

アンジュ・ヴィエルジュ *Skyblue Elements*

トライブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一学期を終えて、青蘭諸島は夏休み期間に入る。世界接続20周年記念祭を目前に控え、ブルーミングバトルに出場する生徒たちはさらに実力を高めるべく特訓中。

しかし、不思議なことが起こっていた。プロGRESSやαドライバーは連日、一様に同じ夢を見ている。大人たちは忙しなく動き、何かに備えている——？

そして訪れる変化の時。世界は新しく、形を変えようとしていた。小さな翼の少年少女は、まだ見ぬ大きな世界に震えつつも、ついに羽ばたき始める——。

※この作品は「アンジュ・ヴェイエルジュ」の二次創作です。アンジュ・ヴェイエルジュの世界観をある程度理解していることを前提に書いております。

キャラ・世界観は公式のものと多少変えております。ですが、あまり大きくは変えていないので、概要を知りたい方は公式サイトをご覧ください。↓<https://ange-vierge.com/story/>

追記：公式サイトが消滅しているので、画像をここに載せておきます。↓<http://macrotribe.blog.fc2.com/blog-entry-252.html>

■【1幕】が完結しました。応援してくださいました皆様、本当にあり

がとうございました。

■【2幕】が完結しました。応援してくださった皆様、本当にありがとうございます。

■【幕間2】の投稿を開始しました。日常編です。どうぞお楽しみください。

■【3幕】が完結しました。応援してくださった皆様、本当にありがとうございます。なお、これ以降も【幕間2】に話を追加する可能性があります。

■1幕、2幕、幕間2のあらすじは、それぞれの1話目にしまっており、不定期投稿になりますが、よろしく願います。

■感想・評価をお待ちしております。稚拙な文章ですが、どうぞお楽しみください。誤字・脱字報告などもしていただけると幸いです。

目次

Chapter 0 : Ange Vierge	1
1幕【Obstinacy vs Will】	
第0話「特別になりたかった」	4
第1話「どうしてこの島に来たの？」	9
第2話「なかなか強情だね」	32
第3話「ゴホウビあげちやおうかな♥」	52
第4話「はい。記憶しました」	71
第5話「まあ、なるようになるさ」	90
第6話「なかなか、思うようにはいかない」	109
ブルーミングバトル・ルール プロトタイプ	128
第7話「楽しい事イチバン！って信条で生きてますんで」	133
第8話「もしかして、盗み聞きしてたってこと？」	154
第9話「あまり、失望させるな」	176
第10話——それでもわたしは、	204
第11話「それが可能性つてもものだろ？」	233
最終話 “スカイブルー・エレメンツ”	272
Chapter 100 : Winter Hero	295
【幕間1】	
《青は藍より出でて藍より青し》	297
《どこの鳥も黒い》	303
《錬金術師は文無し》	308
2幕【Relations confusion】	
第0話「孤独は人を強くする」	312

第1話「私と、アイドルやらない?」 | 315

第2話「先生は優しいので」 | 337

第3話「会長殿は仕方ないな」 | 354

閑話「私、嫌われてないかしら?」 | 375

第4話「私じゃない」 | 381

第5話「私だって同じこと思ってたよ」 | 398

青蘭島北部の地区配置 | 424

第6話「会長に任せちゃいなさい」 | 426

第7話「そんな完璧なやつのパートナーになんか、俺はなれない」 | 442

442

第8話「格好良いって、言ってくれないの?」 | 457

第9話「2人とも大嫌い」 | 470

第10話「言わなきゃ、何も伝わらない」 | 480

第11話『私があなただを 愛していたこと』 | 518

断章『ファーストキス』 | 546

最終話《シー・オブ・ホープ》 | 559

くその想いは世界を超えてく | 575

《相克》 | 578

【幕間2】 Into summer

1話 ルクスとお揃いぬいぐるみ | 581

2話 セニアとラウラのはじめてさがし | 595

3話 それぞれのしあわせ | 606

4話 御影葵は甘党である。 | 613

5話 限界と | 625

6話 ”大人”と”子供” | 635

7話	安寧を蕾ませる雨の郷	649
8話	小さな命	664
9話	アイの道	675
10話	フタロブルーのシアン	686
3幕【Gate of G】		
第0話	『門を開け。』	701
第1話	「夢は所詮、夢ですから」	705
第2話	「細かいこと気にしててもしょうがないし」	717
第3話	『案ずるより産むが易し』	739
第4話	「君はやっぱり、見どころあるよ」	756
第5話	「人間、楽ばかりでは成長しない」	782
第6話	「忘れちゃってもいいよ」	815
閑話	青い彼岸花	826
第7話	「強すぎる力は、抑圧も制御もできない」	832
第8話	「ブルーマウンテン頼んでいい？」	849
現在登場しているプログレスとそのエクシードの紹介		
第9話	『この一瞬』で十分だった	874
第10話	立ったまま	926
第11話	『これからも、よろしくーーーー!!!』	966
最終話	「これからよろしくな」	975

Chapter 0 : Ange Vierge

それは、遠い昔の光景――

虹の神殿は光に包まれたその世界の象徴たる建造物だったが、その場所に立ち入ることのできる人間はほんの一握りで、それ以外の人間はそもそも神殿がある場所すら知らなかった。しかし、彼はその一握りに入っている者だった。

「何故、ご理解頂けないのです」

彼は、絶望の表情で眼前の存在に問い質した。

そこは神殿の最上階に位置する、《創造の間》。陽光が差し込む荘厳なる場に、その2人は対峙していた。片方は床に跪き、片方は玉座に腰掛けている。

「二体、何故。世界は破滅の危機に瀕している。それをもたらす破滅の龍を打ち倒すことができれば、世界は恒久の平和に包まれるというのに！」

対照的な2人だった。白髪混じりの髪を振り乱して慟哭する男に對し、赤い髪の女神はあくまで冷静に答えた。

「万物は、生まれ、育まれ、栄え、滅びるもの。その概念に当て嵌るのは、世界とて変わりありません。貴方の考えは、この世の概念を根底から覆すことを是としています」

「しかし……！」

食い下がる男に、女神は辛抱強く、さらに言葉を重ねる。

「世界を破滅から守りたいという貴方の思いは良く分かります。それは私たちも同じです。しかし我々の使命は、貴方が覆そうとしている概念を護ること。それに、破滅を忌避せんがために一度ならず世界を揺さぶろうなど、決して許されることはありません」

磨き上げた己の『智』を否定された男は、がくりとうなだれた。その碧い目は、絶望の色に染まっている。

「私は……ただ……世界を守ろうと……そのためには、この方法が最

も効率的且つ効果的だということ、貴女もお分かりのはず……なのに何故、貴女方はそれを認めぬのです？ 何故、別の世界の連中の言葉などに耳を傾けられるのです？」

独り言のように疑問をこぼしていた男は、不意に立ち上がると、女神に背を向けて歩きだした。

「お待ちなさい。どこへ行くのです」

「私は、もう貴女方とは分かり合えない。私は、私の道を歩みます」「貴方の考え方は危険です。どうか思い直してください。世界を試す以外にも、きつと方法はあるはずです」

女神は男の背中に呼びかけたが、彼を説得できるとは思っていないようだった。男は、もう返事をしない。それでも女神は、自らに課せられた義務として、その背中に問いかける。

「何が……貴方の望む世界を変えたいのです？ 何が貴方を、そこまで駆り立てるのですか？」

男が立ち止まったことは、女神にとっても意外だった。振り向いたその顔は今まで通りの柔和な面立ちだったが、女神はそこに、有るか無いかの「それ」を感じ取る。

それは「狂気」。

男は口元を歪ませて、言った。

「私は、ただ信じているだけです。『可能性』というものを」

男は再び女神に背を向け、歩き出した。そうして、二度と振り返ることはなかった。

彼は永遠に神殿を去った。神殿は、一度去れば記憶からその存在が消え、二度と戻れなくなる。彼はもうこの場所に帰ってくることはできず、この場所にまつわる全ての記憶を失う事になる。例え復讐を仕掛けようとしても、彼、または彼に連なる者にそれを成すことは不可能だ。

それなのに、女神の心中を満たしていたのは、不安のみだった。

今、私は、とても重要な歯車をひとつ、壊したのかもしれない。

彼女は疲れ切った様子で座っていた玉座に深く体を預けると、深く溜め息を吐く。

男の背中を見るその眼差しは、悲哀に満ちていた。

どこで間違えたのだろう――

どこで間違えてしまったのだろう――

「それでも貴方は……何故……?」

暁天の女神アーシーは、去りゆく賢者に問いかける。

その声が届くことは、もう無いのに。

女神の背後で、世界水晶は赤い光を湛えている。

彼女の意思と同じ、静かな光を。

1幕【Obstinacy vs Will】

第0話「特別になりたかった」

お前が本当に『特別』になりたいなら、気をつけろ。

『普通』に甘んじるな。

『常識』に抗え。

『絶対』を信じるな。

『当たり前』を疑え。

『当然』だと思ってること全ては、お前をがんじがらめに縛り付けている『鎖』だ。

『一般的』なことは、特別な奴にとって『枷』でしかない。

『他人』とは違う存在になりたいなら、決して『まとも』になろうと
するな。

『自分』の全てを見直し、正しく改めれば、お前は『世界』から逸脱
できる。

お前は『凡庸』から『特別』になれる。

そのことを自覚しろ。

.....

神城春樹かみしろはるきの人生は、正直言つて大したことのない人生だ。
彼は、たった13年ぼっちの自分をそう評価する。

『普通』に生きてきた。

自分は少なくとも『常識』人なはずだ。変じゃないはずだ。

そういえば、幼い頃に引いたおみくじに「将来『絶対』に成功する！」とか書いてあったような。

だからというわけではないが、別段努力を積み重ねてきた人生ではなかった。『当たり前』なことをやり続けただけだ。

みんながやっていることを自分もやる。みんながやっている程度の勉強を自分もやる。それくらいは『当然』だと思っているから。

『一般的』な考えで言ったら、十分に良い人生だ。

頭も体もおかしいところがなく、至極『まとも』な生き方をしていた。

自分が『世界』にとつてどんな役割が与えられているかなんて、考えたことがなかった。

だけど。

心の片隅では思っていた。こんな人生でいいのか、と。ありふれた人生を、ありふれた生き方で歩む。それだけでいいのか、と。

そういう自問をするたびに、心の大部分が反論した。いいじゃないか『普通』で。『常識』人で何が悪い。そうやって生きれば、『絶対』に負の道には行かないはずだ。それが『当たり前』だろう。

そうやって、自分の『弱さ』が心の中で大合唱するたびに、『常識』への反骨心は薄まり、次第に忘れていってしまうのであった。

あとひと押し、何かきつかけさえあれば。

弱い心を振り切つて、前に一步、踏み出せるかも知れないのに。

しかし、忘れてしまつても、心の中から消えたわけではない。それはずっと眠っていたのだ。

その時をずっと待っていた。

自分の中に眠る『特別』が誰かに見出される、その時を。

.....

中学生の頃、まだ寒い冬のことだった。

『1年B組の神城春樹くん。職員室まで来てください。繰り返しします。1年B組の——』

昼休みが始まると同時に、担任の先生から校内放送で呼び出された。全身がさつと熱くなる。

「あれ、神城、なんかやらかしたの？」

「え？ いや、別に……なんにもしてないと思うんだけどなあ」

「まあいいや。じゃあ終わったら校庭来いよなー！」

「わかってるって」

仲のいいみんなに少しからかわれつつ、春樹は言われたとおりに職員室へ向かった。

一体なんの用だろう。これといって校則違反はしてないはずだし。次の授業で使う教材か何かを運ばせようってことかな。

春樹は至極真面目な生徒だった。人当たりがよく、成績も良好。問題行動も見られない。少しばかりリーダーシップに欠けるようだが、それ以外はひどく模範的な生徒だった。リーダーシップにしたって、そんなものはこれから学ぶのに十分な時間がある。中学1年生としては大人びていて、落ち着いた生徒だった。

しかし、それはそれ、これはこれ。何もしていないからといって、急に職員室に呼び出されたら、誰だって不安になる。

「し、失礼します」

春樹が声をかけながら職員室に入ると、待ち構えていた担任は「お、来たか」と言うと、春樹を職員室の外へ誘った。向かっているのは、少し離れた応接室。

「あの、俺、なんかしましたか？」

「うん？ いや違うよ。君に会いたっていうお客様がお見えになっ
てるんだ」

「え、俺に？」

担任は頷くと、応接室のドアを開いた。入るのは初めてだが、ここに来ることになるとは予想していなかった。

「御影さん。連れてきました」

「ああ、ありがとうございます」

ソファから立ち上がって礼をしたその人物は、若い男性だった。180を超えるであろう長身、顔つきは穏やかで、艶やかな黒い髪は伸ばし、背中側で緩く束ねている。黒いスーツをびしっと着こなしており、その胸に小さな青いバッジが留められている。

対面するソファに座ると、御影と呼ばれた男性はニツコリと微笑んで口を開いた。

「こんにちは、神城春樹くん。青蘭学園せいらんがくえんから参りました御影凌雅みかげりょうがとい
います。どうぞよろしく」

差し出された名刺を、春樹は微かに震える手で受け取る。薄青色の名刺には彼の名前と、所属名が書かれている。

間違いではない。そこにははつきりと書かれていた。

青蘭学園。

今では誰でも知っている、その名前。

この世界における『特別』の象徴——

御影は春樹伺っていた。春樹が名刺から目を離して顔を上げると、彼は殊更嬉しそうな表情になった。

「さて、神城くん。いきなりだけど、君にはαドライバーとしての適性が認められた。是非、青蘭学園へ編入してもらえないだろうか？」

この時をずっと待っていた。

自分の中に眠る『特別』が誰かに見出される、この時を。

今こそ、変革の時だ。

勇気を出して、変われ！

実際、悩むことはできたかもしれない。少なくとも、今のこの生活は捨てる必要があるのだから。仲のいいみんなとも別れなくてはならない。両親は……春樹以上に歓迎してくれるだろうが、それでも慣れ親しんだ土地を離れるということに恐怖がないわけではない。

しかし、この時だけは、そんな風に悩む時間がやけに勿体なく感じられた。

春樹は頷いて、口を開く。

「はい、喜んで」

考える前に、口が動いたというか、そんな感じの返事をした。

ずっと、そう思っていた。「特別になりたかった」という願いを叶えるために。

第1話 「どうしてこの島に来たの？」

薄汚れた光が見える。

全身が痛くてたまらない。

冷たい苦しみの中で藻掻いている。

頭が凍りつき、感覚が失われていく。

痛みも。

苦しみも。

冷たさも。

光も。

何も感じなくなってしまう。

失われるはずだった、ひとつの命。

他の誰とも変わらない、ひとつの命。

そこらじゅうで失われているそれと、何ら変わりのないひとつの命。

それでも、その暖かさだけは、守っていたかった。

だから、私は、

.....

それは、遠い日の思い出の中。

世界を赤く染め上げる夕日の中で、栗色の髪の少女が、古い日本家屋の建つ庭で遊んでいる。彼女は一人で毬遊びをしていたが、その横顔は不思議と寂しそうには見えなかった。しかし、二つに結った髪の毛は、どこか寂しげに揺れている。

縁側に、一人の老女が出てくると、少女は待ちかねたように彼女に駆け寄った。

靴を脱いで縁側によじ登ると、少女は老女に抱き着き、老女もまた少女を心底愛おしそうに抱きしめた。

「おばあちゃん！」

「ごめんなさいね、遅くなって。さあ、もう暗くなるよ。お靴は玄関に置いてらっしゃいねえ」

「うんー!」

素直に応じた少女は靴を持って玄関まで駆けていき、驚くべき速さで駆け戻ってきた。

「おやおや、相変わらず足が速いねえ」

「このまえもね、うんどうかいで、かけっこいちばんだったんだよ!」

「すごいねえ。うんうん、みうちちゃんはきつと立派な女の子になるよ」

「えへへ、そうかな」

照れたようにはにかむその少女は、自らの祖母に抱き着くと、頭を撫でてと言わんばかりにぐりぐりと頭を擦りつける。そんな仕草にまた感心した祖母は、少女の頭を慈しむように撫でた。

「ねえねえ、今日もお話読んでー」

「はいはい。それじゃあ、みうちちゃんの大好きな最中、持ってきてしましうね。お隣さんからもらったの」

「もなか! みうみ、もなかすき!」

少女は祖母に手を取られて屋敷の奥に連れられて行く。

日は沈み、辺りは暗い静寂に包まれる。その中で、少女の楽しいげな笑い声が響いていた。

それは、世界に選ばれた少女の、遠き日の思い出の中。

.....

ある日、世界は連結した。

突如として開いた”ハイロウ門”。三つの異なる世界との融合。その影

響によつて、『プログレス』になった少女たちは身体能力の飛躍的な上昇や、超能力じみた不思議な力など、様々な『エクシード異能』に目覚めるようになった。

.....

「.....つてき.....なんか不気味じゃない?」

その日の天気は、雨だった。

放課後、忘れ物を取りに教室へと戻った彼女は、ドアの前で急停止した。

何人かの女の子が、教室に残って談笑している。

「あいつの周り、いつつも風吹いてるんだよ」

「ほら、アレだよアレ。変な力が使える《プログレス》ってヤツ」

「ああ、アレね。選ばれちゃってるっていうんだっけ。気持ちわるいよね」

思考が一瞬で凍りついた。次いで、バッグを握った手が震え始める。

「だよねえ。本人は必死こいて『私はみんなと同じ女の子だよ』みたいに気取ってるけど、もうあいつ青蘭島行き決まっちゃってるんだもんね。内心あたしらのこと見下してんのバレバレだし」

「ほんつと、ムカつくよね」

足が震える。

頭が熱くなる。

いつも笑顔で接してくれているみんなの、汚い心の中身。

みんなと違う。それだけでここまで言われる。

みんなのこと、見下してなんかない！ そんな風に言われるくらいなら、こんな力いらさない！

逃げたい。今すぐ走って家に帰って、布団にくるまって泣き喚きたい。

今すぐ教室内に駆け込んで、あんたの方がよっぽど見下してんじゃない、と叫びたい。

でも。

——ずっと笑顔でいなさいね——

彼女は顔を上げると、教室に向かって無理矢理笑顔を作る。そうすると、彼女の心は自然に前向きになる。

それは、彼女の本能が、周りから嫌われないようにするために編み

出した『儀式』だった。

そうして自分の心を騙して。

彼女は教室のドアを開け放つと、満面の笑みを浮かべて言った。

「あれ？ みんなまだ残ってたんだ。何話してたの？ 私も混ぜて！」

その日の天気は、土砂降りの大雨だった。

……………

美しい碧と緑に囲まれた島・青蘭島。上空にきらめく三つの”門^{ハイロウ}”は、この島の何よりもの特徴です。

四つの世界を揺るがす『世界接続』^{ワールド・コネクト}が起きてから、既に19年が経過しています。異能^{アブノーマル}に目覚めた少女^{グレイス}を育成する青蘭学園は、今年で開校15周年を迎え、また、ほかの三つの世界も世界接続20周年を祝い、友好の証として、各世界で記念祭が開催される予定です——

「ふう〜ん……そうなんだあ。世界接続って、もう20年くらい続いてるんだ」

青蘭島に向かうクルーザーのデッキの上でパンフレットを眺めながら、日向美海は感嘆のため息を吐いた。

栗色の髪をふたつに結ってツインテールにしており、上半身はピンク色のパーカー、下半身はホットパンツとニーソックスにスニーカーという出で立ちで、本人の内心の興奮を表すかのように、ツインテールまで落ち着きなくそわそわしている。

青蘭島まではあと2時間程度。夢にまで見た青蘭学園が待っている。そう考えると、落ち着きがなくなってしまうのも仕方がない。

昨夜は緊張とクルーザーの揺れであまり眠れなかったが、そんな不調を越して余りある期待に胸が弾んでやまない。

「あつ、見えてきた！」

天空に開いた三つの門。そして緑に包まれた青蘭島。水平線の彼方にひよつこりと顔を出したそれに、美海はひどく興奮した。”門”は、門というよりは巨大な星に見えて、写真で見るよりもずっと迫

力がある。遂に青蘭島に来たんだ、という実感が、胸の内からじわじわと湧いてきた。海上はそれなりに寒いのに、なんだか顔が火照ってきている。

「いったいどんなところなんだろうなあ。楽しみだなあ」

笑顔いっぱいを取り柄の美海は、目を見開いて海を眺めている。憧れの青蘭島はすぐそこに迫っていた。

.....

彼はひどく悩んでいた。

四月に二年生に進級する彼は、苦悩に暮れている。極力人前では見せないようにしているが、ひとりになつてしまうと、どうしても自分の弱さが浮き彫りになつて、つらくなる。

支えてくれるプログレスは、もういない。

朝、目覚めるのすら億劫になる。

朝起きると、携帯に同級生から遊びに行かないかと誘いのメールが入っていたが、どうにも乗り気になれない彼は、それをやんわりと断つた。彼も彼なりに気遣つてのことだと分かつていたので罪悪感が募るが、心の底から楽しめる状況じゃないと相手にも申し訳ない、と思つてしまうのだ。

昨日のうちにマーケットで買っておいた出来合いの朝食を胃に押し込むと、彼は気晴らしに外に出ることにした。少しの間、行く当てもなくふらふらとして、そうだ海を見よう、と思ひ立つ。島の東側の岬に行つて、しばらくぼーつとしてみれば、なんとなく気が晴れるかもしれない。

歩きながら、こつそりとため息を吐く。

彼は世界でもそう見られない『αドライバー』だ。αドライバーは、リンクというつながりによってプログレスの異能を強化することができる、というのが一番の特徴だ。そして、プログレス複数人とαドライバー1人で構成されたチームで戦うのが『ブルーミングバトル』である。

目下不安なのは、2年生になると出てくる『ブルーミングバトル実践』の授業だ。プログラスの方は任意なのに対し、αドライバーは必須科目。なのに、彼には自分と相性のいいプログラスが現在存在していない。

もちろん、急ごしらえのチームで出ることも可能だが、彼としては果たしてそれでいいのかと何度も考えてしまう。

リンクで何よりも大事なのは、絆。

例え強力なプログラスであっても、お仕着せの絆ではまともに力を引き出してあげることができない。

もちろん、それでも別に構わないのだが、彼は悩む。彼にとつてのプログラスは『支え』だから、全力を出させてあげられないというのは、そのプログラス達に対して冒瀆的だと思っているのだ。

一緒に事を成してくれる仲間が楽しめないなら、満足できないなら、その仲間に対して申し訳なくなってしまう。それが彼という男の魅力であり、また最大の欠点でもある。

(自分のためだけに生きられれば、もつと楽なのかな……)

例えば、今日はみんなと遊んで、無理矢理楽しんでみるとか。表面上だけでも楽しんでもらえれば、そっちのほうがいいんじゃないか。

例えば、クラスで仲のいいプログラスを1人か2人誘って、内心をぶちまけて泣きついてみるとか。そうすれば、ぶちまけられた方はたまったものではないだろうが、少しは気分が晴れるかも。

ぐちやぐちやと思考を濁らせていると、いつの間にか東岬に着いていた。シンボルである陶磁器のように白い灯台はそれなりに見どころであるものの、青蘭島の観光名所は中央の学園特区と商業地区が大部分を占めているため、わざわざそこから数キロ離れたここまで来て灯台を見たいと思う者は少ない。現に、今だって誰もいない。しかし、今はそれが都合だと思った。

結局、そんなことを考えてはみるものの、実行に移す勇氣はない。彼の性格は、よく言えば『空気が読める』とか『気が利く』とか言えるが、悪く言えば『自分がない』ということになる。そして、彼自身、我が薄いのは承知しているのだ。そうなった理由はわからない。気

にする意味もないだろう、だって、別段悪い性格というわけではない——はず、と思っっているから。まあ、今はそうでもないかもしれない。ほとんど無意識のうちに、友人の誘いを断るといふ我を見せている。しかし、その『自分の薄さ』は、2年生になったらチームを組んでブルーミングバトルに出ようと契りあった、特別相性の良いプログラマー4人を一気に失ってから、輪をかけて薄くなった。

二度と目にしたくないような光景を目の当たりにして、彼の中にあまりにも大きすぎる穴が空いて。

そこから『自分』を形作っている何かが流れ出していくかのよう、『自分』が、薄くなる。

誰かに誘われなければ、何かをする気になれない。なのに、誰かに誘われても、それに乗る気にもなれない。

こうして、ふらふらと歩き、歩き……そして、途方も無い虚しさに呑まれるだけ。

——今の俺を見たら、『あいつらはなんて言うだろう。きっと『今の俺』は、あいつらに好かれる資格なんてどこにもない……。

荒波が飛沫を上げる岸壁に腰かけ、水平線の彼方に視線を投げる。あまりにも広大な海を眺めていると、自分が相対的に小さく見える。なのに、胸の内に渦巻く苦悩は消える気配がない。

悩んでいるだけでは、何も変わらないのに……。
気が遠くなるほど蒼い海をぼんやりと眺めながら、かみしろはるき神城春樹はまたため息を吐いた。

………

憧れの青蘭島に上陸したという喜びは、美海の属する寮に着くまで胸を覆いつばなしで、青蘭西港から寮までのバスの中で、ロクに景色をみることも出来なかった。

「……ここが私の部屋かあ」

この四階建ての寮の名前は『満月寮』というらしい。この他にも、『睦月寮』『如月寮』『弥生寮』などがあるのだとか。ここだけ月の旧名

ではないのには、別に大したことではないけど、まあ理由があるのよ、と案内してくれた優しい寮母の小春さんが言っていた。

かなり充実した部屋だった。トイレとバスルームは別々、洗濯機もキッチンもある。少し狭めの寝室には二段ベッドが一つ。それなりに大きいそれにちよつと寝転がってゴロゴロとしてみたが、毛布もフカフカでかなり寝心地もいい。

洗面所もクローゼットもベランダも広めで、美海としては特に洗面所が広いことに感銘を受けた。これなら、女子がもう一人くらい普通に入れそう。改めて自分が『招待された』存在であることを再認識する。

「プログレスってそんなに貴重なのかなあ」

寮は二人部屋だった。玄関から顔突き出してドア横の表札を見ると、『日向美海』以外に、もうひとりの名前が書いてある。

「えーと……岸部、沙織……ちゃん？」

美海は新入生の中でも一番乗りに近い。なんと言っても、今はまだ三月上旬である。卒業式が終わるやいなや、すぐに青蘭島に来たのだから当然といえば当然なのだが、相部屋になる女の子が来るのは、恐らく当分先になるだろう。

「どんな子なのかなあ。かわいい系かな？ かっこいい系かな？」

荷物の中の洋服を備え付けのタンスにしまいながらあれこれと想像を膨らませていると、不意にドアがノックされた。

「はーいー。えと、どちら様ですかー？」

元氣よく返事をする、「二年の東条でーす」と名乗られた。急いで玄関を開けると、灼熱のような赤毛の、快活そうな先輩が立っていた。

「よっ！ 新入生ちゃん！ 歓迎の挨拶をしに来たよ」

「あ、ありがとうございます。日向美海です！」

美海が名乗ると、先輩はニコつと笑った。綺麗で《自然な》笑顔だ。「私は2年で、風紀員の東条遥とうじょうはるか。そのまんま遥って呼んでね。『はる』って呼ばれると小春さんと間違えちゃうし。ま、分からないことがあつたらなんでも聞いてくれていいし、困ったことがあれば相談に

乗るよ」

「ありがとうございます、遥先輩」

美海は「いろいろ聞きたいんですけど、立ち話もアレですし、どうぞ中に入ってください。何にもありませんけど」と遥をリビングに連れて行った。

「うんうん。今年の一年生トップバッターは美海ちゃんね。今日の晩御飯は歓迎会するって小春さん言ってたけど」

ピンク色の絨毯の上に腰掛けながら遥が嬉しそうに言った。

寮監の小春さんは、美海を部屋に送り届けたあと、やたらに嬉しそうにスキップしていた。それを思い出しながら美海は考える。

「そうなんですか？ でも、私だけのために……もう何人か来てからの方が良さそうですね」

それに、どうせお祝いしてくれるなら、みんなまとめて祝ってくれた方が楽しいし。と付け加えると、遥は「そうだよね」と相槌を打った。

「そう。私もそれ思った。じゃあ小春さんに言っとくから、美海ちゃんも新入生トップバッターとして、青蘭学園での抱負とか考えておいてねー」

「ほ、抱負？」

「そ。目標みたいなものね。どう、なんかある？」

「うーん……とりあえず、友達をいっぱい作りたいなあ……」

ぼやぼやと浮かぶ空想のうちの一つを口に出してみると、遥は懐かしむように目を細めた。

「いいねー。そういうの、初々しさが出てていいね。既に1人、友達出来ちゃってるしね」

「え？」

美海が我に返ると、遥は面白そうに笑った。

「学年は違えど、みんな友達だよ。美海ちゃん。それで、聞きたいことって何かかな？」

「あ、そうですね」

美海は遥に訊ねた。それはいい服屋だったり美味しいクレープ屋

はあるのかだったり、と女の子らしい内容ばかり。応える遙も楽しそうに笑っている。

「そういえば、この寮って何人くらい住んでるんですか？」

「今のところは22人ってところかな。美海ちゃんが23人目で、一年生は美海ちゃん以外にあと7人来る予定……だったはず」

「え、少ないですか？」

「ああ、別にこの寮だけに新入生が来るわけじゃないよ。全体、というか、他の3つの世界も合わせると、たぶん……40人くらいは来るんじゃないかなあ」

「よ、40人」

中学校は一学年に生徒が150人程いたので、少しどころかかなり少なく感じる。

「でも、そっかあ。40人くらいなら、全員と友達になれるかも！」

「あはは。美海ちゃんならヨユーそうだね」

お互いに笑い合い、遙が美海の頭を撫でた。

その瞬間、美海の体がびくと跳ねた。頬が急に熱くなり、えも言われぬ、表現しづらい感覚が襲いかかる。

「あ、ごめん！ 嫌だった？」

心配そうな口調で遙が問いかけるが、美海の様子は不快ではなく驚きに満ちていた。

「いや、そうじゃなくて！ その……頭を撫でられたこと、そんなになかったから……」

なんだろう。ものすごく気持ちいい。背筋がゾクゾクする。頭を撫でてもらうって、こんなに気持ちいいんだ。

「そっか……なら、先輩に任せなさい！ 美海ちゃんがもうやめてーって言うまで、撫で繰り返しちゃうからね」

「ちよ……あはは！ 待って先輩！ くすぐった……あはははは！」

遙は美海の体をガッチリとホールドすると、その頭を強く何度も、しかし優しく撫でた。美海としてはくすぐったくて仕方がないが、それでも、遙の優しさが嬉しかった。

何事にもポジティブなのが、美海最大の強み。

だから、前を向いていて欲しい。そのことは、出会ってまだ十数分の遙にもしつかりと伝わったようだった。

……………

「ちよつと散歩してきます」と言つて美海は寮を出た。雲行きが少し怪しくなり、雨は降りそうではないものの、陰鬱な雲が空を覆っている。しかし、辺りには潮の香が広がっており、慣れない美海は少し新鮮な気分になった。

「やっぱり孤島だと、お魚とか海の幸がおいしいのかな」

遙の話によると、島はかなり東の方にある満月寮からさらに東に行くと、灯台のある岬に出るそうだ。逆に西に向かうと、青蘭学園特区や、シヨツピングモールなど栄えた商業区画に行けるらしい。東に行つても灯台しかないよ、と言われたが、せっかくだし海をもつと感じたい、ということと東に向かっている。

「灯台……あれかな？」

人通りが疎らな道路を歩いていくと、真っ白な灯台が見え始めた。しかし、

「うわあ、砂浜だー！」

砂浜の海岸線が同時に目に入る。思いつきり気を惹かれた美海は、どうせなら砂浜を歩いていこうと思ひ立ち、さくさくとした砂に足を下ろした。ごく薄い茶色の砂が、美海の歩いた軌跡を残している。振り返つてそれを見たとき、美海の中に蘇る記憶があった。

（そういうえば、最後に海に行つたのはいつだったっけ。小学生の時だったかな……）

崩れていく砂を踏みしめる度に、少しずつ記憶が戻ってくる。

（そう、小学生の頃……希美のそみちゃんの家族と一緒に……。空も海も真っ青で、おっきな波を見て、二人して驚いてたっけ……）

無二の親友の家族と行つた海。そこで美海は思いつきり遊んで、そして――

不意に足が止まる。

（ううん、驚いただけじゃなくて……）

脳の深淵から浮き出てきたのは、痛みの記憶。苦しくて、死ぬほど

苦しくて、目の前が霞んでいく。

思わず美海はかがみ込んだ。頭を抱え、その場にうずくまる。砂の一粒一粒が、やけに大きく見える。

(死ぬほど、じゃない。私はあの時……)

みうちちゃんや、この海の、ふかーい、ふかーいところにはね、海神わだつみ様が
いるんだよ。

海神様はとても大きくて、立派な姿をしていてね、私たちをいつも見守っていてくれるんだよ。

みうちちゃんがいい子にしていたら、もし海で溺れてしまっても、海神様がきつとみうちちゃんを助けてくれるよ。

だから、ずつといい子にしているんだよ。お父さんとお母さんの言うことをよく聞いて、助けてあげなさいね。ずつと笑顔でいなさいね。

美海は砂浜に座り込んで海を眺めていた。

(……………)

寄せては返す細波が、大丈夫？ と美海を気遣うかのように、静かにさざめいている。

(私は……………)

まとわりつく水は、いくらもがいても決して離れてくれず、空気を求めて反射的に開いた口を容赦なく覆い、流れ込んでいく。吐き出したくても吐き出せず、頭が凍りつき、すべての感覚が失われていく。痛みも、苦しみも、冷たさも、光も。

脳の奥から溢れ出てきた痛み_に顔をしかめる。

(……………海神様が助けてくれたの？ いい子にしたからなのかな)

一人の女性が脳裏に浮かんだ。あまりにも美しい、巨大な存在。真っ暗な冷たい水の中に沈んだ美海を、その暖かい腕で包み込み、息を吹き込んでくれた、優しい海神様。

しかし、その顔はつきりと像を結ばない。なのに、《彼女》であることは分かった。今まで味わったことのない不思議な感覚に、戸惑っ

てしまう。

(それからだっけ。私がエクシードに目覚めたのは)

最初は、そよ風だった。海から帰ってきたその後のある日、暑いなあ、風が吹けば涼しいかなあ、と思ったとき、そよ、と風が凧いだ。偶然だと思っていたが、それから何度も試してみても、美海は自分がそよ風を作り出せるようになっていたことに気づいたのだ。

それからの異能の成長——いや、肥大化は凄まじく、中学生になつてしばらく経った頃には、もう風を操って空を飛べるようになっていた。心躍る反面、自分の中にある《ソレ》が恐ろしくなつたことが無い、とは言い切れない。

他者とは違う。

それは、彼女にとって、あまりにも恐ろしいことだったのだ。

(でも、死んじやってたはずないもん。あの時死んじやってたら、今こうして、夢だった青蘭島にいるわけがないし)

いつまでも悩んでないで、灯台に行こう。美海は、よし、と気合をいれて心を入れ替えると、灯台に向かって足を踏み出した。

.....

ここに座つて、そろそろ一時間が経過する。流石に尻が痛くなつてきた。

春樹は、これまた特大の溜め息を吐く。

(結局.....こうだもんなあ)

無益なことというものは、思いの外体に来るものだ。そして、体が悲鳴を上げ始めると、どうせ無益なことだし、とすぐに諦められてしまう。

正直、暇だった。

春樹は体をひねって背後の灯台を見やった。

(お前も、難儀なもんだな.....)

お前は大層美しい存在だが、建っている場所が場所だから、誰も見に来てくれない。少なくとも、島に馴染んだらわざわざここに来たい

と思う奴なんかそういない。自分のような、行動に何の自主性も持てない奴が来るもんだ。

本当にどうしようもない。そして、何よりもどうしようもないのは、そんな自分を演じている自分自身だった。そんな風にして自分を騙している自分自身だった。

今までの自分がどうであつたか、振り返ってみる。予想はしていたが、本当にどうしようもない。

クラス中で自分が《おかしくなっている》扱いを受けているのはよく知っている。そりゃあ、学年で2人しかいないαドライバーの1人がこんなことになっているのだから、悪目立ちして当然だ。

「可愛そうだ」と言われる。

そして、自分はそれを知っていた。それが問題なのだ。みんなが楽しくなれないから……なんていうのは端から建前で、本当は「可愛そうだ」と言われる存在であつたんじゃないのか。そうだったとしたら……タチの悪いかまってちゃん以外の何者でもない。

「ほんと、どうしようもねえな……」

自分の境遇を鼻にかけ、不幸せ者を気取って周りに当たる。徒にいたすら他者からの善意を弄び、挙句、せつかく差し伸べてくれた手さえ、偽善を演じて振り払う。

結局、そうしてみんなの好意に甘えるのは《楽》なのだ。こちらはただ不幸を演じていれば、周りが構ってくれるのだから。

どうしようもない野郎じゃないか。αドライバーとしてだけに留まらず、人として、あまりに碌でもない。

(結局お前は、自分のことしか考えてねえじゃねえか)

——偽善者。

——人の顔色伺ってないで、本気でぶつかってきなさいよ。

——そういうのが、一番ムカつくんだよね。

「……………」

きつと、特にキツイ性格だった《彼女》なら、初めて会った時のよ

うに、容赦なく「偽善者」とぼつさり切り捨てただろう。それ以外の子たちにしたって、いい顔はしなかに決まっている。でも、それは当たり前だろう。自分だったら……責めてしまうかも。

「責めてしまうかも」？

「……んー……」

そこで春樹は、始めて自分が自分をどう思うだろうか、ということに考えが及んだ。責めてしまうかも？ これなら《彼女ら》の方がずっと優しいじゃないか。

となれば、これからは少なくとも表面上は社会的に振舞わなければ、というかそうするべきだろう。例えば自分が辛くても、こんなふうにふざけた態度は取るべきではない。

「春休みも、まだ始まったばかりだしな」

自分の方から誘ってみてもいいかもしれない。別段何がしたいという思いが真面目に考えても湧いてこない辺り、本格的に自分が薄まっている証拠だが、ほかの連中はそうでもあるまい。自宅に帰ったら、「今日のごめん。明日は行きたいとこに付き合うよ」とメールを1本入れればいいのだ。なんだ、簡単じゃないか。

自己完結で心機一転できただけマシか、と思つて改めて海を見ると、なんだか海が煌めいているような気がした。天気はどんよりと曇っているのに、まるで春樹の改心を祝福しているかのようだ。いや、どちらかというところ「やっとか、このマヌケ」と叱責されているようにも感じる。

そう考えると、自然に笑みが浮かんだ。自分では見えないが、きつとニヒリズムが漂っているのだろう。「ニヒリズム」が何なのかは知らないけど。

それが、運命の始まりだった。

不意に、斜め下あたりから呼び声が聞こえた。

「おーーいーいー」

声のする方を向いてみると、見慣れない顔と目があった。栗色の髪

をツインテールに結った、快活そうで可愛らしい子だ。奇特にも、砂浜を歩いて灯台まで来たらしい。

しかし、なんて呼び返したらいいかわからなかったので小さく手を振ってやると、向こうは腕全体で大きく振り返した。そして、更に叫ぶ。

「いまそつちに行きまーすー！」

そうして左右を見やる女の子。しかし、岬の先端であるここには、砂浜から直接は行けないのだ。少し戻ったところにある階段から道路に上がらないと、ごつごつした岸壁をよじ登る羽目になる。その高さ、実に10メートル——ビルの2階くらいある。例えば下が砂浜でも、落ちたら痛いだけでは済まないだろう。

春樹は「後ろの階段から登っておいで」と声を掛けようとしたが、それよりも先に女の子は、決心したかのようにこちらを見上げ、えいやとジャンプした。行動としては、それだけだった。

瞬間、ものすごい勢いの『風』が、地面から空に向かって吹き上がる。今まではそよ風程度だったので、この突風には完全に不意を打たれたが、それにしても身長176センチ、体重63キロある春樹の体が一瞬浮きかけた。肝を冷やした春樹は慌てて姿勢を低くし、地面にしがみつく。おかげで吹き飛ばされずに済んだが、春樹は横目に見た光景に瞠目する。

女の子が、ツインテールを暴れさせながら、当たり前のように風に乗って飛んできた。

フード付きパーカーの裾を翻し、春樹の隣に片足で着地した彼女は、体操選手のように腕を横に広げて得意げに「えへへ」と笑い、そのまま、綺麗に、足を滑らせた。

あつ、と思う間もなく、反射的に春樹は彼女を抱きとめた。

「きゃ……っつ？」

「あ、危ない……！」

お互いに一拍遅れて声が出る。

彼女は春樹の腕の中で、半分笑顔のまま呆然とする、という曖昧な

表情で固まっていた。

「だ、大丈夫？」

「は、はい。お、お恥かしいところを……えへへ」

照れ笑いする女の子。その笑顔にどことなく「華」があつて、思わず見とれてしまう。

よく見ると、非常に可愛らしい女の子だった。少し幼さの残る顔立ちには綺麗に整っており、照れ笑いが良く似合っていた。きつと、楽しそうな笑顔も嬉しそうな笑顔も、よく似合うのだろう。

それよりも強く感じたのは、《近き》。

この少女と自分は、《近い》。言葉には言い表しにくいのが、肩肘張る必要がなさそう、とか、気兼ねなく接せそう、とでも言えばいいのだろうか。

それに、この顔……どこかで見覚えがあるような。特に目元が誰かに似ている。誰だったかは思い出せないが……。

彼女の方も、春樹の顔を食い入るように見つめていた。照れ笑いから笑いが失せ、どんだん頬が赤らんでいく。

「あ、あの……」

「ん？」

「そ、そろそろ離してもらつても……？」

「え？ ……ああ、ごめん！」

慌てて女の子を離し、それでもあまりに恥ずかしくて、顔を背ける。しかし、春樹の見えていないところで、彼女の表情は、不意打ちながらも満更ではなかったと物語っている。

一方、慌てて話題を探した春樹は、

「えつと……君、新入生？」

「え？ あ、は、はい。日向美海つていいいます」

「美海ちゃんね。俺は神城春樹つて言うんだけど……あれかな、たぶん先輩になるはず。高等部1年になるんだよね？」

「はい。ちよつと早く着きすぎちゃったかなーって思つてて……えへへ」

私以外誰も新入生がないんですよー、とまた照れ笑いしながら語

る美海を、春樹はぼんやりと眺めた。

「で、なんでまたこんなところに来たの？　ここらへん、何もなければ」

「それはですね、この灯台を見に来たんですよ！」

キラキラとした目で灯台を見上げる美海を尻目に、春樹は内心なるほど、と思う。と同時に美海を見る目が、つい珍妙な生き物を見るような目になった。

この子、結構変人だな。

そう思いはすれど、

「……奇特きくなもんだね」

と呟くだけにとどめておいた。当の美海は気にした様子もなく「綺麗ですねー！」などと喋っている。というより恐らく、「奇特」の意味が分かっていない。まだ高校生になりかけの年齢なのだし、仕方がないだろう。というより、春樹もよく分かっていない。雰囲気で言っただけだ。

「先輩先輩、先輩のこと、春樹先輩って呼んでいいですか？」

「え？　ああ、別にいけど……」

「で、春樹先輩こそ、何やってたんですか？　なんか悩んでるっぽかったですけど」

「ん。まあその、ちよつと考え事だよ。ここらへんは人気ひとけ無いし、ぼーっとするにはいい場所だなんて」

「なるほど。じゃあ私も一緒にいいですか？」

「はあ……まあ、構わないけど」

「やったあ。それじゃ隣、失礼しますね」

嬉しそうな笑顔になって春樹の隣に小ぶりなお尻を下ろす美海。それを見ていた春樹は、先の想像が外れていないことを確信した。その笑顔は、美海によく似合っていたからだ。

そよ、と風が吹く。美海のツインテールが靡なびき、ふわりと揺れる。

「俺も……」

「はい？」

「俺も君のこと、美海って呼んでいい？」

その時、自分はどんな眼差しを美海に向けていたのだろうか。自分でも、その時の心境をはつきりと感じることは出来なかった。様々な感情が薄く混じり合い、まるで霧のようにぼやけた感情だったのだ。

強いて言うならば——救われたかった、という思いだろうか。この底抜けに明るい少女に支えてもらいたかったのかもしれない。

自分とは、そういうものなのかもしれない。

《自分》では分からないから、他者に省みてもらうしかない。

春樹の視線を正面から受け止めた美海は、一瞬きよとんとしながら、ニツコリと満面の笑顔になって、「もちろん！ いいですよ」と了解した。

「美海のエクシードってさ、風を操る感じなの？」

「はい！ よくわかりましたね！」

「まあね……」

危うく吹き飛ばされかけたからな、と小声で付け加えると、美海は「あわわ……」と泡を食って、

「そ、そうでした。ごめんなさい……」

「ん、別にいいよ。吹き飛ばされなかったし。ただ、大したもんだなーって」

「え？」

「リンクも無しで自分の体を浮かせられるわけじゃん。それってすごいことだと思うよ。少なくとも、今までそんなに強いエクシードを素の状態で使える奴はいなかったしね」

「はえー……これ、そんなにすごいんだあ」

美海は呆然としながら自分の手のひらを眺めた。握って、開いて、また握ってを繰り返し、そんな自分をどこか不思議そうに眺めている。

「美海は、どうしてこの島に来たの？ 単に、招待されたから？」

そんな質問が、春樹の口から出てきた。横目に美海を見ると、面食らった表情までは予想できたのだが、それよりも不可解な感情がチラリと垣間見えた。

恐怖。

一瞬だったが、確かにその表情は、何かを恐れていた。

「え、えーと……はい。招待されたからってのもありますけど……」

美海は笑顔を取り繕いながら、拙く言葉を紡ぐ。

「残りは、秘密です！」

そう言った時には、既に美海は満面の笑顔だった。岬に降り立った瞬間と、何も変わらない笑顔。

薄っぺらいのに、厚い。

それを見た春樹は、先程とは異なり、にわかに背筋が冷えた。

(ついさっきまで、笑顔じゃなかったのに……)

これは単に「明るい」で済む範疇を超えているように思える。

どこか自分と似ている気がする。果たしてこの子も自分を騙しているのだろうか。

気が付くと春樹は、美海の頭に手を乗せていた。そのまま、そっと左右に動かし、頭を撫でる。髪を乱さないように、そっと。彼女の頭が一瞬震えたが、何も言っては来なかった。

「いつか、教えてくれよ」

春樹は独り言のように呟いた。相変わらず彼女の方を向けなかったが、実は彼女の顔を見たくないだけだった。きっと彼女は、見られるのが恥ずかしい顔をしているに違いない。

そしてそれは、実際その通りだった。美海は顔を伏せ、一粒、涙をこぼした。

「……やっぱり」

「ん？」

美海が震える声で何か言ってきた。春樹が生返事をする、美海は嬉しそうに言った。

「やっぱり春樹先輩のこと、春樹くんって呼ぶね！ 同い年だと思つて！ いいかな？」

——春樹くん！

心臓が、跳ねた。彼女が誰に似ているか、一瞬分かった気がした。

「……ん、構わないよ」

口から出た返事は、ごく当たり障りないものだったが、春樹にはこれが精一杯だった。

そして、やつぱり、美海の顔は見れなかった。浮かべているであろう満面の笑顔は、見たかったのに。

だからだろうか。彼女が誰に似ているか、もう思い出せなかった。その笑顔を見れば、完全に思い出せたかもしれないのに。

.....

夜。春樹は自室のベッドで携帯電話の画面を眺めていた。画面に表示された『日向美海』の文字を、特に何かを考えもせずに見つめ続けている。

結局、春樹は美海のために青蘭島の中を案内して回った。青蘭島は東京23区の半分と同じくらいの大さきがある(さすがに開発されているのは一部だが)ので、流石に全ては回れなかったが、最も近かった商業地区を少し見て回ることは出来た。

そして、帰りがけに言ってしまった。

青蘭島、見て回りたいなら明日以降も付き合うよ、と。

そうすると美海はまた嬉しそうに笑って、

「じゃあ、明日は青蘭学園に連れてって欲しいなー! 『ふれーむのうはてすと』っていうの受けなくちゃいけないみたいだし」

プログレスもαドライバーも、青蘭島に来たらまずは『フレーム脳波テスト』を受ける。これにより、自分が『Ωリンカー』なのか『Σリンカー』なのかを知ることができ、また、学園に脳波を登録するとは入学条件のひとつとなっているのだ。

ちなみに春樹はΩフレーマー。そして、断言はできないが美海もΩプログレスだろうと予測している。

(あの時、近かったもんな……)

あの時、というのは、岬から落ちかかった美海を抱きとめた時のことで、同じフレーム脳波を持つαドライバーとプログレスは、『精神的に近い』ということがわかっている。あくまでも感覚の話で、これと

いった学術的な証拠は出ていないのだが。

ひよつとしたら、あの子が俺をまた変えてくれるのかな……。

そう考えてみると、不思議と心が軽くなって、思わず微笑んでしま
うのだった。

今日は、早寝しよう。明日、早起きするために。

春樹はベッド脇に携帯を放ると、リモコンを操作して部屋の明かり
を落とした。

……………

「春樹……くん、かあ」

美海はベッドの上でその名前を呼んでみる。すると、なぜか心が暖
かくなった。

「きつと、気づいてるよね……」

——いつか、教えてくれよ。

そう呟いた時の彼の表情には、何かを悟ったような透明さがあつ
て、美海の心に冷たい風が吹いたような心地がした。しかし、同時に
嬉しくもあったのだ。

偽りの自分に何も言わないでいてくれる、その優しさに。

「彼となら、きつと」

最高のパートナーになれる気がする。《気がする》だけだ。何も根
拠なんてない、ただの直感に過ぎない。しかし、青蘭学園の説明をし
てくれた男性はこう言っていた。

——己の直感を信じろ。αドライバーに関することなら、大概正し
い。

だから、美海は信じようと決心した。春樹のことを「春樹先輩」で
はなく「春樹くん」と呼んでいいか聞いたときには、心臓が爆発しそ
うだった。その時だけは、それを上手く隠せたが。

構わないよ。そう彼が言ってくれたとき、美海はものすごく久しぶ
りに、心の底から笑えた。それはびっくりするほど暖かい感情で、笑
顔ながら内心は非常に驚いていた。

心残りといえ、春樹がそれを見てくれなかったことだろう。でも、いいのだ。

「これから、何回でも見てもらうもんね」

口に出してみても、自分でそれを笑うと、美海はベッドに横になった。

二段ベッドの上側にはまだ誰もいない。

最も身近な未知との出会いにも。まだ見ぬこの島の姿にも。考えられる全てに心を躍らせながら、美海は青蘭で最初の眠りに落ちていった。

第2話 「なかなか強情だね」

「……はい。ええ、大丈夫ですよ。楽しみにしてますんで。……いやいや、そんな迷惑なんて。嬉しいですよ寧ろ。あんなにちっちゃかったのにもう高校生とか。……あ、代わる？ はい。……ああ、久しぶり。ごめんなー仕事詰まっちゃって帰れなくて。それより、やっぱり青蘭学園に決めてくれたんだね。……いやそんな、照れるつて。で、いつ出るの？ ……え、明後日？ 早いねー。……まったく、親子揃って褒め倒し作戦か？ 褒めたってなんも出ないぞ。……うん、オツケー。待ってるよ。制服姿、楽しみにしてるさ。……変態じゃないよ、姪っ子の晴れ舞台だもん。きつと可愛いんだろうなあって。……ははは。そうだな。……ん。りよーかい。大丈夫だって。お兄ちゃんに任しとけ。……おう、それじゃあ」

彼が受話器を置くと、後ろから声がかかった。

「今の、だれ？」

「ん？ 今の、俺の義姉さんと姪」

「ねえ？ めい？ 変な名前」

「いやいや、それ名前じゃないから」

ソファに座るその少女は、見目麗しい容姿をしていた。朝日に照らされて白く見える鈍い銀髪に、身長は155センチ程度、年齢は10代半ば。惜しむらくは目つきが少し悪いところだが、ラフに着崩している男物のワイシャツとストラップスの上から浮き出る身体のラインは、少女らしきと女性らしきが混じり合っている。奇怪に思えるのは、声に抑揚がほとんど存在しないところだ。そしてその双眸は、全く揺らぐことなく、携帯ゲーム機の画面に注がれていた。

「……う、た、耐え……ダメだ」

「朝っぱらからゲームかよ。いいご身分だな」

「今日の予定は？」

「まあ普段通り出勤」

「卒業式、もう終わったって言った。遊びに行こう」

「そうもいかないもんなだよね。まったく、これだから公務員って奴は……一応立場は講師ってことになってんだから、休ませて欲しいんだけどな」

腕組みをして溜め息を吐く男は、身長170センチ程と男性にしては低めながら、言い知れぬ《大きさ》を持っていた。外見からは年齢がわからない、不思議な雰囲気な男だ。暑がりなのだろうか、まだ3月だというのに上半身はタンクトップ、下はジーパンという格好をしている。鍛え上げられた、どちらかといえばがっちりとした体型は、どこか格闘家を思わせるが、彼の場合は雰囲気も相俟ってそれ以上に見える。

彼はその上からワイシャツを羽織り、ボタンを締めると、カバンを持って玄関へ向かう。

「いつもどおり、昼飯は冷蔵庫ん中にあるから温めて食えよ。4時くらいには帰る」

「ん。ドーナツよろしく」

少女が、また彼に目も呉れずに言うと、彼はまた溜め息をついた。

「まったく、お前も最近、口開けば飯かゲームかドーナツばっかだよな」

「うん。大好き」

彼は困ったように頭をガリガリ搔くと、「まあいいや」と玄関に向き直った。

「で、次はいつ外に連れてってくれるの？」

「どうだろう……明後日なら、多分」

「わかった。我慢する」

「いい子だな。じゃあ留守番よろしくな。アイ」

「ん。いってらっしゃい。ゆーま」

僅かに感情の籠った声を聞いて外に出ると、岸部雄馬きしべゆうまは青蘭学園へと歩きだした。

………

「楽しそうだな、美海」

「うん！　なんていうか、リンクとかフレームとか、いろいろ青蘭学園《らしく》なってきたなあって！」

青蘭学園1号館1階のロビー。もう春休みなので人気の少ないそこに春樹と美海はいた。

「……足、パタパタさせないの」

「えへへ。落ち着かなくて」

長椅子に座ったまま忙しなく足を揺らす美海。顔は笑顔だが、案外かなり緊張しているのかもしれない。

そう思った春樹は、美海の頭に手を乗せて撫でた。

「まあ落ち着けよ。そんなひどい結果にはならないって」

「そ、そうかなあ〜？」

上目遣いで見上げてきた美海の瞳は、急に心配そうな色になっていた。単に結構《脆い》だけなのか、或いは気を許してくれているのか、それとも素の反応なのか——春樹にはその一瞬での判断が出来なかったが、何となく、笑顔でない顔が見れたのは嬉しかった。しかし、美海は春樹の反応が不満なようで、

「う、うう。なにニヤニヤしてるの！」

「え。俺そんな顔してた？」

「してた。なんか嬉しそうだった」

「まあ……否定はしない」

「Sだこの人！　他人の怯える姿見て喜んでる！」

「そんなことないって。……ないよね？」

「あるよ〜！」

ころころと表情を変える美海が面白くて、それ以上に可愛らしくて、つついからかってしまう。そして美海も、そんな自分の表情の変化に幾分驚いているようだった。

「で、担当の人はまだかなあ」

「そんな焦らなくてもいいだろ。気長に待てよ。あと足。パタ。パタ」

「あ。いや、ホント落ち着かなくて……ごめんなさい」

「まー気持ちは分からないでもないけどね。俺も最初はそんなん……いや、それ以上に緊張してたし」

「そうなの?」

「だって、誰も付き添いというか道連れがいなかったんだぜ? そりゃ緊張するのもやむなしっていうか……」

言っていて急に恥ずかしくなった春樹だが、そんな彼を見かねたのか今度は美海が春樹の頭に手を伸ばして、

「うんうん、仕方ないよね〜」

よしよしよし、と髪をかき回した。驚いて隣を見ると、美海の嬉しそうな顔が目に入る。その頬が少し赤い。本人的には、割と背伸びした行動らしい。それとも、先ほどの春樹と似たような心情を抱いているのかもしれない。

「なんか、俺からかわれてる?」

「いやいや、すごいなあって」

「……そこはかとなく上から目線っぽいけど」

「気のせいだって」

あつはつは、とわざとらしく笑う美海を半眼で眺めていると、ロビーに聴き慣れた声が入ってきた。

「おー、待たせてごめんな」

廊下からやってきたのは、青蘭学園で講師をやっている男で、名前を岸部雄馬といった。身長は春樹よりも低いのに、どこか言い知れぬ《大きさ》を持っている。初対面なら、彼にその気がなくとも圧倒されてしまいそうな雰囲気だ。

しかし、春樹は去年どこか中学2年から世話になっているので、今更気圧されたりはしない。

「あ、雄馬先生」

「あれ? お前も一緒なん? なんだよ、もう新生生ゲツトか。手が早いな」

「ち、違いますよ! ただその、偶然知り合ったから付き添いで……」
大慌てで否定する春樹の横で、美海が何かに気づいた。

「あれ? もしかして、青蘭学園の説明しに来てくれた人……? でしたっけ?」

「ん? おお、確かそうだったかな。如何せん数が多いもんで。えー

と……なんだっけ。日向、み、みう?」

「美海です」

「ああ、そうだ。珍しい名前だったんだ。思い出したよ」

雄馬は豪快に笑うと、さて、と話を切り直した。

「これから美海には、フレーム脳波テストと汎用リンクテストを受けよう。春樹とのリンクテストは、そのあとでいいだろう。2人も、付いておいで」

雄馬に連れられて向かった先は、第一マシンルーム。プログレスやαドライバーの能力値を測定する機械が並んでいる。

「まだ時期が早めだから空いてるよ。αドライバーはともかく、プログレスはいつつ3月下旬になると行列ができるからな」

あはは、と笑いながら、雄馬は機械のセッティングを進めていく。2人はそれを眺めることしかできない。暫くポカーンと突っ立っているだけだった。

「さて、準備完了つと。美海、そこに立って。これを頭に付けてな。春樹はちよつと待つてな」

美海は言われたとおりに測定装置の前に立って、機器から伸びるケーブルの先端を額に付け、ヘッドフォンのような器具を装着する。なんだか本格的にテストをするんだな、という実感が湧いてきた。

「よし、できたな。まずは試験運転……美海、違和感はないか?」

どでかいヘッドフォンのような器具を付けているため違和感が無いわけがないのだが、たぶんそういうことではないのだろうと察し、

「特にないです。大丈夫です」と答えた。

そんな美海の心情を見越したのか、雄馬が、

「ヘッドフォン、重くない?」

「重いですけど……」

「そう言うだろうと思った。我慢しとくれや」

「……なんだろう、今日は男の人がドSな日なのかな……」

半眼になってボヤク美海。その後ろで春樹も苦笑している。その横で、雄馬が太い帯状の器具を取り出し、

「春樹、これ付けてやって」

「え？」

「男ならまだしも……俺がやると、問題になりそう」

雄馬に小声で囁かれ、ハツとする。

手渡されたお腹に巻くための器具で、春樹もこれを付けた記憶がある。腹のあたりから心臓までを覆えるほどの太さだ。これは背中側で止めてそこにケーブルを接続するため、1人では装着ができない。

「よ、よし。美海、万歳して」

「はい」

美海が両手を挙げたのを確認すると、春樹は彼女の背中側に回り込んだ。帯を美海の正面で回し、両端を掴んで、そこでふと思いつく。「胸の高さに付けなきゃいけないんでしたっけ？」

「そうそう」

「んじや、美海。ちよつと前の方を持ち上げてね。大体胸の高さまで」

「はい。こんな感じ？」

「オツケー。んじやいくよ」

器具の高さが合わせられ、春樹が後ろの金具を閉じると、ぶかぶかだった帯が急に収縮して、美海の胴をびつちりと締め付ける形になった。しかし、一切の前触れがなかったため、美海は思わず嬌声を上げる。

「きやん!？」

「うわ、ごめん！ そうだった。こいつ金具を閉じると勝手にフィットイングするんだった」

かれこれ3年も触れていなかったので覚えていなかったが、春樹の頭の中に、初めてこの器具に触れた時に同じような反応をした記憶が甦った。しかも、その時のものは今のものよりもフィットイングの圧迫が強かったもので、前触れなしで締め付けられた春樹は息が止まって死にそうな思いをした。

そんな2人の様子を後ろからニヤニヤしながら眺めていた雄馬は、「若いっていいねえ」とぼやきながら機械を操作し始めた。

「よし、始めよう。じっとしてるんだぞ。まずは頭部位置確認と……」

雄馬が操作を進めると、まず、ヘッドフォンのヘッドバンドの部分が上下に動き、美海の頭部を撫でるように動き始めた。

「まずは頭の形と脳の位置を測る。あんまし動かないこと」

ヘッドバンドは1回頭の後ろ、うなじの辺りまで動き、今度は戻って額の方まで頭部を1週した。それを何か繰り返している。雄馬の言通り、頭の形と、その中にある脳の位置を確認しているようだ。

「機器は良好……だな。んじゃ、テスト開始」

再びヘッドバンドがゆつくりと動き出し、それと同時にスピーカーから微かな高音が聞こえ始めた。

「超音波……つまり人間には聞こえないレベルの高音が出てるけど、もし気分悪くなったら言ってな」

「だ、大丈夫です」

胸の位置で巻いた帯が、部分的に締め付けてきたり、緩まったりしている。どうやら内蔵の反応を見ているらしいが、美海の口からは、慣れない感覚に意図せず声が漏れていた。

「あつ、ん……はあ」

春樹は、自分の頬が赤らんでいくのを感じた。目の前だとびきり可愛らしい女の子が喘ぎ声を上げている……というのは、ちよつとどころではなく、だいぶ琴線に触れる。大人ぶっていても、春樹はまだ16歳。健全な青少年にこの光景は、刺激がなかなか強すぎた。

(やば……耳、塞いどころかな)

しかし、春樹は美海の背後に居る。向こうからこちらは見えないのだ。というわけで、申し訳ないと微かに思いながらも春樹は声を聴き続けた。なんだか変態になった気分だ。

「フレームはΩ……。脳波強度はかなり高め……こりや、素晴らしいな」

雄馬は画面に見入っていて、気付きもしない。気を紛らわそうと春樹も覗き込んでみると、画面の大部分を占めるオシロスコープの表示のような脳波形状の下にある、『フレーム』と『脳波強度』の欄が目に入った。『フレーム：Ω』は昨夜に予想した通り。その下に、『脳波強度：267』と出ていた。数字は細やかに変化しているが、大体2

60近くで安定している。

「これ……高いんですか？」

「そうだな。平均が大体150くらいだから、かなりというか、超高め」

感服の眼差しで美海を見る。当の彼女は圧迫にも慣れてきたみたいで、声も収まっていた。ふう、と胸を撫で下ろす春樹の横で、相変わらず画面を見ながら雄馬が続けた。

「だが……汎用フレームでは無いっぽいな。結構独特な形をしてる」

「分かるんですか、そんなこと？」

「あくまで経験に基づく勘、ってやつだな。……恐らく、汎用リンクテストの結果はあんまり芳しくないだろうが……でも、尖ってる方が良いつていう意見もあるし、一概に優劣は付けられないもんだ」

「はあ……」

脳波の形なんて見てもイマイチよく分からない春樹は、そういうえば、自分も汎用リンクテストの結果があまり良くなかったのを思い出した。平均70%のところだが、55%程度しかなかったのだ。

そんな春樹にも、去年、なかなかリンク率の高いプログラズが4人も見つかった。もし仮に、美海の汎用リンクテストの結果が良くなかったとしても、きつとそういうαドライバーが現れるか、少なくともどこかにはいるのだろう。何せ、世界が4つもあるのだから。

そうこう考えているうちに、美海のフレーム脳波テストが終わり、次は汎用リンクテストとなった。

ちなみに、ここで測ったフレーム脳波は、学籍番号と紐付けられ、校内のデータベースで管理される。そして、学籍番号にフレーム脳波を登録するのは青蘭学園への入学条件のひとつとなっている。

「今度は、そこに立ってるだけでいいぞ。中央に立って」

雄馬が指差す先の、四角く囲われた枠の中に美海が入る。今度はどんななんだろうとソワソワしていて、見ている春樹はなんだか急に心が和んだ気がした。

「位置オッケー。Ωモードで起動つと。動くなよー」

雄馬の操作によって、囲われた範囲が半透明の光で覆われる。機械

が擬似的にαフィールドを形成したのだ。この機械は平均的なαドライバーの脳波を模した波長の波を作り出すことができ、それとの整合率でリンク率を測る。本来のαフィールドの範囲は見えないのだが、これは識別のために見えるようにしている……とかなんとか。

「うーん、やっぱり思ったとおりだが……あれ？」

画面を眺めていた雄馬が素っ頓狂な声を上げた。春樹も気になって画面を見ると、徐々に上がっていくはずのリンク率の欄の数字が、なんと15%で止まっている。まさかの春樹以下——どころか、こんなに低い数字は見たことがない。

「もうちょい時間を置いて……みるまでもないか。もう完全に止まってるし」

装置を停止させ、「どうでした!？」と興奮気味の美海に対し、雄馬は特に言い淀むでもなく数字を答えた。

「それって、どのくらいすごいですか？」

「そうだな……平均の5分の1くらい」

「え……？」

「大体7人に1人くらいしか、そもそもリンクできるαドライバーがいないってことだな」

「ちよ、雄馬先生っ」

小声で叱責する春樹の横で、マジか、という表情を見せる美海。しかし、持ち前の明るさで一瞬のうちに立ち直り。

「じゃ、じゃあ次は春樹くんとの相性が知りたいです！」

「ちよ……そんな、相性なんて」

思わず赤くなる春樹だが、雄馬も乗り気で、「よし、やってみっか」と次の機械のもとに2人を連れて行く。

「さて、お待ちかねの相性確認タイムだ。春樹はこっち、美海はこっちな」

先ほどの機械と似た形状だが、今度は機械の前後両側にスペースがある。春樹には、フレーム脳波テストで使ったものと同じヘッドフォンを渡され、それを付ける。これにより春樹のフレーム脳波を機械が認知、αフィールドを発生させるだけの技量がなくともリンク率

が測れるのだ。

「おし、準備完了だな。それじゃ、スタート」

美海の時と同じようにヘッドバンドが動き、頭の形と脳の位置を計測、後に脳波を測り出し、美海の側で汎用リンクテストと同じく、疑似αフィールドが形成される。

しかし、今度は美海の反応が違った。フィールドが形作られるや否や、閉じていた両目が無意識に開き、虚空を見つめる。その眼は、新鮮な驚きに満ちていた。誰かと繋がる感覚に、不思議と心が躍る。

一方の春樹は、あくまで疑似リンクを行っているのは機械であるため、美海とのリンクの感覚を得ることはできない。しかし、機械を挟んだ反対側にいる美海の反応が、先ほどのテストとは明らかに違うことが見て取れた。

なんの前触れもなく、唐突にテストが終わった。ほんの一瞬だったように思えたが、時計を見ると、なんと5分間もテストしていたらしい。美海は、まだリンクの余韻から抜けきっていない。呆然と宙を眺めている。

「ど、どうでした？」

春樹が恐る恐る雄馬に尋ねる。雄馬は、画面を食い入るように見つめていた。何か、信じられないものを見ているように。春樹の呼び掛けにハッと我に帰った雄馬は、

「お前ら、すげえな」

それしか言わなかった。

こちらに向けられた画面を見て、春樹もまた呆然となった。

——どうして、こうなるんだ。

『リンク率：98.9%』

.....

「……………」機嫌だな」

「うん！ 汎用リンクテストはアレだったけど、春樹くんとは相性バツチりだったからね！」

昼下がり。商業地区の喫茶店で春樹と美海は昼食を済ませ、さらに話し込む為にドリンクバーで粘ろうとしていた。主に美海が。

「なあ、結構混んできたし、そろそろ出ないと店側にも迷惑だぞ……？」

「えー？ もっと落ち着いて色々お話したかったのに……でも、迷惑かけるのはいけないよね」

美海は聞き分けよくジュースをストローで一気に吸い上げると、「よし、行こっか」と席を立った。春樹も後続き、2人分の料金を支払う。それに気付いた美海が「あ、私の分……」と慌てるが、春樹は右手を持ち上げてそれを遮った。

「わ、私の分は私が払わないと」

喫茶店を出ると、いきなり美海が食い下がってきたが、

「相性最高のお礼に……な」

とまたもそれを遮った。美海は不服そうに頬をぷくーつと膨らませたが、すぐになつこり笑顔に戻り、

「じゃあ、あそこでお土産買ってあげるね！ ご馳走様でしたー！」

なんて言い出した。15歳で礼儀が成りすぎだ、これは敵わん。と心の中で苦笑した春樹は、「はいはい、ありがとうね」とそれを流し、シヨップिंगモールへと足を向けた。

「寮の先輩にね、いいお店教えてもらったんだ」

「へえ。誰に？」

「えつと、東条遥先輩と神風千鳥先輩……で分かる？」

「分かる分かる。風紀委員でしょ？ それに千鳥には結構世話になってるな」

「そうそう！ 『風紀委員に入らない!』って勧誘されたんだけど、入るべきかなあ？」

「んー、どうだかなあ？ 俺にはなんとも……でも、確か試験あるんだよなアレ。しかもやたらに厳しいヤツ。俺は面倒だったからパスしたけど」

「うえ〜？ だったら私もパスかなあ。テストって苦手なんだよね〜」

談笑しながら歩く2人。春樹は去年、プロGRESSに「歩くの早いよ〜」と何度も言われたため、自然と歩幅を女子に合わせるようになっていた。

しかし、春樹の内心は複雑だった。美海とのリンク率は、あの4人とのリンク率よりも高かったのだ。98.9%——いや、90%を超えた時点で、まっとうな観点から見れば、すぐにチームメンバーに加えるべき数字だ。

ブルーミングバトルには高等部2年からしか参加できない。が、それはαドライバーの話で、実はプロGRESSは中等部2年から参加が可能だ。これは、ブルーミングバトルの最中はαフィールドによってプロGRESSが守られるからであり、逆に守る立場であるαドライバーは、プロGRESSが本来受けるべき負荷を全て引き受けるため、それなりに身体的に成熟している必要がある。

このルールに沿うと、美海は既にブルーミングバトルへの参加権を持っている。そして、本人は恐らく、春樹がチームを組むと聞いたなら、喜んで参加をするだろう。

だが、春樹は美海をチームに参加させたくなかった。それは、春樹が昨日自分自身を抉り、分かったことがあるからである。

——俺は偽善者だ。今だってこうして、内心を偽って美海と喋っている。

去年親交を深め合ったあの4人は、様々な経緯を辿ったにせよ、それなりにぶつかり合い、お互いに分かり合うことができた。その上で、こんな自分と仲間になつてくれた。彼女らに対する恩情は、決して潰えることはない。だからこそ、今でもこうしてウジウジとそれを引きずっている。振り切れてなどいない。今でも女々しく彼女らを求めている愚かな自分が、確かに存在している。

美海はまだ自分を知らない。嘘つきで偽善者な自分を知らない、ただの気の良い先輩としての自分しか見て貰えていない。

もし、美海が好いているのが、そういう自分だったら？

本当の自分を、認めてくれるだろうか？

それが、ただの先輩後輩の関係だったら、迷わず自分はそれを暴露しただろう。自分は君の思っているような人間ではないから、期待しないでほしい。そう言えただろう。

だが現実はそのようではない。

αドライバーとプログラムのリンク率はただの数字に見えて、実はそうではない。リンク率というものは、目に見える数字以上にαドライバーとプログラムの仲に影響を及ぼすものである。しかも、今回はそれが2段構えで美海に襲いかかっている。

汎用リンク率を告げられた時の美海表情。あれは本物の、彼女の本心を顕した顔だろう。平均70%くらいのところ、測ってみたら15%だった。平均以下どころか最低レベルだったのには、ショックを受けて然るべきである。

しかし、その直後に測った春樹との相性は、ほぼ最高どころか文字通り千載一遇の相性だった。ショックの直後に救いがあるというシチュエーション、またはその逆は、人の心に決して少なくない影響を与える。今回の場合、美海が春樹に依存する可能性が十分にあるということだ。

現に、今の美海はとにかく嬉しそうで、それを見た春樹の心には、決して偽りではない嬉しさに満ちている。だがその横で、それが碎かれる要素を自分が秘めていることに危機感を覚えてもいる。

自分が信頼してやまない先輩の本心を知った美海の心は、どうなるだろう。

2度と現れるかどうか分からないほど相性の良いパートナーが自分に向けていた表情が偽りだったと知った時、美海は何を思うだろう。

そして、何よりもマズいのが、ブルーミングバトルにおける何よりも重要な要素が《絆》だということ――。

一番気に食わないのは、こんな状況であるにも関わらず、自分の胸は罪悪感で張り裂けそうだというわけでもないことだ。

このままはぐらかすだけではダメだということは分かっているの

に、ふと気づけば時間稼ぎの方法を考えている。そのままあなにし続けられることではないと知っているはずなのに、どうにかして曖昧に煙に巻いて振り切る手段が、頭の中をぼんやりと占拠する。

自分は今、正に、臆病者で偽善者だった。

「春樹くん？ どうしたの、難しい顔して」

「え？ ああ……そうだな。少し考え事」

「もう、ちゃんと私とお話してよね！」

「ぐ、ごめん……」

怒ってますよ、という顔を作ってみせる美海に対して、春樹は曖昧な返事を返すことしかできない。

（こりや、まいったなあ……）

この懐き様。美海が既に春樹に対してそれなりの信頼を置いていることは、傍から見ても明白である。

もういつそ、騙し抜くか。それとも、洗いざらい話すか。前者は後々心が痛み、後者は今すぐ心が痛む。隠し事、というものの厄介さを、身に染みて感じた。

「あーっ！ 猫カフェだって！ ねえねえ春樹くん、猫カフェだって！」

「猫、そんなに好きなの？」

「うん、大好き！ 入ろうよー」

「でも、今ご飯食べたばかりじゃん。また今度な」

「え〜？ 仕方ないなあ、今度一緒に行こうね！」

満面の笑みで、指きりげんまん♪ とやってくる美海。反面春樹は、また安請け合いしちまったという痛恨の面持ち。

（この笑顔は……嫌いじゃないけどさ）

少しは考える時間をもらってもいいよな……と思考が逃げ気味になるが、突発的に行動したってロクなことにはならない。後から知った美海がどうなるか、というのを考えるのが嫌だったのもあるが、今は、この嘘に身を委ねていたい。

——弱虫。

気づけば商業地区の中央広場に出ていた。この地区の象徴的な才

プロジェクトである《青鐘の噴水》は、今日も天に向かって煌びやかに水を噴いている。

「で、今日はどこに行きたいの？ 特別行きたい！ って場所ある？」
「とりあえず教えてもらったお店に行って……で、その後は……昨日見れなかったところ、全部かな！」

「はは……こりや困ったちゃんだね」

「あつ！ ねえ春樹くん。デザートに、クレープなら食べていいでしょ？ ほら、あれ！ 私が買ってくるよ」

美海が指差す先には、クレープ屋の屋台がある。商業地区だと、こういう屋台は珍しくなく、アイスクリームだったりチョコロスだったり、女子高生が食いつきそうな軽食を取り扱ったものはいくつもあつ。初めて見たときは、中央広場の雰囲気も手伝い、デイズニードの中みたいだ、と思つたものだ。

「そうだね。じゃあお金を」

「ああつ、ダメだよ！ 私が奢るもん！」

「え？ 払うよ普通に」

「なかなか強情だねつ。でも……」

財布を出そうとした春樹を止めた美海は、

「相性最高のお礼に……ね？」

先ほど春樹自身が口にした言葉をそのまま真似ると、可愛らしくウィンクして駆けていってしまった。呆然と取り残された春樹は、噴水近くのベンチに座ると、頭を掻いて空を見上げた。昨日とは打って変わつての晴天だ。

「……今日は、一本取られっぱなしだな」

……

「……で、これが彼女のフレームだ。どうよ？」

カーテンが全て締め切られ、照明が絞られた音楽室の椅子に腰掛けた雄馬は、手に持っていた端末を横に居る男に渡した。

端末を受け取った男は一瞬顔をしかめるが、すぐに緩んだ。

「ほぼ確定だ、が……あまり目を離さないほうがよさそうだ。どう転ぶものか」

彼もまた不思議な雰囲気のものだ。雄馬よりも少し高い身長割に、雄馬と同じく謎の威圧感を放っている。ノータイのシャツにスラックスを履き、右耳にだけ蒼い星のように煌く宝石のはめ込まれたイヤリングを付けている。顔からして歳は30程度に見えるが、それなりにストレスが溜まっているのか、短く爽やかな風にかットされた髪には既に白いものが少しばかり混じっている。しかし、そんな点を含めて彼には男としての『味』があった。

きずきかいと
城海斗。青蘭学園で数学の講師をしている男だ。

「やっぱ、海斗先生でも分かんないわけ？」

「流石にフレームだけでは、何ともな。単に異常にエクシードが強いだけかもしれないし、実際に見てみれば分かるだろうけど」

雄馬は明らかに年上且つ『上のポスト』である海斗にも物怖じせず、にタメ口で喋る。対する海斗もそれを気にする素振りは見せない。2人の付き合いは既に数年間に及び、その中で彼らは、互いの特徴を大いに弁えていた。

「俺は何となく分かった気がする。沙織と同じ雰囲気だったからね」

「沙織……」

「そ。姪っ子。超可愛いんだけど、その……エクシード発現の場に俺も居合わせちゃって。というか、多分俺のために生まれたんだろうな、あのエクシードは。まだ彼女は5歳かそこらだったし、俺も17だったもんだから、事後処理とか何やらとにかく大変で……でも一番に感じたのはやっぱり、他の子たちとは違うってことだけだったなあ」

古い記憶を掘り出しながら懐かしげに語る雄馬の横顔を眺めながら、不意に海斗が呟いた。

「……一馬も、同じようなことを言っていた」

瞬間、雄馬の表情がサツと凍りついた。失言に気付いた海斗が「ああ、すまん」謝り、

「一馬の話は、しない約束だったな。すまない」

「いや……いい。そもそもあいつに繋がりそうなこと言ったの俺だし。それにあの時は、あいつにも迷惑かけた。そういえば……」
「……どうした？」

「あ……いや。何でもない。ちよつと思ひ出してな。あいつが最後に笑ったの、沙織のエクシードを見た時だったな。なんつうか……俺にも見せないような、本当に嬉しそうな表情だった」

独り言のような雄馬の呟きは、海斗にはよく聞き取れなかった。海斗はそれをまるごと聞かなかったことにして、「さて」と雄馬に向き直った。

「彼女に関しては、俺もそれなりに情報が欲しい。しかし、あまり私生活を邪魔するのも忍びないもんだ。青春は一瞬で過ぎ去るからな。てなわけで、調査は緩く、新学期が始まってからだ。それまではお前も少し羽を伸ばせ。彼女の件もあるし、お前には無理させてばかりだからな」

「じゃあ出勤させんなよな。今日の仕事、俺じゃなくて凌雅でも良かったろ。……それに、無理してんのはお互い様じゃんか。白髪、増えてるぞ」

「メルとさくらにも言われた。メルに無理すんなって言われるのには慣れてるが……さくらに「おジジになってる」って言われて……ちよつとシヨックだったな」

「おジジとはまた傑作だな。休まなきやならんのは寧ろ、あんたの方ってことで」

軽く笑い飛ばした雄馬はスツと立ち上がった、

「アイはとても良くなってる。もう式神1人置いておけば、留守番させといても心配ないし、そんなに苦労してない。最近じゃすっかり人間らしくなって、少しばかり家事も手伝ってくれるんだぜ。皿洗いとか、色々な」

そう言い残して音楽室から立ち去った。一人残された海斗は、様々な情感の籠った溜め息をひとつ吐く。

「主の器、か……」

そうして、彼もまた音楽室から出ていき、施錠されたそこには誰も

いなくなった。

「なんでこんなに現れるんだ……あんたに意志は無いんじゃないのか……？」

……

中央広場の時計が午後5時ちょうどを指した。

「ねえ……まだ見て回るの？」

「え？ もちろんだよ！」

かなり疲れた表情の春樹。隣りには、数時間前と全く変わらず元気な美海。

広場のベンチに座って、美海チヨイスのクレープを食べて以降、ノinstoppで様々な店を見続けている。それ自体は構わないのだが、問題は、服とか靴とかいった物の内、女性物は見てもあまり面白くないことだった。まあ、美海に似合いそうなものを見繕うのは、それはそれで面白くはあったのだが……しかも、途中で流石に気を遣ったのか、逆に美海が春樹に似合いそうなものを探してくれたりもした。結局のところ、春樹が美海のテンションについて行けないだけだった。

何しろ、ここは異能に目覚めた少女を育成する島。当然ながら女性物を取り扱った店が多い。率直に言って、男子はアウエーだった。特にこのショッピングモールの中では。

(この感覚は……アレだな。あの4人について来させられた時の感じに似てる)

女三人寄ればかしま姦しいとはよく言ったものだが、4人集まると隙がない。取り残された男子は完全にハブである。何が凄いかというと、その隙のなさを美海1人で再現しているところだろう。

「ほら、もう5時だよ。そろそろ帰らないと、寮の夕食に間に合わないんじゃない？ 確か、6時半……だったけ」

「あ、ホントだ……え、もっと春樹くんと一緒にいたいなあ……」
「えっ!？」

何気なく美海が漏らしたセリフに、思わずドキツとした。しかも、なんだか非常に庇護欲を掻き立てる、寂しげな表情を浮かべている。当の美海は本当に何気なかったらしく、驚く春樹を見て「ど、どうしたの?」と目を丸くしている。

「いや、何でもない……それより、な」

「そうだね。じゃあ残りは明日ってことで!」

「え? 明日も?」

「うん? もちろんだよ?」

マジですか、という表情を見せる春樹。しかし、先ほどの表情がまだ目に焼き付いている春樹は「仕方ねえな」と了解してしまった。それを見た美海は満足気にしていたが、「あ、そうだ」と何か思いついたようで、

「じゃあ最後に、春樹くんにお土産買ってあげなきゃね!」

「お土産? いいって。さつきクレープ奢ってもらったし」

「いやいや、あれじゃあ全然足りないよ。うーん、何にしようかなあ……」

「だから、そんなに気にしなくてもいいって」

「ダメ! 買ってあげるの!」

「……まったく、なかなか強情だね」

春樹そつちのけで熟考モードに入る美海。春樹は「もうどうにでもなあれ」的な顔になった。まあお土産を買って貰えるのは、済まないとは言え不快ではないし、「むむむ」と頭をひねっている美海の様子は、それはそれで微笑ましい。やたらに気が利く美海だが、そういうところは実年齢よりも少し幼めなのか、まるで妹を見ているようだ。もともと、春樹は一人っ子なので兄弟がどういふものなのかは知らないのだが。

「あ、そうだ! ちょっと待っててね!」

急にピコーンと来たらしい美海は、春樹をその場に置いてダツシュした。そのダツシュが、冗談にならないくらい速い。陸上同好会のプログレスらと張り合えるくらいの速さに度肝を抜かれて、待つこと3分。

「おまたせ！」

「……走るの速いな」

「えへへ。かけっこじゃあ、幼稚園から1位以外とったことないんだよ」

はいっ！ と渡された紙袋は、少し重い。

「ありがとう。これ、中身なんなの？」

「今見ていいよ」

美海に許可をもらったので中を覗いてみると、マグカップが入っていた。それは、小物が売っていた店で春樹が少し気に入り眺めていたものだ。取っ手が風のような渦巻きのような形になっている、白地にスカイブルーの模様が入ったマグカップ。美海が他のところを見ていた時にちよつと眺めていただけだから、彼女は知らないと思っていたが……。

「美海、見てたのか」

「えへへ。どうですか？」

今日は本当に一本取られっぱなしだ、と改めて認識した春樹は、美海の頭に手を乗せて、よしよしと撫でる。美海は、もう竦むことなく、目を細めて春樹の愛撫を受け入れた。

「ありがとう。大事にするよ」

「はいっ！」

その時の美海の笑顔は、本当に、本当に嬉しそうで。

それを見た春樹も、より嬉しくなった。美海は、きっとそういう魅力を持った女の子なのだろう。周りに笑顔を与えられる、誰にでも真似できるものでは決してない魅力。

昨日見損ねたから、今日はしっかり見ておこう。

嘘を隠した心が、ちくりと痛んだ。

第3話 「ゴホウビあげちやおうかな♥」

「え？ 春樹くん？ うーん……空気読むのが上手い、かなあ。ちよつとぶつきらぼうで抜けてるけど、そこがカワイイって言う子もいるよ。あたし？ あたしは……確かに春樹くんはカワイイっていう意見には賛同するけど、その、もう心に決めた人がいるから……あ、でも、だからって春樹くんが嫌いなわけじゃないよ？ 寧ろ好感度はメチャ高だよ？」

「春樹がどんな人か？ まあ、いい奴だと思っよ。ちよつと周りに流されやすいところはあるけど。苦労人体質ってヤツ？ 私も去年、何度が迷惑かけたし。あと……まあ、今はちよつと落ち込み気味だろうから、そこんとこフオローしてあげると喜んでくれるかもね。え、私？ ……気の利いたこととか言うの苦手だし……逆に気を遣わせちゃうと悪いし……現にもう遣わせちゃったし……」

「春樹さん、ですか。優しい方だと思います。去年、困ってた私を手伝ってくれたりもしましたし。それに顔立ちも整っているので、隠れファンもそれなりにいるのではないかと。αドライバーとしても優秀で、私も彼と1度だけリンクテストを行ってみたのですが、かなりの高レベルリンクができて嬉しかったです。去年までは彼と非常に仲のよかったプログラマーがいたのですが……ああ、すみません。これ以上は……」

………

「春樹くん、評価高いなあ……」

夜、美海はベッドに寝そべって天井を見つめていた。頭の中には、先ほど夕食の席で先輩に聞いた春樹の評価がもやもやと漂っている。

評価が高いのはいい。自分にとって唯一かもしれないαドライバーなのだ、美海としてはとても嬉しい。強いて言うなら、ちよつと流されやすそうなのが気になるが。

しかし、ライバルが多そうというのは、少し不安になる。彼に対し

て反感情を持っている。プログレスは、話の限りでは1人もいない。彼は、なんというか、八方美人というヤツなのだろうか。

その一方で、春樹と特別仲がいいというプログレスもまた1人もいなかった。1学年上の神風千鳥は仲が良さそうだったが、話を聞くと今は少しギクシヤクしているらしい。

「謎、だなあ」

彼ほど周りからの評価が高いなら、もうちょっと親しいプログレスが3人か4人くらいいてもおかしくないのに。高等部2年には、αドライバーが彼を含めてなんと2人しかいないという。「学年で好きな男子は？」というアンケートが出回ったら、単純計算で票の半分は春樹のものだ。それとも、もう1人のαドライバーが、それこそ八方美人の超絶イケメンなのだろうか。

——それとも。「去年までいた、彼と仲のよかったプログレス」っていうのが。

結局「詳しいことは彼に聞いてみてください」とはぐらかされてしまったが、一体どんなプログレスだったのだろうか。しかし、そんな風に言われたからと言って、「本人に聞いてくれて言われたから聞きにきたよー」なんて切り出せるほど美海は無神経ではない。

彼はきつと、悩んでいるのだ。最初に会った時も「考え事」と言っていたではないか。海風の吹き荒ぶ岬でひとり、ずっと考えていたのだろうか。そのプログレスのことを。

そう思うと、美海は途端に、自分がどうしたらいいのか分からなくなった。「過去なんて気にしないで、今、私を見て欲しい」なんて言えよいのだろうか。きりとて、一緒に悩んであげるのが正解なのか。彼女には、どちらも採るべき選択肢ではないということが分かっていた。だが、それ以外には何も思いつかなかった。

「私、バカだからなあ……もつと頭が良ければ、春樹くんになんて言っ
てあげればいいか、私なんかに分かるのかなあ」

口に出してつぶやいてみる。

『私なんか』

その言葉が耳から頭に入ってきて、そうなるとなんだか悔しくて、

無性に腹立たしくなった。

美海は、馬鹿な自分が嫌いだった。

.....

その後.....

「え？ ダメなの？」

『友達付き合いもあるからさ、その、明日だけ勘弁してくれないかなあ？』

美海が聞いただと、春樹は弱ったような声で返してきた。

突然携帯に春樹から電話がかかってきて、明日は友達に誘われたからそつちを優先したいと言われた。

約束したのはついさっきなのだが、これはいわゆる、ドタキャンなのだろうか。怒ってもいいか、美海は少し悩んだ挙句、

「せっかく準備したのに.....」

ちよつと拗ねたような声を出してみた。すると春樹は、

『ホントごめんね。明後日あさってさ、鐘赤島しやうせきとうを案内するから。青蘭島よりも綺麗なビーチがあつてね、今はまだシーズンじゃないんだけど。それに、赤の世界の料理を出す、いいレストラン知ってるんだ。そこでお昼をご馳走するから。ね？ だから、その』

慌てて美海の機嫌を取ろうとまくし立てる春樹がなんだか可愛らしくなって、思わず笑ってしまった。先輩の言ったとおりだ。

「もう、別に怒ってないよ。確かにお友達は大事だもんね」

クスクスと笑う美海に少し安心したのか、スピーカーから春樹の溜め息が漏れ聞こえてきた。先程はその場のノリでああ言ってしまったが、流石に3日間連続で束縛するのも何となく気が引けたし、ちよつと良いといえばちよつと良かったのも事実だ。まさか、向こうから断ってくるとは思わなかったが。

「でも、明日暇になっちゃった。どこかオススメな場所とかある？」

『オススメ？ そうだね.....鐘赤島以外だと、賢緑島けんりよくとうとかどうかな。青蘭島はかなり開発されてるけど、向こうはまだ自然が結構残ってる

ね。でなければ夕玄島ゆうげんとうなら、黒の世界の文化が見られて、面白いと思うよ。白百合島しらゆりとうは平地が多い島で、島を一周するサイクリングコースがあるんだ。もちろん自転車はレンタルしてくれるし』

話を聞くと、アクティブ派の美海としてはどこも魅力的に感じられたが、今回はとりあえず、お隣の島・夕玄島に行くことにした。

『夕玄島にはバスが出てるし、フェリーもあるから、好きな方で行くといいよ』

「ありがと！ 春樹くんも楽しんできてね」

.....

翌朝。

既に外出の準備は整えている。昨日美海に貰ったマグカップの中のコーヒーを飲み干してシンクで洗うと、お気に入りのかばんを背負い、自宅を後にした。

「さて.....下見といくか」

.....

青蘭諸島は5つの島からなり、青蘭本島から北向きに右回りに五角形を描くように、鐘赤島・賢緑島・白百合島・夕玄島が存在している。各世界への門ハイロウはそれぞれ、黒の門が夕玄島、赤の門が鐘赤島、白の門が白百合島の上空に開いている。また、青蘭本島のすぐ隣にある鐘赤島と夕玄島には、15キロメートルほどの橋が架かっており（白の世界の技術を駆使して建造された、非常に頑丈なものらしい）、春樹の言葉通り定期的にバスが出ていて、もちろん、普通の乗用車でも行き来ができるようになっていた。

青蘭本島以外の4つの島は、どれも大きさは本島の20%ほどしかないが、本島に設置しきれなかった様々な施設があるため、来島者は多い。また、異世界に行くための転移施設『界港かいこう』もそれぞれの島にある。

フェリーはこの前乗ってきたので、今日はバスで夕玄島に行くことに決めた。15キロメートルもある夕玄大橋は、途中にひとつサービスポイントを挟んで青蘭島と夕玄島を繋いでいる。

窓にへばりついて外を眺める美海は、いつも通りのワクワク顔だ。バスは閑散としているが、どうもそれが普通らしい。青蘭島の中だけでも見所がたくさんあるから、別の島まで足を伸ばしていられないという。それに、まだ来島している新入生が少ないというのもあるだろう。

「海、きれいだなあ」

見渡す限り一面の青に、すらつと伸びる白い橋は、なかなか風景として映えるものがあった。今は春だが、夏にはきつと雄々しく立ち昇る入道雲が加わり、もつと綺麗になるのだろう。

青蘭学園生は、島の交通機関を使うのに料金がかからない。学生証を見せれば、バスだろうがフェリーだろうが、好きなだけ乗れる。また、病院で診察を受けたり、島民会館を貸し切るなど、公共施設の使用も無料。これもある種の学園生特権だ。行き帰りの交通費を払うと思っていた美海は、思わぬところで予算が浮いたので上機嫌になり、帰りはフェリーで戻ろうと心に決めた。

パンフレットを見ると、行き先の夕玄島は夕日に関する絶景スポットがいくつもあるらしい。当然だが全部回りきるのはまず不可能なので、特に評価の高い西の岬を今日の最終地点に設定する。まあ、決めたところであちらへこちらへとフラフラしてしまうのが美海なのだ。

少し顔を上げると、夕玄島の上空に黒の世界への門ハイロウが見えた。こうして近づいてみると、思っていたよりも小さく見える。というより、遠くから見えるよりも高い位置にあるようだ。紫色に煌く星のような門を、同じ色の魔法陣が幾重にも取り囲んでいる。

昨日春樹から聞いたが、各世界への門は、通常では結界によって閉まっているらしい。いつでも行き来出来ると思っていたので驚いたが、この世界でも国同士を行き来するにはパスポートが必要で、それに加えて様々な手続きを踏まなければならない。それが世界同士の

事情になるのだから、当たり前といえは当たり前の話だ。

毎日、この世界の時間で言う4時〜7時・12時〜15時・18時〜21時の間だけ、あの結界が緩んで通行が可能になるという。当然ながらこの世界で言うパスポートのようなものが必要になり、世界移動の理由やら滞在期間やらも申告しなければいけない。どこの世界も変わらないものだ、と思う。

美海の今日の目標のひとつとして、結界が緩んで通行が出来るようになる瞬間を見てみたい、というのがあった。案外、空港で飛行機の離着陸を見たがる少年のような心持ちなのかもしれない。

バスに揺られながらパンフレットを眺めて過ごすこと約30分。夕玄島の西側にある港でバスを降りた。大型の客船を停泊させる青蘭港よりはこぢんまりとしているが、これはこれで悪くない。帰りはここからフェリーに乗ることになる。最終目標の岬も、少し見渡したらずぐに発見できた。

港から島の西側の海が一望できた。正面には鐘赤島と赤の世界への門が見える。蒼い海と空とのコントラストは、思わず写真に収めたくなるような美しさだ。せっかくなので、携帯で写真を撮っておいた。美海にしては上手く撮れたので、また少しテンションアップ。

黒の門は、もう頭の上にある。遠くから見た時の大きさからしたら、真下に入ると頭の上は一面紫色だろうな、と思った。が、遠くから見た時と真下から見た時で、何故かあの門の大きさは変わっていない。というか、今写真に収めたばかりの赤の門と大きさがまったく同じである。そこはいまいち腑に落ちないが、それだけあの門は特殊なものなのだろう、と自分を納得させた。

時刻はまだ午前10時。名所を見て回る時間はたっぷりある。

「よし、行くかぁー！」

美海は満面の笑顔を浮かべると、上空に煌く門を目指して歩き始めた。

.....

「……それでデートスポットの下見に僕を連れて行くってわけね。別にいいと思うよ、そういうの」

「で、デートじゃねえし！ その、自分で案内するって言い出したんだから、それなりに知っておかなきゃと思っただな……」

鐘赤島行きフェリー。その2階から海を眺める男が2人。

片方は春樹。もう1人は、春樹よりも高い身長の優男だ。名前を三島冬吾しまとうごといい、青蘭学園高等部2年に2人しかいないαドライバーの内の1人だった。

「もう新入生ゲットしちやってるんだね。やっぱここでの暮らしが長いと、手も早くなるもんなの？」

「だからゲットとか手が早いとかそういうのじゃないって！ 美海はその、なんていうか成り行きで……」

しどろもどろになって反論する春樹を、冬吾は普段通りの笑顔で眺める。春樹の心が少しずつ元に戻ってきているのを感じ、素直に嬉しかった。

明日の今日で下見に行くとは、知ったかぶりをしたくなかったのだろうが、どっちにしろ付け焼刃である。あまり効果的ではないのではと冬吾は危惧したが、あえて口には出さないでおいた。代わりに、

「普通さ、ただの成り行きなんかで明日の下見とかする？ 春樹は美

海ちゃんのこと、大事に思ってるんじゃないの？」

「お前はしそっただけだな、この優男やぶおが」

「……確かにそうかも」

真面目に考え込む冬吾を若干殴りたくなる春樹。2人はなんというか、こういう関係だった。

今日、実は外出を誘ったのは春樹の方だった。美海には嘘を吐いたことになるが、それでも鐘赤島は個人的に大好きな島なので、どうせ紹介するなら、その見所をしつかりと再確認しておきたかったのだ。確かに冬吾の言うとおり「成り行き」で済ますのには些か苦しいものがある。

これはごまかしなのだろうか。

「それで、どこに行きたいの？ 今日はい日開けておいたけど、ユフイ

に言われててさ、なんか明日早いらしいから、あんまり遅くまでは無理だよ?」

「お前とデートしてるわけじゃねえし、別にそこまでしないよ。まあ、美味しいもん食べさせて、コーラルビーチを見せて、で、どうするかなんて考えてるんだけど。とりあえずそこは見ておくとして……」

「残りはノープランなんだね……仕方ないなあ。考えてあげるよ」

少し呆れつつも、冬吾は協力してくれるようだ。

「ありがとな。お礼にドリンクバーは俺の奢りにしとく」

「別にいいけど。ちよつと持ち直してくれたみたいで嬉しいし」

「あー……そうだな。お陰様で、まあそれなりに」

「ひよつとして、その美海ちゃんが好きっかけだったんじゃないの?」

「さ、さあ。どうだろうね」

「あ、凶星だ。それなら、質のいいお礼がしたいってのも分からないじゃないよ」

冬吾は小さく笑うと、行き先の鐘赤島に視線を向けた。その上空には、赤の世界へと続く門が、赤い光を放っている。

「もう1年経ったのか……なんか、色々あった1年だったな……」

冬吾が誰にともなく呟いた。春樹も何か感じるところがあるのだろう。視線を冬吾と同じ方向へと向ける。

中学2年の時に青蘭諸島に来た春樹にとって、去年は3年目だった。高校生になった春樹は、青蘭諸島で一番忙しかったその1年を、充実したものにしたかった。

振り返ってみれば、確かに充実はしていた。しかし、それは11月までの話であり、4人の仲間を失った12月以降は、まるで亡霊のような日々を送ってきた。生きる意味のない、無為な人生。そう思っ日々を生き続けた。プログレスについて悩むことなど、もう二度とないだろう。これ以上の悩みなど、存在し得るわけがない。

などと思っていたのもつい先日までの話で、今こうして、美海というプログレスに対して悩みを募らせているわけだが。

「先なんて、分かんねえもんだよな……」

「老人みたいだね、春樹」

「うるせ。感慨に浸ってんだ」

春樹は手すりの上で組んだ手の上に顎を乗せた。少し首を傾けて鐘赤島を眺める。3つある門には特殊な結界が張られており、ある一定の距離に入ると、そこからは、どこから見ても同じ大きさに見えるため、遠近感が薄れてしまう。奇妙な感覚だったが、青蘭諸島にいる、という証のような気がしており、何となく嫌いになれなかった。

2人を乗せたフェリーは、鐘赤島へと向かっていく。

.....

世界同士を繋ぐ門^{ハイロウ}。真下から見たそれは、遠くから見た時とはまた違った荘厳さがあつた。

黒の世界への空港ならぬ『界港』。巨大なリング型をしたその建物は近代的なガラス張りで、それこそ空港のような施設だった。

「へえ〜……黒の世界って、いつも夜なんだ。なんか健康に悪そう……」

リングの内側がよく見えるベンチに腰掛けた美海は、観光客丸出しの仕草でパンフレットを眺めている。

世界転移装置。リングの中心に位置するそれは、パツと見は3本の塔だ。左右の5階建ての塔には、1階以外のそれぞれの階層に通路が張り出しており、その先に輪つかのような足場がついている。パンフレットによると、左右の2つの塔は左右対照になっており、それぞれの輪は、美海がいる方から階段状に外向きの半円を描くように4つつ。人工物であるはずなのに、妙に神秘的に思える。

美海から見て右側の塔は黒の世界へ行く用で、左側は黒の世界から来る用らしい。輪つかの外側は電光掲示板になっており、出発時刻及び到着時刻が表示されている。

美海が驚いたのは、世界移動の方法があまりにシステムティックだったことだ。これでは本当に空港と変わらない。全く異なる世界を繋ぐシステムをここまで整えるのに、いったいどれだけの時間と労力をかけたのかなど、中学生に毛が生えた程度の頭脳であると自負し

ている美海には、分かるどころかそれを疑問に思う由もない。

あと少しで門が開き、世界間通行の様子を見ることが出来る。美海は落ち着かなさげに、ツインテールまでびよこびよこ揺らしながら待つこと5分……10分……15分……。

時計の短針と長針が、同時に12を指した。

それと同時に、門の中心が、ちかり、と強く煌く。門を幾重にも囲っていた魔法陣の内側あたりの一部が、外側に吸い込まれるようにして消失し、紫一色だった門の中心に、新しく白い光が生まれた。

美海は思わず立ち上がって窓にへばりついた。変化はそこまで派手ではなかったが、美海はたった今、他の世界と繋がるその瞬間を目の当たりにしたのだ。興奮して当然である。なんと言ったらいいのかわからないものだから、半開きになった口からは「はえ……」と気の抜けたような声が出てきている。

しばらく放心状態で門を眺めていると、門の中心から紫色の光が吐き出されてきた。光は左側の塔の一番上のリングへと集結し、1人分の人影を作り出した。それに続けて、今度は幾筋もの光が門から流れてきた。まるで流星群のような光景に、これまた言葉を奪われる美海。

光が止んだ頃には、リングの上に数十人程の人が現れていた。ほぼ全員が、物珍しげに辺りをきよきよ見回している。初めてこの世界に來た人にとっては、きつと空が青い、というだけでも大仰天のはずだ。

「世界の間って、あんなふうに移動するんだ……」

移動している最中はどんな感じなんだろう、と漠然と思いを巡らせながら再びベンチに腰掛ける。もう少し時間が経つと、今度は右側の一番上のリングの上に乗っていた人たちが、紫色の光になって門へと吸い込まれていった。

「私もいつか、ほかの世界に行ってみたいなあ」

充実感に浸りながらベンチを立ち、そろそろお昼ご飯にしよう、と歩き出すと、何やら怪しげな集団が目に入った。6人の内5人が黒いマントを着て、フードをかぶっている。先程、黒の世界から來た集団

のひとつだ。

その中心に、何やら位の高そうな少女が居た。後ろ姿しか見えないが、薄い色の髪の毛を美海と同じくツインテールに結び上げ、高級感溢れる黒いゴシッククロリータな服に身を包んでいる。身長は大体160センチくらいか——いや、履いているブーツの底がやたらに高いため、実際の身長はそれよりも低いだろう。なんだか背伸びしているようで、美海は微笑ましくなってしまった。そして（少なくとも美海的には）驚くべきことに、悪魔のようなしっぽが生えている。そう考えると、ツインテールのすぐそばにあるあれは髪飾りじゃなくて、角？

ふと、振り返ったその少女と目があった。少し茶色がかった瞳をしている。美海がにつこりと笑みを強めると、向こうは少し頬を赤くして、すぐにそっぽを向いてしまった。

「照れ屋さんなのかな？」

美海の行き先とは反対方向に歩いていくその少女の背中を眺めながら、美海はなんだか、あの少女とは縁深い関係になりそうだという予感がしていた。

……………

お昼を食べようと思っていた場所は、既に決めてあった。黒の世界の料理を出してくれるレストランが海沿いにある、と寮の先輩に教えてもらっていた。

レストランの方まではバスが通っていないため、青蘭諸島に来た日と同じように砂浜を歩きながら目的地を目指す美海。今日は晴天なので、太陽の光がキラキラと海に反射して、とても綺麗だ。

途中で虹色に輝く綺麗な貝の欠片が落ちていたので、ちよつと子供っぽいかなとか思いつつそれを拾い、たどり着いたレストランに入る。

「いらっしやいませ。おひとり様ですか？」

店に入ると、出迎えたのは女性の店員だった。長い銀色の髪を優雅

に結った、背の高いグラマラスな女性だ。

「はい！　ひとりです！」

「あらあら、元気な子ね。どうぞこちらへ」

ログハウスのような店内は、落ち着きのある暗めの照明に彩られている。昼時だというのに客はまばら、というか美海のほかに2人しかいない。店員も、カウンターの中で料理をしている、やたらにダンディな方と、今美海を案内しているウエイトレスだけだ。結構オープンな立地ながら隠れ家的なレストランらしい。バス停から結構歩かなくてはいけないのがダメなのだろうか。

案内された窓際の席に座り、渡されたメニューを見てみる……ものの、ほとんどが未知の料理だ。どんな時でもなるようになるさ、と思っている美海でも、前評判無しでいきなり「はいこれください！」と言えるほどまでチャレンジャーではないので、美海は先ほどのウエイトレスを呼んだ。

「あの、その……オススメとかってありますか？」

「ふふ。黒の世界の料理、初めてかしら？」

「はい、そうなんです」

「そうね……初めてなら、これかな？　青の世界の人にとっては、黒の世界の味付けは少し濃いみたいだけど、うちはそこるところに気を使ってるから大丈夫だと思うわ」

ウエイトレスはメニューに載っている、ドリアのような料理を指した。値段はそこら辺のファミレス並み、とはいかないが、値段相応に美味しそうだ。美海はそれを注文すると、背もたれに体を預けて窓の外を眺めた。今日の波は穏やかで、もう少し暑ければ余裕で泳ぎに行ってしまうだろう。

「あなた、青蘭学園の新生さんかしら？」

「え？　はい」

先ほどのウエイトレスが美海のところまで戻ってきていた。艶やかな微笑みが、なんだかやたらに性的に感じる。ふと美海は、彼女が誰かに似ている気がした。

『『どうして分かったの？』って顔してる。可愛いわ』

「え、可愛い？ お、お世辞なんか頂いても……えへへ」

「お世辞じゃないわよ。とつても可愛らしい笑顔。名前、聞かせてもらつてもいいかしら？ 私はジル。ジル・マカリストアー」

ネームプレートをつまんでニッコリと微笑むジル。同性ながら見惚れてしまうようなその笑顔に少しドキドキしながら、「ひ、日向美海です」と答えた。

「ねえ、美海ちゃん。マスターが料理を作り終えるまで、少しお喋りしてもいいかしら？」

「は、はい。大丈夫です。でもいいんですか？ お仕事なのに……」

「ふふ、別に大丈夫よ。うちは昼時でもこのくらいしかお客が来ないような場所だし、マスターはそういうことに、あまりうるさくないから。ほら、リピーターを増やすつて大事じゃない？ それにね、私は青蘭学園生の知り合いを増やすのが好きだから」

ふむふむと相槌を打つ美海。青蘭学園生の知り合いを増やすのが好き……というのは、どういうことだろう。

それを聞いてみると、ジルは「ああ」と事も無げに口を開いた。

「私ね、黒の世界出身なんだけど、昔はあの学校に通っていたのよね。高等部に行っていたのは、もう14年も前になるけど……」

「14年前……つて、え？」

彼女が18歳で卒業していると仮定すれば……

「ジルさん、今32歳つてことですか？」

美海は思わずジルの全身を見回した。素晴らしいプロポーションを保った体、化粧つ気のない顔からわかる肌の質は、明らかに30代のものではない。多く見積もつても20代前半程度にしか見えなかった。青蘭大学に通つていて、ここでアルバイトしているのかな、と勝手に想像していたが、そうではないらしい。

「あら、知らない？ プログレスつて、身体の劣化がとつても遅いのよ。私、50過ぎのプログレスを知っているわ。つていうか、青蘭学園の先生なんだけど……よかつたら探してご覧なさいな。もちろん、本人に聞くつてのはナシでね。答えが決まつたら私のところに答え合わせに来て頂戴。もし1発で正解したら、そうね……ゴホウビあげ

ちやおうかな♥」

「ゴホウビ？」

「ええ。アイス御馳走してあげる。あ、だけどアルスメル先生とラエル先生はダメだからね？　一発で分かっちゃうもの」

遠まわしに「また来てね」と言われたのに気づかない美海だが、プログレスといものは、いわゆる『不老長寿』なのだろうか。だとしたら、それだけでおトクな気分だ。

「話が逸れちゃったわね。私が青蘭学園生の知り合いを増やすのが好きっていうのはね、現役の女の子を見るのが好きだから、なの。難しい勉強に頭をひねったり、楽しく運動していたり、時には恋に悩んだり……そういう、等身大の女の子の話を聞いているとね、過去を思い出して、それとなく幸せになれるの。私が歳をとったからなのかは分からないけれど、郷愁に浸る、っていうのかしら？　そういう感情を覚えるの。体は歳をとらないものだから余計のそうなのかしら」

言葉を切ったジルは、先ほどの艶やかな笑みとは違う、どこか寂しげな笑顔を覗かせる。ちらりと美海から視線を逸らして窓の外の世界を眺めるその目からは、美海には到底理解しきれない深さの哀愁が見て取れた。

「32歳が何言ってるんだって感じだけど……歳をとるにつれてあの学園が遠くに行っちゃう気がして、寂しくてね……。学校って、行こうと思えばいつでも行けるのに、勝手に遠ざかっちゃう。不思議よね」

ジルの感情を敏感に感じ取った美海は、思わず身を乗り出して、「じゃあ、私もジルさんに青蘭学園のお話、持つてきます！　まだ入学すらしてないからよく分かんないけど……でも、絶対に！」

それを聞いたジルは、おやつ、と言う代わりに片眉を持ち上げ、それからまた艶やかな笑顔になった。

「ありがとう、美海ちゃん。そんなに威勢がいいと、ちよつとサービスしてあげたくなくなっちゃうわ」

結局美海は、また食事に来るという約束の元、食後に果物のシャーベットを振る舞ってもらったのだった。

.....

写真ではこの美しさは絶対に保存できない。

絶景スポットに再びたどり着いたとき、辺りはすでに夕日の色になつていた。その光源である夕日を目にした瞬間、美海はそう思つてしまった。

絶対的なオレンジが海も空も染め上げ、その中でなお赤く煌めく赤の世界への門^{ハイロウ}。それを見て、美海は、改めて自分のちっぽけさを悟る。今見ているこの景色だけでも、これでもかよばかりに自分の小ささを叩き付けてくるのに、一体この世界はどれだけ大きいのだろう。

この島々からは、それと同じくらい大きな世界——しかも3つも——へと旅立つことができる。そのすべて見て回ることは出来るのだろうか。

そもそも、『世界』って何なのだろう。4つの世界があつて……でも、今それらは繋がっている。とすれば、今世界は1つになっているのだろうか。

まるで、自分の中身が体を離れ、より広い視界の中にこのオレンジ色の世界を収めるかのような感覚。そういうえば、前にもこんなことがあつた。

そのあまりの美しさに呆然自失となり、精神が肉体を少しだけ離れて視界が広くなる、この感覚。昔泊まりに行つた海のそばのホテルで、そのベランダから視た、眩い朝焼けの光景。海に向こうから強大な力が徐々にせり上がってくる、あの光景に、胸を打たれ——心を奪われた。

そして、その時と同じだ。今、自分は——恐怖を覚えている。それも、単なる恐怖ではない。自分でさえ、自分の心が何に對して恐れているのか、分からない。原因不明の、言わば生命の根源から湧き出た恐怖。

まるで、世界の偉大さ、そのほんの端っこを指先で突いてしまったかのような。決して侵されることのない神聖なる場所に、足の爪先だけ踏み入ってしまったかのような。美海は『世界そのものの姿』を、そ

の『真理』たるものを、ほんの少しだけ垣間見てしまったのだろうか。「二応、写真撮っておこうかな……」

カメラの画面が一面オレンジになってしまったが、何枚か撮ってみて何となく満足できたので良しとした。それよりも今は、この夕日を目に、そして脳に焼き付けておきたかった。

美海は夕日が沈むまでじっと岬に佇んでいた。そして、日が完全に落ちて、暗くなった空に星が輝き始めた後も、まだ佇んでいた。

(いつか、春樹くんと一緒に見たいな……ここじゃなくてもいいから、とつても綺麗な場所を)

そして、彼に聞いてみるのだ。

ねえ。

あなたも、怖い？

………

日付が変わり、午前4時。

ハイロウ
門が開いた。

門を幾重にも囲っていた魔法陣の内側あたりの一部が、外側に吸い込まれるようにして消失し、薄黄色一色だった門の中心に、新しく白い光が生まれた。

その中から、白い光が落ちてくる。それは、世界転移装置の上に集結し、形を成す。

現れたのは、3人の人影だ。白衣の人間が2人と、その間に挟まれた、やたらと小さい少女。

白衣の2人は特に気負いなく少女の手を取ると、界港へと入り、入界手続きを済ませ、

「ああ、苦勞様。ここまででいい」

入界ロビーはがらんとしていた。白衣の女性と、新聞を広げて読む男の2人しか席に座っていない。しかし、3人にとって最も意味のある女性が、そこに座っていた。

触れれば切れるようにシャープな美貌を持った女性だ。彼女から

は言い知れぬオーラのようなものが発せられていた。界港のガラス張りの窓から夜空を――門を、眺めている。

「ドクター。我々も一緒にラボまで付いていきます」

「いや、だからいいって。お前たちはさっさと帰って寝ろ」

「は、はあ……しかし任務は……」

「その任務を出したのは私だ。というわけで任務変更だ。帰れ。私もそのうち、いったん戻る」

彼女の言葉には有無を言わさぬ『強さ』があった。思わず気圧された2人は、少女の手を離すと、渋々といった感じで出界ロビーの方へと向かっていった。

取り残された少女は、女性の方へと歩いていく。女性は自分の隣の席を叩いて「座って」と命じた。

「ああ、お前を待っていたよ。9ヶ月……だったかな。どうだった？」
「質問の意図が理解しかねます。もっと具体的な質問をお願いします」

女性が少女へ問いかけると、少女は鈴の鳴るような柔らかい声で、鋼鉄のように硬い言葉を発した。女性は苦笑すると、改めて質問をする。

「お前は何を学んだ？」

「話すには多すぎます。具体性も大きく変わってはいません」

「なるほどねえ。要するに、お前は何も学んでいないということだ」

「そんなことはありません」

「いや、ムキになるな。お前が学ぶのはこれからなんだから」

女性が笑っていると、前の席で新聞を読んでいた男が、新聞を畳んで振り返った。

「……その子が『片割れ』？」

「そうだ。似てるだろう」

「雰囲気は全然。まったく……あんな計画を、よりにもよってこの僕に無断で実行しちやって。……失敗作を押し付けられるこっちの身にもなれってんだ」

「ああ、その件はすまなかった。でも、あの時期はお前こそむしろ大概

だっただろう」

「まあ……それもそうだけど」

「世の中は結果が全て。まあ、良かったと考えるべきだな。して、どうだ。彼女の方は。最近話を聞かないが」

「話すことがないほどまともだって事だよ。デルタ・テックの経営も順調。交渉も取引もなんでもござれだ。しかし、お前も大概狂ってんな」

「否定はしないさ。でも、狂ってる奴ほど特別だ。っていうのは、お前の言葉だろう?」

「……はいはい。そうだったね」

男性は呆れたように首を振ると、立ち上がってロビーを後にする。

「で、その子、接触させていいのか?」

「今はダメだ。短くても1ヶ月後つてところだな。今は……何が起くるかは全く予想できない」

「了解つと。じゃあ明日はお前のラボな。しかし、お前もさっさと学んだほうがいいと思うぞ。その子に口出しできなくなる」

「何をだ」

男性は振り返ると、ニヤリと口の端を釣り上げた。

『『魂』つてものをな』

それだけ言い残して、男性はロビーを去った。

「……確かに私は、そこら辺には疎い。そろそろ本腰を入れて取り掛かるか」

女性はそうひとりごちて、隣に座って門を見上げる少女の頭を撫でた。少女が口を開く。

「彼は、何者ですか? ドクターに対して、不躰ふしつけかと思われます」

「いや、あいつはそういう奴だ。それに、彼に迷惑をかけてるのも事実なんだよ」

女性は、深い情感が籠ったため息を吐くと、

「さて、行こうか」

「はい」

2人は席を立つ。女性が少女の肩に手を置いて言った。

「これからは、今まで以上に忙しくなるぞ。明日はお前のマスターに
会わせてやる。頑張れよ」

「はい、ドクター・ミハイル」

少女の返事を聞くと、ミハイルは柔らかな笑顔になった。

「期待してるぞ、セニア」

第4話 「はい。記憶しました」

歴史によれば、世界が接続された当時、青の世界に対して最も友好的だったのは赤の世界だったという。

「ねえねえ、きれいだねー!」

「そうだな……花畑なんて、滅多に來ないもんだけど。こうして見ると、これはこれでいいもんだ」

鐘赤島の一角には、赤の世界との友好の証として、向こうの世界の植物を集めた植物園がある。春樹と美海は、その周りを囲んでいる花畑にいた。

花の種類など、両者ともほとんど知らない。その辺に立っている説明書きを読んで「へえ〜」となる程度だが、それでも薫^{かお}り高い花々に囲まれて、えも言われぬ開放感に満たされることには違いなかった。赤の世界出身のプログレスに聞いたところ、赤の世界の植物には靈力があり、魔法に用いられることもあるのだとか。

「昨日ね、海辺のレストランに行ったんだよ。春樹くんは知ってるお店かな。ジルさんって人がいる……」

「ああ、あそこね。去年何回か行ったよ。連絡先、なんか交換させられたし」

「そうなんだー! 今度一緒に行こー! あのねー、クイズ出されたんだけど……」

他愛もない話に花を咲かせながらブラブラと歩いていると、突然美海が何かに気づいたようだった。

「あれ?…この花の中に……」

美海が1輪の薄いピンク色をした花のそばにかがみ込んだ。なんだろうと春樹も覗き込んでみると、半開きの花卉の中に小さな人型の何かが目撃していた。

「ねえねえ! これ……!」

「こらこら、あんまり大きな声出さないの。起こしちゃうでしょ」

春樹がたしなめると、美海は口をギョツと一文字に結んで、改めて

花の中を覗き込んだ。暖かそうな花卉に包まれてスヤスヤと安らかに眠る姿は、まるで妖精のようだ。というか、

「随分ちっちゃな妖精だね……生まれたばかりなのかな」

「え、妖精？」

思わず素っ頓狂な声を上げた美海を春樹はまた制止しつつ、そこから離れるために彼女を連れ立った。

「赤の世界には『妖精』っていう種族があるんだよ。詳しいことは知らないんだけど、力の強くなる場所で自然と生まれるんだって」

「へえ……って、『力が強くなる場所』ってどういうこと？」

「詳しいことは知らないって言ったでしょ。でも、聞いた話じゃあななんていうか……『そのまんま』の意味らしいんだ」

「？」

さっぱり意味が分からずに首を傾げる美海。『そのまんま』……とは、『何のまんま』なんだろう、とでも言いたげだ。ただ、春樹だつてよく分かっているわけじゃない。

「例えば花なら花の力が、鉱石なら鉱石の力が強い場所があるんだつて。だからさ、ほら……」

春樹は辺りをぐるりと見回した。まさに『花の絨毯』という表現が相応しいくらい、一面に花が咲き乱れている。

「ここは、花の力が強そうじゃん」

「そうだねえ……一面、花だらけだもんね。じゃあ他にも、妖精さんがいたりするのかな!？」

「随分と食い気味だな……こんだけ広ければ、絶対にいるだろうね。まあ、のんびり行こうか。ひよつとしたら寝てない子もいるかもだしね」

ご機嫌な美海と並んでしばらく歩いてみると、ねぼすけな妖精たちもようやくお目覚めの時間なのか、ひらひらと翅はねを揺らして花の中から出てきた。

「わあ、すごいすごいー」

「あんまり脅かすなよ」

「はいはい」

美海が寄っていくと、妖精が3匹ほど集まってきた。妖精はそのほとんどが好奇心旺盛で悪戯好きなため、小さな指で美海の鼻の頭をつんつんと突つついたり、ツインテールの片方を頑張つて持ち上げようとしている。

「あはは、くすぐりたいよー」

美海の頭の上に座つてご満悦な表情をしていた妖精を美海がひよいと捕まえ、手のひらの上に乗せると、妖精は翅をパタパタ、目を白黒させて慌て始めた。

「喋らないんだね」

「人間の言葉を喋つたり理解できるのは、知能の高い一部の妖精だけなんだってさ」

美海が手のひらに乗せた妖精の頭をよしよしと撫でてやると、向こうもようやく落ち着いていたのか、気持ちよさそうに目を細めて甘え始めた。それを見ていた残りの2匹も、ズルいズルい！　と言う代わりに美海の手のひらに乗つかろうと押し合い圧し合いを始めた。

「あつー！　こらこらこら、ダメだよ。ちゃんと1人ずつね」

手のひらの上の妖精を肩に乗せて、2匹目の妖精を撫で始めた美海を眺める春樹は、不思議な感情を覚えていた。

(よく懐かれてるな……)

昨日下見に来た春樹は、妖精たちにちよつかいをかけられまくつていたのに。

美海からは、何か人を惹き付ける何かを感じる。ある種のカリスマ、とでも言うのだろうか。本人は割とドジでぽけぽけで、元氣ながらも頼りない面はいくらもある。しかし、彼女の魅力はそんな点も含めてのものであり、その魅力は、どこか美海のお世話をしたくなるというか……要するに、放っておけないのだ。そういう魅力を、彼女は持っている。おそらく、彼女の自覚していないところで。

(ちよつとずるいよなあ……でも、あれも美海の特性つてことかな)

ほぼ無条件で人に好かれる美海。少しばかりの嫉妬を感じた春樹だったが、それで別にどうこうする気にはならないのも美海の雰囲気のせいなのだろうか。

そんなことを思っていた春樹は、頭の上に何かパラパラと落ちてくるのを感じた。手に取ってみると、土だ。後ろを見ると、3匹の妖精がしてやったり顔で笑っていた。妖精たちに頭の上から土を振りかけられたのだ。春樹は頭を振って土を落とすと、はあ、とため息を吐く。

流石に怒った。

.....

白の世界は、他の3つの世界との距離を測るべく、全てにおいて静観を保っていたという。

三島冬吾は白百合島のとある場所に足を運んでいた。とても重要な用事がある、と、彼のプログレスであるユーフィリアから伝言を聞いていたためである。

Dr.^{ドクター}ミハイル。白の世界で「ドクター」と言えば大体この人物を指す、というほどに有名なアンドロイド技師だ。冬吾が向かっているのは、白百合島に設置された彼女の出張ラボだった。

去年、そこにはアンドロイドの調整の為に何度か行っていたため、特に道を間違えることなく到着する。ラボは3階建てと低めだが、敷地面積がやたらに広いため、狭いという印象は全く受けない。施設の裏には広大な庭園（という名の飛行訓練場）もあり、来るたびに冬吾は、贅沢してるなあ、と思う。ミハイルは白の世界にだっていくつかの研究施設を持っているのだ。

とはいえ、どうせ大した用事ではないだろうというのが冬吾の所感だった。相手が目上の人間であるため逆らう気にはならないが、そういえば前回呼び出しを食らった時は、脳波に反応して展開する装甲を自慢されただけだった（仕組みもそれなりに教えてもらったため、勉強になったのは事実だったが）。

『おはようございます。ご紹介の方ですか？』

「おはよう。三島冬吾です。えと、ドクター・ミハイルに招かれてます」

『少々お待ちください。——シエイプ・チェック。確認できました。三島冬吾様、ミハイルラボへようこそ』

入口の門の前で、来客対応用のAIと手慣れた風に会話し、門を開けてもらう。今でこそ普通にやり取りしているが、初めての時は、それこそカルチャーショックだらけで、興味津々でAIと会話していた結果、門の前で10分も使ってしまった。

「おはよう、冬吾。時間通りだな」

「おはようございます、ドクター・ミハイル。お出迎えして下さいるなんて珍しいですね」

「たまには外の空気を吸ってもよからう」

冬吾の前に現れた、白衣を纏った女性こそ、Dr. ミハイルだった。艶やかな黒い髪をポニーテールに結び上げており、少しキツそうな印象を与えるツリ目には真つ赤な縁のメガネをかけている。30代だと聞いているが、その美貌にはまったく曇りが無い。とはいえ、それはきちんと手入れされていければの話で、少なくとも今の彼女の美貌は、目の下にできた濃い隈によって台無しにされていた。

「また寝てないんでしょう？ 隈がくつきりですよ」

「まだ67時間しか起きていない。今日来た奴のせいで、この分だと最長記録更新かもな」

「ちなみに最長記録は？」

「計った中だと278時間と34分つてところだな。さあ、付いてきなさい」

うわあ、それだと丸10日以上は起きっぱなしってことかよという表情を浮かべる冬吾の前をずんずん歩いていくミハイル。エレベーターで3階に上り、そこから一番奥の部屋を目指している。そこは冬吾が何度か訪れた、ミハイルの私室だ。

「ユフィとテルルとナナは？」

「下の階で調整中だ。テルルの腕部装甲の故障箇所の修理、ユーフィリアのエンジン点検、ナナの薬剤補充。やることはいくらでもある。そういや、デルタがセラフィック・ブースターの新型を持ってきていたな……まあ、調整が終わり次第引き合わせるさ」

「へえ……マスターが、新しいセラフィック・ブースターを……って」
え？ 何と引き合わせるって？

と冬吾が聞くよりも前に、ミハイルが自室のロックを解除し、ドアを開いた。その中には、大きなぬいぐるみをぎゅっと抱いた1機のアンドロイドが、ぺたんと床に腰を下ろしていた。そのアンドロイドは、ドアの開く音に反応して、こちらを見た。まず、ミハイルを。そして、視線が冬吾に移った。

すっ、という音が聞こえそうなくらいに透き通った眼差しが、冬吾の視線と交差した。目が、逢った。

これが、運命、なのだろうか。

その一瞬は、永遠だった。冬吾の頭の中に、彼女の情報が流れ込んでくる。短くカットされたサラサラの白い髪、側頭部に装着された脳波増幅装置、額に描かれたプロダクトサイン、何の感情も感じさせない口元、起伏に乏しいボディライン。そして何よりも、磨き上げた水晶玉のように澄んだ、瞳。全ての要素が時計を動かす緻密で精巧な歯車のように噛み合い、その美貌のアンドロイドを作り上げていた。

「今朝一番に来たんだ。バイタルコードΩの46。プロダクトコードOHP-232、セニアだ」

ミハイルの言っていることは、ほとんど冬吾の耳に入っていないかった。唯一理解できたのは、

「セニア……」

彼女の名前。

冬吾がぼんやりとその名前を口に出すと、またそれに反応したのか、アンドロイド——セニアはぬいぐるみ置いて立ち上がった。小さい。身長が150センチもないことは明らかだ。182センチある冬吾の胸に頭が届くかどうか、というくらい小さい。

「セニア、これが——」ミハイルは冬吾の背中をぐいと押し、前に突き出した。「——今日からお前のマスターになる」

「えっ？ 聞いてないんですけど」

「言っただけだからな」

完全に初耳だった冬吾は、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。せ

いぜい新装備を自慢されるだけかと思っていたのに、予想外過ぎた。

泡を食う冬吾をよそに、セニアは冬吾の全身をくまなく見回している。セニアの内部プログラムにセッティングされたマスターインシヤライズ認証システムは、彼女が生まれてから初めて使用されていた。

緊張しながらセニアの認証を待ち……セニアが長く2回、まばた瞬きをした。それからペこりと一礼し、口を開いた。

「おはようございます、マスター。SWⅡコードΩ46、セニアと申します。どうぞよろしくお願いします」

鈴を鳴らすような柔らかな声とは裏腹に、口にされたのは鋼鉄のように硬いフレーズ。アンドロイド特有のヤツだが、ここまで『機械っぽい』アンドロイドは見るのすら初めてだ。

「ほら、まずは名乗ってやれ」

ミハイルが耳元で囁いた。それもそうだ、と冬吾はセニアに向き合う。

「えと、三島冬吾です。よろしく」

やや緊張気味の名乗りを聞いたセニアは、トコトコと冬吾に近寄ると、彼の胴体——主に肋骨のあたり——をペタペタ触り始めた。冬吾の7割程度の大きさもないであろう彼女の手のひらが彼の上半身の上を滑り、非常にくすぐったい。

「ちよ……何すんの!？」

「申し訳ありません。認証の過程をひとつ飛ばしていたのを失念していました。マスターの感触を調べています。シエイプ・チェックと顔認証は偽装される恐れがあります。セニアには触覚が存在するため、上半身の形状を記録するマスター認証システムが搭載されています」
一通り触り終えて満足したセニアは、1歩下がって再び腰を折ると、その水晶玉のような目で冬吾を見た。

「非礼をお詫びいたします。改めて三島冬吾様を、セニアのマスターとして登録しました。以後、どうぞよろしくお願いします。マスター」

「あ、そ、そう……よろしく、セニア」

冬吾は引きつった笑いを浮かべながら、横で腹を抱えて笑いをこら

えていたミハイルに耳打ちする。

「……この子、誰が作ったんですか？」

「もちろん、私だ」

「じゃあ、触覚使用のマスター認証システムなんて機能を積んだのも？」

「無論、私だ」

「この子、今何歳ですか？」

「まだ5歳だな」

「……今の、そんなに面白かったですか？」

「客観的に見て、相当面白い」

笑いのツボが致命的にズレているミハイルは放っておくことにした。きつと、設計した本人だからこそ面白いのだろう。それならそれで、余計にムカつとくるものがあるが。

セニアは冬吾を見上げたまま、微動だにしない。命令されるのを待っているのだ。

冬吾はそれを、異常に感じた。

「……ホントに、バイタルがΩの46なんですか？」

「本当だ。なんなら、設計図を見せようか？」

「いや、結構です……」

アンドロイドには固有名称の他に、《プロダクトコード》と《バイタルコード》という、2種類の識別方法がある。

プロダクトコードとは、その名の通りアンドロイドの制作規格としての識別コードで、セニアの場合はOHP-232。これはそのアンドロイドの製品プロジェクト名や型番などが縮めて付けられることが多い。つまるところ、セニアは「OHP」規格アンドロイドの「232」号機ということになる。はつきり言って、単一個体を識別するだけならこれのみで十分と言える。

そして、それとは別に存在するバイタルコード。これは当該アンドロイドの「機械パーツと生体パーツの割合」を示す。「機械化率」を示すΩと、「生体使用率」を示すΣ、どちらかの記号のあとに続く数字が、記号の示す割合のパーセンテージとなる。バイタルコードがΩ46

であるセニアは、「ΩⅡ機械化率」が「46」%である、ということだ。余談だが、逆に先頭の記号を「ΣⅡ生体使用率」にした場合、その数字は100―46で「54」%になる。バラバラなのは、使用するアンドロイド用の兵装の規格のせいだという。

これを踏まえて冬吾が異常に感じたのは、セニアの機械化率が46%である——逆に言えば、半分以上が生体パーツ、即ち「生きている」——にも関わらず、彼女が余りにも「機械らしすぎる」ことだった。冬吾の知っているアンドロイドは数体存在するが、その中にも、セニアよりも機械化率が高い個体はいくつかあった。しかし、彼女の「機械っぽさ」は郡を抜いていて、正直、そこらのAIよりも機械らしいと言っつていい。少なくとも、性格面においては。

「こんなに柔らかいのかな……」

セニアの、如何にもぷにぷにしていそうな頬つぺたを優しく摘まんでみる、と、想像以上の柔らかさだった。餅肌という言葉は確かに存在しているが、今感じている柔らかさは、まさに餅肌としか表現のしようがない。そして、当のセニアは、まるで表情を変化させない。

「感情の変化が鈍い———というか、感情はあるんだが、表に出てこないだけらしいんだ。ま、いろいろ試してやってくれ、マスター？」

「なんだろう、なんか腹立たしいんですが」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて肩を叩いてくるミハイルを横目で睨み付けてみるが、元の顔が優男のため、いまいち決まらない。それよりも、とりあえずテルルに食べさせる用に買ってきた飴の袋がバッグに入っていることを思い出した冬吾は、袋を開けて一粒取り出し、包み紙を剥がしてセニアに渡した。キラキラしたザラメの付いた、青いサイダー味の飴だ。

「マスター。これは何でしょう」

「何でしょう……つて、飴玉だけど」

「如何なる用途に使用する物ですか？」

「如何なる用途……つて、食べるため、かな」

「しかしマスター。この物体は食料としては硬度が高すぎます。錠剤のように飲み込むには体積が大きすぎます」

「……ドクター。ホントにこの子、5歳ですか？ 飴玉なんて3歳児でも知ってますよ」

「5年間の内4年間は凍結状態にあった。活動時間は1年……いや、それ以下だな」

それを先に言っただけ、という言葉を飲み込みながらセニアを見ると、渡された飴玉を不思議そうに眺めている。

「マスター。この物体は食料よりかは、むしろ芸術品ではないでしょうか」

微妙にズレた指摘がセニアから入る。そういう観点はなかったなあ、と妙に感心してから、笑いをこらえているミハイルを横目でチラ見して、この親にしてこの子有りか、と若干ため息。

「……セニア、飴玉は噛むんじゃなくて舐めるんだよ。ほら」

冬吾は自分も袋から飴を取り出して、口に放り込んだ。幼い頃に食べた記憶が今でも残っている、冬吾の一番好きな飴玉だ。

セニアは興味深そうにそれを見つめた後、おもむろに自分の手のひらの上に置かれた飴玉を口に入れた。

「どう？」

「……甘いです。糖分が多量に含まれているのですね」

「そうだね。それが飴だよ。覚えた？」

セニアは、しばらく飴を口の中で転がしていた。白の世界では摂取したことの無い、異常な量の糖質。こんなものを日常的に食していたら、あつという間に健康状態が失われてしまうだろう。しかし、

「……はい。記憶しました」

セニアは、どことなく満足そうにそう言った。その様子を眺めながら、冬吾はセニアの頭に手を伸ばし、その髪をやさしく撫でた。セニアは特に反応を示さず、ただ熱心に飴を口の中で転がしていたが、偶然にも、冬吾の方もよく分からない満足感を感じていた。

……

赤の世界は、古より伝わる伝承に従い、すべての世界に対して和合

の使徒を送ったという。

昼食を摂り終えた春樹と美海は、鐘赤島の中でも人気が高いビーチである『コーラルビーチ』へとやってきていた。

「うわあ、すっごく綺麗！」

「夏になったら泳ぎに来るか？」

「うん！ 行きたい！」

旅行会社のパンフレットに描かれた嘘くさい透明な海よりもずっと透き通った海に興奮を隠しきれない美海。コーラルビーチはその名の通り、少し沖に出ると広大な珊瑚礁が続いている。オーストラリアのグレートバリアリーフまでとはいかないが、世界でも有数の珊瑚礁だ。しかし、青蘭諸島の閉鎖性により、取り上げられることは少ない。

ビーチ周辺にはレンタルで泊まれるログハウスがいくつもあり、ホテルも存在する。ここは青蘭諸島でも数少ないリゾート地なのだ。他には、青蘭島南部の『サファイアリゾートベルト』に加え、賢緑島にも点在している。

レストランでの食事は、かなり気に入ってもらえた。昨日冬吾と一緒に来て、美海にはどれが合うだろうと2人して考えていたのは内緒だが。

「ねーねー、足だけなら入ってもいいかな？」

「まあ、いいんじゃないか？ タオル持ってる？」

「持ってるよー！」

ポシエットからタオルを取り出した美海は、それをポシエットごと春樹に押し付けると、靴と靴下を脱いで海の方へ行ってしまった。なんとも行動力に溢れる少女だ。海に入っているか、と尋ねてからまだ30秒も経っていない。

春樹は砂浜に腰を下ろして、きやあ、つめたーい！ とはしゃいでいる美海を眺める。夏場にはなんだかんだ言って毎年来ているので、流石に昨日はここに来なかった(野郎2人で海というのもなんだかアレだったのが……今感じている、この不思議な感覚はなんだろう。ここでこんな感情になったことは、今まで1度もない。

寄せては返す波、ひとつとして同じものはない。成長して自分も変わり、もう元には戻らない、ということなのだろうか。そうだとしたら、少し物悲しい気分になる。いつか自分は、こうして水と戯れる少女を、ただぼんやりと眺めていることができなくなってしまふのだろうか。そして、こんな感情を覚えることすら忘れてしまふのだろうか。

美海はプログレスだ。これから先、体の成長及び劣化は急激に遅くなる。それは果たして『変わらない』ということなのだろうか。それとも『変わりにくくなる』のか。まだ16年しか生きていない春樹にはそんなことが分からないし、当然美海自身だつて分かるはずはない。

そもそも、『変わる』とはなんなのだろう。自分の今の生き方——ダンス、心の持ちようは、年齢と共に『変わる』のだろうか。死ぬまで今の生き方を変えずにいられるかと言われれば流石に違ふだろうが、なら1年後、5年後、10年後——自分は『変わっている』だろうか。

1年後のことは分からないが、1年前なら分かる。そして、自分の心が1年前と今とでは、少し変わってしまったということも。大切な人々を失つて、『変わる』ということを考えている今と、そもそもそんなことを考えてすらいなかった1年前では、一目瞭然だ。

なら、大きな衝撃がなければ人は『変わらない』のだろうか。体が変化し続けているのに、心が変わらない、などということはありえない。だとすればそれは、『変わっていない』のではなく、『変わっていない』ことを認識できない』というだけのことなのか。自分は5年後、10年後に生き方が変わり、あまつさえそれに気が付けないのか。

寂しい。

ふと春樹は、自分の心がそんな感情を抱えていることに気付いた。理由はさっぱり分からないのに、浅瀬に立ってはしゃいでいる美海を眺めていたら、急に涙がこみ上げてきた。潮風が目にしみたというわけではない。慌てて目を拭い、頭を振って気持ちをリフレッシュ。

どのくらいそうしていたのだろう。飽きもせずに水面に立つ美海

は、何やら貝殻を探しているようだ。確かにコーラルビーチにはきれいな貝殻がよく転がっているし、たまに大きめの珊瑚の欠片も落ちていたりする。島の工芸品店で、それらを加工したアクセサリーも売っている。

「春樹くーん！ 見て見てー！」

美海がこつちこつちと手招きしてくるので、腰を上げて近くに行ってみる。美海の手には、蛋白石オパールのような光沢を持つ貝殻が握られていた。

「ほら、すつごくキレイ！」

「後で工芸店にでも行くか？ そういうのをアクセサリーに加工できる体験みたいなのができるけど」

「えー！ 行きたいー！」

「それじゃ、さつさと海から上がりな。もう10分も経ってるぞ。このままじゃ日が暮れちゃう」

「そだねー。あ、でも砂がついちやう……」

「ほら、あそこの栈橋に座って待ってな。水買ってくるから」

少し離れた場所にある木製の栈橋を指さすと、美海が何か言うよりも前に、春樹は駆けだした。どうせまた遠慮合戦が始まってしまうだろうから。

この数日間で分かった。美海のそういうところは確かに美德ではあるが、少し過ぎるくらいがある。先輩であり、曲がりなりにもαドライバー候補にしているであろう春樹に、もう少し委ねるのが普通ではないのか、と思う。少なくとも、《彼女ら》はそうだった。

それとも。

——残りは、内緒です！

彼女も隠しているのかもしれない。その隠し事が、過度な遠慮を生むのかも。案外、引け目を感じているのか？

しかし、それも全て春樹の中での想像に過ぎない。単に美海が超絶謙虚な良い子ちゃんだということも十分に有りうる。

自販機でペットボトルの水を買って栈橋へ戻ると、美海は言われたとおりに栈橋に腰掛け、水平線で曇り空と繋がっている海を眺めている。

た。その横顔はどこか寂しげで、それとは別に、浮世離れた《何か》を湛えているかのようだ。

まるで、ここではない、別の世界を見ているかのように――

一瞬、話しかけるのを躊躇う。その横顔を見ていたかっただというわけではない。何故か、邪魔してはいけない気がしたからだ。

「……美海、ほら。これで足を洗いな」

「あつ、春樹くん。ありがとうね」

春樹は美海の隣に腰掛けながらペットボトルを渡した。彼女の笑顔は、先程までの元気が削がれたように淡い微笑だった。この数分に、いったい何があったのだろう。

「あのさ、春樹くん」

美海が足を流しながら、ポツンとつぶやく。

「綺麗すぎるものって、なんかさ、怖くならない？」

「え？」

あまりにも予想外の質問に、気の抜けた声が出ってしまった。美海は、果たして自分が口に出していることを認識しているのかしているのか分からない、ぼやけた表情をしている。

「昨日ね、夕玄島で夕日を見たの。私、怖かったんだ。綺麗すぎて。なんていうか……触っちゃったっていうか……奥の方に……ホントは、触っちゃいけないのにね……」

春樹には、美海が言いたいことがなんとなく理解できる気がした。春樹にも、似たような体験があるからだ。

それは幼い頃、山の上にあるホテルに泊まった時。早朝、陽光に照らされた雲海を目の当たりにした時。まるで、ボロボロになった壁を、今にも巨大な力が突き崩そうとするかのような、その黄金に煌めく、ひび割れにも似た幾筋もの光に、心を奪われた。そして、呑まれてしまったのだ。その荘厳さに。

人の手では変えられない、世界の真理。美海の言葉を借りれば、世界の、その奥の方。

感慨に浸りながら美海の横顔を見る。と、何かがおかしい。普段は焦げ茶色の瞳が、淡い青色の光を帯びている。

「おい、美海？ ちょっとこっち見て」
「え？」

軽く美海の肩を掴んでこちらを向かせると、瞳の奥で揺らめいていた青い光は、既に薄れており——消えた。

「あ、あれ？ 私、今何を……？」

我に返ったように辺りを見回す美海。自分が何を言っていたのかも自覚がないようだ。

——気のせいだったのか？

「春樹くん、どしたの？」

「いや……なんでもない。ただちよつと、元気なかつたぞ」

「そう？ 私はいつでも元気だよ！」

濡れた足をタオルで拭きながらにこやかに答える美海。今は普段と大差ないようだが……先程の美海は明らかにおかしかった。いたい何故なのだろう。

「あのさ、美海」

「なあに？」

ふと春樹は、自分が美海に対して隠し事をしていることを思い出した。やたらにデカい奴と、小さい奴。小さい方をバラしてみても、もし大丈夫だったら、あるいは………

この小さな嘘でさえ、センチメンタルな気分浸っている今でなければ、言えない。

「俺さ、美海に嘘ついてた。昨日は俺が友達に誘われたって言ったろ。あれさ、実は俺が友達を誘ったんだ」

「えっ、どうして？」

わずかに滲んでいるであろう失望の色を見ないように心がけながら、言葉を紡ぎ続ける。

「この島、俺、好きでさ。ここには毎年来てるんだ。夏になると暑いから、海水浴したいじゃん。でも、じゃあ他にこの島のこと詳しいかつつうとそうでもなくて……でも、美海にはこの島の、っていうか青蘭諸島のいいところ、たくさん知ってもらいたかったんだ。だから昨日、友達を誘って下見に来たってわけ。偉そうに解説とかしてたけど、あ

れもほとんど付け焼刃の知識でな……だから……」

失望したか？

そう話を結ぶよりも前に、美海は、

「そうだったの。ありがとう！」

「え？」

「私なんかのために、わざわざ下見までして、いいところを教えてくださいなの？ 嬉しいなあ。おかげで私、鐘赤島が大好きになったよ！」

美海の顔いっぱい浮かんでいたのは、満面の笑み。戸惑いながら春樹は尋ねる。

「……怒ってないの？」

「なんで怒らなきゃいけないの？」

「だって、嘘ついたんだよ？」

「そうだけど、正直に話してくれたから、別にいいよ。それに、悪い嘘じゃなかったし」

「……そっか。優しいな、美海は」

「えへへ、そーでしょうそうでしょう。私は心が広いのです」

冗談めかしてそう言った美海は体を傾けて、ことん、と自分の頭を春樹の肩に預けた。

「み、美海？」

「でも嘘吐いたからね。ちよつとだけ、こうしてもいい？」

美海は海を眺めながら、妙に艶のある声で言った。

「まだ、見てたいんだ。春樹くんと、この景色を」

「……そうか」

「それに、流石にちよつと疲れちゃった。あはは」

春樹はついうっかり、美海の肩に手を伸ばしかけて——止めた。美海とは、そういう関係じゃない。《まだ》ではなく、《決して》。

そのせいで、春樹は《大きい方》の嘘を口に出すタイミングを見失ってしまった。言わなきゃいけないのに、今、言えたのに……。

そのまま2人とも無言で、しばらく海を眺め続ける。視界の向こうにある賢緑島の上空には門ハイロッカが無いが、機動隊の基地から輸送機が飛び立つのが見えた。

「それじゃ、行こっか！」

「そうだな。まだ見せる場所はあることだし」

——弱虫。

と、下に向けた視界の中で、キラリと光るものがあった。

「よし、行くか」

と言うやいなや、春樹は栈橋を飛び降りて、足のバネを効かせて下の砂浜に着地。見つけたものを拾う。

それは、先程美海が見つけたものと似た、綺麗に煌く貝殻だった。

「ほら、これもアクセサリーにしてもらおうか」

「あ、キレイー！」

エクシードを使い、砂を巻き上げながら降下速度を落として着地した美海が、春樹の差し出したそれを受け取る。しかし、美海は何かを「うーん」と考えて、言った。

「でも、どうせならさ——」

……………

「楽しかったなあ」

美海と春樹は寮へ帰るバスの中、最後列に座っていた。

「今日はありがとね。また誘ってね！」

「ああ。それじゃ、また」

「うん、またね〜！」

寮の前に着いたので、美海はバスから降りる。大きく手を振ると、春樹は小さく振り返した。

今日は、途中から春樹の様子がおかしくなった。おかしいというか、少し元気がなくなっただけというか……栈橋に座って海を眺めていた時に、またあの『自分が浮き出る』感覚に襲われ。春樹の元気がなくなってしまったのは、その辺からだった。

「私、何か悪いことしちゃったかな……」

春樹に別れを告げるとき、「誘ってね」などと美海らしくもない消極的なセリフを言ってしまったのは、春樹に対する申し訳なきが募って

いたからだ。本来なら「次はどこ行こっか！」と逆に誘いにいってもおかしくないのが美海だ。

今になってようやく雲は晴れてきて、夕焼けが綺麗だ。寮の正面からは3つの門がすべて見えるため、これはこれで幻想的だ。昨日の夕玄島で見た夕日も美しかったが、これも相当なものだろう。美海は写真を1枚撮って、あとで春樹くんに送ろう、などと考えていた。

春樹の様子は、元気がなくなつたというよりは、『枯れた』と表現する方がいいかもしれない。初めて美海と出会ったとき、岬で見せた、あの透徹した視線を持つ表情。心の底を見透かしているかのような、あの目。

美海は、春樹のことが好きだ。男性として……はどのようなか分からない。今まで恋愛などしたことがないから。だけど、彼の優しさはなんとなく、甘えたくなくなってしまふような包容力がある。その優しさは、大好きだ。

しかし、その裏側で彼にそこはかたくない恐怖を覚えているのも確かなのだ。あの美しい、悟りに満ちた視線。美海が頑張つて隠しているはずの《それ》を、まっすぐ見つめる瞳。

美しい。

だから、怖い。

寮の入口で寮母の小春さんに今晚の献立を聞き、カレーだと言われ嬉しくなり、自室へ駆け上がるスピードが上昇。

2階へ到達し、すぐさま一番奥の自室に着く。鍵を開け、リビングに入った。

「え？」

「え……？」

その光景は、実に美しかったのだ。だから……というわけではないが、すぐには動けなかった。

彼女は、窓から差し込む夕日を全身に浴びていた。艶やかな黒い髪は日を受けて煌き、こちらを見つめる視線は水晶のように透き通っている。健康的な肢体は芸術品のように滑らかで、腰から臀部に至る曲線は、同じ女性である美海すらも魅了した。

が、美海が完全に凍りついたのは、どちらかといえば美しかったからではなく、彼女が着替え途中だったからだ。しかも上半身は裸で、下半身も下着のみだった。

美海は、自分の胸の大きさが平均以下であるということに自覚しており、密かなコンプレックスでもある。対して目の前の彼女は、決して大きすぎず、だからといって小さいわけでもない、まさに理想的な大きさの胸だった。しかも、形がいい。カップは綺麗に整ったお椀型をしていて、その先端はツンといじらしく尖っている。

なぜ美海はここまで事細かに状況を観察できたかというと、美海だけでなく、目の前の少女も完全に凍りついていたので、美海だ

沈黙が部屋に充満する。その間に、少女の顔はみるみるうちに赤らんでいき……。そして、

「きゃあああああ!？」

その沈黙は、絹を裂くような彼女の悲鳴とともにあっさりと破られた。美海は、わたわたと手を振り回して、頭に浮かんだ弁解の言葉を必死に垂れ流すので精一杯だった。

美海と沙織は、こうして出会った。

第5話 「まあ、なるようになるさ」

入学式。それは、新たな世界への門出。

しかし、残念ながら春樹はそこまで前向きな性格ではなかった。

「なんで2年である俺らまで出席しなきゃいけないのかね」

「まあいいじゃない。いい子が見つかるかもよ」

見つかるわけねえだろと思いつつ、春樹は視線を前に戻した。

ぴしりと制服を着た春樹と冬吾は、わずか1列、しかも3人しかない在校生の列に座っていた。隣には、恐らく在校生代表で何か喋る役の上級生プログレスが1人。その隣はもう教師陣である。実は、現在3年生にαドライバーは在籍していない。しかし、αドライバーがない学年があるというのは、別段珍しいことではない。ひどい時は、3学年まるごとαドライバーが不在ということもある。それくらい、αドライバーは貴重な存在なのだ。

入学式参加が強制されているのはαドライバーだけで、プログレスはいない。彼女らにとつて、今日は休日ということになる。正直、「αドライバーは少ないから別に場所とらないし出る」としか理由付けがされていないのではと思っているのだ、これにはなんとなく納得がいかない。

「俺はもう3年目だけど、やっぱずるいよなあ。なんで俺らだけ……」
「文句言わないの。ほら、そろそろ1年生が入ってくるよ」

あまり乗り気ではない春樹に対して、冬吾は楽しみそうな顔だ。

華やかな音楽と共に入場してくる、真新しい制服に身を包んだ新1年生は、その多くが緊張気味の表情をしている。そんな新1年生の中を探してみると……いる。美海が。多少は緊張しているようだが、他に比べれば幾分リラックスしているようだ。それでも、なんとなく所在なさげに見える。他と似たり寄ったりといったところだろう。しかし、たまたま春樹と目が合うと、美海は安心したように笑顔を強めた。と同時に、緊張が解けたようだった。知り合いがいるというのは、それだけで心強いはずだ。春樹も小さく微笑み返してやった。

列の一番後ろには、3人の男子がいる。今年のαドライバーは3人

だ。3人とも、講師たちの計らいによって行われた親睦会で、既に顔合わせをしている。が、実は春樹と冬吾は、3人の内1人とは前々からの面識がある。というのも、その1人は中等部からの持ち上がりだからだ。名前はハイネ・カミュオン。黒の世界の魔族家系出身の少年で、一流の魔術師を目指している。

残りの2人は、日本人だった。異世界人は、まずこの世界の文化に馴染むことから始めなければならぬため、どうしても最初は面倒事が多くなる。その点、同じ日本出身なら親しみやすい。

入学式に限らず、式典というものはとにかく退屈だ。

しかし、入学生代表に選ばれたプログラスの話だけは、ちゃんと聞いておいた。

.....

毎年そうなのだが、卒業式以外の式典は、意外な程早く事が済むものだ。その卒業式にしたって、青蘭学園の生徒の少なさなら、ひとりひとり卒業証書を渡したところで、普通の高校よりも時間がかかるということはない。

入学式は、終わったならそのまま帰っていいよとのことだったので、冬吾を連れ立って帰ろうとしたが、冬吾がカフェテリアでセニアと待ち合わせをしているという。それを聞いた春樹も、美海達の様子でも見に行こうかな、と気分が変わったので、冬吾とその話をしていたら、後ろから彼ら呼び止める声があった。

「おーい、春樹！ 冬吾！」

「あ、雄馬先生」

呼び止めたのは、体育の講師・岸部雄馬だった。新しいαドライブバーが青蘭学園に来るたびに親睦会を開く、そういうところでやたらと気が利く大人だ。

「あれ？ なんで雄馬先生が？ 講師の人って、入学式に出るんですけどっけ？」

冬吾が質問すると、雄馬は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「いや、今日の俺は保護者枠でね。姪っ子が入学したもんだから、出席は当然の義務ってワケ」

「姪……なんて名前ですか？」

「岸部沙織って言うんだ。めっちゃ可愛い。ほら、入学生代表の。産まれた時から世話してるんだ。お前ら、手エ出したらタダじゃおかないからな！」

「だ、出しませんよ」

実に目がマジである。それは置いておいて、その名前は記憶に新しくなった。先ほどの入学式で新入生代表の言葉を述べていたのは、確かに岸部性の生徒だった。可愛い容姿をしていた。艶やかな黒い髪の毛、春樹的には「The・優等生」みたいな外見だったと記憶している。同年代である春樹達にとっては「可愛い」よりかは「可憐」と評したいものだが、彼女が産まれた時からそばにいて、現在三十路近い雄馬からすると、やはり「可愛い」のだろう。手を出されたら怒る、というのだから、十分に理解できる。

——にしたって、生徒に向けるのに、その目はないでしょ。

明らかに殺気の混じった視線に若干頭痛を覚えながら、「それで」と春樹が話題を元に戻す。

「俺らになんか用ですか？ まさか、その沙織ちゃんを自慢するためだけに……」

「ちげーよ！ 自慢したいのは山々だがな、入学式に出るって海斗に言ったら、伝言を頼まれてな」

「城先生が？」

「そうそう。それで、その伝言つてのがだな……」

雄馬は、何でもないことのように言おうとして、それに失敗したのか、困ったように右手で頭を掻いた。

「お前ら、ブルーミングバトルに出ろ」

『……………えっ？』

間の抜けたような2人の返事は、奇しくも同じタイミングで放たれた。

……………

一応休日扱いのため、ほぼ誰もいない学内のカフェテリアで、奢ってもらった早めの昼食を前に、春樹と冬吾は揃って呆然としていた。

雄馬が出て欲しいと頼んだのは、4月の末日に行われる《スプリング・ストライクショー》と呼ばれるイベントの一環であるブルーミングバトルだった。このイベントは、青蘭島のことを新入生によく知ってもらおうという目的で、毎年4月に開催される。このブルーミングバトルには競技性の色が薄く、どちらかといえばショーのような色合いが濃い。去年、春樹達も参加した——ただし、観る側で。

「だからな？ ホントに足りないんだって。αドライバーが」
雄馬は困ったように言った。

去年のブルーミングバトルは、青蘭大学から4組のチームが、そして高等部3年から2組、合計6組のチームが対戦を行った。あくまでもショーであるため、行われたバトルは、同学年同士のみのもので3戦だけだった。

ブルーミングバトルの、αドライバー側に設けられた年齢制限は、16歳以上。春樹も冬吾も高校2年生のため、そこはクリアしている。だが、去年聞いた話だと、2年生になってブルーミングバトル実践の授業を受け始め、その成果を最初に発揮する場合は、夏休みに行われるイベントだと聞いていた。つまり2人は、ブルーミングバトルのルールこそ知れども、行ったことは1度もないのだ。

「ちよつと待つてくださいよ。去年出場した大学のαドライバーは1年と3年が2人ずつ……学年が上がっても、今年もまだいるでしょう？」

冬吾がもつともな質問をした。隣で春樹も相槌を打ったが、雄馬は顔をしかめて言う。

「いや、足りない。元3年の2人は、出場停止処分にされた」
「あつ……」

雄馬の言を聞いて、冬吾は何かを思い出したようだった。そして、思い出したのは春樹も同じだった。

ブルーミングバトルの様子は、その映像を放送しているため、全世界で見ることができる。特に地球では、どの放送局が放送権を取るか

で毎回争っているらしい。

ブルーミングバトルを含むタイプの青蘭島主催イベントは、大体3ヶ月に1回ほど行われている。前回のイベントは2月中旬にあった。そのイベントはブルーミングバトルがメインとなるもので、1年間の集大成となるイベントのため、競技性の高いトーナメント方式で行われている。失意に暮れていたため、前回のものは観に行きすらしなかった春樹だが、前々回、そしてその前も、大変盛り上がっていたことは覚えていた。

そして、そのイベントは当然ながら日本全国でも放送された。そこで事件は起きていた。

アンダーグラウンドな場で、そのイベントに対する大規模な賭博場が開かれていたのだ。この手の賭博は刑法186条で禁じられており、開張者はその2項・賭博場開張凶利罪に当たる。野球賭博と同じようなもので、明確な犯罪である。これが摘発され、一大事件になった。

それだけなら、まだよかったのかもしれない。だが、調査を進めるうちに、大学3年のαドライバー2人が八百長に関わっていたという事実が発覚してしまった。

青蘭島の華でもあるブルーミングバトルで八百長が起きたという事件は、瞬く間に全世界へ広がり、2人にはブルーミングバトルへの出場停止処分が下った。さらに青蘭島側は自粛の意から、3年の間、ブルーミングバトルの放送を停止するという処分を自らに下した。ブルーミングバトルの放送権は当然ながら高額で取引されるものだが、それを取りやめるということは、青蘭島が持ち得る利益の損失につながる。反対意見も多かったらしい。しかし、事実として処分は下り、以降3年間は、ブルーミングバトルがテレビに映ることは一切無くなるという流れになった。

「必要なαドライバーは6人だけど、お前らより上で今出れる連中は4人。てことは必然的に、もう出れるお前らに出てもらうしかないんだよ」

雄馬が辛抱強く言った。確かに、理由としては妥当なもので、冬吾

も「そういうことなら……」と納得したような空気だ。しかし、春樹は――

「誤解のないように言っておこうか」

春樹が口を開くよりも前に、雄馬が釘を刺すように言った。

「お前らももう16歳。ブルーミングバトルに出れる歳だ。だから教えてキツい言い方をすれば、春樹、別にお前は一番不幸なわけじゃない」

「え……………?」

春樹の『言い訳』。プロGRESSがないから、という砦は、その一言であっさりと崩れ去った。

雄馬は話を続ける。

「確かに、プロGRESSをまとめて失ったお前の悲しみは分かる。けど、もうお仕舞いにしようや。ウジウジしても前には進めないだろう? そういえば」

雄馬はそこで一回言葉を切ると、殊更真面目な面持ちになった。

「早輝さきのリンク率、まだ言ってなかったな。本人のいないところで言うのも申し訳ないけど、無礼承知で、敢えて言うことにする。あいつの汎用リンク率は0.01%だ。この意味が分かるよな?」

それを聞いた春樹は、絶句した。そんな数字、あり得るのか。下手したら、この学園の誰ともリンクできない可能性がある。ブルーミングバトルに参加するプロGRESSの人数は、最低でも1人以上。その1人すら、見つからないかもしれない。あの明るくて活発なαドライバーは、そんな大きすぎる重石を背負わされていたなんて。

「お前はこの前、美海との相性が最高に等しいということを証明しただろ。もしプロGRESSのアテがないなら、彼女を辿ってみろ。そういうヤツは、意外と当たるもんだからな」

「……………でも」

春樹は小さく反論しようとした。今から作る急造チームでいいのかという、また建前の言い訳。だが、それも雄馬の視線に出会って霞んだ。

その目は、ひどく真剣である。普段おちやらけている彼からは想像

もできないほどに。

「じゃあ趣向を変えて、俺の話をしようか」

雄馬は、そう仕切りなおして語り始めた。

「俺もかつて、この学園に通ってた。そこで俺は……まあ、モテた。それなりに。相性が良さげな子は、いっぱいいたさ。そんなもって、チームを組んだ」

雄馬がモテた、というのは、よくわかる話だ。顔立ちは整っているし、声も綺麗だ。性格も明るくて親しみやすい。何よりも、仕草や声の抑揚に『色』がある。というか、今でも女子生徒からの人気は高い。だが、結局話が何処に向かっているのか気になり、春樹と冬吾は怪訝な表情になる。

「かと言つてだな、別に俺のブルーミングバトルにおける成績がめっちゃ良かったか、つて言われれば、別にそうでもないんだ。相性良さげなプロGRESは、確かに沢山いた。だけど、真に相性が良いプロGRESだらけだったかって言えば、答えはノーだった。

で、夏に初めて試合に出るって時に、練習中にプロGRESが負傷して……試合前の1週間で組んだ俺のチームは全部で5人。最高リンク率のプロGRESでも、数字は70%前半程度。そんなもんだったよ。それでも、やらなきやいけなかったからやった。それで、勝てたんだ」

雄馬は、郷愁に浸るような面持ちでそう告げた。そして、春樹と冬吾を見据える。

「大事なのは、リンク率でもチームを組んでからの時間でもない。自分がどれだけプロGRESを信じられるか——そして、プロGRESに信頼してもらえるかだ。俺はその1週間、死ぬ気で頑張った。プロGRESを信じきるために、お互いの事を知らなきやいけないうって思ってたから、かなり沢山手を打った」

聞き入っていた春樹と冬吾に向かって、雄馬は微笑んだ。

「なあ……俺はお前らに期待してるんだ。春樹は美海っていう最高のパートナーが見つかったし、冬吾もセニアとのリンク率が良かったって聞いている。ちよつと時期は早まったが——2人とも、ブルーミング

バトルに出てくれるな？」

ルールは知っている。チームを急造し、数回の授業を受けただけで、ぶつつけ本番で試合に挑む。しかも、そのチームの核になるのは、まだ信頼からは程遠い少女。正気じゃない。正気じゃない、が……。

「……分かりました。出ます」

春樹は、きつぱりそう言い切った。隣で冬吾も了解し、2人はかなり無謀なブルームینگバトルに挑むことになった。

「……でも、大丈夫ですかね？」

少し弱気になった春樹がそんな弱音を漏らすと、雄馬はいつもの快活な表情に戻って言った。

「まあ、なるようになるさ」

……………

まだ担任教師が来ていない1年生の教室は、多少ざわついている。40人余りのの新入生は、1クラスに纏められたため、それぞれの寮で知り合った友人がいる——即ち、普通に話せる相手がいる——からだ。しかし、どこか言い知れない緊張感に包まれている。

しかし、そんな空気をものともせずに

「ねえねえ、お名前教えてー！」

「どこの世界から来たの？」

とほかの生徒に話しかけまくるプログレスが1人。言うまでもなく美海だ。

同じ寮に住んでいる青の世界出身のプログレスとは、既に打ち解けている。しかし、それ以外の世界出身の学生寮には行ったことがない。知り合いは数人いるものの、全員は知らなかった。

「美海ちゃん、ホントにこういうのは得意だよね……昔からあだったの？」

「そだねー……昔からあだったよ」

そんな美海を眺めながら話しているのは、黒髪が美しい優等生感漂う岸部沙織と、青蘭島の「顔」として広報活動に勤しんでいる美少女・小鳥遊希美だ。希美は小学生時代に美海と同じ学校に通っていた、いわゆる幼馴染という立場だった。両親の都合で中学からは青蘭学園

中等部に通っており、中等部寮から高等部寮へと引越してきて美海と再会したのだった。

その時の事を思い出しているのか、遠い目になる希美。

「美海ってすごいんだよ。私は頑張ってダンスとか歌とか練習してたのに、美海ったらちよつと見せただけですぐに上手くなっちゃうの。それでいてあんなに社交性もあるとか……ちよつとズルいよね」

「確かに美海ちゃん……そういうところズルいよね」

「む！ 私のこと話してる気配がする！ なんの話してたの？」

「美海ちゃんはすぐに人を落とすから、ズルいなあつて」

「落とす？ 何のこと？」

「沙織を見れば分かると思うけど」

むう、と考え込む美海を見て、沙織と希美は可笑しそうに笑う。

「なにさあ、私だけ仲間はずれ？ ひどいよう」

「違ふよ。むしろ美海ちゃんは、みんな仲間にしちゃう感じだもん」

「ある意味、『仲間はずれ』って言葉からは一番遠そうだよな」

「そうかな？ えへへ」

褒められているのかどうか微妙なラインの返事を聞いて、表情を緩める美海。

ところで――

教室の窓際の列、後ろから3席は、女子だらけの教室で異彩を放つ『男子』が座っている。互いに知り合いなのか談笑しているが、そのうちの1人の表情は少し硬い。

と、そこに美海が襲撃する。

「さあ、お待ちかねのαドライバーさん！ 私は日向美海だよ！ お名前聞かせて？」

「え、ええっ？」

美海が声をかけると、クラスのポリウムが数段下がった。αドライバーの話は気になるところがあるのだろう。

薄い色の髪をした黒の世界出身のαドライバー・ハイネ以外の2人は、片方がやたらに小さく、もう片方は背が高い。先に口を開いたのは、小さい方だった。

「えと、永瀬俊太ながせ しゅんたです。日本出身です。よ、よろしく……」

緊張気味に答える俊太は、身長が156センチの美海と大して変わらないであろうほどに小柄な男子だった。伸ばした明るめな色の髪を後ろで縛っている。顔立ちは整っており、声も高めと、女装したら男だとは分からなくなりそうな容姿をしていた。

「大村早輝おおむらさきです。俺も日本出身です。美海ちゃん……でいいのかな。よろしく」

対する早輝はフランクな様子で美海に挨拶した。俊太とは比べるまでもなく身長が高い。それに、笑顔が板についている。初対面の美海にも動じずに対話出来ていた。

そして残る1人。

「黒の世界出身のハイネ・カミュオンです。よろしく」

「あ、ハイネくんは知ってるからいいや」

中等部に通っていたハイネは、薄い色の髪に碧い目をした、少しひよろ長い少年だ。ミステリアスな雰囲気漂っている。人間とは異なる『魔族』という種族である彼は、春休み中に美海と出会っており、その時に少し話をしていた。

美海の雑な返しに、ハイネは少し傷ついたような顔になった。

「そりゃ酷いな。あの時はちよつとドタバタしてたから改めてと思っただのに。ね、ソフィーナ」

「な、にやによ!？」

ハイネが前の方の席に座っていたツインテールの少女に声をかけると、少女は顔を赤らめて振り返った。

「あ、ソフィーナちゃん! こつち来てお話しようよ!」

「し、仕方ないわね……」

席を立った少女——ソフィーナは、目を見張るような美少女だった。一番の特徴はツインテールに結った髪だが、それ以外にも側頭から角が生えていたり、スカートから尻尾が伸びていたり、なんというか、非常に黒の世界『らしい』少女だ。彼女もハイネと同じく魔族だったが、ハイネが人間とほとんど変わらない姿をしているにも関わらず、ソフィーナは魔族としての特徴が大きく外見に出ている。

「で、何の用よハイネ」

「いや、俺と久々に再会したあの時のお前の顔、写真撮つとけばよかったなあって」

「誰が撮らせるもんですか!」

「あ、そうだね。私も見返したいなあ。すつごく可愛かったもん」

「あんたも乗つからんじやないわよ美海!」

からかうハイネと美海に、顔を真っ赤にして怒るソフィーナ。

やいやいと騒ぐ3人に、俊太が尋ねる。

「えと……ハイネとソフィーナ……さん? って、知り合いなの?」

「私を呼ぶならソフィーナでいいわ。理ことわり深き黒魔女、ソフィーナ・アルハゼンとは私のことよ」

「理深き……ねえ」

ハイネが、「またこれだよ」と言わんばかりの、馬鹿にしたような眩きを漏らす。生憎ソフィーナは話の続きをするのに夢中で、聞いていなかったようだ。

「そうよ。このバカと私は小さい頃からの知り合いで……いわゆる幼馴染って奴かしら? そんな感じ」

「ちっちゃい頃からひねくれてたんだよ」

「ひねくれてないし! もっと言い方考えなさいよ!」

「じゃあ、素直じやない、とか? それとも、天邪鬼あまのじやくなんてどう?」

「あんたねえ……」

ソフィーナがメラメラと怒りの炎を燃やしている。心なしか、彼女の体から漏れ出た魔力が陽炎のように周囲の空間を歪ませているように見えた。

しかし、美海は動じない。どちらかといえば、気づいていないだけにも見えるが。

「あははー。仲良しさんなんだね」

「別に仲良くなんかないし。大体、コイツとは10年くらい顔も見てなかったんだから……」

「でも息びったりだよ。ねー、ハイネくん」

「そうだな。仮にも幼馴染だし……その昔は一緒に山の中を駆け回っ

た仲だもんね」

「はあく……そうね。そうだったわね」

みんなにはまだ話してはいないが、ソフィーナは黒の世界の最高統治者である『魔女女王』という人物に才能を見出され、彼女の下で一流の魔女になるために修行を積んできた。そして、魔女女王の『ほかの世界に行つて、見聞を広げて来なよ』という提案により、青蘭学園へと留学することになったのだ。

そんな『魔女』なソフィーナ的には、例え幼い頃のことであっても『山の中を駆け回る』というのはエレガントさに欠けるのだろうか、ほとんど諦めムードでハイネの言葉に相槌を打った。

そんなハイネとソフィーナを眺めながら、早輝が口を開く。

「でも、いいなあ。幼馴染つて。しかも、こんな美少女！ 当然リンク率もいい感じだったりするわけ？」

「ホームルームが終わつたら計りに行こうかなつて。でもきつと最高だと思うよ。ね、ソフィーナ？」

「だ、誰が最高よ！ あんたとなんか、精々7割が関の山つてところね」

「あ、ソフィーナ照れてる。ハイネがからかいたくなる理由、なんか分かる気がする」

「そうだろう？」

「そうだろう？ じゃないわよ！」

早輝と俊太とは初対面なのに、やたらと馴れ馴れしく接されるソフィーナである。が、それもソフィーナの魅力のひとつなのだろう。

そんな微笑ましい様子を見ると、美海のポケットが震えた。

「あ、春樹くんだ。なんだろう」

メールを受信した携帯電話を取り出した。そこには、春樹に見つけてもらった貝殻と美海が1人で夕玄島に遊びに行った時に拾った貝殻、それらとビーズで作られたアクセサリーが付いている。画面を見てみると……そこには、

『お願いなんだけど、もし美海と相性が良さそうなΩの子がいたら、ホームルームが終わり次第2階のカフェテリアに来てくれるかな？』

と書かれていた。

後ろでハイネとソフィーナが騒ぐ中、どういふことだろう、と美海は考える。春樹はブルーミングバトルのチームを組むつもりなのだろうか。でも、連れてこいと言われたのは『春樹と』相性が良さそうなプログレスではなく、『美海と』と書かれている。それでチームが組めるのだろうか。

しかし、実は美海にはその条件に当てはまるプログレスに——心当たりがある。同じ寮にやって来た、おなじ日本出身の子が3人。挨拶して、握手して——その時、なんとなく『近い』感じがしたのだ。春樹の時ほど劇的ではなかったが、確かに美海の直感であった。

『了解でーすー!』

と返信して、ソフィーナ達に「ちよつと待っててね」と断ってから、美海はちようど固まっていたその3人の元へ足を運んだ。

担任教師が教室へとやってきたのは、その3分後だった。

.....

「.....で?」

「『了解でーすー!』だって」

「自分から出向けばいいのに。そうすれば、春樹の方にも合う子が見つかるとかもよ?」

「まあ.....もしダメだったらそうするさ。まだ学校に慣れてない子が多いのに、いきなり訪ねるのは気が引けるってもんでしょ」

雄馬が去った後のカフェテリアで、春樹と冬吾はすっかり冷め切った昼食を食べ終え、額を寄せ合って携帯電話の画面を見ていた。携帯電話には、美海が見つけた貝殻とビーズで作られたアクセサリーが付いている。

「てか、お前はそろそろ帰れよな。ネタバレになるだろ」

「ネタバレも何も、春樹はユフィとテルルとナナを知ってるじゃん。ズルくない?」

「初対面で別に関係ないお前がいたら、向こうも緊張するだろ。ほら、行った行った」

「ちえ、冷たいの。仕方ない。セニアとは別の場所で待ち合わせしよう」

春樹に追い出された冬吾は、カフェテリアを出て行く間際に「じゃあ、幸運を祈ってるよ」と言い残して去っていった。

「……ああいうセリフを咄嗟に出せるのが、モテる秘訣ひけつなんだろうか……」

昨年、春樹は4人・冬吾は3人のプロGRESと親密だったが、それ以外のプロGRESでの人気投票だと、冬吾の方が人気が高かった。それもその筈、冬吾はちよつとした気配りができる性格に柔らかな物腰と高い身長、それに加え、定期試験の成績で常にトップ3に入るような秀才である。これでもかとはかりにモテる要素を詰め込んだような男なのだ。そんな奴が相手だから仕方がない……と割り切ることは簡単だが、それでも若干悔しくなるのは年頃の男子高校生だから当然だろう。

ボキャブラリーは、増やしておいて損なしだな、などどうでもいいことと、ホームルームが終わるのはいつになるのだろうか、とこれからのことを考える。冬吾の提案でメールを送ったはいいが、いざ美海が連れてきた連中を前にしたとき、ちゃんと気の利いた台詞が出てくるだろうか。一抹の不安がよぎったが、なんだかんだ言っつてこの島での生活も4年目になる。今更といったところだろう。

携帯電話を弄ってニュースなどを見ながら時間を潰す。太陽光の差し込むカフェテリア窓際の席は、夏場になると暑いが、今はちょうど良い心地だ。

30分ほど経った頃、カフェテリアに、あの元気な声が入ってきた。「春樹くーん！ おまたせー！」

……

「それで、困ったことはなかったかな？」

「はい。問題ノープロブレムありません、マスター」

「そう。よかった」

冬吾は腕を伸ばして、セニアの小さな頭を撫でた。セニアは、何も

反応を示さない。

青蘭学園は、外との明確な仕切りが薄い、大学のキャンパスのような構造をしている。というよりも、広大な青蘭大学のキャンパスの一部（とはいえ相当広いが）を青蘭学園が占めている、という形の方が近い。出入りは自由なため、青蘭諸島の住人は好きな時に図書館やカフェテリアなどの施設を使える。

冬吾とセニアは、青蘭学園の外であり、青蘭大学キャンパスの中のレストランで落ち合った。

冬吾の目の前には、無表情でハンバーグをもそもそ食べているセニア。冬吾は先程済ませたため、今はコーヒーのみだ。

この1ヶ月弱で、セニアに教えたことは本当に多かった。何しろ、この世界の事——どころか、ほとんどものを知らない状態だったのだから仕方がない。

「マスター。この物体は、食するには熱すぎます。口内の表皮が大きくなダメージを受けます」

「そういうときは、息を吹きかけて冷ますんだよ」

「了解しました、マスター」

こういうやり取りを、悠に100回以上行ったといえれば分かり易いか。

ハンバーグを小さく切り分けて、ふーふー息を吹きかけて冷ましてから、あむ、と小さな口に頬張る姿は、なんとなくリス科の動物を想起させる。

（実際、ちっちゃいもんなあ……大人しいシマリスみたいだ）

好奇心はある。寧ろ、旺盛と言ってもいいだろう。セニアは実に様々なものに興味を示した。それは道端に生えるタンポポから他のアンドロイドの装備まで。目に映るもの全てが新鮮なのだろう、表情に現れないから分かりにくいものの、その純粋さ、無邪気さを、冬吾はある程度理解できていた。

「それで、マスター。この後の予定は？」

「うん、これからドクターの所に行くよ。セニアの装備の話をするって聞いてるけど」

「装備、ですか？」

「そう。ブルーミングバトル用の特注品なんだつてさ。僕も詳しいことは全然知らないんだけど……楽しみだね」

「はい」

こくり、と頷くセニア。それを見て満足した冬吾は、ふと自分が何か忘れていることに気付いた。

——忘れてることに気付く……って、意味ないよね。だって、忘れてるんだもん。

そんな素晴らしくどうでもいい思考をしていると、携帯にメールが来た。なんだろうと思って確認しようとしたその瞬間、レストランの入口、ガラス張りのドアを蹴破らんばかりの剣幕で来店したお客様があった。

店内が一瞬で騒然となる。同時に、冬吾の首筋に、冷たいものが流れていった。

「三島、冬吾おおおおお!!」

「——あ。」

冬吾の『忘れていること』。それは、彼女に待ち合わせ場所の変更を言いそびれていたこと——

「よくもわたくしに黙って待ち合わせ場所を変更しやがりましたね……わたくしの可愛いセニアを独り占めしようとは……今日という今日は、万死、万死、即ち1万回の死に値するでございます……」

「ま、待ってカレン。誤解だよ。なんか言葉が普段以上に変だし、それに僕はただ忘れてただけ——」

「問答、むよー……!!!」

ずんずんと近づいてくるそのシルエットは、その身から放つドス黒いオーラのような威圧感だけで、店内の人間を全員黙らせていた。

バイタルコードΩ33、プロダクトコードOHP-202。通称、カレン。冬吾や春樹と同じ高等部2年に在籍するアンドロイド。セニアの前型機のアンドロイドであり、病的なまでにセニアを溺愛している、つまるところセニアの『姉』。

表情に乏しい（はずの）端正な顔は、まるで仁王におうの如き憤怒の表情に彩られ。セニアと同じく（いつもは）鈴を鳴らすかのように柔らかな声は、今にも張り裂けんばかりに高らかに。鈍い色の（普段は）ストレートの金髪は、『怒髪天を突く』としか表現のしようがないヘアスタイルにアレンジされている。

「セニアの晴れ姿がどうしても見たい！」と言っていたカレンだったが、今日の午前中は彼女にしかできない仕事があった。その折衷案として、入学後、一緒に昼食を取ろうと約束していた。青蘭学園のカフェテリアで。

春樹に追い出された冬吾は、セニアのことばかり頭にあって、カレンのことを忘却していたのだ。

そして——彼女は、戦闘用アンドロイド。

その存在意義を明確にするように、右腕に装備された分厚いブレスレット型の装甲が自動的に展開し、彼女の指先から肘までを覆い尽くすガントレットに変形した。装備者の脳波に反応して自動展開する、ドクター・ミハイルの新型兵装だ。

そのままカレンか冬吾を殴りつけるように握り締めた右の拳を突き出す。しかし、冬吾とは距離がある。拳は届かない——と思いきや、そこから、

「か、カレン！ 人前でミサイルはまずいって!! いや、人前じゃなくてもまずいってばそんなの食らったら絶対に死ぬ

「まずー一回目えええええええ!! 死ぬえええええええ!!」

冬吾は慌てるあまり、座っていた椅子から滑り落ちたが、カレンは微塵も戦闘意識を薄めない。

カレンの装着するガントレット、その一部がさらに展開し、現れた小型ミサイルの先端を冬吾に向けた。カレンの目は、完全に狂気に満ち満ちている。まともな状態ではないということ、店内の全員が理解できた。同時に、彼女に対して一切の關係を持ちたくないということも。

小型ミサイルの先端のマーカーランプが、ちかり、と鈍く煌めいた。発射まであと数秒もない。

——ああ、終わったな。僕の人生。

絶体絶命。死期を悟った冬吾の脳が、脳神経を焼き切らんばかりの異常な速度で動き出し、今までの記憶がフィードバックする——そこに滑り込む影があった。

「!? セニア!?!」

カレンの表情が歪んだ。眼前のミサイルにも物怖じせず、セニアが冬吾を背に、カレンに向かって仁王立ちしていた。

「カレン。マスターを、傷付けないでください。マスターは、まだ自己弁護が不十分です」

「セニア……」

取り敢えず、危機的状况は免れたらしい。元の思考速度に戻った脳が、セニアへの感心を示した。

——僕を、庇^{かば}ってくれた？

「それに、マスターを傷つけたら、いやです」

柔らかい声。普段なら、ここに付随するものは鋼鉄のように硬い台詞だ。しかし、今セニアは自らの意思を口に出した。その事実には、不覚にも冬吾は少し感動してしまう。椅子から滑り落ちた、情けない格好のまま。

「……セニアにそう言われたら、矛を収めるしかないのですが」
カレンは、無感情に戻ってそう呟くと、ミサイルをガントレットに格納し直し、そのガントレットも金属的な音を立てて元の分厚いブレスレットに戻った。

先の喧騒が一転、沈黙が、場を支配する。

沈黙を破ったのは、冬吾だった。

「……ひとまず、謝っておこうか?」

「……そうするのでございます」

セニアが再び席についてハンバーグをもそもそやり始める横で、冬吾とカレンは「ご迷惑をおかけしました」と「お騒がせして申し訳ありませんでした」をひたすら連呼する羽目になった。

後で携帯を確認したところ、さつき受信したメールは春樹からで、文面は「カレンが探してたぞー」とのことだった。もう数分早ければ、

もっと上手い言い訳が考えられたのに、と少し悔やむ冬吾だった。

第6話 「なかなか、思うようにはいかない」

少し前に時間を遡る。

「いやー、どもども。那月琉花なつきるかって言いまっす！ みうみんなに声かけられたんで来てみましたけど……なんだー、いい男じゃん！」

と、制服姿に、なぜか腰にリボルバー銃を下げている少女が言う。

「あ、あの……すみません！ 美海ちゃんに来て欲しいと言われたので……あ、わ、私、生嶋兔莉子いくしまうりこといいます。その……あの……ごめんなさいっ」

と、か弱い小動物を連想させる、薄幸の姫君のような少女が言う。「お初にお目にかかります。拙者、風魔忍ふうましのぶという者でゴザル。美海殿に言われて来てみれば、拙者の主人と成り得る男性とは。ふむう、世は分からねぬものでゴザルな」

と、日本人なら誰がどう聞いても忍者としか思えない少女が言う。実に、キャラが濃い。

美海の連れてきた子は3人。その3人が全員、濃ゆいキャラクターだったのは少々想定外だった。春樹は引きつった笑顔で挨拶するしかない。

——あいつら、あれはあれで割とマトモだったのかもしれない。

しかし、どうも美海の勘は冴えているらしい。試しに握手してみたら、全員が全員、美海と初めて接触した時の感覚に似たものを覚えたからだ。

「で、春樹くん。連れてきたはいいけど、何するの？ もしかして、もしかしちやうの？」

期待顔の美海。いきなり「プログレスを連れてこい」なんて書いたものだから、きつと色々と察しているのだろう。春樹は「まあ……そんなところかな」と適当にお茶を濁す。

それから、さてどう切り出したものかと思案し、取り敢えず、

「取り敢えず、ゴハン食べよう。1人1000円あげるから、好きなも

ん取っておいで」

……………

渡そうとした1000円は全員から拒否され、ファースト・インスピレーションはカッコ悪く決めることになった。そして、ちよつとした小話を交えながら食事をすすめ、全員が食べ終わると、事のあらましを洗いざらい話した。

「……で、ブルーミングバトルに出ることになっちゃったから、プロGRESが欲しかったと」

「そうだね……なんとも面目ないけど」

すると、琉花から当然のような質問が出る。

「うーん……でもそれって、2年生か3年生に頼めばいいんじゃない？」

まったくもってごもつともすぎる指摘である。

「俺、今の2年と3年にリンク率が高い子、いないんだよね。それで、まあ、ひよつとしたら1年生にいるかもって思っ……申し訳ない」

「あ。い、いやいや、別に責めてないよ？ でも……」

慌てて手を振る琉花。しかし、琉花、美海、忍の視線が、兔莉子へと向かう。

「あ、あう……………」

話聞く限り、兔莉子のエクシードは『動物と意思を疎通できる』というものだった。戦闘では役に立たないと、本人も自覚しているのだろう。涙目になって縮こまってしまった。

「ご、ごめんなさい。役に立てなくて……」

「あ、いや。別にいいんだよ。こつちもいきなり呼び出したりして申し訳ないし、それに」

春樹は一旦息を整えて言う。

「ブルーミングバトルとかエクシードの質とか、そんなもの抜きにして兔莉子と仲良くなれたら、俺は嬉しいよ」

それは、今成さねばならないことを無視してでも伝えたい、春樹の本音だった。

去年仲のよかった4人のプロGRESの内2人は、戦闘向きではないエクシードの持ち主だった。それでも、彼女らとだって固く絆を結ぶ

ことができた。だから兎莉子とも……と思ったのだが。

「……………」

兎莉子は顔を真っ赤にして俯いてしまった。春樹としては「気にしない」という意味も込めて言ったつもりだったが、傍から聞いたら実に恥ずかしいセリフである。他の3人の「何言ってるんだこいつ」的なリアクションを見て、ようやく自分が何を言ったかを自覚した。

しかし、あわてて弁解しようとした春樹の心に不意に芽生えたのは、先の自らの言葉に対する反発的な感情だった。

——待て、『固い絆』？

現状、出会ってから1ヶ月程度が経過している美海とすら、未だに距離をとっているのだ。いつでも離れられるようくらの、微妙な距離を。もともと、美海はそんな春樹の態度などまったく気にしていないかのように振る舞うが。

そんな自分が、この3人とも仲良くなる？ 信頼できない——いや、信頼させてはいけない相手を、この上、余計に増やしてしまうのか？ 信頼したようなフリをして？ 偽りの信頼は彼女らを、余計に傷つけるだけじゃないのか？

——いや、違うだろう！

雄馬が言っていた。「大事なものは、リンク率でもチームを組んでからの時間でもない。自分がどれだけプロGRESSを信じられるか——そして、プロGRESSに信頼してもらえるかだ」と。だとしたら、必要なのは信頼したフリじゃない。心からのそれだ。やるって言ったからには、やらねばならない。そうしなければ、向こうも心を開いてくれるわけがない。でも、そこまでする理由があるのか？

——俺は、冬吾に勝ちたいのか？

——それをみんなに強要するのか？

決まりきらない。割り切れない。他人本位で優柔不断、それでいて自己中心的。歪んだ匙が、頭の中に渦巻く要素をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

だからこそ春樹は——弁解の仕方を、口に出す直前でいびつに変え

る。すると、我ながら整合性のない台詞が出てきた。

「だ、大丈夫だよ。とりあえずチームを組むのは今回だけだし！」

「え？」

その言葉に怪訝そうな声を上げたのは、美海だった。

「春樹くん、他に組めるプログレスいないんですよ？ だったら私たちと組んでよく。夏にもブルーミングバトルの大会みたいなのがあるんでしょ？」

まあ、琉花ちゃんと忍ちゃんとはリンクテストしてからだけど、と付け足した美海は、春樹の心など何も知らない。対する春樹は……咄嗟に反論ができない。美海の言っていることは、当たり前のように正論だ。普通に考えれば、結成したチームを1回限りで崩すなんてもつたいないに決まっている。

春樹がとりあえずで出した結論を、彼女は一瞬で打ち砕いていく。

と、そこに……新たにやってきた姿があった。

「セ、ニ、ア~~~~っ!!」

「……カレン？」

カフェテリアに入ってきたのは、同学年の春樹ですら一度も見たことのないような至福の笑みを浮かべたアンドロイド——コードΩ3 3カレンだった。

そのカレンはきよろきよろとカフェテリア中を見回して、

「あら神城春樹。セニアと三島冬吾はどこでございますか？」

探しているものが見つかからないと分かった途端に、一瞬で普段通りの無表情に戻るカレンに対し、ちようどいい邪魔が入ったと春樹はそつちに向かって、

「セニア……って、お前の妹機だっけ。ああ……さつき冬吾が、どこか別の場所で待ち合わせするって言って出て行ったけど」

「な、に………？」

特に気負いなく答えた春樹の視線の先で、完全に表情が滑り落ちて普段以上の無表情になるカレンは、1年生達が全員ドン引きするようなオーラを発し始めた。兔莉子など、震えてすらいる。いや、1年生だけでなく、春樹すらも背筋に悪寒が走った。

「あの三島冬吾め……いいいよ本性を現したでございませすね……万死……万死に値するでございませす……」

「あー、カレン？」

カレンは背筋を丸めて俯いたままカフェテリアを出て行った。

沈黙が、場を支配する。

「じゃ、じゃあ、みんなでマシンルームに行こー！　ものは試しだし、リンク率、パパッと測っちゃおう！　春樹くん、いいよね？」

「あ……ま、まあ、そうだな」

「よ、よっしやー、行こうぜ！」

「あ、あう。よ、よろしくお願いします」

「春樹殿が拙者の主人たり得るか、調査でゴザルな！」

結局、微妙な雰囲気のままロクな反論ができずに言葉を濁していたら、美海に主導権を握られ、リンクテストをしに行く流れになってしまった。

こういう時、自分の押しの弱さが嫌になる春樹であった。

とりあえず、冬吾には『カレンが探してたぞー』とメールしておいた。

……………

『ようこそ、デルタラボへ。あ、冬吾さんにセニアさん、それにカレンさん。お待ちしております。どうぞお入りください』

「ありがとう、ニア」

白百合島の北西。冬吾の個人的な先生、デルタのいるデルタラボは、ラボと銘打ってはいはいるものの、実際のところ彼の自宅であった。デルタのアシストAI、ニアは、ドクター・ミハイルのラボの門番AIよりもずっと感情豊かで高性能だ。それもその筈、ニアはデルタの作成した兵器をサポートする為に存在していた。門の開け閉めしかできないAIとは、モノが違うのだ。

冬吾はここで——個人的に白の世界の兵装について学んでいる。冬吾は昨年アンドロイドと多く触れ合う機会があったため、その兵装に興味を沸いた……のではなく、ひよんなどころから知り合ったデル

々が、冬吾の才能を見抜き、直々に彼の後継者にするために兵装の技術を教えたのだ。寧ろそのせいでアンドロイドと触れ合う機会が多くなった。

.....

冬吾は頭がいい。非常に、頭がいい。天才だ、と持て囃されてきた。勤勉な性格もあつたのだろうが、とにかく物覚えがよく、中学の定期試験の結果は入学から卒業まで全て1位。そういう少年だった。頭の作りが、常人とは異なる存在だと言つても過言ではないのかもしれない。

そういう少年だったからだろうか——彼の両親もまた優秀な人であつたが、彼に対して、愛情らしい愛情を見せたことが少なかった。共に研究職に就いており、多忙を極める両親は、彼に対して口を開けば、彼の成績のことばかりを聞いた。そして、自分が優秀であることを伝えると、満足して仕事に戻るのだった。

当然、このまま行けば高校は一流の進学校へと入学し、そこから東大・慶応などに進学する。そして、両親と同じく優秀な頭脳を持つ人間として、技術の発展に繋がる仕事をする。そう、思っていた。

しかし、その事実を突きつけられたとき、彼の中にずっと眠っていた——否、縛り付けられていた欲求が唸り声を上げたのだ。

成績なんてどうでもいいだろう。もつと僕を見てくれ。

両親に対してそんなことを口にしたことなどなかった。聡明な彼の理性が、そんなことをしても無駄だ、とはつきり告げていたからだ。でも、友人の家に遊びに行つて。和氣藹々とした家族団欒を見るたびに。優しく、厳しく、躰をする母親というものを目にするたびに。「昨日の晩、うちの父さんがさー」そういう話し出しを聞くたびに。

羨ましかつた。そういう風な両親の元に生まれたかつた。両親に不満は無い。だけど、それだけだ。

その感情は、飢えだった。

プログレスとαドライバー。その関係性を——多くのプログレス

が1人のαドライバーに付き従うというものを——聞かされるたびに、口では「そういうのもいいかもね」と適当に言い。

心の中では、言いようのない、激烈な羨望が渦巻くのだ。

1人でもいい。多くは望まない。僕を愛して。

冬吾が、その温和な性格と天才的な頭脳に反して抱いていた感情は、狂おしいまでの『愛』への飢餓だった。

だからこそ、その事実を突きつけられたとき、冬吾は、嬉しかった。反面、絶望した。

冬吾の両親は、言つてはなんだが前時代的な人間だった。世界接続など不要。青蘭学園の存在をあまり快く思っていなかった。

冬吾の両親に限らず、そういう人間は一定層存在している。プログレスまたはαドライバーとその関係者、及び青蘭諸島内での仕事に従事する人間以外は、一切の渡航が禁止。ブルーミングバトルの映像を全世界へと放送しているとは言え、青蘭諸島に渡る権利を得た人間は、例外なく身辺調査から血統調査までされ、不適切ならば渡航はできない。留学生に関しては、さらに厳しいテストもある。そんな過ぎたる閉鎖性が反発を生むのは、当然のことだった。

だから、両親に事実を伝えようとしたとき、冬吾は内心恐怖を抱いていた。

当然のごとく両親は反対した。

子供を、自分たちの用意したレールに乗せて将来へと導く。その教育方針は、ひよっとしたら間違っていないのかもしれない。子供の、将来の安定を願つてのことならば……しかし、冬吾はもう嫌だったのだ。

僕は、あなたたちの人形じゃない！

冬吾は生まれて初めて、泣きながら慟哭した。

そして、両親との話し合いが拗れて入學案内者が聞きつけるや否や、彼は交渉用の人材を派遣して両親の説得にかかった。青蘭学園にとって、純系日本人のαドライバーは、喉から手が出るほど欲しい存在だ——だからこそそこまでしたのだろうが、それは両親の更なる反発を生むだけだった。

冬吾は、半ば両親から勘当される形で青蘭島へやってきた。

「お前なんか、もういらない」

そう言った時の母親の顔は、なんだか非人間的に見えて、ぞつとした。

正直、清々していた。今までデフォルトで自分を縛り続けていた鎖が解けた時、冬吾が感じたのは、勘当された悲しみよりも、解放されたことへの喜びだった。後から思い出して、自分はなんて傲慢で非情な奴なんだろう、と悩みもしたが。

青蘭学園では、かけがえのない友人が2人できた。1人は春樹。今でも大事な親友。もう1人は、自分を磨くためにと黒の世界へ留学した。今でも時々手紙のやりとりをする。彼も大事な親友だ。

そして、彼は出会った。自分なんかでは、到底太刀打ちできないほど巨大な才能に。

.....

「おーし、集まったな。そんじや、早速セニアのデータをとろうかな」
黒い癖つ毛の髪をわしゃわしゃやりながら、デルタが言った。

中肉中背な体躯、少し伸びた髭、ジーンズにTシャツ1枚という冴えない出で立ちからは、とても天才的な頭脳を持つ科学者のオーラが見えない。しかし、彼こそが『白の革新者』ホワイト・インベーターと呼ばれた天才科学者なのだ。

白の世界の技術は、実のところ青の世界にそのまま持ってきてても正常に作動しないことが多い。それは単純に、稼働に必要な電圧が異なる、という、この世界の中でも普通に有りうる原因もある。しかし、最も大きな理由は、『白の世界で作成されたほとんどの動力機関エンジンが正常作動しなくなる』という問題だった。これは、白の世界で作られるエンジンが光の反射を利用しており、白の世界と他の世界では光の反射率が微妙に異なっているために起きる問題だった。白の世界で作られたものならほぼ例外なく動かなくなってしまうため、解決法が無い、と、さ、れ、て、き、た。こ、の、天、才、が、青の世界でエンジンを作り始めるまでは。

白の世界の光の反射率だからこそ動いたはずのエンジンを、青の世界で動くように改造できたのは、彼が天才であったためだろう。しかも、彼が作成したそれは、白の世界どころか黒や赤の世界に持って行ってもそのまま使用できるのだ。それをこの世界で売れば——仮に白の世界相手だったとしても——大儲け間違いなしなのだ。白の世界で何かしらのいざこざがあったのか、彼は企業相手の大量受注だとか、そういうものは一切受け付けていない。彼は基本的に、自分の趣味で作った兵装と、青蘭学園に在籍しているアンドロイドの装備に使用する、という目的以外でエンジンは作らないという信条を掲げていた。

開放的なりビングに集まったのは、デルタ、冬吾とセニアとカレン、そしてユーフィリア、テルル、ナナに加えてドクター・ミハイルの計8人。

「セニアさんの装備は、マスター・デルタが開発した新型なのですよね？」

脚の長い椅子にお行儀よく腰掛けている銀髪の美女・ユーフィリアは、中々にミステリアスな性格をしたアンドロイドだった。ボディは直視するのが恥ずかしくなるほどグラマラスで、顔立ちは絶世の美女。そのくせ、どこか抜けていたりユーモアがあったりと、親しみやすい性格をしているため、交友関係は広い。

「ママの装備……もしかしてアレかなあ」

そして、時々おかしなことを口走るのが彼女の欠点らしい欠点だった。具体的には、なぜかセニアのことを『ママ』と呼ぶ。それに、冬吾と初対面の時も、彼のことを『パパ』と呼んで泣きじやくつたりしていた。冬吾にしてみれば、まったくわけがわからない。結局、人前で『ママ』『パパ』と呼んだのは初対面の時だけで、それ以降はプライベートな時やちよつとした眩きの中でそう呼ぶようになった。

「ニア、お腹が空いたですの」

『もう！ テルルさんったら、この調子で食べ続けられたら、今晚のサラダを作るために、芝刈り機を動かさなきゃいけないなっちゃやうじゃないですか！』

そして、先程からずっと食事を取り続けてニアに怒られているのは、バイタルコードΣ52、プロダクトコードJMI-02、通称テレル。四肢に取り付けられたジェネレーターから発せられるエネルギーにより、強大な電力を発揮できる、パワフルなアンドロイドだ。その代償として、燃費が悪い。しかし、現在はジェネレーターを使っていない。なぜ使っていないはずのジェネレーターの代償を求めるのか——それは単純に、彼女が非常な大飯食らいだからだった。

冬吾は取り敢えず、持ってきた飴玉の袋をテレルに渡すと、テレルは「待つてました!」と言わんばかりの表情でそれを受け取り、一度に2粒の飴を頬張った。口になにか入れておけば、それなりに満足はするらしい。去年から対策に悩んだ冬吾の、当面の対処法だった。

と、ソファから立ち上がったセニアが、トコトコとテレルの元へ歩いて行った。そのまま、じーっとテレルを見上げる。

「欲しいのですの?」

テレルが尋ねると、こくり、と頷く。

「はい、あーんするのです」

包装を開けて飴玉をつまみ上げたテレル。セニアは律儀に小さな口をあーんと開けた。テレルは、隠し持っていた携帯電話で瞬時にそのセニアの写真を撮ると、「はいですの♪」とセニアの口に飴玉を入れた。

「……何してんの?」

「ほら、可愛いじゃないですか。要ります?」

何を馬鹿な、要るわけないだろうとテレルの手元を覗き込んだ冬吾。携帯電話の画面に表示されている、可愛らしく口を開いてこちらを見上げているセニアの画像を見て、セニアに聞こえないくらいの小声で、

「あとで送って」

「飴玉2袋ですの♪」

「わかったから」

いくら天才的な頭脳を持っていて、尚且つ人並み以上に大人びている冬吾であっても、彼は16歳、思春期真っ只中である。即ち、そう

いう欲求もそれなりにある。——というか、周りのアンドロイドが皆
ぴつちりとしたスーツを着ていることが多いため、否が応にも反応し
てしまうのだ。どこがとは言わないが。

当のセニアは、むぐむぐと口の中で飴玉を転がしながら、不思議そ
うにこちらを見ている。言い知れない申し訳なさが冬吾の中に芽生
えたが、これはあくまで可愛がる用、と自分を割り切ることにした。
「微笑ましいですねー。こういうの、良いですねえ」

そんなテルルとセニアのやり取りを見てほんわかしているのが、M
U—21型救護用アンドロイドのナナだ。すぐに治療したがるくせ
に流血を見るのが苦手（映像も含む）という、なんとも中途半端なア
ンドロイドである。その治療の腕にしても、はっきり言って発展途上
なため、現在は頑張って勉強中だ。

セニアを含め4人には、冬吾がブルーミングバトルに出る旨を既に
話してある。ナナは戦闘用アンドロイドではないので出ないが、ユー
フィリアとテルルは快く承諾した。

ちなみに、冬吾はΣフレーマーなので、Ω波のカレンとはリンクで
きない。そして、ブルーミングバトルに出場できるプログレスは、α
ドライバーとのリンク率が最低でも50%なければいけないので、フ
レームが異なるゆえにリンクできないカレンは出場させることができ
ないのだ。それを話したとき、カレンのなんと悔しがったことか。
「ほら、おいでセニア。冬吾も来い。ニア、テストマシンを準備して
おけ」

『了解です』
イエス・サー

デルタは冬吾とセニアを呼び寄せ、地下へと続くエレベーターに
誘った。

「おい、ミハイル。2階のラボ使っていいから残りの子の調整よろし
く」

「分かったよ。さ、行くぞ」

はーい、というユーフィリア、テルル、ナナの声。しかしカレンは、
「セニアを男2人に任せるのは不安であります」

「まあ確かに……じゃ、カレンも付いて来ていいよ」

カレンも乗り込んだエレベーターの扉が閉まり、地下へ向かっていく。

「さ、パパッと終わらせるぞー。見たい映画があるんだよね。取り敢えず、シエイクをとるかな」

エレベーターの扉が開くと、そこは雑多な雰囲気の漂う、いかにも機械工学の研究所といった部屋だった。そこら中にケープルやネジなどが転がっており、机の上には作りかけの機械類がごちゃごちゃと置かれている。ここは、冬吾が実習作業をする時にも使用しているラボだ。

その奥に、こちらは白く清潔そうなドアがあった。そこを開くと、中はこれまたいかにも近未来的な真っ白い部屋。こちらはアンドロイドのデータを取るためのマシンスルームになる。

「おし、セニア。そこの上に立ってな。冬吾はこれ見てて。カレンはこっち手伝って。ニア、準備できてるな？」

『起動可能状態です』

冬吾は、手渡されたデータパッドを見る。これは、マシン起動後、テストマシンの上に乗ったアンドロイドをカメラに写すと、その状態がリアルタイムで表示されるものだ。去年、この機械の使い方は一通り教わっていたので、その通りに操作し、必要な情報のみを画面に表示させるように設定する。

デルタは、固定された機械の操作をしながらセニアに呼びかけた。

「セニア、プロテクトを一旦解いてくれ」

「了解しました、マスター・デルタ」

「よし。そんじゃニア、起動しろ」

『了解しました』

セニアの乗った台座が透明な壁に包まれる。それと同時に、データパッドの画面にセニアの状態が表示された。

「冬吾、見えてるか？」

「大丈夫です、マスター」

冬吾はデータパッドのカメラをセニアに向けたまま、彼女の周りを1周する。こうすることで、パノラマ写真を撮る時のように、360

度の視界から見たセニアの情報が、データパッドに記録されていく。セニア自身は、目の前を横切る冬吾を不思議そうに眺めていた。そして、カレンがこちらを剣呑な目で見ている。

—— 僕が悪いんじゃない。誇大解釈をするカレンが悪いんだ。そして、僕は別にセニアをそんな視線で見えてないぞ。

「これで十分ですかね？」

「上々だろ。貸しな」

冬吾はデルタにデータパッドを返す。デルタがそれを、彼が操作していた機械に差し込むと、データパッドが取得していた情報を画面に表示した。

「シエイプ、シエイプ、と……ニア、必要な情報は？」

『取得完了致しました。バイタルコードはΩ^{オメガ}4^{フォー}6^{シックス}で登録。汎用スロットに合わせ、エクシード『^{ブルム}四六式乙型^ム亜空間^ス連結^マ機構』に格納可能な形状を確認。サーの設計図から想定される体積・質量で計算した場合、アームとレッグを分割するならレベル2領域に、同時にならレベル3領域に格納可能です。また、背面装甲はレベル3領域に格納可能となります』

「全部まとめたらどうなる」

『その場合はレベル4領域になります。また、セニアさんの頭部装甲にアクセスし、脳波の形状を記録。身体の形状と合わせて、最適な状態で装甲を展開できるように設計図の調整を提案します。よろしいですか？』

「それは後でやろう。今は取り敢えず、必要な情報を記録しておく。撮影データからモデルは？」

『作成完了しています。注文通り、レントゲン情報から骨格を再現しがあります。どうぞ』

ニアがそう言うなり、機械の手前にセニアのホログラムが映し出された。そのホログラムはニアの言うとおり骨格が再現されているので、無理のない範囲で様々なポーズングをさせられる。毎度のことだが、冬吾はこの技術につくづく感心させられていた。

「ホント、いつ見ても凄いですよね……」

「そうか？ このくらい、白の世界が普通だぞ？ ロボットなら、プロテクト薄けりやプログラムどころか数分でコピーできるし」

「それ、なんか問題になりそうじゃないですか？」

「青の世界の感性だと、そう思うのも無理ないかもな。あっちじゃ、ロボットとかの類は鹵獲されたらおしまいだし。その点、アイムは結構プロテクト厚めにしてるからな。一応、公開されてるクラッカーは全部防げるし、一応自前のハッキングソフトにも対抗できる」

「……本当に、どこまでも常識の通じない方でございますね」

セニアのプログラムをどことなく……いや、かなり羨ましそうに眺めていたカレンが嘆息した。

アイム、というのは、彼が自ら作成した超高性能パワードスーツの名前だ。構造は複雑を極めるが、冬吾はその腕部分の仕組みを教わり、実習としてそれを作成している最中である。

そして、至極当然のことのように言っただけのけたデルタだが、白の世界のハッキングツールは、仮に青の世界で使用した場合、ほとんどのパスワードを割ったり、暗号化データを復元してしまえる。青の世界の情報セキュリティなど無いに等しい状態になってしまふのだ。それをいかにも簡単そうに防げてしまふのは、何度も繰り返すように彼が稀代の天才であるからである。

そんなデルタが、思わずぎよつとするような事を言った。

「よし、予定通りなら5月上旬には完成できそうだな」

「……え？」

冬吾は思わず声を上げた。怪訝そうな顔を向けるデルタ。

「うん。5月上旬。それがどうかしたか？」

「いや、あの……」

冬吾は返答に困った挙句、呟いた。

「なかなか、思うようにはいかないな」

それから「実はですね……」デルタに話を切り出した。

……

琉花のエクシードは、『液体を操る』というものだった。

先程、コップの中のお茶を球状にして浮かせていたが、エクシード

を開放できればもつと大質量の液体を操ることも可能なのだとか。これは『液体の流動操作』である。腰に下げたりボルバー型水鉄砲で水を打ち出して、高速で相手に当てるのが得意だという。

また、『液体の状態操作』ということも可能らしい。曰く、液体であるなら、それを凍らせて個体にしたり、蒸発させて気体にすることもできる。ただし、あまりうまく扱えていないらしい。本人もお茶を凍らせようとしていたが、残念ながら失敗していた。

さらに、琉花本人が完全に使いこなせないと言っており、本人も意図的に使わないようにしているのが『液体の性質操作』だ。こちらは液体の性質を変化させられるという。水をワインにできたり、やりようによっては毒にもできる。そんな反則級の力は、操作するのに非常なポテンシャルを要求するという。

——そんな琉花とのリンク率は、86.5%。かなり高い。

「いやあ、入学早々こんなに良いリンク率のαドライバーと出会えるとは思ってなかったよ。ありがとね、ハル先輩！」

琉花は春樹のことを『ハル先輩』と呼ぶようになった。なにかとせっかちな性格で、変なイベントとか開催するのが好きなのでもしかしたら巻き込むかもと言われた。正直に言って、勘弁して欲しい。

忍のエクシードは、『炎を操る』というものだった。

マッチの火から火災現場まで。琉花のものと同じように、多くの炎を操るには相応のエクシードを開放しなければならぬが、それでも有用な能力である。

彼女の何が強いかというと——彼女はどうかやら忍者の一族らしく、エクシードが無くとも『シノビ・アーツ（忍が言うには）』さえあれば、そこらの戦士にも負けない戦闘力があるのだ。そして、そのシノビ・アーツの一環として『火遁の術』というものを習得しているらしく、それによって彼女は自力で炎を生み出し、それを操れるのという。実際、「実演するぞザル」と言って、口からガスバーナーくらいの大きさの炎を一瞬だけ吹いて見せた。

——そんな忍とのリンク率は、81.3%。琉花より低いとは言え、ブルーミングバトルに出るには十分なレベルである。

「このリンク率なら……拙者の新たなる主は、春樹殿に決まったでゴザル。よろしくお願いするでゴザルよ。拙者、春樹殿の忠実なる隠密として、主に益をもたらすべく——」

忍は春樹のことを『春樹殿』と呼ぶようになった。ついでに「部下扱いしてくれ」というので、断つてはみたものの押し切られて、そういうことになった。正直に言つて、勘弁して欲しい。

兔莉子のエクシードは、『動物と意思疎通ができる』というものだった。

動物、この世界で言うところの哺乳類と鳥類とは殆どの場合お話できるのだとか。海岸を飛ぶカモメや、街中にいる猫だったり犬だったり。水族館に行けばイルカやシャチやペンギンとだつて話せる。これらと話せるのは、生物の中でもかなり高度な知能を持っているためであり、逆にあまり知能指数の高くない爬虫類・両生類・魚類の多くとは話せず、単純な感情のやり取りをするか、または読み取るだけだという。

これらの特徴からして、恐らく彼女は、黒の世界に棲む竜種や、赤の世界に棲む霊獣種とも意思を疎通させることができるはずだ。——と春樹が言ったところ、どうやら本当にできるようで、青蘭諸島に少数ながら棲んでいる霊獣種のひとつであるグリフォンと、春休み中に話せたらしい。また、植物園を囲っている花畑の妖精達とは、はつきりとした会話こそできないが「楽しい」「嬉しい」といった大雑把な意思を読み取ることができ、逆に彼女もそれを伝えられたという。戦闘向きではないが、それはそれで使いようのあるエクシードだ。

——そんな兔莉子とのリンク率は、92.9%だった。ブルーミングバトルに出れないのが惜しすぎるリンク率だ。

「あ、あの……こんなにリンク率が高いのに、バトルに出れなくてごめんなさい！ で、でも、春樹さんのために……私は、私にしかできないこと、したいですっ」

兔莉子は春樹のことを『春樹さん』と呼ぶようになった。やや積極性に欠ける子だが、なんとなく一段階リラックスしてくれたような雰囲気がある。その傻げだが嬉しそうな笑顔を浮かべる彼女は、無碍むげに

しようものなら、とてつもない罪悪感に苛まれそうな予感がした。ちよつとだけ、勘弁して欲しい。

「さあ、じゃ早速コロシウムに行つて、リンクを試してみよう！」
と美海が言う。しかしながらここで残念なお知らせが。

流れに流されてコロシアムの使用許可を取りに職員室に行つてきた春樹が、

「今日はコロシウム使えないんだつてさ。監督してくれる先生がいなくて。今日は入学式だし、仕方ないよ」

「むう。なかなか、思うようにはいかないものでゴザルな」

忍が腕組みをして嘆息した。今日は色々ありすぎて、少し感情を整理したい気分である春樹だ。

「でも、入学早々チームに入れちゃうとは思つてなかったなあ。せつちかな私が言うのも何だけどき、別に焦んなくてもいいんじゃない？

試合は4月末なんしょ？」

「そうですね、美海ちゃん。あんまり急いだら春樹さんが困っちゃいます」

琉花と兎莉子のフォローも入り、「それもそっかー」と美海が聞き分けよく引き下がったので、とりあえず今日は解散という流れになった。

——さて、こいつらをどうやって信頼させたものか。

ここまで来たら、流石に引き下がるわけにはいかなくなつてしまった。ある程度、と割り切つて考える。先程、好きな事を少し聞いてみたのだが……

美海好き、変な事をするのが好き、新しい忍術を考えるのが好き、動物と喋るのが好き——

美海と兎莉子は、商業地区にある猫カフェにでも連れて行けばいいだろう。琉花も……本人がなにかやりたいと言いだしたら付き合つてやればいい。

——なんだよ、忍術を考えるのが好きつて……！

まだ入学式が終わつただけだというのに、いきなり問題がてんこ盛りになつて頭を抱える春樹であった。

……

青チーム！（仮）（5）

——4/6（Tue）——

春樹《明日の放課後、もしよければ、コロシウムでエクシードを試したあと、猫カフェでも行かない？》

美海《猫カフェ！ 行く行く！》

忍《拙者も行くでゴザル。猫好きだし》

琉花《シノって猫好きなんだ？ あ、私も行きます》

忍《いや、普通に可愛いでゴザろう？》

美海《だよー！ 猫可愛いよねー！》

春樹《とりあえず、美海と忍と琉花は行く……と。兔莉子は？》

琉花《携帯見てないかもしんない》

琉花《ちよつと聞いてくる》

——4/7（Wed）——

琉花《行くって》

美海《やったー！ みんなで猫カフェ！》

忍《兔莉子殿は何してたでゴザルか？》

琉花《なんか、文字の打ち方が分かんなかったって》

琉花《あと眠そうだった》

美海《明日教えてあげよつと》

春樹《全員行くってことね。了解しました。じゃあおやすみ》

美海《おやすみなさーい！ 私も沙織ちゃんももう寝るーっていうから寝ます》

琉花《おやすみ》

忍《おやすみでゴザル》

琉花《でも忍って携帯とか使えたんだ》

忍《バカにしてるでゴザルか？》

琉花《キャラ的に》

忍《このご時世、忍びも電子機器を使うでゴザルよ》

忍《しかし、拙者も眠いでゴザル》

忍《早寝早起きは忍びとして必須でゴザル》

忍 《琉花殿？ 起きてるでゴザルか？》
忍 《そつちが先に寝落ちしたでゴザルな。拙者も寝るでゴザル》
兔莉子 《いきま》

ブルーミングバトル・ルール プロトタイプ

《ブルーミングバトル基本ルール》

1：フィールド関連

- ・コロシム内は「リンク・エクシード抑圧結界」環境下にある。
- ・バトルフィールド外でのリンク強度及びエクシード強度は最低ライン（レベル0状態）まで抑圧され、この状態でのリンクのことを「ファーストリンク」と呼ぶ。
- ・バトルフィールド外にいるプログレスのエクシード使用は、この結界によって禁止される。
- ・バトル開始10分前までに、αドライバーはコロシム内に入り、出場させる自分のプログレス全員とファーストリンクを結ぶ。これにより、プログレスはブルーミングバトル出場権を得る。ただし、リンク率が50%未満のプログレスは出場できない。
- ・バトル開始と同時に、バトルフィールドとエクストラプログレスゾーン、αドライバーゾーンが展開される。このゾーンはαフィールドと同じ役割を担う（ダメージの肩代わり及びリンクの実行）。

『バトルフィールド関連』

・バトルフィールド内には、各αドライバーの所有するプログレスが、それぞれ4人まで入ることができる。ただし、バトルフィールド内に存在するプログレスが0人になった場合、そのαドライバーはバトルに敗北する。

・プログレスは、自らのタイミングでバトルフィールド外に出ることができ、ただし、その際にはハーフラインよりも下側からしか退場できない。

・プログレスは、自らのタイミングでバトルフィールド内に入ることができる。ただし、その際にはエンドラインからしか入場できない。

・バトルフィールド内から外に出たプログレスは、以降30秒間、フィールド内への入場が許可されない。

・バトルフィールドから出たプログレスはレベルの下降が始まり、

30秒で1下がる。

『エクストラプログレスゾーン関連』

・エクストラプログレスゾーンは、現在バトルフィールドに入っていないプログレスが1人だけ入ることができる。ただし、このゾーン及びバトルフィールドから出て30秒以内のプログレスの入場は許可されない。

・このゾーンに入ったプログレスは、以降30秒間、このゾーンからの退場が許可されない。

『αドライバーゾーン』

・このゾーンへの、あらゆるプログレスの入場は許可されない。また、このゾーンの中へは一切のエクシードが侵入できない。

・このゾーンからαドライバーが退場したとき、そのαドライバーはブルーミングバトルに敗北する。

・このゾーンの中で、αドライバーが脚2本で立っていないと判断されたとき、そのαドライバーはブルーミングバトルに敗北する。

・また、αドライバーが意識を失う、または出場しているプログレス全員が意識を失うなどの理由で、プログレス全員とのリンクが切れた場合、そのαドライバーはブルーミングバトルに敗北する。

2：リンク関連

『セカンドリンク関連』

・バトルフィールド内にいるプログレスは、リンク強度に応じて一定時間ごとにレベルが上昇する。

・レベル4未満のプログレスは、αドライバーに対して「セカンドリンク」を要求することができる。

・セカンドリンクを要求されたαドライバーは、要求に応答することができない（ただし、同時にセカンドリンクを結べるのは2人まで）。

・セカンドリンク状態のプログレスは、レベルの上昇速度が通常の2倍になる。これは2人同時にセカンドリンクを結んでいる場合であり、1人のみとセカンドリンクを結んでいる場合、そのプログレスのレベル上昇速度は通常の3倍になる。

『αリンク関連』

- ・プログレスはαドライバーに対して「αリンク」を要求できる。
- ・αリンクを要求されたαドライバーは、要求に応答することができる（ただし、同時にαリンクを結べるのは1人まで）。そうした場合、現在結ばれているセカンドリンクが一旦全て解除される。

- ・αリンク成否判定待ちプログレスのレベル上昇は止まる。
- ・αリンクの成否判定には5秒を要する。この間、αドライバーは、あらゆるリンクに対して応答できない。

- ・αリンクに成功した場合、そのレベルに応じた強度のエクシードが解放される。ただし、

- （レベル4未満）再びそのプログレスがセカンドリンク状態になった場合、またはレベル4に達してから10秒が経過した場合、

- （レベル4）αリンク成功から20秒が経過した場合、

- （共通）別のプログレスのαリンク要求にαドライバーが応答した場合、またはαドライバーがαリンク解除命令を行った場合、

- 再びエクシードは抑圧される。

『サードリンク・レベル5関連』

- ・レベル4のプログレスは、αリンク以外に「サードリンク」を要求することができる。

- ・サードリンクを要求されたαドライバーは、要求に応答することができる（ただし、同時にサードリンクを結べるのは1人まで）。そうした場合、現在結ばれているセカンドリンクが一旦全て解除される。

- ・サードリンクは、リンク強度にかかわらず30秒間を要する（成率は必ず100%）。この間、αドライバーは、あらゆるリンクに対して応答できない。

- ・サードリンクに成功すると、レベルが4から5に上昇し、レベル5のエクシードが解放される。

- ・レベル5のプログレスはαリンクを要求できず、レベル上昇から20秒後、無条件にレベルが0に戻る。この間、αドライバーは、別のプログレスの要求するリンクに応答することができる。

- ・レベル5のプログレスが登場してから60秒間、そのプログレス

の所有者のチームに属するプロGRESはバトルフィールドへの入場が許可されない。

・以上3つのリンクは、対象プロGRESがフィールド外に出た場合、自動的に切断される。

『エクストラプロGRESゾーン関連』

・エクストラプロGRESゾーンにいるプロGRESは、バトルフィールド内にいる時と同じようにレベルが上昇するが、レベル上昇速度は通常の半分である。セカンドリンクを要求することもできる。

『ダメージ関連』

・バトルフィールド内にいるプロGRESは痛覚を遮断され、彼女らを受けるすべての痛覚はαドライバーが引き受ける。ただし、衝撃そのものはプロGRESが受ける。

・痛覚は「痛覚変換器」ダメージ・コンデンサーを通してαドライバーに伝わる。痛覚変換器は、αドライバーが出場させているプロGRESの人数に応じて痛覚を軽減させる（人数が少ないほど軽減率は大きい。逆に、人数が多すぎると増幅される）。

《ダメージ軽減率表》

人数 痛覚軽減率（プロGRESが受ける痛覚のうち、この倍率の痛覚のみがαドライバーに逆流する）

1人	↓	10%
2人	↓	30%
3人	↓	40%
4人	↓	60%
5人	↓	70%
6人	↓	80%
7人	↓	90%
8人	↓	100%

以降、1人増えるごとに+10%

《レベル上昇速度とリンク率の関連》

リンク率 ↓ レベルが1上昇するまでに要する時間

1					
0	9	8	7	6	5
0	0	0	0	0	0
%	%	%	%	%	%
↓	↓	↓	↓	↓	↓
1	2	2	3	4	5
5	0	5	0	0	0
秒	秒	秒	秒	秒	秒

第7話「楽しい事イチバン！つて信条で生きてますんで」

2年生に上がった元1年生達は、普通の学校よりも生徒の数が少ないため、クラス替えの発表に一喜一憂することもなく、決められた新教室へと集まった。

「なんだよ冬吾、そのシケたツラは。昨日なんかあったのか？」

「……まあ、少しね。そっちはどうだったの？」

「二応、人数は集まった感じかな。今日エクシードを試してみるつもり」

「そう、よかったじゃない」

自分の不幸をとりあえず置いておいて笑顔になれる冬吾はやっばすげえな、と春樹は思う。

クラスの様子は以前のまま……ではなく、少し違っている。去年度はどことなく寂しげだったプログラスの表情が、目に見えて明るくなっていたり。

「アウロラ、やけに嬉しそうだな」

「あら、春樹くんに冬吾くん。お久しぶりね」

声を掛けられた少女の名前はアウロラ。赤の世界出身のお嬢様で、穏やかで包容力のある性格は、同性からも、アウロラは女神か天使！

と評されていた。制服を着ていても分かるスタイルの良さは直視するのを躊躇うレベルで、そういう理由もあってか、この学年の『二大頼れるお姉さまプログラス』の内の1人として知られていた。

「やっぱり、分かっちゃ Schau かしら？ そうなの。春休み中にいい事があってね」

「どうしたの？」

自己犠牲の精神が強いアウロラは、どうしても自分より友人の方を優先してしまうため、滅多に自分のことを喋らない。そのアウロラが喜んでいる理由は、質問をした冬吾やとなりで聞いている春樹でなくとも気になるところだ。

「あのね、私にぴったりのαドライバーが見つかったの」

蕩けるような甘い声でそう言ったアウロラは、見ているこっちまで嬉しくなりそうなほど幸せいっぱいな表情を浮かべた。

「え、誰？　もしかして俊太？」

「あら、シユンくんを知ってるの？　ええ、そう。彼と出会って……ひと目で理解したわ」

アウロラは胸に手を当てて目を閉じ、噛み締めるように言った。

アウロラは、その万人に好かれる性格と裏腹に、極端にαドライバーとのリンク率が低かった。Ωフレームとの話だったが、去年測ってみたところ、同じΩフレーマーの春樹とすらリンク率が30%に達しなかったのだ。当時の3年生のαドライバーとも試してみたが、こちらも同じような結果だったという。

周りで今の話を聞いていたプログレス達は「えー、アウロラαドライバー見つかったんだ！」「おめでとー！」「いいなあ。ねえアウロラ、私もその子と試してみたい？」と好意的な印象。

そして、とびきりの反応を示したのが、

「アウロラーっ！　よかったじゃないですか！」

「ユファイ！　おかげさまで、本当にありがとう」

アウロラの背後から彼女に抱きついたのは、白の世界出身のアンドロイド・ユファイリア。通称『ユファイ』だ。普段は真面目でミスティアス、なんとなく掴めない性格だが、なんだかんだ言って楽しいことが大好きだったりユーモアがあったり時々ドジツたりと、親しみやすい少女である。彼女もまた抜群のプロポーションの持ち主で、『二大頼れるお姉さまプログレス』のもう片翼が彼女だった。また、冬吾のチームに所属している1名でもある。……元々は『お姉さまプログレス』は、もうひとりいたのだが。

「結局、自分で見つけちゃったわ。ごめんなさい、ユファイの努力を無駄にしちゃって……」

「そんなことありません！　アウロラにαドライバーが見つかって、私も本当に嬉しいです！」

申し訳なさそうに謝るアウロラに対し、ユファイリアはちよつと本

気で怒っているようだ。今更そんなことに気を遣うな、ということなのだろう。

ユーフィリアもまた多くのプログラムの困り事を助けており、アウロラと共によく頼られているが、去年から殊更アウロラを目にかけており、彼女のαドライバーを探すために脳波サンプルを持って島中どころか諸島中のαドライバーの元を巡っていたりした。そのこともあって、アウロラは誰よりもユーフィリアを信頼し、ユーフィリアが困っていたとき、何よりも優先して事に当たっていた。それでも、2人とも他のプログラムの悩み相談なども蔑ろないがしにしていなかったのだから、彼女らの器量の良さが顕れているといってもいいだろう。

親友、なのだ。2人は。

しかし……目の前で巨乳美少女同士が抱き合っている光景というのは、色々と来るものがあつた。胸の奥とか、その他の場所に。

「しかし、俊太ねえ……どうなの、関係は」

若干奥手などところがあるその少年のことを思い浮かべながら春樹が尋ねると、案の定アウロラは表情を曇らせた。

「それが……イマイチ乗ってくれなくて、困ってるの。一緒に帰ろうって言っても、恥ずかしがっちゃって」

「はー……うちも他人ひとのこと言えた節じゃねえけど、どこも結構苦労してんだな……」

「今日もめげずにトライしてみるつもりよ。ねえ、ユフィ。なにかいい案はないかしら？ 男の子を誘うのって初めてだから……」

「そう、ですね……寧ろ、向こうに合わせてみるのはどうでしょうか？」

「そうね！ 彼、剣道部に入るって言っていたから、私も付き添いで行ってみることにするわ」

無邪気なアウロラとユーフィリアの様子に顔を見合わせて苦笑した春樹と冬吾。その笑みには、どちらにも隠しきれない疲れが見えた。

昨日カフェテリアで別れてからの時間がやけに長く感じていたのは、お互い様だったようだ。

.....

「何、お前ら、ブルーミングバトルに出るの？」

セニアの測定が終わった後、冬吾はデルタに事情を話すと、彼は目を丸くして言った。

「はい。それで、セニアの装備が間に合わないのかと……」

「ははあ……なるほどね。そうか……」

セニア達も上階に上がり、デルタの研究室に全員が揃っていた。

完全に初耳だったらしく、デルタは腕組みして考え込む。そこにミハイルが続けた。

「デルタ。設計図はできてるんだろう？ だったら私も協力する。どうにかして間に合わせてやりたい」

「いや、それはごもつともだ。だけど、今回ばかりは無理だ」

顔を上げたデルタは、きっぱりとそう言い切った。しかし、ミハイルは諦めない。

「おいおい、白の革新者ホワイト・インベーターが言ってくれるじゃないか。その装備はお前に『禁句』を言わせるほど難解な相手なのか？」

信頼しているが故に、嫌味のように言ったミハイルだが、対するデルタは至って真剣だ。

「知識と作業ならそうだな。無理ってことはないだろ。だけど、今回の相手は材料と時間だ。流石の俺でも、誤魔化せない」

「何……？」

眉をひそめるミハイル。デルタはニアに指示して、背後のモニターにセニアの装備の設計図を映し出させた。

途端に、その場にいるデルタとセニア以外の全員が怪訝そうな表情になった。冬吾とユーフィリア、テルル、ナナは、なんだかんだとデルタの手助けを多くしており、彼が描いた装備の設計図を見ることも多かった。腕部装甲と表示されているからには、いかにも腕っぽい形の装備なのだろうと全員が思っていた。特に冬吾など、現在それを作成している最中である。

しかし、目の前に表示されたそれは、手の部分を除くと、数枚の金属板だけだった。記憶のどこを探しても、対応する知識が出てこな

い。

セニアの武装は、今までの装備とは全く異なるものだったのだ。

「セニアの装備は、俺が今まで作ってきたものとは全く異なる概念のもとに設計図を描いた。ニア、サンプルを持って来い」

『了解しました』

デルタがニアに呼びかけると、背後で箒を持って部屋の掃除をしていたキヤタピラー付きのロボットアームがキュルキュルと音を立てながら室外に出て行った。

カタン、と、放り出された箒が音を立てた。

「この装備はな、非常に特殊な金属を使って作られている。これは格納状態で、展開すると、こうなる」

デルタがモニターを操作すると、表示されていた金属板はそれぞれがなめらかに曲がり、手の部分と繋がり——腕の形を成した。

流星にミハイルが声を上げた。

「なんだこれは。常温で自在に曲がる金属だと？　こんなものが実際に出来るとでも？」

「ああ、出来る。ほれ」

キヤタピラーのキュルキュル音が近づいてきたかと思うと、入口からキヤタピラー付きロボットアームが帰ってきた。そのアームは、薄い金属板を握っている。

「これが、その金属だ。見てろ」

デルタはポケットから何かの装置を取り出し、同時に金属板を机の上に置いた。全員が息を飲んで見守る中、デルタは装置を金属板に近づけ、ボタンを押した。ピリツ、という小さな音がして——金属板はくるりと曲がり、輪っかの形になった。

「これは……」

ミハイルが絶句する中、デルタは口を開いた。

「黒の世界と赤の世界で採れた特殊な、魔力を含む鉱石の合金だ。電気信号を与えると、プログラムされた通りの形に変形するようになってる。これを使えば、大きさを減らせる。で、^{ブルム・エクス・マキナ}四六式乙型亜空間連結機構は、^{クロス・エクス・マキナ}四六式甲型亜空間連結機構と同じで、

格納できる装備の大きさに制限があるんだろ？ 本来ならこの腕1本でレベル2領域に入れなきやいけないけど、この形なら2本を纏めてレベル2に入れられる」

「なるほどな……じゃあ、お前が「相手」と言ったのは……」

「そうだ。この金属を作るために必要な素材となる金属の納品が4週間後なんだよ。産出は既に終わっているようなんだが……最近発見された金属ってことで、錬成にまだまだ時間がかかるんだってよ。それこそ、この質量を錬成するのに3週間とかかかっているんだぜ。まあ、はつきり言って絶対に間に合わないわな」

デルタが手元の装置を操作して、ピリツという音がするたびに、金属板はねじれたり、また丸まったり、と繰り返し形を変え、最後には元の板状に戻った。

それを見ていた、今まで沈黙していたセニアが口を開く。

「つまり、セニアの装備が間に合わないために、セニアはマスターの役に立てない、ということではないのでしょうか」

その声は、鈴が鳴る、というよりかは、微かに鈴が震える、と表現したほうがいいような声音だった。

——セニア、恐がつてるのか？

しかし、デルタはそれに気づいてかそうでないのか、セニアの言葉を即断する。

「いや、旧型装備を使えば十分に戦えるだろう。ただし、さっき言ったように旧型装備は四六式乙型^{ブルム・エックス}亜空間連結^{マキナ}機構の仕様上、格納効率は悪くなるが……」

「構いません」

セニアの口調は、強い。それを本人は、果たして自覚しているのだろうか。

「ならそうしよう。セニアのデータは既に取ったから、それに合わせて一式用意する。明日以降にもう1回おいで」

「了解しました、マスター・デルタ」

「あと、その時にもう1回測定させてな。お前さつき、プロテクト完全に解いてなかったでしょ。エクシードのレベル5領域が見えず終い

だったから、そこをな」

デルタがいちやもんをつけるように言うと、セニアは平然と答えた。

「解ける部分は完全に解きました。あの部分のプロテクト及びそれ以降の領域へのアクセス権限は、セニアにはありません」

「なんだと？　じゃあミハイルか？」

「いや、初耳だぞ私は。どういうことだ」

「つまりだな……」

ミハイルと談義モードに入るデルタ。冬吾は驚きっぱなしで、終始言葉を発せなかった。

——この人は、まだまだ途上なんだ……。

あまりの巨大な才に圧倒されている冬吾の横で、ユーフィリアは、心配そうな目でデルタを見ていた。

彼女の手が無意識に掴んでいた冬吾の制服の裾を、ぎゅつと握り締めた。

ふと、耳にデルタとミハイルのやり取りが飛び込んできた。

「お前なら、材料と時間もどうにか出来そうだけだな……」

「自分の手の届かない場所の事まで変えようとするのは、傲慢極まるってもんだろ」

「つまり、どういうことだ」

「僕は拳銃じゃないってことさ」

……………

放課後。昼休みのうちにコロシアムの使用許可を得た春樹たちは、そこに集結していた。

「いい？　今日はちよつとリンクとエクシードを試すだけだからね」

「分かってます」

一応釘を刺しておいたが、美海は上機嫌だ。他の3人——琉花・忍・兎莉子も、心なしか気合が入っているように見える。

「広いなあ。この白い枠線の中がバトルフィールド？」

「そうだよ。めいっぱい使っていいからね」

「でも、サッカーコート並みの大きさでゴザルな。この中で4対4は、少し余るのでは？」

「この世界の感覚だとそうだけど、アンドロイドとかの機動力はすごいからね。去年なんか、勢い余ってフィールドから飛びてちゃった子なんかいたし」

コロシアムは、普段も別の用途に使えるよう、陸上競技場のような形をしていた。サッカーコートの周りにトラックを敷いたような形だ。客席も、そこらのスタジアムに負けなくらいの収容人数を誇る。ブルーミングバトルが行われるときは、ここが満席になるほどだ。

そもそもブルーミングバトルとは――バトルフィールド内のプログレス最大4人が、同じく相手のプログレス最大4人と闘って勝ち負けを競うという、多人数対多人数のプロレスのようなものだ。しかし、通常のそれと決定的に異なる点、それが、プログレスの受ける痛覚をフィールド外で指揮するαドライバーがすべて引き受け、そのαドライバーが倒れば負け、というところだ。ややもすると、αドライバーは非常に損な役回りになる。実際に戦闘に参加しないにも関わらず、痛みだけ引き受けて、倒ればそこでゲームが終わってしまうのだから。

春樹の手元には、実際のブルーミングバトルで使用するデータパッドが握られている。先程、教師から借りてきたものだ。これを使うのは初めてだが、基本的な操作は一応教わっておいた。その際、絶対に壊すなど念押しされた。

バトルに参加しているプログレスの情報は、全てここに表示される。相手側のプログレスの情報も、見れる部分が限定されるとは言え重要な情報だ。

「まずは……ファーストリンクからだな。よし、みんな、手を出して」「わ、私も？」

「バトルには出ないけど、一応ね？」

戸惑う兎莉子に優しく声を掛ける。

去年、何回かやったように。差し出されたみんなの手に、自分の手

を重ねる。一瞬の躊躇の末、目を閉じて集中。

「みんな……俺に合わせて」

春樹がそう言うのと、みんなは無言で頷き、春樹と同じように目を閉じた。

まだ、よくわからない。でも脳波を——心を重ね合わせることが、リンクすることだ。

リンク率は高いのに、あの4人よりうっすらとしか繋がらない。それでも、少しずつわかってくる。

琉花を感じる。興奮しているのか、高ぶる胸の鼓動が、伝わってくる。

忍を感じる。肝が据わっているのか、朝凧のような心の揺れが、伝わってくる。

兎莉子を感じる。自分と同じように躊躇っているのか、感情の震えが、伝わってくる。

美海を感じる。自信の裏に小さな恐れを隠しているのか、焼け付くような魂の聲が、伝わってくる。

みんなは、一体自分をどういうふうに感じているんだろう。

そうして、春樹と4人のプログレスは繋がった。

目を開けると、全員が全員、何やら顔を赤らめている。そういえばあの4人と最初にリンクした時もそうだったな、と思い出した。曰く、内側から昇ってくるエクシードの疼きが、否応にも興奮させるのだという。

「——ッはあ——！ え？ もうオツケー？」

琉花が、どうやらずっと止めていたらしい息を一気に吐き出した。

「うん、大丈夫。ほら」

春樹は左手に持っていたデータパッドを見せる。そこには、今リンクした4人の情報が載っていた。

「わあ、すごい！ テレビで見たことあるよ、これ！」

「これでリンクに出来る、でゴザったか？」

「そう。じゃ、これつけてバトルフィールドの中に入って」

春樹は4人に、耳に取り付けるインカムを渡す。そして自身は、バ

トルフィールドの外にある半径1メートル程度の円でできた『αドライバゾーン』、いかなるエクシードの干渉も防ぐ、αドライバ専用のゾーンに入った。このゾーンの中で2本足で立っていないと判定されれば、ゲームに敗北する。

全員がサッカーコート大のバトルフィールドに入ったのを確認してから、インカムでフィールド外で状況を見ている教師にお願いをし、実際のブルージョーニングバトルと同じようにフィールドを形成してもらった。同時に、春樹の足元から細長い棒が、腰の高さまでせり上がってきた。そこにデータパッドをセットすることが、準備完了を意味する。

プロGRESSがαドライバとリンクすると、自然とエクシードのレベルが——一部の例外プロGRESSを除き——最大4まで上がったいく。このレベルは特殊な装置で測ることができる。実際のレベルは時間と共に上がっていき、それに対応するようにエクシードも緩やかに開放されていくものだが、ブルージョーニングバトルはあくまでゲームなので、レベルの上昇とエクシードの開放がきつちりと管理されている。現在、データパッド上には4人を表すアイコンが表示されており、それぞれに『レベル0』という表記、そしてその周りにゲージがある。このゲージは時間経過で伸びていき、満タンになるとレベルが1上昇するというものだった。いわゆる、アナログとデジタルということだ。

「じゃあ、みんな。セカンドリンクを要求して。『レベル上げたい』とか思えばいいから」

了解を表す言葉が4人分帰ってくる。それに遅れて、4人のアイコンの下に《2nd Link》というボタンアイコンが出てきた。データパッドに触るのは初めてなので、この表示を生で見るとも当然初めてである。成り行き任せとはいえ、こちらも気が高ぶってきた。

たった今形成された、バトルフィールドを囲う結界には、エクシードが外部に漏れないようにする効果があるが、それ以外にも音声を遮断する効果がある。なので、αドライバとプロGRESSはインカムを使つてやり取りをする。

「じゃあ、美海と琉花から行こうか。セカンドリンクするよ」

『わかったよー!』

『よっしゃ、頼むぜー!』

春樹は4人分のセカンドリンク応答用のボタンのうち、美海と琉花のアイコンの下にあるものを押した。

ブルーミングバトルにおけるリンクには数種類あり、1つ目が『ファーストリンク』。バトルに参加する自分のプログレス全員と結びリンクだ。このリンクは機械によって固定され、バトルが終わるか意識を失わないと切れない。『バトルの参加』を意味するリンクだ。

そして2つ目が『セカンドリンク』。基本的にレベルの上昇速度はリンク率に依存する。このリンクはバトルフィールド内にいるプログレス最大2人までと結ぶことができ、レベルの上昇速度を2倍にする効果を持つ。これによってレベルをすぐに上昇させ、高いレベルのエクシードを扱えるようにする、というのが、ブルーミングバトルの基本戦術だ。また、2本のセカンドリンクを1人のプログレスと繋いだ場合、そのプログレスのレベル上昇速度は通常の3倍になる。

リンク率が低めのプログレスと積極的につないで、平均的にレベルを上げていくという戦術も取れるが、リンク率が高いプログレスと二重に繋いで、一気にレベルを上昇させて早い段階から攻め始める、という戦法もある。昨晚、ブルーミングバトルの記録映像を動画サイトで漁って見てみたりもしてみたが、多彩な戦術同士がぶつかり合う様は、やっぱり見ている面白かった。しかし今回は面白いだけでは済まない。自分が戦略を練らなければいけないのだから。

相手側のプログレスに関しては、現在のレベルと、誰とどのリンクを結んでいるか、という情報のみがデータパッドに表示される。次のレベルまでどのくらいか、という情報は、一部の例外を除き見ることができない。

美海と琉花のリンク率の差は10%以上ある。そして、美海のレベル上昇速度は目を見張るほど早い。リンク率がほぼ100%に近い美海は、通常ならレベルが1上昇するのに16秒弱かかる。セカンドリンクを結んでいけば、その倍、8秒程でレベルが上がってしまう

のだ。

実際のゲームでは、レベルは4で上昇が止まる。反対に言えば、レベル4が主戦力ということになる。この主戦力に、セカンドリンクを1本繋いでやった美海は、約30秒でなれてしまう。記録映像では、お互いにレベル4のプログレスが2人ほど登場してからが本番で、そこまで行くのに大体1分といったところだったが、30秒で美海1人を出せ、尚且つその間もう1人とセカンドリンクを結ぶことが出来るのだ。現に、レベルをガンガン伸ばしていつている美海の横で、琉花のレベルも上昇していつているのだ。美海より遅いとは言え、それでも10秒くらいで1レベル上昇という速度で上がっている。

『わあ……すごい！　なんか、体のそこから力が沸き上がってくるみたいだよ！　ね、琉花ちゃん！』

『ホントすごい……！　なにこれ。今だったら凍らせられるかも……ねね、シノ。水遁の術やってよ！　昨日できるよーつってたじゃん』
『仕方ないでゴザルなあ。では……いざっ！』

バトルフィールド内では、忍が手印を結んで水を大量に発生させ、それを琉花がまるごと浮かしている。そして、

『えいっ！　凍れ！』

水の塊に手のひらを向けて力を込める。……が、

『あれ？　わわ、うわっぷ！』

『きやあっ！』

水は凍らず、更に凍らせようとした際にエクシードによる支えを一時的に失ってしまったのか、じゃばーん、とそのまま琉花に落ちてきた。その勢いで、近くにいた残りの3人も水流の被害に。その衝撃が、若干春樹にも逆流する。軽いが4人分なので、ちよつと顔をしかめる程度には痛かった。特に、頭からモロに食らった琉花の分が。

『うう……びしょ濡れです』

『ゴメンゴメン！　イケると思ったんだよ！　ほら、こっちはうまくいくから！』

地面に飛び散った水分をエクシードでかき集めて、再び大きな塊にしてみせる琉花。しかし、4人ともびしょびしょに濡れてしまった。

「琉花、αリンクしてみようか。先生、αリンクってどうやって結べばいいんですか？」

インカムを伝って、『『エクシード使いたい！』ってかんじでいいんじゃない？』という曖昧な答えが返ってきた。それを聞いた琉花は、むむむと春樹に向かって念を飛ばした。すると、先ほどのセカンドリンクのボタンアイコンの下に《α Link》というボタンアイコンが現れた。他の3人も真似して送ってきたので、それも4つに増える。春樹は琉花のアイコンの下のボタンを押した。

ブルーミングバトルにおいて複数あるリンクの種類。その3つ目が『αリンク』だ。これを結ぶと、そのレベルに応じた本来のエクシードを開放できるようになるものである。多用できれば当然強いが、デメリットもある。これを結んでいる間は、ファーストリンク以外のリンクが使えず、また結ぶためには絶対に5秒かかる。記録映像を見た限りでは、大体のチームが、メンバーのレベルの上昇が十分に済んでからαリンクを結んで攻撃に転じていたが、一部の試合では、早々にレベルを上げ切った1人のプログレスと繋いで速攻戦術を立てていた試合もあった。

5秒間の静寂の末、レベルが4まで上がりきった琉花とαリンクが繋がる。すると琉花は、美海が春樹とのリンクテストを行った時のように目を開き、呆然と宙を見上げた。春樹もまた、胸が熱くなるのを感じる。まるで心が熱い液体で満たされるかのような、誰かと繋がるリンクする時の、独特の感覚。

『これが……本当のリンクなんだ……！』

眩きのような琉花の声がインカムから流れってくる。琉花は今度はみんなから少し離れた位置に水の塊を浮かべ、えいやと力を込めた。

瞬間、ばきばきという音と共に、水の塊が氷の塊になった。紛れもない成功だ。

「やったな、琉花！」

『おお、成功したよっ！ すごいっしょ、ハル先輩！』

琉花の高揚が春樹にも伝わってくる。そしてその高揚は他の3人にも伝わる。1人でもムードメーカーのいるチームは強い、と相場が

決まっているらしいことは記録映像から、そしてこの目で見てきた試合の流れから知っている。声を掛け合ってテンションを維持することとは、ブルーミングバトルにおいて想像以上に重要なことだ。特にαドライバーのテンションが落ちてくると、その感情がプロGRESSに伝播してしまうため、良い結果にはならないということも春樹は知っている。

このチームにはムードメーカーになりうる人材が美海と琉花の2人いる。忍だつて、物怖じしない豪胆な性格を良い方向に使えば、きつと良い働きができるはずだ。

ところで――

「あれ？・琉花のエクシードつて『液体の流動操作』だったよね？」

『うん。それが？』

「なんで氷になつてるのに、まだ浮いてんの？」

『え？』

確かに、とその場にいた全員が思ったところで、いよいよ琉花の集中力が限界に来たのか――「ふう」というため息と同時に、氷の塊が地面に落下して砕けた。

すると、その中から大量の水が溢れ出た。要するに、氷にできていた部分はほんの表面だけだったらしい。その内部の水を操って浮かせていただけだったということだ。そして、また水流の被害に遭う4人。距離をとっていたため、先程よりずっと少なかったものの、今度は混じっていた氷のつぶてがコツコツと当たった。少し痛い。

しかし、これは痛いでは済まない。怪我をするかも知れないからだ。プロGRESSの痛覚は確かにαドライバーが引き受けるが、怪我は普通に負ってしまう。

「みんな、大丈夫!? 怪我してない?」

『だ、大丈夫……』

集中力が切れ、遂にαリンクも切れた琉花が弱々しく答えた。他のみんなも「あらら」という感じで意気消沈している。先生のため息も聞こえてきた。

しかし、そこはチーム最大のテンションアッパー・美海。率先して

立ち上がると、

『次は私がやっていい?』

「そうだな……いいよ、じゃあ、もう1回αリンクを要求して」

『オツケーだよ! ほらみんな見ててね!』

表示されたボタンを押し、5秒間待って、今度は美海と繋がる^{リンクする}。琉花に失礼かもしれないが、琉花の時よりもずっと深く繋がるのが分かった。

美海の心臓の鼓動、高まる感情、抑えきれない興奮、そして理由は分からないが——僅かな恐怖。それが纏めて伝わってくる。

「よし……できたぞ。さ、美海。やってみな」

『よし! それじゃあまず……みんなを乾かしてあげよう!』

「え?」

『え?』

美海以外の全員が疑問の声をあげるが早いか、美海を中心に風が舞った。

そもそも、美海はエクシードが非常に強い。春樹が初めて美海を見たときに知ったが、彼女はリンク無しでも、体重45キログラム程度の自分の体を浮かせて、10メートルもある壁を登ることが出来るのだ。

つまり。

『きやあああつ?!』

その風は、台風かと思うレベルの暴風だった。琉花・忍・兎莉子そして美海自身も含め、なすすべなく吹き飛んだ。美海自身も意表を突かれ、暴風は一瞬で止んだ。しかし——

——マズイ!?

忍は大丈夫だった。忍者というだけあって、素早い身のこなしで体勢を立て直し、上手いこと着地した。

琉花も大丈夫だった。なんとか水の塊を呼び寄せ、それをクツションのように使って軟着陸した。

そして、美海も大丈夫だった。自分まで吹っ飛んでいることに気づけた美海は、風を操ってどうにか着地の速度を和らげ、地面に転がっ

た。

問題は、戦闘能力が無く運動も得意ではない――

「兔莉子！」

飛ばされる勢いは、全員の想像以上に強い。これで地面に叩きつけられたら、酷い怪我を負うだろう。もし、当たり所が悪かったりでもしたら、その時は――

――させるかよ！

一瞬で頭を支配した恐怖心が、春樹を冷静にしていた。冷静でいられたのは、たまたま兔莉子が飛ばされてきたのが、自分のいる方向だったからかもしれない。一心不乱に兔莉子の元へと足を進め、彼女を受け止める体勢になる。

兔莉子は、ほとんど春樹にぶつかるといえるような形で受け止められた。鈍痛が春樹の体を貫き、ぐつ、と声漏れる。勢いを殺しきれなかった春樹は、兔莉子ごと人工芝の地面に倒れ込んだ。

「兔莉子、大丈夫か!？」

「春樹、さん……?へ、は、はい、大丈夫です……!」

春樹の腕の中で涙目になって答えた兔莉子を見て一安心したが、兔莉子も春樹と同じように痛みを振っている。彼女を抱きとめる際、余りに夢中になっていたせいで、αドライバーゾーンから出ていた――即ちゲームに敗北した扱いになり、そのせいで全てのリンクが解けていたのだ。それを目にした途端、心の内側からどっと庇護欲が沸いてきた。背中や肩やお腹をさすってあげながら、

「大丈夫か?痛かった?ごめんな、ちゃんと受け止めてやれなくて」

「い、いえ。平気です。ちよつと痛いけど……飛んだのは初めてじゃないですから」

そういえば、グリフォンと友達になったとか言っていたな、と思いつく春樹。

「そっか。強い子だな」

「あ、ありがとうございます……」

すぐ近くにある兔莉子の頭を撫でると、動物と話ができる兔莉子

は、自分も動物のように目を細めた。そして、安心からか、2人して笑い合う。――が、突然、兎莉子の顔が真っ赤に染まった。

「は、はは、春樹さん……!」

「ん? どうした?」

兎莉子の濡れた頭を撫でながら、反対の手では腹筋など全く付いていない柔らかなお腹をさすってあげている。水に濡れた兎莉子の髪はしっとりしていて、顔と首筋に艶美に張り付いている。地面を転がったせいで人工芝もあちこちにくっついており、それもまたなんだかいやらしい。そして、その体勢が。

彼女を、まるで恋人を抱くかのような――

「――つて、あ! ごめん!」

慌てて手を離して兎莉子からも離れる春樹。対する兎莉子は、ちよつとだけ残念そうだったが、あまりの恥ずかしさと申し訳なさで顔を逸らしていた春樹は気づかない。

「いてて……死ぬかと思った」

「美海殿のエクシードは強力でゴザルが……」

「使いどころ、難しそうですね……」

全員の視線が美海へと向かう。軟着陸して人工芝を体中にひっつけた美海は、

「……あ、あははー……ごめんなさい」

白けた笑いの後にしゅんとなった。しかし、バツと顔を上げると、

「じゃあ、次は忍ちゃんの番――」

美海 of 言葉は、コロシアムの入口から入ってきた数人の教師を見て途切れた。その言葉を、春樹が引き継いだ。

「――は、後でになりそうだな」

……………

「あうううう……疲れたあ」

テーブルに突っ伏す美海の顔のそばに、猫がトコトコと1匹寄ってくる。美海はだらけた姿勢のまま、にへらーと表情を緩ませて「心配してくれてるの?」などとぼやきながら猫の頭を撫で始めた。

約束通り、春樹たちは商業地区の猫カフェに来ていた。狭めの店内

はテーブル席が3つとカウンター席がいくつか。深い絨毯とソファのくつろぎゾーンの場所もあり、店の半分を占めていた。最初、美海がそちらへダイブしそうになったが、「猫ちゃんたちが驚いちゃいますよ!」という店員さんと兎莉子の制止によって、最初はテーブル席に着くことになった。

もう夕方だ。辺りはオレンジ色の光に照らされて暖かい雰囲気になっている。春樹達以外に来客はおらず、暖かい色に染まった店内は擬似貸切状態だ。

意思が通じるからなのか、兎莉子の周りには多くの猫が集まってきていた。にやあにやあ鳴きながら兎莉子に飛びついたり椅子をよじ登ってきたり、なんとか我先に意思を伝えんと押し合いへし合いをしていた。兎莉子はとても楽しそうに「あう、くすぐりたいですよ」とか「ここが気持ちいいんですか?」とか言いながら相手をしていた。

——— あるいは、花畑の妖精の時の美海もこんな感じだったな。

春樹にだけやたらとちよつかいをかけてくるところも。膝の上に乗った小さい黒猫が後ろ足で上体を持ち上げて、彼の腹にうりやうりやとパンチを決めてきている。全然痛くないが、これはどうなのだろう。

「兎莉子……この子、なんて言ってるの?」

連続猫パンチを喰らいながら隣の席に座っている兎莉子に春樹が尋ねると、彼女は楽しそうに、

「遊んで! って言ってますよ。ふふ、春樹さんが気に入ったの?」

兎莉子が聞くと、膝の上の黒猫は、みい、と鳴いた。そして、また春樹にパンチを入れにかかった。

「よーし……いいだろう! ほら!」

勢いある言葉とは裏腹にそっと黒猫の脇に手を差し込み、ゆっくりと抱き上げた。赤ちゃんを抱き抱えるように抱っこすると、今度は近くなった顔にパンチされた。

「……これホントに懐かれてんのか」

「懐いてますよー。猫ちゃんって警戒心強いですし」

ならそういうことにしておこう、と春樹は黒猫を膝の上に戻し、指

2本で黒猫のパンチに応戦し始めた。

「ほほお……気持ちいいでゴザルかあ？」

「ここがええんか？ ん？ ここがいいんだねえ」

向かいの席では、忍と琉花がこれまた猫と戯れている。今抱いている猫の「撫でられると嬉しい場所」を兔莉子に教えてもらった2人は、それぞれお腹をさすりさすりしたり、耳をカリカリするのに夢中だった。

「あれ？ 猫が普通に好きだって言ってたの、どっちだっけ」

「拙者でゴザル」

「いやあ、いいもんだねえ。ウリちゃんがいるのが、もつといいって感じ」

琉花が褒めると、兔莉子は顔を赤くして「そんなことないよ」と答ええた。

「楽しそうだな、琉花」

春樹が言うと、琉花はにんまりと笑みを強めて、

「そりゃ私、楽しい事イチバン！ って信条で生きてますんで。リンクしたときのエクシードも使い方がなんとなくわかったし、明日からの練習も頑張りたいねー」

と非常に前向きな意見。美海もうんうんと頷いている。

「でも……これじゃあ、作戦会議になるわけがないな」

春樹がぼやく。自分だって膝の上の猫と戯れるので忙しいから、他人のことなんて言えないが。

あの後、「使ったこともないエクシードをいきなり人に向けるとは何事」という趣旨の説教をこつてり受けた美海のテンションは、空気が抜けた風船のように萎み、でも持ち前の明るさで立ち直り、みんなのエクシードがどんなものかを、今度は1人ずつ試して、気付いたら完全に夕方だった。

とにかく、リンクしまくった疲労で全員クタクタだったが、ここに来て少し取り戻した感じだ。もつとも、

「春樹く〜ん、そろそろ向こうに行きたーい」

美海が相変わらずぐーたれながらぼやく。それを聞いていた店員

さんから「寝てる子は起こさないように」との注意と共に許可をもらい、

「やったあ。すみません、猫ちゃんのおやつください!」

200円で買ったサラミか何かを受け取って、くつろぎゾーンに向かった。そつとソファに腰掛けると、猫が数匹寄ってきて、エサをくれとタカリ始めた。

「はいはい、今あげるよ。みんなもおいでよ」

美海に呼ばれて兎莉子と琉花は席を立ったが、春樹と忍は座ったままだった。

「行かなくていいの?」

「春樹殿こそ、行かなくてよろしいのでゴザルか?」

「ほら、大所帯だとみんな驚いちやうでしょ」

「拙者と同じ考えでゴザルな。春樹殿は優しい殿方でゴザル」

猫と戯れる美海・琉花・兎莉子の3人を眺めながら、少し感慨深い気分になる。膝の上の黒猫は、流石に疲れたのか丸まって大人しくなっていた。その背中を優しく撫でながら、呟く。

「忍には、頑張ってもらうことになるかも知れない。みんな以上に」

戦闘経験があるのは忍だけ。美海と琉花は完全に一般人だ。この3人で、ユーフィリアとテルルという戦闘用アンドロイド2体以上を相手にするのは、エクシードのゴリ押しを使っても難しそうだった。

だからこそ、戦闘経験がある——もつと言えば、エクシード抜きでも戦力になる忍は、チームの要になるだろう。

様々な示唆を含んだ呟きを聞いた忍は、さも楽しそうに、

「ふふ、望むところでゴザル」

ニヤリと笑って豪胆に答えた。

ふと、目が合う。その太々しい視線が、去年ここに来た時に猫たちをビシッと整列させていた彼女に似ていた気がして、慌てて目を逸らした。

くつろぎゾーンでは猫と戯れる3人がわいわいと、しかし猫たちを驚かさないうように静かな声で騒いでいる。

「……すう……すう……」

「——つてみようみん!? 寝ちやったの!？」

「今日1番頑張ってみましたもん。ソファもフカフカで気持ちよかつたんじゃないですか?」

「むにや……こらこら……もうおやつないよ……」

「夢の中でも猫カフエなんだ……すごいね、みようみん」

「とつても幸せそうです」

「どうやら、猫と遊んでいるうちに気持ちよくなった美海が寝てしまったらしい。店員さんも苦笑いだ。」

春樹は膝の上の黒猫を抱き上げて席を立ち、くつろぎゾーンへと向かう。深い絨毯の上にそつと黒猫を下ろしてやり、それから、美海の寝顔を見る。

眠っている人の顔は、普段より少し幼く見える。猫と友達、彼女の大好きなものに囲まれてこの上なく幸せそうな寝顔を、暖かい夕日が彩っていた。

………

ここなら私は嫌われない。

第8話 「もしかして、盗み聞きしてたってこと？」

1週間が過ぎた。

2年生になりたての春樹と冬吾が観衆の前でブルーミングバトルをする、というニュースは学園中に広まりきっていた。1年生や3年生、果ては中等部のプログレス何人かが彼らの元を訪ね、是非バトルに出してくれと頼み込んできたときはどちらも驚いたが、残念ながらリンクの結果が芳しくなく、メンバーは互いに増えていなかった。

……………

火曜日の1・2時間目、高等部1年生は体育の授業だ。

暖かい陽気に包まれたグラウンドに、体操着姿のプログレス達が集まる中、それとは少し離れた場所で、何とも居心地悪そうにしているαドライバーが3人、グラウンド脇のベンチに座っている。

「これ、ホントに俺たちもいていいんだよな？」

と心配そうに尋ねる俊太に、

「中等部の頃もこんなだったけど……こればかりは慣れないんだよな」

と苦笑しながら答えるハイネと、

「流石の俺も……中学の頃は遠目から見られる程度だったけど、いくら人数少ないからって、マジで一緒に授業受けるのか」

と肩を竦める早輝。

青蘭学園は1学年1クラス、多くても2クラスしかない。そして、青蘭学園で教えることのできる教職員の人数もまた限られる。そのため、こういう体育まで男女合同だったりする。流石に水泳の授業は分けられるが。

早輝が不意に俊太に話を振った。

「しっかし……お前、私服は割と男っぽかったし制服もそうだけど……体育着だとマジで女の子みたいだな」

「え!？」

「そだね。可愛いよ」

現在の俊太は、男女共にほぼ同じデザインの半袖・短パン（まだ肌

寒いので上はジャージ（体育着を着ている。小柄な体躯で、中性的な顔立ちに加え、髪も少し伸ばして後ろで縛っているため、ともすれば女子に見える、という早輝の感性は、一般的な観点からすれば正しいといえる。微妙にジャージの丈が長くて、長袖の袖口に手のひらを隠す、いわゆる『萌え袖』っぽくなっているのも原因かも知れない。

しかし、俊太は不満なようで、

「だー！俺に『可愛い』とか言うな！」

と怒っている。俊太は昔からよく可愛いと言われてきたので、そう言われると「男としてはプライドが傷つけられる」と言って怒るのだ。

「やってることは剣道って男っぽいにな」

「ギャップ萌えって奴じゃない？アウロラ先輩も喜んでたし」

「こ、こらあ！その話はすんなつつたろ！」

剣道部に俊太を見に来たアウロラと、その友達の妖精2匹が見守る中、やたらとプライドの高い新入生の剣道部員と練習試合をしてひと悶着あったのは、つい先週の話だ。

「あー……葵ちゃん、また美海ちゃんに突っかかてるよ」

「え？あ、ホントだ。なんであいつは誰にでも突っかかっていくんだ……」

その、やたらとプライドの高い新入生の剣道部員・御影葵が、美海に指を突きつけて何やら物申しているらしい。その光景に俊太は溜め息を吐く。強気そうな目に、麗しいツヤのある黒髪をポニーテールに結び上げた彼女は、克己心が非常に強い。だが、それがよく災いして他人に突っかかってしまうという欠点があった。……と、本人は言っていた。

で、そちらの方かというと、

「今日の体育、何するんだろーねー」

と美海。

「初日だし、体力測定じゃないか？」

と葵。

「測定、かあ……50メートル走とかもするのかな」と沙織。

「そりや、するでしょ。あと……立ち幅跳びとか？」
と希美。

「たいりよくそくてい？　たちはばとび？　何それ。変な呪文ね」
とソフィーナ。

黒の世界出身のソフィーナに体力測定や立ち幅跳びが何かを教え
ている葵と希美の横で、心配そうな沙織に、美海が声を掛ける。

「沙織ちゃん、運動苦手なの？」

「えーと……」

もじもじと俯く沙織は、見た目が生粋のお嬢様といった雰囲気
で、本を持たせてメガネでもかければ、完全に文学少女と呼んで差し支え
ないような姿をしている。全く運動ができそうにない、と思うのは、
別に美海に限った話ではないだろう。

何か言いづらいことがあるのか、沙織は少し悩んだ挙句、話題を変
えて、

「み、美海ちゃんは、走るの速そうだよね」

「私？　私は速いよ！　徒競走じゃ、1位以外とったことないんだよ
！」

沙織が素直に感心して「すごい！」と言うより前に——それを聞
き逃していなかった葵が、

「何？　聞き捨てならないわね！」

そして、ビシッ！　と音が鳴りそうなくらいの勢いで美海に指を
突きつけると、

「足には私も自信がある！　勝負よ美海！」

「お、いいねー！　かけっこ一等賞の名にかけて、葵ちゃんには負けな
いよー！」

「それいつの話よ……」

本人たちは盛り上がっているが……周りは「またこれだよ」と呆れ
顔だ。なぜならこの2人、寮の中でも何かしらの勝負事を見つけては
競り合っているのだ。黒の世界の生徒用の寮に住んでいるソフィー
ナは知らないことであるが、同じ寮に住んでいると——結構うるさい
のだ、これが。

葵はよく美海に勝負を申し込み、美海もそれに乗っている……が、これは葵の克己心云々よりかは、単純に2人がやたらと仲良しで、2人とも勝負事が好きなだけなんじゃ——と、その場にいた全員がそう感じた。

そんな中、1人だけ呆れ顔ではなく、ぷんぷんと怒り顔だったのが、沙織だった。

「葵ちゃん！」

「な、なに？」

珍しく語気を強める沙織に、思わず背筋を伸ばす葵。沙織は可愛らしくほっぺたを膨らませて、

「前にも言ったけど、ビシツって指を突きつけちゃダメだよ！ 人に当たったり、目に入っちゃったりしたらどうするの！」

「あ、あう……そうだった、ごめん。つい身内にやるクセで……」

「美海ちゃんも、すぐに勝負に乗っちゃダメだよ！ それだから葵ちゃんが付け上がるんじゃない！」

「ひゃ、ひゃいっ！」

「付け上がるって……言い方が……」

むん！ と息を荒げる沙織に、美海と葵は完全に気圧されている。

「これは2人ともに言えることだけど、美海ちゃんも葵ちゃんも、すぐになんでもかんでも競争しちゃダメだよ！ 心が荒んじやうよ！」

腰に手を当ててぷんすかな沙織と、しよんぼりしている美海と葵。まるで厳しい母親と悪ガキ2人みたいな光景だ。悪ノリするとうる

さい2人だが、こうやってド正論をぶちかます沙織に対しては頭が上がりなかつたりする。

沙織に関して、本人は頑張って叱っているつもりなのだろうが、如何せん沙織自身が非常に可愛らしい容姿のため、傍から見ていると、背伸びしている物心付きたての少女のような微笑ましさをすら感じられる。寮での触れ合いが増えて遠慮が少し無くなったのか、はたまた怒っているせいか、かなりズケズケとものを言っているが。

そんな沙織の後ろから、ニヤニヤしながら希美が抱きつく。

「ひゃうっ!？」

「どつたの沙織？　なんかやけに使命感に満ち溢れてたけど」

「の、希美ちゃん。それは、あの……先輩方から『あなた、あの2人を静かにさせられない？　うるさいんだけど』って苦情が来て……しかも2人ともよく私の部屋で騒ぐから、これは私が2人をどうにかしなきゃ、寮の……というか私の安眠が、って……」

「ははあ、それで」

前に沙織が怒ったのは、春休み中に葵と美海が、どういう成り行きでか美海の部屋——つまり沙織の部屋でもある——でテレビゲームで勝負を始めてしまい、それが深夜1時まで続いた時だった。まさか苦情が来ているとは思っていなかったらしく、美海と葵はさらに落ち込んでいる。横で事の成り行きを見守っていたソフィーナも「あんたたち、寮でもそんななの？」と呆れ顔だ。

若干調子を崩された沙織は、希美に抱きつかれたまま「と、とにかく」と頑張つて声を張り上げ、

「勝負はあんまりやらないようにね！　あと、もう少し静かにしてね！　特に寮では！　いいですか！」

『は、はい……』

お姉さんのような沙織に対して、美海と葵は完全にゴメンナサイ状態だ。

そこに丁度いいタイミングで体育講師がやってきて、沙織のお説教はようやく幕を閉じた。

体育講師・岸部雄馬は、まだ4月だというのに半袖だった。身長は低めで、どちらかといえばがっちりした格闘家のような体型だが、グラウンドの向こうの方でぶんぶんと腕を振って「こつちだよー」と教える姿は、女子の目にどことなく魅力的に映った。彼という男は、そういう、何気ない仕草にすら妙な色香を感じさせる、不思議な雰囲気を持つ男性なのだ。

もうひとりの講師も男性で、クリップボードを眺めて生徒の顔と名前を頭の中で一致させている。名前をアルマ・カミュオンというらしい。ハイネのように妖艶なオーラの青年だが、そこには貧弱さというものが全く見えない。ハイネのそれをすらつとした、どこか儂さを感じ

じさせる細身の日本刀に例えるのなら、こちらは鍛え上げられた、無骨ながらも振るわれるためだけに洗練された大剣、とでも言えばよいのだろうか。『妖しさ』と『力強さ』が絶妙なバランスで共存する、彼もまた不思議な魅力の持ち主だった。

それを見た女子——主に青の世界出身——の間で、「カツコイねー」という声に混じって「これまずいんじゃないの」的な言葉がそこそとやり取りされる。男女比約1:9のクラスで体育を教える人間が2人・両方男性というのは、確におかしい。

雄馬は一通り出席を取ったあと、

「君たちの言いたいことはよくわかる」

と、深く頷きながら言った。

「ほぼ女子クラスを教えるのに、両方男つてのは確におかしいよな。でも、青蘭学園は人手不足なんだ。女性の先生は中等部だから……まだ2人とも講師始めて数年のペーパーだけど、一応実績はあるし、まあ勘弁して欲しい」

あ、流石に水泳の授業は無理言つて男女分けて女性の先生に来てもらうよ。と話を続ける。

「まずはじめに、この授業は体育と銘打ってはいるものの、俺らが付ける成績評価に、技術的な部分は一切取り入れない。この授業はあくまで『体育を通して体を楽しく動かして欲しい』っていうコンセプトでやるから、はつきり言っちゃうと、例え運動が苦手でも、やる気さえあるなら全員評定5が取れちゃうからね。ま、得意な子も苦手な子も1年間、とにかく楽しむこと第一優先でいこう！」

生徒たちの間から、やったーという声が上がると、何を隠そう美海も、体を動かすのは大好きだ。

「それでなんだけど、俺たち2人は『ブルーミングバトル実践』の授業を受け持ってもいる。この中にも、出たいと思ってる子はいらるだろう。てなわけで、そっちの方の説明も兼ねて、俺たち2人がそれぞれ少しだけお話するから、まあ退屈だろうけど、みんな座ってね」

全員がグラウンドの上で体育座りになったのを確認すると、雄馬は喋りだした。

「この中には、入学前のテストで、リンク率が低かったり、エクシードの出力が弱かったり、っていう子、何人かいると思う。そういう子にこそ、ブルーミングバトル実践の授業に出て欲しいんだ。毎週水曜日の放課後にあるから」

雄馬は数人の生徒に視線を送る。それらのプログレスは皆、雄馬が今言った特徴に当てはまる生徒だった。

「俺は正直、この『ブルーミングバトル実践』っていう授業名、変えて欲しいって思ってる。というのも、この授業はブルーミングバトルへの理解を深めると同時にエクシードとの付き合い方を教える授業でもあるからね。エクシードをうまく扱えない子、そういう子は、得てしてその使い方に慣れていないだけなんだ。もし来てくれれば、こっちは懇切丁寧……って、俺が言うのもおかしいかな？ とりあえずまあ、一緒に考えるから、1回だけでもいい、是非来て欲しい。もちろん、戦闘用のエクシードじゃなくても全然オツケーだよ。授業へのエントリーの仕方は携帯を使って学内ネットからお願いね」

わからなかったら、どの先生でもいいから聞いてみてね。と雄馬は話を区切った。

続いて、雄馬に変わってアルマが口を開く。

「はい、アルマ・カミュオンです。黒の世界出身で——もうわかるかな？　そこにいるハイネ君の兄です。1年間よろしくね」

女子の間から、えーっ！　ハイネくんのお兄さんカッコイイー！　などの声上がる。ハイネは……恥ずかしそうに俯いた。実は、毎年こうだったのだ。

「さつき雄馬先生が言ったような、リンク率が低い、エクシードが弱い、そういうことを言われた子——それだけじゃない、ここにいる全員に言っておくけど、そういうのは一切気にしないでいい」

アルマは一旦言葉を止めると、微笑んで話を続ける。

「エクシードは近年、技術の進歩でその出力だったり性質だったり測れるようになってる。確かに、その数値はある程度信用に値するものだ。現に、君たちの知らないところで——君たちのステータスは、測定の結果を元にランク分けがされてる」

にわかには生徒がざわつき出す。勝手にランクが付けられているなど、あまり気分のいい話ではない。

しかし、アルマはそれを気にせず、あくまでにこやかだ。

「まあ、そのランクってのは見たい時に学内ネットで見れるんだけど。面倒臭がりなαドライバーとかはそれを参考にプログラズを選んだりするわけだ。ランクの上からプログラズを数人見繕えば、最強チームの完成っていう寸法で」

口調を変えずに、まるでなんてことでもないかのように言い切ったアルマ。生徒たちの様子は当然ながら不満げだ。美海も心中「それはないでしょ……」と思う。

しかし、そんな生徒たちを前に、アルマは始めて口調を——『実直さ』というものが見え隠れする口調に——変えた。

「でもな、俺らは——少なくとも俺は、ランク分けってのは好きじゃないし、俺らが教えてるってのもあるんだろうけど、この学園に在籍するαドライバーは決してそんな方法でプログラズを決めない。それがなんでだか、わかるかな？」

その質問には——誰も答えられない。彼がこの話をするのは高等部からなので、中等部で教わっていた希美などの一部の生徒も、答えられない。αドライバーであるハイネ、俊太、早輝ですら、答えられない。

アルマが嬉しそうにニヤリと笑う。

「それはな？ エクシードだとかリンクだとかいうものは——機械なんかはその全貌を推し量れるほど薄っぺらいものじゃないからだ。あ、これは決して俺が黒の世界出身だからじゃないぞ」

先の実直さは何処へやら、おどけて言うアルマに、生徒たちはどう反応しているのか分かりかねているようだ。アルマは自分のギャグが受けなかったのを確認して少しシヨボンとしたあと、口調を再び真剣な調子に戻した。

「白の世界の技術をデイスるわけじゃないんだけどね。機械はある程度を教えてくれる。あくまである程度をな。でも、それは決して全部じゃないんだ。だってそうだろう？ 君たちは体力測定して、君は50

メートル走は何秒です走り幅跳びは何メートルですなんて言われたところで、次の日から頑張つて走る練習なり跳ぶ練習なりしたら、もちろん短距離走のタイムは縮まるし幅跳びの距離は伸びるだろ？

それとおんなじことで、エクシードやリンクも鍛えて使っていけば、確実に成長していくんだ。考えてもみてくれ。年度の初めにエクシードとリンク測定して、その結果をランクにして、そのランクで1年間頑張つてねーなんて言われて、1年間頑張つてもその評価が更新されるのは次の年度だ、なんて理不尽でしょ？ 努力つてものを考慮に入れてくれない機械が出した数値なんてのは、目安にしかならない。その目安だけで、自分のパートナーを決めるのは、あまりにも不確かで、不誠実だ」

噛んで含めるように話すアルマ。しかし、彼が発した最後の『不誠実』という言葉の意味を、その場にいた生徒の一体何割が理解できただろうか。

「機械の定規は努力を測つてくれないし、伸びしろも測れない。だからαドライバーはみんな、自分の目で見て、触れ合つて、リンクしてみても、そこで始めてパートナーを選ぶんだ。そこには、機械がはじき出した数値なんてもんは関係ない。もう一回言うけど、君たちの持つ力や可能性は、決して機械ごとき——いや、もつとはつきり言おうか。君ら自身でも測れるような軽薄なものじゃない。それは複雑で入り組んでいて、暗く深い場所で成長していくものなんだ」

生徒たちは皆食い入るようなアルマの話を聞いている。アルマの話には、耳を逸らさせる隙を与えない密度というものがあつた。

「だからこそ——エクシードとの付き合い方がわからなくなったり、エクシードに関係なくても何か悩みがあつたら、そのときは俺ら先生の手を取つて欲しいんだ。もちろん無理強いはしないけど、ここにいる全員がエクシードを完全に開花させられる権利を持つている。それが青蘭学園側のスタンスである以上、君らにはその権利を、是非有効に使つて欲しい」

アルマが話を終えると、自然に拍手が起こつた。アルマは照れた様子で下がり、対する雄馬は額の右の方を掻きながら、

「はいアルマ先生ありがとうございます。それじゃあ硬つ苦しい話はこのままでにして、とりあえず質問タイム！」

「はいはいー！」

真つ先に手を上げた美海を雄馬が指す。と、美海は嬉しそうに、

「アルマ先生がハイネくんのお兄さんなら、雄馬先生は沙織ちゃんのお兄さんなんですか？」

「お、いいところ突いてきたね。そう。実は俺、そこにいる沙織の兄——」

と雄馬が言いかけたところで、耐えかねたように沙織が、

「じゃないでしょ！　もう、お兄ちゃんったら！　お兄ちゃんは私の叔父さんでしょ！」

「え……と、さおりん？　それ、お兄ちゃんなの？　叔父さんなの？」

隣に座っていた琉花が、その勢いにむしろ食いついた。「へ？」と自分の言ったことをようやく認識した沙織は、顔を真っ赤にしてうずくまってしまった。耳まで赤くなったその頭からは、心なしか湯気が上がっているようにも見える。

雄馬はカラカラと笑い、

「沙織は俺の姪っ子ね。お兄さんの娘つてやつ。沙織がいるから、みんなも俺のことを呼ぶなら、親しみも込めて下の名前でもよろしくね」と、お茶目に片目を閉じてみせる。普通の男がやつたら確実に引かれるであろうキザなウィンクも、雄馬がやるのなら魅力的に見えるのだった。

その後、この授業では生徒たちのリクエストに則つてサッカーやバスケットボールなどのスポーツを行い、結局美海と葵はその悉くで張り合ったのだった。

大体の生徒は、それを呆れた様子で眺めていた。琉花や忍などのノリのいい子は面白がつて参戦した。沙織は、なんかもう色々諦めたみたいだった。

……………

放課後のコロシウムで、春樹のチームは特訓に励んでいる。

「そろそろ、美海も琉花もエクシードの扱いに慣れてきたかな？」

『うん！　なんていうか、コツがつかめてきたよ！』

『私も右に同じかなー。状態操作は全然ダメだけど、流動操作は結構続くようになったぜー！』

バトルフィールドの中では、美海と琉花と忍がそれぞれエクシードの練習をしている。兔莉子はクラスの仕事があるらしく、遅れてくるようだ。

美海は頑張って特訓した成果が早くも出始め、不安定ながらも空中でホバリングができるようになっていた。さらに、左右に高速で動くこともできる……が、こちらはまだ安定しておらず、地面に落下しては春樹が痛い思いをすることになった。ちなみに、スカートは風で巻き上げられて大変なことになるので、初回以降は全員体育着姿で特訓している。

「なんか、体育着汚れてるね」

『体育の時間にバトルしまくったからね！』

「……くれぐれも怪我しないようにね……」

琉花は言葉通り、流動操作に関してはお手の物になっていた。球体を維持することはもちろん、平たく壁のようにして美海の風を防いだり、波のように流して相手を押しやることもできるようになった。美海と同じく、まだ未熟な点は見受けられるが、初めて使った時とは見違えるようだ。

『拙者はなんかもう、評価もクソも……って感じでゴザルな。使えて当たり前前な』

「いや、そんなことないよ！　でも、忍は元々エクシード使えるじゃない」

『拙者、高レベルのリンク状態でエクシードを使用するのは、実は初めてだったでゴザルよ。思ったよりも勢いがすごくて、正直ビビったでゴザル』

少し拗ねたようにぼやく忍は、レベル4リンク状態でも当たり前のように大量の炎を操っていた。火遁の術で細く吹き出した炎を、まるでレーザーのように動かしたり、多数の火の玉を生み出して、それぞ

れ異なる起動で敵を追尾させたり、と芸達者に拍車が架かっている。今回のバトルは、どんな戦略を立てようとしても、その要は忍だ。如何に彼女が「忍び」というものは、日の下で戦うことが本分ではないのでゴザルが……」と言ったところで、一般人の美海と琉花に比べたら、戦闘力の差は一目瞭然だろう。

そして、それは冬吾も理解している。

この間、冬吾のチームが練習を見に来た。流石にこちらだけ向こうの情報を知っているというのはアンフェアなので、顔合わせということとで春樹もそれを快諾した。ただし、「セニアの性能を見せてもらう」という条件付きで。現在、お互いにそれぞれのチームのプログレスのステータスを、ある程度理解しているということだ。

セニアは、まだまだ武装の調整に苦労している感じだった。彼女のエクシードは、自らの亜空間領域に格納した装備を限定的に使用できるといったものだった。非殺傷のエネルギーショットだったり、様々な機能を持つ腕部装甲などが見受けられたが——セニアはその悉くの取り扱いに不慣れで、ユーフィリアに助けられて、なんとかなっているという雰囲気だった。そして春樹は、ユーフィリアとテルルの武装について、ある程度の知識がある。

ユーフィリアのエクシード『セラフィック・オルタナティブ・アップメント三六式神聖炎翼機装』は、背後のブースターから青白い炎を、まるで翼のような形で吹き出す武装だ。高速で移動することが可能になる他、大きく展開して広範囲へ攻撃することもできるし、飛行することも可能だ。

テルルのエクシード『マキシマム・ガン・トレット五二式衝撃増幅手甲』は、自分と接続状態の専用の籠手が物体を殴った時、生まれる衝撃をジェネレーターによって増幅するというものだ。ブルーミングバトル中はリミッターが起動することになるので、ジェネレーターの性能に制限がかり、人が死ぬことはないらしい。が、あのエクシードは通常状態のフルパワーで地面にクレーターを作ったりコンクリートの壁をあつさり割るレベルの威力を持っている。一撃でも喰らえば大きく体力を持っていかれるだろう。ただし、液体を殴る場合はジェネレーターが正常に働かず、増幅倍率が極端に落ちる。

そこで、春樹はいくつかの作戦を立てた。

自分のチームの誰が誰に当たるべきかを考えた。まず、液体が苦手なテルルに琉花を当てる。次いでユーフィリアには、その高速移動についていける忍を。そして体重の軽いセニアには風で攻撃できる美海を。

だが。

——冬吾は、どこまで読んでくるだろう？

春樹のチーム全員が強力なエクシードを持っている——その中でも別格な美海がいる——ということを知った。そして、その性質も。

冬吾からしたら、春樹がこのようにプログレスを当ててくることは、最早考えるまでもないことだろう。だから、空中に逃げられ広範囲へ攻撃できる美海には、同じく空中戦が可能で範囲攻撃の手段を持つユーフィリアを。液体を操ることが出来る琉花に対しては、液体での威力減衰が難しいエネルギーショットを含む武装を取り扱えるセニアを。忍の機動力に高い脅力についていけ、且つ一発当たればゲームを決めてしまえるほどの攻撃力を持つテルルを。

春樹も馬鹿ではない。そこまではこちらも読めた。しかし、具体的な対策があるかといえば——無い。

冬吾が望む形で戦闘が形成されてしまったとき、戦闘経験のない美海と琉花にそれを「打開しろ」と言うのは、あまりにも酷な話だ。琉花がセニアを、ならまだしも——美海がユーフィリアから逃れることは難しいだろう。このバトルに参加するプログレスの中でも随一の機動力を持つユーフィリアに、忍を——強引に当てるのなら、可能かもしれない。しかし、フリーになったテルルはどうなるだろう。セニアとのコンビネーションで琉花を狙われたら、流石の琉花の防御でも耐えられないだろう。

何よりも——バトル中、相手のプログレスに指示を出すのはあの冬吾だ。学年一の秀才は、春樹の泥縄な戦略など容易く見破り、すぐさま対策案を立てるだろう。

そこで春樹は考えた。春樹の取るべきは——

読めても防げない戦略。

そのキーは……美海だった。

……………

「春樹たち、頑張ってるな」

コロシアムの様子を映すモニターの前で、雄馬が呟いた。

コロシアムのコントロール・ルームには3人の姿がある。1人は雄馬、もう2人は沙織と希美だった。

「美海ちゃん、頑張り屋さんだね」

「そだね。美海も変わったんだなあ……」

沙織が感心したように言った。それに希美が同意する。

「美海ちゃんと琉花ちゃんって、朝早くから寮の近くを走ってるんだよ。偉いよね」

「へえ、美海もそうだったんだ。知らなかった……」

どこか悔しそうな表情を浮かべる希美。その横で、雄馬が2人に向かって、

「今回のバトルは、面白くなりそうだ。なあ、2人とも？」

「そうだけど……私は、いきなりはひどいと思うなあ」

沙織が、持ち前の優しさでやんわりと批判した。希美も頷いている。

「俺だってそう思うよ。だけど、歴史はいつだってそういうことを示してる」

「どういうこと？」

「可能性はいつだって、苦境を跳ね除けるために成長するんだ。昼間にアルマ先生が言ってたろ？ 可能性は機械じゃ測れないって」

2人が頷いたのを見て、雄馬は嬉しそうに笑んだ。

「だから成長させて、目で見て測るんだ」

沙織はポカンとして雄馬を見つめていた。一方の希美は、青蘭諸島での暮らしも4年目になるため、確かにといった面持ちになった。

その希美が、

「ねえ、雄馬くん。私も高等部に入学したことだし、そろそろブルーミングバトルに出たいなあ」

と甘えるように言った。希美と雄馬、2人の関係もまた、4年目に入ったところだった。

「そうだな……沙織、俺のチームに入ってくれるか？ 沙織のエクシードなら、きつとみんなを守れる」

「え!? 私……お兄ちゃんのチームでブルーミングバトル、かあ……やりたい、かも」

「そか。ならアイも合わせて3人か。十分戦えるな。そのうち、出れそうな大会とか探しておくから、それまでにちゃんと体を作っておきな。なんなら、俺が鍛えてやつてもいい」

「じゃあ私も、美海ちゃんと一緒に走ろうかなあ」

「そういえば沙織、体育の時間で初めて知ったけど、結構運動が得意なんだね。なんか如何にも運動できません！ って外見だから中身もそうなのかと思ったけど、サッカーやつてる時も全然息切れしてなかったよね」

「ひ、ひどいよ希美ちゃん！ それに、別に私は運動得意じゃないよ。体力はなんか、他の子よりも多いんだけど」

涙目になって反論する沙織を見て、雄馬が嬉しそうな表情になる。

「なあ希美、今じゃ沙織はこんなお嬢様っぽい感じになってるけどな。その昔は結構やんちゃでいたずらっ子——」

「わ、わー！ 何言ってるのお兄ちゃん！ 昔の話は恥ずかしいからやめてよー！」

「へえ、だからかあ。美海に仕掛けるちよつとしたいたずらとか上手いなあつて思ってたけど」

「そ、そんなこと思ってたの!? あ、あれはつい出来心で……！」

「ねーねー雄馬くん、沙織の昔話、もっと聞かせてよ」

「よしきた」

「よしきた、じゃないよ〜!!!」

いずれチームを組む3人の奇妙な戯れ合いは、しばらく終わる気配を見せない。

……………

コロシアムは日替わりで春樹と冬吾が使う約束をしたので、今日の

冬吾たちの放課後は自由時間だ。

冬吾は「あんまり毎日毎日バトルだバトルだーって言っても、正直みんな疲れちゃうでしょ？ リラックスって大事だと思うから、自由にしていいよ」と言っており、現にテルルは外食しに出かけて、ナナは医療の練習に励んでいるのだが、なぜかセニアとユーフィリアは冬吾のそばを離れようとしなかった。

「セニアさん、学校にはもう慣れましたか？」

「はい。ですが、まだ不慣れな点もあります。それと、セニアのことは『セニア』と呼んでください。2日前にも同様の事を言いましたが」「あつ……ごめんなさい。さん付けだったり敬語なのは癖なので……了解しました、セニア」

中庭のベンチに座って、のんびりと時間を過ごすセニアとユーフィリア、その隣に冬吾。セニアとユーフィリアがじゃれあう横で、冬吾はそれを微笑みながら眺めている。

と、そこに予期せぬ訪問者が現れた。

「あら、猫ちゃんです」

トコトコと歩いてきたのは、どこから来たのかも知れない1匹の子猫だった。ユーフィリアと冬吾は、可愛いなあという表情になったが、セニアの表情は、ぴきつ、と少し固くなった。

「マスター。これは……」

「猫、だよ。流石に知ってるでしょ」

「はい。ですが……」

子猫は何の気まぐれか、地面に下ろしたセニアの足に擦り寄ってきた。同時に、セニアがびくりと震える。

「あ、あの……」

セニアが困ったように、あるいは怯えたように冬吾とユーフィリアに助けを求めるかのような視線を向けた。が、冬吾とユーフィリアは寧ろ感心したように、

「セニア、気に入られたんじゃないですか？」

「抱っこしたら怒るかな……？」

「結構人馴れしてそうですし、大丈夫でしょう」

「え？ ああ、その」

セニアが戸惑い、二の句を継ぐ前に、ユーフィリアが流石の手さばきで子猫をひよいと抱き上げ、セニアの膝の上に置いた。幸運にもユーフィリアの予想通り人馴れしていたらしく、にやあと一声鳴いて丸くなった。そんな丸くなった猫とは正反対に、セニアの動きはがच्चいんと固まる。しかし、その目は貪婪どんらんな知識欲をはつきりと浮かべていた。

自分の膝の上で蠢く、自分よりも小さな器に収まっている《命》。触れたことのない、人間とは別の生き物。その脈動、その温度、その息遣い。それは一体、何なのだろう。

それが、今、自分の膝の上に乗って丸くなっている。その事實は、セニアの頭を大きく揺さぶっていた。

しかし、どうしたらいいのか全くわからない。この毛深くて温かくて柔らかくてにやあにやあ鳴くこの生き物にどう接したらいいのか……それに気づいているのか、はたまた気づいていないのか、ユーフィリアが、

「撫でてあげましょう」

などと言う。それから、「ほら、こうやって……気持ちよさそうですね」とその背中を優しく撫でてみせると、子猫は気持ちよさそうに目を細めた。

「さあ、セニアも」

「は、はい」

セニアは微かに震える手の平を、そつと子猫の背中に当てた。子猫の綺麗な毛並みが触れる。

その瞬間の感覚を、セニアは一生忘れないだろうと思った。

生温かい子猫の体温が。その息遣いが脈動となって、細く硬い背骨を上下させる動きが。ユーフィリアのやっていたように撫でてみることにより、体毛の滑らかさと肉の柔らかさ、背骨の硬さとその形が。感覚を研ぎ澄ませば、心臓の鼓動と、送り出される血液の流れ、呼吸による空気の動きまで。

その全てが、たったひとつの存在により成り立っている。

即ち、

「……これが、『命』」

自分の体にも宿る命。誰でも等しく1つ持つ命。小さな生き物に触れることで、その存在をより身近に感じる。

「ま、マスター。ユーフィリア。セニア……セニア、今、猫さんを撫でていますです」

興奮のあまり口調がおかしくなっていることも自覚できず、セニアは夢中になって子猫の背中を撫でている。子猫もリラックスしたように、にやあと鳴く。それを見た冬吾とユーフィリアは顔を見合わせて互いに微笑むと、

「そうだね。セニア、また1歩成長したね」

「セニア、偉い偉いですよ」

ユーフィリアがセニアの頭を撫でた。その時、セニアはひとつ思うことがあった。

冬吾もユーフィリアも、テルルもナナもみんな、よくセニアの頭を撫でる。それが、ずっと疑問だった。嫌ではない、寧ろいい気持ちになる、でも、どうしてみんなしてセニアの頭を撫でるのだろうか。

彼らは自分たちよりも小さいセニアの頭を撫でることで、『命』を感じていたのだろうか。

「しかし、今なんとなくセニアがカレンに見えたよ。語尾に「です」を付ける口調が似てたし」

「私もそう思いました。姉妹機だからでしょうね？」

「あ、そっか。そりや似るわけだ——と、メールだ。なにになに……マスターが、出来るだけ早くセニアの装備の使用状況を知りたいって。ユフィ、データ持つてる？」

「今ですか？　今はちよつと無いですね。精密な奴は寮に帰らないと、何とも。出来るだけ早くということなら、口頭でいいなら幾らかは……デルタさんってそういうことあまり気にしなさそうですし」

「確かに、『本人の口から直接聞く意見は重要だ』って言ったもんな。じゃあ、少しはそれでいいかな？　電話していいか聞こう」

横で冬吾とユーフィリアが何やら話しているが、猫を撫でるのに夢

中なセニアは全く聞いていない。

——今度は少しだけ、頭の方まで失礼して……。

震える手で子猫の頭をちよいちよいと撫でてみる。と、子猫は鷹揚に首を1回巡らせた後、にやあと鳴いてまたおとなしくなった。よきにはからえ、とでも言いたかったのだろうか。

「セニア？　猫ちゃん撫でながらでいいから、マスター・デルタに今の装備の使用状況を教えてあげられるかな？」

「え？　あ、はい。了解しました」

セニアは、誰もが思っていたよりもずっと動物好きだったらしい。背中を撫でられるたびに気持ちよさそうにする子猫を見て、僅かに——ほんの僅かに、微笑んでいた。

その後少しして、デルタとの通信が繋がり、セニアは現在の装備の使用状況を話した。デルタはどうやらセニアの意見を元に、装備を少し改良するつもりらしい。

『そりや、装備は作りっぱなしじゃダメってもんさ。今回はセニア専用つてことで、通常のそれよりも少しサイズを絞ってるから、なんか不具合が出るかも知れない。で、セニア。なんか困った点は無いかな？』

「いえ、特には……お恥ずかしながら、セニアはまだ装備を完全に使いこなせていません」

『そりやあまあ、1週間で慣れるなんて土台無理な話だ。そこらへんの使い勝手は変えないつもりだし』

「そうですね……あ。強いて言うなら、エネルギーショットの持続時間が短いこと、でしょうか」

セニアの腕部装甲は、手の平に取り付けられた装置からエネルギーショットが打てる。しかし、通常の装備が合計50秒ほど打てるのに対して、セニアの装備が打てるそれは、20秒ほどでエネルギー切れしてしまふのだ。

デルタは通話越しに悩ましげなうめき声を上げた。

『やっぱそう来るよなあ。さつきも言ったとおり、セニアの装備は通常より小型なんだ。だから、どうしてもエネルギー切れしちまうんだ』

な』

「しかし、マスター・デルタ。リフレクター・コアはほぼ無尽蔵にエネルギーを生み出すことができます。どうしてエネルギーが枯渇するのですか」

セニアがもつともな事を言うのと、デルタは困ったように、

『そりゃ、確かにリフレクター・コアは便利なもんだよ。だけど、あのエネルギーショットを打つためには、リフレクター・コアが生み出したエネルギーを別の形に変換してやらなきゃいけないわけ。その過程で変換器が必要になるんだけど、このサイズだと触媒がすぐ摩耗するタイプのやつしか無いんだよな。時間さえあればもう少しいいのを調達できるんだが……テロに使われたからって理由で最近された規制強化が効いててな。いや、不甲斐ないのは承知の上なんだけど』
「はあ、それで……」

ユーフィリアが納得したように声を漏らす。セニアの身体的特徴が、こういうところで弊害をもたらすとは予想していなかったのか、冬吾も少し厳しい表情だ。

『改良は進めているが、如何せん非殺傷エネルギーへの変換というところ、テルルじゃねえけど触媒の燃費が悪いのなんのって……そのサイズに収めるなら、どれだけ伸ばしても2.5秒だな。使い勝手は多少落ちるが、それでもいいって言うならサイズを増加させて3.5……いや、4.0秒までは保証する。どうだ？』

「マスター、どうしましょう」

デルタの提案を受けて、セニアは冬吾に意見を仰いだ。冬吾は少し考え込んでから、

「うーん……セニアには今の形を使い続けて欲しい。とにかく、慣れて欲しいんだ。だからとりあえずは今の形のままにしてください。このタイミングで使い勝手が変わっちゃうのは、惜しい」

『そう言うと思った。じゃあ、そういう形で調整しておくから、そうだな……明後日までには完成させておく。取りにおいで』

「了解しました、マスター・デルタ」

デルタとの通信が切れると同時に、セニアの膝の上で丸くなってい

た子猫が急にぴよんと地面に飛び降りた。

「あつ……」

子猫はにやあと鳴き、来たときと同じような気まぐれさで、どこかへ行ってしまった。

「ふふ、名残惜しそうですね」

「そう……でしょうか」

どこか寂しげなセニアの横顔を見て、冬吾が言う。

「じゃあ、リラックスも戦略の内つてことで、今からペットショップにでも行こうか？ セニアが好きそうな動物、いっぱいいるよ」

「あの猫さんと同じような動物がいっぱい……いい、行きたいですっ」

どこか語気を強めて答えたセニアの水晶のような目は、見たこともないくらいキラキラとしていた。

……

冬吾達が去つて数分後。

「はあ、だいぶ遅れちゃいました」

クラスの仕事で遅くなつた兔莉子は、コロシウムへの道を急いでいた。中庭の時計を見れば、もう30分も遅れている。兔莉子はバトルの面では何の役にも立てないが、横からみんなの様子を見ておく、というのは案外重要だと春樹が言っていた。曰く、「2人分の目があった方が、より多くの視点でものが見える」とのことだった。

不意に横から、にやあ、と鳴き声が聞こえた。

「あら？ あ、この間の」

ガサガサと草むらから出てきた子猫は、青蘭学園の周辺に住んでいる。前にお腹がすいたー！ とにやあにやあ鳴いていたところにたまたま兔莉子を通りかかり、ちょうど持っていたエサ（兔莉子は学校指定のバッグとは別に、動物たちのエサが入ったポシェットを持っている）を恵んでもらえたからか、やたらと彼女に懐いていた。

すりすりと兔莉子の足に擦り寄る子猫は、とんでもないことを言い出した。

《25秒！》

「え？」

《まえに兔莉子、やくにたちたいっていった！》

「は、はい。そうだったね」

《うりこたち、たたかう！ ぼとるする！ そのあいてのちつちやいこ、えねるぎーしよつと？ とかいうの、がんばってもぜんぶで25びようしかうてない！》

「え、え……？」

セニアのエネルギーショットは琉花の防御を破る鍵になる。だからその対策に苦悩していた春樹。

その答えは、持続力の無さだった。それを、

「も、もしかして、盗み聞きしてたってこと？」

《ぬすんでないよ！ どうどうとひぎのうえできいてた！》

こんな形で相手の情報を知ってしまうというのは、どうにもアンフェアな気がする。これではまるで、兔莉子が斥候を放って相手を諜報していたみたいではないか。

それに、こういうふうに知った情報をみんなに教えたら、みんなはなんて言うだろう。ズルい、汚い、そんなせこい手段で情報を仕入れてくるとは思わなかった——

「ど、どうしよう……」

兔莉子の心は自分の正義感とチームへの貢献、2つの間で揺れていた。

《そんなことより、おなかすいた！ なんかもってない？》

苦悩する兔莉子のよそに、子猫は脳天気になやあにやあ鳴いていた。

第9話 「あまり、失望させるな」

目の前に広がっていたのは、黒焦げになった部屋の内装。ひびの入った壁。割れたガラス窓。吹き飛んだテーブルと椅子。床に落ちてぐちゃぐちゃになったケーキ。あちこちでチラチラと様子を伺うように燃える炎。それを消すために天井のスプリンクラーから発せられる水。そして、酷い怪我を負って倒れた4人。

みんなが、転がっている。まるで、そこらへんの壊れた家具と同じように――

ひとりひとり助け起こす。おい、大丈夫か？ どうしてこんなことに？ 弱々しい反応の末、笑顔を浮かべ、動かなくなる。

心が、軋む。

心が、ぐらつく。

心が、裂ける。

嘘だ。やめてくれ。夢なら覚めてくれ。いつそ俺も殺してくれ。

そうだ。夢だ。これは夢だ。現実であるわけがない。あつていいはずがない。だってそうだろう？ あんなにも優しく、強く、美しかった女の子達が、こんなにも無残な姿になっていいわけがない。そんな残酷なことがあるはずがない。あつていいはずがないじゃないか。だから彼は目を閉じる。これは、現実のことじゃないんだ。だから、大丈夫。

絶叫した。

あまりの大きさに、喉が張り裂けるかと思った。鼓膜が破れるかと思った。頭上から降ってくる水を浴びながら、大声で吠えた。

眼前の事実を受け入れられなくなかった。受け入れられなかった。だから啞った。啞いながら泣いた。苦しみの絶叫を振り撒いた。

それは、愛。憎しみ。怒り。哀しみ。

それは、壊れた心から、いろんな感情が混ざり合って、濁流みたいに溢れ出ているかのようなだった。

.....

早朝、美海はランニングのために上下にジャージを着て寮を出よう

としていた。

春樹に、それとブルーミングバトル実践の授業で言われたのだが、当然ながらブルーミングバトルに出るプログレスには体力が要る。フィールドを走り回り、リンクを繋ぎ、エクシードを多用するための体力が。それは、プログレスが個々で身につけるものだ。決してαドライバ―頼りにできるものではない。

ブルーミングバトルの勝敗はαドライバ―の体力が決する。しかし、そこに追い込むためには、やはりプログレスの体力というステータスが非常に重要になってくる。だからこそ、多くのプログレスをバトルに投入する場合、それはルール上、痛覚フィードバック率の上昇というデメリットになって返ってくるのだ。

今回バトルに出るプログレスは、お互いに3人。しかし、向こうに実践を積んだアンドロイドが2人いるのに対し、こちらが一般人2人では、持久力という点で全くお話にならない。なので、琉花と相談して、毎日数キロメートル走って体力を付けよう、という結論に至ったのだ。

しかし、寮を出たとき、普段とは違うことに気づいた。琉花だけでなく、なぜか沙織もいる。普段はストレートの艶やかな黒髪は、運動するときにはポニーテールに結われていた。

「おはよ、みうみん!」

「おはよう、美海ちゃん」

「あれ?、なんで沙織ちゃんが?」

同室ながら、いないことに気づいていなかった。沙織は2段ベッドの上なので、確認していなかったのだ。

沙織は照れたように、

「私も今日から走ろうかなって思ってた……」

「もう3週したんだってさ」

「えっ……!?!」

美海達はランニングのために満月寮のある居住地区を歩いてみて、1週が大体1キロくらいになるルートを決めており、普段はそこを3週する。しかし、沙織はそこを既に3週走っていたというのだ。

「沙織ちゃん、ホントに体力あるんだね……じゃあ、もう入るの？」
「ううん。私ももう3週走るよ」

「で、でも……」

美海が心配そうな顔をすると、沙織は、大丈夫だよ、とニッコリと微笑んで言った。

「私、なんでか昔から体力だけはあるから。さ、走ろう！」

「……うん！」

しばらくの間、朝焼けに照らされた居住地区に、3人の走る靴音が響いていた。

……

数日後のある日、春樹は昼休みにカレンに呼び出された。

「えっと、一体何の用？」

呼び出される謂れが全く思いつかない春樹は、単純な疑問をカレンに投げかけた。

場所は校舎最上階の廊下の突き当たりだった。昼時どころか普通の時でも滅多に誰も来ない場所だ。

カレンの隣には、なぜか同じクラスの神風千鳥かななぎちどりもいた。ちよつと強気そうな目をした、面倒くさがりだが根は優しい黒髪の美少女だ。この学園でも珍しい、青蘭島で生まれた少女で、実家である青蘭島の中央にそびえる山の中に位置する青蘭神社で巫女をしていたりする。

カレンは複雑な——それでも普段通りの無表情に見えるが——表情で、話を切り出した。

「春樹はなぜ、私たちにチーム結成の話を持ちかけなかったのをごさいますか？」

「——っ！」

そう来るとは思わなかった。瞬間の焦りが、顔に出る。

カレンはΩプログレス。リンク率は60%後半と低めなもの、春樹とリンクができるのだ。そして、戦闘用アンドロイドであるカレンは戦闘経験がある。

対する千鳥は、『言霊を操る』という特殊なエクシードを持つ。千鳥はエクシードの出力そのものが低いが、その対価として、フレームを

ほとんど指定しない、特殊な脳波を持っていた。当然ながら春樹ともリンクができる。

しかし、なぜ今自分は——『マズい』と思ったのだろう。なぜ、弁解の言葉を探しているのだろう。

「そ、その……忘れてた、っていうか」

「嘘でございませう。あなたが今のプログラマ達と会っていたとき、私はそこに行つたでございませう」

「そ、それはその……その時はまだブルーミングバトルに出るつて決まつてなくて……」

「それも嘘でございませう。あの日、後から三島冬吾から2人がブルーミングバトルに出る事を聞きました。それで私は、その時に会つていたプログラマ達をバトルに出そうと考えているに違いないと得心したのでございませう」

ここまでされたら、もう言い逃れは不可能だろう。いままで口を閉じて俯いていた千鳥が口を開いた。

「ねえ……どうして？ 私があの時、ひどいこと言つたから？ だから、この学年の子は信頼できない……の？」

細かいことに頓着しない千鳥の性格上、その台詞は様々な思いが込められていた。それは、春樹も容易に理解できた。

そして、彼女らがあの時を知っているから、遠慮が——気遣いがなくなつてしまつたのだろうか。次に発せられた春樹の言葉からは、『思いやり』という名の暖かさが完全に滑り落ちていた。

「違ふよ。そんなんじゃない」

「——っ」

千鳥が息を呑む。カレンも表情を険しくした。

「そんなんじゃないんだ。俺はただ、きつと——どうでもいいだけ……お前らをバトルに出して、それで勝つて、あるいは負けて、一緒に喜んで、悔しんで、あいつらのことを無かつたことに……」

長いこと彼女らの事を話していなかつたせいとか、そう口にした春樹は、なぜか涙が込み上げてくるのを感じた。

「俺は……初めてのブルーミングバトルをあいつらと楽しみたかつ

た。頑張つて練習して、その成果をぶつけたかった。一緒に、笑いたかった……！」

自分でも、どうしてこんなに涙が、悲しみが、怒りが煮え立っているのか、全然わからない。1つだけわかるのは、今、自分の心に施したメツキが剥がれかけているということ。

行き場のない感情が、春樹の、自分でも覆い隠していた本心が、目を見開いて春樹の話を聞く2人に、そして春樹自身にも襲いかかる。

「俺は、今回のバトルなんて……どうでもいいんだ。きつと。俺の初めてのバトルはあいつらと出るバトルだ。それまでにやるバトルなんて——どうでもいい！」

最後の言葉は、悲しみを弾き飛ばすかのような絶叫だった。目をぎゅつとつぶり、一気に言い切る。そうしなければ、ズルズルと下の方へ引き摺り下ろされそうな気がして。

不意に、頬に熱を感じた。驚いて目を開ける。カレンが春樹の頬を平手で張ったのだ。

「……春樹、貴方様は、自分でバトルに出るためのプロGRESSを選びました。それを冒涇するということは、同じプロGRESSとして許さないのでございます」

厳しい口調で言うカレン。千鳥も、悲しげな顔を無理やり歪ませて春樹を睨みつける。

自分がないように見せかけて、どこまでも自分本位。罪悪感を無理やり正当化するために、他者を簡単に傷つける。カレンの言葉を受けて、ようやく再認識した。自分が、あまりにも醜い存在だということ。

しかし、カレンの行動にはその後があった。彼女は、春樹が二の句を継げないうちに、

「でも、貴方様の選択は貴方様のものでございます。考えを変えるつもりがないのですから——せめて、このくらいはさせてくださいませ」

ぎゅつ、と春樹を抱きしめた。その温もりに、弾き飛ばしたはずの涙が、溢れ出る。

「ごめんね、春樹。本当はあんなこと、言うべきじゃなかった。ほら、私ってバカだから……後先考えずに喋っちゃう。みんなこと、馬鹿にしてるみたいって気付かなかった。本当に、ごめんね……」

と、千鳥がつぶやくように言いながら春樹の頭を撫でる。

思えば、彼女らもこうやって春樹に、『個』たるものの無力さと愚かさを教えたのだ。

カレンと千鳥は自分なりに、『彼女ら』の代わりに果たそうとしていくのかもしれない。

「……カレンは、冬吾側だと思っただけ。セニア、妹なんだろう？」

「一から十まで承知で事を進めるあの馬の骨よりも、一だけ知って残りを足掻こうとする貴方様の方が魅力的でございます。無論、馬鹿すぎて呆れる時もあります」

「……そりゃ、どうも」

「要するにあんたは、あんたが思ってるほどバカじゃないし、あんたが思ってる以上にあんたを好いてる子は多いうてこと」

「それは……どうかな？ 俺、結構バカな自信あるけど」

「卑屈になるのは、馬鹿らしくありません。そういうことは、三島冬吾に任せるべきでございませぬ。貴方様は……貴方は、がむしゃらに前を向いて歩くべきです」

「それを、きつとみんなも望んでる、と思う」

春樹の涙は、止まりそうになかった。

決戦の日は、もう10日前にまで迫っていた。

……

矢のように時間が過ぎていく。

そんな、また数日後の放課後。春樹はグラウンドの脇をブラブラと歩いていた。美海と兎莉子が『神学』の専科を取ったらしく、また琉花と兎莉子が『魔法薬』の専科と取ったということで、せっかくコロシラムを使えるというのに手持ち無沙汰になってしまったのだ。冬吾に使ってもいいよ、と言ったら、

「ルールは守らないと。それに、専科が終わったら使うでしょ？」

とのことだった。なんとなく腹立たしいが、言っていることはごもつともである。その冬吾は、自身の用事で白百合島に行ってしまった。

——琉花と忍が魔法薬とか、なんかヤバいことに使いそうで怖いな……特に琉花は。

などと考えながら、グラウンドを通り過ぎる。

青蘭学園にはグラウンドのそばにアスレチックゾーンが設置されている。規模は小さいが、それなりに大きめなジャングルジムや、高校生が使う用のやたらに長い雲梯うんていなどがある。

その雲梯にぶら下がる少女がひとり。

「うわ、出た」

思わず春樹が声に出すと、その少女は、なんだという顔をこちらへ向けた。

「出た、とはなんですか」

大飯食らいのアンドロイド、テルルである。右腕で雲梯にぶら下がって懸垂していたらしいが、左手の方が、尋常ではない。

なぜなら、彼女は右手で懸垂する傍らで、左手では150キロのバーベルバーベルを持っていたためである。

「いや……よくやるよなあ、って思ってた」

「このくらい……当然、ですのっ！」

テルルは当たり前前だと言っているが、その右手の1点には、テルルの体重+150キロの重量がかかっているわけである。春樹は、自分がそんな状況になった時を想像してみて、腕が引きちぎれないのが不思議に思った。

1年の頃から、この雲梯はテルルのお気に入りであるが、既に彼女のせいで1回壊れているということは、知る人ぞ知る事実だ。一体どんなぶら下がり方をしたら壊れるのか。

——これもアンドロイドだからか。こんな腕で殴られたら、一発で死ぬだろ。

「こんにちは、神城春樹様」

「ん？ おお、セニアちゃんか」

テルルのあまりにもショッキングな光景に目を取られて、そばのベンチに座っていたセニアに気付かなかった。彼女はデータパッドをテルルの方に向けて、データを取っていたらしい。

セニアは、どこことなく浮かない顔をしている。正確に分かるわけではないが、カレンの妹機であるという以上、カレンとセニアの仕草がなんとなく似ていることが見て取れた。カレンが落ち込んだ時と同じように、微妙に俯いて上目遣いになっている。

「セニアちゃん。なんか落ち込んでるの？」

「……どうしてそう思われるのですか？」

「ん、カレンが落ち込んだ時と、なんか似てる気がして」

「……そうですか」

セニアはデータパッドを下げ、更に俯いた後、テルルに向かって言った。

「テルル。春樹様になら……その……」

「言ってみればいいんじゃないのですか？」

問われたテルルは、ごく素っ気ない声で答えた。彼女からしたら、それはどうでもいいという意味ではなく、セニアに任せる、という意味なのだろう。

「……春樹様、少々お時間を頂けますでしょうか？」

「え？ そうだな……うん、大丈夫だよ」

セニアが、自分の隣をぺしぺしと叩いて「どうぞ座ってください」と言うので、言われた通りにする。

彼女は数秒間黙り込んだあと、意を決したように顔を上げた。

「……マスター、は」

「ん？」

「マスターは、三島冬吾様は、セニアの事を信頼なさってません」

「え？」

セニアは藁にも縋るような顔をこちらに向けると、拙いながら言葉を紡いだ。

「マスターは、ユーフィリアやテルルやナナに……それと、貴方様に向ける視線を、セニアには向けて下さいません。マスターはチームの皆

を、貴方様を信頼さなっています。だから、その視線を向けてもらえないセニアは、マスターに信頼されていません」

目を見開いて驚く春樹は、反面、確かに、と思わざるを得なかった。冬吾は確かにセニアを溺愛している。休み時間など、わざわざセニアのクラスに行つて安否を確認してしまうほどだ。

しかし——その行動の根底にある感情は信頼ではない。いや、言い様によつては、信頼できないからこそ、とも言える。

セニアはまだ生まれてから活動している期間が1年程度だという。彼女が如何に初期からある程度のデータをインプットされて生まれたアンドロイドであろうと、その精神面において、彼女はまだ1歳なのだ。となれば、あの心配性極まる男がセニアを心配しないわけがない。言い換えれば——あの心配性は、一般人レベルで行動できる1歳児なんかを信頼できるわけがない。

春樹が返答に困っていると、セニアは春樹に問い掛けてきた。

「春樹様。どうすれば、マスターはセニアを信頼してくれるのでしょうか。セニアは何をすれば、マスターの信頼を勝ち得ることが可能なのでしょうか。強くなれば、ちゃんと与えられた役割を全うすることができますか？」

それは、必死の問いだった。

だからこそ春樹は、心の中に芽生えた感情に、狼狽えずにはいられなかった。

お前が未熟だから、無理だろ。冬吾はお前を信用しない。

彼女の揺れる心を、言葉で煽り立てる。マスターである冬吾への忠誠心を揺らがせ、チームに亀裂を入れる。

可能だ。しかし、そんなことをしていいわけがない。第一、テルルがすぐそこにいるだろう。

だが、これは紛れもない事実なのだ。

だから春樹は、当たり障りのない言葉を選んで言おうとした。が、そのテルルに、

「思つてることを、正直に言つてやって欲しいですの」

と言われた。しかし、言つていいのか。この感情は、確実にセニア

を傷つける。それでもいいのか。

「……テルルは、なんて答えたの」

「もちろん、貴方と同じ回答をしましたよ。でもセニアは受け入れられなくて。冬吾がもつとも信頼する貴方の本心を聞かせてやることは、大事だと思っんです……のっ」

テルルは一旦雲梯から降りると、バーベルを左手から右手に持ち替え、ジャンプして今度は左手で雲梯を掴んだ。

「……そう」

春樹は心を決めると、セニアに向き直った。

「……冬吾はな、めちやくちや心配性なんだ」

「？」

「あいつは親から愛情らしい愛情を注がれてこなかったって言うだけ……多分、そうだったから、セニアちゃんのことを、愛情を込めて育てたいんだと思う」

「あい……じょう？」

「セニアちゃんは、まだ活動し始めて1年とかなんだろ？ 冬吾は、そんな幼い君を全面信頼することは、決してないだろうな」

それを聞いたセニアは、いよいよ絶望の表情になって俯いた。しかし、春樹は言葉を続ける。

「だけどな？ それは、決してセニアちゃんが信頼できないだけの子だからじゃない。むしろ逆だ」

「逆……？」

「そう。セニアちゃんが成長した暁には、君はきつと冬吾の信頼を大いに勝ち得ると思う。だから、冬吾は今、君に余計な重石を乗せたくないんだよ。信頼されたら、応えなきゃいけないからな」

最後の一言は、きつと自分にも向けていた。セニアは顔を上げて聞き入っていた。

「だからね、セニアちゃん。対戦相手に塩を送るっばいことになるけど……そうだな、冬吾を信じて頑張れ。冬吾に認められたいっていう思いがあるなら、それを掲げて頑張るんだ。そうしていれば、あいつも必ず、セニアちゃんが信頼に値する存在になってるってことに気づ

くはずさ」

言っていて、自分が嫌になる。

自分は、信頼に応えられているのか。美海達が仮に、もし仮に、自分のことを信頼してくれていたのなら。自分は、それに応えるほどのことができているのか。

——できて、ねえよな……。

カレンにあんなことをぶちまけるくらいなのだから、結論から言えばそういうことなのだ。信頼したくないのは、もしかしたら自分も同じなのかもしれない。その動機は、余計な重石を背負いたくないから——即ち、信頼し返されるのが嫌だから——

「……セニア、頑張ってみます。ありがとうございました。あの、どうかこのことは、マスターにはご内密に……」

「ああ、分かってるよ。頑張れ」

セニアはペコリとお辞儀をして、決意を新たにしようだった。テールも微笑んでいる。

対して、春樹は——

——偽善者。

……………

矢のように時間が過ぎ、気づけば、ブルーミングバトルの前日だった。

今日はお互いに最終調整ができるように、フィールドを半分ずつ使う予定だ。しかし、冬吾が用事で遅れるとのこと、向こうのチームはまだ来ていない。なので、現在はこちらのチームだけでフィールドを使っている。

美海と琉花は動きがそれなりに様になってきた。戦闘するときの様々なことを忍に教わっているため、それぞれ自らのエクシードと合わせて、結構まともにやりあえそうな気がしてきた。本来なら、そこから辺をサポートするのも春樹の役目のだが、戦闘云々について語れないのは春樹も一緒だったので、忍に一任していた。

「やー、結構上達するもんだねー!」

美海が満足そうな声を上げた。ホバリングの腕前はかなり上がり、今ではリンク無しでも安定して浮いていられる。もちろん、高速で移動するとなればまだまだ粗が目立つものの、少なくともユーフィリアの攻撃を回避することはできそうだ。

「だねー。私もなんとなく様になってる気がするぜー」

返答する琉花は空中に浮かべた水球を何個にも分裂させて遠くに飛ばしては、それを回収してひとつの球にまとめる、ということを繰り返していた。つい1週間前、エクシードのレベル上昇によって、干渉することのできる範囲が広がっていることに気付いたため、その練習を急遽行い、ここまでモノにできたというのだから、琉花の飲み込みの早さには感心させられた。

「うむうむ。2人とも、だいぶ動けるようになってきたでゴザルな。これなら拙者ひとりで奮闘せざるを得ないという状況を回避できそうでゴザル」

忍は既に戦闘が完成の域にあったので、この数日間もっぱらエクシードの質を高めることに集中していた。自分の忍術との合わせ技もいくつか開発しており、それを見せられる度に、その多芸さに舌を巻かされた。

「みんな、すごいですっ。ちゃんと動けてます！」

春樹の隣で3人を眺める兎莉子も声を弾ませている。ここどころ、時々何か言いたげな表情になるが、その度に「どうしたの?」と聞くと、「な、何でもありません、ごめんなさい!」となってしまう。しかし、それ以外の時は本当に良くみんなの様子を見てくれて、春樹も気付かないような場所に気付いてくれることもあった。現に、琉花のエクシードの干渉範囲拡大について最初に言及したのは兎莉子だ。

春樹も、かなり満足いく出来に仕上がったと思う。正直、嬉しい。しかし、カレンと千鳥に励まされてから、そしてセニアの相談に乗った時から、胸の奥にしこりが出来たように、時々思いがつかえることがあった。

自分の発した言葉と、自分の取る行動のギャップ。

セニアに『信じて頑張れ』などと言っておきながら、自分はやっぱり

り心のどこかで美海達を信じきれていない。そのギャップに、心がぐらついているのだ。本人が自覚している以上に。

でも、そうだ。別に美海達だって春樹のことを全面信頼しているわけじゃないだろう。流石に出会って2ヶ月、琉花や忍に至っては1ヶ月も経っていない。そんな奴のことを一方的に信頼するなんて、流石にない。だから、自分もそうで大丈夫だ。

そんな危うい中で保たれているバランスは、最悪のタイミングで崩壊を迎える。

「これなら明日も結構頑張れちゃうかもね！」

「そうだな。向こうは強敵だけど、頑張ろう」

一旦練習を切り上げて美海達がフィールドから出てきたので、春樹もαドライバーゾーンから出てリンクを切断する。

「しっかし、ハル先輩がいい人で助かったよー！」

「え？」

琉花が言う。それを聞いた春樹の心が、軋む。

「なんかさ、去年はヤバいαドライバーがいたらしいじゃん？ 無理

やりチームに引き込もうとしたり、すぐにこう……なんつーか、エツ

チなことしようとするαドライバーが。なんか、今はいなくなっちゃったんだっけ？ それを察の先輩から聞いて、ハル先輩は大丈夫かなー、って思ってたけど、めっちゃ紳士でいい人だったからね！」

「や……ちよつと言い過ぎじゃない？」

「あ、それ、拙者も思ったでゴザル。まあ、そんな不貞な輩と比べるまでもなく、春樹殿は殿方として非常に誠実な方だなあ、と思うでゴザルがね。春樹殿のような殿方の忍びになれて、拙者、結構嬉しかったでゴザルよ」

「そう……あ、ありがとう」

同意する忍。心が、ぐらつく。

「わ、私も……その、怖い人じゃなくて良かったですよ。みんなのことも色々考えてくれるし、それどころか、バトルじゃ役に立っていない私のことまでちゃんと見てくれて……私、春樹さんのような優しい男性に出会えて、本当に幸せです！」

「幸せって……大げさな」

心底嬉しそうに微笑む兎莉子。心が、裂ける。

「だよーねー！ 春樹くんが私たちのことちゃんと信頼してくれてるから、私たちみんな、ちゃーんとエクシードを使いこなせるようになったし、私たちも全部委ねられてるんだもんね！ 春樹くんにはホントに感謝だよー！」

にこやかに言う美海。それに頷く3人。

カレンと千鳥は、そしてあの4人は。春樹の心情を理解した上で、すくい上げてくれた。

しかし、この4人はそうではない。教えていないから当たり前なのだが、春樹を理解せず、自分の思いを春樹にぶつけてくる。

いい人。

誠実な方。

優しい男性。

信頼してくれてる。

全部委ねられてる。

つまり、間違っていたのは――

心が、碎ける。

「やめろー！」

その大音声だいおんじょうに、美海達がびくりと震える。春樹は、無意識に叫んでいた。

「やめろよ……そんな、人が優しさだけで出来てるみたいなのを言うのは……俺は……」

ああ、こんなことを言うつもりはないのに。言いたくなんかないのに。言っただけいけないのに。ここまで苦しいのは自業自得なのに。なのに――頭では理解していても、心は。

壊れた、心は。

「お前らのことなんか、信頼してない！ 俺は、お前らに信頼されるような人間じゃない!!」

絶叫するように言葉を叩きつけると、春樹はそのままコロシアムのゲートに向かって駆け出した。美海達の制止を振り切り、逃げるため

に。

頭では理解していても、

心は、これっぽっちも言うことを聞かない。

……………

コロシウムへ向かう冬吾とそのチームメンバーの横を、ものすごい勢いで春樹が駆け抜けた。

「は、春樹？」

すれ違う直前、冬吾が問いかける。しかし返答はない。

「待って、春樹くん！」

その後ろから、美海と琉花、忍が追いかけてくる。それだけで冬吾は——いや、ユーフィリアも、何が起きたのかを全て察してしまった。彼女らが春樹に何をしたのか——

「待って、みんな」

冬吾は腕を上げて美海達を制止する。

「なんで止めるんですか！ 冬吾先輩！」

止められた怒りからか、涙を浮かべて叫ぶ美海に、冬吾はあくまで落ち着いて答える。

「今は、1人にさせてやってくれ。コロシウムに行こう。そこでみんなに、全て話すから」

……………

春樹が中等部にいた頃、春樹は、自分と相性のいいプログレスが1人もいなかった。無論、それなりに社交的な性格をしていた春樹はプログレスの友達も多かったが、自分はブルーミングバトルとは縁遠いαドライバーなんだな、と信じていた。その頃の彼からすれば、高校2年生なんて遙か彼方の時間で、実感がわかないということもあった。そういうαドライバーが1人くらいいたって、別にかまわないだろう。それも個性だ、と。

そう思い込んでいた。心の叫びを無視して。

「そんな春樹には、高等部1年に上がると同時に、相性のいいプログレスが4人もできたんだ」

冬吾は、フィールドの人工芝の上にみんなを座らせ、自分も座って話し始めた。

冬吾の目から見て、最初は、なんだかギスギスしてるなあ、と思っただ。そのうちの1人、黒の世界出身の子とのリンク的な相性は特に良かったのだが、性格的な相性はそれほど良くなかったらしく、妙なとっかかりから、いつも言い争いをしていた。

それでも、その言い争いは互いを罵倒するような醜いものではなく、むしろ如何に相手をうまく言い負かすかのバトルみたいで、見ている方も面白かったし微笑ましかった。何より、本人らも言うほど互いのことが嫌いでは無いようだった。むしろ、互いを思っているからこそ、その感情がすれ違っているようでもあった。周りからすれば「早くくっつけよー」と、もどかしいことこの上なかつた。

残りの3人とは普通に仲がよく、なんだかんだ言って春樹たちは5人であることが多くなった。無論、言い争いはよくしていたが、それも含めて『心地よかつた』のだ、と春樹は言つた。

「1年の頃、彼はよく言つたんだ。『俺のチームができたから、俺はこのチームで、お前のチームと一番最初にバトルする』って。僕は彼らが最高のチームになるって思つた。」

冬吾は昔を懐かしむように言つた。そんな語らいをしたのも、遠い昔のように思える。

「春樹はああ見えて、随分と臆病で、ちよつと自己中心的な節がある。なんだろうな、自分の保身に走りがちっていうか。そんな彼が、自分のことなんか省みずにがむしゃらに走れたんだ。彼女らのためだったから」

美海は、少し春樹に依存しているところがある。それと同じように——いや、それよりもはるかに——春樹はその4人に依存していた。だから、自分を省みることなく一生懸命になれていた。

その時まで。

「でも、彼の誕生日に——」

.....

いつか来た島の東、真つ白な灯台の前に腰掛けて、春樹は暮れなずむ海を眺めていた。

胸を支配するのは、ほとんどが後悔だった。なぜ自制できなかった。あんなこと、言わなければ良かった。言わずに済んだ。なのに、言ってしまった。

チームを壊した罪の意識、そして、明日への恐怖――

2か月前にここに来たときと、まるで変わらない。変わっている点を強いて挙げるとすれば、それは自分が失ったものが、誰によって失われたか、ということだろう。

あの時は、絶対に許すことのできない悪に。

そして今は、大嫌いな自分に。

その時のことが、嫌でも頭を支配し始めた。

.....

「今日はありがとな、冬吾」

「いやいや、こつちこそ楽しかったよ」

いよいよ本格的に寒くなってきた11月の暮れ、昼下がりに、春樹は冬吾と自宅マンション前で別れるところだった。

「ユフィもテルルも、直接お祝いできなくてごめんねって言ってたよ」

「別に気にしねーよ。まあ、先に会ったらありがとうって言つといてくれ」

「了解」

春樹は、自分の親友に微笑みかける。

「……今朝、さ。十和とわから手紙が来てたんだ。バースデーカードが」

「へえ、十和に教えてたんだ。彼も律儀だね」

「でも、俺、あいつの誕生日知らなくてさ……しかも、十和だけじゃなくて成未なるみも書いてくれててさ。俺もお返ししたいなあって」

「じゃあ返事の手紙出しなよ。『誕生日いつ?』って」

「でもさ、それで過ぎてたりしたら、なんか恥ずくない?」

「恥ずかしくないよ。ま、頑張りな」

ばん、と冬吾に背中を叩かれる。その感覚は、普段よりも心なしか

心地よいものだった。

「……俺、幸せ者だな」

「そだね。でもこれからもっと幸せ、なんでしょ？」

「だな……まあ、プリエがまた変なことやって、ケーキが爆発してなきやいいけど」

「美波ちゃんとセーレちゃんがいるし、大丈夫でしょ」

2人して軽口を叩いて笑い合う。

「それじゃ、またな」

「うん、楽しんできてね」

そう言って、冬吾と別れる——瞬間。耳を裂かんばかりの爆音が轟いた。同時に、目の前のマンション——春樹の自宅マンションの3階の窓ガラスが、内側から砕けて路面に降り注いだ。

「っ！ 危ない！」

冬吾が咄嗟に春樹を庇い、また春樹も身をかがめてガラスから身を守った。そこから中から悲鳴が聞こえる。

——今の音。それに、場所。

3階の突き当たりに部屋。マンションの貸し部屋。彼女らが春樹の誕生日パーティを開くために借りた、部屋——

「ま、待って春樹！」

冬吾の制止など、耳に入らなかつた。一目散にマンションに駆け入り、オートロックを解除して、自動ドアが開くのを待つのももどかしくそれをこじ開け、エレベーターなど待っていられず、階段を駆け上った。途中にいた、警戒状態の警備員を後ろからなぎ倒し、その怒りの声に耳もくれず、ただ走った。そして、予定の部屋、内側から吹き飛んだように転がるドアを踏み越えて部屋に入った。

目の前に広がっていたのは、黒焦げになった部屋の内装。ひびの入った壁。割れたガラス窓。吹き飛んだテーブルと椅子。床に落ちてぐちゃぐちゃになったケーキ。あちこちでチラチラと様子を伺うように燃える炎。それを消すために天井のスプリンクラーから発せられる水。そして、酷い怪我を負って倒れた4人。

「お……おい、なんだよ、これ……」

みんなが、転がっている。まるで、そこらへんの壊れた家具と同じように――

「――っ！ み、ミミミ！」

我に返った春樹は、一番近くに転がっていた身体を抱き起こす。瞬間、ぞつとした。右腕がない。断面からは大量の血液と、微弱な電気が流れ出ている。

「は、ハル……ご、ごめんね。ミミが、ちゃんと、見え、て、れ ば……」
「み、ミミ……」

青ざめた顔で弱々しく、それでも気丈に笑顔を浮かべた彼女は、残った左手であちこち欠けたバイザーを下ろすと、そこに文字を表示させた。『Happy Birthday HARUKI!!』――

その表示が明滅し、薄れ、消えた頃には、彼女の意識もまた途絶えていた。

心が、軋む。

「プリエ……プリエ！」

何を考えていいのかわからなくなつて、動かなくなつたミミの身体をそつと床に下ろすと、また目に入った身体を抱き起こす。新雪のように綺麗な白だった翼は黒く煤け、先端に火がついていた。慌ててそれをはたいて消す。最早熱も痛みも、感じない。

「はる、き、さん……私、ケーキ、ちゃんと、作りました……あんなに、なつちやつて、ごめんなさい」

薄く笑んだプリエは、残念そうに、床に落ちてぐちゃぐちゃになつたケーキに目を向けた。喉から漏れ出る声は、綺麗な鈴のような声ではなく、死に際のような掠れ声だ。

「そんなの……どうだっていい！ なんで！」

「春樹さん、は……私の作った、ケーキなん、て、どうしても、いいんですか？」

「なっ……違うよ！ でも！」

「じゃあ、まっつて、ください。新しいの、作ります……ああ、でも、まずは、そうですね……こつちが先、でした」

痛みに顔をしかめたプリエは、最後の力をうんと振り絞つて笑顔に

——みんなを癒し続けた笑顔になり、

「お誕生日、おめでとうございます……」

そして、力尽きたようにぐったりとした。春樹が揺すって、意識を戻そうとするが、反応はない。

心が、ぐらつく。

頭が半分狂い始めたのか、春樹はプリエの身体を優しく床に横たえ、テーブルの下敷きになって弱々しく蠢くものを、必死になって助け起こした。

「セーレ……セーレ！」

弾き飛ばされた食器の破片で全身が傷だらけで、チャームポイントの頭の上の猫耳、その左側に白い陶器の破片が突き刺さっている。慌ててそれを引き抜くと、背筋が凍った。思わず声を上げてしまうほど、血液がどつと溢れてきた。

「い、痛い……痛いよ、春樹……」

「せ、セーレ！ 大丈夫か!? なんで、こんなことに……」

受け入れたくない。春樹がセーレに問いかけると、彼女は苦悶の表情で、

「キッチンの下が、爆発した……それだけ……」

ハツとしてキッチンの下を見ると、そこは完全に破壊され、黒く焦げ付いている。

しかし、その破壊は、キッチン下だけにとどまらず、そこら周辺にも及んでいる。そんな強い爆発が起きたのなら——！

「はる、き……誕生日、おめでとう……それと、ね、ずっと、言いたかったの、言わせて……」

「セーレ……う？」

傷ついた彼女を見たくない。でも、視線は勝手に吸い寄せられる。セーレは、見たこともないくらい幸せそうな表情を浮かべた。

「だい、すき、だよ。春樹」

そして彼女もまた、動かなくなった。その顔には、最後の笑顔の名残が、刻まれたままだった。

傷さえ見えなければ、眠っているかのように安らかな顔で——

心が、裂ける。

「み、美波……」

春樹は、最後の身体に飛びついた。息が一気に上がる。彼女の脇腹から、椅子の脚が突き出ていたから……

「美波！ 大丈夫か!？」

そんなはずはないのに、聞かすにはいられなかった。揺ると傷口を広げてしまうかもしれない。

彼女は、答えなかった。ただ苦しそうに顔を歪めたまま、悪夢にうなされているような顔のまま。あの暖かな笑顔はどこにもない。苦しみに彩られ、黒く煤けたその頬に、一滴、雫が落ちた。春樹の、涙だった。

嘘だ。やめてくれ。夢なら覚めてくれ。いつそ俺も殺してくれ。

春樹は美波の顔を見下ろしながら、漠然と思った。

そうだ。夢だ。これは夢だ。現実であるわけがない。あつていいはずがない。だってそうだろう？ あんなにも優しく、強く、美しかった女の子達が、こんなに残虐な姿になっていいわけがない。そんな残酷なことがあるはずがない。あつていいはずがないじゃないか。だから春樹は目を閉じる。これは、現実のことじゃないんだ。だから、大丈夫。

春樹は安心したような表情になった。そして俯き、ぐつと奥歯が砕けそうなほど噛み締めて。

心が、砕ける。

絶叫した。

あまりの大きさに、喉が張り裂けるかと思った。鼓膜が破れるかと思った。頭上から降ってくる水を浴びながら、大声で吠えた。

眼前の事実を受け入れられなかった。受け入れられなかった。だから噛った。噛いながら泣いた。苦しみの絶叫を振り撒いた。

それは、愛。憎しみ。怒り。哀しみ。

それは、壊れた心から、いろんな感情が混ざり合って、濁流みたいに溢れ出ているかのようだった。

……………

必死になって追いついた冬吾は、戦慄が走り抜けるような音を聞いた。

破壊されきった部屋の中で、美波を抱き上げた春樹が発する、声。その日、その時、冬吾は始めて知った。自分が遠い未来に、幾千、幾万と聞くことになる、その音を。

人が真に希望を失ったときに上げる、魂の声を。

壊れた心とその散り際に上げる、絶望の叫びを。

混沌に染まった世界の悲鳴を。

.....

「やっぱり、ここにいた」

「.....」

気づけば、冬吾が後ろに立っていた。振り返ると、冬吾は春樹にバッグを放った。

「忘れ物だよ」

「.....そうか」

特に感情の籠らない声で返事をする、投げ渡されたバッグを脇に置き、再び視線を海へと戻した。夕日は既に沈み掛け、辺りは薄暗くなっている。我ながらなんて子供っぽい――

「みんなに、全部話した」

「――っ!？」

耳に入ってきたその台詞を理解したとたん、サツと頭に血が上がった。振り返って立ち上がった.....かと思うと、春樹は自覚のないまま、冬吾の胸ぐらを掴んでいた。

「な、なんで!？」

「どうせ言っただろうと思ったからだよ。案の定だったね」

「余計なお世話だ!」

「お前に、そんなこと言われたくない」

冷たい声でそう言われて、手を振り払われる。次の瞬間、視界が勝手に横を向くのと同時に、頬に熱を感じた。カレンに叩かれた時よりも、ずっと深い熱。――冬吾に、殴られた。

地面に倒れる。冬吾は、聞いたこともないほど冷たい声で言った。

「あまり、失望させるな。もう少し強いかと思ってたけど、とんだ期待はずれだったよ。まさか、ここまで腰抜けだったとは思わなかったよ」

呆然としていた頭の中が、徐々に赤く染まっていく。赤く。赤く。「もう立ち直れたかと思ってたのに。美海ちゃん達のおかげで、傷が癒えてると思った。でも実際は違ったね。むしろ、彼女らを大きく傷つけた」

どうしてそんなに辛い言葉を吐くんだ。どうして俺を傷つけるんだ。

そんな、女々しい疑問の裏で、グラグラと煮え立つ怒り。

「お前がみんなになんて言ったか、聞いたよ。『信賴してない』だとか『信賴されるような人間じゃない』とか言って、逃げ出したらしいね？

雄馬先生が言ってたことを忘れたの？ どれだけプログレスを『信じられるか』が大事なのに。お前はみんなを信じて、理解しようとしなかった。それに、信賴されるべきかされないべきかなんて、お前が決めることじゃない。付け上がるな」

付け上がるな。

始めて冬吾の方を見た。その顔は、単純な怒りを浮かべていたのでなかった。薄い怒りと軽蔑——その裏にはつきりと見える、悲哀。春樹の立場を理解している——違う、している気になっているからだ——！

「黙って聞いてれば、ズケズケとものを言うなあ……」

ゆらり、と春樹が立ち上がる。春樹には生憎、武器があつた。今この瞬間だからこそ冬吾を痛めつけられる、武器が。

「プログレスを理解してねえのは……信じてねえのは、お前も同じだろ……?」

「何?」

訝しげに眉をひそめる冬吾。春樹は内心で彼女に謝りながら、その名前を口に出す。

「セニア!!」

「——っ!」

「セニアちゃんだ。お前が一切信頼してねえのは……信頼しようともしてないのは」

「それは……仕方がないじゃないか。セニアはまだ幼い——」

「セニアちゃんは、お前に信頼されたいって言ってたぞ。俺なんかに相談するほど思いつめて——そうだったのは、お前が無意識に彼女を拒み続けてたからじゃねえのかよ?」

「そんなことは……!?!」

冬吾が言い訳に走った瞬間、春樹は冬吾に向かって飛びかかり、爪が手の平に喰い込むほど固く右手を握り締め。思い切り振るった。

ごつつつ、という嫌な感覚。一生忘れない。人の肉体を傷つける感覚。

冬吾の頬を、殴り飛ばした。

「それを言い訳にして、あの子を信じねえお前は、腰抜け以外の何なんだ!?! いい子ちゃんぶって笑顔であんな幼い子を傷つけて、そんな口で俺を馬鹿にするなんて、よくできたな!?!」

今度は、春樹が冬吾を傷つける番だった。溢れてくる感情を言の葉の刃に変えて、切りつける。

「俺は怖かった! みんなを信頼して、みんなに信頼されて、それでも、みんな失って——! もう嫌だった! 二度とあんな思いしたくなかった! 大切にならなきゃ、失ったって何とも思わない! だから俺は、みんなを最後のところで拒み続けた。みんなが理解されたがってたって、わかってたんだよ! わかってるんだよ、自分が最低野郎だったことは!」

口から溢れる、自分の本心。カレンによってむき出しにされた、始めてのブルーミングバトルは彼女らとが良かったとか、そんなものさえ建前に過ぎなかったのだ。心を支配していたのは、結局のところ、単なる恐怖だった。

「でもお前はどうか!?! 結局お前はセニアちゃんの何を理解してた!?! 彼女の本心を、お前は理解してたか? できてなかった! しかし、お前は彼女が『理解されたがってる』ことすら理解できなかった! お前はあの子を信用しないで、しかも彼女の本心を探ろうともし

なかった！ お前お得意の『分かっていますオーラ』で彼女のことをずっと拒んでた！」

怒鳴る声は、半分絶叫に近かった。いつの間にか、目からは涙が溢れ出していた。悲しみではない。そして恐らく、怒りでもない。

「それとおんなじだ！ お前は俺を理解できない！ 俺を分かったよいうな気になって説教垂れてんじゃねえ！ お前には理解できない！ 始めて全力を出させてくれた女の子を4人も！ いっぺんに失うなんてことは！ どんな気分か理解できるか!? 今お前の周りから、ユーフィリアもテルルもナナも、セニアちゃんも！ 全員大怪我負って生死を彷徨うような状態になって、その気持ちを考えられるか!？」

冬吾の表情が苦悶に歪む。春樹は、もう歯止めが利かなかった。

「無理だ！ これはな、なってみなきや理解できねえんだよ！ 何もかも失って、たった独りになるってことは！ だから……二度と俺の気持ちを理解しようとなんかするな！ お前にできるのは、俺だけじゃねえ、誰もそのことを理解した気になることだけだ！」

「黙れ!!」

冬吾も、黙っているだけではなかった。立ち上がり、春樹の胸ぐらを掴む。

「僕は理解したいと思ってる。お前のことも、みんなのことも、勿論セニアのことも……わかって理解しようとしなのお前より、はるかにマシだ！」

その怒声に焚き付けられて、春樹も胸ぐらを掴んだ。

「俺は理解しようと思えばできる。みんなのこと、理解できる！ 理解して欲しがっていることがわかるからだ。理解して欲しい思いを無視して、理解できるどころだけ一方的に理解してるフリをするお前よりも、はるかにいい！」

2人とも息を切らして、言いたいことを全て言い切った。ありありと敵意を込めた視線をぶつけ合うこと数秒の後、どちらからともなく手を離れた。

冬吾はフラフラと背後に転がっていたバッグを手に取ると、それを乱暴に肩にかけ、春樹の方を向いた。

「明日、僕はお前を負かす。みんなの思いを知ってるのにそれを拒んでる……お前みたいなやつなんかには、負けない」

春樹はその視線を真正面から受け止め、逆に太々しくに笑った。「それはごっちのセリフだ。そもそもみんなを知ろうともしないし知ることもしない……お前なんかには、負けない」

また数秒間視線が交差し、冬吾は背後を向いて、岬を立ち去った。春樹も振り返り、海を見つめる。

……………

夜。美海から貰ったスカイブルーのマグカップに氷水を入れて晴れ上がった頬を冷やしていると、携帯電話が鳴った。美海から、電話だ。一瞬手が強ばったが、それを無視して電話に出た。

「……もしもし?」

『あつ、春樹くん!』

美海は、心底心配そうな声だった。

『あのね、私、チームの代表で電話掛けるの。相談して。それで、昼間はごめんなさい。春樹くんのことをなんにも知らないで、無神経なこと言ってる……』

「なん……だ。別にいいよ。悪いのはお前らじゃない。何も話さなかった俺だ」

美海に対しての申し訳なきが、心の底から湧いて出た。

「なんにもかも隠してて、ごめん」

春樹の謝罪を聞いた美海は、数秒黙りこんだ後、声を発した。

……………

「あのね、私、夢があるの」

『夢?』

「うん。春樹くんが見せてくれた、夢」

満月寮から外に出た真正面、海岸線の道路のガードレールに寄りかかって、美海は満月を見上げた。

「私は、高く飛びたいの。誰よりも、ずっと」

自分の素直な思いを、たどたどしくも言葉にして、春樹に伝える。

「私も、春樹くんに隠してた。私もね、怖かったんだ。みんなに嫌われ

るのが」

『美海が、か?』

春樹が意外そうな声を出した。美海はくすくすと笑う。

「そうだよ。私、中学生まではみんなに嫌われてたから。だって嫌じゃん。自分の周りに変な力持つてる奴がいたら」

『それは……』

夜風に、普段はツインテールに結っている、美しい茶色の髪が靡^{なび}く。

「私はね、昔から思ってた。このエクシードを使って、みんなから逃げたかった。だあれもない、ひとりきりの場所、空に逃げたい。誰よりも高く飛べれば、誰もついてこれない。ひとりになれるって、そう思った。でもね、春樹さんとリンクしてみて、わかったの。ひとりじゃられないってこと」

美海は満月を見上げ、満面の笑みになる。

「私が空高く飛ぶその時、春樹さんに……ううん、違う。私は、大好きなみんなと一緒に、飛びたいの」

……

「……そうか」

春樹は、美海の思いを聞いて、不覚にも涙ぐみそうになった。しかし、それは気合で堪える。

そして、新たな志を胸に、それを言葉に。

「なら、俺も……美海と一緒にいきたい。とりあえず、最初の晴れ舞台には俺が連れて行くから……その後は、俺を引っ張ってくれるか?」

『もちろんだよ! 明日、頑張ろうね!』

美海の元気いっぱいな声を聞いて、少し心が凪いだ。おう、じゃあ明日遅刻すんなよ遅刻常習犯。と少し冗談をかまして2人で笑ったあと、電話を切った。

ベランダに出て、満月を眺める。美海も、この月を眺めているのだろうか。

「絶対に負けない」

口に出して、心を入れ替える。もう、いたずらに心を扱う時間は終

わった。

その胸にあるのは、真摯な思い。ただ、冬吾に勝ちたい。そのために、残されたわずかな時間すら絶対に無駄にしない。

美しく月の光を弾く波は、ただ静かにさざめき、春樹を見守っている。

第10話——それでもわたしは、

いよいよ、ブルーミングバトルの当日になってしまった。

美海は朝、普段よりも早く寮を出た。

緊張はしている。しかし、それでもガチガチで何もできないというわけではない。頭は当然のように不安を訴えているが、心は不思議と凧いでいた。

——よし、これで遅刻はなさそうだね！

遅刻への不安というのはもちろんあったのだが、春樹との壊れた関係性もまた、当然ながら不安になる要素だった。しかし、美海は心配していない。昨晚電話で彼と話し、彼の声を聞いて。美海にとって、それだけで良かった。彼が美海達の前を去った時に発した悲痛な声は聞くに耐えない痛々しい響きを持っていたが、電話で聞いた彼の声は、普段通り——いや、普段以上に静かで、落ち着いていた。その声が、美海は好きだった。

——まずは、やっぱりごめんなさいだね。

電話での謝罪など、謝罪のうちに入らない。直接会って謝るのが大事だ。美海はそう思っているし、みんなもそうだと言っていたので、まずはみんなで謝ろう。そうすれば、きつとブルーミングバトルだつて、悪い結果にはならないはずだ。

だが、どんな時も、理不尽な暴力はある。

朝の居住地区は、人通りが少ない。現に、今すれ違った男性2人が最後に、美海の視界から通行人がいなくなつてしまった。

突如、背後から気配。警戒する暇もなく、美海の顔に布が当てられる。

その芳香を思い切り吸い込んでしまった美海の意識は、容赦なく闇に引きずり込まれた。

……………

「うわあ、腫れてるね」

「痛そうでゴザルな。誰に……なんて聞くまでもないでゴザルな」

「あわわ、し、志賀先生呼んできますっ！」

いよいよにぎやかになってきた青蘭学園ブルーミングコロシウム。春樹は冬吾に殴られて腫れ上がった頬をさすりながら、会場をウロウロしていた。

春樹たちの試合は午後からだだが、午前中は青蘭大学のαドライバーがバトルを行うため、こうして午前中からコロシウムに足を運んでいる。

琉花と忍と兎莉子は、まず春樹に会うなり深く頭を下げて、謝罪した。春樹としてはもう済んだ話なのだが、本人達的には、頭を下げなきや済まないらしい。しかし、昨日も思っていたとおりむしろ謝るべきはこちらだ、ということ春樹もちやんと頭を下げた。

「俺、今日のパトルに、絶対勝ちたくなつちまったんだ。俺、頑張ってみんなのことを信じる。信じきる。みんな、力俺を信じてくれるか？」

そう発した言葉に含まれた一抹の不安は、みんなの満面の笑みによる肯定で見事に吹き消された。

美海の姿は見えないが、琉花と忍と兎莉子が言うには、彼女は先にお察を出たらしい。先にコロシアムの席を取っておいてくれたりしているのだろうか。しかし、それならメールをくれるなりSMSに何かしら書き込むなりしていてもいいはずなのだが、そんな様子はない。(ひよつとして、食べ歩いてんじやねえだろうな?)

今日は『スプリング・ストライクショー』。ある種のお祭りでもあるので、コロシアムの周りには、普段商業地区で屋台を構えて商売している店(美海が大好きなクレープ屋もそのうちのひとつだ。)が、今日だけこちらで商売しているのだ。美海なら目を奪われて、ちよつと食べ歩き、なんてしていきそうなのがまた彼女らしい。

しかし——妙な胸騒ぎがする。

「美海、どこにいるんだろうな?」

「電話、掛けてみるわ」

ぼやいた春樹に応じる琉花。携帯を取り出し、電話を掛ける。が、繋がらない。不審に思った春樹がSMSに『美海、今どこにいるの?』と書き込んでみるが……返事がない。

「先生、春樹さんが」

「あらあら、ホントに腫れちゃってるわね。男前が台無しよ?」

兎莉子が連れてきたらしい養護教諭・志賀龍姫先生しがりゅうきが、いつものように天使のような微笑みで近づいてきた。彼女はプログレスで、『高速治療』のエクシードを持っている。志賀が春樹の頬に手を添えて力を込めると、ジンジンと熱を持つていた頬の痛みが、嘘のようにぬぐい去られた。中等部に所属している時から、このエクシードには度々お世話になっていて、彼女には頭が上がらなかった。

「あ、ありがとうございます、志賀先生」

「いいのいいの。あら? このメンバーで揃ってて、美海ちゃんがないのは珍しいわね? 春樹くん達、バトルに出るんだから、バトル開始前の少なくとも30分前には控え室に入らないといけないわよ?」

「それはわかってるんですけど、なんか、美海と連絡がつかなくて……」

事情を説明すると、志賀はうんうんと話を聞いてくれ、

「分かったわ。見つけたら、春樹くん達が捜してたって伝えておくわ」

「ありがとうございます」

春樹たちは志賀にお礼を言っただけで別れた。

しかし、これで異変が終わったとは、到底思えなかった。

………

心地よい振動だと思っていたら、不意に、ガタンと揺れる。

「ん、どうかな? これ、売れそう?」

「……かなりの美少女だ。幾らになるだろうか……3000くらい吹っかけても買いそうだ」

また、ガタンと揺れる。その揺れで、美海は目を覚ました。

視界に入ってくる情報から察するに、大きな車の後部座席にいるらしい。でも、おかしい。どうして横向きになってるんだろう……—ハツとした。そして、もう遅かった。美海は腕も足も縛られ、口には布が詰め込まれ、更に覆いまでされていた。

「あ、起きちやった？ なんでもつと濃い使わないのさ。倉庫に運ぶまでは眠つてもらたかつたんだけど」

「後遺症が残るからだ。この前の奴、ちよつと強くしすぎたせいで、なんかすぐに壊れちまつたみたいで。散々お怒りだったからな」

「あ、なるほど」

「――！」

倉庫。

運ぶ。

後遺症。

壊れた。

美海は、自分がどうなるかを臆げに察する。

ドラマや映画でしか見たことのない――それにしたつて1回か2回程度だ――いわゆる、拉致。

「ん――！ んう――！」

必死に身をよじり、叫ぼうとするが、手足は固く縛られ、口の中の布が声を出すことを許してくれない。

「あはは、大丈夫だよそんなに怖がなくて。君の買い手は優しい方だから、気に入られたらきつといい生活ができるよ」

助手席に座った男性――先ほどすれ違った男性2人のうちの1人だ――が、にこやかな笑みを浮かべて言う。美海は心の底から凍りつき、それを振り払わんと更に暴れようとするが、手足の拘束はまるで綻びを見せない。

「ねえ、君、まだ処女？」

――処女？

美海は戸惑う。そういう性的な話には疎いという自信がある。でも、これに関しては、少しだけ知っていた。

――それつて、まだ、男の人とエッチなことをしたことがないつてこと？

なぜか、頭の中を一瞬春樹の顔が過ぎり、思わず頷いてしまう。すると、男性は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ねえ、この子まだ処女なんだつて！ これ、もう500はふっかけら

時間が惜しい。だが、このまま放置するという選択肢はありえない。3人に相談すると、まず琉花が、

「外に屋台があつたつしよ？ みうみん、結構常連だから、もしかしたら見かけてる人がいるかも」

続いて忍が、

「拙者、一旦寮に戻るでゴザル。小春殿に話を聞きたいし、何か手がかりがあるやも知れないので」

最後に兎莉子が、

「とりあえず、先生方に連絡しましょう。流石におかしいです。先生方も探して下さるはずです」

と、三者三様の意見を出してくれた。とりあえず、春樹は2手に分かれて美海を探すことにした。自分は兎莉子と行動を共にし、辺りで聞き込みを行う。忍と琉花は一緒に広範囲を搜索する。連絡は電話もしくはメールで行う。

別れる前に、まずは教師に連絡をした。こういう時に最も頼りになるのは……去年大きく世話になった雄馬だ。

『なに？ 美海がいねえだと？』

『そうなんです。連絡もつかなくて……』

事情を説明したあとの雄馬は早かった。

『分かった。こつちも探す。お前らも探してもいいが、やばい状態になつたらまず俺らに連絡しろ。いいな？』

「分かりました」

時間にして3分も話していなかっただろうが、幾分か安心できる。

あの講師は、こういう状況に強い男だった。

「それじゃあ、別れよう。雄馬先生も言ってたけど、なにかまずいことになつたら絶対に連絡してね」

「了解！」

「承つたでゴザル。では、行こう琉花殿」

忍と琉花が走り去った。春樹は横の兎莉子を見下ろして言う。

「こつちも動こう。まずは、聞き込みからだ」

「はい！」

兎莉子は、決意の表情で言った。

……………

『……………はい、もしもし。キシベです』

「おう、アイ。今すぐ出てこい」

『お仕事？』

「そうだ。お前が必要になる」

『分かった。お給料は弾んでね』

「10個でいいか？」

『15』

「わかったよ、欲張りさん。青蘭学園コロシウムにいるから、早くおいで」

『うん』

家への電話を切った雄馬は、次々と講師仲間や教師陣へと連絡していく。生徒が行方不明だ、捜索をしてほしい。会場及び周辺の警備を増強せよ。皆、了解とともに行動を起こしていく。まるで陰陽師が幾つもの式神を放っていくように、雄馬の警告で皆が動き出す。

生徒には、極力感づかれないほうがいい。今は楽しいショーの最中なのだから。だが、敏い子は気づいてしまうだろう。

——さて、どうするか。

そして最後に、虚空に向かって呟いた。

「お前も、警戒を怠るな」

雄馬のそばで、微かに気配が揺らいだ。

……………

あと、2時間と少しでバトルが始まる。

冬吾は、ナナに治してもらった頬をまだ撫でながら考えていた。

現在、冬吾のチームは、先輩方のブルーミングバトルを観戦している。試合は中盤から終盤に差し掛かり、バトルフィールドを挟んで対峙する2人のαドライバー両者ともに肩で息をしているが、これからがクライマックスだ。

しかし、冬吾は試合の内容がぼんやりとしか頭に入ってこなかった。これから、自分があの場に立つ。だから、出来るだけ多くの情報

を持つておきたいのに、頭の中を支配するのは、春樹の言葉だけだった。

——理解して欲しい思いを無視して、理解できるところだけ一方的に理解してるフリをするお前よりも、はるかにいい！

昨日は、春樹に対してひどいことを言った。喧嘩の火蓋を切ったのは自分だ。でも、そうしてでも春樹に伝えたかった。自分が、春樹に取り戻してもらいたかったものを。

高等部1年生の頃の春樹は、輝いていた。大好きな人たちに囲まれ、毎日が本当に楽しそうだった。

冬吾は気づいて欲しかったのだ。例え一度失ったとしても、お前の周りに今いる子達は、お前のことをちゃんと思っている、ということ。そうすれば、彼はまた輝ける。冬吾はそう信じている。

でも、それはそれだ。春樹を傷つけたという事実は何も変わらない。い。

そして、当然ながら冬吾は春樹に傷つけられた。自分が理解できていない、セニアの思い。

春樹の言っていたことは、正直、凶星だった。自分は、確かにセニアの思いには気付けなかった。

何よりも、セニアが自分に直接言うよりも、春樹に相談することを選択したのが、ショックだった。でも、だからといってセニアを責めるわけにはいかない。信頼していないのは、自分だって同じだ。

わかっているのに、わからないふりをする春樹。

わからないから、わかっているふりをする冬吾。

どっちが悪くて、どっちが善いのか、冬吾にはわからなかった。だから、だからこそ、勝ちたかった。自分が、春樹よりも善く有りたいから。

——でも、それは意地汚い意志だ。

目の前で、片方のチームのプログレスの1人が覚醒——エクシードレベルがレベル5になることの俗称だ——し、試合は最高潮へと達する。レベル5になるためにはただ普通にレベルを上げ続けなければならないというわけではない。他の誰ともセカンドリンク及びαリンクでき

ない状態になるサードリンクというものを30秒間も結んだ上で始めて達することができ、レベル5でいられるのはたった20秒のみで、しかもその時間制限が過ぎると無条件にレベルが0に戻される。言うなれば諸刃の剣だ。登場する後にも先にも大きなデメリットを強いるレベル5プログレスは、その条件に見合った強力さ故にブルミニングバトルを大きく盛り上げる存在のひとつだ。

隣でセニアが、目を丸くして試合を見ている。始めて見るブルミニングバトルの様子に、目を奪われているようだ。

試合はそこから大逆転を見せる。なんと、レベル5を出されてしまった側のチームは、なんとかその攻撃を耐え切ったのだ。そして、レベル0に戻ってしまうその隙を見逃さず、一気に畳み掛ける。鮮やかな逆転劇で、会場は最高潮に達した。

「……………すごかったです」

セニアは普段以上に呆然としながら呟いた。

「ねえ、セニア?」

「はい、なんでしようマスター?」

ふと、セニアを呼んでみると、セニアは普段通りの無表情で冬吾を見上げた。しかし、普段と違う。

彼女の目は、こんなに澄んでいただろうか。

セニアに、昨日春樹から聞いたことを言い出したいのに、思わずその瞳の純粹さに気後れしてしまう。

「……………いや、なんでもない」

「そうですか」

冬吾は、横目でじとつとした視線をユーフィリアとテルルとナナが向けていたことに気付かなかった。

と、そこに何やら焦っている様子の講師アルマが駆け寄ってきた。

「あ、冬吾。ようやく見つけた」

「なにかご用ですか?」

冬吾が尋ねると、アルマはいつもよりやや早口で、

「いや、お前らバトルに出るんだから、1時には控え室に入っとけよっ

て」

「分かっていますって」

「そか？ なら大丈夫か。いやなに、念の為に」

それからアルマはすぐさま踵を返すと、振り返って「バトル、頑張れよ。健闘を祈る」と言つて、また慌ただしくどこかに行つてしまった。

あのアルマが、焦っている。あんな様子のアルマを見たのは1度しかない。そして、そういう目で周りを見ると、顔を知っている教師の面々が、皆何やら焦っているみたいだ。

——こんな様子、前にも。そう、あの時以来だ。

「……変だな」

「はい？」

しかし、冬吾には関係ない。

「いや、なんでもない……」

冬吾のつぶやきにセニアが首をかしげるが、冬吾はまたもや隠した。

しかし、それにはどちらも気づくこともなく、冬吾はいつものように——いつもよりぎこちなく——セニアの頭に手のひらを乗せた。

「……がんばろうな」

「はい」

春樹のことをバカにできない、と冬吾は思った。

——僕だって、十分臆病者だ。

……

「美海ちゃん？ うーん、僕、今朝は結構早くからここで準備してるけど、美海ちゃんは見かけてないなあ」

「そうですね、ありがとうございます」

普段は商業地区の広場で商売をしているクレープ屋の店主に礼を告げて、その場を立ち去った。「バトル、直接見れないけど応援してるよ！」と激励されてしまったが、今の状態では出場できるかどうか……。

かなり多くの人に聞いてみた。今のような屋台の店主は、なんだか

んだいって3年間ここに住んでいる春樹とは顔なじみだし、美海もよく通っている。たまたま来場していたいつぞやの猫カフェの店員さんもいた。沙織などの、美海のクラスメイトにも会った。早朝から会場設営に携わっていた教職員にも聞いた。しかし。

困った。手がかりが、本当になかった。この周辺にいる人は誰ひとりとして、美海の姿を見ていないのだ。

しかし、それは逆説的にあることを証明している。それは、美海が今日、ロシアム周辺には来ていないという事実だ。

となれば、より重要な情報はここよりも満月寮側——即ち居住地区の方にあると思われる。そして、忍と琉花は居住地区にある満月寮に一度戻っている。となれば、向こうに連絡してその旨を知らせるのが賢明だろう。

「美海ちゃん、ホントにどこに行っちゃったんだろう……」

隣で兎莉子が不安そうな声を上げる。春樹はその頭に手のひらを載せて撫で、「大丈夫だ」と言いながら携帯電話で琉花に通話をかける。

ほとんど間髪入れずに通話は繋がった。

『ハル先輩！ みうみん、見つかった!』

「いや。どうやら美海は、こつちには一度も来ていないらしい。誰も美海の姿を見ていないって」

『そう……こつちも、みうみんの情報は無かったよ。でも……』

琉花が不安そうに声のトーンを落とす。

『ちよつとヤバげな噂聞いちゃって、それでシノが「調べたいことがある」って言って、どっか行っちゃったんだ』

「噂?..」

春樹が聞き返すと、琉花は更に声を低くする。

『……青蘭諸島のプログレスが……いや、女の子が、時々ふらつといなくなっちゃうって噂。2ヶ月か3ヶ月くらい前かららしいんだけど……青蘭学園のプログレスも、前に1回いなくなっちゃって……それで、今も見つかってないって』

心臓が止まりかける。

「琉花、琉花はいまどこにいるの？」

『え？ 私は今、居住地区で普段のマラソンコースに手がかりがないか調べてる』

春樹は、やや足りない頭をフル回転させる。琉花と忍は別行動をしている。美海の今の状況を考えれば、琉花が1人で歩いているのは不安がある。それに、もしかしたら、という可能性。

美海が、寮を出てから西——学園特区に向かったのではなく、東——灯台のある岬へと向かった可能性だ。

「……俺もいまからそっちに行く。一通り探し終わったら、満月寮の前で待っていてくれ」

『分かった。気をつけてね！』

通話を切ると、兔莉子が不安げに春樹を見上げていた。

「ど、どうでした!?!」

「向こうも美海は見つからなかったみたいだ。それで、いまから島の東の方に行ってみようと思う。ついてこなくても大丈夫だけど、どうする?」

「ついていきます!」

兔莉子は涙目になりながらも、決意の籠った声で言った。

「じゃあ、行こう」

「は、はい!」

バスで行けば、満月寮には割とすぐに着く。琉花は既に寮の前にいた。

「あ、ハル先輩! それにウリちゃんも」

駆け寄ってくる琉花に、美海が島の東側に向かった可能性があることを説明する。

「確かに、そうかもね……でも……」

「で、琉花はなにかわかったのか?」

「うん。私たちのランニングコースって、一部が普段学園に行くときに使う道なんだよ。で、その通りにある家のおばさん、今朝美海を見たって言ってたんだよ」

「え!？」

春樹の叩き出した推理が、今の一言であっさり崩れ去った。もしそうなら、島の東に行ったという可能性は殆どない。むしろ、嫌な可能性に突き当たる。

学園に向かったのに、今どこにもいない。ということは、必然的に何かに阻まれた――

携帯が鳴る。慌てて取り出すと、忍からの着信だった。

「も、もしもし」

『ああ、春樹殿! 美海殿に関する情報がさる伝手より入ったので、お知らせするでゴザル』

「な、何?」

忍は意図的に感情を殺したような声で、淡々と情報を伝えてきた。

『まず、美海殿は寮を出て、学園特区につく前……即ち、居住地区内にいる間に、どうやら拉致されたようでゴザル』

心臓が、一拍止まる。

『拉致したのは、どうやら《ファントム》と呼ばれる犯罪組織の一部でゴザル。現在位置は目下捜索中でゴザルが、どうやら青蘭島西側にある倉庫群のどこか……春樹殿?』

忍が不審げな声を出したのは、春樹が携帯を取り落としたからだ。取り付けられた貝殻のアクセサリが、じやらりと音を立てる。

ファントム。

彼女らを傷つけた、絶対に許すことのできない輩。

それに美海が、攫われた。

心臓が早鐘を打ち出す。呼吸が荒くなり、見当識が覚束なくなる。

いつの間にか春樹は、アスファルトに膝をついていた。呼吸がどんどん早まっていく。携帯を拾おうとしても、無意識に手足ががたがたと震え、上手くいかない。

「は、ハル先輩!? ちょ、シノ、ハル先輩に何を……」

「は、春樹さん!? 大丈夫ですか!？」

そばで琉花が、春樹の落とした携帯を拾い上げて忍と会話し始めた。兎莉子がかがみ込んで春樹の背中を撫でるが、春樹の震えはむし

多くの動物と触れ合ってきた兔莉子だからこそ、こうして怒りも恐怖もぬぐい去れるのかもしれない。

「はあ……はあ……」

「大丈夫です、春樹さん。まだ、間に合います。大丈夫です」

兔莉子の囁きで、心が鎮まってく。そうだ。諦めてどうする。あの時は何もできなかった。でも、今は違う。琉花も忍も兔莉子も、まだここにいます。

信じるんだ。彼女らを。そして美海を。

「……春樹、さん？」

「だ、大丈夫……だいぶ落ち着いた。ありがとう、兔莉子」

弱々しい笑みを浮かべて兔莉子の頭を撫でる。彼女は心底安心そうな表情をしてくれた。

「ハル先輩！ 大丈夫!?!」

「ああ……なんとか。琉花も、ありがとう」

琉花から携帯を返してもらい、忍にも取り乱したことを謝る。

しかし、どうする。ここからどうやって島の西まで行く？ 実のところ、春樹は青蘭島の西側にはあまり行ったことがない。そもそも家が東側にあるのだし、行ったところで特に何もないからだ。バスで行けば、少なくとも1時間はかかってしまう。島の東と西を直接つなぐバスは運行していないため、一旦商業地区で乗り換えなければいけないからだ。かといって、徒歩で行くという選択肢もまた有り得ない。教師陣に一任するという手もあるが……。

3人にそのことを相談すると、意外なことに、真つ先に手を挙げたのは兔莉子だった。

「それなら、私にお任せ下さいー!」

兔莉子はいつも身につけている可愛らしいポシエツトから、何やら木製の小さな笛を取り出し、思い切り息を吸い込んでから、吹いた。甲高い笛の音が空を吹き抜け、響いていく。

何だったのだろう、と思って空を見上げる春樹と琉花の視界に、巨大なシルエツトが写りこんだ。

……………

「やはり、フアントムか……」

雄馬は春樹から連絡をもらい、行き着いた結論に唸り声を上げる。フアントム。青蘭諸島の闇に棲み付いた、規模不明の犯罪組織である。末端はいくら摘発してもキリがない。あつという間にどこからか欠員を補充している。青蘭諸島執行部と呼ばれる警察組織は何度も彼らを一網打尽にしようとしているが、あまり効果が見られない。根っこの部分が、深く青蘭島に食い込んでいるためだ。そして、その末端は様々な事件を起こす。強盗、恐喝、そして拉致。

『いまから、倉庫群に向かうつもりです』

春樹の言葉は、雄馬が即座に否定せねばならないものだった。

「ダメだ！ 万が一、お前らにまで何かあつたらどうするつもりだ!」

『それでも、俺、見てるだけは嫌なんです!』

春樹の必死の叫びは、皮肉にも、雄馬が青蘭学園の生徒だったときに発したそれと、とても良く似ていた。心を揺らされる。が、すんでのところまで留まった。

——でも、春樹と俺は違う。春樹には力がない……!」

「だいたい、どうやって行くつもりだ？ お前、今居住地区にいるんだろ？ だったら、バスで行くなら1時間はかかる——」

『兔莉子が手段を用意してくれたんです!』

「何？ 兔莉子だと?」

『はい、彼女が呼んでくれたんです。グリフォンを!』

——マズい!」

「やめろ！ お前ら、どれだけ危険か分かってんのか!」

雄馬が堪らず怒号を発する。それに釣られるようにして、彼の体から妙な気が漏れた。人の心を底から寒からしめるかのような、怒りの気。

しかし、生憎春樹は電話の向こうにいる。伝わるわけがない。

『分かっています! でも、美海はもつと危険なはずです! 俺だけ安全なところで美海が助けられるのを待ってるなんて嫌だ!』

それはごもつともだ。春樹の思いはよくわかる。しかし……。

『それに、俺らだけで仕掛けるつもりもありません。着いたらちゃん

と連絡して、正確な位置を絞り込みます!』

そこまで言うなら……と、雄馬が折れた。

「……出来るだけ、倉庫から離れた場所に着陸しろ。連中が感付くかも知れない。いいな?」

春樹の了解の声を聞いて、雄馬は通話を切った。即座に、別の連絡先に電話をかける。

『……雄馬か。どうした』

「西の倉庫群にファントムがいる。美海はそれに拉致られたらしい」

『——ッ!』

「お前、どこにいる?」

『……商業地区だ』

「車出してんだろ? 急げ。春樹たちはグリフォンを使って行くつもりだ。恐らくお前よりも早く着く。凌雅に連絡して向かわせた上で、お前も急いでくれ。アルマとサイオンは警備に回す。デルタはオペレーティング・ルームから外さない。俺はすぐにここを発つ」

『……了解した』

雄馬は通話を切る。すぐ横で、アイが不思議そうに雄馬を見上げていた。雄馬の放っていた気に、まるで動じていなかった彼女は、雄馬のコートの裾を掴んでいる。前を開いた薄手の黒いコートの下から見えるのは、青いネクタイに白いワイシャツと黒いストラップスという、男性のような姿だ。腕にはピンクゴールドの小さな腕時計が光っている。

「ゆーま、焦ってる?」

「……そうだな」

「焦らない」

「わかってる。行くぞ」

「うん」

雄馬とアイはそこから走り去った。

愛する生徒たちに魔の手が忍び寄るよりも前に、すべて終わらせてやる。そう誓って。

……………

「うわわ、マジで飛んでるよー!」

「琉花ちゃん、あんまりうるさくしないでください! ゲイルさんがうるさいって!」

叫ぶ琉花を静止する兎莉子は、珍しく声を張り上げている。

春樹達3人は、兎莉子の呼び出したグリフォン（名前をゲイルというらしい）に乗って、まさに空を飛んでいた。春樹は無言だが、怖くないというわけではない。どちらかといえば、怖いがゆえに声を出している余裕がなかった。なんというか、ジェットコースターに乗ると終始無言になるタイプだ。

しかしこの速さは心強い。ゲイルの翼は力強く、羽ばたくたびに大きな推進力を生み出してぐんぐんと前に進んでいく。寒さで凍りつきそうだったが、ゲイルと、後ろからしがみついている琉花、そして春樹がまさにしがみついている兎莉子の体温がそれを少し和らげていた。これなら、10分とかからず倉庫群に着きそうだ。地形を無視できるという空路の強みが、よく出ていた。

下を見るのは恐怖の極みだったが、それでも美海の手がかりを探さなければならぬ。頑張つて地上に目を凝らしていると――ふと、キラリと光るものが視界に入った。倉庫群と海を挟むコンクリートのスペース。あの輝きを、春樹は見たことがある。

兎莉子の指示で、ゲイルは倉庫群から少し離れた公園の中に降り立った。犬の散歩をさせていたら面白いおじさんが、ぎよつとしたように目を剥いた。

春樹は輝いていたのがなんだったのかを確かめるために走り、倉庫群の近くまで駆け寄る。

果たして春樹の予想は正しかった。それは貝殻だった。

「あ、これ、みうみんの携帯アクセサリ……?」

「これ……俺が美海にあげて、それを美海は携帯のアクセサリにしてた……」

やはり美海はここを通った。もう間違いない。このずらりと並んだ倉庫のどこかに、美海が捕われている。

「これがあれば……そうですね。場所、わかります。ちよつと待つて

てくださいい！」

公園に駆け戻っていく兎莉子。数分後、彼女は1匹の犬を従えて戻ってきた。先ほどゲイルが着陸した公園で散歩をしていた小型犬だ。

——そうか、犬なら。匂いに敏感な犬なら！

瞬時に兎莉子の考えを理解した春樹は、貝殻を犬に差し出す。

「チョコちゃん、これ、よく嗅いでください。匂いを辿って。この倉庫のどこかに、この匂いの元があるはずです。どこかわかったら、その倉庫の前でくるくる回ってください。……そう、そんな感じですよ。そして戻ってきてください。あと、絶対に吠えないでください！　お願いできますか？」

兎莉子の丁寧な説明に了解したらしい犬は、地面を注意深く嗅ぎながら前進していき、8番目の倉庫の前でくるくると回った。そこに、美海がいる。

「ありがとうございます、チョコちゃん！」

駆け戻ってきた犬を抱きしめて撫でる兎莉子。

「すみません、彼女を戻してきます」

「……そうだな。兎莉子は公園にいてくれ。ゲイルと一緒になら、兎莉子が襲われるってことはないだろうし、後から来る講師の先生達への連絡役を頼める。お願いできるか？」

「は、はい！」

兎莉子は真剣な表情で頷くと、公園へと戻っていった。それと入れ替わりになるように、今度は忍が現われた。

「春樹殿、お待ちしていたでゴザル」

「忍。場所がどこだか分かった。こつちから数えて8番目の倉庫だ。諜報できるか？」

「お安い御用でゴザル。見たところ、魔力系の結界も無い様子。では、少し行ってくるでゴザル」

忍は、まさに忍者が消える時の典型のような、いわゆるドロンと消えた。それを確認し、今度は雄馬に連絡する。

『……着いたか？』

「はい。場所もどこだか分かりました。今、忍を諜報に向かわせています」

『そうか。絶対に手を出すなよ。俺もあと少しで着く』

「分かりました」

雄馬と情報を交換していると、そこに忍が戻ってきた。

「どうだった？」

春樹が恐る恐る聞くと、忍は安心した表情で、

「美海殿はまだ無事でゴザル。手足は拘束され、口も塞がれ、男性数人に囲まれてゴザったが、乱暴された様子はなかった模様。どうやら取引の商品にされるようでゴザった」

それを聞いて、春樹は大いに安心した。通話越しに雄馬の安心も伝わってくる。

その時、悲鳴が聞こえた。はつきりとわかる、美海のものだ。春樹の安心が、一瞬にして吹き飛ぶ。

『待て、春樹！』

すべて察した雄馬が制止するが、春樹には届かなかった。8番目の倉庫の中から、人が2人出てきたからだ。こちらに向かつてきている。

「倉庫群近くの公園に兎莉子がいます。詳しいことは彼女から聞いてください。東側から数えて8番目の倉庫です」

それだけ言って春樹は通話を切った。そして、焦る頭であらかじめ考えていた強襲案をもう一度練り直しながら、忍へ一言、命令した。

「やれ」

.....

「.....くそッ！」

走るのをやめた雄馬は思わず毒づいた。このままでは、春樹たちが危ない。周りを気にしている余裕は、最早なかった。幸い、商業地区を抜けたためあたりに人は少ない。今なら大丈夫だろう。

「急ぐぞ。アイ」

「うん。.....わっ？」

雄馬はアイを抱き上げると、

「しつかり掴まってるよ」

「わかった」

そのまま走り出した。その速度が、どんどん上がっていく。そして、舗装された道路を砕く勢いで思い切り踏み込むと、そのまま大きく跳躍した。しかし、並大抵の跳躍ではない。大砲から発せられる砲弾のような勢いで大空に舞い上がった。跳ぶ、ではなく、飛ぶかのようだ。

「うわ。気持ちいい」

「これやんの、結構久しぶりなんだよな……ほら、落ちるぞ。掴まれ」
「はあい」

雄馬の、人間とは思えないどころか人間では有り得ない挙動にもアイは一切動じず、むしろ楽しんでるようだった。

……………

薄暗い倉庫に運び込まれた美海は、恐怖に震えながらも、なんとか頭を冷静に保っていた。

どうやらこの男たちは、美海に乱暴する気はないらしい。この先のことを考えると怖くてたまらないが、それならこちらにもできることはある。春樹達を信じるなら、きっと。

「な、なあ。こんな子滅多に手に入らないっすよ。ちよつと味見しても……」

「ダメだ。彼は新品を望んでおられる。お前らの汚い舌で舐めた後では、取引が成り立たない」

「なんすか！ ここを用意したのは俺らっすよ！」

「そして、その謝礼はこの子を売ったその代金から支払われる。言っただ通りの金額が欲しいなら、黙っている」

「うう……そうだ、少しくらい滅つてもいいから、味見させて——」

いやらしい表情を浮かべて美海の口を覆う布を剥がした男は、その顔を美海に近づける。

手足が動かせない美海に残された最後の武器、エクシード。口の中。喉の奥に小さな気流を作り出し、それを外に向かって流す。その

勢いで口の中に詰め込まれた布を一気に吐き出し、そのまま叫んだ。締まらないのは、その悲鳴が完全に本気の悲鳴だったことだろう。

「愚か者！」

美海を運んできた男——かなりの大男だった——が、美海に手を出そうとした男を殴り飛ばした。

「誰かに気づかれたかもしれん。全く……誰か、様子を見て来い」

美海のを再び覆いながら命じる男。それに従った2人の男が倉庫の扉を開き、外を見て、

「3人、向こうの方にはいます！ 男が1人と女が2人です！」

「そうか。捕えろ。無理なら始末しろ」

3人……忍と琉花と……あと春樹？ しかし、始末しろ、なんて……。喜びと悲しみが混ざって、涙が出てくる。

「……お仲間が助けに来たようだね」
「……………」

「なら、彼らも同じ場所に連れて行ってやろう。この国らしく、オマケをつけよう」

大男は薄く笑いながら言った。美海は涙を流しながら、それでも、必死に男を睨みつけた。

もう、希望はないのかもしれない。

——それでもわたしは、みんなを信じる。

男の命令を聞いた2人が、倉庫の外へと出て行く。しばらく沈黙が倉庫内を支配し……外へ出ていった2人が、帰ってこない。倉庫内にいた男たちは何かを察して、それぞれが武器を手に持ち始めた。拳銃だ。倉庫の入口に銃口を向け、それが扉を開けるのを待っている——しかし、倉庫の扉を開けた——否、ぶち破ったのは、彼らの誰もが想定していなかったものだった。

轟音とともに倉庫の扉を破り、雪崩込んできたのは——大量の水だった。倉庫内を洗い流さんとする勢いで流れてきた水流は、まるで意志を持つかのように男たちを包み込んでいく。

ソファの上に転がされていた美海も、容赦ない水流に呑まれた。布の覆いが水を拒んでくれたが、舐めてみるとしよっぱい。これは海水

だ。そしてその海水は、男たちにしたように美海を包み込むのではなく、むしろ美海を倉庫の入口へと押し流そうとした。

「よっし、全員抑えたよ！」

「あとは拙者に任せるでゴザル！」

入口から飛び込んでくる、元気な声。2人の少女を従えた、男の子のシルエット。美海の涙腺が遂に決壊する。

春樹が倉庫に駆け込んでくる。しかし、轟音がそれを阻んだ。海水に吞まれてもなお戦闘意識を失っていなかった大男が、春樹に向かって弾丸を放つ。それが、春樹の右肩に当たった。

「ぐあっ!？」

走り抜けた激痛に囚われ、思わず転倒する。転んだ春樹は、床を濡らしていた水分で滑り、また美海は琉花が操る水流によって春樹の方に向かって押し流されており——2人がぶつかった。

「美海——」

春樹は、動かせる左手だけで無理やり美海の口を覆う布を剥がすと、その左手を、美海の頬に添えた。彼は痛みを耐えて、それでも懸命に微笑んでいた。

「——飛べ。お前の翼で——」

その言葉に、美海は言葉を返さなかった。その代わりに頷き、心で答えた。涙ぐみながらも、満面の笑顔になる。

——ずっと笑顔でいなさいね——

彼を信じる。2人の心が、重なる。リンクする繋がる。

風が吹き抜け、美海の手足の拘束を切り裂いた。美海は立ち上がり、伸ばされていた春樹の手に、自分の指を絡めた。

「一緒に、飛ぼう——!」

それを聞いた春樹は、ニツと太々しく笑った。

その瞬間、2人の心は、完全に繋がった。バトルフィールドでのリンクが明らかに制限されたものだと分かる、強大なリンク。体の底から——心の底から力が溢れてくる。美海は湧き上がる力をすべて、

容赦なく解き放った。

効果は絶大だった。美海を中心に竜巻が起こり、倉庫内を破壊していく。その中心に立つ美海は、まるで嵐を踏んで世を駆け抜ける風神のようだ。翼のようにツインテールに結い上げた髪が暴れ、水に包まれていた男たちは、竜巻によって宙へ巻き上げられた挙句、壁に叩きつけられて気絶していった。

「あいたっー!」

見れば、ちやつかり忍も巻き添えを食らっている。しかし流石というべきか、すぐに受身を取って床に伏せた。琉花は危険を察知して一旦外に逃げたようだ。

「美海、そこまでに……!」

「あつ、うん!」

美海はぐつと力を込めて、風を止ませた。忍も琉花も春樹も美海も、全員息が上がっていた。それでも、美海が、ここにいた。救出できた。

「美海……」

春樹が呼びかけると、美海はハツとして春樹を見た。何も言わず、ただ春樹の顔を食い入るように見つめている。その瞳に、涙が浮かぶ。

そこからは流れるままだった。美海は春樹の胸に飛び込むと、大声で泣きだした。

「うええええん!! 春樹くん……!!」

何度も名前を呼ぶ。春樹くん、春樹くん! 二度と会えなくなるかも知れなかったのに、危険を冒して駆けつけてくれた。怪我を負っても、果敢に。

「美海……っ! 良かった……!」

そして、春樹もまた涙を流していた。美海と同じくらい号泣かも知れない。失われてしまうかと思った彼女が、腕の中にいる。自分の手で、そしてみんなの協力で守れた。その嬉しさと安堵から、完全に涙腺が壊れていた。

「もう絶対に離さない! みんなのことを信じて、頑張るから! 俺

のこと、信じてくれ……！」

「春樹くん……！」

すぐそばでは、忍は安心した表情で、琉花は美海達と同じように泣いていた。

「さて、感動のシーンはここまでかな？」

倉庫に響く、軽々しい声。全員の背筋が凍りつく。

「あ、動かないでね。動いたらこの子の頭に穴が開いちゃうよ？」

視線だけ倉庫の入口に向けると、そこには、琉花の頭に拳銃を突きつけた男が立っていた。美海を運んでいる時に助手席に座っていた、あの男だ。

「さ、両手を挙げてね。それで、地面に膝をついて……そう、それでいい」

琉花は恐怖に彩られた顔で、男の指示に従った。男が持っているのは、琉花の持っているリボルバーみずでっぽう銃とはわけが違う。たった指一本で人を殺せる武器。

「応援があと10分で来る。それまでこうしてもらっただけさ。君らは全員、商品になるからね」

男が嬉しそうにクツクツと笑う。これまで以上の絶望が、場を支配する。彼には、琉花を傷つける意思がある。だから、忍でさえ、動けない。

しかし、その笑いは突如途切れた。驚いて顔を上げると、手に持った銃と右腕に、背後からナイフが刺さっていた。

「なっ……！」

言葉を失った様子で男が背後を振り向く。それと同時に、次々とナイフが降り注ぐ。四肢を狙ったそれは、ものの3秒で男を完全に無力化してしまった。

悲鳴を上げる男を黙らせたのは、入口にいつの間にか現れていた銀髪の少女だった。彼女の拳の一閃が、男の意識を完全に奪っていた。

ばたきと倒れるナイフだらけの体に、春樹たちはびくりと身を引く。

「ゆーま、おわった」

外に向かつて呼びかける少女は、春樹たちが全く知らない少女だった。年の頃は同じ程度だと思われるが、奇妙なのは、彼女の顔に一切の表情が浮かばないところだった。黒いリボンをつけた銀色のショートヘアが、海風に柔らかく靡く。その髪を掻き分ける左手の手首に、ピンクゴールドの腕時計が光るのを見た。

「春樹！ 大丈夫か!？」

倉庫に駆け込んできたのは、雄馬だった。春樹、美海、琉花、忍と見回して安堵の息を吐く。そして、春樹の肩の傷を見て、「馬鹿野郎！」と大喝した。

「春樹！ お前、自分がどんなに危険を冒したか分かってんのか!? その肩の傷があと10センチ左にできてたら。死んだかも知れないんだぞ！」

雄馬は真剣な表情で春樹を怒鳴りつけた。春樹はビクツと身を縮めながらも、美海の頭を抱いたままだった。

「……全く、どうして子供って奴は、大人の気持ち……」

雄馬はぶつくさとききながらも春樹に近寄り、手際よく傷の応急処置をしていった。

「ごめんなさい……」

「……別にいいさ。誰も死んでないんだから、それでいい」

素直に謝った春樹に、雄馬は呟くように言った。

「ほら、出来た。外に海斗先生が車を出してるから、それに乗ってココシアムに戻れ」

雄馬は立ち上がると、その場にいた全員に向かつて、

「お前ら、よくやった。だが連中の増援が来るまで時間がない。とつとと海斗先生のところまで行け！」

その言葉に突き動かされ、慌てて立ち上がる春樹と美海と琉花。春樹は美海に支えられながら、全員でその場を去った。その背中に、雄馬が叫ぶ。

「ブルーミングバトル、期待してるぞ！ 頑張れ！」

.....

「……もしもし、龍姫？」

『あ、雄くん。美海ちゃん、見つかった?!』

「見つかったが、春樹が銃弾を食らった。右肩だ」

『た、大変!』

「あと20分で海斗の車がロシアムに着くから、車から降ろす前に治せ。あの傷は公衆の面前に晒すには、スプラッタすぎる」

『りよ、了解したわ。雄くんも気をつけてね』

「わかつてる。それじゃあ」

「……電話、おわった？」

「ああ。……さて、応援はどんだけ来るかな？」

「見たところ、6人。あんまり割けないみたい」

「そうか。大物はメルと凌雅だけでいいっぽいし、俺らは雑魚狩りつてことで、1人頭2人な。行け」

「了解」

.....

数学講師の城海斗きつぎかいとの車に乗り込むなり、彼は春樹達に対して雄馬と同じような説教をしたが、結局全員生きているし良しということになった。

「ホント、心配させないでくれ。攫ひなたわれた日向はともかく、神城かみしろ。お前はエクシードも何も持たない、一般人なんだぞ。無茶しないでくれ」
「本当にすみません……」

春樹の頭は下がりっぱなしであるが、肩には相変わらず激痛が走っている。美海と兎莉子がさすってくれなければ、痛さで絶叫しているかもしれない。海斗もそこはちゃんと心配しているらしく、そうまで責めはしなかった。

兎莉子は春樹の肩の傷を見たとき、泣き叫ばんばかりに心配したが、彼女の優しい心根を知っていれば当然だと思いかも知れない。

「よし、着いた。……と、志賀先生だ」

車が止まるなり、ドアを開いて乗り込んできた志賀は、春樹の傷を見るなりそこに右手を当て、力をうんと込めた。

「春樹くん、大丈夫!? じっとしててね!」

「は、はい」

温かい感覚とともに痛みがどんどん引いていき、2分も経った頃には、もう傷は跡形もなかった。

「ありがとうございます!」

「いいの。それじゃあ会場に向かつて。もうあと35分しかないわ」

志賀に急かされた春樹たちは会場に向かつて走り出そうとして――全員、お腹がめちやくちや空いていることに気づいた。

美海が目敏く、コロシアムのそばでクレープを売っている屋台に気付く。まさか、と一同が思うが早いかな、美海は「ちよつと待ってて!」と言い残して、ぴゅーと走って行ってしまった。

「すいません、ベリーのクレープ5個ください!」

「お、美海ちゃん! 見つかったんだね。もうみんなのそばを離れちやダメだよ? じゃあ1個250円、5個で1250円ね」

「はい! ……あれ? お財布……あ」

美海はどうやら攫われた時に、持ち物を全部没収されていたらしい。ポケットを今更のようにまさぐって、財布がないことに気づいた。美海に追いついた春樹も、財布の中の紙幣が海水でびしょ濡れになっていることに気づく。

しかし、少しおネエ系な店主はくすくすと笑うと、

「顔なじみの美海ちゃんだし、春樹くん達はお得意様だから、サービスしちゃう。ちよつと待っててね!」

と、あつという間にクレープ5個を差し出した。

「すいません。後で払います……」

「いいのいいの! それじゃあバトル、頑張つてね! ちゃんとモニターで見てるから!」

店主の激励を再び受けた春樹たちは、クレープを落とさないように、それでも極限まで急いでコロシアムに入り、教師陣に導かれて控え室に入る。

ブルーミングバトル、開始30分前だった。

……………

「……ねえ、海斗くん。彼、ほんの1時間半前にここに来た時よりも、
なんだか一回り成長したみたいだったわ。何があつたの？」

「そうだなあ……もうあのチームは、ブルーミング開バトル戦を行うより
もずつと、その可能性を花開かせた……つてところか」

「じゃあ、これからバトルをしたら、もつと花開いちゃうってこと？」

「だとしたら、どうする？」

「それは、ものすごく楽しみね」

昼食に出かけていた観客たちが、コロシウムの中に戻っていく。た
だひとつの勝負を見るために。

身を乗り出して海斗の話を聞いていたクレープ屋の店主は、とても
嬉しそうに微笑んだ。

第1話 「それが可能性つてもものだろ？」

バトル開始時刻が迫り、昼食に出ていた人々が戻ってきて、コロシアムの中にはだんだんと声が増えていく。今日の目玉でもある、高等部生同士の唯一の試合で、しかもこの試合は彼らのデビュー戦だ。彼らが、今までのαドライバーとは全く違う戦術を見せてくれることへの期待で、会場はさらに盛り上がっていく。

そんな中、高等部1年のαドライバー3人もまた、期待に胸をふくらませていた。

ハイネは、普段一緒にいるソフィーナと、それに加え沙織と希美と並んで座っていた。

「ブルーミングバトルって……噂に聞いてたよりは、ずっと、こう、なんていうか……泥臭くて重いよね」

「俺らも来年あそこに立つんだよ」

「ま、私は優雅に戦わせてもらうけど？　でも、傷は御免ね」

ソフィーナとハイネは途方にくれたように、あるいは感心したように言葉を交わしていた。

先の2戦は青蘭大学のαドライバー同士が戦っていたが、バトルの内容はどちらも見応えがあつて、映像で見るより何倍も面白かった。しかし、どちらのバトルも、終わった時には、フィールド上にプログレスが転がって痛みに悶えていたのを見て、少し背筋が冷えた。バトル終了と同時にリンクは切断され、αドライバーにフィードバックしていた痛覚をそのまま感じなければならなかったためだ。もちろん、すぐに医療班が出てきてそれらのプログレスは回収・治療されたが、ブルーミングバトルは予想以上に重いバトルなのだった。間違つても、ちよつとした喧嘩で「じゃあブルーミングバトルで決着をつけよう！」などというノリでできるものではない。ボクシングやプロレスに近いものだということがはっきりと感じられた。

ハイネは3年前からブルーミングバトルを見ているから今更ながらの感慨はないが、それでも来年あそこに立つと考えると、武者震いした。

その横で、沙織と希美は口を一文字に結んでバトル開始を待っている。春樹のチームで出場する美海、琉花、忍は一緒の寮に住み親しいため、彼女らがどんなバトルをするか楽しみで、それ以上に心配で不安なのだった。

俊太は左にアウロラ、右に葵という、何とも正反対の2人に挟まれていた。

「どちらのバトルも良かったが……私は次のバトルが一番楽しみだ。俊太は？」

「俺は……俺も、そうだな。先輩達がどんなバトルを見せてくれるのか、楽しみだ」

俊太は、まだ誰もいないフィールドに目を向ける。俊太には、隠していた感情があった。それは、美海達3人のプロGRESSがあの場合に立つ事に関してだった。

3人も俊太と同じく、右も左もわからない状態でこの青蘭学園に入学した。みんな、入学直後でいろいろとゴタゴタしていた。それは仕方ない。でも、3人はもうあの場に立とうとしているのだ。それが、俊太をひどく焦らせた。自分は……まだプロGRESSを1人見つけられただけだ。いや、アウロラの友達である妖精も合わせれば——その妖精たちとは、アウロラほど強力ではないものの、かなり強度の高いリンクができた——1人と2匹。

素直に、すごいと思った。それはきっと葵も同じだろう。バトルフィールドに立つことそのものよりも、入学して1ヶ月も経たないのにそこに立とうと頑張れるその勇氣に、感銘を受けた。

「私もいつか……あそこで戦いたい」

隣でぼそつと葵が呟いた。やたらと好戦的な葵だが、今の呟きには普段とはまるで異なる感情が込められているように感じた。

対するアウロラは、あまり楽しそうな表情ではない。生来非常に慈愛に満ち溢れた彼女は、どんな形であれ傷つけあう事が嫌いだ。ブルーミングバトルも、生で見たのは実は2回目——去年の春以来である。

しかし、そのアウロラが今頑張つてブルーミングバトルを見ている

のは、単に俊太のためだった。彼のパートナーになる彼女は、決心していた。もう逃げない、と。

「私も近く、あそこに立つ事になるのね……」

「……アウロラ？ その、別に俺は……」

うっかり漏らしてしまった声に、俊太が敏感に反応する。アウロラは柔らかく微笑んで言った。

「いいの。私も、逃げてたから。傷つけあうのが嫌いなのは本当だけど……放っておくだけでは、このエクシードは育たないって分かっている。分かっただけで、避けてたから。むしろシユンくんにはお礼を言いたいくらい。私、シユンくんのために頑張るわ」

「……あ、そ」

「シユンくんのために」刃りで頬を赤くした俊太は、照れを隠すようにぷいっとそっぽを向いた。葵がじととした視線を彼に向けるが、生憎気づかない。

アウロラが頑張っているのは本当だ。防御寄りなエクシードを持つ彼女は、この春から『魔術戦闘』の専科を取って、攻撃手段を持つために練習に励んでいた。そして、それは俊太も知っている。知っているからこそ、余計に照れくさいのだ。

「俺も、頑張んなきゃな……」

俊太もまた、頑張らなければならないことは十分に承知していた。大好きなアウロラに、報いるために。

早輝は誰とも一緒にいなかった。わざわざハイネや俊太からは離れた席を選んで、1人で座っていた。その視線は、鋭い。それは、自分とリンクできるプログレスがいつか現れた時のために、全てを吸収しようという学びの姿勢だった。

「プログレス……」

早輝は普段の朗らかさがどこにも見えない、寂しげで弱々しい声で呟く。

「俺にも……プログレス、できないかなあ……」

バトル開始15分前。遂に2人のαドライバーがフィールドに姿を現し、会場は熱狂に包まれる。

……………

「さて、いよいよだな」

5人揃ってクレープを食べ終えたあと、春樹はそう切り出した。

妙な閉塞感のある控え室の中。目の前には、美海、琉花、忍、兔莉子の4人。

「作戦は……昨日までに考えた奴をそのまま使う。でも、ひとつだけお願いがあるんだ」

バトルに出る3人は、一体何だろうと身構える表情になったが、春樹はむしろ笑みを強めた。

「思い通りにやってくれ。俺はお前たちを信じるから、お前たちのやりたいようにやってみな」

それを聞いた3人は、表情をぱあつと明るくした。

「うん！ 一緒に頑張ろう！」

「ま、極力負担にならないように頑張るぜ！」

「拙者の忍術、しかとお目にかけるでゴザル。期待して良いでゴザルよ」

3人に気合が入ったところで……いよいよ会場に、と思ったその時、兔莉子が声を上げた。

「あ、あのー！」

「どうした、兔莉子」

「その……皆さんに、伝えておきたいことがあるんです！」

兔莉子は、何か壮絶な決心をしたかのように顔を引き締めて言う。

「春樹さんは、セニアさんのエネルギーショットが琉花ちゃんの水の壁を貫通することを懸念していらっしやいましたね」

「そうだけど……それが？」

「あのショットは、最大でも25秒しか打てないんです！」

「——っ！」

その一言で、一同に衝撃が走る。

「……どうしてそれを？」

「あの……友達の猫ちゃんがセニアさんとユーフィリア先輩と三島先

輩の会話を盗み聞きしてて、それを教えてもらったんです」

申し訳なさそうにもじもじする兔莉子。その仕草で春樹は、兔莉子がここ数日感何か言いたげな様子をしていたことを思い出した。

「知ったのはたまたまだったけど、それでも、盗み聞きしたことを戦力にしているのか、私、ずつと迷ってたんです。卑怯かもしれない、嫌われるかも知れないって。でも、私、春樹さんに信じてもらえて、春樹さんが「勝ちたい」って言っていたのを聞いて、それで思ったんです。私も、みんなの役に立ちたいです」

兔莉子は顔を上げると、笑顔に涙を浮かべて言った。

「これが、私の力です」

「……そっか」

自分を信じてくれた人に嫌われるかもしれない。それでも必死に勇気を振り絞った兔莉子に、春樹は感動する。春樹は彼女の頭を優しく撫でた。

「別に俺は、卑怯だなんて思わないよ。兔莉子の言うとおり、これは兔莉子の力の賜物だ。よし、その情報、ちゃんと使わせて貰うよ！」

「は、はい……ありがとうございます……！」

嫌われなかったことが意外だったのか、兔莉子がちよつと本気で泣き始めてしまった。他の3人が「あーあ、泣かしたー！」などと囃してくるので、春樹は慌てて兔莉子の頭をさらに撫でる。

「……で、3人も聞いたな？ 25秒だ。キツイかもしれないけど、頑張つて避け続けてくれ。ショットを打った時間は俺が計るから、3人はバトルに集中してくれ」

『はいー！』

美海と琉花と忍の返事を聞いて、自分も気を引き締めた春樹は、最後に兔莉子の頭をもうひと撫でして、

「じゃあ、行ってくるよ」

「みんな、頑張ってくださいー！」

満面の笑顔に最高のエール。春樹たちは、戦場へと足を踏み出す。

……

別室でセニア、ユーフィリア、テルルの3人が装備を整えている間、

冬吾は控え室の椅子に座って考え込んでいた。当然バトルのことも色々考えていたが、やはり集中しきれない。鋭い春樹の言葉、そしてあまりにも純粋なセニアの瞳。それが頭の中をぐちゃぐちゃにかき乱す。表情には出していないが、自分が思うように思考をコントロールできていないという事実には、冬吾は自分でもはつきりと分かるほどに焦っていた。

「冬吾さん、焦ってます?..」

「うわっ!?!」

そのひよっこりと顔を出したのは、ナナだった。全く油断していた冬吾は思わず仰け反る。ナナはくすくすと笑うと、

「冬吾さんって、結構顔に出る人ですよ。春樹さんほどじゃないけど」

「そ、そう?..」

バレていた事が分かったため、反射的に情けない、助けを求めるような表情になってしまった。それを、救護用アンドロイドのナナは見逃さない。冬吾の頭を、その豊満な胸に優しく抱いた。予期せぬ柔らかさに思わず変な声を上げてしまいが、彼女は気にせずに冬吾の頭をよしよしと撫でた。

「大丈夫ですよ、冬吾さん。私はバトルに出れないけど、こうして冬吾さんを勇気づけてあげることならできます。頑張ってください。私はいみんなの努力をちゃんと見ていました。負けるはずありません。大丈夫です」

ナナが、大丈夫、大丈夫と繰り返すたびに、頭の中をかき乱していた2つの要素が、だんだんと落ち着いていく。思考のコントロールを徐々に取り戻し、内心の焦りが溶けていく。

「冬吾さんは、やりたいようにやってください。みんな、それを望んでいます」

「.....そうだね。ありがとう、ナナ」

天にも昇る心地良さを持つナナの胸から顔を離すのはどうにも惜しかったが、そんなことは言っていられない。ナナの言うとおり、彼女は彼女なりに冬吾を応援しているのだ。それは、男性本能的なこと

などとは全く関係なしに嬉しかった。

ちようど良いタイミングで3人が戻ってくる。冬吾は立ち上がり、3人に向かって言った。

「僕はこの試合に、勝ちたい」

最初の一言で、3人が見せた反応はそれぞれ違った。セニアはいつもどおりの無表情を少し引き締め、ユーフィリアは感心したように頷き、テルルは呆れをにじませた笑顔で肩をすくめた。

「僕は春樹に、勝ちたい。頑張ろう」

「珍しく物事に私情を絡めてますの。まあ、想像つきますけど」

「本気ならいいじゃないですか。私も気分が高まります」

「セニアは、マスターのために頑張ります」

戦略は何度も確認しているので、試合前に交わす言葉はこれだけで良かった。冬吾は自分も表情を引き締めると、入場口の方を向いた。

「じゃあ、行こうか」

『はい、マスター』

セニアは普段と同じだが、ユーフィリアとテルルが冬吾を『マスター』と呼び、戦闘状態に切り替わる。踏み出したその一步が、未来を構築し始めた。

バトル開始、15分前。

.....

ゲートをくぐる前にαデータパッドを受け取った春樹達が入場するなり、観衆が一斉に声を上げた。その様子に少しびくりとしたながら、春樹達はフィールドに入っていく。去年までは観衆の側にいた春樹は、こんなにプレッシャーを受けるなら声を上げるのを自重しておけばよかった、と意味のない後悔をした。

「うわわ……テレビで見たことあるけど、やっぱりすごいなあ……」

「やば、この私が緊張してる……？ これ、ヤバイね……!」

「……やっぱり、忍びというものは、こんなに観衆に囲まれて戦うものではないと思うのでゴザルが……」

春樹は例によって緊張のあまり無言、美海は目を皿のようにして会

場を見回し、琉花は若干の緊張にありありと興奮を浮かべ、忍は肩を落として嘆息しながらも堂々としている。

——これが、観衆つてもんなのか。

緊張しすぎて逆に冷静になってきた春樹は、改めて会場を見回す。どの顔も、期待と興奮に満ちている。

隣のゲートから冬吾のチームが入ってくるのが見えた。春樹は何よりも先にそちらへ向かっていく。それを見た冬吾は訝しげな表情になるが、春樹の差し出した手に驚いた。

「正々堂々、勝負だ」

「……負けないよ」

「俺も、負ける気はねえ」

春樹の差し出した右手を、冬吾はしっかりと握る。その光景に会場がまた沸いた。

やりとりは、それだけだった。どちらからともなく手を離すと、春樹は冬吾の背後、3人のアンドロイドに「お互い頑張ろう」とだけ声を掛け、そのまま背を向けて自分のチームメイトの元へと駆け戻っていった。

「……それで、良いでゴザルか?」

「おう。満足した」

ブルーミングバトルは、バトル開始10分前までに出場するプログラズ全員とファーストリンクを結ぶ。これにより、出場するプログラズが登録されるのだ。

「さ……みんな、頑張ろう!」

『はー!』

春樹の突き出した手に、3人がそれぞれ手を重ねる。目を閉じ、意識を集中。周りに自分を合わせていく。今重ねた手のように、そっと心を重ねていく。

——ファーストリンクが完了した。αデータパッドに3人の情報が表示される。

バトル開始、10分前。

どちらのチームも自分たちの作戦を改めて確認し、気合を入れてい

く。会場の熱は、どんどんと高まっていく。

出場プログラズが完全に確定し、会場の大スクリーンにそれぞれのプログラズとαドライバーの情報が表示され、さらに熱は高まる。同時に、それぞれのαデータパッドに、相手プログラズの情報が載せられた。

バトル開始、5分前。

「それじゃあ、行こう」

春樹の声に3人が頷くと、春樹はαドライバーゾーンへ、プログラズたちはバトルフィールドの中へ入っていく。春樹がαドライバーゾーンに入ると、足元からαデータパッドを固定しておくための細長い台がせり上がってくる。最悪これに無様にしがみつくことで敗北は回避できるが、そんなαドライバーを春樹は見たことがなかった。薄いファーストリンクを通して、全員の緊張が伝わってくる。しかし、ただの緊張ではない。興奮、高揚感、そういうものを含んだ、良い緊張だ。だから春樹は、大丈夫だと心の中で繰り返す。自分に言い聞かせるため、そして、みんなに伝えるため。

会場が徐々に静まってくる。その場にいる全員がただその時を待ち、熱狂を内側で高ぶらせていく。刻一刻と時は進む。

ふと、冬吾と目があつた。真剣な色に満ちた冬吾の眼差し。自分は……どうなんだろう。

そして――

時計の長針が真下を指した。

時刻、13時30分。αドライバーゾーンとバトルフィールドが形成され、会場が興奮で爆発する。

ブルーミングバトル、開始。

……

「なあ海斗。なんで今回、彼らにバトルさせたんだ？ 僕は正直反対だったぞ。伝えてから1ヶ月もないのに。時間潰し、それに隙間埋めなら僕らがバトルすりゃ良かったろ」

「さあ、なんでだろうな？」

「おいおい、そりやねえだろ。それに、規制緩和の話も聞いたぞ。彼らには、早めに教えておいたほうがいいんじゃないのか？」

「話していいのは、5月からということになってる」

「全く、手厳しいね。僕は教え子に厳しい方だと思ってたけど、お前は全く僕以上だな」

「可能性というものは、そうやって育てるもんだ」

「厳しくすりやいいってもんじゃないだろ。過度の負担は可能性の芽を踏み潰しちまう」

「わかっている。だから、これが最良だ」

「………つたく、どこまで読んでることやら。お前、そういうの感じ悪いぞ？ 楽園^{エデン}を潰した時もそうだったけど、お前の慧眼は一体何なん

だ。無理を通してあんな装備作らせて。おかげで今まで大助かりだよ、このスクラップめ」

「可能性の潮流を読むことは、決して難しいことじゃない。如何に広く、そしてどこに視野を絞るかだ。コツ、今教えたぞ」

「僕には無理だね。お前らみたいにくっつきや強いわけじゃねえし。例え流れを読めたところでボルホワに出来ることつつたら、せいぜいかつちよいいマシンの兵隊並べてニヤニヤするくらいだぜ」

「そのブリキの兵隊が1度に3000人の首を救ってる。お前も立派なヒーローだろ」

「バカ言え。ヒーローってのは、雄馬……じゃねえな。どっちかつーと凌雅みたいな奴の事を言うんだ」

「雄馬が聞いたら怒るぞ」

「だろうな。他言無用だ。出勤させてる身としては、罪悪感がある。すんげー楽しみにしてたもんな」

「ちゃんとホログラム映像は撮ってるんだろ？」

「もちろん。でないとなんか怒りそうだし。しかし、可能性、ねえ……彼らの可能性って奴は、そんなに早く育てなきゃいけないのか？」

「当然だ。でなければ、ほかの誰かに摘み取られてしまう。日向が攫われたと知った時には、肝が冷えた。殺されでもしたら、最悪だ」

「でも、無事で良かったな。さ、そろそろゲーム開始だ。B B O Sは良好に作動中、つと……ま、反対意見派としてはアレだが、やるならやるで楽しみだ」

……………

バトルが始まり、会場が歓声で爆発する。しかし、春樹は冷静だった。

3人のレベルが徐々に上昇し始める。

「さ、始めるぞ。忍、琉花、頼んだ！」

『了解！』

忍と琉花を前衛に回し、春樹は戦略通りにリンクのアイコンをタッチした。

春樹が頭を必死に回して考えた『読めても防げない戦略』。それが、始動する。

……………

冬吾はまず、春樹の手を読んでセニアとユーフィリアとセカンドリンクした。セニアは高レベルにならないと戦えないし、ユーフィリアはリンクしていたほうが出力が高い。そして、テルルはリンクなしでも戦える。

「……………」

αデータパッドに、目をやった冬吾は、驚きに少し眉を上げた。美海のレベルが、もう2になった。バトル開始から10秒しか経っていない。

美海と春樹のリンク率は98.9%。リンク率100%のプログレスは、セカンドリンク無しでのレベル上昇量は15秒につき1。そして目の前で、10秒で2上がったレベル。そうこうしている間にも、さらにレベルが上昇。レベル上昇のスピードが、通常の3倍。ということとはつまり、

「……………思ってた通りか」

春樹は美海とセカンドリンクを2重に結んで、レベル上昇速度を大幅に引き上げている。

眼前では、こちらのチーム3人掛かりで忍と琉花を攻撃している。

向こうも反撃している。が、目立ったヒットはない。向こうは反撃よりも回避・防御に念頭を置いて行動しているようだ。テルルの攻撃も、予想通り琉花の水の防壁に阻まれている。

しかし、冬吾は慌てない。予想済みだ。

「テルル。作戦通りだ。来るぞ」

『了解、マスター』

テルルの了解と同時に美海のレベルが、4になった。

.....

美海のレベルが、4になる。それと同時に、春樹はさらにαデータパッドを操作し、既に要求されているリンクを結ぶ。対象は美海。結ぶリンクは、αリンク。

「行くぞ、美海！」

『うん！』

琉花と忍が前衛で防御している。時間稼ぎだ。春樹の体には既に鈍痛が何度も走り抜けているが、先ほど肩に銃弾を食らったばかりなので、正直気にならなかった。

5秒の待ち時間。そして、

「琉花、忍！ 引け！」

『了解！』

忍が忍術で琉花を捕まえ、2人で一気に下がる。琉花が飛び散った水滴を残らず集めて2人を包み込む全方向への防壁を張った。練習通りの動き。

しかし、予想していなかったのは向こうの反応だった。急な撤退に慌てていない。しかし、今更後には引けない。弱気になるな。

「行け、美海！」

『了解！』

引き下がる琉花と忍と入れ替わるように、美海が前に出た。その身体は風を纏っている。バトル開始からたった30秒で、既にレベル4のエクシードを開放している。

『いっくよー！！！！』

掛け声と同時に、美海が宙へ舞い上がった。両手を前に突き出し、

相手の3人に向ける。そして、

暴風が吹き荒れた。

体重が軽いセニアが真っ先に吹き飛ばされる。それをなんとか捕まえるユーフィリアも、また飛ばされている。

『読めても防げない戦略』。美海のエクシードを真っ先に解放させ、敵を全員フィールドから吹き飛ばす。春樹は、一番リンク率の高い美海とバトル開始の瞬間から全力でリンクしている。例え読めても、読めた時にはもう追いつけない。

だからこそ、春樹は瞠目した。美海からも、驚愕の心情が伝わってくる。

テルルが暴風に身をさらしながら飛び上がり、すでに吹き飛ばされたかけたユーフィリアを左手で捕まえた。セニア、ユーフィリア、テルルの3人が数珠繋ぎになる。

次に、ユーフィリアのセラフィック・オルタナティブムーブメントの三六式神聖炎翼機装から青白い炎が迸り、3人を地面へと近づけていく。しかし、吹き飛ばされる勢いは変わらない。バトルフィールドのエンドラインが迫る。

そして、3人が地面と接触した。その瞬間、春樹は自分の失態を悟った。

鈍い音を立てて、人工芝が舞い上がった。見れば、テルルが自らの右腕を地面に突き刺している。それがまるで船の錨いかりのように、暴力的な空気の猛威から己の位置を固定していた。

油断していた。レベルの上昇速度的に考えて、向こうがセカンドリンクしていたのはセニアとユーフィリアの2人。テルルはノーマークだった。脳内に、彼女が150キロのバーベルを片手で持ったまま、もう片方の手で懸垂していた光景がフラッシュバックする。

何度も見てきたではないか。テルルがリンク無しでも圧倒的な脅力を持っていることなど。

「……美海、まだいけるか？」

『大丈夫だよー。でも……これ、全然吹き飛ばせない！』

春樹は不意に訪れた予感に従ってαデータパッドを見下ろした。すると……やはりだ。ユーフィリアのレベル上昇が早い。向こうは

ユーフィリアにセカンドリンクを一極集中させているらしい。理由は？ もちろん、反撃のため。

「美海、反撃されるぞ！ 警戒しろ！」

『りよ、了解！』

その言葉を言い終えた直後、ユーフィリアの背中に装着されたブースターが、先程のとは比較にならないほどの出力の青白い炎を吹き出した。

.....

ある程度は予想していた。あれほどの出力のエクシードを持つプログレスがいれば、その戦略は思いつく。相手が控えを用意していないことを知っているなら尚更だ。

しかし、冬吾は歯噛みする。それにしても、美海の暴風の威力を舐めていた。タイミング的にはギリギリもいいところだった。数珠繋ぎになっている最後尾のセニアなど、つま先がバトルフィールドの端をこすっている。

右腕が痺れている。テルルが地面に穴を開けるときに走った衝撃だ。覚悟していたが、40%でこれなのか、と冬吾はさらに表情を陰しくする。

しかし、やられっぱなしはこれまでだ。セカンドリンクを集中させたユーフィリアが、遂にレベル4に達する。

「ユフィ、完成だ。反撃して」

『了解です、マスター』

ユーフィリアは返事一つで反応した。うんと力を込めて、自分の両腕に握っているテルルの腕とセニアの腕を引き寄せ、互いに繋がせた。

『行きます！ セラフィック・ブースト！』

三六式神聖炎翼機装が青白い炎を吹き上げ、翼のように広がった。美海の暴風はなおも吹き荒れ、それを吹き消そうとするが、炎の勢いは一向に弱まらない。どころか、向かい風に逆らって美海の方へ進み始めた。美海が焦ったような表情になる。しかし、春樹に言葉をかけられたのか、表情を引き締め直すと、不意に暴風を止ませた。自分を

浮かせていた風まで止め、自然落下していく。ユーフィリアは一瞬の困惑の末、それを追った。

美海は地面に落ちる直前、一気に上昇気流を作り出した。真上から追っていたユーフィリアはモロにそれを受ける。体勢を崩す一瞬。その一瞬で美海が急上昇し、ユーフィリアの上に出た。

——しまった！

『食らええ〜！』

ユーフィリアは、内心疑問だった。風を操るエクシードは確かに有用だ。しかし、バトルフィールドから押し出す以外に、どうやって攻撃に使用するのか？ その答えは、冬吾も出しかねていた。

答えは簡単だった。

美海の掛け声と同時に、今度は急激な下降気流が発生。激しい気流の変化に、ユーフィリアの反応が遅れる。肝が冷える感覚と共に、身体が急降下する。

——空中に巻き上げてから、地面に叩きつける。

だが、ユーフィリアも一筋縄ではいかない。地面に接触する寸前にコントロールを取り戻し、ダメージを免れる

「ユフィ、危ない!」

はずだった。

『がつ!』

ユーフィリアが思わず声を上げたのは、背中に衝撃が走り抜けたからだ。今のは確実にダメージを受けた。冬吾の背中に鈍痛が走る。

——なぜ？ 地面との距離は計算済み……！

疑問に思うユーフィリア。その答えは、彼女の体が沈んだ時に始めて気がついた。

水。即ち琉花だ。彼女が水を操り、ユーフィリアの下に敷いてから、急上昇させてユーフィリアに当てたのだ。水は、一定以上の速度でぶつかると鋼のように硬くなる。プールで飛び込みをやるうとして腹打ちした時に悶えるほど痛いのだと同じだ。

——お見事です、春樹さん。それに、美海さんと琉花さんも。

ユーフィリアは心中で3人に賛辞を送りながら、小さく、セラ

フイック・バースト、と唱える。一旦出力が弱まっていたブースターから再び炎が迸り、身を包む水を残らず払った。

「ユファイ、大丈夫？」

『マスターこそ、大丈夫ですか？』

「僕はまだまだ。時間稼ぎ、ありがとう」

『どういたしました。では、そろそろ本番と行きましょう』

ユーフィリアが不敵な笑みを浮かべる。

ユーフィリアがαリンク抜きで美海のエクシードを引き付けること30秒。

その間に結んでおいたセカンドリンクによって、テルルとセニアのレベルは4になっていた。

……………

αデータパッドに表示された情報を見て、春樹は歯噛みする。

「美海、αリンクを切るぞ」

『うん！』

そう断ってから美海とのリンクを断つ。すぐさま操作を進めて琉花と忍とセカンドリンクし、レベルを上昇させにかかる。バトル開始から既に1分と30秒が経過している。琉花と忍のレベルは既に3まで上昇しているが、向こうは全員4だ。

「琉花、忍！ 10秒辛抱しろ！」

『了解！』

琉花と忍のリンク率は、1桁目を切り捨てて80%。レベルが1上昇するまでに25秒かかる。端数を切り捨てているので実際はそれより早い……既に向こうは攻撃を開始している。

「琉花、防壁だ！ テルルは通すな！」

『オツケー！』

琉花に指示しながら、春樹は内心焦っていた。

先ほど、美海と琉花の連携攻撃でユーフィリアにダメージを与えられた。それはいい。それはいいのだが。

琉花がユーフィリアに水の塊をぶつける直前のユーフィリアの体勢から察するに、彼女はあそこから体勢を立て直せただろう。そし

て、彼女の武装のブーストによつて、琉花が操っていた水はまとめて吹き飛ばされた。

確かにダメージは通った。しかし、彼女はαリンク無しで美海と琉花相手に戦っていた。逆説的に考えれば、ユーフィリアには美海と琉花の2人掛かりでなければダメージを通せないということになる。

結果的に今の局面で、ダメージの点では冬吾よりも春樹の方が優位に立った反面、プログレスレベルの点では逆に優位に立たれてしまった。

——勝ちたい。

——だから、容赦はしない。

だから、狙うべきは。

「忍！ セニアを狙え！」

無情かもしれない。だが、それが春樹の選択だった。

忍は軽く頷くと、セニアの方へ駆け出した。

……………

美海が宙へ舞い上がり、それをユーフィリアが追う。琉花が水の防壁を張り、それを突破しようとするテルル。そして、セニアを狙う忍。

「マスター、リンクを」

『分かった！ いくよ！』

セニアは自分に危機が迫っていることが分かっていた。それは冬吾も同じだ。

「セニア殿、ご覚悟を！」

そう言いながら忍が駆けてくる。武器は持っていない。体術で攻めてくるつもりだ。

しかし、セニアも黙っているわけではない。小柄なのはお互い様、それを活かした素早い攻防が繰り広げられる。

冬吾が言っていた。「誰かと相手をする時には、出来るだけそいつに近づけ」と。冬吾は、美海によつてセニアがフィールド外に吹き飛ばされる可能性を常に懸念していた。「敵の誰かに密着していれば、美海ちゃんは味方を巻き込むことを恐れて攻撃してこないはずだ」と。そして、その推測は正しかった。

『セニア、αリンク完了だ！』

「了解です、マスター！」

冬吾の声と同時に、遂にセニアのエクシードが完全に解放される。
「ブルム・エクス・マキナ四六式乙型亜空間連結機構機動。レベル4領域、フルアクセス」

セニアが唱えると同時に、まずセニアの腕に腕部装甲ガントレットが現れ、細やかな金属音を立てて装着。更に、バトルスーツを締めているベルトに、2丁の銃が出現した。セニアは右手の平を忍に向ける。そこにエネルギーショットの銃口があった。

「本気でゴザルな。なら拙者も行くでゴザル！ 忍法・火遁の術！」

忍は手印を結んで身の回りに炎を出現させた。ここからが本当の勝負だ。

「……行きます！」

自然と気分が高ぶる。練習中にこんな気分になったことはない。その感情は、どこか心地よかった。

忍の炎術を躲して拳を放つ。特殊な合金でできたパンチは喰らえば痛いだろうが、忍はそれを軽々と避けてみせる。逆に拳を打ち込まれたが、それはガントレットでガードする。炎術は熱いが、耐えられないほどではない。熱はαドライバーへフィードバックせず、プログレスが受けるのだ。火傷するほどの熱さなら当然痛みを伴うため、それはαドライバーへとフィードバックするが。

そうして数回拳を交わしたところで、今度は隙を突いて右手の平から3秒間ショットを放つ。忍の気配が変わった。勢いを増させた炎を盾にすると、エネルギーショットはそれに吸い込まれてしまった。エネルギーショットと同じで、炎もまた純粋なエネルギーの形。よりエネルギーの強い方へ吸収されてしまったのだ。それだけ、忍のエクシードが強力だとも言えるが……。

インカムから、冬吾の舌打ちが聞こえた。セニアも承知している。あと22秒しかショットは打てない。

『セニア！ 銃に切り替えろ！ 揺さぶれ！』

「了解です、マスター！」

セニアはすぐに腰から2丁の銃を抜く。片方は装弾数7発のエネ

ルギーガンだが、もう片方は非殺傷のゴム弾が装填されている。たった10発しかないが、無論、炎で溶けるようなゴムは使っていない。

セニアはゴム弾装填の銃を1発、忍に向かって放つ。流石に銃弾の速度には追いつけなかったのか、腕に当たる。すぐさま2発目を放つたが、今度は即座にそれを見破った忍が、驚異的な反射神経でそれを躲すために集中させ、結果、避けた。素晴らしい。セニアは心の中で思う。そして、

それを待っていた。

セニアは目の端で捉えていた、テルルと交戦中の琉花に向かって、もう片手のエネルギーガンを放った。

忍が驚いたのも無理はない。2丁の銃はそれぞれ外見の形状が全く同じなのだ。そして、セニアのゴム弾を躲すのに神経を集中させた上、ゴム弾なら琉花が打たれても大丈夫だ、と反射的に判断したのだろう。その攻撃は、完全に琉花を捉えていた。水の防壁を貫通してショットは琉花にヒット。衝撃で転倒した拍子に防壁が緩む。冬吾の作戦が上手く嵌ったことに、セニアは薄く笑いを浮かべた。

忍が舌打ちをひとつ。

「世話が焼けるでゴザル！」

懐から何やら小さな玉をいくつか取り出すと、それを空中に放り、「目暗ましでゴザル！」

纏っていた炎を操って点火した。破裂音とともに色とりどりの煙が舞い上がり、セニアの視界を覆い尽くした。急いで振り払うが、視界は一向に晴れない。視覚が役に立たなくなった以上、次に頼れるのは聴覚だ。耳を澄ますと、忍の声が聞こえてくる。

「あそこに投げるでゴザル！」

——いけない。

『セニア！ 避けて！』

悪い視界の中、冬吾の声が聞こえるが早いか、イチかバチか横っ飛びに跳んだ。次の瞬間、セニアのいた場所に大量の水が降ってくる。煙はその水が洗い流してくれたが、良くないものが近づいてきていた。

「つしやあ！ 次は私の番だぜ！」

言うまでもない、琉花だ。しかし、これはセニアにとって格好の標的と言える。水の防壁ではエネルギーショットを防ぎきれない。ついさつき、そのせいで琉花はセニアの攻撃をモロに食らったのだ。このバトルでセニアともっとも相性の悪い春樹のプログレスは、間違いなく彼女だろう。

セニアは、そして冬吾は、その理由を判断しかねた。どちらも合理的なものの考え方には長けている——それ故、春樹が悪手を踏んだ理由が、すぐに理解できない。そして、両者共に琉花に対してエネルギーショットが有効だということなら知っている。セニアはゴム弾の銃を収め、右手の平、そして左手でエネルギーガンを構えた。

「行きますー！」

「よしきた！ 当ててみな！」

琉花がくるくるとリボルバー銃を回しながらセニアを挑発。左の銃で狙い撃つ。が、直前で避けられた。見れば、彼女の足元に水が流れている。それに敢えて足を捕らえさせて躲したのだ。

そこからの琉花の動きは、誰も想像を絶していた。

半分地面に倒れるような体勢になりながら、背中に這わせた水流で高速に移動する。時に高く巻き上げた水流に乗って自分も宙へと飛び、そこからリボルバー銃によって何発も水の弾を発射。まるでウォータースライダーに乗っているかのように素早い移動。しかも厄介なのは、ウォータースライダーと違ってルートが読めないところだ。セニアがルートを予測してエネルギーショットを放つと、琉花は直前で水流の向きを変えてやり過ぎした。単発のエネルギーガンではまともに当てられない。なので継続して打っていられるエネルギーショットを、琉花のルートを予測して薙ぎ払うように放つことで、何度かヒットさせることができた。しかし、大きなデメリットを負う。ショットの残量が急激に減っていた。

しかし、琉花の動きはだんだんと短調になってきた。疲れているようだ。ここが決め所だ、と判断したセニアは、左手のエネルギーガンと右手のエネルギーショットの残弾をすべて同時に放つ。

それが間違いだった。

琉花の足元から間欠泉のように莫大な水流が立ち上り、琉花を空中へと押し上げた。息をやや荒げながらも、その表情は軽い。

攻撃が外れると同時に、エネルギー攻撃の残弾がなくなった。セニアは悟る。

——疲れたフリ？ 攻撃を誘っていた？

驚くのはそれだけではなかった。琉花は、まるで今の一撃でセニアが弾切れを起こしていることを知っているかのように、水流を操って一直線に突っ込んできた。冬吾が息を呑む気配が伝わってくる。

『ユファイ！ セニアを！』

冬吾の叫び声が聞こえる。その声に反応したユファイリアは、琉花がセニアに激突する寸前でその間に滑り込んだ。

「セラフィック・ガード！」

その叫びに応じて炎の翼が盾のようにユファイリアの前に広がり、琉花の水流を押しとどめた。弾き飛ばされた琉花が地面に転がる。これで琉花の驚異はどうかなくなった。

琉花の驚異は。

ユファイリアがセニアのガードに回るといことが、彼女から枷を外したことに、そのときは誰も気づいていなかった。外された彼女さえも、その瞬間は呆然とした。

——誰かと相手をする時には、出来るだけそいつに近づけ。

——敵の誰かに密着していれば、美海ちゃんは見方を巻き込むことを恐れて攻撃してこないはずだ。

だから、その一撃は誰にも予想できなかった。

ユファイリアの後ろを駆け抜ける疾風。

冬吾が、己のミスを自覚する。訪れるであろう痛覚に身構える。

セニアとユファイリアの真横に軟着陸した美海が発生させた突風によって、体重の軽いセニアは、まるで小枝のように吹き飛んだ。

.....

これが全部計算ずくだったらかっこいいのに。と春樹は自分をそう評価した。

既に全身に痛みが走っている。当然だ。琉花はエネルギーショットを何度か食らっているし、忍は頑張つてテルルと単身で戦い引きつけておいてくれた。美海もユーフィリアの攻撃を数回受けているし、軟着陸の衝撃もある。だが、まだ行ける。

そしてなにより、セニアを盤上から引き下ろすことができた。しかし、これは偶然に偶然が重なって導かれた結果だ。ある程度は戦略通りだった——例えば、琉花がセニアのショットを消費させるところとか。でも、結果としてセニアはフィールド外に出てしまった。これは大きい。美海と琉花でユーフィリアを、忍でテルルを。バトルフィールド外に出たプログレスは、30秒の間再入場が禁止される。とりあえず30秒間はそういうふうには戦える。

それは向こうも承知しているはずだ。しかし、どうも冬吾の様子がおかしい。どこかで読まれる、そのときを今か今かと恐れていたが、結局セニアがフィールド外に放り出された。

——あいつ、集中できてないのか？

自分が昨日、冬吾に何を言ったかを思い出す。

——理解して欲しい思いを無視して、理解できるところだけ一方的に理解してるフリをするお前よりも、はるかにいい！

その言葉は、春樹が予想した以上の効果を発揮しているようだ。一方の春樹は——もう、そんな言葉には惑わされない。美海に、琉花に、忍に、そして兎莉子に。みんなに励まされ、傷が癒えた。

なら、負けない。

「美海と琉花はユーフィリアを！ 忍はテルルを！」

そして、美海のαリンクに応じ、美海のエクシードを解放させる。

「さあ、一気に行くぞ！」

『はいー』

打てば響くコンビネーション。このチームが結成から1ヶ月も経っていないと暴露したら、この試合の観客は大いに驚いただろう。

……………

地面に叩きつけられたセニアは、何が起きたのかわからなかった。気づいたら宙を舞い、気づいたら地面に転がっていた。受身さえ取れ

なかった。というより、上空から墜落したときの対処法を知らなかった。

痛くない。だが、それが逆に背筋をぞつとさせた。

冬吾の方を見ると、端正な顔を歪ませて痛みを耐えていた。やっぱりだ。セニアは冬吾の言いつけを破って敵に密着しなかったためにバトルフィールド外に放り出された挙句、墜落の衝撃で冬吾にダメージを与えてしまった。

「ま、マスター」

『セニア……大丈夫か?』

必死に取り繕った声を聞いて、セニアは自分の身体を確認する。背筋が冷えた。

「マスター……」

『どうした?』

セニアは呆然となって、その事実を告げた。

「腕部装甲が、動きません」

『——っ!』

セニアの両腕に装着されたガントレットは、墜落の衝撃で壊れていた。さらに、バトルフィールド外に出たことでエクシードが抑圧され、セニアの装備が格納され直した。

『セニア、あとは何が使えぬ?』

「……ゴム弾が8発と閃光弾が2発のみです」

『……そうか。セニア、エンドラインに戻っておいで』

あくまで優しい響きの冬吾の声に、セニアはえも言われぬ感情に囚われた。

それは、真つ赤な感情だった。

両手が勝手に固く握り締められ、奥歯が砕けそうなほど噛み締められる。四肢が震え、頭が熱くなる。心拍が上昇し、息が荒くなる。

『……セニア?』

なんだ。なんだこの状態は。セニアは自分の中のデータベースを——冬吾やユーフィリア、テルル、ナナに教えてもらったことばかりだ——を漁る。しかし、全く情報がない。

いつの間にか、セニアは涙を流していた。噛み締めた歯の間から、微かに唸り声が漏れる。

役に立ちたかった。

自分も、マスターの役に立ちたかった。

信頼されなかった。

でも、結果はどうだ。

バトルの流れを大きく持って行かれてしまった。

拳句装備は壊れ、自分は役立たず。

役立たず。

ガラクタ。

ゴミ。

使えない。

こんなガラクタを、マスターが信頼するだろうか？

有り得ない。

信頼されるような器でもないのに、自分はマスターの信頼を求めた。それはなんて、傲慢。

春樹が言っていた台詞が、脳内に蘇る。

——信頼されたら、応えなきやいけなからな。

何が「信頼されたい」だ。

信頼される資格のない奴が、無礼甚だしい。

それでもやっぱり、諦められなかった。

——冬吾を信じて頑張れ。冬吾に認められたいっていう思いがあるなら、それを掲げて頑張るんだ。

セニアはゆらりと立ち上がる。

認められたい。

認められたい。いや——違う。

「セニアは、マスターを——」

——認めさせてやる。

その感情は、火傷するほどに熱い《悔しさ》。

セニアの中で、何かが壊れた。

.....

全身が痛い。しかし、まだ耐えられる。

冬吾はテルルとユーフィリアに指示を出しながら痛みを耐えていた。

バトルフィールドを挟んで春樹を見る。彼もまたダメージを負っているが、瞳には強い光が見える。

自惚れていた。戦略勝ちできる、と簡単に思っていた。その結果がこれだ。セニアはほぼ戦闘不能といっても過言ではない。30秒の入場制限を終えても、彼女を再びフィールド内に入れるかどうか決めあぐねっていた。

冬吾は正直、恐れていた。手負いの獣の強さ、火事場の馬鹿力とでもいうのだろうか。冬吾よりもはるかに卓越した戦略の数々に、見入る反面恐怖を抱いた。春樹の勝負強さが、怖かった。

——とりあえず、現状に集中しよう。

「ユファイ、美海ちゃんをお願い。テルルは忍ちゃんを頼む」

ユーフィリアとαリンクを結びながら指示を出し、集中しようとする。

ふと横を見ると、セニアの様子がおかしい。地面に両手を突いてうなだれたまま、動かない。

「……セニア？」

冬吾が問いかけると、セニアはゆらりと立ち上がった。その水晶のように澄んだ瞳が、真つ直ぐに冬吾を射抜いている。

『セニアは、マスターを——』

ぼそつと呟く声が聞こえる。

『マスターは、セニアを——信頼していますか？』

その声に、思わず息が詰まる。言い訳できない自分の本性は、セニアに見破られていたのだろうか。

しかし、逃げるのはもうやめた。春樹は今、バトルに全力で挑んでいる。なのに自分は——春樹に恐怖し、セニアの瞳に怯え。

もう、やめだ。すべて正直に——そうすれば。

「してなかった」

冬吾はそう口に出した。

「信頼してなかった。したくなかった。怖かったから。こんなに小さくて純粋な子に信頼を押し付けて、傷つくのを見たくなかったから！」

『……では、マスターは、セニアのことを信頼しないのですか』
「いいや、違う！」

その裂帛の声にセニアが息を呑む。

「僕はセニアを信じる！」

言い切った。もう後戻りはできない。すると、セニアがとんでもないことを言い出した。

『装備が、あります』

「え？」

『たった今、解放されました。レベル5領域に、装備があります』

それは、まさに捨て身の発言だった。でも、もう冬吾は迷わない。

「じゃあ、それを使おう」

セニアがフィールドを出てから30秒が経った。

………

美海は苦戦していた。ユーフィリアの動きが、今までとは明らかに違う。はつきりと見て取れる本気。先程まで当たっていた攻撃が当たらない。先程まで避けられていた攻撃が避けられない。

ユーフィリアは、フィールド外に放り出されたセニアの分まで動き、少しでも美海の体力を削るつもりだ。そして、それははつきりと効果をあらわしていた。美海の息が切れ始める。

スタミナの枯渇。

——でも、負けない！

不意に、ユーフィリアが美海の下に回った。慌てて方向転換しようとしたが、

「セラフィック・バースト！」

その真下から、ユーフィリアの炎の翼が襲いかかる。咄嗟に下に向

けて風を放出し、押しとどめる。それが毘だった。

ユーフィリアは、その隙に美海の頭上へと舞い上がっていた。そして、

「セラフィック・ブースト！」

ブースターの加速を使用して一気に急降下。不意をつかれた衝撃と身体の疲れから反応が遅れた美海の背中にそつと手の平を当て、地面へと突き落とした。

バトル開始直後に美海が行った攻撃への意趣返し。今度は美海が地面に叩きつけられそうになる番だった。必死に風を操って大勢を立て直す、が、間に合わない――

「みうみん、危ない！」

琉花の叫びと同時に水の塊が美海を包み込んだ。ユーフィリアにしたのとは異なり、落下の勢いを殺すために美海の降下に合わせ、衝撃を吸収する。

しかし、すべての衝撃を殺しきることはできず、美海はまた地面に軟着陸した。しかし、今回は真下への軟着陸だ。内蔵が圧迫される感覚に、息が一瞬止まる。

「みうみん。大丈夫!？」

「わ、私は、大丈夫……!？」

嘘だ。ずっとユーフィリアと空中で戦っていたため、体力の限界が近い。元々体力はある方とはいえ、ぶっ続けでここまで激しく動くのだと、やはり要求される体力は桁が違う。

――もつと、役に立ちたい。

――こんなところで、終わりたくない！

悔しかった。1年の功があるとは言え、ユーフィリアはエクシードの差をこうも容易く埋めてくる。

思い上がっていた。自分は、別に強くもなんともない。ただ、みんなに褒められて舞い上がっていただけ――

『弱気になるな!』

春樹の怒声がインカムから響いた。びくりと震える。春樹の方を見ると、彼は苦痛に耐えながらも、瞳に強い光を宿していた。諦める

気など全くない、不退転の覚悟の光。

『まだ俺はやれる！ だからお前らも頑張れ！』

——そうだ。

——何諦めてるんだ。まだみんな立ってる。まだ戦える。春樹くんが付いてる。みんな、信頼し合ってる。

——繋がリンクっている。

そう自覚すると、不思議と体の底から力が湧いてくるようだった。

——諦めて、たまるか！

奥歯を食いしばって立ち上がる美海。インカムの向こうで、春樹が驚いたように声を上げた。

『美海、お前……』

「ど、どうしたの？」

美海が問いかけると、春樹は震える声で、

『レベル5になれる』

「——え？」

美海ですら自覚がなかった。しかし、体の奥底から湧いてくるこの力は——

春樹が悩んでいるのがはっきりと分かった。レベル5は諸刃の剣。他のリンクをすべて切断した上で30秒間もサードリンクしていなければいけない上、レベル5状態は20秒で解け、解けた後はレベルが強制的に0に戻される。

しかし、決めざるを得なくなった。

フィールドに再入場したセニアが、異常なオーラを発し始めたからだ。即ち、サードリンクを結んでいる。

『——美海、行けるか？』

春樹の震える疑問。春樹の恐れが——諸刃の剣を切る事への恐怖が——伝わってくる。

だから美海はむしろ満面の笑みで、心いっぱい希望を灯して言った。この思いが、みんなに届くように、強く！

「行こう、春樹くん！」

返事は無かった。同時に美海は、自分の中から更に湧き上がる力を感じた。

……………

美海のアイコンの下に《3rd Link》のボタンが現れた時には、はつきり言って呆然とした。

現実に戻されたのは、セニアのアイコンの下に《3rd Link》の表示が現れたからだ。

セニアがレベル5になろうとしている。その時、対抗できるのは恐らく美海がレベル5になった時だけだろう。

「美海、行けるか？」

そう聞いた時の春樹の声は、我ながら笑つちやうほどに弱々しく震えていたと自覚している。

だからだろう。返ってきた声は、強く、活力にあふれ、希望に満ちていた。

『行こう、春樹くん！』

返事はしなかった。その代わり、春樹は美海のサードリンクボタンを迷わずに押した。

未知の感覚に、胸が震える。今までのリンクとは全然違う。もっと深いところで繋がる。美海の心が流れ込んでくる。光に満ち溢れた美海の心。しかし、少し暗い場所もある。恐怖だ。何かを失うことへの恐怖。

しかし、そんなものは春樹にもある。むしろ春樹には、失ったことへの痛みがある。

繋がった心が、互いに互いを癒し合う。美海の光が春樹の痛みを和らげ、春樹の心が——だったら良いのだが——美海の恐怖をほぐしていく。

フィールド内で、先にセニアがレベル^覚5^醒になった。全身が白く光り輝き、全身を覆うアーマーが形成される。頭部にはバイザーと口元を覆うマスク、胴体は薄い、しかし弱さなどまるで感じさせないア—

マーに覆われ、背面にブースターが、そして6機のビットが出現した。ブースターを噴かして空中へと舞い上がる最中、彼女の背後に、真っ白な炎が形作る光輪を見た。まるで機械デウス・エクスマキナでできた神のような、神々しく光り輝く存在に、誰もが見入った。

そして、少し遅れて美海も覚醒する。髪を結び上げていたりボンがひとりでに解け、ツインテールがばらりと広がる。今までのものとは比べ物にならないほどの疾風が美海の元へ集い、眼前の純白の神と同じ格へと彼女を押し上げていく。その背中に、青く煌く翼を見た気がした。赤の世界の伝説の中で、命を導くと言われる大天使ラファエルの持つ青い翼の如く、世界を仰ぎ、大きく広がる。

あまりの神々しい光景に、まるでバトルフィールドの中が隠世かくりよと化したかのようだった。

神と天使の決戦。誰も胸が大きく震えた。

.....

冬吾は、我知らず叫んでいた。

「セニア！ 行け！」

返ってきた声は、決意に満ちていた。

『了解です、冬吾さん！』

.....

春樹は、思わず叫んだ。

「美海！」

飛べ！ と言おうとした。しかし、心が叫んだ声は、違っていた。

「飛ぼう！ 一緒に！」

美海の心から喜びが溢れるのを感じた。

『うん！ 一緒に飛ぼう、春樹くん！』

.....

神と天使がぶつかり合う度に、2人のαドライバーに強烈な痛覚が走った。しかし、互いにそれを気にする様子もない。リンクを繋ぐこ

とに必死なのと、目の前の戦いに、ただ純粹に見惚れているのだ。

地上は美海のエクシードが解放されているせいで、風が荒れ狂うあまり戦うどころの話ではない。なんとか吹き飛ばされないようしながら、それでも全員が頭上の決戦に見入っていた。

青く煌く疾風が吹き抜け、白く光り輝く機体が光線を放つ。拳と拳がぶつかる度に、青と白が混じり合い、大輪の花が狂い咲く。

誰も目を奪う、至上の戦い。しかし、すぐに違和感が出来始めた。青と白の中に、鮮烈な赤が混じり始めたのだ。

出処に目を凝らすと——それは、セニアの関節だった。レベル5の装備がセニアの関節に異常なまでの負担を掛けているらしい。そのせいで、皮膚が裂けているのだ。

冬吾は、急激に増した痛覚に歯を食いしばる。セニアは気づいていない。リンクしているので痛覚を感じられず、自分の体が、自分の召喚した装備によって破壊されていつていることに気づけないのだ。

『セニアちゃん！ 血が！』

戦っている美海まで心配して声を上げる。しかし、セニアは厳しい表情を崩さなかった。

『セニアの心配など、しないでください！ セニアはマスターのために、全力であなたを倒す！』

始めて聞く、セニアの強い怒声。その声を聞いて、美海も表情を改めた。

『なら、容赦しない！』

疾風が駆け抜ける。光線が荒れ狂う。そして、再び拳と拳がぶつかった。一瞬の均衡。その瞬間だった。

『あつ……！』

セニアの武装が解除された。20秒。制限時間になり、レベルが0に戻され、装備が光とともに消えてしまった。

そして、美海はまだレベル5だった。その差が勝負を分けていた。拳の均衡はあっさりと破られ、セニアは大きく吹き飛ぶ。

『セニアちゃん！』

美海は自分が吹き飛ばしたセニアを必死で追いかけた。なんとか掴む。抱きとめる。

そこで、美海も覚醒が解けてしまった。同時に、なんと、バトルフィールドの外に出てしまう。風を操って軟着陸しようとしたが——無理だった。バトルフィールド外ではエクシードが使えない——！

衝撃への恐怖。セニアを庇いながら——美海は地面へ墜落した。

……………

激痛が身体を走り抜けた。思わず気を失うかと思った。しかし、土壇場で春樹は踏みとどまる。まだ勝負は終わっていない。春樹も冬吾も。どちらも——立っている。

αデータパッドを見ると、春樹は肺から空気が全部抜けていくかのような心地を覚えた。美海のアイコンが、消えた。彼女が意識を失い、ファーストリンクまで切断されたためだ。

叫びそうになる。今すぐαドライバゾーンから駆け出して、美海を介抱したい。無事を確かめたい。あんな墜落の仕方したら、命が危ない。

でも。春樹はその欲求をねじ伏せた。まだ勝負は——終わっていない。

「琉花！ 忍！ 決めるぞ！」

『了解！』

セニアも大きく傷ついている。そのせいで、冬吾にも多大な痛みがあることだろう。だから、勝負はこれで決まる。

「琉花はテルルを相手しろ！ 忍！ ユーフィリアを捕えろ！」

『オツケー！』

『承ったでゴザル！』

美海の繋いだ、この盤面。意地でも制してやる。

……………

関節がちぎれるように痛い。墜落の衝撃もある。しかし、冬吾はまだ立っていた。すぐ横に美海とセニアの身体が横たわっている。セ

ニアは肩や肘、膝などの関節から血をどくどくと流し、美海は全く動かない。

肝が冷えた。美海の安否を確認したい、セニアを今すぐ介抱したい。そう思う心は、自分でも予想できないほど強かった。

しかし、勝負はまだ終わっていない。終わっていないのだ。

セニアが己の身を賭して繋げた局面。落とすわけには、決して行かない。

「ユファイ！ テルル！ 2人掛かりで琉花ちゃんを攻撃しろ！ 忍ちゃんが阻んだら、ユファイリアが対処しろ！」

『了解です、マスター！』

思わず荒くなる口調に、しっかりと対応するユファイリアとテルル。最後に、まだリンクが繋がっているセニアに対して言った。

「セニア、よく頑張った。動かないで、後は見ていてくれ。いいな？」

『……は、はい……マスター』

セニアは掠れた声で、それでもはつきりと言った。

ありがとう、セニア。僕の意志を見ていてくれ。

………

2人の意思が交錯し、テルルは琉花と、忍はユファイリアと対峙した。αリンクが繋がっているのは琉花とテルル。

「ここは通さないでゴザル。ユファイリア殿には、琉花殿によってテッル殿が敗北する姿をゆるりと見ていただくとゴザル」

「そうはいきません。忍さん。貴女を倒して、私が、いえ……私たちが、勝利する」

苛烈な言い合い。忍は懐から1本の苦無くなを出した。そして、余計な感情が滑り落ちた、初めて見せる本気の声で言う。

「舐めるな」

その声に、ユファイリアが構える。背中から青白い炎が迸り、再び翼を象る。

「春樹殿！ 多少の痛み、ご覚悟を！」

『ああ！ 構わない！ やれ！』

春樹の返事を聞くや否や、忍は右手の苦無で左手の平を切り裂いた。鮮血が迸り、人工芝の地面を濡らす。

「——っ!？」

「行くでゴザルよ！ この風魔忍、不肖の身ながら、これより拙者の見せる熱い幻想に、どうか酔いしれて下され！」

慇懃な口調で叫んだ忍は、右手の苦無を左手に持ち替えると、それを素早くユーフィリアに向かって投擲した。それを見切ったユーフィリアは、身体を僅かに逸らして躲す。苦無は背後の地面に虚しく突き刺さった。

しかし、一瞬気が逸れたのは変わらない。その隙に忍は懐から4枚の式符を取り出していた。その式符に、左手の平から溢れる血液をベツタリと塗りつける。

「さあ、行くでゴザル！ 第壹いちの術！」

忍は式符を宙に投げ捨て、そのうち1枚を掴み取った。ユーフィリアの翼がより一層広がる。

「燐火舞い散らし狂い咲け！ 忍法・炎花爆裂フレイヤー・ボンバー！」

式符が赤く光り輝き、いくつもの黒い球へと変化する。それらはユーフィリアの周りへ飛んでいくと、まるで花火のように色とりどりの火花を散らしながら爆発した。

爆弾？ いや——

——目くらまし！

「セラフィック・バースト！」

ユーフィリアが叫び、ブースターから吹き出す炎が勢いを増して火花を残らず払った。その時には、既に忍は空中にいる。

「第貳にの術！ 星礫集いて大河と成せ！ 忍法・炎星流河フレイヤー・シャワー！」

2枚目の式符がまた赤く輝き、今度は白熱したいくつもの小さな球へと変化した。彼女の言葉通り、まるで星のような——

その星々が、赤い奇跡を引いてユーフィリアへ殺到する。その光景は流星群の如く。しかし、ユーフィリアもただでは受けない。

「セラフィック・リープ！」

ブースターから溢れる炎が、細長くなった。瞬間、ユーフィリアの

姿が掻き消える。まるで瞬間移動のように、現れては消え、消えては現れを繰り返し、全ての流星を躲した。それと同時に忍との距離を詰めていたユーフィリアは、すかさず拳を彼女に叩き込む。

その拳が、忍の身体にすぼりと埋まった。慌てて引き抜こうとしたその時、下から声が聞こえた。そちらを向くと、その手には既に4枚目の式符しかない。つまり――

――しまった！ 分身――！

「第参さんの術！ 光に煙で幕を引き、我が分け身と成れ！ 忍法・フレイム・ブレイク炎幕分身！」

その分身が、爆発した。衝撃をモロに食らう――その寸前で、「セラフィック・ガード！」

炎の翼を盾にし、それをなんとか防ぐ。

忍の赤い炎と、ユーフィリアの青白い炎。2つの炎が互いにその威を競い合うかのように弾け、舞い散り、混ざり合う。表と裏が入れ替わり、一瞬たりとも目が離せない炎同士のバトルに、会場の熱狂はさらに高まっていく。

忍の手元で、4枚目の式符が赤く煌めいた。

「第肆よんの術！ 熱風逆巻き縛り捕らえよ！ 忍法・炎熱縛網！」

式符を地面に叩きつけると、先ほどの爆発で発生した熱が網と化し、ユーフィリアに上から被さってその動きを捕えた。その熱さに一瞬息が止まり――しかし、諦めない。

「セラフィック・ドライブ！」

今までで最も強い炎がブースターから発せられ、ユーフィリアは熱の網を強引に破りにかかる。術式は抵抗したが――ユーフィリアに破られた。

――これで……！

もう忍の手元に式符は無い。この勢いで、一気に勝負を決める！

『――っ!? ダメだ、下がれユファイ!』

その言葉の意味を一瞬理解し損ねた。それが致命的なミスとなった。

「第伍ごの術！」

——な、何!?

驚愕するユーフィリア。対する忍は、会心の笑みを浮かべた。

「千鎖繰り疾く吹き閉じよ! 忍法・炎鎖フレイズ・プリズン戒牢!」

式符も無いのに、どこから術が。その答えは背後からやってきた。

熱い鎖が、ユーフィリアの首首、足首、胴体、さらにブースターに巻き付いた。同時に、ユーフィリアの動きが完全に固定される。首しか動かせない。

——これは……金縛りの術に、霊力結界!? でも、一体どこから——?

鎖の飛んできた背後を見て、唾然とする。

苦無だ。

最初に忍が投げた苦無。地面に突き刺さったその持ち手に、鎖の先と式符が巻かれている。投げる直前に左手に持ち替えたため、血液も付いている。忍は、あの苦無に巻きつけられた式符の術を遠隔で起動させたのだ。

——なんて、芸達者。

このタイプの術式には覚えがある。あの苦無が要なのだ。あれを地面から引っこ抜けば、すぐにこの結界は解ける。だが。

今、テルルは琉花と戦っている。赤い鎖はブースターまで封じ込めていた。抜け出す手段が、無かった。

ユーフィリアと冬吾の戦略は、忍に完全に敗北した。

………

自分が情けなかった。琉花の守りを、突破できなかった。忍と戦った時にも、致命的な一撃を入れることができなかった。

テルルは拳を振るいながら、そのもどかしさに臍ほそを噛む。

対峙する琉花も、息が切れ始めている。あと少し——だが、その少しが、遠い。

視界の端で、ユーフィリアが忍の鎖に囚われた。もう、自分しか残っていない。

なまじ強大な膂力を持つテルルは、もしかしたら自惚れていたのかもしれない、と、その時ようやく自覚した。

——本気を出せ。

でなければ、勝てない。

もう、自分しか残っていない。

その事実を、テルルの頭を不思議と冷静にさせた。冷静に、自分が何をすべきか悟った。

「いく、ですよ」

テルルは琉花に向かって突進する。そして、水の壁に頭から突っ込んだ。冬吾の制止の声を意図的にシャットアウト。

半分は破れかぶれだった。でも。

後悔なんか、していなかった。

……………

水の壁を無理やり越えてきたテルルの拳が、琉花の胸に突き刺さった。あまりの衝撃に肺から息が抜けていく。ここまで頑張つて防ぎ続けたのに……ダメだった。

——諦めて、たまるか！

春樹の声が聞こえた気がした。その声が、飛びかけた琉花の意識を強く抱きとめる。

「諦めて、たまるか……！」

テルルは今、ここにいる。今しか、狙えない。

琉花はありつたけの意思を込めて、テルルを抱きしめた。その瞬間、テルルが越えてきた水の壁が凍った。

液体の状態変化。

土壇場で使いこなせていなかったそのエクシードを完璧に操った琉花に、目を剥くテルル。その背中に、大量の氷が降り注いだ。

——あーあ、疲れたわ。なんか、ふかふかなベッドで寝たいなあ。

例えば——このテルル先輩の胸みたいな。

馬鹿らしいことを考えながら、琉花は意識を手放した。

後悔なんか、していなかった。

……………

静けさが、コロシウムを支配していた。スクリーン上に表示された、誰も見たことのない表示に、その場にいた全員が言葉を失つてい

た。

.....

「……おい、こんなことって」

「システム上はありえる……かな。しかし、すげえなあ……」

「……そうだな……今年の連中は、どいつもこいつも素晴らしい」

「でも、ありえねえよなあ……こんなの見たことねえ」

「それが、可能性つてもものだろ？」

「……かもな。さあ、とつとと救護班だ。みんな無茶しまくりやがって。あとでセニアのレベル5領域の装備を調べまくってやる」

.....

「あーあ。結局見れずじまいだったよ。つたく。生で見たかったなあ」

「大丈夫。デルタが撮ってるって言ってた」

「でも、生で見るといろいろと違うもんなの。もう……こっちは雑魚狩りで終わっちゃったよ」

「ゆーま。ドーナツ」

「あーはいはい。そうだったな」

「20個」

「……増えてね？ お前15個つつつたる」

「沙織と希美呼んで、みんなで食べたい。そっちのほうは、美味しい」

「……そっか。じゃあそうすっか。ブルーミングバトルの映像見ながら、みんなでドーナツパーティーだな」

「楽しみ」

.....

会場が、まるで爆発したかのような歓声に包み込まれた。どの観客も、素晴らしい攻防の数々にただ胸を打たれ、一心不乱に拍手している。

春樹は、意識を失って倒れていた。冬吾もまた、意識を失っていた。

スクリーンにでかかど表示されたその文字が、春樹の意地と冬吾の意志がぶつかりあった、その結果を表していた。

最終話 “スカイブルー・エレメンツ”

残念ながら、頭が導き出した結論は「もう無理だ」だった。でも、諦めたくなかった。

諦めて、たまるか——

……………

目を覚ますと、見慣れない天井が見えた。最高にふかふかなベッドの上に春樹はいた。上手く回らない頭で、そうだ、高等部の保健室だ。と思い出した。暮れなずむ斜陽が室内をオレンジ色に染めている。そしてどうして自分がここにいるのか考え始めた。考え——と、急に頭が冴え切った。

——俺は、負けたのか？

いや、負けたに決まっている。お互いに限界だったが、テルルの攻撃を受けた琉花。あれが致命傷になって春樹は意識を手放したのだ。

でも、あまり悔しくはなかった。むしろ、自分たちがこれからどこを鍛えていけばいいか、はつきりとした。忍は、もう今更何を教えようと言うんだというほどに素晴らしい攻撃を見せてくれた。琉花は、防御は素晴らしかったが攻撃の手段に欠けていた。美海は——
そこで、春樹はガバツと跳ね起きた。

——美海！

フラツシユバツクする、地面にうずくまった美海。高所から墜落して——

慌てて跳ね起きたはいいものの、なぜか体に力が入らず、またベッドに倒れ込んでしまった。その時、ベッドを仕切るカーテンの裏で

『あら？』と言う声が聞こえた。

『目覚めましたか、春樹様？』

「あ、えーっと……確か、デルタさんとこの……」

『ニーアでございます。ご無事で何よりです。少々お待ちくださいませ。今、人を呼びますので。えーと、コールボタンはどこかしら……このアームやっぱり使い辛いですね……サーに言っても変えて

くれないし、いつそ私が作っちゃおうかな……』

「あ、あの、美海は？ 美海は無事なんですか!？」

春樹が必死で叫ぶと、ニアは『まあまあ』と春樹をいなした。

『大丈夫ですよ。誰も後遺症が残るような怪我をした方はいらつしやいません。ただ、セニア様だけは少しの間入院かもしれませぬ』

「よかった……って、セニアが?。」

セニアが覚醒したとき、彼女の関節から血液が流れ出ていたことを思い出す。

『はい。あの装備が関節に相当な負担を掛けたようでした。出血は志賀龍姫先生のエクシードによってすぐに治癒しましたが、摩耗した関節部分はそう簡単には治りません。ああ、ご心配なく。必ず治りますので。ああ、これですか』

何やら机の上をがさがさと荒らす音がした後、ポーン、と少し間の抜けたコール音が響いた。黙って待っていると、スライド式のドアが開く音とともに足音が聞こえてきた。

「ありがとうございます、ニアちゃん」

『お礼には及びません、龍姫先生。家でお留守番も暇なものなので。では私はこれで。春樹様、どうぞお大事に』

「あ、ありがとうございます……」

妙に人を食ったような慇懃なAIが入ったキヤタピラ付きアームは、キュルキュルとキヤタピラ音を鳴らしながら部屋から出ていった。と同時にカーテンが開けられた。養護教諭の志賀が、にっこりと微笑んでいた。

「よかったあ。気がついて。冬吾くんはもう少し早く気づいたんだけれど」

「み、美海は!？」

「慌てないの。大丈夫よ。少し頭を打っちゃったみたいだけど。もう治ったわ。でも大事をとって、今は寝かせてるの。とつても貴方に会いたがってたわ」

それはそうだろう、などとは口が裂けても言えない、というかそんなことよりも差し迫った質問はいくつもある。

「なら、琉花は……」

「琉花ちゃんも大丈夫。ちよつとノックアウトされちゃってたけど、もう治ったわ」

忍……は、大して攻撃を食らっていないかった。味方2人は戦闘不能にされたのに、やはり彼女はすごい。

そして――

「それで、その……バトルの結果は……」

春樹が言いにくそうに質問すると、志賀は少し表情を引き締めた。

「そうね。とつても意外な結果だったわ」

「え？ 意外？」

――俺らが負けたんだよね？ 俺らが負けたのが意外だったってこと？

頭の中に疑問が浮かんだ春樹の表情を見て、志賀がくすつと笑った。

「結果はね、引き分けだったの」

「ひ……引き分け？」

ブルーミングバトル。どちらかのαドライバーが倒れた時点で勝負が決まる。

「引き分けなんて、あったんですか？ 俺、いくつか動画見たけど、そんなん見たことないんですけど」

「システム上はあるみたいなのよね。貴方と冬吾くんは全く同じタイミングで倒れたから、引き分け」

「……………」

なんだろう、この釈然としなさは。しかし、バトルの運びを見れば実質的に負けのようなものだ。だが、冬吾も同じく倒れたのなら、かなり食い下がれたということであれしくもある。

――つまり、俺らが途上なのは変わらないってことか。

その事實は、別に勝利したとしても変わらないということによやうく気づく。

どちらも未熟者だ、と。

「身体、痛まない？」

「大丈夫です」

「じゃあ、仕上げね。貴方が起きて動いちやわないように掛けた封印を解くわ」

志賀が春樹に右手の平をかざすと、そこから暖かさが溢れてきて、春樹の身体を優しく包み込んだ。すると、今まで入らなかつた力が、体に入るのを感じた。

「ありがとうございます」

春樹がお礼を言うと、志賀は優しく微笑む。

「今回は貴方達に、とつてもいいものを見せてもらったわ。お客さんもみんな大興奮だったし、先生方も素晴らしいって褒めてくださっていたわ。」

私はね、この青蘭学園出身だけど、初めてバトルに出たのは2年生の秋だったわ。貴方達はその半年も前に、いちプログレスよりもずつと重要なαドライバーという立ち位置でバトルした。その経験は決して無駄にはならないし、誇っていい——ううん、誇るべきことよ」

「は、はあ」

志賀が青蘭学園出身だったということは、3年間知らなかった。彼女は春樹の頭をよしよしと撫でた。

「よく頑張りました、春樹くん。えらいえらい」
「……………」

志賀のような天使の如き美女に頭を撫でられて、思わず赤面する春樹。すると、コンコンとドアがノックされた。

「どうぞー」

「失礼しまーす」

軽く声を掛けながら入ってきたのは雄馬だった。やけに穏やかな笑顔を浮かべている。

「よ、春樹。お疲れさん。龍姫も治療終わったのか？」

「もう、学内では『志賀先生』って呼びなさい」

「別にいいじゃん、どうせもう勤務時間は終わりだし、ここには春樹しかいないし」

「まったく…………公私をちゃんと分けられない男性はモテないよ？」

「生憎、モテなかった経験がないもんで」

「あ、やらしー。ね、春樹くん？　こういう勘違い男、イケてないわよね？」

「え、ええ？」

今どき「イケてる」とか「イケてない」というのは、少し古いのではないだろうか。と心の中で突っ込みを入れる春樹。それよりも、2人ともやけに親しげである。一緒にいるところをあまり見たことがない——生徒にとつて、教職員のプライベートは謎だらけなのだ——が、この親しさは……結構前に偶然知った志賀の年齢を考えると……

「もしかして、お2人つて青蘭学園で同期だったりします？」

我ながら、よくこんなバカバカしい質問ができたもんだと思つていると、雄馬が、

「あれ？　言つてなかったっけ？」

とあっさり肯定した。

「龍姫は俺とおんなじ28歳。いわゆるアラサーだな」

「……雄くんにそう言われると、妙に歳をとつた気がするわ」

志賀が諦めたように、雄馬の愛称を交えて呟く。志賀はプログレスだから、例えば28歳ですと言われたところで到底信じられないような、若く瑞々しい美貌を保っている。雄馬も雄馬で、恐らく本人の底知れない活力と気さくな雰囲気、彼を実年齢より若く見せている。そんな、歳の割に妙に若々しい2人の掛け合いのせいで、春樹はすっかり呆然としてしまった。

「じゃあ、ひよつとしてブルーミングバトルに出たつても、雄馬先生のチームで？」

「そだな。最初の一回は、なんかみんな気合入れすぎたせいで試合前に全員負傷——つて、この話前にしたよな？」

「でも、龍姫先生つて高速治癒のエクシード使えるじゃないですか」

「あの頃は未熟だったつてことだな。お前らと同じ高校生だったんだぞ？　しかもあの頃の龍姫と来たら、心がポツキリ折れちまって、エクシードが使えなくなつて——」

「も、もういいでしょ雄くん！　春樹くん。あ、あんまり言いふらさな

いでね?」

志賀に涙目で睨まれたら——繰り返すが天使のような美女だ——首を縦に振るしかない。

「まあ、ともあれ、無事に終わって良かったよ。結果は聞いたけどまだ試合内容は見てなくて。家に帰ったら見るからな」

「は、はい。ありがとうございます」

と、そこでまたドアがノックされた。志賀が返事をする、ドアが開かれ、そこには——

「冬吾?」

春樹が呟くと、冬吾は無言でずかずかと春樹に歩み寄り、いきなり胸ぐらを掴んでねじり上げた。

「ちよ!!」

驚く春樹、悲鳴を上げる龍姫、呆れ顔で肩をすくめる雄馬。冬吾は怒りと屈辱に顔を歪ませていた。

「どうして美海ちゃんが攫われたって、僕に言ってくれなかったの!? 言われれば僕らだって探すの協力したのに!」

「え?」

思わず素っ頓狂な声が出た。その後、ようやく何を言われたか理解できた春樹は、「い、いやあ……」と言葉を濁しながら、

「お前、セニアのところには……」

「行った! 今までずっといたよ! そしたらニアが入ってきて『それにしても、春樹さんは災難でしたね』とか言ってきたから問い詰めたら……」

「だって、喧嘩してたじゃん」

「そんなの関係ないだろ! 大事な美海ちゃんが攫われてたんでしょ!?! しかも、春樹も無理してひどい怪我したって聞いた! なのに試合前に僕のところに来て……」

「そ、そんなことバトルには関係ないだろ」

「関係なくない! 春樹はそんなに! そんなに……」

激情に駆られていた冬吾は、急に言葉が詰まったように勢いを失うと、今までの剣幕が嘘のように弱々しく言った。

「……友達、だろ……？ 喧嘩してたって、僕らは友達だろ……？」

「……そ、だな。まあそのぶつちやけると……」

「何？」

「……忘れてた。そういえば、お前がいたな……」

本当のことを告白すると、冬吾は毒気を抜かれたような表情になり、へなへなと手を離れた。

「……これじゃあ……僕の完敗じゃないか……僕なんかよりも春樹の方がずっと……」

うなだれてそう呟く冬吾に、春樹は——また手を差し出した。バトルの前にしたのと同じように。

「引き分けだ」

「え？」

「引き分け、だったろ？ だったら、喧嘩両成敗だ」

「……それ、喧嘩両成敗とは言わないよ？ それは仲裁人が言うセリフだ」

「じゃあ、なんて言うんだ？」

冬吾は呆れたように微笑むと、春樹の差し出した手をしっかりと掴んだ。バトル前とは違い、もつと強く。

「それは、仲直りって言うんだよ」

「……そか。勉強になった」

2人はお互いの手を、硬く握り締める。

「……酷いこと言って、あと殴った。ごめん」

「それはお互い様だよ。僕も、ごめん」

「次は勝たせてもらうぞ」

「僕だって同じさ。次は、勝つ」

春樹と冬吾は、お互い試すような目つきで睨み合ったあと、照れくさくなつてどちらからともなく手を離れた。それを横から見ていた雄馬は、「いやあ、やっぱ青春っていいねえ」と苦笑しながら言った。

「やっぱ、男同士ならこうでないとな」

「なんか、一生分の青春した気分です」

「いいんだよ。こんくらい青臭いのが高校生つてもんだぜ？ 俺だっ

てやったわ、殴り合い」

「ど、どうして殴り合いしたこと知ってるんですか？」

「だってお前ら、朝会った時どっちもほっぺ腫れてたからよ。春樹がコロシアムから逃げ出したことも知ってたし」

そう言われて、昨日今日の行いが急激に恥ずかしくなった春樹は、唸りながら布団に顔をうずめた。すぐそばでは、冬吾も雄馬も志賀も笑っている。穴があつたら入りたい、という言葉の意味を嫌というほど実感していた。しかし、少し時間が経つと、先ほどまでの自分の滑稽さが一周回っておかしくなり、布団に顔を押し付けたまま春樹も笑った。

そうして、皆してひとしきり笑ったあと、

「それじゃ、俺はもう帰るな。2人ともよく頑張った。あとでバトル、見させてもらうからな」

と言って保健室から出ていった。次いで冬吾も、

「じゃあ、僕も行くね。みんな待ってるから」

と退出する。最後に志賀が、

「私、少し職員室でやらなきゃいけないことがあるから、席を外すわね。ちよつと休んだら、帰っていいからね」

と言って出ていき、春樹は保健室にひとり取り残された。先程までの賑やかさが嘘のように静かな部屋。日が沈みかけ、部屋の中はだんだんと夜の色に染まっていく。妙な虚しさに囚われた春樹は何をすることもなく、ベッドに寝転がった。自分の家とは違う、慣れないベッドの寝心地に身を埋めながら、空っぽの頭で天井を見つめている。

すると、急にドアが開いた。びっくりと身体をすくませながら起き上がる。そこには――

「――美海？」

美海は冬吾と同じように無言で春樹の元に近付き、

「春樹くん!!」

「み、美海？」

気づけば春樹は、美海にしっかりと抱きしめられていた。小さくと

も、最上級に温かく柔らかい美海の身体の感触が、春樹を優しく、そして激しく包み込む。

「心配したよ！ 気絶するまでバトルしてたって！ でも無事ではなかった！ 良かったよお……！」

美海は、泣いていた。嗚咽を飲み込みながら、春樹の背中を一心不乱に撫でている。

「俺だって……心配した！ お前が墜落して、心臓止まるかと思ったぞ！ 心配させやがって……！」

春樹も泣いていた。ひよつとすると美海以上の号泣かも知れない。泣きながら彼女を抱きしめ返した。もう二度と離さない、そういう意思表示であるかのように、2人はさめざめと泣きながら、お互いをきつく抱きしめ合う。が、

「いやあ、お熱いねえ」

と投げかけられた言葉に、ハツと反射的に反応してしまった。見れば、ドアのところに琉花と忍がニヤニヤしながら、そして兔莉子が泣きそうな表情で立っていた。その兔莉子が、

「春樹さん！」

と、こちらも胸に飛び込んできた。美海と2人抱え込む形になった春樹は戸惑う。

「兔莉子？」

「みんな私を心配させて！ 酷いですよう！ 美海ちゃんは高いところから落っこちるし、春樹さんは無理して気絶しちゃうし、琉花ちゃんもはノックアウトされちゃうし！ 見てて、死ぬほど心配したんですからね！」

滅多に聞かない、兔莉子の強い口調に思わず気圧されたが、兔莉子もまた泣いているのを見てすぐに我に返り、彼女の頭を撫でた。

「ごめんな……無理しちゃって。俺、勝ちたかったんだ。まあ、結局勝てなかったけど……」

涙が少し引っ込み、落ち着いた静かな口調で囁くと、兔莉子も美海も揃って首を横に振った。

「勝ち負けなんて関係ないもん！ 春樹くんと一緒に闘えて、嬉し

かったし楽しかったもん！」

「見てるだけしかできなかつたけど、勝ち負け関係なく、私、誇らしいです！ だから春樹さんも誇るべきです！」

2人して関係ないと言ってきた。しかも、

「引き分けてるのはなんとなく腑に落ちないけどさ、裏を返せばそんなだけ三島先輩のチームに食い下がれたってことじゃん？ 私は嬉しいよ！ ま、もつと強くなりたいけどな！」

「琉花殿の言うとおりでゴザル。多少は悔いが残った方が、次へのモチベーションは上がるものでゴザルよ。拙者もまだまだ未熟、皆一丸となって次のバトルに望みたいでゴザルな」

琉花と忍まで後方支援に回る。春樹は、うーんと考えた末に、みんなの言うとおりにした。

「……そだな。終わったことをいつまでも気にしてちやダメか」

春樹は涙を拭って微笑むと、美海も兎莉子も——春樹の服で——涙を拭いて、にっこり笑った。

「ね、春樹くん。まだ、このチームを解散させるつもりでいるの？」

「え？」

「ほら、初めてみんなが集まった時に……」

——とりあえずチームを組むのは今回だけだし！

「……ああ、言ったな。そんなこと」

「じゃ、じゃあ？」

「解散」

「えええっ!?!」

春樹は、まるでこの世の終わりが来たかのような表情で驚く美海の頭に、優しく手を乗せた。

「なんて、嘘だよ」

「え、ええ……ひどいよ……心臓止まるかと思ったあ……」

「ごめんね。つい」

「何が『つい』だあ。ひどいもん。もう許さないもん！」

ぶんぶん涙を浮かべながら怒る美海。

——やべ、ホントに怒らせちゃったか？

一瞬の『やつちまったか？感』は、その後の太陽のような笑顔によって、すぐに解消された。

「ずっと、一緒だよー！」

涙に濡れた笑顔は、いつの間にか浮かんでいた月の光に照らされて、見入ってしまうほどに煌めいていた。

……………

セニアはベッドの上で横になりながら、窓から見える月を眺めていた。

先程までは冬吾がいたが、どことなくぎこちない雰囲気だった。そして、ニアアから春樹のことを聞いた途端に、「ごめんねセニア。また明日来るよ。ちゃんと休んでね」と言っ出て行ってしまった。

「マスター……………」

セニアは胸に手を当てて、その鼓動を感じる。命。

関節の痛みはだいぶ引いたが、それでもまだ痛い。冬吾はこれの何倍の痛みに耐えていたのだろう。そう考えると、セニアは冬吾の目を直視出来なくなった。

出血はすぐに治してもらえたが、摩耗した関節は時間をかけて治さなければならぬ。特殊な結界に覆われたこの部屋の中で安静にしていれば、志賀のエクシードを織り交ぜたこの部屋の『場』が、セニアの身体の異常を治していつてくれるという。

傷ついた、命。

「セニアは、マスターを、信じています」

ぽつりと呟いてみる。この部屋にはセニアの他に誰もいないのだから、当然誰も答えを返してくれない。

当たり前だ。でも、それが不思議と、

「寂しいです、冬吾さん……………」

バトル中に感じた真つ赤な感情とは全く正反対の、白く、どこか青い感情がセニアの心を満たしていた。

セニアは、青白く光る月を眺める。

……

校舎の入口のところで、ユーフィリアとテルルとナナが待っていてくれた。

「……待っていてくれたんだ」

冬吾が声を掛けると、3人とも淡く微笑んだ。冬吾は、それを見て言う。

「ごめんね。勝たせてあげられなくて」

「勝ちたいと言ったのは、冬吾ですの。テルル達はそれに従ったままでのことですよ」

テルルが感情の読めない微笑で静かに言った。

冬吾は、悔しかった。実質的に完敗だった。バトル面でも、精神面でも。

悔しかった。自分が、自分の精神の揺れが、自分の命令が、ほぼ敗北というところまでチームを追い込んだ。その事実が。

「初バトルなのに、僕のせいで、勝てなかった。ごめん」

そう詫びて、冬吾は頭を下げた。何も反応がない。恐る恐る顔を上げると、ユーフィリアが目の前にいた。彼女が、震える声で問いかけてくる。

「冬吾さんは……貴方のせいでバトルに勝てなかったって言うんですか?」

「そう……だろう? 僕が未熟だったせいで、みんなに的確な指示を出してあげられなかった。それに、春樹たちの狙いにも気付けなかった。全部、僕のせいで——」

冬吾が言葉を切ったのは、ユーフィリアが俯いて震えだしたからだ。

「……貴方という人は、いつもそうやって……私も……」

「ユフィ?」

冬吾が怖々と呼びかけると、ユーフィリアはキツと顔を上げた。涙に濡れた、凛々しい顔——

「そうやって貴方は、いつでも全部自分のせいにする! 全部自分で背負い込んで、それでも笑顔を取り繕って!」

叫んだ声は、まるでナイフのように冬吾の心を切り裂いた。

「貴方のそういうところが——昔から私は、大嫌いです……！」
大嫌い。

言の葉の杭が、冬吾の心に突き刺さる。彼女は何か口にしかけて、それをぐつと飲み込んだ後、

「冬吾さんの、馬鹿！」

乾いた音が響く。頬に走った衝撃は、春樹に殴られた時以上だった。ユーフィリアは冬吾の頬を平手で叩くと、そのまま冬吾の横を駆け抜け、階段を登っていつてしまった。

テルルが呆れた表情で、

「……ちよつと鈍感過ぎませんか？」

「……そう、かな」

奇しくも春樹が言った通り、尽く自分は他人の心を理解できないらしい。理解した気になって、みんなを気遣うようなことを言って、結果はこれだ。冬吾は呆然としながら頬をさする。

「テルルも正直腹が立って、思いつきり殴りたいのです。いいのですか？」

「……それ、洒落にならないよ」

「なんで叩かれたか、分からないんですの？」

「……………」

無言で考え込む冬吾の頭を、背伸びしたナナが優しく撫でた。

「冬吾さんはいつだって、みんなのことを考えていらっしやいます。問題はそこです」

「え？」

さすがのような視線でナナを見ると、彼女は人を癒す力を持っているとしか思えない表情を浮かべた。

「みんなのことを考えすぎなんです。でもみんなにはみんなの感情があつて、それは自分自身がどうにかするべきものなのに、冬吾さんはそれを全部まとめて抱えようとしてしまうから、ユフィさんは怒ったんですよ」

「…………え、と、つまり？」

「冬吾さんは優しすぎ、且つお人好しすぎます」

「極度のお人好しは、寧ろ凶々しいと言えますの」

ナナに続き、テルルもそう言ってくる。冬吾は、昨日からのモヤモヤが晴れた気分だった。

——なるほど。春樹がああなるわけだ。じゃあ、僕が言うべきことは……

冬吾は表情を改めると、口を開いた。

……

ユーフィリアは屋上に出て月を眺めていた。

何をするわけでもなく、麗しい銀髪はただ静かに夜風に吹かれ、揺れている。

——ねえママ！ あの星には綺麗な都みやこがあるって本で読みました！ いつか行けるでしょうか？

幼いユーフィリアに、彼女の母は優しく微笑んで。

——そうですね。いつか行きましょう。ユフィと、ママとパパで。

思い返せば、馬鹿らしいことばかり両親に聞いては、彼らはそれを飽きもせずに、微笑みながら教えてくれた。

月に向かって、そっと手を伸ばす。

あの優しい笑みを二度と見ることができなくなるなんて、あの時は想像だにしなかった。それでもユーフィリアは、それを承知でここに来た。この、青く煌く世界に。

「パパ……ママ……」

青白い月に、彼らの微笑みが浮かぶ。

「私……最低です。バトルに勝てなかった原因を作ったのは私なのに、冬吾さんはそれまで背負ってくれようとして……拳句、大嫌い、なんて……」

ぼろぼろと涙がこぼれてくるのを、止められなかった。

不意に背後でドアが開く音がし、びくりと振り返った。そこには、冬吾がいた。

彼は何も言わずにユーフィリアに近付き、彼女の隣に座って月を見上げた。それを見てユーフィリアも、また視線を上上げる。

しばらくの沈黙。先に破ったのは、冬吾だった。

「名前が『冬吾』だからって訳じゃないんだけど、僕は冬が好きだ……って、前に言ったっけ？」

「いいえ……でも、似合います」

「冷たいってこと？」

「いいえ。冬の寒さの中なら、冬吾さんの暖かさは一層目立ちます」

「そっか。ありがとう」

そうして、また沈黙。まだ寒さの残る夜風が、2人を優しく撫でた。

「……僕、さ。自惚れてた」

「……………」

「みんなのこと、理解した気になってた。でも、昨日春樹に言われたんだ。『お前はみんなを知ろうともしないし知ることできない』って。それ、本当だったみたい。みんなのことを考えて、みんなの心は考えてなかった。だから、勝てなかった」

「そ、そんな……………」

自嘲気味の表情を浮かべてくすくすと笑う冬吾。ユーフィリアは反射的に心配してしまう。が、彼の言葉はそれで終わらなかつた。

「でも、テルルとナナに言われて気づいたんだ。それは、傲慢だったって」

「ごう、まん……………」

「そ。誰だって心がある。気を遣うあまり、それを無視して自分の善意を押し付けるのは、傲慢だ」

「そう、ですね……………」

ユーフィリアは涙を拭くと、冬吾の顔を見上げた。その顔はいつ見ても、いかにもユーフィリア好みの端正な顔立ちだった。

「だから今回のバトル、勝てなかつたのはみんなのせいだ……ってことで、いいかい？」

「…………ふふ、そうですね」

少し悲しげにユーフィリアは笑った。その頭に、冬吾は手を乗せた。

「だから、みんなでもっと強くなろう！」

——だから、みんなでもっとより良い未来を作ろう！

ユーフィリアの瞳から、涙がこぼれ落ちた。月明かりを受けたそれは、まるで水晶のように煌き、地面に落ちて砕けた。

「どう、っ、さん……」

もう我慢できなかった。ユーフィリアは冬吾に抱きつくくと、嗚咽を上げ始めた。冬吾はその頭を、さらさらの髪を、優しく撫でる。

「……パパでいいよ。ほら、今は2人つきりだ」

「……2人きりじゃないですよ」

「え？」

慌てて周りを見回す冬吾が可笑しくて、ユーフィリアはまだ涙をこぼしながら、くすつと笑った。

「ほら、お月様が見ています」

「は、はあ……？」

「だから……今は、これだけですよ」

そう前置きしたユーフィリアは首を伸ばして、冬吾の頬——先ほど自分が叩いた場所——に、そつと口付けした。

「……明日、セニアにも同じこと、言っていいかな？」

「明日じゃダメです。今言いに行きましょう」

「でも、寝てたら……」

「一晩寝てからの感情は薄れてしまいます。少し無理言っつて、今言いましょう」

「で、でも……」

言葉を濁す冬吾を見て、ユーフィリアは少しいたずらっぽい表情に変わる。

「もしかして、怖いんですか？」

「……多少」

「私には言えたのに？」

「……じゃあ、勇気をちょうだい」

「仕方ないですね。パパは昔から、少しだけ臆病です。これならお月様も許してくれるでしょう」

につこりと笑ったユーフィリアと、不安げな表情の冬吾。

月明かりの下、2人の唇が、わずかな水音と立ててそつと重なった。
……………

まさか、高校生になってまで貝拾いをする事になるとは思わなかった。

「春樹くん、いいの見つけたー?」

「俺はこれにすっかなあ」

「私はまだー。ハル先輩、手伝ってー!」

「拙者は……うーん、微妙、でゴザルなあ……」

「あつ、綺麗なの見つけました! 見て見て」

数日後、春樹達は、いつか美海と一緒に来た鐘赤島のコーラルビーチで、熱心に貝を拾っていた。美海が突然、

「このアクセサリー、みんなとお揃いがいいなあ。ねえ、みんなで貝を拾いに行こうよー!」

とか言い出したためである。彼女のはファントムに攫われた時に、ストラップの紐がちぎれてしまったので、これを期に全員新しいのしよう! ということだ。

——高校生が5人、こんなところで貝拾い、とか……

正直馬鹿らしいが、何かに一生懸命打ち込む、それはそれで気分が良いものだった。

春樹と兎莉子は浜辺で拾っていたが、美海と琉花と忍は海に入っている。まだ水は冷たいが、5月上旬の日差しは、既に初夏の香りを漂わせていた。

しかし、こうも長時間腰を折り曲げていると、正直痛い。美海達はたった今始めたかのようなテンションを保っているが、実際にはもう1時間も経っている。

「やっぱ、女子ってのはテンション高いなあ」

自分は満足いく貝を見つけたので、波打ち際から少し離れた砂浜にどっかりと腰を下ろした。以前に来た時は曇り空だったが、今は快晴。日焼け止めが必要かも、と心配になるレベルの快晴だ。

しばらくそうしていると、兎莉子がこちらに歩いてきた。

「春樹さん。お隣、いいですか?」

「ん？ 構わないよ」

快く応じると、彼女は「失礼します」と言つて、ぽす、と音を立てて小さなお尻を砂浜に下ろした。

「見てください。綺麗でしょう？」

「お、マジでキラキラだ。こんなんあるんだなあ」

「春樹さんののは？」

「俺はこれだな」

「あ、こっちは形が可愛いです」

くすくすと笑う兎莉子。それに釣られて春樹も笑う。それから急に頬を赤らめて、

「あの、春樹さん？ 差し支えなければ、私のとそれ、交換していただ

けませんか？」

「俺のど？ でもそつちの方が綺麗だぞ？」

「か、形が可愛いから！ ダメでしょうか？」

「いや、構わないよ。はい」

春樹は兎莉子に自分の貝を——ハート型をしていた——差し出すと、兎莉子はいよいよ真つ赤になって自分の貝を差し出した。

「あ、ありがとうございます！ 大事にします！」

「喜んでくれたなら良かったよ」

向こうでは、

「えいっ」

「ふぎや！ る、琉花殿〜！ やったでゴザルなく！ お返しでゴザ

ル！」

「ちよ、シノ、冗談だつて冗だ——ぎやあ」

「みきや！ 何？ 水かけっこ？ なら負けないよう！」

3人が水の掛け合いを始めてしまった。春樹は慌てて、

「お、お前ら！ 着替えあんのか!？」

と叫ぶが、

「いまいいとこなの！ 邪魔しないでー！」

と返される始末。隣の兎莉子は楽しそうに笑っているので、まあいいとした。

「春樹さん、私、幸せです」

「ん？」

「みんな一緒。それって、素敵なことだと思いませんか？」

「……そうだな」

水辺ではしゃぐ3人を見つめながら、そう返した。思えば、以前に
来た時は、はしゃいでいたのは美海1人だった。2ヶ月で、自分の周
りにはまたプログレスが集まった。

「俺も、幸せだ」

「……いつか、元の春樹さんのパートナーさん達にも、会いたいです」
控えめに放たれたその言葉。少し前だったら過剰に反応していた
かもしれないが、今は違う。無論、痛みはある。だが、もつとゆった
りと受け止めることができた。

「会えるさ、必ずな」

ここにいない4人の顔を脳裏に浮かべながら、今の4人の顔を眺め
る。

少し前では考えられないほど、春樹は満ち足りていた。

「さあ、最終奥義いっくよー！」

「あ、私も負けないぜ！ いっけー！」

「あ、2人ともエクシード使うのは反則でゴザ——ぶはっ」

「ば、バカお前ら何やって——ぎゃあ」

「あわわわ……」

美海と琉花のエクシードが衝突し、飛んできた水の塊が春樹と兔莉
子まで包み込んだ。

……

「どう、セニア？ 痛みはない？」

「はい、大丈夫です、マスター」

「よかったあ。これで完全復活！ ですね、冬吾さん」

「セニア、おんぶするのですの？」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ、テルルさん」

同じ日の昼下がり、ようやく退院できるようになったセニアは、

チームメンバーに囲まれて青蘭学園の前に立っていた。カラツとした快晴で、航空機動装備があればぜひ飛んでみたいと思うような天気だ。

冬吾は「さて——」と背筋を直し、

「じゃあ、みんな揃って回復したところで、みんな、本当にお疲れ様」
みんながそれぞれ頷くのを見て、冬吾は言葉を繋げた。

「今回のバトル、結果は正直アレだったけど、僕は、なんていうか——勝てなくて、良かったなって思う」

「でも、マスターは勝ちたいって言っていました」

「そうなんだけどね。でも、『勝てなかった』ってというのは、勝ったことよりも大事なことが多いと思ってるさ」

冬吾は4人の目を順番に見る。水晶のように透き通ったセニアの瞳。柔らかな快活さを秘めたユーフィリアの瞳。決意に満ち溢れたテルルの瞳。深い慈愛を湛えたナナの瞳。誰からも、逸らさなかった。

「みんなにいいところがあつて、みんなに悪いところがあつた。それがこのバトルの結果を導いたのだとしたら——まだ、みんなには伸びしろがある。それは、僕にも言えることだ。だから……僕らみんな、強くなろう」

4人の顔に、笑顔が浮かぶ。セニアのはまだぎこちなさがあつたが、それでも彼女は、笑顔を浮かべてくれた。

「みんな」

セニアが繰り返す。

「それは、素敵なことですね」

その言葉に、全員が笑顔になった。

「じゃあ堅苦しい演説はこれでおしまい！ セニアの快気祝いに——」

「ご飯食べに行くですよ！ バイキングがいいですよ！」

「いきなりそう来るか。でもテルルをバイキングに連れて行くと、終わった後になぜか僕が『勘弁してくれませんか』って店員さんに泣きつかれるんだよね……」

「普通にレストランでいいじゃないですか。ね、セニアさ——」
「ユーフィリア。セニアのことは『セニア』と呼んでください」
「そ、そうでした。セニアは、何が食べたいですか？」
「そうですね……強いて挙げるなら、はんぱーぐが、食べたいです」
「セニアちゃんがそう言うなら、決定ですね！　じゃあ行きましようか」

「セニアって意外に肉が好きなんですね……」

「わいわいと賑やかになるチーム。その輪の中で、冬吾は思う。」

——僕は、幸せ者だな。

「マスター、よろしいでしょうか？」

「うん、それじゃあ行こっか」

冬吾を見上げるセニアの瞳。

そこには、どんなに素晴らしい宝石にも勝る輝きが、はつきりと宿っていた。

……その20分後。

「セ、ニ、ア~~~~~!!!!!!　ご退院おめでと~~~~~!!!!!!
~~~~~!!!!!!」

普段は誰にも見せないような満面の笑みを浮かべたカレンがその部屋に入ると……

「あれ？　カレンちゃん」

「あら、志賀龍姫先生。ごきげんよう。セニアは……」

「つい20分前に出て行ったわよ？　冬吾くんたちが来て——カレンちゃん？」

カレンは顔を俯けて怨嗟の籠った呟きをぼとぼと落とした挙句、  
「三島、冬吾おおおお!!!」

その後、みんなで行ったレストランに、いつぞやの如くカレンが襲来し、またひと悶着あった上で、結局カレンを含めた全員でセニアの回復を祝ったのであった。

.....

「まさか、あんな合体技を開発していたとは……」

「えへん。ちゃんと考えて水遊びしていたのです」

げんなりする春樹に、胸を張る美海。

全員ずぶ濡れになったあと、春樹は強制的に3人を浜辺に上げた。すると、忍は忍術で生み出した炎をエクシードで操り、その熱で温まった風を美海が操って、さらに琉花のエクシードで服の水分を抜き出し、全員の服をあっという間に乾かしてしまった。

だが、水に濡れた私服姿の4人、その服の透け具合とか張り付き方のいやらしさだとか、そういうものは、目に焼き付いてしまって忘れられそうにない。

春樹達は鐘赤島のレストランに入って、赤の世界ならではの料理を食べ、昼食を終えた。美海は前回とは違うものを、他の3人は完全に初めてだったので、新鮮な表情で食べているのを見るのは、なんだか微笑ましかった。

「ねえねえ、ところでさ」

「ん？」

「私たちのチーム、名前無いの？」

「あ、それ、私も思った。動画だと名前付いてたもんね。無いの？」

「それを考えるのが、面白いんじゃないでゴザルか？」

「うーん……でも、変な名前だと笑われちゃうかもしれません……」

美海、琉花、忍、兔莉子がそれぞれの反応を示す中、春樹は、

「実は……もう決めてあるんだよね」

「そうなの!？」

「なんでそんなに食い気味なんだよ。まあ、SMSのチーム名のところ変えといたから、それ見て」

4人が一斉に携帯電話を取り出し、自分たちのグループを見る。少し前まで『青チーム! (仮)』としか書かれていなかったそこには、

——“スカイブルー・エレメンツ”

「スカイブルー……エレメンツってなあに？」

「元素、という意味でゴザルな」

英語が不得意な美海に忍が教えている。正直、恥ずかしい。

「で、これ、どういう意図で付けたのさ？」

「わ、私も知りたいです」

全員が目をキラキラさせてこっちを見てくる。春樹は頬が赤らむのを感じながら、ここで引いたら負けだと言わんばかりに、

「あらゆるものを形作っている元素を俺らに例えて、みんなで力を合わせれば、どんな困難なことでも、必ず解決できる——そういう意味です、はい」

結局尻すぼみになってしまったが、みんなからの評価は高かった。おおく、と4人分の拍手が降り注ぐ。穴があつたら入りたかった。

しかし、ここで美海から突っ込みが入る。

「でも、スカイブルーっていうのは？ 別に関係ないよね？」

「それは……まあ、あれだな」

「どれ？」

「美海がプレゼントしてくれたマグカップ見てたら、いいかなって思ってた。ほら、全員この世界出身じゃん？ 理由は後付けだけど、良

くない？」

「いいと思うー！」

「早いなー！」

というより、自分のあげたマグカップがチーム名に入ってしまったことが嬉しいらしい。

恥ずかしさを振り払うために、春樹は手を叩いて場を仕切り直す  
と、

「じゃ、じゃあ、これから俺たち、いろんなバトルに出て行くわけだけど、どんな時でもみんなで力を合わせて、頑張っていこう！」

『お〜ー！』

ひとつのチームになった5人のポケットからは、綺麗な貝殻とクリアブルーのビーズでできたアクセサリーが光っていた。

——後に違う意味で全ての世界に名を轟かせるその名前は、全ての始まりの島々の中で、青い空高く掲げられた。

1人の男が、そこにいた。

暗い研究室。何度拭おうとも拭い去れない『荒廃』が溢れかえっている。

破損した器具。溢れた液体。ひび割れた壁、床。そこにこびり付く、血。

その一角の机だけは小さい電気に照らされ、その男の顔を彩っていた。

男は深くフードを被っていて、目元は見えない。左の頬には酷い火傷の痕があり、好き放題に伸びた髭と髪は、半分ほど白くなっている。

彼の目の前、机の上には、4つの煌く光がある。燦然たるシルバーが象る、リングだ。そこには、それぞれの――

彼が不意に後ろを振り返った。研究室の中央には実験台があり、その上には、破壊し尽くされた1体のアンドロイドが横たわっている。

彼を薄く彩る狂気が完全に失せ、血の気のない顔に悲哀の色が浮かんだ。その悲壮感たるや、百年も悲惨な目に遭い続けたかのようにだった。

アンドロイドの胸には、円形の白い装置が埋め込まれている。まるで切れかけの蛍光灯のように、今にも消えそうな薄い光が明滅し、部屋を時々明るく照らしていた。

彼はリングに向き直ると、その横にあつた黒い箱に、それらを丁寧に仕舞った。蓋を閉め、彼が箱をひと叩きすると、箱は白い光を発し、完全な立方体に変化する。

彼は立方体となった箱を手にとると、実験台の方へと足を引きずって進めた。優しくアンドロイドの手を開かせ、その上にそれを置く。

慈しむように彼女の頭を撫でると、「さあ」と呟いた。

「頼むよ」

彼の声は掠れ、今にも消え入りそうな声音だった。しかし、アンド

ロイドは反応した。

「……りよ——い——し——、——ご——。ど——、——うん——」

破壊し尽くされたアンドロイドの、口と思しき部分が引きつるよう  
に開閉し、どこから発しているかも分からない声で言った。それと同  
時に、胸の装置が確かな光を放ち、それが止んだ頃には、立方体は消  
え去っていた。

それを確認した彼は、アンドロイドの、辛うじて額だと分かる場所  
にひとつ、口付けを落とした。そして、アンドロイドの胸にはめ込ま  
れた装置を右手で掴む。

カチン、と音がした。彼の右手は、薄い光を弾いて鈍色に輝く。  
それは金属で出来ていた。

「……………ごめんね」

彼は愛情の籠った声でそう呟くと、装置をそつとアンドロイドの胸  
から引き抜いた。あとにぽっかりと空いた孔あなは見るも痛々しく、彼は  
すぐに目を背けると——その装置を、自分の胸に空いた孔に嵌め込ん  
だ。

装置が、アンドロイドの胸に嵌っていた時とは全く異なる、強い光  
を放ち始めた。それに呼応するように、彼の体からエネルギーが満ち  
溢れてくる。

「僕は、変えてみせる」

そして彼は、光に包まれ、忽然と消えた。

破滅だけが、そこにいた。

【幕間1】

《青は藍より出でて藍より青し》

遙か昔、その島は「鬼ヶ島」と呼ばれていた。文字通り鬼が棲んでいたと云われた島であり、ここから海を渡って日本列島に上陸した鬼達は、そこで邪智暴虐の限りを尽くしたという。その末に、逆境の中で立ち上がった小さな英雄とその家来によって鬼は滅ぼされ、この鬼ヶ島も今や誰も棲まない無人島となったという。その際、この島は切り捨てられた鬼の血で真っ青に染め上げられた。

そんな血生臭い伝説を持つ割に、この島は、青い海に囲まれ豊かな緑に彩られた、自然溢れる美しい島だった。

「……特に変わってないな」

「ま、数十年じゃ変わらんだろう」

上陸した2人の男は、辺りを見渡しながら言葉を交わした。道らしい道など無く、少し進めばもう森林に入る。

「じゃあ、登るぞ」

「それが仕事だもんな」

片方がしっかりとした口調で言うと、もう片方はうんざりした口調で返した。

何の感慨も見せずに森林に足を踏み入れた2人は、しばらくは平坦な（それでも鬱蒼たる森林なので、決してただ平らな地面ではなかったが）地面を歩き、もうしばらく歩くと今度は地面が傾いてきた。山地に入ったのだ。彼らは木々が密接に絡み合い、ろくな足場などほとんど存在しないような山を登り続けた。驚くべきは、2人とも全く息が上がらぬ気配がないところだ。足場の悪い道なき道を、軽々と踏み越えていく。

歩き続けて数時間が経過した頃、ようやく少しの平坦な地面が現れた。山の斜面に掘られた、ほこら祠のような場所だ。

「結界は効いてるようだな」

「千年来だつてのに大したものだ」

「実は、前に俺がかけ直したんだ。切れかかっていたもんだったから」  
「なんだ。俺の感心を返せ」

今登ってきた道を見返しながら軽口を叩き合う2人。祠の入口に座り込み、背負っていたリュックサックの中から取り出した水筒から水をあおっている。

「そろそろ……だと思うんだが」

「それ、本当に信用できるのか？」

「これが信用できなきや、何も信用できない」

男の片方は、リュックサックの中からさらに取り出した本を読んでいた。擦れた痕だらけの古ぼけた表紙に、中の紙も黄ばんでいる、日記帳程度の大きさのみすぼらしい本だ。

「あえて聞いていなかったが……お前、後任は誰にするつもりだ？」

「当面の間は兄に、その後は弟に変わる予定だ」

「その予定こそ信用ならんと思うのは俺だけか？」

「何、俺らはそういう生き物だ。殺し合って、力を奪う。そうやって強くなっていく」

「その兄に、弟が敵うのか？」

「敵うさ。どっちも失敗作っぽかったが……どちらかといえば弟の方に分がありそうだからな。お前に頼みたいことは、必ず弟に勝たせろってことだ」

「……憐れだな」

「仕方ないさ。生まれつきは、変えられない」

2人は座ったまま話しながら、何かを待っている。

その5分後、ようやくその何かが現れた。2人の思っていたとおり、上からの来客だった。

1対の純白の翼、その上下に青い光の翼を左右に2対ずつ。合計6つの翼を持つ者。頭上に煌くは黄金と蒼玉（そうぎよく）に彩られた輪（ハイロウ）。即ち、天使だ。

「お待たせしました」

透き通る声の持ち主は、触れれば切れるような美貌を持ちながらも、決して他者を威圧しない、不思議な雰囲気（きふく）に包まれていた。その



眼の瞳孔には、澄んだ青色の十字架が刻まれている。

天使が地面に降り立つと、青い光の翼は宙に溶けるように消えた。白い翼は体に巻きつけるように畳み、パツと青い光が散ったかと思うと、次の瞬間には純白の法衣へ変化していた。今まで本に目を落としていた男が顔を上げ、満足げに笑う。

「こちらこそ、こんな山奥まで。ありがとう。青と青で、なんと縁起がいい。で、どちらだ？」

「《命導》にございます。我らが主、七女神よりの貢ぎ物は、こちらに」  
懐から何かを取り出そうとする天使を、男は手を挙げて制した。

「いや、後にしよう。向こうに行くのもだ。主の下まで案内する。歩けるか？」

「はい」  
返事を聞いた男は立ち上がると、振り返って背後の祠に入っていた。続いてもう1人の男と、天使も入っていく。

数メートルの深さしかない、小さな祠だった。奥には崩れ掛けの祭壇らしきものと、突き当たりの壁に描かれた妙な壁画しかない。その壁画にしてもボロボロになっていて、何が描いてあるのかはほとんど分からなかった。

先に進んだ男は、祭壇を回り込んで壁画に手を当てた。すると、青い光が満ち溢れ、それが消えた時にはそこに壁画はなく、奥へと続く道が出来ていた。天使は少し驚いた表情をしたが、もう1人の男は大した感情を顔に浮かべていなかった。

「さあ、行こう」

3人が道に入ると、背後でまた青い光が溢れ、再び壁画が現れた。そこから先は、極度に曲がりくねった道が続いた。下へ向かっているのか、急に傾いた道が多い。先頭の男の持つ懐中電灯以外は何の明かりもなかったが、3人とも疲れる様子を見せずに、大人1人がギリギリ通れる程度の幅しかない道を歩き続けた。

数時間が過ぎる。まだ歩き続ける。そして、決して冗談でもなんでもなく、歩き続けて10時間が経過した頃、目の前の道から微かな青い光がちらつき始めた。

「あと少しだ」

少し歩くと、今までただの岩だった壁が、徐々に青く輝く鉱石へと変わり始めた。さらに、道幅が広くなっていく。道もだんだんと平坦になっていき、あまり曲がりくねったりもしなくなっていた。

そうして3人がたどり着いたのは、白い鋼でできた観音開きの扉だった。男は、壁画にしたのと同じように手を当てると、そこから青い紋章が広がっていくように浮かび上がり、扉が勝手に開き始めた。「さて……主、ただいま戻りました」

扉の奥の広い円形の空間は、青い光に満ち溢れていた。床も壁も、全て青い鉱石でできている。見上げるほどに高い天井も青。その部屋を形作る鉱石が成長しているのか、尖ったその先端がむき出しの部分が散見された。

その中央に、再び円形の祭壇があった。祭壇に描かれた五芒星、その先端の1つに、青い宝玉が柄に嵌め込まれた剣が突き刺さっている。

「正常に稼働している……あらかじめ、ということか……まあ、理由は今後調べていくとしよう。さあ、貢ぎ物はそこに置いてくれ」

祭壇に登り、剣を調べていた男は、円形の部屋の隅にある、中央のものよりもずっと小さな祭壇を指した。同じような祭壇が、円周上に正方形を描くようにもう3つある。

天使が懐から取り出したのは、手の平に乗る程度の大きさの、血のように赤い鉱石だった。言われた通りに祭壇へそれを乗せると、青かった祭壇が瞬時に赤くなった。

「これで、良いのですか？」

「ああ。これで当面は問題ない。数十年もすれば、100倍にして返せる」

「ご協力、感謝致します」

天使が深々と頭を下げた。それを見て頷く男。そして、もう1人の男は、中央の祭壇、五芒星の真ん中に、仰向けに寝転んでいた。

「早く済ませろ」

「そうだったな。永い付き合いだった。ありがとう、玄馬<sup>げんま</sup>」

「じゃあ、後のことは頼んだぞ」

「分かってる」

男は調べていた剣を地面から引き抜くと、寝転んでいた男の胸に、それを突き立てた。天使が悲鳴を飲み込む。

その顔は、苦痛に歪むことなどなかった。まるで、苦痛など感じていないようだ。男の体は青い光に包まれていき——それが消えた頃には、男の亡骸はどこにもなく、代わりに祭壇の五芒星が放つ青い光が強さを増した。

「……命が、中に？」

「こういう契約だった。命導の大天使に看取って貰えて、彼も幸せだったろう」

感情を感じさせない声で呟いた男は、いつの間にか五芒星の中心に現れていた、3つの青い鉱石の欠片を手にとった。

「これが、我々のものだ」

「ありがとうございます。改めて、ご協力に深く感謝致します」

差し出されたその一片を受け取った天使は、再び深く頭こっぺを垂れた。

「どちらにも言いたいことは山ほどあるが……まずは、使者など送ってこない残りの連中の元に行こう。時間がない」

男は元々その剣が刺さっていた場所にそれを突き立てると、残った2つの鉱石をリュックサックに放り込んだ。代わりに古ぼけた本を取り出すと、ページをめくりながら祭壇に背を向ける。

その表紙には、掠れた5つの星が描かれていた。

右に黒、上に赤、左に白、下に小さな緑。

そして、中央に大きな青。

「しかし、これは……彼なのでは？」

「そんなことないさ。これは間違いなく彼女だよ」

「……………」

「そう訝いぶかしむ無かれ。この世界には、こういう言葉がある」

「？」

「《青は藍より出でて藍より青し》ってな」

その謎のような言葉の意味を、天使は瞬時に理解できなかった。

## 《どこの鳥も黒い》

この世界において、一番栄えているといってもいい都市の名前をケイオンとிட்ட。地方に出れば、それぞれの種族の影響が強い地域が存在するが、このケイオンは様々な種族が住んでおり、そのため物流が激しく活気のある都市だ。遠い昔、世界が混沌としていた時代、一番最初の王が降り立った場所とも、あるいは世界を支配した王がそれぞれの種族の長を集め、諍いを仲裁した場所とも云われていた。この世界において『和平の象徴』とも言える都市が、このケイオンだった。

そのど真ん中にそびえ立つのが、世界を支配する王の住む城だ。

最上階、謁見の間に3人はいた。1人は玉座に腰掛け、もう1人はその前で跪き、最後の1人はその隣で突っ立っている。

既にももの交換は終えていた。玉座に座る黒衣の女性の手には、赤と青、2つの鉱石の結晶がある。

「伝承に従い、用意しておいて正解だったわ。もっとも、使者を送ってくるのは女神だけだと記されていたが」

女性が満足気な口調で言うと、恐れ多くも玉座の前で突っ立っている男が「まあな」とぼやいた。

「交信だけしても仕方ないだろう？ 術式を繋ぎ直しておきたかったし。しかも、あれを——」

男は窓の外を親指で指した。

「——塞ぐには、あなたの協力が必須だ。お願いするなら、こつちから出向くのが義理かなって」

「義理、とはなんだ？」

「えーと、そうだな……例えば俺が果物を1個持ってて、あなたがそれを欲しがったとするだろう？ そんな時はどうする？」

「持って来い、と言うが」

「持ってきてくれなかったら？」

「魔術で奪うが」

「ごめん、あなたが理解できるように『義理』を説明すんのは多分無理

だわ」

男は困ったように、微妙に白髪交じりの髪を掻いた。王はケラケラと笑うと、

「冗談だ。そのくらい私にも分かる。やらないだけで」

「余計最悪だな。その魔力、生まれつき？」

「そうだ。だが、操り切るには努力した」

「だろうな。今から30秒あれば何ができるよ」

「30秒？ そうだな……」

「この都市くらいは消せるんじゃない？」

「失敬な。30秒あればケイオン4個分くらいは消せるぞ」

「聞かなきゃよかった」

またケラケラ笑う王と、肩を落とす男。その横で、天使がオロオロと2人を見比べている。

「お、御二人共、お戯れはそこまで……」

「そうだったな。時間がないんだった。で、あんたらの方はどうすんだ。伝承によれば……」

「使者を出す。そうだ。もう用意してある。が……」

王はニタリと笑むと、粘着くような声で、

「その前に、お前の実力を見たい」

男を指差して言った。それと同時に、2人の間に魔法陣が出現し、光とともに1人の少女が現れた。10歳程度の外見をした、長い髪の少女だ。その手には、10の葉を<sup>セイライラ</sup>宝玉で模し、それが21の枝で<sup>パス</sup>繋がれた<sup>セイイロト</sup>聖樹の形をした杖が握られている。

少女のくりつとした目が、男を捕えた。その少女に王が命ずる。

「《戦え》」

「了解」

少女が杖を構え、呪文の詠唱も無しに魔術を放った。小手調べにしては強力すぎる魔力弾を、男は軽々と避ける。背後で壁が崩れた。

「下がって。あと、これ持ってて」

男は手振りて天使を下がらせ、背負っていたリユククサックを投げ渡した。それを受け取った天使はすぐに下がって、青い光の翼を2対

出現させた。その翼が一枚一枚の羽に解け、彼女を包み込む光の繭を作り出した。

「これが伝え聞くところの《十二杖》って奴？」

男が少女に尋ねると、少女は嬉しそうに微笑んだ。

「如何にも。妾が、我らが王より聖なる杖を賜った十二杖が一柱であるぞ」

「名前は？」

「人に名乗らせる前に自分が名乗るのが道理ではないかの？」

「そんなこと言ってる暇があったらさっさと名乗るのが合理的だ」

少女はフンと鼻を鳴らすと、杖をくるりと回してまた魔力弾を放つ。男はそれを、避けない。握り締めた拳を鋭く打ち出して、砕く。

少女の顔つきが変わった。

杖を握る手の人差し指で、その柄をピンと弾く。そこから光が柄を伝い、聖樹の最下部に位置する王国の宝玉を虹色に煌めかせた。そこから光が上へ上へと登っていき、最後に最上部の王冠が白く輝いた。

「少し、本気を出そうぞ。」

唱えた呪文は、人間が出せるとは到底思えないような声で紡がれた。その呪文に応じ、杖の中央に青白い炎が灯った。変化はそれだけだった。しかし、それだけで彼女の持つ雰囲気が大きく膨れ上がる。

「砂が沸れ」

再び呪文を詠唱。すると、何処からともなく大量の砂が、少女の周りを取り囲むように出現した。その砂は少女を守護する壁に、盾に、攻撃するための剣に、槍に、斧に、形を変えていく。

「ハッ、こりゃ面白い」

対峙する男は、微塵も気圧された気配が無い。拳を固く握り締め、砂の壁を打ち破るために駆け出した。それを阻もうとする砂でできる武器を紙一重で躲していくが、謁見の間を埋め尽くす砂は今尚その量が増えていつているため、幾らかはやむを得ず拳で砕いた。躲された武器は、その一つ一つが床を割るほどの威力を持っている。そして、その武器達は、砕かれたり攻撃を避けられるや否や砂へと戻り、新たに形を成していく。

男が、飛んでくる剣の軌道を見極め、その柄を掴み取った。しかし、その剣も瞬く間に砂へと戻り、指の間から抜け出ていく。利用されることも対策済みらしい。

「キリがねえな。こっちも少し本気出すか」

そう呟いた男は、無限に襲い来る武器を避け、砕きながら、わずかな隙を縫って、握り締めた左右の拳を胸の前で打ち合わせた。

青い光が、炸裂する。その光を浴びた武器達が一瞬にして形を崩し、砂に戻った。無論、少女を守る壁も。そして、天使が紡いだ光の繭ももろとも。

少女が目を見開いた。その時には、爆発的な瞬発力によって既に男は彼女に肉薄していた。

しかし、少女も十二杖。王より直々に杖を賜った、最強の魔女の1人である。杖を持つている右手をぐつと握り締め、結界を張った。

男は微かに表情を訝しげなものへと変えた。見たところによると、魔術ではないのだ。即ち、彼女が特性として持つ異能——しかし、そんなものは武器同様、砕いてやればいい。

その結界に男の拳が触れた。2人が揃って瞠目する。

結界は、男の拳の侵入を阻むようなものではなかった。男の拳が結界に入り込んでいく。

男が瞠目したのは、結界に入り込んだ腕、それを覆う衣服が、先ほどの武器や壁のように形を崩し、砂へと変わっていったからだ。さらに言えば、男はこの結界を砕けると過信していた。

少女が瞠目したのは、結界に入り込んだ拳が粒子化しないからだ。少女の異能は、万物を粒子に変え、それを再錬成することができるというものだ。なのに、男の腕はなぜか形を崩さない——

気づけば、男の拳は、少女の眼前で静止していた。男がギリギリでブレーキをかけたので、彼の軸足は石でできた床を深く削っていた。

両者ともに息はそれほど乱れていないものの、衝撃の表情を浮かべているお互いを見て、男はそつと手を引き、少女は結界を収めた。はらはらとした表情の天使は泡を食って床にへたりこんでいたが、争いが終わったことを確認するとようやく立ち上がった。



「……名前は？」

「……アルスメルじや。聞き返すが、汝は何じや？」

「俺は……ただの人間」

「それが嘘だということは、これからじっくり調べていくとしようかの。して、なぜ拳を収めた？」

「だって、このまま突っ込んだら裸にされると思っで。美女2人の前でそれはちよつと……」

「3人、であろう？」

「いや、2人」

「王よ！ 妾はこやつを好かん！ ほかのに変えてくれ！」

少女——アルスメルが後ろを向いてぎやあぎやあ言い立てるのを見て、『深き闇を抱く魔女王』と呼ばれた王・ミルドレットは満足そうに笑いながら、

「やだ」

それをあつさり却下した。

「どうぞ」

「あ、無事だったね。ありがとう。これが吹き飛んだら洒落にならない」

「……それと似たような本を、我らが主神も所持しておりました。それはなんなのですか？」

「秘密の書だ。中には世界を滅ぼす方法が書いてある」

「主神もそう仰っておられました。そんな本に従っても良いのですか？」

「滅ぼす方法が書いてあるんだから、それを回避する手段だってわかるだろ？」

「……主神と全く同じ答えです」

「その王に聞いても、多分同じ答えだぞ。《どこの鳥も黒い》からすことがよくわかると思う」

## 《錬金術師は文無し》

青蘭学園高等部の校舎の西側階段は、1階からさらに下へ行ける。しかし、下った先には地下フロアがあるわけではなく、その突き当たりには、近代風な内装に似つかわしくない、様々な魔物のレリーフがあしらわれた古めかしい扉がある。決して開かず、ノッカーを鳴らしても何の反応もないことから、ほとんどの生徒たちは『開かずの扉』として不気味に思っていた。

城海斗がそのドアの、竜の頭を象った不気味なノッカーを鳴らすと、中、というよりその竜頭型ノッカーが「入れー」という幼い声を返した。

海斗がドアを開いて中に入る。そこは暗い地下室……ではなかった。

そこは、まるで巨大な図書館の中のようなようだった。10階建てのビルの床をそのままぶち抜いたかのような円形の空間。その壁は、本という本でびっしりと埋まり、各所に点在する窓からは暖かな陽光が差し込んでいる。部屋の中央には太い柱が1本、部屋を貫き通すように立っており、側面から張り出した階段で、上階へ移動できるようになっている。見上げるほど高い天井はドーム型のガラスで出来ており、その真下・柱の最上階には、これまた巨大な天体望遠鏡が設置されていた。そして、空いている空間を、本やら天体のモデルやら砂の詰まった瓶やらがプカプカ浮いていたり、盛んに空中を移動していたりする。

そこは、『魔導図書館』という言葉がそのままピッタリ当てはまりそうな空間だった。

「今日は……随分上にいるんだな」

上階を見上げながらひとりごちた海斗は、中央の柱の階段を登っていく。しばらく登り続けて、彼女のいる6階の、広めな読書スペースに辿り着いた。

「おう、海斗。ゴールデンウィークなのに呼び出して済まないのう」

「何の用だ、メル。今日はさくらと過ごす予定なんだが」

「まずは、ほれ、座れ座れ」

「仕方ないな……」

海斗が椅子に座ると、その上にぴよんとアルスメルが乗っかってきた。そのまま身体を海斗に預けるように深く座る。海斗の膝の上は、彼女のお気に入り席なのだ。

図書館の主、アルスメルは、誰がどう見ても10歳児程度の外見をした魔女だった。しかし、これでも黒の世界では名だたる魔術師であり、至上の錬金術師だったりする。どうやら魔術の影響で不老になり、数百年前からこの姿で生き続けているらしい。

彼女は眼前に広げたホログラム映像を眺めていた。先日の、春樹のチームと冬吾のチームが行ったブルーミングバトルの記録映像である。

彼女の手元には、ブルーミングバトルに関する様々なデータが記されたパッドがあった。彼女が再生ボタンを押すと、ブルーミングバトルの様子が動き始めた。ちょうど、美海とセニアがほぼ同じタイミングでレベル5になったシーンだ。

「妾が用があるのは、ここじゃ」

アルスメルは手元のデータパッドを海斗の方に向けた。

「αフィールドが、圧迫されてるな」

「その圧力が、異常なのじゃ」

「そりゃ、2人がいつぺんに覚醒すれば、圧力も通常の2倍だろ？」

「それでもじゃ。2人合わせて、通常の1人分の6倍は圧迫されておる。随分昔に文香とシャリーイが同時に覚醒した時も、ここまでではなかった。B B O Sのαフィールドは、こんなに脆かったかの？ 下手をすればαフィールドが破れ、大惨事になったやも知れぬ」

「そうか……なら、早急に補強せねばな」

海斗はアルスメルの頭を撫でながら言った。傍から見ている、確かに素晴らしい覚醒だ、と感嘆していたが……まさか B B ブルーミング・バトル・オペレーション・システム が破綻しかけていたとは思わなかった。

「圧迫度合いからして、6倍のうちの4倍くらいは日向のものだな。驚異的だ」

「これは覚醒、なのか？」

「覚醒ではある。ただ、これは半分暴走つてことだな。本人は振り回しているつもりなんだろうが、振り回されてる。操りきれてるのは1割から2割程度だろう」

「やはりそう見えるか。しかし、2割でこれとは……完全に操りきつたらどうなるものか」

「とりあえず、デルタかアルマに頼んで、できるだけ早く制御装置を作ってもらうことにしよう。このままでは、次の覚醒で日向が吹き飛ばかねない。しかし、この力の振るい方は、なんというか……」

「うむっ？」

海斗が言いにくそうに言いよどむ。アルスメルが振り返って、くりくりとした目で見つめてきた。

「雄馬が本気で戦う時に似ているな」

「ああ、ああ。妙に既視感があると思えば、それか。ならば道理じゃろう。彼女は器じゃ。似るのも必然であろうぞ」

「雄馬のは、どちらかといえば血に因るものだと思ったが。」

「それもあるじやろう。が、結局は似たようなものになる。なにせ、アレはそういうものなんじやろうが？ 学生時代は散々やらかしてくれたであろう？」

「……そうかもな」

陽光に照らされた読書スペース。アルスメルが手元の再生ボタンを押すと、再び映像が動き始めた。ほんの十数秒間、そこに咲き乱れた、青と白が彩る幻想的な大輪の花。誰もが思わず見とれる美しい戦い。

花開いた、可能性のぶつかり合い。

「二兎を追う者は一兎をも得ず、か……」

「む、汝らしくないのう。その諺、所謂《錬金術師は文無し》と似た意味であろう？」

「なんだそれ」

「錬金術なんぞで金を作ろうとする浅ましい奴は、大抵貧乏という意味じゃ」

「少しニュアンスが違う気がするな。それにお前、錬金術極めてるくせに大金持ちじゃねえか」

「錬金術というものはな、そこから始めるものではないのじゃよ」

「じゃあお前は何かから始めたんだ」

「さあ？ そんな昔のことは覚えていないのう。ただひとつ言えることは、妾は金を作るために魔道を歩んだ訳では無い、ということかろう。今は満足じゃ。この軀からだを手に入れることができたし、今は小さい連中を見守るのが楽しい。あやつには感謝しておかねばのう」

「……そうか」

海斗はアルスメルの頭をゆっくりと撫でると、彼女は気分が良さそうに目を閉じた。

「今でこれなら、後々どうなるか。楽しみだ」

「うむ。これほど力が集まるのは久方ぶり故、胸が躍る」

「……それで、俺もお前に用事があるんだ。せつかくだから」

「む？ なにかの？」

「お前の小テスト、難しすぎだ。中学レベルに合わせろって言っただけ。しかも、早く採点しろ」

「む、む？」

「あと、成績に入れる時は全員5にしろ。流星にあれで成績は測れないだろ」

「……………」

「……………なあ、メル。どうしてお前が急にSに目覚めたのか教えてくれ。あとこっち向け」

「そ、それは……問題作ってたら、新生生の美少女どもが難しい顔して頭を捻っているのを想像して、それで面白くなって……そ、そんな感じだよ、お兄ちゃん！ ってそれは」

「今の録画したから」

「なあ!? け、消せこのー!」

「じゃ、俺、さくらのとこ行くから。バイバイ」

「ひ、卑怯者! 妾も行くー!」

2幕【Relations confusion】

第0話「孤独は人を強くする」

遠く細波の音が聞こえる。

海神様わだつみが呼んでいる。

だから私は前へ進むんだ。

たとえ、この体が壊れても。

でも、心は失いたくないな。

大事な人が待つてるから。

………

幼いあの頃。なんでもできる親友が妬ましかった。

私は頑張って練習してるのに、あの子はなんでも見ただけで真似てしまう。

ズルい、と思った。

きっと私には才能なんてなくて、だから頑張らなきゃいけないんだ。

本当に天才なのは彼女なんだ。だから、私がしているような努力なんていららないんだ。

ズルい、と思った。

でも、口には出さない。

私はあの子より賢いんだ。だから口には出さない。

妬ましかった。

正直、憎らしかった。

あの子がぐるりときれいに回る度に、殴りつけてやりたい衝動に駆られた。でも、しない。

あの子がきれいに歌を歌う度に、喉を掻っ切ってやりたい思いが頭を駆けた。でも、しない。

流石に今はそうでもなくなった。きっと歳をとったからだ。ちや

んと頭の中で処理できる。

私は賢いから。

でも、やっぱりズルい。

ズルい。

でも、言わない。

私は賢いから。賢いんだ。

「いつか目にも見せてやる」

その思いひとつで、私はあの子が絶対に真似できない力を手に入れた。

その思いひとつで、私はこの舞台に立った。

だから、絶対に負けない。

覚悟して。

.....

必死に鍛錬に明け暮れる彼女を、俺はそばでずっと見てきた。

彼女は何に対しても非常に熱心で、その努力は当然のことながら彼女という花を、ゆつくりと、しかし確実に開かせていった。

感心すべきは、血を舐めるような努力、それを、彼女はおくびにも出さないとこだ。普通だったら、辛い、やめたい、弱音を吐いて当然のはずだ。しかし、彼女は違う。誰にも言わなかった。両親にすら。

だからだろうか。時々彼女は、俺に対して、そばに居ないで欲しい、と言うことがあった。俺は彼女の秘密の努力を言いふらすような真似は決してしなかったが、それでも彼女は、そばで誰かが見ている、というのが落ち着かないらしく、それ以上に。

弱音を吐いてしまうかもしれない。

俺は、それを拒否した。

当たり前だが、彼女は怒って理由を聞いてきた。なるほど、孤独の中での努力はとて立派なものに思える。彼女の克己心ならば、隠れて怠ける、なんてことはないだろうということもわかっていた。

しかし、俺はこう答えた。

「影での努力は立派だよ。でも、誰にも見せないのはいけないな」

「どうして?」

「誰かに見られてないと、人間は怠けちやうからな」

「そんなことないもん!」

「俺もそう思うよ。それでも、そばにいさせて欲しい。あと、適度に弱音は吐くべきだぞ。溜め込み過ぎたらパンクしちゃうから」

俺の真摯な思いが伝わったのか、はたまた彼女が素直だったからか、それ以来、彼女は俺を拒むことがなくなった。そして、ほんの時々、弱音を零すようになった。辛い、苦しい、と。その度に俺は彼女の頭を撫で、まだ頑張れるよ、俺が付いてるよ、と優しく慰めた。

晴れ舞台に立つ彼女は、目が眩むほどに輝いている。

その輝きの理由<sup>わけ</sup>。その一端に俺の存在があつたなら。

俺にとって、これ以上の喜びはないだろう。

.....

孤独は人を強くする。

だが、本当に独りきりだと、その成長の方向が曲がっていても、それに気づけない。

そうした者が再び世界に戻った時、そいつはそこでようやく気づく。

自分がとつくの昔に、人として歩むべき道を踏み外していたことを。



## 第1話「私と、アイドルやらない？」

——なんでまだあの子達のこと気にしてるの。ちゃんと前を向きなさい！

——お前に俺の気持ちがあつたまるか！

……………

青蘭神社は、商業地区から青蘭島中央にある青枝山<sup>あおえざん</sup>への長い階段を登って行った先に位置している。

4月には満開だった桜も5月になるとすっかり散つてしまい、若い緑色の葉桜に囲まれた青蘭神社は、早くも夏の香りを感じさせるような姿になっていた。太陽が昇ると、木漏れ日が優しく神社を彩り、幻想的で神秘的な——まさしく《神域<sup>しんいき</sup>》と呼ぶのに相応しい様相を作り出している。

神城春樹<sup>かみしろはるき</sup>はその神社の奥——神主の一家が住む家屋の縁側で寝転んでいた。その隣には、一家の一人娘である神凧千鳥<sup>かんなぎちどり</sup>が、これまた春樹と同じように横になっている。

「いやー……この季節になるとここは本当に気持ちいいなあ」  
「そうねえ……」

2人は寝転んだまま、他愛もない話に花を咲かせている。春樹はさておき、千鳥はこうして気分良く寝ることが趣味の一つになってしまふほどダウンな性格だった。

少しツンとした顔立ちに艶やかな黒髪を持ち主である千鳥は、青蘭学園に通う生徒としても珍しく、青蘭島で産まれ育った少女だ。実家であるこの青蘭神社は、20年前に世界接続が発生した折に青蘭諸島が開拓された時に建てられた。元々本土に住んでいた神凧家は、とあ

る人物の要請を受けて青蘭島へと移り住み、今に至るまで神主を勤めている。

千鳥は、高等部に進級した折に学生寮である満月寮で生活し始めたものの、休日にはこうやって実家に戻り、家業を手伝っている。今はだらけているが。

春樹は見慣れた天井を見上げたまま、千鳥に声をかけた。

「なあ、千鳥」

「なに？」

「……ありがとな。あの時、励ましてくれて」

「あの時……って、ああ。別にいいよあんなの」

千鳥は半月ほど前に、初めてのブルーミングバトルへの不安で揺れていた春樹を励ましていた。そのおかげもあって、春樹は分の悪いブルーミングバトルを、辛くも引き分けまで持ち込むことができた。

千鳥は、少し寂しそうな笑顔を浮かべて天井を見上げている。

「私たち、結構歳とっちゃったね」

「んなこと雄馬先生の前で言ったら、ぶっ飛ばされるぞ」

「ふふ、そうね」

春樹と千鳥の関係は、春樹が中学2年の時に青蘭学園に転入した時から続いている。実は、去年青蘭を去った4人よりも付き合いが長いのだ。

「私ね……今思えば、嫉妬してた」

「嫉妬？」

「うん。美波<sup>みなみ</sup>たちに対する、嫉妬」

千鳥は相変わらず、寂しそうな笑顔のままだ。だが、そこに少しの自嘲の色が差す。

「私は春樹と、中等部の頃から一緒だったのに、高等部にいきなり入ってきたあんたらが、私の春樹を取らないで、って思ってた……のかな。もちろん、みんなとも仲良かったよ？ でも……心のどこかで、そう思ってた。私は誰とでもリンクできる代わりにエクシードは中途半端だし、春樹の力にはなれない……そう思ったら、怖くなったの。

でも一番嫌だったのはね、みんながいなくなった時、少しだけね

……『やった』って思ったことなの。これで春樹は、私のところに戻ってきてくれる、つて……」

千鳥の声が微かに掠れた。横を見ると、彼女は涙を流していた。

「やだよね、そんな子。最低だよね、友達の不幸を笑うなんて……。だから私は……。春樹に……」

もし仮にこの告白を聞いたのが1ヶ月前だったら。春樹は恐らく、千鳥に失望していただろう。それだけ、彼女らの存在は春樹の中で大きなものだった。

しかし、今は違う。もちろん、今でも彼女らを大事に想う気持ちはある。決して色褪せない想いが。だが、それだけではないということ、春樹は身を持って知った。美海や琉花、忍、兔莉子のお陰で。カレンやセニア、そして、ここにいる千鳥にも。

それは、心に余裕ができた、とでも言うのだろうか。今までは、痛みの記憶にばかり目を向けて、自ら傷ついていた。しかし、そうではなかったと知ったとき、彼の視野が広がったのだ。

「別にいいよ」

春樹が出した答えは、特に気負いのない声で発せられた。

「例え千鳥の思いがそうだったとしても……。俺が浮かれて千鳥のことを蔑ろにしたのは確かだし」

「そんな……。蔑ろだなんて。春樹はちゃんと私とも喋ってくれてたじゃない」

千鳥が驚いたように反論したが、春樹は起き上がって首を振った。「それでも、なんていうのかな。千鳥は俺と2年間仲良くしてくれてたわけじゃん。でも、相性がいいプロGRESSができたからっていきなり放り出して……。千鳥に対する感謝、っていうのかな。それを、忘れてた。忘れて、しかもみんながいなくなっただけからは自暴自棄になっただけ。人付き合いが最悪になって……。挙句、俺を叱咤しつたしてくれた千鳥にあんなこと言っつて。最低なのは俺のほうだ」

春樹は俯いて、厳しい眼差しで自分のつま先あたりを見つめている。そんな彼を見て、千鳥も起き上がった。そして、春樹の背中を叩いた。

「じゃ、お互い様だね」

「お互い様?」

「うん。私もごめんなさい。春樹もごめんなさい。おあいこでこの話はおしまい。じゃないと、ごめんなさい合戦になっちゃうでしょ?」

「そう……だな」

様々な感情が入り混じった曖昧な表情で笑う春樹。千鳥は彼の方に向き直って深く頭を下げた。

「春樹。ひどいこと言って、ごめんなさい」

その真剣な声を聞いた春樹も、ちゃんと彼女の方を向いて頭を下げた。

「俺も、ごめん。ひどいこと言って、付き合いも最悪になって、ごめん」  
縁側に、2人が頭を下げ合う姿が数秒間続いた。その後、<sup>のち</sup>2人は顔を上げると、お互いに微笑んだ。

「あの子達には……感謝しないとね」

「そうだな。みんな、いい子だ」

春樹は自分のブルーミングバトル・チーム”スカイブルー・エレメンツ”を思いながら答えた。

神社を囲む雑木林の中。冬の間葉を落としていた柵<sup>くぬぎ</sup>や樗<sup>ぶな</sup>にも、それぞれ新しい葉が芽吹きつつある。一方で、1年間葉を落とさずに寒い冬を耐え抜いてきた檜<sup>かじ</sup>の木は、これから来る暑い季節を待ち構えるかのように、空に向かって枝葉を大きく広げている。

そよ風に揺られて騒めく新緑を眺めながら、2人の時間はゆっくりと過ぎていった。

……

ほぼ同時刻。

「……………」

昼下がり、青蘭学園所属の学生寮『満月寮』の食堂。

普段は寮で昼食は出ないのだが、ゴールデンウィーク中なので、ということと寮母の好意で出してくれた昼食は全員食べ終わっている。だということに、そこには1つのテーブルを囲んでいる9人の少女がいた。

何をしているかといえば、部屋別対抗、2人1組で4チーム。人生ゲームである。残った1人はゲームの親だ。

「よーし！ 次は私たちの番だね！ ルーレットは……3？ 1、2、3……いやー！ 沙織ちゃん！ 家が燃えたんだけどー！」

「え!? うう……あの時お金が心もとないからって火災保険に入っておかなかったのが裏目に出たね……」

1つ目のチームは、栗色の髪をツインテールに結った活発な少女・日向美海と、如何にも大和撫子然とした黒髪ストレートの落ち着いた少女・岸部沙織。両者共に自宅が全焼したショック（というよりかは多額のペナルティ）に落ち込んでいる。

「ふふ、美海チームは運に見放されたようね。じゃあ次は私たちの番と。琉花、4以外ならなんでもいいから出そう！」

「オッケー！ この私のルーレットテクを見よ！ ……あ、4だ。車故障して修理費プラス1回お手つき!」

2つ目のチームは、学生の身でありながら青蘭島の顔として広報活動に勤しんでいる少女・小鳥遊希美と、ボーイッシュな格好と言動をしたサイドテールの少女・那月琉花。他人の不運を喜んでいたのも束の間、あつという間にこちらも窮地に追い込まれて意気消沈している。

「じゃあ次は私たちの番ですね。ルーレットは……7。あ、泥棒を捕まえて感謝された、だって葵ちゃん！ なんかお金も貰ったけど」

「やったわね兎莉子！ このまま順調に進んで行けば、最下位にはならなさそうね」

3つ目のチームは、ウェーブの掛かった髪を伸ばした、儂い姫君のような雰囲気少女・生嶋兎莉子と、それとは対照的に艶やかな黒髪をポニーテールに結った、刃のようにシャープな美貌を持つ少女・御影葵。こちらは特に大きな不幸に見舞われることもなく、順調に駒を進めている。

「さあ、拙者の番でゴザル！ ルーレットを回して……」

「忍、経理ばっかりやだ。私も回したい」

「仕方ないでゴザルなあ。……6？ ま、埋蔵金を掘り出した!? な

んたる運でゴザろうか……!」

最後のチームは、奇妙な帽子を被り、室内なのに赤いマフラーを着用して、まるで忍者のような口調で喋る少女・風魔忍と、その場に居る少女らの中でも一際小柄で、ぶかぶかなパーカーにうづくまっっている物静かな少女・古谷樹理<sup>ふるやしゆり</sup>。忍は樹理の豪運に驚愕した表情、一方の樹理はなんてことない顔でコーヒーの入ったマグカップを傾けている。

この8人は青蘭学園高等部に通う1年生である。そして、このゲームの親を、

「これは忍ちゃん、ルーレットは樹理ちゃんに任せて経理に回ったほうがいいんじゃない?」

2年生で風紀委員に所属している、短めに切りそろえた髪をピッグテールに結っている快活な少女・東条遥<sup>とうじょうはるか</sup>が勤めている。はつきり言ってるゲームの親など、お金をあげたり奪ったりするだけで「見るだけ」の延長である。だが、人生ゲームというものはなかなか稀有なゲームで、やるよりも見ている方が面白いことがある。少なくとも、いよいよ不運なマスが現れてゲームが荒れ始めている今は面白い。

もう何ターン過ぎたかは誰も覚えていなかったが、みんな和やかにゲームを進行させていた。上位争い組と下位争い組で分かれてしまいい、どちらも無駄にライバル意識を燃やしている。

「次は私たちのターン! ルーレットは……8! やった、一気に進めるね!」

「あの……美海ちゃん、落とし穴に落ちて1回お手つきって……」

「なんで!? なんでそこに落とし穴あるの!? ていうか人生ゲームで落とし穴って逆に珍しくない?」

「ふふ、不運は重なっちゃうのね。次は私たちの番」

「いや、車壊れたからお手つきだよのぞみん」

「そ、そうだったわ……」

「私たちは……4ですね。あ、なんかプレイカードを引けって出ました」

「プレイカードねー。はいはい。さあ、好きなのを取りたまえ」

「うーん……ここは葵ちゃんに引いてもらいましよう」

「え、私？　じゃあ……これだ！　お？　なかなか使えそうなのが……ほら兎莉子」

「おおー！　でもこれ、美海ちゃんチームか希美ちゃんチームに使ったらイジメになっちゃうよね」

「仕方がないさ。この世は弱肉強食なんだから。弱者が肉となるのもひつじょう必定なのさ……」

『何を引いたのー!!』

「うむ。では拙者らの番でゴザルな」

「……私がルーレット」

「いや！　ここは拙者にも運があるということを証明するでゴザル！

樹理殿におんぶにだっこでは風魔の名が泣くでゴザルからな！」

「3。……強制出資でさっきの埋蔵金全部持ってかれたんだけど……」

「な、なにー!?!」

「でもほら、出資だからそのうちいいことあるかもよ？」

などと食堂を賑わしていると、そこに1人の少女が入ってきた。

「あら、賑やかね」

「お姉ちゃん！」

真っ先に反応したのは遥だ。食堂に入ってきたのは、遥と全く同じ色の髪を伸ばした背の高い少女・東条悠ゆうだった。苗字の通り遥の姉で、活発な笑顔が特徴的な遥と比べ、悠はかなり落ち着いた雰囲気である。高等部の3年生で、現在は風紀委員長を勤めている。

「人生ゲーム？」

「そう！　1年生が部屋別で対抗戦やるーっていうから、親をやっているの」

「へえ、楽しそう。私も見ていい？」

1年生達の答えはもちろん「いいよ」なのだが、なにせ相手はお堅い（と思っている）風紀委員の長おんである。あまり3年生とは会話する機会がないし（一応同じ寮生だから、困ったことがあれば相談したり

もするが)、その「いいよ」にしても、満面の笑みで言えたものではなかった。もつとも、少し時間が経ってからは、

「あー！ 今の、もうひとつ大きければ避けられたのに！ 惜しかったわね！」

とか、

「あら、資産大幅アップじゃない。すごいわね！」

とか、のめり込んでいる。傍観者なのに。

彼女が図っていたのかは知る由もないが、そのおかげで1年生たちの緊張は少しずつほぐれていった。

結局そのゲームは、なんとか忍&樹理チームが逃げ切り、尚且つ美海&沙織チームと希美&琉花チームがお互いの足を引っ張りあった挙句同じターンで破産するという悲惨な結果に終わった。

そして、続く2ゲーム目には「私たちもやりたい！」という悠の発言により東条姉妹チームを加えた5チーム対戦になる。

当然ながら先ほど以上にはしやく悠と、それに釣られてよく笑う遙を見た1年生たちは、2人に対する親近感をより深めることになった。

ちなみに東条姉妹チームは、悠の采配ミスで1回破産しかけたにも関わらず、なんだかんだで1位になった。

本人ら曰く、『姉妹パワー』のおかげらしい。

……………

次の日。

「でね、結局両方とも破産しちゃったんだよ〜！」

「はいはい、分かったから。これからは足を引っ張り合うんじゃないよ」

春樹と美海は、青蘭島商業地区へと足を運んでいた。美海が「春樹くんの服を選ぶよ！」と言ってチームメンバーである琉花・忍・兎莉子の3人を誘ったのだが……………

「まさか、全滅だなんて……………」

「仕方ないよ。用事は誰にだってあるもんだ」

琉花と忍は樹理と一緒に行く場所があるらしく、兎莉子は葵と先約



があつたとのことだった。

「というか、言い出すタイミングが遅すぎるだろ。なんだよ昨日の晩って……」

「うう、それまで知らなかったんだもん」

「ま、俺が暇で良かったな」

「うん！」

春樹の服選び、という目的は、後付けのようなものだ。今日は、本来の目的が別にある。それは、商業地区の北広場で行われるチャリティコンサートだ。そこに希美が出演すると美海が知つたのが昨日の晩。それから急に招集をかけたため、たまたま暇、というか元々様子を见に行こうとしていた春樹以外は誰も集まってくれなかった。

「でも、希美もすごい度胸だよ。昨日の午前中にリハーサル終わらせて、午後から人生ゲームやつてるなんて」

「うん！ 希美ちゃんは昔からすごいんだよ！」

「あ、そういや、幼馴染だったっけか」

「そうなの。いつも一緒に遊んでてね。アイドルごっことかしてたなあ。『いつか一緒に歌おーね！』って約束して……まあ、その、私音痴だからアレなんだけど」

などと談笑しながら時間が過ぎていく。

余談だが、希美は小学校を卒業すると同時に青蘭諸島に渡り、青蘭学園の中等部に入学した。つまり、希美よりも1学年上で、且つ中等部2年から編入した春樹とは、「青蘭滞在歴」とでも言うべき期間が同じなのである。中等部は高等部に比べて生徒の数が極端に少ないため、学年を超えての結びつきが強いという側面もあり、実のところ希美と春樹はだいぶ親しかったりする。小学校を卒業するまで一緒だった美海と、中学生になってから親しい春樹が、今や相性抜群でチームを組んでいる、というのは、希美にしてみれば数奇な話であろう。

美海には何着も見繕ってもらったところ悪いのだが、なんとなく春樹のセンスとはかけ離れた服を大量にチョイスされたため、その中でも彼のセンスに沿うような物を少しだけ購入。「外で食べたい！」と

いう彼女の要望により、中央広場に集まっている屋台の内の1つでタコスを買って、ベンチに座って食べる。そういえば、美海と出会った次の日に、こうして中央広場の噴水を眺めながらクレープを食べたなあ、と思い出していると、案の定彼女が「デザート！」と言いつ出した。正直、予想していた。

「そこまでデフォルトなのな、お前……」

「えへへ」

決して褒めているニュアンスではないのだが、頬を緩ませながらクレープを幸せそうに頬張る美海は、なんだかんだ言いつて本当に可愛らしい。

始めて出会った時にも思ったが、彼女の笑顔にはどことなく「華」がある。見ているこちらにも幸せになつてしまふそうさ。

(いや、なつてしまふそう、じゃない。まさに幸せだな)

昨日、自分が千鳥に言ったことを思い出す。

みんな、いい子だ、と。

他の3人はひとまず置いておくとして、美海は割と天然で行動が危なっかしいところがある。本人にも自覚があるようだが、あまり頭が良いわけでもない。でも、その底抜けな明るさと社交性の高さは、これらの欠点を補って余りある長所だ。斯く言う春樹も、美海の笑顔で前向きになれたことがある。

人懐っこい仔猫、とでも言えばいいのだろうか。

しかし、彼女の性格以上に何が仔猫っぽいかというと、

「春樹くん、美味しいね〜」

「ちよ、あんまくつつくなつて」

春樹に気を許しているからか、結構じゃれついてくるのだ、美海は。周りの目もあつて気恥ずかしいので、春樹は彼女の頭を掴んで引き離れたが、せつかく好意を向けてくれているのに無碍にあしらうのはちよつと可哀想なので、そのまま手を優しく動かして頭を撫でる。すると美海は、それこそ仔猫のように目を細めた。本人は同性に対するスキンシップとほとんど同じだと思つているのだろうが、春樹にしてみれば相手は宝石のような美少女。彼がドキドキしてしまうのも仕

方がないことだ。

そうこうしている内に、コンサートが始まる時刻が近づいてきた。のんびりするのも程々に、中央広場からアーケード付きのメインストリートを通って北広場へと向かっていると、見覚えのある顔に出会った。背の高い美女と、背の低い男の子。

「アウロラに俊太じゃん」

「あら、春樹くん。こんにちは」

「アウロラ先輩に俊太くん、こんにちはー！」

「あ、先輩と日向。えと、こんちは」

春樹が声をかけると、前を歩いてきた2人は振り返って会釈した。

背の高い美女の名前はアウロラという。春樹と同学年で赤の世界から来たお嬢様だ。優しい表情とたおやかな体つきが相俟<sup>あいま</sup>って、まるで天使か女神のような神々しい美貌に溢れているように見えた。そして、実際に彼女は慈愛に満ちた性格で、下級生どころか同級生にも、ともすれば上級生からも頼られるような少女だった。

対して、背の低い男の子の名前は永瀬俊太<sup>ながせしゅんた</sup>という。こちらは美海と同学年で、名前の通り日本出身。中性的な顔立ちで背が低く、明るい茶色の髪（染めているわけではないらしい）も肩あたりまで伸ばしたものを後ろで1つに結っているため、一見して女子に間違えられかねない容姿の持ち主だ。「かわいい」男子なのだが、本人は「かわいい」と言われるのが嫌なようで、入っている部活は剣道部、と日々男らしくなるために頑張っているらしい。

「もしかして、コンサート見に行くの？」

「ええ。希美ちゃんが出るって言うから。この子たちも見たいって」

そう言っアウロラが指さした先は、俊太が持っている編みバスケットだ。その中に、

「ハル！ おひさー！」

「こんにちは、ハルキ」

「あ、フローリアにルビー。お前らもいたのな」

身長30センチもない妖精が2匹入っていた。小さくて、透き通った羽が生えている、と、容姿は通常の妖精と同じだが、2人はそこら

へんの妖精とは違う、人間と同レベルの知能を持つ上級妖精だ。元々は鍾赤島の森の中に棲んでいたが、アウロラと出会ってからは彼女に懐くこと懐くこと。結局今では赤の世界用の学生寮『文月寮』で、寮母のお手伝いをしながらのんびり暮らしている。

バスケットから身を乗り出してニコニコと春樹に手を振っているのは、『花』の妖精フローリア。すまし顔でいるのは『紅玉』の妖精ルビーだ。どちらも核となる要素が表に顕れた格好をしており、前者は花の髪飾りを、後者は赤い宝石のブローチを身に付けている。

と、ここでフローリアとルビーを見た美海が、

「あ、春樹くん！ この子たち妖精さんだよね！ お話できる妖精さんだよね！」

「そうだな。前に見た子たちとは違うな」

「わーい！ 私は美海だよ！」

と妖精2匹に飛びつく美海。妖精たちもそれに快く応じている。

それを脇目に見ながら、春樹はアウロラに声をかけた。

「そういえばアウロラは、希美のファンだったな。どうして今日はまたみんなで」

「ええとね、希美ちゃんがチャリティコンサートに出るんだよっていう話をシュンくんにしたら、興味を持ってくれたみたいだから、せっかくだしみんなで行こうって」

「なるほど。なに、お前希美に興味あんの？」

「え？ いや、そういうわけじゃなくて。なんつーか、同い年なのに人の前に立てるってすごいなーって思ったから……」

「ははあ。お前もいろいろ考えてるんだな」

「春樹先輩も日向も、もう人前に立った立場でしょ？」

「あー、バトルやったからな。でも結構夢中でやってたから、緊張してたのは最初だけだったな」

「そういうシュンくんだったって、中学生の時に剣道の大会に出ていたんでしょ？」

「でもあんなに人多くなかったし……俺が出る試合以外にも幾つか同時進行でやってたから、皆が皆俺の試合見てたわけじゃないし」

そんな雑談をしながら（美海はフロリア、ルビーと戯れていた）アーケードを抜け、北広場に出ると、既に多くの人々で賑わっている様子だった。当然ながら出演するのは希美だけではなく、集まっている人々の目的として一番多いのは、近頃人気の黒の世界出身の歌手であろう。だからといって、希美に人気がないわけではないのも確かだ。デビューして既に3年が経ち、彼女の成長を見届けたいと思う一定層の固定ファンが多くいるのだ。何を隠そう、言ってしまうば春樹だってその1人である（実は、出ている彼女のCDは全部買っていたりする）。

ざわめきの中でアウロラや俊太と話していると、不意に背中を叩かれた。なんだ、と訝<sup>いぶか</sup>しんで振り向くと、そこには2人の少女が立っていた。片方は満面の笑みで、もう片方は少し申し訳なさそうな顔をしている。

「こんにちは、春樹センパイ！」

「こ、こんにちはです」

「なんだ、エルエルとレミエルか」

2人の少女は、どちらも赤の世界から来た天使だった。ニコニコしている方がエルエルといい、控えめな方がレミエルという名前で、姉妹のように仲の良い、中等部3年に通う生徒だ。2人とも翼を畳んで法衣のような形に変えてあるが、頭の上にはちゃんと天使の輪が浮いている。それに、エルエルには側頭部にも小さな羽が生えていた。

「センパイ！ こないだのバトル、ちよーすごかったです！ 私、感動しました！」

「そか、ありがとな」

エルエルはいつもハイテンションで、誰とでも友達になりたがる少女だった。そして、彼女自身の特徴として、人と人の間にするつと入ってきてどちらにも懐いてしまうという、不思議な少女でもある。「せ、先輩。私も、その、感動しました。引き分けはちよつと残念でしたけど、その、あの、これからも頑張ってください！」

「ありがとう、レミエル」

対するレミエルは控えめな性格だが、なんとなく庇護欲をそそる少

女だった。彼女は普通の天使とは異なり、通常2枚あるはずの翼が1枚しかない。普通と違う、そのせいでオドオドするようになってしまったようだが、少し付き合ってみれば実は芯の強い少女だということがすぐに分かる。

「あ、日向センパイだー！ こないだのバトルすごかったです！」

「ん？ えーと……」

「私エルエルって言います！ 中学3年生です！ 友達になってくださいー！」

「エルエルちゃん？ もちろんだよ！ なんだか気が合いそうなオーラを感じるよ」

「なんだかハイテンションな2人が意気投合している傍ら、春樹はレミエルに尋ねた。

「で、2人は何しに来たの？ もしかして、これ見に来たの？」

「え？ これは……？」

「このコンサートに希美が出るんだよ」

「そうなんですか？ ならもう少し余裕を持って来ればよかったなあ……私たち、サイオンお兄様におつかいを頼まれているのです」

サイオン、というのは、青蘭学園で音楽の講師をしている赤の世界出身の男性で、レミエルとエルエルの保護者でもある。聞けば、ゴールデンウィークなので、中等部に通う学生用の寮『長月寮』から鐘赤島にある彼の家に帰省(?) していたところ、少しおつかいを頼まれたのだとか。

エルエルが初対面である俊太まで巻き込んでいる横で話を聞いていたアウロラが、  
「まあ、そんなに時間押してないなら見ていきましようよ、せっかくだし」

「そうですね……お兄様はあまりそういうことにうるさくない方ですし、見ていくことにします。希美先輩の歌、好きなんですよ。ねえ、エルエルー？」

「ほいさー！ なーに、レミエル？」

「このコンサートに希美先輩が出るから、ちよつとだけ見ていくこと

にしよ?」

「え、ホント? 見てく見てくー!」

エルエルは頭の羽をパタパタさせて喜んでいいる。彼女は嬉しくなると頭の羽を盛んに動かす癖があった。まるで子犬のようだ。逆に落ち込んでいると頭の羽までしょんぼりしてしまうという、とにかく感情が表に出やすい子であった。

結構な大所帯になってしまったが、青蘭学園は生徒数が全部で200人もいない小規模な学園であるため、学年内はもとより、学年同士のつながりが強い。そのため、皆が皆知り合いということも、あまり珍しいことではないのだった。特にエルエルは、出会ってしまったえば誰でも友達になりたがり、相手もそれを断る理由がないので、もしかすると青蘭学園の生徒で1番交友関係が広い少女かも知れない。

しばし歓談していると、いよいよコンサートが始まった。希美の出番はまだだが、どの曲も不思議と元気が出てくるような曲で、聴き入ってしまう。黒の世界や赤の世界の歌には、本当に魔法でも込められているのだろうか。

(そういえば、ルビーは特に歌が好きだったっけ)

ちらりと横を見ると、バスケットの中から身を乗り出して、紅玉のような赤い目をキラキラさせているルビーが目に入った。どちらかといえば彼女は歌う方が好きだったはずだが、こうして歌を聴く事も大好きらしい。

いつの間にか幾つかの歌が終わり、いよいよ希美の出番がやってきた。仮設ステージの上に彼女が登場すると、他のどの歌手にも劣らない喝采が上がった。

「みんなー、今日はコンサートに来てくれて、本当にありがとう!」

希美のよく通る声が広場に響き渡る。二言<sup>ふたこと</sup>、三言<sup>みこと</sup>喋<sup>のち</sup>った後、いよいよ彼女が歌い出した。

彼女のエクシードは『印象操作』という、かなり特殊なものだ。効果は読んで字の如く、対象のイメージを変えることができる。流石に自由自在に、とはいかないようだが、今の彼女は自分にそれを使っている。

青蘭学園の校則に「学外でのエクシードの使用は原則禁止」というものがある。だが、彼女は青蘭学園公認のアイドルであるため、多少の使用が許可されているのだ。とはいえ、他のプログレスにしても、軽度の使用ならば黙認、という空気はあるのだが。例えば、『風を操る』という美海のエクシードでそよ風を吹かせてみたり、『液体を操る』という琉花のエクシードでコップの中の水を操ってみたり。

ともかく、黒を基調としたアイドルらしい衣装に加え、自らのエクシードで着飾った希美は、それはもう惚れ惚れするほど綺麗だった。ただ、彼女を至高たらしめているのは衣装でもエクシードでもなく、その満面の笑顔と、心から楽しんでいるのがはつきりと分かる歌の2つだ。

彼女はまだ高校生。他の成人しているアイドルや歌手に比べれば、多少拙い点はいくつもある。だが、そういう欠点すら魅力に変えてしまふ、そんな不思議な力が、その歌には込められているように感じた。それはきつと、日々弛まぬ努力を積み重ねているが故の輝きなのだろう。

どのくらい希美が歌っていたかは分からなかったが、あつという間の数分間だった。周りを見渡すと、皆笑顔で拍手を贈っている。美海やルビー、フローリアやエルエルなど飛び上がっているほどだ。普段は落ち着いているアウロラとレミエルでさえ、興奮した面持ちで手を叩いている。

そんな中、俊太だけは、笑顔を浮かべつつも、どこか下向きな表情だった。

.....

「今日は来てくれてありがとね」

日が傾き始め、コンサートの終わってステージの撤収が始まった頃、希美はまだ広場に残っていた春樹達のところへやってきてくれた。

おつかいがあるので、と途中で抜けたレミエルとエルエルと、コンサートが終わってすぐに「ぜひ希美ちゃんの歌をもっと知ってほしいわ」と言つてCDショップへ俊太を引きずっていったアウロラと妖精



2匹がいなくなり、広場に残ったのは春樹と美海だけだった。

「希美ちゃんすごかったよ！　またコンサートするならもつと早く教えてよ！　今度はみんなで見に行くから」

「ありがと。ま、その時はその時ね」

美海の賛辞をサラツと流す希美だが、その頬が赤いのは夕日のせいではないだろう。ステージの上では純朴な子っぽく見える彼女だが、普段はなかなかツンツンした性格である。悪い言い方になるが、アイドルをしているときは可愛子ぶっているのだ。まあ、どちらの希美も素直で且つ照れ屋なので、「そこが可愛い！」と評判だったりするのだが。

「すごいよー」を連発する美海と、頬を赤らめて「そんなことないっで」で反撃する希美。それを見ながら「俺もすごかったと思うよ」と茶々を挟んだりしていると、向こうから知り合いの講師が歩いてきた。

「よう、お前らちゃんと見てたか？」

「へ？　あ、雄馬先生だ！」

歩いてきたのは、青蘭学園で体育の講師をしている岸部雄馬きしべゆうまという男性だった。身長は170センチほどと男性にしては低めながら、言い知れない《大きさ》を持っているように見える。初対面なら思わず圧倒されてしまいそうな雰囲気だが、既に3人はそれに慣れていた。付き合ってみれば、非常に気さくで頼れる存在なのだ。

「ちゃんと見てたか、って、雄馬先生、いませんでしたよね？」

「俺は裏にいたのさ。希美がステージに出るときにはボディガードやってんの」

「ええ？　講師なのにな？」

「どっちかつつーと、講師だから、かな」

彼は教師ではなく講師なので、青蘭学園で教えている、というより、青蘭学園に教えに来ている、という表現が正しい。なので、彼が教鞭を取っていないときは、こうして外部で何かしていることがある。もつとも、希美は青蘭学園公認のアイドルであるため、これも学園の仕事の一環として見ることもできるが。

「まあ、ボディガードとか言いつつ、結局はただの話し相手になっちゃってるけどね」

「リラックスは大事だ。だろ?」

「まあそうだけど」

また余談になるが、仮にも講師である雄馬に対して、希美はタメ口で喋る。それは、小鳥遊家が青蘭島へ移住し、希美がアイドルとしてデビューする際、彼女の両親が雄馬をボディガードとして雇った時、彼らが雄馬に付けた条件のひとつに「希美の話し相手になってやって欲しい」というものがあつたからだ。

当時の希美は非常に内向的な性格で、友達が出来るかかなり怪しいレベルだった。本土にいた時はもつと活発だったのに、と、急な娘の変化に彼女の両親は頭を抱えていたが、そんな時、とある講師の話が彼らの耳に届いた。少し調べてみると、件の講師——岸部雄馬の評判は様々な場所から入ってきた。意見はもちろん三者三様だったが、皆が口を揃えているのが、

——女の子の心を開くことに関しては、彼の右に出るものはいない。

正直任せるのが不安だったが、彼らに対して雄馬が見せた誠意は疑いようもないものだったので、様々な条件の元に契約を結び、彼に愛娘を託すことにしたのだ。

その仕事が上手く行ったかどうかは、現在希美の両親が青蘭島を離れていることから明らかである。雄馬は見事契約を履行し、彼らの信頼を得るに足る仕事をやってのけたのだ。希美は心を開き、今に至るまで頑張つて学生とアイドル業を両立させている。

女の子に甘い雄馬ではあるが、他者との信頼に何よりも重きを置く彼の生き方は、それだけで色々な人を引き付けている。

その雄馬が、

「でき、春樹よ。ちよつと提案があるんだけどな」

「なんですか?」

「俺のチームとブルーミングバトルしない?」

『え?』

春樹と美海はそろって口を開けた。雄馬は頭の右前の方を掻きながら、

「いやな？ ちょっと先の話になるけど、ちょっとした大会があるんだよ。20歳以下のプログレスで構成されたチーム2つで登録して、その2チームでバトル。勝ち負けは問わず、バトルの質を見るっていう大会がな」

「はあ。で、それに出ると」

「そういうこと。バトル経験は多い方がいいからな。どうする？」

「俺は……まあ、構いませんけど、美海は？」

「私もオツケーだよ！ でも琉花ちゃんと忍ちゃんもいるから……で、雄馬先生のチームって誰なんですか？」

「それは秘密。……だとズルいから教えてやる。1人はこいつだ」

と言って雄馬は希美の頭をぽんと叩いた。

「え!? ウソ!？」

「嘘なもんか。なあ、希美？」

「そうね。あと沙織も含めて、今のところ2人かな」

「沙織ちゃんも!? どうしよう……」

美海が頭を抱える傍ら、春樹も少し悩み始めた。沙織のエクシードがどんなものかは知らないが、希美はエクシードが戦闘向きではない。それなのにブルーミングバトルに出るとは、どういふつもりなのだろう。

「まあ、こっちはそちらの人数に合わせるから。あと2、3日で結論を出してくれ」

雄馬はそう言い残すと、希美の肩をぽんと叩いて去っていった。残された希美は、何やら言いにくいことがあるかのようにもじもじしていた。

「どしたの、希美ちゃん？」

「な、何でもないわ。ただその……美海に、お願いがあつて」

「なーに？」

なにかな？ と待ち受ける美海に、希美は、

「わ、私と、アイドルやらない?」

「……………へ?」

……………

黒の世界・赤の世界・白の世界という3つの世界と繋がっているこの青の世界、地球。太平洋上に浮かぶ青蘭本島を中心とする群島・青蘭諸島には5つの島があり、鐘赤島・賢緑島けんりょく・白百合島しらゆり・夕玄島ゆうげんの4つの島が、青蘭本島から北向きに右回りの五角形を描くようにそれぞれ並んでいる。

その別世界への門を《ハイロウ》と呼ぶが、黒の世界への門は夕玄島、赤の世界への門は鐘赤島、白の世界への門は白百合島、各島の上空に、それぞれの世界を象徴する色をした大きな星のような姿で浮いていた。その門は厳密なシステムにより開閉が制御され、世界間を移動できるのは、青の世界の時間で4時～7時・12時～15時・18時～21時の間だけ、と決められている。

門の真下には《界港》と呼ばれる、いわゆる空港のような施設があり、世界間を移動する人々の管理を行っている。

しかし、世界接続から20年が経とうとしている今、隣あつた世界というものはそれほど珍しいものではなく、世界間を移動する人の数は減少していつている。

時刻は18時30分過ぎ。ちょうど日の入りが近く、昼と夜が交差する黄昏時たそがれ。まるで災厄の前触れであるかのような朱色に染まった空が、ガラス張りのロビーから見えた。

場所は夕玄島界港。既に門は開いており、世界間を移動する人々が紫色の光となって門と世界間移動装置との上を行き来していた。

その男は、閑散とした入界ゲートの近くのロビーで座っていた。手にしているのは、この世界の文字で書かれたものではない本・魔導書だ。妖艶な風貌をした男性だが、そこにか弱さというものは一切無い。例えるなら、破壊を振り撒く存在でありながら、その完成された姿故に人を魅了する竜。『妖しさ』と『力強さ』が絶妙なバランスで共

存する、不思議な魅力の持ち主である。

名前を、アルマ・カミュオンという。青蘭学園で体育の講師をしている、黒の世界出身の男性だ。

アルマは不意に魔導書から目を上げると、ゲートの方に視線を投げた。そこには、大きなバッグを持った1人の少女が歩いてきている。

身長は160センチほど。淡い色の髪をツインテールに結び上げ、クリップのような髪留めで固定している。即頭部から伸びる短い角からして、黒の世界の固有種・魔族。口元に浮かんでいるのは妖艶な笑み。自身に満ちた足取りで歩いている。

だが、最も他者の目を引くのは、その溢れんばかりのバストである。それ以外の場所は普通の少女なのに、胸だけが不釣り合いに大きい。一步一步ロビーの床を踏む度に、その大きさを主張するようにぶるぶると揺れていた。

「……久しぶりね、アルマ兄<sup>にい</sup>」

「久しぶりだな、リゼ。お前いつそんなにデカくなった？」

「それは、どこの話かしらん？」

「身長もそうだけど、特に胸」

「やだ、セクハラ？ もう、この人ったらあ」

口ではそういつつも彼の隣に座りながら、胸をかき抱くようにして主張してみせる少女。

「昔からマせてたけど、身体までマせて来るとは思わなかったなあ」

「アルマ兄に見てもらえるように頑張ったのよ？」

「そりや僥倖<sup>うまいちか</sup>だね。まあ俺は立場上お前の教師になるわけだから、学校の中ではあんまり迫るなよっ。」

「そう言われると、是<sup>せ</sup>が非<sup>ひ</sup>でも学校内でやりたくなっちゃうわ」

「勘弁してくれ。ネロに呆れられちまう。ていうかお前、そんなに熟<sup>う</sup>れた身体してんなら男がほつとかないだろ。もう処女じゃなかったり？」

「するわけないじゃないの。やっと再会できた大事な人のために、ちやあんと取っておいてあるわ。今すぐにもあげちやいたいくらいよっ。」

「ならちよつと胸を……なんて言えるか。このバカ」

人が少ないことをいいことに下品な話にしばし笑った後、2人は席を立った。

「……空が赤いわね」

「夜は俺らの世界と同じような感じだけど、昼になれば青くなるんだ。不思議だよな」

「そうね……本当に追いかけてきちゃった。ソフィーナとハイネ、どんな顔するかしら?」

「まーぶつたまげるだろうな。ぜひ拝見したいところだが……ソフィーナのは見れるな。寮に行けば嫌でも会える。あと、アビーにも会いに行つてやれ。昔っから懐いてたし、きつと喜ぶだろうさ」

「まあ、楽しみねえ」

懐かしい人の名前をいくつも聞いた少女——リゼリツタ・ナイトローゼは、お得意の妖しげな笑みを浮かべた。

## 第2話 「先生は優しいので」

「……美海。時々思うんだけど、あんたって底抜けのバカなんじゃない？」

「ソフィーナちゃんひどっ！ でも安心したー、沙織ちゃんも出てくれるなら、勇気100倍だよ」

「うう……勢いに押されちゃったけど、恥ずかしいよぉ」

「なに、私だけじゃ不安ってワケ？」

「え？ いやいや、希美ちゃんも合わせて、200倍だよ！」

10日ぶりの登校は少しばかり億劫になるのは仕方がないことだ。

全体的に気だるげな雰囲気の中の朝の教室で、沙織は机に突っ伏していた。彼女もまた希美の勧誘を受け、お人好しが過ぎる性格から同意してしまっていた。

……………

「わ、私と、アイドルやらない？」

「……………へ？」

美海は思わず呆然となった。言われた事の、言葉としての意味は理解できたのだが、如何せん急すぎて意図が全く分からなかったのだ、思わず間の抜けた声が出た。答えを求めて横の春樹を見やったが、彼もなんだかわけの分からなそうな顔をしている。

「えつと……それってどういう……う？」

仕方ないので本人に直接聞いてみると、希美はつつかえながら、

「だ、だから、私と一緒にステージに立って、歌ったり踊ったりしてくれないかな、ってこと！」

「えーと……なんで、私なの？」

もつともな疑問がポロっと口から出て、それから――

私と一緒にステージに立って――

それは、かつて自分が彼女と交わした約束だった。幼い頃、美海がまだエクシードに目覚める前のこと。

——わたし、おおきくなったら『かしゆ』になるの！

——それしってるー。たくさんおうたをうたうんだよね？

——うん、そうだよ。

——じゃあ、そのときはみうみもいつしよにうたっている？

——もちろんだよ！

「雄馬くんが言ってたバトル、あるじゃん。あれの少しあとに、学園内でちよつとしたコンサートやるの。でね、それには友達を何人か連れておいでって言われてて……こんなこと頼めるの、美海くらいだから……」

希美は下を向きながら、ぽつりぽつりと言葉を紡いでいる。一杯一杯という感じだ。

だから美海は、彼女の手を取って言った。

「もちろんやるよ！ 任せて！」

それを聞いた希美は、嬉しそうに笑った。

でも、春樹の目には、その笑顔に過ぎる、ほんの僅かな別の感情を見た気がした。

……………

「はいおはようございます。さ、ホームルームを始めるから席に着きなさい」

予鈴が鳴る時間になると、担任教師の癖のある声が教室内に響いた。

教室に入ってきた1年生の担任教師本条文香ほんじょうふみかは、教師のはずなのに、やたらと背が小さい。黒い髪をツインテールに結び、ワイシャツの上から明らかに身の丈に合っていない白衣（裾がふくらはぎの半分くらいまでである・袖が長すぎて幾重にもまくっている）を羽織った、数学を教えている女性だ。

号令を掛けるクラス委員長に就任したのは、黒の世界出身の才女、ソフィーナ・アルハゼンだ。曰く、

「まあ、この天才魔女たるソフィーナには、たった三十数人のクラス



メートをまとめることなんて造作もないことだし？ やってあげなくもないわ？」

とのこと。ちなみに、今は一癖も二癖もあるクラスメートに日々手を焼かされている。結局、みんなの助けもあってなんとかなっているが、元々彼女が高飛車故に若干弄<sup>いじ</sup>られキャラ気質なのが問題な気がしないでもない美海である。

そのソフィーナは、心なしかゲンナリしているように見える。美海らが「どうしたの？」と聞いても、「まあ、色々よね……」と言葉を濁した。というより、喋るのが疲れるからのようだ。

「皆さん、ゴールデンウィークはいかがでしたか？ 青蘭諸島、ちゃんと見て回りましたか？ レポートはあとで回収するので、終礼までに書いておくこと。どうせみんな遊んでいて書いてないでしょう。先生は優しいので、最悪放課後まで待ちます。ちゃんと書くように」

本条は酷く表情の変化の少ない女性だ。声の抑揚も小さく、感情が読み取り辛い。しかし、その実かなりお茶目な性格であるらしく、真顔で発せられる冗談にもそろそろ慣れてきた頃だ。また非常に親切で、教え方も上手く、理解しきれない生徒のために補講を開いてくれることもある。それ以外の個人的な悩みであったり、ちよつとした相談にも快く乗ってくれるため、取っ付き難<sup>にく</sup>いことを除けば、まさに模範的な教師と言える。

その本条が、いきなりとんでもないことを言い出した。

「さて、じゃあ最初に、転入生を紹介しましょうね」

——転入生!?

クラス中の生徒が一堂にそう思ったことだろう。同時に、あともう1ヶ月くらい早く入ってくればよかったんじゃないかな、とも。

本条が教室の外に呼びかけると、スライド式のドアが開き、1人の少女が入ってきた。

その少女は、薄い色の髪をツインテールにして、そこにクリップのような髪留めをしている。即頭部から角が生えてるのを見て、魔族であるソフィーナと同じような種族なのかな、と予測できた。

しかし、なによりもクラス中の目を引いたのは、その巨大な胸だ。

あまりの大きさに、青蘭学園指定の制服のワイシャツのボタンが弾け飛びそうになっている。自信に満ちた歩き方で1歩足を進めるたびに、その大きさを誇張するように揺れていた。この時点で、クラスにたった3人しかいない男子は目を逸らそうとして失敗した。しかし、そのうちの1人違う意味で目が逸らせなかった。

教壇の横まで進むと、少女は肉感的な唇を開いて――

「……リゼ？」

言葉を発する前に彼女を呼ぶ声があった。その声は、3人の男子のうちの1人、黒の世界出身のハイネ・カミュオンが発していた。

「あら、ハイネ。お久しぶり」

少女は妖艶に微笑むと、彼にのみ向けて言った。それから、今度は全員の方を向いて、

「黒の世界から来た、リゼリツタ・ナイトローゼです。どうぞよろしく」

どこことなく色気の滲む声で自己紹介した。彼女のインパクトに呑まれながらも、皆が口々によろしくと返すと、本条は満足気な表情をする（あまり変化は無いものの）。

「ナイトローゼさんは諸事情があつて入学が遅れてしまったとのことです。青蘭諸島にも昨日着いたばかりのようですので、みんないろいろと教えてあげるように」

そして、

「また、様々な事情で入学するタイミングがずれてしまうことがよくあるので、この学園において転入生はそれほど珍しい事ではありません。なので、皆は転入生の子に青蘭学園のことや青蘭諸島のことを教えてあげられるように、身の回りのことはちゃんと知っておいてください。いいですか？」

皆がそれぞれに頷くと、本条は「では――」と教室内を見回して、一番後ろの空いている席を指差して、「あそこの席に座ってください」とリゼリツタに示した。彼女は本条に向かって優雅に一礼すると、先ほどと同じように自信有り気な歩き方で歩いて行った。

「さて、1時間目は数学ですけれど、せっかく転校生が来たことです

し、触れ合いタイムにしましょう。また、ゴールデンウィーク中に出した宿題がまだだという人は、それをやっつけてもいいです。回収は次の時間にします。もう1回言いますけど、先生は優しいのですからね。分からない所がある子は、分からない箇所が分からなくなってしまう前に、ちゃんと先生に聞きに来てください」

本条は一気に言い切ると、黒板前の椅子に座って本を読み始めてしまった。ゴールデンウィーク中の課題として出した数学の問題は数が少なかったため、勉強が苦手な美海も（沙織の補助を得まくって）終わらせている。なので、たまたま席が近いということもあって、美海は真っ先にリゼリツタに飛びついた。近づくと、甘いキャラメルのような匂いがした。

「リゼリツタちゃん、私は日向美海だよ！ よろしくね！」

「ひなた、みうみ？ そう、よろしくね、日向」

「あ、できれば美海の方で呼んでくれると嬉しいな」

「苗字の方がいいの？ じゃあそうするわ」

「え？」

「ん？」

いきなり会話に齟齬そごが生じてしまっている。そこに割って入ってきたのは、

「この世界の人は、苗字の後に名前が続くんだよ」

先ほどリゼリツタに声を掛けたハイネだった。薄い色の髪に碧い目の、少しひよる長い少年で、不思議とミステリアスな雰囲気をもとっている彼だが、今はその雰囲気崩れている。

「あら、そうなの。じゃあこの美海は、とってもフレンドリーな子なわけね？」

「そういうこと。にしても、驚いたよ。また会えて嬉しいな」

「私も、とおくつても嬉しいわ、ハイネ？」

「うっ……」

ハイネとソフィーナは同郷の出だが、このリゼリツタも同じである。つまり、3人は共に幼馴染なのだ。そして、リゼリツタは、他人をからかうのが大いに好きな、困った性格の持ち主だった。いわゆる

トラブルメーカーだと言える。

次々と寄ってくるクラスメート達に快く応じているリゼリツタだが、その裏でなにやら品定めするような目つきをしている。きつと、からかい甲斐のある相手を探しているのだろうか。

「……………その様子だと、全く変わらないよう。道理でソフィーナがああなってる訳だ」

「ええ。そういう意味じゃ、貴女も良さそうねえ」

「え!?!」

妖艶な眼差しを向けられた美海は、背筋にゾクツとするものを感じた、とてもではないが、同じ15歳だとは思えないオーラである。体つきも大人っぽいし、全身からフェロモンを振りまいているみたいだ。

と、そこでガタつと椅子を鳴らす音が聞こえた。何かと思つてそこらを見れば、ソフィーナが立ち上がつてこちらへずんずんと歩いてくるところだった。

「ちよ、ちよつと!?! 何美海まで毒牙に掛けようとしてるのよ!?!」

「あら、別にいいじゃない? 彼女だけじゃなく、可愛い女の子がいっぱいいるもの。からかう相手には困らなそうって思っただけよ」

「それをやめなさいって言ってるの! 大体あんたはいつつも他人をからかつてケラケラ笑つて……………趣味が悪いのよ!」

その「趣味が悪い」というソフィーナの発言にカチンと来たのか、リゼリツタも席から立ち上がると、ソフィーナに真正面から対峙した。

「そういえば、最近『理ことわり深ふかきナントカ』とか呼ばれてるみたいねえ、ソフィーナ。成長しているようで何よりだわ。で、言い忘れてたけど」

「何よ」

「……………ごつちの方は、あまり成長がないみたいね?」

リゼリツタは囁くようにそう言うと同時に、ソフィーナの——未発達と言わざるを得ない——胸を、人差し指でなぞった。多少はあるため、人差し指はその先端から1センチほど埋没したが、相手はリゼリツタ。はち切れんばかりのこちらの胸をつついてみれば、恐らく指全体が沈むことだろう。

しかも、なぞつたルートにたまたま——というか絶対に狙ったであろう——彼女の胸の先端があつたらしい。年頃の少女のそれは、なんとも敏感なもので……

「ひゃああっ!?!」

と普段なら絶対に聞けない悲鳴を上げて、顔を真っ赤にしたソフィーナが飛び退いた。その反応が面白かつたらしく、リゼリツタはケラケラと笑っているが、他の皆は赤面気味、中でも男子は目を逸らした。男女比1:9よりも偏っているこの学園はほとんど女子高のようなもので、こういう女子同士の性的なやり取りが時々発生し、その度に男子は肩身の狭い思いをしている。見たいのは山々だが、見ではいけない気がするのだ。

「リ、ゼ……あんたねえ……!」

一方、からかわれたソフィーナはたまつたものではない。まるで猫のようにツインテールを逆立てながら、体から溢れ出た魔力が蜃気楼のように空間を歪ませている。大爆発しそうなのを、辛うじて押さえ込んでいるのか、手足が小刻みに震えている。まさに一触即発。流石の美海ですら、これに触れたいとは思えなかった。

しかし、そんなソフィーナに進んで触れに行く者が1人。言うまでもなくリゼリツタだ。

「ああ、理深き黒魔女様がこんなになつちやつてえ。こーんな暴力的な女は嫌よねえ、ハイネ?」

「え!?!」

リゼリツタは近くにいたハイネの腕を掴むと、それをそのまま自分の胸に抱き寄せた。即ち、その巨大な胸を押し付けた。

「ちよ、リゼ!?!」

「ほらあ、ハイネも、あんなまな板より、こういうおつきなおっぱいの方がいいわよね? 幼馴染だし、使いたければ使ってもいいわよ?」

ハイネも、アルマ兄ほどじゃないけどそれなりに男っぽくなったし……ねえ?」

「!?!」

「ねえ、ハイネはおつきい方が好きよね? どこぞの理深き黒魔女様

みたいなちっこいのよりも、ねえ？」

ハイネが、振りほどきたくても振りほどけない、というより振りほどけなくはないけど振りほどけない、そんな魔性の拘束から逃れられずにいると――

遂に大爆発が起きた。

「ハイネくくくくッ!!!」

「な、なんで俺なの!」

「朝っぱらから、そんな下品なことして……は、破廉恥よ! 成敗するわ!」

「あら、ペチャパイがなんか言ってるわね?」

「あなたのその牛みたいにでっかい乳ごと吹き飛ばしてやりゆ!」

激昂のあまり呂律が回らなくなっている。

しかし、そんな些細な変化以上に、ソフィーナが発している魔力の量がとんでもないことになっていた。当たり前のように、リゼリツタの周りにいたクラスメートが一目散に教室の端へ退避する。そして何よりも凄いのが、この騒ぎのそばにいながら眉一つ動かさない担任・本条であろう。

「――って、なんで逃げさせてくれないの!」

「私とハイネは運命共同体。死ぬときも一緒よ……」

「リゼは兄貴の方が好きじゃなかったっけ!」

「それもそうなんだけどお。なんかハイネがかっこよくなってたから……ようやく再会できたことだし、久々に会う幼馴染の味見もしたいなあって」

「ばっ、おま、そんなこと言ったら……」

眼前の魔力の出力がまた数段上がった。そして、その魔力が、ソフィーナの右手に集まっていく。

彼女のエクシード『グリーンデイ・ハンド』。望む物を右手へと引き寄せる力だ。

「覚悟、しなさいあああい」

怒りが高まりすぎて、いつそ穏やかとも言える声を発するソフィーナは、これぞ魔族、という風貌である。髪の毛は逆立ち、牙を剥き、何

より膨大な魔力を纏っている。

「ソフィーナは右手を前に突き出すと、不思議な言葉を紡ぎだした。  
「アムソット マット ？??? ？??? ？??? ？??? ？??? ？??? ？」  
「ちよ、マジで攻撃あんの!? ここ教室内だよ! 先生!」

「……ここですか? ここはですね、係数もちやんと2乗して……」

「あ、そつか……忘れてた」

「遠藤さんは、ケアレスミスが多いですね」

「うう……気を付け、ます」

「文先生、私の方も」

「少し待ってくださいね古谷さん。すぐに見ますからね」

本条は、宿題で分からない箇所がある生徒に解説をしている最中だった。本条もそうだが、教壇の前で教えてもらっている生徒2人も、この状況にも全く動じていない(その内の1人は樹理だ)。普段から静かで落ち着いている2人であるとは言え、その豪胆さは凄いと思わざるを得なかった。

ソフィーナが唱えたのは、黒の世界にある、汎用魔術語と呼ばれる言葉を使つての魔術。もつともポピュラーな、溜めた魔力を放つ魔術だ。黒の世界出身の者なら、ほぼ全員が知っているだろう。

しかし、その出力が半端ではない。彼女が何を以て『才女』であるのか、クラス中が認識させられていた。

「ね、手伝つてよ」

「やだ、つて言いたいけど、そうしないと死んじゃうかも……」

対するリゼリツタとハイネもまた、全身に魔力を漲らせて魔術を発動させる。

「アムソット マット ？??? ？??? ？??? ？??? ？」  
「リゼリツタとハイネの魔力が、防御壁を作り出した。こちらもかな

りよく知られた魔術である。2人掛かりでようやくソフィーナの出力に対抗できそうな壁が生まれた。後ろに控えるクラスメート全員を守るような防壁だ。

「消し飛ばええええ!」

頭のネジが吹き飛んだかのように奇声を上げたソフィーナの右腕

から、遂に魔力の玉が解き放たれた。リゼリツタとハイネは衝撃に備えてさらに力を込める。荒れ狂う魔力は防御壁に衝突し、そのまませめぎ合いを始め――

「――ッ!?!」

て、いない。衝突するかギリギリとところで、何かに掴まれているかのように前へ進まない。

慌ててソフィーナが後ろを向くと、そこには相変わらず解説を続ける本条の姿があった。生徒のノートと問題集から目も上げていない。何も変わっていないように見えた。

しかし、たつたひとつ変わっているのは、左手の人差し指を上に向かって立てていることだった。そこには小さな魔力の玉があり、その玉がソフィーナの魔力を押しさえ込んでいた。

呪文の詠唱もなければ、これといってアクションがあったわけでもない。それなのに、今彼女は確かにソフィーナの全力を止めている。

「な――!?!」

本条は、目の前の2人に「ちよつと待っててください」と断ると、魔術を使った3人に向かって口を開いた。

「思い切りがよくて結構。3人とも、基礎に忠実です。呪文の詠唱も良好。皆高い魔力を持ちながら、それを上手に活用している。ここ数年で身につけた技術ではありませんね。ちゃんとした指導者に教えてもらっている証拠です」

3人が驚いたのは、青の世界の人間であるはずの本条が、さも当然のように黒の世界の魔術について評価したことだった。その言葉と行為は、攻撃を止められているソフィーナだけでなく、攻撃を受けるはずだったリゼリツタとハイネをも驚愕させている。

本条は3人の方を向くと、立てた人差し指を丸めて親指で押しさえ、デコピンするような仕草をする。すると、小さな魔力の玉が弾け、一瞬空間が揺らいだ――同時にソフィーナの魔力と、リゼリツタとハイネの防壁が、まるで霧のように宙へ掻き消えた。

「しかし、あまり喧嘩はしないように。仲良くしましょう。あと、先生は優しいので黙認しておきますが……アルハゼンさん、エクシードの



行使は原則控えるように」

「は、はい……」

「よろしい。では解説に戻りましょう。ここはですね、古谷さん……生徒たち——特に黒の世界出身——は、一瞬だけ垣間見えた、このよく分からない担任の力量に、背筋を震わせるしかなかった。

……

昼休みに、春樹たち”スカイブルー・エレメンツ”は、講師岸部雄馬に呼び出された。

「決めてくれたか？」

職員室よりも狭い講師室の中。雄馬の単刀直入の質問に、春樹は頷いた。

「はい。俺は出ます。あと、美海と琉花も……だよな？」

「うん！ 私も出ます」

「もちろんよ！」

美海と琉花は威勢のいい返事。だが、忍は……

「拙者は、出場を控えさせて頂<sup>う</sup>いでゴザル」

「あれ、忍は出ないのか？」

「拙者、少し思う所があつて、此度<sup>こたび</sup>は外から試合を見たいと思ったのでゴザルよ」

「なるほどねえ。それも有りか。じゃあ、こつちも希美と沙織だけ出すことにする」

今回、忍は試合を観る側に回りたらしい。それを聞いたとき、春樹たちは大いに驚いたのだが、よく考えてみると悪いことではない。現状、”スカイブルー・エレメンツ”は、戦闘力の多くを忍に負担させている。もちろん、美海のエクシードはかなりのものだし、琉花もそれに負けじと力を付けていつている。だが、エクシードの開放がまだされていない序盤で、戦闘のほとんどを受け負うのは、忍者故<sup>ゆえ</sup>に戦闘経験があり、且つ『忍術』というエクシードに左右されない戦力を持つ忍である。また、先日のバトルでも終盤に上級生であるを圧倒してのけたのも忍だ。

その忍が抜けるということは、即ち大ダメージなわけだが、これを

機に美海や琉花にも序盤の戦闘力を付けてもらうというのは、悪い話ではない。

ということで、忍の不参戦は、チーム内で既に納得されている。当の忍は申し訳なきげな顔だが、今回の意志は硬いようだ。

「ていうことなら、俺が練習相手を見繕ってやる」

と雄馬が言った。それは願ってもない申し出だった。

「そんなことしていただけるんですか？」

「おうよ。ていうか、こないだのバトルが終わってから、お前らの実力を知りたいっていう連中がいてだな。そいつらの相手をしてやってくれないか？ あと、そのくらいなら忍も出るだろう？」

「それは構わないでゴザルよ。して、相手というのは？」

「この学園の卒業生だよ。それなりに手応えはあると思うから、頑張ってくれ」

雄馬はニヤリと笑った。

と、そこに1人の講師が入ってきた。

「ようやく解放された……さて、さつさと昼飯食って……あ、美海。いところろに。ちようど呼ぼうと思ってたんだ」

体育の講師であり、先ほどの騒ぎの渦中にいたハイネの兄、アルマ・カミュオンだ。

「え、私をですか？ なんかしりましたっけ」

「おう。お前のエクシードがな、強すぎて危ないって話」

「はあ……」

気の抜けた声が出たが、なんとなく、今とんでもないことを言われたんじゃないかと美海は思った。

アルマは一度自分の机まで戻ると、何かを持ってきた。燻したシルバーに青い宝玉のついた腕輪だ。

「お、完成してたのか」

と雄馬。純粹に興味があるようだ。皆の視線も腕輪に注がれている。

「そっだよ。はい、これあげる」

「なんですか、これ」

「お前のエクシードを制御する呪具じゅぐ、平たく言えば魔法のアイテムだな」

「魔法！」

「食いつくところ、そこじゃないから。これを嵌めて、力を込めてみ」  
美海は言われたとおりに腕輪を嵌めて、それからうんと力を込めてみた。すると、

「おおっ、なにこれ!？」

腕輪は光と共に、一振りの刺突剣レイピアへと形を変えた。腕輪だった時と同じように、燻し銀に青い宝玉の意匠が凝らされている。

「それはお前のエクシードを制御するのに役立つはずだ。まあ、実際にやってみたほうが早いわな。バトルする時はそれを持っていけ」

「はい！ でも危なくないですか？ こんな刃物……刺さっちゃう……」

美海が恐る恐る剣の先端を指先でツンツンと突ついたりしていると、アルマは微笑んだ。

「そこらへんは抜かりない。それは刺せないし切れない。衝撃として相手にダメージを与える、ブルーミングバトル専用の装備だと思ってくれ。ほら、ここを突き刺そうとしてみな」

そう言つてアルマは手の平を美海へと向けた。その発言にビビった美海は剣を取り落としかけたが、なんとか拾い上げて、これまた恐る恐るアルマの手の平へ剣を突きつけた。そのまま少し押すと、如何にも鋭そうな剣の先は皮膚を突き破ることなく、まるで指で押したかのように手のひらが凹んだ。もう少し押してみると、彼の手が後ろへ下がった。どうやら、彼の言っていることは本当らしい。

「おお……」

「作るの、結構苦労したから壊すなよ？ 戻れつて念じれば腕輪に戻るから、普段から身につけておくのもいいかもな」

美海が剣を腕輪に戻したのを確認すると、アルマは「早いとこ使い方を覚えちまえ」と言つて自分の席へ戻っていった。

「ちようど良かったな。これで少しはマシになるだろ。美海も、ただ風を吹かせてるだけじゃなくて、もっといろんな使い方を考えてみ

な」

雄馬はそう言うと、頑張れ、と小さくウィンクしてみせた。

これで話は終わり——そう思った矢先に、再び講師室の扉が開いた。

「失礼するでございませう」

そう言って入ってきたのは、白の世界出身のアンドロイド、コードΩ33・カレンだった。春樹と同じ、青蘭学園高等部の2年生である。

「あれ、カレン。どうしたの？」

「やはりここでございましたか、春樹」

カレンは鈍い色合いの金髪をした、背の高い少女だ。表情の変化は少なく、言葉遣いも若干おかしいが、基本的には気の良いアンドロイドである。

カレンは雄馬の方を向くと、

「さる筋から春樹がバトルに出ると聞いたのでございませう。そのバトルに、わたくし私も参加させて頂きたいのでございませう」

いきなり過ぎる発言に驚く春樹。だが、カレンと春樹はリンクがでるので、チームメンバーになること自体は可能なのだ。

「え!? ていうかさる筋って誰?」

「それは秘密なのでございませう。春樹、よろしいですか?」

「ま、まあ俺は構わないけど……美海と琉花は?」

「ん? 全然オツケーだよ! よろしくお願ひします、カレン先輩!」

「私も大丈夫だよ。戦闘用アンドロイドだっけ? 頼もしそうじゃない!」

美海と琉花が快く応じてくれ、別に春樹としても異存はないので、一時的にカレンがチームに加わることとなった。

「カレンが追加、ね。了解。じゃあこっちも1人増やすことにするわ」「誰を増やすんですか?」

「まだ決めかねてるかな。まあ、適当にカレンレベルの子を見繕うことにするさ。で、カレンは特訓に来る?」

「特訓? なんのことでございませうか」

後から来たカレンに、卒業生が練習に付き合ってくれる、という話

をすると……。

「うーむ……是非、と言いたいのは山々なのでございますが、その日は先約があるので、不参加とさせていただきます」

「そうか。まあ、それは仕方ないか」

来てくれないのは残念だが、どうしようもないことを考えても意味がないので、とりあえずは目先のことを考えるのが大事だ。

「じゃあ、今日の放課後にコロシウム借りよう。で、美海の剣を試そうか！」

『おー！』

春樹達の元気な様子を見て、雄馬は彼らしい快活な笑みを浮かべた。

……………

1年生のαドライバー3人は、放課後に呼び出しを食らった。

「なんだろう……別に俺ら、何もしてないよな？」

不安げな俊太。

「3人一緒だし、そんなに身構えることじゃないでしょ」

特に気にしていないハイネ。

「ま、大丈夫大丈夫。気楽に行こう」

そして、背の高く、笑顔が板についている樂觀主義の大村早輝<sup>おおむらさき</sup>。人当たりがよく、好かれる性格なのだが、リンク率が前代未聞の0・01%という低さから、自分に合うプログレスを見つけれずに苦労している少年である。

呼び出された先の教室には、3人以外誰もいない。日が傾いて夕日が差し込む教室の中、少々の不安を抱えて談笑すること数分、1人の講師が入っていききた。

「済まないな、呼び出して。何、話すことはちよつとだから」

数学の講師を勤める、城海斗<sup>きつぎかいと</sup>だ。顔つきは30代かそこらに見えるが、ストレスからか若干白髪混じりだ。ノータイのシャツにスラックスを履き、右耳にだけ蒼い星のように煌く宝石のはめ込まれたイヤリングを付けている。まだ15歳の3人でも少し憧れてしまうような、男としての『味』のようなものがある男性だった。

海斗は、手に3枚のプリントを持っていた。それを3人に配る。そのタイトルを見た3人は、呆然とした。

「まあ、言いたいことはそこに書いてある通りなんだ」

そこに書いてあったのは、『規制緩和によるブルーミングバトル出場規制年齢の引き下げ』。

「さて、今月よりαドライバー側の規制が緩和されて、今まで16歳以上じゃないと出場できなかったブルーミングバトルに、15歳以上でも参加できるようになった。つまり、お前たち3人には出場権がある」

海斗はそう言った。3人が呆けてしまったのも無理はない。何せ、ブルーミングバトルに参加できるようになるのは来年からだと思っていたからだ。まだ1年以上ある。だから、気持ちの準備ができる、と。

「直近のブルーミングバトルだと、夏休み中に行われる奴だな。3人には、それに出場してもらうことになるけど……どうかな？」

突然のインパクトに思考が全くまとまらない3人だったが、まず俊太が、

「俺は……出れるなら、出たいです」

「そうか。ちなみに、夏の大会は外部のプログレスを使ってもいいことになってる。ただし、年齢制限は18歳以下だから気をつけろよ」  
「はい」

俊太が、青蘭学園に所属していない妖精2匹——フロリアとルビーだ——と親しいことを知っていたのだろうか。海斗は前もってそう言った。これは俊太にとつて、願っても見ない幸運だった。これで、現状俊太と相性の良いプログレス3人が出場できるようになる。先日の、春樹と冬吾のブルーミングバトルは、彼の心を大きく揺らしていた。

俺もあの舞台に立ってみたい、と。

「俺は……俺も、出ます」

続いてハイネも同意した。相性の良いプログレスとして、ソフィーナがいる。これ以上プログレスが見つからなければ最悪1人で戦う

事になるが、それもいいとハイネは思う。彼は黒の世界出身ながら、既にこの世界で3年間生きているため、ブルーミングバトルを何度も見てきた。そして、その中にいたのだ。αドライバーとプログレスが1人ずつというチームが。その2人がバトルに勝つところを見た、その記憶が今でも残っている。

しかし、早輝は――

「俺は……すいません。リンクできるプログレスが見つからないので、今のところは辞退します」

「まあ、それは仕方ないだろうな……」

海斗も表情を澁らせる。実際、リンク率0.01%という数値は教務課の中で驚きと共に駆け巡った。

早輝は、この件を気にしないようにしている。だが、目の前の事実として、参加できるαドライバーと、できない自分を突きつけられると、反射的に表情が暗くなってしまふ。それは仕方のないことだった。いかに大人びているとは言え、まだ15歳なのだから。

ただ、早輝を見る海斗の目に、『哀れみ』が混じっていないのは気が楽だった。教師の誰もが、彼を哀れまないのは、彼としても嬉しいことだった。可哀想、と言われるのは好きではない。

「ま、なんかの拍子にひよっこり見つかるかも知れないし、そしたら……」

「はい。その時は是非参戦したいです」

早輝はそう言って笑った。しかし、その奇跡を信じているようには、まるで見えなかった。

### 第3話 「会長殿は仕方ないな」

約束の日。第一コロシウムについた時には、既に1人の女性がフィールドの中で佇んでいた。

「おひさ、春樹くん！」

「朝子先輩！ ご無沙汰してます」

「ご無沙汰って……春樹くん、成長したねー。この前のバトルみてびっくりしちゃったよ」

「先輩、なんだか親戚のおばちゃんみたいになってますよ……にしても、練習相手って、朝子先輩のことだったんですね」

「ま、半分アタリかな」

背の高い女性は、陽光を浴びて煌く髪を大雑把にポニーテールに結い上げていた。

名前は、成瀬朝子なるせあさこという。すらりと背が高く、声は落ち着いたアルト声。まだ5月だというのに、着ているものは半袖のTシャツと膝丈の短パン。さらに流麗な足をソックスとスポーツシューズで飾る彼女は、一見で《ボーイッシュ》だと理解できる。実際に彼女は気さくで姉御肌な性格であり、始めて見た美海も、なんとなく憧れてしまうような魅力に若干呑まれている。

「ども、成瀬朝子です。この前のブルーミングバトル見て、ちよつと興奮しちゃって雄馬くんに頼み込んだ。ゴメンネ、付き合わせちゃって。3人のことはバトル見たから知ってるけど、そっちの子は……」

と視線の先には、兎莉子。確かにチームの一員でありながらバトルに参加しない彼女の存在は、知られていなくてもおかしくない。

「あつ！ あの、私、生嶋兎莉子といいます！ バトルはできないけど、一応チームに……」

「ああ、サポートメンバーね。そういう子がいるチームって強いよね。よろしく、兎莉子ちゃん。他の3人も——えっと、君が美海ちゃんで、君が琉花ちゃん、で、貴女が忍ちゃんね。よろしく」

ひとりひとり握手して回る朝子に、率先して美海が、



「あの、春樹さんと成瀬さん？　って、一体どういう関係なんですか？」

「あー、朝子でいいよ。苗字呼びってあんま好きじゃないし。で、春樹くんとの関係っていうのはね……初めての……」

「え!？」

「そんな思わせぶりなこと言わないでくださいよ。俺がここに入学したとき、生徒会で副会長やった人だよ。それで、いろいろお世話になったんだ」

「あ、じゃあ、卒業生なんですか？」

「そゆこと。今は20歳で、青蘭大学に通ってるわ」

そう言うと、彼女は親しみを込めてパチンとウインクしてみせた。タイプのには、琉花に似ている人だ。その琉花は、何やら親近感的な物を感じているのか、心が踊っているように見える。

「で、さっきの『半分アタリ』ってどういう意味ですか？」

春樹が疑問を投げかけると、朝子は「あー」と頭を掻いた。

「いやさ、我らが会長殿も来てるんだけど、なんか用事があるとか言っ  
て剣道場の方に行っちゃって。確かにこの時間には来るって言っ  
ただけけど……あ、やっと来たっほいね」

朝子がコロシアムの入口に視線を投げた。釣られて全員がそちらを向く。すると、1人の長髪の女性が駆けてきていた。

「ごめんなさい〜！　ちよつと遅れちゃった!」

「こら、時間を守れないとカツコ悪いよ」

「だって、すぐく見込みのある子がいたものだから、つい熱が入っ  
ちやって」

女性は袖をまくった薄い水色のワイシャツにスラックスという、男性のような格好をしている。朝子ほどではないが、清らかな水が流れるような体躯だ。走ってきたのだろうか、肩で息をしているが、その瞳には強い意志の光が宿っている。

「半分って、会長だったんですね。お久しぶりです」

「あ、あら。お久しぶりね春樹くん。こないだのバトル見させてもらったわ。とっても素晴らしいバトルでした。で、半分ってなあに

？」

「いや、朝子先輩が……」

「ああ、そういうこと。遅れてごめんなさいね。あ、あともう私は会長じゃないのよ？」

女性は腰から、木刀をぶら下げていた。それもただの木刀ではない。春樹たちは知らないが、その木刀はある特殊な神木からできている。唯一その危険性を見極めていたのは——やはり忍だった。目を細めて木刀を見ている。

そして、反対側の腰には、縦長のケースのようなものが吊るされている。

「あ、あの、あなたは……？」

（美海たち4人に見れば）謎の美女の登場に困惑する中、やはり最初に口を開いた美海が控えめに問いかけると、女性は、「あ、ごめんなさい！」と4人に向き直った。

「私、3年前にこの青蘭学園で生徒会長をやりましたが、蒼月紗夜そうげつさやっていいいます。よろしくね」

……………

フィールドに立つ、美海、琉花、忍。そして、向こうには紗夜と朝子が立っている。こちらは3人、向こうは2人。人数的なアドバンテージはこちらにある。

現在、バトルフィールドは特殊な状態にある。春樹は3人とリンクしているのだが、紗夜と朝子は『トークン』と呼ばれる擬似脳波とリンクしている。これは、リンク率測定テストで使う「αドライバ」の平均的なフレイム脳波」とほぼ同じものだ。リンクしやすいのだが、相性の良いαドライバに勝るといふことはまずない。つまるところ、リンクやエクシードの開放に制限が掛かっているようなものだ。

加えて、春樹はオペレータールームにいる雄馬の手配によって、痛覚フィードバック率が0%になっている。曰く、ブルーミングバトル・オペレーターティングシステム——通称『B B O S』の機能の内にダメージ・コンデンサー『痛覚変換器』というものがあり、通常のブルーミングバトルはそれ

によって痛覚フィードバック率を上げたり下げたりしているのだが、今はそれを0%にしているのだ。その代わりに『ダメージカウンター』——ある一定量のダメージをプログレスが受けるとカウントが1上昇して、それが上限に達すると敗北するシステム——を設置。向こうの上限は4で、こちらは8である。単純に向こうはこちらの半分しかダメージを受けられない（ちなみにこのシステムは、春樹たちが参加しようとしているブルーミングバトル大会でも採用されている）。

最後に、こちらのリンクレベル上限が無いのに対し、向こうは3。強いて言うなら、向こうはαドライバーのような、αデータパッドを操作する人物がいなかったため、セカンドリンクとαリンクが不可。即ち、レベル上昇速度を上げることも、更なるエクシードの開放もできない。

端的に言えば——ハンデというハンデを貰い尽くしている状態だ。とはいえ、これはトレーニングなので、これらの要素全てが活きるには限らない。

しかし、  
「まあトレーニングってことだし、あんまり堅苦しくなくていいよね。気軽に行きましよう」

紗夜は気さくにそう言うと、「誰からやろうか？」などと喋りだした。美海たちが悩んでいると……

「じゃあ……個人的に気になる子、からでいいかな。君」

そう言つて紗夜が指さしたのは、忍だった。

「拙者でゴザルか？」

「うん。バトル見ても、動きが良かったし、何より——」

紗夜は僅かに口の端を釣り上げると、腰の木刀を叩いてみせた。

「気付いてるでしょう？ 素晴らしいわ」

「お見通しというわけでゴザルな。承ったでゴザル」

紗夜の申し出を了解した忍は、数歩前に歩み出て苦無くぬいと呪符じゆふを構えてみせた。

対する紗夜は前に歩み出ただけで、何もしない。それを訝あやしんだ忍

が尋ねる。

「それは、使わないのでゴザルか？」

「それは、君たち次第かな」

その返答に、忍は不敵な笑みを浮かべた。それを見た紗夜は、肩をすくめるだけ。

「そうだ。美海ちゃんと琉花ちゃんは、好きなタイミングで入ってきていいからね」

その発言に、美海と琉花は驚愕する。ただでさえ不利な状態——人数的にも力量的にも——なのに、この上『タイミング』というイニシアチブまで譲るのか。はつきり言って、正気を疑った。

「私は？」

「まあ、タイミングを見て。できれば入ってこないで」

「それじゃ、私何のために来たのさ」

「じゃあこうしましょう。私がこれを抜いたら入ってきて」

「会長殿は仕方ないな——」

朝子が紗夜に文句を垂れているのを見ながら、忍は緊張感を高めていく。元生徒会長のこの女性は、一体どれほどできるのか……。

「さあ、始めましょう。かかっておいで」

にこやかな笑顔を伴った紗夜の言葉により、試合、もといトレーニング開始。

忍はまず、自信満々なその鼻面をへし折るために、

「早速行くでゴザルよ！ 春樹殿、セカンドリンクを頼むでゴザル！」

「了解！」

火遁の術で炎を起こし、エクシードでそれを操作。火炎の玉にして紗夜にぶつける。最初はエクシードレベルが低いため小手調べ程度だが、火遁の術の威力そのものはエクシードに左右されない。火炎の玉にしきれない分は、忍術で制御。残らず紗夜へと放つ。

それに対峙する紗夜は——なんと、動かない。相変わらず、木刀も抜かない。どころか、手を掛けることすらない。どうするつもりだと訝しむ。

一瞬、蜃気楼が立ち昇るかのように、空間が歪んだ。

「？」

一言。しかし、その一言で紗夜の体から澄んだ霊力が迸り、炎を消し飛ばした。

紗夜が使用したのは、仏教における種子真言。静を尊び厄災を払う、月光菩薩の種子真言だ。

炎が消し飛ばされる光景に、忍自身はもちろん、美海と琉花、そして春樹も驚愕する。なぜ言葉ひとつでこうなったか、その理由が分からない。だが、驚いてばかりではいけない。

「なら、次は！」

時間経過で忍のレベルが上昇。先ほどよりも、より多くの炎を操れるようになる。再び火炎の玉を、今度は2倍ほどの大ききで放つ。

だが、『知らない』ということとは、不利であることに他ならないのだ。「？」

種子を唱える紗夜。先ほどと全く変わらないあつけなさで火炎は消し飛ばされた。

単騎で攻め入るという手段はもちろんあるのだが、今の高圧の霊力を見る限り、果たして近づかせてもらえるかどうか分からない。なによりも、自分の磨き上げたエクシードと忍術が通じない。その事実にならなく慌てた忍は、たまらず背後に控える2人にアイコンタクトを送る。

参戦しろ、と。

2人はそれを理解し、また春樹もその動きを鋭敏に感じ取った。レベルが上昇しきった忍とのセカンドリンクを切り、美海と琉花に分配。戦力を平均的に上げにかかる。なによりも、向こうから攻めて来なさそうなのが救いだっただ。

レベルが最大まで上がった忍は、いよいよ形振り構っていられない。苦無で左の手の平を薄く裂き、苦無をその左手に持ち替えて投擲。当然避けられてしまうが、その隙に滲んだ血液を呪符に塗りつける。ここまでは、先日、ユーフィリア相手に行った戦法のままだ。

——しかし、紗夜殿は我々のバトルを見ておられる。となれば、この時点で先日の作戦は通じないと思っただけで良いでござろう。さて……。

しかし、今回はまだ美海と琉花がいる。今回選んだ呪符は、忍と相性の良い火行符ではなく、琉花と相性の良い水行符、そして美海と相性が良い金行符（忍の扱う忍術は陰陽五行説に基づいており、それによれば、風は金気を帯びると云われている）もある。

密かに話し合い、練習していた連携技。あとはこれらを組み立てるだけだ。

美海のブレスレットが彼女の意志に応じて細身のレイピアに変化する。同時に、彼女が空気を集めて風を纏った。その横で、忍は水遁の術で水の塊を生成し、琉花に制御を渡す。これで、全員が万全に戦える状態が揃った。

先手を取るの、やはり忍。彼女の忍法『フレア！・シヤワー炎星流河』で攻撃と攪乱かくらんを同時に行い、その対処に追われている隙に美海と琉花がさらに攻撃を加える。

「せいれきつて星礫集いて大河と成せ！ 忍法・フレア！・シヤワー炎星流河！」

忍の放った呪符が白熱した幾つもの小さな球体へと変化し、それが彗星の如く紗夜の元へ殺到する。攻撃力があるだけでなく、視覚的な派手さから攪乱性能もあるこの術で、まずは流れを掴む。

その作戦は、相手が同じ高校生だったならば、非常に効果的に働いただろう。

そして、紗夜は――

ふ、と鋭く息を吐くと、胸の前で両手の指を絡ませ、手印を結んだ。両手の指を丸めて互い違いに組み合わせ、中指だけを立てる。

「ノウマクNamah サマsamanta | ボダナbuddhanam  
ヴァルナvarunaya ソワカsvaha」

流れるように唱えられたのは、インド神話における水神ヴァルナの真言マントラ。その言と共に紗夜の体から発せられた靈気が水に転化される。たちまち水は渦巻く水流の盾となって忍の術を打ち消した。陰陽五行における、五行相克そうごく。水気は火気を克こくする。

それどころか、彼女が結んだ手印を解き、両手の平を前へ突き出すと、水流は荒波となって美海たち3人の方へと押し流されていった。それだけなら、まだなんとかなった。美海は風を操って上空へと逃

げた。忍は結界を張ってやり過ぎした。琉花は水を操れるので、上手く逸らしてくれるだろう。しかし、予想外だったのは――

「っ！ 琉花殿?！」

琉花が反応してしまっていた。襲いかかってきたのが、自分の操ることのできる水だったからだ。逸らすだけでは足りない、とその目が物語っている。

「なんの、これくらい!」

そして、なんと琉花は、その大質量の水を操ってみせた。荒波は勢いを失い、押し止められ、琉花の支配下に置かれる。

しかし、足並みが崩れた。作戦通りに動くことよりも目先の攻撃を優先してしまった、その隙を逃すような紗夜ではない。その作戦を完璧に崩すために、更なる一手を打つ。

木刀の反対側に吊るされた、縦長のケースの蓋を指で弾いて開けると、そこには忍のものと同じような呪符が入っている。その中から見ることもなく一枚抜き出した。忍だけが理解できた。木行符。

——マズイ!

と忍が思ったのとほぼ同時に、紗夜は木行符を地面に叩きつけ、霊力を注ぎ込んだ。

『地を這い巡り、天へ枝葉伸ばし捕えよ』

琉花が操っている大量の水は、彼女の支配下に置かれているとは言え元を正せば紗夜の霊気。つまり、

「な、何?！」

人工芝であるはずの地面から、大量の水を吸い上げ一瞬で樹木が生える。その枝が、まるで意思を持つかのように琉花を縛り上げた。今度は五行相生。水気は木気へと生ずる。

1人捕らえられた。となると、作戦を放棄せざるを得ない。

「美海殿! 琉花殿を!」

「任せて!」

忍の指示を受けて空中でターンした美海は、刺突剣を構えて琉花の元へ向かった。その選択肢は正しい。五行説においては、金克木――金気は木気を相克する。なので、風、即ち金気は、現在琉花が捕らわ

れている木気を祓いやすい。忍も、恐らくそれを読んで美海に任せたのだろう。

そして、その金気を克するのは火気。火気は忍のエクシードで操ることが出来るので、もし美海の行動を阻害されそうになっても、火気での攻撃なら忍が抑えることが出来る。咄嗟の判断だが、定石に則った良い盤面構築だと言えるだろう。

(さて……どうしようかな)

紗夜は考える。木刀を抜けば、正直どうとでもなる場面だが、逆に、木刀を抜かなければならないような場面だとも言える。

(悪手だったかな？ 複雑な盤面だったのを、私が一手指したことで、結果的に明確な答えを出してしまった)

しかし、それは、こちらの対応策もより明確になったことでもあった。当然ながら、3人を相手にするよりかは1人の方がいいに決まっている。

それに……これはあくまで訓練。ならば、答えは難しすぎない方がいい。

まずは忍を止める。そのために、ようやく紗夜は足を踏み出した。同時に、両腕を伸ばして両手の指を組み合わせ、術式を念じる。すると、組み合わされた手を覆うように、球形の魔法陣が発生した。紗夜が手を離すと、球は真つ二つに割れてそれぞれの手の動きに付き添う形になる。両手に小さな盾を持っているかのようだ。見方を変えれば、ボクシンググローブを付けているようにも。

「それは……？」

「ちよつとした魔術よ」

「拙者と近接でやり合うつもりでゴザルか？」

「大丈夫。多分、退屈しないから」

至近距離まで接近してきた紗夜に対抗する忍。まず拳を一発放つたが、それは紗夜の右手の魔術の半球にブロックされた。途端に、忍の突き出した拳が、予想よりもはるかに大きく弾き返された。あの球には、攻撃を大きく跳ね返す力があるらしい。忍は反射によつて崩された体勢を元に戻しながら、注意して攻撃せねば、と自分に言い聞か



せる。

驚いたことに、それ以降は攻撃が当たらなくなった。紗夜の素早い身のこなしもそうだが、何よりも攻撃を先読みされている。いや、先読みというより、誘導されている、と言ったほうが正しい。彼女の両手にある魔術の半球の存在のせいで、そこを迂闊に攻撃できない。攻撃できる部分が限定されてしまうのだ。そして、彼女からしてみれば、攻撃の飛んでくる位置を限定したため、どこに攻撃が来るか予想しやすい。

最初の一撃を防いだことにより、忍の思考を制御し、この戦闘のインシアチブを握る。それは単なる戦闘のセンスだけではなく、彼女の頭が良いということを示していた。

何よりも恐ろしいのは、紗夜がまだ攻撃していないことだ。

「そろそろ反撃するね」

「クツ!？」

紗夜の両手の動きに付き添う魔術の半球が、その様相を少し変えた。半球の裾、つまり切断面が伸び広がり、それこそ丸盾のような形になる。

そして、その拳が突き出された。

(速い——!?)

素早い攻撃の数々に、忍は避けるだけで精一杯だ。ガードしたら、あの魔術のせいで大きく吹き飛ばされてしまうため、反撃の考えを頭に残しながらも、避ける。本能的に理解できたことは、まだ彼女はこれでも手加減している、ということだった。木刀も使っていないし、やろうと思えば反撃できそうな隙がある。しかし、彼女は必ず片方の手をフリーな状態にしている。そこに罠があると考えられるだけの知識は忍も持っていた。だからこそ、余計に反撃できない。反撃したいが、していいのかわからない。反撃しなければならぬが、防がれた時のデメリットが大きい。

だが、反撃の手段が無いわけではない。忍にはエクシードがある。こちらの手印を結んで両手に炎を発生させ、腕の動きとは異なる動きをさせて反撃を行う。紗夜がコントロールしているのはあくまで忍

自身の攻撃だけ。これなら防ぎにくいはずだ——が、  
「？」<sup>ア</sup>」

その一言で、紗夜の体から霊気が噴出し、忍の炎が吹き消されてしまった。またもや種子真言。今度は動なる光にて闇を祓う日光菩薩の種子だ。先ほどの月光菩薩とは対を成す存在である。

エクシードがまるで通用しない。これはあまりにもやりにくい相手だ。

だが、こちらにはもう一手ある。先ほど投げた苦無が。

「千鎖繰り疾く吹き閉じよ！ 忍法・炎鎖戒牢！」  
せんさくく と ふ と 忍法・炎鎖戒牢！

紗夜の背後、地面に突き刺さった苦無から赤い鎖が伸び、彼女を拘束せんと殺到する。鎖の対処を優先すれば忍が、忍に気を取られたままでは鎖が、それぞれ紗夜を襲う。

——どうだ!?

答えは、簡単だった。

『伸びよ』

唱えたのは、たった一言。しかし、その一言に反応するものがあつた。

先ほど紗夜が地面に叩きつけた木行符だ。放つたらかしになつていたそれが、紗夜の言葉を受けて再び術式を発動させる。木行符の置かれた場所から、瞬く間に樹木が生えた。その場所は、苦無と紗夜を結ぶ直線上——つまり、鎖が飛んでくるルートの真上。

絶妙なタイミングで現れた障害物にぶち当たった鎖は、もちろんそれを雁字搦めに縛り上げた。その木気を吸い上げた火気を纏う鎖は、瞬く間に呪符ごと樹木を炎上させたが、それだけ。当然、紗夜には届いていない。

「いいタイミングだったね。ちよつと焦っちゃった」

その言葉とは裏腹に、紗夜に慌てた様子は微塵も無い。忍が苦無を紗夜の背後に配置した瞬間から、この展開を読まれていたのだ。

しかし——やるべきことはやった。なぜなら、忍が紗夜の攻撃を避け続ける事によって——

「よし、やつと切れた！」

背後から美海の声。琉花を樹木の束縛から解放できたようだ。そのため時間を稼げたと考えれば、悪い交換ではなかったはずだ。未だダメージというダメージは貰っていないし、何より、体術で自分を圧倒してのける相手と闘えたのは大きな経験だ。

忍は、その中でも飛んできた攻撃の一つを、敢<sup>あ</sup>えて交差した両腕で受ける。やはり魔術によって体全体が大きく吹き飛ばされたが、逆にその勢いを利用して一気に後退、美海と琉花の元まで戻った。

「……一筋縄ではいかないでゴザルな」

「どうしよう……」

「真正面から突つかかっても、ダメだろうね……」

突破口が見えない。3人で同時に、という作戦も、もはや通用するのだろうか分からない。

そこに、紗夜が声を掛けた。

「忍ちゃんの大体の実力は分かったわ。鍛え甲斐があるけど、それはちよつと後にしましょう。だから、次は美海ちゃんと琉花ちゃんにかけておいで」

そう、これはあくまでも練習、トレーニング。勝ち負けというより、美海たちの実力を伸ばす方が先決だ。そして、紗夜が「2人で掛かってこい」と言った以上、「スカイブルー・エレメンツ」の作戦は失敗に終わってしまったのだ。

「さ、2人の出番でゴザルよ。拙者、少し疲れたでゴザル」

未だ血の滲む左手の平に簡単な治癒術をかけながら忍は後ろへ退いた。結局、用意した呪符もほとんど役に立たなかった。これからは、2人にも術を扱えるようになってもらうべきか、と思索する。

忍と入れ替わるように前へ出た美海と琉花は、今の戦闘を見ていたため、正直相手になるかどうか不安だった。特に琉花は、その絡め手を直接食らっているため、余計に出方が分からない。

そこで紗夜が、

「どうせなら、1人ずつやる？ そっちの方が簡単でしょう」

との提案。確かにそちらの方が、銜<sup>てら</sup>いなくエクシードを<sup>てら</sup>使えるため（美海のエクシードは特に仲間まで巻き込む可能性が高い）、その提案

を飲むことにした。

「どつちから行こうか」

「私からでいいかな?」

「うん、分かった」

少ない言葉で相談して、琉花が前に出た。まずは春樹に頼んでαリンクを繋げてもらう。もう一度忍に頼んで水を用意してもらい、それを操ってヴェールのように体の周りに纏わせた。同時に、腰のホルスターからリボルバー銃みずでつぼうを抜き、纏った水の一部をそこに入れる。これで装填完了だ。

一方の紗夜は、

「1人ずつって事になったから、朝子は忍ちゃんにアドバイスしてあげて」

「なんか、こーなる予感はしてたんだけどねー。りよーかいりよーか」と

フィールドに座っていた朝子は、よいしょと立ち上がると、忍の方へ歩いて行った。

「さて、こちらは準備完了。いいかしら?」

「はい。お願いします!」

「元気がいいのは武器ね。さ、始めましょう。おいで」

紗夜の掛け声と同時に琉花は纏っていた水のヴェールを地面へと流し、自分もその水流に乗る。バトル中、対セニア戦で見せた戦法。ウォータースライダーに乗っているかのように高速且つ不規則な軌道で動き回り、水の弾丸を浴びせる戦い方だ。

その戦い方も、紗夜は既に見ている。だから、はつきり言って1発目が来るよりも前に止めることはできた。先ほどと同じように、木行符を放って水気を木気へ相生してやれば良いのだ。そして、紗夜にはそれを可能にするだけの实力がある。

だが、流石にそれでは彼女の实力の底を見ることはできない。なので、それは後回しにして、別の方法を取る。

降り注ぐ水の弾丸を軽々と避けながら、

「大丈夫? それ、持ちは悪そうだよ?」

「う……」

凶星だった。この戦い方は、多くの水を大きく動かし続けるため、体力の消耗が非常に激しいのだ。だが、まるで攻撃が当たらないからといって、諦めるわけにもいかない。

『点』で駄目なら、『面』で制圧する。

「なら、これは！」

琉花は攻撃の最中、位置が地面に近くなった時、突然地面に転がって着地した。それを合図に、今まで不規則な形を描いていた水の動きが変化し、彼女の前に防壁を築くような形を取った。

「さっきのお返しだよ！」

そして、それをそのまま紗夜に向かって勢いよく流す。荒々しく暴れさせつつも辛うじて制御は離さず、避けようとする紗夜を追尾させながら、水の防壁は大波と化して襲いかかる。

それに対して、紗夜は。

「うん、『揺らぎ』は大事。同じことをし続けて相手が優勢なら、それは相手にとって有利な状況であるということ。だから無理にでも行動を変えなければならぬ——そこは、抑えているみたいね」

そう評価しながら、不思議な姿勢を取った。両手の指を曲げて、まるで子供がライオンの真似をする時のような手をする。そのまま右手を左に、左手を上、それぞれ持っていた。紗夜の顔が一部、腕で隠れる。

（何をやる気——？）

紗夜は体の左側に構えた右手を一気に右側へ振り抜き、次いで上に構えた左手を下へと振る。これまた子供が『引つかき攻撃』でもするかのように。

だが、それは攻撃ではなかった。右手の五本指と、左手の親指を除く4本指が光の跡を残し、紗夜の前に格子状の軌跡を描いた。

そして、波がぶつかるその瞬間、光の格子がより一層強く輝き、水の侵攻を防いだ。波は岩肌にぶつかって砕ける時と同じく、派手に飛沫を上げて弾き返された。

早九字護身法。本来はこの格子を、刀印——人差し指と中指を伸ば

し、残りの三指を閉じる——を結び、呪文を唱えながら一本ずつ切らねばならないのだが、その過程を大きくスキップすることによって、出力の高さを放棄して即席での発動に特化した、紗夜なりのアレンジを加えた術である。

それを見ていた琉花はもちろん、この場で一番驚いたのは忍だろう。

「結局、ダメージカウンターとか意味なくなっちゃったね」

「あの術は……」

「ハハ、あれすごいよね。修得しきつたのは最近なんだけどき、あれが攻撃を弾くのなんのって」

「一体どれだけ幅広い呪術を学んでいるのでゴザルか」

「あれ、本人は使えるものを学んで使ってるだけみたいだよ？ ま、忍ちゃんの言うとおり幅広くやつてるから、対処しづらいんだけどね」隣で忍の背中を撫でている朝子が笑いながら言った。忍にとっては笑い事ではないのだが。

忍も早九字は知っているが、ここまで簡略化させたものは見たことがない。格子を描く過程を短縮しているだけではなく、呪文の詠唱すらない。これでまともに術が発動し、あの攻撃が防げるのなら、まず琉花に勝ち目はないだろう。当たり前だが、あれを忍が見よう見まねで再現してみようとしたところで、全く使えないのは目に見えている。

——我ながら、とんでもないと相手をしてるでゴザルな……これが生徒会長の実力でゴザルか……。

生徒会長など、ただの学生の長である、という考え方は捨てたほうがいいのかもしれない。実力があるから支持される、というのは、ある意味当たり前なのだから。

——でも、純粹に選挙で決まってるなら、とんだ脳筋生徒たちもいたもんでゴザルな。

「……紗夜殿は、学生時代も強かったのでゴザルか？」

「え？ うーん……どうだろ。少なくとも、あんなに余裕<sup>しやくしやく</sup>綽々で構えてられるようなキャラじゃなかったなあ。あーでも、紗夜自身は弱

かった気がするわ。呪術を学び始めたのも高二か高三の頃だったし。それに、紗夜のエクシードって直接は戦闘に役立たないんだよね」  
「え!？」

「でも、どんなバトルでも、必死で闘ってたよ。まあ、それは今もなんだけど。多分、内側に隠すのが上手くなっただけなんじゃない?」

朝子は特に気にした様子もなく言っているが、忍はそのことを全く失念していた。紗夜は、まだエクシードを使っていない。そして、戦闘向きではないエクシードを持ちながら、彼女は生徒会長になったのだとすれば、それはやはり彼女自身の人望に他ならないと言える。

——今の生徒会長は、どうなんでござろうな?」

と忍は、入学式挨拶の時に見た現生徒会長の優しげな笑みを思い出しながら、そんなことを思った。その眼前では、力を使いすぎた琉花がへたりこんでいる。そこに駆け寄る美海。

「琉花ちゃん! 大丈夫?」

「ん? あ、あははー……ちよつとやりすぎちったかも」

軽い口調でそう言ってはみるが、その「やりすぎ」た結果、全く話にならなかつたのだから、我ながら度し難いと琉花は思う。さつき樹木に捕らえられた時、脱出のために大きく消耗していなければ、もう少し闘えたかもしれないのが悔やまれた。

そして、最後。美海の番だ。

「じゃあ最後は美海ちゃんね」

「よ、よろしくお願いします!」

「ごちらくそよろしくね」

にこやかな笑顔に一瞬ドキツとしながらも、エクシードを操作して風を纏う美海。練習する機会はあまりなかったが、この刺突<sup>レイビエ</sup>剣型エクシード制御装置の使い方も、少しずつものにし始めていた。剣を包むように風を集め、その範囲を広げて自分も包みこむ。いつものように体を浮かせると、紗夜は感心したような表情を浮かべた。

「それ、地味ながら素晴らしいよね。自前のエクシードで空中戦できるなんて、朝子といい勝負」

「朝子先輩も飛べるんですか?」

「うーん、「飛べる」っていうか「跳ぶ」んだけど……まあいいや。あとで見せてもらいましょう。おいで」

美海はニュアンスの違いを上手く読み取れなかったが、自分のものとは違うらしいということは分かった。

それよりも今は紗夜に一撃入れることを考えなければ。

「行きますー！」

掛け声と共に剣を突き出し、紗夜に向かって暴風を起こす。前回のバトルの最初に行った、相手を吹き飛ばす作戦。その制御も、剣がなかった頃に比べれば簡単だ。

「これは……出し惜しみとかしてられないわね」

紗夜はそう呟くと、遂に腰の木刀を抜いて、地面に突き刺した。それを支柱に暴風に耐えるつもりだ。こうなってしまうとどうしようもない、というのは前回のバトルで学習した。

結局のところ、美海のパトルにおけるアドバンテージは、高い機動力にある。こういう戦法はあくまで「できるだけ」であり、それだけにするのは勿体無い、と前回のバトルの後に話し合ったのだ。

だから美海は、不意に風を止ませる。直後、紗夜へと突進するように風を吹かせ、その勢いで剣を振るう。当然攻撃は木刀の一閃に防がれたが、美海はその勢いのまま一気に紗夜の下から離脱した。

風の勢いを利用したヒットアンドアウェイ。高所から落下する際のエネルギーまで攻撃に利用するため、一撃一撃が重くなる、ここ数日で考え出した戦法だ。

対する紗夜は、少し表情をしかめた。美海の攻撃が重かったから――ではなく、別のところに注目しているようだ。

(エクシードを操りきれない……?)

実際に今の攻撃は見事だった。空中という、こちらの手が届きにくい場所から一発当ててまた空中へ逃げる。琉花のものと同じく持ち手は悪そうだし、まだまだ攻撃に関してまだ甘い点も多いが、よく考えられていると思う。突き詰めれば、強力な戦法のひとつになるのは間違いない。

だが、それはそれとして、美海のエクシードの不安定さが紗夜を目



を引いた。まるで、暴れ馬に重い足枷を付けて無理やり走らせているかのようだ。剣がエクシードを制御するものだとは分かったものの、それでも尚安定しているとは言い難い。

——どうということ？

紗夜が疑問を抱いていることなど知りもせず、美海が第2撃を放つ。それも木刀で受け流しながら、言い知れぬマズさのようなものを感じた。

美海は、自分の戦法が上手く行っていることを知りながら、それでも後一步、届かぬもどかしさを胸に抱えている。

(もつと速ければ、あのガードを崩せるかも)

しかし、その一步が遠い。制御装置に意識を向けるが、レベル4ではここが限界なのだろうか。

——いや、そんなはずない！ バトルの時は、もつと速かった！

しかし、攻撃を繰り返す度に、そのもどかしさは募<sup>つ</sup>っていくばかりだ。もつと速く。もつと強く。そうすれば、紗夜にようやく一撃入れることができるのに。

5発目の攻撃が終わって再び空中に戻ってきた時、美海の息は切れ始めていた。持ってあと1発。それ以降は、体を浮かせていられる自信がない。

(最後の1発くらい、当ててやる!!)

美海はそう強く念じた。

不意に、風がざわり、と騒いだ。

美海は気づかない。寧ろ、美海の戦意に風まで猛<sup>た</sup>つたのかと興奮して、今までよりも速く、紗夜へ突撃する。

目の前で、紗夜の表情が「マズイ」とでも言うかのように歪んだ。

——これなら、当たる。あの防御を崩せる！

しかし、違った。「マズイ」のは自分だったのだ。天から降り注ぐ矢のように紗夜へ突撃し、剣を振るう。紗夜も木刀を構え、振るった。2つの剣が6回目の衝突を——

「!?!」

起こさない。木刀が、紗夜の体が、透けた。

同時に、自分がとんでもない状態に陥っていることに気付く。このまま進めば、地面に激突するのだ。

もちろん、地面に激突するのは織り込み済みだ。風を操作して、上手いこと軟着陸すればよい。美海はその経験が数回あったため、同じように風を操って、

「マズイ」のは自分だったのだ。

地面へ激突した。

「ぐ、ああ」

そのままゴロゴロと地面を転がり、バトルフィールドの端でようやく止まった。全身が痛いはずだが、リンクの影響で痛く感じないのが恐ろしかった。これがバトルなら、全部春樹のところへ行っているはずなのだから。

と思つたら、リンクが切れたのか、美海の体に痛覚が戻ってきた。やっぱり、全身が痛かった。

それよりも。

——ど、どうして……!?

風が、言うことを聞かなかった。確かに軟着陸できるように操つたはずなのに、勢いづいた風は美海をそのまま地面へぶつけたのだ。

「美海ちゃん、大丈夫!？」

紗夜が駆け寄って来た。美海はなんとか体を起こしながら、「あはは、失敗しちゃいました……」と微笑んでみせた。

「でもなんで紗夜先輩、透けて……?？」

そこが疑問だったので聞いてみると、紗夜は微笑んで言った。

「私のエクシードは、光を操るエクシード。さっきのは、光で作り出した幻影よ」

「な、なるほど……」

「やろうと思えば、貴女の視界を歪めて墜落させることも、多分できるわ」

紗夜は最後の最後でエクシードを使つたらしい。それにしても、恐ろしいことを聞いてしまった。

「美海！ 大丈夫か!？」

「あ、春樹くん……うん、ちよつと痛いけど、大丈夫」

「そんな訳無いだろ！ 凄いな音してたぞ！ 紗夜先輩、ちよつとコイツを龍姫先生りゅうぎのどこまで連れて行くんで、琉花と忍をお願いします」  
「分かったわ。行ってらっしゃい」

「美海、立てるか？」

「え？ うー……痛っ！」

「つたく、言わんこつちやない。ほら腕貸せ」

「お、おんぶして欲しいな……」

「……仕方ないなあ、全く」

急いで駆けてきた春樹は、1人で立ち上がれないらしい美海を背負うと、そのままコロシアムの出入り口の方へ歩いて行った。

「日向美海ちゃん、ね……」

その後ろ姿を眺めながら、紗夜の目つきは鋭い。

……

無人の廊下に、春樹の足音だけが響いている。美海は怪我しているとは言え、静かだった。

「……強かったな」

「うん……攻撃、通らなかった」

「もつと、練習するか？」

「うん。もちろんだよ」

言葉数が少ない、しおらしい美海を背に感じながら、春樹は廊下を歩き続けた。

春樹は終始、何もしていなかった。何しろ紗夜の使う呪術は初めて見るものばかりで、指示の出しようがなかったし、終盤に至っては指示を出す必要性すらなかった。

未熟なのは、春樹も一緒だ。

……

美海は春樹に背負われながら、その背中に手を当てた。

「ん……？ どうした？」

「ううん。何でもないの。ただ」

「？」

「大きいな……って」

「そりゃ、俺は男だからな」

「そうだね……」

美海は痛みに苛まれながらも、心は静かだった。エクシードを操りきれなかった、その事実が、彼女の心の中に、ずん、と沈んでいた。

自分の感情が分からない。悲しいのか、悔しいのか。それとも……腹立たしいのか。

分からなくなったから、美海は春樹の肩から両手を伸ばし、その背中に抱きついた。

「春樹くん……どうしよう、私」

「どうしたの？」

「エクシード、最後の最後で、操りきれなかったの」

「そっか……お互い頑張るしか、ないな」

「頑張るしか、ないのかな」

「多分な。頑張ろう、一緒に」

春樹の背中は大きくて……だから美海は、自分を余計に小さく感じる。

閑話「私、嫌われてないかしら？」

「なんていうか、お前らと飲める日が来るとは思わなかったなあ」

商業地区にある居酒屋の一角で、雄馬が酒の入ったグラスを傾けながら言った。

青蘭島北側の中央に存在する商業地区の中でも西寄り、経済・行政地区にほど近い部分には、居酒屋の類が並ぶ通りがあった。当然ながら、青蘭学園生の立ち入りは推奨されない。

店内には程良い騒音に溢れ、居酒屋ならではの雑然とした雰囲気醸し出している。

「そのセリフ言うの、何回目よ」

「おっさんは酔うとおんなじ事ばかり言うからねー。しかも目をまたいで」

4人掛けのテーブル席には、雄馬の他に紗夜と朝子、そして、

「酔ったら細かいこと気にしない方が、いい」

静かで落ち着いた声。どう見てもここにはいけないような若い少女が座っていた。身長150センチにも満たない体躯に黒いローブを纏い、かなり暗めの銀髪をひとつに束ねた少女だ。暗い緑青色のつぶらな瞳は、既に眠そうに細められている。

名前は、メディオディア・ルルカルン。黒の世界出身の彼女は、こう見ても立派な20歳、青蘭大学の学生で、紗夜と朝子とは青蘭学園高等部の同級生。その頃からの大親友だ。加えて、紗夜が生徒会長だった時には生徒会で書記を務めていた。紗夜と同じく既に研究室から声が掛かっているような才女である。彼女が得意とする魔法薬の分野に関しては高等部生時代から勉強を重ねていたが、それに加えて非常に稀有なエクシードを持っている、優秀なプログレスとしても知られている。なんと、エクシードでお金を稼いでいるほどだ。

そんな彼女が居酒屋に入ると当然の如くまず店員に止められ、青蘭大学の学生証を見せると驚かれるのは、最早見慣れた光景だ。

メディオディアは鶏の軟骨の唐揚げを口に放り込むと、それをガリガリと齧りながら、

「細かいこと気にしてると、ハゲる」  
「ハゲねえよ！」

男性の尊厳に関わる辺りには結構反応する雄馬。それを見て、呆れたようにクスクスと笑う紗夜、声を上げて笑う朝子。すまし顔でグラスの酒を飲むメディオディア。

全くタイプの違う4人（強いて言うなら、人付き合いに強い雄馬と朝子は似たタイプだと言える）だが、こういった酒の席だとタイプの違いなど些細な問題だ。

アルコールのせいで少し上機嫌な紗夜が、雄馬に向かって口を開いた。

「ねえ、最近どう？」

「どう、って何が」

「えま絵麻」

「ああ」

雄馬の浮かべる笑みが、心なしか優しさを増した。

「絵麻なら心配いらないよ。いい子だし、ステラと一緒にお前のいたポジになるために頑張ってるよ」

「無理してないかしら？ 絵麻、ステラちゃんとバスケのことは話してくれるけど、学校のこととはあんまり……私、嫌われないかしら？」  
「んなわけあるかよ。絵麻の奴、俺に向かって口を開けば『お姉ちゃんは〜』『お姉ちゃんがね〜』『お姉ちゃんなら〜』って、お前のことばかり。そこは、お前と似てるな」

「よっ、シスコン会長殿！ 絵麻ちーが中学生の時にバスケ大会で優勝したとき、聞いてくれれば———というか、聞かなくても誰にでも触れ回ってたの、今でも覚えてるわ」

「う、うるさいわね！ だって本当にいい子なんだもの。昔から———」  
「はいはい。姉妹仲が良いのは、いいことよ」

「そうよね？ メディは分かってくれるよね？ 絵麻ったら本当にいい子でね、私が今日帰りが遅くなるからごめんね、って言ったら、あの子はちゃんと『うん、楽しんできてね！』ってね！」

「その話、もう3回目。聞き飽きた」

「そ、そうだったかしら？」

「まったく、姉妹揃ってシスコンかよ。ま、俺もメデイの意見と同じ、姉妹仲が良いのは、いいことだ」

皆でひとしきり笑った後、紗夜が少し真剣気味な表情になって口を開いた。

「で、雄馬くん。話は変わるけど、彼女の方はどうなの？」

「誰がだよ」

「日向美海ちゃん」

「あー……」

その一言で紗夜の言いたいことを全て察したかのように雄馬は渋面になった。

「制御装置は渡したし、見た限りじゃ本人も使いこなしているようだけれどな」

「でも、あれはどうなの？ 映像で見たときにはもしやと思ったけど、本当に暴走気味だなんて。しかもあの制御装置、彼女の力を無理矢理縛ってるみたいだったわ」

「仕方ないだろ。通常のエクシード封印があんまり効かないんだから。あのエクシードを封印するには……そうだな、コロシアムの常設結界レベルの拘束が必要なんだから。それをあそこまで小型化させたアルマ先生を褒めてやれよ」

雄馬が話を逸らしにかかると、朝子がそれに食いついた。

「え？ あれアルマ先生作だったんだ。じゃあ拘束力は納得だけだよ。でもちよつと雑じゃね？」

「それはどうも、あれがプロトタイプだかららしくて。その内改良版を持ってくるとは言ってたな」

「じゃあ、どうすんの。その改良版が上がってこなかったら、あれを大会で使わせるの？」

「仕方ないだろうな」

「仕方ないで済ませちゃいけないと思うんだけど……彼女の安全が第一でしょ？ なんでもかんでも龍姫ちゃんに任せてちゃダメでしょう」

グラスを傾けながら呆れたように紗夜が言う。そういう反応をするのは予想通りだった雄馬は、また渋い面になった。

「それはごもつともなんだが、無いよりはあった方が断然マシだ。それにな？ あの制御装置を使わなきゃいけない理由はどっちかっていうと美海が、というよりかは、αフィールドが、なんだよな」

「どういう意味？」

「レベル5状態の美海のエクシードが、αフィールドを破壊しかねないから、泥縄でも出力を縛っておきたいんだよ。本題はそっちなわけ」

「ああ、なるほど……」

「αフィールドって壊れるの？」

紗夜は納得したようだが、朝子は聞き返した。メデイオディアは黙って聞いている。

「理論上は、同一リンク上のエクシード過剰開放で、圧力に耐えられなくなるとか。αドライバー2人分の力を機械で強化しているとはいえ、プログレスを同時に繋いだαフィールドが耐えられる限界値はおよそ10人——そこに少し余裕を持たせて、『お互いに4人までしかプログレスを出せない』っていうルールにはそういう意味があるんだよ。紗夜は知ってるよな？」

「そうね。そこらへんの基礎知識は知ってるわ。でも、ブルーミングバトルのαフィールドが壊れたっていう話を聞かないのだけけど」

「ああ、壊れかけたことならあるぞ。何を隠そう、あの文香がな」

「文ちゃんが？」

朝子が尋ねると、雄馬はテーブルに頬杖をついて昔を思い出すように言った。

「そ。あいつが生徒会長になった直後のブルーミングバトルに、生徒会長対決とか言ってシャーリイが出てきてな。お互いにレベル5になって、シャーリイの雷撃を文香の結果が防いだ時に……流石の俺も死ぬかと思ったわ、あの時は」

「シャーリイ……って、鐘赤島の教会のシスター様？」

ようやくメデイオディアが口を開く。



「メデイ、アルバム読んでないのかよ……そうだ。雷雲さえあれば島中が攻撃範囲になるとかいう、歴代生徒会長でも5本の指に入るくらいの実力者だな」

「へえ、すごい。流星のあたしでも、手こずるかも」

「あんたじゃ話にもならないわよ。それに、歴代と言っても、14人しかいないじゃない。まあ、私は下から何番目かでしょうし、そういう攻撃タイプのエクシードがあればいいなー、と思ったことが無いとは言わないけど」

ほろ酔い状態で感情の起伏が激しくなっているからか、ネガティブに伏し目がちになりながら紗夜がぼやくと、雄馬は逆にそれを否定した。

「でもよ、お前の強さは攻撃タイプのエクシードを持っていない、『だからこそ』だと俺は思うんだよね。策士タイプっていうのかな。戦況をコントロールするのは容易いもんだろ。それに呪術もちゃんと成長させているようだし。派手なのは他に任せて、お前は地味ながら着実に敵を倒せるようになればいいと思う」

「雄馬くん……」

ぱあつと頬を赤らめる紗夜。

「ほらそこ、ラブラブ光線出さない！ メデイが妬やくでしょ」

「朝子だって羨ましいくせに」

「そんなことないってば！ 私と雄馬くんはいつだってラブラブだし？ ——ってメデイ！ それ私の刺身でしょ返しなさい！」

「むぐむぐ」

「あんた自分の唐揚げがあるでしょ！ しかも、サワーに刺身はあまり合わないと思うけど」

「なんとなく、こつちが食べたくなった」

「そう来るなら、私はあんたの唐揚げを——」

「させるかー」

「な、魔術で防御は卑怯でしょ！ もー、容赦しないよー！」

メディオディアと朝子がつまみを取り合っている横で、紗夜がとろんとした眼差しで雄馬を見つめた。

「ホント、貴方って女性だけには困らなそうね」

「この性格もなかなかキツイんだぞ。学生時代はそれこそ死ぬような思い、何度もしたし」

そこに、結局唐揚げを取り上げられたメディオディアが口を挟む。

「雄馬くんは、100回殺しても死ななそう」

「だと助かるんだけどな」。 「死んでくれ」 って頼まれたことあるし。100回くらい死ねたら、そういう子のお願いも叶えてあげられるんだけどなあ」

メディオディアから奪い取った軟骨の唐揚げを頬張った朝子が言った。

「雄馬くんって、そういうところ若干ズレてるよね」

「まーそれは自覚してる——というか、させられたわ。流石に」

その言葉とは裏腹に、雄馬は肉食獣のような笑みを浮かべた。

## 第4話「私じゃない」

元生徒会長の紗夜と、その補佐であった副会長の朝子。その实力はまさしく本物であった。美海たちは、今の自分たちが決して超えることのできない實力の差を思い知らされた。

しかし、紗夜と朝子は、ただ美海たちを叩きのめして帰るというわけではなく、戦闘に関する様々なテクニクやコツなどを教えた。

美海らは様々な知識を得たが、寧ろそうする事によって、自分たちが如何に無知であったかを痛感することになる。

……………

「では、ここを誰かに答えてもらおうかの…………よし、日向！」

「はい！ わかりません！」

1年生の教室内に美海の元気な声が響き渡った。と同時に、笑いが広がる。

が、指名した教師——正確に言えば、教壇に置いた椅子の上に乗っている——の方はがっくりと肩を落とした。

「むう…………どうやら基礎が……っそり抜け落ちているようじゃな…………日向と、その他数名」

教壇に立つ教師は、恐らくこのクラスにいる全員が——少なくとも青の世界出身の生徒は——、今まで見た教員の中で最もヘンテコな教師だと思っているであろう人物だった。

何しろ、身長が小学生、それも下手をすると低学年レベルなのだ。身長145センチ程しかない樹理よりもさらに20センチほど小さい。そんな形なりのくせに、口調は大昔の人間を思わせるような喋り方。非常に謎の多い存在だ。

アルスメル、という名前の、化学の教師だ。黒の世界出身である。そこもミスマッチ感が物凄い。何しろ黒の世界は魔術が発達しており、化学という学問がそもそも存在しない。なのに彼女は化学の教師をやっているのだ。

話によると、どうやら本職は錬金術師のようで、元から化学という

考え方こそ無けれど、それなりに近いことは昔からやっていたようである。現に、彼女はちゃんとした授業をやっている。変なことといえば、ちよくちよく錬金術や魔術の話を挟むことや、1発目の授業でいきなりとんでもなく難しいテストを課したことくらいだろうか。（ちなみに、魔法薬の専科の授業は彼女とアルマが受け持っていて、琉花と忍はそれでも彼女から指導を受けている。）

青蘭学園は、4つの世界から生徒が集まるため、知識レベルの統一が全くと言っていいほどなされていない。化学はその最たる例なのだが、黒の世界や赤の世界のように、そもそも化学という学問が無い世界から来た者もいれば、普通に優秀な青の世界の者、または科学技術が非常に発達した白の世界から来た者もいる。

なので、とりあえず分からない方へ合わせる、ということ、授業のレベルは必然的に低くなってしまおうのだが……美海は青の世界出身で、中学生の頃も理科という形で基礎的な化学を学んでいたにも関わらず、そのレベルでもギリギリであった。

「むー。特にレベルが高い話をしているわけではないのじゃがのう……。」

「す、すみません……。」

「まあ、よい。では、分かりやすいように説明をしようかの」

アルスメルは特に気にした様子もなく、指示棒で黒板の図——魔術によってチョークが勝手に描いた図だ——を指し示した。

無論、堂々と「分かりません!」ということが恥ずかしくないわけがない。実を言うと、結構恥ずかしい。

だが「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」とも言うだろう。あとで恥をかくよりも、今恥ずかしい思いをしておいたほうがいいのが正しいのだ。それに、どっちにしろ誤魔化しが効くような場面でもない。知らないことは知らないのだ。

しかし、それはそれとして……最近美海は、静かになると悩み事を始めてしまうようになっていた。理由はもちろん、紗夜と朝子との練習の結果である。

地面に激突したときの痛みは、保健室にいた養護教諭の志賀のエク

シードであつたという間に取り除いてもらえたが、美海がエクシードの制御に失敗したという事実は変わっていない。なんというべきか、エクシード制御用の刺突剣『ミストラル』を受け取る前と後では、確かにエクシードの制御の難しさが変わっていた。というより、『ミストラル』は美海のエクシードを抑え込んでいるみたいで、だからこそ御しやすい。

しかし、最後の局面で美海がエクシードを無理矢理暴れさせた——そのせいで、押さえ込まれていた反動からか、エクシードが制御を離れ、美海の思っていた以上に暴れてしまった、ということだったようだ。少なくとも、その場にいた紗夜はそう言っていた。

だが、『ミストラル』を使わなければ、操りにくいものの大暴走はしないから、じゃあ使わない」のが正しいかといえば、それには待つたを掛けられた。どうやら、美海のエクシードは『ミストラル』である程度抑えなければブルーミングバトルのαフィールドに大きな負荷をかけてしまうようで、それだけは勘弁してくれ、と雄馬に言われた。

つまり美海のやるべきことは、あの時感じた「もつと速ければ」を我慢し、別の方法を探すことだった。

美海の主な戦術は、あの時に使用した「フィールドから吹き飛ばす戦法」「ヒットアンドアウェイ戦法」、前回のブルーミングバトルで使った「巻き上げてから地面に叩きつける戦法」程度しかない。もつとも、これでゴリ押しできてしまうのが美海のエクシードの恐ろしいところだが、攻撃のバリエーションは多いに越したことはない。紗夜が琉花に対して言っていたが、「揺らぎ」は大事なのだ。そして、その「揺らぎ」を如何に大きくできるかは、自分の手札の枚数次第だ。

というわけで、美海が現在悩んでいるのは、自分のエクシードの有効活用法だ。バトルでどう使えば、上手く働くのか。どう活かせば、より大きな「揺らぎ」を作れるのか。どう——

「日向！　これで分かったかの？」

「え、分かりません！」

「分かったか」と聞かれたので、条件反射で「分かってない」と言う。

アルスメルの解説が終わっていた。

「汝、分からないのではなくて聞いていないだけであろう!？」

「え、えーと……」

美海は、素直に謝った。

彼女が勉強できない理由のひとつは、あまり人の話を注意深く聞いていないからなのかも知れない、とアルスメルは思った。

……………

「はい、そこでターン！」

「え、た、ターン！ つととと！」

美海は体勢を崩して尻餅をついてしまった。

「大丈夫、美海？」

「だ、大丈夫だよ……」

心配する希美の声に、強がってみるものの、その語気はどこか弱めだ。

場所は、青蘭大学の中にある小ホール。普段は会議などに使われているそこは、現在、美海と沙織がダンスと歌を練習する場所になっていた。

希美の要求である、アイドルの練習である。

隣でこちらは綺麗にくるりと回った沙織が、慌てて駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫!？」

美海はお尻をさすりながら、弱々しく「大丈夫」と返した。

上手くいかない。

バトルもダンスも。それに、歌の練習もしているが……それもあまり上手くできていない。

心中にあったのは「もどかしさ」。一步届かない、それがもどかしい。

こんなに「もどかしい」のは、生まれて初めてだった。

今までの美海は、正直言つて「どうにかなるさ」と思つてやってみたらできた……悪い言い方をすると、行き当たりばったりな生き方をしていた。もつとも、それでそれなりに上手く出来ていた——出来て

しまっていた。

何かと言うと、「こうしなきや」と思つてこなかったのである。それは単純に彼女の頭が少し良くないからでもあり、また楽観的な性格のせいでもあった。

しかし、今はその「こうしなきや」がはつきりと見えている。見えていて、手が届かない。あと少しなのに、手は確実に伸びているのに、届いていない。

もどかしい。

それがほとんど初めての経験であるから、美海は酷く慌てていた。どうになっていたことが突然上手くいかなくなるという事態に、心を乱していた。

「美海、なんか調子変じゃない?」

「そ、そうかな?」

「うん。最近、たまにぼーっとしてるよね。そういえば、授業中にも……」

「あー……そういえば、そうだったね……」

希美と沙織にも、詳しいことは分からないとはいえ、悩んでいることはバレているあたり、やっぱり美海は隠し事をするのが下手くそなのかもしれない。よく表情に出る性格がダメなのだろうか。

練習時間は今日だけでそろそろ2時間になる。もちろんダンスの練習だけではなく歌の練習もあるし、そもそもそのダンスにしても、希美が気を遣ってくれたのか、とんでもなく動きの多いものというわけでもない。そして体力の多い美海とさえど……流石に疲れてきた。それは沙織も同じのようだった。慣れないことを一気にやろうとすると、体力が、というより、「気」疲れしてしまう。

その疲れを、希美が見抜いたのか、

「まあ、毎日頑張ってるしね。今日はこの辺にしておこっか。じゃあ、ストレッチするよ」

今日の練習は終わりを迎えた。

あともう少し……その「もう少し」が、やっぱり遠く感じる。

——こんな時は、春樹くん相談するのがいいのかな。

気付かない内に美海は、何故か弱気になっていた。

授業の時は、堂々と「分かりません」と言えるのに、春樹に相談することをどこか恐れている自分がいた。

………

青蘭学園の体育館に、ボールを弾ませる音が響いている。

弾んでいるのは、重く、力強い音を上げる、バスケットボール。

体育館の中には、たった2人の少女しかいない。その2人が、バスケットボールをドリブルする片方、腰を落としてそれを待ち構えるもう片方に分かれている。

『loner』である。バスケットボールは基本的に5人ずつのチーム同士が争うものだが、極端な話、このlonerが集まって出来ているとも言えるスポーツだ。そういう意味で、例えば人数が足りなかったとしても、このlonerを鍛えておくと、いざチームプレーを行うとき、意外なほど活躍できる（もちろん、チームプレーには慣れておくに越したことはないが）。

ボールをドリブルしている方は、小さい。身長が150センチも無いように見え、とてもではないがバスケットボールに向いているとは言い難い。スタイルも身長相応の子供らしい薄さで、薄い色の髪をツインテールに結った、可愛らしい顔立ちの少女だ。

対して、それを阻もうとしている方は、短めの金髪の少女。表情は真剣そのもので、相手の動き出しの兆候すら見逃さない、鷹のような眼光だ。特徴的なのは、頭部に装着された、猫の耳のような形のヘッドアーマーと、左右で異なる色の瞳。

両者は見つめ合い、互いが隙を見せるのを待っている。張り詰めた緊張の糸が緩む、その一瞬を。

金髪の少女が、瞬まばたきした。

その瞬間、ツインテールの少女は爆発的な速度でドライブをかけた。右に、つまり相手にとって左側。利き腕でなければ、守備は難しい。

しかし、金髪の少女の動き出しもまた早かった。彼女もまた素晴らしい速度で、相手の行く手を阻む。身長で劣るツインテールの少女が



これを無理やり抜くのは得策ではない。

「——チッ！」

なので、進んでいた方向とは逆、左側に切り返すフェイク。これに釣られて体勢を崩せば、右側からドリブルでレイアップが決められる。

ダン、と体育館に響き渡る、その小さな体軀からは想像できないほど強い足踏み。しかし、金髪の少女は怯まない。まるでフェイクを出す、と予め見抜いているかのように、姿勢を傾けるものの体幹は全く揺るがせない。

ツインテールの少女が、不意にボールをホールドした。まだゴールまでは距離がある。身長差からして、ジャンプシュートは確実に止められる。

だから、少女が繰り出したのは、後方に跳びながらシュートを放つ、フェイダウェイシュート。身長の高い選手がブロックを越すために放つシュートである。また、こちらへ向かってくるはずの敵が、こちらから離れながらシュートを打つため、対処がしにくい。

通常ならそれだけなのだが、少女の場合、そのジャンプ力が尋常ではない。自分の身長の7割近くもの高さまで跳び上がりながらのフェイダウェイである。相対している相手からすれば、敵が突然消えてしまったかのように見えるだろう。

「——ッ」

だが、金髪の少女は既に動いていた。ツインテールの少女が後方へ跳び上がる……その予備動作の段階で直後の行動を見切ったのか、シュートに合わせて大きくジャンプし、シュートラインを潰す位置に手を伸ばしていた。

指先がボールを掠める。だが、それだけでシュートコースは僅かにずれ、ゴールリングに当たって弾んだ後、床に落ちた。

一瞬の沈黙。そして、

「うわああ、また防がれたー！ ステラはブロック上手すぎー！」

ツインテールの少女が、気が抜けたような声と共に床にへたり込んだ。

「絵麻えまのフェイクが下手なだけ。自分は特筆すべき速さじゃない」

ステラ、と呼ばれた金髪の少女は、無表情でボールを拾いに行った。「もう0.2秒遅れてたら、防げなかった」

「でも、止めたじゃーん」

絵麻と呼ばれたツインテールの少女が、床にばったりと大の字に寝転がった。ステラは、コートの外に置いてあったタオルとペットボトルを持ってきた。

「はい、水」

「あ、ありがとー」

絵麻は、よいしょと起き上がると、ペットボトルからくびくびと水を飲み始めた。その様子を眺めながら、ステラも床に座る。

「ステラはすごいよねー。私、結構フェイダウェイには自身あるんだけどなー。身長低いし、こうするしかないっていうか」

「絵麻はドライブも速い。それに、仮に逆の状況だったら、絵麻ならバックジャンプを見てから対応できるはず。自分は予測しないと無理だから、絵麻がフェイダウェイのフェイクが上手くなればいい」

「って言ってもさー、思いつきり何かをするフリするのって難しいよ？ ステラは逆だからそう言えるのかもしれないけど」

「逆？」

「なんにもするつもりがないフリするってコト」

「ああ、そういうこと。なら問題ない。自分はそういうプレイスタイルを突き詰めている」

「ちえー、やりにくいなー」

絵麻は再びばたーんと大の字になった。ステラは無表情に僅かな呆れを滲ませながらも、同じように寝転がった。

2人が自主練を始めてから、既に数時間が経過している。

「流石に、疲れた。絵麻は？」

「クタクタだー」

「そう」

ステラはほんの少しだけ微笑む。それを見ていた絵麻は、ニコニコと笑った。

「ステラ、笑うの上手くなったよねー」

「そうでもない。マスターには、まだ硬いと言われる」

「アルマ先生ひどーい。こんなに可愛いのにねー」

そう言うと、絵麻は横を向いてステラの口の端に手を伸ばし、むにゅと口角を持ち上げた。

「絵麻、やめて……」

「でもほらー、可愛いよー!」

2人がじゃれあっていると、そこに1人の男がやって来た。

「こら。お前たち、いつまで残ってる」

言葉では注意しつつも、その口調はどこか優しげである。数学講師の城海斗だ。

「あつ。城先生! その、ちよつと燃えちゃってですねー」

「自分も、同じ」

慌てて起き上がる絵麻とステラ。海斗は少しため息混じりに、

「もう7時だぞ。閉門するから、さっさと片付けて帰りなさい」

「りよ、了解しましたー!」

絵麻が驚異的な速度でバスケットボールを片付け、倉庫の鍵を閉めて海斗に渡すと、ぺこりと一礼。

「さようならー!」

「さようなら」

「はいさようなら。気をつけて帰りなさい」

『はーい!』

2人が荷物を引つつかんで体育館から出て行くと、そこには海斗1人が取り残された。彼は絵麻から受け取った倉庫の鍵をくるくると回しながら出口へ向かい、電気を消した。

「まあ、生徒会の2人だし、問題ないか」

バタン、という大きな音とともに鉄の扉が閉まった。

青蘭学園で事件が起こる、前日の夜である。

.....

「おっはよー、春樹くーん」

「おはよう、絵麻」

朝、春樹が教室に入ると、1人の少女が声を掛けてきた。薄い色の髪をツインテールに結った、小さいが元気そうな少女。名前は蒼月そうげつ絵麻といい、元生徒会長である蒼月紗夜さやの妹だ。

——前から思ってたけど、若干、美海に似たタイプかもしれない。髪型も似てるし。

「どした、なんかいつも以上に元気なような」

「春樹くん、お姉ちゃんとバトルしたんだってー?」

「ん? ああ……いや、バトルっつーか、特訓つけてもらったんだけど」

やたらにキラキラした絵麻の目をあまり直視出来ずに春樹が答えた。このあと何が来るのか、大体予想できるからだ。

思ったとおり絵麻は、

「お姉ちゃん、強かったでしょー!」

「あー、うん。強かったな」

姉自慢。絵麻は、自覚があるのかないのかは知らないが、結構重度なシスコンである。姉である紗夜の話をし始めると、本当に止まらないのだ。

春樹は知っているが、紗夜の方もかなりのシスコン。彼女がまだ青蘭学園にいた頃は、当時中学生だった絵麻がバスケットボールで活躍した、とかなんとかで、何度も自慢話を聞かされた記憶がある。

蒼月姉妹は、似た者同士の姉妹なのだ。

案の定絵麻は、そこから紗夜の話をし始めた。これが初回ならば、へー、ふーん、すごーい、となるのだろうが、生憎、至極最近のことを除けば何度も聞いた話だ。それも、1年生の頃から。遮っても良いのだが、そうすると、まるでこの世が終わったかのような顔になるため、断りづらい。そこもなんとなく紗夜に似ている。

さてどうしたものか……と絵麻の話聞き流し、適当に相槌を打ちながら困っていると、そこにもう1人の少女が現れた。

「絵麻。しつこい」

「ぐえっ、ステラ?」

絵麻の耳を引っ張りながら抑揚のない声でそう言うのは、バイタルコードΩ77のステラというアンドロイド。大雑把に短く切った金髪に猫の耳のような形のヘッドアーマー、そして左右で色の違う瞳が特徴的な少女だ。

絵麻とステラは共にバスケットボール部、そして生徒会に所属している。生徒会での役職は、絵麻が副会長、ステラが書記だ。特に絵麻は、紗夜と同じく生徒会長になるために頑張っている。

「絵麻、その話は今年度に入ってからもう10回もしている。全員飽きている。強いて言うなら去年はもつとしている」

「うー、お姉ちゃん、凄いのー」

「紗夜さんの凄さは、全員知っている」

「でも、なんてゆーか、定期的に誰かに話さないと、お姉ちゃんの凄さを忘れちゃうかもじゃーん」

「忘れたら絵麻に聞けばいい。絵麻から話す必要はない」

「うわーん、ひどい。ひどいよねー、アウロラー?」

「え? え、えーと……そうね」

近くにいたため突然会話を振られたアウロラも、口調はいつもどおり優しいのだが、少し顔が引きつっている。女神か天使の如き慈愛の持ち主も、絵麻のしつこさだけには少々辟易していたらしい。

ちよつと話が逸れたところに、これはチャンス、と更に方向を変え  
るために、

「しかし、絵麻。お前毎日そんな背負ってて、重くないの?」

「ん? えー、これ? 最初は重かったけど、慣れちったー」

通常、女子高生が背負うものといえば、学生鞆だとか部活のバッグだとか、スポーツ系の部活ならラケット類だとか、音楽系の部活なら楽器とか……そんなものだろう。

しかし、絵麻はそれらとは遠くかけ離れたものを背負っているのだ。

絵麻は背中のをそれを無造作に手に取ると、バスケットボールでやるように指先でくるくると回し始めた。

「やっぱ普段から背負って、時々使わないと鈍るかなーと思ってきー」

壁当てとかしてるわけよー」

それは——金属製の、かなり大きな丸盾である。シルバーとブラックでシンプルに彩られた中央は青で、蘭の花を象った紋章が染め抜かれている。

生徒会役員は往々にして、校内で起きた事件——エクシードの暴走などもある——を止めなくてはならないため、選抜基準の1つに戦闘力が入っており、絵麻はこの盾を投げて戦うのだ。その戦闘力は、小さな体軀からは想像もできないほど高い。

「生徒会も大変だな」

「んー、そうでもないよ。会長は強いし優しいし、他の先輩達も親切だしねー。それに、大きな事件はあんまり起こってないし」

「そういうもんなのかな」

「そういうもんよー」

ニコニコと笑いながら答える絵麻。間延びした喋り方を聞いていると、不思議と落ち着く。

(しかし、大きな事件、か……)

直近で、学園内での「大きな事件」なら、心当たりがある。春樹も当事者だ。

春樹のプログレス達が爆弾で攻撃された、あの事件。あれは、実は青蘭学園の生徒が起こした事件なのだ。

もっと言えば、事件を起こした生徒はプログレスではなくαドライバーだった。

(もう、そんなの起こらなければいいけどな)

痛みを知った春樹は、そう切実に思う。

……………

1年生の昼休みの教室は、いくつかのグループに分かれて食事をとっている姿が見られる。大体は寮ごとに分かれているが、完全にそれだけというわけではなく、食事が終われば美海や琉花あたりが騒ぎだすのが日常的だ。

今日はなぜか知らないが、担任の本条文香が教室にやってきていた。

「誰かー、先生にパンを恵んでくださーい」

無表情でこの台詞を言うため、初見だと結構戸惑うが、慣れてしま  
うとある意味可愛らしくもあった。

美海が、

「文先生、今月苦しいんですか?」

と聞くと、本条は、

「今月というか、毎月ですけど。趣味でお金が吹き飛ぶ上、薄給でこき  
使われてるんです。しくしく」

「あー、先生、補講とかしてくれるから……」

「いえ、それは完全に皆さんのために自主的にやってることなので  
お構いなく」

もう既に本条の補講の世話になっている美海としては、ただただ頭  
が下がる思いだったので、買ってきた惣菜パンを1個あげると、本条  
は「あつりがとうございませう」と言いながら別のグループの方へ  
行ってしまった。

パンが1個少なくなってしまったので、帰りにスーパーマーケット  
でお菓子でも買おうかな、と思っていると、

「優しいね、美海ちゃん。はい、半分あげる」

「え、いいの?」

沙織が、自分のパンの半分を美海に差し出していた。断つてもお腹  
は膨れないし、沙織は断ると悲しむ性格なので、ありがたく頂戴して  
おいた。

「ありがとう! あむ。うーん、沙織ちゃんの愛情の味がするよー」

「も、もう、美海ちゃんったら。買ってきたパンなんだから、愛情なん  
て」

照れて、美海の肩をパシパシと叩く沙織。まるでカップルだ。

「……あんたら、ホント仲良いわよね。ねえ希美、ダンスの練習とかし  
てる時もこうなの?」

「うーん、流石に練習してる時は真剣だけど、なんだかんだ言ってお互  
い大好きだから、終わったらイチヤついでるわ」

目の前に座っている葵と希美が、呆れたように声を交わしている。

その横で、

「樹理ちゃんは、動物は好きじゃないの？」

「そういうわけじゃないけど、植物の方が好き。エクシードがそっち向きだし」

「じゃあ、好きな動物っている？」

「うーん。ウサギ、とか……逆に兎莉子は、好きな花とかあるの？」

「お花かあ。そう……菜の花、とかかな。動物に食べさせてあげられるから……」

兎莉子と樹理が、動物と植物の談義をしている。2人はそれぞれ「動物と意思疎通ができる」「植物成長を早める」という正反対のエクシードを持っているが、「生命に作用する」という点では似ているとも言える。そのため、なのは定かではないが、何かと気が合う2人だった。

「そんでさー、そこで私、地面から生えてきた木に捕まっちゃってさー」

「え、木に捕まるの!? ヤバくない!？」

「そうなんだよ翔子! こう、によきによきつとさ……」

「Oh! それはExcitingねー!」

「エキサイティングではないでゴザルよエミリー殿。琉花殿は目先の事態に囚われないよう、しっかりしていたでゴザル」

「それより、あたしと似たようなエクシード持ってたその先輩の話が聞きたいなー」

「ん? ああ、確かに朝子先輩のエクシードははねるのと似てるよなー」

少し離れたところでは、琉花と忍、それから別の寮で生活している青の世界出身の数人と談笑している。

和やかな食事風景。もう少して授業だ。

それは、本条が「じゃあそろそろ、次の授業の準備があるので。皆さん、午後も頑張ってくださいねー」と教室を出ようとした時に起こった。

最初は、誰も「事件」が起こったとは気付かなかった。



「え……う？」

美海の目の前で、兔莉子が左胸——心臓の真上——を抑えた。表情が、苦痛に歪んでいく。

「う、あ」

声にならない苦悶。息が荒くなり、身をかがめた。

「どうしたの、兔莉子。どこか痛いのか？」

突然の反応に驚いた樹理が、兔莉子の背中をさすりながら尋ねても、

「あ、あ——」

開いた口からは、声が出ない。喉の奥から絞り出されるのは、まるで、息が詰まったような——

「大丈夫ですか、生嶋さん？」

兔莉子の異常を見て戻ってきた本条が、彼女の肩に手を触れた——瞬間、

「これは……いけない」

本条の表情が変わった。素早く兔莉子を床に座らせ、そのまま仰向けに寝かせる。

兔莉子の表情は苦悶に満ちていた。荒い息を吐く口は半開きのままで、その端から唾液が流れている。目は開ききり、しかし瞳はどこも見えてはいない。眼球がぐるぐる回っている。手は固く胸を抑え、足は少しでも痛みを外に逃がそうとしているかのように何度も床を蹴っている。

「全員、慌てないで！ その場から動かないで！」

本条は教室内にいた全員に向かって叫ぶと、兔莉子の耳元で「大丈夫です。今、楽になりますからね」と囁いた。兔莉子の左胸から彼女自身の手をどかし、代わりに自分の左手を当て、右手は刀印を結び、その先端を自分の喉に当てた。

「????????????」

彼女の口から、人間が発せるとは到底思えないような声が紡がれた。

同時に、兔莉子の胸に当てた左手が輝き、手を当てたそこに光のリングが現れた。本条がゆっくりと手を持ち上げると、嫌な水音を立

てて、濃い紫色のドロドロした塊のようなものが、リングを通過してきた。

本条は、取り出した奇妙な塊の表面を撫でるように手を動かすと、光の膜が塊を包み込んだ。

兎莉子の表情は依然として険しいが、口と目を閉じられるようになり、幾分か楽になったようだ。

「……これは、呪いです。毒の、呪い」

本条がボソツとそう呟いた。瞬間、ガタツと音がする。皆がその方を向くと、そこには――

「違う！ 私じゃない！」

椅子から滑り落ちた、琉花。いつも元気でお調子者なはずの彼女は、苦しむ兎莉子を見ながら、その顔に恐怖を浮かべていた。はつきりと何かに怯えるような、そんな表情――

「私じゃない！ 私じゃない！ 信じて！ 私じゃないの！」

そばにいた忍の足にしがみつき、それでも双眸は兎莉子を捉え続けたまま、必死に弁解する。周りにいた全員は、わけが分からない。

「る、琉花殿？ 大丈夫でゴザルか？」

忍がしゃがみこんで、琉花を抱きしめた。背中をさすってやるが、琉花は恐怖に震えたままだ。ぼろぼろと涙を流しながら、

「違う！ 私じゃない！ 私はやってない！ みんなが悪いの！ みんなが私をいじめたのがいけないんだ！ だから私は悪くない！ 私じゃないの！ 信じてよ……！」

支離滅裂な言葉を何かに向かってひたすら叫び続ける琉花。忍が必死に宥めたおかげで、徐々に勢いを失ったものの、そのまま静かに泣き始めてしまった。

「私じゃない……私じゃない……！」

美海だけではない。その場にいた誰もが、状況を正確に把握できていなかった。

「……ステラさん？ 今すぐ高等部1年生の教室まで来てください。」

生徒会顧問の権限において、一時的に兵装とエクシードの使用を許可します」

本条が何かを呟くと、そのすぐ数秒後に教室のドアが開いた。入ってきたのは、短い金髪の少女——ステラだ。

「本条先生、自分は何をすればいい」

「これと、この子を、保健室に。彼女は安静にさせて、魔捜課の人たちが来るまで、付き添っているように。こちらの塊は、志賀先生に渡してください」

「了解」

ステラは了解すると、腕1本で兎莉子を抱き上げ、もう片方の手で光の膜に包まれた塊——呪いの元凶——を持つと、目にも止まらぬ速さで教室を飛び出した。続けて本条は、耳元に手を当てて、

「先生方、生徒会役員、並びに風紀委員に通達。高等部1年の生徒が何らかの毒物を投与され、呪いを受けた模様です。安全確保の為、午後の授業を中断し、生徒を安全に帰宅させるように誘導をお願いします。また、カミュオン先生及びアルスメル先生は、保健室に急行し、術式の調査をしてください。職員室に残っている先生方は、執行部魔術犯罪捜査課に事件発生の報告をし、青蘭大学病院に急病人の存在の通知と救急車の要請を行い、最後に各寮監に連絡し生徒が緊急に帰宅することを伝えてください」

そう呟いた。

それは、誰が聞いても理解できる、非常事態宣言。

誰も自分の席に付いていない教室内に、午後の授業の開始を告げるチャイムが響き渡る。その中で琉花は静かに涙を流し続けていた。

「違うの……お願い……許して………」

## 第5話 「私だつて同じこと思つてたよ」

朝、起きると、お母さんは寝ていた。

お父さんは、仕事で家にいなかった。

——行つてきます。

誰も「いつてらっしゃい」つて言つてくれなかった。

学校が終わつて、家に帰ると、お母さんは仕事で家にいなかった。

お父さんは、仕事で家にいないか、寝ているかのどつちかだった。

——ただいま。

誰も「お帰りなさい」つて言つてくれなかった。

だから、「いつてらっしゃい」と「お帰りなさい」が当たり前だと思つているあの子が、妬ましかった。

.....

明かりの付いていないベッドルームに月光が差し込んでいる。

「……琉花？」

「ん……」

「大丈夫？」

「……うん、へーき」

満月寮の2階の1室で、琉花はベッドに横たわり、毛布にくるまっていた。それを眺めるのは、ルームメイトの希美だ。

恐慌状態に陥つた琉花は、その場にいた本条に軽い眠りの魔法を掛けられ、泣き疲れていたのもあつて、すぐに眠つてしまった。教員の運転する車に乗せられ、満月寮に帰ってきた後もしばらく眠り続け、夜の8時になつてようやく目覚めた。

「小春さんが、晩ご飯用意してくれてるよ。食べに行く？」

「ん……そだね。お腹空いた」

いつもの元気一杯な琉花はそこにいない。彼女の様子は、奇妙に静かだった。

琉花がベッドから降りて、着たままの制服を脱いでいる最中、リビングから持ってきたキャスター付きの椅子に腰掛けていた希美は、

そつと琉花に訊いた。

「ねえ、琉花？」

「……なに？」

「あのさ、『私じゃない』って言ってたよね」

「……うん」

「あれ、どういうこと？」

疑いたくないのに、自分からああ言われては、声にも疑るような響きが入ってしまう。

対する琉花は、ブレザーを脱いで、スカートを下ろして、そこで手を止めた。

「別に……なんでもない」

「でも、みんな聞きたがってる」

「そうだろうね」

「教えて、くれないの？」

「……」

琉花は胸の前で両手をギュツと握り締めた。

「……言ったら、嫌われる。だから、言いたくない」

「そっか」

希美は努めて素っ気なく返事した。そして、

「どうしてもっていうなら、無理には聞かないけど……辛いなら、ちゃんと誰かに相談してね」

なぜ「私に相談してね」とは言えなかったのか、この時の希美には分からなかったが、希美も琉花と同じく、辛いのだ。

ただ、異常が表面に出た琉花とは異なり、希美は異常を必死で隠している。隠せてしまっている。

自分自身からも。

そして、希美に背を向けた琉花は、

「うん、そうする。ありがと」

と言つて、ベッドルームから出て行った。しかし、その声は、琉花とは思えないほど、硬質なものだつた。

……………

「……………誰も、分かってくれるわけ無いじゃん……………」

……………

事件が起こった青蘭学園には、執行部刑事課による捜査の手が入った。また、使用された毒物が魔術的なものであったことから、魔術犯罪捜査課——通称『魔捜課』も捜査に加わる。

当然ながら学園は休校となり、生徒たちは外出禁止が言い渡された。犯人が捕まっていないため、どこで事件が再発するか不明なためである。

青蘭大学病院に搬送された兎莉子は、体内に巢食っていた呪いと共に、原因究明及び犯人の特定の重要な手がかりになるので、彼女の体調を完全に回復させることを最重要項目としながらも、兎莉子から直接事情を聴取する。

——しかし、春樹が気がかりなのはその兎莉子の安否と、どうも様子がおかしかったらしい琉花である。

現在学園に在籍しているαドライバーは、全員1人暮らしをしているため、個々に自宅へ帰すと孤立してしまいかえって危険だという執行部部長の意見により、例外的にαドライバーのみ学園の教室で寝泊りすることになった。もちろん、警護はついている。が、それゆえに落ち着かない。

現在、春樹たちαドライバー5人は、普段は選択科目の授業で使用している空き教室に留まることを命じられている。学園には、災害発生時に使用する布団などが備え付けられており、もうすでにそれらは床に敷かれている。寝たければいつでも寝れるが、春樹は兎莉子と琉花のことが心配で、ずっと落ち着かないでいた。

他の4人も、言葉数は少ない。これがただのお泊まり会だったら盛り上がりがあっただろうが、事件が起きた後となれば、皆が皆、自分のプログラムを心配するのは当たり前だ。そして、まだプログラムを見つけれない早輝も、相性善し悪しの前にクラスメートである皆

の身を案じており、話している言葉にもどこか元気がない。

早輝を含む1年生のαドライバー3人は、呪いに苦しむ兎莉子と恐慌状態の琉花を直に見ている。そのため、例え自分のプログレスでなくとも不安そうな色が表情に出ている。被害に遭った兎莉子と状態がおかしかった琉花は春樹のチームのプログレスだから、心配するのは当たり前だ。

「春樹？」

「ん……？」

声を掛けてきたのは、春樹と同学年であり親友のαドライバー、三島冬吾<sup>しまとうご</sup>。高身長でイケメン、性格も穏やかで頭脳明晰、運動神経も良い、と非の打ち所のない男だ。少し前に大喧嘩をしたが、今は仲直りしている。

「そんなに辛い表情しないで。今の春樹を見たら、美海ちゃんたち驚いちゃうよ」

「……………そうだな」

冬吾の言葉に、春樹は最小限の言葉で返した。

春樹は去年の暮れに、自分のチームに入れようと思っていたプログレス4人が爆弾で攻撃された。彼女らは白の世界の病院へ送られ、現在も目を覚ましていない。さらに、前回のブルーミングバトルの直前に、美海が拉致されかけた。

それらの事件に関わっていたのは《ファントム》と呼ばれる犯罪組織である。

ファントムはその規模が不明で、青蘭諸島どころか他の世界でも様々な事件を起こしている。裏社会などどこにでも形成されてしまっているのだが、青蘭諸島の場合はその大部分がファントムで占められているという。

仮に、今回の事件がファントムによるものだった場合、春樹は自分と仲の良いプログレスを6人も攻撃されたことになる。春樹は今ここにいる5人の中で、最も強い憎しみをファントムに対して抱いているのだ。なので、辛い表情をするなどという方が無理だった。

ただ、冬吾も無神経でそう言ったかといえ、そうでもないことが

春樹にも分かっていた。冬吾は「チームリーダーである春樹のテンションがチームメンバーに伝播する」ことを示唆しているのだ。特にチームの要であり、春樹に若干依存気味の美海が影響を受けると、チームが根幹から揺らぎかねない。琉花も、理由こそ不明だが心を揺らしている。忍だつて例外ではないだろう。

今春樹がするべきことは、とにかく毅然としていることなのだ。そして、それはまさに「言うは易し、行うは難し」そのものである。

不意に、携帯電話が鳴った。画面を見ると、カレンから電話が掛かってきている。

「悪い、ちよつと電話」

春樹は冬吾に断ると、廊下に出て通話ボタンを押した。

「もしもし」

『こんばんは、神城春樹』

「どうしたの、こんな遅くに」

カレンから電話が掛かってくることは結構珍しいため、驚いて聞いてみると、彼女は淡々とした声音で、

『貴方様がチームリーダーとしての責を果たしているかどうか、確認したいのでございます』

と言った。続けて、

『那月琉花と話しましたか？』

「……いや」

琉花に電話をしようとは思っていたが、今は混乱しているだろうし、本条によつて眠らされたことは知っていたので、明日にしようと考えていた。だが、これも言い訳なのかもしれない。

春樹は心のどこかで、琉花の秘密に踏み入ってしまうことを恐れていた。ちようど先月、己の秘密に踏み入られることを恐れていたように。

『なら、今すぐ電話しなさい』

「でも……もう夜遅いよ?」

『それでもでございます。貴方様はチームリーダー。リーダーはメンバーの状態を常に知っておかなければなりません。今の琉花がどの



ような状態なのか、知っておくべきでございます。電話を掛け、仮に出なかったとしたら、それは「電話に出れない」もしくは「電話に出たくない」ような状態だということでございます。それを知るためにも、まずは連絡を取りなさい』

通話口からすらすると流れるカレンの声は、春樹の頭にすんなりと入ってきた。それで、自分が今まで気を滅入らせていたことに気づく。同時に、自分がリーダーとして求められる行動を取れていなかったことを後悔した。

「うん、分かった。今すぐ電話してみるよ。ありがとう、カレン」  
『礼には及ばないのでございます』

カレンはそう返事した後、少しの間を開けて、新たに声を掛けてきた。

『春樹』

「ん？」

『貴方様は、リーダーという立場になるのは初めてでございますか？』  
「え？ そうだな……こんなに重要なチームのリーダーになるのは、確かに初めてだけど」

『それなら言っておくのでございます。貴方様は誰でも頼れるのでございませぬ。クラスメイトも、他の学年の者も、教員も。だから、困ったら誰にでも頼るべきでございます。あのいけ好かない三島冬吾を筆頭に、貴方様を助けてくれる者は、決して少なくありません。無論、現在貴方様のチームに身を置く、この私も』

「……」

『貴方様は、「人に頼る」と「人を使う」ことの重要さを認識してくださいませ。ひとりで問題を抱え込むことほど無益なことはありません。足掻くことも大事かもしれませんが、どうしようもない時まで足掻いては虫と同じです。勇氣と無謀は別のもの。勇氣ある男は素敵ですが、無謀な男を素敵だと思ふ女はほとんどいません』  
「カレン……」

『私は、今の貴方様に対して「頼りにしています」などとは決して言いません。が、それは貴方様が頼りないからではなく、貴方様自身が人

を使い慣れていないからでございます。ですのでどうぞ、チームメンバーであり部下である私をお使い下さいませ』

それは、言葉を飾らないカレンなりの優しさだったのだろう。春樹は、淡々としながらも自分を助けしてくれると言ってくれた彼女に感謝を覚えながら、

「じゃあ……もし琉花が電話に出てくれなかったら、相談してもいい？」

『了解しました。では、相談を持ちかけられないことをお祈りしていただきます』

カレンは、そう冗談めかして通話を切った。

春樹は1回深呼吸をすると、改めて琉花に電話を掛けることにした。通話ボタンを押す指が僅かに震えたが、なんとか堪える。

数回のコール音の後、通話に出た。

『……もしもし？』

「お、琉花。こんばんは」

『ん、こんばんは』

声を聞いてみて、案の定元気が無さそうだった。

『ハル先輩、こんな遅くに何の用？』

「いや、その……先生から、ちよつと様子が変わったって聞いたから。心配で」

『そっか、ありがとね』

口調は同じなのに、声は静か、というか若干硬い。いつもの弾けるような元気が感じられなかった。

春樹は慎重に言葉を選び、

「大丈夫？」

『あー、大丈夫大丈夫。ちよつと混乱しちやっただけだから。心配しないでオツケーよ』

「そうか、ならいいんだけど」

今はとりあえずこれでいい、と春樹は判断した。彼女はきつと何かを隠している。だが、それを無理やり暴くのは利口なやり方ではないだろう。そんなことをしようものなら即座に通話を切られるに決

まっっているし、今後の関係にも響くはずだ。  
ただ、

「バトルが近いから、何か悩みがあったら遠慮しないで相談してくれよ。俺じゃなくても、友達とか、先生でもいい」

カレンに言われたことを自分の言葉で琉花に伝えようと、彼女は一瞬押し黙った後、

『……ありがとう』

と言った。しかし、その声音は今日一番硬いものだった。

それは、文面とは裏腹に、拒絶にも聞こえた。

通話を続けるための話題も浮かばず、ちよつとした挨拶を交わすと、通話は切れた。

「……大丈夫、だよな」

口に出してみたが、余計に大丈夫じゃない気がして、怖くなる。

——琉花は何を隠しているのだろう。

………

目を覚ますと、木目の板が目に入った。2段ベッドの、上段の底板である。これを見ながら起きるのも、もう3ヶ月目だった。

「………夢、か」

彼女はゆっくりと起き上がると、いつもはベッドから降りて体を伸ばすのだが、今日はそのままじっと何かを考え込んでいた。

——もうアイツのために金を払わなくていいのか。

「……お父さんもお母さんも、大嫌い」

彼女はポツリと呟くと、ベッドから降りた。

………

授業は無いのに、学校にいたとは新鮮だった。しかも、目覚めて最初に目に入るものが教室の天井だ。

一晩明け、青蘭学園の様子は朝から慌ただしい。執行部による捜査が続いているのだ。そんな中、春樹は特別に許可を貰って、青蘭大学病院へと足を運んでいた。学園特区から少し離れることになるが、今

はあちこちに執行部の人間がいて、顔見知りの人も少しだがいるため、それほど危険ではない。

近代的な印象の病院に入り、面会の申請を先生が通してくれたのでその旨を受付に伝え、案内されるままに奥へ入っていく。清潔感のある白い壁は綺麗だが、どこか不気味さを感じるのは、病院がホラースポットとしてよく取り上げられるからだろうか……。

などと無駄なことを考えているうちに兔莉子がいる病室へ着いた。開かれたスライドドアから中に入ると、そこには数人のスーツを着た男女と、ベッドの上で横たわった兔莉子がいた。

「あ、春樹さん！」

兔莉子は春樹を見つけるなり、ぱあつと顔を輝かせた。とにかく無事だったという事実が春樹の胸に染み入り、思わず駆け寄って彼女を抱きしめてしまった。

「ひゃあっ!?!」

「兔莉子！ 良かった……!」

「あ、あの……」

兔莉子も抱きしめ返してくれたが、いきなり病人を抱きしめるなんて非常識だったかなと思ひ直し、すぐに手を離れた。彼女は顔を真っ赤に染めている。

「あらあら、お熱いわね」

その様子を見ていたスーツの女性が頬に手を当てて言うと、周りで笑い声が生まれた。周りに人がいたことを思い出し、春樹まで赤くなる。

スーツの男女は、皆胸に小さなピンバッジを付けている。青い蘭のモチーフを取り囲む明るい紫。これは執行部の中でも魔術犯罪捜査課の証だ。

「す、すみません。事情聴取中、ですよね……」

春樹が謝ると、彼らはむしろ面会を歓迎し、一旦退出してくれるようだった。どうやら、兔莉子一人で心細い思いをさせている中、必要とはいえ数人の大人で取り囲んであれこれ聞き出したことが引け目だったらしい。

大人たちが出て行くと、春樹はベッド横に置かれていた椅子に腰掛け、改めて兎莉子の顔を見た。呪いを受けてその苦痛に耐え、更に色々と聞き出されたからか、かなり疲れているように見えた。

「兎莉子、大丈夫?」

「はい、大丈夫です」

それでも春樹が話しかけると、彼女は自然に笑顔になってくれた。それから、行く途中で買ってきたお見舞いを渡した。

「はい、これお土産ね。確か兎莉子、アイスが好きだったよね」

「え? わあ、これ高かったんじゃないですか?」

「兎莉子のためだもん、高くなんかないよ」

「え、あう、あの、ありがとうございます……!」

少し高級なバナナ味のアイスクリームを、兎莉子はとても喜んでくれたようで、その笑顔を見るのは春樹が想像していた以上に嬉しかった。

幸せそうにアイスを口に運んでいた兎莉子が、そういえば、と春樹の方を向いた。

「あの、今、授業中なんじゃないですか?」

「いや、今は休校になってるんだ。事件の捜査があつて」

「え、そんなにですか!」

「うん。しかも、原因がわからないから迂闊に外出させるわけにもいかないってことで、基本的に外出禁止なんだ」

「そうなんですか……なんか、我ながらスゴい事件に巻き込まれちゃいました」

茶目つ気を出して笑う兎莉子だが、春樹にとっては笑い事ではない。手を伸ばして兎莉子の頭の上に置き、何度も撫でた。

「でも、ホント無事で良かった……もし後遺症とか残っちゃったら、俺……」

「大丈夫ですよ。呪いも完全に取り除けたみたいですし、もうすぐ退院できるって言っていました」

「そっか。良かった」

「はい。文香先生がすぐに対応してくれたから何とかなつたそうなの

で、感謝です」

「そうだな……」

春樹は本条と少し話をしていて、彼女が兎莉子の応急処置をしてくれたことは知っていた。既にお礼を伝えてあるが、より一層頭が上がらなくなってしまうな、と思った。

「……？ 春樹さん？」

「ん、どうしたの？」

不意に兎莉子が首を傾げた。そして、春樹の顔を見て、

「春樹さん、疲れていますか？」

と聞いてきた。

「え？ どうして？」

「なんだか、心の底から笑えていないような気がして」

「そりゃあ、大事な兎莉子がこんな目に遭わされてるんだから……」

「だ、大事な……つと、そ、そうじゃなくて！ こう、なんていうか、何かお悩みなのでは？」

「それは……」

そこまで言いかけて、思わず春樹は口を閉じた。確かに悩みはある。またファントムの仕業なのでは……という悩み。そして、それ以上で彼の中で存在感を発しているのは、無論、琉花のことだ。

しかし、今の彼女にそんなことを伝えても、負担になってしまいうだけだ。ただでさえ辛い状況なのに、これ以上重荷を背負わせたくなかった。

改めて兎莉子を見る。ウェーブの掛かった薄い色の髪。筋肉などほとんどついていない細い体躯。澄んだ瞳。可愛らしく優しげな顔つき。全てが組み合わさり、儂げな姫君のような印象を植え付けられる。

彼女は今、非常に疲れているはずだ。いや、むしろ春樹よりもよっぽど疲労しているのは疑う余地もない。それでも彼女は、春樹の悩みに気付き、寄り添おうとしている。

——こんなに儂いのには。

春樹は彼女が、その儂げな印象とは裏腹にタフな精神を持っている

ことを知っている。美海がファントムに誘拐されかけた時、その事実を聞いて慌てふためいていた春樹に落ち着きを取り戻させたのは、他でもない兎莉子だ。また、美海を探すためにグリフォンを呼んでくれたのも彼女なら、ブルーミングバトルの際、セニアの装備攻略のきっかけをくれたのも彼女だ。戦えなくとも、チーム”スカイブルー・エレメンツ”の立派なメンバーなのだ。

だから、彼女に遠慮して黙っておくのは逆に傷つくと、春樹は思った。

「——うん、そうだね。実は……」

春樹は一息、間を置くと、今彼が抱えている悩みを話し始めた。

……………

事件発生から2日目、兎莉子が退院し、また事件の原因も特定できたとということで、ようやく翌日からの授業再開の目処が立った。

そして、その次の日。生徒達が、2日ぶりの再会の喜びと事件への不安、兎莉子が無事であったことへの安堵や、外出禁止により寮や自宅に拘束され続けたことでの精神的な疲れを混ぜ合わせた、不思議な表情で登校する中、各クラスの委員長及び副委員長が、真っ先に職員室に呼び出された。

呼び出したのは、目の下にできた濃い隈をファンデーションでなんとか隠した本条だった。彼女の席を取り囲むように、高等部と中等部の各クラス委員長と副委員長が並んだ。

「まずは、皆さんにこれを渡しておきます」

そう言っただけで彼女が全員に渡したものは、数枚の呪符だった。

「高等部1年生の生嶋兎莉子さんが病院へ運ばれた原因は、呪術でした。これは、その元凶たる呪物を体内から取り除くことのできる札になります」

縦長の半紙に墨汁で描かれているのは、黒の世界のものらしき魔術式だ。それを理解できた高等部1年生のクラス委員長で黒の世界出身のソフィーナ・アルハゼンは、

「これ、効くのかしら？　なんだか見たことのない紙にインクだけ……インクはともかく紙は、羊皮紙とか無かったの？」

「それは青の世界の呪術に用いられる紙です。もちろん効きますよ。夜を徹して作りました」

「ならいいけれど……」

初めて目にする素材で出来ている呪符を疑わしげな目で眺め回しているソフィーナ。本条はそれを「観察はあとにしてください」とたしなめ、それから、普段通りの無表情に深刻さを滲ませながら口を開いた。

「その呪符は、できるだけクラスの人には見せないようにしてください。また、今から話すことも、できるだけほかの人には喋らないように。いいですか——」

本条が声を潜めると、じり、と彼女を取り囲む輪が縮まった。

「今回の事件は、青蘭学園内部に犯人が潜んでいる可能性があります」その言葉を聞いた全員が驚き、「そんなはずない」と言う声もあつたが、本条は手を上げてそれを静止した。

「私も、この学園の生徒達の誰かが犯人だとは考えたくありません。ありませんが……事件の証拠はその可能性を示唆しています。この呪符を全員に渡すということも考えましたが、万が一犯人の手に渡れば、術式を解析され、この呪符で解呪できないように呪いの式を改変されてしまうかもしれないので、信頼する委員長と副委員長に授けることにしました」

本条はそこで一旦言葉を区切ると、改めて話し始めた。

「もし、もし呪いを受けた生徒を発見した場合、すぐにこの呪符を、その生徒の身体に当てて力を込めてください。皆さん、できますか？少し練習してみましよう——」

皆が呪符を一枚取り、力を入れてみると、描かれていた魔法陣のような模様が紫色の光を発した。術が発動した証拠だ。

「大丈夫なようですね。では、その呪符は常に携帯するように。なるべく教室から出ないように呼びかけますが、束縛し続けるわけにもいかないので、移動教室の場合を除き、委員長か副委員長のどちらかは必ず教室に残るようにしてください。特にお昼休みは注意してください。多くの生徒が購買に昼食を買いに行きますからね。また、呪い



を受けた生徒を発見したならば、その容態にかかわらず、すぐに教員を呼んでください。いいですか？」

全員が頷いた。だが皆の表情は、不安と恐怖に彩られている。遠まわしに、自分たちの行動が生徒の生死を分けると告げられているも同然なので、当たり前のことだろう。中等部3年生の委員長であるエルエルなど、小さく震えてさえいる。その様子を見た本条は、口元に静かな笑みを浮かべた。

「大丈夫です。何かあれば、我々教員が絶対に助けます。前触れ無しでも生嶋さんを助けることができました。なので、再犯は決して許しません。必要以上に神経質にならず、まずは皆さん生徒なので、目先の授業に集中するように」

本条の冗談に皆の表情は少し緩んだが、それでも完全には晴れない。

——自分のクラスの誰かが、生徒を傷付けた犯罪者かもしれない。

……………

「春樹くーん、久しぶりー!」

学校へ着くなり、元気な美海の声が飛び込んできた。

「普通に土日挟んだくらいだろ? それに、電話もしたし」

「そうなんだけど、でもでも、いざ寮から出るなって言われてたら、なんだか寂しくなっちゃって」

正門の前で待ち構えていた美海は、春樹の姿を見つけると急いで駆け寄ってきた。その表情は嬉しそうだが、同時に少し不安そうでもある。彼女はそのまま春樹を引っ張って、グラウンド周辺の木陰まで連れて行った。

なぜだろう、と思っていた春樹に美海が告げたのは、琉花の様子のことだった。

彼女が言うには、琉花の様子は普段通りに見えるが、どうにも本調子ではない、ということだ。

「なんだろう、いつもの琉花ちゃんっぽいんだけど、1人でいるときにすごく悩んでるっぽい表情になるの。『どうしたの?』って聞いても、

はぐらかされちゃうの」

「そうか……俺もな、彼女と電話で話して……」

春樹が、電話で聞いた琉花の様子を話していると、

「おや、神城春樹に日向美海。おはようございます」

「あ、カレン。びっくりしたー」

「おはようございます、カレン先輩」

春樹の後ろから、今登校してきたカレンが声を掛けた。いつも通りの無表情だが、春樹と美海が何やら真剣な表情で話し合っていたらしい様を見て一言、

「那月琉花に関しては、少し様子を見るべきだと思いますです」

一瞬で内容を見抜かれた。

「春樹が聞いた琉花の様子と、美海が見た琉花の様子からして、彼女にはよっぽど隠し抜きたいことがあるようです。それを無闇に暴こうとすれば、当然、反発されることでしょう」

春樹は結局、琉花と電話で話したあと、不安になってカレンに会話の内容を報告していた。それと同時に、どうやらカレンは美海とも連絡を取り合い、琉花の様子を調べていたらしい。アンドロイドだから、抜け目のない子だな、と思わざるを得なかった。

「琉花ちゃん、何を悩んでるんだろう……」

「目先の練習に不都合がないのであれば、そつとしておくのも手かもしませんが、そうでないのなら、どうにか聞き出さなくてはならなくなるかもしれません」

「それって、無理やりってこと?」

「そうは言っていないでしょう。人間である以上、常に警戒心を保ち続けることは非常に困難です。どこかで警戒心が緩むのなら、そこを突く手もあります。ですが……」

カレンは一回言葉を区切って、再び口を開いた。

「彼女が仮に警戒心を保ち続けた場合、精神面において看過できない疲労を溜め込みかねません。気を病んでしまう前に適切な処置が必要になるでしょう」

「そんなことになるのか?」

「確定はしていません。ですが、その確率は高そうです。希美とも連絡を取りましたが、自室でも一切警戒を緩めていないようです」カレンは春樹と同じく数少ない中等部からの持ち上がり組だ。中等部は人数が非常に少ないため、学年同士の結びつきが非常に強い。なので、中等部上がりの希美とも仲が良いのだ。

琉花と相部屋の彼女にさえ隠しているということは、カレンの言うとおり、よほど隠しておきたいことなのだろう。

更にカレンは、春樹と美海を悩ませることを告げた。

「希美は、琉花がこのように言っていたということを教えてくれました。『言ったら嫌われる』と」

その言葉を聞いて、2人は思わず黙り込んだ。言ったら嫌われることとは、なんだろう。なぜ、琉花がそんなことを。

「まったく……三島冬吾もセニアと上手くいつていませんし、間を取り持つ私は大変でございます」

そのように茶化すカレンは鉄面皮だが、2人と同じように、実はものすごく頭を悩ませているのかもしれない。

「……とにかく、練習を欠かすわけにはいかないから、琉花には普段通り練習してもらおうしかないな」

春樹はそう呟いた。美海は頷いたものの、不安そうに春樹を見上げていた。

……………

寮で外出禁止が命じられている間も、美海と沙織は空いている部屋を借りて、希美の指導を受けていた。その間に、美海のダンスはかなり上達していた。

随分と久しぶりに感じる学校。クラスの様子は普段通りを装ってはいたが、皆どこか警戒心が強まり、いくつかのグループで固まって行動していた。特に、兎莉子を擁する美海が中心のグループは、何かと神経質になっていた。

クラスの雰囲気は、はつきりいつて良いものとは言えなかった。もちろん、生徒の中に犯人がいるかもしれないということを、教員は委員長と副委員長以外の生徒には伝えていない。そのはずなのだが、

『毒を盛られた』となれば真つ先に疑うべきは周辺の人間であり、特に過剰反応していた琉花は、言いくいがか——どこか疑われているように美海は感じた。もちろん、美海は琉花のことを疑ってははいないし、本人も努めて普段通りに振舞っていたようだが、その様子はどこか硬さが抜けなかった。

「わっ……とと！」

余計なことを考えていたせいで、バランスを崩す。数日前までは尻もちをついていたところだが、なんとかバランスを取り戻すことができた。

「美海ちゃん、大丈夫？」

「え、えへへ。大丈夫大丈夫」

「こら、美海。なんか余計なこと考えてたでしょ」

「あ……うん。ごめんなさい」

それを見て心配する沙織と、注意を促す希美。

「琉花ちゃんのこと、考えてたの……」

美海が正直に言うと、沙織も希美も口を閉じてしまった。特に希美は琉花と相部屋だ。同じ部屋でなければ、最悪意識しなくても良いのだが、同じ部屋で暮らしている、となれば、意識せずにはいられない。「……琉花のことは、大丈夫」

希美は、どこか硬い声で言った。彼女もまた、相当なストレスを溜め込んでいる。学業に加え、休日にはアイドルとしての活動がある日も多く、それでいて放課後に美海と沙織の指導にも当たっていて、尚且つ同室の琉花の様子はどこかおかしい。ストレスを溜めるなどいう方が無理な話だった。

「さ。練習、続けよ」

練習が再開する。美海は本当に上達していて、くるりと回るターンは、ツイントールが軌跡を引いてとても美しい。まだ粗はあるものの、始めた当初と比べれば雲泥の差だ。

昔から何かと物覚えが良い美海は、小学生の頃、希美のダンスをしよう見まねでやってみたら希美よりも上手く出来た、ということが何度かあった。

「ほら、どうよ希美ちゃん！ 結構上手くなったでしょ？」

「ん……そうね。上手くなった」

「いいなあ、美海ちゃん。私ももつと頑張らないと」

沙織は、体力はあるものの身体を使い慣れていないため、ターンをすればバランスを崩したり、回りすぎたり、といつて何度も失敗しているが、これが標準なのだ。綺麗に1回転するのは、思った以上に難しく、しかもそれを曲の流れに合わせて行わなければいけないため、相当な練習が必要になる。当然、ただターンだけしていればいいわけではなく、曲に合わせて歌を歌い、所定の位置まで決められたタイミングで移動しなければならぬ。アイドルのライブというものは、想像以上に大変なものだった。

そうこうしているうちに、練習も終わりになった。慣れている希美以外の2人はヘトヘトだが、これも始めた頃に比べれば良くなった方だ。

沙織は寄るところがあると行って、先に練習ホールを出た。残った2人が片付けをしている間、どうしてもたまらなくなつて、美海は希美に声を掛けた。

「あの、希美ちゃん？」

「なに？」

「その、琉花ちゃんのこと」

「……大丈夫」

「で、でも」

「大丈夫だってば！」

希美が急に大声を上げて、美海はびくりと震えた。

「あ……ごめんね。しつこかったかな」

「……私も、大声上げてごめん」

希美の声は、どんどん硬くなつていく。だが、美海は——気付かない。

「そのね、もし希美ちゃんがその……辛いなら、相談に乗るよって」  
「相談？」

希美は顔を上げた。普段の優しい笑みではない、疲れ果てた笑顔。

希美の中で、何か壊れてしまったかのように――

「……琉花と話した？」

「え？ うん」

「ただ話すだけじゃないよ？ あの子、最近私が言わなきや部屋でぼーっとしてるばかり。起こして、着替えさせて、ご飯食べに行かせて、学校行かせて、帰ってきたらお風呂入らせて、寝かせて……それ、やってみる？」

「え……」

美海の知らない事実を叩きつけられ、困惑した。希美の声は静かながら、どんだん熱を帯びていく。

「まあやらないよね。別にいいよ。誰もやりたがるわけないじゃん。いいの。……とところでさ」

希美は美海に詰め寄った。熱い吐息が顔に掛かる。話し声は、囁くように小さくなった。

「美海、随分上手くなったよね、ダンス」

「え？ そ、そうかな？」

「うん。すつごく上手くなった。……私よりも、上手いんじゃない？」

「そ、そんなことないよ」

「でもね、沙織はそこまで上手くないわ。でね、そっちが当たり前なの。普通は、上手くないのが当たり前なの」

「……………希美ちゃん？」

困惑する美海。希美は精一杯の笑顔になって、

「あんたのそういうところ、昔から大嫌いだった」

「え……………」

美海は言葉を失う。希美は、止まらない。

「私がどんなに辛い思いしてこここまで来たか分かる？ あんた達にやらせてるのなんて、初歩中の初歩よ。でもあんたは、どんだん上手くなっていくの。私が必死で努力してるのに、あんたは見よう見まねで上手くなっちゃう。理不尽じゃん？ 私はね、小学生の頃からずっとそう思ってた」

希美の口から紡がれる、妬みの言葉は、美海の心を刺し貫いた。ど

うしてこんなこと言われなきやいけないだろう。

頭の中で、理不尽だ、という思いがじわじわと脳全体を熱くしている中、その片隅で、逆に急速に冷え固まっていく箇所があった。

「あんたが私より綺麗にターンするたびに、いつもあんたを殴りつけなくなつたわ。ズルいつて。あんたが私より綺麗に歌うたびに、いつもあんたの喉を搔っ切つてやりたくなつた。でもしなかった。私が死ぬ気で努力すれば、あんたがたどり着けない場所まで来れるつて、そう思った。でも、結果はどう？ あんたは今でも私より綺麗に回つて見せたわ」

「のぞ、み、ちゃん……」

今や希美の手は美海の肩に掛かり、痛いほど握り締めてきている。

「あんたのそういうところが、昔から大っ嫌いだった！」

肩で息をしながら、希美が言い切つた。そして、美海の肩から手を放して――

……………

あの子の家に行くのが楽しみだった。だから、楽しくあるために私にするべきことは、できるだけあの子をあの子の両親から引き離しておくことだった。

「ママ、みてみて！ これ、私が描いたの！」

「あら、可愛いわね。よしよし」

「お前は将来、アイドルよりも画家になるかなー」

そうやって頭を撫でてもらうことが、どれだけ尊いことなのか、知らないの？

そうやって頭を撫でてもらったことのない子が、こんなに近くにいらつてこと、知らないの？

でも私は、何も言わなかったよ。

死ぬほど悔しかったけど、ずっと羨ましかったけど。

私は、何も言わなかった。

だって私、バカだから。

.....

その腕を、美海が掴んだ。

「……………」

希美が怪訝な表情で振り返る。

希美の言葉が——美海の中にある思いを切り裂いていた。押さえ込んでいた——彼女ですら忘れかけていた、思いを。

「そういうことなら、私だって同じこと思ってたよ」

「え？」

驚愕に目を見開いた希美に、美海は、

「私も、希美ちゃんが大好きだったよ」

静かな声音。それが逆に恐ろしく感じる。はつきり言って、希美は反撃を受けるとは思っていなかった。だからこそ、あそこまで強く言えたのだ。

「小学生の頃、よく希美ちゃんのお家に遊びに行ってたよね。私ね、希美ちゃんの家に行くの、楽しみだった。だって、あなたのお母さんはいつも私に笑顔で「いらっしやい、美海ちゃん」って言ってくれるから。休日に遊びに行ったら、お父さんも同じこと、言ってくれたよね。すごく嬉しかった」

——行ってきます。

「私、希美ちゃんが羨ましかった。いつも笑顔でお家で待っていてくれるお母さんがいて。休日には一緒にいてくれるお父さんがいて。ずっと羨ましかったよ。それでね、そんな幸せを当たり前だと思ってる希美ちゃんのこと、ズルだって思ってた」

——ただいま。

「希美ちゃんがお母さんやお父さんに甘えてるのを見るたびに、頭が燃えそうなほど悔しくなったよ。そういう風に甘えられる相手がない子がこの世にいるって、こんなに近くにいて、知らないのになって。見せつけられてるみたいで、悔しかったよ」

誰も「いつてらっしやい」って言うてくれなかった。



誰も「お帰りなさい」って言うてくれなかった。

「希美ちゃん、プログレスでアイドル目指してるってことを青蘭学園の人に知ってもらえたから、中学からこっちに来れたんだよね？ それでお父さんとお母さんも、こっちに来て一緒に住んでくれたんだよね？ 私はね、お父さんとお母さんに「青蘭学園からスカウトされた」って言ったら「好きにしろ」って言われたよ。学費が免除されるってことを伝えたら、それは嬉しそうだったな……」

——もうアイツ美海のために金を払わなくていいのか。

美海は皮肉めいた笑みを浮かべた。

「だから私は、そんな希美ちゃんが、大嫌いだったよ」

理性なんて働かず、言いたいことを言った。

美海は「ごめんね」と呟いて、希美の横を通り過ぎてバッグを拾い、外に出た。歩調はゆっくりだったが、どんどん早くなっていく。しまいは走りになり、同時に涙も溢れてきた。

もう空は暗く、雲に覆われて星の1つも見えない。

走りながら、後悔した。なんであんなこと言っちゃったんだろう。黙ってれば良かったのに。

思えば、なんて理不尽だろう。努力している人が、なんの努力もしていない人に負けて、妬ましいのなんか当然だ。希美の押し込めてきた怒りが遂に美海に向かったのだからって理解できる。

なのに、自分はどうだ。ただ優しい両親がいた、それだけで妬ましかったなんて。生まれなど変えられるわけでもないのに……言われた方はたまったものではないだろう。

「うっ……うっ……」

どうしよう。

自分はなんて身勝手な怒りを抱いていたのだろう、という美海の後悔は、考えれば考えるほど、走れば走るほど強くなった。

希美に謝らなければ。しかし、希美は自分に対してはつきりとした怒りを持っていた。それも、正当な怒りを。自分と持つ理不尽な怒りとは違う。理不尽な怒りで攻めてきた相手が謝ったところで、許してくれないだろう。

いつの間にか寮に着いていた。部屋に入る。まだ沙織は帰ってきていない。電気も点けずにベッドルームに駆け込むと、バッグを放り出し、ベッドに飛び込んだ。毛布をぎゅっと抱きしめ、そして、  
「うう……うわあああああ……」

毛布に顔を押し付けて、泣いた。誰にも見られないように――

……

「どうした、やけに気合入ってるけど」

「……………」

希美はひたすらにサンドバッグを殴りつけ、蹴り飛ばしている。中等部3年生の後半辺りから通うようになったボクシングジム。ここで希美は雄馬から戦い方を教わっていた。皆にはアイドルとしてのトレーニングをしている、と偽っている。この事実を知っているのは、彼と自分だけだ。

ジムに入ってきたばかりの雄馬が、異様に力の籠ったパンチやキックを繰り出している彼女を見て、怪訝に思ったらしい。希美は返事をしない。ただ目の前のサンドバックを叩きのめしている。

「希美?」

「……………」

「おい、どうした」

ガツン、という音を立てながら、希美はようやく両手でサンドバッグを止めた。

「なんかあったのか? あ、いや、琉花のことは大変だつて分かってるけど」

希美は雄馬の方を向いた。心配そうな表情だが、通常の人とはどこか「違う」心配だ。不安げな顔ではなく、むしろ眉をしかめて訝しんでいるかのようだ。だが、これが彼の心配だと希美は知っていた。

「……ねえ、雄馬くん」

「ん?」

「私さ、どうしても許せない小学生時代の友達がいるって言ったこと、あったよね?」

「ああ、そうだな」

「あれね、美海なの」

「……………そうだったのか」

その時点で雄馬は、大体の内容を察したようだった。希美は、自分がその友人に対してコンプレックスを抱いていることを既に打ち明けていた。

「……………喧嘩したな？」

「……………」

希美は、自分がなんて矮小な奴だったのだろうと、美海を責めたことを、2つの理由で後悔していた。

1つは、美海をアイドル活動に誘ったのは自分だということ。今なら、彼女は追いつけないだろうと思つたし、もし、もし仮に追いつかれたとしても、平静でいられると思つていた。

だが、結果はこれだ。ストレスが溜まつていたとは言え、自分から誘つておいて理不尽な怒りを美海にぶつけた、なんて最低な奴なのだろうと。

そしてもう1つが、美海も自分を妬んでいたということだ。希美は、「自分だけが」負の感情を抱き、その元に努力している——ある種の使命感に駆られていた。しかも悪いことに、自分自身がそれを高尚なものだと捉えている節があつた。自分だけが、そういった高尚さを持つているのだと勘違いしていた。だから一方的に責めても許されるのだと。

しかし、美海もまた希美に対して嫉妬の念を抱き続けていたことで、「自分だけが」という優位性は瓦解し、2人は対等な立場になつた。もう一方的に責めることはできない。

才能の差などは努力で十分に埋まるものだ。現に、美海のダンスはまだ粗が多い。小学生時代など、ターンを数回やつた程度だ。通して踊り抜き、歌い抜くことなどできるはずがない。なのに希美は、そんな才能の欠片に嫉妬を抱いていたのだ。

対して、美海が妬んでいたのは暖かい家庭だった。生まれは変えられない。冷たい両親の元に生まれてしまったのは不幸だが、だからと

いつて美海に何ができる？ だから、妬んで当然なのだ。羨ましいと思うのは当たり前だ。彼女の言うとおりで、それを当たり前だと思っている希美に怒りを抱いて、何がおかしいだろう？

美海がずっと抱いていたむき出しの生々しい感情を直にぶつけられて、希美は何も言い返せなかった。美海の言っていることは全く妥当なことで、むしろ希美は自分を恥じることになった。なぜ自分は、ちよつとした才能の欠片に必死になっていたのだろう。

自分はなんて無神経だったのだろう。美海は彼女自身の家に希美を呼んだことがなかった。その理由を考えたことが、なぜ1度としてなかったのだろう。

ちよつとダンスが上手い、そんな才能の欠片如きが、暖かい家庭の代替になり得るか？

そんなはずある訳ないではないか。

美海の怒りの理由を聞いたとき、希美は自分の立っていた足場ががらがらと崩れ、一気に地の底へ落ちていくかのような心地を覚えた。自分の嫉妬が如何に矮小なものであり、彼女の嫉妬が如何に高尚であつたかを思い知らされた。

怖かった。

いつも笑顔で、悩みなんて何も無い。美海はそういう子だと思っていた。

だけど、その裏にあんな暗い感情を隠していたなんて。

美海が淡々と自分の気持ちを吐露している最中に希美が何も言えなかったのは……今ならばつきりとわかる。怖かったからだ。

「雄馬くん……」

希美は雄馬の胸に飛び込んだ。彼は少し驚いたようだったが、すぐに手を回して背中を撫で始めた。

「美海も、私のこと嫌いだったって。お父さんとお母さんに、愛されてたから、嫌いだったって」

普通なら、その理由を聞いて「理不尽だ」と思うだろう。しかし、雄馬は昨年度、美海のスカウトに行っていた。その際、彼女の家庭の様子をその目でしっかりと見ている。あんな家庭で育ったのなら、暖か

い小鳥遊家を妬む理由も、十分に理解できた。

「すごく真剣に、私のこと恨んでた……！　もう許して、もらえないよ……」

涙を堪えきれず泣き出した希美の背をさすりながら、雄馬は彼女に  
なんと声を掛けたらいいのか、分からなかった。

……

学生時代に、女の子同士の喧嘩を仲裁したことが何度もある雄馬  
だったが、生徒同士の諍いとなると、下手に手を出すべきではないと、  
彼は理解していた。

なぜなら、美海も希美もいい子だからだ。雄馬が「仲直りしろ」と  
言ったら、仲直りしてしまう。自分の心に嘘を吐いてでも……それは  
「いけないこと」だと彼は思っていた。

——　　そういえば、紗夜と朝子が喧嘩した時はどうしたっけな……？  
紗夜と朝子が高等部1年生だった頃、物凄い大喧嘩をしたことが  
あったが、その時はメディオディアが喧嘩を仲裁していた。今回、そ  
の立場にあるのは沙織だ。

メディオディアは、雄馬が何も言わなくても双方の間を取り持って  
いた。

沙織はどうだろう。彼女は、とてもではないがメディオディアほど  
神経が図太いとは思えない。それは、彼女が生まれた時からそばにい  
た雄馬だからこそ、はつきりと分かった。

沙織を後押しするのは、正しいのだろうか？

「どうしようかな……」

嗚咽を上げる希美を抱きしめながら、雄馬もまた迷っていた。

## 青蘭島北部の地区配置

### ← 青蘭島北部の略図

学園特区：青蘭大学の広大なキャンパスが存在する地区。立ち入りは自由。敷地中にちよつとしたスーパーマーケットが点在するレベルには広大で、その他にもビジネスホテルや多数の飲食店がある。商業地区の近くには青蘭諸島で最も大きい病院である青蘭大学病院が存在している。

キャンパスの一部が青蘭学園高等部と中等部の敷地となっている。港湾地区：地区内でも東西で役割が分かれている地区。青蘭諸島の他の島との連絡船や、日本の本土と青蘭島を行き来する大型船舶が着くのが東側。主に漁船が着き、鮮魚の卸売市場が存在している漁港となっているのが西側。

商業地区：中央に巨大なショッピングモールが存在している地区。その周辺に様々な店がある（猫カフェやペットショップもあるよ）。活気に満ち溢れ、各所に公園や広場があり、屋台も多く出ている。学園特区にほど近い広場で店を構えているクレープ屋やチュロス屋は、青蘭学園の女子生徒に大人気。基本的に、ここの中で揃わないものはそうそう存在しない。

また、経済・行政地区に近い箇所には、少し古びた雰囲気居酒屋が立ち並び、商店街のような通りがある。当たり前だが、青蘭学園生は昼夜を問わず立ち入り非推奨。

経済・行政地区：青蘭諸島の行政を司る役所や、様々な企業ビルが立ち並ぶ地区。青蘭本部庁舎もここに存在している。とはいえ、完全なるビル街かといえばそうでもなく、青蘭諸島は地盤の関係上、8階建てよりも高い建物が建てられない条例があるため、平べったい建物がいくつも並んでいる。イメージとしては霞ヶ関に近い。企業人や役人たちが適度に息を抜くために、公園がそこかしこにある。どちらかといえば活気のある商業地区とは違い、落ち着いた気分になりたい

ならこちらの公園の方がオススメ。

居住地区：東と西の2つが存在する。東側は主に青蘭学園生や商業地区の店に勤めている人が、西側には経済・行政地区で働いている人が住んでいる。マンションもあるが、土地が余っているため一戸建ても多い。その中でもごく一部は高級住宅街となっており、セレブな人や偉い人が住んでいる。

東側には青蘭学園生のための学生寮がいくつか建っている。ちなみに、大学生用の寮もちゃんと存在している。

西倉庫群：様々な資材が置かれている倉庫群。開発が進んだ現在では、そんなに使用される場所ではなくなり、周辺の治安は若干悪い。管轄は青蘭庁執行部。

東灯台：突き出した岬に白い灯台が建っている。技術が進歩した現在では使用されていないが、世界接続当時は夜間の航行の際に目印として使われた。

青枝山：青蘭島中央にそびえる山。標高はそこまで高くなく、頂上まで森林で覆われている。商業地区の南側には、青枝山の中に位置する青蘭神社へと続く階段がある。

目撃者の話によれば、この青枝山を覆う森林には《青蘭の守り神》と呼ばれる何かが生息しているらしいが、その姿を捉えた写真は1枚も存在していない。

## 第6話 「会長に任せちゃいなさい」

謝りたい。

ただ、下手したでに出るのも卑屈だと思われかねない。「こいつは下手に出て仲直りしようとしている」そう思われたら、それこそ二度と仲直りできなくなってしまう。

だから美海は翌朝、希美と出会うなり、

「おはよう、希美ちゃんー!」

とびきりの笑顔で挨拶した。

希美の表情は硬かったが、一瞬強ばった表情になるものの、すぐに普段通りの表情になると、

「おはよう、美海」

同じように、笑顔で挨拶した。

隣にいる沙織は、何も気付いていない。美海は沙織に昨日のことを話していないし、希美も同じようだ。

とにかく、ステージを控えているというのに、個人の感情でそれを台無しにするわけにはいかなかった。その思いは、どうやら希美も同じようだ。

朝食の席に着く。表情は普段通りだが、言葉数が少ないのはどちらも同じだった。

美海と希美の静かな戦い。言い争ったり、暴力を振るったりしない喧嘩。それはさながら第2次世界大戦後から40年以上も続いたアメリカとソビエト連邦の戦争——冷戦のように静かな幕開けであった。

……………

『あつ、ととー!』

放課後のブルーミングバトルの練習中、美海が尻餅をついた。普段とは違う感じに風を吹かせていたところ、誤った方向に推進力が生まれ、真後ろに倒れたのだ。無論、リンク中であるため、痛いのは春樹だ。



「美海、大丈夫か？」

『う、うん。大丈夫大丈夫。ごめんね春樹くん』

バトルフィールドの障壁を挟んでインカム越しに聞こえる声は、どこか弱々しかつた。美海が、エクシードの応用について悩んでいるのは知っていたが、今日春樹が「一緒に考えようか？」と聞いてみたところ、「大丈夫だよ」と言われてしまったので、そのまま放置している。美海には、傍から見てもマズくなっていたら手を貸そう、と決めた。その思いのまま視線を逸らし、今度は琉花の方を見る。

彼女のエクシードは、目に見えて落ち込んでいた。今も、額に汗を浮かべながら水を操ろうとしているが、αリンクしているにも関わらず、操れている水の量は前回のバトルの時の半分以下。今回のバトルには忍が出場しないため、琉花は武器である水を生成するために水行符の扱いも練習しているが、事件の前と比べて扱いに苦難しているようだ。

琉花の表情は硬く、真剣だ。しかし、リンクしているから分かる——その裏に何かもつと暗い感情が潜んでいる。琉花は、春樹とリンクしているにも関わらず、その感情をほとんど隠し通している。

「琉花？」

『……………』

「大丈夫か？ リラックスしろ」

『……………うん、分かった』

春樹の言葉を受けた琉花は、少なからず力を抜き——操っていた水が地面に落ちて弾けた。そして、服が濡れるのも厭わず、びしょびしょになった人工芝の地面に仰向けになった。肩で息をしているので、かなり力を込めていたのだろう。琉花の練習効率は、明らかに悪化していた。

春樹はフィールドの中でエクシードの練習をしているカレンに視線を見やる。それと同時に彼女もまた春樹に視線を送ってきていた。やはり彼女も、琉花の様子が懸念なのだろう。

「美海、いったんフィールド解いてもいい？」

『え？ うん、いいよ』

美海の了解を得ると、春樹はαドライバーゾーンにαデータパッドを置きっぱなしにしてゾーンから出た。αドライバーがαドライバーゾーンから離れると、バトル続行不可能とみなされ、バトルフィールドも解ける。

春樹は水で湿ったフィールドを横切り、琉花のそばに行った。

「大丈夫？」

「……うん、大丈夫」

「起きれる？ ほら」

「——ん、ありがとう」

春樹が手を差し出すと、琉花は一瞬躊躇った後、手を掴んでくれた。美海の様子を横目で見ると、フィールドが解けるなり地面に座り込んで、何やら物憂げな眼差しで空を見上げていた。

バトル前だというのに、チームの様子は、はつきり言ってボロボロだった。一番の理由は琉花だが、何やら美海の様子もおかしくなった気がする。

2人とも、聞いても何も答えてはくれない。それでは何も解決しないことは分かっているが、それ以上押したところで、どうにかなるとも思えなかった。

(せめて、兔莉子がいてくれれば……)

しかし、現在彼女は青蘭大病院で、最後の検診を受けている。チームがこんなことになっている今、あの柔らかな笑顔が恋しかった。それに、彼女なら、今のチームをつなぎ合わせられるかも、と思ってしまうのだ。

そこに、カレンが寄ってきた。

「琉花、練習効率が低下しているようでございます。何か懸念がおりでしょうか？」

「え……いや、その……別に」

「話したくないのならそれでも構いませんが、練習効率は元に戻すように。1人が崩れれば、チーム全体が瓦解します。いいでございませうですか？」

「……はい」

「それと、美海」

「は、はい！」

「新技術の開発はどのように進んでいるのでございますか？」

「え？ それは……あの、まだ、です」

「早く完成させるように。土壇場で思いついた付け焼刃の技術では、どうやっても戦略に綻びが生じます。質よりも量。できるだけ早く開発し、練習時間を伸ばすように。いいでございますですか？」

「は、はい……」

カレンは、いつそ冷たいと言えるほどの態度で美海と琉花に接していた。でも、カレンとしては、これが最適解だと思っただろう。

春樹は、内心カレンに感謝した。彼女は、優しや故にプログレスに対して強く出れない春樹に代わって、憎まれ役を買って出ているのだ。彼女自身が現在春樹の部下である、その有り様を、言外に示している。

（俺は、リーダー失格だな）

カレンは、春樹の指示を待たずに独断で行動している。春樹のためを思っていることだろうが、それが逆に、任せられない頼り無さを暗示しているようだった。

（いや、落ち込むな。だってカレンは言っただじやないか）

——私は、今の貴方様に対して「頼りにしています」などは決して言いません。が、それは貴方様が頼りないからではなく、貴方様自身が人を使い慣れていないからでございます。

そう。使い慣れていない。春樹が琉花と美海に強く出れないのも、人を『使う』ことが真にどういうことであるか、理解していないからなのだ。

目標はなんだ。そう、バトルに勝つこと。じゃあ、それを達成するにはどうしたらいい？ チーム全体で強くなる。そのためには、調子の出ていないメンバーのケアをしてやる必要がある。

優しく言ってもダメなら、叱ってでも。

目標のために人を『使う』とは、そういうことなのかもしれない。しかし、カレンが正しく理解しているように、春樹は『使う』こと

に慣れていない上、慣れたとしても、恐らくそれが苦手であろうことは分かっていた。

(厳しいのは、カレンだけでいい)

だから春樹は、琉花の背中を優しく撫でた。かつて兔莉子が春樹にしたように、心の中の恐れを和らげるように。

「大丈夫。ゆっくりでいいからな。焦らないで」

「……うん、ありがとう」

琉花はこちらを向いて、弱々しくだが、微笑んでくれた。

「琉花だけ辛い思いし続けなくていいんだよ。俺のこと、頼つてくれたら嬉しいな」

「ん、大丈夫。まだ頑張れるよ」

ここまでしてもなお意地を張り続けられるのはいつそすごいと思つたが……これが本音でないとも言切れない。心の中を完全に知ることなど、不可能なのだから。だから、意地を張り続けられる限りは、見守るだけでもいいのかもしれない。

春樹は琉花に「頑張ろう」と声を掛け、背中をポンポンと叩くと、彼女のそばを離れ、美海の方に向かった。

美海は、シヨンボリとしていた。カレンに叱責されたのもあるのだろうが、今日の美海はそれ以上に何か変だった。上の空、とでも言えればいいのだろうか。

「美海?」

「春樹くん」

彼が近付くと、美海は座ったまま彼のズボンを掴んだ。その仕草を、どこか変だと思つた春樹は、屈んで彼女と視線を合わせた。

「どうした、大丈夫か?」

「私、ダメなのかなあ……」

彼女の手が、所在無さげに人工芝の地面を撫でているのを見て、春樹はその手を掴んだ。彼のよりも小さくて、柔らかくて、暖かい手。

「……?」

首を傾げて春樹を見る美海。その目ははっきりと「不安」を映している。春樹は掴んだ手を両手で握ると、

「大丈夫だよ、美海。俺が付いてる」

握ったその手にまじないを掛けるように呟いた。大丈夫、大丈夫と、何度も繰り返す。

「ちよつとした悩みでも聞くよ。不安なこと、ある？」

「……な、ないよ」

「じゃあ、新技、期待してもいい？」

「えっ？」

美海が言葉に詰まったのを見て、ほらやっぱり、と思う春樹。新技の質問は、ちよつとした意地悪のつもりだったが……。

「一緒に考えよう。1人よりも、2人で考えたほうが、きつといいものができるよ」

「いいの……？」

「もちろん。チームメイトだろ？ それに、俺はお前の、パートナーだから」

噛んで含めるように、美海に言い聞かせる。頼ってもいい存在はここにいるのだと、自覚させるために。

「じゃあその……お言葉に、甘えちやおうかな」

美海ははにかんでそう言ったが、その曖昧な表情からは、何かまだ言い出せないことがあることが分かった。

でも、それを指摘はしなかった。

……

数日後の昼休み。

樹理は購買で昼食のパンを買った帰り、飲み物を買うために校舎端のあまり人気のない自動販売機に向かった。

「ん……？」

そこに、1人の少女がいた。自動販売機の前できよろきよろと戸惑っている様子だ。恐らく異世界出身の子だろう。この世界に来たばかりの子は、青蘭諸島の基軸通貨である円の数え方や、そもそも自動販売機の使い方を知らなかったりするのだ。

「きみ、大丈夫？ どれが欲しいの？」

樹理は少女に訊ねた。振り向くと、胸に紫色のリボンを付けてい

る。青蘭学園生は胸に付けるリボン（αドライバーはネクタイ）の色が出身世界毎に分かれており、紫色は黒の世界出身の証だ。背はそれほど高くないが、流石に樹理よりは高い。ダークシルバーの髪をポニーテールに結っている。

少女は喋らずに、一番上の段を指差した。樹理がジャンプしなければギリギリで届く高さである。

「うっ……ちよつと待ってね」

樹理は少女から受け取ったお金を入れて、ジャンプしてボタンを押した。がこん、とペットボトルが下の取り出し口に落ちてくる。それを渡された少女は、しばらくペットボトルを眺め、べこべこと指先で凹ませたりした後、なるほど、と得心した様子で、同じように飲み物を買った。

「はい、あげる」

「え？ お金……」

「教えてくれたお礼」

少女は最初に樹理が買った方のペットボトルを押し付けると、足早に立ち去った。飲みたかったものはこれでは無かったのだが……

「……まあ、いつか、こっちでも」

事件発生後、単独行動はできるだけするなど言われているため、樹理は特に気にすることなく、教室に戻ることにした。

………

美海と希美の喧嘩を知る者は当事者しかおらず、いつも一緒に昼食を取っているメンバーですら知らなかった。ただ、当然ながら互いに積極的に口を利くことはない。

美海はパンをかじりながら、沙織と話す希美をチラリと見た。別段気にしていないように見えるが、ひよつとして呆れられているからなのだろうか。

なにかきっかけがあれば……しかし、そんな幸運はそうそう訪れない。手がかりを掴めないまま、もそもそとパンをかじる。

そこに、

「どーしたのよ、そんなシケた顔して」

「ソフィーナちゃん」

美海の両肩に手を置いたのはソフィーナ。振り返ると、いつものツンツンした表情にどこか心配を混ぜたような顔をしている。

「最近、なんか元気ないんじゃない？」

「そうかな？ でも、心配してくれてありがとう」

「べ、別に心配してないわ。うるさくないのは好きだから！」

「……普段は嫌いつてこと？」

「そ、そうじゃないけどー！」

自分から話しかけておいてしどろもどろになっているソフィーナ。だが、彼女のそういうところが——豪胆そうに見えて非常に心配性なところが——美海は好きだった。

そこにリゼリツタも寄ってきて、誰彼構わずからかいまくってソフィーナに追い掛け回されていたり、俊太に激突して吹き飛ばしたり、何故か混沌としていたが、

(これでも、いいのかな……)

その思いは、果たして弱気から来るものだったのか、美海は判断できなかった。

「それでね、これもらったの」

「ふーん。でも、暗い銀髪のポニーテール……三日月寮にそんな生徒いたかしら？」

「中等部生なんじゃないの？」

昼休みも終わりに差し掛かり、樹理の、さつき変な子がいたんだよという話を、結局リゼリツタに追いつけなかったソフィーナと一緒に聞いていると……目の前で、異変が起きる。

既視感。

前回は兎莉子だった。今回は——樹理。

それは、明らかに前回兎莉子に起きた症状と完全に一致していた。

「樹理ちゃん!!」

「樹理!!」

美海は叫ぶことしかできなかったが、ソフィーナは違った。胸を抑えて痙攣する樹理を床に横たえて押さえ込むと、懐から取り出した紙

——先日、本条から受け取った呪符だ——に力を込めて、その胸に叩きつけた。紫色の光が呪符から溢れ、樹理の中へと入り込み、駆け巡る。

クラス中は騒然としていた。

「誰か！ 近くから教員を呼んで！」

「わ、分かった！」

美海を含む数人が教室の外へ駆け出し、たまたまそばにいた教員を教室内に呼び入れる。

呪符の効果が効いてきたのか、荒くなっていた樹理の息は、徐々に落ち着いていく。だが、依然として苦しそうだ。

「……効いたみたいね」

ソフィーナがそう呟いた。

その瞬間

「いやあああああつ!!!」

悲痛な叫び声が上がった。樹理ではない。発声源は——琉花。彼女は頭を抱えて、目をギュツと閉じて蹲っている。まるで、何かから身を守るように。何か巨大な恐怖に、まさに襲われているかのよう。

「やめてよ！ もう私を虐めないで！ お願い、なんでも言うこと聞くから、助けて！」

また、である。しかし、前回よりも遥かに強く、何かに怯えている。床に転がった彼女は、心配して彼女を見やるその目をまさに恐れているかのよう縮こまり、何度も床に頭を叩きつけた。

その狂気的な行動に、周りの数人——いつも琉花と仲良しな体育会系の少女ら——が慌てて彼女を取り押さえ、大丈夫、どうしたの、と鎮静の言葉を口にするが、琉花の暴れ方はより一層激しくなるばかりだった。

「やだ！ やめて！ 私じゃない！ それをやったのは私じゃないの！ 私じゃないの！」

そんな琉花の様子を気にしながらも、別のことに気を引かれた人物がいた。ソフィーナである。



「魔力線……?」

樹理の胸とその上の宙を交互に見やりながら、そう呟いた。

……………

「な……っ!?!」

少女は、自分の胸に灯が点くのを感じた。物理的な灯ではなく、魔力の灯。<sup>トーチ</sup>即ち、

「マーカー……!?!」

してやられたと思い、転移魔法を試みるが、使えない。結界で押さえ込まれているようだ。逆に、ふと冷静になって、使えないことに感謝した。灯が点いたまま転移したら、基地の位置がバレてしまう。

彼女は、既に勝機が欠片も残っていないことを知った。

「くそ……!」

こうなったら、足で逃げるしかない。灯が消えるまで、逃げ続けるのだ。

……………

職員室にいた本条は、標的が罫に引つかかったことを知った。

各クラスの委員長と副委員長に渡した呪符の目的は当然、治療のためだが、真の目的はそうではない。

前回の事件の原因は呪物だったが、それは兎莉子の体内からしか見つからなかった。これは変だと思った魔捜課の面々は、黒の世界の魔術医の力も借り、どうにかして原因の特定ができた。

原因は、彼女が当日飲んでいたペットボトルのお茶だった。もちろん、ただの中毒ではない。その茶の中には呪物の誘導物質が入っており、それが兎莉子の体内の霊気と反応して呪物になったのだった。そして、兎莉子は当日、自販機の前で誰かと会っているという。

ただ、これだけでは犯人の特定はできない。当たり前前の話だが、犯人の姿が誰にも見られずに毒を入れられた水が、後になって「これには毒が入っている」と分かったところで、それだけでは犯人の特定はできない。

そこで決定打となったのが、この誘導物質は単に兎莉子の霊力と触れるだけでは反応せず、どこからか起動させられた、ということだっ

た。

つまり、

「誘導物質を起動させてから数刻は、まだ誘導物質と犯人が霊力で繋がっている、という仮説は、当たっていたようですね」

それを逆手に取った犯人特定の手段が、本条の作り出した呪符だった。呪物を体内に入れてしまった生徒を治すと同時に、恐らく体内の誘導物質を起動させるための呪力線を辿り、その果てに霊力マーカーを灯すというものだった。

「……そこですか」

これも、委員長・副委員長の迅速な対応のおかげだ。そちらの処理は別の人物に任せるとして、まずは、

「蒼月さん、ステラさん。標的を発見しました。1階、玄関にいます。直ちに確保を」

『りよ、了解しましたー！』  
『了解』

インカムで生徒会の2人に連絡した後、もう1人に連絡をする。

「今、どこにいますか？」

『はい、魔術工房にいます。もしかして……』

「ええ、そうです。できるだけ早く帰還するように。恐らく犯人は校門から逃げるでしょう。先回りしてそちらを塞ぐように」

『了解しました』

その後、教員と風紀委員にも指示を出し、続いて魔捜課にも出勤を願う。断固確保。それ以外に道はない。

「……覚悟してもらいましょうか。青蘭学園を敵に回すと、怖いですよ」

本条は暗い表情で呟くと、先程から開いた手の平の上にある光の球体を転がした。

魔術ではない。彼女のエクシードウオーラル・プロジエクター《壁礫》は、既に起動している。

……………

校舎3階、高等部2年生の教室。絵麻は机の横に立てかけておいた

丸盾を手を取った。

「絵麻。自分は兵装を整えてから出動する。先導して」

「オツケーだよー!」

慌ただしい教室内。春樹や冬吾など数名は1年生の教室へ向かって状況を確認している。

そんな中、

「ほんじゃま、行こっかー」

常の間延びした口調のまま、絵麻は窓際に寄り、窓を全開にした。そこから、全く緊張を感じさせないまま、飛び降りた。

生徒会と風紀委員は前もって、有事の際にはエクシードの使用を許可、との命令が下っている。

なので絵麻は、地面に接触する間際、脚に力を込め、着地に伴う衝撃の一切を地面に散逸させた。

現生徒会副会長たる蒼月絵麻のエクシード、力の方向を操作するサイ・オウ・フォース《流 留 錨》である。

生憎、絵麻は靈気に疎い。その為、犯人には靈力マーカーが付いていますと言われてもよく分からない。が、明らかに不審な人物が1人いた。暗い銀髪のポニーテール。あんな生徒は見た事がない。

「——フツ」

絵麻はその少女に向かって、全く予告無しで盾をフリスビーよろしく投げた。ただ、肘から先の動きだけで投げた割には、勢いはフリスビーレベルのものではない。空気を切り裂いて猛進する盾に全く反応できなかつた少女は、その一撃を真正面から受けた。

盾は、狙ったように絵麻の手元へ返ってくる。この盾は、実はデルタが作成したもので、絵麻のエクシードの影響を遠隔で受けることができる。つまり、跳ね返るだけのエネルギーがあれば、どこに投げても絵麻の元に返ってくるのだ。

絵麻が驚いたのは、地面に思い切り叩きつけられた少女が、なんのダメージも受けていないかのように起き上がり、脱兎のごとく逃げ出したからだ。

「ちよ、嘘でしょー」

唾然とする絵麻。当然だろう。この盾は、数回当てればコンクリートさえ砕くのだから。しかし、いつまでもぼーっと突っ立っているわけにはいかない。犯人は目の前にいるのだ。絵麻もバスケットボールで鍛えた脚で追いかける。

その横を颯爽と駆け抜ける、黄金の影があつた。ステラである。

「自分が、止める」

そう呟く彼女は、ジャケットを脱いだ制服の上に、兵装を着けている。両腕と両脚と腰に、何やら丸い透き通るプレートを多数埋め込んだ、奇妙な機械だ。そして現在、腰の後ろ側と両足の踵・足裏に位置するプレートから、エネルギーの光が発せられていた。

ステラは難なく少女に追いつくと、そのまま右手を引いて腰だめに構えた。左手は添えるように前へ。右ストレートの構えだ。

そこから、右肘と左手の平のプレートがエネルギー光を発した。それはそのまま推進力となり、右腕が前へ、左腕が後ろへ、それぞれ動く。更に、背中の右側と左の脇腹付近のプレートもまたエネルギー光を発し、彼女の身体全体が左側に振れる。

その右ストレートの威力は絶大だった。走っている最中にも関わらず、プレート状のブースターから発せられるエネルギーで理想的な攻撃を行う。しかも、

(次は、こっち)

ステラは、少女の背中に拳をクリーンヒットさせ、衝撃でその背中が遠ざかる最中、加速した思考で次なる攻撃の手を考えていた。

まず、思い切り突き出した右手を開き、手の平を外側に向ける。続いて、僅かに右足を持ち上げる。左回転中のエネルギーをそのまま利用し、右手の平、左手の平、腰、左足の甲、右足の踵と足裏のブースターをほぼ同時に起動。

結果的にステラの左回転の勢いは更に高まり、持ち上げた右足でのトキックが少女の背中に突き刺さった。

これがエクシード《七七式加速強襲兵装》によるステラの連続攻撃である。アーマーの各所に埋め込まれた数十個の薄型リフレクター・コアによるブースターは、そのままでは全てを制御しきれない。しか

し、そこに彼女自身の異能である『思考加速』が組み合わさることで、一瞬と思えるほどの間に使用すべきブースターと生み出されるエネルギーや身体の動きを算出できるようになる。そこから生まれる驚異的な機動力と瞬発力をもって敵を追い詰めるというコンセプトの元に作られた戦術なのだ。

背中への右ストレート、直後にその勢いそのまま放たれたトーキックを食らった少女は、冗談抜きで数メートル吹き飛んだ。

流石にこれを受けて立ち上がれる者などいるわけがない。

だからこそ瞠目する。少女は平然と立ち上がり、再び逃げ出した。

「な——」

「うそー」

追いついた絵麻もやはり啞然とした。あれだけ吹き飛ぶほどの攻撃を受けてノーダメージというのは、考えられなかった。ステラは、絵麻の攻撃が通らなかつたのを見ており、ほぼ手加減なしで攻撃を放っていたのだが……それでも少女は全くひるまない。

だが、絵麻がちらりと見た。少女の首に見える、黒いチョーカー。

「ステラ、あの子を抑えてー!」

「了解」

先んじて絵麻が再び盾を投擲し、盾は植え込みのコンクリートに反射して少女の脚に当たった。体勢を崩して転ぶ少女に、ブースターにより一瞬で肉薄したステラが、その首と腰を抑えて動きを封じようとする。

が、

「くっ!」

バチイッ! と電気が弾ける音がして、ステラが吹き飛ばされた。電気の魔術が使われたのだ。少女は立ち上がると、首元のチョーカーを指さした。

「これは加護のチョーカーよ。これを着けてる限り、私は物理的な攻撃を一切受け付けない」

「そんなー……」

「……反則」

つまるところ、この2人では彼女にダメージを与えられないということだった。押さえ込もうにも魔術で邪魔される。

やれることは、ひたすら足止め。はつきり言って情けないにもほどがあった。しかも、少女の方もこちらの攻撃を見切り始めている。

そうしてのらりくらりを繰り返す間に、校門が迫ってきた。あそこを抜けられたら、本条の結界で押さえ込んでいる転移魔法が使用可能になり、逃げられてしまう。

「どーしょー……」

「まづい……」

まさに打つ手なし。少女が勝ち誇った顔で校門を抜けようとした……その時。

「2人ともありがとう。もう大丈夫ですよ」

澄んだ声が辺りに響き渡った。校門の前に、1人の少女が立っている。金の線条細工フィリグリーの装飾を多分にあしらった分厚く長い黒コートを肩から羽織り、腕まくりした学園指定のワイシャツの胸元には、白の世界出身であることを示す黄色いリボン。やや青みがかつた銀髪は結われることなく優雅に宙を泳ぎ、その瞳は深い海のような碧あお。

その少女は胸の前で両手の指を組み合わせると、左右に引き離れた。その間には、白く煌く魔力の糸が束ねられている。コートの線条細工も白く輝いた。

少女は右手を後ろへ引き、左手から糸束を巻き取るようにぐるぐると腕を回すと、左手から糸を切り離し、右手を向かってくる少女へ思い切り振り下ろした。

右手に巻かれた魔力の糸束は、まるで鞭の如く少女を襲う。

「うがあああああっ!？」

効果はてきめんだった。度重なる絵麻とステラの攻撃にも一切動じなかった少女は、地面に倒れ、苦痛にのたうち回っていた。

「インカムから聞こえましたよ。『物理的な攻撃は一切受け付けない』と。どうですか、魔力の鞭で霊体を打たれた感触は」

コートの少女は呟く最中も手を休めず、その手から生み出される白い光の糸を幾筋も放ち、たちまち少女を拘束した。線条細工のような

白い光に縛られた少女は、その意識さえも束縛され、気を失う。

そこに、絵麻とステラが駆け寄ってきた。

「助かりました、かいちよおく」

「不甲斐ない……」

泣きつく絵麻と、俯くステラの頭を同時に撫でながら、

「大丈夫ですよ。会長に任せちゃいなさい」

当代の生徒会長——バイタルコードΩ11、プロダクトコードMA P-003、個体名称エミルⅡアンナは、まるで2人の姉のような笑みを浮かべた。

……………

『無事に確保しました。このまま教務課と魔捜課に身柄を引き渡します』

「ありがとうございます、エミル会長」

『危ないところでした。先生の結界から抜けられていたら……』

「その時は、霊脈を捻じ曲げて私のところに転移させましたよ」

『なるほど、流石は本条先生です。歴代生徒会長の中でも最強と言われるわけです』

「最強は初代ですよ。……まあ、結界に関してだけなら、初代にも負けるつもりはありませんが」

……………

完全に頭を抱えて縮こまる琉花を前に、春樹は声を掛ける。

「琉花……?」

彼女は一瞬春樹の方を見たが、

「来ないで！ 私を虐めないで！ お願いだから……やめて……」

彼を、はつきりと拒絶した。

どうしたらいいのか、分からなかった。隣で立ち尽くすカレンにも、名案は浮かんでいないようだった。

「許して……ゆるしてよ……私じゃないの……違う、違うの……」

戸惑いに足元がぐらつき、迷いから視界が歪む。そんな中で、完全に錯乱してしまった琉花が、見えない何かに許しを乞い願う声だけが、ずっと彼の耳元で反響していた。

第7話「そんな完璧なやつのパートナーになんか、俺はなれない」

小さい頃から、彼女は親しい幼馴染であると同時に、憧れの存在だった。

でも、彼女の才能はすごくて、いつか置いて行かれちゃうんじゃないかって、怖かった。

そして、置いて行かれた。

それが悔しかったから、俺は頑張れたんだ。

再会した彼女は、俺よりもずっと前にいたから、また悔しくなった。

……

「……琉花？」

「……………」

「朝ごはん、食べないの？」

「……いない」

「でも、学校には……」

「……行かない」

「……そっか。じゃあ、小春さんに言っとくね」

「……………」

取り付く島もない。希美は仕方なしに寝室を出た。

樹理が、兔莉子と同じように呪いを受けた翌日。彼女は青蘭大学病院で一晚を過ごし、今日1日は検査を受ける。だが、樹理の治療も兔莉子の時のノウハウがあるため、比較的早く終了することだった。

また、一連の事件の犯人が捕まったと聞き、生徒たちは大いに安心している。

ただ1人を除いて。

「おはよう、希美」

「おはよう、葵。兔莉子は？」



「もう先に下行ってる」

隣の部屋から出てきた葵とたまたま出くわした。希美の疲れた表情を見るなり、葵は心配そうな顔になる。

「……大丈夫?」

「え? うん。大丈夫」

「でも、夜中間こえたわよ。琉花の……」

「……まあ、しょうがないよ」

夜。再び錯乱状態に陥った琉花は前回と同じように睡眠魔法をかけられた上で寮に送られたが、睡眠魔法が切れ、彼女自身の眠りになつた後が酷かった。悪夢にうなされていたのか、夜通し大声で泣き喚いていたのだ。希美はどうにかして落ち着かせようとしたが、琉花は見えない縄から逃れようとするかのようにベッドの上で大暴れしていたため、仕方なくリビングのソファで眠った。

「琉花は大丈夫なの?」

「……ごはんも食べたくないし、学校にも行きたくないって」

「……そう」

琉花は外界とのコミュニケーションをはっきりと拒絶していた。この後、寮監の小春にも相談するつもりだが、はっきりいって説得できるとは思えなかつた。それに、一部の教員も琉花の様子を目撃しているため、彼女が学校を休むことを無碍には断れないだろう、とも思った。

「……琉花、どうしちゃったのかしら。いつもはあんなに元気なのに……」

「分かんないけど、原因については、喋るのすら嫌がっていたの」

「……難しいわね。無理やり聞き出すのは可哀想だし……」

「とりあえず、しばらくは様子を見ないと」

希美は、どこかいらついていた。錯乱してもなお頑固な琉花に、喧嘩中の美海。目前に控えたブルーミングバトルとステージ。どれもこれも心を強く押しつぶしている。これほどのストレスを抱え込んでも耐えられるのは、この寮生の中では希美しかいないだろう。

だからこそ、これ以上重石を増やすわけには行かない。今まで頑

張って来れた彼女でさえ、もう破綻寸前なのだ。

「立ち話もなんだし、下、行こっか」

「そうね」

葵を連れ立って下の階の食堂に向かおうとした、その時、

「あ、葵ちゃん。と、希美ちゃん。お、おはよう」

「あら美海。おはよう」

美海が部屋から出てきた。最初に葵を見、次いで希美を見て、少したじろいだようだった。いらついている心が外側に出てしまったのだろうか。寸刻の間、言葉が出なかった。

何か支えが欲しかった。光が欲しかった。暗い闇の中でもがき続けるための標しるべとなる光が。例えばそれは、いつも能天気で明るい笑顔……。

「お、おはよう、美海」

希美は不自然に釣り上がった笑みで挨拶をしたが、美海の薄皮を張ったような警戒は解けなかった。

………

朝食を食べている間、美海は何度も希美の様子を伺っていた。先ほど挨拶をした時、希美が酷くいらついていたのが分かったからだ。

——でも、当たり前だよ。琉花ちゃんがあんな風になっちゃって、バトルもステージもあるのに。

だからこそ、喧嘩中である身が疎ましかった。

自分のことを嫌いだと告白した希美に対して、それでも今の彼女を支えてあげたい、と思う気持ちは、自分でも驚くほど強かった。しかし彼女は、果たして自分が嫌っている奴に助けられたいと思うだろうか？

美海は、妬ましさが先行して希美のことを攻撃したことを反省していた。それでも、攻撃したという事実は消えない。希美は忘れないだろう。そんな奴が手を差し伸べたところで、手を取ってもらえるのだろうか？

「……なに？ 顔に食べかすでも付いてる？」

「えい！ う、ううん、何でもないよ！」

突然声を掛けられて、思わず不自然な返答をしてしまった。今の彼女の言葉には、別段険があるようには聞こえなかった。だけど、彼女はアイドル。本心を隠すことなど、容易なのだろう。

いつも騒いでいる美海が静かで、ムードメーカーの琉花がない食堂は、嫌に静かだった。

.....

数日前に遡る。

ハイネは悩んでいた。ブルーミングバトルについてだ。

元々、ブルーミングバトルは高等部2年にならなければ出場できなかったが、先日、規制緩和によって高等部1年生でも出場が可能になった。そして、ハイネは今から約3ヶ月後に開催される、夏のブルーミングバトルに出場しなくてはならなくなった。

「なに変な顔してるのよ、ハイネ」

「そんなに変な顔してる?」

「額に皺が寄ってるわ。変なの」

「うつさい」

時は放課後。隣のソフィーナがからかってくるが、気にしない。

実は、チームに加えたいプログラメスは既に決めてある。ソフィーナはその内の1人で、既に「私のαドライバーがあんたなのは当然ね」と承諾してもらっている。問題は残りの子が承諾してくれるか、だが

.....

「ハイネく〜ん!」

廊下を歩いていると、後ろから声が掛かった。あまり振り返りたくなかったが、生憎相手は偉い人なので、仕方なく足を止めてそちらを向いた。

「こんにちは、会長」

「あく、また会長と呼んだ〜! エミル、って呼んで?」

「.....エミルさん」

「はい、おはよう〜!」

「いや、もう放課後ですけど」

視線の先にいたのは、やや青みがかった銀髪の美少女だった。身長は少し低めで、ソフィーナと同じくらいだ。ジャケットを着ずにワイシャツを腕まくりしており、胸元には白の世界出身を示す黄色いリボン。瞳は深い海を思わせる碧<sup>あお</sup>。

そんな彼女が何よりも特徴的なのは、ジャケットを着ていない——その代わりに、膝ほどの長さの分厚く黒いコートを、袖を通さずに羽織っていることだ。袖口や裾などの箇所には金色の線条細工<sup>ファイリグリー</sup>が多分にあしらわれ、窓から差し込む陽光を浴びて優しく煌めいている。そして、腕を通されずに宙を泳いでいる左袖には『生徒会長』の腕章。

名前は、プロダクトコードMAP-003、バイタルコードΩ11、個体名称エミルⅡアンナ。青蘭学園の現生徒会長であり、世界接続後に新機軸の戦力として考案された魔導アンドロイドのプロトタイプである。体内に霊力装置を備えており、アンドロイドであるにも関わらず、高度な魔術を行使することが可能なのだ。羽織っているコートは、彼女のエクシード兵装《<sup>マギア・クロス・ムーブメント</sup>十一式魔導調律機関》である。

なぜ生徒会長の彼女がこれほどハイネに親しいかという点、彼はエミルが入学してきた2年前から時々一緒に魔術の練習をしているからである。

「生徒会のお仕事が忙しくて、なかなか会いに行けなくてごめんね」

「あ、いや、別にいいですよ」

「えー！『別にいい』って、私はいらないうってこと!？」

「そういうわけじゃ……」

誰にでも優しい、みんなの憧れの生徒会長。困っている人を決して放っておかない善人。であるにも関わらず、ハイネが若干彼女を苦手としているのは、単に彼女が結構な寂しがり屋で、俗に言う「かまってちゃん」だからだ。ただ、うざったいだけのそれとは違い、甘え方を心得ている上、ちゃんと周りの状況に気を遣って甘えてくる。「かまってちゃん」と言うよりも「要領の良い甘えん坊」と言ったほうが正しい。それでも若干面倒くさいのだが。

しかし、本当に大変なことは自分ひとりで抱え込んでしまうので、放っておけない。ハイネが彼女を苦手としているのは、普段はかまっ

てちゃんの癖に、彼が辛い時にはそばにいてくれて、彼女が大変な時は何も言ってくれないからであった。

正直なところ、ハイネはこの生徒会長が、苦手であれど嫌いではない。好きか嫌いかで問われれば、寧ろ好きだろう。

だが、普段はベタベタしてくるのに、肝心な時に頼ってもらえないということが、酷くもどかしい。

——そんなニコニコして話しかけてくるくらいなら、辛い時こそベタベタと頼ってほしいのに。

「本当は信頼してくれていないんじゃないか」という疑念こそが、彼女を苦手としている理由だった。

「ソフィーナちゃんも、おはよう〜」

「え？ あ、おはよう……貴女と私って初対面よね？」

「あら？ でも見なかったかしら、入学式で？」

本気で思い出せないらしいソフィーナにこっさり「生徒会長」と耳打ちすると、それでもピンと来ないらしく、「あ、ああ、そうだったかしらね」と適当に流した。そんなソフィーナの白々しい様子に、むうつと頬を膨らませていたエミルは、すぐに「まあいいや」と笑顔になり、

「3年生で、生徒会長やってるエミルさんです。よろしくね、ソフィーナちゃん」

「よ、よろしく……っていうか、なんで名前知ってるの？」

「全校生徒の名前と顔を一致させるくらいできなければ、生徒会長は務まりません。そんなわけで、ソフィーナちゃんの名前も知ってるのです。まあ、個人的に興味があるというのも、理由だけ」

「なにそれ」

「だって、第二魔術工房の一番大きい部屋を借りてるの、貴女でしょう？ あの、月額25万円もする……」

「そうね。まあ私というより、私の主がだけ」

「いいなー。魔女王様は太っ腹でいいなー。だって、ひと月25万円ってことは、1年間で300万円で、それが3年で約1000万円でしょ？ いいなー」

「……まあ、太っ腹なのは確かよね。なんか最近、鉱石とかなんかで儲けてるらしいし」

「あそこなら、質の高い魔道具が作り放題なのにく。私なんか、生徒会長にもなったのに研究チームが「これで十分だ」っていうから、小部屋なの。すぐに霊力が使用上限に達しちゃうから、質の高いものを作ろうとすると、月を跨がなきゃいけないのよねー」

「別に『作り放題』って訳でもないけれど……あー、その、今度来るかしら？　正直、結構余らせちゃってるものだから……」

「ホント？　やったー！」

「あ、ずるい。だったら俺も行きたいわ」

「アンタはアルマ兄にいの家の地下があるでしょ？　この前見たけど、あそこも結構供給良いじゃない」

「俺一人で使うなら確かに不自由ないけど、アビーもロザリーも使うんだよあそこ。でなきゃ普通に兄貴が使ってるし。しかも最近はりゼリツタまで来るようになった」

「あー……過密なのね」

青蘭諸島に存在する特別な建物は、電力やガス、水道とは少し異なるシステムで、『霊力』というものが供給される。

この霊力は、予め霊力を使用する建物として設計された建築物にしか供給されない。そして、ここで供給される『霊力』とは、誰かの身体から出た霊力ではなく、『誰のものでもない純粋な霊力』である。どういうことかと言うと、この供給される霊力は『誰のものでもない霊力』であるため、この霊力で作成した魔術式や魔導具は、誰が使用しても同じように働くのだ。個人で扱う魔術式や魔導具を作るのなら供給霊力に頼る必要はないが、例えば『集団で使用する魔導具』を作成する場合は、この供給霊力を使用したほうが、個人間での動作率のムラが少なくなる。

通常、魔導具とは、その読み通り『道具』なので、特殊なケースを除き、求められる条件は『誰でも使える』ということだ。なので、魔導具を作成する際は、ほとんどこの供給霊力を使用する。

この青蘭学園が所在する学園特区の中には、大規模な霊力供給を受

ける建造物が3つあり、それを『魔術工房』と言う。学園特区の施設は、青蘭学園や青蘭大学に在籍する学生ならほとんどが無料で借りられるのだが、この魔術工房だけは、霊力というエネルギーを直に扱うために責任能力が問われ、その上で純粋な供給霊力は貴重な資源であるため、借りるのにお金が掛かるのだ。現在エミルが借りている、通称『小部屋』と呼ばれる、部屋のサイズが小さく、供給上限が魔術工房の中でも1番低い（全部で3段階ある）工房ですら、1ヶ月借りるのに約3万円も掛かる。青蘭大学の学生なら、所属する研究室の教授がキープしている、研究用の部屋を特別に貸してくれる場合もあるが、青蘭学園の生徒ならそうはいかない。

そんな風に3人で、お金だ霊力だなんだと話していると、エミルの背後から2人の人影が現れた。

「あら、生徒会長。ご機嫌よう」

「エミル会長！ 今日もなんと美しい銀髪だ！」

「ん？ あら、マリオンちゃんにカサンドラちゃん。おはよう」

「もう放課後ですわよ」

1人は美しい黒髪の美女。きりりとした顔立ちは少々威嚇的でもあるが、付き合ってみれば威嚇的なのは外見だけで、実際は心優しいことがよく分かる。金色の目は強い光を放っており、意志の強さがそのまま現れているようだ。特徴的なのがその耳で、しゅつと横に伸びた、いわゆる『エルフ耳』である。名前はマリオン・マリネール。高等部3年生で、風紀委員の副委員長を務めている。

もう1人は鈍い銀色の髪を長い三つ編みで纏めている少女。肌の色は、まるで磁器の様に白いマリオンとは対照的に褐色で、瞳は深い紫色。だが、まず真っ先に目に入るのは、側頭部から生えている、奇妙に捻れた紫色の角である。耳も少し尖っており、ソフィーナとは少し異なるが、分かりやすい魔族の姿だ。名前はカサンドラ・サブナツク。こちらは高等部2年生だ。

「なんですか、揃いも揃って、こんな廊下で立ち話？ どうせなら優雅に座ってお話すればよろしいでしょう？ サロンとかあるでしょう」

「美を語るのには時も場所も重要ではないよマリオン君！ 大方、エミル会長の美しさについて語っていたのだろう！ そうでなければ、ソフィーナ君の可愛らしさか、ハイネ君の妖艶さであるに違いない！」

マリオンは、話し方を聞く通りのお嬢様。元は黒の世界でエルフ族が棲んでいる『銀の森』で、族長を補佐する家系の生まれらしい。

対してカサンドラは『美しいもの』に目がない性格である。感受性が豊かといえばよいのだろうか。何かにつけては「綺麗だ」「美しい」「可愛い」「かつこいい」を連発する。

この2人について、一応ハイネは中等部に通っていたので、高等部から入ってきた2人も、マリオンは2年、カサンドラは1年の付き合っている。ソフィーナは、黒の世界から来た生徒用の学生寮『三日月寮』で一緒なので、顔見知りだ。

偶然揃ってしまったが、今ここにいる4人こそ、ハイネがブルーミングバトルに出したいと思っているプログレスである。全員、ハイネとはそれなりに高度なリンクを結べる存在だから、バトルに出るならこの子かなあ、と思っていたのだ。もつとも、元々は来年からバトルに出られるようになるはずだったので、その時にはエミルもマリオンも卒業し、新しいプログレスを探さなければ、とも考えていたのだが。頼もうにも、ソフィーナ以外の3人は皆先輩である。とすれば、多少言い出しづらいのは年頃の男子なら理解できるだろう。何せ「俺のプログレスになって、ブルーミングバトルに出てくれ！」と言うのは、言い換えれば「俺とお前は相性がいいから信頼し合って頑張ろう」という意味になる。ある種の告白に近い。

とはいえ、ここで言わなきゃいつ言うんだ、ということ、思い切つてハイネは「ちよつといいかな」とみんなの言葉を遮り、

「お、俺のプログレスとして、一緒にブルーミングバトルに出てくれないかな!？」

言った。ソフィーナは既に話を聞いているため、「ああこの3人にするのね」という感じの表情だが、その3人はきよんとしている。焦ったハイネは、



「いやその、規制緩和の話は知ってるでしょ!? 俺もバトルに出られるようになったからその……一緒に戦って欲しいなと」

尻すぼみになる。

——ああ、言わなきゃ良かった

「もつちろん! ていうか、誘ってくれないのかと思ったよー!」

とエミルが、にっこり笑顔で快諾し、

「ん。まあ、高校生のうちに1回は体験しておきたかったの。望むところでしょう」

とマリオンが、なぜかドヤ顔で頷き、

「いいじゃないか、ブルーミングバトル! きつとその戦いの果てに、真の美しさがあるに違いない!」

とカサンドラが、若干ズレているものの了解してくれた。

「どうやら、心配するだけ無駄だったらしい。『案ずるより産むが易し』とはよく言ったものである。」

ハイネが一安心していると、そこに1人の教員が通りかかった。というか、声を掛けて貰えなければ気付けなかったであろう。身長が低すぎて。

「む、汝ら。楽しそうじゃの。妾も混ぜるのじゃ」

「あ、アルスメル先生」

化学教師のアルスメル。やたらとでかいトートバッグを肩にかけた、身長120センチ程度の幼女にしか見えない先生が、キラキラとした目で見上げていた。

ソフィーナが若干緊張気味の面持ちになる。それもその筈、アルスメルは、この青蘭学園の教師をしていると同時に、黒の世界の最高統治者「魔女王」から直々に任命された最強の魔術師集団《十二杖》の一角である。その実力は、魔女王のお膝元で魔術を練習してきた、現在も修業中のソフィーナなど、当然のごとく遥かに超える。そのため、彼女はある種の畏敬をアルスメルに向けていた。もちろん、ここにいる全員が彼女を尊敬しているが、ソフィーナはその実力をよく理解しているため、その度合いが他よりも高いのだ。

「そうじゃ、ちようど良かったエミル。ついでじゃからここにいる全

員でいいじやろう。汝らに相談があるのじやが」

「なんですか？」

「なに、少々面白いことをしようと思っておつての。汝らに手伝ってもらいたいのじや」

トートバッグの中をごそごそと探っていたアルスメルは、1枚の作りかけのチラシを取り出した。

「えー、なになに……『魔法技術コンテスト』？ なんですか、これ？」

マリオンが不思議そうに訊くと、アルスメルは「よくぞ訊いてくれた」とふんぞり返った。

「これは、魔術師を集めて、より美しい魔法、より技工を凝らした魔法を評価して1位を決めるというコンテストじや！ 個人戦と集団戦があるぞ」

「美しさ!!」

「はいはい分かったから。で、なんでこんなこと始めようと思ったの？」

1ワードで食いついたカサンドラを宥めながらソフィーナが首を傾げた。

「む、将来有望な魔術師には目を付けておきたいではないか。どこかに潜っているやも知れぬからの。優勝賞品で釣ろうと思ってるのじやが……そうじやの、純オリハルコン1キログラムでどうじや？」

「釣れそうなのが怖いです。というか私も欲しいです！」

エミルまで食いついた。目がキラキラしている。ソフィーナとハインも一瞬で前のめりになった上、魔術をそこまで多用しないマリオンまで興味を持ったようだ。

そんな皆の反応が嬉しかったのか、アルスメルは更に胸を反らした。

「ふむ。ならコンテストに出るがよい。会場から携帯のアプリで投票させ、且つ妾を含む数名の審査の合計で順位を決める予定じや。教えずとて、鼻屑はせんぞ。今のうちに腕を磨いておけ。良いな？」

どうもブルーミングバトルの勝利よりオリハルコン1キログラムが魅力的に思えてきてしまったが、ひとまず共有できる目標ができた

のは良かったのかな、とハイネは思った。

……………

そして現在。

「だから、ここをこうして……こうだって言ってるじゃない」

「ここを……こう、で……あつ」

「あらら、失敗ねえ」

「お前もできないんだから偉そうに言うなよな」

ソフィーナの魔術工房に集まっているのは、ハイネとソフィーナ、そして付いて来たがったりゼリツタである。

稀代の天才魔術師（の卵）ソフィーナに魔術を教えてもらっているハイネだったが、その結果はどうも芳しくなかった。

だが、これは正常な結果である。ソフィーナは、その年齢で習得すべき指標よりも遥かに高レベルの魔術を習得している。ハイネだって、保護者である兄アルマ・カミュオンや、教師であり強大な魔術師でもあるアルスメルに教えてもらっているため、標準よりはかなり高いレベルにいる。それでも、魔王の元で鍛錬を続けてきたソフィーナとは、やはりモノが違うのだった。

ハイネは、随分と昔からソフィーナに対して劣等感を抱いている。幼い頃、カミュオン家、アルハゼン家、ナイトローゼ家は、黒の世界の大都市ケイオンから遠く離れた山奥のとある集落の中に、隣り合って住んでいた。ハイネ、ソフィーナ、リゼリツタの3人は幼馴染同士で、いつも一緒に遊んでいたし、魔術の練習も同じく、ハイネの母親から習っていた。その頃からすでにソフィーナは、その天与の才を顕し始めており、ハイネやリゼリツタにはまだ難しい魔術も、平気で動かせてしまっていた。

ハイネは、それを羨ましいと思っていた。だが、何よりも堪えたのは、彼女が、自らの才能を「当たり前」だと思っていたことだった。そして、良く言えば無邪気な、悪く言えば他人の感情の機微に鈍感なソフィーナは、それを普通に口にした。本人に悪意はなく、ただ純粋な疑問として。

ソフィーナの魔術は大好きだった。煌びやかな彼女の魔力が魔術

に変換され、美しく流れる様は、何時までも見ていたいと思わずには  
いられなかった。ハイネの稀有なところは、そんな劣等感に「憧れ」が  
加わることで、それを容易く克己心に変えられるところであろう。彼  
女に追いつくために、必死で頑張った。きつと頑張りが足りないせい  
だ。そう自分に言い聞かせて。

だが、転機が訪れる。

ソフィーナの家族が、ケイオンに移り住むことになったのだ。

ソフィーナに憧れ、彼女に置いていかれたくない、その一心で頑  
張ってきたハイネは、あつさり置いていかれることになった。もち  
ろん、それはただの距離的な問題なのだが、幼い心に傷を付けるには  
十分な鋭さであった。

それも、彼らが4歳の時の話だ。11年を越え、今でもハイネはソ  
フィーナに憧れる一方で、彼女への劣等感も消えていない。そして、  
それらを踏み台にして、魔術の習得に励んでいる。

だが、物事には限度がある。

「全く……どうしてできないのかしら」

「そりゃ、ソフィーナとはモノが違うだろ」

「そんなことないわ。ハイネだって素質はあるもの」

「ソフィーナには勝てないよ」

ハイネとソフィーナが口論している横で、リゼリツタは何かを考え  
ている。しかし、徐々に白熱していく2人は気づかない。

そして、その口論の果てで、ソフィーナが一言放った。

「そんなんじや、私のパートナーにはなれないわ！」

その瞬間、恐ろしい感覚がハイネの頭を貫いた。

ソフィーナが、自分以外の誰かのものになる。

「私のパートナーは最強じゃなきゃいけないの！ だからハイネも最  
強になるの！」

「ソフィーナには分からないよ！」

思わず大声を上げていた。思わぬ反撃にソフィーナがびくりと震  
えたが、ハイネは止まれなかった。

「天才のソフィーナには分かんないよ！ 俺がどんなに努力したっ

て、お前には追いつけない！ お前みたいなさぐいやつにはなれない！」

心の中でずっと溜め込み続けた劣等感が爆発する。

そこに、予期せぬ横槍が入った。リゼリツタだ。

「いいのよハイネ。理ことわりぶか深き黒魔女様には、私たちがみたいな劣ったやつ  
の気持ちなんか理解できないわ。言うだけ無駄よ」

その言葉は、ハイネに向かって掛けられたものながら、明らかにソ  
フィーナを狙っていた。彼女もまた、幼い頃からソフィーナに劣等感  
を抱いてきた。

「ソフィーナは天才だもの。同じ天才のパートナーを見つけてるでしょ  
うよ。私たちは劣った者同士、底辺で仲良く暮らしましょう」

普段なら、ここでソフィーナが爆発して終了、というところなはず  
なのに、今回は違った。それも当然、今までのソフィーナは、からか  
われてはいたものの、攻撃はされたことがなかった。ハイネはまだ、  
感情の爆発だけかもしれないが、問題はリゼリツタ。彼女は明らかに  
悪意を持ってソフィーナを攻撃している。

そして、その悪意に、心が不安定になったハイネも、釣られる。

「ソフィーナは完璧な人しか求めないんだもんね。いいよ。俺じゃ無  
理だ」

「は、ハイネ……」

この場所がそうだった。ソフィーナは、魔王様に用意してもらった  
高級な魔術工房。対してハイネは、兄の家の地下（あまり不自由は  
していなかったが、ここと比べると流石に劣って見えるのは当たり前  
だった）。

ソフィーナがいない10年間、ずっと頑張ってきた。ソフィーナが  
故郷を去って1年後、母親が何処かへと消え、兄と妹と自分1人にな  
り、苦しい生活ながらも、ずっと頑張ってきた。寝る間も惜しんで、ア  
ルスメルの図書館で借りてきた魔導書を読んだ。貸出してもらえな  
いような魔導書は、何日もかけて書き写した。わざわざ兄や先生にお  
願いして、年齢不相応に高度な魔術も練習してきた。他の子と共同で  
使っている兄の家の魔術工房で、幾つも難しい魔術式を組んだ。長い

呪文も覚えた。ソフィーナに追いつきたい。彼女に見てもらいたい。俺はここまで強くなつたんだと、知らしめてやりたかった。

再会したソフィーナは、そんなハイネなど歯牙にも掛けないほど、素晴らしい魔女になっていた。

「そんな完璧なやつのパートナーになんか、俺はなれない！」

堪らず、ハイネは工房から飛び出した。

胸にあるのは怒り。そして、それを覆い隠してしまうほどの後悔だった。

.....

ソフィーナは、走り去るハイネに声を掛けることができなかった。

「.....じゃ、私もう帰るわ。じゃあね、ソフィーナ」

後を追いかけるわけではないのだろう。しかし、リゼリツタも続けて工房を後にした。

残されたソフィーナは、自分がとんでもない間違いを犯していたことに気づいていた。だから、一言も発せなかった。

「.....バカ.....バカ.....」

俯くと、涙が溢れてきた。

貰った時は誇らしかったこの魔術工房が、不思議と陳腐に思えた。

## 第8話 「格好良いって、言ってくれないの？」

背が小さいのはコンプレックスだ。

だって、見た目で舐められるから。

だからそういうことが無いように、いろいろ頑張ってきた。

背の高い彼女は優しいけど、そばにいてくれることが怖かった。

背の低い俺には、似合わないから。

……………

本条には、クラスの雰囲気がどんどん悪くなっていくのが手に取るように分かった。

最たる理由としては、やはり琉花が登校拒否状態になったことだろう。クラスを盛り上げているムードメーカー的な存在である彼女がいなくなっただけで、教室内の音量ボリュームが1段階下がってしまったかのようだ。

それとは別に、美海の様子もどこかおかしい。もちろん、同じ寮に住んでいる琉花を心配する思いもあるのだろうが、それ以上に黙り込んでいることが多くなった。

2連続で起きた事件の犯人が捕まったということは、既に生徒に知れ渡っている。なので、安心して様子でもあるのだが、なぜか琉花が登校拒否していることに変わりなければ、美海が黙り込んでいるのもまた事実である。恐らく、事件での精神的な圧迫感・ストレスが、これらの状態を招いている。だとすれば、ここから良くなる可能性もあるが、転がり落ちる可能性もまた存在するだろう。というより、雰囲気としては後者の方が明らかに有力である。

担任としては、どれも頭痛の種である。

満月寮の寮監である四宮小春（しのみやこはる）からの連絡を受け取り、担任として琉花との面談に行ったのだが、取り付く島もない、という状態だった。返事は最低限。感情の起伏を意図的に押さえつけているようだった。そもそも目を合わせてくれないし、ベッドの上で毛布にくるまって出てこない。

しかし、それも仕方のないことなのだろう。教員らは皆、彼女が過去に何をしてしまったのかを知っている。

それに、プログレス——それも、未熟故にまだエクシードを完全に支配下に置くことができていない——の扱いは、非常にデリケートである。なぜなら、過度な精神的負荷を掛ければ、エクシードが暴走し、他の生徒が傷つく可能性が高いからだ。

以上の理由により、教務課は最終的に「しばらく登校を止めて、それで彼女の精神状態が元に戻るのなら」という判断の元、彼女の登校拒否を認めることにした。ただし、定期的な面談は行うことにする。

「いやホント、疲れますよ」

「そんなことになってたんですか……」

場所は商業地区の西寄りにある居酒屋。本条の隣に座っているのは紗夜である。

色々とやることが多くて、あつという間に週末になってしまった。今日は、普段から顔を突き合わせている教員達ではなく、かつての教え子と飲みたいという不思議な気分で、それに紗夜が乗ってくれたのだった。

「私、ちよつと前にあの子達と会いましたけど、全然そんな風には見えなかったなあ……特に琉花ちゃんは」

「そうでしょうね。事件が起きたのはその後なんですから」

「だとしても、そんなに急に変わっちゃうなんて、と思ひまして」

「それは私も同じです」

本条は猪口に注がれた熱燗をちびちびと飲み、時々つまみの塩辛を箸先でつまんで口に運んでいる。表情は普段通りの無表情だが、目元が赤くなり、酔っているのが分かる。

対する紗夜は、あまり酒が得意ではないので熱燗は付き合いで少しだけ、あとはチューハイだけ。だがこちらも普通に酔っており、薄膜が掛かったような思考で、本条の話聞きながら、酔った彼女なりにどうすればそんな状況を変えられるのかな、と考えつつ、鶏の唐揚げをかじっている。

暫くの沈黙を破ったのは本条だった。



「そういえば」

「はい、なんででしょう?」

「貴女の方は大丈夫なんですか? その……《蒼月》の方は」

「んー……大丈夫ですよ。先生の式、ばっちり使ってるみたいですし」  
「でも、跡取りはこうして2人とも孤島にいるわけじゃないですか。  
実家を離れて。大丈夫なんですか」

「まあ……そうですけど。でも当面は私も絵麻もこっちで頑張るよう  
に言われました。本土は父と母と親族が頑張るから、って」

「なら、良いのですが」

「あ、ひよつとして心配してくれています? 大丈夫ですよ。先生は、ク  
ラスのことを考えてあげてくださいいね」

「……せっかくの人の親切を……」

唇を尖らせる本条を、紗夜はむしろ愛らしく思った。そして、彼女  
なりに考えた結論を告げてみる。

「琉花ちゃんに関してなら……そう、適切な相談相手がいると思いま  
すよ。彼女をあてがってみましょう」

「誰……ってああ、彼女ですか。まあ似たタイプですし……でも……」  
「多分、少しは聞き出せると思いますよ。学園生時代にメデイの家族  
関連のことを聞いてあげたのもあの子だったし。私はその……不甲  
斐ないけど力になれなかった」

「では、悪化させない自信があるならどうぞ。そっちまではさすがに  
面倒を見きれません」

「ありがとうございます」

紗夜は礼を言うと、グラスから少し酒を口に含んだ。本条は猪口に  
残った酒を一気に呷ると、徳利から酒を継ぎ足した。

「すいません、これ、もう1本」

「ちよつと、飲み過ぎじゃないですか?」

「いいんです。週末くらいは」

テーブルの上には、飲み終わった徳利が4本も置かれている。そし  
て、飲みすぎを指摘する紗夜も、今日は結構飲んでい。一応、愚痴  
を聞く代わりに、今日は本条の奢りなのだが……それでも少し遠慮は

している。

そんな紗夜は、今更のように訪れた違和感を口にした。

「先生、そういえば」

「はい、なんででしょう？」

「いいんですか？ 髪、ツインテールのままで」

「……なんか、今日はこういう気分なんです」

「それに、呼ばなくて良かったんですか？ 龍ちゃんとか、雄馬くんとか……」

「……いいんです。こういう気分なんです」

うつむき加減に猪口を傾ける本条に感じていた違和感の正体が何であるかを見破った紗夜は、「ダメですよ」と彼女を叱責した。

「先生まで暗くなっちゃ、ダメです」

そう。ストレスを抱えているのは、クラスの雰囲気の流れされそうになっているのは、何も生徒だけではない。本条もだ。だからこそ、普段から一緒にいる他の教員ではなく、元教え子呼び出してまで愚痴を吐いているのだ。

思わぬ指摘を受けた本条は、ハッと顔を上げた。

「そう……そう、ですよ。私まで暗くなっているはいけない。ありますが……」

「いえいえ。私もいけませんでした。確かに性格上、接しやすいのは今の先生ですけど……お酒を飲む時まで今の先生でいる必要はないですよ」

「……でも、紗夜さんに迷惑をかけてしまいます」

本条が上目遣いに紗夜を見やると、彼女はニヤリと笑って、ちょうど熱燗の徳利を運んできた店員に、

「すみません。烏龍ハイと唐揚げとチーズ下さい」

と注文した。そして、酔いから珍しく困惑を顔にする本条に向かって笑いかけ、

「値段相応の迷惑は、掛けてください」

「……全く。どうして生徒会長は皆曲者ばかりなのでしょう」

「それは先生もでしょう？」

「そうですね。違いありません」

本条はツインテールにしていた髪をほどくと、手馴れた手つきで、今度はポニーテールに結い上げた。

彼女は晴れやかな表情でニツと笑うと、

「さあて、飲むかー！」

「ふふ。お付き合いしますよ、文ちゃん」

紗夜は徳利を傾けて、本条の猪口に注いだ。

……………

数日前に遡る。

「うくん、美味しいわ！ やっぱりこのおうどんは最高ね」

「そうだねえ……」

アウロラと俊太は、青蘭島の商業地区の一角にあるうどん屋に来ていた。彼女はちゆるちゆるとうどんを吸い上げると、頬に手を当てて至福の表情を浮かべた。

彼女の発言には十分同意できるほど、確かにそのうどんは美味しかった。しかし、どうにも俊太が微妙な表情なのは、相席のアウロラのせいだ。

アウロラが現在すすっている大盛りのどんぶりの横に、既に空になった同じどんぶりが3つ並んでいる。

4杯目なのだ。大盛りを。

このアウロラは、見た目の柔和さにそぐわず……なのかは知らないが、結構な健啖家である。これといった趣味が無いせいなのかは分からないが、私費のほとんどが食費になるらしい。大食いで知られる（というより単に燃費が悪いだけのように思われる）アンドロイド・テールとは、よく食べ歩きをする仲だそうだ。とはいえ、単なるドカ食いではないため、来訪から1年経った今でも、（幸いにも）出禁になっている店はないという。

このうどんも1杯700円はするのに、よくお金が持つよな。と思う俊太だが、アウロラの実家であるエオース家は、赤の世界でも有数の名家である。要するに、お金持ちなのだ。なので、毎月の仕送りの

量も多く、お昼ご飯に1杯700円のうどんを4杯食べても、全然大丈夫らしい。しかも、彼女の実家は青蘭学園に援助金を出すほどの親青蘭派の家系だ。

「ふう……こんなものかしら。ごちそうさまでした」

アウロラは4杯目のうどんを平らげると、満足気な表情で手を合わせた。

「アウロラ……ほんとに大食いだね」

「そうかしら？　そういう俊くんだって、結構食べてるじゃない」

「まあ……そうだね」

俊太は身体こそ小さいものの、剣道をやっていてよく体力を使うため、彼も割と食べる方である。うどんは1杯だが、サイドメニューを色々付けていた。

「それにしても」

「なに？」

「私ね、この世界に来て驚いちやった。何せ、神様が800万人もいらつしやるんでしよう？」

「え？　……ああ、やおよろず八百万の神々ってこと？　それは実際に800万人いるわけじゃなくて、身の回りのもの全てに神様が宿ってると思って、なんでも大切にしなさいって意味で……」

「うふふ、知ってるわ」

「じゃあ変なボケかまさないでよ！　なんか恥ずかしいじゃん！」

慌てて怒る俊太、アウロラは尚も微笑みかけた。

「でも、そういうことがすごいと思うのよ、この世界は。だって、この世界の神様は目に見えないけど、何かを食べる時に『いただきます』って言って、食べ終わったら『ごちそうさま』って言うじゃない？」

「そうだね。でもそれって日本だけらしいけど」

「そうなの？　でも素晴らしいわ。何物にも感謝の気持ちを持って接するって。私たちの世界に、そういう文化は無かったわ。神様がそのへんを歩いている世界なのね。寧ろ、そのへんを歩いているほどありふれた存在だから、ありがたみとかも薄れてしまったのかしら」

「そんなにいっぱいいるの？」

「まあ、それほど多くはないし、もちろんお会いできれば敬意を持って接するけれど……でも、そうね。こういう食べ物そのものへの感謝はほとんど無かったわ。少なくとも、私たちのような貴族には。豊穰の女神様に感謝することはあっても、食べ物を食べることは当たり前。そう思っていたわ」

アウロラはどこか悲しげな表情だったが、すぐに柔らかく微笑んだ。

「だからこそ、私はこの世界が好きよ。全ての物に感謝する。それって、とつても素敵なことでしょう？ ほら、俊くんだって、剣道場に上がるときとか試合前と後とかに一礼するじゃない」

「そっか、そうだね。囲いの中は、正々堂々と勝負を行うための、神聖な場所だからって教えられたから。それに、剣道は『礼に始まり礼に終わる』って言うし。剣道って、素振りならまだしも、基本的に1人じゃ練習できないからね。そういう意味で、闘ってくれる相手への敬意が必要っていうか」

「そうでしょう？ 俊くんはとつても礼儀正しい子だと思うわ。背筋もすつと伸びてるし」

「そ、そうかな？」

「ええ。とつても——」

と、そこで彼女は少し慌てたように言葉を切ると、

「うん、いい子。可愛いわ」

と言って、俊太の頭を撫でた。

もちろん俊太は嬉しいのだが……そこに混ざる複雑な思いがあった。

——「格好良い」とは、言ってくれないのかな。

………

青蘭諸島は太平洋上に浮かぶ孤島ではあるが、緯度は東京よりも少し上なため、南国の島、というわけではなく、夏はそれなりに涼しく、冬は雪が普通に降る。

とはいえ、今日はやけに暑かった。まだ5月だが、肌寒い日が続い

ていたからそう思うのだろうか。

「んー、今日は少し暑いわね」

「そうだね」

うどん屋を出て商業地区を歩く2人。アウロラはぐーつと腕を上げて身体を伸ばした。すると、彼女の豊満なバストが強調されて、俊太は反射的に目を逸らした。

「あら？ どうしたの、俊くん？」

「な、なんでもないっ」

——自分がエッチな体つきしてるってこと、自覚がないのかな？

横目でチラ見しながらそう思う俊太。健啖家の彼女は実に稀有な体質らしく、食べた分はほとんど胸に回っているようだ。バストサイズは大人顔負けである。豊満な体つきの彼女だが、太っているという印象は全く受けず、逆にむっちりとした太ももは非常にいやらしく、それでいて腰はきゅっとくびれ、お尻への魅力的なラインを見せ付けられる。長い、ウェーブのかかった髪はポニーテールに結い上げられており、扇情的なうなじが見え隠れする。体中どこを見ても、男子高校生には刺激が強すぎた。

高校生離れしたグラマラスな彼女。身長も170センチ程度と高い。そんなアウロラの隣を歩くのは、少しだけ……怖かった。

俊太は身長が低い。アウロラよりも10センチくらい低い。顔立ちも中性的だし、声も高い方だ。そんな男らしくない自分が、こんなに女性らしい女の子の隣を歩いているのか、というコンプレックスを抱いているのだ。

彼女には、もつとこう、似合う人がいるはずだ。例えば、彼女よりも身長が10センチくらい高くて、イケメンで——

「あ、俊太くん。アウロラちゃん。こんにちは」

そう、声も男性らしくて頭が良くて——

「って、と、冬吾先輩!？」

「あれ？ なんか驚かせちゃった？」

「あー、いえ、その、ごめんなさい」

目の前にいたのは、1学年上の先輩αドライバーである三島冬吾

と、その横に、

「こんにちは」

真っ白な髪の毛の小さな女の子、セニアだった。

「あら、冬吾さんにセニアちゃん。こんにちは」

「どうしたの、2人で」

「あのね、おうどん食べに行ってたの。それでね——」

冬吾と話し始めるアウロラ。何時でも優しく、幸せそうに話す彼女は、とても可愛らしい。俊太はそれを見上げていた。

冬吾とアウロラは、とてもお似合いに見えた。

胸が、少し苦しくなる。

その苦しさを紛らわすように、俊太はセニアに声を掛けた。実は今まで1度も話したことがなかったが、先日のバトルで見っていたので知っていた。

「あのさ、セニアちゃん、だよね？」

「はい。えーと……」

「俊太。永瀬俊太だよ」

「俊太様、ですね。登録致しました。それで、どんな御用でしょうか」

「え？ いや、あの、この前のバトル、すごかったよって。レベル5になった時とか、ほんとにかっこよかった」

「そうでしょうか……」

アンドロイドであるセニアは、アンドロイドらしくない、どこか下向きな呟きをこぼした。しかし、それに気づかない俊太は、

「そうだよ。とっても頑張ってたよ」

「はい……ありがとうございます」

念を押すと、セニアは真っ直ぐに俊太の目を見て答えた。

まるで水晶のように澄んだ瞳。心の底まで見通すかのような眼差し。

それを認識したとき、俊太はこのアンドロイドの少女を、改めて「すごい」と思った。

彼女と冬吾は、身長が30センチも違う。彼女はまだ中等部1年生なのに対し、冬吾は高等部2年生。2人の間にはそれだけの差がある

のに、彼女は全く揺るがない。余りにも違う存在の隣にいて、これほど自信を持って立っていられるということに感銘を受けた。自分のように、フラフラとしていない。その一本通った《芯》に、心から感服させられたのだ。

「それじゃあ、またね」

「ええ、また」

「さようなら」

少しして、4人はまた2人ずつに別れた。隣を歩くアウロラは上機嫌だ。

「アウロラ、楽しそうだね」

「ええー！ だって楽しいもの」

——それは、冬吾先輩と話して、つてこと？

とは、聞けなかった。勇気がなかったからだ。

——俺は惨めだ。

……………

そして現在。

部活が無いにも関わらず、俊太は剣道場の鍵を借りて、1人で自主練習に励んでいた。いや、正確に言えば、1人で励もうとしていた。

竹刀を素振りする俊太を、アウロラが横から眺めていた。だから、剣道場には2人いる。

彼女はいつの間にもやら剣道部のマネージャーになっており、部員が竹刀を振るう様を横から見てアドバイスをしたり、練習試合の結果を管理したり、補給を勧めたり……と、本当に様々なことをやってくれ。今年度に入るまでは剣道の知識など無きに等しかったのに、今は猛勉強してマネージャーたらんと頑張っている。

誰かにじつと見られながら、というのはどうにも落ち着かないが、彼女が自分の振りの癖や良くないところを指摘してくれるのは事実だ。だから、黙ってひたすらに精神を収斂し、あたかもそこに何か倒すべきものが立っているかのように竹刀を振るう。

そうすると、自然に頭に浮かぶのは、冬吾の姿だった。アウロラに、



お似合いの。例え本人はそんなことを思っていないかつたのだとしても——俊太は知らないが、実は彼には既に恋人がいるため、決してアウロラに特別な感情など抱いていない——それでも、コンプレックスは着実に彼を追い詰めていた。

「俊くん？　ちよつとぶれてるわ」

「あつ。ごめん、直すよ。……これでいいかな？」

「ええ。良くなつたわ」

——いけない。

ほんの小さな感情のぶれが、太刀筋を歪める。アウロラはそれに（後者にだけだが）すぐに気付いて指摘した。

彼は頭を小さく振って世迷言を頭から弾き出すと、再び無心で竹刀を振るい始めた。

「お疲れ様。はい、飲んでね」

「ありがとう」

ひたすら竹刀を振るい続けること30分。俊太は防具を外して板張りの床に倒れ込んだ。剣道着は汗だくで、下にきた肌着など、絞れそうなほどだ。だが、このやりきった感が俊太は好きだった。

彼は起き上がって、アウロラから差し出されたスポーツドリンクのボトルを受け取ると、1口含んではゆつくりと飲み込み、また1口含むということを繰り返した。疲れているのに一気飲みすると、余計疲れからだ。

「俊くん、大丈夫？　なんだか普段よりもぶれが多いみたい」

「ん……大丈夫。ちよつと疲れてるだけ」

「ならいいけれど」

アウロラは心配そうな手つきで、俊太の頭を撫でた。彼女はよく俊太の頭を撫でる。それ自体は嫌ではなかったが、彼女が自分のことをどう捉えているのかが伝わってきて、複雑な気分だった。

そして、決まってこう言う。

「ふふ、可愛い」

「え？」

「なんだか、意地っ張りな弟が出来たみたい。可愛い」

「弟……」

「意地は、張らないでね」

——俺は、どうしたいんだろう。

彼はストレスを溜めていた。中毒事件が2度も起きた。犯人は捕まったものの、目の前で苦しむ少女を2度も見た。アウロラがこうなったらどうしようかと、夜も眠れずに考えた。悩んだ。怖かった。

だからいい加減、限界だった。不安定な心で、自分が萎縮するほどの美女の隣にいるということが。自分に、自信がないから。いや、違う。自分が彼女に、認めてもらっていないから。

俺が彼女に言っただけ欲しいのは、「可愛い」じゃない。

——俺は、

気づいたら、俊太はアウロラを床に押し倒していた。

「え？　え？」

彼女は戸惑った表情で、自分が何をされたのか分かっていないようだった。

俊太は息を荒げてアウロラに覆いかぶさっている。

そして、ポツリと呟いた。

「アウロラは、格好良いって、言ってくれないの？」

「え……？」

アウロラは戸惑いを隠せていない。しかし、何をされたのかはようやく理解したようだった。それでいて、何故か——拒む様子を見せない。

汗の雫がアウロラの頬を伝う。その潤んだ双眸が俊太を見つめている。憧れていた彼女の顔が、こんなにも近くにある。

「俊くん……私は……」

彼女の言葉が耳に入ってようやく、俊太の方が自分が何をしたのかを理解した。

「ち……違うー！」

彼は弾かれたように彼女から飛び退くと、改めて彼女を認識した。

俺が、彼女を押し倒した。

「違う……違うんだー！」

たまらず、逃げ出した。ここではないどこかに逃げなくては。罪悪感に、押しつぶされてしまう！

——最低だ！ 最低だ！

こんな時でも、「アウロラは、俺に乱暴されたことを先生に言うだろうか」などと考える自分が、余計に嫌だった。

……………

「俊くん……………」

剣道場に取り残されたアウロラは、胸に手を当てて俯いた。

「私は……………彼を、傷つけてたのかな」

自問するまでもない。そうだった。自分は、大好きな少年を傷つけていた。彼女が逃げることによつて。

「どうしよう……………」

普段は頼れるお姉さままで通っている彼女でも、その答えはすぐに出そうになかった。

## 第9話 「2人とも大嫌い」

琉花が不登校になった。

その少し前から美海も、どこか様子が変わった。

春樹は悩んでいた。いったいどちらを優先すべきなのだろう。不登校になってしまった琉花？ それとも、相談すればなんとかなりそうな美海？

「どうしたのでございますか、春樹」

「……カレン」

「もー、また辛気臭い顔してるよ」

「千鳥も」

琉花が学校に来なくなった次の日の昼休み。春樹が難しい顔をしながらパンを頬張っていると、左右から声を掛けられた。中等部の頃からの仲間。そして、密かに――

――確かに、相談するのなら、確かにこの2人もな。

1人であれこれ悩んでいても、いい回答なんて出てこない。カレンも『貴方様は誰でも頼れるのでございます』と言っていた。

春樹はお茶を一口飲むと、「あのさ……」と話し始めた。

「……なるほど。先にどちらの対応をすれば良いのか、ということでございますか」

「琉花のことはもちろん心配なんですけど、美海も何か隠してそうで不安なんだ」

「確かに、最近の美海、なんか変なのよね。普段はよく騒いでるのに、妙に静かっているとか、上の空っているとか」

「どうやら、最近春樹が美海に対して感じている違和感は、他の人も感じるらしかった。寮でも上の空だというなら、いったい何が原因なのだろう？」

「美海のことでも心配だけど、琉花のことだって心配してる。でも、どっちから手をつけたらいいのか、分からなくて……」

「……ふむ」

カレンは顎に手を当てて考え込んだ。

「普通に考えれば、優先すべきは琉花だよね」

千鳥は至極まっとうな意見を出す。

「しかし、美海のこと心配だ、と」

「そう」

「私も、琉花を優先すべきだと思いますです」

「……でも」

心配気味な表情になる春樹。だが、カレンは冷静に分析する。

「美海は不登校になつてはおりません。現状はそれなりに耐えられているのでございましょう。なれば、明確に耐えられていない合図を出している琉花が先決でございいます」

「……そうだね」

苦しい顔で同意する春樹。その背中を、千鳥が叩いた。

「心配しなくても大丈夫だつて。あんたが琉花に取り掛かつてる間は、私が美海を見ておくよ」

「本当？」

「もちろん。困つた時はお互い様でしょ？」

その言葉を聞くと、彼は幾分か安心した様子になった。

「でも、バトルまでそんなに日がないでしょ？ さっさと片付けちゃいなさい」

「難しいのは承知の上でございいます。ですが、貴方様ならきつとできる、と私は信じておりますです」

千鳥とカレン、2人に背中を押され、春樹は立ち上がった。

……

「琉花ちゃんの様子を？」

「うん。見に行きたい」

放課後。春樹は、1年生の教室の前でそう言った。

対する美海は、うーんと考え込む。

「会ってくれるかなあ……全然話してくれないんだよね。完全に塞ぎ込んでる」

「それでも、会わなきゃダメだ。俺はその、チームのリーダーなんだから」

「それもそうだよね……」

美海は少し考え込んで、

「そうだよね。頑張れリーダー!」

「はいよ。それで、琉花のルームメイトって希美だよね? ちよつと呼んできてくれる?」

「えっ!? 希美ちゃん!」

「いやだって、一応彼女の部屋でもあるわけじゃん。入っているのかって」

「そ、そうだね……うん、ちよつと待ってて」

美海は教室の入口まで行くと、何故か少しつかえながら「の、希美ちゃん!」と呼んだ。

「……何?」

「え、いや、その、春樹くんが」

「春樹くん? あ、どうも。何か御用?」

どこことなく不機嫌さ、というより不信さが漂う希美に、春樹は声をかけた。

「俺さ、琉花と会って話がしたいんだ」

「話してくれるかしら?」

「会ってみたいと分からないし、俺はチームリーダーだから。ダメ元でも、行かなきゃ」

「そうね。で、どうして私なの?」

「ほら、希美は琉花と相部屋じゃん。許可は取らなきゃと思って……」

「ああ、そういうこと……」

そこで希美は、春樹にも美海にも見えないように、何やら暗い笑みを浮かべた。

その笑みは一瞬で消え、希美は……春樹に擦り寄った。

「ちよ、希美?」

「だったら、私がついて行くわ。1人じゃ不安でしょ?」

「ちよつと、希美ちゃん!」

「まあ、確かに希美の部屋だから、道理ではあるね」

「でしょ?」

「の、希美ちゃんってば!」

美海が大声を上げた。その目は潤んで、どこか攻撃的な色がある。それに対する希美は、あくまで平常。ただ、こちらもどこか攻撃的だ。

「なあに、美海? 私の部屋でもあるんだから、ついて行って何が悪いの?」

「で、でも……今日はダンスの練習じゃない」

「そうなの? じゃあ、日を改めようか?」

「そんな必要ないよ。だって、私と春樹くんの仲じゃない」

「まあ、確かに付き合っても4年目だけだよ」

そこで春樹は美海を見た。今にも泣き出しそうだ。

「こ、こら希美。ほら、美海が泣いちゃいそう」

そう言うと、流石に観念したらしい希美は「冗談よ」と言っつて春樹から離れた。

「小春さんに言えば開けてくれるから。頑張っつてね」

「ありがとう」

それを聞いた春樹は礼を言うと、すぐに踵を返した。

どこか様子のおかしい美海に、その苦しみを取り払いたいという思いに、後ろ髪を引かれながら。

……………

ダンスが、上手くいかなくなった。当然だが、希美という気掛かりの種がそばにいるのだ。集中できない。

そして、希美もそれを敢えて指摘はしない。

これは意地悪なのだろうか。

しかも、今まではなかったモヤモヤを、希美に対して感じている。喧嘩とは別の理由のものだ。これは一体なんなのだろう。

「あいたつ」

考え事をしていたら、足を滑らせて転んでしまった。

「大丈夫、美海ちゃん!」

「だ、大丈夫大丈夫……」

沙織に助け起こしてもらっていると、希美がそこに、

「はい、あなたのせいで最初からやり直しね」

と言ってきた。沙織は突然の攻撃的な口調に一瞬困惑したようだったが、すぐに立ち直った。

「ちよ、ちよつと希美ちゃん。そんな風に言うことないんじゃないかな?」

ただ……不幸にも、沙織を挟む2人のストレスは、限界に達しかけていた。希美は、日頃から抱え込んでいる様々なストレスに加え、琉花の現状がそうさせて。美海は、原因不明のモヤモヤが、喧嘩のストレスという火種に引火したかのように。

「はいはい、私のせいでごめんね。優秀な希美ちゃんの足を引っ張っちゃって」

「み、美海ちゃん?」

「じゃあせいぜい足引っ張らないように努力しなさいよね」

語気がだんだんと強まっていく。間に挟まれた沙織は、困惑するしかない。

美海は、モヤモヤの原因が分かってきたので、それを希美にぶつけることにした。

「そういえばさ、なんでさつきあんなことしたの?」

「あんなことって、なによ?」

「春樹くんに擦り寄り寄ったりして……好きでもないくせに」

「好きでもない? 別にそんなことないけど。3年間も付き合ったられるんだから、彼のことは好きだけど。あなたなんかよりもずっと」

美海は奥歯を噛み締めて、でも反撃する。

「でも、希美ちゃんは悠馬先生のチームじゃない」

「ええ。どちらか決めろと言われたら、悠馬くんの方が好きだもの。リンク相性もだけどね」

その言葉のせいで、爆発してしまった。

「じゃあ、春樹くんに手を出さないでよ!」

「うるさい! あなたにとやかく言われたくないわ! 暖かい家庭に恵まれなかったくらいでウジウジしてるあなたなんかに!」

「希美ちゃんこそ、素人な私の才能なんか嫉妬してた弱虫の癖に!」



「やめてよ!!」

沙織が、叫んだ。彼女は頬を真っ赤に染めて、美海と希美を見た。「なんでそうやってお互いの悪いところばっかり言うの? なんて傷付けあうの? もしかして、最近2人がなんか変だったのって、ずっと喧嘩してたからなの!?!」

「沙織、だって私は」

「だってじゃない! 2人ともバカみたい。本番が近いのに、争って、貶しあって……」

沙織は悔しさからの涙をこぼすと、

「2人とも大嫌い! 傷付け合ってる2人なんて、大っ嫌い!」

大声で叫んで、荷物を引っつかむなり、ホールから出て行ってしまった。

残された2人はしばらく、その沙織の声に固まっていたが、希美が、「……じゃあ、今日はここまで。沙織がいなくなったから、もうやる意味がない」

「……分かった」

美海は出来るだけ早く支度をする、何も言わずにホールを出た。

——前と同じなのに。

喧嘩をして、外に出たとは前と同じだったはずなのに。

その胸には、まだ炎が燻っている。

……

「琉花ちゃん? 起きてる?」

「……はい」

「あのね、お客さんがいらっしやっただの。入っていいかしら?」

「……………誰ですか? 先生?」

「ううん。春樹くんよ」

「——ッ」

ドアの向こうで、琉花が息を飲んだのが聞こえた。

「入れて、いいわね?」

「……………はい。でもその前に、顔を洗わせてください」

寮監の小春に言われ、彼女は渋々といった感じでドアを開けた。

琉花の姿は、痛々しいものだった。明るい色の髪はボサボサで、どこかくすんでいる。目は充血し、疲れきった表情から、よく眠れていないことが分かった。食事あまり摂っていないのか、顔色が悪く、まるで病人のようだった。

「……ども、ハル先輩」

「上がって、いいかな?」

「……………どうぞ」

春樹は小春に見送られながら、部屋に入った。リビングにテーブルはなく、絨毯の上にローテーブル、というか卓袱台ちやぶだいと座椅子というスタイルだった。春樹は案内されるままに座椅子の1つに腰掛け、卓袱台を挟んで反対側に琉花が座った。

「……はい、水。これしかないの」

「ありがとう」

琉花に差し出された水を一口飲む。その様子を琉花は、どこか苦々しげな眼差しで見えていたが、すぐに視線を逸らした。

「……それで、何の用?」

「決まってるじゃん。バトルが近いんだから、練習くらいしてもらわないと」

いきなり要求を叩き込む春樹。だが、これも打算あつてのことだ。とにかく自分を、頼つてもいい存在だと思わせなければならぬのだ。

返答に詰まった琉花。その上で、

「悩み事があるなら、なんでも聞くよ。できる限り、力になるから。琉花が必要なんだ」

「……悩み事なんて」

「無い、とは言わせないよ。現に不登校になってる」

かなりデリカシーに欠ける言葉だというのは分かっていたが、こうでもしないと、今の彼女に声が届かない。

「……何が、怖いのか? 琉花? 大丈夫。話してみて。どうして、琉花に何の関係もない事件が、琉花をそこまで怖がらせるのか?」

春樹は心からそう訴える。

琉花はしばらく黙っていたが、ようやく口を開いた。

「……私ね。エクシードが目覚めたの、小学生の頃だったの」

話の方向が分からないが、やっと話をしてくれるようになったので、春樹は黙って先を促した。

「その時はね、私、髪も短くて、ほら、この性格でしょ？　ほとんど男の子みたいなものだった。身体を動かすのは好きだし、いつも外で遊んでた。

でもそのせいで、女の子たちからいじめられてたの。男女って言われてた。だから、私はより一層男の子たちと一緒にいたんだけど……5年生の頃から、男の子たちからも引かれ初めて……ほら、10歳にもなれば、男女意識とか出てくるじゃん？　気付けば、私は1人だった」

「……」

「苦しかったよ。誰も友達になってくれないんだもん。今更髪を伸ばしても遅いって言われて、いじめられ続けた。先生もまともに取り合ってくれなかった」

そこで琉花は、何かを思いついたかのように顔を上げると、春樹のコップを手に取って、両手で握った。

「琉花？」

「学校に、私の味方は1人もいなかった。憎かった。全部消えちやえばいいのになって、毎日思ってた。そしたらね、夢が叶ったの」

「叶った？」

「そう。私が給食当番だったとき——」

今や彼女はどこか狂気じみた笑みを浮かべていて。

「——私、スープをよそってた。誰も目を合わせてくれないから、下向いてね。もう分かるでしょ？」

「……エクシードが？」

「そう。私がよそったスープね、みんな毒になっちゃったの。みんなが「苦しい、苦しい」って呻くのを、ずっと見てたんだよ。私が、みんなを、倒したの。私が、私が——クラスのみんなに、毒を盛ったの」

「琉花——」

「でもね、その時の私はそんなこと分かってなかった。それで、クラス中で1人だけ食中毒になってなかった私は、大人にいろいろ聞かれたの。私は当然答えたよ」

「私じゃない！」

「——ってね。誰も信じてくれなかったけど。だから、うちはお父さんもお母さんいろいろ嫌な視線を向けられて、結局すぐに引越したの」

琉花の話が、終わった。春樹は、すぐになんと言ったらいいかわからなかった。慰めるべきか、はたまた気にするなと言うべきか。

春樹は、想像だにできなかった事実<sup>じじつ</sup>に打ちのめされていた。琉花が誰かが苦しむ姿に異常なほどの恐怖心を抱くのは、他でもない彼女が、誰かを苦しめていたから。罪悪感が、そうさせていたのだ。

「あ、そうだ。はいこれ」

琉花は、今まで両手で握っていた春樹のコップを、再び差し出した。手に持ってみると、冷たい。彼女がエクシードで冷やしたのだろう。

春樹は、それを一口飲んで気分を落ち着かせようと——

「ねえ、それ、飲んでいいの？」

「え……？」

「だって、私がエクシードで冷やしたんだよ？」

「それが……っ!？」

春樹は言葉を詰まらせた。彼女が何を言いたいのか、分かっ<sup>わ</sup>てしまったからだ。

『私が——クラスのみんなに、毒を盛ったの』

琉花のエクシードの影響を受けているなら、この水も毒に変化しているのかもしれない。

そう考えた時、春樹の手が止まった。そして、そろそろと下がった。

そして、琉花を見た。彼女は、ひどく傷ついたような顔をしていた。

「ほら、やっぱり」

「ち、違う」

琉花は立ち上がると、春樹の首根っこを掴んで無理やり立たせ、

「出てって」

「琉花、違うんだ——」

「出てって！ 出てってよ！」

「琉花——！」

しかし、琉花は耳を貸さなかった。

「ハル先輩なんて大嫌い！ この偽善者！ もっと本気だと思ってた！」

「——!？」

「そういうのが一番ムカつくの！ 人が大人しい内はいい人ぶってるくせに、こつちが本性現したら途端に引け腰になる人が！」

——偽善者。

——人の顔色伺ってないで、本気でぶつかってきなさいよ。

——そういうのが、一番ムカつくんだよね。

「大嫌い！ 出てって！ 早く出てってよお！」

春樹はまともに抵抗もできず、追い出されてしまった。

——俺は何をしているのだろう。

——俺は何も成長できていない。あの時のまま、また傷付けている。

春樹はしばらく、何も考えられなかった。

……………

琉花は、春樹を追い出すとすぐにドアに鍵を掛け、寝室に戻って毛布にくるまった。

——これで良かったんだ。私みたいな足でまといのことなんか、彼は気にするべきじゃない。

——もう、見捨てられただろう。こんな私のことなんか。大嫌いと言った私のことなんか。

「うわああああああん！」

しかし、何故か涙が止まらなかった。何度嗚咽を飲み込んでも、次から次へと湧き出てくる感情。

——もう救われない！ もう許されない！

琉花は毛布に顔を押し付けて、ひたすらに咽び泣いていた。

大好きな人を、大切な人を傷付けた、その罪悪感に。

## 第10話 「言わなきゃ、何も伝わらない」

どうやら遅かったらしい。というのが、千鳥の所感だった。

美海を待ち構えていたつもりだったのだが、帰ってきたのは泣きじやくる沙織だった。目元を腫らして涙を流す彼女が余りにも痛々しかったので、急いで自分の部屋に上げた。相部屋のプログレスは外出中だが代わりに隣には絵麻がいる。話を聞いた絵麻は、生徒会副会長として！ という理由で、寮生でもないのに満月寮に来ていたのだ。

「どしたの、沙織ちゃん。泣かないで」

「そだよー。泣くと余計悲しくなっちゃうよー？」

こんな時でも絵麻は相変わらず間延びした喋り方だが、逆にそれが沙織の気分を落ち着かせたのか、彼女はしゃくり上げながらも泣き止んだ。実は、沙織と絵麻は現在とあることのために一緒に活動しており、その際に色々と助けてもらったことで、絵麻に対する安心感があるのだった。

「美海ちゃんと希美ちゃんが……喧嘩してて……目の前で言い争ってたから、思わず叫んじゃって……バトルもステージも近いのに、何してるのって……それだけなら良かったのに、2人に、大嫌いつて言っちゃった……！」

沙織は、その場の空気ですべてしまったことを心底後悔しているようだった。

「にしてもあの2人、なーんかおかしいと思ってたら喧嘩してたのね……」

「どうりで最近、希美がイライラしてるのかなーと思ってたー」

喧嘩していた癖に、表面上それを取り繕っていたのなら、結構な負担になるはずだが、それがついさっき爆発したので、目の前でそれを見ていた沙織は耐えられなかったのだという。優しい彼女からすれば、いきなり仲の良い親友2人が言い争いを始めたら、混乱するのも当然だろう。

「沙織はどうしたいのさー？ 仲直り、したい？」

絵麻がそう聞くと、沙織は当然頷いた。だが、

「もちろん、したいです。でも……喧嘩し続けるなら、嫌……」

思ったよりも、沙織の思いは固いようだった。

千鳥は、一気に複雑になった現状に頭を悩ませる。

美海のことを見ておくと言ったのは千鳥自身だが、仲直りさせなければならぬ2人は、まだ寮に帰ってきてはいない。しかし、ここで沙織を放り出しておくわけにもいかない。電話をするという手もあるが、突然先輩から電話がかかってきて「仲直りしろ！」なんて言われたら、例え沙織の名前を出したとしても、余計に警戒心を抱かせるだけではないか。寧ろ、お互いに納得していないのに、沙織のために表面上だけ仲直りした振りをさせてしまう可能性もある。それは一番いけない。下手に動くよりも、2人が帰ってくるのを待つほうが早い。2人が仲直りしてくれる保証はどこにもない。このままでは、春樹やカレンに合わせる顔がなくなってしまふ。

だが、今はできることをするだけだった。

「……とりあえず、甘いものでも食べて落ち着きましょうか」

千鳥はそう提案して席を立った。それでいいのかは全然分からなかったが。

……………

とぼとぼと行くあてなく歩く美海。日が傾き、そろそろ夕方だ。これから空が朱<sup>あか</sup>くなっていくだろう。

寮に戻りたくなかったのは、恐らく沙織が帰っているだろうという推測からだ。 「大嫌い」と言われた手前、すぐに顔を合わせたくないと思うのは当然だろう。

「……そうだ」

こんな悩ましい時には、あそこに行こう。大好きな人と最初に出会った、あの場所に。

自然と足が動き、美海は「そこ」にたどり着いた。

白い灯台。

青蘭島の北東に位置する、人があまり来ない岬に立っている灯台。ここなら誰にも邪魔されずに考え事ができる。……と思ったのだが、

意外なことに先客がいた。

「……冬吾先輩？」

「ん？ ああ、美海ちゃん」

そこに腰掛けていたのは、冬吾だった。美海を見るなり笑顔になったが、その顔には消しきれない寂寥感が残っていた。

「どうしたんですか？ その……」

「……ん。その、お恥ずかしながら、セニアと大喧嘩しちゃってね」

冬吾は自嘲気味の口調で呟いた。

「そういう美海ちゃんこそ。ここに來るってことは、なんか悩みがあるの？」

「……私も、喧嘩しちゃったんです」

美海は無理やり微笑むと、冬吾の側に寄った。

「隣、いいですか？」

冬吾は返事するでもなく、無言で促した。美海が腰掛けるなり、

「誰と喧嘩しちゃったの？ 春樹じゃないよね」

と聞いてきた。

「はい。寮で一緒の友達です。希美ちゃんと、沙織ちゃん」

「あー……気まずいよね」

「しかも沙織ちゃんは相部屋だから……」

「そっか。仕方ないね」

冬吾は同情するように微笑むと、意外なことを言った。

「でも、なんか安心したかも」

「え？」

「ほら、美海ちゃんって誰にでも優しくて、元気に接するじゃない。そんな君でも、普通に、人並みに喧嘩するんだなって思ったら」

「それを言うなら、冬吾先輩もですよ。先輩だって人畜無害で紳士な感じじゃないですか。どうして、その……セニアちゃんと喧嘩しちゃったんですか？」

美海が一步踏み込んだことを聞くと、冬吾は少しの間黙り込んだ。

だが、まずいと思った美海が謝ろうとする前に。再び口を開いた。

「……セニアってね、生まれてからは5年経つんだけど、実際に動いて



いた期間はたったの1年間なんだよね。知ってた?」

「いえ……そうなんだ」

「うん。でね、セニアだったら最近、承認欲求が目覚め始めたみたいで、やたらと僕に認めてもらいたいって思うようになってしまったらしいの。一人前としてね」

「一人前……」

「でもね、僕は正直、セニアのことをほっとけないんだ。だってあの子はまだ一歳児で、理不尽な悪意にも触れたことがない、純粋な子なんだ。第一、僕だってまだ一人前じゃない。だから、セニアのことを一人前だと認める事はできないよ、って言ったらね。まあ怒られたよ。で、マスターのことなんか嫌いです、って言われちゃって……」

冬吾は夕日に照らされる海を眺めながら、ほとんど自分に言い聞かせるように呟いた。その横顔を眺める美海は、深い苦しみと悲しみを覚えて取ると共に、非常に場違いながら、彼の整った横顔にしばし目を奪われていた。春樹もとてもかっこいいし、実際に美海の好みなのは春樹の方なのだが、彼はまるで役者のように完成された美貌の持ち主なのだ。

「美海ちゃんは何?」

「私、私は……その、希美ちゃんとのすれ違いで。なんていうか、ですね。私、実は希美ちゃんと同じ小学校に通ってたんです」

「そうなの? 珍しいね」

「はい。その頃から希美ちゃんはアイドルを目指してて、たくさん練習してたんです。で、時々私と遊ぶ時に、アイドルのまねっこしてたんですよ。その時に、私は何の練習もしてないのに、希美ちゃんよりも上手くターンしたりすることがあって、それが希美ちゃんは羨ましかったですよ。良かったですよね。」

それで、今ね、ちよつと本格的にアイドルのまねっこをするチャンネルを貰って、その練習をした時に、また私、希美ちゃんよりも上手くやっちゃって、彼女を怒らせちゃったんです。練習してもいないあなたが、必死で練習してきた私よりも上手いのはズルい、って感じで「まあ……ちよつと理不尽だけど、分からなくもないかな」

「そうですね？ でも、それだけで終わっておけば、まだ良かったんです」

「と言うと？」

「私も、反撃しちゃったんです。」

希美ちゃんのご両親はとっても優しい人で、彼女が中等部から青蘭学園に入学できたのもそのおかげだったんです。でも、私は……その、あまり、両親に恵まれなくて……彼女の暖かい家庭が、とっても羨ましかったんです。そのことを、言ったんです。全然関係ないのにね。優しい両親を持つことが、どれだけ素晴らしいことか知らない希美ちゃんのことを、ずっとズルいつて思ってたって」

「……そっか」

冬吾は深く同情したように言った。同情できたのは、彼もまた両親からの愛に恵まれなかったからだ。

「それで、沙織ちゃんの前で希美ちゃんと言い争ってたら、沙織ちゃんが2人とも嫌いだって。彼女は、優しいからね」

「……確かに、目の前で親しい友達が喧嘩してるのを見るのは、辛いよね」

冬吾は少しの沈黙の後、決心したかのように口を開いた。

「僕と美海ちゃんは、似てるね」

「え？」

「僕も。両親からの愛情なんて、あんまり受けてこなかったんだ」

「そうなんですか？」

「うん。うちの両親は結構な青蘭アンチでね。僕が青蘭に行きたいって言ったら猛反対されて……でも押し切って来た。勘当同然の扱いになっちゃったけど。もう、本土に僕の帰る場所はないんだ。ここが僕の、永住地さ」

「……私も、そうなのかな。お父さんもお母さんも、私が特待生扱いだって聞いたら、学費払わずに済むって言って喜んでましたもん。厄介払いができるって。」

そう考えれば、冬吾先輩のご両親は、先輩に反対しただけ、愛情があつたんじゃないですか？」

「……今考えれば、そうかもと思うこともあるよ。でも、もう遅いんだ」

しばらく、沈黙が続いた。波の音と風の音が、耳を優しく撫でていく。不意に、冬吾が沈黙を破った。

「ねえ。美海ちゃんは、どうしたいの？」

「え？」

「仲直り、したいの？ 希美ちゃんとも、沙織ちゃんとも」

「それは……したいに決まってるじゃないですか。でも、許してくれるかどうか分からなくて……不安で……」

相手があまり関わりのない、それでも八方美人で通っている冬吾だったからこそ、美海は不安を口にできていた。これが春樹だったら……恐らく、見栄やらプライドやらが先行して、ここまで心の底を吐露できなかっただろう。

「じゃあ、ちゃんとそれを言わなきゃ。言わなきゃ、伝わらない。多分、僕もそうなんだと思うけど」

「え？」

「セニアの前では、どうしても建前を優先しちゃうっていうか……そもそも、僕ってそういう、本音よりも建前を強く伝える癖があるんだよね。多分、悪い癖。だから、どうしてもセニアに伝わらなかったのかもしれない」

「なるほど……」

「それでもセニアが僕のことを嫌いだっていうなら、それは仕方のないことなのかもしれないけど……それでも、伝えずにずっとこのまますれ違い続けるよりは、ちゃんと話してぶつかった方がいい」

「……ですね」

美海は神妙に頷くと、海を眺めた。朱く染まった海。希美の告白が浮かんだ。沙織の涙声が蘇った。怖い。誰かと話すことが、こんなに怖かったなんて。

それでも、進まなきゃいけない。例え仲直りできなくても。例え聞いてもらえなくても。この思いを胸に抱えたまま生きるのは、嫌だ。

「……私、中学に入っても、希美ちゃんのような友達は1人もできません

んでした。みんなどこか警戒してて……プログレスだったからなのかな。だから……仲直りしたい。もう1度、やり直したいです」

「そう。じゃあ、それをちゃんと言おう。きつと理解してくれるよ」

「はい。それと、冬吾先輩も」

「ん？」

「セニアちゃんは、ちゃんと分かってくれますよ。彼女は……いい子だと思えますから」

入学前。3月にショッピングモールで迷子になっていたセニアを、美海は保護したことがある。その時から2ヶ月経ち、セニアはどんどん成長している。そんな彼女なら、絶対に冬吾の思いを理解してくれる。美海がそう確信を持って言うのと、冬吾はどこか寂しそうな表情に、ほのかな笑みを混ぜた。

「ありがとうございます。背中押してくれて」

「いいんですよ。春樹さんのライバルですもん」

「そうだね。またそのうち、やってみたいな」

「次は、絶対に勝ちますよ！」

「ふふ。僕のセニアがそれを許してくれるかな？」

2人は笑い合うと、それぞれ一歩踏み出すために立ち上がった。

……………

「ははあ。それでハイネと喧嘩したわけか」

「ちよ、アルマ兄！ 声が大きいわよ！」

「学校じゃカミュオン先生と呼べって言ってるだろ」

「ハイネくん、頑張ってるのになあ」

「それはっ……悪いと思ってるわよ」

放課後の講師室で、ソフィーナはアルマに相談をしていた。そして、たまたまそこに居合わせたエミルも、その相談を聞いている。

講師室には都合のいいことに3人しかいない。相談するには打って付けの場所だった。

内容はもちろん、先日喧嘩をしたハイネのことだ。

「だからっ！ 私はどうしたらハイネとその……仲直りできるのかしら。あと……ついでにリゼとも」

「ついでとはまたリゼも可哀想なもんだが……普通にそれを言えばいいだけなんじゃねーの？」「ハイネのことが好きなの！だからずっと一緒にいて！」って」

「だ、だだだだ大好きだなんて、言っていないじゃない!?」

「いや、お前らがこーんなチビだった頃から知ってたわ。お前、いつつもハイネの手を引いて探検とかしてたもんな」

「へえ、可愛いー!」

「そ、そんなことはどうでもいいのよ!」

2人にからかわれて、この2人は失敗だったかと反省しかけていたが、そうする前にエミルが口を開いた。

「でもね、私と一緒に魔術を練習してる時のハイネくんって、とっても真剣だったわ。でね、1回だけ「どうしてそんなに真剣なの？」って聞いてみたことがあったの。そしたらね、彼はこう言ったの」

——俺、どうしても追いつきたい子がいるんです。今は黒の世界にいるんですけど……その子はとっても優秀で、俺なんかじゃ全然敵わない、天才なんです。

——俺、ずっとその子のことが好きで……だから、そんな彼女の目に俺がはつきり映るように、頑張るんです。強くなれば、あの子は俺を見てくれるはずだから。

——十二杖の息子って肩書きだけを持ったボンクラにだけは、絶対になりたくないんです。

「……あれは、ソフィーナちゃんのことだったのね」

それを聞いたソフィーナはハイネに対して申し訳ない思いでいっぱいになった。彼はそこまで気を張り詰めて頑張っていたのに、自分はそのを蔑ろにするようなことを平気で言っていたのだ。

「どうしよう……どうすればいいのかな」

気弱になったソフィーナが問いかけると、アルマは特に気負うでもなく、平然と、

「昔みたいにやればいいじゃん。手を引いてやれば」

「じゃあ、リゼは?」

「あいつは単に面白がつてるだけだろ。とりあえず謝つといて、それ

でもしダメなら、俺から話をするからさ」

「うん……」

どうして自分はハイネやりゼリツタのこととなると、こうも冷静でいられなくなるのか。

「ねえ、もしダメだったら、どうしよう……」

「んなことあり得るかよ。ハイネはお前がない10年間、お前に見てもらったことだけを考えて自分を鍛え続けてたんだぞ。こんなくらいで折れるなら、俺が殴ってやるさ」

困った時にはいつも助けてくれたアルマは、10年前と全く同じように歯をむき出してニツと笑った。

……………

琉花の血を吐くような独白に完全に打ちのめされてしまった春樹は、茫然自失のまま居住地区を歩いてた。

春樹のシヨックは、琉花が過去にしたことよりも、無意識のうちに自分が彼女を傷付けてしまったことが原因だった。もっと言えば、あの時に琉花が発した言葉が、過去に自分に向けられたそれと、ほぼ同じだったからだ。

——偽善者。

家に帰ろうか、それとももう1度説得しようか悩んでいたが、圧倒的に前者の気持ちの方が強かった。帰って、風呂に入って、寝る。それが非常に魅力的なものに思えた。それに、例え後者を選んだとしても、1度彼女を傷付けた自分を、もう1度受け入れてくれるだろうか。話さえしてくれないだろう。

そうして浮かない足取りで帰路を辿っていると、通りかかった公園の中に、見慣れない顔があった。

「……アウロラ？」

ベンチに腰掛けていた彼女は、沈んだ顔で俯いていた。彼女にαドライバーがいなかった時期は、よくこういう表情を見たが、俊太という彼女にとって最高のαドライバーが出来たにも関わらず、あの表情は少しおかしいと思った。今日も、教室では普通だったはずである。

とはいえ、じゃあそのまま慰めに行くかと言えば、そう簡単には考

えられなかった。何せ、数十分前に別の女の子を傷付けているのだ。普段の自分ならまだしも、今のメンタリテイでそう考えられる者など、そうはいないだろう。

「……いや、でもほっとくのは、良くないよな……」

他人本位で物事を考える癖がある春樹は、やはりアウロラの方へと足を向けた。少なくとも彼女は不登校になるほど気に病んでいるわけでは無さそうだし……という状況分析の元。

「アウロラ？ どうしたの？」

「え？ あら、春樹くん」

春樹が声を掛けると、アウロラは一瞬驚いたような顔になったが、すぐにいつもの柔らかい笑顔を浮かべた。しかし、先程までの沈んだ表情の残滓は、疲れのように見てとれた。

「うん……あのね。私……俊くんと、ぎくしゃくしちやつて」

「俊太と？ またどうして」

「それは……」

アウロラは言葉にしづらそうに、ぽつぽつと説明を始めた。自分の無配慮から、俊太を傷付け続けていたことを。

「どうして、格好良いつて言っつてやらなかったの？」

「だって……初めてだったんですもの」

「何が？」

「その……誰かに、恋をするってことが……」

アウロラは頬を赤らめながら、それでも沈んだ表情で答えた。

「私、変なの……普段は余裕を持って物事に接してるはずなのに、彼にだけは余裕でいられないの……こんなんじや嫌われちゃうつて思っつて、それでも恥ずかしくて、結局濁して可愛い可愛いって言っつてきたけど……それが彼を傷付けてたの……」

聞けば聞くほどもしかしい関係に思えた。俊太がアウロラに恋していることなど（本人に言ったら大変失礼だが）バレバレだし、アウロラも俊太が入学してから突然剣道部のマネージャーを始めるなど、傍から見れば付き合っつていて当然の関係のようにも思えるのに、実際はすれ違い続っつてている。俊太は少し屈折したところがあるので、仕方

がないと思っていたが、アウロラの側にも問題があったとは知らなかった。

「私……嫌われちゃったのかな……？」

「いや、そんなはずないと思うけど……」

寧ろ、その質問は俊太の方がしたがってそう、とは、敢えて言わなかった。確証はないわけであるので、適当なことは言うべきではない。

「……やっぱり、思ってるだけじゃ、ダメなのよね。言わなきゃ、何も伝わらないのよね」

「そうだね……」

さつき、春樹は琉花に伝えたいことを伝えられなかった。本当に伝えたいという意志があれば、例え琉花の慟哭を遮ってでも、伝えることはできたはずだった。

(できたはず、だった)

でも、春樹はできなかった。打ちのめされてしまったのもあるが、一番の理由は、彼自身が琉花を舐めていたことにあるのだろう。

(そう、舐めていた。悩みなんか俺が全部取り払ってやるっていう、自惚れがあったんだ)

自惚れ。あるいは過信、油断、傲慢。自分が吹っ切れたから他人もそうだろうという先入観。そう考えれば、琉花が——少なくとも、未だに自分のしたことを引きずっている彼女が——怒らないわけがなかった。

では、そんな部分をありありと見せつけた自分を、彼女は受け入れてくれるだろうか？ 先程までの曖昧な予感、より実体を強く伴った不安と化していた。

「伝えようとしなけりゃ、伝わらないよな」

「そうね。私は……伝えたかったけど、口にするのが怖かった。もう少しだけでも、この曖昧なぬるま湯に浸かっていたらいいって思ってたわ」

アウロラは頷きながら、自分に言い聞かせるように呟いた。それから、



「ありがとう、春樹くん。悩んでいたことを口に出せて、少しすっきりしたわ。ごめんなさいね」

「いや、いいよ。とりあえず前向きになってくれたなら、それで」  
寧ろ、春樹の方が余計に悩みを深めたのだが、注意深く行動できるようになったと考えれば、一概に後退とはいえない。……踏み出しづらくなったのは事実だが。

去っていくアウロラの背を、春樹はぼんやりと眺めていた。

——言わなきゃ、伝わらない。

——でも、聞いてくれるのだろうか？

そんなことを考えていると、携帯が鳴った。カレンからの電話。

「もしもし」

『春樹、今どこにいらっしやるのでございますか？』

春樹が現在の地の公園を伝えようと、彼女は、

『そこで待っているのでございます』

と言って電話を切った。

「……もしかして、今のでバレたかな」

だが、こういう時に頼れるカレンを、彼の心は大いに欲していた。

……………

「何、あんたまだ落ち込んでるの？」

「逆に、全く凹まないお前が羨ましいよ」

アルマの家の地下、彼自前の魔術工房の中で、ハイネは魔術式を書いていた。隣にはリゼリツタがいる。

書く、といつても、空中に描いた魔術式を羊皮紙に焼き付ける、というのが正しい。羊皮紙に焼き付けた魔術式は、魔導具を作成したり魔法薬調合をサポートさせるのに便利なのだ。ただ、今日はどうにも上手くいっていなかった。

「後悔してる？」

「……そりゃ、もちろん」

「謝る気は？」

「……分かんない」

逆上した自分も悪いが、原因はソフィーナにある、というのがハイ

ネのスタンスだ。実際、その通りである。だが、リゼリツタはそれを良しとしなかった。

「……置いて行かれたのは、あんただけじゃないのよ」「え?」

「あんたはソフィーナだけに置いて行かれたわね。でも私は、あんたにも置いて行かれた」

「……………」

リゼリツタは、常にない沈鬱な表情で告げた。

「11年前に、ソフィーナは私たちの前を去ったわ。でもね、私は5年前にあんたにも去られてる。寂しかったわ。からかう相手も可愛がる相手もない。あの村に子供は私だけ。残ったのは私の一家と、ネ口姉ねえの両親だけだった。寂しかったけど、頑張ってたのはあんただけじゃないわ」

彼女は淡々と事実を告げる。置いて行ったことに対して無配慮だったのは、ソフィーナだけではないと。

「……ごめん、リゼ。俺……」

「いいの。もう過ぎた事よ。ここは毎日が楽しい。同じ年代の子がいっぱいいるし……何よりも、あの村にいたみんながいる。アルマ兄もアビーもソフィーナも、あんたも」

「……そうだな」

珍しく、毒のない微笑みを見せるリゼリツタは、一番言いたかったことを告げた。

「あんたの今の心は、きっとソフィーナのものと同じはずよ」

「……そうかな。俺とソフィーナは違う。彼女は俺と違って、プライドが高い……」

「あら? あんたも似たようなものでしょ? だってあんたはソフィーナにキレたじゃない」

「それも、そうか……」

ハイネはここ数日感でそうなかった新鮮な気持ちで宙を眺めた。そして、もう1度魔術式を描き、羊皮紙に焼き付けた。

「……大丈夫みたいね」

「うん。俺、今からソフイーナの所に行ってくる。どうせまたあそこにいるだろうし」

「ええ。行ってらっしゃい。あと、あの子がちゃんと反省してたら、よろしく言っておいてね」

「わかった」

ハイネは立ち上がると、地上への階段を駆け上がった。いった。

「……ホント、誰も、何も変わらない」

取り残されたりゼリツタは、嬉しそうに呟いて羊皮紙を片付け始めた。

………

アウロラと話をすることさえしていない日々が続く、俊太は精神的に参っていた。まさか、自分の中でアウロラがあれほど大きな存在を占めていたとは、全く気付いていなかったのだ。

——剣道で、精神は鍛えたつもりだったんだけどな。

剣道で鍛えた精神はあくまでも誠実さとかそういう類のものであり、恋煩いへの耐性は特に得られていなかったらしい。

だが、気分が沈みつぱなしでは何も手につかないので、気分転換に少し遠回りして帰ろうと考えた。

青蘭島の居住区と砂浜の間には防砂林が植えられている箇所があるが、その中に林道のような細長い公園があるのだ。緑に囲まれて少し歩けば、きつと気分がいいだろう。幸い、学園特区からすぐに行ける位置にある。

——そういえば、初めてアウロラと出会ったのも、こんな自然の中だったよな。

実際には、島の東側にある花畑で、なのだが。そんなどうでもいいことを考えながらブラブラと公園の中を歩く。防砂林の中にある公園は林道なので、他所のものとは違い、地面が土だ。懐かしい土の感触を足に感じながら歩を進めていると……珍しい顔を見つけた。ベンチに座っていた、セニアである。

「あれ、セニア？」

「あ……俊太様」

無表情ながらも浮かないとはつきり分かる表情でつま先を見ていたセニアは、ハツと顔を上げた。

「あの、何かセニアに御用でしようか」

「いや、なんだか寂しそうにしてたから」

俊太が率直に言うのと、セニアはまた浮かない表情に戻った。

「……俊太様。ご相談があるのですが」

「俺でよければ、聞くよ。どうしたの？」

「実は……マスターと言いつ争いの喧嘩をしてしまったのです」

「え？ どうして？」

俊太は驚いて、俯いたままのセニアを見た。彼が初めてセニアと話した時、彼女に対して感じたあの《芯》はどこかに失せ、そこにいたのは、小さな、ただの悩める少女だった。

「セニアは、マスターに認めてもらいたかったのです。セニアは一人前で、1人でなんでもできます。そう伝えたら、マスターはダメだと仰りました」

それは、形こそ違えど、俊太がアウロラに対して抱いていた思いとよく似ていた。奇妙な偶然もあるものだ、とより傾聴する。

「4月に、春樹様にも似たような質問をしました。その際、彼は、マスターは心配性だから、セニアが傷付くの見たくないからだ、と仰られました。セニアはあれから、頑張ってきました。だから、認めてもらいたいのです」

「そっか。認めてもらいたいなだね」

「はい。でも……」

「ん、まだ何かあるの？」

「はい……セニアは、マスターが尚も認めないと仰られた時、つい感情的になって、口にははいけないことを言ってしまったのです」

「何て言ったの？」

「……マスターなんか嫌いです、と」

「……そっか。でも、キツイもんね。頑張ったのに、認めてもらえないって」

「怒らないのですか？」

「うん。なんていうか……俺も同じようなことで悩んでてさ。こんなに頑張ったのに、どうして結果が出ないの、って思うことは普通だよ。まあ、その……大嫌いは言い過ぎかもしれないけど」

そう言うと、セニアは余計に落ち込んでしまったようだった。そこから気を離させるべく、俊太は1つ質問を投げかけた。

「ねえ、セニア。セニアはどうして、冬吾先輩に認めてもらいたいの？」

「え？」

「俺はね、アウロラに認めてもらいたかったんだ。その理由は……内緒だよ？俺がその、アウロラのこと大好きだからなんだ」

「はあ……」

「なんかよく分かってなさそうだね……まあいいや。でも理由はそれだけじゃなくて、認めてもらえないままだったら、彼女がどこかに行っちゃうかも知れない、っていう不安からでもあるんだ」

「不安、ですか？」

「うん。恥ずかしい話だけど……」

俊太が頬を赤らめながら告白すると、セニアはやや考え込んでから、

「セニアが、マスターに認めてもらいたい、その理由は……マスターを、取られたくないから」

彼女は、自分の中の感情を整理するように呟く。

「マスターの元には、セニア以外にもアンドロイドがいます。セニアは、その誰にも、負けたくない。マスターに知ってほしい。セニアにしかできないことがあるのだと。他のアンドロイドの下位互換ではないと」

「いいじゃん。じゃあ、それを伝えなよ。自分には、他の誰にもできないことがあるから、そこだけでも認めてくれって」

「……はい」

「でも、それだけで満足しちゃダメだよ。いつか、自分全体を認めてもらえるように」

「はい。努力します」

セニアはどこか晴れやかな表情になっていた。

対する俊太も、自分の中のモヤモヤが、少し晴れているのに気付いた。

——そう。俺だって、アウロラに認めてくれて言ったことはなかった。なのに、行動だけで認めてほしいって、それはちよつと都合が良すぎる。

——伝えよう。俺の心の内を。そうすれば……。

木々の間から見える夕日がこんなに美しかったことに、俊太は初めて気付いた。

……………

「琉花の説得に失敗したようでございますですね」

カレンは春樹の前に立つなり、そう断言した。

「……どうしてわかるの？」

「成功していたら、少なくとも隣に琉花がいるはずでございましょう。でなければ、こんな場所でぼけつとしていているなんておかしいのでございます」

「……そうだよ。失敗した」

春樹は観念して、ことの成り行きを洗いざらい話した。

「……そこで躊躇ったのが決定的だったわけでございますか」

「うん。だって、液体を毒に変えて誰かを傷付けたことがあるって言われた直後に、琉花のエクシードの影響を受けた水を飲むか、って話」

どうにも言い訳がましくなってしまったが、そこで「だから何？」と言って平然と水を飲み干せば、何かが変わったのだろうか。いずれにせよ、過ぎたことであるが。

「俺……どうしよう。今の琉花に、俺の声が届くのかな。俺は琉花のいいところばかり見てて、悪いところを見せられた時に怖くなった。そんな根性無しの言葉を聞いてくれるのかな」

3年間の付き合いがあるカレンを前にすると、どうしても気弱になつてしまう。自分の弱さが、彼女の澄んだ瞳の前にむき出しになるみたいで、怖くなる。

そのカレンは、春樹の質問に質問をぶつけた。

「春樹。貴方様は、琉花を愛しておりますですか？」

「あ、愛して？ え、と、それは……」

「質問を変えましょう。貴方様は今でも琉花をチームに戻したいと考えていらつしやいますか？」

「それは当然だ！」

「では、その理由は？」

「理由……不登校のままだと心配だし、琉花の秘密を聞いたあとでも、俺は……彼女と仲良くしたいから」

ぐるぐるとこんがらがった思考の糸を一本一本手繰り寄せて、琉花を助きたい……その根底に有る理由を見つけると、カレンはフツと微笑んだ。

「それが、貴方様が琉花のことを愛している証拠でございます。愛する人の良い点も悪い点も認め、その先へと歩いて行きたい。それは紛れもなく、愛があるからでございます」

「愛……か……」

春樹はイマイチ実感が湧かないが、カレンが言うにはこれこそが「愛」であるらしい。

「俺は、どうすればいいのかな。愛があっても、変わらないでしょ」

「いいえ、変わります。愛は、どんなに分厚い心の壁さえも軽々と打ち砕き、どんなに遠く離れていようと一瞬で打ち抜ける、最強の武器だからでございます。それは決して、恋とは異なる想いでございます」

「恋とは、違う……？」

「そう。妄執のような、泥濘でいねいのような、灼熱のような恋とは異なり、愛とは、今の春樹が抱いているような、もっと崇高で、清いものがございます。全く無欲の、ただその人の助けになりたいという感情。そして、愛ならば、無責任に押し付けても良いのでございます」

「いや、それはダメだと思うけど……」

春樹が至極まっとうな反論をすると、

「ならばよろしい。私が今からお手本を見せて差し上げるのでござい

ます。よく、見ておくのでございますよ」

カレンは、そう前置きした後、春樹の両の頬を、その白魚のような手で挟んだ。

「何を——」

その後の言葉は、発せなかった。

唇が塞がれたからだ。

カレンの唇で。

目の前に、目を閉じたカレンの美貌があった。何が起きたか理解できない春樹は、その美貌を食い入るように見つめることしかできなかった。

どのくらいそうしていただろう。カレンの顔が離れ、その瞳が熱烈な意志を伴って春樹の目を貫く。

「愛しています、春樹。ずっと、愛しておりました」

カレンの唇が、囁くように言葉を紡いだ。心なしか頬は紅潮し、口元には微笑が浮かんでいる。

「辛いのでございますね。それは重々承知の上でございます。なので今晚は……私が全て、忘れさせて差し上げるのでございます」

蠱惑的な表情。魅力的な言葉。今抱える全てを投げ出して、彼女の愛に埋もれたい。

だが、

——偽善者！

「ダメだ」

「残念でございます」

カレンはあっさりとは無表情に戻った。数十秒前までキスしていた男の前にいるとは思えないほどの急変化に、流石の春樹も驚いた。

そんな彼などお構いなしに、カレンは淡々と言う。

「これが、愛を押し付けるということでございます。私は今、私自身の中にある愛を、接吻せつぶんという形で貴方様に押し付けました。貴方様は拒絶なさりましたが、私の想いは伝わりましたでございましょう？」

「……うん」

「ならば貴方様は、その胸に秘めた愛を、彼女に言えなかったことに乗



せて、押し付けるのでございます。よろしいですか？」

「……わかった。ありがとう、カレン」

「今すぐ行きなさい。まだ、時間はあるのでございます」

「うん」

春樹は立ち上がると、そのまま公園を出ていこうとして、振り返った。

「あの……カレン？」

「はい、なんでございますよう」

「その、本気なの？」

「何が？」

「いや、だから、俺のことをその……」

春樹が言葉を選んでいると、カレンは非常に珍しく——可笑しそうに笑った。

「当然でございます。少し前に言ったでしょう。一だけ知って残りを足掻こうとする貴方様は魅力的だ、と」

「そ、そうだったね」

カレンは春樹に駆け寄ると、その背中を、バン、と音がするくらいに強く叩いた。

「今回の貴方様は少々知りすぎでございます。だから残りは、しつかり足掻きなさい」

「……おう」

それは、彼女なりの激励だったのだろう。春樹は、もう振り返らなかつた。

(愛を、言葉に乗せて、伝える)

アウロラの言葉とカレンの言葉が重なり、ひとつの答えが照らし出された。自分の中にある、琉花への想いを、はっきりと伝えるべく、言葉にする。

聞いてくれるかどうかではない。聞かせるのだ。無理矢理にでも伝えるのだ。拒絶されたとしても構わない。伝えなければ、何も始まらない。

先月のことを思い出した。春樹のことを殴った冬吾。彼の想いは、

文字通り痛いほどの勢いで叩きつけられた。あれもまた、愛なのだろうか。愛を、拳に乗せて、押し付けたのだろうか。

(見てろよ。もう俺は、迷わないぞ)

夕日の中、春樹は進んでいる。

だが、締まらないことに、あのキスの感覚を完全に吹っ切れてはいなかった。

.....

「希美。お前、今日はステージの練習じゃなかったっけ？」

「.....」

悠馬の問いかけに、希美は答えなかった。答えず、ただひたすらにサンドバッグを殴っている。その必死さは、まるで何かから逃げているかのようだ。

場所は、彼女が体術の練習のために通っているボクシングジム。本来なら雄馬が先に来ていて、もう少し後で希美が合流するはずだったのだが、来てみれば既に希美がサンドバッグを殴りつけていたのだ。

「おい、希美」

「.....なに」

「一旦手え止めろ」

「.....」

希美は答えなかったが、ガツン、と音を立てて、サンドバッグを止めた。

「どうした。なんでこんなに早くからいるんだ」

「.....もう、いい」

「なんだと？」

希美は雄馬を見上げた。その瞳には、涙が光っている。

「もういいの。美海とまた言い争ったし、今度は沙織とも喧嘩した。もうおしまいだよ」

「それで.....お前はそれでいいのっか？」

雄馬の質問に、希美は首を小さく縦に振って肯定した。だが、目を合わせようとはしなかった。

そんな希美を見て.....雄馬は、これではダメだ、と感じた。

だから。

「——っ!？」

乾いた音がジムの中に響く。雄馬が希美の横っ面を叩いたのだ。

「ゆ、雄馬、くん?」

今まで、どこまでも優しくかった雄馬の顔は、凍えるほどの怒りに彩られていた。

「お前……それは、だめだろ。人として、だめだ。約束を破るな」

「……でも」

「でもじゃない」

希美の反論を封じると、いよいよ彼女は泣き出してしまった。

「でも!・ どうしていいかわかんないよ! 美海は私のことを許してくれない! 私、美海に意地悪したもん! 沙織の目の前で喧嘩したから、2人とも大嫌いつて言われたんだもん! もう無理だよ! 仲直りしたいのに、どうすればいいか、全然分からないよ!」

しゃくり上げながら気持ちの濁流を吐き出す希美。ぺたんと座り込んで泣きじゃくる彼女の頭を、雄馬はそつと撫でた。彼の顔に、既に怒りは無い。

「ほら、仲直りしたいんじゃない。じゃあそう言え。仲直りしたい、意地悪してごめんなさいって」

「……でも、聞いてくれるわけ無い……」

「そう思ってるから、マイナス思考になるんだ。もつと明るいことを考えろ」

「そんなの、無理だよ……」

尚も弱気な希美の背を軽く叩いた雄馬は、彼女の隣に座って口を開いた。

「なあ、希美。ずいぶん前に、俺言ったよな? 影での努力は立派だが、誰にも見せないのは良くないって」

「……うん」

「理由、覚えてるか?」

「……誰かに見られてないと、怠けちゃうから」

「そう、怠けるんだ。自分一人だけで頑張り切れる奴なんかそうそう

いない。大方のそういう連中は、大して成長できていないのに、できた気になってる。結果を出すことよりも「努力してる自分」が大事なんだよ。結果の出ない努力に何の意味がある？ 言い方は悪くなるけど、監視の目が無い努力なんか、俺に言わせりゃ1人よがりの『努力ごっこ』さ。だから努力し続けるには、周りの連中に「自分は努力してます」って言いふらして、実際にその姿を見せれば、引くに引けなくなつて努力し続けなきゃいけなくなる。自分を追い込んで、本気を出す……それが本当の努力ってもんだ」

「……………」

「けどな、もっと重要なのは、自分の心身の負荷に気付かない奴が、それで壊れるからなんだよ」

「壊れる……？」

「ああ。自分の身体や心に傷が付いてるのに、まだ頑張れるって思い込んで、それで過負荷を掛けて壊しちゃう。でも、傍から見てる奴は、明らかな異常を指摘してくれる。で、今のお前が正にそれだ」

「え？」

「お前、自分がどんだけストレス溜め込んでるか、誰かに話したことあるか？」

「……………」

「だろ？ それは、お前自身がそれに気付いてなかったからなんだよ」

雄馬は彼女の背中を軽く叩いて慰める。

「今までは、俺結構気を使ってお前のストレスを管理してやってたけどな、お前ももう高校生だ。そろそろ、自分でそういうことをできるようになったほうがいい。……って思って、少しほつといたんだけど、ちよつとまだ早かったかな……」

「は、早くない！」

その言葉に、失望のニュアンスを受け取った気がして、思わず声を上げてしまう希美だったが、雄馬は寧ろ微笑んだ。

「いやいいんだよ。失敗なんて誰でもするし。若いうちなんて失敗して当然だよ。これも数ある失敗のひとつで、それを踏まえて

前進しよう」

「前進？」

「そう。お前、今から美海のところ行って謝ってこい」

「え!?! でも、無理だよ……」

「例え無理でもぶつかるとだ。扉が鉄製なのか紙製なのかなんて、叩いてみなきゃわからないだろ？ 文句を言うなら、美海に振られた後にするんだな」

それでも、やや煮え切らない様子の希美。3年間、彼女のそばにいた雄馬は、仕方がないなあと頭を掻いた。

「……希美。いいことを教えてやろう。人を努力させるための3つのポイント」

「努力……させる？」

「そう。1つ目はさっき言った、周りの目を作ること。見られていると思えば、人は自然に努力できる

2つ目は、期限を設けることだ。宿題に提出期限があるのはそのせいで……これも他言しておくとおくと効果アップだ。

3つ目、なんだか分かる？」

「………分かんない。なに？」

「うん。めっちゃ単純な話なんだけどな。3つ目は、ご褒美を用意すること」

「ご褒美？」

「そう。そして俺は今から後者2つを設けるぞ。まず、今日中に美海と話をしろ。そして、成否に関わらず、それが達成できたら、ご褒美をあげようじゃないか」

「な、何をくれるの？」

希美がおずおずと訊ねると、雄馬は、

「何でも。まあ、俺が叶えてやれる範疇での話だけど」

「な、何でも」

「そうだ。さあ、何が欲しい？」

「そ、そんないきなり言われても……後でじゃダメ？」

「ダメ。明確な目標を目指すことで、自然と努力できるからな。曖昧

「じゃ効果が薄い」

「うーん……」

希美はしばらく考え込んだ上、頬を赤らめて問いかける。

「その……変なお願いだけど、いいかな?」

「なんだ、言ってみな」

「……デートして。1日間」

「そんなことか? もちろんOKだよ。寧ろ、そんなんでいいのか?」

「……うん。これがいい。もう高校生になったんだし」

希美は頬を紅く染めたまま自問自答し、これで良いという結論に  
なったらしい。

「よし分かった。じゃあ俺も、とびっきりのデートコースを考えてお  
こう。どこがいいかなあ」

「……ホントにいいの? その、生徒と先生なのに……」

「俺はあくまでも講師だからな。学校外に出れば、ただのおっさんだ  
よ。とはいえ、美海の方もどうにかなるだろう」

「なんで?」

「だって、俺をデートに誘えるんだからさ。言いたいこと、全部言える  
さ」

「……そ、そうかな?」

「おう。お前は出来る子だ。大丈夫。自分のしてきた努力を、ちゃん  
と自信に変えるんだ。いいな?」

「うん」

希美が決心を固めた様子を見て、雄馬は、やっぱりこの子はいい子  
だ、と思う。それから、先ほど叩いた彼女の頬に手をやり、優しく撫  
でた。

「ひゃっ!?!」

「さつきはゴメンな、いきなり叩いて」

「……うん。痛かったし、びっくりした」

「ゴメンな。でも、お前に自分が今どうなってるのかを知ってもら  
うには、こう、ちょっとしたショックがいるんじゃないかって思って  
……でも、早計だったかもな」

「ううん。いいの。なんていうか、気合入った。もう一回やって？」  
「いや、やだよ。でもまあ、このくらいなら」

雄馬は希美をこちらに向かせると、その両の頬を両手で挟むように、優しく叩いた。

「あ、あと監視も一応付けるからな。これで万全だ。もう後はないぞ。さあ、行ってこい」

「……うん」

監視の目がある。引くに引けない。期限を設けた。これも監視されている。そして、ご褒美がある。それを思えば、プラス思考になる。それを教えてくれた雄馬に、

「……雄馬くんって、どうしてそんなにいつも元気でいられるの？」

昔から気になっていたことを訊ねると、彼は常のような快活な笑みを浮かべて答えた。

「元気でいると、女の子にモテるからな。そのためさ」

……

今日2人目の来客だった。

「よっ。あらあら、そんな顔しちゃって」

その来客は、恐々とドアを開けた琉花の顔を見るなり洗面所へ引っ張っていき、顔を洗わせて櫛とドライヤーで髪を整えた。

「うん。少しマシになったね」

「なんなんですか……」

来客——成瀬朝子はニツと笑った。琉花は辟易したような声を出したが、不思議とそこまで不快感がなかった。

今日はもう誰とも話さないと決めたのに、(密かに)憧れていた朝子が来たと聞いて、ドアを開けてしまった。

「なんで来たんですか？」

「んー。まあ率直に言うと、紗夜の差金かな」

「紗夜先輩の？」

「うん。なんか琉花ちゃんがまずいことになってるって小耳に挟んだらしくて。で、あいつが相談役にぴったりだって考えたのが私、つてわけ。どうしたの。なんかたくさん泣いた後だったっぼいけど」

「……………実は」

琉花がつい先ほど春樹にしまったことを話すと、朝子はうんうんと頷いた。しまいには、また涙が出てきて、

「私……………本当にハル先輩にひどいこと言っちゃった……………」

と自分を責めようとしていたら、朝子が側に寄ってきて、琉花の頭を抱いた。

「うえ?」

「うんうん、キツイよね。その場のノリで誰かを傷付けちゃうってこと、結構あるんだよ。それで後からぐるぐるぐるぐる考え込む……………うん、学生なら誰にだってそういう経験はあるもんだよ。もちろん、私にもね」

「そうなんですか……………?」

「ああ、そりゃあひどいノリで紗夜と大喧嘩したもんさ。行くところまで行って、もうお互いの欠点という欠点をぶちまけて……………最終的には殴り合いまでしてさ。絶交もんだと思ってたよそんな時は。でもま、なんだかんだで仲直りして、今や大親友って感じだけどね」

「……………どうして仲直りできたんですか?」

「んー、そんな時はメデイー——あ、ゴメンね。私と紗夜にはもう1人親友がいるんだけどさ、その子が間でこそこそとやって……………せつかく作ってもらった仲直りするための機会も3回くらいぶつ飛ばした挙句、なんだか喧嘩してんのにバカバカしくなっちゃってさ。「もういっか?」て聞いたたら、「もういいわ」って言われて……………まあ、そんな感じ」

「……………運が良かっただけじゃないですか?」

そんな好都合はそうそうない、と感じたままを言うと、朝子は苦笑した。

「そう言われちゃあそうとしか言えないね。でも、相手は春樹くんでしょ? 言った内容も、偽善者、ムカつく、引け腰——」

「く、繰り返さないでくださいよー!」

「んっふふ。ゴメンゴメン。でも大丈夫だと思っよ。私が紗夜に言ったのよりも全然マイルド。それに、琉花ちゃんが過去にしたことも、



全部」

「え……？」

「小さい頃にエクシードで起こした事件がトラウマになっちゃってる子って、探せば結構いるもんなのよ実は。でき、私はそういう子を何人か見てきたけど……言えることは「気にするな」ってことだけかなあ」

「そんなの……無理です」

「まあまあそう言わずに。じゃあ、今後悔しまくって登校拒否して、それで昔やらかした事実が変わるのかい？」

「それは……違いますけど」

「でしょ？ やらかした過去は過去。それは、今を全力で生きない理由にはならないよ。まあ、少しくらい休憩してもいいけどさ。そろそろ終わりにしよう」

「先輩は……何も知らないから……！」

「うん。私は何も知らないよ。だから、琉花ちゃんはここまでぶっちゃけてるんでしょ？ それは、ちよつととした足掻きなんだよ。今キツイって思ってるなら、それはもう少し踏み出してみれば、楽になるもんだよ。バトル、近いんでしょ？ じゃあ、それに向けて走ろう。そうすればきつと、今よりは良くなるよ。」

結局のところ、人間、どうにもならない過去をどうにかしようとするより、どうにでもなる現状をどうにかしてる方が楽なのさ」

頭を撫でられながら、言葉をすり込むように言われると、本当にそういう気がしてくる。

どうして私は今、完全に立ち止まっているのだろう。結局、私は私が出たことから逃げ続けているだけなのではないか？ あの事件を、真正面から受け止めたことはあっただろうか。

そう考えていると、ドアがノックされた。

………

ここに戻ってくるのはついさっき振りだが、やはりドアの前に立つと緊張した。しかし、その気持ちを押しつぶしてドアを叩く。

ちよつとの間が有り、ドアが開かれた。

「よっ、春樹くん」

「え、朝子先輩?! なんでもここに……」

「ま、先輩からのちよつとした親切、かな。思ってたよりも早かったけど」

朝子は快活な笑顔になって、部屋の中に呼びかけた。

「そんじゃー、そろそろ私はお暇するよ。あとは頑張ってるね」

「は、はい」

部屋の中から琉花の声が返ってきた。心なしか、先ほど話した時よりも元気になっているようだ。

春樹と入れ違いで部屋から出ていこうとする朝子は、すれ違い様に耳元でこっそり囁いた。

「ちよつと壁崩しといたから、まあ頑張りな」

「……はい、ありがとうございます」

朝子はふふつと笑うと、春樹の背中を叩いて、今度こそ出て行った。それと入れ替わるように、もう1度、部屋の中に踏み込む。

琉花はさつきと同じ場所に座っていたが、表情は暗いとはいえ先ほどと比べれば幾分か明るく、また同時に緊張してもいるようだった。

「座るよ?」

「う、うん」

春樹は了承を得て、彼女の正面に座った。そして深呼吸をしてから、思い切って口を開いた。

「まず、さつきはごめん。俺、その気は無かったけど、琉花のこと傷付けた。琉花が俺に言ったこと、全部その通りだったよ」

「そ、そんなことない。私も……言いすぎたから。その、ごめんなさい」

琉花の反応はかなり良い。拒絶全開オーラでは無くなっている。春樹は、言いたかったことに愛を乗せて、琉花にぶつけにかかった。「俺には、琉花が必要なんだ。ブルーミングバトルにもだけど、後輩として、友達として、大事なパートナーとして」

「……本当?」

「もちろん。お前の秘密を聞いた後でも、思いは全然変わってない。

必要だつて以上に、今まで通り、仲良くしたいんだ」

「……でも、私はハル先輩のことも、チームのみんなのことも、傷付けるかもしれないだよ?」

「それでも構わない。苦しんでたら助けになりたいし、悲しんでいたら慰めてあげたい。俺は、琉花とずっと一緒にいたい」

そう言うのと、琉花は下を向いて少し黙った後、ぽつぽつと語りだした。

「……私、ずっと逃げてた。なかつたことにしてた。だからあれだけシヨックを受けたんだと思う。でも、思い出して罪の意識を感じたららつて、今更どうすることもできないつて、朝子先輩に言われたんだ。それよりも、今をどうにかしろつて。そつちの方が、ずっと良くなるからつて」

琉花は顔を上げて春樹の目を見つめた。彼女の瞳の奥に不安が見えた。水がたくさん入った器が揺らされて、今にも水がこぼれそうになつているかのように。

「私……いいのかな? 全部置いて、楽になつても。許されるのかな……?」

「それは……許すとか許されるとかそういう話じゃないでしょ?」  
「え?」

「事件を忘れないでいつか償いをするにしても、それをするのが今じゃないなら、今は、全力で生きなきゃ。全力で生きて、その先に何を選ぶのかは、琉花の自由だと思うよ。……ごめん、上手く言えなくて」

「……うん、分かつた」

琉花は微かに震える声で答えた。その答えをしつかりと聞き届け、春樹は立ち上がり、琉花の前に立つて手を差し出した。

「……?」

なんだかよくわからないその手を掴むと、春樹は手を引いて琉花を立たせた

「行こう、琉花」

「え? どこに?」

「海。お前、エクシードの練習上手く行ってなかったろ？ 今からやるぞー！」

「え、今から!?」

「そうだよ！ さ、行こうぜ！」

「ちよ、ちよと待つてよ！ 私、着替えなきや……」

「大丈夫だつて！ 海なんてすぐそばじゃん。誰も気にしないよ！」

「え、ええ……!?!」

春樹は琉花に靴を履かせると、そのまま手を引いて琉花を連れ出した。

「……デリカシーなさすぎ」

「え？ なんかつたか？」

「ううん、なんでもない！」

返ってきた琉花の声は、普段の快活さを取り戻しつつあった。

……

春樹と琉花が寮を出た数分後。

美海が寮の前に戻るのと同時に、希美も寮に戻ってきた。

（――っ）

美海は一瞬たじろいだ。が、それは希美も同じだった。2人して、言いたいことを胸に秘めたまま立ち尽くす。

先に口を開いたのは希美だった。

「あ、あのね。私……美海に言わなきやいけないことがあるの」

それを聞いた美海も、口を開く。

「わ、私も同じ。言わなきやいけないこと、あるよ」

「あんたが先でいいわよ」

「ううん。先に言い出したから、希美ちゃんから」

「……分かった」

希美は頷くと、やっとの思いで言葉を紡ぎだした。

「私ね、ずっとあんたが羨ましかったよ。妬ましかったって言ったよね。あれはホントのことで、今でもそう思うほどだった。そこは、否定しない。私はあんたが羨ましい。」

……でもね。ここにきて初めて分かったの。私のことをずっと照

らしてくれてたのは、あんだだっただってことにね。誰かに話しかけるのが怖かった。あんたの光に照らされたないと、不安で堪らなかつた。

私はずっとあんたが嫌いだった。でも、あんたの光に照らされたくて堪らなかつた。あんたが、優しく輝いてる美海が、ずっと大好きだった」

希美は自分の心の内を全部さらけ出す。その中には汚い感情もあつた。それでも全てを明かしたかつたのだ。

そして、それに美海は答える。

「……私は、ずっと希美ちゃんのことを嫌いだったよ。暖かいお父さんとお母さんに囲まれて、それが幸せだつてことに気付いていないあなたが、心底妬ましかつた。私もそういう暖かさが欲しいって、ずっと思つてた。今でも、そう。」

でも、希美ちゃんが行つちやつてから、私には友達ができなくて、ずっと寒い思いをしてきたの。それでようやく分かつたんだ。いつも側にいてくれた希美ちゃんが、ずっと私のことを暖めていてくれたんだつてことに。寒くて寒くて……青蘭島に行けるつて分かつた時、一番に希美ちゃんに会いに行くことが頭に浮かんだくらい。

ずっと嫌いだったけど……希美ちゃんの暖かさが忘れられなかつた。私は、希美ちゃんの優しい熱が、ずっと大好きだつたんだよ」

美海もまた、希美がしたのと同じように、溜め込んだ感情を洗いざらい吐き出した。

2人は夕日の中、見つめ合う。

「ねえ、希美ちゃん。私、希美ちゃんの友達になりたい。いいところも、悪いところも、全部受け入れて……私は、希美ちゃんの友達になりたいの」

「……いいの？　こんな私を、受け入れてくれるの？　これから先も、あんたのことを妬むかも知れないの？」

「うん。妬んでもいい。嫌つてもいい。それは私だつて同じだよ。希美ちゃんの家族のこと、羨ましいって思つちやうかも知れないよ」

「そんなの、別に大したことじゃないわ。でも……」

希美が二の句を継ぐ前に、美海は希美に抱きついた。

「ごめんなさい！　ずっと妬んで、ひどいこと言って、ごめんなさい！」

「私も……ごめんね。ひどいこと言って、意地悪して、本当にごめん！」

2人は自身の言いたかった最後のことを——謝罪を——言った。

「ねえ、いいかなあ？　私、希美ちゃんの友達になれるかな？」

耳元で囁く美海の声は、涙に濡れている。それが分かったとき、自然と希美の目からも涙が溢れ出した。

「私も……美海の友達になりたい。こんな醜い私でも、あんたの友達になれる？」

「希美ちゃんは醜くなんかないよ。それを言うなら私のほうが……」

そんな卑下合戦をしていると、急にバカらしくなって、どちらからともなく声を上げて泣き出した。2人はお互いの身体を、きつく抱きしめる。もう離さないという意志を、より強く相手に伝えようとするかのよう。

「——美海ちゃん、希美ちゃん」

そこに、声がかかった。2人は飛び上がって離れて声の主を見ると、寮から沙織が出てきていた。

「仲直り、した？」

「え？　う、うん。その……そうで、いいんだよね？」

「そ、そうね。ええ。仲直り、した」

2人が涙を拭いながら答えると、今度は沙織が泣き出した。

「もう！　2人ともバカ！　本当に大バカ！　私に内緒で喧嘩なんかして！　言ってくれれば、いくらでも間を取り持ったのに！」

その大音声に度肝を抜かれた2人は慌てて沙織を慰めようと、

「さ、沙織ちゃん。もう大丈夫だから。ごめんね、心配させたくなくて」

「そ、そうよ。黙ってたのは沙織を気遣ったのことで、悪気があったわけじゃ……」

そんな2人を、沙織は出し抜けに抱きしめた。息が止まるほどの圧

迫感が2人を襲う。

「げえ!?!」

「うぐ!?!」

「大好き……2人とも大好き! これからもずっと一緒! 喧嘩しても同じだからね! 分かった!?!」

声を張り上げて泣く沙織の背を、美海と希美は優しく撫でた。2人もまた、涙に顔を濡らしていた。

1度は分たれた3人の影は、朱い夕日の中で1つに溶け合っていた。

……………

「はあはあ……もう! 私、靴下履いてないんだよ!?!」

「あつはは、ごめんごめん」

寮から砂浜の波打ち際まで一気に駆けてきた2人は、そこでようやく立ち止まって、荒い息を整えた。特に琉花は、ここ数日感外に出ない上、ロクに食事も摂っていないため、運動が得意とは言えど流石に息が上がっていた。

「なあ、綺麗だろ?」

「え? うん、そうだね……」

春樹が見つめる海は、夕日を反射し、朱く染まっている。水平線に太陽は沈みつつあり、東の空は藍色に変わりつつあった。

「さあ、やるか。水はいっぱいあるから、好きなだけやれ」

「え、でも何をすれば……」

「ん? まあ、やりたいようにじやない?」

春樹はそう言うと、琉花の手を掴んだ。

「え!?!」

「あ、いや、いきなりごめん。ほら、リンクするからさ」

「そ、そう……分かった」

琉花は戸惑いながらもリンクの姿勢に入った。目を閉じ、心を落ち着かせる。その耳に、春樹が囁いた。

「大丈夫。合わせるよ」

「……うん。ありがとう」

春樹の心が分かった。合わせる、という言に偽りは無いようで、その心は穏やかだった。

その暖かさを感じた。琉花の全て——良いところも悪いところも含めて——を包もうとする優しい熱。

(ああ、この人は、こんなに暖かい心で、私を受け入れてくれるんだ) そう思ったら、不思議と恐怖が薄れてきた。

心は自然と重なり……そして繋がる。リンクする。

「……よし」

琉花は自分に前置きをして、春樹と繋いでいない方の手を前に突き出した。そこに力を込め、目の前の海に作用させる。

「おおつ、今までで一番凄くないか？」

春樹が感嘆の声を上げた。気付けば琉花は、今までの限界量の3倍程度の海水を一気に持ち上げていた。それを砂浜の上、自分たちの真上まで移動させてみる。しかも恐ろしいことに、まだ余裕があった。

彼との生リンク(バトルフィールド以外でのリンク)はかつて1回だけ、美海を奪還するときだけ結んだことがあったが、その時でもこれほどではなかった。

(すごい。力が、いくらでも湧き出てくる)

胸の奥から、春樹を通じて力が湧いてくる。まるで、その太い繋がりを祝福するかのように。

「じゃあ、試しに1回やってみようか」

「な、何を？」

「水質変化」

「だ、ダメだよ！」

流石にそれには反応するが、春樹は寧ろ笑い飛ばした。

「大丈夫だ。俺が付いている」

彼は手を持ち上げて、繋いだままのそれを琉花に見せつけた。

琉花はそんな彼を見て……少しイタズラしたくなった。

「そんなんじゃないダメ」

「え？」

「後ろから抱きしめて」



「え!? ……でも、それなら出来るの?」

戸惑う春樹が、どこか可愛らしくて。琉花はニツと笑った。

「やってみるさ」

「……よし、分かった」

春樹は繋いでいた手を離すと、琉花の後ろの回り込み、背中から腕を優しく前に回した。

彼の熱を背中全体に感じる。琉花を後押しするかののように、優しく鼓動する春樹の心。

「さ、あれを、真水にしてみて」

「……うん」

琉花はもう片方の手も突き出して集中。

(あの時は、そういう憎しみとか怒りが、毒を生み出したんだ。なら、真水にするには?)

答えは余りにも簡単だった。琉花は自分の心を極限まで落ち着かせ、繋がっている春樹の心と合わせる。彼の、清い想いを抱く心と。(これが、ハル先輩がずっと私に伝えたかったことなんだ)

いつの間にか、彼女は微笑んでいた。彼と一緒に何でも出来る。どうにだってなる。罪の意識は消えていないものの、今までのように琉花を苛む毒ではなく、心の片隅の闇に——誰でも普通に持っている物に——なりつつあった。

どこまでも透き通った想いを、両手の先から、浮かべた水の塊に放出する。まるで心が解き放たれたかのように、どこまでも自由に。

しかし、消耗は存外激しかったらしい。

ふっ、と力が抜け、頭上の水の塊が落ちてきた。

「うおわっ!」

「きゃあー!」

ばっしやーん、と音を立て、2人ともずぶ濡れになった。

「いってー!」

特に春樹はリンクしていて琉花が受ける痛覚まで受けたため、頭が2重に痛い。

「バ、バ、めんー!」

「え？ あはは、別にいいよ。痛みを引き受けるのがαドライバーの仕事だからな！ それより……」

春樹は頬に付いた水滴を指先で取ると、それを躊躇なく口に入れた。

「ちよ、ハル先輩!?!」

「あ、すごい。真水になってるよ!」

「それ、私のエクシードが……」

その言葉は、春樹の満面の笑顔に出会って立ち消えた。

「大丈夫だって。琉花の心、すつごく綺麗だったから」

「……ありがとう」

春樹と琉花は少しの間笑い合っていた。シャツもズボンもびしょ濡れで、靴の中も下着も濡れて非常に気持ち悪かったが、彼の笑顔を見ていると、それもどこか心地よかった。

すると、急に春樹がぎよつとなつてジャケットを脱いで、それを琉花に差し出した。本人は海の方を向いた。今の琉花は、プリント付きとはいえ白Tシャツ1枚。それで、彼の言わんとするところを察した。

琉花はジャケットを受け取って羽織りながら、

「……み、見た?」

「えーと、そうだな……可愛いブラだね」

「さ、サイテー!」

これでブラさえ付けてなかったら、今すぐ砂に穴を掘って埋まりたくなっていただろう。

借りたジャケットの前を念入りに閉めていると、春樹が呟いた。

「なあ、怖くなんかないよ。琉花。俺さ、去年プロGRESSを一気に失ってから、毎日が怖くてたまらなかった。誰も助けてくれないって、さっきの琉花以上に引きこもってたし、荒れてた。もう誰も、大事なやつなんか作らないって決心してた。

でも、お前たちが俺を、また信じさせてくれた。信じていいんだって思わせてくれたんだ。

だから今度は、俺がお返しする番だって。……ちよつとカツコつけ

すぎかな」

「ううん、そんなことないよ。カッコいい」

感慨に浸った声音と言葉に混ぜられた冗談に、琉花は笑って答えた。それから春樹の隣に立って、同じように海を眺めた。

「琉花。俺らはまだ、全然頑張れるよな。だって、あんなに強く繋がれたんだからさ」

「……そだね」

どちらからともなく手を差し出し、互いの手を握った。

「一緒に頑張ろう、琉花。あんま時間ないけど、そんなもんどうにでもなるさ。そんで勝とうな。一緒に」

「……うん。一緒に」

太陽は水平線に沈み、新たに地上を照らすは数多の星々と3つの門ハイロッの光。

光は繋がった2人と海を、優しく照らしていた。

## 第1話 『私があなただを 愛していたこと』

数日間を経て、いよいよバトル当日がやってきた。

五月晴れという表現が（厳密には違うとは言え）ぴったり当てはまりそうな、カラっとした天気。陽光に包まれた会場には、多くの人がやってきていた。場所は青蘭学園が管理しているコロシウムではなく、青蘭島の東側に位置する、青蘭丁管轄の汎用グラウンドだ。前回のよりも小さめのフィールドが2つ並んでおり、その両方でブルミングバトルが同時に進行していた。

「やー、やっぱり緊張するなあ」

「大丈夫だよ春樹くん！ ずっと頑張ってきたもん！」

2回目とはいえ、また人前でバトルをするのだと思うと緊張してきた春樹に、美海は持ち前の明るさで励ました。

あの日。琉花を連れてびしょ濡れのまま寮に戻った春樹と琉花。どこか安心したような表情の小春に乾かされながら、2人でなにしてきたの！ という趣旨の大目玉を頂戴していると、食堂に美海がやってきた。

琉花の問題を解決していい気になっていたが、まだ美海も残ってるんだ——と思うも束の間。少し前までの彼女とはまるで異なり、彼女は晴れ晴れしい笑顔を浮かべていた。

2人がずぶ濡れなことよりも、琉花が前向きになったことが嬉しいらしい小春は、そろそろ夕食だし、と2人を解放した。

春樹は、彼を見つけて寄ってきた美海に訊ねた。

「その、美海？ 大丈夫？ 何か悩みとか……」

「え？ うん。大丈夫！ さっきね、新しい友達ができたの！」

「新しい友達？」

春樹と琉花が揃って首を傾げていると、ちょうどそこにやってきた彼女を引つつかみ、

「そう、希美ちゃん！」

「え？ 元々友達でしょ？」

と、ここから、実は数日前から希美と喧嘩しており、そのせいでいろいろ調子がおかしかったんだという理由を聞いた春樹は、まず安心した。そして、

「お前ら喧嘩してたなら言えよ！ そうすりゃいくらでも間を取り持ってやったのに」

「わ、びつくり。沙織ちゃんと全く同じこと言ってる！」

「いいから、わかったか!? これからはちゃんと言うんだぞ！」

「ひゃ、ひゃいっ！ ごめんなさい！」

と、春樹が手を貸さずとも解決していた。

後で、美海が前向きになれたのは冬吾と話したからだと聞いて、彼に頭を下げたり、逆に下げられたりというやり取りをした。

そして、残り少ない日数で、プログレスは戦闘技術を、春樹は戦略を、詰め込めるだけ詰め込む。なぜなら、今回のバトルフィールドは前回のようなんだっ広い人工芝のフィールドではなく、壁のような障害物が生成されるフィールドなのだ。地形はランダムらしいが、その基本的な活かし方は、知っておいて損はない。特に、障害物が置かれることで、美海の必殺技である「フィールドから吹き飛ばす」が非常に使いにくくなることは、戦略的に大きな意味を持つ。前回のフィールドでテルルがしたように、地面に自分を固定せずとも、障害物にしがみつけばいいからだ。一方のプログレスたち、というより美海と琉花は、単純ながら戦闘における障害物の有効的な利用の仕方をカレンと忍から学ぶ。

日数は少なかったが、やれるだけはやった。

片方のフィールドでは既にバトルが開始されており、それぞれのプログレスが火花を散らしていた。障害物は白い石材らしく、それを出来た壁や柱は、破壊されているものもあった。戦闘の邪魔になる障害物は破壊してもよいというルールで、戦略に則ったものなのだろう。

もう片方のフィールドには誰もいない。ここが春樹たち“スカイブルー・エレメンツ”が戦うフィールドだ。バトル開始15分前に障害物が生成され、そこからバトル開始5分前までは、好きに見て回ってもよいという。その10分間で戦略を練らなければならない。

既に全員の着替えは済ませてあり、バトル開始まで20分弱。α  
データパッドを受け取ってフィールドに出ると、観客が沸いた。

「来たな、春樹。今日は正々堂々、勝負だ」

「雄馬先生。こっちこそ、どうぞよろしくお願いします」

先にフィールド入りしていた雄馬がこちらへ歩いてきた。挨拶を  
交わすと、

「今回はこの3人で出る」

と後ろを指した。立っていたのは、希美と沙織、そして――

「やつほー、春樹くーん」

「え、絵麻?」

のんびりと間延びした声。生徒会副会長の、蒼月絵麻だった。

「いや、元々は紗夜に手加減させる予定だったんだが……絵麻がどう  
しても出たっていうから仕方なく」

「でも、1年生2人と2年生1人で、公平でしょー?」

「まあ、確かにそうだね……」

絵麻は強い。生徒会副会長が務まるほどだ。元生徒会の紗夜の妹  
というだけあって、その戦略立案の腕も割といい方だ。

その絵麻は観客席に向かって手を振っていた。そちらを見ると、兎  
莉子や忍の隣に、紗夜が座っていた。どうやら応援に来たようだ。

絵麻の言うとおり、公平なのは確かだ。だからこそ、戦略の立て方  
で全てが変わる。

プログレス同士がそれぞれ握手した。

「美海、負けないからね、私」

「私も負けないよ、希美ちゃん」

美海と希美は、ライバル同士熱い視線を交わし合い、だがそこには  
一切の悪意は含まれておらず、ただ純粋な高揚感のみが見て取れた。

「琉花ちゃん、大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。今回は相手なんだから、心配いらないよ」

沙織は、優しい彼女らしく琉花を心配していたが、琉花は軽く笑っ  
てそれを跳ね除けた。沙織は、仕方がない子、とでも言うような呆れた  
ような、それでいて挑戦的な笑みを浮かべた。

「負けないよー、カレン。お姉ちゃんの手前、無様を晒すわけにはいかないからねー」

「私も、手加減はしません。本気で掛かってくるのが良いのでございます」

2年生の中でも実力が上位の絵麻とカレンは、互いに不敵な笑みを浮かべて握手していた。

そうこうしている間に、試合開始15分前。春樹たちがバトルを行うフィールドに、白い光と共に障害物が生成された。白い石材で出来た柱や壁が、フィールドに立ち並ぶ。

「さて、お互い戦略立案タイムと行こうか」

雄馬はそう言うと、自分のプログレスを引き連れてフィールドに入っていった。

「……とりあえず、ファーストリンクしておこうか」

春樹が告げて手を差し出すと、3人はそれぞれ頷き、手を出した。春樹手に自分の手を重ねていくと、それと同じように心を重ねていく。

美海の高揚した心、琉花の熱烈な心、カレンの凜いだ心。その全てが、春樹と重なる。

リンク成功。バトルできるプログレスの選定が終わった。

「じゃあ、フィールドを見て回ろー!」

美海の掛け声で、春樹たちもフィールドへ向かった。

………

障害物の把握はとりあえず済んだ。障害物の高さは全部で3段階。地面からよじ登れる高さの台、その台からなら登れる壁、その壁から台1つつ分高い柱の3つ。台、壁、柱の順によじ登れば、飛行能力のないプログレスでも柱に乗ることが出来るようになっていた。

$\alpha$ データパッドにはフィールドの俯瞰図が表示されており、それによれば不公平が無いよう、障害物はフィールドの中央を中心として点対称になるように生成されている。

フィールドの中央は大きく開けており、ここがメインの戦場になることは容易に想像できた。その空間を、そこに入るための大きな隙間

を空けて囲むように壁があり、中でも上下の壁には台が隣接して、登れるようになってる。

一方で、左右の壁と、フィールド自体のサイドラインの間は、奇襲者が潜伏する場所になりそうだった。

中央エリアの手前には柱が1本立っていた。身を隠しても良いし、前述の壁に登れば、そのままその柱にも登れそうである。

フィールドの右手前には大きなL字の壁があり、左手前には柱がある。右の壁は休息ポイントにしてもよさそうだが、その反面、この壁を使えば美海の吹き飛ばし作戦を対策できそうでもある。対する左の柱は、そのすぐ近くの台に登ろうとしている相手プログラムの急襲に使用できそうだ。

総じて、中央の空間での戦い方と、左右の空間の使い方、疲弊したプログラスを引かせて隠すかが重要になりそうだった。

バトル開始5分前。全員フィールドから出て、最後の作戦会議に入った。まず、2年生の2人から絵麻のエクシードに関して説明があり、その恐ろしさを覚え込んだ美海と琉花。次に、見た感じの障害物の利用の仕方を検討する。柱は美海のエクシードを使えば登れるだろう、など。

そして、今持って不明だったのは、沙織のエクシードと、希美のエクシードをどう戦闘に転用するかだった。不明な沙織の方は見てから考える(それで作戦を台無しにされる危険性もあったが)として、全員が希美のエクシードが「印象操作」であることを知っている。印象を拡大されると意識をそちらに持って行かれやすくなるから、それでは注意力を削ぐのだろうか。

「まあ、とにかく……これは一応、バトルの質を見るってことだし、あんまり勝ち負けにはこだわらずに行こう。相手は多分、強いと思うけど、まずは全力で戦おう！」

「そうだね。頑張ろう！ おー！」

「鍛えた私の力を見せれば、優勝間違いなしだからね！ 頑張るよー！」

「私も、全力で行くのでございます。皆、悔いの残らないように！」

声を掛け合って士気を高め合い、フィールドへ向かう3人。……か



と思つたら、カレンはその場に残った。

「カレン？ ほら、早く行きなよ」

春樹がそう言うと、カレンはするりと彼に近寄り、その耳に囁いた。

「春樹——いえ、マスター」

「!?」

「信じています。頑張りましょう」

「——おう、当然だ」

カレンはふつと微笑むと、美海たちの後に続いてフィールドに入った。春樹は頬を叩いて気合を入れ直すと、自身も自分の持ち場—— $\alpha$ ドライバーフィールドに入り、せり上がってきた細い柱にデータパッドを接続した。それと同時に、プログレスたちの状態が表示される。そして、前回はなかったものも表示された。

ダメージカウンター。

初期値は0で、プログレスが一定以上のダメージを受けるとカウンターが上昇していき、8まで上がりきるとバトルに敗北するというルールだ。その代わり、 $\alpha$ ドライバーに対する痛覚のフィードバックは無い。だから今回の春樹の役割は、純粹にリンクの選択と戦術指示になる。 $\alpha$ ドライバーの体力がゲームの終着点になる通常ルールよりも幾分か気軽だが、 $\alpha$ ドライバーの体力とは関係なしに試合が進む分、余計に戦略が大事とも言えた。プログレスが先走って大きなダメージを受けた場合、通常ルールなら彼が耐えればそれでいいが、このルールではその分カウンターが、彼の意地とは関係なしに上昇する。プログレスのコントロールが必要なのだ。

データパッドに表示された時間が減っていき、バトル開始が近づく。この感覚はどうにも慣れない。心臓が鉄製に変わったかのように、肋骨を痛いほど叩いている。だが、その一方で沸き立つ高揚感は、嫌いではなかった。

そして、データパッドに表示されている時間が、0:00になった。  
ブルーミングバトル、開始。

.....

「ごめんなさい、兎莉子、忍。遅れちゃって——さ、紗夜先輩!？」

「あら、葵ちゃんこんにちは」

「あ、葵ちゃん! もうバトル始まっちゃうよ!」

「遅刻とは関心しないでゴザルな」

「だからごめんなさいって言ってるじゃない」

「なんかそれ、私にも刺さる言葉ね」

「あれ? 紗夜先輩と葵ちゃんって知り合いなんですか?」

「ええ。この前の練習の時、ちよつと遅れてきちゃったでしょ。その時にね、剣道部に顔を出してたの」

「ああ、それで——葵殿が珍しく狼狽しているものでゴザルから、何かやらかしたのかと」

「やらかしてないわよ! で、どうして紗夜先輩が?」

「私? ほら、妹が出るから、応援にね」

「あ、ホントだ。絵麻先輩が」

「とはいっても、それだけじゃないんだけどね」

「え?」

「確かに、妹を応援したいけれど……今回は中立かな、私は」

「そうなんですか?」

「ええ。春樹くんのチームがどう仕上がったのか……とつても楽しみなの」

「ああ……琉花も復帰したみたいだし、どうなったのかは私も気になるります。で、忍はなんで今回出なかったの?」

「拙者は、外からあのチームを見てみたかったのでゴザル。その結果次第で、今後拙者がどういう風に身を振るべきか、見定めたいのでゴザル」

「え? 忍ちゃん、結果次第じゃやめちゃうの!？」

「ああ、あの中で、という意味でゴザルよ。せつかく主ができたのだから、そう簡単にはやめないでゴザルよ」

「まあ確かに、忍ちゃんみたいにも多角的な攻撃手段を持つプロGRESSは、チームでの立ち位置が特に大事になることは確かだね。攻め手になるか、サポーターになるか、はたまたこういうフィールドなら奇襲者

になるか。私も似たタイプだし」

.....

バトル開始と同時にまず行うべきなのは、絵麻以外の2人がどのように立ち回るかを見定めることだった。

まず動いたのは、シールドを構えた絵麻だった。中央のエリアにいきなり駆け込んできた。残る2人は左右へ。

「カレン、美海。中央へ」

『了解！』

絵麻に対して1人で挑めるのは、おそらくカレンだけだろう。なので今は、とりあえず2人で攻め、数の力で絵麻を押し返す。カレンと美海の両方にセカンドリンクを結び、レベルを上昇させにかかった。美海の腕に付けられたブレスレットが輝き、銀のレイピアに変化した。

不可解なのは、向こうのレベルの上がり方だった。なんと、絵麻とはセカンドリンクせずに、希美と沙織のレベルを上げているらしい。

「琉花、左へ。希美を抑えて！」

『了解！』

春樹は次に、こちらから見て敵陣・左側のL字壁に隠れた希美を琉花に抑えさせる。琉花は現在、腰にケースのようなものを吊るしていた。紗夜が携帯していたのと同じ、呪符ケースである。その中から水行符を取り出し、力を込めて大量の水を発生させた。これが、ここ数日で琉花が最も頑張って練習していた、呪符の扱いである。水がなければ、琉花は基本的に戦力にならないため、忍抜きでも水を用意しなければならなかったのだ。

中央では、既に戦闘が始まっていた。カレンが地上から、美海が空中から攻める作戦である。1対1ならほぼ隙なしの絵麻でも、2方向から同時に攻められればキツイだろうという考えだ。

そして、美海の新技がここで発揮された。

今までどおり空中にいる彼女は、僅かな風を受けて、不自然な降下をした。そのままレイピアを絵麻に叩きつける。絵麻は握ったシールドでそれを弾き返したが、吹き飛ばされる美海はまた僅かな風を受

けて体勢を立て直す。

エクシードが解放されていない序盤から相手を攻める手段として考え出した、僅かな風を突発的に吹かせてそれを受けることにより、身体の制御を行うというもの。攻撃手段にレイピアが加わったことで可能になった戦い方だった。

そして、その隙に——カレンが、文字通り滑り込み込む。

彼女のエクシードは『空間を捻じ曲げる』というものだった。彼女は空間と空間を捻じ曲げて繋げ、3メートル先の絵麻の懐へ、1秒と掛からずに入り込んだ。

金属製の青いガントレットに包まれた拳が絵麻を襲う——刹那。

台に隣接した壁の上へ、沙織が現れた。その左腕が、燃えている。真つ青な炎に包まれている。

——助太刀に入ったか!?

春樹はその一瞬で、彼女が忍の同じようなエクシードを持っていると判断した。だが、それでどうこうできるタイミングは過ぎている。

沙織は襲われかけている絵麻を見るや、そちらに向かつて右手を振った。すると、左腕を包む炎が一条の筋となって絵麻を包んだ。

ミスか？ そう歓喜した春樹は、次の瞬間、己の間違いを知る。

絵麻はカレンの拳を避けられなかった。その勢いはかなりのもので、練習でダミー人形を殴った時は、間違いなく1点カウンターを上昇させられた。クリーンヒットすれば2点の時さえあった。

だからこそ驚愕する。

向こうのカウンターが、上昇しなかった。

——どうして!?

そう疑問を感じた直後、春樹は勘違いに気付いた。理由は分かりきっていた。沙織のエクシードだ。あれは間違いなく絵麻を狙ったものだった。そして、炎に包まれた絵麻は、どういう原理かは知らないが、ダメージを受けていない。

つまり、沙織のエクシードは防御の力なのだ。

彼女は既に壁から後ろへ降り、隠れている。壁に隠れた状態で、どうやって絵麻のピンチを知ったか？ それは当然、雄馬の指示だろ

う。

リーダーたる雄馬の指示を受けて、遠距離から味方の防御力を著しく上昇させる、隠れた盾。それが沙織の役割だった。

——マズい。

カレンも美海も、今の一瞬で沙織の能力を知った。春樹は急いで琉花にも内容を伝える。

絵麻を2対1で押し返すためには、前提として、もう1人で沙織を抑えておかなければならなくなってしまった。そして、それを行うためには、希美からマークを外す必要がある。

その前提を覆す鍵は——やはり、障害物に左右されない飛行能力を持つ、美海。

「美海！ 沙織を抑えろ！」

『りよ、了解！』

美海なら、壁を飛び越えて上から沙織を攻撃できる。そして、台の右側にはサイドラインしかない。そちらに向かって攻撃すれば、彼女をフィールドから吹き飛ばすことができる。

彼女もそれを理解したからこそ、飛ぼうとした。

『美海、避けなさい！』

突然の、カレンの大声。呼ばれた美海は、何が自分に迫っているのか理解できなかった。そして、理解できなかったのは春樹も同じだった。

その背中を、拳が貫いた。

間違はなく、左のスペースは琉花が見ていた。

なのに、その左のスペースから入り込んだ彼女は、美海を不意打ちした。その瞬間まで、そこに誰かいたことさえ、分からなかった。

迷いなど全くない右ストレートは、“スカイブルー・エレメンツ”

側のダメージカウンターを1つ上昇させるのに十分な威力だった。

拳を突き出した希美は、不敵に笑んだ。

1 | 0

.....

中等部3年に上がった時、雄馬は言った。

「お前のエクシードは、確かに戦闘には役に立たない。直接はな」  
雄馬のチームで戦いたい。そう彼に言った希美は、きよとんとした。

「お前の『印象操作』の力は、直接戦闘に意味をもたらす物じゃない。だから、お前は役に立たない。」

——そう思うか？」

正直、そう思っていた。だからこそ怖くなって聞きに行ったりしたのだが。

雄馬は微笑んで言った。

「違うな」

彼は断言した。そして言葉を繋げる。

「お前のエクシードは正にも負にも働かせられるものだったのは知ってる。つまり、印象を大きく見せる——その逆もできるってことだ」  
逆。即ち、印象を小さく見せるということ。今の自分よりも、小さく。

「それを極限まで行えば、お前は普段とは真逆の状態になる。ステージに立って、誰の目をも引くお前の逆。お前は誰にも見えなくなる」  
希美は、自分がどのようにバトルで役に立ってるのか、その答えを知りつつあった。

「お前はずっとダンスを続けてきた。当然、体は鍛えられてる。歌も歌わなきゃいけないから、肺活量だって標準よりずっといい。そこに、今の答えを組み合わせると——どうなると思う？」

「——奇襲？」

雄馬は頷いて、にっこりと笑った。

「でも、生憎だが今のお前には戦闘技術がない。そこでだ。俺が1年で、お前を戦えるように鍛えてやる。キツイけど、ついてくるか？」  
悩む必要など、全くなかった。

.....

してやられた。

希美は、普段とは全く異なる形でエクシードを使用していたのだ。気を引くのではない。

気が付かなくなるのだ。

印象を極限まで縮小させることで、例え真正面にいたしても気付かないほどに気配が薄くなる。だからこそ、琉花は目の前を普通に通っていった希美に気が付かなかった。

そして、戦況の把握に夢中で全く見ていなかった春樹は、データパッドに今更ながら目を落とし、愕然とする。

いつの間にか希美のレベルが4まで上がっていた。そして、他の2人のレベル上昇速度は通常。これから導き出される結論は1つ。

希美にαリンクが発生し、エクシードが解放されている。

しかし、不可解なことが1つだけあった。

なぜ——カレンは、攻撃が来ることを予測できていたのか？

.....

してやられた。

希美は中央のエリアを離脱しながら今更ながらに思った。

カレンに気付かれていたのは他でもない。彼女がアンドロイドだからだ。より正確に言うなら、彼女はフィールド無いのプログレスで唯一、印象などという曖昧なものを頼りに戦況を観測していない——即ち、センサーによる索敵を行っていたからだ。

人は、物事を見たとき、それが持つ印象で、それが認識できるかどうかが決まる。具体的に言えば、派手な格好をしている人は認識されやすく、道端の小石などは認識されない。だからこそ、普段は意図的に普通の格好をしているのにあたかも派手な格好をしているかのよくな印象を醸し出すことで印象の拡大を、現在は道端の小石レベルの印象を醸し出して印象の縮小を、それぞれ行っている。

ただ——機械のセンサーとなれば話は別だった。

確かにカレンはアンドロイド。生体脳を持っているので、印象操作の影響は受ける。

それはそれとしてセンサーは今ある事象を、ただ端的に表示する。派手な人も地味な人も、機械が見ればどちらも人間が1人。

カレンは生体脳で物事を見る、その傍らで——センサーも見てい

た。だからこそ、印象に残らないほど気配が薄れた希美の奇襲に前もって気付けたのだ。

だが、それにも穴はありそうだ。彼女は直前まで、希美の接近に気付かなかったからだ。とはいえそれは直前の戦闘に夢中で、センサーを見ていなかったからなのかもしれない。

希美は次の一手を、慎重に考える。

………

カレンは絵麻と交戦しながら、一気に悪くなった状況を把握していた。

希美の奇襲には確かに気付けた。だがそれも直前にレーダーの観測結果を見たからだ。

絵麻の激しい攻撃は、カレンにレーダーから気を逸らせるためなのだろう。敢えて美海を攻撃することはしていなかった。とはいえ、美海が中央のエリアから抜け出そうとしたら、持ち前の盾投げで牽制していたが。

「春樹！ 今すぐ琉花のレベルを4まで上げ、αリンクを！」

『——っ!? どうして?』

「希美の奇襲を感知できるのが私だけだと困るからでございませす！」

いいでございませすか？ 確かに今の希美を、人間が捉えることはできません。でございませすが——彼女の及ぼした影響は、確実に周りに知れ渡るのでございませす。美海が殴られたとき、それを全員が知った——

『——そうか!』

春樹はカレンと美海に断ってからセカンドリンクを切断した。琉花とセカンドリンクを結んだのだろう。

絵麻と単騎で張り合えるのは自分だけ。だからこそ、自分にしか見えない伏兵を、琉花に感知させるのだ。

………

琉花は一連の春樹とカレンのやり取りを聞いていた。しかし、なぜ自分なのか分からない。

『琉花！ 一気にレベル4まで駆け上がるぞ！ そうしたら、水を地



面に流して!』

「な、なんで?」

『足音がすれば、必ず気付くだろ?』

「——なるほど!」

希美は自分の気配を極限まで薄れさせている。このままでは気付かない。だが、さつき美海を殴った希美は、確かに自分の存在がそこにあることを示した。

カレンと春樹が思いついたのは——フィールドに一定の厚さで水を張ることだった。そうすれば、その上を駆ける希美は足音が鳴り、自分の存在を知らせてしまう。

春樹は、中央エリアを除く外周をに水を張らせるように言った。中央まで水を張れば、そこで常に水音が鳴り続け、索敵の邪魔になるからだ。

壁に隠れなければ、絵麻に攻撃される可能性がある。なので琉花は中央エリア近くの台に乗り——ここよりもエンドラインに近づくと、影響力が外周全体へ及ばなくなるからだ——水行符をまとめて5枚取り出した。

『行くぞ——αリンク』

春樹の声のぴったり5秒後、自分のエクシードが解放されたのを感じた。

「よっし、行くぞ!」

琉花はありったけの霊力を水行符に注ぎ込み、大量の水を生成。フィールドを囲うように地面を流れさせそれを制御する。影響力的に、向こう側の壁の向こうの台——沙織が乗っているであろう場所だ——までを包むのが限界で、その先までは覆えなかったが、とりあえずはこれでいい。あとは神経を集中させ、希美の位置を探るのだ。

.....

「げっ……ヤバイ」

希美は、突然自分の足元を流れてきた水に驚愕する。足音をぐまかせないことは、経験上知っているのだ。

とりあえず、これでカレン以外の誰にも気付かれずに地上を移動す

ることはできなくなった。中央エリアを通るといふ手もあるが、そこに入ろうとした時点で気付かれるであろう。

——一旦戻ろう。

希美は琉花への奇襲を諦め、沙織のいる台まで引いた。

「雄馬くん」

『そうだな。こうなっちゃ、今は意味がない。と思うか?』

「え?」

『フィールドは、何で囲まれてる?』

——フィールドは、何で囲まれて——

「——っ!!」

そう。フィールドは、壁で囲まれている。

そして、壁に登る手段は目の前——沙織が乗っている台。

雄馬は、壁の上を伝っていけば、どこにでも行けると言っているのだ。

——まだ、諦めない。

……………

美海と春樹はリンク率が非常に高い。そのため、セカンドリンク無しでもレベルが上昇しやすいのだ。

彼女のレベルが4になったところで、春樹が指示を寄越した。

『美海! 沙織が顔を出したら、中央に風を向こう向きに吹かせろ!』

「うん!」

春樹の指示。美海は、春樹が何をさせたいのかを理解した。

カレンと絵麻の交戦の末、また絵麻にピンチが迫った時に、それが

明らかになる。

再び沙織が壁の向こうから現れ、絵麻を援護しようとした。

その瞬間を見計らって、美海はαリンク無しのエクシードを集中。長持ちはしないものの、突風を吹かせる。

すると、沙織から伸びた青い炎の筋が、突風に煽られて散逸した。

加護が無い。その状態で再びカレンの攻撃を受けた絵麻は、今度こそダメージカウンターを上昇させるだけのダメージを受けた。

沙織の防御対策。向こうは火を飛ばしているのだから、それを風で

吹き飛ばせばよいのだ。

だが、向こうもそれをそのまま見過ごしてはくれないだろう。

1 — 1

.....

——希美が台に登った？

春樹は不審に思った。

希美は琉花に接近していたが、水を流すと引いたのは見えた。水を揺らして右側のスペースから戻っていったのだ。

そして、その行先が不自然だった。そこから水に再び足を踏み入れた様子もない。あつたら言うように琉花に指示していた。

——台の上で水が引くのを待ってる？

そんなはずはなかった。彼女を指揮しているのは雄馬だ。そんな怠惰を、彼が許すはずがない。

美海の突風によって沙織の防御が破れ、ダメージが入った。当然ながら嬉しい——

——なんだ、今の？

壁の上で、気配が揺らいだ気がする。もしかして——いや、これならありえる。琉花の索敵に引っかからない——！

「琉花！ 水が壁を越す高さまで持ち上げて、中央に向かって勢いよく集めろ！」

『——っ!? りよ、了解っ!』

ざぶん、と音を立てて、水が壁を越える高さまで持ち上がった。そのまま中央に向かって一気に集まる。——それに引っかかった者がいた。

いきなりのことに対応できなかった希美が、中央エリアに叩き落とされていた。

——やつぱり!

彼女は壁の上を伝って琉花を急襲しようとしていたのだ。

そのまま、彼女を封じる手を打つ。

「希美が中央に落ちたぞ、琉花。性質変化、使えるな?」

『——うん、やってみる!』

ここ数日で琉花は水を粘液状に変化させることができようになっていた。これによって希美と、あわよくば絵麻も捕まえられれば、後がぐつと楽になる。

壁の横から頭を出した琉花は、上空に浮かべた水の性質を変化させようと念じ始めた。

——行ける。行けるぞ。

だが、現実には甘くない。

……………

「お兄ちゃん——」

『今だ。右から回れ』

「了解」

……………

——えっ？

と思う間もなく、琉花は宙を飛んでいた。

勢いよく。サイドラインから飛び出る勢いで。

何が起きたか、その時ようやく理解した。念じることに夢中で気付いていなかったのだ。

左から接近していた沙織に。

彼女は琉花を引っつかんで、フィールド外に投げ飛ばしていた。彼女は不思議と力が強い。だがまさか——人間を投げ飛ばせるほどだとは誰も知らなかった。

——しまった！

だが、思いも虚しく琉花はフィールドから放り出されてしまった。上空に待機していた水の塊は制御を失って、中央エリアにいた4人を押し流す勢いで落ちた。

フィールドを覆い尽くす量の水が頭の上に落ちてくれば、痛覚も相応のものになる。各2人分の痛覚で、それぞれのカウンターが2上昇した。

3 | 3

……………

いち早くその衝撃から立ち直ったのはカレンだった。

——今しかない。

彼女は素早く絵麻に接近する。彼女が立ち直れていないうちに、「それは貰うのでございませう」

絵麻が持つていたシールドを無理やりもぎ取った。

「え、ちょー——」

そして、それを後ろに向かって思い切り投げた。

彼女の最大の強みは、このシールドだ。近距離戦で防御手段と攻撃手段の両方になる上、必ず戻ってくる性質を利用して遠距離攻撃にも使える。

とにかくこのシールドを、エクシードの影響が及ばないフィールド外に投げ飛ばしてしまえば、彼女の戦力は半減どころではなくなる。そうでなくとも、琉花がフィールド外に出されているのだ。あと30秒は琉花がフィールドに入れず、戦力が激減しているのだから、これくらいはせねばならない。

「そうはさせない——」

絵麻は素早くシールドにエクシードを送った。エネルギーの方向を捻じ曲げて、戻ってこさせようという魂胆だろう。

だが、カレンはこれを許さない。

「対人戦では使えないので、ちよーど良かったでございませう」

右手を後ろに向かって突き出した。その手に装着されたガントレットから、とあるものが出てくる。

それは——小型ミサイル。

いつか冬吾に向けたそれで、宙を飛ぶシールドをロック。すぐさま放つ。

シールドに見事命中したミサイルは爆発し、その勢いで最後のひと押しをして、シールドは春樹側のエンドラインからフィールドの外に出た。

.....

絵麻は、すぐにシールドを取りに行くプランを脳内で検討した。

自分からフィールド外に出る場合は、自陣側のエンドラインからしか出ることができないというルールがある以上、こちら側のエンドラ

インから出て走って取りに行くしかない。だが、フィールドを空ける30秒間は残った2人で戦わなければならない上、そもそもエンドラインから出て30秒でフィールドを取って来れるかといえれば曖昧なところだ。仮に取って来れたとしても、全力疾走する必要がある。せっかくフィールド外に出るといいう危険を冒すのに、そこでまた体力を失っては不利が続く。

ならどうするか。

「もー許さないぞー!」

絵麻はカレンに掴みかかった。絵麻はそれほど組み技が得意ではない——というより、カレンの本領が組み技なのだ。まず勝ち目がない。

そこを逆手に取る。

「無駄でございませす、よっ!」

掴みかかった絵麻を、まるで赤子同然に掴み返し、投げ飛ばす——

「いっただきー!」

そこでカレンは、自分の失態を悟ったようだった。

絵麻は、カレンが自分を投げ飛ばそうとするその力を——捻じ曲げていく。カレンが、自分の後方へ投げ飛ばすように。

そして、投げ飛ばされた。元は壁に叩きつけてダメージを与えようとする勢いで投げ飛ばされたので、絵麻は軽々と宙を舞った。向こう側のエンドラインに向かって。

確かに飛ばされたのは絵麻の意思あつてのことだが、投げ飛ばしたのはカレンだ。ルール違反にはならない。

絵麻はフィールド外に飛び出し、そこで受身を取って着地すると、フィールドを拾いに行った。

.....

時間的なアドバンテージはこちらにある。春樹はそう判断した。とにかく、美海とカレンの2人で、希美と沙織にダメージを与えるのだ。

そのフィールド内で、沙織は希美を助け起こしていた。同じように、カレンは美海を介抱している。美海は目を回していたが、顔を猫

のようにプルプルと振ると、すぐに立ち上がった。

「美海、カレン。大丈夫か？」

『だ、大丈夫だよー！ ちよつと目を回しちやっただけ』

『……私の失態でごさいます』

「後悔はいい。今は現状に集中して。カレンは希美を逃がさないように釘付けにして、美海は沙織ちゃんを」

『了解！』

一方の沙織たちの声はこちらには聞こえない。だが、二言、三言言葉を交わすと、沙織の左腕がまた激しく燃え上がった。その炎を、希美に纏わせる。

——これ、不味くないか？

さきほどまでは、炎が目標に到達する前に美海に吹き消させていたからどうにかなっていた防御。こんな至近距離で受け渡されていては、妨害するどころの話ではない。

炎。対策手段は風だけではない。炎なら当然、水でも消えるだろう。

そして、今中央エリアは水浸しだ。

「美海、αリンクだ！ 地面の水を飛ばして炎を消せる？」

『や、やってみる！』

5秒間の空白。美海とαリンクに成功した。そのまま美海は上昇気流を発生させ、地面に流れた水を風に乗せ、飛沫を沙織と希美に浴びせた。だが——やはり上手く行っていない。そして、沙織は驚異的な身体能力で美海を追い詰めている。美海はそれを、自分の周辺に突風を吹かせることで避けるしかなかった。沙織に向かって風を吹かせても、その左腕から燃え上がる青い炎は、全く消える気配を見せない。

躲しきれなかった1発を食らい、ダメージカウンターが1上昇。だが、その隙を利用して、美海もレイピアの一撃を叩き込んだ。向こうのダメージカウンターも1上がる。沙織のエクシードは、沙織自身の防御力を上げるものでは無いようで、それを理解しているからか、カレンを攻撃することもしない。

そのカレンは、エクシードを使用していた。彼女の空間を捻じ曲げるエクシードは、自己の瞬間移動だけでなく、指定した空間に圧力をかけることにも転用できる。彼女は今、希美の周りの空間に圧力を掛け、その動きを封じていた。とにかく、このトリックスターを捕まえておかなければ、また不意打ちを食らうことになる。だが、沙織に攻撃されれば反撃は容易だっただろう。

「琉花、行けるな？」

「おう、任せておいてー！」

琉花がフィールドを出て、30秒が経った。彼女がフィールドに入る。ここから数秒間のみ、こちらは数的有利を得る。

琉花は水行符を1枚取り、霊力を注ぎ込んで水を生成。それを希美に向かって投げつけた。

「——ッ!!」

分かっているても、そう、カレンのエクシードのせいで避けられない。希美はまた頭から水をかぶり、沙織の加護が消えた。

その瞬間、カレンが希美に肉迫し、沙織が手を貸す暇を与えず、右腕の一撃を叩き込んだ。希美が吹き飛ぶと同時に、向こうのカウンターが1上昇。

初めてこちらが有利に立った。あと3点でこちらの勝ちだ。

4 | 5

.....

悔しかった。

最初の一撃以降、いいところが全くない。思い通りに動けない。もどかしい。

私じゃない方がよかったのかもしれない。  
でも。

「いつか目にも見せてやる」

その思いひとつで、私はあの子が絶対に真似できない力を手に入れた。

その思いひとつで、私はこの舞台に立った。



だから、絶対に負けない。  
覚悟して。

美海。

私は、負けない。

.....

その数秒後、シールドを無事取ってきた絵麻が入る。

雄馬は、正直彼らを舐めていた節があった。

蓋を開ければ、希美と沙織のエクシードは、とにかく相手のプログレスたちのエクシードと相性が悪い。実践されていないだけで、例えば美海がエクシードを解放すれば、フィールド全域に効果を及ぼす暴風は気配を隠した希美にも及ぶだろう。

「さ、こっちも負けてらんねえな」

データパッドを見ると、全員レベル4、その中でも絵麻の欄の下に、レベル5になることのできるサードリンクのアイコンが表示されていた。

それを押そうとした雄馬は、その寸前で手を止めた。

希美の欄の下にも、アイコンが表示されたのだ。

雄馬は数秒間、らしくもなく固まってしまった。

「——希美」

『な、なに.....?』

度重なる攻撃を受け、息が絶えている。だが、これを使えば、絵麻がレベル5になるよりも大きな影響を及ぼすことができるだろう。

「戦えるか？」

『ちよつと.....キツイかも』

「レベル5になれる。そうすれば、逆転できる」

雄馬は感情を込めずに聞いた。彼女は——

『じゃあなる』

ただの一瞬も、迷わなかった。

「いい返事だ」

雄馬は、彼女に託すことにした。

………

——な、何っ!?

春樹はデータパッドを見て愕然とした。

希美がレベル5になろうとしていた。つまり、ここで決める気なのだろう。

データパッドには、なんと3人ともレベル5になれるアイコンが出ている。ただし、選べるのは1人だけだ。

さらに、フィールド内で嫌な光景が見えた。沙織が他の2人に炎を纏わせ、3人が分散したのだ。絵麻が前へ、沙織は左へ、そして希美は後ろへ。絵麻をカレンが食い止めようとしたが、先に投げられたシールドが、壁に当たって反射し、的確に琉花を捉えた。誰の防御も間に合わないタイミングで琉花がL字壁の手前までノックバックされた。ダメージを1受ける。

その上で彼女を、沙織が追い詰める。琉花が前に出られなければ、αリンクを結んでも下がった希美まで水の影響が及ばない。

——炎を消せる琉花を抑えにきたのか……!

先程まで希美を執拗に抑え込もうとしていた春樹は、まさに意趣返しをされて、臍を噛む。

琉花が戦闘に釘付けにされれば、遠くまで水を操ることができない。そうすれば、カレンは一方的なハンデを絵麻に対して負うことになる。そして、どうやっても琉花のエクシードが届かない位置まで引かれた希美を追う意味がなくなった。

「美海! 琉花に加勢しろ!」

『りょーかい!』

絵麻の追撃を上手く躲して美海が下がった。それを確認しながら、「琉花、お前しかいないんだ。レベル5になれるな?」

『なれる……の?』

「ああ。行けるか?」

春樹は、断られてもおかしくない、そうしたら美海がカレンをレベル5にして……

などとは、考えなかった。

『もちろん、行けるぜ！』

その言葉が返ってくる、知っていたから。

5 — 5

.....

怖かった。

誰かと触れ合うのは、怖かった。

また裏切られるかもしれない。

また傷付けてしまうかもしれない。

怖い。

でも、彼は私に手を差し伸べてくれた。

周りのみんなも、私に優しい声を掛けてくれた。

暖かかった。

だから私は、それに報いたかった。

私の心は水。

どこまでも自由な心。

私の心は水。

決して縛られない心。

私の心は水。

全てを受け入れる心。

だからどこまでも行ける。

彼と、繋がっているのだから。

大好きな彼と、繋がっているのだから。

.....

—— 希美？

—— なに？

—— 歌え。

—— え？

—— それがお前を、解き放つ鍵だ。

——うん。わかった。歌うよ。だって私、雄馬くんのこと——  
——お前はいい子だ。さあ、行こう。

.....

『——ずっと独りで 歩いてきた——』

希美が、レベル5になった。それと同時に、彼女は歌いだす。誰の手も届かない、フィールドの奥。

彼女が歌いだすと同時に、その場にいた全員がその歌に聞き入った。

その印象が、どんどん大きく膨らんでいく。眩しいほど煌びやかになる。

『——寒さも苦しさも 押し込めて——』

戦闘中なのに思考が乱される。明確な意志を、これでもかとはかりに念じなければ、その声を頭から追い出せない。

カレンは脳が焼き切れるほど強く、戦闘意識を高め、頭の中を塗りつぶす。

『——ただ前を向いて 歩いていた——』

——これが、希美のレベル5なのか……!!

春樹は驚愕した。どうすればいいのか、戦略を練れない。雑念が入り込んだ瞬間、彼女の声が思考を塗りつぶす。聞き入らずにはいられない。

『——痛さも辛さも 隠してた——』

油断した沙織さえ、その歌に聞き入った。美海も地面に降りて——飛んでいられなかったのだ——耳を傾ける。

絵麻は、尚も攻めてくるカレンを通すまいと必死に、歯を食いしばって思考を固定する。

『——でもそれは嘘 ホントじゃない——』

たった1人。琉花だけは違った。

誰よりも澄んだ心で。

誰よりも透徹した心で、希美の歌を耳から追い出していた。

『——寒いよ 苦しいよ 痛いよ 辛いよ——』

彼女は呪符ケースから全ての呪符を掴みとり、どこまでも湧いてくる力を、そこに全て注ぎ込む。力は水に変換され、大量の水が荒れ狂う。

そして、琉花もレベル5になった。

『——素直じゃない私は 差し伸べられた その手を払う——』

琉花は全ての水を操り、自らを上空へと押し上げて、一部を凍らせて柱とする。

そして、残ってまだ大量の水を天へと向けて放出する。

『——あなたはそれでも まだ手を貸してくれた——』

フィールドの上空に、水が溜まっていく。琉花はその液体の温度を操作し、蒸発させる。水蒸気になった水は、それでも制御を離さなかつた琉花のエクシードによつて集められ、擬似的な雲となった。

『——もういいんだよと言ってくれた 私はそれが うれしくて——』

琉花は雲の温度を急激に下げた。凝結した水蒸気は、水滴となる。ぽつりと、1粒の雫が落ちてきた。次いで2粒、3粒——増えていく。雨が、降っている。

その雨は、沙織のエクシードによる炎の加護をかき消した。

『——その手をようやく取った あたたかくて やさしくて——』

カレンも絵麻も、ただ戦っていた。希美の歌を頭から追い出すために、ただひたすら殴り合っていた。加護が消えたことなど、どちらも気付かない。

誰も点数など見ていなかったが、7対7——あとどちらか一方が1ダメージを受ければ、バトルは終わる。

『——もう独りじゃないよ その声は とても明るくて——』

どの柱よりも高くそびえ、煌く氷の柱。フィールドの中に降り注ぐ雨。そして、余りにも美しい歌声。

隣りのフィールドでバトルをしているチームらも、全ての観客も、その幻のような光景に見入り、聞き入っていた。

『——やっと気付けたこの思い もう嘘はつかない 隠さない——』

その氷柱の上に立つ琉花は、雨水を浴びながらただ、天へ向かって手を広げていた。

『——私があなただを 愛していたこと——』

——不意に、歌が止んだ。その歌に聞き入っていた全員が我に帰った。

希美のレベル5状態が、終わったのだ。

そこからいち早くに復帰したのは——

.....

これが、私の世界。

これが、私の想い。

これが、私の、愛。

負けても構わない。

これが届けばいい。

誰も見てないけど。

私はここにいますよ。

私は頑張ってるよ。

今でも、心にある、

この思いはずっと、

この先も、ずっと、

決して離さないよ。

だから、もういい？

私を赦してくれる？

.....

雨水に濡れながら、中央エリアで2人は殴り合う。

「もう、しつこい——!!」

「しつこいのは、そちららでございませすです!!」

シールドで殴りつける絵麻。それを躲し、拳を叩き込むカレン。それをシールドで弾く絵麻。

希美の歌があっても、2人は聞き入らず、ただ戦っていた。そうするしか、なかったのだ。

そして、その歌が止んだこのに気付けたのは、人間の耳という、機械よりも雰囲気や気配に敏感な絵麻だった。

——今なら。

絵麻は、自分の左の壁に向かってシールドを投げつけた。そこには誰もいない。カレンは一瞬、その意図を測り損ねた。それが致命的だった。

シールドは壁に当たって反射し、すぐそばの柱へ当たる。そこでもまた反射して、奥のL字壁に。その長辺と短辺で1回ずつさらに反射。その先にいたのは——

いち早くに復帰していた沙織。

彼女はシールドを受け取ると、その勢いのまま、すぐそばにいた美海にそれを投げつけた。

もう間に合わない。美海本人ですら。

ガツン、と音がし、何も反応できなかった美海がシールドの一撃をまともに受け、倒れた。

最後の1カウントが、“スカイブルー・エレメンツ”に入った。

8 — 7

.....

「.....負けちゃったか」

「.....そうでゴザルね。でも、すごいバトルだったでゴザル」

「そうね.....膨大な可能性を感じる、ワクワクするようなバトルだったわ」

「拙者も、胸の高まりが収まらないでゴザル」

.....

——だって私、雄馬くんのこと、愛してるから。

## 断章 『ファーストキス』

——ねえ、ハイネ！ あんた、大きくなったら私のはんりよになりなさい！

——『はんりよ』ってなに？

——え？ えーっと……なんかこう、ずっといつしよにいる人なんだって。

——ずっといつしよにいればいいの？ そんなのカンタンさー！

——でもねんのため、おまじないしておきましょう。ずっといつしよにいられるおまじない、おそわったの。

——ホント？ それ、きくの？

——モチロンよ！ 私がおまじないするんですもの！ まずは小指で指きりして……。

——はい、指きり。

——それで、それぞれ相手の名前をよぶ。ハイネ。

——ソフィーナ。

——そしたら、もう片方の手で指きりしてる指をにぎる。

——はい、にぎったよ。

——そしたらそのあと……『せいこうい』って書いてあつただけど、アリス先生に聞いたらそれはまだ早いから、後でいいよって言われたの。

——じゃあ、後でにしよ。でも『せいこうい』っていうくらいだから、成功すればいいんじゃないかな？

——なるほど。ハイネ、あんた頭いいわね！

——えへへ、ありがとう。

………

夕玄島のアルマの家から青蘭島の魔術工房まで足を運んだハイネは、意を決してソフィーナの工房のドアを叩いた。

「……………」

だが、返事はなかった。もう一回叩いてみるが、やはり反応はない。



「……俺が怒ったことに怒ってんのかな」

俄かに失望がこみ上げてきた。今日は帰ろう――

「何してんのよ」

「うおわっ!？」

後ろから急に声をかけられ、ハイネは思わず飛び上がった。振り返ると、訝しげな目でソフィーナが見上げていた。

「……何してるの?」

「あ、いや、話があつて。……中で話せる?」

「あー……ええ、そうね。立ち話もなんだし」

ソフィーナに導かれて中に入ると、数日前に後にした時と同じ、豪華な部屋……ではなく、散らかっていた。ソフィーナはかなりの潔癖症なので、これはおかしい。

「ごめんなさい、部屋、汚くて……」

「じゃあ一緒に片付けちゃおう」

「いいの?」

「おう」

彼女はどこか怖がつているような眼差しでハイネを伺っていたが、彼は宣言するや否や掃除を始めてしまったので、ソフィーナもそれに従う。

お互いに背中を向けて、黙々と部屋を片付ける。言葉が交わされるのは、「これはどこに置けばいい?」「それはそこに置いて」という類のやり取りのみ。

そんな中、ソフィーナがぽつりとハイネを呼んだ。

「………ねえ、ハイネ」

「何?」

「私、その……ハイネに、謝らなきゃいけない」

「………うん」

「私、ずっとハイネに対して、ひどい態度取ってきたのよね……?」

「ん………まあ、ある程度は努力に繋がってたけど」

「でも、ずっとひどいこと言ってた。自分が天才だからって、他人もそうだと思うのはおかしい。……その通りよね。無配慮で、ごめんなさ

い」

「……ん、いいよ。もう、怒ってないから。ていうか、怒るつもりも、無かったんだけどね」

「そうだったの?」

「うん。でも……俺、怖かったんだ。ソフィーナは天才で、俺は非才で。俺が頑張ってる間に、ソフィーナが別の誰かと行ってしまったら……俺は、耐えられない」

「そんなことしない!」

ソフィーナは片付けの手を止めると、ハイネに後ろから抱きついた。

「そ、ソフィーナ?」

「私、ずっとハイネって決めてた! ちっちゃい頃からずっと! ハイネ以外の男と結ばれるなんて、考えられなかったよ……!」

でも、再会したハイネは、もういろんな女の子に囲まれて……私以外のものになっちゃったらどうしようってずっと悩んでた。だから無意識に高圧的に接して、ハイネを逃がしたくなかったのかも……」

「そっか……なんか馬鹿らしいね」

「え?」

ハイネはソフィーナの方へ振り返り、その手を握った。

「どっちもおんなじような事考えて、でも口に出せなかったからすれ違ってた。口に出したら、こんなに簡単に仲直りできちゃった」

「……仲直りで、いいの?」

「逆によくないの?」

「いい!…もちろんいいわ!」

急に慌てるソフィーナが可愛くて。ハイネはその頬に手を添える  
と、

「」

ソフィーナの顔に自分の顔を近付け、その頬にそっとキスした。

「!?!?!」

すぐに唇は離れたけど、何をされたか理解したソフィーナは目を白黒

させ、言葉にならない声を発そうともがいていた。

「な、何を——ッ！」

「仲直りの証だよ」

「は、ハイネ、あんた変よー！」

「まあ、そうかもね」

未だに信じられないという表情のソフィーナの頭を、ハイネはそつと撫でた。

「さあ。残りも片しちやおう。そうしたらお茶を入れるよ、ソフィーナ」

「よ、よろしく頼むわね」

幼い頃に交わした盟約が、果たされつつある。

……………

——ねえ、ママ。『せいこうい』ってなに？

——……あー、ソフィーナがおまじないしたのね。

——うん。でも、さいごにそれがひつようなの。早くむすばれたくなって思っで。

——そうね。『せいこうい』っていうのはね、この世で一番好きな子とするものよ。私たちはそれを行うことで、2人は永遠の繋がりを得るの。

——えいえんのつながり？ なにそれ？ つながるの？

——そう。ずーっと先までね。ハイネがおじいちゃんになっても、続くのよ。

——すごい。で、どうすればいいの？

——うーん……今は教えられないわ。さつきも言ったとおり、これをすれば永遠に結ばれる……だから、決して簡単な魔法じゃないのよ。この繋がりはどんな幻も打ち払う、最強の魔法なの。

——さいきよう！ すごいなー。いつ教えてくれる？

——15歳になったら、考えてもいいわ。

——えー、ずっと先じゃーん。

——それまでにしつかりと強くなっておくのよ。いい？

——はーい。ぼく、頑張るよ!

——いい子いい子。流石は私の自慢の息子ね。

.....

「ふう、ようやく終わったね」

「こんな片付け、久しぶりにしたわ」

数十分後、部屋は整頓された状態になっていた。いかにもな高級感が戻ってきている。

「でも、なんであんなに散らかしてたの?」

「だ、だって……あんに悪いことしたって自覚あったけど、どうしたらいいか分からなくて……頭がごちゃごちゃになってたのっ。悪い!?!」

「別に。俺もおんなじようなもんだったし。ついさつきまでさ……」

2人は縮まった距離を保とうとするかのようになり、雑談しながら寄り添ってお茶を入れ始めた。大部屋にはキッチンどころかシャワーや風呂・トイレまである。しかもそこに彼女はやらたと大きい天蓋付きのベッドを持ち込んでいたため、ここで暮らすことも簡単だろう。現に彼女は休日は徹夜で作業していることもある。形だけなら、もはやひとつの1LDKの物件だ。

「しかし、ベッドはいるのか?」

「いるでしょう。夜のうちに術を染み込ませなきゃいけない時とか、ここで仮眠するし」

「このベッド、超ぶつかふかじゃん。こんなんで寝たら、絶対ぐっすり寝ちやうよ」

「目覚ましくらい掛けておきなさいよ」

これまた高そうな櫥のテーブルで——先程までは羊皮紙とインクだらけだった——で入れたお茶を飲む。ソフィーナが好きな黒の世界のものではなく、ハイネがこの前買ってきた、この世界のお茶。ここ数日間、心を落ち着けるためにこれを飲んで、ハイネを思い出して心を乱し、でもハイネが買ってきたものだから捨てるわけにもいかず、正直味は好みだし、また飲む……という悪循環を続けてきたが

……今は、とても心が落ち着いていた。ハイネが入れてくれたからだろうか。

「ねえ、ソフィーナ」

「なに？」

ハイネは落ち着いてリラックスした様子で口を開いた。

「俺さ。さつきまでリゼと一緒にいて……それで言われたんだ。俺もリゼのことを置いていったらろって」

「……そっか。あんたは5年前にここに来たのだものね」

「だから、ソフィーナに怒ったのは筋違いだったかなって思ってた……」

「筋違いじゃないわ。私もその……悪かったわ」

「リゼにも、ちゃんと謝っておいてね」

「……うん。でも、あの子……」

「怒ってなかったよ。少なくとも、ソフィーナがちゃんと反省してるのなら」

「そう……それなら良かったわ。ちゃんと……謝れそう」

その言葉を聞いたハイネは、手招きで彼女を呼んだ。訝しげな表情のソフィーナが席を立ててハイネのそばまで行くと、彼は立ち上がって、

「——!!」

彼女を抱きしめた。

「偉いよ、ソフィーナ」

「は、ハイネ……」

彼女も戸惑いながら、ハイネを抱きしめ返す。

素直ではないソフィーナをこういう面は、自分がリードしなければならぬ、と思っていたハイネは、その耳元にそっと囁いた。

「大好きだよ、ソフィーナ」

「私も……大好き」

ずっと秘めてきた想い。周りにはバレバレだったが、それでもずっとこの想いを貫いてきた。2人とも同じ約束の元に結ばれている。

「俺、何があってもソフィーナのそばにいる。だから俺を、置いてかな

いでくれる?」

ハイネが微かに震える声で問うと、ソフィーナはすぐにそれを否定した。

「置いてかない! ずっと手を繋いでてあげるから。苦しくなったら、必ず慰めるから。だから、私を選んでくれる?」

「うん。俺はずっと、ソフィーナを選ぶよ」

「……………ありがとう」

2人は互いを自身に縛り付けるように抱き締め合った。不意にソフィーナが顔を上げた。その瞳は潤み、何かを求めるように唇を突き出している――。

ハイネは少し戸惑い、いいの? と聞いた。彼女は無言で背伸びをし、さらに彼との距離を詰めようとした。

彼は、彼女の精一杯の背伸びをいじらしく思った。そして微笑むと、そっと、ソフィーナにキスをした。淡く触れる程度の、ぎこちない、けれど大切なもの。

「……………ソフィーナ、初めてだった?」

「ええ。……………ハイネは?」

「俺も初めてだよ」

「そう……………ありがとう」

どちらからともなく顔を離して終えたファーストキス。しかし、ハイネは抱擁は解かない。

「いつか交わしたおまじない……………覚えてる?」

「おまじ……………っ! あ、あれのこと……………?」

「そう。母さんも15歳になったらしてもいいみたいなこと言ってたし……………」

「……………最後に1過程、残ってたわね……………するの?」

「俺は、したい。ソフィーナと完全に、結ばれたい」

ハイネは真剣な表情で訴えた。対するソフィーナの回答は、決まってきた。交わしたあの日から、ずっと。

「……………ん、いい、よ。しましように」

夜は、まだ始まったばかりだ。

.....

セニアと別れた俊太が少し晴れた気分で家に帰ると、いつの間にかアウロラからメールが来ていた。さっと頭が熱くなる感覚に襲われ、謎の恐怖心が湧いたが、興味が先行してそれを震える指で開く。

『直接お話ししたいことがあります。明日、お家にお邪魔してもいいですか？』

と、時間の指定と共に書かれていた。

どこか安心したような、だけど恐怖心は抜けないような、変な感情を覚えた。

——怒ろうとしてるのかな。それとも……それとも、何だ？

だが、怖かろうと、伝えようと決めたのだ。この心にずっと秘め続けていた想いを。

俊太は文面を書いては悩んで消し、ああでもないこうでもない文章を考えて、結局、

『アウロラの好きな紅茶を用意して待ってます。』

と送った。送信ボタンを押した瞬間、後悔に苛まれてベッドの上でジタバタしていたが、数分後に返ってきたメールには、

『嬉しいー！じゃあ、紅茶にぴったりなお土産を買っていきます！』

とあった。しばらくその文面を見て……これは大丈夫そうだと判断した俊太は、すぐに私服に着替えてスーパーマーケットに向かった。少し前にポロっと聞いた彼女が一番好きな紅茶を買いに行くために。

そして、帰ってくるなり部屋の片付けをし、少しでも見栄えをよくするために奮闘する。元々あまりものは持っていない俊太だが、だからといって剣道の道具がそこらへんに放つてあるのは言語道断。すぐにクローゼットにしまう。ゲームもテレビ下のラックに片付け、ハインの付き合いで始めて少しハマり気味のカードゲームもまとめ机にしまう。

その辺の行動は、ごく普通の男子高校生と何も変わらなかった。

.....

翌日。

「おじやましませーす」

「い、いらつしやい」

アウロラは、今まで通りの笑顔で俊太の家にやってきた。

「はい、お土産よ」

「うわ、すごい量だね……」

彼女の持ってきたお土産は、ケーキの箱にシュークリームの箱に……と、商業地区のちよつとお高い店で売ってそうな、俊太がまず自発的に買うことはないであろう高級そうなスイーツ。

——ていうか、半分自分が食べたくて買ってきただろこれ。

だが不思議なことに、呆れよりも可愛らしきの方が強く感じられた。それに、箱を開けて、どれが食べたい？ うーん、これかな。じゃあ私はこれ！ といったやり取りが心地よかった。

予め入れておいた紅茶を用意し、ティータイムのような感じになった。ちゃぶ台でティータイムもあるものかと違和感を覚えていたが、彼女が行儀よく正座しているので、俊太もそれに倣う。

彼女は紅茶を一口飲み、ほつと一息吐くと、意を決したように話し始めた。

「……じゃあ、メールで送ったように、俊くんにお話があります。聞いてくれる？」

「うん。なに、かな？」

彼も同じように紅茶を一口飲む。アウロラに似た、落ち着いた風味の紅茶だ。それが心を落ち着かせ、焦りを止める。

「まずは、俊くん……本当にごめんなさい。私、ずっと貴方のことを傷付けてた」

「あ、アウロラが謝らなくても……俺もごめんなさい。そ、その……押し倒したり、よそよそしくしたり……」

「でも、俊くんにそういう態度を取らせるようなことをしたのは、私が原因でしょう？ だから、ごめんなさい、なの」

アウロラの語り口調は静かながら、その下に謝罪の響きを強く伴っていた。

「私、ね……確かに普段は大人っぽいキャラで通ってるわ。その、自分



で言うのもなんだけど……それなりに物事を大局的に捉えることには長けてる、と思う。でもね、俊くんことは、全然大局的に見るこ  
とができなかったの。お花畑で初めて出会ったあの時から……」

彼女の頬がどんどん赤らんでいく。その告白に聞き入って、俊太は  
口を挟めない。

「俊くんのことを考えると、いつも頭がぐるぐるして……全然2人の  
関係とかまで目が行かなくなっちゃうの。俊くんはどうしたら喜ん  
でくれるかな、とか、俊くんは何を考えてるんだろう、とか、ずっと  
考えちゃうの。周りからどんな風に見られるかなんて考えられない  
し、こんな気分になるのが……怖かった。

「ごめんなさい。俊くん、私に言ったわよね? 『格好良いって、言っ  
てくれないの?』って。私、ずっと俊くんのことを格好良いと思っ  
ていたわ。小さいけれどどこまでも一途に頑張れる貴方のこと、とっ  
ても格好良いと思ってた。でも、それを口にするのが恥ずかしくて……  
それでつい、可愛いつて言葉で誤魔化してた。でも、それは俊くんを  
傷付ける言葉だつて気付けなかった……本当に、ごめんなさい」

アウロラは俯き気味になり、上目遣いで俊太を見ていた。彼女が言  
いたいことを全部言ってくれた。その思いの真相は、俊太の疑念を晴  
らしてくれた。

「俺も、アウロラに謝りたい。そのさ、俺がもつとアウロラにいろいろ  
話せば、アウロラも分かってくれたはずなのに、恥ずかしくて全然話  
さなかった。だって、アウロラより背が10センチも低いのが恥ずか  
しいですなんて、言いにくくて……。それでアウロラにばかり「格  
好良いって言って」とか要求して、ちよつと虫が良すぎた、かな……  
それに、俺、アウロラにはもつと似合う人がいるんじゃないかと思う  
と怖くなって、それでその……あの時思わず、押し倒しちゃった、つ  
ていうか……本当にごめん」

「そんな……そんなことないわ。私も悪かったわ」

お互い、言うべきことは全部言った。最後に俊太は、一番言いたい  
ことを彼女に要求する。

「俺のこと、認めてくれる? 俺、アウロラのαドライバーでいてもい

い？」

拒否されるのが怖かった。自分だけ舞い上がっているという事実を突き付けられたたくなくて。

彼女の返答は、あまりにも単純だった。

「もちろんよ。ずっと、私のαドライバーでいて欲しい。ずっと」

アウロラは立ち上がって俊太の方へ向かい――

「あ、つつー！」

「ちよ、アウロラ!？」

倒れ込んできた彼女を、俊太は慌てて抱きとめた。

「どうしたの、アウロラ!？」

「え、えーと……」

彼女は自分の足を指して、

「し、痺れちゃった……正座してて……」

「あー……そっかー……」

なんか心配して損した、と思うも束の間、俊太は彼女の豊富な身体が自分に押し付けられていることを知り、大いに慌てたが、アウロラは嬉しそうに彼に身体を預けた。

「しばらく……こうしてたいな。ダメかしら？」

「い、いいの？」

「ええ。俊くんに……こうされてたいの」

アウロラは俊太にもたれ掛かると、ふんわりと笑った。彼女らしい、どこまでも優しい女神か天使のような笑み。

「俊くん、足痺れないの？」

「まあ……剣道でよく正座してるから、慣れてるっていうか」

「そういえばそうだったわね。うん、格好良いぞ、俊くん」

「……………ありがとう」

「でもやつぱり、こういう反応は可愛いわ。ねえ、これからも可愛いって言うてもいいっ？」

「べ、別にいいけど」

俊太が照れてそっぽを向くと、アウロラは殊更嬉しそうな声になった。そして、この人には勝てないな、と思う。

そのアウロラは、静かなトーンの声に戻ると、こう言った。

「ねえ、俊くん。私、春樹くんと話してて気付いたの。私が貴方に、ずうっと恋してたってことに」

「……………」

「俊くんはどう？ ああ、ホントに嫌なら突き放してもいいのよ……？」

どこか恐怖を含んだ声。その声を聞いて、俊太は、ああ、と納得した。

——なんだかんだ言っつて、想いを伝える恐怖は、アウロラにもあるんだな。

そう思うと、なんだか急に心が軽くなって。すぐそばのアウロラの頭を、そつと撫でた。

「俺も、好き。ずつと恋してた。一目惚れだったんだから。大好きだよ、可愛いアウロラ」

「……………」

彼女は、心の底からの歓喜に胸を震わせているような声で答えた。それから、姿勢を正して俊太の隣に座ると、彼が選んだケーキを見て、

「あら、こつちもおいしそうね。俊くん、ひとくち欲しいなあ」

「え？ いいけど、はい」

俊太が皿ごとアウロラの方にやろうとすると、彼女は目を閉じて口を開いた。

——これはまさか、食べさせてくれたってことなのか!?

漫画でよく見るシチュエーションがいざ自分の身に降りかかると慌てるのは当然だが、紅茶を一口飲んでなんとか落ち着きを取り戻すと、ケーキをひと切れフォークで切り、持ち上げ、彼女の口元へ持つていく。

「はい、あーん」

「あーん」

本当にこんなやりとりがあるとは思わなかったが、ぱくりとケーキを加えて嬉しそうに頬に手を当てる彼女は、やはり年齢相応の可愛らしさがあった。

「うーん、こっちも美味しいわ。今度また買っちゃお」

「……ほどほどにね？」

「はぁーい」

のんびり返事をするアウロラ。その唇に、クリームが付いている。舌で舐めた時に付いたのだろう。

「アウロラ、唇にクリーム付いてるよ」

「あら、ホント？　じゃあ俊くんが取って？」

「え、ええっ!？」

アウロラはどこかいたずらっぽい表情になり、俊太に顔を寄せた。

「口で、取って？」

そこでようやく、これが彼女の策略だったことに気付いた。

——可愛い顔して、なんて策士。

「……いいの？」

「ええ、だって……大好きなんだもの。この味を、俊くんにも分けてあげたいから」

もう、考える余地は無かった。

俊太も意を決して、彼女にそっと近付き、

初めてのキスは、甘いクリームの味がした。

## 最終話 《シー・オブ・ホープ》

数日が過ぎた。

「うー、ここに来て超緊張してきた。転んじやったらどうしようー！」  
「あんたらしくもない。練習通りにやればいいのよ」

「私も心臓がドキドキして止まらないよう」

「大丈夫だって。あんたらが失敗しても私が取り繕うから。それに、素人だってことも伝えてるし」

青蘭島・青蘭学園特区の一角に設えられたステージの裏で、美海、希美、沙織の3人がスタンバイしていた。チャリティーコンサートということで、規模はそれほど多くないが、予想していたよりも観客の数は多かった。

それをちらつと見た美海は、若干青ざめた顔で、

「ちよつと多すぎない？」

「仕方ないじゃない。この前のバトルが評判だったんだもの」

「うう……あんまり張り切りすぎるんじゃないかなあ」

……

初めは、バトルが終わったことに気付けた者はそれほど多くなかった。

やがて、少しずつ拍手が起き始め、すぐにそれは会場を埋め尽くす大きさまで膨らんだ。

「……負けたか」

春樹は、胸を焼くような感情を抱いた。これが悔しさ。引き分けの時とは全く違う。負けても仕方がないバトルだと分かっていたいながら、それでも実際の敗北には、堪えようもない悔しさを感じた。

指揮の弱さ。判断の甘さ。プログレスの練度の差。そのどれもが劣っていた……とは思わない。常に戦況は動き、その中で優勢になり劣勢になり、結果的に劣勢で終わったというだけのことだった。

そして、悔しさではなく、清々しい思いを抱いているのもまた事実だった。やりきったという達成感と、次は勝ちたいという意欲。

少なくとも、間違いなく言えるのは、やってよかったということだった。

美海もカレンもかなり怪我をしていたので、フィールド外に出てから治療を受ける。特に美海は、最後の一撃によって気絶していたので、目を覚ますのはもう少し後になるらしかった。

「……負けてしまいましたね」

「ああ。でも、まだまだ伸びれるよな、俺たち」

「無論でございます」

カレンは静かな、だがどこか晴れ晴れとした表情で言った。彼女も絵麻と互角で、最後の最後に出し抜かれたことが憤懣やる方ない様子だったが、それをとりあえず横に置いておけるところは流石アンドロイドだと思った。

カレンはすつと立ち上がると、どこかへ行ってしまった。きっと絵麻のところへ行っただろう。

「……私がグズグズしてなければ、勝てたのかな？」

「そんなこと言わないの。結果は結果。頑張つて次は勝とうな」

「うん……！」

琉花は少し涙ぐんでいた。自分が引きこもっていなければ——そう考えているようだったが、口にした通り、結果は結果である。それを踏まえて次に活かさなければ、それこそ意味がない。春樹は琉花の頭を優しく撫でた。

そうしてしばらく他のバトルを眺めていると、希美と沙織がやってきた。2人とも、ぐったりしたままの美海が心配でたまらないらしい。

「美海ちゃんは!？」

「大丈夫。気絶してるけど、すぐに目を覚ますって」

「……そう、よかったです」

最後の一手を打った沙織は、自分のせいで友達を傷付けたことが、やはり堪えられないようだった。しかし、そんな優しい自分を封印して友達に立ち向かえる、その心根は素直に感嘆せざるを得ない。

一方の希美は、春樹とカレンの方を向いていた。中等部の頃からの

付き合いの彼女。今回は……悔しいが、完全にしてやられた。

「してやられました、希美。貴女のエクシードにあのような使い道があるとは」

「まあ、カレンに察知されたから、失敗だと思ったけど」

「レベル5の時も、すごかったよ。俺、完全に吞まれてたし」

「……ありがとう」

希美は照れくさそうに言うと、今度は琉花の方を向いた。

「琉花？」

「……希美」

「なにメソメソしてるのよ」

「だって……私が早く復帰してたら、練習量も増やせて、勝てたかもしれないなかった」

「もう、しつかりしなさい」

希美は腰をかがめて、座っている琉花と目線を合わせると、その頬を両手で挟み、上を向かせた。

「琉花のレベル5、凄かったよ。雨を降らせるなんて思わなかった。それに、水張って足音で私を補足しようとするなんて……」

「……そんなことない。希美の方が凄かった」

「でもあんた、別に影響受けてなかったじゃない」

「あれは——なんていうか、頭がぼーっとして何も考えてなかったっていうか……」

琉花は視線を上げ、相部屋の2人は、お互いに見つめ合った。

「次は、あんたも魅了してあげるから。覚悟しなさい？」

「……なら、私ももっと強くなって、希美のことコテンパンにしてやる」

「どうかしら？ 私、負けないわ」

「私も、次は負けない」

琉花と相部屋の希美は、間違いなく青蘭に来た琉花と最も長く一緒にいる親友だ。琉花は、目の前の彼女を抱き締めた。

「私が引きこもってる間もその前も、迷惑いっぱいかけて、ごめんね……！」

いろいろ忙しかったのもあるが、ずっと言えていなかった。不意をつかれた希美は、それでも平然と、

「ああ、そんなこともあったかしらね。別に気にしてないわ」  
「……でも」

「だって私たちは、親友でしょ？」

そう言うと、希美も琉花を抱き締め返した。

「うん……ありがとう」

春樹は、そんな仲睦まじい様子の2人を眺めながら、ああこれも愛なのか、と思つた。カレンが自覚させてくれた『愛』とは、あまりにも多様な形がある。2人は今、抱き締め合い、言葉を交わし合つて、お互いの愛を伝えている。

女の子を本当に慰められるのは女の子だけなのかな、と少し寂しい思いに囚われていると、美海が目を覚ました。

「ん……う……？」

「み、美海ちゃん！ よかった……痛いところは？」

「沙織、ちゃん？ 痛いところ……ううん、特にないよ。あ、春樹くん……」

起きたばかりの美海は状況が理解できていないようだったが、自分たちがフィールドの外に居ることを自覚すると、当然ながら《それ》を気にした。

「バトル、どうなったんだっけ」

「俺らの、負けだったよ」

「そっか……私が最後、避けられてれば」

「仕方ないって。俺だってまともに指示を出せなかったんだし」

「ごめんね美海ちゃん。友達なのに……バトルだからって殴ったり蹴ったりして……」

「え？ いいよそんなの。バトルだし……私だつてたくさん打ぶったよね。お互い様だよー」

美海はどこかぼやけたような表情だった。が、希美がやって来ると、満面の笑みを浮かべた。だが、その眉尻は僅かに下がっていた。

「凄かったよ、希美ちゃん。私、聞き惚れちゃった」



「……そう」

「今回は、私の負けだよ希美ちゃん」

彼女は素直に、自分の負けを認めた。言われた希美は照れくさそうにそっぽを向いて、

「次も負けないから。あんたも強くなつて、かかつてきなさい」

と、右手を差し出した。

「うん。もーつと頑張つて、希美ちゃんの歌に負けなくらい強くなるよ」

美海はその手を握った。

2人は固く、再戦を誓う。

………

完全に元通り、いや、以前よりも打ち解けた2人を後に、沙織はそつとその場を立ち去った。少し歩いたところで、背中を軽く叩かれた。生まれた時から知っている感触。

「羨ましいのか、沙織？」

「お兄ちゃん。う、羨ましくなんか……ない」

珍しく素直になれない沙織の頭を、雄馬はポンポンと叩いた。

「まだ伝えられないか？」

「言ったら、絶対に变だって言われちゃうよ」

「あの2人なら大丈夫だと思っただけだな」

雄馬は笑顔を消しながら、それでも力ある言葉を紡ぐ。

「……ま、特殊性癖なんてもんは誰にだって少しはある。たまたま俺らは、それがちよつと激しいだけのことさ」

「でも、お兄ちゃんは少なくとも、対象が女の子だけでしょう？」

「実は、男もしたことがある」

「え!?! 嘘でしょ？」

「ホントホント。引いたか？ 嫌いになった？」

「そ、そんなことないけど……」

「だろ？ 性癖なんてそんなもんさ。今は黙っててもいいけど、手遅れになる前に、口にしてみな。馬鹿にする奴がいたら、俺が守ってやるからよ」

「うん……ありがとう」

よく似た笑顔を浮かべる叔父と姪は、並び立って歩いていく。

……………

昼食を一緒に食べたり、満月寮の面々とそこに混じっていた紗夜とバトルを一緒に観戦したりして、ようやく長い一日が終わりを迎えようとしていた。

忘れかけていたが、この大会は勝ち負けを競うものではなく、バトルの質を見て、最も素晴らしいバトルをしたペアが優勝する。

残りのバトルを観戦している中で、少し自分たちのは泥臭すぎただろうか、とか、戦略が甘すぎたかな、とか不安だった春樹だが。

蓋を開ければ、優勝したのは春樹たちのペアだった。

『本当に素晴らしいバトルを見せてもらいました。ラストスパートにかけての流れがとても良かった』

『プログレスの性質と地形を上手く利用していた』

『レベル5同士の、全く異なる領域でのぶつかり合いは非常に興奮させられました』

などの評の数々。いざ本当に優勝してみると恐れ多いことこの上ないし、聞いた時には呆然として何が起きたのか分からないほどだったが、最後に参加者たちの前に出て賞状と盾を貰うとき、隣に立っていた雄馬が春樹の背中を押した。

「お前が受け取れ。本当に素晴らしかった」

春樹は震える手で盾を受け取ると、この場に立てることがうれしくて、少し涙が出た。身体が内蔵から震えているような感覚。これほど「歓喜に震える」という言葉に近い状態になったのは初めてだった。

次こそは勝利して、その上でまたここに立ってやる。そう思わずにはいられなかった。

……………

青蘭のアイドルである希美が初めてブルーミングバトルに出て、大活躍だったらしい。

対戦相手のチームは、まだ在学中のαドライバーがリーダーを務める、新進気鋭のチームらしい。

希美のチームには、ブラックホース的な活躍をした1年生がいるらしい。

そして、そのバトルを織り成した3人が、近く学園特区のチャリティーコンサートに出るらしい。

といった具合に広まった噂のせいで、予想していたよりも多くの観客が集まっていた。

青を基調とした、いかにもアイドルらしい、加えて青蘭学園の制服の意匠を取り入れた服に着替えた3人は、後は出番を待つだけであった。

緊張は限りなく高まっていく。

いよいよ出番が直前に迫る。3人はそれぞれ手を差し出し、重ねた。

「さあ、準備はいいわね？ あんたなら失敗しても、可愛いから許してもらえるわよ」

「し、失敗しないもん！」

「その意気だよ美海ちゃん！」

だが、2人が一緒なら大丈夫。

重ねた手のぬくもりが、教えてくれる。

「さ、出番だぞ。思い切り頑張ってこい！」

出番が来たことを、裏方として働いている雄馬が教えてくれた。3人でできたユニットはステージへと登る。

「それじゃあ行くわよ？ ちゃんと付いてきなさいよね！」

「うん！」

「ええー！」

ユニット名は、《MI／cross》。

.....

春樹は観客席の一角に座っていた。美海の姿を近くで見たいため、もちろん最前列にほど近い場所だ。

「しっかし、こんなに人集まるとは思わなかったなあ。午前中しかやらないほど小さいのだと思ってたけど」

「私もそう思ってたけど、まあいろんな人にみうみんなたちを見てもらえて良かったじゃん」

「うー、みんな緊張してないといいですけど」

「美海殿はここ一番に強いから、大丈夫でゴザロウよ」

春樹の隣りには、琉花、兔莉子、忍がいた。カレンは来ていない。そもそもこういう場合は苦手らしいが、それを押しでも来たがっていた。ただ、どうしても外せない用事があるらしく、悔しがっていた。そもそも飛び入りだった彼女をカウントしなれば、一応“スカイブル・エレメンツ”のメンバー全員ということになる。

コンサート規模は小さいもので、言った通り午前中だけのプログラムである。なのに、この人の集まりは大したものだ。と初めはそう思ってた周りを見回していたのだが……。

「ほら、あの男の子！ この前のバトルのαドライバー……」

「あ、水の子もいる！ みんなで来てるのかな」

「あの帽子の子、4月のバトル出てたよ。どうして今回は出なかったのかなあ」

「2人の子もチームメイトなのかな？」

などと、まさか自分たちが噂の対象になっているとは思わず、慌てて前を向いてそのまま固まってしまった。

ともあれ、先日のバトルが評判で、そのバトルに出ていたプログレスが出るからという理由で来ている人が多いらしい。実際、声も掛けられた。泡を食っている横で3人（特に忍）が冷静に対応してくれていなかったらと思うと恐ろしい反面、自分たちを知ってもらえたことが嬉しくもあった。

「そしていよいよ美海たちの番が回ってきた。」

『みんなくっ！ おっはよー！』

元気の良い声。この島で3年間生きてきた春樹にとっては最早聞き慣れた、それでも心が明るくならずにはいられない声。

希美は満面の笑顔でステージに立った。まずは、普段通りの希美の

ソロで開始する。美海たちはその後で登場する手はずだった。

彼女が1人で歌うのは最早恒例だが、だからといって会場が盛り上がらないわけでは全くない。むしろ、このあとへの期待から普段以上に会場は熱せられていく。

『みんな、ありがとー!』

それから、

『今日は、私の親友の2人もステージに立ってくれるよ!』

という掛け声と共に、

『は、初めまして! 日向美海です!』

『同じく、岸部沙織です!』

ステージに登ったのは、美海と沙織。どちらも表情は少し硬いが、当然だろう。だが、2人とも楽しそうに笑っていた。

3人とも所定の位置に付くと、希美は笑顔でマイクに向かって言葉を紡ぐ。

『今日はみんな来てくれて本当にありがとう! 思ったより多くてびっくりしてるよー! あ、この2人はアドリブできるほど場慣れしてないから、みんな許してあげてねー』

会場を笑い声が包んだ。美海は照れ隠しの笑顔でペコペコとお辞儀し、沙織は赤く頬を染めながらも優美に一礼した。春樹たちも笑い、そして鼓動が高まっていくのを感じた。

『今日は、私たち《MI/cross》が、飛びっきりの歌を歌うよー! この日のために新曲作ったの!』

『頑張つて歌うので、みんなと一緒に楽しませよう!』

『それでは行きますよ! 聞いてください。曲名は《シー・オブ・ホープ》です!』

沙織の声と共に、ポップな音楽が流れ始めた。希美の得意なポップ・ミュージック。だが、普段のそれとは少し違い、どこかテクノな雰囲気もある。

同時に、会場を飲み込む、希美のエクシードが発動し始め、彼女が一層強調された。

『星たちが私を照らす

月が浮かぶ海の上』

まず、希美が歌い出した。その様子が普段とどこかが違う。ふと考え、すぐに分かった。輝いているのが、希美だけではない。美海と沙織もだ。彼女はエクシードを美海と沙織にも使用しているにも違いない。むしろ、希美本人よりも強調されているようにも感じる。

『白く青く照らされて

君はその瞳を明るく輝かせた』

次に、美海が口を開いた。明るく元気な歌声。小さい頃から希美と一緒にアイドルごっこをしており、「いつか一緒に歌おう」という約束をしていたというが、その夢が今、叶っている。その喜びが、声に顕れているかのようだ。

『重なる足音、続く足跡

先に進む道へ歩き出した』

沙織の声が響いた。2人に比べれば落ち着いた声。この島で得た新たな親友2人と一緒に歌っている。そこには共に過ごした時間など関係なく、ただ余りにも強い絆だけがあった。

春樹たち、いや、会場の観客は1人残らず、3人の歌声に引き込まれていく。

『すれ違い、いがみ合い

迷いから恐れる、立ちすくむ』

『争い、傷付け合い

恐れから苦しむ、立ち止まる』

美海と希美の声が、互いに言葉をぶつけるように鳴り響いた。競い

合うように、張り合うように、それでいて、互いをいたわるように。

『心はいつも、繋がってる』

『そう信じれば、全て変わるの』

『素直になつて、手を前へ』

『探して、掴んで、差し出した手を』

そこに沙織の歌声が入る。2人の架け橋であつた彼女の声が、美しく、伸びやかに、会場を包み込む。

『誰よりも輝く星』

『見つめる私には、眩まばゆくて』

『I, m c o n n e c t i n g w i t h y o u 』

『戦う君を、強い君を』

『護りたい、そう誓つた』

美海が持ち前の身軽さで跳ねるようにダンスしながら、力いっぱいに歌う。吹き抜ける風のように、どこまでも滑らかで、力強いダンス。慣れていないからか、既に汗びっしょりだが、その汗の一滴一滴がまるで宝石のように輝いていた。

美海に合わせるように、希美と沙織の歌声も混じる。3人の声が重なって合わさり、もう彼女たちから目を離せない。

春樹は、言い知れぬ感動を胸に秘めたまま、それを言葉に表せなかった。明確な感情にもできない。

『青い空を翔る鳥』

『見上げる私には、眩まばゆしくて』

『I, m c o n n e c t i n g w i t h y o u 』

『笑顔の君を、優しい君を』

『守りたい、そう思つた』

希美がベテランの動きでダンスしながら歌う。青蘭に生きる人に元気を与え続けた声。手を伸ばして美海の手を取り、沙織の手を取り、ステージの中央へ。2りとも一瞬戸惑ったような顔をしたのを見ると、どうやらアドリブらしい。それでも、2人はそれに付いてきた。心が通じ合っているかのよう。2人に挟まれて、希美は今までで最も輝いて見えた。

3人の絆を目の当たりにした観客らは、これが初めて聞く曲だというのを除いても、それに見入らずにはいられなかった。

『信じ合えば、炎の中でも、私は歩ける』

もつと先まで、遙か未来まで』

沙織が2人の間に割り込み、満面の笑顔で2人と手をつないだ。それは、これからずっと2人の間で架け橋になるという誓いのようにも見えた。

その中で、彼女の声は海溝のように深く、心臓を震わせるように響いた。心臓どころか、魂まで揺さぶられるような、想いの詰まった声。

『信じ合って、炎の中を、歩いていこう』

もつと先まで、遙か未来まで』

最後は、3人で歌いきった。当初の予定のダンスは後半ほとんどしていなかったが、それでも3人は、それでいいと思っていた。美海は両腕をいっぱい振り上げて手をブンブン振り、沙織は2人の腰をギュツと抱き寄せて、希美は普段通りに見えて普段以上にニコニコ笑っていた。

終わってしまったえば、歌っていたのはたったの2分程度。

それでも、その2分で、会場は最高潮に達していた。音楽が終わるや否や、割れるような拍手と歓声が爆発した。春樹も、自分で何を言っているのか分からないほどに叫んでいた。ただ、この感情を爆発させたかったのだ。言葉にできないような感情を。そして、そうして



いる人は決して少なくなかった。

ステージの上で、観客に向かって笑顔で手を振る3人。

その彼女らが、実は少し前まで大喧嘩していたと言っても、誰が信じただろう。

そのくらい、3人の絆は確固たるものになり、誰の目にも眩しいくらい輝いて見えた。

……………

なぜCDを売らないんだ。

という声が殺到したため、近いうちに《MI／c r o s s》のCDが出ることになった。だが、彼女らが今後もユニットとして活動していくかどうかは、まだ未定だった。ステージが終わったあと、美海も沙織も腰が抜けて立てなくなってしまう、希美に笑われていたが……………。

全プログラムが終わった後、春樹たちは真つ先に3人に会い、賞賛の言葉を雨あられと投げかけた。3人は恥ずかしそうにしていたが、嬉しそうでもあった。

「凄かったよ、美海」

「ありがと、春樹くん。希美ちゃんがアドリブ入れてきたから、歌詞が頭から吹き飛びそうだったよー」

「うるさいわね。いいじゃない、楽しかったんだし」

「うん、すっごく楽しかった！ とっても緊張したけど……………」

雄馬も、そんな3人の様子を見て、嬉しさを隠せないようだった。少し涙ぐんでもいる。よほど感動したのだろう。そう思った春樹も、気付けば半分泣きかけだった。

「CD出たらすぐに予約して、毎日聞こつと」

「ちよ、恥ずかしいよ琉花ちゃん！」

「私ももう一回聞きたいなあ。あ、今日の晩ご飯の席でもう一回歌うってどうかな？」

「や、やだよ。美海じゃないけど、流石にそれは恥ずかしいっていうか……………」

「沙織殿も珍しくはつちやけていたようでゴザルな。録画禁止だったのが惜しいでゴザルよ」

「ろ、録画してたらどうするつもりだったの忍ちゃん……?」

と歓談していると、満月寮の面々やら1年生のクラスメイトやらが押しかけてきた。そろそろ退散しなくては、と思つてその場を去ろうとすると、その肩を雄馬に掴まれた。

「お疲れ様。パーティーしたいんだけど、来る?」

「え? い、行きます!」

「そうか。他にも呼んでいいけど、チームメンバーだけにしといてくれよ。みんなでやりたいのは山々だけど、場所がなくてな。こつそりつてことで」

「分かりました。あの、カレンは呼んでいいですか?」

「もちろん。じゃあよろしくな。場所はメールで教える」

雄馬はどこか心の底をくすぐるような笑みを浮かべると、3人の元へ戻つていった。

……………

確認してみると、パーティーには全員来れるとのことだった。カレンにも連絡したが、是非参加したいと返ってきた。

「ん、風が気持ちいいね」

「そうだなあ」

パーティーは夜に行われるので、それまでは自由時間。兔莉子と忍は商業地区へと行ってしまい、残った琉花が「さ、散歩でもしない?」と言つてきたので、それに従つて港湾地区までやつて来ていた。天気は晴れ。空も海も青く、徐々に夏の香りを含み始めた潮風が心地よかつた。

「すごかつたね、みんな」

「そうだな。ホントに感動したよ」

「私も出たかつたなあ。ほら、バトルに出た1年生で、私だけじゃん」

「それもそうだな」

「あ、でも……出なくてよかつたかも。私、その……」

急に暗い声になつた琉花。何が言いたいのかはすぐに理解できた。

自分が出ることになってたら、引きこもり期間で3人にも迷惑を掛けていたということだろう。

春樹はその気を嫌って、琉花の背中を気持ち強めに叩いた。

「おわっ！ な、何さ？」

「暗くなるなよな。ほら、こんなにいい天気なんだから」

「う、うん……そうだよな。ゴメン！ もう暗くならない！」

「その意気だぞ」

琉花は満面の笑顔になって、ニツと歯を見せて笑った。琉花らしい、元気な笑顔が春樹は好きだった。

「ねえ、ハル先輩？」

「何？」

「あのさ、嫌ならいいんだけど……ハル先輩のこと、呼び捨てにしている？」

「え、なんで？」

突然の質問に春樹が純粹に理由を聞くと、琉花は慌てふためいて、「だ、だからさ!?! ほら、みうみんだって『春樹くん』って呼ぶじゃない?! だからその、2人っきりの時だけでも、あの……」

「別にいいよ、呼び捨てでも」

「ホント!?!」

「嘘ついてどうすんだよ。2人きりの時だけじゃなくてもいいぞ」

「……それは、いい。これは、ケジメだから」

「ケジメ？」

なんのことか分からずに春樹が問いかけると、琉花は一瞬押し黙った。それから真剣な表情で春樹の方を向いた。

「あのね、私……ずっと隠してきた思いがあるの」

「隠してきた？ あれ、俺に全部話してくれたんじゃないや……」

「最近気付いたの。で、今から話したいんだけど、いいかな？」

「も、もちろん。どんと来い」

少し前に腹を割って話し合ったが、まだ隠していた思いがあるらしい。意を決して彼女の思いを受け止める準備に入った。

「耳貸して。大事なことから、1回しか言わないよ？」

「それ、普通2回言うんじゃない……」

「いい、いいのっ。それから、この思いを聞いた後でも、私への態度を変えないでね」

「……わかった」

それほど重要な思いなのだろう。いよいよ春樹も真剣な表情で、横を向いて琉花に耳を貸した。彼女はそっとそこに口を寄せ、

「……目を閉じて」

「？」

よくわからないが、言う通りに目を閉じた。さあ、どんな思いでも、俺が絶対に受け止めて――

不意に、頬に何か柔らかかなものを感じた。

慌てて目を開くと、琉花は春樹の頬に、キスしていた。

「る、琉花!」

驚きすぎて彼女から飛び退くと、琉花は珍しく、柔らかく優しく微笑んで、

「ハル、大好きだよ!」

――ハル、大好き!

その言葉に何も言えなくなってしまった春樹を前に、

「じゃあ私、パーティーの準備あるから!　また後でね!」

と言い残し、駆けていってしまった。

春樹は、未だキスの感触が残る頬を無意識にさすりながら、呆然とそれを見送るしかなかった。

これで、彼女への態度を変えずにいることなど、無理に決まっていた。が、それでも、努めて今まで通りに接しなければならぬ……

全く、なんてトリックスターだ。

そう思わずにはいられなかった。

もちろん、パーティーの時に目も合わせられないほど緊張していたのは、言うまでもない。

くその想いは世界を超えてく

「彼が、アルファアー・ワイズ……」

「そう、この世界における史上最高の天才科学者だ」

白の世界。青の世界への門が開いているコロニー『ファイオナ』<sup>ハイロウ</sup>

その中でも、人間やアンドロイドが住む区画の一角に、その建物は建っていた。

『アルファアー・ワイズ記念博物館』

白の世界で最も名高いと言っても過言ではない科学者の功績を遺すために建てられた博物館である。天才的な発明の数々や、様々な偉業。このコロニーに生まれた者ならば、10歳にもなつてこの場所に来たことがない者は1人とて存在しないだろう。

4人の少女と1人の男性が、その内部、アルファアー・ワイズの肖像画の前に立っていた。横の説明によれば、彼は世界接続を目前に、何者かに殺害されたらしい。若くしての死であった。

「なんだか、親しみやすそうな人だなあ」

明るい茶色の髪の少女が言った。

「そうかしら？ 子供っぽいつて言うんじゃないの？」

頭の上から猫の耳が生えている少女が言った。

「それを親しみやすいつて言うんですよ」

頭の上に光の輪を浮かべ、背中に白い羽が生えた少女が言った。

「そだよ。アルファアー様をバカにしちゃいけないんだよ！ ほら！」

額にバイザーをかけ、右腕が機械になつている少女が言った。

その少女が、隣りのスペースに置かれたものを指さした。

巨大な戦闘機。一見普通のそれと同じに見えるが、これこそが彼の最大級の偉業。かつてこの世界の統治者が暴走した時、それを真正面から止めたもの。ただの戦闘機に見えて、その実とんでもない力を秘めた超科学の結晶体。これの呼び方は多々ある。《破滅を撒く船》《超戦闘機》《殺戮者》など。だが、最も有名で且つ、他の名を寄せ付けなない名がある。

彼の親友により戴いた名を、《<sup>ヒリーヴ・オブ・アルファアー</sup>アルファアーの信念号》という。

暴走から立ち直った統治者は、彼に最大級の賛辞を送り、この博物館は建てられた。

「これ……まだ動くの？」

「E・G・M・A. を止めた時に壊れたって書いてあるわよ」

「この鋼の塊はそんなに凄いものなのですか？」

「ちよー凄いや！　なんてったって、E・G・M・A. 様を止めたんだからね！」

そんな少女らを見守る男性は、

「お前たちも順調に歩けるようになって来たな。復帰も近いだろう」

と4人を気遣って言ったが、彼女らは反発した。

「でも、体力は落ちてる。もう少しリハビリしたいわ。ねえ、みんな」

後ろで3人が頷くと、彼は困ったように頭を掻いた。

「つたく、彼も苦しんでるんだぞ。僕だって、彼に隠し続けるのは心苦しい。っと、そういうえば、今日はこの間、彼がやったバトルの映像を持ってきたんだ」

「本当!?　あの子たち、大丈夫だった？」

「ああ。今回はカレンも出たぞ」

「カレンが？　なら安心だけど……」

その言葉に、4人の少女は色めき立ったが、ここが博物館の中だと思出し、すぐに落ち着きを取り戻した。

「病院に戻ったら見るわ。ありがとう、デルタさん」

セーレ・メイデンは落ち着いて言った。

「でも、今はもう少し歩きたいです。こんな情けない姿、彼には見せたくないのです」

プリエは柔らかに微笑みながら言った。

「そだね。私ももつとこの腕に慣れておきたいな」

バイタルコードΩ23ミミはにこやかに言った。

最後に、

「……春樹くん、大丈夫かな。早く会いたいな」

前島美波は、明るく笑って言った。

そんな4人を、デルタは優しく見守っていた。

彼女らが青蘭を離れて、既に半年が経っている。

## 《相克》

青蘭島北西部の経済・行政地区の一角に所在するビルに、城海斗きづきかいとは足を運んでいた。周りの雰囲気とエントランスの内装の高級さからして、一般人が入れそうなビルではなかった。

彼はカウンターに向かうと、バッグの中から鍵を取り出した。それを専用の機械に通した係員は、『《特定の人物》を呼べ』という見たこともない表示に戸惑う様子を見せた。

ここは『青蘭金庫ビル』である。特別に許可を受けた強力且つ排他的な結界がいくつも重ね張りされ、不法侵入者を決して許すことがないここには、巨額の資産や数多くの価値ある品々が収められている。「お待ちせいたしました、城様」

「ありがとうございます、結城さん」

呼ばれて出てきたのは、柔和そうな顔立ちの初老の男性だった。この青蘭金庫ビルの従業員の中でも最も偉い人物——理事長である。

海斗は結城に従い、そばにある一般用のエレベーターではなく、狭い通路を入った裏にある従業員専用のエレベーターに乗った。結城は階数ボタンの下にある鍵穴に、先ほど海斗が出した鍵を差し込む。すると、エレベーターは自動的に下へと向かい始めた。

「まさか、もう引取りに来るとは思わなかった。なにか予感があるのかな？」

結城は突然砕けた口調になり、それでも穏やかな口調で海斗へ訊ねた。海斗は少し考えてから、落ちついて声を返した。

「俺も、まさかこんなに早くだとは。ただ、予感というよりは……予見が出ている」

「予見……と言うと、あのプロスペキア家のご令嬢が？」

「そう。しかも、タイミングが悪い。どうやら刻は、世界接続ワールド・コネクト20周年祭の周辺期間で訪れるのだとか」

「それはまた……早いな」

「記憶している内容によれば、もう少しで青蘭諸島にいるほとんどのN.E.X.T.ネクスの脳に影響を与え始めるはずだ。夢という形で」



「クレア様の予見はその前触れだと？」

「おそろくな。そうでなくとも、これから世界接続20周年祭で忙しくなる。その前に、できれば回収しておきたかったんだ。魔女王や女神、E. G. M. A. とともに先に協議しておくに越したことはない」

「そうだな。備えあれば憂いなし、というもの」

「……そもそも、アイが現れた時から警戒しておくべきだった。彼女がこの世界に落ちたのが今年の1月。思ったよりも、近付いていたのかも知れない」

「……しかし、腑に落ちないのは、此方こちらから彼方あちらへは簡単に滑り落ちてしまうということだな。ともあれ……鶴がちゃんと情報を集めていてくれれば、心配事はぐっと減る」

「鶴は、大丈夫だろうか」

「彼のことだ。危うい場所も口先八丁で切り抜けているだろうさ」

そうこうしていると、今までずっと動き続けていたエレベーターがようやく止まった。扉が開くと、そこは暗い洞窟の中だった。その突き当たりに、金属製の扉がある。

「鍵を」

「では、いつてらっしやいませ」

「似合ってるよ、その口調」

「ありがとう」

2人は軽口を言い合い、鍵を受け取った海斗はその扉を開いた。3重の自動ドアが開き、その中へ入ると、ドアは再びその口を閉ざした。

そこは、一面真っ白な空間だった。今入ってきた扉と、その真向かい、海斗の正面にも、また扉がある。

《チェックを開始いたします。チェック項目は13点です。尚、1つでも当てはまらない場合、即座に警報が鳴りますのでご注意ください  
い》

無機質な女性の声のアナウンスと共に、チェックが始まった。これには4つの世界全ての技術が用いられている。指紋、網膜、手のひらの静脈などという青の世界で使用されている生体認証、黒の世界の技術を用いた魔力の質や構成魔素の認証、赤の世界の技術を用いた靈魂

形状及び思念波の認証、それら全てを白の世界の技術で超高精度で検査する。

《13点、認証されました。おかえりなさいませ、城海斗様》

無機質なアナウンスがまた鳴り、海斗の正面の扉が開いた。非常に分厚い金属の扉の向こうは、また金属の扉。それが開くとまた扉。今度は5重である。先ほどの入口の扉を含め、全ての扉には異なる、それも強力極まる結界が掛けられている。はっきり言って、この先にあるものを無許可で手に入れることは、黒の世界の魔王でも、赤の世界の女神でも不可能と断言できた。この部屋に掛けられている結界さえ、青蘭の法で言えば違法レベルの強力なものである。

そして、その過剰すぎる防護の先に保管されていたものは――  
テーブルの上に乗った、1冊の本だった。

擦れた痕だらけの古ぼけた表紙に、中の紙も黄ばんでいる、日記帳程度の大きさのみすぼらしい本だ。

海斗はその本を手にとると、中身をパラパラとめくり、それからカバンにしまった。

「忙しくなるな」

彼はそのまま踵を返し、部屋を後にした。

その表紙には、掠れた5つの星が描かれていた。

右に黒、上に赤、左に白、下に小さな緑。

そして、中央に大きな青。

【幕間2】 Intro Summer

1話 ルクスとお揃いぬいぐるみ

休日。特にやることのない日。そんな日は、太陽が昇っても寝ているのが至福だ。

神城春樹はそう考える。カーテンの隙間から陽の光が差し込んできても、今日は寝ててもいいんだと思うと、布団の心地よさが格段にアップする気がする。だが、あと5分で起きなきゃいけないと思っても、布団の心地よさは上がる。結局のところ、寝ているのが好きなのかもしれない。

と考えながら、カーテンの隙間から漏れる太陽光でぼんやりと照らされた天井を眺めながら、もう一眠りすることにした。携帯で時間を見ると、まだ6時半である。十分二度寝できる時間帯だ。流石に午後まで寝ていると、母親がそれを知ったら怒るし悲しむので、大体9時には起きるが。

もう6月になる。6月はこれといった祝日・祭日がないため、基本的にはどの週も土日しか休みがない。と思えば、ただの土曜日でも貴重に感じられるから不思議だ。

その6月の、やや夏の香りを含み始めた風が窓から優しく吹き込むのが好きだった。まだ涼しい風が快適な睡眠を約束してくれる。ああ、なんたる幸福。寝ているだけで幸福だとは、自分って結構コストパフォーマンスがいいんじゃないかと思う春樹である。

そうしてまどろみに落ちていく最中、何か音が聞こえた気がしたが、そんなことはどうでもいい。もう少し寝るのだ。少なくともあと2時間半は――。

「あ、きやああつー！」

――と、そこに響き渡る悲鳴。春樹は一人暮らしである。同居人がいない。女の子の悲鳴が聞こえるなんておかしい。

流石の春樹もこれには飛び起きて、声が出た方へと走っていった。たどり着いたのは玄関。そこには……

傘立てに躓いてすっ転んだ、美海がいた。

「……美海」

「……ひゃ、ひゃい」

「……とりあえず、警察呼ぶわ」

「やめてえええええ！」

今日は、もう寝ていられないようだ。

……………

「言えばドア開けてやるから！　なんで窓から入ってくるんだよ！」

「……だって開いてたんだもん」

「そもそも飛んで来るのがおかしいだろ！」

「うう、ごめんなさい……」

テーブルを挟んで美海と向き合った春樹は、なんで朝っぱらから説教垂れなきやいけないんだと思いつながら、説教を垂れていた。美海は正座でうなだれている。

朝起きてヒマだった彼女は、エクシードで飛行しながら春樹の家のベランダまでたどり着き、ちょうど窓が開いていたので入ってきたらしい。普通に不法侵入である。

「あのなー、そうやってエクシードをホイホイ使っていると危ないし、もし他の家だったらマジで通報されるぞ。そもそも——」

と、できれば教師に投げっぱなしにしたいレベルの説教を始めようとする、ぐう、と鳴った。美海の腹が。

「あっ」

恥ずかしそうにお腹を押さえる美海。その仕草がやたらと可愛いので、春樹は思わず説教を止めてしまった。

「朝ごはんは？」

「寮の朝ごはん、7時半から……」

「じゃあ、なんも食ってないのな。それでエクシード使ったから……」  
「……お腹すいた」

美海は、えへへくと笑って頭を掻いた。どうしてこの後輩は、仕草がいちいち可愛らしいのだろう。

確かに、春樹も腹が減っていた。無駄に体力を使ったせいで。怒る

のにも体力がいるものだ。

なんかもう、面倒になったので、

「じゃあ、もう窓から入ってこない?」

「入りません!」

「誓うな?」

「誓います!」

「よし、じゃあ朝ごはん用意してやるから待ってろ」

「はあ〜い」

と美海を甘やかしてしまふ春樹であった。

.....

「わあっ! は、春樹くん!」

「なんだ、そんな変な声上げて」

気分転換のために寝間着から部屋着に着替えようとすると、美海が手のひらで目を覆い.....その上で指の隙間から春樹を見ていた。

「き、着替えるの?」

「おう。なんか問題ある?」

「な、ないこともないような、でもあるといえばあるような.....」

なぜかはつきりしない美海。対する春樹は、よく理由がわからな  
い。確かに立場が逆だったら、つまり女の子の着替えを目の前にした  
ら、男は許可なくガン見などできない（少なくとも春樹は）が、今は  
男の着替えを女の子の前に行っている。例えば裸になるなら、それは当  
然恥ずかしいが、今はシャツとズボンを取り替えるだけである。それ  
なら別に大したことはない、というのが春樹の考えであり。

「逆ならまだしも、男の着替えなんか見ても別にどうってこと無いだ  
ろ?」

と思った通りのことを言うと、春樹はシャツを脱いで上半身裸にな  
り、「部屋着、部屋着、つと.....」とクローゼットを漁り始めた。視線  
を感じたので後ろを向いてみると、なぜか美海がこちらを向いてい  
た。相変わらず指の隙間から凝視している。心なしか、息も荒くなっ  
ているような。

「.....そんなに見たいの?」

「え、ええっ!? み、見ていいの……?」

「別に減るもん無いし。それに、興奮なんてしないだろ? 男の着替えなんかで」

そう言いながら取り出したシャツをベッドに放った。それからズボンを探していると、

「……す、するよ。興奮……」

「え? 何か言った?」

「な、なんにも!」

「そうか」

「……き、鍛えてるのかなあ……」

「なんだよ美海。さつきからよく聞こえないよ?」

「な、何も言ってますん!」

……………カシャ。

「写真撮った?」

「と、撮ってないよ!」

「嘘つけ、背中に携帯隠しただろ。何に使うんだよ」

「え? えーと、そのお……あの……」

「まあ、バラまかなきゃ何でもいいけどさ」

春樹はズボンを取り出すと、そのまま着替えを続けた。だが、美海がずっと見ているので、少しこそばゆい。

そして残念ながら、自分の着替え写真が（大体は冬吾のオマケとして）女の子たちの間で出回っていることは、既に認知している春樹であった。

——アレで何してるんだらうな?」

……………

作ってやるとは言ったものの、これから大掛かりなものを作るのは普通に無理だし、何より面倒なので、朝食は目玉焼きを振舞った。母親直伝の味噌汁付きで。

この味噌汁がかなり気に入って貰えたらしい。母の味とは偉大なものである。

「このお味噌、美味しいね！」

「小春さんには負けるでしょ」

「え？ そんなことないよー」

「お世辞が上手いなあ」

「……お世辞じゃないもん。美味しいもん」

謙遜したら拗ねられたので、好意は素直に受け取っておくことにした。

食後になると彼女が「食器洗うよ！」と言ってきたが、おつちよこちよいな彼女に食器を割られそうな上、そもそも春樹は食洗機を持っていたため、それは断った。どうにも不服そうな美海。押しかけたから、多少の引け目があるのだろうか。

とはいえ、

「どうする？ まだ外行くにも早いし、ゲームでもする？」  
「するー！」

と、ゲームに素早く食いついたわけだが。こういう、自分に素直なところも可愛らしくて、つい甘やかしてしまう。が、こんなに素直で可愛い後輩に慕われていたら、甘やかしてしまうのは男として必然だろう。

それはそれとして、ゲームは真剣である。

「じゃあ、負けた方は買った方にクレープ奢りね！ トッピングマシンでー！」

「口を開けばクレープばっかだなお前……」

クレープ大好き少女こと美海と外出した後のことを決めつつ、真剣勝負スタート。

「ちよ、お前結構上手くね？」

「いっつも葵ちゃんと勝負してるからね！」

「女の子ってゲーム下手だと思ってたわ」

「偏見だね！ って、あっ！ ズルい！ そんな技知らないもん！」

「こーいうところは女の子だなー」

と隠しコマンドまで大人気なく使う春樹と、それでも尚食い下がる美海。隣同士でやっており、美海がかなり身体を動かすので、よくぶ

つかってきた。その上、

「えい！」

「おま、リアル攻撃は無しだろ！」

と脇腹を突っついてきたり、拳句の果てに、

「ふう、特等席ゲット〜！」

「み、美海お前な！ 頭が邪魔で見えない！」

「へへ〜ん、戦略です〜！」

胡座あぐらをかいた春樹の足の上に、美海のお尻がぽすつと飛び込んできた。ゲーム中でなければ大いに赤面していただろうが、生憎今は真剣勝負中。コントローラーの操作を背中で妨害してきたため、仕方なく彼女の正面に手を回した。傍から見れば彼女を後ろから抱き抱えるような形になっているが、特にそれには気付かなかった。

そして、

「うわーん、負けたー！」

なんとか春樹の勝利。美海はコントローラーを投げ出して全身を後ろ——すなわち春樹——にもたれさせた。春樹はそんな美海の頭を撫でて、

「はい、クレープ奢りね。言いだしっぺお前だし」

「勝てると思ったのに……」

「そりゃ、こんな番外戦術使えば勝てるだろうよ——」

と言ったところで、ようやく自分らがどういう体勢なのか気付いた春樹。

男の脚の間に女が座っていて、女は身体を男に預け、男は腕を女の前に回して——

まるで恋人同士である。

一気に顔が熱くなるが、美海はどうやら気付いていないらしい。というより、彼女は春樹とのスキンシップを好むので、これもその一環なのかもしれない。今も、春樹が頭を撫でているのをいいことに、まるで猫のように頭を彼の胸に摺り寄せている。あざとい。実にあざといが、打算無しでこれをやってくるのが美海の恐ろしいところである。



そして、そんな彼女に、決して性的ではない暖かさを覚えているのも、また事実だった。

「……なんてな。別にいいよ、奢んなくて」

「でも、私が言いだしっぺだし……」

「じゃあ、トッピング1個追加してもらおうかな。これでいい？」

「いいの？」

「女の子に奢らせたなら、なんか男が廃る気がして」

そう言うと、美海は殊更嬉しそうに春樹に擦り付いた。本当に甘えている猫のようだ。その仕草も殺人的に可愛い。それに暖かいし柔らかい。本当にズルい後輩である。

そんな美海が、ふと窓の方を向いた瞬間、あっ、と声を上げた。

「どしたの？」

「あ、あれ！ あの子！」

何かと思つてそちらを見ると、ベランダの落下防止用の柵に、2匹の《何か》が止まって、じゃれあっていた。

鳥ではない。シルエットのにはネコに近い。だが、耳はウサギのように伸びていて、何よりも特徴的なのが、背中から鳥のような羽が生えている。全身が純白の毛に覆われ、眼は海のような青。そして、額に青い宝石のようなものが見えた。

「ああ、ルクス？」

「し、知ってるの？」

「おう、たまに見かけるよ」

彼らの名前は《ルクス》という。

青蘭諸島にのみ生息する霊獣である。基本的には森の中に多く棲んでいるが、こうして街中まで飛んでくることが珍しくない。春樹は青蘭島に住んで3年間で経つが、時々こうしてベランダにいるのを見かける。流石に喧騒の商業地区や港湾地区にはあまり来ないが、学園特区の中でも静かな場所——例えば小さな林の中など——で見かけたこともあった。見た目が非常に愛くるしいため、見れたらラッキーマシ的な、青蘭のマスコットのような存在となっている。実際、彼らを模したぬいぐるみやキーホルダーは、商業地区でそれなりに売られてい

た。

そして、彼らは非常に興味深い特徴を幾つか持っている。例えば、「たまに寮のベランダにもいるんだよね。すぐ逃げちゃうけど。写真撮って沙織ちゃんに送ろつと。……あれ？ 写らない……」

まず、どういう原理かは知らないが、彼らは写真に写らない。そのため、正式な記録がスケッチしか存在していない。

次に、

「でも可愛いよねー。いつもは部屋の中をじっと見てたりするんだけど」

と美海がベッドに登って窓にへばりつくと、それに気付いた2匹のルクスは慌てて飛び立ち、宙へと掻き消えた。

「あ、やっぱり消えちゃった……」

「しよがないよ。ルクスって超臆病だから」

異常なまでの危機察知能力を備えており、少しでも危険を感じると瞬く間に消えてしまう。消える原因については、研究によれば「霊的存在として、実体化を解いている」とのことである。春樹が聞いてもピンと来ないし、そのことを美海に話してみてもよく分かっていないようだった。

「ねえ春樹くん、あの子たちって何者なの？ もふもふしたいんだけど……」

「んー、青蘭の守り神の遣いっていうのをよく聞くけど」

「へえ、じゃありがたい存在なんだね！」

「そだね。でも俺も、あんなふうは無警戒なのは初めて見たよ」

美海の言うとおり、大体ルクスを見かけるとき、彼らは部屋の中をじっと伺っている。そして、春樹が窓に近づくだけですぐに飛び立ち、消えてしまう。2匹でじゃれあっているところを見るのは初めてだった。

そして何よりも曰くつきの逸話がある。

「あおえさん青枝山の山頂には、ルクスの親分みたいなのが棲んでるんだってさ。しかも、すごく大きいらしい」

「えー、見てみたい！ 登ろう青江山！」

「——つて言う奴が多かったんだろ。うな。一般人は登っちゃいけないんだよね。登るとしても、青蘭神社くらいまで」

「そんなあ。おつきなもふもふ……」

残念そうな美海だが、春樹だつて話を聞いた時から確かにルクスの親分を見てみたいと思つている。全長数メートルと聞いたことがあるが、もしそんなに大きければ、美海ではないがもふもふしたくなるだろう。

「ま、今後ルクスを見かけたら、追いかけておくとしておくのがいいんじゃない？」

「そだね。怖がらせちゃ悪いし。もふもふするなら猫カフェで足りるか！」

「そのうちまたみんなで行こうな」

「うん！」

……

「……………」

「なにキョロキョロしてんの？」

「ルクスちゃん、どつかにいないかなーって」

「ここら辺りにはあまり飛んでこないんじゃない？」

10時を過ぎて太陽が天頂に近付く。春樹たちは商業地区への道を歩いてきた。徐々に賑やかになっていく感覚は好きだが、臆病極まりないルクスらは、当然ながらそれを好まない。

とはいえ、

「あつ、いた！」

「マジ？ どこどこ？」

「ほら、あそこ、屋根の上」

「ホントだ。今日はラッキーガールだなお前」

「えへへー」

注意してみると、割とルクスはそのら辺に居ることが分かった。屋根の上とか、とにかく高い所からその透き通った青い宝石のような眼でこちらをじっと伺っている。ただ、明るいところにいると妙に見えるづらい上、見つかる慌てて消えてしまう。

そして、商業地区に完全に入ると、ルクスは全くいなくなってしまう。

「むく、ここらにはいないのかなあ」

「うるさいの嫌いだしね……」

広場のベンチに座り、約束通りトツピングを1個追加してもらったクレープを食べながら話す。普段はあまりクレープは食べないが、美海と一緒にいると大抵彼女が食べたがるので、春樹も自然とそれに付き合っている。その間も、美海は辺りを見回している。

「そんなに気になる？」

「うーん、でも今日の私、ラッキーガールだし。いないかなーって」

「ラッキーにも限度があるだろ。そういえば……」

「なに？」

春樹は、少し前のことを思い出した。

「青蘭神社には、ルクスが結構いること多いよ。一応あそこも森の中だし。この前行った時、1匹見つけたよ」

「ホント!? 行く行く!」

即答である。残ったクレープを一気に平らげた美海は、目をキラキラさせながら立ち上がった。美海は非常に行動力に溢れた子だ。そんな無邪気で活発なところはとても可愛いと思うが、一緒にいると、その後に結構疲れているのは内緒である。

「まったく、ちよつと落ち着けよな」

「う、ごめんなさい」

「まあ、可愛いからいいけどさ」

「うえっ!?!」

美海が変な声を出した。急いで食べたクレープが逆流してきたのかと思っただけ心配したが、そうではないらしい。逆に、デリカシーがない! と怒られてしまった。確かに、女の子に対していきなり「吐きそうなの」とか聞くのはデリカシーに欠けるよなど反省。それにしても、今日の美海はどことなく変だ。

……………

境内から見る青蘭神社は、生い茂るの隙間から木漏れ日が差し込

み、夏が一足先に来たかのような光景だった。

「ルクス？ 今日は見えてないわよ」

休日になると実家である青蘭神社を手伝いに来ている神風千鳥は、にべなく言った。

「そんなあ」

「あんまり落ち込まないの。ルクスなんて、それこそ見れたらラツキーな感じの生き物なんだから」

「でも、今日は3匹も見つけたもん……」

「じゃあそれでいいじゃない」

がつくりとうなだれる美海を千鳥が慰めている。

「ていうか美海、あんた朝っぱらから寮を勝手に抜け出したでしょ。小春さん心配してたよ」

「一応電話はしたんですけど……」

「あと、沙織ちゃんも超心配してたわ。『起きたら美海ちゃんがないの！ どうしよう！』って」

「あ……あとで謝らないと……」

「で、春樹んちに窓から入ったと。流石にやばくない？」

「反省してます……」

ここに来てもまた説教を受けている美海である。なんとも不憫だが、残念ながら自業自得だ。

「そんなにルクスが好きなら、ぬいぐるみでも買えば？ 下で売ってるでしょ」

「欲しい！ でも、あの如何にもすべすべで超滑らかそうなルクスちゃん本人も撫でてみたい……」

「そんなに欲張らない。どうせルクスに触ったことある人なんて1人もいないんだから」

「その第一人者になりたいなあ」

「将来ルクスの研究でもしたら？ ルクスが写るカメラ作ったら大発明かもよ」

「うう、研究……」

頭があまりよくない美海にとって『研究』とは、耳に痛い単語だろ

う。

そんな千鳥と美海をやりとりを少し離れたところで聞きながら、新緑の森を満喫する春樹であった。

……………

再び商業地区に戻ってきた春樹と美海は、ぬいぐるみが多く売っているショップに足を運んだ。春樹一人ならまず入らないようなファッションシーな内装にとぬいぐるみたちに目がチカチカする。

ぬいぐるみといってもサイズは様々で、両手に乗る小さなサイズから1メートル以上もある巨大なものまであった。

「いいなあ、これ」

と今美海が見惚れているのは、そのどでかい奴だった。現実のルクスは猫レベルの大きさだが、女子にはこういうビッグサイズなぬいぐるみも需要があるらしい。

そして、その足元を見た美海は、げつ、と声を上げた。視線の先――  
―値札には、

『?12000 (税別)』

と書かれていた。高校生がポンと出せるお金では決してなかった。

「いいなあ、これ……………すべすべ……………」

「売り物なんだからあんまり触るなって」

ルクスのぬいぐるみは人気だからか、それともすべすべの材質がいからか、サイズに対して値段がやたらと高い。小さいのですら3000円はした。

悲しそうな美海を見るのが辛かった春樹は、ひとつの提案をした。

「ゲーセンのプライズにあるかもな」

「でも、取るのにいくらかかるんだろう」

12000円(税別)の衝撃から立ち直れていない美海は、暗い表情のままだったが、その背中を春樹は優しく叩いて、

「任せろ。今日の俺にはラッキーガールが付いてるからな」

と言った。それを聞いた美海はぱあっと明るい表情になって、うん、と答えた。

……………

ゲームセンターから出た時には、既に日が傾いていた。思ったより熱中してしまったようだ。

結局、3500円も散財した。αドライバーである春樹は学園からお小遣いを貰えるが、だからといって際限なく使ってもいいわけではない。

だが、

「まさかもう1個くつついてくるとは」

「よかったね!」

ゲームセンターのクレイゲームコーナーに案の定あったルクスのぬいぐるみ。たまたまタグが絡まっていたからか、取るのには時間(とお金)が掛かったが、奇跡的に2個とも落ちてくれた。質こそプライズなので、ぬいぐるみショップに売っていたものには劣るものの、大きさは70センチ程度とかなり大きなものをゲットできた。抱き枕とかに使用するなら十分だろう。

「ありがとう、春樹くん! その、お金……払わないと」

「いいって。俺も楽しめたし、コツとか結構掴めたよ」

アクリルの向こう側で転がるぬいぐるみにいちいちリアクションしていた思い出を語らう2人は、大きなぬいぐるみの入った袋を、それぞれ1つずつ持っていた。

「寮まで送ろうか?」

「大丈夫! 近いから」

春樹の住むマンションの前で別れの挨拶を交わす。春樹は手に持っていた袋を美海に渡した。

「え? これ……」

「俺が持ってもしょうがないだろ。寮の誰かにあげな」

「……むう」

正直に言えば、春樹はこのぬいぐるみを、悪くない、と思っていた。が、敬愛してくれる後輩の手前、見栄を張ったのだ。すると美海はふくれっ面になった。

「ダメ! 流石にダメ! これは春樹くんのもの!」

「でも……」

「いいのー！」

美海はそう言うと、春樹が渡した方の袋からぬいぐるみを取り出し、ニコニコ笑いながらぎゅーっと抱き締め、

「はい。私と春樹くん、お揃いだよー！」

それを春樹の胸に押し付けた。

押し付けられた春樹は、少しの間呆然としてから、美海の頭を撫でた。

「……お前はいい子だな、ホント」

「うんー！」

どうしてもこの後輩を甘やかしてしまう春樹。

だが、時々こうして甘やかしてもらうのは、嫌いではなかった。

………

その日の夜。パジャマ姿の美海がルクスのぬいぐるみを抱っこしている自撮り写真が届いた。とても嬉しそうで何よりだ。メールの本文を見ると、沙織と共有にしたらしい。

春樹は片手で携帯を操作してそのメールを見ながら、もう片手でぬいぐるみを撫でていた。肌触りは、それなりに良かった。春樹こそ、これを抱き枕にしようか考えていた。

ふと食器棚を見ると、かつて美海がプレゼントしてくれたマグカップが目に入った。取っ手が風のような形になっている、白地にスカイブルーの模様が入ったマグカップ。

あれをプレゼントされた時と、ぬいぐるみをプレゼントした今。確かに地続きの時で、でも春樹は成長している。

「……甘いのも、いいかもな」

ぽつりと呟いた春樹は、コーヒーを入れるために立ち上がった。



## 2話 セニアとラウラのはじめてさがし

おたがいーさま「おたがひー」【お互い様】

〔形動〕自分も相手も同じ立場や状況にあるさま。

「困った時はー」

……………

寮監の千夏が「お客様が来てるよ」と言うので寮の外に出ると、知らないアンドロイドが立っていた。

「初めましてなの。ラウラはラウラっていうの。マスターの命令で参りました。今日はよろしくなの」

「……あの、本日はマスターと出かける予定なのですが」

セニアは僅かに眉をひそめて、目の前のアンドロイドに言った。

柔らかかそうな金髪を伸ばした、柔和な顔立ちの少女だ。身長はあまり高くないものの、何故か胸は大きい。表情はぼんやりしているが、優しそうな雰囲気伝わってきた。

しかし、それはそれ。警戒は解かない。今日は、マスターと青蘭島の商業地区を見て回る予定なのだ。

「ーん、失礼します」

そこに、電話が掛かってきた。マスターからだ。携帯デバイスを通話モードにすると、彼の柔らかかな声がー申し訳なきを伴ってー流れてきた。どうやら、急遽学園に提出しなければならない書類ができってしまったらしく、その用意に追われているらしい。

目の前のアンドロイド、ラウラは、今日セニアと一緒にいられないマスターの代役、ということだった。

そういうことなら……とセニアは警戒を解き、ペこりとお辞儀をした。

「セニアです。よろしくお願ひします」

……………

時は三月中旬。太陽が昇れば春の陽気を感じられるが、それでもまだ寒い季節だ。セニアはシャツの上からクリーム色のコートを

羽織り、下は薄茶色のショートパンツにストッキング、足元は水色と白の縞模様のレッグウォーマーに茶色のシューズという格好である。一応ヘッドアーマーも付けている。

ラウラは青蘭島に八年前から滞在しているらしい。そして、彼女自身のマスターによって作られたのがさらにその六年前。ということは、彼女は十四歳のアンドロイドということで、セニアの姉機であるカレンより四つも年上ということになる。

記録に残る限り、その時代より少し前、生体パーツの研究が発展し始めた時代のアンドロイドは非常に特徴的で、現在のように人間とほとんど変わらない姿というわけではなく、どちらかといえば、生体パーツを各所に使用したロボットという印象がまだ強い。ラウラは、そんな時代を越え、現代アンドロイドの方向性が固まってきた中、制作の試行錯誤の過程で生まれたアンドロイドだった。そのため、現代アンドロイドとはバイタルコードの記述が異なっている。

実際のところ、彼女は生体使用率が八十六パーセントとかなり高く、元々は生体パーツのデータ取得のために製造された個体らしい。しかし、機械の部分が少ないためか、彼女の立ち居振る舞いはアンドロイドとは思えない柔らかさに満ち溢れていた。

なによりもセニアが困惑したのは、十四歳だというラウラの、その言動がセニアと大差なかった点だ（セニアは製造されてから五年が経つが、その内の四年間は休眠していたため、実質一歳児である）。

道端に生えていた黄色い花を見つけるなりしやがみこんで、

「あ、見て見てセニア。たんぽぽなの」

「この黄色い花は、たんぽぽというのですか」

セニアも俯ってしやがむと、ラウラは頬に手を当てて微笑んだ。

「そうなの。この季節になると、花が咲いて……もう少し経つと、白い綿毛になるの」

「綿毛?」

「そう、ふわふわしてるの。かわいいの。ふーって息を吹きかけると、ふわふわ飛んでいくの」

「飛ぶのですか?」

「そう、飛ぶのよ。綿毛になったら、また見に来るの」

説明の仕方もふわふわしているし、実際にセニアも、ラウラの話に出てきた『綿毛』とやらのイメージが掴めない。

とはいえ、その知識量は決して馬鹿にできない。この世界で活動しているアンドロイドの中でも、ラウラはかなりのベテランだ。というより最古参に近い。例え路傍の花にいちいち気を取られていようとも、この世界に関する知識は非常に多いのだ。特に『実際に体験した』という知識の量においては、他のアンドロイドの追隨を許さないレベルだろう。無邪気で好奇心が旺盛なため、なんでもやりたがるのだ。つまるところ彼女は、知識量の多いアンドロイドによく見られる特徴である『頭でっかち』ではないのだ。

今日は、居住地区から一回北上し、海岸線を西に進んで港湾地区へ。そこから南下して学園特区を通り、商業地区へとたどり着く予定だ。

「言うなれば今日は、セニアのはじめてさがしなの」

「はじめてさがし？」

「そうよ。セニアのはじめてを、いっぱい探すの。もう、一個見つけたの。セニア、記憶した？」

「はい。たんぽぽ……綿毛になったら、また見に来ます」

「よしよし。セニアはいい子なの」

ラウラは嬉しそうに微笑むと、セニアの頭を撫でた。青蘭島に来てからというもの、よく頭を撫でられるセニアだが、撫でる人が違えば、それぞれ撫で方も違うことを『学んで』いる。ラウラの撫で方は、マスターよりも柔らかかった。髪の流れに沿って優しく撫でられると、なんとなくこそばゆかった。

初めて会ったはずなのだが、なぜか初めての気がしない。セニアは言い知れない感情に囚われていた。

「じゃあ行こうね。セニア、海には行ったことあるの？」

「ない、です」

セニアがふるふると首を横に振ると、ラウラは殊更嬉しそうに微笑んだ。

「なら、はじめてがいっぱい見つかるの。楽しみね」

「はい」

ラウラはまたセニアの頭を撫でた。

……………

白い砂に足を下ろすと、さく、という音と共に、靴が砂に少し沈んだ。

「お、おお……」

「フィオナコロニーの中には海が無いから、セニアは砂浜も初めてのなのね」

「は、はい」

青蘭島の砂浜は非常にきめ細かい砂で出来ており、慣れないうちは歩くのにさえ手こずるだろう。

実質一歳児のセニアは、当然ながら不安定な足元に気を取られて、返事さえ疎かになっている。砂の上を歩くのはもちろん初めてだが、行動の基盤である足場が覚束無いと、こうも不安になるものか、と感じた。会話しようとしても、脚に意識が集中して上手く喋れない。

そんな様子を、ラウラは微笑んで見ていたが……

「セニア、はい」

「あ……」

自然な流れでラウラがセニアの手を取った。手を引かれると、不思議と歩きやすくなった気がした。

「砂の上は慎重に歩くの。でも、走るのも楽しいのよ?」

「は、走る」

「やってみる?」

「……はい」

セニアの返事を聞くと、ラウラは手を離し、さっさつ、と音を立てて走っていった。セニアとの距離は、三十メートルほど。

「走ってくるの〜!」

彼女の声が聞こえるが、頼る綱を失ったセニアに不安が戻ってくる。が、何事も体験。

足を勢いよく踏み出し――

「あや」

つま先が予想以上に沈み込んで、変な声が出た。前に偏った重心を慌てて戻そうと、つま先に力を入れて、体重を後ろに掛け、「おああ」

掛けすぎた。そのまま、すてーん、と尻餅をついた。お尻まで砂に沈み込んだので、それほど痛くはなかったが、びっくりして腰が抜けていた。

「まだ難しかった？」

駆け寄ってきたラウラが手を差し伸べながら聞いてきた。

「はい……難しいです」

その手を取ってなんとか立ち上がる。

「ラウラも最初は転んだの。コツがあるのよ」

「コツ、とはなんですか？」

「うーん。そうね……何かをする時のちよつとした工夫のようなものの、なの」

「なら、それを教えてください」

「ラウラが『教え』ることはできないの。コツは『学ぶ』ものなのね」  
セニアは、咄嗟にその差が理解できなかった。教えられた情報では、『教え』られ、それを『学ぶ』のだという。『教え』られなければ、どうやって『学ぶ』のだろう。データが提示されなければ、どうやってそれをメモリに書き込めというのだ。

それを聞いてみると、

「コツは、経験が『教え』てくれるの。何度も繰り返して経験して、一回ごとに『学ぶ』の。でもそれだけじゃなくて、全体を通して『学ぶ』のね」

「経験……」

ラウラの話は難しく、セニアは全てを正確に理解できたわけではなかった。だが、何が言いたかったのかは理解できた。

勢いよく走ろうとして、転びそうになって、転んだ。何がいけなかったのか、なぜ転んでしまったのかを分析する。その分析結果を蓄積する。分析は『学習』であり、そのデータこそが『コツ』になる。

そして、よくよく考えてみれば、セニアは確かに誰に教えられずと

も『学んで』いた事象がある。頭を撫でる人が違えば、それぞれ撫で方も違うということ。

今回は、それを自発的に行うだけのことだ。そういうふうと考えてみると、砂浜で走ることも簡単だ、と思えてきた。

「……もう一回、やります」

「お、やる気なの。じゃあ、コートを預かるの」

ラウラは微笑んで手を伸ばした。

結局十回くらい転んだが、終わった後はなぜか胸の内がすつきりしていた。

……………

セニアはきよきよと周囲を見回して、柔らかな金色の髪を探していた。

「困りました……」

端的に言えば、迷子になった。

場所は、青蘭学園特区を越え、商業地区の中のショッピングモールである。青蘭学園は既に春休みに入り、辺りは——七割くらいは女子高生で——賑わっている。だが、ラウラがどこにもいない。

原因としては、ラウラに連れられてモールを横切る最中、キラキラしたキャンディを売っている菓子屋に見惚れていたセニアが全面的に悪く、それを彼女自身も理解していたのだが。

これほどの『不安』を感じるのは初めてだった。先刻の砂浜など、その比ではなかった。

セニアのそばには、常に誰かがいた。白の世界、彼女が製造されたミハイルラボでは、作り手であるドクター・ミハイルか、そこで働く研究員が。この世界に来てからは、マスターや同じく白の世界出身のアンドロイド達、はたまたセニアと同じ青蘭学園中等部生の住む弥生寮でも、相部屋の少女、アビー・カミュオンと一緒にだった。独りきりになる機会は、ほとんどなかった。なにせ、彼女はまだ一歳児なのだから。なりたくとも、周囲が放っておかない。

しかし、事実として現在彼女は独りである。いろいろと見て回るの

に夢中で、ラウラの携帯端末と通信できるようにするのを忘れていたのが痛手だった。

通常の一歳児なら、それこそ泣き喚いて母親に「自分はここにいるよ」と合図を送るだろう。だが、セニアは生憎泣いたことがない。そもそも、そういうことをすると同行者が気づいてくれるということさえ、知らない。

分からない。何をしているのか、全く分からない。それは、想像したこともないような恐怖だった。

ウロウロと歩きながら——置いていかれてしまったら、その場でじっとしておけば、同行者が来た道を遡って探しに来てくれるかもしれない、ということも知らないのだ——あの柔らかな金色の髪がどこかで靡かないかと必死で探す。なぜか、目の下が熱くなったので、歯を食いしばった。

そんな彼女の、挙動不審な様子を見つけた少女がいた。

「ねえ君、どうしたの？」

驚いて振り向くと、可愛らしい少女が心配そうな表情で首を傾げていた。栗色の髪をツインテールに結った、どこことなく快活そうな雰囲気纏った少女だ。

誰かは知らないが、自分を独りきりからすくい上げてくれた。呆然としたセニアは歯を食いしばるのを忘れ、目尻から何か液体が漏れるのを感じた。

「あわわ、ちよ、泣かないで！　はい、ハンカチ」

「あ、ありがとうございます」

何故か声も震えていた。差し出されたハンカチでその液体を拭くと、不思議と不安も収まった。

「早く行こうよー」

「何してるの？」

そこに、もう2人の少女が現れた、綺麗な黒の髪に桃色の花の飾りを付けた、いかにも柔和そうな顔立ちの子と、一人目の少女よりも更に明るい茶色の髪にリボンを付けた、少し気の強そうな子。

「あのね、この子がなんか不安そうにしてたから……ねえ君、どうした

の？」

快活そうな少女がもう一度セニアに訊ねた。柔和そうな少女と気の強そうな少女も、涙を拭っていたセニアを見て、心配そうな表情になる。

「同行者と、はぐれてしまったのです」

セニアが三人を見上げてそう言うのと、まず快活そうな少女が、

「じゃあ一緒に探そう！」

と言い、続いて柔和そうな少女が、

「でも、ここ広いよね……四人で探すのは大変そう」

と心配を表し、最後に気の強そうな少女が、

「私はそれなりにここを知ってるから、特徴次第で見つけられるかも。最悪エクシードがあるし」

と冷静に考えながら言った。

当のセニアは、全く話に付いて行けていなかった。

「あ、あの」

「ん？ どうしたの？」

快活そうな少女が返事をした。セニアが疑問を投げかけると、

「今は、何の話をしているのですか？」

「何、って……貴女、迷子になっちゃったんでしょ？ 一緒に探してあげる」

気の強そうな少女が答え、

「困った時はお互い様だよ。大丈夫だからね」

柔和そうな少女が優しくセニアを慰めた。

困った時は、お互い様。

その言葉を、セニアは知らなかった。だがこの少女らは、見ず知らずのセニアを、そういう理屈で助けてくれるらしい。

『親切』という言葉知らないセニアは、この三人もラウラと同じで優しい存在なのだ、と端的に理解した。

そんなことを考えていると、気の強そうな少女が、いよいよ本格的にラウラを探すために情報を求めてきた。

「ねえ、その『同行者さん』の名前、教えてくれる？ あと、どんな外



見？」

「はい。ラウラ、というアンドロイドです。金色の髪に――」

「ラウラで金髪？　なんだ、知り合いじゃない。ちょっと待っててね。……あ、もしもしラウラ？　あのね、今、あんたとはぐれたっていう、真っ白い髪の毛の女の子と一緒にいるんだけど……」

拍子抜けするほどのあっさりさで、ラウラと連絡が取れてしまった。そして、あっという間にラウラがやってきた。

「セニア！　心配したの！　大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

ラウラの豊満な胸に抱きしめられながら、セニアはようやく本当に安心できた。

「もう、あんたはホントにぼーっとしてるんだから……」

「うう、これはラウラの落ち度なの。マスターに叱られちゃうの」

「でも、たまたま知り合いだったなんてスゴイねー！」

「さすが、アイドルなだけあるよー」

「べ、別にそんなんじゃないわ。でも知り合ったきっかけは、私が迷子になってたからなんだよね……」

「うふふ、懐かしいの」

「うるさいわね！　もうはぐれないように、しっかり手を繋いでおきなよっ。」

「うん、そうするの」

ラウラは一通り彼女らと挨拶を済ませると、「じゃあ行くのね、セニア」と、繋いだ手を引いた。しかし、セニアはそれに逆らった。

「ん？　どうしたの？」

セニアは、それには答えず、

「あの、ありがとうございました」

自分に協力してくれた三人の少女に向かって、頭を下げた。

顔を上げたとき、三人は優しく微笑んでいた。それから「もう迷子にならないでね」と告げ、談笑しながら去っていった。

「さあ、行きましよう」

そのセニアの頭を、ラウラが撫でた。

「ちゃんとお礼を言えて、偉いの」

「はい。お礼の仕方は、マスターに教わりました」

「それを実践できるセニアは、素晴らしいの」

ラウラはニコニコと笑ってセニアの頭を更に撫でた。

その後ラウラは、セニアから目を離して不安な思いをさせたお詫びに、アイスクリームを食べさせてくれた。

初めて食べる氷菓はびっくりするほど冷たくて、でも甘くて、セニアの好みの食べ物だった。

次にマスターにおねだりするの、これにしよう。

……………

その晩。セニアはドクター・ミハイルにつけると言われている絵日記に、ラウラと、自分を助けてくれた三人の少女の絵を描いた。

「困った時は、お互い様……」

「んー？ どしたのセニア？」

ソファに座った一学年上のアビーが、セニアには解読できない字で書かれた分厚い本と睨めっこしながら訊ねた。

「アビーとセニアも、困った時はお互い様、なのですか？」

「当たり前だよ。なに、なんか困ってるの？」

「そういうわけでは。でも……良い言葉だと思います」

セニアは絵日記のページの下の罫線の欄に、最後の一言を書き込んだ。

アビーよりも先に寝室へ行き、柔らかくて暖かい布団に潜り込むと、今日あったことを思い返した。

不安も恐怖もたくさん感じたが、この布団のように柔らかで暖かく包んでくれるものもたくさん感じた。『学ぶ』ということ、頭を撫でるラウラの手、不安な時に訪れた、三人の少女の声と笑顔。

「はじめて、たくさん見つかりました」

今日見つけた『はじめて』をマスターにどう話そうか、そんなことを考えると自然と楽しくなり、徐々にセニアの意識は深い眠りへと沈んでいった。

『いつかセニアも、こまっている人をたすけてあげられたら、しあわせです。』

### 3話 それぞれのしあわせ

時刻は午後7時を過ぎ、辺りはもうすっかり暗くなっていった。6月も中盤に差し掛かっている。太平洋上に浮かぶ青蘭島は梅雨前線の影響を受けないものの、ここ数日間雨の日が続いていた。これから暑くなってくると、今度は台風の驚異に曝されることになる。まったくもって陰鬱な気候が続いていた。

今日は朝から珍しく快晴だった癖に、昼頃からは結局、しとしとと雨が降り出していた。

そんな静かな雨に打たれる青蘭学園の剣道場に、1人の少女がいた。それなりに広い道場の片隅にだけ明かりを付けて、何か奇妙な箱の前で正座している。少女は艶やかな黒髪を侍のようにポニーテールにして、剣道着に剣道袴を着ていた。既に竹刀の素振りを終え、面や籠手、垂に胴といった防具は全て外され、彼女の横に竹刀と一緒に置かれている。その辺に放り投げられたタオルは、既に彼女の汗を吸ってびしょびしょだ。

少女は剣道部に所属する青蘭学園高等部の1年生だが、今日は部の活動が無い日だ。それでも彼女は時々ここにやってきては、自主トレーニングに励んでいる。だが、今彼女が励んでいるのは剣道のトレーニングだけではなかった。

正座する少女の目の前に置かれた、様々な紋様が刻まれた1辺1メートルほどの立方体の箱の中には、大量の砂が詰まっていた。

「よう……い……くぞう」

今まで目を閉じて瞑想していた少女はその両手の平を、意識と共に箱の中に敷き詰められた砂へと向ける。彼女がぐっと力を込めると、急に砂がざわめきだした。少女は意識を集中したままゆっくりと手を上に持ち上げていくと、ざわめいていた砂が彼女の手の動きに連なって上へと持ち上がり始める。だが、その動きはどこか鈍く、ぎこちない。未練たらしく重力にしがみついている。

少女の息が荒くなり始めた。集中するあまり眉間に皺が寄り、額には玉のような汗が浮かぶ。しかし彼女は尚も気を緩めない。前に突

き出していた手のひらを、徐々に合わせるように閉じていく。すると、柱のように立ち上っていた砂が1本の棒状へ収束していった。そのまま力を流し込み、棒状の砂から1本の棒へと変化――

「――ッ」

させていく途中で、張り詰めていた糸が遂に切れるが如く、息が途切れてしまった。少女が弾かれるように板張りの床に転がると、立ち昇っていた砂は一瞬にして崩れ、サラサラと音を立てて箱の中へと戻った。

少女は荒い息を吐きながら起き上がると、箱の中の砂を忌々しげな視線で睥んだ。今日失敗したのはこれで5回目。1時間ほど前から、チャレンジしては力を使い果たし、少し休憩してはまた挑戦しているが……毎回毎回、ロクに力が整わないまま挑戦しているため、何度も失敗するという悪循環に陥っている。

もったも、忌々しいのは自分自身だ。何時まで経っても進歩できない自分自身が、たまらなく恨めしい。

――今日は、もう止めようか……。

と、そこに、道場に入ってくる人影がいた。

「〆精が出るわね、葵ちゃん」

驚いて振り返った先には、背の高い1人の少女が立っていた。傘をさしても少し雨に濡れてしまったせいとか、たおやかに揺れる緩いウェーブのかかった髪にはしっとり水気が滲み、同じ女性の視点から見てもドキツとするような、艶かしい色香に満ちている。体つきもグラマラスで、整った顔立ちに浮かぶ表情も柔らか。非の打ち所がない。

1学年上のアウロラ・エオースという、赤の世界から来たお嬢様だった。剣道部のマネージャーをしている。

「あ、アウロラ先輩？」

御影葵はアウロラの方に向き直ると同時に、崩していた足を正座に戻した。それを見たアウロラは「そんな気を遣わなくていいわよ」と苦笑しながら靴を脱いで畳に上がると、葵のそばに近づいた。そして、葵の背後にある箱の中身を見るや、その顔に浮かぶ苦笑に僅かな

『心配』の色が刺した。

「エクシードの特訓？」

「は、はい。でもどうしてアウロラ先輩が……？」

アウロラは剣道部のマネージャーではあるが、活動のない日にわざわざここに来るのは不自然だ。葵が当然の疑問を投げかけると、アウロラは剣道場の外を指差して、

「ここの外、もう紫陽花が咲いているでしょう？」

「そうですね」

「先日までは咲いてなかったけれど、フローリアが、綺麗だったよーつて言うものだから。それを見に来てみたら、まだ明かりが点いている。それで、もしかしたら思って思ったの。急にお邪魔してごめんないね」

「ああ、それで……」

葵は納得したように頷いた。アウロラの友達に花から生まれた妖精・フローリアがいることは知っているし、実際に会ったこともある。それを除いて、そういうことに疎い葵でも、確かにここの外に咲いている紫陽花の青きたるや見事なものだと分かる。

「隣、いいかしら？」

「ええ、どうぞ」

葵は正座を崩して胡座をかきながら自分の隣を差した。少し無礼かもしれないが、葵の顔に浮かんでいる笑顔は、親しい友人に対するものだ。アウロラはその意図を汲み取って、彼女もまたイタズラっぽい笑顔を浮かべて葵の隣に座った。

もつとも、どちらの笑顔もすぐに消えてしまった。葵は先程までの恨めしげな表情に、一方のアウロラは心配の表情に変わった。優しい先輩はうつむき気味の後輩の背中を撫でて、そつと声を掛ける。

「特訓、あまり上手くいっていないのね」

「そう、です」

葵は言葉少なに返す。そんな彼女の頭を、アウロラはよしよしと撫でた。

「もしかして、焦ってるの？ だとしたら良くないわ。焦ったらどん

どん、自分を見失っちゃうわ。剣道も、エクシードも」

「……でも、私は、早く強くなりたくんです」

「どうして? ……なんて、聞くだけ野暮というものかしら?」

「もちろんです。私は弱いし、私には、勝ちたい奴がいますから」

葵は自嘲めいた響きでそう口に出す。アウロラは彼女の頭を撫でる手を止め、次いでポンポンと頭を叩いた。

「葵ちゃんは弱くないわ。こんなに頑張っているんだもの。弱いはずがないわ」

「それでも私は、未だにロクにエクシードが操れない自分が恨めしいです。彼女は……あの子はもう、操っているというのに」

「そうね……」

アウロラは葵に伸ばしていた手を引っ込めた。その顔には、優しい苦笑が浮かんでいる。

——あなたはこんなにも魅力的で、格好良くて、何よりも頑張っているのに。あなたは、自分の良いところに気付けていないのね。

彼女はその思いをどう伝えたものかと少し思索し、その末にこう言った。

「ね、葵ちゃん。私の前でエクシードを使ってみてくれないかしら?」  
「え!?! いやでも、私のエクシードはまだ人に見せられるようなものじゃ……!?!」

「大丈夫よ。私とあなただけの秘密。ね?」

アウロラは葵に顔をぐいっと近付けると、思わずドキドキしてしまうような艶かしい笑顔になった。対する葵は、うう、とか、あう、とか言いながら、渋々といった感じで砂の詰まった箱に向き直った。

「これ、ただの砂じゃないわね? 魔力が宿ってる」

「はい。アルスメル先生に用意してもらいました。私のエクシードが通りによくくなってるんです」

「なるほどねえ。それで、普段からこういうもので練習しておけば……」

「はい。他の物ではもっとやり易いはずですよ」

葵は正座に戻ると、深呼吸して背筋を伸ばし、先ほどと同じように手の平を前に突き出した。アウロラは、そんな葵の背中をそつと撫でる。

「焦ってはダメよ。気を張り詰めるのではなく、気持ち解き放って。絶対に出来るわ」

「……………はい」

葵はもう1度深呼吸をすると、両手に力を込めた。アウロラの優しいオーラに当てられたためだろうか。はたまた単に疲れから、適度に力が抜けているためか。先ほどよりもずっと優しく、そつと力を込めていく。口をすぼめて細く長く息を吐くように、途切れることなく力を注ぎ込む。すると砂は、さっきのようにざわめくのではなく、サラサラと躍るように動き出した。

今までは、力を込めすぎてすぐに力を使い果たしていたが、今回は違った。焦らずに、深く息を吸い込んで細く長く吐き出すというサイクルを繰り返して呼吸を安定させ、箱の中の砂全体に自分のエクシードを浸透させていく。それからゆつくりと突き出した両手を上へ持ち上げていくと、砂は先ほどとはまるで違う様子で葵の思い描いた通りの姿に収束していく。1本の棒の形をとり始める。

最後の締め。葵は手の平をゆつくりと合わせ、そこに力を注ぎ込み――棒状の砂から、1本の棒へと錬成する。

終わった、という感慨は無かった。成功したことが分かったのは、隣で息を呑んでいたアウロラが喜びの声を上げたからだ。

「すごい、ちゃんと棒になってるわ！ やったわね、葵ちゃん！」

「え？ は、はあ……………やった……………」

確かに、エクシードを切り上げても形が崩れない。成功だ。

不意に、ぐらりと視界が傾いた。この挑戦は今日で6回目。とても静かに力を吐き出していたが、気づかぬ内に力を使い果たしてしまっていたのだ。気付けば葵は、アウロラの膝に倒れ込んでいた。

「あ、葵ちゃん!? 大丈夫!？」

「は、はい……………でも、疲れました……………」

アウロラは喜びと心配が入り混じった表情で、ハンカチを取り出し



て葵の顔の汗を拭いていく。

「でも、よく頑張ったわね。えらいえらい」

「ありがとう、ごこぎいます……でも、目標は刃にすることなんですよね」

「そうなの？ でも、無理は禁物よ」

体に力が入らない葵は、アウロラの魅力的な柔らかさを持つ太ももに頭を預けたまま、目を閉じて深呼吸を繰り返した。

「ねえ、葵ちゃん。さつきも言ったけど、葵ちゃんは全く弱くなんかいわ。私、ずつとあなたを見てきたわ。葵ちゃんは一生懸命頑張ってる。その努力は、絶対にあなたを裏切らないわ。例え、今満足に結果が出なくても、いつか必ず実を結ぶ。そういう風にできてるの。だから焦る必要なんかはないの」

「……はい」

アウロラの優しい口調は、葵の胸にゆっくりと染み入るように彼女を満たしていった。焦る必要はない。その事實は、頑固者の葵にもはつきりと理解できた。今、アウロラが教えてくれたから。そのお陰で、エクシードを操り切ることが、まあ一応とはいえできたから。

「何よりも、一生懸命頑張っているあなたは、とっても格好いいわ」

「そういうのは俊太に言ってるべきなんじゃないですか？ でもまあ、ありがとうございます」

そこで一旦言葉を区切った葵は、小さく深呼吸して、再び口を開いた。

「……先輩。さつき私、勝ちたい奴がいっぱいいるって言いました。でも、ただ勝ちたいんじゃないんです」

「？」

葵は目を開けると、澄んだ水晶のようなアウロラの本目を見つめた。その瞳の奥の柔らかい光に囁きかけるように、己の心の裡を口に出していく。

「打ち負かしたいわけでも、勝ち越したいわけでもない。負けて、勝つて、また負けて、また勝つて。そういう風にしながら、みんなが強くなっていけたらいいなって、思うんです」

「……そうね。それはとても素敵な関係ね」

アウロラは変わらない口調で——しかし、ほんの少しの寂しさの滲む声で同意した。その声音に気づいたのか、葵は少し口元を挑戦的に釣り上げて、

「もちろん、アウロラ先輩ですよ。いつかバトルする機会があったら、その時は負けません」

そう言った。それを聞いたアウロラは、もう、とでも言いたげに苦笑した。

「あら、それなら私も負けないわ。私も頑張ってるんですからね。その時はいい勝負をしたいわ」

辺りは既に真っ暗だが、剣道場の明かりが外に漏れ、真っ青な紫陽花を柔らかく彩っている。

先輩と後輩であり、互いに親友でもある二人の少女の笑い声は、暗闇の中、雨音に優しく溶けていた。

「ああ、でもさっきの発言はちよつと撤回ですね」  
「？」

「私の兄だけには、是非とも勝ち越したいです」

#### 4話 御影葵は甘党である。

6月某日。

葵は、目の前のテーブルに置かれた、緩やかに湯気を立たせる焦げ茶色の液体にうつすら映った自分の瞳を見つめた。

「さあ、飲んで」

「うぐ……」

我ながら女子らしくない呻き声が出たという自覚はあったが、そんなことはどうでもよかった。

マグカップを取り上げ、何度も息を吹きかけて冷ましてから、そつと一口……ほんの一口だけ、その液体を口に含んだ。

苦い。

超苦い。

なので、なんとか喉に流し込んでどうにかした。だが口内の苦味は全然消えないので、たまらず横に用意しておいたグラスから水を飲んで、後味を消しにかかった。

「む……無理……っ」

「もう、だらしない。お兄さんが悲しんじゃう」

「べ、別にいいもん……!」

向かいに座っている樹理じゅりはやれやれと首を振った。悔しいが、流石にこればかりは好みの問題である。でもやっぱり悔しい。

御影葵は、コーヒーが大の苦手だった。

……

「大体、なんであんたが付いてくるのよ」

「お兄さんが、いいお豆があるから取りにおいでって言ってくれたから」

「はあ……甘いんだから」

数日前。

葵と樹理は、葵の兄の家へと向かっていた。葵は「たまには遊びに来て欲しい」と兄からメールを貰ったので仕方なく、本当に仕方なく

行ってやることにしていたのだが、樹理の方は明確な目的があるらしい。

(呼び出す口実くらい、考えておきなさいよね)

と心の中で叱責するのも馬鹿らしいが、やたらと気が利くくせにそういうところに鈍感なのは、昔から兄の数少ない欠点であった。

隣を歩く古谷樹理は、小さい少女だった。短く切り揃えられた髪と、丹精な顔立ち、それに薄く小柄な体躯は、精緻な人形を思わせる。そんな素体の良さを隠すかのごとく、明らかにぶかぶかなパーカーと、どう見ても男物のカーゴパンツを着用している。パンツの方はまだしも、パーカーは袖を持て余すレベルでぶかぶかだ。遠目からなら少年にも見えるだろう。服装のセンスが皆無なのか、はたまたこれを気に入っているのかは不明である。試しに聞いてみたところ、「これ？ いいでしょう」としか返ってこなかった。もつとも、今日の葵も白のワイシャツにデニムパンツを合わせている。彼女も彼女で男っぽい格好だが、こちらはただの私服の好みであった。

樹理は普段から無表情で口数も少なく、何を考えているのかよくわからないところもあるが、寂しがり屋なのは確かで、よく猫のようにスルリと誰かのそばに寄って行っては甘やかしてもらっている。そんなところも総合して、大いに不思議な少女だ。

そんな彼女は、ちよつとびつくりするほどのコーヒー好きである。自前のミルとサイフォンを持ってしているほどだ。こんなに可愛らしい見た目(服装は除く)なのに、よくあんなに苦いものを……と思う葵だったが、それもまた、人の好みであろう。

青蘭学園に国語の講師として勤務している葵の兄の家は、葵と樹理が住む満月寮と同じく、青蘭島の東居住区に位置している。それほど遠くはないが、だからといって頻繁に顔を出すかといえば、どうせ学校で会うんだし、と葵は敢えてそこに行くことはなかった。ところが、向こうが先に音を上げたので、仕方ないから行ってやろう、ということだった。生まれてこの方、あの兄に何かしらでも勝てたことはほぼ無いに等しかったが、今回は珍しく勝てた。

もちろん、楽しみだった。

兄の家は一軒家である。青蘭島はなんだかんだで土地が余っているので、地価がそこまで高くない。とはいえ、26歳で一戸建てを買うとは、彼がとんでもなく稼いでいる証拠だった。ただの講師でここまでお金が稼げるとは思えなかったが……。

インターホンを鳴らすと、「はい」という声の後、重い扉が開かれた。

「2人とも、いらつしやい。待ってたよ〜」

「はいはい、そういうのいいから」

「もう、葵ちゃんは冷たいなあ」

「お兄さん、こんにちは」

「こんにちは、樹理ちゃん。さあ、2人とも上がってね」

にこやかな表情で出てきたのは、葵の兄・御影凌雅<sup>みかげりょうが</sup>である。物腰が柔らかく、誰にでも優しい男で、11個も年が離れている葵は、この兄に甘やかされて育ってきた。年齢が大きく離れている上、性格は聖人なので、もちろんいじめられたこともない。どんなに口ではどうでもいい風を装っていても、彼に懐いているのは否定できなかった。それはそれとして、この兄は少々特殊な趣味を持っていた。

それが、今の彼の格好である。

まず、上半身に着ているのがクリーム色のVネックのカットソーだ。しかも、明らかに女性物である。下は黒か紺のガウチョパンツ……が普段なのだが、今日は真正銘、黒のアシメスカー<sup>左右非対称な</sup>トだ。その下に同じ色のズボンを穿いている。葵と同じく艶やかな長い黒髪も、いつもは背中側で緩く束ねるだけなのに、今日は頭の真後ろより若干左でひと纏め<sup>纏め</sup>にしていた。その上で、前髪はピンで右側に寄せている。最後に、本人は背がすらりと高く、メイクなど一切していないくせに役者のように整った美形の優男。

はつきり言って、女性にしか見えなかった。

凌雅の最大の欠点として、女装を好む、というものがあつた。講師として勤めている時は流石に抑えている（それでも中性的よりかは女性寄りに見える）が、今日の彼はまるきり女性だ。今の今まで知らなかったが、普段こんな格好で外を出歩いているのなら……表情には出

さなかつたが、葵はこつそり冷や汗をかいた。そして、こんな格好でも女子ウケがいい、というかそれも彼の性格の良さゆえだろう。

葵と樹理を合わせて、この場にいる3人の中で最も女性らしい格好をしているのが凌雅だった。そう考えると、結構複雑である。

「お兄さん、そのスカート可愛い」

「そう？ つい買っちゃったんだよね。ありがとう」

樹理は凌雅のことを「お兄さん」と呼ぶ。葵の兄だからお兄さんなのか、それとも本当に兄だと思っているのかは分からないが、仲良くなつたきつかけはコーヒーショップで出会ったかららしい。彼女は甘えん坊だからか、甘やかし屋な凌雅との相性は良く、学校でもよく甘えている。今も凌雅に頭を撫でてもらって、幸せそうに頬を緩ませていた。

彼の家は、とても清潔だった。フローリングは磨き上げられ、センスの良さを感じるインテリアの数々は整頓されている。テーブルの上には、皿に何やらおしゃれなクッキーが盛られている。

「クッキー焼いたんだ。葵ちゃん好きでしょ？ 樹理ちゃんもよかつたら食べてね」

それは女の子が言うセリフだろうと思つたが、彼がお菓子を作るのが好きで、小さい頃はよく彼の作ったものを食べていたのを覚えている葵は、それをひとつ手に取って口に運んだ。葵が大好きな、甘くて懐かしい味だった。

葵は甘党である。幼い頃から凌雅が作ってくれたお菓子を食べていたから、というのもあるが、単純に甘いものが好きなのである。クールで通っているから普段はそれほど表には出さないが、寮でお菓子の話をしていると結構話し込んでしまう。そういう点では、所属している剣道部のマネージャー・アウロラとは話が合う。時折、休日に彼女の食べ歩きに付き合うこともあった。

そして逆に、苦いものや辛いものは苦手だった。だから、

「はい、コーヒーですよ。あとでこれのお豆あげるからね」

この、コーヒーという苦いだけの液体が大の苦手であった。

しかし、凌雅が持ってきたコーヒーは樹理の分の1杯だけだった。

なにか嫌な予感を抱いた葵は……それがあつという間に的中してしまったのを知る。

「葵ちゃんのは、こっちなね。ブラックは飲めないから、ミルクとお砂糖たっぷりのカフェオレ。好きだったでしょ？」

「え、ええっ!？」

「葵、コーヒー、ブラックで飲めないの？」

樹理の冷たい視線。

普段はクールで通している葵が、ブラックコーヒーを飲めないなんて。

と如実に視線が語っているような。

とりあえず、そ、そんなことないわよと反論嘘をつこうとしたしようとしたが、さらにその前に、

「葵ちゃんったら、昔から苦いもの苦手なんだよね。コーヒーだけじゃなくてピーマンとかも……」

「ちよ、黙ってなさいバカ！」

凌雅はさらつと葵の秘密を暴露していった。このクール極まる（ように見える）葵、その実態はただの甘党？　だなんて格好が付かなすぎる。特にこの樹理の前では。

だが、下手に足掻くのはもつとみつともない気がした。それも、この樹理の前では特に。

「でも、寮のご飯でピーマンとか入っても、葵残さないよね？」

「さ、最近はどうでもないし」

観念してそう言うと、凌雅は嬉しそうに笑った。

「そうなんだ！　葵ちゃん、成長したね。昔の葵ちゃんは欠片でもピーマンが見えると、ものすごい真剣な表情になって全部選り分けて残しちゃうから、隠すのが大変だったのね」

「こ、これ以上変なこと言わないでよ！」

真つ赤になった葵は、顔から湯気を出しながら俯いてしまった。そんなところで真剣になってどうするんだ昔の私！　などと思っていたが後の——というか今の祭りだった。

それに、ピーマンとかなら別に最近は普通に食べられるようになった

たのは成長だと思う。幼い頃は、こんなもん一生食べない！ と意地を張っていたが、今では——あまり好まないとは言え——食べられる。

それでも、どうしても乗り越えられないものが1つだけあった。

それが、今日の前で湯気を緩やかに立たせている液体、コーヒー。

今は砂糖とミルクたっぷりで甘くなっているが、この苦いだけの液体をどうして人は好むのか、またなぜこんなものを飲めるのか、というのは、葵の中でも永遠の疑問の1つだ。甘党と同じく、苦党とかいうものも存在するのだろうか。何かの罰ゲームなのか。その理由がまるで理解できなかった。

凌雅を見ていれば、歳を重ねればそのうち飲むようになるのかなーと考えていたこともあったが、それは目の前の樹理に打ち砕かれた。聞けば、小学5年生くらいの頃にハマったらしい。はつきり言って味覚障害だと思うが、まあ違うのだろうか。

凌雅は、葵が物心着いた頃から既にコーヒーをブラックで飲んでいて。彼の真似を試してみたかった幼い頃の葵は試しに1回飲んでみたが、あまりの苦さに思わず泣いたレベルだった。それがきっかけで、凌雅は彼女にミルクと砂糖たっぷりの甘いカフェオレを飲ませてあげるようになったのだ。

今回のカフェオレも、一口含んでみると、豆が違うからか風味が異なるものの、葵好みの暖かい甘さだった。

それが何となく腹立たしかったのか、はたまた樹理が凌雅と仲良さそうに話しているのが気に食わなかったのか……自分でも分からなのまま、葵は終始むすつとしたままだった。

そして、凌雅が気を遣ってくれてもぶっきらぼうな返答しか出来ない自分が嫌になった。

……

それが嫌だったからこそ、葵は今こそ苦手克服の為に、樹理に協力を要請してコーヒートをブラックで飲めるようにしたかったのだが……。



「樹理。人間には、得手不得手があるんだ」

「言いだしつぺはあんたでしようが」

樹理は、葵が飲めないと判断したコーヒーを勝手に飲みながらすまし顔で返した。言いだしつぺのくせに泣き言を言ってしまうことは屈辱だったが、だからといって苦いだけの液体をコップ一杯飲むわけではなかった。

テーブルに突っ伏す葵を、頬杖を突いて眺める樹理は、しばらく黙った後、沈黙を破った。

「そもそも……どうして葵はコーヒーをブラックで飲むようになりたいの？ 別にいいじゃん。クールキャラのくせに甘党でも。私も好きだよ、甘いもの」

そう聞かれて、葵はすぐに返答できなかった。

もちろん、理由はある。でも、それがうまく纏まらなかった。素直になれない自分が嫌だから？ 樹理と凌雅の仲に嫉妬したから？ 何もかもお見通しなのが腹立たしいから？

認めたくはないが、どれも正解だった。だが、それだけではなかった。

頭の中で、凌雅の笑顔が浮かんだ。幼い頃から全く変わらない、葵を安心させたいという思いから来る笑顔。

不意に、先日アウロラと話したときの自分の言葉を思い出した。

『兄だけには、是非とも勝ち越したいです』

考えてみたところ、結局そこに行き着いてしまった。自分が兄に反抗したい理由なんて、結局それしかないのだ。

剣道で負け続けた。何もかも見通されている。ただそれが気に食わないだけなのだ。

裏を返せば、剣道が弱くて、何もかも見通されているような薄い自分が嫌なのだ。

葵はがばつと起き上がると、携帯を取り出し、兄に電話を掛けた。

『もしもし？ どうしたの葵ちゃん』

「今どこにいるの？」

『家だけど』

「じゃあコーヒー入れて待つてなさい。10分で行くわ」

『いいけど……』

「それから、ミルクも砂糖も抜きでね」

『えっ？ 葵ちゃん、それ飲めるの？』

それには返事をせずに通話を切った。それから樹理に、

「悪いわね、ちよつと出てくるわ」

「へえ、強気」

にやつと返されてしまった。どうやら樹理にさえ葵の考えはお見通しのようなだ。だが、今はどうでもよかった。

葵はパツと私服に着替えると、最低限の荷物を持って部屋を飛び出した。

……………

凌雅は、普段と何も変わらない様子で葵を出迎えた。急だったのに、髪は雑に纏められていたが、服装は女物ではなかった。中性的ではあったが。

「いらつしやい、葵ちゃん。また来てくれて嬉しいよ」

「お邪魔します」

リビングに入ると、葵の言ったとおり、テーブルの上でコーヒーが湯気を立てていた。黒に近い茶色。紛れもないブラックコーヒー。砂糖が入っていないとは言い切れなかったが。

「で、どうしたの葵ちゃん。ものすごい急だったけど。それに、コーヒーをブラックで入れろだなんて、らしくもない」

「いいの。見てなさい」

葵はそう啖呵を切ると、目の前のマグカップを口元へ持つていき、それに口を付けて、一口含んだ。

案の定だ。苦い。だが、意地でもそれを顔には出さない。頑張って飲み込む。口の中が空になると、また一口。また一口。幼い頃を思い出して泣きたくなるが、我慢する。我慢して、飲み干す。この男を打ち負かすのだ。もうブラックコーヒーを飲んで泣いていた御影葵ではないぞ。

何時間も経ったかと思うほどの回数、口の中を空にすると、マグ

カップの中が空になっていることに気付いた。それを認識すると、葵はマグをテーブルに戻し、不敵に微笑んだ。

「どう？ もう私はブラックでコーヒー飲めるのよ」

「涙目だよ。葵ちゃん」

「あ、熱かったからよ！」

思わずムキになってしまった。凌雅はしばらく葵を見つめると、急に悪戯っぽい表情になった。

「なんか葵ちゃん、随分と急いで飲んじやったけど、もう少し味わって飲んでね。これ、僕の特製ブレンドなんだから」

「え？」

「コーヒーは味わってナンボだからね。はい、もう一杯」

そう言うなり、彼はサイフォンからもう一杯をマグに注いだ。それが、葵の目の前にトン、と音を立てて置かれる。

流星にお手上げだった。この男には勝てない。

葵はそう結論付けるしかなかった。

……………

凌雅は別にサディストではないので、からかうために入れたもう一杯のコーヒーは自分で飲んだ。

「ね、葵ちゃん、こっちおいで」

負けて傷心の葵は、言われるがまま凌雅の指すソファに身をうずめた。その隣に彼も座る。普段だったら、近すぎるだとかあっちいけだとか言って強がる葵も、今は何も言わなかった。

「……私、あんたには勝てないわ」

「そりゃ、歳が11個も違うからね」

凌雅の声はどこまでも穏やかだった。昔から聞いてきた、葵が一番落ち着く声。

「私、弱いな」

「んー……どうだろうね」

彼は否定もしなければ肯定もしなかった。しばらく言葉を選んでから、でも、と続けた。

「でも、葵ちゃんは我慢してブラックコーヒーを一杯飲み干したよね」

「それが何よ……」

「我慢できたでしょ？ それは偉い。よく頑張ったね」

「……うるさい」

「聞けば、エクシードの特訓も頑張ってるみたいじゃない。それも偉いよ」

「うるさいってば」

素直に褒めてもらうのが恥ずかしかった葵は、それでも嬉しさを表現するために、彼に寄りかかった。昔の葵は、そのまま眠ってしまうのが好きだった。そして、しようがないなあとぼやく凌雅の腕に抱かれて、布団に連れて行かれるのが好きだった。

「……昔みたいにも、そのまま寝ないでね」

「分かってるわ」

「そっか。ちよつと残念」

「どっちなのよ」

なんだか可笑しくて、2人はしばし笑った。その後の柔らかな沈黙を、凌雅は優しく破る。

「……葵ちゃん。今まで言っていなかったけどね。僕が女装好きになったのは、葵ちゃんのためだったんだよ」

「どうして？」

驚いて彼を見上げると、彼は憂いの表情を浮かべていた。

「……葵ちゃんの、お母さんになってあげたかったから、かな」

「……………」

葵には、母親がいない。葵の出産に耐えられず、彼女の誕生から1年後、体調が優れぬままにこの世を去った。写真でしか見たことのない母親は、自分にそっくりだった。そして、凌雅にも。

「お母さんみたいにも、甘えて欲しかったんだ。僕は、葵ちゃんのお母さんになってあげたかったんだ。それで、お母さんの着ていた服を着て葵ちゃんの前に出た時、葵ちゃん、何してんのって言ってたっけ。あれはシヨックだったなあ」

僕、結構勇気出したのにな。と寂寥感の滲む笑みを浮かべながら凌雅は語った。その表情を見て、葵は急に申し訳ない思いでいっぱい

なった。葵が1歳になる頃に母は他界した。——それは、凌雅にとつて、12歳で母を失うことでもあった。辛かっただろう。苦しかっただろう。悲しかっただろう。それでも彼は、残された葵を悲しませないために、自分に来ることを探した。それが『母になる』ということだったにも関わらず。

葵はそれを、何も思わずに否定したのだ。

その事実に行き着いた葵は、当然自分の言動を謝ろうとした、が、それよりも前に。

「でも、それから僕自身が女装そのものにハマっちゃうんだからどうしようもないよね。実際カワイイでしょ?」

「は、はあ!? 本気でカワイイと思って女装してるの!」

「え、カワイくないの?」

むしろ美人すぎる。というのが本音だったが……

彼はきつと、そんな謝罪など粒ほども望んでいないのだろう。なぜなら——

「ずえーんぜんつ、カワイくないわ」

と笑顔で言い放ってやった。それを見た凌雅は、それはそれで嬉しそうだった。

……………

辺りが朱く染まる夕暮れ時に、葵は凌雅の家を出た。

「じゃあ、また学校でね」

「ええ、また」

クツキーのお土産を渡された葵は、紙袋を手に後ろを向こうとした。が、凌雅がその肩を掴んだ。

「ね、葵ちゃん」

「何よ」

彼は笑顔を浮かべていた。葵を一番安心させる、笑顔を。

「今じゃなくていいよ。いつか、僕の特製ブレンド、味わってね」

「……うん。今日はありがとう。お兄ちゃん」

凌雅は、葵の口から自然にこぼれたその単語を聞き取るなり、殊更

嬉しそうな笑顔になった。

「すつごい久しぶりだね、葵ちゃんが僕のこと、お兄ちゃんって呼んでくれたの」

「え？ ……あつ、わ、忘れなさい！」

「やだねーん。だって僕、葵ちゃんのお兄ちゃんだもん」

その笑顔は、どこまでも晴れやかだった。

……………

兄も、私の母親になりきれない自分を責めていたのかもしれない。でも、その笑顔は本物だった。兄は、私の兄であることを誇っていた。

だから、私も誇ろう。御影凌雅の妹であることを、誇ろう。

同時に、自分に足りない物を何もかも欲しがるのも止めよう。自分で言ったことだが、人間には得手不得手がある。

彼の言うとおりに——『いつか』でいい。いつか、お兄ちゃんの特製ブレンドコーヒーを味わえれば、それでいい。

今の御影葵は甘党である。

だから、帰ったら飲もう。ミルクと砂糖たっぷりのカフェオレを。

## 5話 限界と

降りしきる雨の中、学園特区の片隅、青蘭大学が魔術関連の研究を行う棟の地下に、2人の姿があった。

「呼び出しに応じてもらって、ありがたいでゴザル」

「いいのよ、可愛い後輩の頼みだし。それにしても、1対1で稽古をつけるって」

ここは、魔術の研究を行う一環として地下に設置された修練場である。強力な魔術結界が常設されており、ここならそれなりに大規模な魔術を行使しても、この結界が外部への影響を遮断してくれる。このような修練場は青蘭諸島内に幾つか存在し、ここはそのうちの1つだった。

風魔忍はこの日、青蘭学園のOGであり青蘭大学の3年生、元青蘭学園生徒会長の蒼月紗夜を呼んで、自分に戦闘の稽古をつけてもらう約束をしていた。

先日のバトルが終わってから、早くも2週間が過ぎた。6月も中盤に差し掛かり、連日降る雨はなかなか止む気配を見せない。そんな中でも、忍は折を見ては修練場を借り、基本的な呪術と、エクシード併用の忍術の練習に勤しんだ。その理由は、自分が”スカイブルー・エレメンツ”でどのような役割であるべきかを、おぼろげに掴みつつあったからだ。また、前回紗夜と戦った時に、ほとんど何もできずに完敗したことも大きい。

時々、この修練場で別の人と使用時間が被ることもあったが、忍はそれを許容した。そして、青蘭大学の学生たちと模擬戦を行い、術を競い合うこともした。学生相手には無敗、たまたま挑戦する機会を貰った教授には負けたが、「紗夜に勝ちたい」というと、全員口を揃えて言ったのだった。「あの人は別格だ」と。

夏には、青蘭学園主催の大きな大会も待っている。それまでに、何としてでも強くならなければいけないのだ。例え相手が誰であっても、勝たなければいけない。主に勝利を捧げなければならない。

チームの戦術の要である忍は、負けられないのだ。

例え相手が、この蒼月紗夜であろうとも。

蒼月紗夜。その澄んだ霊力が体内を循環し、隅まで満たしているのが分かった。

「この前のバトルで刺激を受けたのね。さあ、始めましょう。先手は貴女でいいわよ」

紗夜は常変わらぬ涼しげな表情で告げた。腰には木刀を吊っており、呪符入れもあるが、両手は平手のまま。だが、彼女の真に恐ろしいところは、手でも木刀でも呪符でもなく、その頭脳だということ。忍は知っていた。

「……行くでゴザルよ」

「おいで」

忍も、体内の霊力の循環を促し、一部の隙なく体内を満たしていく。霊感覚が広がり、周囲の霊気を正確に捉える。この修練場は霊的に密閉されているので、ここにあるのは自分と紗夜だけだ。その紗夜から高密度の霊気が発せられているのが分かる。だが、戦いの前だということに、あまりにも『揺らぎ』がない。緊張して固まっているわけでもなければ、興奮して荒ぶっているわけでもない。ただ単純に、『自然』なのだ。

まずは、練り上げた霊力を使用し、火遁術を派手に放つ。エクシードは使えるが、その条件は向こうも同じ。しかし、力任せのゴリ押しではなく、戦略を立てる。そうでなければ、この女には勝てない。

「？」

紗夜は一言で、修練場に溢れる火遁術を吹き消した。静を尊び厄災を払う、月光菩薩の種子真言。

だが、術は祓えても、忍本人は無傷。舞い散る火の粉をかき分けて、忍が突進していた。そのまま勢いよく拳を振るう。紗夜は、一瞬反応が遅れた。クリーンヒットは免れたものの、咄嗟に張った結界では忍の拳を防ぎきれず、広げた両手に彼女の拳が勢いよく叩きつけられた。忍の練り上げた呪力が腕の中を通り抜ける。

「初撃は頂いたでゴザルよ」



「流石」

紗夜は短く評価した。忍は火遁術を修練場中に撒き散らすことで、自分の霊力を紗夜の靈感から隠したのだ。その対応を種子真言で行うことも織り込み済みで。

だが、紗夜も一筋縄ではない。今、忍の拳は紗夜の手の中にある。忍が拳を引き戻す一瞬先に、紗夜はその手にぐつと力を込めて掴まえた。近距離戦では、おそらく紗夜に勝ち目は無い。そういう自負が忍にはあった。だから、逆に突っ込むことにした。その瞬間。

「???」  
「???」  
「???」

決まり文句を省いた、黒の世界の魔術。効果は単純、手の平の中のものを遠くへ飛ばす。簡易詠唱のため威力は削がれるが、それでも忍を後方へ吹き飛ばすには十分だった。思わず、ぐつ、とぐもつたうめき声が漏れる。向こうこそ流石だ。紗夜の攻撃範囲は、一定の距離未満ならおそらく全範囲であることは前回の戦闘で分かっている。とはいえ、事前準備無しでの近接戦までできるのか——いや、できない、あるいは苦手だからこそ、紗夜は忍を、自分が最も戦いやすいレンジまで押し下げたのだ。と考えれば、この距離で戦うのは危険だ。戦うべきは、近接の間合い。

——考えろ、考えろ！ どうすればこの間合いを抜けられるか？

単純な突進などではまず無理だ。前回の勝負で紗夜が琉花相手に使用した、超簡略版の早九字護身法。あれを複数放たただけで、忍は近付けなくなる。とはいえ、呪術を使用した下手な絡め手などは種子真言で破られる。

そして、間合いの維持もまた問題だった。近接の間合いで戦うとはいえ、紗夜はそれを易々と許しはしない。まず間違いなく、忍を遠くへ押しやるはずだ。まだ見たことのない手も持っているかもしれないし、逆に紗夜の方が遠ざかる手段が無いとも確信出来ない。

とにかく、手を探る。向こうの手札を可能な限り暴くのだ。そうしなければ、どこから突き崩しているのかも分からない。

忍は木行符と火行符を取り出し、立て続けに放った。先行して起動した木行符から蔓草が網のように広がり、後発の火行符がその蔓草を

炎上させた。陰陽五行の相生、木生火。木気は火気を生ずる。勢いよく燃える炎の網が紗夜に降りかかった。

が、紗夜の動きはそれ以上に早かった。

「ノUウMaマhク      sサaマnンtダa      |      bボuダdダhナaン  
ウaワrルuルnナaヤyヤa      sソvワaカhカa」

忍が呪符を2枚投げ、それが木行符と火行符であると判断するや否や、その目論見を見抜いた紗夜は水天の真言を唱えて手印を結び、渦巻く水の盾を生み出した。炎の網は水流の盾に阻まれて虚しく消える。五行相剋の水剋火。水気は火気を刻する。

——やはり、読みが早い。しかも、今のは……。

今の術は、前回の勝負でも使ったものである。当然、忍はそれを知っていた。紗夜はもしかしたら、手札を暴いてやろうという目論見さえ見抜いているのかもしれない。

今度は逆に、紗夜が呪符を1枚取り出した。忍は霊感覚を高めて、瞬間でその式を看破する。木行符。ならば狙いは、木行術を、たった今生み出した水天の真言でブーストし、強化された蔓草、あるいは樹木で忍を封じることだろう。前回の勝負では、それにかなり近いやり方で琉花が封じられた。

紗夜の手から木行符が放たれ、式が起動する、その瞬間に滑り込むように、忍はエクシードで火遁術を制御して炎の盾を生み出した。

しかし、それさえ、甘かった。

「疾あまはしく天走れ、疾ちはしく地走れ、雨あまみず水よ」

謎の呪文と同時に、起動中だった木行符の式が放棄される。忍が驚く暇もなく、水天の真言によって生み出された水流が横殴りの雨になり、炎の盾を打ち据えた。当然、炎の盾はひとたまりもなく吹き飛び、台風のご真ん中に放り出されたかのような衝撃を受けて忍も吹き飛んだ。

——今の術は……!?

紗夜が使ったのは、日本神話における水神であり龍神でもある閻御津羽神つはのかみの威を借る術である。伝承に乏しい神で、日本国内でもこの神を祭る神社は少ないが、紗夜はとある先輩からこの神の存在を知

り、その先輩と共同で、その威を借る術を編み出したのだ。

しかし……

「読みは悪くないわ。読んで、実行に移せているのも合格。でも、定石に則るのはいいけれど、あまり拘りすぎると抜かれた時に焦るよ」

そう。反省すべきはこちらだった。先に自分が定石に則った五行相生の式で紗夜を拘束しようとしたのだから、紗夜までそうしてくるはずだ、とは考えるべきではなかった。紗夜はこちらの読みを読み、戦況を鑑みた上で、忍の防御を抜いたのだった。

また、紗夜は水天の真言を唱えて忍の炎の網を打ち消したが、忍はエクシードを使用しての防御を行おうとした。エクシードは魔術よりも直感的に働き、レスポンスも早い。ならば、忍の睨みが現実のものとなってからでも遅くはなかったのだ。あるいは、防御の早さこそが、逆に紗夜に判断する隙を与えてしまったのではないか。盾を先に見せびらかせば、吟味されるのは当然の話といえる。

——どこまでも強敵でゴザルな。

結局のところ、下手に小手先の策を弄するより、自分の強みを活かすしかない。忍の強みは忍術だ。その真髄は、様々な呪術と道具を使い分けることにある。呪術は種子真言でどうにかされるとしても、道具はどうにもならず、別の対策が必要になる。そこに生まれる僅かなタイムラグを突くのだ。呪術と道具、そして自分自身を使った波状攻撃で。

「行くでゴザルよー」

自分を奮い立たせるために叫び、忍は即座に術式と道具を用意した。まずは木行符を放ち、呪力を注入。式が起動し、紗夜を捕らえんと蔓草が伸びる。

対する紗夜は、例の超簡略版の早九字護身法を使って蔓草を弾いた。

しかし、忍は既に次の行動に移っている。懐から取り出した2本の苦無のうち1本を、鋭く投げつけた。これも紗夜に避けられ、背後の壁に突き立った。

「爆炎の如く疾く走れ！ 忍法・炎輝加速！」

バースト・ブースト

その時には既に、忍はエクシード併用の忍術によって紗夜に切迫していた。足の裏で爆発を起こし、その勢いで加速する忍術。緊急回避にも使えるが、今は接近のために使用した。その最中、手にしたもう一本の苦無も投げつける。こちらは、紗夜がやむを得ず抜いた木刀により弾かれる。その過程で、紗夜の右手は外側に大きく開かれた。使えるのは左手だけ。なので、彼女から見て右側——左手でストレートを放つ。これは止められない。  
はずだった。

パシィツ！ と小気味の良い音と共に、忍の左手が止まった。紗夜は左手での防御が間に合わないかと判断した瞬間に、右手の木刀を離し、紙一重で拳を止めたのだ。だが、やはり防御は不完全で、拳の乗った呪力の攻撃はほとんどが通る。

紗夜が僅かに微笑んだ。それを……忍はほぼ無意識に『油断』だと判断した。だからこそ、忍の方も微笑みが漏れたのだろう。

初めて紗夜の表情が激変した。

「害悪を払えー！ 急急如律令！」  
きゅうきゅうによりつりよう

紗夜は気付いたのだろう。木行符の蔓草に呪符が紛れ込んでいることを。そして、爆炎に紛れて今まで隠せていたが……忍が超加速で紗夜に切迫する前に、その地点に呪符を一枚残していたことに。

紗夜が避けた苦無は彼女の背後に刺さり、

弾いた苦無は彼女の右に放り出され、

蔓草は彼女の左側に、

忍が残してきた呪符は彼女から見て真正面。

つまり、囲まれている。

絶叫のように呪文を唱えるところほぼ同時に、紗夜は掴んでいた忍の手を離し、呪符ケースから確認もせず4枚の呪符を抜いて放った。その符に予め仕込まれていた術式が、紗夜の強靱な呪力によって無理矢理書き換えられる。

一方の忍は、紗夜の右手から拳が解放されるや否や、片足に残しておいた炎輝加速バースト・ブーストを使用して即座に囲いの内側から出て、

「千鎖繰り疾く吹き閉じよ！ 忍法・炎鎖戒牢！」  
ブレイズ・ブリズン

4枚の呪符の式を同時に起動させる。狙いは紗夜、ではなく、それ  
ぞれに対して右側の呪符。4本の炎の鎖が結び合わさり、紗夜を囲う  
炎の結界を形成する。

あとは、その内部に対する新しい術を放てば、勝利は確実、だった。  
その前に紗夜の術が完成した。それは4枚の呪符を使用した、紗夜  
の周囲を覆う結界だった。これで身を守るつもりなのだろう。そう  
なれば、どちらの呪力が強いかの勝負だ。そうなったら勝てる自信は  
ないが……少なくとも消耗はさせられるだろう。こちらは準備済み  
の式を使っているが、向こうは急造の式だからだ。

と思っていた忍は、次の瞬間、自分の甘さを思い知らされる。

紗夜の生み出した結界には、通常のそれでは多すぎる呪力が注がれ  
ていた。これでは内圧が高すぎて、例え結界が結べても内側から破裂  
してしまうだろう。

——咄嗟のことで焦ったのでゴザルか？  
違った。

その結界は、なんと結ばれなかった。半分暴走しているレベルの呪  
力が、紗夜を中心に、爆発するように拡散する。

「辺獄の火炎にて焼き焦がせ！ 忍法・炎焼地獄！」  
ロースト・カースト

本来なら、鎖の囲いの内側に炎を生み出し、内部のものを焼き尽く  
すはずだった。唱えた術が発動する、その直前。

紗夜が制御を放棄した結界が、荒れ狂う呪力の波となって、それら  
の術式をまとめて吹き飛ばしてしまった。先に発動していた  
ブレイズ・ブリズン  
炎鎖戒牢の術ごと破壊され、炎の鎖は宙に溶けるようにして消える。  
同時に、4枚の呪符に仕込んでいた残りの術式も破壊された。

「ふう……焦ったわ。成長したね、忍ちゃん」  
「どうもでゴザル」

既に結ばれた結界を内側から吹き飛ばして尚、紗夜の霊気に揺らぎ  
はない。表情はどことなく嬉しげだったが、忍は紗夜が自分の策に気  
付いた瞬間の顔を脳裏に焼き付けようとした。

——これだけやっても、まだダメなのでゴザルか。  
自分はまだまだ未熟だ。手応えはあったが、実際彼女はどこまで読

んでいたのかは分からない。そして、どこまで読まれていたのかが分からないなら、その裏をかくこともまた難しい。それさえも読まれていくかもしれないからだ。

その隙に、紗夜は先ほど手を離れた木刀を拾い上げた。そして、

「じゃあ、私が攻めるよ。受けられるかな？」

「来いでゴザル！」

忍の返答に紗夜はにやりと笑うと、何気ない所作でポケットから取り出した物を放り投げた。

緩やかな放物線を描いて宙を舞うそれは——指輪だった。白い寶石が埋め込まれた指輪。

その光景は、不思議とゆっくりに見えた。光を反射しながら優雅に地面へと落ちてゆく指輪を、戦闘中だというのに、見つめてしまった。その向こうで、紗夜が左手を銃のように構え、

忍の視界に、光が炸裂した。

「うわあああああっ!!」

思わず目を塞ぎ、手で押さえる。痛みさえ感じるほどの眩しさ。視界がホワイトアウトして何も見えなくなる。しかも、

——み、視えない!?

その閃光は驚くべきことに、忍の霊感覚まで一時的に封じていた。つまり、今の忍は、戦闘中ではありえないほど無防備だった。

とりあえず攻撃に備えて結界を張ろうにも、霊感覚が遮断されている。体内ならまだしも、体外に放出した呪力の状態を正確に認識できない。そんな状況で自分を丸ごと覆う結界を張ろうなど、無謀もいところだった。

とにかく、できることをしなければと考えた忍は、この状況で頼れる唯一の力を放出する。即ち、エクシード。仕組み自体は単純な火遁術で生み出した炎を、エクシードで制御して壁にする。これなら、紗夜は近付けない。

「轟雨の女神よ。その荒れ狂う御力の一篇を我に貸し与え給え」

という思考は、体幹への物凄い衝撃で吹き飛んだ。

視界が真っ白なため、何がどうなっているのか分からないが、数

メートル吹き飛んだのは確からしかった。勢いよく転がり、壁にぶつかってようやく止まった。

「ごめんなさい、少し大人気なかったかしら？」

「いや……勉強になったでゴザル。拙者の負けでゴザルな」

完璧な敗北だった。それを認めると、いきなり視界が戻ってきた。霊感覚も同時に戻ってくる。

「……エクシードでゴザルか」

「そう。体内に溜め込んだ光を、魔導リングを通して視界と靈感を封じる、ちよつとした目くらまし」

近づいてくる紗夜は、木刀を肩に担いでいた。

「なら、あの攻撃は？」

「赤の世界の、轟雨の女神様の加護を使った遠距離攻撃、かな。こんなふうに」

紗夜はそう言うと同時に、右手の木刀を肩から下ろし、真横に向かって軽く振るった。すると、見たこともないような澄んだ霊気が木刀から発せられる。それは空を切る刃となって壁にぶち当たり、修煉場の霊的防御を揺るがす轟音を上げた。

「芸達者が過ぎるでゴザルな」

「あら、そうでもないわよ。凌雅さんなんか、私の数倍は使いこなすわ」

「凌雅さん、って、御影先生のことでゴザルか？」

「そう。見た目と性格はあんただけど、ものすごく強いだよ。私なんか右腕一本で完封されるわね」

それを聞いて、忍は背筋を凍らせた。その言葉が本当なら、青蘭学園にはあのように、見た目と実力が全くマッチしないような強者が大勢いるのだろう。

思い切り脱力してしまった忍は、ぐでつと壁際に寝転んだ。

「拙者、この2週間、かなり頑張ったのでゴザルよ。大学の学生とも闘ったし、教授ともやったでゴザル」

「ええ、少し聞いたわ。なんかすごい子が来てるって。すぐに貴女だと思っただわ」

「そこまで見抜いてるのでゴザルか」

「状況的に、貴女くらいだもの」

笑みを絶やさないう紗夜が、忍の横に腰を下ろした。

「でも、あの結界はマジで焦ったよ。まさか、爆炎と蔓草で呪符を隠すなんてね。私でなきや、おそらく引つかかるはずよ。そこは自信を持っていいわ」

「……でも、先輩には感づかれたでゴザル」

「それは……そうね。私もそういうの、よくやるから」

「この上、あのようなこともできると?」

「一応ね」

「それに、勉強になったでゴザル。結界にあんな使い方があるとは」

「青蘭学園の先生に教えてもらったの」

「うちの教師に? 誰でゴザルか?」

「言っただい分かかんないから、今は内緒」

参った。この先輩には、当分勝てそうになかった。相変わらず手札の数は見えないし、その質も——異様に高いということ以外は——推し量れない。

それでも屈するわけにはいかない。自分はチームの要なのだ。

負けるわけにはいかない。

忍はよいしょと起き上がると、深呼吸して言った。

「さ、もう一回、お願いするでゴザル」

紗夜は嬉しそうに微笑んだ。



## 6話 ” 大人 ” と ” 子供 ”

「教師の実力が知りたいの！」

講師室にて、ソフィーナはアルマに詰め寄った。詰め寄せられたアルマは目を瞬かせて、

「俺じゃダメなの？」

教師じゃなくて講師だけど、と聞き返した。

「ダメ。アルマ兄の実力は……まあ、知ってるわ。でも他のがアルマ兄と同じくらい強いかわからないじゃない」

「ん、似たようなもんだと思うけど」

「それを直で感じたいの。ダメ？」

「ホントのところは？」

そう指摘されたソフィーナは、一瞬、口をつぐんだ。彼女が今、誰かと戦ってみたいと思うのは、彼女が8月にブルーミングバトルに出るからであった。研究技術ならまだしも、戦闘技術に関して他者からの評価を受けることはあまりなかった。だからこそ、

「自分の実力でどこまで食い下がれるか、知りたい」

「あー……」

アルマは渋い顔になって考え込んだ。確かにソフィーナは才女だが、それはあくまで子供としてであり、大人と比べれば……比べるまでもないことはよく知っている。しかし、それを言ったところで「論より証拠」を実践したがるのがソフィーナであった。

さてどうしたもんか、教師だってみんな忙しいんだぞ——と言いかけたところで、講師室に1人の男性が入ってきた。

「あら、ソフィーナちゃん。どうしたの？」

「み、御影先生……」

入ってきたのは、青蘭学園で国語の講師を務めてる男性・御影<sup>みかげりよう</sup>凌雅であった。男性、なのだが、本人の趣味でやたらと女性らしい格好をしている。シャツに薄手のカーデイガンを合わせ、ボトムズは黒のガウチョパンツ。メタルフレームの眼鏡に、首から下げた青い宝石のネックレス、伸ばした黒髪は背中側で緩く束ねている。背は高く、顔

は俳優のような美形。おまけに誰にでも優しく親しげで頭脳明晰、と叩きどころがまるで見当たらない。妙な女性らしさが生徒にウケており、彼を慕う女の子は多いという。

そんな彼とは真逆なタイプのアルマが、

「あー、お前さ。土日で暇な日ある？」

「え？ そうだね。剣道部の活動がある日の午後とか、なら……どうして？」

「こいつの相手してやってよ。教師の実力が知りたいんだって」

「僕が？ 別に構わないけれど、僕教師じゃなくて講師だよ」

と、目の前でトントン拍子に話が進み、凌雅と戦うことが決まった。「じゃあ、僕も準備しておこうかなあ。ソフィーナちゃんもあつたけの武器を持っておいで」

「……言われなくても」

にこやかな凌雅に対して、ソフィーナはあくまで挑戦的に返した。

……………

数日後。魔術の實踐に使用される修練場にソフィーナは来ていた。

「あれ、ハイネくんは？ リンクしないの？」

「ハイネには内緒なの」

「そつか。正真正銘、ソフィーナちゃんの実力のみでの勝負つてことね」

向かい合う凌雅は、涼やかな表情で言った。

ソフィーナは、魔術を扱う際に最も適している、というよりそういうふうに住らせたゴシッククロリータ調のドレスを身に纏っている。手には魔導書、腰には呪具が詰まったポシェット。言われた通り「ありつたけの武器」を持ってきている。

対する凌雅は、普段のような女性らしい格好に加え、腰に一振りの刀を差していた。変化としてはそれだけだった。

観客席にはアルマが座っていた。

そして凌雅は、

「ならこれはいらなかな」

などと言つて腰から刀を外し、客席の方へ持つていこうとした。

「ちよ、ちよつと！ どういうこと!?!」

「いや、念の為に持つてきたけど、やっぱりいらなかったかなーって」

「ほ、本気で掛かってきなさいよ!」

「本気？ 僕が？ いや、それは無理だよ」

と凌雅は断言した。

「私じゃ本気を出すに値しないってわけ?」

「まあ、その通りかな。僕が本気出したら、仮にソフィーナちゃんが10人いても相手にならないと思うよ。今のソフィーナちゃんなら、そうだね。持つて、30秒かな」

「何がよ」

「30秒以内に君を殺せる」

凌雅が、背筋が冷えるようなことを言うと、ソフィーナの眼差しは一層険悪なものになった。が、凌雅の視線は揺らがない。ただ単に彼は『事実』を述べているだけなのだ。

「……随分と言つてくれるじゃない」

「ソフィーナちゃんは、講師の実力を知りたいんだよね。じゃあこれがなくても、十分教えてあげられるよ。当然、納得もできるはずだ」

「私を舐めてるの？ 貴方、まだ私の魔術戦を見たことがないはずよね?」

「あのね、ソフィーナちゃん。確かに君は年齢不相应に素晴らしい魔術師だと思うよ僕も。でも、それはあくまで、年齢で見た場合だ。15歳の子達と比べれば突出しているというだけで、大人から見ればまだまだ『子供』だよ。それに、魔術師っていうのは、戦うべき相手を選ぶものだよ。選ぶには当然、相手を見定める必要がある」

凌雅の声は変わらず涼やかだ。だが、不満げなソフィーナの反抗的な表情に出会って苦笑し、

「よし、いいでしょう。これは、持つたままにするよ」

一度外した刀を再び腰に戻すと、

「僕がこの刀を少しでも抜いたら、ソフィーナちゃんの勝ちでいいよ。難しいと思うけど、頑張つて」



に、出力の差はあまりにも圧倒的だった。

やっっていることはほとんど同じだ。だが、凌雅のそれは、黒の世界ではほとんど見られない防御だった。瞬間的に靈力を練り上げ、一気に爆発させる。誰しもが『術』を扱うあの世界で、ただ練り上げた靈力の圧だけで防御を行おうとは、誰も思わない。

ソフィーナがいきなりの大掛かりな魔力放出で若干息を荒げたのに対し、凌雅の息は微塵も乱れなかった。その『差』を思い知りそうになりつつも――

「――チッ！」

攻撃の手を緩めるわけにはいかないソフィーナは、続いて小型の魔力弾を大量に打ち出した。魔導書に大きくサポートさせることによって可能となる攻撃で、1発ずつの威力は小さいが、多角的に大量の弾で攻めるため、防御は難しいだろう。

――せめて数発当たれ。

という願望は虚しく潰える。

彼は右手で刀印を結ぶと、それを体の前でぐるりと回して円を描き、そのまま刀印でその円を十字に切る。すると、彼を狙っていた魔力の弾丸は次々と勢いを失い、墜落して消滅した。

ソフィーナは、その現象を知っていた。

「じゅ、《呪文惑わし》!?!」

「そう。まあ、ソフィーナちゃんなら知ってるよね。小型の魔術を大量に処理する時には、便利だから」

《呪文惑わし》とは、黒の世界に存在している魔術のひとつだ。名前のとおり、術者ではなく呪文そのものを幻惑し、指向性を曲げるといふものである。『幻惑は対人術』という原則を根底からひっくり返す、非常に珍しい術だ。

それもその筈、《呪文惑わし》は、いわゆる汎用魔術――一般的に誰でも扱える魔術――ではなく、大昔の種族が生み出したと言われる古式魔術の類である。構造が複雑でかつ独特、何よりも理論立っていないため汎用魔術には持ち込まれなかったもので、それを書物で呼んだソフィーナは存在のみ知っていたが……。

「いつか習得してやろうと思ってたけど……」

「ゴツさえ掴めば、意外と簡単だよ」

そう軽く言つてのける凌雅に対し、ソフィーナは畏怖を覚えた。

青の世界出身の男が、黒の世界の古式魔術を習得している。その事実が問題なのだ。例え凌雅が覚えている古式魔術が《呪文惑わし》1つだけだったとしても、それを証明する手段がない。何せ、古式魔術の世界はどこまでも暗く、複雑に入り組んでいる。どれもこれも思いつきレベルの術をそのまま形にしたようなものばかりで、術式が統一化されておらず雑然としている分、効果はストレートで目に見えて強い。仮に彼が攻撃的な古式魔術を1つでも習得していた場合、ソフィーナはそれに対抗できる自信が無かった。

そもそも、《呪文惑わし》には、古の魔族が使っていた言語による呪文の詠唱が必要だったはずだが（ソフィーナはそれが問題だったから習得を後回しにしていた）、彼はそれを省略したのだろうか。だとしたら、それはただのセンスと言うには余りにも異常すぎる。

確かに、この男は強い。自分が10倍強くても、勝てないかもしれない。

だが、引き下がるわけにはいかないのだ。ハイネの為に。

ソフィーナはポシエットから複数の呪具を取り出した。銀色の杭のような形のそれを4つ、真上に投げ、すかさず術を展開。

「縛り囚えよ！　プリズンボルト《杭 檻》よ！」

呪文を受けて杭は鋭く飛び、凌雅の周りに突き立った。杭同士は相互に魔力で繋がり、内部に強力な格子状の霊圧を発生させて対象を拘束する檻となる。

——その術式が起動する刹那。

凌雅は一瞬で複雑な手印を結び、短く呪文を唱えた。それから、懐から1枚の呪符を取り出し、それに呪力を注ぎ込んで前方に投げつける。

するとその呪符が、魔力に対する凶悪なまでの斥力を生じさせた。その斥力により——杭に仕込んだ術式が乱される。その式も知っていた。汎用魔術であるが……。

(なっ——《呪具叱責》!? でも、威力が!?)

術式を破壊された杭は、床に突き立ったまま——何も起こらなかった。

《呪具叱責》は名前の通り、呪具に組み込まれた魔術を咎める魔術だ。が、呪具という形代に組み込まれた魔術は、当然だが形代という物理的な盾を持っているも同然である。特に金属は形代とするのに都合が良いもので、内部は魔力を通しやすく、外側は他の魔力を排斥しやすい。

ソフィーナは曲がりなりにも黒の世界の最高統治者である《魔女王》が管理している機関《クレイドル》直轄の教育機関で優秀な成績を修め、魔女王本人から留学の機会を賜ったほどの才女である。なので、例え呪具の形代に金属を使用していたとしても、生半可な式ならば強力な魔力を前に式が乱されることは知っている。なので、この杭は見た目以上に内部の式が強く守られているのだ。

だが——凌雅の使った《呪具叱責》は、通常のそれとほとんど変わらぬ効果ながら、その出力が段違いだった。それにより、《杭牢》の霊的防御はいとも容易く破られた。

潤沢な霊力を持つ、などというレベルではない。この男には、霊力の底が本当にあるのか疑わざるを得ない瞬間的な出力だった。しかも、強力な術を連続して放つたにも関わらず、全くもって消耗した様子がない。

更に付け加えれば、今の《呪具叱責》に使用した呪符は半紙で出来ていたし、描かれていた式も青の世界のものだった。だとすれば、この男は黒の世界の汎用魔術語を青の世界の魔術語に翻訳でもしたのだろうか。だとしたら、ソフィーナとしては平伏せざるを得ない。

「その式、翻訳したのは先生自身?」

「まさか。元々知ってた術を《呪具叱責》に似せて、それっぽく変えてみただけだよ。こっちのほうが使いやすいから。翻訳なんて、とても」

幸いにも予想は外れたが、その言葉を文面通りに受け取るなら、それはそれで物凄いセンスである。先に発動した《呪文惑わし》も、効

果が同じだからそうだと判断しただけで、発動のモーションはオリジナルに近い。もしくは、ソフィーナが知らない青の世界の呪術なのだろうか。

「なんというか——彼は「型に嵌らない」。

姿格好もそうだが、言動にしろ戦闘行動にしろ、その一つ一つがソフィーナの知る常識を逸していた。

だからこそ、何事も型に嵌めて考えがちなソフィーナは、酷い「やりにくさ」を感じる。

とにかく、刀を抜かせるどころの話ではなかった。この男の“底”を知らなければ、まず勝ち目はない。

「塞ぎ防げ！ 《網陣》よ！」

次いでポシエツトから取り出したのは、鈎爪かぎつめのような形の呪具。宙を引つ掻くように何度も振るうと、その軌跡が重なり、網状の結界を形成した。それを凌雅に向かって飛ばす。

飛ばした呪具は《呪具叱責》で咎められる。ならば、手元に置いておけばいい。万が一《呪具叱責》の方が飛んできてもいいように、突貫で《網陣》の霊的防御を重ねがけする。その上で、凌雅の行動を封じる。戦略自体は臨機応変に練り変えられ、素晴らしいものだった。だが、これに限っては相手が悪かった。

「オン？ アビテヤマリシ ソワカ——オン？ マリシエイ ソワカ」

彼の体から発生していた霊力が一瞬で凝縮するのと同時に、彼の輪郭が一瞬揺らいだような錯覚を覚える。

そして、《網陣》による網状の結界が凌雅を縛り付ける、その瞬間、ソフィーナは目の前の光景に瞠目した。

彼が前に進んできている。

彼が——魔力の網をすり抜けて——前に進んできている。

陽炎が神格化した姿と云われる、摩利支天まりしてんの真言。何者にも触れられないこの神は、その加護を受ければ必ず戦に勝てるとして、戦国時代にも忍者や武士に好んで信仰されていたという。

「なっ——!?!」

結界を強引に破るのではなく、すり抜けられることを全く予想して



いなかったソフィーナの思考は、そこで一瞬停止した。何が起きているのか分からないのだ。

「その瞬間を見計らって、」

「セキアの弾丸」  
到底人間が発射することのできないような声で唱えると同時に、右手を銃のように構えた。そこから、まるで弾丸のように圧縮された霊力が放たれる。

——ま、魔族言語まで!?

咄嗟のことで、向こうがどんな魔術を使ったのか捉えそこねた。しかし、確かに《セキア》とは聞こえた。ならばあれは——セキアの弾丸。魔族言語の古式魔術の中でも随一の破壊力を持つ。

慌てて思考を取り戻したソフィーナは、動揺しつつも、ならば自分も魔族言語の魔術で、と返す。

「セキアの魔術——!」

ソフィーナが習得している、最も強力な防御魔術。

彼女の祖先であるセキアという強大な魔術師が編み出した、魔族言語により唱えられる古式魔術だ。そこにありったけの魔力を注ぎ込み、凌雅の弾丸を意地でも弾かんと念を込めた。

ソフィーナは一時期、頑張って古式魔術を覚えようとしたことがある。だが、古式魔術は体系立っておらず、法的的に習得するのが難しい。だが、この《セキアの盾》と《セキアの弾丸》は、かなり気合を入れて習得した。それは、ソフィーナがセキアの末裔であったということも大きい。血筋的に、彼女はセキアの魔術を使いやすいのだ。

ほんの一瞬で超硬度の《セキアの盾》を生成してのけた腕前に、アルマが息を飲んだ。

——さあ、来い!

そう意気込んで弾丸を盾が迎える、一瞬前。

弾丸の威力が急激に縮んだ。

何故? どうやったかは分からないが人間が魔族言語の魔術を使ったから、制御ができなくなったのか? という考えは、至極妥当だっただろう。

しかし、眼前の凌雅の眼差しは、先刻と何も変わらない穏やかさだ。  
——何を狙っている？

その答えはすぐにやってきた。

減退した威力の弾丸は、盾に弾かれるのではなく、盾に吸収された。驚く間もなく、次いでやってきたのは異常なまでの引力。盾が凌雅に引つ張られたのだ。弾丸を弾くため、できるだけ外向きに魔力を注いでいたソフィーナは、突然のことに対応しきれず、魔力の手綱を手放してしまった。

すると、手放した魔力を通じてソフィーナの体内の魔力が、ごつそりと引き抜かれた。貧血を起こしたように立っていることができなくなり、彼女は思わず床に倒れ込んだ。

——な、何が起きたの？

それさえも分からず、ソフィーナは呆然と宙を見上げるしかなかった。体内の魔力が枯渇し、思考が回らなくなる。

「ソフィーナちゃんって、苗字から察してたけど、セキアの嫡流でしょ？」

「……そう。それが、何か？」

「君なら《セキアの盾》を扱えると思っていたよ。でも、君は単純に知らなかったみたいだね」

「何を？」

「《セキアの盾》も《セキアの弾丸》も、同じセキアの術系統だってこと。魔族言語の古式魔術は、同じ系統同士でぶつけ合うと、相殺しないでどちらかに取り込まれることが多いんだ」

言われてみれば、その通りだった。古式魔術の時代は、各種族同士が領土を取り合っていた時代。その中でも魔族は集団戦に優れていたという。それは単に強大な魔力を持つ者が多かったというわけではなく、大量の魔術師が同じ系統の術を混ぜ合わせて使っていたからだという言い伝えがある。

ゆえに、魔族言語の古式魔術は、他の言語のものに比べて混ざりやすいのだ、と。

それに、ソフィーナの周辺で、このレベルでセキアの術を使えるも

のはほぼ0人だったため、同じ系統の術同士がぶつかった時、実際どのような反応を示すのかを見たことがなかったのも痛手だった。

「君の盾に僕の魔力を溶かした後、それを通じて君の盾を乗っ取って、ついでに君の魔力も引っ掛けて引っ張り出したってことだね」

「……なるほど。さすが、教師ね」

「講師ね。一応」

しかし、まだ腑に落ちないことがあった。

「……なんで貴方、魔族言語を話せるの？」

「喉の中の空気の通り方を、魔術でいじるんだよ。そうすると、人間でも魔族言語を話せる。でも、聞いたことはないかい？ 群雄割拠の時代、なぜ非力な人間がその時代を生き抜けたのか」

「……………」

ソフィーナは首を振った。魔術の勉強は大量にしたが、歴史となるとそこまで詳しくはなかった。

「それはね、人間には《適応力》っていう力があつたからなんだ。人間は訓練次第で、ほとんど全ての種族言語を話せるようになる。その魔術も、使える。魔族言語も竜族言語もエルフ族言語も、何もかもね。だから、優秀な人間は各種族が欲しがった。そして人間は、様々な種族の庇護の下で繁栄し、生命を繋いできたんだ。——で、合ってるよね、アルマ先生？」

「そうだな。確かに人間には取り沙汰するほど特筆すべき能力はないが、適応力だけははずば抜けていた。単に種族的なものだけでなく、環境に対するものもな。更に言えば、他の種族にはあまり見られない思考の柔軟さも重宝されたとかいう話もあるな」

自惚れを、思い知らされた。確かに自分は、大人から見ればまだまだ『子供』だ。

それでも、負けるわけにはいかない。自分を信じてくれるパートナーのために。

「はい。とりあえず、魔力は返しておくね。じゃあ、今日はここまで——」

「待って。まだやれるわ」

「ホント？ 無理してない？」

「無理してでも、やんなきゃいけないの！」

ソフィーナがフラフラと立ち上がりながら叫ぶと、凌雅は真剣な表情になった。

「じゃあ、かかっておいで」

結局、凌雅の腰に差した刀は、その刃を1ミリたりとも見せることはなかった。

.....

その日の夜。

「そつか。まあしようがないよ。御影先生、めっちゃ強いし」

「知ってたの？」

「そりゃ、俺はこの島に3年前からいるわけだから」

ソフィーナは、自分の魔術工房にハイネを呼んで今日のことを話した。ソフィーナは、彼が失望すると思っていたが、ハイネはむしろ勝てたらおかしいと思っているらしい。

「俺の知る限りだと、あの人以上の術巧者なんてそうそういないって。術そのものも凝ってるけど、それ以上に戦闘の運びが上手いんだよね。俺も何回か手合わせしてもらってるけど、まー遠い存在だよ」

「……ハイネは、失望しないの？」

「なんでさ」

「だって、いつも偉ぶってる私が、こんなに簡単に負けるなんて、って」

「別に……なんだかんだ言って、俺もお前もまだ子供だろ」

ハイネは彼らしい飾らない態度で、紅茶のカップを傾けながら言った。

「御影先生以外にも、ハイトマン先生とか、それこそ兄貴とかにも稽古をつけてもらうことがあったけど、全員が全員、大人なんだよな。結局俺らはまだ子供で、だから真っ直ぐに努力し続けなきゃいけない。ってなふうに思うんだよね」

彼の口から紡がれた言葉は、背伸びしがちなソフィーナには思いつかない考えだった。それにしても、まだ15歳とは思えないほど”大人”な考えである。

背伸びしてでも”大人”に追いつきたいソフィーナと、頑張った地道な努力を積み重ねる”子供”なハイネ。

どちらが”大人”なんだろうと考えたとき、それが後者であろうことは悩む余地もなかった。

「私も、まだまだなのかな」

「当たり前じゃん。ソフィーナだって、兄貴にもネロ姉にも勝てないでしょ?」

「そりゃあ、あの2人はなんていうか、器が違うもの。私が悔しいのは、ああいう”違う器”がこの島にはいっぱいあるってこと」

「ソフィーナだって、十分”違う器”だよ」

ハイネは手を伸ばしてソフィーナの頭を撫でた。その感触は心地良いのに、なぜか悔しさも湧いてきた。ハイネは大人だな、と思ってしまうからだろうか。

「……あなたは、強いよね。何度負けても、頑張れるのね」

「ソフィーナに追いつきたいからだよ。でも、お前がヘタれたら、俺はお前に付いていかなくなるかもな」

「え!? やだ!」

「じゃあ、頑張ろうね。今負けたとか勝ったとかじゃなくて、いつか必ず勝てるように、前に進もう。そういう子が、俺は好きだな」

彼の口調は、どこまでも優しい。周囲に抜かれないように、ただひたすら努力し続けた——し続けざるを得なかった時とは、違うのだろうか。

「負けてもいいの? 強くないの?」

「今はね。俺より弱くてもいい。大事なのは、前に進み続けること。どんなにゆっくりでも、絶対に足を止めないこと。そうすればいつか、勝てる日が来る。って俺は思ってる」

「その”いつか”がいつになるか、分からないの? 10年後になっても、100年後になっても?」

「うん、必ず来る。ってというか、今来た」  
「え？」

ソフィーナが驚いてハイネを見上げると、彼は少し意地悪な表情をしていた。

「まさか、ソフィーナが俺に、負けちゃったどうしよう〜！　なんて相談してくるなんて。俺嬉しいよ。ソフィーナが負けてくれて」

「それどういう意味よ」

「俺とソフィーナは、まだ近い存在だって思えるから。どっちも、まだ子供って言われちゃう存在だよ」

「まだ、子供ねえ……」

「少なくとも、俺らの当面の目標は、8月のブルーミングバトルで勝つことだろ？　だったら、まずはそれを目指そう。今すぐ先生を全員倒さなきゃいけないなんて、誰も言っていない」

「……そうね。少し調子に乗りすぎたかしら」

「ま、今回はそういうふうには反省しておくといんじゃない？　反省の後には進歩あるのみ、だって言ってたよ。兄貴が」

見上げるハイネの横顔は、数十センチと離れていないのに、今この時だけはやけに遠く見えた。

## 7話 安寧を蓄ませる雨の郷

6月になると、この島はよく雨が降るらしい。

「……今日も雨ね」

「こういう静かな季節もいいんじゃない?」

「毎日続くと、陰鬱な気分になるわ」

「あんな工房に籠っててよく言うわ」

「なんですつて?」

教室の窓辺に立っていたソフィーナとハイネは、締まりのない空気に任せていたらだと雑談を交わしていた。教室内は音量ボリュームが数段落とされたようで、普段はうるさい美海や琉花ですらどこか静かだ。

「しかし、よく降るわね」

「そういう気候なんだよ。しょうがない」

「毎年そうなの?」

「そ。この季節になると、雨の日続きなんだ。これが止めば、一気に暑くなるけどね」

「……それはそれで嫌だわ」

フリルたつぷりのゴスロリ服を愛用しているソフィーナ的には、夏も嫌らしい。

「暑いのが終わると、次は寒くなるよ」

「まだ寒いくらいがいいわ」

「ちなみに寒さは、グロースエンパイアくらい」

「ゆ、雪が降るってこと? 嫌!」

黒の世界でもかなり寒い気候の地域を例に挙げると、それはそれで嫌だという。わがままなお嬢様だね、とハイネは内心ため息を吐いた。

「わがままなお嬢様だね」

「……声に出てるわよ」

「いいじゃん。ソフィーナだって雨ひとつでぎゃーぎゃー騒いでるし」

「誰がぎやーぎやー騒いでるって!？」

沸点が低いソフィーナはキレ気味に窓の外に手を向けた。その手の平から魔力の弾が打ち出される。脅しの意味で。ハイネというかこのクラスにとつては最早日常茶飯事である。この世界で言うなら拳をボキボキ鳴らす程度の威嚇に過ぎない。彼女自身もその魔力弾でなにかをどうこうする気はないらしく、その魔力弾も、窓の外でパッと弾けて終わりだ。……普段は。

しかし、その時は違った。

「あ、あれ?」

窓の外に放たれた魔力弾は、雨の中を突き抜けていき……消滅した。

「き、消えちゃった……なにこれ」

「ああ、それもこの島の雨の特徴だよ」

「特徴?」

先刻までの怒りなど何処へやら、きよとんとするソフィーナにハイネは経験談を話す。

「この島の雨って、魔力を打ち消す力があるんだよね」

「なんでそんな変な力があるのよ」

「知らない。兄貴に聞いてみても『そういうものだ』としか返ってこなかったし。だからそういうことなんじゃない?」

だが、ソフィーナはその回答では満足しなかった。天才魔女の血が騒いでいるのだろう。

「……これは、調査が必要ね」

……

その2人の女性は雨の中を歩いていた。

「今日は付き合せちゃってごめんなさい。お休みだったはずなのに……」

そう静かな口調で喋っている女性は、骨が多い黒の傘を差している。髪は雨に濡れているかのような艶やかな黒髪を、腰の辺りまで伸



ばしている。服装はレディーススーツで、脚にはストッキングを穿いていた。背は高めで、すつと伸びた背筋も総合して、純な大和撫子を思わせる。名前を、あまみやしずく雨宮雫といった。

「いえ、大丈夫ですよ。先輩を守るのが私の仕事です」

やや気弱さが見え隠れする声で話している女性は、何の特徴もない透明なビニール傘を差していた。背は低く、没個性なブラウスにカーディガン、膝までのスカートに防水靴という格好に加え、くすんだ黒髪をピッグテールに結っていることも相まって、まだ学生に見える。言っているセリフそのものは頼もしいが、瞳は自信なさげに周囲を見回しており、警戒している臆病な小動物を思わせた。こちらの名前は久遠くおんすがさ、という。

現在は平日の昼間なので、青蘭学園に通う生徒はその辺をウロウロしてはいない(はずである)。大人の女性らしい雫は当然として、明らかに普段着らしい格好で歩いているすがさも、また社会人である。

しかも2人は、この青蘭諸島においても多くは見られない、有数の強力なエクシードを持つプログレスである。

「そろそろ、近いですか?」

「ええ。そのビルの5階。妙な霊力の流れが、そこから」

「了解しました。先輩、あまり動かないでくださいね」

「大丈夫。信じてます」

すがさは左腕に付けた腕時計をカチャカチャいじっている。その最中も、相変わらず周囲は警戒したままだ。

「それじゃあ、行きます」

「はい、行ってらっしゃい」

それだけ言い、傘を閉じて雫に渡すと、すがさは突如として消えた。つい今まで見えていた姿は完全に消え去り、付け加えるなら既に彼女はそこにいなかった。

しばらくして、雫の付けていたインカムに連絡が入った。

『取り押さえました、先輩』

「分かりました。ご苦労様です」

すがさとの通信が切れると、雫は控えさせていた部隊を呼び寄せ

た。

その胸元には、青い蘭を明るく紫が取り囲んでいる模様のピンバツジが光っている。

……………

ソフィーナは、まず雨のサンプルの採取から始めた。

「ねえ、まだ続けるの？」

「もちろん」

「なんで俺まで連れ回されてるの？」

「パートナーでしょ」

「……それを言われると痛いな。帰りたいたいんだけど」

ハイネは荷物持ちをやらされていた。都合の良いパートナーもあつたものである。

一方のソフィーナは、ハイネを連れて島中を歩き回り、各所の雨のサンプルを試験管に保存していった。その後、その場所で一定の量の魔力を放出し、その状態の変化を記録する。

そんなことを、なんと5日間も続け、青蘭島のみならず他の4つの島に降った雨のサンプルと記録を魔術工房に持ち帰った。

「ふうく、だいぶ集まったわね」

「壮観だね」

どでかい机の上にずらりと並んだ試験管の数々。今は、机の上に敷かれた青蘭諸島の地図の上に描かれた、サンプルを採取した場所の印に合わせて、その場所のサンプルを配置している最中である。

「こんだけ集めたけど、これどうするの？」

「もちろん、全部成分を調べるわ。何か分かるかも知れない。できれば青蘭の外の雨も採取したかったけれど……」

「まあ、異世界人には無理だね」

基本的に、異世界からの来訪者は、青蘭の外に出ることが許されていない。日本のみならず、地球全体の混乱を防ぐためである。それは、黒の世界の魔女王でもそうなのだ。最も、彼女が青の世界に来た

ことはほんの数回しかないが……。

ちなみに、何人かの教師に聞いてみたが、この島の外の雨は、別段特別な効果はないらしい。となると、この青蘭という力場が何らかの作用を雨に与えていると考えられるが……。

「まあ、確かに特殊な地ではあるわよね。異世界への”ハイロウ門”が3つも開いているんだもの」

「じゃあそれでいいじゃん。はいおしまい」

「さて、検査を開始するわよ」

「……俺もやるのか」

「当たり前でしょ？」

言葉通り、ハイネの協力をさも当然と思っているソフィーナ。おいおいずつと手伝ってやってただろ、と思うハイネだったが、ニコつと無邪気な笑顔を浮かべられて、つい押し黙ってしまふ。

昔から、ハイネはソフィーナのこういう笑顔に弱かった。彼女はいつも無邪気な笑顔を浮かべて、ぐいぐいと自分を引っ張ってくれる、強い子だった。

「まったく……いったいどうやって調べようってのさ」

「まずは含有される魔力を調べるわ。ただの雨つてことはまずないはずだし、何かしらの魔術が掛けられているに違いないわ。どんなに微弱な魔力でも、これを使えば大なり小なり反応があるはずよ」

そう言つてソフィーナは、机の下から太い羊皮紙のロールを取り出して広げた。次いで、空中に両手で魔術式を描き、それを広げた羊皮紙に焼き付け始める。

「感応術式？ 随分たくさん作るんだね」

「ええ。何といつても、現状の私の目によると、この雨には魔術式が掛けられているような異常がないの。恥ずべきことにね。だから、僅かな魔力も見逃さないように、念入りに重ねるわ」

「大丈夫なの？ それだけ重ねたら、変な場所で反応したりしそうだけど」

「私を誰だと思ってるの？ 『ことわりが理深き黒魔女』ソフィーナ様よ」

「その名前好きだね。誰に付けてもらったの」

「ネロ姉だけど」

「あー、やっぱりか。ソフィーナ、ネロ姉にめっちゃ懐いてたもんね」  
「そ、そうかしら？ とにかく、あんたも幾つか作りなさい。私が配置するから」

「はいはい」

雑談を交えながら、羊皮紙に幾つもの魔術式を焼き付けていく2人。数分もすると、机を覆い尽くすような大きさの羊皮紙には、複雑な魔術式が端々まで広がっていた。

「さて、始めるわよ」

魔術式の出来栄えに満足した様子のソフィーナは、愛用しているフリルだらけの袖を捲った。

……………

2人の努力虚しく、結果は芳しくなかった。

「おかしいわ……こんなはずないわ！」

「まあまあ」

そこから更に数日間も掛けて、全てのサンプルを調べた2人。だが……

「まるで魔術式の反応が出ない……こんなことってありえないわ」

「あったとしても、無関係なものばかりだったね」

幾つかのサンプルには魔術式の反応があった。だが、それは魔力を打ち消す効果とはまるで無関係な、ちよつとした魔術が行使された残滓のようなものしかない。

だが、奇妙な事実が発覚していた。

「魔術式は無いのに、魔力はあるんだよね」

「そこがおかしいのよ。なんで魔力はあるのかしら」  
ソフィーナはソファに寝転がると、手足をバタバタと振り回している。感情のやり場がないのだろう。

奇妙なことに、サンプルの雨には、場所による違いこそあれど、通常の雨にしてはまず多すぎる量の魔力が含まれていた。ということ

は、雨がどこかしらから魔力を得ているものだと考えるのが普通だが、肝心の『魔力を取り込むような魔術式』は一切見られない。

「なんか、『あと一步感』はあるのよね」

「そうねえ、こうなる原因は何かあるはずなのに、もどかしいわね……」

ハイネが淹れた紅茶を、久しぶりにさっぱりしたテーブルに置くと、ソフィーナがよろよろと寄ってきた。言いだしつぺでありながら、彼女も結構疲労しているらしい。

「ありがとう、ハイネ」

「どういたしました。ま、今の俺らじゃ理解できないことなのかもな。兄貴の言うとおり、きつと『そういうもの』なのかもしれないよ」

「そう……そう、かもね。でも、何かしらの理由はあるはずなのよ。いつか、その理由を知りたいわ」

「雨の日に外で魔術使えないって、面倒だしね」

「そうよ。いざ外で何かあった時に、不便じゃない。原因は突き止めるべきよ！」

また妙に燃えてきたらしいソフィーナ。対するハイネは、下手なことう言うんじゃないかと、と渋面になりながら紅茶をすすった。

………

「というわけなのよ。本当のところ、どうなの？」

「本当も何もあるか。そういうもんなんだよ」

翌日。ソフィーナはハイネの兄で、体育の講師であるアルマの元を訪ねていた。一通り話を聞いたアルマは、昨日のハイネにそっくりな渋面になって答えた。

「お前も知つてのとおり、この島周辺の霊相は特殊でな。術式とかそういうんじゃないだよ。確かに雨の日は不便で、場合によっちゃ危険でもあるが、受け入れるしかない。この時期を過ぎれば、雨が降る頻度も落ちるし、冬になれば気温が下がって雨が雪になるから、結構安全になるぞ」

ソフィーナの耳に、アルマの言い分は正しいように聞こえた。ただ、それでも納得できない思いも心中にある。

『理深き』の言葉に倣い、他者の理路整然とした意見を取り入れることに抵抗は無いが、逆に自分の内の理を通したいという欲求も強い。「そういえば、お前今週のブルーミングバトル実戦の授業、出ないのか？ エントリー無かったけど」

「ええ。まあ、私も私でやることあるし。大丈夫、夏休みが始まるまでに2回は出るわ」

「そうか。ま、何事にせよ、あんまり難しく考えんなよ、ソフィーナ」アルマはそう言って手をひらひらと振った。もう帰れ、と言いたいのだろう。確かに、放課後の時間帯にあまり拘束されたくないはずだ。

「難しく考えない、ね」

ソフィーナは、今アルマに言われた言葉を口に出しながら、次のブルーミングバトル実戦の授業にいつ出ようか、と考え――

ふと、何かが繋がった気がした。

「術式がないのに……効果だけがある……そう、これなら、可能……そのはず……」

「どうした、ソフィーナ」

訝しげにソフィーナを呼ぶアルマに、彼女は確信しかける可能性を口にする。

「誰かのエクシードっていう可能性があるわ」

その瞬間、アルマがついこぼした痛恨の表情が、ソフィーナの疑念を完全な確信に変えた。

……

「まさか、見破られるとは思ってなかったんじゃないですか？」

「当然です。ちゃんと隠してきたつもりですから」

雨の中を歩く、雫とすがさ。場所は青蘭学園特区の中だ。

「いったいどんな子なんでしょうか」

「素晴らしい才女だと聞きます。きつと才気あふれる、聡明な子でしょう」

行き先は、第二魔術工房。その中にある一番大きな部屋。そこを借りている、ソフィーナ・アルハゼン。

「通常業務よりもこちらを優先していいと仰せになられた親方様に、感謝ですね」

「親方様は、私という駒の特殊性が惜しいのですよ。同じことは貴女にも言えますよ、すがちゃん」

「私はバレてないですよね？」

「私のものは効果の範囲が非常に大きいですからね。それに、シャーリイのように限定的なものでもありません。すがちゃんは……すがちゃん自身が見えづらいから、大丈夫でしょう」

「それ、私のことデイスってたりします？」

「まさか。褒めてますよ」

くすくすと笑う雫を、頬を膨らませて見上げるすがさ。だが、すぐに自分も可笑しくなったのか、笑い始めた。

「まあ、学生の頃はいっぱい迷惑、かけちゃいましたしね……」

「あら、迷惑度合いなら私の方が上でしたよ。なにせ、毎日大雨になってた頃もありましたし」

「うわあ、すごいです」

「褒めないでください」

「いや褒めてないですけど」

……………

ソフィーナの確信めいた疑念は、完全な確信に変わりつつあった。彼女は例の魔術工房の大部屋にいた。ブルーミングバトル実践の授業に出ているため、今日はハイネはいない。

今日も雨が降っている。その雨を、前よりかなり多く採取し、改め

てそれに何の術式もないことを確認すると、彼女はごく単純な魔術式を編んで、その雨水に干渉しようとした。すると……

「……やっぱり、打ち消された」

雨水に触れるやいなや、術式は雨水に溶けるように崩れてしまった。

その後、もう1回雨水を調べる。すると、術式がないのはそのまま、今彼女が雨水に干渉するために編んだ術式——それに使用した魔力が、そっくりそのまま雨水に溶け込んでいたのだ。

「こんな芸当が可能なのは、エクシードしか考えられない」

ソフィーナは満足して結論を口にした。とりあえず納得できる答えが出せて満足だった。

満足だったが……だとすると、更なる疑問が1つ浮かび上がる。

「これ、誰のエクシードなのかしら」

そう。これがエクシードによるものだとすると、問題はその発生源だ。この雨は魔術を使う多くの人々に影響を——主に悪影響に違いない——及ぼしている。だということに、どうして青蘭はこの雨を発生させるプログレスを放置しているのだろう。

もしかすると、青蘭でも追いきれない、非常に強いプログレスなのだろうか。だとしたら、全力で探さなければならぬだろう。

「あるいは……その逆つてこともあるのかしら」

ソフィーナが思考の海に沈もうとしていると不意にドアがノックされる音が聞こえた。

「何かしら。……って、もしかしてエミル会長？」

前々から「たまにお部屋貸して〜」と言ってくる生徒会長の、妙に人を安心させる笑顔を思い出しながらドアの覗き窓を見ると、見たことのない女性が立っていた。

「誰？」

訝しげにソフィーナが尋ねると、その女性——レディーススーツに黒髪だ——は、微笑みながら、

「失礼、私、青蘭庁執行部魔術犯罪捜査課の雨宮雫と申します。ソ



ファイーナ・アルハゼンさんでお間違いないでしょうか？」

一瞬、彼女の言っていることの意味を掴み損ねた。聞こえた音を反芻すると、青蘭庁、執行部、魔術、犯罪、捜査課――

次いで、彼女の胸元に目が行った。青蘭で時折見かける、青い蘭を紫が取り囲む模様の小さなピンバッジが光っている。

「私が、何か脱法行為でも？」

「あの、そうじゃないんです。少し、個人的な話をしたくて参りました」

「なら、公の立場を名乗るのはどういうことなの」

「あっ!? いえ、その……一回やってみたくて、こういうの」

女性――雨宮はソフィーナの指摘に驚いたあと、頬を赤くして小声で言った。それを聞いたソフィーナは、やや脱力してしまった。

それに――

(いざ敵だったとしても、勝てそうね)

先日の御影凌雅との鬪いを忘れられないソフィーナは、より気合を入れて雨宮の霊気を視る。彼女の霊気は非常に静かで、一分の隙もなく全身を巡っているが、どちらかという戦い向きの霊気には視えなかった。恐らく、結界術師か治療術師といったところだろう。

「いいわ、上がりなさい」

「失礼します。……わ、本当に大きいですね。大学生の時に小部屋を1ヶ月だけ借りたことありますが、ここは別格ですね」

「そんなのどうでもいいわ。それで、個人的な話って何かしら？」

「はい。それは、その机の上にあるものについてです」

雨宮は落ち着いた表情で、テーブルの上に置きっぱなしだった検査呪具の群れを指さした。

「ええ。ちょうどこの島の雨について調査し、少しばかりの結論が出たところよ。それが何か？」

「それに関して分かったこと、お聞かせ願えますか？」

「……理由は？」

ソフィーナが問いかけると、雨宮はニコリと微笑んで告げる。

「答え合わせ、してあげますから」

「……面白いじゃない」

ソフィーナの頭の中で、幾つもの可能性が消えたのが分かった。雨宮は立場を明らかにした上で、ソフィーナの雨の研究について言及した。しかし、ソフィーナは研究のことを誰にも喋っていない。少なくとも、ハイネとアルマ以外には。別に話すようなことでもないし、ここまでムキになっているのは自分だけだったので、話すのを躊躇ったということもある。

なのに、雨宮はソフィーナの研究について述べ、その上で「答え合わせ」をすると言った。となれば、この雨は恐らく……

「この島の雨には、魔術を打ち消す力がある。魔術を溶かし、その魔力を内側に溶かし込む……そして、それ自体は魔術ではない。魔術抜きでそんな芸当をできる手段は限られている。場所がこの諸島であるということ鑑みれば、プログラムのエクシードである可能性が高い」

彼女が手短かに結論を言うと、雨宮は嬉しそうに微笑んだ、

「素晴らしいです。たった1人でここまでのことを調べてしまうとは。さすがは『理深き黒魔女』様ですね」

「で、答え合わせってのは？」

「はい、概ね正解です。それ、言ってしまうと私のエクシードです」

「あ、貴女の？」

これにはソフィーナも少し驚いてしまった。これが青蘭の管理課に置かれているプログラムのエクシードであるというのは、雨宮が訪ねてきた時点で察したが、まさか本人が出張ってくるとは思わなかった。

何しろ、影響範囲が異常である。青蘭島の最南端から白百合島の最北端まで、影響がほとんど同じだったことから、この雨の影響は、青蘭諸島をすっぽりと覆ってしまうほど広いのだ。それは、非常に強力なエクシードであるということの何よりもの証左だ。

「私のエクシード《エテジア蓄雨郷》です。広範囲に渡って大雨を降らせ、魔術式を溶かし、魔力を吸収する。そして、その効果範囲を、私の覚知下

に置きます」

「はっ？ 貴女、青蘭諸島全域を感知できてるってわけ？」

「魔術式の行使なら、ですけれどね。ここ数日間、青蘭諸島中で貴女の魔力を感じしました。悪いことを企んでいる者がいるのかも、と勘ぐりましたが、アルマ君が『うちの生徒が《エテジア雷雨郷》についての結論を出そうとしてる』と仰っていたので、直接尋ねにきました。その様子ですと、純粋な好奇心によるものようですね」

「まあ、そうよ。物事には道理があるもの。それを深くまで知ることが『理深き黒魔女』でしょう」

「ごもつともです、ソフィーナさん」

雨宮はにこやかに笑った後、きゅつと眉を吊り上げた。

「でも、このことは、決して他言無用でお願いしたいのです。どうか」  
「どうして？ この雨の効果自体は、誰でも知ってる。その原因を知られると、何がまずいの？」

「それは、私の所属を思い出していただければ、自ずとご理解いただけると思いますよ」

所属……とソフィーナは少し前の雨宮の発言を思い出した。

青蘭庁執行部魔術犯罪捜査課。

「……貴女、エクシードを犯罪捜査に使ってるのね。で、そのことが極秘事項ということなら」

「ご名答です。屋内で魔術を行使しても、漏れた僅かな魔力は屋外に出ます。私はそれを感じして、どこで犯罪的な魔術が行使されているのかが分かるのです。そのことが極秘ということまで、よく見抜けましたね」

「まあ、誰も知らないってことはそういうことですよ」

「はい。ということですが、このことはどうかご内密に……まあその、せつかく答えにたどり着いたのですし、ちよつとしたご褒美をあげますから……」

やや下手な口調でそう言った雨宮は、持っていたカバンからクリアファイルを取り出して机の上に置いた。何かと思えば……

「……商品券？」

「現金の譲渡はできない規則なので……その、これで何卒」

「そんな頭下げなくても、別に喋らないわよ」

お金には困っていないのだけれど……と内心ぼやきながら、弱々しい視線でソフィーナを見つめる雨宮を見ると、この女性が青蘭中を覆い尽くすほどのエクシードを行使できる、どころか、している最中であるということ忘れてしまっそうだ。

「しかし、貴女、そんなエクシードを持つてるなら、黒の世界に来たらとんでもないことになるでしょうね。あの世界、魔術回路がインフラと深く絡んでるんだもの。この効果範囲の広さなら、ケイオンを丸ごと覆えるでしょうし、魔王も倒せるんじゃない？」

「とお思いだったのですね。私、残念ながら黒の世界には行けないのです。渡航禁止令の対象です」

「渡航禁止令？ そんなのがあるの？」

「はい。私の能力が黒の世界の根幹を揺るがしかねないので、魔王様から直々に書簡を頂きました。内容をざっくり言えば『本当に申し訳ないが、頼むからこの世界に来ないでくれ』というものです。同じようなものが、赤の世界の大天使様からも送られてきました」

「それは……なんというか、ご愁傷様」

「別に良いのです。確かに他の世界に行けないのは残念ですが……でも私は、自分を育ててくれたこの青蘭を守ることに生涯を捧げようと思っっているのです」

守る。

その言葉に、ソフィーナはハッと気付いた。もし仮に、考えたくもないが、黒の世界が青の世界に攻め込むようなことがあったなら。彼らは魔術をもって戦いを仕掛けるだろう。

だが、青蘭の側に雨宮が1人いるだけで、魔術攻撃はまるで役に立たなくなる。それどころか、魔術を行使しようとすれば位置を捕捉され、逆に攻撃を受けることになる。雨宮がいる限り、この諸島を魔術で攻めることはできないのだ。

たった1人で、世界1つにも対抗できる。それがエクシードという

ものの極致なのかもしれない。

「ただ……」

「何？」

そこで唇に人差し指を当てた雨宮は、やんわりとした、暖かい霧雨のような笑みを浮かべた。

『『来ないで』っていう代わりに、お詫びとして色々貰ってるんです、私。だから、私とあなたは、似た者同士ですよ』

………

それから3日経ち。今日も、雨が降っていた。

「そういや、ちよつと前まで雨雨ってうるさかったけど、あれって結局どうなったの？」

「うるさいとはぐ挨拶ね。結局、この島の性質ってことで理解したわ」「理深き黒魔女のお墨付きなら、安心だね」

「そういうこと」

教室内は雨天の日特有の、奇妙な静かさに包まれている。外からは、パラパラという雨音が絶えることなく流れてくる。

ソフィーナは窓を少し開けると、指先を突き出して、魔力を一筋放った。その魔力は、相変わらず雨に溶けてしまった。

この雨が、知らず知らずの内に、自分たちを守ってくれているのかもしれない。

「……雨続きも、いいかもね」

彼女はぼつりと呟くと窓を閉め、クラス委員長としての務めに戻った。

## 8話 小さな命

7月に入って、いよいよ気温が上がってくる時期になった。長袖の洋服は箆笥に仕舞われ、半袖の出番がやってくる。

「暑いねえ」

「いよいよ日差しが強くなってきたもんね」

「そうだねえ。汗かいちやう」

今日は土曜日。学生にとっては嬉しい休日だ。青蘭学園に通う生徒は、こういう休日には商業地区まで出てきてシヨツピングを楽しむものである。無論、日向美海と岸部沙織も例外ではない。異能力エクシードを持つプログレスと言えど、中身は普通の女子高校生なのだから当然だ。

仲良しの希美は、まだ寮に残っている。やることがあるからとのことで、それが終わったら急いで行くと言っていた。

「どこで希美ちゃん待とつか」

「うーん、港湾地区近くの噴水公園とか。あの辺、セレクトシヨツプ多いでしょ？ アクセサリーとか見たいんだよね」

「それいいねー。じゃあそうしよつか」

夏の訪れを感じさせるような日差しを浴びながら、美海と沙織は東居住地区から商業地区に向かって歩いていった。海沿いの道は潮風を感じられて、この青蘭諸島に来てから4ヶ月が経つのに、まだ新鮮な気分になる。実際、美海も沙織も、まだまだ青蘭諸島の詳細な情報を知らない。

「もう少しでね、私のお母さんが、青蘭島に移住してくるの」

「そうなの？」

歩いている最中、沙織がぽつりとそう漏らした。美海が聞き返すと、沙織は少し照れくさそうに「うん」と答えた。

「本土での手続きが終わったから……もう、残すものは何もないからって」

「そっか。よかったね」

「うん。だからなんていうか、お土産、っていうのも変だけど、これか

「らもよろしくねって」

親の話題は、両親から冷たい扱いを受けてきた美海にとっては少し思う所がある。希美との大喧嘩の後、美海は喧嘩の原因を沙織に教えるために、自分の両親のことを話した。話が終わった後、沙織は少し考えてから、自分の身の上のことを少し語ってくれた。それによると、沙織の父は、彼女がまだ幼い頃に亡くなっている。両親についてデリケートなのは、美海だけではないのだ。

父がいない家庭は、どうだったのだろう。学校で、心無い悪口を言われたかもしれない。小学生くらい幼いと、考え無しの男子には片親を馬鹿にする子も存在してもおかしくない。だが、沙織はまったくそういう負の感情を見せなかった。

『私も、お父さんがいないから……美海ちゃんと、似てるのかな』

沙織はそう言って優しく微笑みだけだった。その時の沙織はひどく大人びて見えて、大喧嘩していた美海は少し恥ずかしくなった。

「お母さんもね、プログラズなんだ」

「そうなんだ！へえ、そんなこともあるんだね」

「うん。とは言っても、お母さんのエクシードが何だかは知らないんだけど」

「そうなの？」

「本土は平和だから、使う機会も無かったし。私もそうだったけど、本土でプログラズだつてことがばれると、居心地悪いから」

「それは……そうだね」

青蘭諸島は、あまり広くないからこそ治安がかなり良く、離島でありながら他の3世界がそばにあるため娯楽も多い。選ばれた者だけが行くことができる楽園のような島々だ。逆に言えば、行く権利を持つ者を選定しているからこそ、楽園で有り続けられる、とも言える。青蘭諸島へは日本からしか行くことができず、その権利を持つのは、原則として日本国籍を持つプログラズ及びαドライバー、そしてその親類3親等までのみ。しかも、それらにしても、身辺調査から血統調査まで、多岐に渡る厳重な審査がある。スパイなどの侵入を防ぐためだ。美海らと同じクラスに所属しているエミリー・マツクは、非常に

珍しい例だと言えるだろう。

特定の人間が、常人よりも有益な権利を持っている場合、人間はそういう人種を妬むものだ。かつて美海も、青蘭学園からスカウトされた際、それを知ったクラスメイトから心無い陰口を叩かれて大いに傷ついた記憶がある。冬吾の両親のように、青蘭に対するアンチ思考を持つ人間も一定数存在するほどだ。

とはいえ、こちらに来てしまえば、そう気になることもないが。そんな話や、勉強の話やらをしながら、人気ひとけのない海岸沿いの公園に入った。防砂林も兼ねた公園で、高い木々が立ち並んでいる。そのおかげで、日差しが遮られて、海風が心地よかった。

「ん？　なんか、にやーにやーって」

「確かに聞こえるけど」

ふと、猫好きゆえに猫の鳴き声に敏感な美海の耳が、猫の鳴き声をキャッチした。妙にくぐもっている。

沙織もそれに気づき、なんだろうと辺りを見回すと……

「あつ、あれ！」

「箱？」

木の陰に、タオルケットが被さったダンボール箱が置かれていた。タオルケットが、ぽこん、ぽこんと、内側から時折持ち上がっている。

美海が近付いてタオルケットを取ると、そこにはまだ小さな仔猫が2匹、入っていた。

「猫ちゃんだー！　可愛いー」

「確かに可愛いけど、この子たち、捨て猫だよね」

「そ、そうだよ。どうしよう……」

2匹の仔猫は、初めて見る美海達のことを警戒する様子もなく、無邪気にじゃれあっていた。大きさからして、生後1ヶ月がいいところだろう。可愛い。非常に可愛いが、明らかに捨て猫だ。寮に持って帰ろうか、と一瞬思いついたが、それはあまりにも無責任だと思い直した。もしかしたら、寮の中に猫アレルギーの人がいるかもしれない。そもそも、寮でペットを飼っても良いのだろうか。

(そういえば、文月寮には妖精さんが2人住んでたよね)



赤の世界からの留学生が住んでいる寮・文月寮には、赤の世界から来た2人の妖精が住んでいる。妖精の中でも非常に知能が高く、何よりヒト語を喋れるので、美海はとりあえず2人を「人」と数えていた。だが厳密に言えば、妖精は赤の世界では虫か何かと同じような扱いになるらしい。もし本当に「虫」と数えたなら、文月寮は虫を2匹飼っているということになるが……そこは寮監の匙加減次第なのだろうか。

「とりあえず、希美ちゃんに連絡しよつか。ここにいるよって」

「そうだね。希美ちゃんが来るまでは、この子達の様子を見ておこう」  
沙織が希美にメッセージを送ると、2人は仔猫達を眺め始めた。美海は抱き上げたがったが、それは沙織が制止した。出元が分からないため、何か病気や寄生虫に感染している可能性があるからだ。

とにかく、捨て猫たちは素人の自分たちがどうこうするべきではない。という話をしながら、仔猫たちが箱の外に出ないように見張っていると……

「おい、お前達。そこで何をしてる」

後ろから声がかかった。びっくりして振り返ると、そこには1人の男性が立っていた。それを見たショックで、沙織は腰を抜かした。美海は後ろにすっ転んだ。

ただの男性ではなかったのだ。短く刈り込んだ金髪に、ミラーコーティングのサングラス。耳にはシルバーの鋭いデザインのイヤークラフを付けており、首元にはぎらつく金属のネックレスがじゃらじゃら。黒ランニングの上からアロハシャツとジーパンという服装自体はまだ普通だが、そのアロハシャツはものすごい極彩色だし、その袖口から伸びる手にもアクセが巻かれていて、バックルは銀のいかつい髑髏型。大きな手、その指という指にゴついリングが嵌められており、手が常人の倍くらい大きく見えた。見上げるくらい背が高く、顔立ちはシャープで、鼻も高いが、それらの印象全てが、彼の身に付ける装飾品によって攻撃的になっている。

何かと言うと……振り返ったら、恐ろしく厳つくてでかいヤンキー

がいた、ということだ。

「ひいつ!？」

思わず声が出た。だけどこんな奴が後ろに立っていたら、誰だって声が出るだろう。そんな様子の2人を見て、男はニヤリと笑った。

「日向美海と、岸部沙織か」

「な、なんで私たちの名前を?」

「この間のブルーミングバトルに出ていただろう。その時に知った」  
発せられた声は、意外にも低くて落ち着いた声だった。なんとなく恐怖感が薄れた気がするくらいだ。だが、容姿がやばすぎるので、警戒心はまるで解けない。

何となく敵対的な雰囲気を感じ取ったのか、男は2人のさらに後ろ——ダンボール箱に入った仔猫たち——を見て、訝しげに口を開いた。

「……猫か?」

「え、えーと、あのっ」

「こ、この子たち、捨て猫みたいで……」

その返答を聞いた男は、足を一步前に踏み出した。  
何をやる気なんだろう。多少ショックが薄れた美海は、どうしようどうしようと、そんなに良くない頭をフル回転させて、この男にどう抵抗するか考え始めた。

が、それよりも前に沙織が動いた。彼女の左腕が、青い炎に包まれたのだ。エクシードを使う気だ。

「こっつ、この子たちを、傷つけないでっ!」

ちよつと早とちりが過ぎるんじゃないですか沙織さん、と焦る美海の横で、沙織の腕から溢れた炎が広がり、美海とダンボール箱を包み込んだ。だが、全く熱くはない。沙織のエクシードプロミネンス・フレア《青き炎の守護神壁》は、その炎に包まれた者を守るのだ。美海がこれを受けるのは初めてだったが、肌を舐める炎が、少しくすぐったかった。

対する男は、サングラスの向こうの目がどうなっているのかは分からないが……口を呆れたように曲げた。

「学園の許可なく、エクシードを使うな」

そう呟き、一瞬息を吸い込むと、ヒュツと音を立ててすぼめた口から息を吹き出した。すると、まるで突風に煽られたかのように、沙織の炎が——炎だけが——激しく揺れ、消し飛ばされてしまった。美海も沙織も何が起きたのかさっぱり分からない。頭の中を、大量の「どうして？」が駆け巡る。

その混乱の中で、先に立ち直ったのは美海だった。右腕のブレスレットに力を込めると、それは瞬時に銀色のレイピアに変化した。美海のエクシードを制御している呪具《ミストラル》だ。

美海は慣れた手つきでミストラルを構え、そこに風を纏わせる。とにかく、この男をどこかに吹き飛ばして——

「二体全体、何やってんだいあんたら」

そこに、また聞き慣れない声が掛かった。今後は女性の声、しかも上空からだ。驚いて上を見上げ——ようとして、付近の異変に気付いた。美海と沙織を、金色の霧が覆っている。しかも、何故か身体が動かない。

「よつと」

掛け声と共に、周辺の木の上から飛び降りてきた女性も、また奇抜な格好をしていた。なんと、この暑い中で、ライオンのたてがみのような色のファーが付いた黒いコートを着ているのだ。髪は明るい茶色で、短く切り揃えている。それに、いかにも「いたずらっ子です」と言わんばかりの顔つきをしている。身長は美海らと大差ないが、明らかに身に纏うオーラが違っていた。

「旦那、何青蘭の生徒をビビらせてんすか」

「別にビビらせたわけじゃ……それを言うなら、テメエこそ何勝手にエクシード使ってたんだ」

「そっちのツイインテの子が旦那をぶっ飛ばそうとしてたから止めてやったんでしようが。マジでぶっ飛ばしてたら、こっちの子の処分が重い。ほら、これで動けるよ」

黒コートの少女がさつと手を振ると、美海らを包んでいた金色の霧は跡形もなく掻き消えた。その少女とヤンキーみたいな男が言い争いを始めたので、美海も沙織も地面にへたり込んで、事の成り行きを見ている他なかった。

「大体ミスティカ、なんでテメエがここにいるんだ。親方から別の仕事任されてたはずだろ」

「通り道でたまたま旦那を見かけたから寄っただけだよ！ そんなことくらいでオヤジは怒んねえって！」

「テメエも一応社会人ならな、もつとマシな言い訳考えろ！」

「あーこれだからザークの旦那はケツの穴が小せえって言われんだよ！ そんなだから、こないだだってセレナさんが——」

「ぼつ、セレナの話は止せ！ テメエこそ、ガブリエルにあーだこーだ言われんのが嫌だから親方の——」

「はア!? が、ガブリエル様はどーでもいいじゃん！」

美海らそつちのけでどんどんヒートアップしていく様子にあつげにとられながら、そつとダンボールの中を覗いて仔猫たちを見ってみると、くりつとした瞳で、不思議そうにこちらを見上げていた。

「……かわいいね」

「……そうだね」

2人して現実逃避しようと、仔猫たちの可愛い様子を眺めていると……

「おまたせ〜！ ……って、ザークさん、ミスティ先輩。何してるんですか？」

「ん？ ああ、小鳥遊」

「あ、希美っち。おひさ」

走ってきたらしい希美が目をぱちくりさせて、言い争っている2人に声をかけた。

………

「アツハハハ！ ザークさん、そりゃビビるでしょ！ 美海はともか

く、沙織とか超ビビリなんだから。もう少しファッション抑えたらいいのよ」

「ほら見ろ、やっぱりビビらせてんじやないすか」

「……濟まなかった、2人とも」

どうやら希美と知り合いだったらしいヤンキーみたいな男は、神妙な面持ちで——と言つても目はサングラスに隠れているが——美海と沙織に頭を下げた。

「ザーク・スプリングだ。青蘭庁執行部、魔術犯罪捜査課の者で、一応、赤の世界出身だ」

「ぎ、ザークさん、ですか」

「よ、よろしくお願いします」

よ————く見れば、極彩色のアロハシャツの左胸に、青い蘭を紫が取り囲むデザインのパッチが付いている。見慣れないが、これは魔捜官の証だ。つまり、ヤンキーに見えるが公務員だったということだ。

ついで、黒コートの少女も自己紹介してくれた。

「あたしはミステイカ。赤の世界出身で、天使だよ」

「て、天使さんですか。レミエルちゃんとかエルエルちゃんみたいに？」

「あの2人を知ってるんだ。そうだよ、ほら」

少女——ミステイカはぐるりと首を回すと、勢いよく手を広げた。すると、黒いコートが羽根となって解け、黒い翼になって広がった。ライオンのたてがみのようなファーも、鳥の翼で言う雨覆あまわおの部分に移動して、如何にも威厳が感じられた。

そして、翼の下は流石に半袖シャツだった。胸元にパッチもある。

「おおー、すごいですー!」

「でしょ? あたしもこのヤンキーと同じところに勤めてつから、なんか困ったことがあったらおいで」

「すごい。いわゆる、墮天使ってやつですか?」

黒い翼に感動した美海が何の気無しに放った一言。それを聞いたミステイカは一瞬固まったあと、

「ちがーう！ 赤の世界にもね、最初からこういう黒い翼で生まれてくる天使がいるの！ 断じて！ 堕ちてなんかいいんだよ！ 分かった!？」

「ひいつ！ 分かりました！」

「うむ、ならよろしい。ま、出来ない天使なのは否定しないけどねー」  
物凄い剣幕で怒ったかと思えば、美海が謝った途端にケロツと笑顔になっていいるミスティカ。これは中々癖が強そうだが、と美海も沙織も思った。

そんなミスティカが、ふと何か思い出したかのように美海に声を掛けた。

「そーういや、この前サヤセンから聞いた、風使いの子って君でしょ。日向美海っち」

「そ、そうです…って『サヤセン』って誰ですか？」

「蒼月紗夜。あのいけ好かないヤツ、あたしの一個上の先輩なのさ。」

「一応先輩だし、紗夜先輩、略してサヤセンね」

「紗夜先輩とお知り合いなんですか」

「まーね。あたしはみ出ものだったからさ、入学してからずっと注意されっぱなしで」

翼を元のコートに戻しながらサラツと言うミスティカ。その横で、希美が口を開いた。

「とか言っちゃって。ミスティ先輩って、紗夜先輩の次の代の生徒会長だったんだよ」

「えっ、生徒会長!？」

「こら希美っち。余計なこと言わなくていいの。もう昔の話さ」  
「って言っても、たった3年前のことじゃないですか」

「げっ、もう3年も経ったのかよ。時間が過ぎるのは早いなあ。まあそんなもんだから、困ったことがあったら力になってあげるよ。連絡先教えといてあげてね、希美っち」

「はい、オツケーです」

ミスティカはうんうんと頷くと、何やら金色の霧のようなものを纏い始めた。先程美海らを覆ったものと同じだ。

「んじや、あたしは仕事に戻りますよ。旦那も道草食ってないで、さつさと戻ることつすね」

「余計なお世話だ。さつさと行け」

「はいはいよー。そんじや、バーイ」

と言うが早いか、彼女の輪郭が霧に薄れ——晴れた頃には、そこには誰もいなかった。

「い、今のって、エクシード?」

「うん。ああやって移動できるから、神出鬼没なんだよね、ミステイ先輩って」

唐突に現れた、元青蘭学園生徒会長が見せた実力の片鱗。そういえば、先程はあの霧で動きを止められたのだ。まったくもってすごいエクシードだ、という感想しか出てこない。

ミステイカの消えた後から目を離せずにいると、後ろで咳払いが聞こえた。ザークだ。

「さて……だいぶ逸れたが、お前ら、その猫は動物病院に連れて行け。そこで感染症とか寄生虫の検査をしてもらえ。そのまま預けるのも手だが……どうするんだ?」

「ど、どうしよっか。寮で飼えないかな」

「誰がお世話するのよ」

「そうだよ。この子たち、まだ小さいし」

美海たちはあーだこーだと言いつつ末、結局病院の判断を仰ぐことにした。里親を探すにせよ、万が一寮で飼うにせよ、とりあえず仔猫たちを安全な状態にしなければならぬ。

「……そうか。なら、急げ。場所は分かるか?」

「は、はい! 今調べました」

「よし、じゃあ行け。何かあったら連絡しろ。いいな?」

ザークは指2本で名刺を渡しながら言った。3人が頷くと、商業地区の方を顎でしゃくった。早く行け、ということなのだろう。

「ありがとうございます!」

「礼はいい。それと」

と、そこで彼はニヤリと笑って、

「学園の許可無く、エクシードを使うなよ」

「は、はいっ。失礼します！」

僅かに飛んでいくことを考えていた美海は、その思考が見透かされたみたいで少し恥ずかしかった。

「見かけによらず、いい人だったね、ザークさん」

「あの人は見かけで誤解させる天才だよ。もう少しまともな格好すればいいのにね」

「そうだよ……見かけが怖すぎて、私、間違えてエクシード使っちゃったの」

「沙織が？へえ、やるじゃん」

なるべく揺らさないように美海が抱えた箱の中を見ると、2匹の仔猫は戸惑ったように辺りを見回していた。

「大丈夫だよ。きつといい飼い主さんが見つかるからね」

「もし見つからなかったら、寮で飼えないかなあ」

「小春さんがいいって言えばいいんだろうけど、そう上手く行くもんなあ」

3人は軽口を言い合いながら、商業地区へ向かった。

……………

去っていく3人の背中を眺めながら、ザークはしばし佇んでいた。

街中には至るところに監視カメラがある。この公園も例外ではない。監視カメラの映像を辿れば、あの仔猫らを捨てた人間を特定することは、恐らく可能だろう。そして、特定した人物の家へ赴き、どうして猫を捨てたのか問い詰めることもできる。生き物を捨てるのは条例違反だ、罰則を与えるぞ、と脅しを掛けることができる。

が……。

「……楽しそうだから、いいか」

ザークはそう呟くと、仕事に戻ることにした。



## 9話 アイの道

名前は岸部アイ。

年齢は16歳。女。出身地は不明。

「ゆーま、おなかすいた」

「今食ったばっかだろ、我慢しなさい」

そんなパーソナルデータの彼女、岸部アイは、保護者である岸部雄馬に訴えかけた。が、まだ昼食を摂ってから30分足らずの時刻だ。彼は呆れるだけで、食べ物はくれなかった。

「ハレはくれるもん、ドーナツ」

「そうか。ハレ、お前甘やかしすぎだぞ」

「いいじゃないですかあ。アイちゃん、甘え上手なんですもん」

「そうかあ？」

雄馬が台所で片付けをしている女性に声を掛けると、彼女は弱ったような声を上げた。少し色の抜けた黒髪を伸ばした、綺麗な女性だ。名前はハレ。雄馬の式神・護法童子で、普段は彼を守護しているが、家にいる時は主に家事をやっている。少し弱気なところもあるが、非常に優秀な式神らしい。

……というのはアイがみんなから聞いた情報であり、アイにしてみればハレは「甘えやすい相手」のようなものだ。

「でも、来た当時に比べれば、本当に良くなったじゃないですか。たまにはご褒美をあげてもよろしいのでは？」

「ん〜……そうだなあ」

「もう。どうしてご主人様は、基本女の子には甘々なのに、アイちゃんには結構厳しいんですか？」

「そりゃあ、こいつが娘みたいなものだからだろ。しかも、生まれたばっかりの。甘やかすだけが愛情じゃねえんだぞ」

「ゆーま、きびしい。お菓子たべたい」

「後でな。言ったら、おやつは3時って。それまでは我慢、な？」

「んもう」

どうせ言っても聞く耳持たずなので、アイは諦めてソファに座って

パズルのゲームを始めた。かれこれ数ヶ月間、同じゲームをしているが、あまりに新鮮でかつクリアできないので、まったく飽きていない。「この辛抱が、どうして他に活きないもんかな」

「いいじゃありませんか。アイちゃん、すっかり良くなりましたよ」「それも、そうだな……」

雄馬はそう呟いて、雑誌を手にとって読み始めた。そんな雄馬とアイを、ハレはまるで母親のような眼差しで見ていた。

……………

アイと初めて出会ったのは、今年の1月の下旬だった。

「うーさぶ……この季節は流石に寒いな」

暑がりの雄馬も、寒波には負けるもので、コートの前面をしつかりと閉めて夜道を歩いていた。仕事で帰りが遅くなるのはいつものことだが、バスの時間を逃したのは痛かった。

彼の自宅は、青蘭学園生の寮が点在する東居住地区ではなく、経済・行政地区にほど近い西居住地区にあった。東よりも静かなのが利点だが、学園特区との交通の便はそれほど良くない。何せ、経済・行政地区をまるごと横切らなければならぬからだ。じゃあなぜ東居住地区に住まなかったのかというと、これには彼の仕事が大きく絡んでいた。

雄馬は、青蘭学園教務課に務める、全部で7人しか認められていない『オンラインサー権限者』である。

『権限者』とは、学園内の自治を行っている教官、その中でも特殊な性質を帯びたαドライバーを指す呼称である。無論、一般の生徒はこれの存在を知らないが、生徒会長や風紀委員長などはこのことを知っている。

業務内容は、平時は教官として働きながら、学園内のプログレスではどうしようもない事件が起きた時に出勤し、事件を沈静化させる。事件の内容は様々だが、最も多いのはプログレスがエクシードを暴走させることだ。それを鎮圧するのが仕事のため、非常に高度な戦闘能

力が求められる。

求められる能力は多岐に渡る。1人で複数の暴走状態のプログラスを鎮圧することなど、当たり前のようにできなければならぬ。

彼らは分類上、青蘭庁の学園運営部に務める公務員に当たる。学園運営部とはいうが、彼らの出番は学園内だけでなく、学園の外にも及ぶ。プログレス絡みならば、青蘭諸島のどこで、どんな事件が起こっても、それをどうにかするのが彼の仕事なのだ。

そういう仕事の関係上、彼は西居住地区担当になり、そこに住まざるをえなくなってしまうのだ。

(まあ、住み心地の良い家はもらったし、賢緑島まで帰んなきゃいけない海斗に比べりやましだけども……)

声に出さないちよつとした文句をぶちぶちとやっていると、不意に光を感じた。妙な光を。

「ん……？」

現在雄馬がいるのは『青蘭スポーツの森』の中だ。体育館や陸上トラック、マラソンコースやテニスコートなど、陸上スポーツならなんでもござれな巨大な公園で、帰宅ルートの中に入っている。当然そこには、ブルーミングバトルを行うためのコロシウムもあった。そして、彼は今、ちょうどその横を通りかかったのだが……。

「なんだ……緑の光なんて」

コロシウムから、緑色の光が漏れているのが見えた。絶対に何かある。そう確信した雄馬は、すぐに入口をカードキーで開け、コロシウムの中に入った。

コロシウムの中央には、少女が1人、佇んでいた。

見たこともない少女だ。暗くてよく見えないが、月明かりに映える銀髪だ。それに、見覚えのない黒い軍服を着ている。彼女は何が起きたのかさっぱり分からない、という風に呆然と辺りを見回していた。

その赤い眼が、雄馬を捉えた。無感情な眼差しだった。

一瞬、悩んだ。彼女は何なのだろう。彼を見ても、そこに何の新鮮

さも映さない瞳が、いやに不気味だった。

だが、友好の道があるなら、それを選ぶに越したことはない。

「やあ、君——」

そこで言葉を切ったのは、ナイフが一本飛んできたからだ。まっすぐに心臓を狙っていた。だが雄馬も（まだ未熟とは言え）権限者だ。胸にナイフが突き立つ直前で、その刃を指で掴み取った。

——こりや、久々にマジなやつだな

若干冷や汗をかきながら、雄馬はコートを脱いで、そのへんに放った。向こうがその気なら、こつちもその気で行く。そうしなければ——殺されるのは目に見えている。

「おいおい、いきなりそれはねえだろ。君がそういう手合いなら、俺もそうするが——」

「——壊す」

か細い、風に乗って消えてしまいそうなほど薄い、しかし強い声。少女はその一言だけしか放たなかった。しかし、それで十分だとすぐに分かった。

彼女を取り巻くように現れた、数十本のナイフ。先ほどのものと全く同じだ。それが、まるでガトリングガンのように雄馬めがけて発射された。

「——ハッ！ いいねえ」

だが、そんな状況にも、雄馬は動じない。太々しく笑い飛ばすと、ぐつ、とコロシアムの地面が抉れるくらい強く踏みしめ、横っ飛びに避けた。

しかも、避ける刹那。飛んできたナイフの、今度は柄を掴み、それを少女めがけて投げ返した。久々に暴れられそうで、筋肉が、心が、魂が喜んでいいる。投げ返されたナイフは、明らかに少女が撃ってきた速度よりも速い。

暗さのせい、少女は反応できなかった。恐らく、自分のナイフが投げ返されることを想定していなかったのだろう。ナイフは少女の右肩に突き刺さる——どころか、その勢いのせいで周辺の肉を抉り飛ばした。鮮血が散り、少女は痙攣したように身体をビクつかせる。痛

覚は感じるのだろうか、少女は肩を抑えて俯いた。

「どうだ、やめるか？」

雄馬が声を掛けると、少女は再び雄馬を見た。今度は明確な感情が宿っている。それは、驚きだった。まるで、抵抗されるということ自体が新鮮であるかのように。

「――壊す」

その掛け声と同時に、今度はナイフが数百本現れた。コロシウムから見える空を埋め尽くさんばかりの量に、流石の雄馬も瞠目する。

「――行け、《ミリアルディア》」

――マズいな。

右肩を抉られたダメージは相当なものだろう。だが、少女はまるで戦闘意識を捨てない。恐らく意識を絶たないと駄目だ。だが、ナイフを投げ飛ばしてでの攻撃では意識を奪えない。痛覚のショックで気絶させるという手が頭を過ぎらなかつた訳ではないが、そうしたら彼女の生死に関わる。

――ぶん殴るしかねえな。

雨のように、しかも雨よりも速いスピードで降ってくるナイフを、避ける。避けながら、少女に近づいていく。

当然、避けきれはるはずがない。腕に、脚に、ナイフが刺さっていく。しかも、地面に落ちたナイフを操作したのだろうか、背中にも刺さった。だが、絶対に急所だけは狙わせない。頭も心臓も、未だ無傷だ。

まるで泥の中を這い進むかのようなだった。しかし、こんな状況でも雄馬は面白くてたまらない。いくらナイフが突き立っても、微塵も揺るがない戦闘意識がその瞳にぎらつく雄馬を、少女は驚愕の眼差しで見つめるだけだった。

「手間、掛けさせんな」

そしてついに、雄馬の拳が少女に届いた。空気を震わせるほどの鉄拳が少女に突き刺さり、彼女は意識を絶たれた。予想通り、ナイフの雨は止み、体中に刺さったナイフも消滅した。

「あつ、マズい……」

ナイフが消えたということは、全身から出血し始めたということ

だ。彼は慌ててポケットから携帯電話を取り出すと、とりあえず目に付いた電話番号に掛けた。それと同時に、失血によりめまいが起きて、コロシアムの地面に倒れた。

『……もしもし、雄馬くん。どうしたの、こんな遅くに?』

「凌雅か……スポーツの森のコロシアムに……来い……あと救急車呼んで……」

『な、何があったの!?!』

「やべえのと戦って……し、死に、そう……」

……

「容態は?」

「お前は大丈夫なのかよ?」

「俺はすぐに治るから。で、彼女は」

「安定してるよ。手術は無事成功。外傷も治ったし、胸部に埋め込まれていた装置も摘出できた。今は、そっちの調査を進めてる」

「その、各部位アンドロイド化については……」

「それも成功。一部臓器と骨格、それから脳を少し、アンドロイド化してきた。これまでの彼女の通りに動けることだろう。とはいえ、まさかミハイルだけじゃなく、エスナまで来るとは」

「エスナ……って、確かE. G. M. A. の直轄アンドロイドとかいうやつ?」

「そうだ。少し喧しいが、腕は確かだったぜ。しかし、危なかったな。エスナがいなきや、エクシードの移植までは上手くいかなかっただろう。移植つっう言い方はちよつと語弊があるが……どっちにしろ人間には荷が重い作業だった」

「じゃあ彼女は、今まで通りにエクシードを使えるんだな?」

「そうだ。だが、少し出力は落ちるだろうってエスナは話してた。まあ、これは使い込んでいけば元に戻るだろうとも言っていたが。それと、脳を調べる過程で、彼女に掛かっていた洗脳も解いた」

「やつぱり洗脳されてたのか」

「ああ……だが、薬物で洗脳した影響で、恐らく改造される以前のものであろう記憶は完全に破壊されていた。それは復元できなかつたんだ。済まない」

「謝るなよデルタ。お前のせいじゃない」

「ありがとう。それと、彼女から改造後の記憶を取り出した。その検証もしないといけない」

「あの子、どの世界から来たんだろう」

「恐らく、黒でも赤でも白でもない。何せ、装置の原動力になっていた水晶の色は緑色だったんだ。エスナもデータを持って帰った。僕らも調べる」

「そういえば、あの子を見つける直前、緑色の光が見えたんだ」

「緑の世界……そんな世界があつたとして、あの子のような改造プログレスを作ってるんだとしたら……まるでブルーエデンの再来みたいじゃないか」

「聞きたくない名前だ」

「僕もだよ。だが、その世界が近づいているのは、明らかなんだ。彼女は、きつと予兆に過ぎない」

「予兆、か……何事も起きないといいが」

「そうはいかないのがこの世界ってものだ。お互い、覚悟を決めるしかないな」

……

目が覚めると、見たこともない真っ白な天井が目に入った。

「……………」

感じたことのない涼しい気分が、胸の中を満たしているようだった。窓から入ってくる冷たい風、そして、ざあざあという、聞いたことのない音。

音だらけなはずなのに、不思議と、静かに感じた。

「……………寝覚めはどうか、君」

その声に、少女の意識はハッと覚醒した。ナイフを呼び出そうとし

た。だが、出ない。

「大丈夫だ。俺は君の敵じゃない。大丈夫だよ」

優しい声だった。見上げると、あの夜に戦った相手の男が、ベッドの脇でニコニコしながら立っていた。

「……だれ？」

「俺は、岸部雄馬。雄馬って呼んで」

「……ゆーま」

「うん、いい子だ」

雄馬は手を伸ばして、少女の頭の上に置いた。その時、少女は何もできなかった。それで初めて気づいた。

「……こえ、聞こえない」

「え、聞こえてないの？」

「ちがう。あたまの中が、静かなの」

「……そっか。大丈夫だよ」

雄馬は少女の頭の上に置いた手を、そのまま動かした。髪がかき混ぜられて、妙な気分になった。滅多に覚えない気分だ……。

「……きもちいい」

「だろ？ 頭を撫でられるのは、気持ちがいいもんだ」

雄馬は、しばらく少女の頭を撫でていたが、不意にかがみ込んで、お互いの目線の高さを合わせた。

「君、名前はなんていうの？」

「……アインス。アインス・エクスアウラ」

「アインスね。長いから、アイでいいや。アイって呼ぶよ。分かるかな？」

「……アイ。うん。アイは、アイ。わかったよ」

「えらいな、アイは」

「でも……こえが、聞こえない。あたまの中で、ああしろ、こうしろ、つて言ってたこえ、聞こえない。アイ、どうすればいいのかな」

「どうにでもできるさ。俺に任せろ」

少女——アイは、嬉しそうに微笑む雄馬の顔を見て、また不思議な気分になった。



壊すつて、いったいなんだったのだろう。

.....

それから、2ヶ月が経った。

「風呂で寝るなって言っただろ？ ほら、こうやってのぼせることになる」

「うう……」

「他は割といい子なのに、なんでこれだけは守れないもんかね」  
「ごめん、なさい……」

アイは、これで12回目の注意を受けているところだった。

身元不明の彼女は『岸部アイ』と名付けられ、雄馬が引き取ることになった。あまりにも常識知らずの彼女は、雄馬の教育によってこの世界に馴染みつつあった。まだ家から1人で出することは許されていないが、時々なら雄馬同伴で外出できるようにもなっている。

「ほら、水飲んで」

「ん……ありがとう」

「どういたしまして」

アイはこの世界の文化をえらく気に入ったらしく、雄馬が家に持つて帰ってくるもの、そして元から家にあるもの全てに興味を示した。青の世界の中でも日本ならではの『湯浴み』という文化も、彼女が気に入ったもの1つだ。だが、適温での入浴があまりにもリラックスできるようで、彼女は放っておくと湯船の中で眠ってしまうのが問題だった。アイが湯船の中で寝ているのに気付く度に、ハレはアイを湯船から引き上げる必要がある。当然アイはのぼせているので、身体拭きから服を着せるまで、全部ハレの仕事に追加だ。最近になって頻度は落ちてきたが、そろそろ大丈夫かなと思つたタイミングでやらかすものだから、ハレとしては溜まったものではない。

その他で言うと、特に甘味の類への食いつきはすごく、雄馬はこれをご褒美にすることで教育のスピードを高めていた。

中でも不思議な反応を示したのは、ドーナツである。

「これ、ドーナツ」

「知ってるのか？」

「うん。ユニとナイアが、くれた」

彼女の言う、ユニとナイアという人物が誰だかは知らないが、とにかく彼女が元いた世界では、青の世界に近い製菓の文化があったようだ。そして、彼女にとって思い入れのあるらしい数少ないそれは、彼女の大好物になっている。

「ねえ、ゆーま」

「どうした、アイ？」

「アイね、いつかゆーまと一緒にたたかいたい」

「二丁前に宣言か、いいね。まずは俺とそれなりに渡り合えるようになることから、だけどな」

「むう……ゆーま、ほんとうにつよい。追いつきたい」

アイは、時折こういう風に、雄馬と共に戦うことを望んでいるようなことを言うことがあった。彼は彼女に、戦闘の訓練もつけている。アイは常識知らずだが、戦闘に関しては天性のセンスがあるようだった。だが、前の世界のやり方では、その才能をまるで引き出せていないようで、雄馬は勿体無く感じるとともに、こんな素晴らしい子を、しっかりと鍛えた上で部下にできれば、少し仕事が楽になるかなー、と考えていた。

だが、それよりも彼は、アイがちゃんとした『人間』になることを望んでいた。

「追いつけるさ、必ず」

……………

「ゆーま、3時。おやつ時間だよ」

「まったくお前ってやつは、おやつのことになると、体内時計が倍増して正確だな。ハレ」

「はいはい。アイちゃんおいで。はい、ちゃんと椅子に座ってね」  
「うん」

ハレの用意するお菓子に釣られて、非常に素直にテーブルにつくアイ。無表情ながら、その目は明らかにキラキラしている。

雄馬はそんな彼女を眺めながら、ふと思った。この子は、まだ我々が知らない世界を知る、重要な鍵だ。実際、彼女を捕獲した際に取り出した記憶から、その世界における彼女の所属国が戦争状態にあることも、既に判明している。そこで彼女が、どういう風に働かされていたかも。

アイは、まるで道具のように使われていた。感情を持たない殺人マシーンとして。

だが……いや、だからこそ、なのだろう。その束縛から解放された彼女が今、こうして様々なことに興味を示し、自分の意思を持って行動しているのは。

「……人間、か」

雄馬はそう呟くと、アイを改めて見る。ドーナツを頬張る彼女は、この上なく満たされているように見えて、それを見た雄馬も、自然と心が暖かくなったのを感じた。

## 10話 フタロブルーのシアン

肌寒い日の朝。いつもの通り市に行くと、珍しく大ぶりのシアンが売っていた。やや濁った美しい空色の果実を少し眺めて、3個買った。自分以外誰も食べないだろうが、まあいいだろう。

.....

3月中ごろに差し掛かり、徐々に暖かい日が増えてくるようになった。春の兆しを感じさせる陽の光が、青蘭諸島の冬を安らかな色に塗り替えようとしている。しかし、今日はやけに肌寒かった。

黒の世界でもそこそこ暖かい地域出身のアルマ・カミュオンは、ポケットに手をつ突っ込みながら夕玄島の自宅へと戻る道を歩いていた。3月なのでもう授業は新学期まで無いが、生徒のプログレスのエクシードの調子を少し見てやるために、朝から青蘭島に行っていたのだ。

時刻は昼頃、頭上には、黒の世界へと繋がる門ハイロウが煌めいている。時間的に今は通行可能で、その真下にある界港と門との間で、キラキラと光る紫色の粒子が引つ切り無しに行き来していた。

「.....お、大型輸送機か」

しばらく道を歩きながらその様子を見てみると、一旦粒子の行き来が止まる。少しして、門ハイロウから大量の粒子が吐き出された。その粒子は寄り集まり、輝きを放って実体化した。白の世界から来た、大型の輸送機だ。外見は6枚の翅はねを持つ、樽のように寸胴な蝶を思わせる。しかし、羽ばたきで飛んでいるわけではない。翅の各所に円形の光を放つ何か（デルタが言うには、大型のリフレクター・コアらしいが、アルマはさっぱりだった）が装着されており、そのエネルギーで飛んでいるのだそうだ。黒の世界出身のアルマからしてみれば、白の世界のテクノロジーは意味不明。青蘭に従事して数年、もう見慣れた光景ながら、未だに少し胸が躍るのは、自分がまだ少年心を持ち続けていることの証明なのだろうか。

方角からして赤の世界へと飛んでいく輸送機を立ち止まって少し眺め、何を運んでどんなやり取りが起ころのだろうとぼんやり思いながら、アルマはまた歩きだした。

アルマの自宅は夕玄島の居住地区のはずれに位置している。海が見える断崖に近い、白と黒と茶くらいしか使わない、シンプルなモダンアートのような家だ。アルマがこの仕事に従事する際に、青の世界で著名な建築家が建てたこの家に一目惚れして頂いたものだったが、今なおとても気に入っている。打ちっぱなしのコンクリートの外壁、直方体をいくつも組み合わせたような外観。所々に和風を感じさせる装飾があるのもお気に入りだ。奇抜な外観だが屋内が非常に使いやすくデザインされているのもいい。現に彼はもう数年ここに住んでいるが、引越したいと思つたことは一度もない。

そんな特徴的な見た目だからか、時折この前を歩く人々が写真を撮っていくことがある。それは別に構わないし、むしろ、この家を一発で選んだ俺のセンスは大したもんだろう、と思つたりもする。見られて困るものが大っぴらにあるわけでもない。……地下には魔術工房があつたりするのだが。

その日、自宅に辿り着くと、それまでに一度もない光景があつた。アルマの家の正面の道路を挟んで向かい側の、ちよつとした草むらに、1人の女の子が座っていたのだ。長い髪を頭の左サイドで1つに結び上げた、横顔だけでもはつきりとわかる美少女だ。ベージュのコートに赤いマフラーと、防寒対策はばっちりのようだが、この寒さの中では少し気になつてしまう。

こんな寒空の下、彼女は小さなレジャーシートを広げて座っており、その上には色鉛筆の箱が置いてある。視線は、スケッチブックとアルマの家を何度も行き来していた。

端的に言えば、その女の子はアルマの家の絵を描いていたのだ。

写真を撮つていく人はそこそこいたが、流石に絵を描いている子は初めてだった。その子があまりにも熱心に描いていて、その視界に入ってしまうのが憚はまかられたので、アルマはその女の子の後ろにそれと無く回つてみた。まあ案の定というか、集中している彼女は気付かな

い。それよりも、その絵はとても――

「……上手いな」

「は、ひゃあ!？」

思わず口に出してしまおうと、女の子は驚いてアルマの方を振り返った。

「ああ、ごめんね。驚かせちゃって」

「あ、あの、ごめんなさい。勝手に、ここ、座ってしまって……」

「え？ あー……それは別に大丈夫だよ。ここ私有地じゃないし」

「そ、そうなん、ですか。よかった」

女の子はたどたどしく言葉を紡いでいる。何とも可愛らしい子だ。この女の子のことを、アルマは一方的に知っていた。入学前の書類に写真が載っていた。この世界出身の、青蘭学園高等部の新一年生だ。名前は、そう。

「遠薙深雪ちゃん、だっけ」  
とのおなぎみゆき

「え、なんで、あの、名前……」

「俺、青蘭学園で講師やつてるんだ。アルマっていいいます。君、4月から入学の高等部一年生だよな？」

「ああ、あの、はい、そうです……あの、やっぱり、いけなかったでしょうか？」

「そんなことないさ。ただ、あんまりにも熱心に描いてたもんだから、家に入るの躊躇っちゃって」

「え、あ、あなたの家、なんですか？ ご、ごめんなさい！ 勝手に、描いてしまつて」

その女の子――深雪は、猛烈な勢いで頭を下げると、すぐさま撤回しようとしたので、アルマはそれを慌てて止めた。

「いいんだよ、描いてて。それより、何時から描いてるの？ もうお昼だけど、お腹空いてない？」

「え、あ、お腹……ちよつとだけ、空いたかも、です」

「それなら何か持って来よう。あと寒くない？ 厚着してても、何時間も外にいたら冷えちゃうよ」

「だ、大丈夫、です。コートの下に、3枚着てます、から……それに、

その、本当に、お構いなく……」

「ダメ。4月からとはいえ、俺の生徒だから。しっかり面倒見させてね」

「あう……あの、ありがとうございます、ます」

深雪は仄かにはにかんで、今度はお礼のお辞儀をしてくれた。アルマはそれがなんだか嬉しかった。

「いいってことよ。その代わり、1個だけ条件出していいかな」

「え、えと、なんでしよう？」

深雪が不思議そうな顔で見上げてくる。そんな彼女に、アルマは満面の笑みで告白した。

「まだ描きかけなのに、君の絵に惚れちゃった。描き終わったら見せに来て。買い取るから」

……

「これが我が家……色鉛筆のみで、美しく描くものですわね？ ええ、ええ、とても素晴らしいと思いませんこと？」

「思ったから買うって言ったんだけど……」

「あ、あの、別にこれ、全然、売れる、なんて……」

「……アルマが買いたいと思う気持ちは、分からないでもないですね？ それでも4月からは講師と生徒という関係になる以上、変な金銭関係を持つと問題になりますわよ？」

「それもそうか……残念だ」

アルマの家に住み着いている、黒の世界の魔王が直々に作った自律人形オートマトン、クルキアータは、ひねくれものの彼女としては珍しく、深雪の絵をストレートに褒めていた。

なんだかんだあつて、深雪が描き終わった絵を持ってきてくれたのは、それから実に2時間後だった。日差しがあつたので寒さはそこまですでもなかったものの、彼女の頬はほんのりと赤くなっていた。今はミルクと砂糖たっぷりのカフェオレで一息ついている。はふう、と漏らす吐息が、これまた可愛らしい。

それよりも、深雪の絵だ。「色鉛筆だけで描いたとは思えないほどリアル!」とかいうわけではない。ただ、妙な幻想の感じがそこにあるように見えた。普段は洗練されたシンプルさを感じさせるこの家だが、その絵の中ではまるで神様が積み上げた積み木のような、不思議と吸い込まれるような魅力があった。淡い青の空の色、遠くに見える赤の世界への門、<sup>ハイロウ</sup>空白で表現された雲、しなやかな黒い帯の道路。家を囲むそれらは、主張しすぎないのに確かな存在感を示している。見えて、なんだか不思議で、気持ちがいい絵だった。

「あ、あの、その絵、あげます。売るなんて、とんでもないです」

「タダ? いやいや、そんなの俺の気が済まない。何かお返しをしなければ、そんな……」

「深雪さん、とりあえず乗っておきなさいな? 彼は本気で貴女の絵

に惚れ込んだようですよ? なら、その賛辞を素直に受けないのは、むしろ無礼というものですわ?」

「え、えつと……はい、分かりました。その、お金とかで、なければ……」

深雪はそれでも、かなり申し訳なきように申し出に乗ってくれた。ちなみに深雪が初めてクルキアータを見た時には、それはもう驚いていた。何せ、クルキアータはその大きさも人形級。身長たったの72センチだ。小枝のように細い手足といい、家の中でも差している日傘で宙に浮いているのといい、青の世界で普通に生きてきたら、こんなものにお目に掛かることはまずないだろう。

一方のアルマは、だからといってすぐにお返しを思いつかない。何かあるだろうか。金銭はアウト。となれば画材だろう。色鉛筆セツトとか……と思ったところで、

「そういえば、青蘭学園には美術部、ないんだよな」

「え、そうなんですか!」

今日一番の大声で驚いた深雪は、ハツとして「ご、ごめんなさい……」と萎<sup>しぼ</sup>んだ。

「あ、あの、美術部があれば、<sup>あぶらえ</sup>油絵も、描けるかな、って、思ってた



……好きなんです、油絵」

落ち込んでいる様子も小動物らしくて可愛いのだが、受けたシヨックは本物だ。それもそうだろう。

「うん。美術室はあるんだけど、部が出来るほど人がいないみたいなんだよね。それで、授業でしか使わないから、油彩画の画材は無かったはず……油彩画って時間かかるもんね。絵具だって、水彩画のやつとは違うんだろうし。あ、でも、それを置いておける場所……そうだ、これがいい！」

「え、えつと……？」

アルマは天啓にも等しい思いつきに歓喜した。そうだ、これなら彼女の才能を、大好きなことを潰さずに済む。

「うちの家の部屋を1つあげるから、そこを深雪ちゃんのアトリエにしよう！」

「は、はいっ？ そんな、も、申し訳ないです！」

「いいのいいの。どうせ物置みたいになっちゃってる部屋があるし。あ、物置って言っても、別に窓無し部屋とかじゃないから。とりあえず見てってよ。ほら、おいで」

「え、あ、あの……はい」

アルマに誘われて、また申し訳なさそうにしながら、それでも席を立つ深雪。その後ろで、テーブルに直接座っていたクルキアータは、やや呆れ顔ながら優しい表情で2人を見送っていた。

……………

後で知ったが、芸術家を保護し、様々な面から支援する後援者のことを、パトロンというらしい。

「つまり、俺は深雪ちゃんのパトロンになったってわけだ」

「その……ありがとうございます。油彩画、描くのに、場所も、時間も、必要だから……」

「任せてよ。その代わり、描いた絵はうちに飾らせてね。いつかうちを開放して、個展開こう」

「あ、あはは……そ、そんなに大した、ものじゃない、です」

「謙遜しないの。それに、もし仮に大したものじゃなかったとしても、それは今の話じゃないか。それなら、ここでもっといっぱい練習して、凄いもの作ろう。そのためなら、いくらでも応援するからね」

アルマが深雪のパトロンになって数日後。物置だった部屋を片付けて、それから幾らかの結界を構築し、無事に深雪専用のアトリエにした。中は魔術的な防音仕様となっており、ドアプレートを「作業中」にしておけば、外の音がほとんど聞こえなくなる。これで作業に集中できるだろう。

今は青蘭島の商業地区、クリスタルモールに画材を買いに来ている。買うものは沢山あった。絵具やブラシ、ナイフや筆洗油など……。上質なアルミのイーゼルと、彼女が好きな大きさのキャンバス、そして使いやすいサイズのパレットは、先に注文しておいた。

「絵具って、色々な種類があるんだな」

「はい。どれも、微妙に色味が違ってて、使う絵具が違えば、絵も結構変わるんです」

ここ数日彼女に付き合ってきたが、普段は舌足らずな深雪だが、今は珍しく饒舌な気がした。その高揚感はアルマもよく知っている。彼に例えれば、魔術道具や魔法薬の問屋に入った時のような感覚だろう。視界に入るもの全てが魅力的で、様々なインスピレーションを沸き立たせ、モチベーションを向上させる場所。

隣り合う色と手を取り合うようなグラデーションで並べられた、色鮮やかな絵具のチューブ。絵具に浸ひたされるその時を今か今かと待っている、まっさらなブラシやペイントローラーの数々。店内の照明を照り返して「私を手を取れ、素晴らしい絵を描かせてやろう」と尊大に主張するペインティングナイフ。同じような表情をした透明の瓶の中に、それぞれ全く違う内面を忍ばせる画用液。その光景が今、深雪の心に薪となって投入され、激しい創作意欲を燃え立たせているのだろう。

「さ、買いたいもの、なんでも買おう。値段とか気にしないでね。芸術なんだから」

「あ、あの、本当に……これって何かの、罨、だつたり……」

「先生がそんなことするわけないだろ？ まあ、俺は教師じゃなくて講師なんだけどき。とにかく遠慮しないで」

「……な、なら、すみません。ありがとう、ございます」

深雪は頭を下げると、買い物カゴに画材をどんどんと入れていった。同じ筆を何本も。同じ絵具を何個も。確かに途中で無くなってしまふよりは、予め何個も用意しておいた方がいいよね。とアルマは納得した。

「えつと……セルリアンブルー……プルシヤンブルー……フタロブルー……」

「青、随分たくさん買うんだな」

「あ、えと、ご、ごめんな——」

「ああ、そうじゃなくて。いろんな種類があるんだなーって」

アルマがそう付け加えた。よく見ると、彼女がカゴに入れた絵具は同じ青系の色ながら、どれも異なるものらしい。

そんな絵具のチューブを繊細な指先で持って眺めながら、深雪は呟くように言う。

「セルリアンブルーは、本当に明るい青……雲一つない、夜明けの空みたいな色……プルシヤンブルーは、とっても深い青で……ひんやり冷たい、海の色……フタロブルーは、すごく鮮やかな青で……澄み渡った空も、透き通った湖も、この色……」

「どれもいい色、なんだね。ゴメン、芸術があーだこーだとか言っておきながら、そんな色のことなんて考えたことなかった」

「ふふ……私は、このフタロブルーが、すごく好き、なんです。これだけでも、とっても綺麗な色、ですが……他の色と混ぜると、もっと違う表情を、見せてくれるんです。よく晴れた空は、明るいフタロブルーと、暗めのプルシヤンブルーのグラデーションで……イエローと混ぜれば、桜の葉っぱみたいに強い緑も、稲の葉のように透き通った黄緑も作れます。少しのクリームゾンと混ぜれば、陽が沈む直前の空みたいな、美しい紫にもなるんです」

「そっか。単体でもいい色だけど、混ぜる用途もあるのか……」

「はい。それで、青蘭は、いろんな景色があるの、ここ数日で見てきました。色々な場所を、描いてみたいんです……。夕玄島から、青蘭島を見た時の、青枝山の緑と、晴れた空の青の、コントラスト、とか……。鐘赤島の、色とりどりのお花畑と、白の世界への門が、一緒に映る光景、とか……。特別な光景で無くとも、海が綺麗な島々なので、そのためにも、青、沢山、欲しいです」

「もちろん構わないよ。その絵を飾るのが、今から楽しみになっちゃうよ。あ、急いで描いてつてわけじゃなくて、深雪ちゃんが描きたい絵を、じっくり描くんだからね」

「……はい。楽しみに、していただきますいね」

深雪は変わらず、呟くように言うと、彼女らしい、はにかむような笑顔をこちらに向けた。

………

少し暑い日の朝。いつもの通り市に行くと、珍しく大ぶりのシアンが売っていた。フタロブルーにほんの少量のサップグリーンとクリムゾンレーキを混ぜたような色の果実を少し眺めて、4個買った。自分以外誰も食べないだろうが、まあいいだろう。

………

6月に差し掛かった頃。リビングの壁に掛けられた、鮮やかで美しい油彩画を眺めながら朝食後の後片付けをしていると、深雪がやってきた。

「おはよう、深雪。今日は早いな」

「おはようござい、ます、先生。お邪魔、します」

「コーヒーでも飲んで始める？」

「はい。お願い、します」

出会って2ヶ月と半分くらいが経ち、そろそろ深雪も余計な遠慮が無くなってきた。いつの間にかアルマも、彼女のことを「深雪」と呼

び捨てにするようになり、深雪もアルマのことを「先生」と呼ぶようになった。距離が近くなっていると思うと、少し嬉しい。最近をよく彼女の笑顔も見られるようになった。

αドライバーとプログレスとしての話をすると、実はアルマと深雪のリンク相性はかなり良かった。ただ、深雪のエクシードは使用機会が限定され、ともしれば使わない方がいい、とまで言えるほどのものだった。

《有象無象の描き手》ドリーム・リアライザー。それは、絵に描いたものを実体化させる力。

彼女が風景画を好んで描く理由がここにあつた。エクシードの制御が上手くできない彼女は、物体を描いた時に不安定な状態で実体化させてしまう。だから、実体化することのない風景の絵ばかり描いていたのだ。

アルマはそれを、否定しなかった。エクシードとの付き合い方を教えている彼だが、彼女のエクシードに対しては、普段のように強気な選択を考えることができなかったのだ。

そんな深雪だが、今日は珍しく、個体に心惹かれたようだ。

「あ、そうだ。シアン冷やしとこ」

「シアン？ 色、ですか？」

「色？ あーそっか。この世界でのシアンは色のことなんだっけ。ほらこれ」

アルマはそう言って、明け方に市場で買ってきた紙袋の中からそれを取り出した。やや濁ったような、それでも美しい空色の、真ん丸な果実だ。その果実に、深雪は好奇心をそそられた様に瞳を輝かせた。

「これ、黒の世界の果物だね。シアンっていうの」

「青い……きれいな、果物」

「どう、ちよつと食べてみる？」

「あ、あの……はい。食べたいです」

「よし来た。ちよつと見ててみ」

アルマはシアンの下にボウルを置き、ナイフでそのヘタを切り落としました。切り口を下に向けると、そこから薄い水色の果汁が大量に溢れてきた。

「わっ……綺麗」

「シアンはすつごく水分を溜め込む果実なんだ。故郷じゃあ、水分補給に持ってこいなんだよ。天然の水筒みたいだね。ほら、ちよつと飲んでみ」

ボウルに溜まったシアンの果汁を小さなグラスで一杯掬い、深雪に手渡した。彼女はそれを一口飲み……微妙な表情。

「……あ、あの」

「薄いよな、うん。そんなもんなんだ。じゃあ果肉はどうなの、って言うと、こんな感じ」

今度はナイフで果肉を切り分け、また少し深雪に手渡した。彼女はそれを口に含み……微妙な表情は変わらない。本当に、よくよく味わえば甘いかも、というレベルなのだ。

「果肉も似たようなもん。ね、じゃあなんでこんなもん買ってきたかって言うと、こいつの美味さは種なのよ」

「種、ですか？」

「ほらこれ。ちよつと刺激強いよ」

最後に果肉の真ん中の方から、ラムネくらいの大きさの薄黄色の小さな種を指で穿り出し、軽く水で洗って、一粒深雪に渡した。

「……噛むんですか？」

「そっだよ」

「はい——、くっくっ!!?」

「ね、刺激強いでしょ」

「は、はいっ……でも、甘酸っぱくて、おいしい、です」

シアンは珍しく、その種子のみが食用に向いている果物だ。森の中で水を切らしてしまった時には水分補給できる果実として重宝されるが、そんなことを気にしない都市圏では、この種子を噛み潰した時の弾けるような触感と、同時に口の中に広がる甘酸っぱさが人気となり、極めて薄味の果汁と果肉はほとんど捨てられていた。

だがアルマは、別の理由でこの果実が好きだった。

「普通は種だけ食べるんだけど、俺は冷やしたこのシアンに、思いっきり噛みつくのが好きなんだよね」

「ん……ぶしやーって、なりそう」

「それが面白いのさ。冷やすと少し甘みも増すし。それで、冷えた果汁を飲みながら、柔らかい果肉を食い進んで、最後に種を齧るんだ。この世界ので例えると……スイカとかメロンに近いかな。ちよつと違うけど」

「ふふ……私も、ちよつと、やってみたいかも、です」

「んじゃあやる？ 冷やしておくよ」

「あつ、でも……すみません」

「……いいよ、言ってみて」

「えと、その……そのシアンを、貸していただけませんか、か？」

そう言ってアルマを見上げる深雪の眼差しの奥には、何か熱いものを感じた。そんな熱に冷水を掛ける真似など、彼にはできない。

「いいよ。どの皿に盛ろうか？」

……

「描き終わり、ました」

深雪がアトリエから出てきたのは、日が傾きかけた午後5時ごろのことだった。作業中は邪魔しないと決めていたが、それでもお昼に出て来なくて心配してしまった。聞いてみたら、やはり腹ペコらしい。

「んもー、お腹空いたら食べなきゃダメだよ。いい？」

「は、はい。ごめんなさい……でも夢中に、なっっちゃって」

「ま、それもそうだよ。見せて見せて」

深雪のアトリエに入ると、イーゼルに乗っているキャンバスには、質素な皿に乗った、3個のシアンの絵が描かれていた。どちらかと言えば抽象的なテクニクを用いる深雪が描いたにしては、形や凹凸・質感などの特徴が上手く捉えられていて、非常にリアルだ。それに……

「ちよつと、盛っちゃいました」

キャンバスの上のシアンは、実物より少し青みが強かった。彼女の好きな、フタロブルーをふんだんに使ったのだろう。恥ずかしそうに

はにかむ彼女が可愛らしくて、アルマは思わず彼女の頭を撫でてしまった。

「絵なんて盛ってなんぼでしょ。現実と全く同じなら、写真でいいし。描き手の伝えたいことが伝わるのが、いい芸術だと思うし。じゃあこれも乾かして、飾ることにしよう」

「あ、あのっ！」

そこで深雪は、普段より大きな声でアルマを止めた。彼が彼女を改めて見ると、その頬がいつになく赤く染まっている。

「あの……先生。わ、私と、リンク、してただけませんか、か？」

たどたどしいその言葉に、アルマはハツとした。そういえばそうだ。今回彼女は物体を描いた。よく見れば、キャンバス上のシアンは実物とほとんど同じサイズ。ということは一――

「いいよ。じゃあ、手、繋ごつか」

「は、はい。……っ」

アルマの差し出した手に、深雪が指を絡める。お互いを想い合う心と心が触れ合い、2人はそつとリンクする。

深雪の心を感じた。深々しんしんと降る雪のように、静かで……それでいて、その内に熱い想いを秘めた心。

逆に、深雪もアルマの心を感じたのだろう。彼女はそつと口を開いて、言葉を紡ぎだした。

「私、妹が、いたんです。小さい頃に、どこか、行っちゃって……今も、見つかってない」

知っていた。彼女と知り合ったアルマは、改めて学園に提出された書類を読み、双子の妹と生き別れていることを知った。突然行方不明になり、搜索は行われたが、妹は終ぞ見つからなかった。

そのことを知っているアルマは、敢えて答えない。

「今もどこかで、幸せに生きていてほしいって、思ってます。どこにいるのか、分からないけど……また、もう一度、会いたい、けど……」

目を閉じた深雪の目尻を、涙が伝った。涙は頬を流れ落ち、アトリエの床に小さな染みを広げた。

「この、力は、妹が……夏菜なつなが、大好きでいてくれた、私の絵を、現実



にする、もの……いつか、また会いたいと、思ってるから、使う……」  
深雪は繋いでいない方の手をキャンバスに向け、その力を注ぎ込んだ。すると、まるで最初からそこにあつたかのように、質素な皿に乗った3個のシアンが実体化していた。

「でも今は、先生の、ために……おひとつ、どうぞ」  
「……ん、ありがとう……おっ？」

彼女がシアンを1個手渡してくれた。手に持った瞬間に驚いたのは、それがひんやりと冷たかったからだ。手に取った質感はずっと重く、皮のざらつきは本物より少し滑らかな気がした。絵具がまだ乾いていなかったからだろうか。それにしても、ため息が出るほど美しい青のシアンだ。

「温度も再現できるの？」

「んー……分からない、けど、さつき、冷たいほうが美味しいって、言ってたから」

「覚えててくれたんだな。どれ……」

アルマは、先ほど深雪に聞かせた通りの食べ方を実演して見せた。するとまた驚いたことに、本物そっくり……どころか、それ以上の果汁感だ。味もちゃんとする。溢れた果汁が床にびちゃびちゃと零れたが、ここはアトリエ。後で掃除すればいい。

「んーっ、やっぱこれだよ。まあ、下品な食い方だけどな。しかもこれ、実物より美味しい気がする！ 甘みが強いな！」

「ふふ……甘くなーれ、甘くなーれ、って思いながら、描きました」  
「マジか。また描いてほしいけど、こんなに美味しいの毎回やってたら、元のシアンが食べられなくなっちゃうよ。それに、次に描いてくれる奴は、リビングに飾りたいし」

そんなことを言いながら、アルマが深雪のシアンを食べていると、深雪も自分のシアンを手を取って……

「は、ぐっ……んっ」

アルマの真似をして、思い切り噛みついた。皮を噛み破ると、ぶしゅっ、と果汁が飛び散る。果肉を噛み千切ると同時に、床を濡らす。  
「あはは、真似しなくていいのに」

「……冷たい。とつても、美味しい。それに、楽しい……！」

その瞬間の深雪の笑顔は、それまでのどんな笑顔よりも素敵だった。果汁と絵具で汚れてしまつて少しばつの悪そうな、けれどとても楽しそうな、そしてすごく幸せそうな、そんな満面の、弾けるような笑顔。

まるでシアンの種のような深雪の笑顔を見て、アルマは、彼女の<sup>α</sup>パトロンドレイパーになつてよかつたと、心の底から思った。

床に零れた涙の染みは、フタロブルーのシアンの果汁が綺麗さっぱり塗り潰していた。

3幕【Gate of G】  
第0話『門を開け。』

甲高い金属音が鳴り響いている。

鳥かごの中に閉じ込められて、何もできない。

吐き気が止まらない。身体が別の何かに変わろうとしている。今までとは全く違うものに。

「たすけて」

自分の足元の地面が崩れていくのがわかった。

「たすけて」

自分の真上の空がひび割れていくのがわかった。

「たすけて」

自分の友達が枯れていくのがわかった。

「たすけて」

自分の家族が死んでいくのがわかった。

「たすけて」

凍てついた地面に突き立っている、ボロボロの緑色の剣。その上を這う虫。

赤い槍は折れ、青い盾は砕け、白い蛇は干涸らび、鉄の爪はバラバラになっている。

虫が糸を吐いて繭を作った。

門を開け。

目の前にあるのは、大きな緑色の、透き通った結晶。その中で、弱々しく光が明滅している。

門を開け。

結晶がひび割れ、砕けた。中の弱々しい光は一瞬抵抗するかのよう  
に強く輝いたが、消えた。

門を開け。

青い光が見えた。もっと強い光が。あまりの強さに、否応なしに吸  
い寄せられていく。

門を開け。

身体が熱い。直火に焼かれているかのように身体が熱い。

門を開け。

身体の表が暖かくなった。それと同時に、身体の裏が寒くなった。

門を開け。

手が痛み指が震えた。まるで指がもう何本か生えようとしている  
かのように痛む。

門を開け。

自分の足元の地面が崩れていくのがわかった。自分の真上の空がひび割れていくのがわかった。自分の友達が枯れていくのがわかった。自分の家族が死んでいくのがわかった。「たすけて」自分の足元の地面が崩れていくのがわかった自分の真上の空がひび割れていくのがわ「たすけて」かった自分の友達が枯れていくのがわかった自分の家「たすけて」族が死んでいくのがわかった自分の足元の「たすけて」地面が崩れ自分「たすけて」の真上の空がひび「たすけて」割れ自分の友達が枯「たすけて」れ自分の家「たすけて」族が死「たすけて」んで「たすけて」自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の自分の

世界が 消えていくのが わかった。

「たすけて」

甲高い金属音が鳴り響いている。

ずっと誰かが喋っている。頭の中が話し声で溢れ、頭蓋骨が決壊する。

鳥かごの中に閉じ込められて、何もできない。

背中の中で、何かが蠢いた。背中の皮を突き破り、外に出ようとしている。

吐き気が止まらない。身体が別の何かに変わろうとしている。今

までとは全く違うものに。

地を這うことしかできない人間が、空を飛べるようになるように。

「たすけて……おねがい……」

繭の中の蛹の中で、ドロドロに溶けた幼子は、目覚めの刻をただ願う。

## 第1話「夢は所詮、夢ですから」

夜だった。

海の上に立っていた。波の音が心地よい。

「助けて……」

上から声が聞こえた。女性の声だ。上を見ると、緑色の光があった。天頂の1点を中心として、その光はゆらゆらと揺れていた。

「助けて……」

手を伸ばしてみたけど、届くはずもない。声はか細く、しかししっかりと耳まで届いている。

「助けて……」

どうにかしなきゃ。でも、どうすれば？ 勢いばかり先走っても、何もできない。

「助けて……お願い……」

それでも、じっとしているのが堪らなくもどかしくて、一歩前に踏み出した。

途端、足が海に沈み込んだ。当然といえば当然だったが……そのまま身体まで一気に沈み、すぐさま頭も水の下に沈んでしまう。

海の中から、まだ緑の光が見えた。助けてあげなきゃ……でも、もがいてももがいても沈むばかり……息ができない……視界が掠れる

……

「——ッはあっ！」

唐突に目が覚めた。全力疾走した後のように息が乱れている。なんとか息を整えながら枕元の時計を見ると……朝6時半。二度寝すると、起きなくてはいけない時間を寝過ごしてしまいそうな、微妙な時間。

「……また同じ夢だ」

ここ最近、ずっと同じ夢を見る。海の上に立って、助けを呼ぶ緑の

光を見上げ続ける。しかし、海の下に沈んだのは初めてだった。普段は気づいたら朝、という感じだったのだが……。

「くそ、いったい何なんだよ……」

神城春樹は悪態を吐きながら、布団を抜け出した。

……

夢のせいで早起きできたので、学園に着くのも普段より早い時間だった。しかし、原因が原因だけに、あまり喜べない。

「……ねー、今日もあの夢？」

「あたしもそれ。ホント何なんだろうね」

「なんか変な魔術でも流行ってるのかしら」

「女神さま……なわけないかなあ」

「新手的思考作用兵器……」

「いくらなんでも陰謀論すぎじゃね？」

「それとも誰かのエクシードなのかなあ」

春樹が教室に入ると、先に来ていた数人のプロGRESSがそんな話をしているのが聞こえた。

「おはよう、みんな」

「あつ、おはよう春樹くん！ ねえねえ、今日もあの夢、見た？」

「うん。見たよ。海に沈んだところまで」

「やっぱり？ 見る夢はαドライバーもプロGRESSも同じなんだね」

現在は7月の中旬。今日が一学期最後の登校日だ。明日から、みんな待ちに待った夏休みが始まる。

しかし最近、妙な現象が起きている。1週間前くらいから、毎晩毎晩同じ夢を見るのだ。しかも、話に聞く限りでは、αドライバーとプロGRESSはみんな同じ夢を見たというし、下級生や上級生に聞いても同じ。こんなのはいくらなんでもおかしい。

先生なら何か知っているかと思えば、先生でもまともな情報を持っている人は1人もいない。逆に、向こうも混乱しているらしかった。



「なんか、変なことにならなきやいいけど」

「だよね。不気味だよねー」

「そういや、絵麻、紗夜先輩も？」

「うん。今朝もおんなじ夢だったってー」

「そつか……先生方といい、年齢は関係ないのか」

「みたいだねー」

春樹の席の前に立つ小柄な少女は、蒼月そうげつ絵麻。淡い色の髪をツインテールに結び上げた彼女は、不安そうにしつつもいつものようにのんびりふわふわと微笑んでいる。間延びした喋り方からも、そののんびりとした性格が伝わってくる。小さいのに、包容力がある子だ。現に、生徒会の副会長を務めており、その実力はほかの生徒からも一目置かれ、頼られている。

あまり考えてもどうしようもないので、しばらくスマホでニュースを眺めながら、あるいはプログレスの子とお喋りしながら時間を潰している、だんだんと教室に生徒が集まってくる。1人1人のプログレスが持つエクシードの多様さと同じように、その性格も十人十色、千差万別。しかし、その話題はやっぱり夢の話で持ちきりだった。

「おはよ、春樹」

「おはよう、冬吾。目の下に隈ができてるぜ」

「やつぱ？ 昨日遅くまで起きててさ。それで今朝は夢に起こされちゃって。あんまり寝られてないんだ」

「息苦しかったよな」

「あ、春樹も同じなんだ。なるほど、どうりでお早い登校なわけだ」「うっせー」

青蘭学園高等部2年生の中でもう1人しかないαドライバー、冬吾と挨拶を交わす。文武両道、才色兼備で背が高くイケメンで性格もいい、完璧な彼にしては、今朝はかなり眠そうだ。彼もそれを自覚しているのか、登校の途中で買ったらしいボトル缶コーヒをぐいっと飲むと、「ちよっと顔洗ってくるね」と言って席を立った。こういうところもイケメンだ。そして、席を立ってから教室の出口までの僅かな距離でも、プログレスに愛想を振り撒いている……というか普通に挨拶

拶しているだけなのだが……。そういうところは真似できそうになくて、少し悔しい。

「春樹さん、おはようございます」

「ん、おはよう、ユーフィリア」

そんな冬吾と入れ替わりになるように、1人の美少女が春樹の席の前に立った。名前はユーフィリア。白の世界出身のアンドロイドだ。さっきの冬吾の恋人で、大人びていながら妙に子供っぽいところもある、魅力的な子だった。冬吾が惚れたのも分かる話だ。

「やつぱり、例の夢ですか？」

「そう。こうも続くと、不安になっちゃうよ」

「あの、そこまで気にしないでくださいね。夢は所詮、夢ですから」

「それはそうなんだけどさ……。そうなのかな……」

彼女は事あるごとに「夢について不安に思うな」と言ってきた。それは何も、春樹にだけではない。不安そうにしている人がいれば、誰にでも言って回っている。そう言われるたびに、彼女の持つ包容力が合わさり、少し不安が消える気がした。

それからもう少しすると、始業のチャイムが鳴り、担任のララエル先生が教室に入ってきた。見た目はたおやかで落ち着いた女性だ。流れるような金髪が美しい、非の付けようがない美女。性格も明るく、快活なのにやけにのんびりとしていて、生徒を安心させる。褒めて伸ばすということがとても得意で、担当科目の家庭科だけに留まらず、彼女に教わることでその才能を開花させたプログレスは大勢いた。

そして、何よりも特徴的なのが、エプロンの上に白いマントを羽織っていることだ。青蘭での暮らしが長かったり、そもそも赤の世界出身の人ならすぐに分かる。その白いマントは翼が変化したもの――すなわち、天使なのだ。

「さあ、みんな席に着いてね。一学期最後のホームルームを始めますよ」

聴き慣れた声で、一学期最後の日が始まった。

………

1年生の教室は、2年生のよりももう少し慌ただしかった。青蘭諸島に来て数ヶ月、という子がとても多く、それに加えて連日の夢の件、そして明日から夏休みという事実で、かなり浮き足立っていた。

かくいう日向美海も、先に挙げた様々な要因から、不安と興奮が入り混じったような落ち着かない感情で胸が満たされていた。

「おはようございます皆さん。席についてください。ホームルーム始めますよ」

担任教師の本条文香先生ほんじょうふみかの癖のある声で、皆着席した。本条は眠そうな目をした、小柄な……とても小柄な女性教師だ。ブラウスの上から明らかに大きすぎる白衣を羽織っており、黒髪のツイントールも合わせてすぐに判別できる。

「さて……グズグズしていると学園長先生と教頭先生が来ちゃいますからね。早速でテンション下がるかもしれませんが、宿題です」

クラス中の、えー、というブーイングもさりと流し、プリントを配り始めた。夏休みの過ごし方、宿題、学校が開いている日、行っ  
てはいけない場所――

「あれ？ せんせー」

「はい、なんですか那月さん」

「20周年祭の間って、どうして賢緑島に行っちゃいけないんですか？」

「ああ、それですか。あとで説明するつもりでしたが……まあいいでしょう」

プリントを見ると、確かに「行っ  
てはいけない場所」リストの中に、カジノや西倉庫群、飲み屋や怪しい店が立ち並ぶヤクラ横丁と並んで「賢緑島全域」と書いてある。その横に「世界接続20周年記念祭の期間中」という記述もある。

賢緑島はその大部分が青蘭庁の土地で、しかも機動隊の基地や訓練場がある。夕玄島や鐘赤島、白百合島とは異なり、上空に異世界への門ハイロウが存在しないという理由もあってそこまで栄えておらず、行くにし

てもわざわざフェリーで行く必要があるため、あまり行く用事もない島だ。

とはいえ、青蘭諸島を構成している島の1つである以上、その全域に「行くな」というのは少しおかしい話である。

クラス中の生徒がそう疑問に思っていると、

「世界接続20周年記念祭の開催にあたり、賢緑島は3日目の夜……最終日の夜に、花火を打ち上げるんです。そのために大掛かりな仕掛けを使うので立ち入り禁止です。ご理解とご協力をお願いしますね」

本条はあくまで事務的に理由を告げた。美海はそれなら納得だったのだが、突っかかる人は突っかかる。

「そんなに大掛かりな仕掛けなんですか、先生？」

そう突っかかったのは、このクラスの委員長を務める、黒の世界からの留学生、ソフィーナ・アルハゼン。「理深き黒魔女」と呼ばれたり呼ばれなかったりする彼女の性的には、本条の言う「大掛かりな仕掛け」が気になるのだろう。

しかし、本条は落ち着いた様子で、

「賢緑島はとても離れているでしょう。そんなところで花火を打ち上げたって、他の島からはちよこつとしか見えません。なので、門ハイロウの常設結界に近い仕掛けを使って、他の島からも大きく見えるように拡大します。ね、大掛かりでしょう」

「は、門ハイロウの常設結界くらいなら……まあ、大掛かりか。分かりました。楽しみにします」

「皆さんも、世界接続20周年記念祭は楽しんでくださいね。ただし、後で学園長先生や教頭先生からもあると思いますが、長期休暇だからといって、あまり羽目を外さないように」

門ハイロウの常設結界。そう聞いてピンと来た生徒は、このクラスの中にはソフィーナを含め、黒の世界出身の数人しかいなかった。大多数の生徒は、なんのこっちゃと首を傾げている。美海もそうだ。

門ハイロウの常設結界とは、この世界と異世界を繋ぐ門ハイロウに掛けられた、様々な機能を持つ永続的な概念魔術結界だ。数多くある機能の中で、最も生活と密接に関わっているものでは、通行できる時間が決まっている

という機能だろう。これに白の世界の技術を加えることにより、安全な世界間移動が実現できている。常設境界がなかった頃は、上手く世界間を移動できずに世界の狭間に飲み込まれた者も少なくはなく、また双方から移動を試みた者同士が門の中で衝突するという例もあった。

青蘭での生活が長くなると自然に慣れてきてしまうのだが……その他の機能として「一定距離内のどこから見ても同じ大きさに見える」というものがある。今、窓の外を見ても、夕玄島の上空に浮かぶ黒の世界への門、鐘赤島の上空に浮かぶ赤の世界への門、白百合島の上空に浮かぶ白の世界への門は、どれも同じ大きさに見える。それぞれの島への距離は違うのに、だ。例えばどれだけ門に接近したとしても、見える大きさは今と同じだ。これは、無理やり門への突入を試みる者への対策である。

そして、本条が言う「大掛かりな仕掛け」とはこれのことだ。賢緑島から打ち上げる花火に「どこから見ても同じ大きさに見える」に近い魔術を使つて、どこの島にいても平等に花火を楽しめるようにするのだろう。

ソフィーナは、そういうことならと一応納得したようだった。

ところで、プログレスというものは珍しい存在だ。間違つてもそこからへんを探して見つかるような存在ではない。それがαドライバートもなれば、その希少価値というのはとんでもないもので、青蘭庁が日本本土に手を伸ばして必死に探しても、1年間に1人見つければいい方だ。

そんな希少な存在を集めたこの青蘭学園は、当然ながら生徒数が非常に少ない。各学年1クラスしかない。その上、中等部など1クラス数人しか生徒が在籍していないほどだ。

そんなわけで、入学式や卒業式など、来賓を招くような式典ならともかく、終業式などの内輪な式典は、わざわざ体育館に全校生徒を集めたりしない。学園長と教頭が各クラスを回つて、そのクラス——つまり学年——ごとに話をする（ちなみに、中等部は先に述べたように生徒数が極端に少ないため、3学年まとめて話をする）。そこまで

長々と講釈を垂れるわけでもないので、学年ごとに伝えるべきことをしっかりと伝えられる、こういった方法を取っているのだ。

本条が夏休みの間の宿題の確認や、過ごし方の注意などを改めて説明していると、教室のドアがノックされた。小窓から、人の良さそうな笑顔の男性が覗いている。

「ああ、教頭先生がいらっしやいました。さ、皆さんちゃんとお話を聞くように」

本条が男性を招き入れながらクラスに呼びかけた。

「おはよう、1年生諸君。初めての夏休みでわくわくしている子が多いかな？」

教室の入口を腰をかがめて潜りながら、よく通る野太い声で話し始めたその男性は——知ってはいるが、改めてすごい人だった。

とにかく身長が高い。2メートルを越しているだろう。それに、半袖ワイシャツの袖から伸びる腕は、冗談かと思うくらい太くて筋肉質だ。どのくらいかというところ、このクラスの女子の太ももの太さを上回るくらい。そして、恐らくは全身が同じく筋肉質なのだろう。首元の筋肉も、ちよつとありえないくらい太い。

藤平正義ふじひらまさよし。青蘭学園の教頭を務める男性で、週に1時間、道德の授業も受け持っている。外見の凶悪さとは裏腹にとても快活で優しい先生で、なんとというか、理屈抜きで信頼できるような安心感のある先生だった。そういうところは、体育講師の岸部雄馬きしべゆうまに似ている気がする。やっぱり筋肉だろうか。マッチョな好漢は最も信頼できる人種の1つかも知れない。

「初めての夏休みで色々やりたくなる気持ちは分かるけれど、くれぐれも危険な行為はしないように。特に、配られたプリントにも書いてある『行つてはいけない場所』には行かないように。青蘭庁の職員がそこら中にいるから、もし立ち入れれば分かるんだよ。それから——」

初めて青蘭での夏休みを迎える生徒が多いので、藤平の言葉も注意じみたものが多い。が、それも仕方ないことだろう。青蘭は一見、地上の楽園のように思える部分が多いが、その実治安が悪い場所もある。

る。特に、今年度の初めに少し関わった、青蘭島西の倉庫群は、空き倉庫に不良が屯たむろしていることも少なくない。美海など、あそこ関連で拉致されかけたほどだ。青蘭の『闇』に襲われたことがある美海は、夏休み中の行動には少し気を付けようと決心した。

「——さて、少しお説教っぽくなってしまったが、初の長期休暇、しっかりと羽を伸ばして、二学期に備えて欲しい。それから、世界説20周年記念祭もある。せっかく青蘭にいるのだから、節度を守って、しっかりと夏休みを楽しんでね。私の話は以上です」

話をそう締めくくると、藤平は教室から出て行った。すると今度は、入れ替わりで別の男性が入ってきた。

「バトンタ〜ッチ。てなわけで次はあたしからね。とは言っても、藤平先生が夏休み中の過ごし方については全部言ってくれたと思うし、あたしからは手短に済ませるわね」

入ってきた男性は、かなり美形な青年だ。しかし男性なのに、女性のような喋り方。有り体に言えば、おネエである。しかし、外見は少し奇妙だった。美海も何といえいいのかイマイチ分からなかったが……外見から年齢を判別できないのだ。ニコニコの笑顔で話す姿はまるで20代のように若く見えるが、髪に若干混じる白髪を見ると50代くらいにも見えるし、忌憚なく達観しているようにも見える泰然とした態度は80代の老人を思わせる。

空木 槐うつぎ えんじゆ 青蘭学園の学園長であり、青蘭庁青蘭学園運営部の部長でもある。しかも、噂ではあるが、彼もαドライバーだという。

そして、美海は彼を、別の姿で知っていた。青蘭島の商業地区の噴水広場によくいる、クレープ屋の店主。6月くらいまで本当に気付いていなかったのだが、彼こそが学園長だったのだ。聞けば、時々……よりはかなり頻繁にだが、ああしてクレープ屋の店主として、青蘭の様子を見守っているらしい。彼の趣味だそうだ。クレープが大好きで、屋台を見かけたら（お小遣いがあるときには）必ず購入する美海が、顔見知りの店主こそが学園長だと知ったときは、大いに恐縮したものだ。

「さて……みんな早く終わってくれーって感じだし、ささつと済ませ

ちやいまいしょう。まず、くどいようだけれど、立ち入り禁止の場所には行かないでね。あと、当然だけどエクシードの無断使用は禁止よ。魔術を使える子も、魔術の無断使用は禁止。他にも――」

美海にとって学園長は、クレープ屋の店主として接した場合を除くと、入学式の話聞いて以来のこととなる。そして、彼は公の場で話すときは、敬語を使うことでそのおネエ口調を抑えるのだ。気付かなかったのにはそういう理由もあるが……。

やっぱり、つかめない。美海には縁遠いが、彼は物事を大局的に見ている気がする。

そして、本条とも藤平とも異なる点があった。それは、

「注意事項はこんなものかしらね……さてと。最近、みんなは変な夢を見るわね？ みんなが同じ夢を、每晚」

そう。生徒が皆不安に思っている、連日の夢について話し出したのだ。これには、正直学園長の話なんて……と半分聞き流していた生徒も身を乗り出した。あの夢に関する情報は、ここにいる全生徒が求めている。しかも、本条ですら少し傾聴しているようだ。

クラス中の注目を一身に集めながら、空木は言う。

「そこまで心配することじゃない……って言っても、そういうわけにはいかないわよね。でも、みんな薄々感づいているでしょう。これは一種の『予兆』なの。だから、今すぐどうこうってわけじゃない。これは信じて欲しいわ。」

だけど、その時は来る。この中には、その『時』を分かっている子もいるわ」

空木のその言葉を聞いて、クラス中の視線が、1人の生徒に集まった。

黒の世界出身の魔族の女の子だ。名前はクレア・プロスペキア。鈍い銀色の髪をツーサイドアップに纏めた、少し鋭い風貌の彼女は、『未来を見通す千里眼』のエクシードを持つという。

もちろん、この奇妙な夢が続き始めたとき、皆はこぞって彼女に聞いた。この先どうなるのか、と。

しかし彼女はこう答えるだけだった。



「アンタたちにもアタシにも関係ないことが、そのうち起きるだけよ。……少なくとも、しばらくは」

その先はまだ見通せていないという。それを皆が毎日毎日聞くものだから、いよいよクレアは「アタシは天気予報か！」と怒ってしまった。それ以来は誰も聞いていない。ただ、彼女は「何かあったらこつちから言う」と言ってくれた。そのクレアが未だに何も言わないということは、何も変わっていないのだろう。

そんなクラスの変化を宥めるように、空木は言葉を重ねた。

「ともかく、その夢はそのうち終わるわ。だから……そうね。ひとまず、みんなは『自分のエクシードの取り扱い』について十分注意するように。許可を得たからって、振り回しちゃダメよ。繊細に操作すること」

話のつながりがイマイチ見えなかったのは、多分美海だけではない。どうしてあの夢とエクシードがつながるのか……？

それはさておき、空木の言葉は少し美海に刺さるものだった。美海のエクシードは確かに強い。だが、繊細さに欠けるということ。最後にバトルした5月下旬から今までのおよそ2ヶ月の間によく分かっていった。

同じチームの琉花は、水を糸のように細く伸ばせるようになっていた。また、忍はさらにエクシードを併用した忍術に磨きを掛けている。そんな中で美海は、さらに強い風を操れるようになった。……出力が高いおかげで、それでも十分な戦力になるのだが、隣を歩くチームメイトに比べて、幾分劣っているように思えてならなかった。

——そういえば、夏休みに入ってから、雄馬先生が特別に稽古を付けてくれるんだっけ。後でお話聞きに行こつと。

少し前、雄馬が「お前のエクシードの特訓に打って付けの人物がいるんだが、稽古付けてもらうか？」という提案をしてきた。劣等感を感じている美海にとっては、まさに渡りに船だ。その予定が、夏休みに入っただけのこと。

——私と同じように、風を操るのかな。頑張ろう、春樹くんの……ううん、チームのために。

そう、強く誓う。それと同時に空木が、

「よし！ 最後に、世界接続20周年記念祭のブルーミングバトルに出る子たち！ 期待してるから、悔いの残らないように精一杯頑張るなさい。以上！ 楽しい夏休み生活をね！」

そう。美海も出場するブルーミングバトルは、夏休みに入って2週間後に開催される、世界接続20周年祭の2日目に行われる。対戦カードは既に決まっており、同じクラスの永瀬俊太ながせしゆんたが率いるチームと戦う事になる。負ける気は……正直、していないものの、今のままでは間違いなく悔いが残る。

だから、頑張るのだ。

そうして、青蘭島に来てから初めての夏休みが始まった。夢のこともある。ブルーミングバトルのこともある。等身大の学生としては、宿題だってちよつと不安だ。

でも、それを優に超えるくらい、楽しみで仕方なかった。

## 第2話 「細かいこと気にしてもしようがないし」

夏休み初日。目覚めた子供が、一年の中で最高の自由を感じる朝。

「……あの夢さえなければ、もうちよつと気分も晴れるのにねえ」

「ホントにね……」

しかし、青蘭学園のブルーミングバトル用のコロシウムに集まった、ハイネチームの面々の表情は硬い……というか、若干げつそりしている。それもそのはず、ここ最近見る夢が、夏休みになったからといって学校のように休んでくれなかったからだ。

「まあ、細かいこと気にしててもしょうがないし、練習がんばろー！」

「エミル会長の言う通りさー！ 今日も美しく特訓開始だ！」

「貴女達のその元氣、こういう時には頼もしいものですわね……」

常のようなほんわか元氣屋さんのエミル・アンナと、常のようなハイテンションさを振り撒くカサンドラを、マリオンは溜め息交じりに評価した。

この場に集まったのは5人。αドライバーであるハイネに加え、彼のクラスメイトであり幼馴染のソフィーナ・アルハゼン、2年生の先輩であるカサンドラ・サブナック、3年生の先輩であり、風紀委員会の副委員長を務めるマリオン・マリネール、そして現青蘭学園生徒会長のエミル・アンナ。

ハイネが選んだこの4人のプロGRESは、鼻真目に見ても非常に優秀な4人だ、と彼はそう評価している。

まずソフィーナ。黒の世界の統治者である魔女王がリーダーを務める政府《クレイドル》で、魔女王から直々に術を教わるほど厳しい修行してきただけあって、その実力は同年代の平均など遥かに超え、大人にも通用するレベルにまで達している。しかも、少し前に青蘭学園の講師のひとりに負けたのが悔しかったのか、近頃個人練習にも熱心だ。右腕に望むものを引き寄せるエクシード《グリーディ・ハンド》の扱いはイマイチ、というより魔術と併用する戦略を練り切れていないのは少し残念だが、そんなものはこれからどうとでもなる。

次にカサンドラ。彼女のエクシード《アマデウスの真翼》は、魔術

を特殊な膜で包み、遠くへ運ぶというものだ。しかし、その性質に反して彼女は魔術が極めて不得手だ。ただし、身体能力は非常に高く、素の状態でも曲芸のような挙動が可能だ。膂力も優れているため、主に近接戦で活躍できるだろう。また、彼女本人だけだとほぼ無用の長物と化してしまうそのエクシードだが、実は彼女はこれを完璧に操ることができると。つまり、すぐ隣にソフィーナがいたりすれば、ソフィーナの魔術を飛ばすことなら可能だ。これは大きな強みといえる。このことを知っている者は数少ないのだ。

マリオンもまた黒の世界出身ながらあまり魔術には優れない。しかし、カサンドラとは異なり多少なら扱える。そして、そのエクシード《フリテイヤリア王の華炎》は、四肢に紫色の炎を纏わせるというもの。彼女はこれを、簡単な身体能力強化の魔術に転用し、膂力をぐんと上げて接近戦を制することができると。また、カサンドラにはない特徴として、遠距離攻撃も多少なら可能だ。総合すると、中々近距離を保つことができれば、彼女のポテンシャルを遺憾なく発揮させられるはずだ。風紀委員会の副委員長を務めるといっただけあって、その実力は教師陣にも認められている。

最後にエミル。この中では唯一白の世界出身のアンドロイドだが、彼女は特殊な『魔導アンドロイド』であり、高度な魔術を行使することが可能だ。しかも、その魔術の方向性はソフィーナと大きく異なり、ソフィーナが出力の高い攻撃魔術を連発するパワータイプなのに対し、エミルは相手を拘束する魔術を立て続けに放ちながら巧妙に立ち回るテクニクタイプといえる。さらに、彼女が羽織っている、黒く分厚いコート型のエクシード兵装《マギア・クロス・ムーブメント十一式魔導調律機関》は、デフォルトの機能として空中浮遊が可能となっており、このメンバーの中で最も空中戦に優れている。現生徒会会長でもある彼女の實力は、間違いない学園でもトップクラスだ。

総合すると、所謂『魔法使いパーティ』みたいなチームである。良くも悪くも、有利不利がはっきりするタイプのチームだ。

そして、夏休み開始直前に通告された対戦相手は、あの冬吾チームだ。以前のバトルを見ていたので、戦法などはある程度把握してい

る。そして、フェアになるように参加メンバーを伝え合ったところ、彼らは今回も、前回と同じメンバーで出場するそうだ。

これを踏まえたチームメンバー5人の共通認識は——「それでも全く油断できない」だった。

「セニアちゃんがどれだけ成長してるか、分からないのよねー。4月のバトルの時は、装備すら不十分だったってデルタさん言ってたし」  
エミルが言うように、まず懸念事項の1つがセニアだ。前回のバトルの時のセニアのコンディションは、はつきり言って最悪に等しい状態だった。正式な装備が整っておらず、訓練も大した量をこなしたというわけでもなく、さらに言えばマスターである冬吾との信頼関係もまだまだ、といった状況だったのだから。むしろ、そのような状態のセニアをチームに入れて、春樹のチームと引き分けた冬吾の裁量を評価すべきところだろう。

今のセニアの実力は未知数だ。というのも、これは彼女が中等部生であり、練習風景を高等部であるチームメンバーがガッツリ見る、ということが憚られたこともある。ただ、それだけの理由なら、同じアンドロイドであるという点を生かして、エミルが情報収集できないこともない。一番の理由は、彼女が秘密の特訓に精を出しているらしいからだ。そして、それを主導しているのが、どうやらドクター・ミハイルのようなのである。ミハイルは青蘭に住むアンドロイドの大半の情報を持っているため、何か思惑があつてのことなのだろうが……。

付け加えるのなら、彼女のエクシード兵装《四六式乙型亜空間連結機構》は、厳密には兵装そのものではなく、兵装を格納しておく固有領域のようなものだという。前回のバトルで、彼女のレベル5兵装の強さはチーム全員が分かっている。下位レベルの装備も十分に整えて来られたら、その対処も一苦労だろう。

「しかし、懸念というならユファイ君もだね。前回のバトル以降、新技の開発に勤しんでいるようだ」

「ユファイリア先輩って、前回もすごい活躍してたじゃない。あんなに飛び回ってたし……」

「だが、最後に風魔忍君に捕らえられてしまった。あの一局を制することができれば確実に勝利できただけに、悔しさも大きかったようだね」

ユーフィリアと同じ2年生のカサンドラが言うには、彼女は新技をいくつか作り出しているらしい。前回のバトル、春樹チームのメンバーと冬吾チームのメンバー、誰が一番多彩に動いていたかといえば、美海との空中戦と忍との地上戦、そのどちらにも大きな影響を与えていたユーフィリアだろう。彼女のエクシード兵装《セラフィック・オルタナティブ・フメント》セラフィック・オルタナティブ・フメントは、それだけならマリオンのエクシードと似ていて、白い炎を噴出させるといふものだ。しかし、その利用法は多岐に渡り、前回のバトルだけでも、炎をブースターのように吹かして煙幕を払った《セラフィック・バースト》、高速移動して相手の攻撃を避ける《セラフィック・リープ》、至近距離での爆発から身体を守った《セラフィック・ガード》、忍の結界を破り切った《セラフィック・ドライブ》と4つの技を見せている。これがさらに増えるとなれば、対策も相応に、いやそれ以上に難しくなる。何せ相手は『あの』冬吾なのだから。増やした技を用いて戦略を多彩に広げるのは目に見えている。そして、それを予測し切るのは不可能だろう。

「一番振れ幅が小さそうなのはテルルさん、ですが……」

「あれはあれで脅威だよ。基本スペックが高すぎるもん。マリオン、どう?..」

「彼女に真っ向勝負で勝てると思うほど、自惚れてはいませんわ」

格闘に秀でたマリオンすらそう評価するのはテルル。極めて高い膂力と、衝撃を増幅させるエクシード兵装《五二式衝撃増幅手甲》マキシマム・ガントレットの相性は極めて良好で、あのチームの中では最も手堅いプログレスだ。空中戦も遠距離戦もできないが、地上・近距離戦に限定すれば向かう所敵なしの強さを誇る。マリオンの言う通り、真っ向勝負で勝とうと思うのは無謀以外の何物でもないだろう。さらに、前回のバトルで分かったことだが、彼女は高い基礎スペックのおかげで、エクシードレベルを上げなくてもある程度の戦力になる。つまり、バトル開始直後から即戦力であり、フィールド外に弾き出した際のレベル低下の影響

も受けにくい。性質自体は単純だが、いざ相手にするとなくなかなか頭の痛い存在だといえる。

「さて……まずは、誰が誰に当たるか決めようか」

「役割分担かあ……それがいいね！　まず、空中戦ができるのは私しかないから、私ができる限りユーフィリアちゃんを抑えるよ」

「それは決定事項として……残りはどうしましょうか」

「とりあえず、各員の戦闘する領域を区切ったほうがいいわね。セニアは地上・中々距離で、テルルは地上・近距離っていう風に」

「となると、マリオンはセニアちゃんと同じく地上・中々距離で、カサンドラはテルルと同じ地上・近距離か」

「ソフィーナ君は地上・遠距離かな。さて、どうだろう。私一人でテルル君を抑えるのは限りなく不可能に近いと思うけれど……」

普段は澆刺としているカサンドラだが、今は少々不安げだ。それもそうだろう。テルルの怪力を一番よく知っているのは、クラスメイトである彼女に他ならない。

ただ、ハイネにはそれに対する答えがもう出来ていた。

「だから、カサンドラはソフィーナとツーマンセルで動くべきだ。それに、カサンドラは単純な力比べならまだしも、動きの柔軟さでなら彼女をいなし続けられるはずだ」

「んー……それもそうだね。いなすだけなら、多分できると思う」

「なら大丈夫だよ。カサンドラの役目はどっちかといえば、攻撃することじゃなくて、テルル先輩をソフィーナが狙いやすい位置に留めておくこと。こうすれば、十分にダメージを入れられると思う」

「なるほどね。それなら確かに大丈夫そうだ！」

「課題はソフィーナの、攻撃範囲の凝縮、でしょうかね」

「まあ……それは何とかするわ。狭めるだけなら、対人レベルにセキアの魔弾を調整しようかしらね……」

ソフィーナがツーマンセル前提の魔術の候補をいくつか出している横で、エミルが口を挟んだ。

「それでも、相手はあのテルルちゃんだよ。素早くノックアウトできればいいけど、多分そんなにヤワじゃないよね」

「そうだろうけど……それが？」

「うん。だから、攻撃を加えるより、フィールド外に出しちゃったほうがいいのかなーって。確かにレベル低下の影響は受けにくいかもだけど、そもそも人数はこっちが1人多いから、向こうが1人いなくなるってことに対するアドバンテージは、すっごく大きいと思うんだよね」

「確かに、一時的にでも4対2になることのアドバンテージは明白だ。素晴らしい、さすが生徒会長だ！」

「エミル、って呼んでよ〜！ ……まあいいや。最後に、私ひとりだと、多分ユーフィリアちゃんとは互角がいいところなんだよね。だから、テルルちゃんを追い出してから再入場までの30秒間、ソフィーナちゃんとカサンドラちゃんのコンビネーションで、私を援護してほしいの。向こうの主戦力は間違いなくユーフィリアちゃんだし、彼女の行動を制限できれば、ぐっと勝利に近づけると思う」

「確かに、1対3なら向こうも攻撃対象を絞りにくいでしょう。眼前のエミルを外すわけにはいかないはずでしょうし、かといってソフィーナの魔術をカサンドラのエクシードで遠くから叩きつけられるのを放っておくわけにもいかない……逃げに徹されたら、それこそエミルの束縛魔術が火を噴く、といったところでしょうね」

「だから、そのー……マリオンちゃんにはできれば、セニアちゃんを単身で何とかしてほしいなーって」

「そのくらい、造作ありません……と言い切るのは少々傲慢でしょうが、風紀委員会副委員長の名に懸けて、残念な結果は見せないよう努力いたしますわ」

ハイネの中にも、だんだんと理想的なビジョンが浮かんできた。まず前提として、向こうの3人それぞれに担当を割り振る。セニアにはマリオン。ユーフィリアにはエミル。テルルにはカサンドラと遠距離からソフィーナ。

それぞれが戦うフィールドは大きく2つに分かれる。ユーフィリアは空中で、セニアとテルルは地上だ。そしてこちらは、魔術が得意なエミルとソフィーナがそれぞれ空中と地上にいる。この2つが相



互に干渉し合わないようにすべきだ。特にソフィーナの魔術は規模が大きい。カサンドラとのツーマンセルが前提であるだけに、いかに範囲を絞るといってもフレンドリーファイア——味方を攻撃してしまいう可能性がある。

セニアに対するマリオンは、正直あまり心配していない。セニアの兵装がどんなものであると、マリオンはこのチームメンバー内で、最も立ち回りの幅が広いプログレスだ。まず一方的にやられるといったことはないだろう。

次にユーフィリアに対するエミル。ユーフィリアがどれだけ多彩な技を身に付けてくるかは分からないが、束縛を得意とするエミルの実力は疑うべくもない。本人は「多分ユーフィリアちゃんとは互角がいいところ」と謙遜したが、実際どうなるかは分からない。なにせ、技を隠しているのはエミルも同じなのだから。

そして、鬼門のテルル対策にカサンドラとソフィーナの2人を充てる。カサンドラが近距離でテルルの攻撃をいなし、その隙をソフィーナの魔術で狙い撃つ。その一方で、ダメージを与える他にフィールド外に押し出すことも狙っていく。これで上手くテルルを盤面から外すことができれば、この2人がフリーになる。つまり、ソフィーナの魔術とカサンドラのエクシードのコンビネーションで、強力な魔術を遠くの敵に叩きつけることができるようになる。エミルが押されていたらユーフィリアを狙えるし、場合によってはセニアを攻撃するのも十分ありだろう。理由は単純、向こうのチームで最も防御が薄そうなのはセニアだからだ。ブルーミングバトルは、αドライバーが倒れたら負け。より効率よくダメージを与えられる相手を集中攻撃するということは、相手が最年少のセニアなだけに残酷に思えるが、必要な戦略だといえる。

だが、その一方で気になるのが……冬吾はハイネらがこういう攻め方をする、ということをごとまで読んでいるのだろうか、ということだ。

中等部からの持ち上がり組であるハイネは、冬吾と知り合って1年と5か月が経つ。その期間で、彼の聡明さはよく知っていた。本当に

人の考えを読むのが上手い人なのだ。

彼らは白の世界のアンドロイドのみで構成されたチームだ。こちらが『魔法使いパーティ』なら向こうは『アンドロイドパーティ』でも言えればいいのだろうか。少なくとも、魔術に関して卓越した知識を持っている人はいない。それは、彼らのバックについているであろうドクター・ミハイルやマスター・デルタも例外ではないだろう。となれば、ソフィーナとエミルの手についてはそこまで心配する必要がなさそうだ。

テルル対策に誰を投じるかは微妙なところだが、ユーフィリアに抗できるのがエミルだけだと断じれば、残る3人のうち2人でカバーする、と考えるのは当然の判断だ。射程に関しては比較的オールマイティなソフィーナをバックに配置し、セニアをマリオンが、テルルをカサンドラがマークすることも……恐らく読まれている。

しかし、仮に彼がこちらの戦略を読んだところで、どう対策して行くかはイマイチ読めない。堅実に見えて意外と大胆なところもある彼のことだ。もしかしたら、こちらが考えている前提を覆すような手段を取ってくるのかもしれない……。

そもそも、前回のバトルもそうだ。春樹チームは最序盤、美海のレベルを一気に上昇させて相手プログレスを全員吹き飛ばすことで超短期決着を狙っていた。もしハイネがあこのバトルの相手だったら、恐らくそこで敗北していただろう。だが、冬吾チームはそれへの対策を考えていた。あの一局だけ見ても、こちらの戦略なんかすべてお見通しなんじゃないか、という恐怖に襲われる。

(そうだ。彼はこっちのプログレスの『可能性』を、きつと俺より重く、深く考えている……)

件の一局は、あくまで可能性の1つだったのだろう。冬吾は美海というプログレスの『可能性』を重く見ていた。単に風を吹かせるというエクシードでも、極めれば暴風を呼び、プログレスを全員退場させられてしまう『かもしれない』。だから、自分のチーム内でとれる手段を組み合わせ、対策する。それだけのことだ。

だとすれば……今の彼の目に、こちらのチームの『可能性』はどれ

ほど大きく映っているのだろうか。

「……相手はあの冬吾さんだ。なにか秘策、練る必要があるかもね」

ハイネがそう呟くと、気のせいだろうか、こちらを向くみんなの眼差しが輝いたように見えた。

……………

青蘭島の商業地区にある有名な場所といえば、まず初めに超大型ショッピングモールで、ここで揃わないものはほぼ存在しないとまで言わしめる『クリスタルモール』が挙げられるが、当然ながらその周辺にも様々な商業施設が存在している。岸部雄馬は、その中でも特に青蘭学園生に縁のない部分——経済・行政地区にほど近い、居酒屋などが立ち並ぶ少々怪しげな通り『ヤクラ横丁』に来ていた。もつと言え、

「こういうところも嫌いじゃないけど、生徒がいるかもしれない昼間だからってのは頂けないな。しかも夏休み初日に」

「いいだろうが別に。生徒たちにとつちやあ立入禁止区域だろ」

「外から見えるかもしれないじゃないですか」

「なら隠形をもつと鍛えるこつたな」

身長170センチと男性にしては低めな身長雄馬の服装は、ボタンを止めずに前を開けた半袖ワイシャツにジーパン、背中にリュックサック、とラフ極まりない格好で、おおよそその場にふさわしいとは言い難い。しかし、場にふさわしいかどうかはさておき、不思議で少々危険な魅力の漂う存在感を持っている。

絢爛な内装が目眩しい、高級クラブである。知り合いが働いているから時々行くというだけで、クラブ自体は彼の趣味ではないが、今日彼がここにいるのは、彼の目の前に座って周りのホステスに愛想を振りまいている男に呼ばれたからだ。珍しく雄馬が敬語を（かなり雑ではあるが）使う相手である。

「あら、雄馬くん。久しぶりじゃない」

「どうも、ミーネさん。こんなクソジジイに気イ使う必要ないっすよ」

「誰がクソジジイだ」

たまたま学生時代に知り合ったプログレスのホステスがいたので、心の底からの親切心でアドバイスすると、その『クソジジイ』が顔をしかめた。

一見して、齢70程度の男だ。白くなった髪はオールバックにして、後ろは肩まで伸びている。口髭も同じく白いが、全く衰えた雰囲気は見えない。声にも言動にも張りがあり、口元には活気のある笑みを浮かべている。スラックスは普通だが、上半身に着ているのは赤いハイビスカスのアロハシャツと、男も雄馬と同じくラフな装いだ。

オルガ・メテオグロード。赤の世界で高名な賢者であり、青蘭庁執行部および、魔術的犯罪捜査課・通称『魔捜課』を束ねる存在である。年齢はあまり表に出したがらないが、こう見えても年齢は100歳を超えているらしい。彼は神族の血を引いているから、長生きなんだろうだ。

「大体、なんで呼び出すときはこういう店にしか呼ばないんです。別に喫茶店とかでいいでしょ？」

「バカ言え。こういう店の方がバレ辛いだろうが」

「100歳超えのジジイがよく言うわ。アンタの趣味だろ」

「こちとら老い先短いジジイなんだ、少しくらい浪費したっていいじゃねえか」

「5年前も同じこと言ってたぞ、クソジジイ。本当に短いなら、さっさとくたばりやがれ」

雄馬は向かいの席にどっかりと腰を下ろすと、明らかな暴言と共にオルガを睨み付けたが、向こうは全く気にしない。当然だ。雄馬などオルガにとっては、自分の4分の1程度しか生きていない『若造』なのだ。

雄馬は青蘭学園の出身だ。そして、青蘭学園を卒業した後、青蘭大学には進まず、日本本土で執行部の仕事をしてきた経験がある。オルガは異世界人である以上、青蘭の外に出ることはできないが、雄馬は彼から直接指示を受けて行動していた。そういう意味で、オルガは雄馬にとって『元上司』なのだ。

「まあいいや。さあ、すまんね」

とオルガが両手を上げると、個室にいたホステス達は全員外へ出て行った。個室に、2人が残る形になる。

「でもほら、俺の金で飲めるのはいいだろ？」

「俺はアンタと違って、一応仕事なんですけどねえ」

「じゃあお前の分は無しだ」

「なら帰るわ。さいなら」

「つたく、いつまでも口の減らねえガキだ」

悪態を吐きつつも楽しそうに笑うオルガ。こういうところでも何となく手玉に取られている気がして、反抗すると子供っぽいかと思いい、雄馬はおとなしく差し出されたシャンパン入りのグラスを受け取った。

——とりあえず、冷房が効いてるからいいか。

暑がりの雄馬はそんなことを考えつつ、少しの間、お互い無言でグラスを傾ける。雄馬はグラスの半分ほど空けたところで、口を開いた。

「で、最近どうなんです。魔捜課に限らず執行部は、最近いい噂聞かないけど」

「魔捜課に限らず執行部はな、周りの目だとかメンツなんか気にしてられる仕事じゃねえんだよ。相手にその気がねえからな」

「そんなことだと、また機動隊に引き抜かれるぜ？ アムベルさん、最近熱心だし」

「どこもかしこも人手不足は同じだ。こっちが引き抜いたって、総人数が増えるわけじゃねえ。魔捜官にしる機動隊員にしる、使えるやつは一朝一夕には生えてこねえんだよ」

「だとしても、アンタは一応使えるやつばっか集めてんだろ？ そのくせ、お仕事が最近どうもテキトーじゃねえか。教務課まで執行部の尻拭いさせられるとは思わなかったぜ」

「ああ、あれか」

雄馬は意地の悪い笑みを浮かべて言った。4月の終わりに開催された『スプリング・ストライクショー』の最中にひっそりと起きてい

た、日向美海が拉致された事件。オルガは渋面になって唸る。

「あのタイミングで連中が動くなんて、予想できるかよ。大体、現場にいた執行部の連中は魔捜課じゃなくて警備課の連中だったし、そもそも警備は分厚かったはずだ。実際に拉致された場所が会場付近でもなくて通学路で、通常の登校時間より大分早い時間に、つてのが抜け穴になった。監視カメラのギリギリ範囲外でもあったし、そういう情報は俺まで上がってきにくいんだよ」

「別にそこに関して文句を言うわけじゃねえけどよ。あの件、大半は結局教務課の負担になったんですよ。どうなつてんだ。しかも一部の生徒が首突っ込んだ挙句、負傷までしてるんだぞ」

「その件については謝罪したし、事後処理はこつちでしただろうが。あんなバカでかい死骸を住民の目につかないうちに片づけたのはこつちなんだぞ。よりにもよつて路上で殺りやがつて」

「そこんところの文句は俺じゃなくて凌雅に言えよな。俺らは雑魚狩りしてただけだし、しかも全員生きたまま身柄をそつちに渡したでしよ」

「下つ端どもなんか何十人くれたところで何も嬉しくねえよ。重要な情報に繋がってる奴は1人もいなかった。肝心の男爵の死骸だけじゃなく、生きてる雑魚どもを処理するこつちの身にもなれつてんだ」

程度の低い言い争いをする2人。しばらくならみ合っていた2人だが、意外にも先に視線を逸らしたのはオルガだった。

「まあいい。この件は一応話を付けてある。今更お前が噛み付いたつて空しいだけだ」

「そりゃ……まあ、そうですね」

「ところで、あの銀髪の嬢ちゃんは元気にしてるか？」

「アイですか？ 元氣過ぎて困ってますよ。あ、どうです親方。ちよつとお小遣い下さいよ。そしたら俺がありったけのドーナツ買って帰って『これはとつてもエラーい人からのプレゼントだよー』って言うんで。親方への好感度、一気にアップですよ」

「別に構わんが、テメエも一応社会人なら、ものの頼み方つてもんがあ

るだろ。あと、他のことに使ったらぶつ殺すぞ」

またなんとも程度の低いやり取りをした後、雄馬はようやく真剣な表情になった。

「……5月の件。あいつは——」

訊ねたのは、5月中旬に起きた、ファントムによる中毒事件の犯人についてだった。だが、雄馬が言い終えるよりも前に、オルガは頭を降った。

「ああ、洗脳だった。どうやら遠隔で記憶を消されたようだな」

「じゃあ、証拠は何もなしくてこと？　しかも、魔捜課が取り押さえておきながら遠隔で記憶消されるとか。いくらなんでも、それじゃあメンツが立たないだろ」

「メンツなんざ気にしてられねえってのはさつきも言っただろ。向こうさんも相当な術巧者だ。今後も下っ端が現れた時に、どんな式が仕込まれてるか分からん。それに、消されたっていうよりかは『引き抜かれた』って言う方が正しいな。意識を乗っ取る式の群体を遠隔で引き抜いたんだ。で、その中に記憶領域もあつたらようだ……」

「……ってことは、記憶が残っている可能性はないってことか。本人も堪ったもんじゃねえだろうな。……気付いたときには犯罪者になってるなんてよ」

「それでもしよつ引くのが俺らの仕事だ。……野放しにするわけにも行かねえだろ」

「あの子、プログレスだろ。アムベルさんが引き抜くだろうな」

「それならそれで、龍慈架りゅうじかに空きができるし、機動隊の戦力も上がる。一石二鳥つてもんだ」

「生き残れば、の話だけだな」

それから2人は、またしばらく無言でグラスを傾けた。氷水で満たされたクーラーの中で、シャンパンのボトルがガラン、と心地よい音を立てた。

今度は、その沈黙をオルガが破った。

「……そっういえば」

「ん？」

「お前んところの、かの名高きソフイーナ・アルハゼン嬢が《エテジャ蕾雨郷》を暴きかけてたぞ。未恐ろしいもんだ。おかげで雫が直々に口止めしにいく羽目になった」

「ほーん、それで最近やけに鼻高々なのか。しかし、才女ってのはマジなのな。将来が楽しみだ」

「アルマが泣きついてきてな、学園中に知れ渡っちまってたかもな。そうしたらどうせ外にも漏れて、効果も半減だ。一応、《エテジャ蕾雨郷》の詳細は外部には一切出さねえことになってる」

「あいつに限って泣きつくとか……てか、ソフイーナはどうなんだ。見た感じ、別に記憶を封じたとかじゃないっぽかったけど」

「おう。まあ少しこう、袖の下の力だな。俺の。小さいのをどうにかするにや、なんだかんだでござ美が役立つもんさ」

「マジかよてめーふぎけんな。そんなら俺も、言いふらしちやおつかな。親方様の袖の下とやらの力があればどうにかなるかもな」

「そんな時は俺が直々に舌を引っこ抜いてやるから安心しろ」

オルガは、まるで閻魔大王のような悪い笑みを浮かべて言った。対する雄馬は、もう抵抗する気も起きない。4倍弱の年齢差はここまでのもんか、とげんなりする。

「——ッ」

すると、突然雄馬が何かに気付いた。そして、気付いたときには、オルガの横に1人の少女が座っていた。ピッグテールの髪の毛の、大人しそうで臆病そうな、小柄な少女だ。服装も淡い色合いのガーリーなもので、この三者の中では最もこの場に相応しくないだろう。

「お疲れさん、すがちゃん。ちゃんと入口通ってきた？」

「うん、一応……誰も気付かなかったけど」

少女はそう言うと、やんわりと微笑んだ。オルガは少し前から気付いていたのか、苦笑している。が、それにしたつてずっと前から分かっていたわけではなく、雄馬よりは少し早かったという程度だ。

彼女の名前は久遠くおんすがさ。外見は間違ってもこんな場所に来ていい風貌ではないが、これでもれっきとした魔捜官である。見た目は中学生に見えるほど小柄だが、年齢は27歳。雄馬の1歳下の後輩で、



青蘭学園に在籍していた時に何かと縁があった人物だった。現在は、執行部と共に魔捜課のトップも兼ねるオルガの直属の部下である。

「お前、またよく嗅ぎつけたな。どうして分かった?」

「今日はアイちゃんに隠形術教える日だったの。それで、ゆうくんの家に行ったら、ゆうくんいなくて。留守番してた橘丸たちばなまるに聞いたら『ちよっとお偉いさんと野暮用みたいですよ』って言われたから、ピンときた」

「テメエ、行くところ全部自分の式神に言いふらしてやがんのか?」

「そ、そうじゃねえって! 今だってハレ連れてるから、相對位置でなんとなく分かるっていうか……。ていうかよくそんな曖昧な情報だけで、こんなところ覗く気になったな、すがちゃん?」

「……この従業員さんに、顔馴染みの情報屋さん、いるから」

「まあ、言っちゃえば『そのために』に作ったもんだからな。てなもんで、ここは『執行部が』使いやすいんだよ」

「そうだったの? 知らなかった……。てことは、俺がどんな情報引き出してるかも……。ま、まあいいや。しかし、こんなところにさえリスクなしで潜入できるってのは強いな。親方、あんたすっげー幸運だった気付いたほうがいいっすよ」

「気付いてなきや、あんなに給与査定が激甘なわけねえだろ」

「そうだったんですか。知らなかった」

「……初任給いくらだった?」

「えっと、48万……。だったかな」

「てことはもしかして、今は月60万とか貰ってるわけ?」

「その……。その1.5倍くらい」

「ちよっとあげすぎじゃね、親方。この子27歳で年収1000万超えだぞ」

「こいつの能力は替えが効かないからな。大金積んででも居てもらわなきやいかんのさ。長官のお達しでな。ついでに雫も」

「はあ……。そんなに貰えるなら、俺も魔捜官に鞍替えしてえな。どうすか、親方。俺のこと買わない?」

「一度ケツ捲つたら。今更いらねえよ」

久遠のエクシードは『存在希釈』とでも言うべき能力で、自分の存在を薄れさせる事ができる。そのままではあまり役に立ちそうになるが、彼女は魔捜官だ。潜入捜査にはもってこいのエクシードと言える。

しかも、雄馬が「リスクなしで潜入できる」と言ったのは『ほぼ』本当のことで、彼女はあらゆる方法で自らの存在を薄めることができる。具体的には、この世界にある仏教系の隠形術でエクシードをさらに強化し、黒の世界の魔術で光学的に透明化する。さらに、彼女が腕につけている、白の世界の技術で作られた腕時計型のフェーズシフターにより、人の身でありながら物理的に透過状態になることができる。ここまで重ねがけすれば、それは——もはや存在するのか疑わしいというレベルだ。

もちろん、これらを全て重ねがけできる時間は限られており、特にフェーズシフターのバッテリーが20分しか保たないので、最大でも20分以下になる。そういう意味で『ほぼ』リスクなし」なのだが、それでもその20分というのは「存在するのか疑わしいというレベル」の状態で行動できる時間としては非常に長い。これほどまでに『替えが効かない』人材もそう多くはないだろう。

「てか、こつち来なよすがちゃん。ジジイの隣なんかいないでさ」

「誰がジジイだ」

「ん……分かった」

「つたく……これだから若いのは」

「いいじゃないですか。ここはクラブ。女の子といちゃつかなきゃ損つてもんだ」

「こういう時は口が回るんだなお前」

「なんの。口先八丁はあんたに習ったんですよ、親方」

「教えたのは失敗だったな」

久遠が隣に来るなり、その頭を嬉しそうに撫でる雄馬。久遠も抵抗はしない。雄馬のちよつと危険そうな魅力に惚れ惚れしている……のではなく、彼にとって自分はこういうものだど理解しているだけだった。

「それで、勢いで来ちゃったはいいんですけど……出て行ったほうがいいですよね」

「あ、撫でない方がよかった？ ごめん」

「そ、そうじゃないの」

「別にいい。むしろ、お前も警戒するべきだ。どっちにしろ、来週には呼びかけるつもりだった」

「警戒……？」

「ああ。だいぶ本題から逸れたが……雄馬、お前を呼んだには理由がある」

「なくて呼んだら、学園長怒るもんな」

雄馬の軽口をよそに、オルガは身を乗り出した。さすがの雄馬も真剣なオーラに、いつもの軽い調子を引つ込めて真面目な顔つきになった。そして、隠形術を多用する都合上、靈氣の流れに敏感な久遠は、オルガが盗聴対策の結界を追加で張ったことに気付いた。既にこの個室には、幾重にも結界が張られている。どうやら雄馬は気付いていないようだが。

「周知メールは読んだな。例の件は『G』ってコードネームで呼ぶことになった。それはいいか？」

「ええ、まあ……意味あるんですか？」

「ある。こうして外でも話せるようになる」

「そんならいいけど……それこそ周知メールで伝えればいいんじゃないんですか？」

「メールは傍受される可能性がある。また少し話が逸れちゃうが……向こうは白の世界の技術を使っている可能性が極めて高い」

「へえ、そりやまたどうして」

「ファントムの侵入を防げない理由」

その言葉を聞いた瞬間、元々真面目だった雄馬の瞳に鋭さが宿った。彼からは純粹な『敵意』がありありと見て取れる。それもその筈、4月に美海が誘拐されそうになり、それはなんとか防げたものの、それ以前に3人、拉致を許している。そして、その3人は、拉致の首謀者の館で発見された。……無惨に殺害された状態で。魔捜課の搜索

に、教務課の代表としてついでに行き、ほんの数ヶ月前まで教えていた生徒の惨殺死体を直に確認した雄馬は、周囲の魔捜官が怯えるほどの強いオーラを発していたという。

隣の久遠が少し怯えたような表情になった。しかし、オルガは何も気付かないふりをして言葉を続けた。

「魔術結界は何重にも張り巡らせてる。界港のシステムだって万全だ。でも、あの世界の技術を使えば、世界間で転移ができるらしい。だとしたら、魔術結界で侵入を防ぐのは無理だ」

「……そりやそうさ。で、だからどうするんですか？」

「話は最後まで聞け。でだ……四世界府が倒れた後、その残党の大半は黒の世界を拠点として活動していたファントムと合流した。……が、どうやら白の世界と繋がったらしい」

「白の世界？ またどうして。エグマが完璧に統制してる世界のはずなのに」

「それはモノを知らねえ、部外者の偏見だ。エグマも完璧じゃない。というより、あえてそうしていると言うべきか……彼女は人間の多様性を尊んでいる。っていうことは、当然ながら反体制派ができるわけだ。それと繋がったと見て、ほぼ間違いない」

「黒の世界の魔術師どもが、技術を悪用する連中と手を組んだのか。碌でもない事が起きるわけだ」

オルガが何気なく出した『四世界府』とは……4年前までこの青蘭に存在していた、青蘭庁と並ぶ巨大な組織である。

青蘭庁が政治の場なら、四世界府は技術の場。「4つの世界の技術を統合させて、よりよい世界を作っていこう」という方針は、それだけなら大いに興味できるものである。

しかし、その実態は方針とは大きく異なった、いや、ある意味その方針を過剰に進ませたものだった。

彼らは技術の発展のためというお題目の元に、次第に暴走していった。これは設立当時の日本の政権の問題もあるのだが、当時の政権はこの四世界府に強大な権利を付与させており、彼らは青蘭庁の監査を拒否できたのだ。政権交代後、これを解体するという案もあったのだ

が、役に立つ技術を発信し続けていたのは事実であったため、その実態がなかなか判明しないまま、事態は悪化していく。

四世界府は、青蘭庁管轄の教育機関である青蘭学園に対抗し、『ブルーエデン』という独自の教育機関を設立した。青蘭学園が、一般の学校にエクシード訓練などの独自の要素を付け加えたものであるのに対し、ブルーエデンは最初から『エクシードの更なる成長のため』に動いていた。そして、そこに所属するプロGRESSは皆エクシードを開花させており、中には『マキシマム・ヴァリユー』と名付けられた「αドライバーとのリンク無しでエクシードを最大まで開放できる」というプロGRESSまで数人いた。これが、青蘭庁の……特に執行部と学園運営部エクシード管理課の目を引いた理由である。

そして5年前、遂に執行部は極秘裡に、四世界府とブルーエデンへの潜入捜査を試みる。余談だが、その際にブルーエデンの担当になったのがアルマだった。そして、遂にその実態を知ることになる。

中で行われていたのは、非人道的で狂気的な実験・研究の数々だった。

マキシマム・ヴァリユー誕生に大きく貢献したブルーエデンは特に酷く、呪術儀式に洗脳、人体改造など、ありとあらゆる『非人道』が詰め込まれていた。

そして4年前、結論を出した青蘭庁は、総力を挙げて四世界府への攻撃を試みる。四世界府は「必要な期間を終えたので解体されることになった」という名目の元、一夜のうちに殲滅されたのだった。

「もつと警備の人数増やしたほうがいいんじゃないですか？ それに『エテジャ雷雨郷』の期間を延ばすとか……」

「バカ言え、人手が足りねえってさつきも言っただろ。それに、人員に關しちゃこれでもかなり水増ししてる方なんだぞ。アリサとニユクスなんか、何とかして『エテジャマニユーバー』の糸の中継人形を作れないか検討してるし、その間にも『エテジャ雷雨郷』の監視は動いてる。だが捕まるのは小物ばかりだ。連中の巧妙さが増して来てるんだよ」

「……だとしてもだ。もう2度と、生徒が犠牲になるなんてことは許さねえ」

「そうだ、お前はそれでいい。で、さっきの話の続きだ。警戒の話」

オルガは一息入れると、僅かに声を低くした。

「もちろん、ファントムへの警戒を緩めるつもりはない。だが、今は『G』がある。警戒すべきはそちらもだ。だからこそ、お前なんだよ」  
「何に警戒すればいいんですか？ さっきはテキストにあんなこと言ったけどさ、魔捜官の真似は俺には無理よ？」

「そうじゃねえ。学園の『外』は俺らがやる。お前は『中』だ」  
「中……？」

少し考えて、まさかスパイ探しをやれって言う気か、と言い返そうとした雄馬をオルガは遮って続ける。

「ここ最近、プログレスのエクシード暴走が相次いでいる。テオドーチエが提出したデータによれば、ちょうどあの『夢』が始まってから増加傾向にあるそうさ。エクシード管理課の調査結果を見るに、プログレスのフレイム脳波が昂ってきているらしい」

「ってことは、これからもっと増える……？」

「『G』までは確実だろう。だからお前も注意しろ。お前の領分はここから西だろうが、常にお前がこっちにいるとは限らねえだろ」

何事も単刀直入に言うオルガにしては少し歯切れが悪い。なんとなくか、明言したくなくて察させようという雰囲気がある。それを不信に思った雄馬は、オルガの言葉を静止して言った。

「……ずばつと言ってもらっていいですよ。親方は大賢者かもしれないけど、俺はバカだから察せないし、多分考えてることと同じですよ」  
「なら言うが……日向美海嬢に気を付ける。あの子のエクシードが、恐らく一番暴走しやすく一番マズい。分かるだろ？」

「ええ。とにかく、彼女自身にも制御を学ばせます。なにせ桜丸さくらまるが是非ってうるさいから」

「それならそれもいいだろう。だがあの魔導具にしろ、無理やり縛るのはそろそろ限界なんだろ？」

「みたいっすね。アルマとバハムさんは、あれでもう4回くらい改良してららしいけど」

「仕方ない。そんなんで縛れるほど甘い可能性じゃねえんだろうよ」

「まあ、それはそうだ……」

雄馬は、頭の中で美海の戦う姿を思い返しながら曖昧な返事をした。エクシードが常に暴走状態にあると思われている美海。現に、かつて練習の時に1回、エクシードが操作下から外れ、暴走したことがある。それをレイピア型の魔導具《ミストラル》で束縛し、無理やり威力を落としているのが現状だ。

しかし、真相は恐らく違う、と彼は考えている。

常に暴走しているのではない。単純に、力が大きすぎるだけなのだ。まるで、世界そのものから力を貰った——いや、貰っているかのように。

「でも、警戒だって『G』までは、ってわけにもいかないんだろ？」

「当たり前だろ。『G』の後に、エクシードの暴走が収まる保証もない。むしろ加速する可能性もある。だが、前回の時は収まった。それに、それ以降はどちらかといえば『G』本体に対する警戒になる。なにせ、あの銀髪の嬢ちゃんの記事から判断するに、あそこは普通にプログラムを育ててもいるが、ブルーエデンと似たようなやり方での強化もしていい——」

「親方っ！」

「——つと、すまん、すまじ。つい口が滑った」

「いえ……だ、大丈夫、です」

オルガがつい漏らした『ブルーエデン』という言葉に、久遠は身をぶるりと震わせた。いつの間にか雄馬のシャツの裾を、その手が白くなるくらいにぎゅつと握り締めている。雄馬の鋭い叱責に、オルガは本当に申し訳なさそうに謝ったが、久遠は俯きながらも首を振った。

実は、久遠には年の離れた妹がいた。そして、青蘭学園に進学した久遠とは異なり、彼女の妹はブルーエデンに引き抜かれた。そこからほんの1年で、妹は『マキシマム・ヴァリユール』と呼ばれるようになり、そのエクシードを単独で全て引き出せるようになっていた。

しかし、今はその妹は、もうこの世にはいない。

急襲を受けて存続不能に陥りかけた四世界府は、その抵抗の最後の手段としてマキシマム・ヴァリユールを強力な洗脳によって操り、自

爆前提の出力で戦わせたのだ。その結果、他者の命を道連れに、彼女らの肉体は自らのエクシードに破壊され、全滅した。

だからこそ、当時は何も知らなかった自分を、久遠はとても責めている。そして、もう二度と自分のように悲しむ人間を出さないために、『誰にも気付かれずに行動できる』という自分のエクシードを、この青蘭を守るために使うと決めたのだ。

「……ともあれ、だ。しばらくはずっと気を張り詰めておかなきゃいけない。お前たちも警戒すると同時に、自分の身体には気を使っておけ」

「わ、私は大丈夫……慣れていくから」

「俺もまあ……基本的にはお気楽主義だしなあ。とりあえず、美海のことには任せてください。俺と桜丸でしっかり鍛えますから」

雄馬はそう請け負うと、グラスの中のぬるくなつたシャンパンを一気に空にし、ワインクーラーからシャンパンのボトルを勝手に抜き取った。



### 第3話 『案ずるより産むが易し』

バトル相手が春樹のチームだと知る前から、俊太はチームメンバーと一緒に特訓を続けていた。

「よし、今日はここまでにしよう」

フィールド内でのプログレスらの出来栄を確認しながら、俊太はそう声をかけた。その呼びかけに、フィールド内でエクシードを発動させていたアウロラ、フローリア、ルビーの三者はエクシードの発動を止めて、エンドラインまで戻ってきた。

練習開始から、既に3時間以上が経過している。今日の練習割り当ては午後からだだったので、時間も17時直前、といったところだ。しかし、夏なのでまだまだ日は高い。コロシアムには当然ながら天井がないので、ずっとこの炎天下の中だ。何度か休憩を挟んだとはいえ、やはりただの人間である以上はキツイ。

だが、本番もこうして炎天下に晒されることを考えると、経験しておいて損はない。

「おつかれさま〜」

「おつかれ、シユン！ 水飲みなさい！」

2人の妖精、特にルビーの方はそんな様子を見せない。紅玉ルビーの妖精である彼女は、熱に対して強い耐性を持つ。信じがたい話だが、ガスコンロで炙あぶられても何も感じないどころか、むしろ気持ちいいらしい。外見が人間とそう変わらない（羽根が生えていてサイズが小さいこと以外は）のに、全く違う性質を持っているのは奇妙なものだ。ちなみにサイズは可変で、その気になれば人間サイズを維持することもできるが、相応に体力を消費してしまう。

フローリアの方も元気だ。直前まで飛び回っていたとは思えない。

「お疲れ様、アウロラ。大丈夫？」

「ええ、ありがとう。俊くんもお疲れ様でした。お腹空いちやっただ。何か食べに行きましょう？」

微笑みながら戻ってくるアウロラは、このチームのプログレスの中で唯一の人間だ。動きやすいスポーツウェアを着ているが、動き続け

ているので汗でびしょ濡れで、その豊満なボディに張り付いている。バストやら太ももやらが、とても直視できない感じになっているので、俊太は思わず目を逸らしながら「う、うん。そうしよっか」とぶつきらぼうに返すので精一杯。

それはさておき、プログレスらの動きはとても良くなっていた。体力的にやたらとタフなアウロラは、炎天下での練習が終わった後でも見せるのは多少の疲労だけだ。チームの要である以上、そこまで生半可な練習ではなかったはずだが……これは安心できる部分だ。4月のバトルを見ていて気付いたが、当時はまだ付け焼刃だった春樹チームの美海と琉花は、バトル中盤から終盤にかけて明らかなスタミナ切れを起こしていたからだ。

ルビーとフローリアの妖精2人も、アウロラよりは疲れて見えるものの、よく頑張っていると思う。しかも、この2人はそれぞれ、面白い特性を持っている。

ルビーの特性は先に述べた通り。熱と光から力を得る彼女は、炎天下という状況に対してアドバンテージを得ている。これは人間ではありえない。外見からは想像できないほど、彼女のスタミナは長く持つのだ。

一方のフローリアは花の妖精。炎天下では萎しおれてしまいうのだが、水分を取り込むことができれば日光をエネルギーに変えられる。そして、今回の対戦相手には、水を扱う琉花がいる。つまり、エネルギー変換の条件が整っているということだ。

当日のバトルも、このコロシアムで行われる。俊太チームと春樹チームのバトルは午後から。天気が晴れなら、フィールドは直射日光に晒される。そして、その環境要因によって疲弊するのは人間だけであり、2人の妖精はむしろ強化される。これはきつと想像以上に大きなアドバンテージになると俊太は考えている。というより、春樹はフローリアとルビーのことをよく知らないはずだ。向こうに赤の世界出身のメンバーはいない。それに、フローリアとルビーの特性は、ヒト語を解せるほど高位の妖精だからこそ、ここまで有効活用できるものだ。春樹チームはほぼ確実に、この2人の限界を見誤るはず。

「俺が偉そうに言うのもなんだけど……3人ともすぐく良くなつて  
る。これなら、互角以上に戦えるはずだよ」

「シユンもそうおもう？ リアもね、そうおもつてた！」

「当然よ！ ルビーにかかれば、ひとひねりなんだから」

「まあまあ、そうがつつかないの。でも本当、最初に比べれば見違える  
ようね。これも、バトルが決まった直後から頑張ってきたおかげね」

俊太がチームの調整を開始したのは、アウロラと仲直りした5月の  
下旬から。ルビーとフローリアもチームに迎え、対戦相手がどんな  
チームでもいいように、3人の特性や技を知り、戦術を組み立ててき  
た。対戦相手が春樹チームだと知った時、冬吾チームと戦うよりは勝  
ち目があると思つた。

アウロラのエクシードドーン・イン・ザ・ヴァーミリオン《暁の極光》は、オーロラのように煌

めく障壁を生み出す、という能力だ。面白いことに、このエクシード  
で生み出す障壁は単なる壁ではなく、布のような性質を持っている。  
つまり、攻撃を受ける際は弾くのではなく包み込んで受け止めるし、  
固定する部分を上端だけにすれば下の部分はカーテンのように揺ら  
めく。それでいて耐久力はかなり高く、現状、ルビーの全力の炎魔法  
でも破れない上、熱もほぼ通さない。しかも、この手のエクシードに  
しては珍しく、張つた後に維持する必要がない。つまり、αリンクを  
成功させてフィールドのど真ん中を真つ二つに仕切るようにオーロ  
ラを引いたら、エネルギーを使うのはその瞬間だけで、後はαリンク  
を解除しようが、たとえアウロラがフィールドから出てしまおうが、  
そのオーロラは破壊されない限り残り続ける。これはブルーミング  
バトルのルール内で極めて稀有なことであり、戦略的に大きな意味合  
いを持つのは明白だ。現に、俊太が今考えている戦略の大半は、この  
エクシードでフィールドを『仕切る』ことを前提にしている。

フローリアのエクシードブルーミング・ストーム《繚乱華》は、植物の種から即座に花を

咲かせる能力——と本人すらそう思っていたのだが、みんなで一緒に  
エクシードについて理解を深めていく中で、調整次第では茎や葉、あ  
るいは根も出すことができるということが分かった。注ぎ込む力の  
量次第で大きな花や葉、太く長い茎や根を出現させられるので、ト

リツキーな動きが期待できる。しかも、フローリアは花を使った魔法に長けており、その内容も、芳香を吸い込むとまどろんでしまう魔法だったり、花から目を離せなくなってしまう魔法だったり、これまたトリツキーなもの揃い。本人が言うには、イタズラのために考えたのだというが、こういつた変則的な技に対する策を春樹チームが持っているか分からない。普段は花の成長で相手の動きを止めながら、要所で指示を出して幻惑する花魔法を使わせれば……。

最後にルビーのエクシード《紅<sup>ラ</sup>き宝<sup>ト</sup>玉の解<sup>ナ</sup>放<sup>ジュ</sup>者》は、宝石のルビーからオーラを発生させるといふもの。これはそのままでも攻撃を阻むバリアのような働きがあるが、その本領はルビー本人が使える炎魔法にある。このオーラを使うことで、まさに攻防一体の動きをすることができるといふのだ。変則的な技が多いこのチームにおいて、ストリートに攻撃役を担うことができる。さすがに忍<sup>しの</sup>ほどの芸<sup>ぎ</sup>達者ではないが、妖精という種族がここで活きる。羽根によって空を飛べるので、空中戦+魔法によるオールレンジ攻撃が可能なのだ。

「じゃあ、対戦相手も決まったことだし……そろそろ本格的に戦略を練ろうか」

「そうね。まずはどこから決めましょうか……私は予定通り後衛でいいのよね」

「うん。そこは変わらないと思う。後ろでオーラを張って、とにかく日向の行動範囲を制限しなきゃいけない」

春樹チームを相手にする上で重要なのは、やはり美海にどう対処するかだろう。風を操るといふエクシードの特性上、フィールド内のどこにいても影響があるのは、他のチーム以上に問題である。なぜなら、サイズが小さく軽く、しかも飛行している妖精2匹が風の影響をもろに受けるからだ。突風に煽られれば、すぐにコントロールを失い、吹き飛ばされてしまうのは目に見えている。だが、アウロラのエクシードのオーラは、風を防ぐことができる。これで美海の行動と攻撃を制限し、あわよくばフィールド外に押し出すことができれば、勝負の流れを一気に引き込める。

「フローリアとルビーも、サイズ連続変化に慣れてきた感じかな」

「うん！ うまくいくようになったよ！」

「ルビーにかかればこのくらい、ラクショーってことね！」

ルビーとフローリアには、エクシードや魔法の扱い以外にもう一つ、サイズ変化をスムーズに、しかも連続して行うという特訓をさせていた。理由は単純。小さければ攻撃が当たらないからだ。さらに、青の世界で普通に生きていけば、戦う相手が大きくなったり小さくなったり、などという体験はしないものだ。なので、ここで『驚き』というアドバンテージを得たい。

「フローリアは那月の相手な。水を操るから、逆に利用してやるんだ」

「うん！ お花、いっぱい咲かせちゃうよ！」

「ん、その意気だね」

フローリアは琉花に当てる。彼女は花の妖精なので、エネルギーを生み出すにも植物を成長させるにも、とにかく水が必要だ。最初、どのチームと当たるか分からなかったときは、アウロラが習得した水魔法を利用してしようと考えていたが、今はサブプラン。せっかく相手に水を操るプログレスがいるなら、これを利用して手はない。ただし、例によって質量の小ささは懸念事項だ。水に囚われてしまったら、容易にフィールド外に叩きだされてしまうだろう。

「で、ルビーは風魔だ。炎に耐性があるお前なら、彼女の攻撃は気にならないよな？」

「うん！ でもあの鎖とか熱でおさえつけるヤツだと、くらっちゃうわよ」

「そこは……俊敏さでどうにかしよう。小さい状態でなら、あの鎖には捕まらないでしょ」

「それならだいじょうぶよー！」

炎に耐性のあるルビーは、当然の如く炎の術を多用する忍に。しかし、忍の本領は忍術だ。煙幕を焚いたり、分身を作ったりと、その技の多様性は同年代どころか学園内でも群を抜いている。しかも、前回のバトルから3か月が経過しているのだから、技術はより洗練されていそうだし、新技もありそう。とはいえ、ルビーはルビーで、不思議と力がかかり強い。これは、ほぼ同い年のフローリアと比べても明

白だ。いざという時には、力押しも考えるべきだろう。

「もう少し考える必要はありそうだけど、みんな自分の役割は分かっているね」

俊太の言葉に頷く3人。そんな彼女らを見ながら、俊太は言葉を続ける。

「……正直言って、勝つのは厳しいと思う。俺にとっては初のバトルで、持つてるノウハウは春樹さんの方が多い。土壇場で間違った戦略を伝えちやうかもしれない。それでも……」

状況的にはかなり有利を取っているという自覚がある。しかし、不安にならないかといえば、もちろんそんなことはない。

プログラシ的な面なら、考察した通り有利なのはこちら。だからこそ、自分の差配が勝負を分けてしまう可能性が高い。今自分で口にした通り、経験的な有利は向こうにある。

「俊くん」

「な、なに？」

やや俯き気味になっていると、アウロラが屈んで頭を撫でてくれた。それ自体は嬉しいのだが、彼女の胸の双丘……どころの話ではないそれが、これでもかとはばかりに主張してきて、ついビクついてしまう。アウロラは、そんな俊太の頭をなお撫でながら、

『案ずるより産むが易し』よ。ね？」

「……うん、そう。そうだ、もちろん」

そう。心配していたって何も始まらない。進むから壁にぶつかる。それは当然のことだ。それでもなお進もうとするから、人間は前に出られる。

慈愛に満ちた表情のアウロラ。不思議そうな表情のフローリア。やや呆れた表情のルビー。その3人の顔をしっかりと見回した。もう、逃げない。この4人で頑張ると決めたから。

「それでも、全力で行こう。俺も頑張って耐える。頑張ってリンクする。だからこの4人で、後悔のないように頑張ろう」

「ええ、もちろん！」

「がんばろー！」

「やるからには、かつわよ！」

返ってきた三者三様のリアクションを見ながら、俊太はまた頑張ろうと決心した。

（そうだ。頑張れる。3人がいてくれるから……何があっても、立つていられる）

「じゃあ何を食べに行こうかしら？ 個人的には、お肉が食べたい気分」

「じゃあ焼肉とか行く？ 一応お金はあるけど……妖精って入っていないだっけ」

「リアはおにく、たべらんない！ おやさい、ある？」

「サラダとかならあるでしょ、多分。ルビーは？」

「イギなーし！ はやくいこー！」

「まずシャワー浴びて、着替えましょうね〜」

そう。大丈夫だ。弱気になる前に、みんなと自分を信じるんだ。

俊太は朱く染まり始めた空を見上げて、そう誓った。

……………

その上空に白の世界への門ハイロウが開いている白百合島。全体的に平坦な島で、島をぐるつと一周するサイクリングロードがあったり、広めの自然公園があったり、テニスコートがあったりと、何かとレジャー施設が多く存在している。青蘭島にも『青蘭スポーツの森』という公園があるが、休日はここで身体を動かす住民もいる。

そんな白百合島の中で最も大きな施設は、島の南東に建つ、半分海に面した円柱型の塔のような建物である。世界間移動を司る界港以上に大きなその施設の名前は『アンドロイド・ネスト』。『ネスト』と略されるここは、この世界にやってきた、白の世界出身のアンドロイドの大半が住む施設である。

ネストはただの居住施設ではない。青蘭はその機能維持と安全確保のために、数多くのアンドロイドを雇用している。例えば、青蘭庁の航空管制局は、世界間を運行する輸送船や機動隊の戦闘機などの航

空機が、空中でアクシデントに見舞われた際、問題解決や人命救助のためにスクランブルできる、飛行ユニットを装備したアンドロイド部隊を指揮している。また、海洋調査を行うための潜水ユニットを装備したアンドロイド調査隊、飛行できるがその用途は建設目的としてチューンされているのアンドロイド建設隊、果ては青蘭庁の施設の受付対応に従事するアンドロイドもいる。

こうした多様な仕事に従事するアンドロイドたちが快適に暮らせて、かつこうしたアンドロイドたちのメンテナンスを行う施設を大量に詰め込んだ、言ってしまうえばここは『白の世界の前線基地』なのである。

「——で、残りはどうなってるの？」

『明日の定期輸送船に5枠確保できましたので、そこに10機載せられます。さらに残った23機は、デルタ・テックのライトキャリアで輸送予定です』

「それで納期には間に合う感じか。それから、こないだ計画に上げたネガクオーツのフレミグナル錬成炉を黒の世界に輸出したいって言ったあれ、どうなってる？」

『そちらは青蘭庁の機能監査がまだ通っていません。『クレイドル』の監査官様方も含めて、本社にある実験炉の様子をお見せする予定を策定中です』

「結構。それが通れば、ネガクオーツもだいぶ入手と加工が楽になる」  
そんな施設の中を歩く男性が1人。くしゃくしゃの黒髪にラフな装いの、イマイチ冴えない彼の名前はデルタ。白の世界では『マスター・デルタ』と呼ばれる天才科学者で、主に兵器やアンドロイドの装備を作成し続けている。彼がアンドロイドたちとすれ違う度に、アンドロイドたちは驚きの表情を見せ、敬礼する者までいたが、彼は「お構いなく」というように笑顔で手を振って受け流していた。

デルタと会話しているのは、彼のサポートAIであるシステムΣ9 X・ニアだ。極めて優秀なAIだが実体がなく、ホログラムのボディすら持たない。今は彼が耳に着けている銀のイヤリングから声だけを上げている。



彼が歩を進める先には、青蘭庁の航空管制局の執務室および  
管制室コントロール・ルームがあった。

『G』は『G』として、世は進む。考えること増えてキツイな」

『そんなこと仰らないでください。もしかしたら、試験稼働中にロス  
トした機体を発見できるかもしれません』

「お前の一部が入ってるんだ。ハイロウ門1つは超えられるんだし、繋がれ  
ば、分かるか？」

『前例がないので何とも言えませんね……ロストするだけならともか  
く、時間が経った後で回収するのは今回が初めてで』

「変なことに使われてなきや……って、そんなはずないよなあ。自力  
で逃げてくれてれば御の字って感じだが」

サポートAIであるニアは非常に特殊な存在だ。なんと、それ自  
身がプログレスであり、エクシードを持つている。《九某式並列思考パラレル・シナプス》  
というエクシードで、思考領域をいくつにも分割して並列思考が可能  
になる、というものだ。デルタとリンクを行い、エクシードレベルが  
上がるにつれて分割生成できる思考数も増えていき、上位思考が下位  
思考を統制するような働きも見せるようになる。

そして、ニアはそうやって分割した自分の思考を、AI領域を持  
つ兵器やロボットの中に入れ、操作するという技術を持っていた。デ  
ルタが作成した多彩な兵器やロボットの大半をニアが管理してい  
る。現在起きている問題とは、ニアの下位思考が入ったロボットの  
テスト機が、試運転の最中に忽然と消えてしまったというもの。予想  
外の出来事だったので、ニアは咄嗟に下位思考を回収することがで  
きず、そのままの状態になってしまっている。

黒髪をわしゃわしゃと掻きながらデルタが航空管制局の執務室の  
ドアを開くと、そこはソファやテーブルが並んでいる、ゆったりとし  
たカフェのような内装になっていた。およそ執務室と聞いて思い浮  
かべるような部屋ではないが、これはこの局長の趣味、というか働  
きやすい環境を目指して作られた部屋だった。執務室の一角には、  
コーヒーや紅茶を無料提供するブースまである。ここで働く人々は、  
忙しそうにしつつもどこか余裕のある雰囲気だった。

そんなオフィスのソファに、1人の女性が座っていた。目の前のテーブルにいくつもの飛行計画フライトプランが置かれており、それに猛スピードで目を通しては、チェックを入れている。

「やあ、来たよ。ガブリエラ」

「ああ、こんな状況で済まない。すぐ終わるから、コーヒーでも飲んで待っていてくれ」

ガブリエラと呼ばれたその女性は目を上げることなく、しかし優しい声でデルタに返事した。流れるような金髪で、どこか高級そうな白い法衣を纏っている。青蘭での暮らしが長ければ分かる。この白い法衣は天使の翼が変化したものだ。

デルタはガブリエラに言われた通りカフェブースに足を運び、カフェオレを注文した。その間にも、ニアと会話を続けている。とにかくやる事が多くて、少しの時間さえ無駄にできない状況だ。

砂糖をたっぷり入れたカフェオレを味わいながらガブリエラの元に戻ると、もう確認作業は終わったらしい。

「その目が欲しくなるよ。色々なものが見えそうだ」

「そういうわけにもいかない。この目は特別なんだ」

微笑むガブリエラの赤い瞳には——十字が刻まれている。特別な目。大天使の証だ。

ガブリエラ——正式な名前はガブリエルだが、彼女は赤の世界でも最高位の四大天使の一角で、《愛導の大天使》と呼ばれる。その赤い瞳は、暁天の女神から生み出された大天使の誇りであり存在証明なのだ。

しかしなぜそんな彼女が航空管制局の局長という立場にいるかといえ、それは彼女が青の世界で何らかの役割を得たいと申し出たからだ。戦略的な思惑、というよりは単純に、四世界が協力していかなければならないと強く感じていたらしい彼女は、天使としての飛行性能を青蘭庁の長官に売り込み、立場を得ることに成功した。アンドロイドらを管理する必要があるため、今では赤の世界出身の人物の中でアンドロイドに関する知識が随一とされる。

また、航空管制局の空中部隊は大きく分けて2つの種族で構成され

ており、片方は先に述べたように白の世界のアンドロイドだが、もう片方は赤の世界の天使らである。そちらに対して、元から絶大な影響力を持つていたガブリエラの協力は、世界接続黎明期、この青蘭上空の安全確保において大きな役割を果たしたという過去があった。

余談だが、青蘭学園高等部2年生の担任教師・ララエルは、大天使であるガブリエラ直属の部下であり、『愛刻の天使』と呼ばれることもある高位の天使である。このように、赤の世界の天使は、他の世界の者らよりも青蘭の生活に絡んでいることが多い。というより、どうやら『別世界』という認識自体が薄いらしく、繋がったのだから1つの世界だ、と捉えている節がある。これは、自分の世界に明確なルーツを持ち、本体が外の世界に出ることができない女神らとは大きく異なる部分だ。

「ミハイルはまだか」

「今日は海洋調査部隊の定期健診の日だからな。少々遅れるのもやむなし。ようやく昨日で航空部隊の検診も終わったところだ。我々で先に始め——ああ、噂をすれば。お疲れ様だ、ミハイル」

「やあーっと終わった終わった。いや遅れて済まない。コーヒー取ってくるからもう少し待っていてくれ」

ドアから入ってきたのは、黒髪が美しい、白衣の女性。アンドロイド関連の研究の第一人者、ミハイル・イプシロン。彼女もデルタと同じく、白の世界では『ドクター・ミハイル』と呼ばれる。

いつものように目の下には濃いクマが浮かんでおり、はつきりと疲れて見えるが、その声には不思議と張りがあった。そんな彼女がコーヒーを持ってくるまで少し待ち、ようやくこの場に三者が揃った。

ちなみに、同じ激務の中でも、ガブリエラの方に疲れは全く見えな。なぜなら彼女は大天使。休息や睡眠すら必要とせず、何なら午後8時くらいにネストを飛び去って赤の世界に戻り、そこで大天使としての勤めを果たし、翌朝6時にまた飛んで戻ってくる予定だ。分かっているが、人間と似たような外見でそんなことをされると、どうにも調子が狂ってしまう、とデルタはぼんやりと考えていた。そんなデルタも、開発に夢中になっていれば平気で10日とか徹夜してしまう

どころか、食事すらろくに取らなくなるが。

「よし、それでは始めよう。あまり時間もないが、よろしく頼む」

「ああ。ニアア、地図を表示しろ」

『了解です』  
イエス・サー

デルタが机の上に携帯端末を置きながら、彼の指示と同時にニアアが青蘭諸島全域を示したホログラムマップを浮かび上がらせた。立体的で、地形もよく分かるようになっていた。

「さて、まずは賢緑島の機動隊基地の輸送機か。何機残す予定だ？」

「アムベルとも話し合ったんだが、賢緑島に3機残して、残り8機中4機は青蘭島東に移動させる。それ以上は諸島内で置いておける場所がない」

「で、残りは白の世界か？」

「いや、1機は黒の世界に待機させようってなってる。というの、

『G』到来でファントムの攻撃が活発化する可能性がある。クレイドルは別にいいと言っていたんだが、ここは門ハイロッ守護の意味も込めて1機置いておきたい」

「ガブリエラも、それには合意か？」

「構わない。とにかく、世界接続20周年祭までに、賢緑島の上空はクリアにする必要がある。輸送機を移動させるなら、早いほうがいい。戦闘機と違って、移動には時間もかかるし、世界間移動させるものに関して申請も通す必要がある。早急に飛行計画を提出すること。いいな、デルタ？」

「了解。ニアア、機動隊に連絡して、移動させる8機を伝えろ。飛行計画が出来たら航空部隊と連携して移動を進めること。世界間移動申請は……」

『心配ご無用です、サー。ニアアがやっております』

「助かるよ、ニアア」

「本当に便利な奴だな」

『むう、便利なだけじゃないですよ！ ニアアはできる子なんです！

晩御飯だって作りますよ！ なんなら今、自宅で作っている最中ですよ』

「実際、素晴らしいよ。ニアアのおかげで事がスムーズに運ぶ。これで実体があれば、いくらでもお礼をしたいところなのだが……」

『生身の身体なんて、持っても面倒くさいだけだと思いますけどねー。下位思考をロボットとかアンドロイドに乗せることは多いですけど、あれが本体っていうのは、ちよつと脆すぎますよね。しかも人間となれば、さらに脆弱！ ガブリエラ様のような大天使様の御身体ならともかくとして、ニアアは電子生命体で十分です』

賢緑島の機動隊基地から8機の輸送機を飛ばすシミュレーションをマップ上に表示させながら、ニアアはつまらなそうに言った。これも白の世界のAIには珍しい特徴で、あの世界のAIは、ホログラムだろうがロボットだろうが、与えられた外見に執着する性質がある。しかし、彼女にその性質が発露する様子は見られなかった。

そんなニアアの様子に、少し困ったように微笑みながら、ガブリエラは続けた。

「それから、世界接続20周年祭の間は、上空を妨害しない程度に飛行部隊を青蘭中に配備する件だが……」

「何か問題が？」

「問題があるわけではない。むしろ皆、望むところだという感じだ。それに、赤の世界から天使が、予定では16人、警護のために訪れる。彼女らにも協力させれば、大半の問題は解決できる」

「そういえば、ラファエルには……」

「ああ、話は通した。こちらの世界代表の1人として来訪する。『G』が訪ればパニックは免れないだろうが、その対応は彼女に任せることとする。構わないか？」

「問題ない。むしろ大事なものはその後……島の間を移動した人々を家に帰すための手段だが……」

「それに関しては、バスとフェリーを増やすしかないだろうが……デルタ、何か案はあるか？」

「一瞬、輸送機を使えばとか考えたけど、まさか青蘭のど真ん中に着陸できる場所もないし、非現実的ってことになった。まあこういう時はシンプルに、大人しくバスとフェリーをありつけたけ出すのが手っ取り

早くて、コストも安い。輸送機だつてタダで飛ぶわけじゃないからな。これでいいか、ガブリエラ？」

「意見相違ない。お金はいくらでも掛かる。形なりふ振り構っている状況ではないとはいえ、切り詰める部分は詰めなければ」

やはり予算のこととなると、いかに疲れ知らずなガブリエラといえども頭は痛いらしい。彼女はソファの背もたれに深く身体を埋めてコーヒーを啜った。コーヒーなど本来、大天使としては意味の無いものであるはずだが、なぜか飲むと落ち着くらしい。大天使の中でも《愛》を導く彼女は、最も人の感情に近いと云われる存在だからだろうか。

そんな様子を眺めながら、今度はデルタが口を開いた。

「賢緑島の基地もある程度空ける必要がある。場所の特定はさすがにまだらしいが……」

「機動隊の業務に影響は出ないのか？」

「そりゃあ、出ないわけないんだけど……機動隊が不審な動きをしてたらファントムにバレる可能性が高いし。20周年祭のゴタゴタに紛れ込ませることができれば話が早いんだが」

「そんなことを言ったら、輸送機の大移動の時点でバレているも同然だろう。今更気になることではない気がするな」

「それもそうか……とりあえず、対応すべき結界の方はアルマからクレイドルに話が行っているはずだ。で、その今は常設結界のコントローラを製造している。これが完成し次第、機動隊基地に運び込んでおきたい。これは問題ないな、ガブリエラ？」

「ああ。基地周辺での輸送機の大きな動きに紛れさせれば、何とかなるだろう。それに、あちらはあちらで、新型兵装の発注も同時に行っているのだろう？」

「さすが、ご名答。つて、これ言っているのかな……しかし、こうも機動隊関連の話ばかりしていると、アムベル辺りは呼ぶべきだったかもしれないな」

デルタが思案していると、ミハイルが彼に懐疑的な声を投げかけた。

「まさか界港を基地内に作るのか言わないよな？」

「界港の建設となるとまた話がややこしくなるが、まあそれは先の話だろうよ。『G』の調査がしつかりと終わってから、ってことになる。場所も含めてな。場合によっては、基地の移設も必要になるかもしれない。それまで、結界を操作するために、魔王に青蘭にいて貰うわけにはいかないだろう？」

「それができれば話が早いのだがね」

「あなたの世界でいえば、宵闇の女神が常駐するようなもんだろ。無理だろうよ」

「いや、あの方はどちらかというところ……その、自営業のお宿を空けることの方を気にされるだろうが」

「え、女神が宿屋やってんの？ 初耳なんだけど」

「あれは、お戯れ以上のものだ。大人気だぞ。2人も赤の世界に行つて、宵闇の都に寄ることがあれば、行ってみるといい。アマノリリス様のお宿でなくとも、宵闇の都はよく眠れると評判だ」

「それは気になるなあ。しばらく休みなど取れそうにないが、その時は是非……って、話が逸れたが、とりあえず界港はまだということだな」

「通商できると決まったわけでもないからね。何しろ、戦争状態らしいから。んで、ミハイルにはやはり戦闘部隊に気を遣ってやってほしい」

「それは言うまでもない。我が社でも新型部隊の調整がそろそろ付きそうな具合だ。先発隊のこともあるし、いきなり実戦投入というわけにはいかないだろうが……」

「ありがたいことだ。昨日まで見てきて分かっただろうが、ここ最近、航空部隊は大いに疲弊している。天使の方も似たり寄ったりだ。少し休息期間を与えてやりたいと思っていた」

「さすがに現行部隊のお株を奪ってしまうほどのハイスペックではない。が、やはり出張ラボではどうしようもない破損部を抱えている子もいた。別途提出した書類の通りだが、彼女らは来週頭に白の世界に連れて帰って、それなりの時間をかけて修繕させてもらう。本人の要

望次第では、除隊もあり得るだろう。代わりに、帰りの便で新型部隊を連れてくるから……」

「そうだな。その詳細は追って聞くとしよう。デルタ・テック側の装備の納品は？」

「10機、明日の定期輸送船に積む枠があったんで、それに乗せる。残りの23機は時期不定だが、うちのライトキャリアで運ぶ予定。そっちの予定はどうする、ニーア」

『イプシロン・インダストリー社のご要望に合わせます。先発する10機は明日、こちらに輸送しますが、残りはいかがいたしましたでしょうか？ あちら側で、ある程度の微調整を済ませてから、アンドロイド様方と一緒に運ぶ、ということも可能です』

「23機か。なら、早めに投入できそうな子達に先に試してみよう」

『承知いたしました。それと、シータ・システムズ社からの納品がありましたので、イプシロン・インダストリー社に提供している、当機専用のフライトシミュレータをアップデートします。よりリアルな感覚が掴めると思いますので、そちらもご活用ください』

「アリーナはやはり仕事が遅いな。まあ一度始めたら凝るタイプだし、精度には期待できるか……とりあえず、了解。いつも助かるよ」

「こちらに届く10機は、現行部隊に調整してもらおうことにしよう」  
『それがよろしいかと思われます。これに関連して、ガブリエラ様。このネストにあるフライトシミュレータを大幅にアップデートする計画についてですが、ひとまずデータの用意自体は完了しました。時期につきましては……』

「ああ、時期に関して明確な回答を出せていなくて済まないな。この情勢だ。ひとまず『G』までは現状維持で行きたい。なので、20周年祭が終わってから2週間程度経ったら……って、また曖昧になってしまった」

『問題ございません。アップデート中はフライトシミュレータを停止させる必要がありますので、今後の訓練計画が決まりましたらご連絡ください。デルタ・テックから日程を提案させていただきます』

「恩に着るよ、ニーア」



『このくらいどうということはありません!』

「常にリンクしてる僕にも、ちつとは感謝してな」

デルタがコーヒーを啜りながらぼやくと、ミハイルもガブリエラも笑った。しかし、ニアにまで笑われたのは少し腹立たしかった。

その後も3人（ニアも含めて4人）は話を続け……最後にミハイルがデルタに言った。

「最後になるが……もう十分時間が経った。こんな時期だが、セニアのバトル前に、刺激を与えておきたい」

「……大丈夫、なんだな？」

「先日会った時に確認したが、もう十分にパーソナリティが乖離している。今なら共鳴はしないはずだ」

「分かった。いつがいい？ アリアもそこまで暇じゃないんだ」

「そうだな……では——」

今まで果たされなかった邂逅が、間近に迫っている。

そんな、真剣に話し合うデルタとミハイルを見ながら、ガブリエラは溢れる慈愛に目を細めた。

#### 第4話 「君はやっぱり、見どころあるよ」

練習日の朝。美海たちがコロシウムに着いた時には、既に雄馬が来ていて、彼女らを待っていた。

そして、彼の横には、見覚えのない女性が立っていた。柔らかな金髪を靡なびかせた、柔和な表情の美女だ。黒くシンプルな女性もののスポーツウエアを身に纏っているが、体つきはかなりグラマラスだ。ウエアの端々から除く白い素肌が、逆にその女性らしさを強調しているように見えた。ふと、青蘭での暮らしが長い春樹の方を振り返ってみたが、彼も初対面らしい。そして、その女性の格好がそこそこ煽情的だからか、若干目を背けている。おっ、紳士だなあ。と美海はぼんやり思った

「おはよう、今日はよろしくな」

「おはようございます！ こちらこそよろしくお願いします！」

今日の主題はチームの練習ではなく、美海に風の術を教える、ということだった。なので、普段はコントロール・ルームにいる雄馬が、今日はフィールドに来ている。

そんな雄馬は横の女性の紹介をしてくれた。

「彼女は青山幸あおやまきち。まあなんとというか……俺の部下、みたいなもんかな。美海と同じく、風を操るエクシードを持ってる」

「講師に部下っているんですね」

「今はそういうのいいから」

春樹の突っ込みは受け流し。紹介されると、その女性——幸は、外見に違わない優しい声で自己紹介をした。

「はあ〜い。雄馬くんの部下の、幸です。みんなのことはずっと見てましたよ。今日のメインは美海ちゃんだけど、他の子もちゃくんと見ますからねえ。よろしく願いしま〜す」

やんわりと間延びした、妙に気の抜けてしまうような声。聞いていると、なんだか眠くなってしまうようだ。にしても「ずっと見ていた」とは、どういう意味だろう……。

しかし、気合十分の美海には、そんなものなど関係ない。

美海は正直、焦っていた。理由は主に2つ。1つ目は、下手にチームの中でエクシードの出力が最も高い分、いわゆる「パワー馬鹿」のような存在になりつつあることを悟っていたからだ。

無論、パワー馬鹿であろうとも、力業とて技である。有効なタイミングでの力押しは、相手に大きな負担を強いる。しかし、それは技量あつての物だろうと思つてもいる。それは、エクシードの出力でもリンク率でも劣る忍が、その類稀なる技量によってチームのエースを務めていることを顧みれば、当然のことだろう、

そして、前回のバトル以降、力押しよりも技術を高める方面で特訓を続けている琉花。結局、この2人に影響されたというのが事の本質なのだが、これはあくまで理由の1つ。

もう1つの理由はかなり切迫した問題で、それはここ最近、エクシードの操作が難しくなってきたからだ。

出力が安定しない。操作により強い力がある。これは何も美海に限った現象ではなく、なんなら琉花と忍も同じような問題があると教えてくれた。

だが、美海は元から桁外れ……とまでは言わずとも、かなりエクシードの出力が高い。なので、その『振れ幅』とでも呼ぶべきものが大きい——と雄馬は教えてくれた。最初に貰った時からすでに4回交換している、エクシード操作サポーター兼ブルーミングバトル用の武器であるレイピア《ミストラル》を使つても、操作は難しくなる一方だ。

そういえば、前回のバトル前、紗夜と練習していた時もそうだった。土壇場の一瞬でエクシードの操作ができなくなつてしまい、地面に激突したことがあつた。そして、今の感覚はあの時に非常によく似ている。操つていると思つていても、風が言うことを聞いてくれないのだ。これに気付いた時、美海はこう思つた。「エクシードの出力を抑えたまま戦えなきや、チームのお荷物になつちやう」

美海のエクシードは、良くも悪くも影響範囲と影響力が大きい。全力で風を吹かせれば、フィールド内の全員を——もちろん、敵味方関

係なく——吹き飛ばせてしまう。彼女が全力で戦うということは、チームメンバーに余計な負担を強いるということでもあるのだ。現に、4月のバトルでレベル5になった時、同じくレベル5になったセニア以外のメンバーは、全員地面にしがみついてフィールド外に吹き飛ばされないよう必死だった。もしあの場面で味方が1人でもフィールド外に飛ばされてしまったら、ブルーミングバトルのルール「レベル5終了後から30秒間、プロGRESはフィールドに入れない」によって、取り返しをつかない不利を被る可能性だってあったのだ。最悪の場合、忍と琉花が両方吹き飛ばされ、あの時の戦闘の展開で美海がフィールド外に出てしまったことにより、フィールド内にプロGRESが1人もいなくなつて負けていた。

琉花も忍も大丈夫だと言つてくれるし、実際美海の風を利用するよ  
うな戦術を春樹と一緒に考えたりもした。だが、それは美海が風を操  
れることが前提のはずだ。今のように、制御下から外れた風は、文字  
通りただの暴風でしかない。

このままじゃダメだ。

春樹のために。チームのために。自分自身のために。強くならな  
きゃいけない。

「もう始めちゃおうかなあ。え〜とお、雄馬くんはどうする〜?」

「俺はコントロールルームに戻つておくよ。αフィールドは必要だ  
し。鍛え方はお前の裁量に任せる」

そんなじゃ頑張れよ。と言つて雄馬はフィールドから出て行つた。  
いつも通りの役に戻るらしい。その雄馬を見送ると幸は今度こそ美  
海らに向き直つた。

「よお〜し、それじゃあ始めよつか。とりあえず、美海ちゃん以外の子  
はフィールドの外に出ててねえ」

「えつと、青山さん。俺はどうすればいいですか? αドライバー  
ゾーンに入ったほうがいいですか?」

「幸でいいよ。妹もいるしねえ。春樹くんはねえ、うーんと……今  
は気兼ねなく動いてもらいたいから、美海ちゃんにはトークンとリン  
クしてもらおうよ。他の子と一緒に見学しててねえ」

春樹は「分かりました。お願いします」と幸に言うと、美海の背中を叩いて、

「頑張れ。ずっと見てるから」

「……うん、ありがとう」

その優しい声にまた励まされ、美海は幸と対峙した。今はαフィールドが起動していないのでエクシードは使えないが、もう少しすれば雄馬がαフィールドを展開するだろう。

「まずは、思うがままにちよつと飛んでみてねえ。あ、それとも、今飛ぶのは危ないかなあ……」

「大丈夫ですー!」

「そう?・じゃあ行つてみよ〜」

αフィールドが展開された。エクシードがレベル1状態で使用可能になる。同時に美海はトークン(仮想αドライバー)とリンクし、レベルが上昇し始めた。

(よし、まずは安定飛行だね)

エクシードが解放された美海は、周囲から風を集めるように吹かせ、身体を持ち上げるように操作する。まだ操れている。そこから飛びたい方向に向かって風を操り、同時に落下しないように下からもずいぶん慣れた行為だが、改めて自覚すると、結構難しいことをしている……気がする。フィールドの外に出ないように、ラインのギリギリを飛び回るのは、チームを組んだ当初から今までずっと続けている、美海の基本練習の1つだ。

(ひとまず、いい感じ——ん、来たね)

何がというと、エクシードレベルだ。自然増加で、2に上昇。エクシードがさらに解放される。普段なら高揚感しか得ないものだが、今は少し怖い。びゆう、と風が勢いを増した。同時に、少し姿勢を崩しかける。

「美海ちゃん、大丈夫?」

「だ、大丈夫ですー!」

返答のためにホバリングに移行しながら声の方向を向くと、幸も風を操って飛び上がっていた。美海と同じように——

(ううん。全然、ちがう)

同じように、ではなかった。幸はまるで重力など存在しないかのよう  
に飛んでいた。ふわり、とも、ひらり、ともつかない……なんと表  
現すればよいのだろう。とにかく滑らかなのだ。滑らかに直進し、滑  
らかに方向転換。上昇も下降も、まるでそこに意図が存在しないみた  
いに滑らかだった。羽ばたく鳥のようですらない。敢えて例えると  
すれば、水中を泳ぐペンギンが、そのまま空を泳いでいるようだ。

しかも、美海本人も風を操るから気付いたのだが、幸の風の影響は  
ほとんどない。美海のように、周囲から風を吹かせて飛んでいるの  
はないらしい……？ 美海にはその理由が咄嗟に分からなかった。

どうすれば自分にも……と考える美海の元に、幸がすいーつと飛ん  
できた。

「うーん、映像見た時から思ってたけど……美海ちゃんは、風で『飛  
ぼう』としてるねえ」

「じゃあ、どうすればいいんですか？」

「風を扱う上で一番大切なことを教えるね。風はねえ、『道』なんだ  
よ」

「道……？」

「すいすいと飛び回る幸は、相変わらず穏やかな笑顔で続ける。

「そう、道。自分が今どこにいて、どこを通って、どこに辿り着きたい  
か。これをしっかりと意識するの」

「どこから、どこへ……？」

「うん。風はねえ、吹けば何処どこかから戻るんだよ。こちらからあ  
ちらへ吹く風あればあ、何処いずこからこちらへ吹く風があるの。そしてそ  
の『何処』を知るにはねえ、自分がどこから来たのが重要なんだ。そ  
それをしっかりと読み取ればあ、何処へだつてするする飛んでいける  
よお」

「どこから、来たか……」

「美海ちゃんのエクシードは、確かにとっても強力です。でも、キミ  
もまだまだ完璧じゃないよねえ。それなのに全部操ってやろうと思  
うから、掴み切れないんだよ。そんな時はねえ、割り切っちゃって

いいのさあ。今ある風をちよちよいつて引つ張つてえ、行きたい場所までかるく道を敷いたら、後はそれに乗つて飛ぶだけ。簡単でしょう?」

美海はエクシードレベルがさらに上昇するのを感じた。また、エクシード操作が不安定になる。だが、今は恐れていない。幸の言葉通りに考える。自分が今どこにいて、どこを通り、どこへ辿り着きたいか。そして、その風の道が、何処から続いているのか。今、自分の周りに吹いている風を認識して……行きたい場所に向かえそうな一片を掴み、すーつと引き延ばす。通りたい場所を通し……辿り着きたい場所まで。

難しい。幸の飛びっぷりを見た後だから、なおさらそう思う。自分がかいかに力にものを言わせていたか、よく分かる。今、この操作の1つ1つに求められているのは、力強さじゃない。正確さだ。そして、周囲の風を認識するということ――

「――つて、美海ちやくん!?」

「ふぎや!」

考えすぎてホバリングが疎かになり、いつの間にか地面まで下降してきてしまった。姿勢を崩したのが地面にほど近い場所で良かった。地面に転がった美海のそばに、幸がそつと降り立った。なんて穏やかな風の操り方だろう……。

「大丈夫?」

「は、はい……でもなんだか、ちよつと分かったような気がします!」  
「うんうん。じゃあせつかくだし、一緒に飛んでみよつかあ。風の道、しっかり感じてねえ。はい、手を繋ごうね」

「はい!」

差し出された幸の手を取り、2人は空へ舞い上がった。

……

「あ……落っこちた。何とも前途多難そうでごザルなあ」

「まあまあ。みうみんだって頑張つてるし! あ、手を繋いで飛んで

る」

「飛び方から指導してるってことは、今すぐ完璧になるわけじゃないけど、将来も見据えた感じの特訓なのかな」

「だ、大丈夫だといいんだけど……でもエクシードはそこそこちゃんと操れているみたい」

フィールド外の日陰から、飛び回る美海と幸を眺めながら、チームの残り4人は話していた。琉花と忍は柔軟体操をしながら。これが終わったら、美海の練習が終わるまで格闘の練習に移るつもりだ。

兎莉子は、チーム共用として購入したタブレット端末で、美海と幸が飛行する様子を録画している。この兎莉子が、ここ最近とても役に立っている。エクシードがやや暴れがちになっているため、こうしてフィールドの外側から状況をちゃんと見ていてくれる人員は非常に有益なのだ、皆実感していた。

「我々も少々安心するでゴザルな。ここ最近の美海殿の風の暴れっぷりは、本当に心配になるくらいでゴザったから」

「ねー。とか言つて、私らもちよつとエクシード暴れがちだけど……大丈夫なん、シノ？ 術に影響出たりしないん？」

「術は予め組んでおくもの故、大した影響はゴザらん。しかし、咄嗟に出力を上げようとした折に暴走、などとなつてしまつては笑えんでゴザルな」

「パワーがあることはいいことだと思つてたけど、こうなつてみると難しいなー。まあ、目に見える水つだけいいのかな。みうみんの風なんて目に見えないし、下手に範囲でかいから、めっちゃ大変そうだもんなあ」

「俺もすっかりリンクしてやらなきゃダメだな。こう、甘えが出てるのかもしいし」

「ハル先輩にそう思わせないために、頑張らないとな」

「ちよおー痛い痛いでゴザル！ 押しすぎ！」

「頑張らないとでしょうがシノ！ 曲がるってーの！ 心配しない！」

「後で同じことし返すでゴザルからな！」



「意気込みはいいけど、あんまやりすぎんなよー」

「あ、あははー……ほどほどにね？ ……あ、また落ちちやつた。大丈夫かなあ……」

また空中から落下し、幸に助けられている美海を眺めながら、春樹はこのチームをどうしたいのかということに思案を巡らせていた。

この特訓で、美海が成果を上げてくれれば、チームの戦略の組み立ては一層やりやすくなる。美海の風を全面的に信頼し、戦略に組み込めるというのなら、やりようはいくらでもある。メインアタッカーにすることも、サポーターにすることも。

一方で、春樹には未だ目覚めない4人のプログレスがいる。彼女らが復帰したら、どうしたものか……。戦えるのは4人の内2人だが、どちらも今のチームには存在しないタイプのプログレスだ。それに、チーム人数が5人を超えて、控えができるということは、プログレスがフィールドから出ることに対するデメリットがいくらか軽減されることを意味する。となれば、プログレスをもっと大胆に動かすこともできるだろう。

また、人数が増えるということは、ブルーミングバトルにおいて痛覚フィードバック率が上がることを意味する。現在・3人の場合のフィードバック率は40%だが、5人になると70%まで上がる。範囲攻撃を受けるなどして、チームのプログレスが同時に痛覚を発生させた際、3人なら40%ずつ合計120%だが、5人だとフィールド内の4人からそれぞれ70%のフィードバックがあるため、春樹が受ける痛覚は280%にまで跳ね上がる。これは無視できない問題だ。自分がそれに耐えられるのかどうかも、考えなければならぬ。となれば、対戦相手次第でプログレスの人数を絞ることも、有効な戦略となるだろう。

(ともあれ……大切なのは、ちゃんと向き合って、理解することだよな)

エクシードは未知の力。単純な考えでは、その可能性を引き出すことはできない。そのプログレスやエクシードの表面だけ見ているは、きつとチームとして強くなれない。

この4か月で、春樹はできるだけチームメイトの4人とコミュニケーションを図ってきた。それは非戦闘メンバーの兎莉子も例外ではない。というより、非戦闘メンバーだからこそ、というべきだろうか。とにかく、4人のことは出会った当初に比べればかなり深く知ることができている。そして、美海は今、自分のエクシードのさらなる可能性を1つ、引き出そうとしている。

ならば、それにしつかりと付き添い、見届けるべきだ。もし必要なら、アドバイスできるように。助けてあげられるように。

(頑張ろう、美海……今は辛くて苦しくても、そばにいるから)

通算4回目の落下する美海を見ながら、春樹の視線は鋭く、そして熱かった。

……………

数回の休憩を挟み……1時間半もすると、美海の飛行はそれなりに上手くいくようになった。

「うんうん。だくいぶ、上手く飛べるようになったね。さすが、飲み込み早いねえ」

「は、はいっ！　ありがとうございます！」

飛行する美海の下で、幸は忍と琉花に対する訓練を付けていた。美海の飛行がそれなりに勢いが良くとも、地面の方にはほとんど影響が出ていない。今までとは違う飛び方を、きちんと習得できているようだ。

「忍ちゃんはホントに言うこと無しだねえ。琉花ちゃんも、よく頑張りました。じゃあ2人は休憩ねえ。お水飲まない、熱中症になっちゃうからね」

「お手合わせ、感謝するでゴザル」

「はい、ありがとうございました！」

疲れた様子の琉花と忍がフィールドから出ていくと、幸はエクシードで飛び上がってきた。それにしても、幸は全く疲れた様子を見せない。それどころか、汗ひとつついていないように見える。これは一体

どういふことなのだろう……。

「さあ、最後は美海ちゃんとの戦闘訓練だね。体力は大丈夫？ 一回、休憩しよつか？」

「大丈夫です。お願いします！」

「いいお返事。じゃあ始めよつかあ。空中の戦闘で大切なのはねえ、上と下を使うことだよお」

「上下に激しく動いて、相手をかく乱するんですよ」

「うーん……激しく動けばいいってものでもないんだなあ、これが。空中で戦闘になるってことは、当然相手も空中戦ができるってことだよねえ？ だから、上下移動に対してアドバンテージを見出すのは、難しいかなあ。大切なのはあ、左右に動くのと同じくらい自然に上下に動くってことだよ。ちよつとやってみよつかあ。さあ、一発、打ち込んでおいでえ」

「い、いいんですか？」

「大丈夫大丈夫。私、強いからあ。あ、それとお、移動の意識はちゃんとそのままねえ。フィールドはできる限り広く使つて、どこから、どこを通つて、どこへ行きたいかは、ちやあくんと意識ねえ」

「はい！ 行きます！」

そう言うなら、と美海は意気込んで、ブレスレット状態の《ミストラル》に力を込めてレイピアに変えた。そしてそのまま勢いを付けつつ、風の通り道を作る。突進するように見せかけて、左下を抜けて背後に回り込み、背中側から上を通つて真上から攻撃する――

と思つて突つ込み、左下に抜けようとしたのは良かったが、そこで驚いたのは、幸がくるりと身体の向きを変えたことだ。それも後ろを振り返ったわけではない。足が上に、頭が下に……つまり、上下にひっくり返つたのだ。

「えっ!？」

「隙アリだよ」

そのままミストラルを持っていた手首を軽く握られ――また驚く。いきなり竜巻に巻き込まれたかのように身体が回転したからだ。遠心力で渦の外側に引っ張られながら、握られた手首が内側に引き戻し

てくる。視界がめちやくちやに入り乱れ、平衡感覚を完全に失う。

(マズい——!?)

ぐるぐると回転させられる中で、方向感覚も分からなくなった。幸の手が離され、何処かへ飛ばされる。しかも、単に飛ばされているわけではない。恐らくこの感覚……幸が作った風の道に乗せられている。

(こつちも、風の道を作らなきゃ……!)

美海はとつさの判断で、自分の頭の方向へ風の道を引き延ばした。飛ばされる自分の身体をホバリングする時の要領でいくらか安定させ、幸の風の道から自分で作った風の道に、何とか乗せ替える。

ようやく向きが分かった。遅すぎることは反省。しかしとりあえず、身体のコントロールは取り戻した。先ほど中途半端に引いた風の道をさらに引き延ばし、もう一度幸の方へ向かう。

「すごいねえ。落ちちやうかなあつて思ったけど、ちゃんと復帰してくるなんて、やるねえ。やっぱり美海ちゃんは、出来る子だねえ」  
「まだまだっ!」

下をくぐるのは無意味。逆にこちらが驚かされてしまった。幸は「左右に動くのと同じくらい自然に上下に動く」ことが大切だと言っていた。そして彼女は、後ろを振り向くのと同じくらい当たり前のように上下を入れ替えた。空中戦に慣れた者にとって、上下移動で意表を突こうとしても、背後を取ること程度の驚きしか与えられない。無論、複数人で戦っていればそれは相応の有利となるが、1対1ではほぼ意味がない。

となれば、正攻法で真正面から攻めるしかない。背後に回る、上下に移動するのは、その後でもいいだろう。現状、攻撃のリーチが長いのはレイピアを持っているこちら。中距離からヒットアンドアウェイを繰り返す、美海お得意の戦法が使える。その戦法を、新しい飛び方で行うのは、確かにいい特訓だ。

意識は風の道。一撃打ち込んで離れ、また一撃与える。風の道をすつと引き、勢いよく幸に突っ込んだ。

「おつ、直球勝負だねえ。いいよ、その思い切り。でも、ちよつとだ

「けえ、直線的過ぎかなあ」

幸はにこやかな笑顔のままそう言うと、ひゅつ、と軽く斜め上に避けた。でも美海も慌てない。多少の方向調整は可能だし、例えレイピアで突きが出来なくても、峰打ちは可能だ。方向を見て、攻撃を調整

できない。幸は上に避けながら、なんと寝返りを打つように、横向きにくるりとロールした。それは美海の頭上を簡単に越え、気付けば美海は背後と上空を同時に取られていた。

マズい。咄嗟に後ろを振り返った美海だが、幸の動きはまだ止まらない。回転の向きを横から縦にしながら、今度は美海の右に移動。まるで上下逆さまのフィギュアスケーターのようだ。美海は幸の動きを追うので精一杯。そして、そこで風が吹いた。その風は、幸のロールに合わせ、しかも彼女に引き寄せられるように渦を巻いている。しかも、今までの彼女からは想像できない強さだった。一瞬とはいえ風のコントロールを失った美海は、その渦に巻き込まれてしまう。

不意に、背後にいる幸の腕が、美海の腰に回された。完全に真後ろを取られてしまった。そのまま先ほどと同じようにぐるぐると回転させられ……今度ははつきり分かる。真下に投げ飛ばされた。しかも、勢いは先ほどより強い。

（復帰は——ムリそう……っ！）

その美海の判断は正しかった。何とか風を一筋掴み、自分の下方向へ、滑り台のように引いて、投げ飛ばしの勢いを斜めにずらしながら地面に軟着陸するのがやっとだった。

「いい判断だねえ。うんうん。君はやっぱり、見どころあるよ」

軟着陸のためはかなり強引に風を引っ張ったため、息が切れている。フィールドにすつと着陸した幸は、美海にくっついた人工芝を払いながら、頭を撫でてくれた。

「ごめんねえ、いきなりスパルタでえ。でもねえ、風の間接はこういう風に掴むの。どうかなあ？」

「……私も」

「？」

「私も、幸さんみたいになれますか？」

幸の方をまっすぐ見つめる美海の瞳は、涙に潤んでいるようにも、期待に輝いているようにも、どちらにも見えた。それを見た幸は、より一層笑みを深めて、

「頑張ればあ、私よりずっと強くなれるよ〜」

その日の練習後、美海は雄馬と幸に深く頭を下げて、今後とも練習する機会を取り付けてもらった。

.....

青蘭島の行政や経済、あるいは教育などの主要な機能は、青蘭諸島の他の島々が近い北側に集中している。そして、平坦な土地が多い東は、青蘭諸島を守る機動隊の基地が所在している。西側には、実は何もない。青蘭島の中央の山・青枝山あおえざんの斜面に近いため、道路とちよつとした道の駅的なサービスエリアが点在するだけだ。

では南側はどうなっているかという点、実はリゾート施設が集中している。遮蔽物が何も存在しないため日当たりが一切遮られず、青く澄んだビーチも広々としているため、リゾート地としては絶好の地だといえるだろう。大雑把に言えば東西に引き延ばした楕円形をしている青蘭島において、この南側の土地は資産家の別荘や、大きなログハウス、中には海上に設えたコテージ群なども存在しており、海辺でのバカンスを存分に楽しむことができるのだ。しかも、土地が余りがない青蘭島の施設の例によって、ホテルやコテージなどに宿泊する際、部屋の広さの割に使用料がとても安いのも魅力的だ。青蘭島北側・商業地区のクリスタルモールほどではないが、そこそこ大きなショッピングモールが存在し、グルメやショッピングを楽しみやすいのも高評価の一端を担っている。青蘭諸島にやってくる人々の多くは、このリゾート地、青蘭庁が決めた正式名称『サファイアリゾートベルト』に滞在する。

そんなサファイアリゾートベルトの一角、青枝山に程近い場所に建

てられた木造のログハウスに向かう、1人の男性の姿があった。名前はアルマ・カミュオン。青蘭学園の体育の講師である、黒の世界出身の男性だ。世界接続20周年祭のブルーミングバトルに出場するαドライバー、ハイン・カミュオンの実の兄である。線の細い美少年のハインと異なり、アルマはどちらかといえば、力強さと妖しさが入り混じる美青年だった。そんな彼も、今はアロハシャツを羽織ったラフな格好だ。これでは妖しさも何もあつたものではない。

「昔はこの辺に住めたら、なんて思ってたけど、よく考えると北側に移動するのめっちゃめんどくさいよな。ぐるって回らなきゃいけないし」

「今のお家も、とても素敵ですわよ？ 変に欲張るものではありませんね？」

「分かってるって。キアは心配性だなあ」

そのアルマは肩に、少女のような何かを乗せていた。『少女のような何か』と形容したのは、それが明らかに人間らしくないからであり、なんと、身長が1メートル弱、下手したら70センチ程度しかない。くりくりとした瞳は紅紫と黄金のオッドアイ。手足は木の枝のように細くしなやかで、艶やかな黒髪は腰のあたりまで伸びている。なによりも特徴的なのはその身に纏う、まるで水晶を織り上げたかのように煌めくドレス。同じく水晶で作られたような日傘を差して、アルマの肩に、そこがまるで玉座であるかのように鷹揚に腰掛けていた。

名前を、クルキアータという。黒の世界の最高統治者・魔女王が、超高純度の水晶塊から削り出したという自律人形だ。元々クレイドルの命令で青蘭に赴任していたアルマの護衛役であり、それ以外に青蘭の情報を收拾するための存在だったが、今はアルマの家に住み着き、そこそこ気楽に生活している。

『G』のゴタゴタは随分続きますね？」

「キアなら、もう答えは見えてるんだろ」

「答えだけなら、可能ですわよ？ しかし、道も無いのに答えだけ知って、一体どうしようというのでしょうか？ 今あたしが知っている答えは『大丈夫』ということだけです？ ……ええ、まるで何の足しに

もなりませんね?」

「いやいや、安心できるよ」

クルキアータ（アルマは『キアー』という愛称で呼ぶ）は、実は人形ながらプログレスで、そのエクシード《ルキオラ・ヘクト・アイ》は『過程を無視して結論を得る』という極めて稀な力である。それだけ聞けばやりたい放題出来てしまいそうだが、実際はそう簡単ではなく、答えを『理解する』ためには、エクシードですっ飛ばした過程を辿る必要が往々にして発生する。普段は家で暇を持て余している彼女は、そんな暇を使って『過程を辿る』という思考に延々と耽っているのだ。

軽口を叩き合っているうちにアルマが辿り着いたログハウスのドアを開けると、1人の女性が出迎えた。

「ごめん、遅れたな、アリサ」

「気にすんなし。まだみんなでケーキ食べてるよ。キアーちゃんも食べる?」

「はい、頂こうかしら?」

「おっけ、紅茶2杯入れちゃうわ」

女性は開いた手の指を、何か糸でも引つ張るようによくいくいと動かしながら、2人をログハウスの中に誘った。

その女性は派手な外見だった。身長はそれほど高くないが、ウェーブの掛かった髪を大雑把にツインテールにしているため、シルエットが大きく見える。しかもビジュウのようなアクセサリーを編み込んでいた。服装はシャツとスカートとシンプルながら、すべての指にリングが嵌められており、大きく開けられたシャツの胸元からは、豊かなバストの谷間と、首から下げたアクセが見えている。そのシャツの左胸には、青い蘭を取り囲む明るい紫の、小さなピンバッジが光っていた。

名前を、アリサ・マイネル。黒の世界出身で、青蘭学園の初代生徒会長だった過去を持つ。今は青蘭庁執行部魔術犯罪捜査課、通称『魔捜課』の一員であり、こんな外見ながら犯罪捜査のエースである。

ログハウスのリビングは、極めて混沌としていた。



「遅いぞ、アルマ。デートに遅れる男はモテんぞ」

「デートじゃないし。普段は図書館塔に籠りつきりだからあんまり見ないけど、やっぱり食欲旺盛なんですな」

「うるさい。この躰からだは、ヒトが食べる食べ物だとエネルギー補給にかなりの量が必要なのじゃ」

まず、大きなテーブルの近くのソファにふんぞり返っているのは、青蘭学園の化学教師であるアルスメル。すぐそばにケーキが乗った皿がいくつも、ふわふわと空中を漂っている。彼女は、ふんっ、と鼻息を鳴らすと、そのうちの1つを捕まえて、フォークで綺麗に切り分けて食べ始めた。外見は10歳くらいかそれ以下かくらいの、愛らしくあどけない幼い少女だが、実際は数百年の時を生きる錬金術師の老である。また、黒の世界の魔王が直々に指名した《十二杖じゅうにじょう》の1人でもある。黒の世界で錬金術を嗜んでいけば、その名を知らずにはいられないほどの有名人だ。しかし、今はそんな威厳もどこへやら、ケーキの甘味に頬を緩ませている。こうして見ると、本当に普通の幼い少女のようだ。

「やあ、アルマ君にクルキアータ君。よく来てくれた」

「アムベルこそ、今は忙しいんじゃないのか?」

「確かに忙しいが、だからといって横との連携を疎かにするわけにもいくまい。ともあれ、航空管理局からの連絡が来る前から準備はしていたから、問題という問題もないな。強いて言うなら、この隙を狙われないか心配だ」

「それは大丈夫でしょう? なにせ、貴女に、貴女の部隊ですものね?」

「信頼してもらえるのはありがたいね」

ソファにゆったりと深く座り、ティーカップを優雅に傾けているのは、ダークシルバーのロングヘアをひとつに束ねた美女だ。目を閉じて紅茶を味わう姿は、とてもリラックスしているように見えるが、それでも獲物を待ち構える猛獣のような、凜猛で鋭利な雰囲気漂っている。身に纏っているのは、こんなログハウスに相応しいとはとても言えない、青蘭機動隊の制服だ。ダークブルーをメインとした、騎士

のような制服は、彼女のオーラと非常にマッチしている。

彼女の名前は、アムベル・マカリストア。黒の世界出身で、青蘭機動隊のプログレス小隊の隊長を任されている、歴戦のプログレスだ。

「お疲れ様、<sup>しずく</sup>雫。ようやく梅雨シーズンも去ったな」

「お疲れ様です、アルマさん。これでようやく、少し休めそうです」

「本当にご苦勞なことだよな。今期の摘発数、かなりの量だったって聞いたけど」

「ありがとうございます。それでも、まだ核心は掴めない感じですよ。何か、こう新しい動きがあるみたいな……あ、失礼しました。これは後で話す機会がありますね」

濡れたように艶やかな黒髪の美女は、<sup>あまみや</sup>雨宮雫。雨を支配し広域を探索するエクシード《<sup>エテジエ</sup>雷雨郷》を持つ魔捜課のプログレスだ。自然に雨が降る季節である6月から7月は毎年寝る間もないほど働き詰めなので、今は少しやつれて見えた。しかし、ケーキを口に運ぶその表情は柔らかなものだった。

そして、そんな面々が揃うリビングを、数体の人形が飛び回っていた。クルキアータよりも大幅に小さく、1体1体は30センチほどの可愛い西洋人形だ。そんな人形たちが、アルマたちの前に紅茶のカップを運んだり、資料の束を整理していたり、キッチンで火の様子を見ていたり、せわしなく働いていた。

「さーて。人も揃ったし、食べながらでいいから、ぼちぼち始めようかし。アムベルさんも時間ないしね。アルマ君もキーアちゃんも、テキトーに座って」

アリサが、相変わらず指をくいくいと動かしながら声をかけた。この人形たちは、アリサのエクシードで動いているのだ。

アルマがテーブル近くの椅子に座り、クルキアータがその膝に座った。大きな円形のテーブルの上には、何も置かれていない。——いや、その中央に、何やら盆のような薄く丸い板が置いてある。

「では始めようぞ。気になる点があれば指摘する。《リビアンデザートグラス》起動」

アルスメルがケーキを頬張りながら行儀悪く唱えると、その盆は突

如としてテーブルと同じサイズまで広がった。厚みは一切変化していない。それからすぐに、その盆の底から、キラキラした無数の砂粒が重力に逆らって立ち昇り始めた。無数の砂粒は寄り集まり、凹凸を作り、10秒と経たずに何かの形を成す。中央が山のように盛り上がった楕円形——青蘭島だ。そして、砂粒で出来ていたそれは、いつの間にか硝子ガラスで出来ているかのように透き通っていた。その形の正確さたるや、特に北側が形作られている部分が顕著で、ビルやマンション、クリスタルモールのような建築物が、精巧な硝子細工ガラスざいくのジオラマとして現れている。そして、その中を、幾筋もの光のラインが複雑に行き交っている。

これは、アルスメルが発明した、青蘭諸島魔力監視システム《リビアンデザートグラス》である。伸縮自在で持ち運びに労力を使わず、中に秘められた無数の硝子の砂粒が結晶に成形されて実体化する。見たい場所だけを見ることができ、範囲内の魔力の流れを光のラインで表している。今は青蘭島だけ表示されているが、操作次第では他の島々はもちろん、海中や上空さえ表示させることが可能だ。

「さて、どこから始めようか。アリサ、お主から話せい」

「おっけー。んじゃ、アタシからね。とりあえず《マニニューバー》の中継地点を増設したよ。増設箇所はここね。はい表示」

アリサが合図すると、光のラインが複雑に絡み合う中で、十数か所に青い光が灯った。その中の5つは、他のものより殊更ひたひたに強い光を放っている。

「霊力管の周辺に仕込んで、外部の目を誤魔化してるよ。地面の下と建物の中だから、《雷雨郷エテジヤ》の影響は受けない。まー、しばらくはこれでどうにかするしかねーってカンジ。でも今まで以上に警戒範囲は広げた……っつーより、密度を上げた、って言った方がいいか。他の島はまだ増設してない。運用テストは今のところ2週間経過で、特に問題なく稼働中ね。以上。質問ある？」

アリサのエクシード《マニニューバー》は、物体を自由自在に操るというものだ。今ログハウス内で動いている人形はすべて彼女のエクシードによって操られている。だが、単に『操る』と言ってもそこま

で大きなものを操ることはできず、この人形サイズがちょうどいいくらいで、人間などの生物はもちろん、他人に操縦されている車すら操ることができない。

ではなぜ彼女が魔捜課のエースと言われるのか。それは彼女の物体操作能力において強い部分が『操る強引さ』ではなく、『同時に操れる数』と『操れる範囲』だからである。具体的に言えば、彼女は同時に百以上もの物体を操作することができ、しかもそのエクシードが及ぶ範囲は、なんと青蘭諸島全域に及ぶ。物体を操作するというエクシードはしばしば散見されるが、ここまでの数と範囲を併せ持つのは彼女くらいのものだろうか。そして、彼女のエクシードを受けて情報を収集することのできる端末は——街灯や道路標識など、一見してそれとは分らない形で——青蘭諸島中に設置されている。つまり彼女は、青蘭諸島のどこにいても、範囲内の情報を収集することが可能なのだ。もし仮に、今この瞬間に白百合島の情報を得たいと思えば、容易に実行してのけてしまうだろう。

彼女の言葉を受けて、皆しばらく黙っていたが、その沈黙をアムベルが破った。

「質問をひとつ。中継地点の性能は既存のものと同じかな？ 情報の連携が今まで通りだと助かるんだが」

「いや、ちよつと改良……というより、後付けができるような領域を確保してる。なんで、連携できる情報は『今のところは』今までと同じ。あともう2週間もテストして問題ないなら本稼働させるし、他の島にも設置する計画が立ってる。事後報告になっちゃってゴメンね」

「なに、構わないさ。それより、後付け領域というのは……」

「アレよ。《エテジァ蓄雨郷》の影響を受けない人形作りに励んでてさ。それが上手くいったら、監視の目をこつちから移動させられるようになるっしょ？ その操作領域つてーのが、主な目的ってカンジかな」

「承知した。私からの質問はこれで十分だ。他の者はどうかかな？」

誰も声を上げなかったので、次はアムベルが口を開いた。それと同じ時に、《リビアンデザートグラスリビアンデザートグラス》の縮尺が変わり、青蘭諸島全域を表した。海中となる部分にも、幾筋もの魔力線の光が走っている。ま

た、青蘭島以外の各島の上空部分には、それぞれの世界への門の光も表示されていた。

「次は私から。よろしいかな、アルスメル様？」

「構わんぞ。報告するのじゃ」

「では……まず、青蘭庁と航空管制局からの要望で、賢緑島の基地から輸送機・戦闘機と人員を移動させた。要望通り、世界接続20周年祭の準備をしているように見せかけて実行したが、当然ながら移動させた分、賢緑島の警備が薄くなっている。アリサ君や雫君をはじめ、魔捜課には普段よりも少し気を配って情報を集めてほしい。多少無防備を晒すのは頂けないが、もしかしたらこの『エサ』に釣られて、賢緑島にファントムが現れるかもしれない」

「当ったり前じゃん。任せてよ。」

「雨が降るならですが、お任せください」

「頼もしいね。次に、5月に発生した青蘭学園生の魔力中毒事件を起こした犯人のプログレスについてだが……ここしばらく接触を図っている。これは魔捜課の面々も存じている通りだろう。事件の記憶に関しては、やはり芳しくないが、彼女が黒の世界のグロースエンパイアの辺りで活動していたのは間違いなく、その辺りから記憶がないらしい。クレイドルには周辺地域の調査依頼を申請したが、どうやらファントムや四世界府の残党どもは、黒の世界の北の方を拠点として活動しているようだ」

「あの地方、一年中雪降ってるもんな。色々と見えにくいだろう」

「ああ。とはいえ、あの世界でなら悪巧みなどいくらでもできる。それに、《エテジ蓄雨郷》で発見することができず、界港を通ることもなく世界間移動できている点から、白の世界の反E・G・M・A派が絡んでいるのもほぼ確実。こちら側からではどうしても対応が後手に回ってしまうのがもどかしいが……」

「それは仕方あるまい。こちらも《リビアンデザートグラス》のアップデートは急ピッチで進めておる。とにかく機動隊には、奴らが現れた瞬間に対処してもらおうしかあるまい。すまぬが、我々が奴らの転移技術を解析するまで、もう暫くの間、場当たりの対応を要求すること

になる」

「その事についてなら問題ない、アルスメル様。そのために普段から訓練している。それで、件のプログラマー……イリアス・フェムト君についてだが、正体を隠して我々、というより私が引き取りたいと思っているが、どうだろうか」

今まで、《リビアンデザートグラス》上で移動する輸送機や戦闘機の動きを見ながら話を聞いていたアリサと雨宮は、アムベルのその言葉にさっと視線を交わし合い、アリサの方が口を開いた。

「まー、魔捜課としてもだいたい調べ尽くしたしねー。親方は、アムベルさんが引っこ抜くなら、それはそれで構わないって言ってたよ。ただ、彼女のエクシードの調査がイマイチねー」

「それは使わせて調べればいい。もちろん情報は共有する。それに、何かあっても私なら抑え込める」

「そこは心配してないっつーの……んまあ、状況が状況だし、今龍慈架<sup>りゆうじ</sup>に行くとして、囚人をぶち込むのはともかく、出すのは何かと憚られるから、少なくとも20周年祭が終わってからにしてってハナシ」  
「分かっているさ。とりあえず、各種申請書を用意しておくよ。私からは以上だが、何か質問はあるかな?」

またしばしの沈黙。次に口を開いたのは、意外にもクルキアータだった。

「先ほど貴女が仰っていた『エサ』についてですが……敢えて『撒<sup>ま</sup>く』という案はあるのでしょうか?」

「いや、食いつくなら食いつけという感じだ。こちらもバタバタしているのだから、事件など起きない方がずっといい。それに、幹部レベルはまず釣れるまい。下っ端を幾ら捕らえたとして、4月、5月と同じように、無駄に龍慈架を埋めてしまっただけだろう」

「それはごもつともですわね?」

「だが、どこから兵力を集めているのかは知っておきたいところだ。5月の子……イリアスか? 彼女はグロースエンパイア周辺で捕らえられたようだが、4月に生徒を拉致した連中は、むしろ元々南の方で結集していたそうだ。男爵の居城があつたからな。親方は

雑魚ばかりと嘆いていたが、それはそれで収穫があるだろ。下っ端を釣るのも、別にデメリツトしかないとは思わないんだが」

「それもそうなんだがね、アルマ君。しかし、しかしだ。敢えてファントムを引つ張り込むのは決して得策ではないだろう？ 連中がどこから青蘭の様子を見ているか、ほとんど分かかっていないんだから。もし実際にエサを撒いたとして、それが揺動だと気付かれてしまった日には、それこそ『G』のことまで掘られかねない。……まあ、今までの傾向からして、既に漏れている気もしないわけではないが」

「どうせ連中は、何もしなくたって来ますものね？ アルマ、焦りほど大きな隙はありませんことよ？」

「ん、その通りだ。敢えて住民や生徒を危険に晒すことはない……俺としたことが、ちよつと焦つたな。申し訳ない」

「いや、君の焦りも分かるよ。何せ、学園の生徒が何人も犠牲になつているし……男爵絡みでは死者すら出ている。権限者として、オーソライザー早急に事態を好転させたいと思う気持ちはもつともだ。我々機動隊も、尻尾をつかめればと歯痒い思いをしているが……」

「内側は妾わらわらの問題じゃ、アムベル。生徒が犠牲になつたのは妾ら教務課の責任なのじゃから、機動隊は外を警戒してくれれば良い。それにアルマ、お主がそう急せいでどうする。何のためにお主がいると思つておるのじゃ」

「……そうだな。ゴメン、忘れてくれ。俺は俺の仕事に集中するよ」

アルマは、彼にしては珍しく殊勝に謝ると、ソファに一層深く身を埋めた。膝の上のクルキアータを撫でながら俯くその表情からは、生徒の前では決して見せられない、焦りと疲れが見て取れた。

その場にいる全員、そのことに気付きながらも、敢えてそれには何も言わず、次に雨宮が話し始めた。

「私からは一点だけです。先日、6月中の摘発データを連携しましたが、7月中ももう少し調査を進めます。特に青蘭島の西居住地区内で怪しい動きがいくつか。また、先月末ごろ、夕玄島の東居住地区でファントムの構成員らしき人物を拘束しましたが、例によって記憶は抜かれていました。警戒は強めていますが……」

「ふむ……その件なら読んだぞ。まあ夕玄島じゃしなあ……界港からそのまま居住区に降りられてしまつては、対応が難しいのもあろうな」

「はい。その通りです。こちらでも何とか追いかけてはいますが、夕玄島は上空の門ハイロウの影響で、普段から空気中の魔力が他の島より濃い傾向にあります。雷雨郷エテジヤでの搜索が難しく……申し訳ございません」

「雫君が謝ることはないだろう。君がいなければ、彼らは皆、野放しだったのだから。それに、クレイドルから黒の世界側の門ハイロウ近くに、機動隊の駐在許可を頂けた。輸送機を1機送つてあるが、そちらでも警戒を強めている」

「それは良かったです。それで、ここからは私の所感になるのですが……フロントム内に新しい動きがあるような気がしています……」  
「新しい動き、ですか？ それは、白の世界の反Eエ・Gグ・Mマ・Aマ派と繋がったから、以外の理由でしょうか？」

「以外、ではないと言いますか……彼らが繋がったとみられるのは、少なくとも去年からです。そして、なんというか、大きな違和感のようなものを感じるようになったのは、6月くらいからのことでした……こう、なんと言いますか。フロントムと反Eエ・Gグ・Mマ・Aマ派が、より深く繋がったところで、何かあったのでは、と……」

「……お互いの『核』みたいなものが結び付いた、つてところか」  
「そう、それです。明らかに巧妙さが増しました。4月の段階では、既存の技術で男爵の出現位置を予測できたというのに、5月のイリアスさんの出現は予測できませんでしたし、彼女自身で世界間転移を行つた跡もありませんでした。これって明らかに変ですよ？ 妙な気がします。まるで、より強固な拠点でも手に入れたかのような十全さです……」

雨宮は俯きながら、彼女の感じたことを、ぽつぽつと言葉にしていた。それを聞いたアルマも、少し思い当たることがある。それはまさに、雨宮が言った『4月と5月の違い』だ。

4月の事件——美海が拉致されかけた事件だが、初動捜査に雄馬と海斗が動き、その報告を受けた段階で男爵——『プロツサ男爵』と呼



ばれる、黒の世界の悪名高い権力者が絡んでいると判断した魔捜課は、その出現位置を予測するべく動いた。魔捜課は、特殊な方法で法外な世界間転移を検知することができる。もちろん、世界間転移には様々なパターンがある上に、界港が開いていると正確な検知が難しいが、男爵が訪れる直前に出現位置を予測でき、そのおかげで彼を倒すことに成功した。

翻って5月、青蘭学園で起きた魔力中毒事件。兔莉子と樹里、2人の犠牲者を出しながらも、主犯のイリアス・フェムトの拘束には成功した。しかし彼女は洗脳されていた上に、洗脳していた領域ごと引き抜かれたせいで、事件にかかわる記憶は何も残っていなかった。また、本来、世界間を移動すると、どうしても霊体に跡が残るようになっていいる。これは移動する世界間の概念や法則の違いから来るもので、時間が経てば慣れて消えていくが、少なくとも1カ月は残る。その跡が残っていないなかったのだ。1カ月前から彼女が潜伏していた可能性も考えられたが、彼女の洗脳前の記憶の最後が、事件発生の約3週間前だったことから、この可能性は潰えている（実際に当時、現地で彼女が活動していたことの確認も取れた）。付け加えると、4月の事件の際に拘束したファントムの下級構成員らには、この跡が残っていた。

明らかに向こうの技術の巧妙さが増している。焦っているのはアルマだけではない。魔捜課も、機動隊もそうだ。今は魔捜課が処理に当たっているが、いざ本格的にファントムが攻めてきた際に応戦するのは機動隊となる。そうなった時、果たして今の装備で、今の兵力で、技術的に向上しているファントムに対抗できるのだろうか。

皆が嫌な可能性に口を噤み、考え込んでいる。そんな中、敢えてアルマは口を開いた。

「……最後は俺ってことでいいか？」

「……うむ、そうじゃな。報告せい」

「それじゃあ。まず、クレイドルから返事が来た。『G』の結界を構築するために、十二杖を3人連れて来るとのことだ。誰を連れて来るかは未確定だが、エヴァースは来るそう。本人曰く、ソフィーナの

調整をしておきたいらしい」

「エヴァアーズと、あと2人か……どうせヘカテリエルかハイディ辺りが来るんじゃない。まさかサヤメを寄こすとも思えんしな」

「シヤリオンは異世界のこと死ぬほど嫌ってるし、アルティオネが森から出るわけもないし、多分その辺りだと思う」

「え、調整って……ソフィーナちゃん大丈夫なん？ バトル出るんしょ？」

「このことはまだ伝えていない。それに、調整もブルーミングバトルの後に行う予定だ。もし何かあったら、ハイネにも辛い思いをさせってしまうから、万全を期すつもりでいる」

「なーら安心……なんかなあ。だってまだ15歳っしょ？」

「杖に慣らすなら早い方が良いじゃろう。確かにソフィーナはまだ未熟。しかし素質は飛びぬけておるからして、触れる程度なら問題あるまいて。どんな影響が出るかどうかは、やってみなければ分からないのがネックじゃが」

「……何も起きないと良いのですが」

「何か起きてくれた方が良いかもしれませんが？ ソフィーナに早くモノになってもらわなければ、いつまでもエヴァアーズが2本持ち続けることになってしまいますからね？」

「だからと言って急ぐのも良くないだろう。ソフィーナ君にも学生としての身分がある。頑張ってもらいたいのは山々だが、青春を知らずに大人になると、時折悲しくなってしまうからね。私みたいに」

アムベルの芝居がかった言い方に一同が噴き出した。当の本人は何ということも無さそうだが、実際、彼女は青春と呼べる期間を味わったことはなかった。

皆でひとしきり笑った後、アルマが話を続ける。

「さて、これが本当に最後なんだが、教務課で色々相談してな。『G』の調査に我々権限者から3人出ることになった。俺とデルタ、それから海斗が行く予定でいる。そこで、アムベルの部隊から5人ほどプログレスを出して欲しいんだが……どうだろう。教務課からは美穂しか出せなくてな。できれば俺とデルタの分……Ωリンカーの子を

頼みたい」

「そういうことならこちらも手配しよう。というかΩリンカーなら、私が出るというのはアリか？」

「調整がつかなら構わないし、むしろ大歓迎だろうけど……大丈夫か？ 調査期間は何週間とかだろうし、これ言ったら親方に怒られたりしない？」

「う、それはマズいな。……よし、考えておこう。メンバーを決めたらいつものルートで伝達する」

「感謝するよ。人数は最悪足りなくてもいいから、なる早で頼むな。予め会って、いろいろと合わせておきたい」

「時間がないものな……承知した。Ωリンカーを5人な」

「よし、これで俺の言うことは以上だ。他に何かある人はいるか？」

アルマがそう呼びかけると、アリサがすつと手を挙げた。

「あれ、まだ言うことあったの？」

「ありまくりだし！ 熱中してたらケーキ余ってんだけど！ あと紅茶も冷めてんですけど！」

「ケーキなら妾が頂くぞ」

「アルスメル様さあ、このケーキその辺のクッキーみたいに食ってたけど、1ピース1500円もするんだけど！ もうちよつと味わって食べるし！」

「む？ そういうことは先に言わんかい、このバカ娘。ま、妾は至高の錬金術師。金銭的な悩みなど理解不能じゃからして——」

「昔は十二杖として尊敬してたのに、この島に来てからマジで尊敬する気無くしてるわ——！」

## 第5話 「人間、楽ばかりでは成長しない」

世界接続20周年祭、ひいてはブルーミングバトルを10日後に控えたその日。セニアと冬吾は、白百合島最大の建造物であるアンドロイド・ネストの付近にある演習場に来ていた。なんでもドクター・ミハイルがここで、セニアに相手をしてもらいたいアンドロイドがいるのだという。

「なぜ、セニアなのですか？」

「んー……ドクターは教えてくれなかったけど、どうしてだろうね？」  
そんな話をしながら演習場へ向かう。テルルとユーフィリアはここにはいない。2人ともエクシードの練習中だ。ユーフィリアは、新技を考案して以来、それを戦術に組み込むことに熱心だ。テルルも基礎スペックをさらに向上させ、前回よりも遥かに幅広い活躍を期待できさるだろう。

しかし、誰よりも成長したのはセニアだった。前回の時は青蘭に来て僅か、どころか活動し始めて僅かだったから当然と言えば当然なのだが、ここでの約5カ月の暮らしが彼女に与えた影響はとても大きなものだ。無表情・無感情そうなところは今も変わらないが、出会った頃に比べれば格段に感情表現が豊かになったし、鋭い洞察力も見せるようになった。彼女らしさと呼べるような個性も出てきたし、他者を慮るような行動も覚えたようだ。

成長は戦闘面でも顕著である。本格的に飛行ユニットの扱いを覚えてきて、まだユーフィリアほど巧みではないが空中戦もある程度こなせるようになった。小柄な彼女ならではの素早い身のこなしもすっかりと身に付き、銃火器にも格段に慣れたことで、中距離戦では時折テルルを制す場面すら見られるになっている。将来的には、地上と空中のどちらでもバランスよく戦える、フィールド全域を任せられる存在となるだろう。そうすれば、今まで空中戦を全面的に任せていたユーフィリアを別の役割に振ることもできるようになり、戦術の幅はより一層広がる。その時が、冬吾には楽しみでならなかった。

ネストの演習場は、チームメンバーが全員アンドロイドということ

で、コロシウムが埋まっただけでこちらが空いている場合に限り、使わせてもらっている。少しズルいような気もするが、これも身の振り方の結果得られた特権のようなものだろう。時々、非番のアンドロイド部隊の面々らが戦闘の講習をしてくれることもあった。セニアの銃火器の扱いは、そうやって覚えた面が多い。何しろ、銃火器をメイン兵装として用いるプログレスは冬吾のチームにいなかったからだ。小柄なセニアが地上戦でどう動くか効果的なのかも教えてもらった。本当にありがたいことだ。

演習場は広大な土地に全部で7つもあるが、その内の指定された1つに着くと、既にドクター・ミハイルが来ていた。

「やおおはよう2人とも。来てくれてありがとう」

「おはようございます、ドクター・ミハイル」

黒髪が美しいドクター・ミハイル。目の下の隈は相変わらずだが、普段に比べれば顔色はずっと良いようだ。この人も、白の世界に自分の会社『イプシロン・インダストリー』社を持ち、こちらの世界では出向してきたアンドロイドたちの点検や修理などを引き受けているにも関わらず、冬吾やセニアによく構ってくれる。そもそも、去年からユーフィリアやテルルといったアンドロイドと仲が良く、その内チームを組もうと思っていた時から懇意にしてくれていた。本人は気にしてもいないようだが、冬吾としては感謝しっぱなしだ。

「それで、その……セニアと手合わせして欲しいアンドロイドっていうのは……」

「あー、もう少しで来るよ。時間厳守なヤツだから、早くも遅くもない、完璧な時間に来るさ」

一通り挨拶を済ませてから冬吾がミハイルに聞くと、彼女は上空を見回した。飛んで来るのだろうか？

「それじゃあセニア、準備運動しておくといいよ」

「はい、マスター」

セニアが荷物を置いて身体を伸ばし始めたのを横目に、冬吾はミハイルに気になっていたことを尋ねた。

「それより……最近、忙しそうじゃないですか？」

「ん？ そんなことない。普段通りだよ」

「いや、ドクターが、っていうより……みんな、って言うんですかね。なんか大人たちが、みんな忙せわしなさそうで」

「そりやお前、20周年祭も目前だからな。こっちなんでまだいい方だぞ？ 青蘭庁なんか、各世界のゲストを招くってことで対応に大わらわみたいだし。ネストがやることって言えば、普段よりも警戒を強めることくらい。ま、普段通りさ」

「んー……それもそう、ですね……」

しかし、冬吾はまた、どこかに引っかけりを感じていた。世界接続20周年祭を目前に控えているから。確かにそれはそうだ。これほどの大イベントが青蘭で行われたことなど、今までに1度も無い。どこもかしこも大忙しなのは分かる。

ただ、冬吾が感じたのは忙しさ、というより。

(焦ってる、みたいな。何かを待ち構えている、みたいな……)

言葉にはしにくいのが……例えるなら、そう……準備は準備でも、盛大な祭りの準備を急いでいるのではなく、まるで「隕石が落ちて来るぞ」と言われた時の準備のような焦りを感じるのだ。その証拠になるわけではないが、冬吾が会ったここ最近の大人たちは皆、楽しそうではなかった。お祭りの前の準備なら、例え大忙しだったとしても少しくらいは笑いがありそうなものだ。何せ、楽しむための準備なのだから。しかし、感じるのは焦りと、それ以上の困惑。「とにかく動かなきゃ」というような、目的地不明が故の焦りが、どうしても伝わってきてしまう。

それは、このミハイルも同じだった。普段と変わらない、毅然とした態度に見えて、その瞳の奥から感じ取れるのは、彼女らしくもない「不安」だった。その不安に一番近いのが……

「……夢、見ます？」

「……みんな見ているさ。プロGRESやαドライバーなら、誰でも」

「ドクターもプロGRESなんですよね？」

「ああ。……だから、見ているよ」

「僕はまだしも、セニアが怖がってるんです。どうにかしてあげたい

んですけど……」

「睡眠が必要な以上、どうしようもないさ。ああでも、黒の世界には、夢を見ずに眠ることのできる魔法薬があるらしい。通界規制を通っていないから、あつちに行つて手に入れる他ないらしいがね」

「アンドロイドだからどうにかなるかなーつて思つたんですけど」

「半機械といえど、意識は人間そっくりなのさ。アンドロイド・マインド理論は難しいぞ。勉強したいなら教本貸してやろうか？」

「あー……それはまだいいです」

夢。水面みなもに立つて、緑の光を見上げる夢。もう1カ月近く続いている。最初は本当に見上げるだけだったけれども、最近水中に沈み、息苦しさから逃れるためにずっと水面に出ようと藻掻くような、悪夢といつても差支えない夢になりつつある。どれほど藻掻いても、緑の光は水の向こう側で、どこか助けを求めるように弱々しく揺らめくばかりだ。

聞けば、この夢はプログレスやαドライバーなら年代に関係なく見ているようで、チームメンバーのアンドロイドたちも悩んでいる。肉体的にも精神的にもまだまだ幼いセニアは、言葉少ななのは相変わらずだが、半月ほど前からあからさまに冬吾のそばを離れたがらなくなった。練習が終わったから寮に帰れと言うと、物凄く悲しそうなくで見上げて来るので、夏休みに入つてからずっと、彼女の寮に迎えに行つて、練習するなり青蘭諸島を回るなりして一日を過ごし、夕方に寮へ送り届けるのが日課になっているほどだ。

また、この夢に対して、なぜか異様にポジティブなユーフィリアですら、ここ最近流石に疲弊してきているらしい。口では相変わらず「夢なんだから気にしないでいいですよ」と言っているが、ふとした瞬間に見せる、困惑と焦燥が入り混じったような表情が、冬吾を心配させている。

「ま、訳の分からないことを考えてたつて苦しいだけだろう。今は目先の……お、来たか」

難しい顔をして悩みこんでいる冬吾を諭すように言いかけたミハイルが、不意に空の一点を見つめた。冬吾とセニアも一緒にそちらを

見る。その方角から、2つの物体が飛来していた。片方は人型だが、もう片方は、大きな箱。少なくとも冬吾の目にはそう見えた。

2つの物体はあつという間に演習場に到達し、3人の前に降り立った。冬吾の目は間違っていないかった。飛来したのは人——美少女型のアンドロイド——と、彼女の身長の2倍弱ある高さの巨大な箱だった。

「さすが、時間ぴったり。……さて、紹介しよう。アリアだ。デルタの元で働いていて、今日は成長著しいセニアの訓練相手に抜擢した」  
「おはようございます、ドクター・ミハイル。そしておはようございます、三島冬吾様、セニア様」

アリアと呼ばれたアンドロイドはにこやかに一礼した。まるで冷たい月明かりに照らされた、波ひとつ立たない湖面のような長く青白い髪と、雪みたいに真っ白な肌。そんな肌とは対照的に、綺麗な顔に凄惨な穴が2つ、穿たれていると錯覚してしまうほどの真っ赤な瞳。プロポーシオンは平坦な方だが、全体的に見て目を見張るような美少女だった。その立ち居振る舞いは悠然としており、ゆつたりとした動作は余裕を感じさせる。

そして、前髪に隠れてよく見えないが、額に描かれているのは、どこかセニアのものに似たプロダクトサイン。

(もしかして、セニアと似た規格のアンドロイドなのかな)

そういえば、側頭部に装着している脳波増幅装置も似たデザインだ、と心の中で思いつつ、冬吾はとりあえずアリアと挨拶を交わす。

次いでセニアが——

セニアは、アリアから目が離せない様子だった。単に見惚れている、とかではない。まるで、文字通り視線が釘付けになってしまっているかのようだ。しかも、これといった理由なく。

アリアの方も、セニアを見た瞬間、にこやかな表情が消失し、その顔を食い入るよう見つめている……。

これは明らかにおかしいぞ、と思ってミハイルの方を振り返ると、彼女はどこか緊張した面持ちでその様子を観察していた。ドクターが割って入らないのは問題無いからなのだろうか、と少し楽観的に考



えてしまつてから、いや、僕は彼女のパートナーだ、という自負が盛り返し、

「セニア、大丈夫？」

「——っはい。大丈夫、です」

セニアは呪縛から解かれたようにハツとして、元に戻つたようだ。一方のアリアも、冬吾が割つて入つたためか、元のにこやかさを取り戻していた。

「セニアです。本日は、よろしくお願ひします」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします」

セニアとアリアがほぼ同時に右手を差し出し、握り合う。

その様子を見るミハイルの顔からは、まだ緊張が抜けきつていなかった。

.....

アリアが持つてきた（というより連れてきた）箱は、名前を『デユオ』というらしく、彼女が使用できる武器や工具・スーツなどの装備がたくさん詰まっているのだとか。この後の仕事に使うようで、今回の訓練では使用しないという。

「僕、デルタさんのラボには何度もお邪魔していますけど、アリアちゃんの色、見たことありませんでした」

「それはそうだろう。彼女は極めて多忙だ。基本的には白の世界にいて、デルタ・テックの経営や技術開発に携わっている」

「デルタ・テックつて、デルタさんの会社ですよね」

「ああ、うち……イプシロン・インダストリーとも関係が深い会社だ。ちなみにうちの技術顧問でもある」

「すごいですね」

「本当に。必要があれば他の世界にも行くことがあるんだと。例えばセニアの装備に使われた、黒の世界産の特殊な金属があったら？」

あれはアリアが取引を成立させたらしい」

「マルチな才能、つてやつですね」

「無論、戦闘の腕も高いぞ。さ、そろそろ始めよう。準備はいいか？」

ミハイルと喋っているうちに、フィールド内の2人の準備は終わったようだ。コロシウムと同じようにαフィールドが展開され、2人もトークンとリンクした。

「エクシードレベルの上限は4だ。実戦じゃあそうないだろうけど、レベル0からスタートして、1レベル上昇に50秒かかる。いいな？」

2人からの首肯が返ってくる中、冬吾はミハイルに耳打ちした。

「僕がリンクしちやダメなんですか？」

「お前がリンクしたらセニアが有利になってしまう。今回の彼女には、少し不利を味わってもらいたい」

「そんなの可哀想じゃないですか」

「だからだ。人間、楽ばかりでは成長しない。お前にはそれを与えられない、だろう？」

「……そ、そんなことは」

「悪い意味で言ったんじゃない。それはお前の、とても良い美点だ。

……始めよう」

ミハイルに褒められながら妙に艶やかに笑いかけられ、思わずドキツとしてしまう冬吾。そんな彼を尻目に、ミハイルはフィールドに視線を向けた。

そして……3、2、1、と彼女が数え、エリアとセニアの訓練が始まった。

……

初期レベルは0。エクシードは使用できない。

セニアのエクシード《四六式乙型亜空間連結機構》は、彼女固有の亜空間にアクセスするというものだ。亜空間の形は入口が狭く奥が広い漏斗状になっており、エクシードレベルが上昇するほど奥に手が届くようになる。彼女はこの内部に武器を格納し、エクシードレベル

の上昇と共に必要に応じて呼び出し使用している。この亜空間はセニアと共に成長していく。4月の段階ではまだまだ狭かったそれも、今ではレベル4領域に全身装着アーマーが入るような広さに成長した。ただし、レベル1領域は成長が鈍く、まだ手持ちの武器が数個入る程度。

レベルが上昇するほど行動の選択肢がぐっと広がり、急激に強くなる彼女は、低レベルの時は素のスペックがそのままさらけ出されてしまう。小柄な彼女の直接攻撃は、決して強いとは言えない。なので冬吾は彼女に、低レベルの間は逃げ回るように指示している。彼女は身体の小ささ相応の素早さを持っているため、レベルが上がり切るまでの間攻撃を避け続けるだけなら、意外なほど上手くいく。最近はユーフィリアとテルルの2人から3分近く逃げ続けるという快拳を見せた。これは並大抵のプログレスでは難しいだろう。

なのでセニアは、アリアが何を仕掛けて来るかを見極め、攻撃に備えた――が。

(……動かない?)

バトルが始まってもしアリアは悠然とした態度を崩すことなく、こやかにセニアを見つめている。

「……動かないのですか?」

いつでも攻撃を躲せるように身構えながらセニアが問いかけると、アリアは、

「はい、レベル1まで待ちます。セニアさんも、その方がいいでしょう?」

と返ってくる。お見通しなのは、前回のバトルの映像を見ているからだろうか。それとも、デルタからここ最近の訓練の様子が伝わったか。いずれにせよ、情報的なアドバンテージを向こうに握られている状況だ。油断はできない。レベル1になるまでの数十秒の間に、戦略を練らなければ。

セニアはレベル1領域に格納されている武器をリストアップしながら、どれをどの順番で使用して追い詰めるかシミュレーションする。アリアの身体能力は未知数。しかし、セニアと似たような規格の

アンドロイドであることから、テルルより力が強い、あるいはユー  
フィリアより高機動だということは無いだろう。となれば必要なの  
は、素早い敵に攻撃を当てるための正確さ。

(いずれにせよ……全力で、挑むまで)

レベルが1に上昇した。

セニアは即座に亜空間のレベル1領域にアクセスし、エネルギー  
ショットを撃ち出す小型の銃を取り出した。まずはこれで牽制しな  
がら、相手の攻撃を見極める。相手も遠距離攻撃を使うなら距離を詰  
めて近接戦へ持ち込み、逆に近づいてくるようなら距離を保って遠距  
離戦を持続させる。その後レベル2になれば、そのまま武器の選択  
肢を広げて多彩な戦略を取ることができる。

——が。

「けふつ——!」

思考を完了する前に、セニアの身体は宙を舞っていた。そこまで手  
痛い攻撃ではないが、これは、セニアが取り出したのと同じような、エ  
ネルギーショットを食らった感覚。

何とか地面に転がりながら着地してアリアの方を見ると、彼女は本  
当にセニアのものと似ている小型の銃を構えていた。

(あんな武器、どこから——!?)

などと驚いている暇はない。その銃は既に消えかけていた。それ  
は余りにも見慣れた光景——亜空間へ格納する時の消え方だ。つま  
り。

(セニアと同じエクシードを、持っている——!)

セニアはアリアに狙いを定め、エネルギーショットを発射した。し  
かし、アリアはそれよりもワテンポ早く軽やかに回避行動を取って  
おり、当たらない。その手には、新しい武器が生成、というより取り  
出されつつある。その速度が異様に早いことにセニアは驚いた。先  
ほどもそうだったが、このエクシードの成長は、武器の取得速度も上  
昇させるのだろうか……? )

(向こうの攻撃に合わせていたのでは、間に合わない)

この数か月で飛躍的に成長していたセニアの頭脳は、そう判断し

た。セーので武器を取得した時に向こうの方が早いなら、セニアに勝ち目はない。再三だがセニアの素のスペックはそれほど高くない。つまり、ある程度防御を固め、こちらの攻撃を無理やりにも突き通せるようになるまでは、逃げ回るのが得策。

アリアが生成した武器は、どうやら近接攻撃用のロッドのようだ。セニアは体勢を立て直すと、すぐさまバックステップ。接近してくるアリアから距離を取ろうとした。その刹那。

「——シッ」

「うぐうっ!?!」

エネルギーショットより遥かに重い一撃が、バックステップ中のセニアを襲った。接近を許したわけではない。アリアはロッドを、セニア目がけて投擲してきたのだ。腹部にそれを受けてしまったセニアは、地面に倒れ込んでしまう。

「——立て！ 寝転がっているのは、方に一つの勝機もない！」

αフィールドの中なので痛覚は無いが、奇襲への精神的な衝撃がセニアの思考を鈍らせていた。だが、今までの訓練の中で、何度テルルに殴り飛ばされたことか。何度ユーフィリアの炎に舞い上げられたことか。その度に立ち上がってきた。自分の役目は、マスターである冬吾に勝利を齎すこと。寝転がりっぱなしでは、絶対に承知は訪れない。とにかく立つ。立って考えるんだ。

セニアは何とか立ち上がり、もう一度牽制射撃を放つために正面を見ると……いない。どこだ、と周りを見回す前に、次の衝撃が真横から襲ってきた。

「アリアのエクシードは、貴女のものに似ているそうですね、セニアさん」

「うっ……！」

「アリアもそうです。亜空間から、武器を取り出すエクシードです」  
襲ってきたのは、手だった。ただし生身の手ではなく、ガントレットを纏っている。殴られたわけではなく、肩を掴まれた。

とつさにセニアが振り向こうとすると、もう片方の手がセニアの腰に回された。元々振り向こうとしていたため、少しの力でセニアの体

勢はがくつと後ろに傾いてしまう。アリアは、セニアが振り向こうとした際の回転モーメントをそのまま利用し、セニアを地面とほぼ水平になるまで体勢を崩しながら、真横に放り投げた。投げられたセニアは時面に転がりながら、どうにか受け身を取る。

「でも、その性質は少し違うようです。武器の展開が貴女より早いのは、貴女の努力不足ではないでしょう」

「な——」

レベルが2に上昇した。

「サー……マスター・デルタからは、エクシードの格納方法が違うとだけ伝えられております。次はこれですよ」

アリアが取り出したのは二丁の拳銃。片方は見たことのないものだが、もう片方はセニアも所持しているから知っている、連射可能なエネルギー銃だ。一発一発の威力は小さいが、牽制には十分。セニアも愛用している。

それを認識するより早く、セニアはレベル2領域からある装置を取り出した。リフレクターコアのエネルギーで球状のバリアを形成するものだ。本体は小さいためレベル2領域に格納でき、しかもこちらからは攻撃ができるという優れものだ。これで連射攻撃を防ぎ、少しは余裕を取り戻したい。

「あら……流石ですね。速度では勝てるかと申しただけで、少々恥ずかしいです。その速度は紛れもなく、セニアさんの努力の賜物でしょう」

「これで——っ!?!」

「まあ、それが来ることは分かっていました」

そんなセニアを襲ったのは、バリアごと彼女を吹き飛ばすほどの衝撃だった。これは……そう。ユーフィリアの攻撃技《セラフィック・バースト》に近い、純粋な衝撃だ。セニアの知らなかった方の銃は、その大きさに比べてはるかに大きな衝撃を発生させるものだったようだ。攻撃用というよりは、相手を押し下げるための武器だろう。連射銃で威嚇しながら、接近して来ようとした、あるいは防御を固めた相手を衝撃銃で吹き飛ばす。理に適った戦略だ。

突然の大きな衝撃には驚いたが、着地のダメージを軽減するためにバリアは切らない。……すると、その球状のバリアに、白く光る鞭が巻き付く。アリアの手を見ると、連射銃の方は既に消失し、エネルギーを鞭のようにしならせたり巻き付けたりして相手を攻撃する、白の世界の警備アンドロイドがよく使用する武器が握られていた。衝撃銃で相手を押し下げた後は、一方的に攻撃できる武器。もし仮に相手を下げられなかったとしても、あの鞭は近接戦でも大きな影響力を持つ。その流れるような展開は、まるで――

「貴女のエクシードの格納方法は、スタックだそうですね。武器を取り出す際、やや時間が掛かる。要は、使う武器を手探りしているのでしょうか」

「それは……っ」

「アリアは違います。キューと言えば分かるでしょうか？ 決まった順番に押し出しています」

スタックとキュー。データの格納方式で使用される2つの概念だが、スタックが箱にものを入れていくように「後入れ先出し」であるのに対し、キューはパイプの一方からものを詰めていくように「先入れ先出し」。セニアは自分の亜空間領域に手を伸ばし、自分で使用したい武器を選んで装着する。一方でアリアは予め亜空間領域内の武器の順番を決めておき、それを随時押し出すことで武器の展開を行っている。武器の展開速度がやたらと早かったのは、このためだったのだ。

アリアがセニアを、バリアごと振り回しながら、言う。

「もちろん、スタックよりキューが優れているとは言いません。亜空間内の武器の順序を入れ替えるのには、それなりの手間を要します。レベル上昇によって開放される領域は接続場所が決まっているので、すぐに使えないのも明確な弱点ですね。欲しい時に欲しい武器が手に入る、という点では、間違いなく貴女の方が優れているでしょう。しかし――」

「……がふっ！」

「エネルギー切れですよ。そのバリア、汎用性は高いですが、1回の

持続時間は長くない。——相手に攻撃する暇いとまを与えないほど速度を稼ぎたいなら、決まった順番に押し出されてくる武器を使っていけばいいだけのこちらが、遥かに有利です」

アリアの言う通りにバリアが切れ、鞭によって地面に叩きつけられてしまったセニア。それに対しアリアが出現させたのは、先ほどのものよりも重厚なガントレットを、両腕に。

セニアの頭は、既に鈍り始めていた。ここまで一方的に叩きのめされるのは、初めてだったのだ。仮に大きな実力差があったとしても、テルルもユーフィリアも、それから今まで相手をしてもらったどんな人物も、セニアが幼いということを理解し、それに合った訓練をしてくれていたのだ。だが、目の前のアリアは、そんなことは一切お構いなしに、セニアを追い詰めている。あくまで冷徹に、計画的に。それでいて恐ろしいほど……柔らかに。

「これがアリアのエクシード 《四六式甲型亜空間連結機構》です」

アリアが出現させたガントレットがどんなものなのか、想像できない。……というより、想像していない。相手がどんな武器か想像し、何とか対抗策を取ったところで、どうせダメだろうという諦めが、セニアを支配してしまっていた。

セニアは、目頭が熱くなるのを感じた。これは……悔しい、のだから。ここで諦めてしまうことも、できる——

「セニア、頑張れ！」

そんな彼女の耳に届いたのは、マスターである冬吾の声。具体性も何もない、ただの激励。だが……聞き慣れたその激励は、このような逆境にあつて初めて、背筋にビリビリしたものを感じるほど効いた。

冬吾の激励により、明らかに目の色が変わったセニアを前にして、アリアは優しく問いかける。

「まだ、頑張れそうですか？」

「……はい。失礼、しました」

アリアは、ゆつくりとこちらに向かって歩いてきていた。走ってく



ることもできたはずなのに。彼女もまた、セニアを慮っていたのだ。なのでセニアはそれに対して、考えを巡らせながら、武器を取る。「ふふ、いいですね。では行きますよ」「はい。よろしくお願いします」

.....

アリアのエクシードの弱点は、彼女の語ったことを真に受けるなら、2つ。

1つは決まった順序で武器を押し出すキューの性質上、「不測の事態に対応しづらい」という点。亜空間内である程度順番は入れ替えることができるそうだが、それでもセニアのような臨機応変さは持っていない。

もう1つは、レベル上昇によって解放される領域は接続場所が決まっているため、「レベル上昇に対する武器の反映にタイムラグがある」という点。これは、手を伸ばせば次レベル領域に即座にアクセスできるセニアが明らかに勝る点である。

それから最後に、これはセニアの推測だが、先ほどアリアが武器を「押し出している」と表現したが、あれはもしかすると「出現させている武器を亜空間に格納しなければ、次の武器を使用できない」ということなのではないだろうか？ だとしたら、あらかじめ詰めるだけ詰めておいて、欲しい時に欲しいだけ（その気になれば亜空間内に格納した装備全て）引っ張り出せるセニアとは大きく異なる。取り出しておける武器の数に限りがあるのかもしれない。

この3つの弱点を突くとしたら、それは「レベル上昇時に開放される武器を即座に、しかも大量に使用して圧倒する」以外にない。

ただ、それを実現しようとするなら、まず必要なのは、アリアの計画<sup>プラン</sup>を推測すること。彼女の思い通りになっている状況下でいくら大量の手を打ったところで、当然それに対する防御ないしは回避手段を備えていることだろう。彼女の手の平から抜け出してはじめて、この戦略は意味を成す。

(まず、しっかりと見る——何をしようとしているか、見極める——)  
現在のレベルは3。レベル4まで、あと22秒。

腰と背中に装着する、飛行用のブースターを取り出し、低空飛行モードへ移行。すると、アリアも空中機動用装備を装着し、セニアに追いついてきた。その最中、セニアは見逃さなかった。空中機動用装備を装着する前、アリアが無意味に武器を出現させ、すぐに消去していた。あれは恐らく、亜空間を回していたのだろう。となれば、セニアの推測——「取り出しておける武器の数に限りがある」——は、恐らく正鵠を射ている。わざわざ空中機動用装備まで装備を回させたということは、この行動がアリアの計画外——いや、もう少し先の予定だった、ということだ。

思えば、アリアは《デュオ》という武器格納用の巨大な箱を持ってきていた。武器や工具が必要で、セニアと同じようなエクシードを持っているなら、そこに格納しておけばいいのに、どうしてそんなものが必要なのか？ その答えがこれだ。今のアリアは武器を手にとっていない。彼女は飛行中、空中機動用装備を出現させているせいで、他の装備——つまり武器を使用できないのだ。だからこそ、外側から入手できる武器が必要なのだろう。そう考えると、あのデュオの存在は、彼女の致命的な弱点をカバーする、非常に理に適ったものだと言えるだろう。あれがバトルに参加していたら、セニアの勝ち目は万に一つもなかったかもしれない。

だがその一方で、やはりその武器展開の速度は驚異的だった。アリアは空中機動用装備を展開するために亜空間を回していたが、武器の出現と消失をそれぞれ5回ずつ繰り返し続けた。それなのに、時間は5秒と経っていない。セニアなら同じように出現・消失を5回繰り返し続ければ、10秒以上掛かってしまうだろう。実に倍以上の速度差がある。ということは、次レベル到達時に装備のレベル格差が生じる時間は、恐らく数秒。セニアの武器展開速度も考えると、事実上ほんの数瞬しかない。

レベルが4に到達したら、もう次のレベルはない。つまり、この数瞬が、これ以降セニアの勝機が最も高まる瞬間である。そこを狙うし

かない——いや、狙ってみせる。

「いいですね。空中機動、なかなか上手いですよ。素手では押し負けそうです」

「負け、ない……っ」

「その意気です。頑張りましょう」

セニアは同時にガントレットも出現させ、装備の面で有利に立つ。しかしアリアは素手ながら、セニアを遥かに上回る飛行テクニックでセニアを封じ込めている。単純な飛行能力なら、空中戦メインのユーフィリアにすら匹敵するのではないだろうか。これは素直に實力不足を認めるしかない。

レベル4まで、あと14秒。

レベル4領域のどの装備を使い、どう攻撃すれば効果的かを考える。必要なのは——まず地上に降りることだろう。それも、アリアの想像より早く。

アリアは先ほど、両者の装備格差について言及していた。その彼女が何の計画もなく、素手になるというデメリットを負いながら空中戦に乗ってくるはずがない。つまり、その計画から抜け出す瞬間を、奇襲タイミングに合わせる必要がある。

あと10秒。

ただひたすら、空中でぶつかり合う。腹の底に隠した企図を読まれないように、がむしゃらを演じる。アリアはどこまで気付いているのだろうか？ 今から計画の変更、見直しは……

あと7秒。

いや、計画は変更しない。針の穴に糸を通すような繊細さではない。必要なのは勢いだ。セニアの意志を突き通す、勢いなのだ。迷いはその妨げとなる。

あと5秒。

辛い。アリアの攻撃もそうだが、ほんの数秒のために戦うことが辛い。あと1秒。この1秒がこれほど長く、重いものだなんて。ユーフィリアやテルルと戦う時には感じたことのない辛さだった。似ているのは、前回のブルーミングバトルで、レベル5の美海と戦った時。

あれもほんの20秒で相手を倒さなければならぬ状況だった。だが、その時とは感じる辛さがまるで違う。歯を食いしばる。

あと3秒。

セニアは唐突に空中戦を放棄し、一直線に地面へと向かった。体勢を整えて着地し、アリアを見る。彼女は少し驚いた表情でセニアを追って地上へ降りようとした。

あと1秒。

《ブルム・エクス・マキナ四六式乙型亜空間連結機構》を開き、レベル3領域の限界までアクセスを開始。その間も視線はアリアの方へ。彼女が、着地する。空中機動用装備が消失し、新しい武器——銃だろうか——が実体化し始める。

0秒。

即座にアクセスしたのは、まだ装着中のブースターに追加で取り付ける、高速移動用のブースター。実体化もままならない内から出力最大。アリアへ向かって突進。

さらにアクセス。レベル4領域から手を引き戻す、その最中に掴んだ、レベル1領域のロッドだ。アリアが最初に使ったものと似ていて、近接戦なら頼れる武器だ。

——1秒。

通常なら数秒掛かる実体化だが、今はレベル4領域から手を引き戻す勢いで取り出した。そのため、実体化速度は普段よりも早く、手の中に握り込む感触を覚えた。

ロッドを構えて突進するセニアは、まるで1つの弾丸だった。アリアが銃を構える速度は、間に合わない。銃の実体化が解け始める。次の装備に繰り替えるのだろうか。

世界が遅く見えた。アリアが出現させようとしている装備の形が臃げに見え始めた。しかし、関係ない。今はただ、この一撃を叩き込む。そのために、セニアは進んだ。

そして——

「素晴らしいです、セニアさん」

攻撃の威力が発生するその直前、ロッドを持った手と腰をアリアに

掴まれた。アリアはセニアの突進の勢いを殺すことなく、そのままバレエのようにくるりとターン。その回転に巻き込まれるようにセニアも回され、数回転したころには、突進の勢いは散逸させられてしまった。

アリアは、素手だった。ふと足元を見ると実体化したのは丸いシールド。彼女は、銃を構える時間がないと知って次の武器であるシールドに繰り替え、その実体化すら間に合わないを見るや、完全に武器を放棄して素手でセニアを捕らえる選択をしたのだ。

「地面に降りる所までは予想していましたが、まさかここまでの速度を生めるとは……まったく予想していませんでした。アリアもまだまだですね」

「くっ……」

「そんなに悔しい顔、しないでください。あの一瞬、セニアさんはアリアを間違ひなく超えていました。誇ってください」

アリアは変わらず柔和に微笑んでいた。セニアは不思議な感覚だった。悔しいのに、不甲斐ないのに、その笑顔を見ると、どこか安心させられたのだ。初めて会ったはずなのに……。

「……一分、時間オーバーですね。次の現場に向かわなくては。ドクター、αフィールドを解除してください」

彼女の指示にミハイルがαフィールドを解いた。瞬間、堰き止められていた痛覚がどっと戻ってきて、セニアはうめき声を上げながら倒れてしまった。一方で、アリアは少し顔をしかめただけで、これといったリアクションはしなかった。それだけ、攻撃できていなかったということなのだろうか……。

そんな、しょんぼりしているセニアを、アリアはそっと助け起こすと、空中機動用装備を展開し直した。

「アリアとしても学びがあった、良い勝負でした。とても楽しかったです。またお手合わせ願いますね、セニア」

それだけ言って、アリアはデュオと一緒に飛び立っていった。そんな彼女を目で追いながらも、冬吾が駆けてくる。

「セニア、大丈夫!? 随分激しくやり合ってたけど、痛くない?」

心配そうな顔。いつも見てきた、大切な顔。でもセニアは、笑っている冬吾が好きだった。

だからセニアは、

「……マスター」

「どうしたの、セニア？」

「買ってほしいものが、あります」

せめて自分から、笑いかけることにした。

……

『まだ全然時間あったのに、なんでもう行くことにしたんです？』

「……なんとなく、です。あそこで終わっていた方が、綺麗でしょう。彼にも、彼女にも、考える時間が必要でしょうし」

『あー、照れ隠ししてますね！ アリア様、そういうところ可愛いですよねー。サーが可愛がる理由、分かりますよ』

「うるさいですよ、ニア。別に照れてなんかいません。それに……」  
『それに？』

「……ああいうのは、いい刺激になりました。これ以上は、欲張りというものです。だから、また今度」

『ふーん？ ニアにはよく分かりませんが、そういうものなんですよ？』

「余計なことに首を突っ込まなくてよろしい。それより、次の取引先の話をお願いします」

……

青蘭諸島が1島、鐘赤島は、その上空に赤の世界への門ハイロウが開いている。門の周辺地域はどうやらその先に繋がっている世界の靈気が漏れ出て来るようで、鐘赤島は赤の世界と青の世界の自然が混じり合った、不思議な光景が見られることで有名だった。赤の世界から輸入してきた鑑賞用の花々は美しく咲き誇り、この島を彩っている。他に

も、荷運び用のグリフオンやヒツポグリフを飼育している牧場や、世界間の友好の証として植えられた『天使の止まり樹』と呼ばれる大樹など、見どころには事欠かない。青蘭諸島を構成する5島の中でも、屈指の観光名所で溢れる島だ。

ところで、赤の世界はそのほかの世界とは全く異なる概念が満ちている世界でもある。それは、世界に住まう『女神』と呼ばれる存在が原因だ。

女神らは文字通り赤の世界における神々らだが、その性質は、少なくとも青の世界の住人からすれば異質なものだ。何しろ、地面を歩き人々と交流を持っているのだから。

ただし、これはあくまでも女神の『影』と呼ばれる存在だ。女神の肉体的な一面、とでも表現すべきもので、本体は赤の世界の各地に染み着いている。というより、その空間自体が女神そのものだと言える。

例えば、赤の世界側から見て、青の世界への門が開いているのは『陽光の都』という都市で、この都市を中心とした辺り一帯は、七女神と呼ばれる最上位の女神の「柱」、『昼』を司る女神である『陽光の女神アロティーナ』の領域となっている。この地域の中では昼が一日の半分以上を占め、人々は少しの睡眠で活力を取り戻すことができ、いつも活気に溢れている。これは、この地域だから、こうなのだ。そして、その『影』である人間サイズのアロティーナが別の女神の領域に行こうが、あるいは青の世界へ来ようが、あくまで本体は動かないため、陽光の都から光が失われることはない。

では別の地域ではどうだろうか。逆に『夜』を司る七女神の「柱」『宵闇の女神アマノリス』の領域は、一日の半分以上が夜で、しかもどんな人でもぐっすりと良質な睡眠を取ることができ、その内部に存在する『宵闇の都』は、活気という意味では陽光の都と比べるべくもないが、世界中、あるいは他の世界からまで、静かな安息を求めて多くの人々が訪れるのだ。

これは一日の時間に限ったことではない。『冬』を司る、七女神よりも一座下の女神『豪雪の女神サイア』の領域は一年中雪に閉ざされて

おり、逆に『夏』を司る『轟雨の女神スコル』の領域内は一年中蒸し暑く、常に雨が降っている（そのため全域が水没しているほどだ）。

つまり、通常の世界では昼夜・季節といった「時間の進み」によって齎される現象が、赤の世界では「女神の座す場所という空間」によって発生するのだ。そのため、赤の世界の時間の流れを、現在位置から観測する太陽・月の位置や季節から推測することは極めて難しい。そんな中、20年前に世界接続が起こり、他の世界の概念を——昼夜・春夏秋冬が時間と共に進んでいく——を知った赤の世界の人々は、世界を旅をして「異なる時間を感じる」という経験を欲するようになった。

そして、そんな女神らを祀り上げ、息災を願うのが、各地に建てられた神殿や教会だ。

翻って青蘭諸島の鐘赤島。ここにも教会があるのだが、そこは『轟雨の女神スコル』を祀っている。その教会に向かって歩く青年が1人。

背の高い、切れるような美青年だ。鋭い瞳は凍り付くような蒼で、理知的な顔立ちをしている。髪は短めの銀髪で、末端に向かって神秘的な青白さを帯びるそれは氷河グレイシアブルーの色だ。さながら少女漫画の世界から抜け出してきたかのような、完璧な青年だ。そんな男なら、例え身に着けているのが、どこにでも置いていそうな白のワイシャツとグレーのスラックスに、スポーツ用のリュックサックだったとしても、大半の女子からすれば貴公子に見えてしまうことだろう。

サイオン・ハイトマン。赤の世界出身で、青蘭学園で音楽の講師を務めている。そして、7人しかいない権限者オンスライザーの1人でもある。そんな彼は青蘭学園中等部に通う天使のレミエルとエルエル、そして未来視のエクシードを持つ高等部1年生のクレア・プロスペキアの保護者だ。

実は、昨今青蘭を騒がせている『G』と呼ばれる事象に関して、最初に警告を発したのは、このサイオンだった。より正確に言えば、彼の家に住んでいるクレアが予見によって『G』の存在を確認したのだ。



クレアのエクシード《ミリオンフイート・フォーサイト三千世界水晶眼》は未来視の力。これによって偶然『G』を予見してしまったクレアはサイオンに相談を持ち掛け、より確実な未来を確認するために、今度はエルエルの力を使った。エルエルのエクシード《エルフレンド経緯絆》は、他者との絆を辿ってエクシードをコピーすることができるというものだ。これによりクレアのエクシードをコピーし、2人で同時に『G』を視ることで、未来視の正確さを上げることができる。2人の予見者が同じ1点の未来を視る、という方法は、黒の世界の予見者（と名乗る人々）の間ではそこそこポピュラーな方法である。

もちろん、普通に行ったのではまず成功しなかっただろう。未来視は魔術としてもエクシードとしても極めて不安定な分野で、クレアもよく、どこの平行世界かも分からない世界線の未来を視てしまったのは辟易している。普段からやっているクレアでそれなのだから、借り受けたエクシードで未来視を行わなければならないエルエルなど、視点を定めることすら難しかっただろう。

そこで最後に登場するのがレミエルだ。彼女のエクシード《きかい綺界蹟》は、微弱ながら『奇跡』を操るといふもの。限りなく低い『確率』を、ある程度まで引き上げることができる。これでクレアとエルエルの視線が同じ『G』という一点で結ばれる『確率』を上昇させたのだ。もちろん、1回で成功したはずもない。何度も試行錯誤を繰り返し、彼と親しい他のプログラムの力を借りて、何とか『G』の存在と、その時間や位置を大まかに定めることができた。それが5月の下旬ごろ。そして、今の今に至るまで予見を何度も繰り返し、ようやく正確な時刻、正確な座標が判明したのだ。

世界接続20周年祭、3日目の午前0時。賢緑島・機動隊基地の真上。

彼はつい先ほどまで、自分が監督を頼まれたチームの練習に付き合っていた。

（「エオースさん、だいぶエクシードの調整が上手くなったね。それに防御力も十分。これなら、日向さんと互角以上に渡り合えるだろう」）

「ありがとうございます、ハイトマン先生！　だけど、もっと強く、なれますよね？」

「勿論だよ。では次は、魔術の方も見るとしようか」

教え子の1人、高等部2年生のアウロラ・エオースの、柔らかな笑顔と声を思い出す。今年度の初めに高度なリンクを結べるαドライバー・永瀬俊太と出会ってから、彼女はエクシードも精神面も飛躍的に成長した。入学した時と、表面的な態度が変わっていなくても、その内面の変化は手に取るようだ。子供に教える立場の人間として、これ以上に嬉しいことはない。それに、本当に心を、背中を預けられるパートナーができることの『強さ』を改めて実感させられた。どれほど歳を取っても、学びは尽きないものである。

「センセー！　リアもみて！　ほら、いっぱいお花！　あとね、つる蔓とか根っこも出せるんだよ〜！」

「そんなこと言ったら、ルビーのほうがすごいもの！　シユンタとリンクしてると、ふだんよりもオーラがいっぱい出るの！　強いまほうも、いっぱい使えるわ！」

「2人とも、始めた時に比べたら、とても上達したね。先生も嬉しいよ。さあ、もう少し頑張ろう」

俊太とアウロラは、ブルーミングバトルに2人の高位妖精を出場させる。フローリアとルビー、彼女らもアウロラと同じく、ハイネと高度なリンクを結べる。最初の方は、その奔放な性格（というより妖精という種族の性質）に、俊太もアウロラも、言ってしまうえば教官であるサイオンも手を焼いていた。だが、辛抱強く物事を教えていった結果、今では並大抵のプログレスを凌ぐ実力に成長した。双方ともに強力なエクシードに、高い機動力と、特殊な妖精の性質。適切な訓練を付ければ、妖精はここまで成長するのか、と感嘆したものである。

「入学した時に比べたら、俺、強くなれてますか？」

「無論だよ、俊太君。君はとても強くなった。そして、まだ強くなれる。そのためなら、私は決して協力を惜しまないよ。一緒に頑張ろう」

小柄なαドライバー、俊太の成長も素晴らしかった。3人とのリン

クを強く結び続け、その上で体力も鍛えた。メンバーへの指示出しも、始めた当初から遙かに上達している。彼らと戦うことになる春樹のチームは、下級生のチームだから、自分たちの方が経験が多いから、と舐めてかかると痛い目を見るだろう。

チーム練習の監督を頼まれたのは、俊太からだ。しかも、時期は5月の下旬。彼らは今回のブルーミングバトルに向けて、一番早くから動き出したチームだった。そして、チーム結成当初のメンバーの凸凹でこぼこ具合を見て、これはやりがいがありそうだとサイオンは直感したのを覚えている。そして、練習を監督し続けてきてよかつたと思っているし、これからも続ける気だ。このチームが今後、どのように成長していくのか、彼自身楽しみでならないのだ。

(どうにかして、勝たせてあげたいものだが……)

サイオンが教会に着くと、教会の正面扉の前に1人の修道女シスターが立っていた。長身でスレンダーな体軀に、滑らかな金髪を風に靡なびかせる、気品ある佇まいの彼女は、彼を見つけるなり破顔して、両腕をぶんぶん振って呼びかけた。

「遅いですわよ、先生！ もう皆さま集まってらっしゃいますー！」

「ごめんね。俊太君のチームのエクシードを見ていて。あと、もう私は先生ではないのだから」

「フーン！ 恩師はいつまで経っても恩師ですわ！ それとも先生は、わたくしのことをもう生徒だと思ってるらっしゃらないと？」

「そんなことはないけれど……うん、私の負けだ。イルダさんには、昔から勝てないね」

「シャーリイとお呼びくださいいね、先生！ 何せ、もう教師生徒の関係ではないのですから」

「あれ？ たった今私のことを先生だとかなんとか……」

「教師ではなく恩師、ですわ！ さあさ、積もる話もあることですし、どうぞ中へ」

微妙に話をはぐらかした修道女——シャーリイ・イルダという名の女性は、元気よくサイオンを中へと誘いざなった。

教会の中は、青の世界で普通に見られる教会と、さほど変わりはない。異なる点を強いて挙げるとするなら、奥に設置された祭壇に向かって扇状に座席が並べられているところだろうか。

中に人は少なかった。それもそのはず、少なくとも観光目当てでこの島に来るなら、この教会は見どころにこそなるかもしれないが、それだけだ。赤の世界出身の人々だって、毎週日曜日に礼拝に来るような場所ではない。赤の世界の教会は、キリスト教観における教会とは大きく異なるものなのだ。

「では、わたくし達は少し話しますので、しばらくの間よろしく願いますね」

シャーリイが他の修道女に耳打ちすると、奥の通路へサイオンを連れて行つた。通路は横に折れ曲がって階段に。そのまま下つていき、地下室に着いた。

地下室の中には数人の人が、既に何やら話し込んでいた。が、シャーリイとサイオンの姿を見ると、全員笑顔を浮かべた。

「おせーぞ、センサー。あたし、待ちくたびれちゃったよ」

「ごめんね。生徒のエクシードのことで」

「ん……昔から生徒想いなこつて、何より」

いたずらつ子のような雰囲気で、砕けた口調で話しかけてきたのは、この真夏にライオンの鬣たてがみのようなファー付きの黒いコートを着た、明るい茶髪の少女。外見は少女なのだが、これでも立派な青蘭庁・執行部の一員であるミスティカだ。年齢はまだ20歳だが、大学に進学することはせずに、そのエクシードを貴重に思った魔捜課のスカウトに乗って今に至る。青蘭学園の生徒会長を務めた経験がある、実力派のプログラマーである。

「サイオン先生のことだ。手の掛かる生徒も決して見捨てない。私もかつて世話になつたし、君もそうだっただろう、ミスティカ」

「だから何よりだったってんだろーが、アーシア。お節介どーも」

「まあ、君ほどの問題児はそうそういないだろうがな」

「あんだと？」

堅い口調ながら柔らかい笑声えごえでミスティカに返したのは、豊かな灰

色の髪を頭の高いところで束ねた女性だ。名前はアーシア・アツシュフィールド。彼女もミステイカ同様、赤の世界出身かつ青蘭学園の卒業生で、24歳という若さで青蘭島・機動隊のプログレス小隊の副隊長を務めている。薄くだが上位妖精の血を引いており、剣のように洗練された美貌は目を見張るほど麗しい。まだ若いながらも素晴らしい剣の腕前を持ち、隊長であるアムベル・マカリスターの右腕として活躍している。口調の通り誠実な性格で、まず筋を通すことを最優先する信念の持ち主だ。だが今は、ミステイカをからかう方が面白い。こちらも元青蘭学園の生徒会長で、ミステイカの4代前の生徒会長だった。

「ようやく全員揃いましたわね！ では早速、報告会を始めましょう！ ほら2人とも、チェス盤は片付けてくださいましね！」

とシャーリイが大声で言った。話し込んでいたと思ったら、どうやらミステイカとアーシアでチェスに興じていたらしい。

ところで、彼女も赤の世界出身だ。つまりこの場には、赤の世界から来た人物しかない。そして彼女もまた、アーシアやミステイカと同じく、かつて青蘭学園の生徒会長を務めた、極めて強力なプログレスである。その強さは本当に伝説級で、特に十分に溜めた後の一撃の威力は途轍もない。青蘭学園のプログレスで彼女の記録を上回る攻撃技を持っていたプログレスは、学園史上存在しないし、他の世界中を探しても、彼女に匹敵する攻撃を行える人物は5人といないだろう。彼女は青蘭学園開校から2代目の生徒会長で、他の2人に比べればかなりの先輩だ。そして、その彼女の一撃を唯一防ぐことが出来た人物こそ、彼女の次の代の生徒会長であり、現在は青蘭学園の数学教師を務める、一年生担任の本条文香ほんじょうふみかだった。

シャーリイに急かされてチェス盤を片付けたミステイカとアーシアが姿勢を直し、サイオンが席に着くと、部屋の奥にいた人物がゆったりと話し始めた。

「では、報告会を始めましょう。シャーリイ、上は？」

「任せておきましたわ。問題なくつてよ」

「いやあの……まだ人いますよね？」

「わたくしが信頼しているのですから、心配など不要ですわ！ それに、未来のフィアンセと一緒にいたいと思う気持ちは、大事にしたいのです！」

「ああ……はあ、分かりました。じゃあ座っててください」

話し始めからシャーリイに出鼻を挫かれてしまったのは、背が高い、がっちりとした男性だ。褐色の肌と分厚い唇、編み込んだ黒い髪はどこかネイティブアメリカンを思わせる。赤の世界で『神官』と呼ばれる立場に就いていた彼の名は、ルアード・グライアス。ここ轟雨の教会の牧師を勤めている。

彼の横の椅子には小柄な、10代前半くらいの少女が座っている。短く切りそろえた髪に貝殻の髪飾りを付け、首からは青く透き通った液体の入った小瓶をぶら下げている。今は頭を左右に揺らしながらも大人しくしているが、その瞳は好奇心に輝いていた。ルアードは、そんな彼女の頭を撫でながら咳払いすると、改めて口を開いた。

「えーと……では、まず私から失礼します。つい今朝方、『虹の柱』から伝令の天使がこちらに参りました。世界接続20周年祭に来賓としてこちらに来られる女神様が決まったそうです。『虹の柱』第二座より『宵闇』の女神アマノリリス様、その従騎士のダスティン君、さらに第三座より『春眠』の女神セレナ様が、来られる予定だそうです。」  
「アマノリリス様とダスティン君は、よく他の世界に出向いているから分かりますが……セレナ様とはまた、珍しいですね。いつも眠っていらつしやるイメージなので」

「おおよそ、従騎士たるザーク君の様子が気になるのでしょう。節目の年ですし、珍しく張り切つていらつしやるのかもしれない。それから君もですよ、サイオン君」

「私ですか……確かに、最近豪雪の郷さとに戻っていません。そうですね、ご挨拶に上がらなければ」

「ええ、その方が良いでしょう。それに、このスコルも……現役の影と接触すれば、良い影響を受けられるでしょう」

「え、ワタシ？」

スコル、と呼ばれた、ルアードのすぐ横の少女は、ニコニコして彼

を見上げた。

その名の通り、彼女は赤の世界の『夏』を司る『轟雨の女神スコル』の『影』その人である。つまり、この教会の『御神体』というわけだ。女神の影となった人は老いることなく数百年の時を生きるが、彼女の場合は外見より少し上の21歳。彼女ら『影』は女神の人間としての身体だが、間違いなく女神その人でもある。そして、人間の身体である以上はいつか死んでしまうのだが、女神の影が引き続き理由は、赤の世界における『転生』というシステムにある。これは死んだ人の魂が、ほんの時折、赤子となってまた生まれてくるものなのだが、女神の『影』となった人間の魂は、100%転生する（ただの人間の魂も転生することがあるのは、この『転生』システムの不具合なのではないかという説がある）。つまり、彼女の外見、というより肉体は確かに21歳だが、その魂は数千年、数万年前から転生を繰り返してきた魂なのだ。

では、同じ魂を持って生まれしてきた代々の『影』となった少女・女性らが皆同じパーソナリティを持っていたかという点、それは違う。なぜなら、『女神そのもの』には人格が無いからだ。精神と魂は似て異なるもので、共通の魂を持つ二者の考え方が同じとは限らない。現に、このスコルはまっとうに21年間生きてきたが、その言動は未だに幼さを残している。彼女の従騎士兼保護者であるルアードが、可愛さのあまり甘やかしてきたせいなのかもしれないが……。

「パパ、本物の女神様、ワタシのところに来るの？」

「来る、というか、会いに行こう。それに君も、本物の女神様だよ」

「ホントに？ やったー！」

女神の影の魂は確実に転生するが、その魂が『目覚める』のは、また別のタイミングだ。生まれた時から目覚めていて、即座に本体との繋がりを取り戻すこともあるが、そうでない場合の方が多い。大半の女神の転生者は、厳しい修行に励むなどして自らの魂の本質を見つけ出し、そうやって『目覚める』。あるいは、強い衝撃を受けるなどして目覚める場合もある。現にこのスコルは、生まれた村を襲った盗賊らへの恐怖によって目覚めた。

無邪気に笑うスコルに一同柔らかな気分になりながら、次に言葉を発したのはミステイカだった。

「来賓の話が出たからこそっちも。天使側の来賓に、大天使からラファエル様が出るって話があったじゃん。その護衛がさ、航空管制局からの要請で倍の16人になるって。当日は青蘭諸島の警備に加わってくれるってよ」

「それはありがたい。上空を任せていいなら、こちらは地上に専念できそう。それで、魔捜課はどうするつもりか分かるか？」

「アーシアさんよお。期待すんのはいいけど、うちはあくまでも捜査専門なんでね。やたらと実戦強いやつばかり揃ってるけど……ま、どっちかといえば今回は『G』の事後処理の方にお鉢が回ってくる予定。親方もそのつもりで動いてる。そういや、賢緑島の基地も大わらわなんだろう？」

「そう。最近の打ち上げ花火の搬入とかセツティングを監督することもあるが。それに、アムベル隊長も事後処理には入るぞ。どうやら学園側から、Ωフレームのプログラスを数人選出するように要請されたいらしい。私はΣフレームなので留守番だが、候補者は決まったようだ」

「ああ、その件。上手く進んでいるみたいで良かった。私も留守番組だから、いない人の分まで頑張つて、一緒に青蘭を守ろう。ちなみに魔捜課からは誰か出るのかな、ミステイカさん？」

「さん付けは止よしてくれよ先生、なんかむず痒い……ああ、魔捜課からは誰も出ない。気にはなるけど、先発は教務課と機動隊にお任せって感じ。何せ『G』の後に何がどうなるか、なーんも分かってないんだから。もしファントムが暴れでもしたら、行っちゃった教務課アンド機動隊連中の穴を埋めなきゃいけないーだろ」

「それもそう。情報をありがとう。最近の連携を密にしなければいけないのに、大っぴらに情報交換できないのは困ってしまうね」

「仕方のない事です。情報が漏れたら、タイミングを見極められてしまいかもしれない。なるべくこの場で話し合っておきましょう」

ルードは深く溜息をつきながら言った。実際、彼らは厄介な状況



に置かれていた。

フアントム。青蘭に巣くう犯罪組織だが、『G』と呼ばれる事象が起きるタイミングは、向こうも大方掴んでいるだろう。だが、どういう対応を取るのかを知られてはならない。特に各世界からの来賓はその筆頭だ。来賓はとても偉いと同時に、非常に強い人物を招く予定だ。その中に1人でも予想外の人物がいれば、それだけでフアントムの計画（あるとしたら話だが）は総崩れになるだろう。

そんなやや暗い空気になってしまったが、それをシャーリイの大音声<sup>こゑ</sup>が吹き飛ばした。

「暗くなるのは、事故が起きてからにしましょう！ 何も起きなければ、落ち込む必要ありませんわ！」

「そーそー。明るくいこー？ 女神様は笑顔が大好き！」

「スコル様の仰る通り！ はいでは次！」

「あー、じゃあ私、アーシアが報告させていただく。とはいっても先ほどのことの繰り返しになるが、改めて、『G』調査のために、我がプログレス小隊隊長、アムベル・マカリスターを含む数名が、数日ほど青蘭を空けることとなる。その間、やや警備が手薄になってしまう旨をお伝えする」

「りよーかい。ま、数日くらいなら何とかなるさ。な、センサー」

「うん。何とかしよう」

「頼もしい。今日の私は聞き役として来ているので、私からは以上だ」

アーシアが口を閉じると、次はサイオンが話し出した。

「教務課からは1点。こちらも城<sup>きやう</sup>先生、カミュオン先生、デルタさんの3人が『G』の調査に赴くこととなる。そのため、カミュオン先生の担当区域である夕玄島に権限者<sup>オンライザー</sup>を置けなくなってしまう。なので、一時的に御影<sup>みかげ</sup>先生にいて貰うことにした。デルタさんがいなくなることで白百合島も空くことになるけれど、こちらは白の世界からの来賓<sup>きびん</sup>がしばらく留まるみたいなので、心配不要とのこと」

「白の世界からの来賓……E・G・M・A直<sup>マ</sup>属のアンドロイドということかな？ 4人の中の、誰が来るのかは？」

「2人来るそうです。誰が来るかは、デルタさん曰く『出発1時間前に

じやんけんで決めるって言われたから分からん』とのことで」

「1度だけ会った、というか見たことあるけどさあ……あいつらそこらへんテキトーすぎるよな。あたしでも引くわ」

「強すぎるが故、だろうな……味方にするなら、それはそれでこの上なく心強いが」

「あれは気にしすぎたら負けですわ。あ、でも、赤いにはできれば来てほしくないですわね。……1回蹴っ飛ばしたこと、未だに恨まれていたら堪ったもんじやないですわ」

「ま……誰が来ても問題ないように構えておくことにしよう。というわけで、私からは以上です」

サイオンの報告が終わると、再びルアードが口を開いた。

「そういえばオルガ師から、赤の世界の来訪団を誰が迎え入れるかを決定するように言われていますが、どうでしょう?」

「親方から、ねえ。そういや牧師と親方は旧知の仲、って奴なんだっけ。……んー、じゃあ、ザークの旦那はぜってーに行かせる。んで、あたしはその横で旦那がセレナ様にいじられるのを見物したい」

「……と言うように、ミステイカは出るそうだ。機動隊は他の仕事が詰まっているし、私は他の者に任せたい。ルアードさん方はいかがかな?」

「その……我々は、前夜祭の準備があつて……」

「わたくしが提案したのですわ!」

「シャーリイが『20周年祭なんだから屋台かなんか出したいですわ!』とか言つてたからー。ワタシも手伝っちゃう!」

「……なぜか申請が通つてしまったので、この大事な時期に屋台を出すことになりました、ハイ」

「まあまあ。そう落ち込まないでください、ルアードさん。言い換えれば、お三方は常に鐘赤島にいて下さるといふことだし……では教務課を代表して、私もお迎えに上がることにしよう。どちらにせよ、他の権限者も来賓のお迎えに行くようだし、私もそうします」

「んじやー今んところ、あたしとザークの旦那とセンサーの3人な。この場には他に来たい人はいないってことね。ま、手が空きそうな人

もないし、丁度いいっしょ。もし来たい人がいるってんなら、連絡ちよーだい。聞きに行くから」

そんな風に、ある程度和やかに話し合いは終わる、はずだったのだが……皆の顔は、どこか無理をしているような雰囲気があった。

ここにいる者は皆、赤の世界から来た者たちだが、その赤の世界では今、他の世界とは比べ物にならないような異変に見舞われている。

1つは、七女神が一柱、『朝』を司る『暁天の女神アーシー』の『影』が16年前に死亡した。『暁天の女神』は、夜闇を掃い世界に一番最初の光を齎す存在として信仰され、その強さからあらゆる女神を統べるリーダーのような女神である。それなのに、その魂の転生者、つまり新しい『影』が未だに現れていないのだ。『影』とはいえ、その魂は女神そのものでもある。そして、例えその魂が『目覚めて』いなくとも、『影』が魂の保有者であることには変わらない。なので女神の領域は問題なく保たれるのだが、今は目覚めていないとかではなく、本当に『影』がない、つまり『暁天の女神』の魂が所在不明らしい。そのため、暁天の女神の領域——本来なら一日の半分以上の時間を朝が占め、人々の精神的な眼識を目覚めさせる地。瞑想や精神統一の修行の場として有名である——は、朝の時間が徐々に短くなり、人々からは活気が失われつつある。巷では「転生システムがついに破綻し、女神が転生できなかつた」と噂になっており、女神を心の柱として生きる赤の世界の人々は不安に駆られている。

もう1つは、四大天使の1人である『戦導』の大天使ミカエルの失踪だ。天使は女神よりもさらに人に近い存在で、その中でもミカエルといえば、赤の世界の天使の中では『命導』の大天使ラファエルと並んで、最も信仰を集める天使である。彼女が消えてしまったことにより、これもまた人々の不安を増大させる要素になってしまっている。

赤の世界の人々が弱い、というわけではない。だが、赤の世界で生まれ、赤の世界で育った人々は、必然的にあらゆる価値観に女神や天使の存在が入り込むのはほぼ確実だ。そして、双方の中核的存在が不在になったことにより、赤の世界は、世界そのものが揺らいでしまっている。そして、その『揺らぎ』は、こうして他の世界に出向いてい

る者たちにも、少なからず影響を与えてしまっているのだ。

特に天使であるミステイカが、ミカエル失踪によつて受けた影響はとても大きいだろう。

「……んまあ、うちの世界のこともあるし、この『G』がさらなる混沌を齎す、なんてことにならなきゃあいいけど……」

「遅かれ早かれ、混沌は訪れてしまうだろうね。だけど、世界はまだ生きて、戦っている。あらゆる世界がそうだ。我々も、そうあるべきなんだ」

サイオンは、まるで自分に言い聞かせるようにそう呟きながら、きよとんとしている女神の影・スコルの瞳を、じっと見つめていた。

その脳裏に、自分を産んだ母、という名の女神——『豪雪の女神サイア』の、遠い表情を思い浮かべながら。

## 第6話 「忘れちやつてもいいよ」

「この島は……溶けるくらい暑いわね……」

「この島だけじゃないみたいだけど……でも、マジで参るよなあ」

ソフィーナとハイネは炎天下の中を歩いてきた。ガラガラと攻撃的に照り付ける日差しは、日差しというものが存在しない黒の世界出身の2人にとってはあまりに強敵だった。しかも、コンクリートの地面はたつぷりと熱を吸収し、下からの熱気は足の裏を炙るようだ。特に数か月前に来たばかりのソフィーナは、箱入りとまではいかないもののかなりのお嬢様。暑くなり始めた頃に、夏の熱気に文句を言っていた勢いはどこへやら。この『真夏』の熱気に完全敗北した彼女は、なるべくエネルギー消費をしないよう、発言さえ少なくなっていた。準備として日焼け止めクリーム塗るために1時間を要し、今でも日傘を差しているが、だからといって特段涼しくなるわけではない。白の世界の技術で何とかできないものなのかな、と益体も無い文句に花を咲かせている。

そんな2人の今日のお供は、途中のコンビニで買ったアイスクャンデーだ。

「でもさ、こんな超暑い中、冷たい氷菓。ちよつと風情あるよね」

「風情ってなによ」

「こういうののこと」

「分からないわ」

「あーあ、『理深き黒魔女』には分かんないかー」

「……普段だったら怒ってるけど、今は、なんかいいわ……」

ソフィーナの覇気の無さたるや、普段の調子からはまるで考えられないほどだ。今はアイスクャンデーを舐めるのに忙しいらしいが、好き嫌いが激しいワガママお嬢様な彼女に気に入ってもらえて何よりだった。

「溶けるの早いな……うおつと」

「へへーん。私はエクシードで引き寄せられるから心配ないわ」

「学園の外で勝手に使っちゃダメでしょ、エクシード」

「アイスの欠片を引つ張るくらい、どうってことないわよ——って、おっと」

ソフィーナのアイスの棒から、最後のひと欠片が脱落した。彼女は宣言通り、エクシードを使った。突然の落下に反応できたのは流石である。

だが、力加減を誤った。というより、できなかった。普段と同じ、軽くものを引き寄せる。それだけだったのに。

彼女のエクシードは……突如として、跳ね飛んだ。

「う、わっ……!?!」

「ちよ、ソフィーナ!」

ソフィーナのエクシード《グリーデイ・ハンド》は、右手に望む物体を引き寄せる力だ。リンクレベルの上昇に比例して、引き寄せることができる物体の『総重量』が増えていく。レベル2程度になれば、ハインという人間1人を引き寄せることも可能だ。

だが、今の彼女は——

「は、ハインっ! エクシードが、制御できないっ……!」

「お、落ち着いて! 今、リンクを——!?!」

《グリーデイ・ハンド》は、完全に暴走していた。まず、すぐ隣にいたハインが、物凄い勢いで彼女の右腕に吸い寄せられるのを感じた。慌てるあまり、彼女を抱きしめるような形で密着してしまうが、事態はそれどころではない。

プログレスがαドライバーとリンクすると、リンクレベルが上昇するにつれてエクシードの出力も上昇する。一方で、エクシードの制御も容易になっていくという利点もある。なのでハインはソフィーナにエクシードを制御させるためにリンクを試みたが、彼女は突然の事態を飲み込み切れず、慌てきり、完全に狼狽ろうばいしている。心が、合わせられない——リンクできない。

幸い、周囲に人はいない。だが《グリーデイ・ハンド》は物体を引き寄せる力。周囲に向かってそれが無作為に働いてしまっているため、今の状況は、とても危険だ。

すぐそばの街路樹が植わっている場所から土くれが飛んできて、2

人に当たった。ゴミ箱に入り損ねたコーヒの缶が飛んできて、2人に当たった。転がっていた石粒が飛んできて、2人に当たった。街路樹の小枝が折れて飛んできて、2人に当たった。プラスチック製のゴミ箱の蓋が外れて飛んできて、2人に当たった。ゴミ箱の中身の缶やペットボトルが次々と飛んできて、2人に当たった。当たった。当たった。当たった。——

「ソフィーナ！ リンクして！」

「で、でも、全然、制御できないの！」

「リンクすれば、一緒に止められるから！ 早く！」

狼狽から立ち直れないソフィーナ。その間にも、周囲からどんどん物が飛んできて次々と2人に当たる。しかも、当たったものは地面に落ちることなく、そのままだ。2人のシルエットは歪に膨れ上がっていくが、同時に収縮してもいる。その様はまるで、自重で内側へ崩れ込んでいくブラックホールのようなだ。

ハイネは、自分の皮膚に小石と空き缶がめり込むのを感じた。まずい、小石などの小さな物体は、このままだと貫通してしまう、と本能的に察する。同じことはソフィーナにも言えるだろう。とにかく飛んで来るものから彼女を守るために、ハイネを彼女をより強く抱きしめた。だが、身体の痛みは増す一方。

ぐぐぐ……と身体の中から生じた音をハイネは聞いた。彼女の右腕に程遠い部分——頭が、その中身が、より下へと吸い寄せられているのだ。ハイネは経験がなかったが、これは彼の身体に高いGが掛かっていることを意味している。その強さはジェットコースターの非ではない。必死に力を入れて踏ん張るが、ソフィーナを抱きしめている状況で力みすぎれば、彼女を傷つけてしまう、と判断したハイネは、上半身の力を意識的に抜いてしまった。

それが大きな判断ミスだった。脳への血流が一気に鈍ったせいで、見ている世界が暗くなり、色を認識できなくなった。もう少しで、彼は完全に視野を喪失してしまう——

「は、ハイネ!? ハイネえッ!!」

ソフィーナの泣きそうな声も、もうぼんやりとしか聞こえない。そ

の視界の中で、彼女の右腕に引き寄せられた自動販売機が、倒れてくる――

「――そこまでなのだ！！！！」――

突如、甲高い大音声と、キイイイイン、という金属音が2人の耳を貫いた。それと同時に、身体を襲っていた強力な力が、完全に消失した。それを認識した瞬間、ハイネの身体から完全に力が抜け、地面に倒れてしまった。意識はまだぼんやりとしているが、頭が血流を取り戻して熱くなるのを感じる。

「ハイネー！ ハイネっ！」

「だ、だいじょう、ぶ……」

まだ血流が戻り切っていないからか、呂律が回らない。飛んできたもので散々汚れてしまったのに、それには全く気付かず涙を流しながら介抱してくれるソフィーナの顔に、上手く焦点を合わせることもできない。

幸いにして、石粒が身体を貫通することはなかったようだ。しかし、大きすぎる力に曝さらされ続けたせい、か、身体中がひび割れるように痛んだ。

そんな2人を見下ろす人物がいた。

「大丈夫なものか、間抜けども」

先ほどの声の主だ。頭だけそちらの方を向けると、小学生と見紛うほど小柄な少女が腰に手を当てて、プンスカとしかめっ面をしていた。

「て、テオドーチェ、さん――」

「全く。ここ最近はただでさえエクシードの暴走事故が多いというのに。余計な仕事を増やしてくれるのだ！」

「ご、ごめんなさい……」

可愛らしい声で怒りを表現する彼女の名は、テオドーチェ・テルマギア。青蘭庁・青蘭学園運営部・エクシード管理課の長を務める、強力なプログレスにして魔女だ。魔族であることを示す2本の角に、金



髪を巻き付けるようにツインテールにしている。外見だけなら本当に10代前半の少女だ。青蘭に3年住んでいるハイネは、彼女からエクシードについて教えてもらったことが何度かあるため、ある種の顔馴染みだった。

そんな彼女は現魔王女に仕える、千年近くの時を生きる魔族でもあった。その名だけ、ソフィーナは知っている。

「貴女が……テオドーチェ・テルマギアなの？」

「ソフィーナ・アルハゼンか。主から面倒を見ると手紙が来たが、こちらはこちらの仕事が忙しいのだ！　しかし、エクシードを暴走させるとは……この時期だから仕方ないと言えば仕方ないが、学園の外でエクシードを使用したのは、感心しないのだ！」

「十二杖候補の……」

「人の話を聞くのだ！　……確かにテオは候補なのだ！　しかし、ただの候補ではない！　テオはエクシード管理課の仕事が忙しすぎるから、エヴァーズに杖を任せているのだ！　本来ならばあの杖の黒い方——『審黒解杖クロスロード』はテオが管理しているはずだったのだ！」

「でも貴女、自分から辞退したって……」

「それはそうなのだ！　仕事が忙しいといったのだ！　原因は、オマエみたいに注意散漫なヤツが、そこら中でエクシードを暴走させるからなのだ！　才能あるのは結構なのだが、暴走すれば危険も倍なのだ！　オマエたちは今、まさに死にかけていたのだぞ！」

「わ、分かったわよ……気を付けます。ごめんなさい」

ソフィーナにしては珍しく殊勝に謝った。流石に罪の意識が強いのだろう。それを聞いてもテオドーチェはまだしかめっ面のままだったが、フン！　と鼻を鳴らすと、手をパンと叩いた。すると、状況の復元が始まる。倒れかけた自動販売機が元に戻る。そこら中に散らばった空き缶やペットボトルが、同じく転がっていたゴミ箱の中に次々と入っていく。散乱した石粒や土くれも、元あった場所に飛んで行った。

それと同時に、ハイネとソフィーナの肌や髪、服から汚れが消えて

いった。柏手かしわでひとつでここまでやってのけるのは、彼女の實力の高さゆえだろう。

そんな光景を背に、テオドーチェは屈かがんで、チツチツと舌を鳴らしながらハイネの顔を覗き込んだ。

「ハイネ。大丈夫なのだ?」

「え、ええ……まだちよつと、朦朧としてますけど」

「ソフィーナのエクシードによる、疑似的な高Gのせいなのだ。脳に血が足りていない。脚にも力が働いていた故、血流不足による痺れもあるだろう。少しは治しているのだが……どうなのだ?」

「ああ……ちよつと良くなったような」

「そうだろう。だが、しばらく横になって休むのだ。そこを少し行つたところに……図書館があるだろう? 事情はテオから話しておく。涼しいところで回復に努めるのだ。よいな?」

「はい。ありがとうございます」

「うむ、よろしい!」

テオドーチェは歯を見せて笑うと、振り返って図書館の方に行こうとした。それを、ソフィーナが呼び止める。

「ね、ねえ、テオドーチェ……さん」

「何なのだ?」

「どうやってアレを止めたの?」

「ふむ。テオのエクシード《アンセスター・アンセム》は、音と共に事象を操るものなのだ。こんな風に——」

にやりと笑ったテオドーチェは、地面に転がりっぱなしだった空き缶を見つけると、それを見つめながら、タン、と音を立ててつま先で地面を叩いた。すると空き缶は真下から弾かれたように飛ばされ、がらん、と音を立ててゴミ箱の中に納まった。

「音さえあれば何でもできるのだ。分かつたら、もう軽々にエクシードを使おうとしないことなのだ。テオはこの力と数百年付き合っている故、もう慣れていているが、ソフィーナはまだまだ半人前もいいところ。大人しくしておくのだ」

「……はい」

「あと、オマエたちは、後日ブルーミングバトルに出場するのだろうか？  
こんなところで無駄に傷ついていないで、練習に励むのだ。期待しているのだからな。よいな？」

それだけ言うのと今度こそテオドーチェは、答えを聞くことなく指を鳴らして、その場から掻き消えた。

残されたハイネとソフィーナは少しの間呆然としていたが、やがてハイネが呟いた。

「……暑いね」

「……そうね。行きましょう。肩を貸すわ」

……………

ハイネとソフィーナがエクシードを暴走させたのと同じ時間帯――

「あつついねえ〜」

「そうだねえ〜」

青蘭島の、海岸線に程近い地点を、美海と兔莉子が並んで歩いていた。2人ともお揃いの麦わら帽子をかぶっており、とても楽しそうだ。それもそのはず、今から行くのは青蘭島東にある岬。そこに今、イルカの群れが集まっているという。2人はそのイルカたちと遊ぶ予定なのだ。

普通なら、野生のイルカと遊ぶといっても、せいぜい身体を撫でさせてくれるかどうかといったところ。しかし『動物とコミュニケーションを取る』というエクシードを持っている兔莉子は別。その力を使って、今まで多くの生き物と絆を結び、助けてきた。それに彼女は、そうでなくとも動物から好かれやすい。この間1人の時のイルカの群れを見つけ、今日遊ぶ『約束』をしたのだという。

「でもすごいよねー。イルカさんたちと、約束しちゃうなんて！」

「ありがとう。でもイルカって、とっても賢い生き物だから。数とか普通に覚えちゃうし。何日後っていうのも『太陽が何回昇ったら』って教えてあげれば、分かってくれるんだ」

「へえ、太陽かあ。そんなこと分かるんだ……」

「太陽って、意外といろんな生き物が認識してるんだよ。本能の場合も、知識の場合もあるんだけどね」

そんな生物雑学を披露しながら、2人は海岸線の歩道を歩いている。途中、数人の人とすれ違った。飼っている犬を散歩させているお姉さん、釣り具を自転車に括り付けたおじさん、機動隊の1チーム、ランニング中の女の子――

「ん？」

「どうしたの、美海ちゃん？」

今すれ違った、ランニング中の女の子が、肩に何か乗せていた気がした。気になった美海が、来た道を振り向いてよく見てみると、遠ざかる女の子の肩には白く小さな猫のようなシルエットが乗っていた。しかし、ただの猫ではない。普通の猫には無い部分があった。羽である。つまりあれは

(ルクス――!?)

ルクスとは、この青蘭島に住み着いている、謎の生物だ。しなやかな体に長い耳という、猫とウサギをかけた合わせたような外見に、身体と同じくらいの大きさの、鳥のような羽が一对生えている。この羽は実際に飛行に使えるらしい。全身を覆う体毛は白く、額には青い宝石のようなものが一粒埋まっている。そして何より特徴的なのは、とても臆病で近づく『消えてしまう』ことと、カメラに映らないということだ。これは彼らが、霊獣、あるいは幻想生物と呼ばれる存在だかららしい。

美海はルクスの外見に惚れ込んでいて、いつか直接接触してみたいと思っていた。だが、彼らは本当に臆病なので、近づこうとしただけでびっくりして、慌てて飛びながら消えてしまう。おかげで一度も触ったことはないのだが、そんな存在を、肩に乗せているとは、いったいどういうことだろう？　もしかして、ぬいぐるみとか？　それでも、同じルクス好きとして話が合いそう。

「あの、すみませーん!!」

美海は自分が認識するよりも前に、その少女を呼び止めた。すると

彼女は立ち止まり、ゆつくりと2人の方を向いた。

青い。まずそう思った。

何が青いかというと、その瞳だ。吸い込まれそうなほど青い、深い海のような色の瞳に、一瞬で心の奥底まで見通された気がした。

その少女は、とても小柄だった。美海たちが暮らす満月寮で一番小さな子、古谷樹里ふるやじゅりと同じくらいの体格だ。青いキャップをかぶっており、後ろから1つに纏めた艶やかな黒髪が風に靡いている。着ているものはごく普通のスポーツウェアとスパッツ、背中に背負っているナップサックという動きやすい格好で、まさにスポーツ少女、といった感じ。疲れているような様子はなく、2人を探るような目でこちらを見ていた。

2人の視線に気付いたルクスが、少女の肩の上から慌てて背後に隠れた。だが、いつもみたいに消えたりはしない。

「……なあに?」

鈴の鳴るような、綺麗な声だった。耳から脳に抜けていくような、聞き心地の良い声だ。その感覚に妙な快感を覚えながらも、美海は問いかけた。

「あの、ルクスちゃん、肩に乗せてたから、なんでかなーって思ってた……」

「……好きなの?」

「うん! とっても!」

「……そう。ね、隠れなくていいよ」

少女が肩越しに背後に隠れたルクスにそう言うと、おずおずと顔だけ肩から覗かせた。その光景すら可愛らしくて、兔莉子はくすつと笑った。

「ねえ、大丈夫だよ。傷つけたりしないよ」

兔莉子がそう声を掛けると、ルクスはきよきよと周りを見渡してから、そつと少女の肩に登ってきた。その光景を見て、少女の表情が初めて変わった。

「……どうして?」

「あの、私、動物とお話できるエクシードを持って……」

「……なるほど」

少女は得心したように頷くと、美海と兎莉子の方へ歩いてきた。肩を軽く揺さぶると、ルクスがそろそろと彼女の腕を降りてくる。

「……ちよつとだけ、撫でてみる？」

「え、いいの!？」

「大声出さないで。臆病なんだから。指先で背中を、ちよつとだけ、ね」

「う、うん。わかったよ」

美海は小声で返事をする、少女の手の平まで降りてきたルクスの背中に手を伸ばした。これほど至近距離で見るのは初めてだ。見れば見るほど繊細な毛並みに、少女と同じく吸い込まれそうなほど青い目をしている。指先でそつと触れた背中は、絹のように滑らかな肌触り。それと同時に、そのルクスの震えも伝わってきた。生きていることの、震えが。

「——生きてるんだ」

「そう思ってたなかったのは、消えちゃうから？」

「う、うん」

「それは違う。彼らは生きてる。こんな風に」

少女の囁くような声が、脳に染み渡る。撫でていると、ルクスの震えが徐々に収まってきた。安心してくれたのだろうか……だとしたらとても嬉しかった。

「貴女、日向美海さん、ね。そっちは、生嶋兎莉子さん」

「あ、知ってるんだ？」

「ええ。有名以上に、気になってた」

「わ、私のことも？」

「勿論。美海さんの、近くにいたから」

「え、私の？」

「はい、ここまで」

少女がそう呟くと、ルクスはたたたと彼女の腕を駆け上り、その肩に乗った。もう警戒はしていないようだ。

「2人とも、自分の力を、過信しないでね」

「え、それってどういう——」

「じゃあね」

少女は後ろを向くと、ランニングを再開させた。それでもせめて、と美海は後ろ姿に声を掛ける。

「ね、ねえ、君の名前、教えて——！」

少女はまた立ち止まり、顔だけ振り向くと、その名を囁いた。

「私の名前は——サファイア。忘れちゃってもいいよ」

少女——サファイアは今度こそランニングを再開し、そのうち見えなくなってしまうた。

「あの子……サファイアちゃん？ 何だったんだろう……」

「エクシードを過信するな、って言ってたよね。どういうことなのかな……」

2人は顔を見合わせて、サファイアの言葉の意味を考えながら、しばらくそこに佇んでいた。

しかし、そこは年頃の少女。その30分後には浅瀬で仲良くイルカと戯れていた。

## 閑話 青い彼岸花

世界接続20周年祭の前日。岸部きしべ雄馬ゆうまは青蘭島東にある、青枝山の傾斜に立つ雑木林に足を運んだ。

青蘭学園を卒業し、一度は本土に戻って執行部の仕事をしていたが、また青蘭島に戻ってきて教務課の権限者オーソライザーに就任した彼。青蘭に戻ってからのは、この季節になると毎年、ここに来る。

いくらか歩を進めると、目的地が見えてきた。木々が頭上を覆いつくす無数の葉に、ぽっかりと穴が開いたように太陽の光が差し込む『ギャップ』と呼ばれる場所。そこには、色鮮やかな彼岸花が咲き誇っていた。

彼は立ったままその花々を見下ろし……そのまま後ろに向かつて声を掛けた。

「隠れてないで、出ておいで」

「……バレてた」

木の後ろからひよこつと顔を出したのは、端正な顔つきに短く切りそろえた銀髪が美しい、1人の少女だった。岸部アイ。雄馬と同居している、出自不明の少女だ。

普段は家から出ないように言いつけているが、家を出てくる時の雄馬がやや挙動不審だったせいだろうか。勝手に付いてきてしまったようだ。

雄馬は呆れたような、それでいて感心するような口調で言った。

「尾行も隠形術も、かなり上手くなったな」

「でもバレた」

「そりゃあ……俺が教えたからだろ。で、なんで付いてきた」

「ゆーま、なんかおかしかった。だから、アイに内緒で美味しいもの食べるに違いない」

「そう思ったんなら、林に入った時点で引き返せよな」

雄馬の小言もアイにはどこ吹く風、バレたのだから離れてても仕方がないとばかりに雄馬の横まで歩いてきた。すると、目の前の彼岸花に気付き、よく見るためにかがみ込んだ。



「……きれい」

「だろ？」

「食べられる？」

「残念、毒がある。絶対食べるなよ、人が死ぬレベルの毒だから」

そう言いながら雄馬は群生する彼岸花の横に腰を下ろした。アイもそれに倣う<sup>なら</sup>。雄馬はスマートフォンで『彼岸花』と検索して、その画像を表示させながらアイに渡した。

「こんな花なんだ」

「……これ、違う花」

「いや、同じだよ」

「形は、にってるけど」

アイが画像を見て、目の前の花と別種だと判断したのも無理はない。なぜなら、今ここに群生している彼岸花は——青いのだ。まるで青の染料にそのまま浸した筆を幾筋も走らせたように。

「不思議だよな。球根は確かに本土から持ってきたって聞いたんだけど、青蘭に植えたら、青く咲くんだった」

「……？」

「分かんないか。そりやそうだ。俺も理屈は分からないし。青蘭大学じゃ一応研究している人がいるみたいだけど」

雄馬は真横の彼岸花を手の甲で撫でながら、独り言のように呟いた。その目が、ここではないどこか遠くを見ているようで、その隣のアイは少しムツとした表情になった。

「ゆーま」

「え、何？」

「こっち見て」

「ああ、はい見た」

「……………戻ってきた」

「そういうことか。ごめんな」

アイの背中をポンポン叩いた雄馬は、今度はちゃんと彼女に言い聞かせるように喋り出した。

「彼岸花ってのはこの時期に咲く花で、彼岸——つまり、死んだ後の世

界に咲いてる花だって言われてるんだ」

「ホント？」

「そりゃただの言い伝えだよ。で、この花が咲く季節は『彼岸』って呼ばれてて、死者の魂が現世に戻ってきてるって信仰があるんだよ」

「戻ってきてるの？」

「それもただの信仰だよ。で、ほら、この写真の彼岸花は紅あかいだろ？」

「こいつらは墓地に咲く花でな、その下に埋まってる死体から血を吸い上げるから、赤いんだ」

「そうなんだ。じゃあこの下には、青い血の死体が埋まってるの？」

「お、いい推理力。その通りだ。この地面の下にはな、鬼が埋まってるんだよ」

雄馬は、自分が座っている地面を撫でながら言った。一方のアイは『鬼』が何なのか、よく分かかっていないようで「鬼ってなあに？」と聞かれたので、「俺みたいなものさ」と返しておいた。とりあえずはそれで納得したらしい。

「強いんだ」

「そう、強い。で、この島には昔、鬼が大勢暮らしてたんだ。でも、ある時本土から渡ってきた戦士に皆殺しにされて、この島は鬼の血で真っ青になったんだって」

「鬼の血は、赤くないの？」

「これは日本特有の言い方かもしれないけど、とても人間とは思えないようなことをしたやつに『お前の血は何色だ？』って聞くことがあるんだ。同じ赤い血が流れている存在とは思えないってこと。そりゃ、人間なら赤いに決まってるんだけどさ、鬼の血は、青かったんだって」

「……ちよつと、見てみたい。ゆーま、血、青いの？」

「お前と初めて出会った時、赤い血を流しまくったと思うけど」

「じゃあ、ゆーまうそつき。鬼じゃない」

「俺みたいに強いってことさ。そんで、そうやって鬼の血がこの地面の下に染み込んでるから、ここに咲く彼岸花は青くなるんだ」

「へえ」

感心するアイを横目に、雄馬は笑いをかみ殺しながら種明かし。

「……………まあ、嘘なんだけど。全部俺の作り話。それに、こつちの彼岸花は本土よりも早い時期に咲くから、本当の彼岸は9月なんだけどさ。しかも『お前の血は何色だ?』っての、実は漫画のネタらしい」「うわ、ホントにうそつきだ。しつぽーした。弟子やめる」

「悪かったって。ただ、俺はそう思ってるってだけ。てか失望した、って……………また橘丸たちばなまるの言葉を覚えやがって」

「……………ドーナツ」

「分かったよ、帰りに買ってやるから機嫌直せ」

「はあい」

思わぬ収穫があつて喜ぶアイ。無表情のように見えるが、随分嬉しいようだ。雄馬はそんな彼女を見ながら、話を続ける。

「実際に青く咲く原理は分かかってないけど、面白い性質があるのは確かだ。この青い彼岸花を本土でも楽しみたい連中が、青蘭で青く咲かせて本土に持ち帰ったんだけど、こいつらは春に枯れて夏に花を咲かせる性質があつてな。本土で咲いた花は、全部赤かったそうだ」

「ここじゃないと、ダメなんだ」

「そういうこと。逆も同じで、本土から赤い彼岸花を持ってきても、次の年に咲く花は青くなるんだって」

「ふうん。じゃあアイ、今お得?」

「もちろん。いい経験だぞ」

「それで、ゆーまはなんでここに来たの? これが見たかったから?」

「……………んー、ちよつと違う」

アイの妙に鋭い指摘に少したじろぎながらも、雄馬は言葉を選びながら、一度嚙つくんだ口を開いた。

「俺には、兄貴がいたんだ。もう死んだけど。俺がここに来ると同時に死んだ。俺は兄貴の、後継ぎっていうか、後任者っていうか。ともかく、あいつが生きてた時と同じ仕事をしてる」

「そうなんだ。お兄さんも、強いのか?」

「そりゃあもう。俺よりずっと強くて、俺よりずっと年上で、俺よりずっと喋らない奴だった。兄弟仲は……………別に良くなかった。仲良く

しておけばよかったとも思わない。寡黙で、何考えてるか分からなくて、口下手で……それなのに俺よりも強かったから、ムカつく奴だったよ」

「……………」

「その兄貴がさ、死ぬ間際に俺に何か言いかけたんだよ。口下手だし、すぐ事切れたから、何が言いたかったのか分かんなかったけど。なんかすごく大切な事だったらしい。でも、死んだからもう聞けない」

「……そっか」

「死んだ後までムカつく奴なんだよ。死ぬならスパツと後悔なく死んでおけばよかったんだ。そうしたら俺も……思い出したくもない奴のことを毎年思い出して、悩むことなんてなかったのに」

「そう……なのかな」

「さつき言ったよな。この時期は彼岸で、死んだ人の魂が現世こっちに帰ってきてるって言い伝えがあるって。彼岸花は、そんな季節の象徴だ。

……だから、もし本当に戻ってきてるなら、教えてほしいと思ったのさ。お前は最期に、俺に何を言いたかったのかってのと……俺にそれを伝えきれなかったことを、後悔してないのかって」

最後は、ほとんど独り言だった。雄馬の視線は彼岸花の、さらに向こう側を見ている。それを見たアイは、今度は彼を引き戻すようなこととはしなかった。1月にこの島に落ちてきて、彼に拾われ、多くのことを学んだ。他人の心になんて興味がなかった彼女は、もういない。今の彼女は、雄馬の心情をなんとなく察して、それをどうにか励ましてあげたい、と思っている。なのでアイは、自分の話をすることにした。半分は、彼女にとっても無意識だったが。

「……もしホントに、しんだ人のタマシイが、帰ってきてるなら」  
「？」

「アイは、きつとすごく、憎まれてるね。アイはいっぱい、人を壊したから」

「……………」

「アイね、こっちに来るまえは、人を壊すことに——殺すことに、何のためらいもなかった。『あたまの中のこえ』にしたがうのだけが、いき

てる理由だった。それしか、なかった」

「……ああ」

「でも、アイ、ゆーまと暮らして、いろんな人とかかわって、分かったんだ。タイセツって、こういうことなんだね、って。」

アイ、ゆーまが殺されたら、嫌。ハレもサチもセイも、みんな、殺されたら、嫌。殺した人を、ゆるせない。アイがこうなんだから、みんなもそうなんだって、ようやく気付いた。

でもアイは、いっぱい人を殺した。その人たちにも、そういう人が、きつといたはず。それが、たとえどんなに悪い人でも。

アイは、そんなタイセツを、いっぱい奪ったんだって。殺した人の数より、ずっと多く。アイが、アイにとってタイセツなものをとられたら、その人のことをゆるせないように……アイはきつと、ゆるして、もらえない……」

元の場所では、肉体を改造され、洗脳され、殺人マシンのように働かされていたアイ。雄馬にとって、その凄惨な光景は、記憶を解析するプログラムによって知ったものだ。彼女が悪いわけではないはずだが、どうやら意識自体はちゃんとあったらしい。

アイは今、何を思っているのだろうか。彼女も彼岸花を見つめながら、その目尻に涙が滲んだのを、雄馬は見た。こんなにも純粋な心の持ち主から流れる涙が、余りにも罪深い気がして、それを誤魔化すように彼はまたアイの背中を叩いた。

「……そう思ったことが、アイの進歩だ。大丈夫、もし憎まれてるなら、親だからさ。俺も一緒に謝ってやるよ。だから、辛くても頑張って生きるんだ。誰かさんみたいに、何かを遺しきれない人生じゃ、半端に遺された人にも迷惑が掛かるんだからさ」

「……………うん。アイ、がんばる」

「その意気だ。一緒に頑張ろう」

2人はしばらくそこに座り、陽光に照らされる青い彼岸花を、無言で眺め続けていた。

## 第7話 「強すぎる力は、抑圧も制御もできない」

夏休みの学校というものは、なんだか特別な感じがする。

そうげつえま 蒼月絵麻はそう思いながら、歩き慣れた廊下を進んでいた。

ふみ 「文ちゃん先生ねえ、何の用事だろうね〜？」

おおかた 「大方、世界接続20周年祭のことだと思う。自分たちは、警戒をする側の者だから」

癖で間延びした絵麻のぼやきに反応したのは、彼女の親友にして同じ生徒会役員を務めるアンドロイド、ステラ。大雑把に短く切った金髪に、猫の耳のようなヘッドアーマー、そしてオッドアイが特徴的な少女だ。いつものように抑揚のない声で応えたが、親友である絵麻はそこに滲む僅かな不安を感じ取った。

ほんじょう 呼び出されたのは、生徒会室。生徒会の顧問である数学教師、本条文香ふみかから呼び出されたのは、生徒会と風紀委員の役職持ちメンバーらしい（ちなみに絵麻は生徒会副会長で、ステラは書記だ）。風紀委員といえば、一般的なその役割の他に、学園内の荒事への生徒としての対応を求められる。同じようなこともする生徒会も合わせれば、これとは何か良くないことに決まっている。

生徒会室の扉を開けると、既に数人の生徒が集まっていた。

「あ、絵麻ちゃんにステラちゃん〜！」

「会長、いちいち抱きつかないで」

「エミルかいちよお〜！ なんか久しぶりだね〜！」

「うんうん！」

真っ先に飛びついてきたのは、生徒会長であるエミルIIアンナ。無邪気さと母性が合わさった抱擁に対し、ステラは回避、絵麻は同じく抱擁で応えた。その様子を見ていたのは、風紀委員の面々。

「あら、ハグいいわね。どう遥はるか、私たちも——」

「い、いいってお姉ちゃん！ 毎日会ってるし！ それにハグは今朝

——」

「姉妹揃って、何をバカやっているのですか、全く」

風紀委員長の東条悠、2年生の副会長の東条遥と3年生の副会長のマリオン・マリネールだ。悠が遥に割と本気で抱きつこうとし、それを遥が結構全力で拒否し、その様子を見たマリオンは心底呆れたように溜息を吐いた。

「風紀委員さんは、もう揃っちゃってるんだよね〜」

「うちは……あとクラリス副会長だけですよね〜」

「……走ってくる。3、2、1——」

「お、遅れましたあ——あ、まだ先生いないな。ふう」

最後に入ってきたのは、3年生の生徒会副会長、赤の世界出身のクラリス・エーデルライトだった。漆黒の髪をキュツと結い上げた、凛々しい少女だ。射貫くような鋭い眼差しに、スレンダーな身体は一部の間も無く鍛え上げられている。だが一番特徴的なのは、側頭部に浮かんでいる青いリング——天使の輪。彼女は赤の世界でも珍しい、後天的に天使になった少女なのだ（厳密に言えば、天使のような性質と力を授かった）。その青い天使の輪は、他ならぬ『命導』の大天使ラファエルから戴いたものだ。

「珍しく遅かったですね〜」

「うむ。この後、赤の世界の来訪団がこの世界に参るのでな。久しぶりに我が主とお話しできればと思って、執行部と交渉していたのだ」「大天使様に会わせてもらえるなんてスゴイ！」

「すご〜い！」

「え？ あ、いや、その……別に大したことではない。そもそもこの力自体、ラファエル様から頂いたものであるし、もし了承されたとしてもそれは下僕の様子は見ておきたい程度のもだろう……」

遥と絵麻に褒められると、クラリスは頬を赤く染め、明後日の方向を向いて喋り出したが、その言葉は尻すぼみになった。普段はきりりとした厳格な少女だが、反面褒められるとこの上なく弱い。生徒会と風紀委員（それと彼女が部長を務める剣道部）はこの方法でクラリスを手懐けていた。もちろん、悪意のあるものではない。

集まった7人が少しの間雑談に花を咲かせていると、やがて生徒会室の扉が開き、小柄な少女に見える先生が入ってきた。いつも通り、

黒髪のツインテールに、丈の長すぎる白衣を羽織った数学教師、本条だ。

「どうもお疲れ様です、皆さん。この大変な時期に呼び立ててしまい申し訳ございません」

いつも通りの癖のある声の本条。生徒に一齐に緊張が走ったのを見て、ふう、と溜息を吐いた。

「揃いも揃って、そんなに身構えないでください。話しづらいです」  
「は、はあ〜い」

絵麻が深呼吸しながら答えると、その間延びた声に皆やらの安心を覚えられたのか、各々が思い思いにリラククスしたような仕草をした。

その様子に、本条自身も少し安心したのか、椅子に座りながら話し出した。

「大した用事があるわけではないんです。まあ、実際マジで大したことないのなら、それこそわざわざ呼ぶんじゃないやねえよと思うのでしょうが」

「別に怒りませんが……でもこんな時期に呼ぶってことは、何かないわけじゃないんですよね?」

「その通りです、遥さん。さて、いよいよ世界接続20周年祭が、あと3日後に控えています。この中には、ブルーミングバトルに出る人もいますね」

「はあ〜い」

「いちいち返事しないでいいですわ、会長」

「エミルって呼んで〜!」

「私が呼んであげましょう。エミルさんお静かに。……さて、こうした大きなお祭りの時は、悪い人たちが動きやすくなります。4月のブルーミングバトルの時も、生徒が1人、拉致されかけました」

「そういったことに警戒しろ、ということですか?」

「それもそうなのですがね、クラリスさん。それ以上に気になるのは、皆さんのエクシードです」

本条はいったん言葉を切ると、生徒たちの顔を見回した。顔を見合



わせたり、記憶を探っているようなところを見ると、全員何かしら思い当たる節があるらしい。そうでしょうそうでしょうと頷きながら、本条は言葉を続ける。

「……最近、毎日のようにエクシードの暴走事故が起きています。エクシード管理課が何とか事を収めています。それもかなりギリギリです。なので、世界接続20周年祭の最中に悪人を見つけ、それを追いかけたり、それと交戦することになったとしても、エクシードの使用には細心の注意を心がけてください。皆さんのエクシードが暴発でもしたら、それこそ目も当てられません」

「それもそうですよね……分かりました」

「自分のエクシードは、暴走しても、自分自身にしか影響がない。」

出し抜けにステラがそう言った。ステラのエクシード《<sup>ゴースト</sup>七式加速強襲<sup>バリエーション</sup>兵装》は、手足や腰の部分に兵装を纏い、各所に散りばめられた小型のリフレクター・コアによる瞬間的な加速を用いて、目にも留まらぬ連続攻撃を叩き込むものだ。しかし、これはただのエクシード兵装であり、彼女本人の異能はあくまで『思考加速』。多数のリフレクター・コアの制御を加速した思考で行い、よりの確で強力な攻撃を行うことができる。なので、エクシード兵装を纏っていないときにステラのエクシードが暴走した場合、それは彼女の思考が勝手に加速し続けるということだ。確かに彼女自身が言うように、エクシードが暴走しても、自分自身にしか影響がない。つまり、周りへの被害はないように思える。

しかし、本条はそれを厳しく咎めた。

「確かに、それはそうでしょう。ですが、その慢心は極めて危険です。例えば、加速した時間の中では人間の音声を正確に聞き取ることができないので、コミュニケーションが不全になります。いざという時にその状態になるということは、仲間と上手く連携できないことを意味します。また、エクシードの暴走がどれほどの規模で、どれだけの時間続くかも不明です。もし貴女の思考が『長時間に渡って加速し続けた』場合、思考回路に深刻な悪影響を及ぼす可能性があります」

「……確かに、それは危険」

「そうでしょうか？ エクシードは『異能』。制御から外れれば、大なり小なり、被害は確実に出ます。特に、絵麻さんエクシードが暴走した際に、周囲に与える影響は極めて大きいでしょう。つい先日、絵麻さんと似たエクシードを持つプログレスがエクシードを暴走させましたが、ほんの30秒ほどでそばにいたαドライバーが死にかけました。なので十分気を遣ってくださいね」

「ええ、死にかけたってヤバいねえ……とりあえず、はあくい！ できるだけ使わないようにします」

「それがいいでしょう。それ以外の皆さんも、しっかりと自分のエクシードを見つめ直し、きちんと制御すること。なんなら絵麻さんのように、可能な限り使用しないのが一番です。そのためには、何も起きないことが一番なのですが……」

本条はやや俯いて言葉を切った。その表情は、普段の無表情さからは想像できないような苦悩と疲労が見えた。慌てて悠とエミルが本条のそばに寄り、その小さな背中をさすりながら声を掛ける。

「文ちゃん先生？」

「大丈夫ですか？」

「あ……いや、はい。大丈夫です。寝不足ですかね……皆さんも同じでしょうけど」

「それは……そうですね」

エミルの言葉を聞いて、本条はまた俯いた。そして、一杯になった器から少しずつ水が溢れるように、ぽつりぽつりと言葉を紡ぎ始めた。

「……実を言うと私は、今回のブルーミングバトルの開催を中止すべきだと、ずっと進言し続けてきました。日に日にエクシードが制御しづらくなる今、当日は今以上に制御が難しくなっていることは予想するに難くありません。それなのに、全力のエクシードをぶつけ合うブルーミングバトルを行うのは、明らかに無謀、無謀も無謀。誰がどんな怪我をするか、分かったものではありません。こんなことを言いたくはありませんが、下手をすると死者すら出るかもしれない……。それを恐れてエクシードを抑えて戦うのであれば、それこそ本末転倒

というものです。

確かに、コロシウムに常設されている『リンク・エクシード抑圧結界』は、エクシードレベルを強制的に0にして、エクシードを封じる効果があります。万が一の時はオペレーターティングシステムを操作してバトルを中断させれば、対処は可能かもしれない。それに、αドライバーとリンクするということは、エクシードを制御しやすくなる効果も見込める。だけど、どちらも暴走したエクシードを止められるかは未知数。1人ならまだしも、2人、3人が同時に暴走したら？ 前回のバトルで、日向さんとセニアさんが同時にレベル5になった時、この常設結界にはかなりの高負荷が掛かっていました。双方のαドライバーとのリンクも、非常に危うい——それも、切れそうで危かつたのではなく、リンクしすぎて危ない状況でした。結界は名前の通り『抑圧』するものでしかない……αドライバーとのリンクも、あくまで制御に力を貸すだけ……強すぎる力は、抑圧も制御もできない……」

本条の眩きに、皆が黙って考え込んだ。エミルとマリオン、バトルに出る2人は特に。2人はい先日の練習の折、この間ソフィーナのエクシードが暴走し、大変だったとハイネから聞いていた。本条が言った、絵麻に似たエクシードが暴走したというのは、このことだろう。エクシード管理課の人が来てくれなければ危なかったという。

ソフィーナは戦いの中であまりエクシードを使用しない。言い換えれば、レベルが低くても戦力になるということだ。実際、2人がソフィーナのエクシードを使用するところを見た時は、手元に魔力を流れ込みやすくするとか、味方に飛んだ攻撃を少し自分に引き寄せることで曲げるとか、それくらいのものだった。その彼女のエクシードが暴走し、危うくハイネを殺しかけたということは、自分達のエクシードも暴走してしまえば周囲に被害が出ることはほぼ確実だ、と自覚させられた。

そうでなくとも、この数週間で暴走したエクシードを何度か見ている。チーム練習の時はハイネとリンクしているので安心感があるが、そうでない時は確かに危ないと思う時もあった。もしこれが暴走したらどうなるのだろう。それを想像するのも恐ろしかった。

しばらく、生徒会室にいた全員が沈黙していたが、本条は我に返ったようにハツと顔を上げると、「とにかく」と前置きしてから締めくくった。

「皆さん、生徒会や風紀委員の他のメンバーにもきちんと伝えてくださいね。それから、会った学園生のプログレスにもなるべく。エクシードを制御すること。極力使用しないこと。それからバトルに出る皆さんは、できる限り安全に気を遣ってエクシードを使用してください。今回のバトル、少なくとも学園側は、ちゃんと頑張りさえすれば勝敗は一切気にしません。危ないと感じたら即座にエクシードを制限すること。皆さんの安全が第一です。以上、何か質問は？」

……………

18時30分。赤の門ハイロウから、20人程度の団体が青の世界に降り立った。手続きを終え、鐘赤界港のロビーに現れた一団を、数人の男女が出迎えた。

「ふむ、今はちょうど黄昏時ですかえ？ 異世界の空も美しいものです。アイーシャにもこの光景を見せたかった」

「あ、アイーシャ様は、あまり都の外に出たがらないから……」

先頭を歩いてきた背の高い女性が、にこやかに微笑みながら窓の外を見てそう言った。赤の世界・七女神が一柱、夜を司る『宵闇』の女神・アマノリリスの影だ。

そして、彼女の言葉に答えたのは、彼女の隣で不安そうにきよろきよろと辺りを見回している、身長2メートルを超えるのではないかというほど長身の男性。ただし、猫背なため身長はもう少し低く見え、手足は細く、悪く言えば虫のようなイメージを抱かせる。こちらはアマノリリスの従騎士、ダステイン・ユーイング。

「ごきげんよう、アマノリリス様」

「うむ。お出迎え感謝いたしますえ、皆様」

「ひ、久しぶり、サイオン君」

「お久しぶりです、ダステイン君」

「せっかく異世界に来たのです。ダステイン、もう少しきりつとしないさい」

「む、無理だよ、お母さん……まわり、女の子だらけだし……」

「大丈夫だよ、ダステイン君。私も最初は戸惑ったからね。——ともあれ、皆様。ようこそこの青蘭諸島にいらっしやいました」

そう言つて出迎えたのは、オーソライザー権限者のサイオンだ。彼が胸に手を当てて一礼する——が、出迎えた人で他に同じ動作を取ったのは、クラリスとガブリエルだけだった。というのも、

「あく、ザークく！ 来てくれたんだねえく！ ねえ、久しぶりの抱っこおく」

「……あ、ああ」

「……つぶ、くふつ……！」

来訪団から抜け出してきた、とても小柄な女の子が、出迎えたザークに飛びついて、抱っこをおねだりしていたからだ。その横で、ミステイカが腹を抱えて笑いを堪えている。

ザークはいつものように、極めて攻撃的な格好をしていた。そもそも極めてガタイが良く、その上で短く刈り込んだ金髪に、ミラーコーティングのサングラス。着ているものはラフなアロハシャツにジーパン。首にも手首にも指にも耳にもシルバーのアクセをじゃらじゃら着けていて、とてもではないが青蘭庁に勤めているとは思えない。これでヤンキーでなければ誰がヤンキーなんだ、という格好だ。

一方、飛びついてきた少女の方は、身長130センチあるか無いかというくらい小さい。特徴的なのは、桜色のふわふわと暖かそうな衣装に、眠たそうな眼。今はそんな眠そうな、しかし自分はこの世で一番幸せな存在だと言つて憚らないような笑顔でザークに抱っこして貰っていた。彼女は赤の世界、春を司る『春眠』の女神セレナの影だ。2人の組み合わせはミスマッチもいいところだが、青の世界で定職に就いているザーク、彼はセレナの従騎士なのだ。

「く、くくつ……せ、セレナ様、ごごご、ご機嫌、麗うるわしゆう……！」

「はいはあくい。セレナ、ご機嫌く」

「だ、旦那も、ご機嫌……っ」

「……………ミステイカ、お前後で覚えとけよ」

「えく？ ザーク、ご機嫌じゃないのく？」

「な、泣くな！ ……ぐ、ご機嫌、だ……」

「わあ、ザークも、ご機嫌く」

「うくくつ……ヤバイ、腹筋千切れそう……！」

ザークが最大限ドスを効かせた声で脅しても、ミステイカはなお笑いを止められないようだ。しかもどうやら、こっそり撮影しているらしい。後で魔捜課で上映会でもするつもりなのだろう。ちなみにザークがセレナの不機嫌に対してここまで慌てているのは、彼女が不機嫌になると、天使だろうが女神の影だろうが、吸い込んだだけでぐっすり眠ってしまう粉を辺り一面に撒き散らすためだ（彼女本人も例外ではなく、真つ先に眠ってしまう）。さすがにこの場でそれをやられるのはマズい。

その横で、ガブリエルとクラリスが前に進み出て、女神らに挨拶した後、その後ろにいた天使の元に寄った。

「よく来てくれた、ラファエル」

「ご無沙汰しております、ラファエル様！ ご壮健で何よりです！」

「あ、ありがとう、ガブリエルちゃん。そ、それから、そんなにかしこまらないでね、クラリスちゃん」

自身なさげだが透き通った声で2人に応えたのは、触れれば切れるような美貌を持ちながらも、不思議と他者を圧倒しない、不思議な雰囲気包まれた女性。その瞳はガブリエルと同じように、青い十字が刻まれている。『命導』の大天使ラファエルだ。足元にひざまず膝き頭を思い切り下げるクラリスを立たせようと慌てている。

「何やら随分と賑やかなお出迎えになりましたえ」

「ぐ、ご気分を悪くされてはいませんか……？」

「そんなことはございませぬよ、サイオン。わたくしも自分の世界では、女神の影である前に、宿屋の主人であります故。賑やかなのは、大変結構なことです」

「それは良かったです。では、ホテルへお連れします」

サイオンがそう言った後も、相変わらずザークに抱きつくセレナ

と、それを見て笑うミスティカ。ラファエルの後ろの16人の天使ら全員に挨拶して回るクラリスと、呆れるガブリエル、慌てるラファエル。しどろもどろになる天使たち。

一行が界港を離れたのは、それから50分後のことだった。異常に遅れたのは、クーラーの効いた界港から外に出た瞬間、暑い外気に触れたセレナが一瞬で気を悪くして眠り粉を撒き散らし、全員で40分間眠ったためだ。

とても安らかな眠りから覚めたサイオンは、機動隊の面々が駆けつけてくれなければどうなっていただろうと考えて、冷や汗を流しっぱなしだった。

.....

19時。夕玄界港のロビーに4人の来訪者が現れた。

「んおー、まだ明るいね。もう少しすれば、私の時間」

「明るいのか暗いのか分かりませんね。どつちかにすればよいのに」

「美しい空じゃあないかい。見てごらん、あちらの空には星が輝き始めておるよ」

窓の外を見て思い思いの感想を述べる3人を、最後の1人が引つ張って連れていく。その先には、出迎えの一行の姿があった。こちらは5人。教務課からアルマ・カミュオンとアルスメル、エクシード管理課からテオドーチェ・テルマギア、魔捜課からアリサ・マイネル、そして機動隊からアムベル・マカリストード。

「あれ、4人？ 護衛は？」

「うん。護衛は無しよ。まさか最重要人物だけで来るとは思うまい！」

「確かにこの面子なら敵なしだろうけどよ……」

出迎えたアルマに、来訪した4人中の1人が答えた。外見は中背の金髪の少女だが、それ以外の部分が極めて異質だ。

例えば角だけなら、どこの家系の魔族なのかな、と思える。例えば耳だけなら、銀の森のエルフ族なんだろう、と推測できる。例えば翼

だけなら、高位の精霊種の血が混じっているのか、と感心する。例えば尻尾だけなら、なんと人化した龍族の方なのか、と感嘆する。だが、彼女にはそれが全部あった。異常でないのは先に挙げた髪と体格、それからエメラルドグリーンの瞳くらいだ。

ネロ・アンゲルⅡグラディウス。今回は魔女女王の代理でやってきた、途轍もない才能を持つ魔女だ。そして、アルマとは同じ村・同じ年に生まれた、いわゆる幼馴染である。

「久しぶり、アルマ。仕事、忙しい?」

「お前ほどじゃないだろうよ、多分」

「そんなこと言つてえ。ホント昔から、謙虚なんだか傲慢なんだか分かんない」

「謙虚つてことにしとけよ。ほら、四世界一可愛いお前によく似合う」  
「もう……この色男め」

「カツコつけずにはいられなくなるくらい可愛いのが悪いんだぞ」  
「やだ、まったたく。そういうトコ、ホント変わんないなあ」

どちらからともなくそつと抱き合う2人。いくら魔女女王の代理を務められるくらいオインライザーのネロと、権限者になるだけの実力を備えたアルマでも、ひとたび近づいてしまえばこれだ。その視線といい笑みといい、完全に惚気のろけている。その様子に、その場にいた全員が呆れたのか、2人はそつちのけで挨拶が始まった。進み出たのはアルスメルだ。

「よう来た、3人も。ヘカテリエル、エヴァーズは当然として、最後の1人はてつきりハイデイが来るものだと思つていたのじゃが……まさかお主が来るとはのう、テルⅡエマ」

「ええ、ええ。せつかくだし、弟子の生まれた世界も見ておきたくなつたのさあ。あの子の言つていた通り、美しい世界だねえ」

「お主が来ると知つておれば、文香も来たがったじやろうに」

「ええ、心配無用ですよ、アルスメル。老婆は老婆らしく、静かな時にゆつくり会いに行くさ」

にこやかに語るのは、しわくちな顔の老婆だ。腰は曲がついて、杖を突いているが、その口調や雰囲気には一切の衰えが見えない。名前はテルⅡエマ。アルスメルと同じく十二杖の1人であり、彼女は



『空』を司る杖を持っている（ちなみにアルスメルは『砂』だ）。十二杖の中でも最古参に近いテルⅡエマからすれば、いくら年寄りぶっているアルスメルも子供のようなものらしい。

そして、その横からもう一人の来訪者が口を挟んだ。

「そうそう、いい世界だしマジで。ハイデイも来ればよかったのに、なんか研究が忙しいからパスとか言って投げたんよね。あーあ勿体ないなあ」

「それはそれは……ともあれ、お会いできて光栄です、ヘカテリエル様」

「ちよつ、様とかやめてよね。私、様付けられつと、なんかゾワゾワするんよ」

そうぼやきながらアムベルと話し始めたのは、褐色の肌に銀髪、そして背中から黒い翼を生やした女性だった。彼女も十二杖の一人で、『闇』を司る杖を所持する天使・ヘカテリエルだ。天使といっても赤の世界のそれとは違う存在で、その杖の先端には、中をくり抜いた三角形の紫の結晶が輝いていた。対するアムベルは、若干恐縮しながら笑顔を交えて話している。十二杖の一人ながら砕けた態度のヘカテリエルは、やはり天使だからだろうか、黒の世界で最も活動範囲の広い十二杖として知られていた。

「とにかく……来ましたよ、私たち。ここでいつまでも話し続けます？ それとも進みますか？」

「今はその中間なのだ、エヴァーズ！」

「でも私、グレーは嫌いです」

「あく……ま、どっちでもいいってのも大事ですよエヴァーズ様。この世はそこそこ、テキトーっすからね」

テオドーチェとアリサに、やや苛ついた口調で話しかけたのは、これまた奇妙な少女だ。年の頃は10台後半の、端正な顔立ちをした少女見えるが、まずはその髪。長さはセミロングで、黒髪に白いメッシュが入っているようにも、白髪に黒いメッシュが入っているようにも見える。つまり、白と黒の髪の束が交互に同じ量だけあるのだ。着ている服もモノクロで、これまた地の色と差し色が白黒どちらか分か

らない。彼女も十二杖だが、世にも珍しいことに、『白』を司る杖と『黒』を司る杖を一手に管理している。名前はエヴァーズ。右手に持つ杖の形も奇妙で、白く真っすぐな杖に、黒い蔦つたのような杖が絡みついていてるのだ。

「さてと……とりあえず移動したいのじゃが、あの2人め、人目を憚らず惚気おつて」

「私はいいと思うよ。愛とは素晴らしいものなのだからねえ」

「最近のネロっち、めっちゃ忙しそうだったから、たまの旅行くらい、ね？」

「いや、私に言われても……まあ、ずっと離れていた恋人同士だ。共に居られる時くらいは、そばにいたい」

「このままここに泊まるおつもりですか？ 地面、硬そうです」

「ほれ、そのソファにでも横になればよいのだ——ああ、冗談なのだ——」

「エヴァーズ様ってマジで冗談通じないなあ」

全員に見られているのにイチヤイチャを止めないネロとアルマだったが、しばらくして、

「え、これ何待ち？」

「お主らじゃ馬鹿者！ さっさと行くぞ！」

……

ミハイル、デルタ、アリアの3人が界港のロビーのベンチに座って、1時間半が経った。近況報告や雑談のネタはとうに尽きており、窓の向こうを眺めながら時々ぼやくだけの時間が続いている。

アリアが爪先で床を叩きながら、苛ついた声で言った。

「……遅いですね」

「ああ。まあ……揉めてるとかじゃないんだろうけど」

「アリアは時間に厳しいからなあ」

「19時半過ぎには来ると仰っておられました」

「彼女らのことだし、きっと気まぐれだろ」

20時55分。白の門ハイロウから待ちに待った2人分の粒子が吐き出された。ブリッジに降り立った2人は、なぜかそのまま5分間待ち、21時になって門ハイロウの常設結界が閉じる瞬間を目撃した。ここまで待たせておいて何をしているんだ、とアリアは半眼で2人を睨みつけたが、遠すぎて伝わるはずもない。

「よくよく考えたら、こっちから門ハイロウの結界が閉まるところって見たことなかったんだよねー。うん、いい経験☆」

「ここにいと邪魔ですよ。お待たせしてしまっているかもしれませんし、早く行きましよう♪」

2人が入界手続きを済ませてロビーに出るのに合わせて、3人は接触を図る。真っ先に進み出たのはアリアだった。

「……遅かったですね、お二人とも」

「はーい、遅参しました☆」

「エスナとアルト、ね。なんで遅れたかはともかく……エスナ、その節は本当にありがとう」

「えーっ？ どの節？ ありすぎて分かんない☆」

「銀髪の子のエクシード移植を手伝ってくれた時だよ」

「あの時？ あれはその節じゃないよ☆ だってアタシらも収穫あったもん☆」

デルタの言葉に対し、ハイテンションな口調で返すのは、可愛らしいツインテールの少女だ。髪色は頭頂部が純白で、先端に行くにつれて金——いや、黄色になっていく、奇妙なグラデーション。瞳の色も黄色で、着ているスーツも白地に黄の差し色、という風に白と黄色だけで出来ているようだ。名前はコードS23E・エスナ。

「こんばんわ、ミハイル様、アリア様。お元気そうで何よりです♪」

「そちらも元気そうで良かった」

「元気でないことなど、なさそうですけどね」

「あら♪ アリア様は聡明ですね。その通りです。ワタシは元気、元気のアルトです♪」

ミハイルとアリアに話しかけたのは、来訪したもう1人、背の高い女性だ。こちらの髪はストレートだが、グラデーションは頭頂部が白

なのは変わらず、先端に行くにつれて帯びるのは鮮やかな緑色。瞳の色も、着ている白いスーツの差し色も、緑。名前はコードS23A・アルト。

エスナとアルトの2人は、白の世界の管理者E<sup>エ</sup>・G<sup>グ</sup>・M<sup>マ</sup>・A<sup>マ</sup>直属のアンドロイドだ。

「それにしても……じゃんけんの結果は悲惨だな。一応、僕らが不在の間にこの島守ってもらうんだぞ?」

「悲惨ってなにさあ☆ ていうか、じゃんけん勝負でアタシが負けるはずないじゃん? アルトには負けたけど☆」

「一応参考までに、アルト様はどうやってエスナ様に勝ったのですか?」

「3人に絶対勝てるような手を3人分作りました♪」

「全然参考にならないな……」

「じゃあさー、仮にグランとマイルが来たとしてどう? あの2人が、何をどうやれば話し合いなんかできんのさ☆ グランは一家で一番おバカで拳が全部解決してくれると思ってるし、マイルは何を喋らせてもしどろもどろだし☆ そしたらアタシとアルトが行くしかないよね☆」

「それに、2人とも力が強すぎるので、もし1人でも連れて来たら、他の世界への威嚇と思われてしまいますしね♪」

「そう言われると、なんだか不憫だな……まあ口だけ達者なエスナはともかく、アルトがいれば何とかなるか」

「荒事と魔法以外なら、ワタシにお任せください♪」

「アタシはともかくって、どういう意味さ☆」

デルタは2人の言葉を聞き流しながら後ろを振り返った。21時で本日の世界間移動は終了し、界港も店仕舞いだ。早くも清掃員がロビーの清掃を始めている。

「ここは邪魔になるな。さっさと行こう。話ならどこでもできる」

「よしきた☆ それいけー☆」

「飛べって言ってるわけじゃないぞ!」

「分かってる☆ だって天才だもん☆」

「ワタシと違って、エスナちゃんは冗談が好きなんです♪ ね?」  
「2人してE・G・M・A。直属のアンドロイドが言うと、笑えない  
ジョークですね。大変勉強になります」

「お、アリアちゃんやるね☆ 皮肉が年々上達してくれて、アタシは嬉  
しいぞ☆」

「うちの子にこれ以上変なことを教えないでくれ……」

「うちの子って言うなら、むしろワタシたちの子でもありますよね♪」

「あれ? そういえばそっかー☆ なら色々教えちゃっても大丈夫だ  
☆」

「勘弁してくれよマジで」

げんなりするミハイルとデルタ、カラカラ笑うエスナと微笑むアル  
トがなんとも対照的だ、とアリアは思った。

界港の出口へ向かう道すがら、エスナが思い出したように口を開い  
た。

「うちの子って聞いて思い出したんだけど……セニアちゃんはどう  
なったの? こっちの世界に連れていくって報告受けたつきり、続報  
がない☆」

「元気でしたよ。この前会いました」

「あれ、もう会っても大丈夫なんですか♪ 女の子の成長って早いで  
すね♪」

「まあ、少しだけ異常が出ていたが。ただ、それだけだった。少し話し  
かけたら元に戻ったし」

「異常出てたのかよ。それ僕聞いてないぞ。おいアリア」

「言うの忘れてました。てへ。申し訳ございません、サー。以後気を  
付けます」

『てへ』さえなければ満点だったのにな」

「えーっ、満点なんてつまんない☆ 女の子なら特別点☆ 狙いに  
行っってナンボだよね☆」

「今の特別点はいかほどですか、デルタ君♪」

「ん……じゃあ120点。よかったな、アリア」

「やりました。照れます」

デルタがアリアの頭を撫でた。済まし顔のつもりだったが、もしかしたら、少しだけ本気で照れていることが顔に出てしまったのだろうか。そんなアリアを見て、外見通り黄色い声を上げるエスナと、彼女を止めようともしないどころか煽るアルト。その後、無理やりにも話題を変えてくれたデルタに感謝せねば。

「しかしミハイルよ。お前は俺よりも早く彼女らと知り合ってるんだろ？　なんかもうちょっと上手く対処できないもんかね」

「無理だ。エスナなんか、いまだに何考えてるか分からんし。グランならまだしも」

「やだ、褒められちゃった☆」

「褒めてないだろ」

「褒めてないんですって♪」

「なんと☆　薄情だよミハイル☆　沢山助けてあげたでしよ☆」

「もちろん感謝はしているさ。尊敬もしている……だが信頼はしていない」

「ひどい☆　そんなこと言うんだったら、イプシロン・インダストリーのデータベース全消去しちゃうぞ☆」

「それをマジでやりかねないんだから信頼されないんだろ……能力上、冗談になってないんだから」

「ワタシと違って、エスナちゃんは冗談が好きなんです♪　許してあげてください♪」

「お前たち、『G』が近づいているって自覚あるのか？」

「もちろんですよ♪　仲良くなれるか、敵になるか、楽しみですね♪」

「そーそー☆　いっぱい儲かれば、とつても嬉しいじゃん☆」

「……本当にお前だけで調査に行つて大丈夫なのか、デルタ？」

「……御覧の通りなんだから。むしろ連れて行く方がマズいだろ」

喋るだけで疲れるエスナとアルトの相手をしながら、ニアが運転する車へと案内するデルタとミハイルを、アリアは、少し後ろから、妙な羨ましさを覚えながら見ていた。

## 第8話 「ブルーマウンテン頼んでいい?」

——これより『世界接続20周年祭』を開催いたします——

20年に1度のお祭りとなれば、どうしてもテンションが上がってしまう。

「俺たちの出番は2日目だからな。お祭りは3日も続くんだし、今日はちよつと抑えめにしような」

「はあ〜い」

春樹の忠告に美海は素直に答えたが、視線はあちこちに吸い寄せられている。

(それも仕方ないよな。だって豪勢だし)

3日も続く祭りなので、明確な開催の告知は放送によるものだけだったのだが、いざ覗いてみると、商業地区は普段以上に人で賑わっていた。これは美海でなくとも目移りしてしまう。

今日は明日に向けて英気を養うために、チーム全員で青蘭島の祭りに来ていた。祭りは夕玄島・鐘赤島・白百合島の3島でも開催されており、そちらはその真上にある門ハイロウの向こうの世界の出し物が多いという。ただ、今日は青蘭島の中だけで楽しもうと決めていた。明日はいよいよブルーミングバトルの本番なので、軽く遊んで、明日しっかりと実力を発揮しよう、という考えだ。みんながしっかりとパフォーマンスを発揮できるようにするには、多分このくらいリラックスしている方がいいんだろう、と直感ながら確信できるのは、春樹もこのチームのメンバーをちゃんと理解できるようになっているということだろうか。

「でもさー。島4つで3日でしょ? 回り切れないって!」

「別に全て回らなくても良いでゴザろう? 胃袋が無限に広がるならともかくでゴザるが」

「お小遣いも限られてるし、目一杯楽しむには、目利きが大事だねっ」「はぐれないようになー」

琉花、忍、兎莉子も、通い慣れた場所の普段と違う装いに目を輝か

せている。春樹は自分の判断が間違っていないかと再確認した。こんなに楽しそうなのに「明日バトルだから」という理由で行っちゃダメなんて言われたら、生殺しもいいところだろう。

実は、この前にバトルに出る他のαドライバーたちと少し近況を報告し合った時に、今日どうするかを聞いておいた。すると、みんな祭りには行くとのこと。どんな時でも冷静な冬吾は別として、少なくともハイネと俊太は、自分自身も祭りが楽しみで仕方ないといった感じだった。そんなことを言ったら春樹も同じだし、冬吾だってみんなと祭りを回るのが楽しみだと言っていたのだが。

バトル相手はみんな見知った相手。自分たちの目的は、練習の成果を出し切ることもそうだが、観客を楽しませることもある。ある意味、自分たちはこの世界接続20周年祭という祭りの中で、出し物を『提供する側』なのだ。変に緊張しっぱなしなのも逆に良くない。それが全員で出した意見だった。

「よし。じゃあ食べ物買い込んだら、広場で作戦会議な！俺ここで待ってるから、なんか買ってきて。はいお金」

「はい！ねえねえ、何買おつか？春樹くんは何がいい？」

「何でもいいよ。食べたいもの買つといで」

「やつぱこういう時はたこ焼きに限るね！なんかこう、特別感あるし」

「拙者は焼きそば一択でゴザる。店主の腕前が分かるというものでゴザるよ」

「ま、まあまあ……とりあえず、一通り買つていこう？ほら、あれ、

黒の世界の食べ物みたいだよ！」

わいわいと楽しそうな4人の背中を見送りながら、春樹は近くにあったベンチに座って待つことにした。あそこに入るのは、男子として少し、気まずいものがある。4月どころかこの島に来た時からずっと思っていたが、やはり青蘭は——少なくとも青蘭学園生は——女子社会なので、男子の肩身は狭い。その男子が非常に重要な存在であるため、プログレスたちはαドライバーに強い興味を示すし、その存在をある程度は意識して行動しているようなので、肩身が狭いと言って



も普通の女子高に放り込まれるよりは遙かにマシなはずだ。とはいえこういう、楽しい状況になると、美海たちにとって自分はお邪魔虫なのではないかと思うことが時々あった。それぞれ特徴的な異能を持つプロGRESとαドライバーは、それだけ普通の男女以上に役割がはつきり分かれている。言ってしまうと……『別の生き物』感が強い。

「あ、春樹くん。どうしたの、こんなところで一人で」

「あ……御影先生。ども、おはようございます。そういう先生も一人ですけど」

「バレた？ 今ね、葵ちゃんたちがなんか買ってくるから待ってるーって、お金だけふんだくって行っちゃったの」

「俺はみんなにお金渡して、なんか買ってきてって言ったところですよ」「あはは、似た者同士だ」

不意に声を掛けられて顔を上げると、そこには中性的ですらりと背の高い男性、御影凌雅みかげりょうがが立っていた。青蘭学園の国語の講師だ。今年入学してきた御影葵あおいの兄である。

春樹にとつても彼は先生というより、雄馬と並んでよく面倒を見てくれるお兄さん、という印象が強かった。というのも、彼は何を隠そう、春樹をスカウトした当時通っていた中学校に来た先生。つまり、青蘭の関係者では——春樹の父親を除いて——最も古い顔馴染みということだ。あの時はスーツを着ていたが、こちらに来てみれば女性のような格好をしていて驚いた。しかも、女装している男性だと分からないくらい綺麗なのだ。

彼はごく自然の春樹の隣に腰掛けた。なんだか爽やかな香りがする。男性だと分かっていても、思わずドキツとしてしまう。

「それで、どうしたの？ もしかして、明日のバトルが不安かな？ まあ仕方ないよね」

「あー……不安、っていうか。みんなを見てたら、αドライバーってプロGRESにとつて一体何なんだろうなー、なんて思っちゃって」

「なるほど、面白い疑問だね。その顔は『パートナー』以外の答えが欲しいって感じだ」

凌雅はニコツと笑うと、賑わう人々の方へ目を向けて話し出した。「僕も一時期悩んだなあ。僕はαドライバーだけど、妹の葵ちゃんはプログラサー。しかもリンクの相性もとてもいい。僕らはαドライバーとプログラサーである前に兄妹で、パートナーである以上に強く繋がってるんだ。一方で僕には……まあ、恋人がいるんだけどね。ほら、リーナちゃんだよ。僕はそちらとも強く繋がってる……と思う。そっちもただのαドライバーとプログラサーっていう関係じゃあない。それは、君たちも同じはずだよ？」

「俺たちも、同じ……」

「うん。確かにさ、プログラサーがエクシードを使っているのを見ると、時々同じ生き物とは思えなくなるよね。だとしても、僕らは兄妹で、恋人同士で、強く繋がってる。君たちもそう。君にとつて彼女らは、ただのプログラサーでも、ただのパートナーでもない、もっと大事で崇高な存在なんじゃないかなあって思うよ。例えるなら……家族、みたいなね」

「……そうかもしれませぬ」

「なんてね。国語講師っぽく、ちよつと詩的に纏めてみました」

美海。失意の底に落ちていた心に、新風を吹き込んでくれた彼女。

琉花。暗闇の中で迷っていた心を、冷水で目覚めさせてくれた彼女。

忍。覚悟を固めきれなかった心に、熱い炎で発破を掛けてくれた彼女。

兎莉子。恐怖と焦燥に崩壊しかけた心を、優しく抱きしめてくれた彼女。

春樹は凌雅の言わんとすることを理解した……気がした。

「硬く考えるのは、よくなさそうってことですな」

「おっ、いいね。ま、気軽に行こう。みんないい子だし、たまに喧嘩するくらいが丁度いいよ。僕だって葵ちゃんと喧嘩することあるし――あ、みんな戻ってきたみたい」

「葵ちゃんたちも一緒だ。……美海と彼女、なんかいつも争ってますね。うわ、どんだけ買いい込んだんだよ……」

「そのくらいがいいんじゃないかな。葵ちゃんが元気そうで僕も嬉しい。さ、行こうか」

その後の一行は、春樹が予想していたよりよっぽど賑やかになった。

.....

「よくこんな暑い中で熱いもの食べられるわねー」

クリスタルモールの3階のフードコート。窓際の席から広場を見下ろしながら、ふーふーと息を吹き掛けて焼きそばを冷ましているのはソフィーナだ。ここは涼しいが、外に出れば熱気地獄である。

テーブルに着いているのはソフィーナの他にエミル、マリオン、カサンドラ、ハイネで、合計5人。12個も太陽があるのに明るいものは1つもない黒の世界の出身者は、総じて夏の暑さと日差しに弱い。白の世界出身のエミルも暑いのは苦手だそうだ——というより、こんな炎天下が大好きだ、なんて人がいるのだろうか。そのため、屋台巡りも早々に切り上げ、買ってきた食べ物をつつきながら戦術の確認をしていた。とはいえ、基本となる戦い方は何度も練習したし、相手はあの冬吾のチーム。予め決めた戦術通りに動いたのでは、彼の策に嵌はまってしまっただろう。必要なはその場の判断を如何に正確に行うか。そしてそれを実行するのだ。

「向こうはエクシードを制限してくるかな？」

「例えそうでも、テルルさんはエクシード抜きでも驚異的なスペックですわ。となればやはり、前提通りカサンドラとソフィーナで止めておくのが手堅いでしょう」

「人数差があるとはいえ、こちらの方が不利になる場面も多いだろう。テルル君は可能な限り素早く、フィールド外に出してしまいたいところだね」

「エクシード抜きってことなら私もそうだから、カサンドラの補助だけに限らず、フィールドを広く使うべきね。それと、前言ってたやつ。いざって時のために、持ち込み可能な魔導具は一通り揃えたから、後

で渡しておくわね」

「お金が掛かるからって、呪符とかは俺らで手作りしたんだ。そんなに難しいものじゃない分、効果もそこそこだから、使い方次第って感じ」

プログレスの練度で向こうに負けるとは思っていない。もちろんスペックも。その上人数でも上回っているのだから、負ける理由なんて無いように思える。

しかし、冬吾とハイネでは頭の良さが全く違う。ここが全ての根幹だ。チェスと同じようなもので、盤に乗っている駒に優劣が無いなら、勝敗を決定付けるのは頭脳しかない。

だからこちらは、頭脳の差を補えるだけの手段を用意しなければならなかった。幸い、魔術に詳しいソフィーナとエミルがいたので、技の多彩さという点では大きくリードできているはず。後は当日、その瞬間瞬間に、それをどう組み合わせるかだ。それはハイネが指示するものでもあるが、プログレス個々人が咄嗟に判断すべきものでもある。

(まあ、胸を借りるつもりで行こう)

軽い気持ちというわけではなく、あくまでも変に気負わないようにするだけ。サッカーの試合と同じだ。ハイネは監督。精一杯頑張つて練習し、試合になったら選手を信じて送り出す。その上で、自分も全力で彼女らを指揮し、全力で耐える。

ここまで来たら、もうなるようにしかならない。そのために色々やってきた。負けても悔いはない……とまでは言えない。できれば勝ちたいが、もし負けても後悔したくないなら、やるべきことは一つ。とにかく全力で取り組むことだ。

「呪符、わたくしのエクシードで燃えてしまったりしませんわよね?」  
「それは大丈夫……なはず。じゃあこの後私の工房に行きましょう。一応動作確認しておきたいわ」

「魔術がてんでダメな私でも大丈夫なのかな?」

「だいじょーぶだいじょーぶ! カサンドラちゃん、魔力はしっかりとあるから、それをグイって込めるだけだよ」

「それが難しいから魔術下手なんじゃないの? ……まあ、やってみないと分からないし、ぶつつけ本番というのも怖いから、とりあえずカサンドラも来なさい」

「承知した!」

エミルがカサンドラの背中をぱんぱん叩いて励ましている。ソフィーナがマリオンに作成した呪符の仕組みを教え聞かせている。成り行きというか、親しい間柄だけで組んだチームではあるものの、意外と上手く纏まってくれた。それはきつと、ハイネの努力だけが成功の要因ではない。みんな頑張ったからだ。だから、みんなで勝ちたい。

なんて思っていたら、急に隣のエミルから声を掛けられた。

「ね、ハイネくん」

「何——って、近い!」

「ふふっ! 頑張ろうね!」

ずいっと顔を近づけてきたエミルは、嬉しそうに笑ってハイネの手を取った。まぶしい笑顔だ——外で輝いている太陽のように。生徒会長になったのも納得できる話だと思う。

「ちよ——エミル! 近いわ!」

「えへへ、ごめくん!」

「ソフィーナ、嫉妬心が強すぎるとロクなことになりませんわよ」

「そうそう! 女の子は笑顔が一番だからね! その点はエミル会長を見習うといい!」

ハイネは膨れっ面で怒るソフィーナを宥めながらも、その心は明日のバトルのことでいっぱいだった。

……………

「んく、これも美味しいわね!」

「アウロラ? まだ食べるの……?」

「ええ! だってこれだけの屋台があるのだもの。せっかくなら、楽しみ尽くしたいでしょう?」

「まあそうなんだけどさあ……」

俊太とアウロラは鐘赤島の祭典会場に来ていた。そこに並ぶ屋台の提供する料理の食べ比べを、アウロラは既に7割ほどコンプリートしていた。

アウロラは赤の世界のお嬢様だ。歩きながら食べる、というのは彼女のマナーに反するらしく、会場のベンチに座って食べていた。で、食べ終わるとまたいくつか買ってきて、それを食べる——この繰り返しだ。隣の俊太はといえば、彼女からお裾分けを少し貰いながら、食べ終わった後のゴミを捨てに行く係だ。そのお裾分けの分だけお腹いっぱいになりそうなのに、この子の腹は一体どうなっているんだと思わざるを得ない。

その彼女の食べっぷりが余りにも良いため、周囲に人が集まってきているほどだ。しかも食べたものの感想を聞かれると、その全てに快く答えている。この鐘赤島の祭典会場の屋台の料理は、その大半が赤の世界のものなので、他の世界の人が食べるのには、少し躊躇があるのだろう。中には、明らかに虫を使った料理があつたが、ゲテモノではなくれっきとしたグルメなのだそうだ（少し食べさせてもらったが、確かに美味しかった）。

「まろやかで、それでいてしつこくない……絶品ね。これなら明日のバトルも頑張れそうね！」

「そうだねえ……」

彼女にとって、これはただの暴飲暴食ではない。もの凄い健啖家な彼女だが、こうして食事によって得たエネルギーを体内に溜め込み、エクシードに変換できるのだという。今これだけ食べておけば、明日の出力には期待できそうだ。……それはそれとして、注目を集めてしまっているのは恥ずかしいのだが。

「お嬢ちゃん！　うちのも食べないかい？　ほら、お代は結構だよ」

「ええっ？　そんな、悪いです！　ちゃんとお支払います！」

挙句の果てには、屋台を営んでいる店主の方から料理を持ってきた。タダでいいということは、彼女に食べてもらうことが宣伝になると思っただろう。周りには人だかりができていて、彼女はとても

美味しそうに食べる。そんな光景を見たら、じゃあ自分も……となる人がいてもおかしくない。

「アウロラ！ ちょっとちよーだい！」

「いいわよ、ルビー。はい、あーん」

アウロラの膝の上に座っているルビーがおねだりして、彼女もお裾分けを貰っている。一方、

「いろんなものたべられて、いいなー……」

「フローリアは植物しか食べられないもんな。はい、お水」

俊太の膝の上のフローリアは、つまらなそうに野菜スティックをぽりぽりと齧っていた。ルビーもフローリアも同じ赤の世界で生まれ、妖精だが、その食性は異なる。ルビーが雑食なのに対し、フローリアは草食なのだ。そのため、フローリアにはお手製の野菜スティックとサニーレタスの束をあげている。春先には菜の花の葉っぱをそのまま食べたりしていた。ルビーが食べているものが羨ましいというよりも、単純に色々なものが食べられるから羨ましいということなので、アウロラの食べているものを欲しがったりはしなかった。それに、自分だけ食性が違うことに疎外感があるのだろう。明日のバトルを前に士気が落ちて、万が一にでもボイコットされてしまっただけで、俊太はフローリアのご機嫌取りに終始していた。

とはいえ、フローリアがいたから、俊太も少し野草に詳しくなれたのは収穫だった。彼女は植物の毒に強く、人間が食べてはいけないような植物も平気で食べてしまうのだが。

「ほら、あの子たち！ 明日のバトルに出るんじゃないか？」

「そうだっけ……あ、ホントだ。明日は頑張ってくださいーい！」

「はーい。食べた分、しっかり頑張ります！」

パンフレットに載っているのが当然だが、自分たちがバトルに出場することもバレている。好奇心からか時折投げ掛けられるエールにも、アウロラは笑顔で対応。こういうところは本当にすごいと思う。俊太は気恥ずかしくて、軽く会釈するだけだ。

俊太は男子にしてはとても小柄だ。そのせいで、背が高くスタイルも抜群なアウロラに対し、一歩引いた想いを持っていた。5月にお互

いのコンプレックスを打ち明け合い、交際を開始したわけだが……彼女に対しての劣等感はどうにかなったものの、周りからの視線は未だに気になる。どんな目で見られているのだろう。美しいアウロラに対して、こんなちんちくりんがパートナー？ もっと良いαドライバーを選べばよかつたのに――

「俊くん？」

「なに？」

「あーん」

「あー……もがつ」

ぼーっとしていたところに、アウロラから何かを食べさせられてようやく我に返った。なんだこれ……と噛んでみると、甘い。今まで味わったことのない、濃厚な歯ざわりなのにすつきりとした甘さの食べ物だ。記憶の中からこれと似た味を探すなら、レモンの蜂蜜漬が一番近い気がする。とはいえ、初めて体験する味だ。

「これはね、リユクサっていう果物を天日干しにして、カラカラになったやつを蜂蜜に漬けたものなの。リユクサはそのままだと酸っぱいし渋いしで、とても食べられないのだけれど、1回干してから蜂蜜に漬けると、とっても美味しくなるのー！」

「なんか干し柿に似てるね」

「そうそう。でもこれはとっても貴重なものよ。少なくとも赤の世界ではね。前に言ったかしら？ 赤の世界では、蜂蜜はとっても高価なものなのよって」

「あー、聞いた聞いた。こっちに来た時、その辺のスーパーで売ってて驚いた、って」

赤の世界において、蜂蜜は高級品だ。これは単に養蜂の技術が確立されていないとか、ミツバチが少ないから、といった理由ではない。

赤の世界の住民に「ミツバチといえば」と問うと、まず間違いなくこう返ってくる。「ミカエル様の御遣いだ」と。四大天使の一角、『戦導』の大天使ミカエルは、その黄色い光の翼からミツバチを生み出した、という言い伝えがある。ミカエルはその黄色い光の翼を無数の輝くミツバチに変えることができ、それを使って戦場を支配したことが



ら『戦導』と呼ばれていた。つまり、実際に赤の世界に生息するミツバチの由来がミカエルだ、というわけではないのだが、現にミツバチは赤の世界では貴ばれるべき生き物で、その巣が齎してくる甘い蜜は、まさに天使様からの贈り物だと広く知られている。そのため、ミツバチを育ててその蜜を頂戴する養蜂業は、強く責任のある一族にのみ許されてきた格式高い仕事で、別の見方をすれば、これはある種の神事だといえる。

そして、アウロラの生家・エオース家は、代々養蜂業に携わってきた由緒ある一族だった。彼女自身、幼い頃から家業を手伝っている。そんなアウロラなので、青の世界で蜂蜜が廉価で売られていることに驚いたのも無理はないだろう。

「これに使われてるのは、こっちの世界の蜂蜜みたいね。味が結構違うの。でも、これはこれで美味しいし、何より誰でも手軽に食べられるから、こういう場には特に持ってこいね」

「赤の世界で食べようと思ったら、どんくらいするの？」

「そうねえ……今俊くんに食べさせたので、5、600円つてところかしら」

「そんなにするの？ やば、焦って飲み込んだじゃった」

「大丈夫よ。でも、その内本場のを食べさせてあげるわ。そうだ、今度実家に帰るときに、一緒に来るといいわ！」

「え？ 俺、通界許可証持ってないんだけど……」

「それまでに作りましょう！ お父様とお母様に俊くんのこと、紹介したいもの」

「それって完全に——あ、いや」

「？」

まるで結婚前の挨拶みたい、などと思ってしまった俊太は、顔を赤らめて俯く。すると膝の上のフローリアが不思議そうな顔で見上げてきたので、その頭を指先で撫でて誤魔化した。

「それ、果物が材料なんだよね。フローリア食べられるかな」

「食べられると思うわ。うちの倉庫によく妖精が入り込んでたし」

「たべたい！」

「はい。じゃあ、あーんして」

素直に、あくんと口を開けたフロリアの口に、小さくちぎった干しリユクサの蜂蜜漬けを入れてやると、彼女は幸せそうに頬を緩めて咀嚼した。それを見ていたルビーが「ルビーも！」と嫉妬し出したので、彼女にもあげる。すると、どうやらルビーに上げた方が大きかったらしく、フロリアが「もっと！」とねだり始めた。仕方ないので俊太が席を立つてもう皿買ってこくることに。それにアウロラが便乗して、ついでにあれとこれを買ってきてとお願いされ。

とてもではないが、ブルーミングバトルを明日に控えているとは思えない、幸せな光景がそこにあった。

……………

「お祭り」というものが初めてだったセニアは、いつもの数倍活気に溢れた通りの中で、目をぐるぐるさせていた。

「ま、マスター……………」

「大丈夫。離れないようにね」

冬吾はセニアの手をしつかりと引きながら前に進む。セニアははぐれないように必死になっているが、その最中も視線はあっちへ、こっちへと大忙しだ。

「何か興味あるものは？」

「あの赤い、きらきらしたもの」

「りんご飴ね。じゃあ買おう」

どうやらセニアは、キラキラしたものに強い興味を示すらしい。それは生物として当たり前の本能なのかもしれないが、彼女の場合はそれがより顕著だ。

それにしても、このりんご飴は真っ赤で、セニアでなくても見惚れてしまうくらい綺麗だ……と思ったなら、これに使われているのは赤の世界産のリングゴらしい。聞けば、10年ほど前に青の世界から苗木が輸入され、赤の世界に根付いたリングゴの樹が実らせたもののだそうだ。そう考えると、この世界接続20周年祭という節目に偶然にも、

20年間に渡る世界間の関わり合いの歴史の一端を垣間見た気がして、なんだか感動してしまった。なので、冬吾は自分の分と合わせて、2つ購入。

流石にこのまま人ごみの中にいると、セニアが混乱してしまいそうなので、もうしばらくして2人は通りから抜け出し、公園のベンチで気を落ち着けることにした。ここでユーフィリア、テルル、ナナと待ち合わせる約束をしている。

「……甘いです」

「ホントにね。このリンゴね、さっき聞いたんだけど——」

セニアに先ほど聞いた蘊蓄うんちくをそのまま言い聞かせると、彼女は分かったような、分かっているような微妙な反応。それもそうだろう。彼女の活動期間は1年と少し。そんな彼女にいきなり「このりんご飴には20年の歴史が詰まっているのだからして、ありがたく食べること」なんて言われたところで、ピンと来ないのは自明の理だ。それに、冬吾だってまだ16歳。彼自身「自分が生まれるより前」としか認識できない時間の積み重ね、その重みを本当に理解しているとは言えない。

「明日はバトル。今日は少し楽しんだら休んで、バトルはちゃんと終わらせて、明後日は目一杯楽しもうね」

「はい、マスター」

「大きな花火も上がるし、精霊流ししようれいりょうしもするんだって。……って、セニアに精霊流しは分かんないか」

「それは一体、何なのですか?」

「うーん……日本でのこの時期は『お彼岸』って呼ばれててね。先祖信仰なんだけど。死んだご先祖様の魂がこの世に戻ってくると信じられてるんだよ」

「……?」

「それで、精霊流しっていうのは、そうやって戻ってきてくれたご先祖様をあの世に無事に帰ってもらうために、目印になる灯籠を水に流すんだ。本土では川に流すのが一般的だけど、青蘭には大きな河川が1本しかないから、基本的には海に流すんだ」

冬吾は、セニアが全く理解できていないことを承知の上で話を続けた。アンドロイドにとつて『信仰』だの『先祖』だの『魂』など、理解しにくい話だろう。だから、今は聞かせるだけ聞かせておく。理解できるようにするのは、この先の数年後、あるいは数十年後でも構わないのだ。

そんな彼女が返した答えは、ある意味笑ってしまうほど単純なものだった。

「せっかく戻ってくるのに、帰らせてしまうのですか」

「え？」

「かわいそうです。居させてあげれば、いいのに」

「……たしかにね。でも、きつと昔の人は、死んだ魂はあの世に居るべきだって、思ったんじゃないかな」

『あの世』とは、どの世界のことですか？」

「あー……どの世界、か。そういう風に考えたことはなかったなあ。強いて言うなら、この世界の、もつと上の方、とかだったりするのかな……」

「マスターも知らないのですか？」

「多分、それを知ってる人はこの世に1人もいないんじゃないかな」  
「そうなのですか」

まさに幼い子の無邪気な質問攻め、といった感じだ。成長すればするほど、この世はそんなにぼつちりルールが決められているわけではなく、白黒のマーブル複雑な模様であることが分かる。冬吾も今、セニアからそれを教わった。生と死は、それ自体はきつちり分かれているものだとしても、生者と死者、の方はそこまで厳密に分かれていないのかもしれない。だとしたら、昔の人はとても賢いな、などと漠然と思った。実際にどう分かれているのかは別として、曖昧な世界をそういう風に区別するやり方は、少なくとも今の冬吾にはない発想だ。

今は亡き、優しいかった彼の祖父母を思い出し、少しセンチメンタルになってしまった冬吾。それに気付いているのか不明なセニアは、再びりんご飴の処理に戻っている。

なんだか気まずい。そう思っているのは冬吾だけだろうか。

「冬吾さーん、お待たせしました〜」

「あ、りんご飴食べてますの。テルルも欲しいですよ!」

「私たちも、色々買ってきましたよ。セニアちゃん、何か欲しい?」

そんな時、ユーフィリア、テルル、ナナの3人がやってきた。ナイスタイミング、と心の中で感謝した冬吾は、せっかく買った食べかけのりんご飴をテルルに奪われるのだった。

.....

「ごめんね、来てもらっちゃって」

「ううん、いいの。お兄ちゃん今日は忙しいみたいだし」

「どーせみんなチームの方行っちゃってだし、ちよーどいい」

商業地区と隣接する経済・行政地区内にあるコーヒーショップの中で、大村早輝<sup>さき</sup>はやって来た2人にお礼を言った。

1人は黒髪の大和撫子、沙織。もう1人はとても小柄で無表情な樹里だ。沙織が女の子らしい格好で着飾っているのに対し、樹里は半袖と短パンにサンダルと、まるで少年のような格好をしている。

樹里の言う通り、彼女らが住んでいる満月寮の他の1年生は、みんなチームの集まりの方に行ってしまった(希美はアイドルとしてステージに立つ予定だ)。ひねくれ者の樹里は、みんなお祭りだけでもそれには寮でまったりコーヒーを飲もうと思っていたらしく、沙織もそれに付き合うつもりだったそうだが、電話で早輝が誘ったところ、快く応じてくれた。コーヒーショップで待ち合わせしたのは、樹里の指定だ。

「まあ、まったりしたいってのは変わんない。人ごみ、苦手」

「ごめんね、樹里ちゃん。この辺はそこまで騒がしくないし……」

「普段より空いてる。ありがてえ。私、エスプレッソ」

「沙織ちゃんも。来てくれてありがとうね」

「こちらこそ、誘ってくれてありがとう。お祭りの中を通り抜けてきたけど、やっぱり普段と違う雰囲気なの、新鮮でよかったから。……私は、アイスカフェラテにしようっと」

「んー……俺も沙織ちゃんと同じのにしよ。あ、ケーキとか頼んでいいよ。コーヒーも纏めて俺が奢るから」

「ええっ!? わ、悪いよー!」

「やったぜ。じゃあミルフィーユ頼む」

「じゅ、樹里ちゃんっ」

「早輝がいつて言ってるんだから、いつてことよ」

「樹里ちゃんが言うのもアレだけど、ホントに気にしないで。今日来てくれた2人に、俺からのお礼」

「ん、ん〜……じゃ、じゃあ、モンブラン……お願いします」

薄暗い明りに包まれた店の外は、普段なら閑静なオフィス街なのだが、今は祭りの喧噪がここまで届いている。先生方に聞いてみると、今回は10周年の時よりもずっと大きな祭りになっているらしい。

頼んだコーヒーとケーキが届くと、一口コーヒーを味わった後、樹里が「で」と切り出した。

「どうしたの、早輝。なんか相談?」

「あ、やっぱ分かっちゃう?」

「分かる。早輝、自覚している以上に、顔に出るタイプ」

妙に鋭い樹里の指摘に、早輝は困ったように笑いながらケーキを口に運んだ。その様子を見ながら、沙織も便乗してくる。

「ここ最近……じゃ、ないよね。5月くらいからずっと……なんか浮かない、みたいな」

「困ったな。隠すの得意だと思ってたのに」

「やべ、沙織の方が先に気付いてた」

「あれ、そうだったの?」

無表情のままお茶目にペロツと舌を出す樹里。可愛らしいその仕草に和みながら、早輝は言葉を選びながら口を開いた。

「んーとね……なんか最近、俺、置いてかれちゃってるなー、って思ってたさ」

「みんなバトルに出るから?」

「そう。俺だけ、出られないからさ。頑張ってるみんなが、眩しくて」  
早輝はΣのフレイム脳波を持つαドライバーである。が、その脳波

が極めて特殊なため、汎用リンク率が0.1%しかない。ここにいる沙織と樹里もΣフレームのプログレスだが、2人とのリンク率はせいぜい10%といったところで、バトルに出場させることはできない（バトルに出場するためには、最低でも50%のリンク率が必要とされている）。1年生αドライバー3人の中で最も社交的な性格の彼は、まだパートナーのいないΣフレームのプログレスを片っ端から当たり、リンク率を計ってみたが……残念ながら、学園内にリンク率50%を超えるプログレスは存在しなかった。沙織と樹里の10%ですら高い方だったと分かった時は、流石に堪えたものだ。

そんな早輝は、今回のブルーミングバトル出場を免除された。出場させられるプログレスがない以上はどうしようもないのだが、それでもハイネや俊太がバトルのために頑張っているのを見ると、何もする必要のない自分が、酷くどうでもいい存在に思えてならなかったのだ。

「沙織ちゃん、5月に春樹先輩のチームとバトルしたじゃん。あれ、凄かった」

「あ、ありがと。うん……あれは私じゃなくて、みんなとお兄ちゃん  
が、凄かったただだよ」

「最後決めたの、沙織だったじゃん」

「あーいや、そういう実力とかじゃなくてさ。頑張つてて、凄かった  
なって。……俺もなんか、頑張つてみたいって思ってるんだ」

「はえー。で、何頑張るの？」

「それが悩みの種って感じかな」

「……なるほど、それもそっか」

身体を鍛えるとか、勉強を頑張るとかは、今もやっている。ブルーミングバトルの練習に費やされる時間が存在しないのだから、そのくらいはやって当たり前だ。

問題は、その先——αドライバーとして生まれ、その素質を持つているのなら、その方向に進んでみたい。その方向に頑張りたい。そんな思いを、努力という形で昇華させられないのだ。

「もし、さ。ラピユタみたいに、自分の目の前に、運命の相手みたいな

相性抜群のプログラミングが空から降ってきて、その子と一緒に頑張っていく、なんてなったらいいんだけどね。現実ってそんなに甘くないから……今できること、なんかないかなーって、ずっと探してるんだ」「今できる、こと……沙織、なんかある？」

「わ、私？ えっと、映像見て研究する、とか。って、それくらいやってたり……」

「……あ、えと。そうだね。映像は色々見てる」

「だ、だよー。……樹里ちゃんは？」

「ラピユタみたいに、相性のいいプログラミングが空から落っこちて来るまで待つ」

「それ一生叶わない奴だよーね」

「だから、やりたいことやりながら待つ。私だったらコーヒー極める。ていうか、相性いいαドライバーいないから、極めてる」

「……なるほどね。意外とアリ、なのかな。沙織ちゃんだったら？」

「私が極めるなら……お料理、とかかなあ。レパートリーが増えれば、毎日退屈しなさそうだし」

「そういう感じか。うーん……」

「あ、閃いた。実況の練習する。解説役狙い」

「解説役かあ。なかなか斬新——って、なんかズレてるような」

その後もいくつかの提案をされた。もちろん、というとせっかくの提案に失礼だが、残念ながらその中に「これだ！」と思うものは無い。

しかし、2人は真剣に考えてくれていた。それ自体が早輝には——未だにパートナーと呼べる存在がいらない彼にとつては、とても嬉しかった。

提案が出尽くしたところには、3人のケーキの皿もコーヒーカップも空になっていた。

「2人ともありがとうね。追加、なんかいる？」

「わ、私は大丈夫だよ」

「私は飲む。せっかく早輝と会えたから、まだ時間潰す」

「嬉しいけど、その太々しき、なんか羨ましいな」

「そう？ 私は、お世辞とか言わないし、皮肉も言わない。どっちもめ



んどくさいから。だから、まあ……」

「？」

「いいんじゃない？ ブルーミングバトルばっか考えなくたって。α  
ドライバーとして才能無くても、人間は人間じゃん。別の何かでも、  
友達とかパートナー、できるよ。こんな風にさ」

「……！」

「それじゃ、だめなの？」

そう言いながら樹里は、メニューから顔を上げずに隣に座っている  
沙織の肩を叩く。すると、今までずっと早輝について、どうすればい  
いのか悩んでいた沙織はハッと顔を上げ、華が開いたような明るい笑  
顔になった。

「そ、そうだよ！ ね、早輝くん。あんまり思い悩まないで。何かあつ  
たら、私たちのこと、いつでも頼っていいんだからね！」

「……うん、ありがとう。何か今の、ぐつと来た」

「ホント？ じゃあブルーマウンテン頼んでいい？ 自家焙煎で……  
3000円」

「3000円!?! 流石にそれはダメ」

「ちえ。私にしては珍しく、いいこと言っちゃったのに」

メニューで顔を隠して不貞腐れる樹里だったが、その耳が少し赤く  
なっているのに、早輝は気付いてしまった。自分でも恥ずかしいこと  
を言ったと思っっているのだろうか。そんな彼女がなんだか可愛かつ  
たので、彼は頬杖をつきながら言ってみる。

「……俺とあと3回お茶してくれたら、その時に奢ってあげるよ」

「マジ？ やった。……けど、なんかあれね。やつすいナンパみたい。  
エサぶら下げる的な——」

「俺は、樹里ちゃん嫌なら全然構わないんだけどな」

「ゴメンって。お願いします」

……

その夜、各世界の代表が滞在する青蘭島南のホテルのレストラン。

重鎮ばかりが滞在しているため、当然ながらホテル全体が貸し切りになっている。警備も厳重で、物理的にも魔術的にも完璧な防壁が張り巡らされていた。その上階のレストランに、「ロ」の字型に長テーブルが並べられている。

「いやー、ゆっくり話す機会があるってのはいいね☆ でも、ゆっくり食べる時間があるのはもつといい☆」

「これ、どれも美味しいですね♪ いくつか持ち帰って、お留守番の2人とお母様へのお土産にしましょう♪」

その一辺。せっかくの豪勢なディナーを押しつけて、屋台で買ってきたであろう様々なジャンクフードを楽しそうに食べる、黄色と緑色のアンドロイド。白の世界代表、世界の管理者E・G・M・A直属のアンドロイドであるエスナとアルト。

「行儀が悪いぞ、お主ら」

「まあまあ。せっかくの異世界だもの。例え世界の代表であろうと楽しむ権利はあるさ」

「そーそー。超活気あつたよね。私あれよ、めっちゃスーパーボール？ っでの掬ったんよ！」

「それ、変なところに飛ばさないくださいね。会談が始まったら没収します。あと料理の中に入ったら殴ります」

その一辺。アンドロイドらに苦言を呈す長髪の幼女と、鷹揚な態度で眺める老婆。食事そっちのけでスーパーボールを何個も床で跳ねさせている褐色肌に黒翼の天使に、それを半眼で睨む白と黒の女性。黒の世界代表、政治機関『クレイドル』が管理している、世界を支える12の杖の適合者『十二杖』の4人であるアルスメル、テルⅡエマ、ヘカテリエル、エヴァーズ。

「白の世界のお2人は黄と緑、こちらの大天使は赤と青。こういった形で揃うのは、縁起がいいことです」

「あ、あの……ぼ、僕、ここにいていいのかなあ……？」

「こちらの黄色も早く戻ってきてくれれば、世界はずっと安定するのだが。というか向こうに残してきたのがウリエルだけというのも、いささか不安だ」

「が、ガブリエルちゃん？　だ、大丈夫、よ。ウリエルちゃん、『お留守番はまかせろー！』って、張り切ってたもの」

「ふわあ……それが不安なんじゃないのおく？」

その一辺。デイナーを食しながら、どこか遠い目をする藍色の女性と、居心地が悪そうにきよろきよろと周りを見ている長身な男性。目を閉じて考え込んでいる赤い天使に、言葉を並べて彼女の不安を和らげようとする青い天使、そして食事の皿を横にずらして眠そうに突っ伏している桜色の少女。赤の世界代表、『一日』の中の『夜』を司る女神の影アマノリリスとその従騎士ダステイン、最高位天使の中で『愛』を導く大天使ガブリエルと『命』を導くラファエル、そして『一年』の中の『春』を司る女神の影セレナ（セレナの後ろにはザークが控えて、いつでも彼女の不機嫌に対応できるようにスタンバイしていた）。

「して……青の世界は、そなただけかえ？」

「あー……なんか遅れてるって。もう少ししたら着くから」

その一辺。スープを掬いながら困ったように言う男性は、青蘭学園の数学講師であり、教務課の権限者でもある城海斗オースライザー。世界の代表というよりその補佐で、今はその代表本人の到着を待っている。

「それにしても……白の世界の。お主ら、せっかく出されたものを食さないのか？」

「えー？　食べたいものを食べるのが、一番美味しいんだよ☆」

「マナーという話でしょう？」

「大丈夫ですよ♪　ちゃんと後で頂きますから♪」

「何言っても無駄なんじゃないのおく？　だつてえ、セレナたちはともかく、そつちは本当に最強、なんだもんねえ〜」

「これで本当に力のある奴らを連れてきていないというのは、幸いなのか、あるいは……」

「えへ☆　アタシたちのこと、最強って言った☆　でも本当の最強は、会談の場に相応しくないから☆」

「始める前から喧嘩しないでくれよ」

「は〜ん♪」

実力者揃いで、何かが起きれば收拾のしようがない辺同士のやり取

りを見ながら海斗は、あいつ早く来ないかなあ、とぼんやりと思った。それだけ現実離れしている光景なのだ。十二杖から4人、第二座と第三座から女神が1人ずつと四大天使が2人、E・G・M・Aのアンドロイドが2体など、本来は集めようと思っても集まらない——（——というわけには見えないのが、こいつらの恐ろしいところだな）

彼女らは強い。強すぎる。なので、一般の人々が感じる『忙しい』など、彼女らにとっては本当に大したことなんてないのだろう。

特に白の世界のアンドロイドたちは、この場の中でも頭一つ抜けた実力を持っている。彼女らは表向き『E・G・M・Aの直属アンドロイド』という扱いだが、真相は少し違う。厳密に言えば彼女らは『E・G・M・Aの機能を4分割したうちの1体』ずつなのだ。姉妹機として作られたからか、その外見は、カラーリングや髪型が大きく違う以外はそれなりに似ている。しかし、その内に秘める機能は全く異なっていた。

……というか、黒の世界の方、1人足りなくないか？ と海斗がメンバーのリストを頭の中で再確認していると、同じことに気付いたらしいヘカテリエルが声を上げた。

「……あれ？ ってか、ネロっちは？ あの子いないとこっち話にならないじゃん！」

「そういうえば、まだ来ていませんね。大方、家族との触れ合いを楽しんでいるのでしよう」

「あやつらめ……すまぬな、アルマに電話してくる。どうせ一緒におるのじゃろ」

「シヤリオンが聞いたたら、嫌っているこちらにまで来て説教しそうなことだねえ」

黒の世界の代表、魔王女の代理として来たはずのネロ・アンゲルⅡグラディウスがまだ来ていなかった。呆れた表情でレストランの外に向かうアルスメルに、海斗はそつと声を掛けた。

「苦勞を掛けるな、メル」

「今更じゃよ、海斗。気にするでない」

こちららも20年間、パートナーとして絆を育んできたからだろうか。たった一言ずつだったが、お互いに言葉以上の感情を伝え合った。

そんな彼女を尻目に、視線をテーブルへと戻した海斗だったが、すぐに後ろから話し声が聞こえてきた。1人はアルスメルだ。

「つと、長官。それからテオ、ようやく着いたか。遅いぞ」

「申し訳ございません、アルスメル様。こちらはこちらで、手間取ってしまい……」

「長官はどんくさいのだ！ おかげでテオも遅れてしまったのだ！」

「ご、ごめんね、テオドーチエちゃん」

「構わぬ。どうせこちららも1人来ておらんしな。今から電話するところじゃ」

「それは……幸運、ということでもよろしいのでしょうか？」

「そういうことじゃな。ほれ、相方が待ちくたびれておるぞ」

「はい。それでは」

アルスメルと入れ替わりになるようにレストランに入ってきたのは、見目麗しい美女だった。真っ白で長く伸びた髪と、海のように深い青の瞳。凛々しい顔にやや哀しげな表情を浮かべる彼女は、この青蘭を管理している青蘭庁の長官だ。

名前を、布津の守、という。

年齢は不明で、『海を操る』エクシードを持つ、旧い時代から生きるプログラسد。

さらに、その横からエクシード管理課の課長、テオドーチエも姿を現した。

「皆さま、遅れてしまい、大変申し訳ございませんでした」

布津の守は、よく通る声で詫びると、海斗の隣の席に座った（他の世界の代表たちの反応はまちまちで、皆特に気にしていないようだった）。

「ごめんなさい、海斗くん。遅れてしまって……」

「いいって、ふーちゃん。んで、テオも一緒に、後は黒の世界のを待つだけか」

「誰が来てない——って、ネロがないのだ！ またアルマと逢引き

しているのか!? 全く……」

甲高い声を喧しく響かせながら、テオドーチェもその隣に座る。すると、黒の世界の辺から声が上がった。

「あれー？ テオっち、こつちじゃないの？」

「テオは青蘭庁の者として参加するのだ。それはガブリエルも同様なのだ！ おいガブリエル、こつちに来るのだ！」

「ああ、そうする。……ではまた後で」

「あれー☆ アタシたち、アウエーじゃない☆」

テオに大声で呼ばれたガブリエルは、嫌そうな顔をしながらもラファエルに何か耳打ちし、席を立った。それに対して、青の世界のテーブルに白の世界の者が誰も着かないことをエスナが嬉しそうに指摘したが、面倒なのか誰も反応しなかった。アルトですら「しようがないです♪」と楽しげに言って宥めるだけだった。

もうしばらくして、電話を終えたアルスメルが席に戻る——と同時に、『ロ』の字の真ん中に1人の少女が、突如として現れた。ウエーブした金髪に、角と翼と尻尾が生えた長い耳の女性——黒の世界代表、最高統治者である魔女王の代理、ネロ・アングレルグラディウスだ。「遅れましたあ——あ、出るとこミスったわ。ごめんごめん、出るから」

と全く緊張を感じさせない声で囲われたテーブルの外に移動する。その光景を見た海斗は、背中に冷たいものが流れるのを感じながら、インカムを確認する。

「——本条。今、開けたか？」

『いいえ。長官とテオドーチェを迎え入れたので最後です。なぜですか？』

「グラディウスが入ってきた。間違いなく、ホテルの外からだ」

『……私もまだまだですね。師匠の手前、情けない……とりあえず、どこから入ったのかは確認しておきます。無駄でしょうけど』

インカム越しに本条の落胆を聞きながらも……ともあれ、ようやくめんつが揃った。こんなヘンテコな面子で何を始めるのか、それは——

「それでは……全員集まったので、そろそろよろしいでしょうか？」

布津の守が立ち上がり、まず黒の世界のテーブルを見た。

ネロが肉料理を頬張りながら言う。

「はーい。初めていいよ」

次に赤の世界のテーブルを見た。

アマノリリスが姿勢を正しながら言う

「ええ。準備はできています」

最後に白の世界のテーブルを見た。

エスナが焼き鳥を飲み込んでから言う。

「こっちもオツケー☆ 始めちゃって☆」

3人の言葉を聞いた布津の守は一度目を閉じると、哀しげな表情をきりりと引き締めて、宣言した。

「それでは——これより『四<sup>し</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>』を始めます」

時刻は、午前零時。

世界が変わるまで、あと2日。

現在登場しているプログレスとそのエクシードの紹介

氏名、年齢、所属、エクシード名といった順にステータスを並べます。公式キャラは、公式とは異なる設定を重点的に書き、性格とかは……別にいいよね？ ほとんど同じなので。

エクシード名はオリジナルです（公式のは一応知っていますが……）。こういう中二病っぽいので多分作中で出せる機会がないので、ここで書きます。

また、筆者はカードゲームが大好きなので、そういうネタを多めに入れています。

ちなみに、半分以上は私の頭の中の整理を兼ねています。

なお、今回はしばらくぶりのため、大量の新キャラクターの他、既存のキャラクターにもかなりの追記をしています。

……………

#### ■青の世界のプログレス

ひなた みうみ  
日向美海

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《嵐 帝》  
タイラント・エア

「元気がいちばん！」元気が取り柄の女の子。エクシードに目覚めたのは小学5年生の時。

エクシードは公式と同じく風を操る能力。

自覚は無いが他者よりもエクシードが強力なため、レイピア刺突剣型のエクシード兵装『ミストラル』によって制御している。

きしべきおり  
岸部沙織

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《青き炎の守護神壁》  
プロミネンス・フレア



物静かな大和撫子。争いを好まない。エクシードに目覚めたのは僅か4歳の頃。

エクシードは、熱量を持たない青い炎を左腕から発生させ、それを右手で操って味方に纏わせる。この炎《聖域の青き炎》は、これを纏った者が受ける衝撃を激減させる。

御影葵

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年、剣道部

エクシード：《錬粒陣》

ストイックな性格の少女。剣道部に所属。実は女の子っぽいものが好きだったり甘党だったり。凌雅という名前の兄がいるが、いつも手玉に取られているのでライバル心を燃やしている。

エクシードは公式と同じく粒子を操るもの。しかし未熟なため、ただの棒など、簡単な形しか作れない。

那月琉花

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《水神》

ボーイッシュで楽しいことが大好きな少女。ガンマンに憧れているが、武器は水鉄砲。エクシードによって高圧の水の弾丸を打ち出すことができる特別製。

エクシードは水を操る力。『液体の流動操作』『液体の状態変化』『液体の性質変化』の3つに分けられ、後ろに行くほど操作が難しい。

風魔忍

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年、  
ザ・ブレイズ・デイクテイター????

エクシード：《焰皇》

忍者の末裔。語尾に「ゴザル」を付けるといいう、胡散臭い言葉遣いを好む。忍者というだけあって身のこなしは軽く、運動能力に長けている。

エクシードは炎を操る能力。また、エクシードとは別に忍術を扱え

る。

生嶋兔莉子いくしまうりこ

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《リベレーター・オブ・ライフ霊 臣》

童話の姫君のような少女。実際に気弱で、知らない人の前だとおどおどしてしまいが、沢山の動物と触れ合ってきたからか、芯は強い。

エクシードは動物と会話が出来るといふもの。

（最近知ったんですけど、公式によると、この子の名前の読み方って『とりこ』らしいですよ。アプリにも出てなかったし、今まで一切指摘が無かったあたり、誰も知らなかったんでしょうけど。まあ、琉花に『ウリちゃん』って呼ばせちゃってるし、個人的には『うりこ』の方がうりぼうみたいで可愛いと思うので、このままでいきます。）

小鳥遊希美たかなしのぞみ

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《イメージ・コンストラクター不可視の偶像》

アイドル少女。美海とは同じ小学校に通っていた幼馴染同士。公式とは異なり、普段はシニカルでやや擦れた性格（美海のことを「あんた」と呼んだり）。

エクシードは印象操作。そのままだと個人レベルの印象を変えられるが、エクシードの開放が進むと、大勢を対象に取ったり、操作できる印象の幅が広がる。印象操作は拡大にも縮小にも用いることができ、アイドルとして活動している時は拡大によって大勢の視線を惹きつけ、バトルに出る時は逆に縮小させて相手に気付かれにくくする。

古谷樹理ふるやしゆり

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《フオーチュン・ティンバー永き世界樹》

小学生と見紛うレベルの小さな女の子。身長は145センチ程度

と低く、静かな性格のためあまり目立たない。無口だが寂しがり屋なのでよく友達にちよつかいをかけており、みんなからは猫のような小動物的な扱いをされている。口を開けばなんでもずばずば言ってしまう癖があるが、その素直なところがみんなに好かれている。服選びのセンスが無く、面倒なのでいつも少年のような服装。

子供のような見た目に反してかなりのコーヒー好きで、部屋には自前のサイフォンとコーヒーミルが置かれているほど。よく周りにお手製のブレンドコーヒーを振舞うものの、あまり同学年にコーヒー好きがいなかったため、もっぱら振舞うのは先輩方や寮母相手である。

エクシードは「植物の成長を早める」という能力。

New! とおなきみゆき 遠薙深雪

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《有象無象の描き手》ドリーム・リアライザー

静かで引つ込み思案な女の子。絵を描くことが大好きで、いつも絵を描いている。特に油彩画を好んでおり、使用する絵具にも一言あるタイプ。アルマがパトロンとして、彼の家の一室をアトリエとしてもらったので、そこで絵を描いている。幼い頃に行方不明になった双子の妹がいる。

青の世界出身の1年生だが、寮は美海たちの住む満月寮ではなく別の場所。そのため、本編での出番は少なめ。

エクシードは、描いたものを物理的に実体化させる能力。ただしまだ未熟なので、小さなものを描くとすぐに実体化してしまう。そのため、描いても実体化しない風景画を好む。

とうじょうはるか 東条遥

年齢：16歳

所属：青蘭学園高等部2年、青蘭学園風紀委員

エクシード：《煌拳 騎》ライトニング・シヤド

活発な性格の少女。寛容だが、悪の影は見逃さない。

エクシードは拳に光をまとわせて攻撃力を上げるといふもの。口ケツトパンチのように光の拳を打ち出して遠距離攻撃もできる。

神風千鳥 かんなぎちどり

年齢：16歳

所属：青蘭学園高等部2年

エクシード：《御言の葉》ソウル・インカンテーション

ダウナーな性格の少女。青蘭島に生家がある、つまり、珍しい青蘭島出身である。

エクシードは言霊。制御が難しく、意図せず発動してしまうことを防ぐため、普段は使用できないように封印している。呪術的な言霊とは少し違うもの。

蒼月絵麻 そうげつえま

年齢：17歳

所属：青蘭学園高等部2年、青蘭学園生徒会、バスケットボール部

エクシード：《流留錨》サイン・オブ・フオース

間延びした喋り方をする少女。性格ものんびりしていて、いつもニコニコしている。紗夜の妹で、自分の姉は四世界一の姉だと思っている。寮生ではなく、紗夜の家に住居している。

背は低く、体型は子供っぽいため、よく中等部生に間違えられる。しかし、その膂力は凄まじく、自分の身長の70%ほどの高さまでジャンプできる。

蘭の模様が中心に染め抜かれた丸盾を常に持っている。この盾はデルタが作ったもので、彼女のエクシードの影響を遠隔で受けられる仕様になっている。

「力の向きを操作するエクシード」を持つ。盾にこの力を作用させることで、投げた盾を手元に戻ってこさせるようにできる。ただし、強すぎる力は操作しきれない。

(ちなみに、このキャラクターは、設定上どうしても出すことのできない、というか出したくない公式キャラの代役として出ています。誰だか分かるかな?)

東条悠 とうじょうゆう

年齢：17歳

所属：青蘭学園高等部3年、青蘭学園風紀委員

エクシード：《煌刃騎》ライトニング・セイバー

穏やかな性格の少女。遥の姉で、妹を溺愛している。風紀委員長を勤めている。

エクシードは光の剣を作り出せるというもの。複数生成が可能で、それを飛ばして攻撃できる。

蒼月紗夜そうげつさや

年齢：20歳

所属：青蘭大学3年

エクシード：《光輝の纏》ガイド・オブ・ルミナス

物静かな性格の女性。青蘭学園生時代には11代目の生徒会長を務めた（その頃は公式同様ストイックな性格だった）。現在は青蘭大学に通いながら呪術の勉強に励んでいる。かなりの秀才で、3年生に上がったばかりなのに、既に研究室から声がかかっている。絵麻の姉で、本人の前では素っ気ない風を装いながらも、実際には溺愛している。本人には気づかれている。

エクシードは光を操るといふもの。東条姉妹のものとは違い、物理的な攻撃力を持たないが、相手の視界から光を奪ったり、歪ませたりと応用を効かせれば非常に恐ろしい力となる。本人が修得している呪術も含め、力で押し切るのではなく、幾重にも策を張り巡らせて相手を翻弄する策士タイプの闘い方を好むが、その気になれば力押しも可能。

成瀬朝子なるせあきこ

年齢：20歳

所属：青蘭大学3年

エクシード：《韋儼天》ミルティエアデイス

姉御肌な性格の女性。おちゃらけながらもどこか毅然としていて、頼りがいがある。高校生時代には生徒会副会長を務め、紗夜の補佐をしていた。また、当時は陸上部に所属していた。

エクシードは脚力の増強。空戦ユニットを積んだアンドロイドとも殴り合えるほど高く跳躍できる。現在はエクシード抜きで闘えるように特訓している。

志賀龍姫しがりゆうき

年齢：28歳

所属：青蘭学園教務課・養護教諭

エクシード：《神聖なる慈愛》ホーリー・ラブ

天使のような包容力を持つ女性。誰に対しても優しく接するため、多くの生徒に慕われている。「龍ちゃん」という愛称で親しまれているが、学生時代は自分の名前が厳しくて嫌いだった。

エクシードは高速治癒。青蘭でのブルーミングバトルがかなり安全と言われるのは、このエクシードの存在が大きい。

本条文香ほんじょうふみか

年齢：28歳

所属：青蘭学園教務課・数学教師

エクシード：《壁礫》ウォール・ブロック

子供のような外見の教師。何に対しても動じず、あらゆる面で淡々としたキャラ。そのくせやけに茶目つきがあったり、結構変人である。人付き合いは良く、生徒の相談にも積極的に乗る。年齢から分かる通り、龍姫とは青蘭学園で同期。「文ちゃん」「文先生」という愛称で親しまれている。青蘭学園で3代目の生徒会長を務めた。

エクシードは結界を張る能力。呪術や魔術によるものとは少し性質が異なり、これらを巧みに組み合わせることで相手を隔離することが可能。

New! 雨宮雫あまみやしずく

年齢：29歳

所属：青蘭庁執行部・魔術犯罪捜査課

エクシード：《薔雨郷》エテツア

雨に濡れたように艶やかな黒髪の女性。静かな性格だが、時折お茶目。学生時代はエクシードを制御できておらず、そのせいで自暴自棄になっていた。雄馬の1年先輩。性格は正反対ながら、高飛車なシャーリーの親友。

エクシードは自分の周囲に雨を降らせる能力。だが今は青蘭諸島を丸ごと効果範囲に収めるほど成長している。また、この能力で降ら

せた雨には魔力を溶かし込む性質があり、そのせいで黒の世界と赤の世界から渡航禁止にされてしまった（インフラに魔力が組み込まれており、彼女のエクシードで雨が降ればそれが一挙に崩壊してしまうから）。その影響力はすさまじく、一説には彼女が青蘭にいるだけで、黒の世界は青の世界に攻め込んだとしても勝ち目がないと言われるほど。普段から持っている黒い傘は『雨矢酉』<sup>あまやどり</sup>という名前のエクシード兵装。

New！ 久遠<sup>くおん</sup>すがさ

年齢：27歳

所属：青蘭庁執行部・魔術犯罪捜査課

エクシード：《不触炎<sup>マシリシ</sup>》

とても成人しているようには見えなくらい幼げな体躯の女性。臆病でいつも周囲を警戒しているが、動くとなると急に大胆。雄馬の1年後輩で、周囲からは『すがちゃん』と呼ばれている。

エクシードは、自らの存在感を希釈する能力。希美のそれよりも汎用性が低いが、能力の絶対値は希美よりも遥かに高く、誰にも気付かずに行動できる。加えて彼女は『呪術による隠形』『透明化する魔法』を習得している上に『物体をすり抜けられるフェーズシフター』を装備しており、これらを併用することで、事実上この世に存在しない状態で行動することができる。学生時代はこれを制御できておらず、このエクシードを使用すると自意識が吹き飛んでしまうという副作用を克服できていなかったため、暴走した途端に意識を失い、気付いた時にはどこか知らない場所にいる、ということが何度もあった。

岸部<sup>きしべ</sup>アイ

年齢：15歳

所属：青蘭学園教務課

エクシード：《銀色<sup>ミリアルディア</sup>の軍刃》

岸部雄馬に付き従う謎の少女。感情に乏しいが、ドーナツを始めとするお菓子には異常なほどの執着心を見せる。

元々は、今ある異世界とのどれとも異なる別の世界に住んでおり、そこで洗脳された上に人体改造を受け、殺人マシンのように働かさ

れていた。現在は洗脳が解かれ、白の世界の技術によって身体も自由になり、初めて『自分』というものに向き合っている。

エクシードは、投げナイフをいくつも生み出す能力。

New! 青山幸一あおやまさち桜丸さくらまる

年齢：不明

所属：青蘭学園教務課

エクシード：《ウインド・ギフト天風の縛り》

ウエーブした金髪にグラマラスな体系の、とても日本人とは思えない女性。ほんわかした性格で、言葉が常にまったりと間延びしている。岸部雄馬の部下にして護法童子。彼が学生時代に下して自らの式神に加えた。

エクシードは美海と似ていて、風を操る能力。

New! 布津ふつの守かみ

年齢：不明

所属：青蘭庁長官

エクシード：《あらうみ荒海の太守たいしゆ》

銀髪で長身の、青蘭庁の長官を務めるプログレス。物静かな雰囲気、滅多に人前には現れない引っ込み思案でもある。

エクシードは、海を操る能力。

New! サファイア

年齢：不明

所属：不明

エクシード：不明

美海と兎莉子が出会った謎の少女。艶やかな黒髪にスポーティでボーイッシュな格好が特徴的。性格は落ち着いていて、異常に警戒心が強いルクスをそばに置いているという不思議な特性を持っている。

.....

### ■黒の世界のプログレス

黒の世界編では、出身も書きましょう。ちなみに苗字は、公式で付いている子以外は全部オリジナルです。『家系』というものがひとつ



大事な要素になるので、付けました。あんまり気にしなくていいです。

ソフィーナ・アルハゼン

出身：魔族家系アルハゼン分家

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《グリーディ・ハンド》

ツインテールが特徴のツンデレ天才魔族。黒の世界の最高統治者である『魔女王』の直弟子。

エクシードは、右手に望む物を引き寄せる能力。

リゼリツタ・ナイトローゼ

出身：魔族家系ナイトローゼ家

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《夜薔薇の輪舞》

ツインテールの魔族。超巨乳で、妖艶な性格。自分がエロいと自覚しているタイプ。ソフィーナの影に隠れがちだが、こちらも優秀な魔術師の卵である。

エクシードは、バラを使用した魔術の効果を促進するという特殊な能力。このエクシードを活かすため、彼女は独自にバラの研究をしている。別の世界のバラにも興味津々なようだ。

New! クレア・プロスペキア

出身：魔族家系プロスペキア家

年齢：15歳

所属：青蘭学園高等部1年

エクシード：《三千世界水晶眼》

静かな性格の魔族。自信家だが時々打たれ弱いところがある。

エクシードは未来視の能力。ただし、制御が上手くいっていないせいか並行世界の未来を拾ってしまうこともあり、そこまで正確ではなく、本人も辟易している。

カサンドラ・サブナック

出身：魔族家系サブナツク家  
年齢：16歳

所属：青蘭学園高等部2年

エクシード：《アマデウスの真翼》

銀髪に褐色肌の魔族。紫色の奇妙に捻れた角が生えている。何かとハイテンションで、美しいものに目がなく、いつも「美しい」「綺麗」「かっこいい」を連発している。ただし、自分の容姿には全く自信がない。

エクシードは、魔術を特殊な膜で包み込み、遠隔地へと飛ばすことが出来る能力。エクシードに関しては天才で、全く修練なしで完璧に扱える。ただし本人は魔法を使えないため、持て余している。

マリオン・マリネール

出身：エルフ家系マリネール家

年齢：17歳

所属：青蘭学園高等部3年、青蘭学園風紀員副委員

エクシード名：《フリテイラリア王の華炎》

黒髪ロングのエルフ族の少女。純系エルフには珍しい黒髪の家系。体術に秀で、特に足技が得意。勝気な性格だが、その反面魔術があまり得意ではなく、自分よりも魔術が遥かに得意な妹を愛すると共に、密かな劣等感を抱いている。

エクシードは、四肢に深く濃い紫色の炎を纏わせるというもの。用途は様々だが、彼女は単純な魔術によって身体強化に用いる。

New! アビー・カミュオン

出身：魔族家系カミュオン家

年齢：14歳

所属：青蘭学園中等部2年

エクシード：《いんゴグマゴグの隕》

ブロンドの髪の魔族少女。セニアのルームメイトかつ、アルマやハインエの実の妹。今のところは本編未登場。好奇心旺盛で、あらゆるものに興味を示すという点ではセニアと非常に相性の良いコンビ。

エクシードは少々複雑だが『投げたものに巨大な衝撃を付加する』

という能力。その気になれば、放り投げた石ころが落下する瞬間に隕石レベルの衝撃を付加することも可能だが、未熟ゆえに制御できていないため、今は封印し、アルマが作成した疑似空間の中で練習している。

New! クルキアータ

出身：無し

年齢：3歳

所属：青蘭学園教務課

エクシード：《ルキオラ・ヘクト・アイ》

魔王が水晶を削り出して作成したドール。身長72センチ。高度な意志を持ち、常に何かを探求している。アルマの家に居候していて、彼の相棒のように振る舞う。ひねくれた性格の持ち主で、セリフを全て疑問形で閉じる癖がある。

エクシードは、物事の過程を飛ばして結論を知るという能力。とはいえ彼女の探求心はどちらかといえばその『飛ばした過程』にこそ向けられており、結論を知った上で過程を辿りたがる。製作者の性質のせいか、恋愛感情の過程だけは飛ばすことができない。

なお公式設定では、彼女の持っている水晶の傘が『ミステリオ』という名前で、しかも喋っていました。アルマの相手になるにあたり、お喋りキャラはいらないと思ったのでオミットしました。ご容赦ください。

アルスメル

出身：不明

年齢：不明

所属：青蘭学園教務課・化学教師

エクシード：《深煌紗しんおうさ》

まるで子供のような見た目の魔術師。年齢は不明。種族は人間であるらしい。強大な魔術師であり至上の錬金術師だが、この世界に来る際に、「錬金術を、黒の世界の概念とは異なる角度から見た物」つまり化学に興味を持ち、独学で極めてしまったため教師になった。巨大な図書館を管理している。

黒の世界における『十二杖』<sup>じゅうにじょう</sup>と呼ばれる杖を管理している魔術師の1人。彼女は『砂塵』の相を持つ『錬砂聖杖セフィロト』を所有している。

エクシードは、あらゆる物体を粒子化・再錬成出来るというもの。その応用で錬金術の研究進展に大きく貢献した。その性質から、実は葵のエクシードに興味を抱いているらしい。

New! アリサ・マイネル

出身：人間家系マイネル家

年齢：30歳

所属：青蘭庁執行部・魔術犯罪捜査課

エクシード：『マニニューバー』

ギャルのように派手な格好をした女性。性格も軽く、とてもではないが執行部に所属する者とは思えない。しかしその実力は極めて高く、雫と並んで広域捜査の要となる魔捜官である。青蘭学園の初代生徒会長を務めた、紛れもない実力者。

エクシードは、見えない糸で物体を操るといふもの。操作力はそこまで強くない（人間などの生物を操作するなどのもつての外。人が操縦している車すら操作できない）が、『同時操作が可能な対象の数』と『操作可能な範囲』はどちらも必ずば抜けており、同時に100以上の対象を、青蘭諸島全域に渡って操作することができる。そのため、彼女に操作されて情報を収集する用の人形を大量に配置しており、それらを操ることで青蘭中を捜査することができる。

妹がおり、彼女も同じようなエクシードを持っているが、彼女は強い操作力を得た代わりに上記のような数と範囲の特徴を持たない。

ジル・マカリスター

出身：魔族家系マカリスター家

年齢：32歳

所属：レストラン『ノロック』従業員

エクシード：『スヴァフルラーメの刃』

銀髪にグラマラスな身体つきの美女。穏やかで余裕のある性格だが、学生時代はエクシードの問題から、チームに入れてくれるαドラ

イバーがおらず、塞ぎ込みがちだった。

エクシードは、刃に魔術を掛けやすくなり、更にその効果を増幅させるというもの。実戦では通常では難しい属性の付与だったり、逆に相手の刃に呪いを掛けたり、とトリッキーな活躍ができるが、当時はブルーミングバトルの治癒システムが整っておらず、刀剣の類は持ち込み厳禁だったため、エクシードがまるで役に立たなかった。

New! アムベル・マカリスター

出身：魔族家系マカリスター家

年齢：54歳

所属：青蘭庁機動隊

エクシード：《ヴァーリの氷柱》

銀髪にグラマラスな身体つきの美女。ジルの姉。機動隊の中でもプログレスを集めた部隊の隊長を務める実戦派のプログレス。常に落ち着いているが、生来の好奇心の強さは隠しきれない。妹であるジルを溺愛しているもの、お互い大人になったのでスキンシップは控えている。

エクシードは氷を操る能力。長い年月を生きているため、それと共に成長してきたエクシードも非常に強力。

New! テオドーチェ・テルマギア

出身：魔族

年齢：不詳

所属：青蘭庁学園運営部・エクシード管理課

エクシード：《アンセスター・アンセム》

十代前半に見えるくらい幼い体躯の魔族女性。性格もワガママさが際立つものの、エクシード管理課の課長としての威厳はしっかり持っている。苗字の『テルマギア』は彼女が勝手に名乗っているものであり、本当の出身は不明。

元々はクレイドルの高位の魔術師だったが、青蘭との交流の際に青蘭庁に出自した。『十二杖』になる素質を持っているが、杖は所持していない。その理由は、十二杖のうちの特殊な2本を除く10本全てに適性があったため。彼女は十二杖のいずれかに欠員が出て、その杖の

所有者がいなくなってしまう場合に、新しい適合者が見つかるまで杖を預かるという、ある意味で重要な役割を持っている。

エクシードは、音を通して事象を操る能力。適切な音があればどんな事象でも操作可能であり、自分が出すことのできるあらゆる音を知り尽くしている他、身の回りのものや持ち運びできる楽器などを使つて音を発し、巧みに立ち回る。

New! ヘカテリエル

出身：黒の世界・天使

年齢：不詳

所属：クレイドル

エクシード：不明

『十二杖』の1人。黒の世界における『天使』の長たる女性（赤の世界のそれとは若干異なる性質を持つ）。だがそんな威厳はどこへやら、軽めの性格と強い好奇心を持っており、世界中を飛び回っては人助けに精を出す変わり者。そうして助けた先で自分が実力を認められた相手に自分の羽根を1枚渡す癖があり、それを使えば彼女を呼び出すことができる。

所持しているのは《闇夜》の相を持つ『梓闇獄杖トリニティ』。

New! テル||エマ

出身：龍族

年齢：不詳

所属：クレイドル

エクシード：不明

『十二杖』の1人。十二杖で3番目の古参で、世界の端で静かに暮らす龍族のおばあちゃん。朗らかな性格で誰にでも寛容。今は十二杖で最もまともな人物と言われているが、若い頃の影響力は途轍もないものだったらしい。

所持しているのは《空間》の相を持つ『空創龍杖スカイヘキサ』。

このままだと一生出てこないのここで明かすと、本条は青蘭学園卒業後、一時期彼女に師事し、結界術を習っていたことがあります。

New! エヴァーズ

出身：不明

年齢：不詳

所属：クレイドル

エクシード：不明

『十二杖』の1人。十二杖の中では新参の方。白と黒が入り混じったような格好をしているが、何事にも白黒はつきりつけないと気が済まない性格。やや怒りっぽく、中途半端なものを見るとすぐにイライラく。

人間のような姿を持つが種族は不明で、魔王に匹敵するほどの魔力を持つ。

十二杖としては極めて特異的な性質を持っており、同時に2本の杖を管理している。所持しているのは《黒錠》の相を持つ『審黒杖クロス』と《白錠》の相を持つ『白理杖ヘヴン』。彼女がこの2本に適性がなければ、そのどちらかはテオドーチェに渡っていた。

New! ネロ・アンゲルⅡグラディウス

出身：人間家系グラディウス家

年齢：28歳

所属：クレイドル

エクシード：《ネロの魔光兵》

十二杖ではないものの、なぜかクレイドルの非常に高位な立場にいる女性。性格はややダウンナーで、何かと面倒くさがり。アルマの同郷の幼馴染で、将来を誓い合った仲。今はお互いに忙しく滅多に会えないが、一度会えば永遠にラブラブしている。

何よりも特徴的なのはその容姿。人間の両親から産まれたにも関わらず、エルフ族のような長い耳、魔族のような角、精霊のような羽、龍族のような尻尾、吸血鬼のような牙が全て揃ってしまっている。学生時代はそれで非常に苦労したが、今は吹っ切れている。なお、エヴァーズと同じく魔王に匹敵するほどの魔力を持つ才女。クレイドルにいたソフィーナの世話もしていた（ソフィーナも同郷の出身なので、彼女にとっては幼馴染の妹分といったところ）。

エクシードは物事の問題を書き換える能力。

.....

■赤の世界のプログレス

こちらにも出身込みで書きます。

アウロラ・エオース

出身：人間族家系エオース家

年齢：16歳

所属：青蘭学園高等部2年

エクシード：《暁の極光》  
ドリン・イン・ザ・ヴァーミリオン

高校生離れしたグラマーな体型ののんびりおっとりさん。優しく、親しみやすいため、多くの生徒と仲が良い。身長が170センチとかなり高く、相方の後輩αドライバーよりも10センチ以上身長が高いのが少し悩み。

エクシードは、オーロラのような障壁を生み出す力。それだけではバトルの役に立てないため、現在は基礎魔術の専科を取って、少しでも役に立てるようにがんばっている。

フローリア

出身：赤の世界・豊穡の女神の大森林

年齢：16歳

所属：特になし（赤の世界から来た学生用の寮・文月寮で暮らしている）

エクシード：《繚乱華》  
ブルーミング・ストーム

人間と同じレベルの知能を持つ上級妖精。しかし妖精特有のイタズラ好きさはそのまま。綺麗なもの、特に花が大好きで、フラフラと飛び回っては綺麗なものを探している。本人は生まれてからの年数など記憶していないが、実はアウロラと同じ年である。花の妖精にしてはかなりの長寿。

エクシードは、植物の種から即座に花を咲かせる、という、かなり特殊なもの。彼女は花を使った魔法が得意なため、ポシエットにはいつも沢山の花の種が入っている。しかし、それは別として花を育てるのも大好き。文月寮の花壇の面倒は彼女が見ている。エクシードの



探求により、種から発生させられるのは花だけでなく、葉や茎や根も可能だということが判明した。

ルビー

出身：赤の世界・秋嵐の女神の山麓

年齢：16歳

所属：特になし（フローリアと同じ）

エクシード：《紅<sup>ラ</sup>き宝<sup>ト</sup>玉<sup>ラ</sup>の解<sup>ナ</sup>放<sup>ジュ</sup>者》

フローリアと同じく上級妖精。フローリアよりは幾分か大人びているが、やはり妖精らしい部分はそのまま。ルビーの鉱脈のそばで発生した後、そのまま森に住み着き、そこにいた最上級妖精から魔法を教わっていた。こちらでも自覚はないがアウロラと同じ年。

エクシードは、紅玉からオーラを発生させる力。そのままではあまり役に立たないが、彼女は魔法が使えるため、そのオーラを魔力に変換して戦う。そのため、いつもルビーでできたブローチを身につけている。

レミエル・ハイトマン

出身：赤の世界

年齢：14歳

所属：青蘭学園中等部3年

エクシード：《綺<sup>き</sup>界<sup>かい</sup>蹟<sup>せき</sup>》

右肩にしか翼がなく、左目に十字架が刻まれた天使。その身体的な特徴のせいで生まれた頃からいじめられてきたが、4歳の頃に元々住んでいた場所を脱走し、運良く1人の青年と女神に拾われた。生まれた時からいじめられていたせいで、引っ込み思案でマイナス思考だが、現在は改善されつつある。天使に親はいないため、本来なら無いはずの苗字は、今の保護者の苗字を便宜的に借りて使っている。

エクシードは、無いはずの左翼が薄黄色の光で顕<sup>あらわ</sup>れ、それを操ることが出来るという力。

エルエル・ハイトマン

出身：赤の世界

年齢：14歳

所属：青蘭学園中等部3年

エクシード：《経継絆》  
エールフレンド

元氣いっぱいな新米天使。誰とでも友達になれてしまうような気さくな性格だが、悪人は嫌う。レミエルと同じ保護者で、苗字も同様な関係だが、実は過去に翼をめぐつて大喧嘩したことがある。12歳の時に今の保護者の元に預けられた。レミエルとは姉妹のような関係だが、実は過去に翼をめぐつて大喧嘩したことがある。

エクシードは、絆を結んだ友達のエクシードを借りられるという特異極まる力。技量が足りないと言われ強力なエクシードは使いこなせない。エクシードレベルが上がると、同時に行使できるエクシードの数が増えるが、当然ながら相応の技量を求められる。

New！ クラリス・エーデルライト

出身：人間家系エーデルライト家

年齢：17歳

所属：青蘭学園高等部3年、青蘭学園生徒会、剣道部

エクシード：《剣の舞》  
つひま

正義感の強い、きりりとした少女。青蘭学園生徒会副会長であると同時に、剣道部の主将も務めている。後天的に天使の性質を与えられた珍しい人物で、主であるラファエルには頭が上がらない。厳格そうに見えて、プライベートはそこそこ自由人。

エクシードは、剣を自在に操る能力。エクシードレベルが上昇すると、同時に操作できる剣の数が増加するとともに、操作できる範囲が拡大される。なお、『剣』といっても刃が無ければならないというわけではなく、木剣でも操作可能。ブルーミングバトルはある程度の安全基準を満たした武器のみ持ち込み可能なので、予備も込みで木剣を10振りほど持ち込む。

New！ ミステイカ

出身：赤の世界・天使

年齢：19歳

所属：青蘭庁執行部・魔術犯罪捜査課

エクシード：《皇 梁》  
スパークル・カリゴ

擦れた性格の天使。外見は中学生のようだが、立派な魔捜官。赤の

世界出身の天使でありながら、闇の中の祈りから生まれたため黒い翼を持つ（墮天使ではない）。翼の雨覆いの部分に亜麻色の毛が生えており、それがライオンの鬣たてがみに見えることから『獅天使』エンジェレオンの異名を持つ。

紗夜の1年後輩で、学生時代は授業をサボったり行っただけではない場所に行ったりと、典型的な不良生徒だった。そんな彼女を、当時生徒会副会長だった紗夜が徹底的に構い倒したため彼女を鬱陶しく思い、最終的には決闘するほど対立したが、それが終わった後は紗夜が自分に向けてくれていた愛情に気付き、素直な学生になった。それでも擦れた雰囲気は変わらなかったが、紗夜の推薦で生徒会に入ってしまった、学園のために奔走する。最終的に紗夜から生徒会長を任せられ、生徒らもそれを歓迎したため、12代目の青蘭学園生徒会長になった。

エクシードは金色の霧を発生させるもの。そのままだとほぼ無害だが、濃い部分には物理的な干渉力が発生する他、自分の身体を霧に溶かして霧の状態で移動することもできる。

New! アーシア・アツシユフィールド

出身：人間家系アツシユフィールド家

年齢：24歳

所属：青蘭庁機動隊

エクシード：《オール・イズ・アツシユ全ては灰に》

銀髪が美しい美女。かっちりとした武人のような性格。この若さでアムベルの右腕となる副隊長として前線に立つ実力派のプログレス。学生時代には8代目の青蘭学園生徒会長を務めた。

家系が少々特殊で、妖精の母と人間の父を持つ。姉と兄がおり、母方の姉は純粋な妖精で、父方の兄は純粋な人間。姉は赤の世界・秋嵐の山麓に住んでおり、兄は『陽光』の女神・アロティーナの影の従騎士を務めている。

エクシードは、自分が傷つけたものを灰に変えてしまうというもの。無機物ほどエクシードが通りやすい一方、生物を灰にするのは難しい。とはいえ、万が一にも暴走すると、受けた側はただでは済まないため、エクシードの使用が前提となるブルーミングバトルには出た

ことがない。ただし、剣技だけでも他のプロGRESを圧倒できるだけの実力は備えている。

彼女の兄はアーサー・アツシユフィールドという名前で、雄馬と同期の青蘭学園生です。

New! シャーリイ・イルダ

出身：人間家系イルダ家

年齢：29歳

所属：鐘赤島・轟雨の教会

エクシード：《驚雷の槌》

高飛車な性格のシスター。スレンダーな長身と金髪が特徴的。今はストリートヘアーだが、学生時代はお嬢様らしくロールしていた。ワガママなどところがあるが、意外にも聞き上手で、誰かの相談を受ける度に破天荒な解決方法を思い付いては、後先考えずに実行してしまう。困っている人を見過ごせない性分で、学園在籍時はムードメーカー兼トラブルメーカーだった。そんな彼女は青蘭学園の2代目の生徒会長を務めるほどのリーダーシップを持っている。

エクシードは雷を発生させる能力。歴代の青蘭学園生で最も高い攻撃力を持っており、未だに更新されていない。しかも、轟雨の女神スコルの加護を受けるようになってから、その威力はさらに増大している。一撃の威力は全世界のプロGRES中でもトップ5に入るほど。また、同い年で雨を降らせる能力を持つ雨宮雫とは大親友で、彼女には副生徒会長を務めさせていた。

New! ガブリエラ

出身：赤の世界・大天使

年齢：不明

所属：四大天使、青蘭庁・航空管制局

エクシード：《境界蹟》

赤の世界における四大天使の一角で『愛導』を司る。赤い瞳に十字が刻まれている。口調は堅苦しいが、性格は愛に満ち溢れており、全てを愛さずにはいられない。天使には睡眠が不要なので、航空管制局の局長として働きながら赤の世界で天使を導く役割もすっかりと果

たしている。本名は『ガブリエル』。

New! スコル

出身：赤の世界・女神の影

年齢：13歳

所属：鐘赤島・轟雨の教会

エクシード：《レイン・イン・ザ・アブリコット雨の天幕》

虹の柱・第三座の女神の石柱で、『轟雨』を司る女神の影。無邪気な性格で好奇心が強いが、やや臆病で人見知り。転生したばかりの影で、まだ本体（大本となる女神の概念）と合一していない、非常に未熟な女神の影である。不機嫌になると周囲の天候が荒れる。

New! セレナ

出身：赤の世界・女神の影

年齢：不明

所属：虹の柱

エクシード：《スプリング・イン・ザ・ピーチ春の天窓》

虹の柱・第三座の女神の石柱で、『春眠』を司る女神の影。肩書の通りとにかく眠がりで、1日の7割は眠っている。性格はとにかくのんびりまったりで、彼女に任せると何も事が進まない。誰に対しても寛容な一方で、不機嫌になると周囲に睡眠導入効果のある粉を撒き散らす。

New! ララエル

出身：赤の世界・天使

年齢：不明

所属：青蘭学園教務課・家庭科教師

エクシード：《あいこくいん愛の刻印》

青蘭学園の教師を務める天使。ガブリエラの直属の部下で、『愛刻の天使』と呼ばれる。虫も殺せないほどやさしい性格で、生徒からも好かれている。その一方で、大天使直属の部下に選ばれるだけの実力も持ち合わせている。

New! アマノリリス

出身：赤の世界・女神の影

年齢：不明

所属：虹の柱

エクシード：《宵ナイト・イン・ザ・クリムゾンの御簾》

虹の柱・第二座（第一座の女神は概念的なもので、事実上の最高位）の女神の石柱で、『宵闇』を司る女神の影。たおやかな性格で、何事にも動じない芯を持っている。影である彼女は、自身の領域である『宵闇の都』で宿屋を営んでおり、その評判は非常に高く、異世界からの来訪者も多い。

.....

### ■ 白の世界

固有名称、バイタルコード（BC）あるいはタイプコード（TC）やシステムコード（SC）、プロダクトコード（PC）の順番に書きます。あと年齢は稼働期間と同義です。

セニア

BC：Ω46

PC：OHP—232Ω

年齢：5歳

所属：青蘭学園中等部1年

エクシード：《四六式ブルム・エクス・マキナ型亜空間連結機構》

5歳だが、内4年間は凍結されていたため、実質生まれたばかりのアンドロイド。常識などを何も知らないため、マスターなど彼女の周りの人は手を焼かされている。あらゆるものに興味を示すが、少しものを覚えてきた最近では小動物が大好きらしい。

エクシードは、自らの支配下にある異相空間領域内に物体を格納・搬出できるといふもの。エクシードレベルが上がると、アクセスできる領域の深度が上がり、同時に取り出しておける装備の数も増える。格納方式はスタック式先入れ後出し。一度入れた装備を再利用するのは早いですが、前に入れていたものを出すのに時間がかかる。

ユーフィリア

BC：Ω00

PC : OHP | 4628

年齢 : 不明

所属 : 青蘭学園高等部2年

エクシード : 《セラフィック・オルタナティブ・アップメント三六式神聖炎翼機装》

いつも笑顔で優しいがどこか掴めない、ミステリアスな性格の美女。謎多き存在。セニアのことを時々「ママ」と呼んだりする。

エクシードは、特殊な機関から青白い炎を発生させるというもの。この炎は熱を持たない純粋なエネルギーの発露であり、様々な技に転用することができる。

カレン

BC : Ω33

PC : OHP | 202

年齢 : 10歳

所属 : 青蘭学園高等部2年

エクシード : 《デイストーション・ムーブメント三三式歪曲空間渡航機装》

無表情でクールな美女。あまり物事に頓着しない性格だが、セニアのことだけは溺愛している。ただし、公式レベルの溺愛ではない。あくまで、少し仲の良すぎる姉妹程度。心の中では、セニアにはちゃんと一人前になって欲しいと思っている。

エクシードは、捻じ曲げた空間の中を移動することで、擬似的な瞬間移動を行うことができるというもの。エクシードレベルが上がると、指定した空間を歪ませて、圧力をかけることができるようになる。

テルル

BC : Σ52

PC : FBT | SS

年齢 : 8歳

所属 : 青蘭学園高等部2年

エクシード : 《マキシマム・ガントレット五二式衝撃増幅手甲》

ツインテールのアンドロイド。丁寧な言葉遣いながら好戦的で、エネルギー消費が大きいためにかく大食らいである。お小遣いのほとんどがおやつ代になっているほど。また、作中でも描かれていると

おり膂力が高く、エクシード抜きでも驚異。

セレンという姉、というか同型アンドロイドがいる。わずかにあちらの方が先に活動を開始したので姉となっているが、テルル本人は「テルルはセレンよりも強いからテルルの方が姉」と言い張って聞かない。

エクシードは、自分とアクセスしている専用の箆手が物体を殴った時、その衝撃を増幅させることができる力。ただし、液体相手だと増幅率が落ちる。

ナナ

TC : MU | 21

PC : E L S P | 005

年齢 : 11歳

所属 : 青蘭学園高等部2年

エクシード : 《エマーシエンシー・ウオードニ一式救急救命機装》

おっとりした性格のナースタイプアンドロイド。そのくせ血液を見るのが苦手という致命的な弱点の持ち主。人間の治療もアンドロイドの修理も一応両方ともこなせる。公式の注射したがりがキヤラは、残念ながらオミットしました。

エクシードは、治療に必要な器具を亜空間から呼び出すというもの。また、治療器具とシンクロしてより高い効果を発揮できる。

ステラ

BC : Q77

PC : G P A | 008

年齢 : 8歳

所属 : 青蘭学園高等部2年、青蘭学園生徒会

エクシード : 《ゴースト・バスターズ七七式加速強襲兵装》

クールな性格のアンドロイド。いつも無表情だが、とにかく速さを求めている。ただし、「速さ」が単純な速度というわけではないことは理解しており、その先を探している。

「反射神経と膂力が鍛えられる」という理由でバスケットボール部に所属している。絵麻とはライバルであり、数少ない親友。ちなみ



に、生徒会に入った理由は「絵麻が入ると言ったから」である。

エクシードは「自分の速度を上昇させる」というもの。通常では思考が加速するが、エクシードレベルが上昇すると身体速度も上昇させられる。また、薄型のブースターを全身に散りばめた特殊兵装を持っている。

エミルIIアンナ

BC：Q11

PC：MAP-003

年齢：7歳

所属：青蘭学園高等部3年、青蘭学園生徒会

エクシード：《マガリア・クロス・ムーブメント十一式魔導調律機関》

現青蘭学園生徒会長。ほんわかな性格の魔導アンドロイド。生徒会長になるほどのしつかり者だが、結構な甘えん坊で、他者とのスキンシップに寛容。生徒会の雰囲気や学園全体に伝播するため、現在は柔らかい雰囲気になっている(過去には、かなり元気な生徒会長が、学園そのものを活発化させていたこともある)。

作られた当初は、エクシードに目覚めたものの、魔術を上手く使えないことができず、落ちこぼれと言われていた。だが、青蘭学園に入学すると同時に多くの人と触れ合い、自身を持つことができたため、真の実力を発揮できるようになった。

エクシードは魔力を白く輝く糸状に織り上げるといふもの。彼女はこの糸状になった魔力を使って、ファイリグリー線条細工のような魔術式を瞬時に組み上げることが出来る。その魔術式は非常に美しいと評判。

New! ラウラ

BC：Q0

PC：PPT-467

年齢：14歳

所属：青蘭学園教務課

エクシード：《ホーグ百式連立狙撃眼》

デルタに仕えている、いつも無表情なアンドロイド。性格は幼く、好奇心旺盛で、とにかく甘えん坊。しかし、その年齢は14歳という

ことで、青の世界で活動しているアンドロイドとしては最年長に近いベテラン。

エクシードは視界をスコープと接続し、精密な狙撃を行うというものの。汎用性は低い反面、制御は容易。

アリア

BC : Σ46

PC : OHP | 232Σ

年齢 : 5歳

所属 : 青蘭学園教務課、デルタ・テクノロジー現CEO最高経営責任者

エクシード : 《四六式甲型亜空間連結機構》

デルタの部下であるアンドロイド。誰に対しても丁寧な態度で接する。とにかく完璧主義で、自己を高めることに余念がない。その一方で、未熟なものからも学べることはあると知っており、他のアンドロイドと訓練することもある。

様々な事業に携わっており、世界中を飛び回っている。デルタの会社である『デルタ・テクノロジー』のCEOでもあり、その経営手腕は卓越している。

エクシードはセニアのものと同じく、自らの支配下にある異相空間領域内に物体を格納・搬出できるというもの。セニアとそれと異なる部分はその格納方式で、彼女は先入れ先出しキュー式。予め整理した順序で装備を取り出すのが早い一方で、一度しまった装備を再利用するには時間がかかる。また、目的に装備を出現させるために必要なことが、セニアは『領域内を探ること』なのに対し、彼女は『その前に入っている装備を出現・格納させて順番を回すこと』となる。

New! ニーア

SC : Σ9X

PC : DSAI | P20

年齢 : 20歳

所属 : 青蘭学園教務課

エクシード : 《九某式並列思考》

デルタ管轄の人工知能プログラズ。実体を持たないのにエクシード

ドを持つ、極めて稀な存在。性格はお茶目でからかい好きだが、何かとデルタや彼の部下のアンドロイドに振り回されることの多い、不憫な存在。それでも仕事は仕事できちんとこなす、優秀な相棒としてデルタに頼られている。デルタの作成するロボットや兵器を操縦する役割も持つ。

エクシードは思考を分割するというもの。AIである彼女にとっては、自分の劣化複製を作り出す能力に近い。エクシードレベルを上昇させることで大量の劣化複製を生み出し、それらをコンピュータのOSのように見立てて管理することで、大量の作業を同時にこなしながらも彼女としての意志を保つことができる。

D<sup>ドクター</sup>r・ミハイル（本名：ミハイル・イプシロン）

年齢：34歳

所属：最先端アンドロイド研究会名誉副会長、イプシロン・インダストリー社創設者兼現<sup>最高知識責任者</sup>CKO、ミハイルラボ所長、ミハイルラボ白百合島出張所副所長

エクシード：《カルキノス》

アンドロイドの研究において一躍名を挙げた天才技術者。公式設定の17歳をぶつちぎって2倍の34歳。とにかく責任ある立場が多く、常に働き詰め。

エクシードは、身の回りの物質を硬質化させるといふもの。

New! エスナ

BC：S23E

PC：不明

年齢：不明

所属：E<sup>エ</sup>・G<sup>グ</sup>・M<sup>マ</sup>・A<sup>ア</sup>

エクシード：不明

白の世界の管理システムであるE<sup>エ</sup>・G<sup>グ</sup>・M<sup>マ</sup>・A<sup>ア</sup>の直属アンドロイド。常にハイテンションで、あらゆることを自分にとって喜ばしいものとして捉える。常に語尾に『☆』が付く。

New! アルト

BC：S23A

PC：不明

年齢：不明

所属：E<sup>エ</sup> G<sup>グ</sup> M<sup>マ</sup> A<sup>マ</sup>

エクシード：不明

白の世界の管理システムであるE<sup>エ</sup> G<sup>グ</sup> M<sup>マ</sup> A<sup>マ</sup>の直属アンドロイド。常におっとりしており、あらゆることに楽しみを見出す。常に語尾に『♪』が付く。

.....

新しいプロGRESSが登場したり、既存のキャラの新しい特徴が現れる度に更新していきます。

## 第9話 『この一瞬』で十分だった

世界接続20周年祭、2日目。

この日のメインの催し物は、何といつても現役青蘭学園生のチーム同士のブルーミングバトルだ。

しかも今回は面白いことに、出場する4人のαドライバーが構築したチームのメンバーが、ほとんど各世界ごとに分かれている。

午前は、白vs黒。

午後は、青vs赤。

この世界接続20周年祭に相応しいバトルが、幕を開けようとしていた。

.....

「.....そろそろ時間だね。みんな、準備はいいね？」

控え室でチームメンバーに呼びかけた冬吾は、頼もしい返事を4つ聞いた。

「もちろんです。勝ちましょう」

胸に手を当てて微笑むユーフィリア。

「エクシードは控えめに、頑張りますの」

拳をぐっと握って力強く言うテルル。

「皆さんのバイタル、ちゃんとチェックしておきますからね！頑張ってください！」

パッドを片手にエールを送るナナ。

「特訓の成果を、お見せします」

目を閉じたまま静かに口を開いたセニア。

その様子を見て、冬吾は、自身の勝利を確信する。それは自惚れでも自意識過剰でもなく、ただの確信。頑張ってきた成果を出し切れれば、その上に自分が正しい判断を積み重ねることができれば。その先にあるのは勝利だけだという、自己暗示。それを掴み取るための資格

を手に入れたという、確信だ。

ここまで来たのなら、悲観論は自分の足を引つ張る考え方でしかない。何事も論理立てて考えなければ気が済まない冬吾にしては珍しいことだが、前回の春樹とのバトルで分かったことがある。バトル中は状況が二転三転し、予め立てておいた計画は、あちこちから崩されてしまい、あつという間に瓦解した。そして、その崩れ方の中には、冬吾が思いも寄らないものが幾つかあった。それは例えば、セニアを一時的に退場させた春樹の機転であったり、忍がバトル終盤まで隠し続けた数々の忍術であったり、レベル5同士のぶつかり合いだったり。なら、どう崩れるかを予測して、あの場合がこう、この場合はそう、といった風に無数のパターンを想定するのは時間の無駄だ。仮に想定できたとして、そこまでの指示を一々飛ばし、皆がそれに逐一従うことができない……というところまで行つた想定は、もはや堅実ではなく浅薄だろう。そんなことよりも遥かに大切で必要なのは、崩れながらも突き通せるだけの、強い意志なのだ。彼はそれを、春樹から、春樹のチームメンバーから、そして目の前の彼女らから学んだ。

「まあ、褒められた決着にはならないと思うけど……これが成功すれば、今後の僕らにとって大きなアドバンテージになる。何回か言ったけど、これはある意味でのデモンストレーションだ。僕もできる限りサポートするけど、頑張ろう」

冬吾は意識して、力強くメンバーに告げた。

……………

バトル開始の時間が近づくとつれて、ハイネのチームの控え室は、どことなく浮足立ってきた。というよりハイネが。

(やばい……ちよつと緊張してきた)

コロシウムへの入場口からは、既に多くの話し声が聞こえてくる。規制緩和後の初めてのバトルということで、注目されているのだ。そんなことは、頭では分かっているつもりだったが……実際はこんなものだ。心臓が、肋骨からの隙間から身体の外に逃げたがっているかの

ように、強く鼓動しているのを感じる。

青蘭で暮らし始めて4年目になるハイネだが、観客席に座っていた今までとは違い、初めて観客席から見下ろされる立場になった。今更過ぎるが、こんなことなら自分が上げてきた歓声を少し控えめにしておけばよかつたな、などと無駄な後悔をしてしまう。

「あなた、大丈夫？」

「ソフィーナは、緊張してないの？」

「まあね。《クレイドル》じゃあ御前試合みたいなのもやったし。それに今更緊張するなんて、なんか勿体ないじゃない」

「それもそうか」

それでもハイネの緊張が抜けていないと、幼馴染のソフィーナはそう思ったのだろうか。彼女はハイネの手を取って、自分の頬に押し当てた。彼女の熱が、手から伝わってくる。

「ほら、大丈夫よ。ね？」

「……うん。ありがとう」

言葉にできない、じんわりとした思いが胸に広がる。と同時にエミルが「あつ、私も！」とやってきて、反対側の手を彼女の頬に当てられた。そういえば、彼女とは3年以上の付き合いがあるにも関わらず、エミルの手以外の肌を直接触つたのは、これが初めてだった。彼女はアンドロイドだが、やはり温かい。

「はい、深呼吸。楽になるよ」

「……もう、大丈夫です」

「よかつたあ〜！ それじゃあどうする？ 円陣とか組んじやう？」

「よしやろう！ 美しいチームメンバーに捧げるよ！」

「そんなのいいですわ。手を重ねて『おー！』くらいにしておきましょう」

「そのくらいがいいわ」

というわけで円陣は組まず、皆で輪になり手を重ねて『おー！』という掛け声はやって。

いよいよ、バトルの時だ。

「みんな、頑張ろう。みんなが頼りだ」

とハイネが言うと、メンバーは皆、自信を感じさせる表情で頷いた。

.....

フィールドはシンプルに障害物無し。

終了条件は、いずれかのαドライバーが両足で立てなくなったら。あるいは、いずれかのチームのプログレスがフィールド内に1人もいなくなったら。

サッカーのフルコート並みの大きさの範囲がフィールドだ。最大でも4対4、合計8人で使うには一見広そうに見えるが、実はそんなことはない。ダイナミックなエクシードのぶつかり合いが発生するなら、これでも狭いくらいだ。

両者のαドライバーが、出場させるプログレスとファーストリンクを結ぶ。コロシアムのスクリーンに、出場するプログレスが表示された。

冬吾のチームは、セニア、ユーフィリア、テルルの3人。前回のバトルと変化なし。

ハイネのチームは、ソフィーナ、エミル、マリオン、カサンドラの4人。いずれも新顔だが、青蘭学園の現役生徒会長が入っているということで、大いに注目されている。

冬吾のチームは、人数でもプログレスの質でも劣っているように見えるが、果たして。

逆にハイネのチームは、この強力なプログレスに対してどのような戦略を立てたのか。

会場内は既に盛り上がっている。その規模は、4月のバトルの比ではない。聞くところによれば、他の世界の、青の世界への門<sup>ハイロウ</sup>周辺にまでこの映像は配信されているようだ。

両者のαドライバーがαドライバーゾーンに立ち、プログレスはフィールド内へ。バトル開始まで、あと1分。

ハイネは緊張しながらも、チームメンバーの心をリンクによって感じ取った。皆の心が震えている。恐怖ではなく、同じような緊張に、



あるいは高揚感に。それはハイネも同じだった。

冬吾の心も、彼にリンクしているメンバーの心も、いずれも穏やかだった。大丈夫、やるべきことをやるだけだ。その思いを全員が共有する。ただ、セニアだけは、挑戦意欲に溢れているようだ。

そして、時刻は午前10:00に。ブルーミングバトル開始。

.....

誰よりも先に動いたのは、ユーフィリアだった。これはハイネの予想通り。ユーフィリアにはエミルが対応する。

が、さつそく予想外の出来事が起きていた。手元のデータパッドには相手のプログレスの情報も載っているのだが、それを見ると、レベルの上がり具合から察するに、どうやら冬吾はユーフィリアとセカンドリンクしていないらしい。

セカンドリンクはリンクの強度を強めるためのリンクで、放っておくよりも早くエクシードレベルが上昇する。そして、冬吾のチームで最も広範囲を活動できるのは、エクシードによつて飛行できるユーフィリアだ。まずは戦場を広げるため、そして地上と空中で分割するためにユーフィリアのレベルを上げてくると思っていた。というより、前回のバトルではそうしていた。

では、かわりに誰のレベルが上がっていたかというところ、セニアだ。しかも、本来は2人に対して結べるセカンドリンクを2重に向けているらしく、レベルの上昇速度は非常に早い。

『——ねえ、ハイネくん!』

「な、なに、エミルさん?」

『ユーフィリアちゃん、飛ばないよ!』

「えっ?」

エミルの言葉につられるようにそちらを見ると、確かにユーフィリアは空中戦に入っていないかった。背面のブースターから白い炎を少しだけ噴出させ、その推進力を使って地面を滑るように移動している。彼女が地上に留まっているので、エミルも地上から離れるわけに

はいかない。そうすると、機動力という観点からエミルはユーフィリアに追いつけない。なのでハイネは咄嗟に、エミルにセカンドリンクを回した。

「——とりあえず作戦通りに！ マリオンはセニアちゃんを、ソフィーナとカサンドラはテルル先輩を！」

もう一方のセカンドリンクはマリオンに。レベルが急上昇しているセニアに立ち向かわせるのに、低レベルのままなのは余りにも不利だからだ。

「カサンドラは引き目に、ソフィーナは援護を！」

他方。カサンドラとソフィーナは、そもそもそこまでエクシードを重要視していない。なので、エクシードレベルが上昇していないテルルに立ち向かっても問題ないはずだ。やることは足止めとフィールド外への押し出し。ここまでは予想通りだ。

あくまでも、ここまでは。

……………

「むっ。テルルのお相手は貴女達ですの？ 予想通りですの！」

「やっぱりかいっ！ とりあえず、お手柔らかに頼むよ！」

「テルルの手はとっても柔軟ですの！ ご心配、いらないですの！」

テルルに肉薄したカサンドラが、レイピアを振るいながら語りかけた。対するテルルは、意味が分かっただけで敢えて茶化したのか、それとも本気で分かっただけなのか。ともあれ手加減する気は無さそうだ。

レイピアを持っているカサンドラに対して、テルルの武器はガントレットのみ。リーチ差はある……と見せかけて、彼女の機動力の前にはないようなものだ。

とはいえ、こちらには背後から援護してくれるソフィーナがいる。

「私だっているのよー！」

「くっ、援護射撃ですの！ 厄介ですのね！」

カサンドラはテルルの攻撃を直接受けようとせず、そのしなやかな

身のこなしとレイピア捌きで上手くないなしている。テルルは強靱な体幹で、攻撃を外しても持ちこたえるが、そこにソフィーナの攻撃魔法が刺さる。それすらもガントレットである程度弾いてしまうのは、テルルの実力の高さ故だろう。

「やはり、後ろから先に——」

「させないよっ！」

「ですよね！・分かってはいるのですの！」

どうにかカサンドラを振り切ってソフィーナを攻撃しようとするテルル。正しい選択だ、と思いつつもそれを防ぐカサンドラ。

ソフィーナの魔法は攻撃だけではない。カサンドラに飛ばしているのは防御魔法だ。テルルの攻撃がある程度入ったとしても、防御魔法がその威力を削いでくれた。しかし、これは一時的なものだ。テルルのエクシードレベルが上昇し、《マキシマム・ガントレット五式衝撃増幅手甲》の衝撃増幅がフルパワーで働くようになったら、このままでは防御魔法など容易く貫通するだろう。その時は水の防壁を張ることで、テルルのエクシードの数少ない弱点である『液体相手には衝撃増幅が上手く働かない』を突くことができる。それでも前回のバトルの最後の場面からして、突破可能ではあるようだが……。

戦況は一進一退。テルルの攻撃がカサンドラに当たることもあれば、逆にカサンドラのカウンターがテルルに入ることも。そしてソフィーナの援護攻撃も確実にダメージを与えている。手数はこちらの方が多く、一撃の威力が大きいテルル側は同じくらいのダメージを与えている。

（この状況が続けて、テルル先輩を抑え込み続けられれば、あるいはフィールド外に出せれば、こちらの『切り札』を使うチャンスができるわね……）

ソフィーナは戦況をそう判断して呪文を唱え続けた。

……

「セニア、レベル3だ」

『はい、マスター』

セニアのエクシードレベルが3になったことを知らせる。すると彼女は作戦通りに装備を展開した。——飛行用のブースターを。

飛行を開始したセニアは、立ち向かってきたマリオンを文字通り飛び越し、さらにバトル用のエネルギー銃とブレードを出現させながらユーフィリアの援護に向かう。そのユーフィリアは、まだ地上を離れる気配がない。というより、今回の空中戦担当はセニアなのだ。ユーフィリアは新技、白い炎を下向きに薄く噴射し続けることで地上での機動力をぐんと上昇させる《セラフィック・グライド》により、地上戦を制してもらおう。

ハイネは敏い子だ、と冬吾はそう評価している。同時に冬吾は、ハイネがすべてのプログレス同士の相性を考えた時、『ユーフィリアⅡ空中』『セニアⅡ地上』という前提を持ち込むだろうと直感した。それだけ前回のバトルにおけるユーフィリアの空中機動能力は、美海を制するほど圧倒的だったし、あそこまで強い空中戦アタッカーがいるのに、他のプログレスにそれを任せるだろうか、と問われれば、大抵の人は否と答えるだろう。

だが、前回のセニアは万全とは程遠い状態だった。その可能性は、冬吾たちですら未だに掘り切れていない。そんな可能性を、ハイネはどう評価するだろうか？

『2対1です、会長』

『うー、マズいね。セニアちゃん、ちょっと待っててくれる？』

そう言うが早いか、エミルが羽織った黒いコート型のエクシード兵装《マギア・クロス・ムーブメント十一式魔導調律機関》の袖の線状細工を白く輝かせ、空中のセニアを白い光の糸で絡め取った。ユーフィリアと交戦しながらの流れのような動作。さすがの手腕だ。セニアの反応は間に合わない。だが——

『想定済み、です』

セニアは銃と一緒に出現させておいたブレードで、その拘束を断ち切った。反応が間に合わなくても、手段を予め用意しておけば、対応可能。セニアがアリアとのバトルで学んだ考え方だった。とはいえ、

拘束が完全に閉じた後だったら、ブレードだけで切り抜けるのは難しかっただろう。これは間違いなくセニアの成長の証だ。

『すごい、セニアちゃん！ 抜けられるなんて——』

『相手はこっちにもいますよ、会長！』

『ごめんね〜！ 今相手するから！』

Emilの袖の線状細工ファイリグリーがまた輝く。現れた白い光の糸の量は、ぞつとするほどだった。少なくとも4月の状態では対処しようがなかっただろう。やはり強い。

だが、今は違う。

Emilの基本戦法は、この糸を使用して相手の行動を制限してから攻撃に移るといふものだ。それだけではないからこそ彼女は生徒會長なのだが、それでもその白い光の糸は、彼女の戦略を根底で支えているものだ。

その糸が、ユーフィリアとセニアの周囲に張り巡らされるが、縛りに来ることはない。恐らく、あれに触れることが術式のトリガーになっっているのだろう。

「ユファイ、リープだ！」

『はい、パパー！ 《セラフィック・リープ》！』

ユーフィリアの詠唱と同時に、今までよりも強くブースターから白い炎が噴射され、それらが幾筋もの糸のように細長く、Emilの糸を掻い潜って伸びる。白い糸同士が絡み合う、巨大な蜘蛛の巣のような光景だ。

その糸から糸へと、ユーフィリアは轉移しながらEmilに接近する。発動と同時に策定した幾筋ものルート上からルート上へ轉移を繰り返して敵に接近、あるいは攻撃を回避する技《セラフィック・リープ》。前回のバトルでは忍の《炎星流河フレア・シャワー》を避けるのに使用したが、今回はEmilの糸の術式に触れないように接近するために使用。

『やっぱそう来るよね〜』

その接近にも慌てず、にこやかなEmil。瞬間、張り巡らされた大量の糸がぐるりと渦巻き、離れているテルルの方へと殺到した。

『えっ!?!』

セニア&ユーフィリアとエミルとは大きく離れた場所でカサンドラ&ソフィーナと戦っていたテルルは一瞬で雁字搦めになる。咄嗟に藻掻くテルルだったが、拘束を破り切る前にソフィーナの魔術によってフィールド外に押し出されてしまった。

『30秒だけ、4体2ね〜』

『……面白いです。ね、セニアちゃん』

『はい。とても、高揚します』

しかし、フィールド内に残った2人は、そんな逆境をものともしない不敵な表情を浮かべていた。

それは、指揮を執る冬吾も同じだった。

(やっぱり崩されたか。面白い)

セニアのレベルが4に到達した。《ブルム・エクス・マキナ四六式乙型亜空間連結機構》全領域が解放される。

……………

(とりあえず、テルル先輩をフィールド外に出すことには成功したか) しかし、ブルミニングバトルのルールで、フィールド外に出たプログレスは30秒経てば再入場が可能になる。今のハイネがやるべきことは、こうして稼いだ30秒の間に、この状況をどう打破するかだ。

もしユーフィリアが地上に留まり、セニアが空中戦を行うというのなら、強力な遠距離攻撃手段を持たないマリオンがセニアの相手をするのは不可能になる。ではマリオンとエミルの役割を交代させ、エミルにセニアを、マリオンにユーフィリア、それぞれ担当させようとすることも一瞬考えたが、すぐにやめた。その理由は、今のフィールド内の状況だ。困ったことに、今、向こうのチームで地面に足を付けているプログレスはいない。今まで地上にいたユーフィリアも飛行を始めたのだ。そうすると、飛行ができるエミルと、地上から魔術による対空攻撃を放つことができるソフィーナしか攻撃のしようがない。つまり、せつかく人数差を広げられたのに、そのアドバンテージを活かしきれていないのだ。マリオンのエクシード《フリテイラリア王の華炎》による魔

術をカサンドラのエクシード《アマデウスの真翼》で飛ばす練習もしておいたら——と一瞬後悔し、すぐにその考えはやめた。たれば話は、ここでは何の役にも立たない。

もちろん、チーム全員が持ち込んでいる呪具を使えば、マリオンとカサンドラにも対空攻撃は可能だ。だが、あれはあくまでも奥の手であり、切り札だ。今使ってしまうのは、惜しい気がした。

判断はあくまで冷静に下さなければならぬ。空中戦アタッカー2人に対応するためには、こちらも空中戦ができるプロGRESSを2人用意する必要がある。

「ソフィーナ。セニアちゃんに対空攻撃を」

『分かってるわ』

「マリオンはカサンドラと一緒に、再入場するテルル先輩を」

『分かりましたわ。まあ、そのくらいしかできませんものね』

フィールド内の上空を激しく飛び回るセニアとユーフィリア。テルルが再入場可能になるまでは回避に専念しているらしく、エミルの拘束を間一髪で避け続けている。地上からのソフィーナの攻撃も芯を捉えられていない。

（予想してなかったな……まさか人数差を作ることの意味がなかったとは……）

だとすると、不利なのは明らかにこちらだ。ブルーミングバトルは、参加させるプロGRESSの人数によって、αドライバーへの痛覚のフィールドバック率が比例するように変化する。参加させるプロGRESSの人数と痛覚フィールドバック率は、3人なら40%、4人なら60%。単純に考えれば、同じ威力で攻撃し合ったとしても、こちらの方が体力の減りが大きいのだ。

もう少しで30秒。ハインはマリオンとαリンクを結び、エクシードを解放させる。

「テルル先輩が入って来るよ。お願いね、マリオン」

『了解ですわ』

しかし、その期待も裏切られることになる。

30秒経過した——が、テルルがフィールド内に入っていない。代

わりに入ったのは、フィールドのエンドラインに程近い、エクストラ  
プログラズゾーンと呼ばれる場所だ。これは主に5人以上のプログ  
レスを出場させるαドライバーが活用するゾーンで、バトルフィー  
ルド外であってもこのゾーンの中だけはエクシードレベルが上昇す  
るのだ。安全にレベルを上げられる反面、レベル上昇速度は通常  
の半分。

ハイネはいくつものバトルの映像を見て勉強していたが、参加  
プログラズが3人以下でこのゾーンを活用しているチームを見たこ  
とはなかった。理由は単純。まず、エクストラプログラズゾーンは  
フィールド内ではないので、当然ながら戦いに参加できない。ただ  
でさえプログラズの人数が最大の4人に満たない3人なのにそんな  
ことをすれば、フィールド内で明らかかな人数不利が発生するのだ。  
確かにレベル上昇を安全に行える利点はあるが、その速度が通常  
の半分とあれば、普通にフィールド内に再入場し、人数不利を解消  
しながらレベルを上げた方がいいに決まっている。

それなのに、テルルがエクストラプログラズゾーンに入ってレ  
ベル上昇を始めた理由。それは明らかに、フィールド内で人数不利  
が発生していないということ、冬吾が見抜いたからだろう。この  
まま攻撃しあぐねていたら、いつエミルやソフィーナを掻い潜  
ってマリオンやカサンドラに攻撃を加えられるか分からない。空  
中から攻撃されたら、2人は防御以外の選択——反撃が  
できないのだ。

——ハイネの思考は、一瞬止まった。

「——つマリオン、カサンドラ！ ソフィーナの呪具を使  
って2人に攻撃するんだ！」

『し、しかしあれは——』

「とりあえずテルル先輩をフィールド内に戻さない  
と！」

『うっ……そういうことか……！』

このバトルの戦略を立てる時に、ハイネは——というより  
チーム全員は、勘違いしていたのだ。確かに、相手の  
プログラズは攻撃してくる存在だが、αドライバーの  
体力を削るためには相手のプログラズを攻撃しな  
くはない。『誰が誰と交戦するか』と『どうすればその



状況に持ち込めるか』——ハイネらは、それを考える際の基準を『誰ならこの相手プログレスに対応できるか』だけで決めてしまっていた。抜け落ちていたのは『このプログレスは相手の誰を攻撃できるか』という部分だ。その観点からすると、彼らは『空中』というものに対する認識が非常に甘かった。

つまり、地上戦のパワーアタッカーであるテルルは、同じく地上戦をメインとするマリオンやカサンドラにとって強大な『敵』であると同時に、彼女らが小細工なしで唯一攻撃を通せる『的』<sup>ターゲット</sup>でもあったのだ。

テルルを、目先の脅威に踊らされてフィールド外に追い出した今。攻撃を通せる相手を失ったマリオンとカサンドラは手持ち無沙汰になってしまった。このまま2人を遊ばせておくわけにはいかない。どうにかしてフィールド内のセニアをユーフィリアを追い詰めなければ、テルルの再入場は行われない……のだろうか？ それとも、もう少ししたら普通に入ってくるのだろうか？

分からない。冬吾が何を考えているのか、推測できない。人数有利を作り出したはずのハイネのチームは、誰が見ても明らかなくらい後手に回っている。

冬吾は間違いなく、この焦りから発生する隙を的確に攻めて来るだろう。

とはいえ、どうすれば？

「ごめん、呪具使うのはちよつと待って！ エミルさん！ αリンクするから、どっちでもいい——できれば両方、地上に落として！」

『お、オツケー！』

「ソフィーナは、とにかく広範囲に攻撃を放って！ 2人の行動を制限するんだ！」

『分かったわ！』

咄嗟の機転。セニアとユーフィリアが地上に降りてこないなら——落としてしまえばいい。そうすれば、悪い表現にはなるがマリオンとカサンドラでタコ殴りにできる。

実は、思い付きはしたのだ。——ソフィーナのエクシード、望むものを右腕に引き寄せる《グリーディ・ハンド》で、空中のセニアとユーフィリアを地面に引きずり下ろすことを。ソフィーナのエクシードは、制御さえできれば、対象を絞って引き寄せ効果を発動できるが、万が一暴走しても Emil のエクシードで味方を拘束することで、その場に？ぎ留めておくことができる。——しかし、その暴走の凄まじさをその身で感じていたハイネは、無意識のうちに臆した。

Emil と  $\alpha$  リンクを結び——成功。エクシードの出力が強化され、今日一番の白く輝く糸が彼女から放出される。同時にソフィーナが攻撃力よりも攻撃範囲を優先して、空中に魔法の弾をばら撒いた。2人の動きが一瞬止まる。その一瞬で、どちらか片方でもいい、完全に拘束できれば——

だから、気付いていなかった。Emil との  $\alpha$  リンクを結び始めたその瞬間に、

フィールド内に駆け込んでいたテルルの存在に。

『えっ!?!』

マリオンとカサンドラの驚きの声がほとんど同時に聞こえる。が、2人が攻撃されたわけではない。テルルは2人には目もくれず、猛ダッシュでフィールドの中心へ。

そして、その途轍もない膂力で大ジャンプした。その跳躍の高さは優に10メートルを超え、ユーフィリア・セニア・Emil が空中戦を行っていた高度まで容易に到達する。

跳躍の途中でソフィーナの攻撃に被弾していたが、威力より範囲を優先していたせいで、大したダメージにはならない。そのソフィーナは飛び込んできたテルルに反応し、攻撃を彼女に集中させるか迷ったが、迷っていられる時間が一瞬しかなかったせいで決めきることができず、範囲攻撃のままだった。

『あつ、うそ!?!』

驚く Emil の声。今、彼女に最も接近しているのはテルルだ。しかも、このままだと振りかぶった拳が Emil に当たる——その危険を感じ取った Emil の防衛本能が災いし、ほとんど無意識の内に拘束術式

の対象をテルル一人に絞ってしまっていた。

そして、それを待っていたかのようにセニアとユーフィリアが急降下する。今、ハイネのチーム全員の意識は、とてつもない跳躍を見せたテルルに——上空に集中してしまっている。その隙を、

『《セラフィック・ボルテクス》！』

聞こえたのは、ユーフィリアの詠唱。彼女のブースターから放たれた白い炎の塊はマリオンとカサンドラのすぐそばで弾け、渦巻く上昇気流へと変じた。反応こそできたが、唐突な広範囲への攻撃を避けきれなかったマリオンとカサンドラは、ひとたまりもなく巻き上げられる——

それと同時に、セニアがエネルギーショットでソフィーナを狙い撃つ。攻撃に集中していた彼女だったが、幸いにもセニアの動きが洗練されきつていなかったおかげで、こちらは反応が間に合った。何とか回避するが——それを先読みしていたかのように、セニアがもう片方の手に持っていたロッドを、投擲する——

その一瞬、時が止まった。

テルルはエミルの拘束術式に捕らえられ、

マリオンとカサンドラはユーフィリアの竜巻によって上空へ飛ばされ、

銃撃を回避したソフィーナの行く先に、セニアがロッドを投げて、一瞬の後、全ての結果が訪れた。テルルは白く輝く糸で雁字搦めになり、勢いを殺されて落下した。空中に巻き上げられたマリオンとカサンドラは地上に落ちてくる際、どうにか受け身を取れたが、その衝撃と痛覚はハイネにしっかりフィードバック。さらにセニアの投げたロッドがソフィーナに直撃し、鈍痛がハイネを襲う。

最後に『《セラフィック・グライド》』で地上スレスレを滑るように移動したユーフィリアが、落下してきたテルルを受け止めた。そのままグライドしてエンドラインに近づく——なんと自分からテルルをエンドラインの向こう、フィールドの外側に投げたのだ。すると、フィールド外に出たことでエミルのエクシードの影響が終了し、拘束が解ける。

その傍ら、セニアはロッドを回収することなく再び上昇し、エミルとの交戦に戻った。今度は攻撃を加えている。ユーフィリアがいない隙を補うために。

一連の流れは、ハイネの体力を削っただけに終わってしまった。テルルがまたフィールド外に出たことで、再び有利とはいえない有利な状況に戻ってしまう。

(くそ……どうすればいい!?)

その答えは、暗闇の中にあつて見えないように思えた。

………

「よし……とりあえず何とかなつたね」

『もう被弾ばかりは嫌ですの！ 出たり入ったりも疲れるですの！』

「ごめんねって。後でいっぱいご飯食べよう？」

『それで誤魔化せると思つたら大間違いですの！』

冬吾は今回、テルルを『波』として扱うことに決めていた。

前回のバトルを見たなら、テルルのパワーは知っているだろう。それがほとんどエクシードレベルに関係しないということも。

このテルルを相手にしたときにまず考えるのは、強力な攻撃をどうやっていなすか、あるいは彼女を無力化するかだ。そこでカサンドラかマリオンのどちらか、あるいは両方がテルルの対応に当たることは予測できていた。

であれば必要なのは、それへの対策——ではない。カサンドラとマリオンの2人が揃えば、さすがのテルルも圧倒されるだろうが、この2人の大きな弱点として、空中戦がほとんどできない。そこで、テルルを積極的にフィールドに『出し入れ』することで、向こうの判断を狂わせようというわけだ。冬吾が様々なブルーミングバトルの記録映像を見た限り、ここまで変な戦法を取っていたバトルは無かった。どれもこれも、言ってしまうえば……お行儀のよいバトルばかりだった。前回の自分たちのように。

相手のチームの構成上、テルルを対策するために、まさかユーフィリアを差し置いてエミルを投入してくるはずがない。そうなったら、空中も地上も自在に動けるユーフィリアがほぼ完全にフリーになるからだ。確かに魔術で相手を拘束するエミルのエクシードはテルルにとって天敵といえる。だが、いざとなったらエミルのエクシードで対処可能だからこそ、エミルはテルルを相手することに対してやや甘い認識なのではないか？ 逆に考えれば、前回のバトルでユーフィリアと交戦しながら地上にも影響を及ぼしていた美海は、それだけ強敵だったのだ。

そして、仮にソフィーナに空中戦が可能だったとしても、それに対する『ズラシ』として、今回ユーフィリアに地上戦を任せた。『いつでも空中戦ができる地上アタッカー』に。結果としては、半分当たり、といったところか。ソフィーナ自身は空中に行けないが、強力な対空攻撃を持っている。それも魔術という、テルルと同じくエクシードレベルにほとんど依存しないタイプの攻撃手段だ。極めればこれも厄介だろう。

この戦術が可能になったのは、セニアのおかげだ。彼女が飛行用ブースターの扱いに慣れて、空中での戦闘が可能になったからこそ、冬吾は大胆な戦略を——『地上をほとんどカラにする』という戦略を立てられたのだ。そうやってこちらのメンバーが誰もいなくなつた地上に、テルルが出たり入ったりすることで、向こうの戦略を狂わせる。狂ってしまうのはテルルが『一撃でゲームを決めかねない攻撃力を持っているから』と『マリオンとカサンドラが唯一攻撃できる、こちら側のプログレスだから』だ。

流石に初っ端からテルルが放り出されるのはほとんど想定していなかったが、だからこそ彼らの認識の甘さを確信できたと言える。ハインネらは恐らく、彼らが想像しているよりずっと不利な編成であることを認識していなかった。相手の人数の少なさはメリツトのように見えて、実は的ターゲットの少なさと同じ。そして逃げ回る的に、どうやって攻撃を当てるのか？ 空中の的に手が届かないプログレスを2人も抱え込んでいるために、参加人数によって無駄に大きなダメージを負つ

てしまう状況にどう対処するのか？

(戦略勝ちできてる——って考えるのは甘いだろう。さっきの反応、何か隠し持ってるね)

冬吾はフィールド内をしっかりとチェックしていた。そして、エミルとαリンクを結ぶ直前、ハイネからの指示でマリオンとカサンドラが焦ったように何か言い返していたのを見逃さなかった。向こうは魔法使いチーム。呪具などのアイテムを全員が持つていてもおかしくはない。むしろ、戦闘範囲が限られるプログレスが2人もいるのだから、少しでも手の数を増やしておくのは、ごく自然な発想だろう。(だとしたら、使い時を誤った——のかな。僕らを相手にするプレッシャーもあるだろう。ソフィーナちゃんをサポートに徹している辺り、彼女を使った切り札も用意しているはずだ)

残酷だが、冬吾はハイネとソフィーナの関係を知っている。彼自身が言ったことではあるが、2人は強い信頼で結ばれているのだ。その信頼を使わないわけがない。

だから先に。

「ユファイ。あとどれくらい?」

『あと1分少しです!』

「分かった。テルル、再入場しよう。準備が出来たら——」

『予定通りにやれ、ですね?』

「うん、あと少し」

『はあ……今回の貴方、本当に容赦がないのですの』

「いい機会なんだ。ハイネくんには悪いけど……今後、勝ち続けるためには——」

冬吾の眼差しは、眼前のバトルのその先を、既に見据えている。

「セニア。あと1分、『あれ』で地上を攪乱しよう」

『はい、マスター』

.....

再びフィールド外に出たテルル。マリオンとカサンドラが手持ち

無沙汰に戻る。今度のハイネは、考えている時間などない。テルルが入って来られない30秒は、逆に言えば『入って来るかどうか悩む必要がない時間』なのだから。

「マリオン、カサンドラ！ 呪符で対空攻撃だ！ 切り札に拘ってちや勝ち目がない！」

『了解ですわ！』

そう。ここまで追い詰められてなお、戦略を押し通せるなどと勘違いはできない。そしてこの30秒間、冬吾はテルルを使った戦略が使えない。この攻撃に、フィールド内の2人だけで対応しなくてはいけないのだ。

マリオンは、ソフィーナから渡された呪符をまとめて取り出し、エネルギーを注ぎ込んだ。マリオンとαリンクし、増幅されたエクシード《フリテイラリア王の華炎》の黒百合色の炎が呪符に注ぎ込まれる。高純度のエネルギーに呪符が反応し、術式が起動した。

『今ですわ、カサンドラ！』

『了解つ！ さあ、盛大な一撃を見るといい！』

そうして発動した魔術を、カサンドラのエクシード《アマデウスの真翼》で包み込み、上空へと飛ばす。カサンドラはエクシードに関しては天才で、何も練習しなくても完璧に操れるプログラسد。そのエクシードの内容が『魔術を膜で包んで遠くに飛ばす』というもので、本人が魔術を使えないというアンバランスな人材ではあるが、こういう場面ではとても役に立つ。複雑な軌道で飛行する空中のプログラسدに向かって、魔術を精密に誘導することもお手の物だ。

狙いを付けたのは、防御力の低そうなセニアだ。ユーフィリアは防御技である《セラフィック・ガード》を持っているため、狙うのは愚策だと判断したのだ。

だが、セニアもただではやられない。自分が狙われているといち早く察知した彼女は、咄嗟にバリアを発生させる装置を出現させて、攻撃を防いだのだ。しかし、マリオンのエクシードによって大幅に強化された黒百合色の爆風はバリアごとセニアを吹き飛ばし、バリアの切れた隙をソフィーナの対空攻撃が捉える。いい感じだ。

(ここでセニアちゃんをエミルさんが拘束できれば……)

そうすればセニアを地上に落とすことができる。——が、妙な違和感。どうしてユーフィリアはセニアのカバーに入らない？ ここでセニアが集中攻撃を食らえば、一気に負けてしまうかもしれないに。

そもそも、ユーフィリアに関しては最初から違和感がある。まるで、前回のバトルのような全力を出しているようには見えないのだ。地上での滑走も空中での飛行も、最小限のエネルギーで攻撃を繰り返している。エミルの拘束術式を抜くために発動した《セラフィック・リープ》も、炎の筋が前回のバトルに比べて明らかに少なかった。なぜだ？ 何かを、待っているのか？

そんな逡巡に思考を奪われ、エミルに出す指示が一瞬遅れた。その間にセニアは体勢を整えながら、腰辺りに6個の球体を出現させ——そのまま地面に落とす。その球体は地面に当たり——強い光を伴って爆発する。

(ば、爆撃か——！)

《四六式乙型亜空間連結機構》にはこんな使い方もあるのか、と感心しながらも、状況は一気に悪くなった。落としてきたのはただの爆弾ではない。スタングレネードだったのだ。落下してくる物体をまじまじと見てしまった地上の3人——ソフィーナ、マリオン、カサンドラは、激しい光に目くらましを食らってしまった。その閃光はハイネの視界も覆いつくし、数秒間はフィールドどころか手元のパッドすら見えない状態に陥った。恐らくエミルも同様だろう。

既にテルル退場から30秒以上が経過していた。マリオンとカサンドラに、テルルに警戒するように言う。だが、手ごたえがなさそうな感じからして、またフィールド内に入ってきていないだろう。ようやく手元のデータパッドが見えるようになったので確認すると、テルルのレベルは緩やかに上昇中。エクストラプログレスゾーンに入っているようだ。

『は、ハイネくうくん！』

「え、エミルさん！ ユーフィリア先輩を——」



『あぐっ!?!』

潰されたようなエミルの声。恐らくユーフィリアから攻撃を受けてしまったのだろうが、不思議と痛覚がハイネにフィードバックしてこない。首元に圧迫感を感じるだけだ。

どういうことだ?　　と思いつつも、目も凝らすと、フィールドの中央付近で、ユーフィリアがエミルを抑え込んでいた。地上に。

『なっ、ユフィ君!?!』

『カサンドラっ!』

攻撃できる相手を見つけて、急いで駆けて行こうとするカサンドラと、それを引き留めるマリオン。マリオンがそうした理由は、テルルが3度目の入場を果たしたからだ。

一瞬、2人の目的がズレた。その隙を突いたテルルが、マリオンとカサンドラの腰を腕で抱え込むように持ち上げ、ユーフィリアの方へダッシュする。

(な——どうして?)

なぜテルルがそんな行動をしているのか、全く理解できなかった。ただ、本能的に分かった。何かを狙っている。これはマズい。

その一方で、ソフィーナがエクシードを発動させた。対象はセニア。中央の塊から彼女を引き離し、個別に攻撃を仕掛けるつもりだったのだろう。αリンクもしていないのに、すごい威力だった。

飛行中のセニアは、ソフィーナからの引力を感じたからだろうか、それともそういう予定だったのだろうか。すぐさま地上に降りてくる——と同時に、2つの装備を実体化させた。片方は、まるで重機のようにごつい足回りのアーマー。もう片方は先ほどソフィーナに投げつけたロッド……:のように見える、先端から白い光の紐が伸びている——

「ソフィーナ!　エクシードを止めて!」

『えっ——ええええええっ!?!』

鞭だ。素早く伸びたそれがソフィーナの腰に巻き付き、地面から足が離れた。すると、ソフィーナの身体がみるみるうちにセニアへと吸

い寄せられていくではないか。これは、セニアが装着した重機のようなフットアーマーのせいでセニアの体重が重くなり、その上でソフィーナの足が地面を離れてしまったため、『グリーンデイ・ハンド』の引力——『2者間の距離を縮めようとする』という引力が『ソフィーナがセニアに引き寄せられる』になつてしまったからだ。そして、エクシードによる初速が発生してしまった以上、今からエクシードを解いても意味がない。にも関わらず、ソフィーナはその一瞬を逃した直後、律儀にもハイネの指示通りエクシードを解いてしまった。これは最悪のタイミングだ。鞭によつて動きを完全に支配されてしまったソフィーナは、セニアの頭上を超えてユーフィリアの方に飛ばされる。

そして最後。ユーフィリアが、不意に抑えつけていたエミルを離れた。他3人の状況が分かつていなかった彼女は、とりあえず上空に復帰しようと飛行回路を働かせる。

『こつ、こつこつから——ふがつ』

『ふぎゅー！』

その直後、セニアによつて飛ばされてきたソフィーナと空中で激突しバランスを崩した。

それと同時に、マリオンとカサンドラを抱えたテルルが、ユーフィリアに向かつて2人を投げ飛ばした。思わず息が止まる。

この一瞬。ハイネチームのプログレスは、誰一人として自分の動きをコントロールできていなかった。そして、ハイネもそれを認識できていなかった。

もちろん、全員がしっかりと練習してきたのだ。2秒もあれば、まずエミルが、次いでマリオンが、自己のコントロールを取り戻すことができただろう。

だが——冬吾にとっては『この一瞬』で十分だったのだ。

『——終わりです！』 《セラフィック・フルバースト》——  
!!!!

高らかなユーフィリアの宣言。それと共に、彼女の背中のブース

タワーから渦を巻くように白い炎が噴出された。が、その勢いは、前回のバトルで忍の煙幕を払うのに使った《セラフィック・バースト》の比ではない。冗談抜きで、その炎の渦の勢いはフィールド全域に広がった。

全てはこのためだったのだ。不自然にエクシードを制限していたユーフィリアも、ユーフィリアの代わりに率先して空中戦に挑んだセニアも、フィールドに出たり入ったりを繰り返していたテルルも。すべてはこちらを惑わせ、行動を鈍らせるため。そうやって稼いだ時間で、一撃必殺の超出力の攻撃を準備する。それで、こちら側の全員を

ハイネのチームのプログレスは、それを至近距離で食らった。ハイネに伝わってきたのは痛みではなく、息が詰まるような衝撃。それに晒された4人は宙を舞い、誰も、何をされたか理解できないまま――全員、フィールドの外に落ちた。

『ハイネ・カミュオンチームのプログレスがフィールドから全員退場しました。よって、三島冬吾チームの勝利です』

この敗北の味は、一生忘れられないだろう。

## 第10話 立ったまま

午前中に冬吾とハイネのバトルを観戦していた春樹は、控え室に入ってから、その時の衝撃を未だに振り払えずにいた。

「俺ら、完全に食われたよな」

「ん？」

「いやほら、相手をフィールドから吹っ飛ばして勝つって、俺らも最初にやろうとしたじゃん？」

「あー、そういえばそうだったね。失敗しちゃったけど……」

「でも、冬吾は成功させた。また戦うとなると厄介だな」

冬吾のチームは、ユーフィリアの《セラフィック・フルバースト》によって、ハイネチームのプログレスを全員フィールドから退場させて勝利した。そして、春樹のかつて同じことをやろうとしたことを思い出す。バトル開始直後から美海のレベルを上げまくり、相手のレベルが上がり切らないうちに決めてしまおうというものだ。

だが、その作戦は失敗した。素の膂力が非常に高いテルルがフィールドに拳を突き刺すことによって位置を固定し、そこにもう2人がしがみついて耐えるという方法で。しかもユーフィリアのレベルを上昇させて美海の暴風の中でも飛行できるようにし、攻撃を行うことでこちらの戦略を元から断ってきた。こちらとしても「決まればいいな」くらいの気持ちだったとはいえ、それと似たような作戦を彼らが成功させたとなれば、今更になつて少し悔しさを感じるというものだ。

(……きっかけが俺らだったとしても、冬吾はこれを上手く纏めてた……)

というのが、春樹の素直な感想だ。春樹らがこの作戦を思いついたのは、全体的にプログレスの練度が足りない中で、少しでも効果的な戦略を増やそうとしている最中。正直に言えば『見せかけ』の大技だったのだ。とはいえ、美海のレベルを素早く上昇させながら、準備の整っていない相手を乱すというのは、そこそこの理に適った作戦では

ある。冬吾の頭脳がそれを上回ったというだけで。

翻ひるがえつて、その冬吾は本当に『決め手』としてこの作戦を取った。前回のバトルを悉く裏切るかのようなトリッキーさでハイネ側の作戦を滅茶苦茶に荒らし、混乱の最中に一気に勝負を搔かつ攫とらうために用いた、文字通りの切り札。悔しいが、この大技を思いついた春樹よりも先に、冬吾の方が早く実戦で決めた。

だが、学べることも多かつたのは確かだ。相手の考えを読んだ『手』の外し方と、誘導の仕方は流石の一言だったし、それぞれのプログレスの動かし方や特徴の出し方も上手かった。時間さえあれば、こつちも新しい戦略を考えたくなるくらいだ。

その上で、再び冬吾のチームとバトルする際の厳しさも実感した、特に空中と地上を完全に切り離してしまふ、あの思い切りの良さは、今後バトルする上で大いに厄介になるだろう。それに、相手チームを対策するために必須となる『過去のバトルのデータ』すら彼は逆手に取った。となれば今回のそれも、布石と考えて間違いない。現に、これから冬吾のチームとバトルすることになったチームは、ほとんど例外なくユーフィリアの《セラフィック・フルバースト》の存在を念頭に作戦を立てなければならぬ。それからセニアの持つ多彩な装備——特に厄介なのは、残数も出てくる時も分からないスタングレネードだと思ふ——に加え、テルルの高い脅力と機動力も変わらず無視できない。この3人は『抜群の機動力と影響範囲の広さ』『攻撃・防御を問わない手段の多彩さ』『エクシードに頼らないデフォルトの身体スベックの高さ』という、互いの弱点を上手く補い合うような強さを持っているので、安易な対策も難しいだろう。

——そういえば、テルルってお姉ちゃんがいるんだっけ。1度も見たことないけど。なんだっけ。仕事、とかでいないんだっけ。一応クラスに在籍だけはしてるけど……そうだ、元素——セレンって名前だったか。彼女がもしテルルと同じで冬吾とリンク相性良かったらどうすんだ、マジで……。こつちも、みんなが戻ってきてくれたら、その時はメンバーどうするかなあ……考えなしに増やすとデメリットの方が大きそうだし……。

「とりあえず……みんな、準備はいい?」

雑念を振り払うための春樹の問いかけに、力強く頷く美海、琉花、忍の3名。頼もしい限りだ。

できることはやってきた。

美海はチームの練習時間外も、雄馬の部下である幸さちに頼んで飛行や空中機動のやり方を教わっていた。そのため、飛行に使うエネルギーの量は以前と比べ物にならないほど減っているし、その飛行も非常にスムーズになった。

琉花はエクシードの出力を高めながらも、搦め手の開発に勤しんでいた。相手の足に水をひっかけて転ばせたり、自分の移動に使用したり。エクシードの効率化にも取り組み、前々回のバトルでセニアを攪乱するために使ったウォータースライダーのような技も、今までよりずっと長持ちするようになった。

忍は今更……と思っていたが、実はこっそり青蘭大学で元生徒会長の蒼月紗夜そうげつさやと特訓していたらしく、新技をいくつか編み出していた。それも、今までとは別方面からのアプローチ——どちらかといえば心理的に相手を追い詰めるタイプのものが多かった。前回の雄馬のチームとのバトルを敢えて観戦したことの収穫は大きかったようだ。

総じて、美海は出力と機動力を向上させ、琉花は燃費が上がってトリッキーになり、忍はそんな2人を纏めながら相手を確実に追い詰めていけるようになった。

(まあ、今回のバトルですべて役に立つとは、思っていないけど……) 今回は、相手に妖精が2人いる。人間とは全く異なる特徴を持っているため、人間相手の作戦がどこまで通じるかは未知数だ。しかし、積み上げてきたものが無駄になるはずもない。

「頑張っちゃおうよー!」

「まあ、ほどほどにでゴザル。怪我したら明日楽しめないでゴザルかな」

「大丈夫っしょー?」 龍姫りゅうぎちゃんが治してくれるだろうし!」

「あ、あんまり張り切りすぎないでね……?」

バトルに出る3人に、兎莉子を加えた4人の調子は、良い感じだ。

先ほどのバトルで刺激を受けたらしい。が、そっちに傾かれてしまうと困るという意味で、

「いいか？ あんまりさっきのバトルに影響受けすぎるなよ？ 俺たちは俺たちがやってきたことを、素直に出し切れればいいんだから」

「大丈夫だよ！ ただ、早く動きたいなあって」

「スポーツマンだね、みうみん。私もだけど」

「身体が疼く気持ちは分からないでもないでゴザルね。拙者も編み出した技が、どこまで通じるのか気になるでゴザル」

「なんか大丈夫そうだな。まあ、気楽に……ってというか、気負わないで？ って感じで行こう」

どうにも締まらないが、これもこのチームの持ち味、とポジティブに捉え、春樹は3人を連れてゲートへと向う——前に。

「行ってくるよ、兎莉子」

「が、頑張ってきてっ！」

兎莉子に声を掛けると、彼女はにっこり笑って、両手で春樹の頬を挟んでくれた。その笑顔が、その小さな手から伝わってくる体温が、昂った心を鎮めてくれる気がした。

……………

俊太チームの控え室は、妙な緊張感に包まれていた。バトルそのものに怖気づいている訳ではなく、武者震いが高まっているような、そんな緊張感。

「うん……準備オーケーよ、俊くん」

「おっし。2人は？」

「おけおけー！ てんきもいーし、ちょうしバツグンだよー！」

「ルビーたちがガンバってきたところ、みせつけてやるわ！」

「大丈夫そうだね、良かった」

バトルに出場する3人の調子は良さそうだ。皆、早く動きたくてたまらない様子。それは俊太も同じだった（αドライバーは実際に動くわけではないが）。

フローリアの言った通り、天気は晴れ。開始時刻は14時なので、ロシアム内は直射日光に晒される。予定通り、環境面ではこちらの有利。

あとはその場の判断次第だ。先ほどのハイネのバトルを見てはつきり分かった。彼らの敗北の原因は、プログレス同士の相性差にも、冬吾の戦略にもあったが、決め手となったのはハイネの指示ミスだった。それに加え、微妙に統率の取れていないプログレスらの独断専行が、チーム全体の致命的な乱れを生んでしまっていたのだ。

一方の冬吾チームのプログレスの動きは完璧だった。彼らの場合、確かに個々の能力が高いこともあるが、恐らく冬吾という指揮官への信頼感が、彼女らの行動を絶対のものにしていたのだろう。白の世界のアンドロイドのみで構成された冬吾のチームメンバーは、バトル時のみとはいえ彼を『マスター』と呼び、彼の指示にのみ従うという主従関係が存在する。その絶対的な力関係こそ、ハイネのチームに足りなかったものだ。

ハイネに対する彼のチームメンバーは、同年代がソフィーナのみで、後の3人は皆年上。しかもエミルとマリオンに至っては、それぞれ生徒会長と副風紀委員長という『立場』を持っている。ソフィーナも、長い間離れていた幼馴染ということ、妙なしがらみを持っているらしい。比較的フラットな関係であるカサンドラでさえ年上となれば、立場の対等さから指揮系統がガタついているのは否めない。彼らは恐らくそういう関係に頓着しないつもりだったのだろうが、やはり無意識のうちにハイネの指示と自らの判断が競合してしまっていたのだろう。

翻って、こちらの対戦カード。

春樹チームはメンバーが全員、春樹の後輩だ。彼女らの入学当初から面倒を見ており、このチームメンバーで1度バトルもしている。その信頼は確固たるものだろうし、指示出しにも慣れていそうだ。指揮が乱れるということは考えづらい。

では、俊太のチームは？ 俊太自身の性格の問題もあり、当初はどうなるか分からなかったが、このチームの練習を見てくれていた音楽



講師のサイオンのおかげもあって、指示出しの練習はずっとしてきた。チームメンバーの3人も、俊太の指示に従うという共通認識ができている。それが実際に上手く働くかどうかはさておきだが、前提条件で春樹らに劣っているとは思わなかった。

俊太の役割は、とにかくフィールド内を注視して指示を出し、なおかつ耐えること。それさえできれば、バトルに勝てる。そして、それができるように特訓してきた。

絶対に負けない。それだけが俊太の心を満たしていた。

「それじゃー……時間だ。行こうか」  
「ええ」

俊太の合図に、アウロラが短く返答。攻撃用の魔法を使うためのロッドを持って立ち上がった彼女の両肩に、ミニサイズになったフロリアとルビーが座る。

「頑張りましょう」

「がんばろー！ おー！」

「うるさいわよフロリア！」

「喧嘩するなって。ほら、みんな見てるぞ」

ゲートをくぐると、4人は大歓声に包まれた。先ほどは観戦席の中において、歓声を上げる側だったのに、受ける側になるところも違うものか、と実感する。ただ、ちらつと後ろを見たところ、プログレス3人は特に緊張していないようだ。フロリアとルビーなど、小さな手を観客に向かって振るほどの余裕を見せている。というより、よく分かかっていないのだろう。それならそれでいいや、と俊太は安心した。余計な緊張で動きが鈍る心配もない。

開始時間が近い。メンバーの3人とファーストリンクを結び、3人がフィールド内に入る。俊太自身もαドライバーゾーンに入って、準備完了。

フィールドの反対側に目をやると、春樹チームも準備が完了したようだ。

一瞬、春樹と目が合う。挑戦的な、それでいて苦笑のような、微妙な笑顔を向けられた。それに対し俊太は、とりあえず一礼しておい

た。ずっと剣道をやってきた俊太にとって、それが一番誠実な対応だと思っただ。

フローリアとルビーはまだ小さいままだ。これも先ほどのバトルを見て改めて理解したことだが……バトルに参加させるプログラムの人数は、そのまま相手の攻撃を受ける的の数になる。ならば、3人分の攻撃力を持つにもかかわらず、1人分の身体しか持たないプログラズがいたとしたら？

開始時刻が迫るにつれて、緊張感が高まる。だが、それはいい緊張だ。今、ファーストリンクで繋がっている4人の心は、熱く燃え立っていた。

「まずは計画通り『おひとり様モード』からスタートするよ」

『ええ、任せて』

数秒の沈黙の後——バトルが開始された。

俊太は考えるよりも先にデータパッドを操作し、アウロラとセカンドリンクを結ぶ。

……………

バトル開始時に春樹が思ったのは「そんなのアリかよ」だった。

なにせ、妖精サイズのフローリアとルビーが、アウロラの左右の肩にしがみついているのだ。こういう、小さいのが左右から魔法を撃ってくる感じのボスキャラ、なんかゲームで見たことあるぞ、などと無駄なことを考えつつ、まずは美海とセカンドリンク。これは場を制す上で必須の手だ。

「忍、琉花、まずは2人で。美海はレベル上昇を待とう」

『承知でゴザル』

『任せろ！』

『りょーかい！』

二重にセカンドリンクを結んだ美海のレベル上昇速度は、そのリンク率の高さから非常に早い。一方で、データパッドを見ると、俊太はアウロラとセカンドリンクを二重に結んでいるようだ。

春樹は……実は、アウロラのエクシードがどんな性質のものかよく知らない。分かっているのは、オーロラのような光のカーテンを引くもの、というだけだ。それも、実際のカーテンのような性質を持っている。これは過去に触らせてもらったことがあるので確実だ。なので、美海の風で吹き飛ばせる、と考えている。それに、カーテン特有の性質もある。少なくとも美海の行動は担保される……はずだ。

だが、過信は禁物だ。俊太という最高のαドライバーを得た彼女のエクシードは未知数。油断なく、手堅く攻める。

『まずは、我々の相手をしてもらうでゴザル！』

『逃がさないよ！』

『ええ、分かっているわ。受けて立ちましょう！』

接近する忍、琉花に対し、アウロラは持ち込んだロッドを振るい、攻撃魔法を放ってきた。忍と同じく、エクシード無しでもある程度戦えるのだ。とはいえ、これは予想通り。アウロラが魔術の専科を受けていたのは知っていたので、ここで簡単に終わるとは思っていない。

いくらかの攻撃を互いに交わしたあたりで、美海のレベルが4になった。

アウロラと妖精2人があくまでも離れないつもりなら、美海の突風で同時に吹き飛ばす。成功すれば、俊太側のプログレスがフィールド内からいなくなるので、これだけで勝利だ。

「美海、リンクする」

『おしー。来てー！』

力強い美海の返事を聞いて、彼女とαリンクを開始。5秒で成功。美海のエクシードが完全に解放される。

『行くぞー！』

「琉花！ 忍！ バックだ！」

『承知っ！』

『おっけー！』

打てば響くコンビネーションは、この数か月の努力の賜物だ。アウロラとの戦闘に集中していた琉花と忍が急に下がり、美海の風を安全に通せる状態に。

だが——やはり俊太も、甘くはなかった。

『極光よ!』

俊太とのαリンクが成功したらしいアウロラの呼びかけに応じ、フィールドに光のカーテンが引かれた。オーロラのように色が変わり続ける、思わず見惚れてしまいそうなほど美しいそれは、上空20メートル以上という高さから、フィールドを前後に仕切るようにたなびく。

そして、美海の突風を受けても、光のカーテンはふわりと揺れただけで、風の大部分は下へと逸らされてしまった。まるでそよ風に吹かれただけのような反応。春樹は直感する。

(アウロラのエクシード……見た目以上に、重いつてことか……!)

そう簡単にバトルは終わらない。だが、春樹にはそれが面白く感じられた。それは、彼とリンクで繋がっているメンバーも同じようだった。

(——出し尽くせるだけ、出し尽くせるってことだもんな……!)

……………

「20メートルなら日向は上を超えてくる。アウロラ、手を抜かないで、仕切り続けて」

『分かっているわ、大丈夫。フロリアとルビーを優先して』  
「了解」

ミニサイズのフロリアとルビーがアウロラと一緒に行動するという戦法の中で、一番のリスクはやはり、纏めてフィールド外に叩き出されることだろう。特に相手チームには美海がいる。それをみすみす見逃すわけにはいかない。

アウロラのエクシードドーン・イン・ザ・ヴァーミリオン《暁の極光》は、厳密に言えば少し違

うものの、オーロラのような光のカーテンを引くというもので、エクシードレベルが上昇すると、一度に引ける幅やカーテンの丈の長さが上昇するが、カーテン自体が重くなる、という効果もあるのだ。そして、何度も試した結果、レベル4まで上げれば相当な突風で

も防げることが判明した。

とはいえ、飛行する美海に対する明確な弱点もある。このエクシードは、カーテンのように発動した場合は、あくまでもカーテンの性質を持つ。カーテンは上から吊り下げるものである以上、上面を塞ぐことができないのだ。そして、ブルーミングバトルのフィールドに天井は存在しない。よって、美海がカーテンの上から入って来ることは十分に可能なのだ。

春樹が最初から美海のレベルを全力で上げに来ることは分かっていた。その時間稼ぎに忍と琉花が出てくるということも。その間、危険なのはルビーとフローリアだ。彼女らはそこそこのレベルを上げなければ戦えない。なので、最初の内はミニサイズのままアウロラにくっ付けておくことにしたので。これが、妖精2人のサイズ感を活かした『おひとり様モード』だ。アウロラが忍と琉花から同時に攻撃を受けることになるが、その琉花もまたレベルを上昇させなければ戦えないタイプのプログレス。レベル上昇していない時の戦闘力はそこまでではないだろうと判断し、アウロラには回避と反撃をメインに、レベル上昇の時間を稼いでもらう。

俊太とアウロラのリンク率は、春樹と美海のそれと大差ないほど高い。同じようにセカンドリンクを二重に結べば、レベル上昇速度はほとんど同じになるので、レベル4に到達するのもほぼ同時のはず。αリンクの判定時間は5秒で固定。全力でやれば、恐らく来るであろう美海の突風攻撃に間に合う。

こんな予想を立てて戦略を練ってみたが、結果としてはまあまあ上手くいっているようだ。

ブルーミングバトルはフィールドを制したものの勝ち。そして、相手にはフィールド全域に影響を及ぼすことができる美海がいる。一見不利なのはこちらだが、その美海すら制限できるアウロラがいる。

「やっぱ超えて来るか。当然だよな。アウロラ」

『ええ、やってみるわ』

予想通り、美海が20メートルのカーテンを飛び越して来た。その対処法は、もう考えてある。今の俊太が注視すべきは、むしろ下。

カーテンをぐぐり抜けてくるかもしれない、琉花と忍だ。

『すつごい綺麗です、アウロラ先輩！』

『ありがとう。美海ちゃんも、4月の時と比べて飛び方が変わったみたい。とても滑<sup>なめ</sup>らかね』

地上と空中で、アウロラと美海が対峙する。アウロラの両肩にはまだルビーとフローリアがしがみついている。琉花と忍は、カーテンについて調べて春樹に報告しているらしい。となれば、こちらに入ってくるのも時間の問題だろう。

アウロラは空中に向かつて幾筋もの攻撃魔法を放った。が、美海はその攻撃の隙間をすすると滑<sup>すべ</sup>るように躲<sup>すく</sup>していく。今までの『飛ばうとして飛んでいる感』のようなものが無い。これには俊太も感心せざるを得なかった。やはり彼女はチームの主力。鍛えるべきところをしつかり鍛えてきた。

その間にも、俊太はアウロラとのαリンクを切断し、セカンドリンクをルビーとフローリアの両方と結んでいた。2人の俊太とのリンク率は、どちらも90%前半と、アウロラほどではないが非常に高い。レベル上昇速度もかなりのものだ。レベルは2から3へと達しつつある。その一方で、データパッドによれば春樹も美海とのαリンクをいったん切りつた上で、こちらは琉花1人のレベルを上げにかかっているみたいだ。

(水を地面に流せば、確かにアウロラのエクシードじゃ防げない……でも、フローリアとルビーは飛行すれば影響は受けないから、仕切りが上手くいけば何とかなるか)

「アウロラ。那月のレベルが上がってる。多分水流してくるよ」

『了解したわ。——美海ちゃん、これはどうかしらっ?』

空中を自在に飛び回り、地面にいるアウロラ達を風で巻き上げようとする美海。攻撃というよりは、体力を消耗させようとしているのだろう。あわよくば、浮かせてフィールド外に放り出して勝利を狙う、といった感じか。だがアウロラの身体が浮く気配は一切ない。こうなることを見越して、自分に対する加重魔法を掛けているのだ。それに彼女は……失礼な話だが、高身長と肉付きのいい身体つきからし

て、そもそもかなり重い。

そのアウロラが杖を振って攻撃魔法を放ちながら、同時にエクシードのカーテンを張る。今もフィールドを真つ二つに仕切っているそれに比べれば小規模なものだが、攻撃魔法で美海の進路を誘導し、その先に配置することで、美海は頭から突つ込むことになった。

『ばぶぶっ！』

間の抜けた声と共に光のカーテンに包まれる美海。しかも、ここでさらに一計。エクシードを操って、カーテンで美海を巻き込んだ。そして、吊り下げられていたカーテンを、外したのだ。結果、美海は自身の重さで重力に従って落下していく。アウロラのエクシードは、他者のエクシードも通さないため、今の美海は風を操って飛ぶことができなない。これで大きな落下ダメージを与えることができる――

と楽観視したのも束の間。地面に落ちきるまでに何とか腕だけカーテンから突き出した美海は、その腕だけでエクシードを使用。風を操って横向きの突風を敢えて自身に当てることで、無理やり横向きのベクトルを加えたのだ。これによって彼女はオーロラのカーテンに包まれたまま落下したが、ゴロゴロと転がって軟着陸となったため、ダメージは大幅に軽減されてしまった。

(これは……間違いなく努力の賜物だな)

『うう……危なかつたあ！』

カーテンを振り払った美海は、あつけらかなとしていた。いや、それもそうだろう。きつとこうなることは予想済みだったのだ。

だが、それはそれでいい。このごく短時間、こちらのプログレスは全員がフリーだったのだから。

気が付けば、フィールドがさらに分割されている。今度は縦方向に。これでフィールドが4分割された。

そして、美海がいる区画からは既に、ルビーとフロリアが去っていた。縦方向のカーテンは忍と琉花を分断し、その区画にそれぞれがいる。

「正々堂々、タイマンでやろう」

.....

思い上がっていたかもしれない。俊太もアウロラも、よくやっている。

春樹は琉花に、フィールドの地面に水を流す作戦をキャンセルさせながら、変化した状況を整理するため、プログレスらに確認を進める。

「完全に分断されたな……忍、琉花、下くぐれるんだよな？」

『無論。しかし、向こうも追いかけてくるだけでゴザル』

『とりま、タイマン勝負を制するしかないってカンジっばい』

『美海は大丈夫か？』

『うん！ でもあれやられちゃうと、今度こそ落っこちちゃうかも』

「だよな……アウロラをフィールド外に押し出してから、忍に加勢するべきだな。よし美海、もう1回αリンクする。アウロラをフィールド外に出すんだ」

『オツケー！』

「他の2人はとりあえず対処だ。アウロラをフィールド外に出せば、オーロラみたいなカーテンも消えるはずだからな」

『承知したでゴザル』

『了解っ！』

美海とのαリンクを試みながら、フィールド内の様子を注視する。とはいっても、それは難しい。なにせ、アウロラのエクシードがフィールドの向こう半分を隠してしまっているからだ。もちろん、オーロラのようなカーテンなので、透けて見えるのだが、詳細なことは分からない。何より、その輝きで目がちかちかしてしまう。(ブルーミングバトルってことになる、かなり厄介だな、あのエクシード)

視覚妨害効果は、あくまでも副次的なものだろうが、それでも今はかなり効果的に働いていると言える。だが、これは逆に、俊太もフィールドのこちら側半分があまり見えていないということでもあるはずだ。であれば、こちら側にいる琉花と忍は、実質的に情報アドバンテージを得ている。奇策にすぐさま反応できないはずだ。



フィールドが横に分断された時にすぐ2人を入らせなかったのは、琉花のエクシードの性質を考慮したからだ。あのエクシードのカーテンは下を完全に閉ざしていなかったため、そこから水を流すことができた。そのまま遠隔で水を操って攻撃できれば、フィールドを分断するカーテンを逆に利用できると思ったのだが……。

美海とのαリンクが繋がった。それと共に、彼女はアウロラに猛攻を仕掛ける。美海の暴風に、フィールドを仕切っている光のカーテンが揺れたが、やはりそよ風程度の揺らぎだ。だが今の目的はアウロラだけ。

レイピアを振るいながら、美海はアウロラにヒットアンドアウェイ戦法で攻撃する。上空から落下しながら風で加速して一撃入れ、すぐさま再上昇するというそれは、シンプルだからこそ一撃の威力が高い。

驚いたのは、アウロラが美海の攻撃をまともに受けていることだ。アウロラもまた、美海への攻撃の手を緩めていない。攻撃に集中するあまり、自分へのダメージを無視しているかのようだ。

実際、プログレス側は、自分への攻撃を無視することができる。理由はもちろん、αドライバーが痛覚を肩代わりしてくれるから。しかし、そうやってαドライバーがダメージを受け続けて倒れてしまえば、そこでバトル終了だ。なので、プログレスはどこまで被弾を無視して強引に攻めてもいいか、予めαドライバーと相談しておく必要がある。これは必須項目と言えるだろう。

『春樹くん、だいじょーぶ!?!』

「ああ、耐えられる。とにかく攻めろ!」

『りょーかい!』

アウロラの攻撃魔法は激しさを増す一方だ。その勢いは、回避に全力を注ぐなら避けきれるとしても、反撃しようと思っただけある程度は受けなければならぬほど苛烈だ。だが、まだ大丈夫。大丈夫である限り、美海には攻めてもらう。この調子なら先に限界が来るのは向こうの方に思えるが……。

他方。琉花はフローリアの対処に追われていた。ウォータースラ

イダーのように水流を制御し、リボルバー銃<sup>みずでつぼう</sup>で着実にダメージを与え  
る——はずだったのだが。

『あーもう！ でつかくなったりちっちゃくなったり、なんかすごい  
ね！ 全然当たらないだけどー！』

『へへん！ リア、すごいでしょー！』

フローリアとルビーが、妖精サイズと人間サイズを使い分けること  
ができるのは知っていたが、まさかここまでコロコロと変えられると  
は予想していなかった。弾丸を受けそうになれば小さくなって身を  
躲し、水流に飲まれそうになったら大きくなって振りほどき、思うよ  
うに攻撃が通らない。ある程度のダメージにはなっているはずだが、  
未だに芯は捉えられていない。

そして、向こうもただ避けているだけではない。

『えいつ！ 花よひらけ！』

琉花の流水に向かって、ポシエツトから取り出した花の種子を投げ  
つけると、その水を吸い上げて巨大なアネモネが何輪も花開いた。思  
わず見惚れてしまう——

『っていけない！ これ、のぞみんの奴っばい！ 目が離せなくなる  
カンジのやつ！』

『げんわくまほー、って言うんだって！ キレイなお花は、みんなでみ  
るの！』

『マジか……結構ヤバいな。琉花、なるべく気を強く保って』  
『おうよー！』

フローリアが使えるのは、花を介した幻惑魔法らしい。確かに目が  
離せなくなる、というのは、前回のバトルで希美が使った『印象操作』  
による幻惑に近い。レベル5になっていたあの時ほど強くない（その  
時はフィールド外の春樹すら何も考えられなくなってしまった）のは  
確かだが、攻撃の合間に細々<sup>こまこま</sup>と使われると、これはこれで厄介だ。そ  
れにしても、あんな動機で魔法が使えるとは……

『つるよ、のびろっ！』

『うわ、こんなのまで……って、なんの攻撃方法もなしに来るわけない  
かっ！』

今度は種子から植物の蔓が幾本も伸びて、琉花に絡みついた。幸い、棘は生えていないようだが……もしかしたら、棘のある植物の茎を、このように出現させることで攻撃できるのだろうか……？

動きを止められた琉花だが、もちろんただでは倒れない。エクシードを操作して、彼女の正面に水の塊を渦巻かせ、さらに増幅させる。その一部だけを防御用に残し、後は全て攻撃に使用。

『動けなくなつて、何とかなるんだかねっ！』

『うわわわ——わっぷ！』

人間サイズでも飲み込めてしまうような水の塊を、まるでスーパーボールのように激しく弾ませ、フローリアを襲う。こうなればサイズはほとんど関係ない。大技の1つとして開発していたが、状況に上手く嵌る形となつた。

しかし、フローリアがどうやら溺れていないことは誤算だつたかもしれない。考えてみれば、水中にも植物は生えているし、水蓮スイレンなどは水中に根を張る。つまり、このマッチアップは春樹が考えていた以上に相性が悪い。

他方。こちらも春樹が軽視していた相性差が出ていた。忍とルビーのマッチアップである。

『星礫集いて大河と成せ！ 忍法・炎星流河！』  
フレア！シャワー

『ぬるいわ！ ルビーにとつてはこんな炎、たいしたことない！』

ルビーは忍の忍術をまともに受けても、平気な顔をしていた。俊太は相性を考えてルビーを忍に当ててきたのだろうが、炎がほとんど効かないのは流石に予想外だつた。これでは、忍はエクシード無しで戦っているも同然である。

『おかえしよー！ 紅玉よきらめけ！』

『くっ……！ こっちは効くんでゴザルよなあっ！』

返礼とばかりにルビーが放つたのは、胸元のブローチから発せられるオーラを用いた魔法攻撃らしい。忍は回避したが、彼女としても予想以上に範囲が広がったからか、僅かに食らってしまった、痛覚が春樹にフィードバックされる。バトルフィールドの効果で30%にカットされているが、そこそこ痛い。まともに食らったら大ダメージと

言っているいい威力だ。

こうなると、考えなければならぬのはマッチアップの変更だ。どうにかしてフロリアに忍を、ルビーに琉花を当てたいところである。変更できれば、植物は炎で燃えてしまい、炎は水に消されてしまうため、圧倒的に優勢となるはずだ。

だが、ここで問題になってくるのが、現在フィールドを分割しているアウロラのエクシードのカーテンだ。美海を拘束しようとしたものは小規模だったので何とかだったが、フィールドを縦横に4分割しているそれはかなり重く、持ち上げて下を潜ることはできるが、そうになると相手に背を向け無防備を晒すことになってしまう。それこそ格好的だ。さつきも感じた通り、特に忍がルビーに大して無防備になってしまったら、大ダメージを受けてしまう。

それに、例え対面を変えることができて、それは向こうも織り込み済みだと考えるのが妥当だ。アウロラがフィールド内に残っている限り、何かしらのタイミングでまたフィールドを仕切られ、有利な状況に戻されてしまうだろう。

つまり、エクシードのカーテンを維持していることも考えて、まずアウロラをフィールド外に出さなければいけない。そうすればカーテンも消えるはずなので、そのタイミングで琉花と忍が、それぞれルビーとフロリアを同時に叩く。

「不利だな……2人とも。隙を見てカーテンの下、潜れそうか？」

『こっちはムズいかも……フロリアちゃん、めっちゃ薦とか伸ばしてくるし！』

『こちらもキツそうでゴザルな。分身に引つかかってくれば可能やもしれぬでゴザルが……』

「さつきの威力からして、あれ食らったら一撃でピンチになりそうだもんな」

『私がどつちかに加勢するっていうのは？』

『美海殿。申し出はありがたいでゴザルが、今そうしても振り出しに戻るだけでゴザろう。また妖精の2人がアウロラ殿に付き添いながら我々を分断し、この対面に戻す可能性が高いでゴザル』

『うゝ、それだと確かに意味ないね……！ こっちは攻撃が激しくて、避けてるだけで精一杯、かも——っ！』

「分かった。美海はとにかく全力でアウロラに攻撃。琉花、忍。回避メインで、向こうの体力を削ごう。サイズ変化にもエネルギーを使ってるはずだから、限界はそんなに遠くないと思う。俺も耐えるから、頑張ろう！」

『りょーかい！』

『おっけ！』

『承知！』

春樹はチームメンバーに発破を掛けながらも、今自分が言ったことの真偽について疑問を持たざるを得なかった。

（限界がそんなに遠くない？ そういえば——この3人の限界って、どこにあるんだ？）

改めて考えてみると、そこが不明な点だ。同じ人間であるアウロラはまだいいとして、妖精であるフローリアとルビー。その体力の限界は、一体どうなっているのだろうか？ 既にエクシードを多用しており、サイズ変化も複数回行っている。それなのに、あの2人と来たらまるで疲れたような素振りを見せない。

思い返すと、先ほどの指示——『はずだ』とか『思う』とか、不確定な事ばかりを言ってしまった。だが、それも仕方のない話かもしれない。何せ、本当に知らないのだから。

一方で気になるのは、アウロラの反応もだ。先ほどから美海の攻撃をまともに回避せず、ダメージ覚悟で対空攻撃に全力を注いでいる。だがここで当然の疑問。なぜ回避しない？ そんなにダメージを受け続けたら、いつか俊太が倒れてしまう——そうなれば、彼女らの負けなのに。地面から空中を攻撃できるのだから、多少攻撃の効率が落ちるとしても、攻撃が迫ったら避けるべきなんじゃないのか？

今の攻撃状況は、煌めくカーテンに阻まれてよく見えないが、それでも美海よりアウロラの方が受けているダメージは多そう感じた、春樹の元にも鈍痛が時々入るものの、フィードバック率が30%なのもあって、これはまだ耐えられる。向こうは、どうなのだろうか？

『いづくよ——なんて!』

『え——ううっ?!』

そんな中、美海が何度目になるか分からない急降下攻撃、と見せかけて、攻撃が当たる直前でアウロラの真横に抜けた。ミスしたわけではない。そのまま流れるように彼女の背後に回り、

『襟掴んでごめんなさいっ!』

『あ……ぐっ!』

アウロラの服の襟を掴みながら、同時に腰を押すことで、彼女の足を地面から離すことに成功した。その瞬間、美海は再び気流を操り、浮かせたアウロラの身体を、自分を中心とした竜巻のような気流に乗せる。咄嗟の事態、激しい身体の動きに、彼女は対応できていない。

『えい——やあっ!!』

さらに美海は、渦巻く気流の一筋をエンドラインに向けて強く引き延ばし、同時にエンドライン付近に気流を自身に向けて引き寄せることで、循環する空気の性質を利用して一際強い突風を生み出す。こうなると、もうアウロラになす術はない。突風に乗せられた彼女の身体は、容赦なくフィールド外に放り出された。

ここ一か月間の猛練習。それが実を結んだことが、はつきりと分かる一連の流れに、美海は思わずガッツポーズ。

『やったあ!——これで——あれ?』

目的達成。アウロラをフィールド外に出すことに成功した——のに。一番の懸念点が消えてない。

アウロラのエクシードの、光のカーテンが、消えてない。

(な——どうして? それは、アリなのかよ……っ!)

春樹は、アウロラのエクシードの性質を決定的に読み違えていたことを知った。

……

「俊くん！ 大丈夫!？」

「俺は、大丈夫、だから——フローリア、ルビー。アウロラが出されちゃったから、協力して『仕切り直し』、だよ。フローリア、朝顔でいこう」

『はい！』

『フローリア！ すぐいくわ！ おみず、のんどきなさい！』

ジンジンと身体を苛む苦痛に屈することなく、俊太はフローリアとルビーに指示を出し続けた。そんな彼を心配そうに見つめるのは、美海によってフィールドから叩き出されてしまったアウロラ。

俊太が見るに、彼女もかなり大きなダメージを負っている。今は痛覚を全て俊太が引き受けているのでまだいいが、やはり美海の攻撃を何度も食らったのは悪手だったか、と少し自問してしまう。

(想像以上に、痛い——な)

それだけ、アウロラが受け続けていた美海の攻撃が苛烈だったというのだが、この程度で折れるわけにはいかない。まだバトルは終わっていないのだ。

この状況になった時、春樹がどのような対応をしてくるかは何パターンか考えていた。最悪のパターンは『アウロラを無視してフローリアを狙う』だった(フローリアは直接的な攻撃手段をあまり持たないため、強烈な攻撃を受けても反撃が行いにくく、すぐにダメージを蓄積させられてしまう)が、これなら幸いにもまだリカバリーが効く状況だ。

状況は、こちらが盤面を支配しているように見えるが、そもそもこちらのチームは出場させるプログレスについて大きな情報アドバンテージを持っていた。なので、ある意味この有利は当然のことである。むしろ春樹のチームは状況を見極め、手堅い手をしっかりと打ってきた。何度も思うが、こういうところに露骨な経験の差が出ている。逆の立場だったら対応できたか怪しいものだ。

だが、アウロラのエクシードの特異的な性質については、流石の春樹も読めなかったようだ。彼女のエクシードは、発動の際にエネルギーを消費することでオーロラのような障壁を生み出すというもの

で、こちらは承知済みだったが、一度発動してしまえば維持する必要がない。彼女とのαリンクが切れようが、発動者である彼女がフィールド外に出ようが、あまつさえファーストリンクを切断した後（つまりバトルから抜けた状態）だろうが、この障壁はずっと残り続ける。そして、攻撃を受けて破壊されるか、もう一度彼女がエクシードを用いて消去を念じるか（この場合は少なくともファーストリンクを繋いでフィールド内にいる必要がある）——このいずれかに該当しない限り、勝手に消えることがないのだ。つまり、オーロラのように神々しく幻想的な見た目に反して、物体を生成するようなエクシードに近い性質を持っていると言える。

恐らく春樹は、アウロラをフィールドから退去させることができれば、同時にアウロラのエクシードの影響が終了し、フィールドを仕切るオーロラが消えると踏んだのだろう。だからこそ、まず全力を注いだのが美海によるアウロラへの攻撃だった。もし目論見通りに事が運べば、残った妖精2人を攻撃することで勝利を狙えたはずだ。フローリアとルビーに対して好相性なのは、それぞれ琉花と忍。だが、このマツチアップが逆転すると、途端に不利になる。そこにフリーとなった美海も手を出せば、まず勝ち目はない。

（春樹さんにしては迂闊だった——いや、こんなの読めないだろ、普通。だからこの状況は、当然なんだ）

アウロラのエクシードの特性は、俊太たちですら練習開始から1ヶ月後によくやく判明した事実である。そしてアウロラは1年生のころ、というより俊太の前以外で、ろくにエクシードを使ってこなかった。なので、実質初見で分かるはずもない。

「とりあえず、何とか作戦通りに、エクシードを変形させたわ」

「ありがとう。上手くいってるよ。さ、2人とも。アウロラが帰ってくるまで、耐えるんだ」

『おっけー！　いっくよー、ルビー！』

『きょうりよくするわよ、フローリアー！』

アウロラは、美海によってフィールド外に飛ばされる瞬間、フィールド内を4つに分断しているオーロラに対し、ある操作を行って



た。前後に仕切る1枚を消去し、左右に仕切る1枚を変形させていたのだ。

今、フィールド内のオーロラは、さながらサッカーコートのあるターサークルの上に引き延ばしたように、ほぼ中央で円筒形になっている。そして、その内側にはフローリアと琉花が閉じ込められている。

そこに、紅玉のブローチから発せられるオーラを用いた魔法を使うルビー。発動したのは、短距離の転移魔法だ。本来はとても難しい魔法だが、本人がミニサイズに縮まることで、拙い術式でも転移できるように調整してある。ルビーの努力の賜物だ。

『なっ——逃げるでゴザルか!?!』

『ゴメン！ あとでね!』

ルビーにとつて有利な対面だったからこそ、自主的に退くとは思わなかった忍の反応が一瞬遅れ、まんまと転移を許してしまう。その転移先は、フローリアと琉花が閉じ込められている、中央のカーテンの中。

そして、そのタイミングを見越して、俊太はフローリアとαリンクを結んでいた。

(時間稼ぎだけど——上手くいってくれよ)

そう祈る俊太の視線の先に、美海がカーテンの上から中央のサークルに入ってこようとするのが見えた。2対2になることを狙ったのだろう。が、実はこれこそが狙いだった。

「今だ!」

俊太の合図で、フローリアとルビーが同時に動いた。まずルビーが、αリンクを結んでいない状態で最上級のオーラをブローチから放つ。そしてフローリアがポシエットから数個の種を投げ、それらに対して思い切りエクシードを発動。すると、先ほどまでのものとは比べ物にならないほど巨大な蔓が伸び出した。

『うわああああっ!?!』

蔓に襲われた琉花の悲鳴。爆発的に伸びた蔓は、琉花のエクシードに必要な水の塊をこっそりと吸い上げて成長したのだ。こうなつて

しまうと、琉花はお手上げだ。

藻掻く琉花を拘束した蔓だったが、すぐに空に向かって花を咲かせ始める。何百輪もの鮮やかな朝顔の花だ。上空からそれを見てしまった美海に、異変が起きる。

『わあ、綺麗な朝顔……』

『やばー！ みうみんなが幻惑魔法に掛かっちゃった！』

フロリアの幻惑魔法だ。普通に発動する分には、範囲も効果も、実はそんなに大したことはない（元はといえば、近づいてきた人に対するイタズラが目的なので仕方がない）のだが、今はルビーがサポートしているため、かなり距離がある美海に対しても効果が出ている。そして、魔法の発動源たる花に近づけば近づくほど、影響は大きくなる。ふわふわと降りてきてしまった美海は、朝顔の花を見渡すので頭がいつぱいのようだ。

これが、アウロラがフィールド外に出されてしまった時用の作戦、名付けて『仕切り直し』だ。マッチアップ的にフロリアのそばにいるであろう琉花を拘束した上で、ルビーがフロリアの幻惑魔法をサポートすることで上空の美海や離れた位置にいる忍を行動不能にする。アウロラがフィールド内に戻ったら、再度エクシードでフィールドを『仕切り直す』というわけだ。

今回の場合、忍はこの状況下で唯一自由に動けるが、動かない。理由は単純で、植物に火を付けたら、それに拘束されている琉花が一番のダメージを受けてしまうからだ。

が、ここで俊太も、読みの甘さを知ることになる。

『まるで拙者が、火しか能がないとでも言いたげな作戦でゴザルな！』  
カーテンの外から、その下の隙間に向かって忍が投げたのは、金行符。呪術によって誘導されたそれはカーテンの内側に入り込み、金属の刃へと変わる。そして、あつという間に琉花を拘束している蔓を切り払った。

『あー！ つる、きつちやダメー！』

『ごめんね！ あんがと、シノ！ よっしや、練習の成果、見せてやるぜ！』

拘束から解き放たれた琉花は、忍が生成した刃の持ち手を握り、同時に懐から水行符を取り出す。そこに力を込めて水を生成——そこに、忍から教わった一工夫を取り込む。力を水行符に、そして手に持った刃にも流すのだ。五行相生の、金生水ごんしんしょうすい。金気は水気へと生ずる。生み出された水の量は、普通に使った時の倍以上。呪術師ですらかなりのセンスを要する五行相生だが、琉花はエクシードの助けも借り、この難しい技を土壇場で見事決めて見せた。

『やった、シノ！ 上手くいったよ！ ほらみうみん！ 目え覚ます！』

『うわわっぶ——はれ？ 私何して——あ、さつき言ってた幻惑魔法か！』

琉花によつて頭から水を掛けられた美海も、その衝撃で我に返つたようだ。これで、作戦は完全に破綻した。それでも俊太は冷静に状況を分析しながら、後の作戦を考え直す。

（一気にダメになっちゃったけど……まあ、当初の目的は何かとなつたって感じか）

この作戦の目的はあくまでも時間稼ぎ。目一杯稼げなかつたとしても、とりあえずどうにかなればいい。もし作戦がぼつちり嵌つたら、アウロラをエクストラプログレスゾーンに入れてレベルを4に戻してから再出場させたが……。それに、こういう時のために、この作戦は円形のカーテンの内側で発動したのだ。稼がなければいけない時間は、あと10秒。

琉花は、相変わらずフロリアに対処させればいい。この絶対的な相性差は覆らない。問題はルビーだ。

「フロリア、幻惑魔法を解除して、さつきみたいに那月と戦って！ ルビーは下の戦闘に巻き込まれないくらいまで上昇して、日向が下に来ないように見張って！」

カーテンを円形に変形させたのは、美海の風に吹き飛ばされてもフィールド外に出されないようにするため。ルビーはなるべく相性がいい忍と交戦させたいが、そのためにカーテンの外に出てしまうと、美海の攻撃も受けることになる。そして、妖精2人はアウロラよ

りも遙かに軽いいため、ダメージを受けるといふより暴風で吹き飛ばされる可能性が非常に高い。よつて、今のあのサークル内は、この状況においてとても安全な領域なのだ。人数不利の状況なら、わざわざ無理に交戦する必要がない。今は安全な領域を確保することに注力すべきだろう。

懸念すべきは、この目論見を春樹が見抜いた時に、どんな作戦を取ってくるかだが——所詮は10秒。気付いたところで今さら対策のしようがあるはずもない。となれば狙ってくるのは自ずと、再入場するアウロラになる。だから俊太は注視する。案の定、美海は中央のサークル内に戻らず、忍のそばに向かった。上手くいった。

「アウロラ、日向と風魔が狙ってくる。エクストラプログレスゾーンに20秒だけ入つて。αリンク成立と同時にレベルが4になるから、オーロラを制御して元の態勢に戻すんだ」

「分かったわ」

春樹が中央のサークル内の対処を放棄したのなら、それは自動的に時間が稼がれるということの意味する。なら、その時間は有効に使うのが一番だ。

フィールド外のプログレスが1人だけ入ることができるエクストラプログレスゾーン。その中にいるプログレスのレベルは、フィールド内にいる状態の半分の数でエクシードレベルが上昇する。リンク率が100%に程近いアウロラのレベルが、フィールド内で1上昇するために要する時間は、約15秒。一方で、αリンクの成立に掛かる時間は5秒。エクストラプログレスゾーンで20秒——フィールド内での10秒——を稼いでおけば、フィールドに入ると同時にαリンクを開始することで、全力を出せる状態が一気に整うという寸法だ。

イメージは、先ほどのバトルの冬吾の作戦。使えるものは全て使つて、勝利する。そのために状況を鑑み、可能性を考慮して、作戦を決める。

考えるのだ。10秒あれば何ができる？ 20秒なら？

そんな中、フィールド内でまずいことが起こり始めた。美海と忍

が、中央で円形になっているオーロラのカーテンを、外側から破壊し始めたのだ。俊太は知る由もないが、アウロラのエクシードは布のよ  
うな性質を持つため、それを断ち切る金属による攻撃に弱い。もちろ  
ん、エクシードレベル4の状態で発動したもので簡単には破れな  
いだろうが、間違いなく20秒は持たない。そして、あのカーテンが  
破壊されてしまうと、恐れていたことが現実のものとなってしま  
う。ダメか……アウロラ、すぐ入って。ルビー、アウロラが入ったら教  
えるから、ミニサイズになってからフローリアを連れて、彼女の元に  
移して。『おひとり様モード』で体勢を立て直そう」

「その方が良さそうね」

『わかったわー!』

「フローリアはなるべく水を摂取して、パワーを貯めておいてね。あ  
と、ルビーが連れ転移できるようにミニサイズになっておいて」

『はい!』

「アウロラは『おひとり様モード』になったら、あのカーテンは放棄し  
ちやつて。そこからは——ちよつとズルいけど『アパート作戦』だ」  
「ええ、信じてるわ。大丈夫よ」

「よろしくね。じゃあ、行くよ——」

大規模な作戦の変更は、やはりドキドキする。下手すれば一気に負  
ける可能性だってある。それでも、このままではいけないことだけは  
確かだ。だから動くのだ。不安でも、怖くても。

アウロラの退場から30秒経った。と共に再入場。同時にルビー  
が急降下してフローリアを捕まえ、彼女を巻き込んだ転移魔法でアウ  
ロラの両肩に。アウロラは美海たちが破壊しようとしていたカーテ  
ンを放棄して消滅させる。俊太はフローリアとのαリンクを切断し  
ながらアウロラとセカンドリンクを2重に結び、即座にレベル4に上  
昇させる。そして、αリンクを結ぶ——。

(この10秒、持ってくれ!)

そう祈ってはみたが、やはり甘くはない。眼前のカーテンが消えた  
ことで、美海・琉花・忍はアウロラに向かってきた。しかも分断を防  
ぐためだろうか。お互いの位置はかなり近い。

考えてみると、今はバトル開始時と同じ状況だ。ただし、全員のレベルが上がりきっていることを除いて。その中でフィールド全体を支配するエクシードを持つ、こちらのアウロラと、向こうの美海。本当にフィールドの支配者となるのはどちらか、勝負だ。

真つ先に美海の放った突風がアウロラに直撃する。肩に掴まるフロリアとルビーは、吹き飛ばされないようにするだけで精いっぱいだ。

だが、真つ先に飛んできたのが『それ』だったおかげで、命拾いした。琉花の水鉄砲や忍の苦無くぬであつたなら、余計な防御をする必要があつただろう。

その僅かな時間が、アウロラにとって有利に働いた。

『いくわよ——』

こちらに向かつてくる美海・琉花・忍の位置がそれぞれかなり近い。——が、それは少し違う。正確に言えば『フィールドを真上から見下ろした際の互いの座標』が近い。事実、美海は琉花と忍の上を飛行している。アウロラのエクシードがフィールドを縦横に仕切るものである以上、この位置取りは厄介だ。これは春樹の指示によるものだろう。

——アウロラのエクシードが、本当に『フィールドを縦横に仕切るもの』であれば、だ。

『私のエクシードは、オーロラの発現。誰も——』

アウロラのエクシードが発動し、僅かに先んじていた忍の真後ろにオーロラが出現した。美海と琉花はそのまま突っ込んでしまったが、先ほどとは様子が違う。カーテンのように包まれるのではなく、トランプリンのように弾き返されたのだ。

『あ、あれっ?』

『下を固定できない、とか——』

今まで上端で固定されていたためにカーテンのようだったそれが、裾の部分も固定されていることで、弾力のある壁になっている。

さらに、美海がオーロラの壁に弾き返され、落下したのは地面、ではなかった。そこもまたトランプリンのように弾力のある——オー

ロラ。

『地面と水平方向に展開できない、とか——言っていないわ』

今までと全く違う。サッカーコートほどの大きさがあるフィールド全体が、地上10メートル程度の高さで、地面と水平にスライスカれるように仕切られている。

さらに、フィールドの外周を囲うようにもオーロラが出現していた。こちらもカーテンではなく、高さ15メートルほどの壁のようだ。しかも、その壁に蓋をするかの如く、天井のようなオーロラまで。

『い、今までののは——前座だったということゴザルな?』

『そういうことよ。これからが本番。正々堂々、戦いましょう』

アウロラのエクシードは、布のような性質を持つオーロラが出現させるもの。基本的にはそれだけであり、地面と垂直方向に展開して上端を固定すればカーテン『のように見える』だけなのだ。つまり、上端だけでなく裾も固定すれば壁のようになるし、地面と水平方向に張って外周を固定すればトランポリンのようになる。今まではフィールドをカーテンで『なんとなく仕切っていた』が、今回は完全なる仕切りになっている。

これが、俊太とアウロラが考え出した『アパート作戦』。フィールドを縦横に、そして上下に仕切り、相手プロGRESSを分断することで連携を無力化する。天井と壁も作ることで、妖精2人と美海の存在的から一番のネックとなっていた『フィールド外への退場』も無力化する。特に美海を『上に』閉じ込めておけるのが、この作戦の大きな利点だ。今までのように、アウロラのエクシードを無視して飛んで来ることはできない。一方、今回は仕切りの裾も地面と接触させて固定しているため、最初にやろうとしていたであろう琉花が隙間から水を流すという作戦も、使えない。

これだけのことを一気にやってのけたアウロラの消耗は当然ながら莫大だが、こちらはフロリアとルビーが健在だ。美海と琉花をひとまず無力化した上で、こちらは3人で忍1人を叩く。

(問題は、この仕切りがどれだけ持つか、だけど……今は考えても仕方ないか)

『3対1で正々堂々も無いでゴザろうよ』

『あら、実質1人みたいなものよ。私、かなり消耗してしまっただし』

『リアとルビーがなんとかするよー!』

『さあ、さっきのつづきといくわよ!』

『——美海殿、琉花殿。春樹殿の指示を仰ぎながら、なる早でご助力願うでゴザル』

『分かったよ!』

『オツケー! って言っても、どうすんのさコレ……!』

早速美海が手に持ったレイピアを床のオーロラに突き立てようと奮闘し始めた。が、立っている地面も布のようなもので、上手く踏ん張れていない。それに、美海が破ろうとしている水平方向のオーロラは、アウロラが最も力を入れた1枚だ。そう簡単には破れないだろう。おまけに美海は現在、地面と天井両方のオーロラに挟まれており、その高さは5メートル程度。美海が得意とする『落差を活かした攻撃』が行いにくくなっているのだ。

琉花もエクシードで壁を破ろうとしているが、こちらも上手くいっていないようだ。壁の下からの浸水が無いかも調べているが、アウロラはそんなミスはしていない。

『ルビー、αリンクするよ。アウロラを守りながら、風魔と戦って』

『わかってるわ! さあ、きて!』

データパッドを見ると、春樹がαリンクしているのはやはり忍だ。つまり、全力勝負に応じたということだろう。

『では、遠慮なく行かせてもらおうでゴザルよ! ——赤く焦げ付く標しるべを示せ! 忍法・炎赤焦準!』

忍が唱えると同時に、アウロラの立つ地面、その周辺が赤く光り始めた。俊太は条件反射的にこう思った——アクションゲームで、ボスキャラクターの攻撃予定位を表示しているかのようだ、と。

ゲームでも現実でも、あれほど露骨な合図が出れば、普通は避ける選択するだろう。だが、それが向こうの作戦のはず。俊太は敢えて受けることにした。まだ耐えられる。耐えて見せる、と自分に言い聞かせながら。



『アウロラ、動かないで！ ルビー、防御を！』

『ええ！』

『紅玉よ、きらめけっ！』

ルビーが胸元で手を組み、ブローチから発せられるオーラでアウロラとフローリアごと自身を包み込んだ。その瞬間、忍の次の術が発動する。

『星礫集いて大河と成せ！ 忍法・炎星流河！』

『またそれっ!? ルビーにはきかないって、いつてるでしょ！』

忍が放ったのは、先ほどと同じ術。流星のような炎が幾筋もルビーに殺到する。こちらは防御を固めている上に、そもそもルビーが炎への耐性を持ったため、ダメージは無いに等しい。

しかし俊太は見逃さなかった。先ほどと決定的に異なる点があったのだ。それは、流星の着弾点。先の術は着弾点がたためで、どちらかといえば『流星の通り道で当てる』という感じだった。だが今回は流星の着弾点が一発も漏れることなく、先に放った赤い光の円の中に収まった。狙って打ち込んだ——というより、やはり炎赤焦準は誘導専用の術なのだろう。そういえば、魔術の専科を取っているアウロラから、そういうった類の術が存在することは聞いていた。

ただ、先ほどルビーに効かなかった術を、何の考えも無く打つてくる忍だとは思えなかった。ということは、今の一撃は『炎赤焦準の効果を教えるため』なのだろう。

(そこに、罨を仕掛けるってことか)

正直言つて、忍にはこの相性差をひっくり返せるだけの實力があるということ、俊太は確信していた。今のは初見の術の効果を知りたかったので敢えて危険を冒したが、もう迂闊な手は打てない。もし今のが、前回のバトルで見せた、特に厄介そうな炎鎖戒牢フレイズ・プリズンだったら、防御していても拘束されていた可能性もあったのだから。

「爆炎の如く疾く走れ！ 忍法・炎輝加速！」

バースト・ブースト

考える暇を与えないようにするかのよう、忍が次の術を唱える。攻撃——ではない。彼女の足元が爆発し、その勢いのままアウロラに突っ込んできたのだ。俊太の反応も、アウロラの防御も間に合わな

い。ルビーの防御も切れかけ。このタイミングで近接戦に持ち込まれるとは……。

『——ふっ！』

『やはり、近づかれると困るのでゴザルなっ！』

『ええ、その通り——よっ！』

殴る。蹴る。また殴る。アウロラは何とか対処しているが、身体能力は明らかに忍の方が上だ。俊太には何度も鈍痛がフィードバックして来ている。となれば、こちらは数で対抗するしかない。

『おひとり様モード』解除だ。ルビー、一端離れて支援して！』

『おっけーよ！』

『リアはく？』

「フローリアはそのまま！ αリンクするから、風魔の足を掬うんだ！」

『はくい！』

俊太の指示通りにプログレスが動く。ルビーが人間サイズに変化しながらアウロラの元を離れ、忍の後ろに回る。フローリアとαリンクを開始し、結ばれ次第攻撃を始める。

だが——俊太は1つ見逃していた。それは忍の左足裏に残ったバースト・ブースト炎輝加速。この術は1回で左右の足裏に術式を装填し、片方ずつを任意のタイミングで起爆できるのだ。今は接近するために右足の術式のみを消費している状態。

『済まない、でゴザルっ！』

『え——きやあっ!!』

ルビーが後ろに回った瞬間、忍はおもむろに左足裏をアウロラの方に向けて、残っていた術式を起爆させた。爆発と共にアウロラから離れる方向への推進力を得た忍は、そのまま自分の真後ろにいたルビーに体当たりを仕掛ける。ルビーの防御は、炎による忍術攻撃を防げても、物理的な攻撃はあまり防げない。不意打ちとなればなおさらだ。その弱点を見事に突かれ、俊太は大ダメージを受ける。

「ぐっ——！」

先ほどアウロラに無理やり攻めさせたため、蓄積しているダメージ

は大きい。思わず地面に足を付きかけて——何とか堪えた。だが、フィールド内の状況は悪くなる一方だ。

アウロラとフロリアは、爆発と一緒に放たれた閃光により一時的に視界を奪われてしまった。体当たりをもちに食らってしまったルビーは、突然の衝撃に目を回している。忍が、完全にフリーになっているのだ。

一時の自由を手に入れた忍は、まだ加速の勢いを残したまま、琉花が破ろうとしているオーロラの壁に向かって苦無を投げた。分厚いとはいえ、オーロラは布のような性質を持つため、貫通こそしなかったが、容易に突き刺さる。そのままダツシュして壁に到達すると、忍は突き刺さった苦無の持ち手を掴み、強引に動かしてから引き抜いた。破れてはいないが、壁に大きな亀裂が入る。

『琉花殿！　ここを狙うでゴザル！』

『あんがとシノ！　おっしやいくぜ！　避けてな！』

壁の向こうの琉花は腰からリボルバー銃を抜いて構えた。そのエクスシードにより、周囲の水が勢いよく圧縮・装填されていく。止めたいが、こちらからは手出しのしようがない……

『Baaaaang!!!』

爆音と共に銃口から発せられた水の勢いは、今まで見てきたそれとは比較にならないほどだった。まるで大砲だ。忍が傷つけた箇所には裏から当たった水の銃弾は、いとも容易く壁を貫通する。いや、貫通したというより、加えられたエネルギーの多さに弾け飛んだかのようなのだ。

しかも、その余波が接触部分を介して、フィールドを覆っているオーロラの壁と天井全体に広がっていく。そして、少なからず揺らいだその瞬間を彼女は狙っていた

『おりやああああ！』

『ナイスみうみん！　どいてな！』

ついに美海のレイピアが床を貫いた。その場所を琉花が、上に向けた銃口から放たれた水の銃弾で反対側から穿ち、美海が下りて来られるだけの穴が開いてしまった。

（アウロラの体力的に、もう『仕切り直し』はできない……休める時間があれば何とかなるかもしれないけど、壁のオーロラを放棄してエンラインから出したところで、フロリアとルビーが袋叩きにされるだけだ。消耗からして、フィールドから出ている間の30秒間で体力を回復できるとも思えない）

何とか起き上がるフィールド内の3人を叱咤激励しながら、俊太はひたすらに思考を巡らせる。

（残った壁の向こうに転移魔法で逃げる手もあるけど、そうするとルビーの体力確保が難しくなる……向こうの3人が合流したなら、壁の2枚や3枚なんて、30秒も持たないだろうし）

考える。ここから勝利する手を。頑張ってきたのだ。だから必ず手はあるはずだ。

（いつそのことフロリアごとアウロラを退場させるってのは？ ルビーだけなら逃げる時間も……いや。そうしたら逆に攻めてこなくなるだろ。今度は向こうに、迎撃するための準備時間をあげることになるだけだ。再入場の隙を狙われて、より戦況は悪くなる）

手は、あるはずなのだ。そのために今日まで頑張ってきた。お互いを理解し、信頼し合ってきたのだ。色々な状況を考え、それに対抗するために、手段を考えてきた。

（しかも、向こうはまだ、前回のバトルで見せたレベル5を出してない……アウロラの制御がない状態で日向にレベル5になられたら、あの壁もまとめて吹っ飛んでしまう）

ピースが足りない。この状況を改善できる明確な手段が見つからない。どこで間違った？ いや、今はそんなことよりも、目の前の事態に対処しなければ。

（アウロラともう1回αリンクして分断するか？ いや、それも難しい。生半可な分断じゃ、逆にこっちが閉じ込められて不利になる。向こうもギアが上がってきて……有利なマッチアップを強いたとしても、今のアウロラに日向を引き留め続けさせるのは酷だ）

身体中が痛覚に苛まれている気がする。考えるのが辛い。現実味が薄れる。

(——このまま負ける、のか)

『俊くん』

不意に、アウロラの声が聞こえた。慌ててフィールド内に視線を戻すと、彼女はこちらを見つめてにこやかな笑顔を作っていた。

『全力でやるわ』

彼女から送られたのは、たったの一言。しかし、そんなたった一言が、今の俊太にとっては何よりも嬉しい言葉だった。

「……全力で耐えるよ」

足にしっかりと力を入れ、手の平で頬を叩いて気合を入れ直し。

「3人とも。全力で、やってくれ」

それが今できる、一番の指示だと確信して言った。

作戦は尽きた。手段も無い。

(でも、俺はまだ立ってる。だからまだ終わらないぞ。終わってたまるもんか)

俊太はフィールド内をしかと見つめ、覚悟を決めた。

……………

忍の活躍に美海と琉花の尽力が合わさって、どうにか体勢を立て直すことに成功した。

アウロラがエクシードを使用しないあたり、流石にエネルギー切れのようだ。これだけのことを一気にやってのけたのだから当然と言えば当然だが、それでもまだ戦えるらしいことには驚嘆してしまう。ここまで体力的にタフなプログレスは、学園内でも彼女くらいのもだろう。

「何隠してるか分かんないからな。慎重に、それでいて大胆に行こう。美海は上から、忍は寄って、琉花は遠くから」

『りょーかい!』

「琉花。今はルビーがフリーだ。相性的に、積極的に狙って」

『よしきた、任せな!』

「忍はさつきみたいになるべくアウロラに近接戦を仕掛けて。多分、

あれ効いてるから」

『任せるでゴザル』

「美海はシンプルに、ヒットアンドアウェイを繰り返すんだ。忍とタ  
イミングを合わせて」

『分かったよ！ 忍ちゃん、合わせるね！』

『承知したでゴザル』

幾枚ものオーロラの壁に阻まれて、戦況が上手く把握できない。し  
かし、報告を聞く限りでは大丈夫そうだ。依然としてフィールドの外  
周は壁に覆われていて、退場させる作戦は使えないが、手堅く攻めれ  
ば勝てるだろう。

『いっくよー！』

『ああ、先走っては——仕方ないでゴザルなあ。拙者も掛かるでゴザ  
ルよー！』

『受けて立つわ！ フロリアー！』

『おーし！ はんげき、しちやうよー！』

向こうはフロリアとαリンクを結んでいる。彼女はポシエツト  
から花の種をばら撒き、そこから花を咲かせた。燦然と輝くような  
向日葵ヒマワリの花だ。また幻惑魔法か？ と思ったのも束の間。

『いっけー！ ひまわりびーむ！』

『うわちよっ——』

上空から攻める美海の方を向いた向日葵が、一斉に光線を発射し  
た。そんな攻撃ができたのか——と思っていたが、それに直撃した美  
海からほとんど痛覚がフィードバックして来ない。

『ま、眩しいっ!? 前見えない！』

『出鼻を挫かれたでゴザルな。美海殿、風は如何いかがでゴザろう？』

『あつ、そっか！』

どうやらあれは視界を封じる魔法だったようだが、成長した美海は  
周囲の気流を感知することができるようになっていた。その応用で、  
ある程度視界を塞がれても大丈夫なのだ。とはいえ、実戦でいきなり  
視界喪失状態になるとは思わなかったが……

「美海、下がれそうなら下がって。流星に危ない」

『えっ、うごけるの!?!』

『動けちゃう! ゴメン忍ちゃん! 一旦引くね!』

『無理しないで頼むでゴザル』

『流石に予想外ね……』

結局美海は、せっかく近づいたのに再度離れた。その際、気流を感じたからか、先ほど琉花が閉じ込められていた壁の亀裂を通って、その向こう側に隠れた。そこなら流れ弾を受ける心配はない。指示はしていなかったが、いい状況判断だ。

『ルビーって水に弱いのか?』

『炎のちからはよわまるけど、石はとけないわ!』

『そりゃそっか。んじゃ、お相手頼むぜ!』

『ま、まけないんだから!』

その傍ら、琉花もルビーとの交戦に入った。スライダーのような水流、リボルバー銃、水の盾。覚えてきた技を次々と繰り出してルビーを着実に追い詰めていく。そして、

『流水つてさ、30センチもあれば立つてらんないらしいよ、つと!』

そう軽口を叩きながら狙ったのは、少し離れた位置で交戦しているアウロラ。飛ばした水の塊がアウロラの膝から下を掬い上げ、その勢いでアウロラはいとも容易く転んでしまった。

『きやつ?!』

『ちよ、ヒキヨーよ! いまはルビーのあいてでしょ!』

『そーだそーだ!』

『今は言いつこなし! 後でいっばいゴメンするから! シノ!』

『分かっているでゴザル』

アウロラが尻もちをついた隙を狙う忍。アウロラは間一髪で避けたが、明らかに消耗している。返礼とばかりにフローリアが花の魔法を放つが、忍のエクシードの炎によって焼かれてしまった。

『うー! やっぱあいしょーわるいよー!』

『泣き言言わないの。応戦あるのみ……って、復帰早いわね、美海ちゃん』

『まだ結構ちかちかしてるよ!』

『無理するなって言ったでゴザろうが……』

『またひまわりびーむ、うちやうもんね!』

『それ、言ったらダメなのよ、フローリア』

そこに美海も復帰し(かなり無理やりのようだが)、戦況はこちらに大きく傾いた。反撃による痛覚が時折発生するものの、与えているダメージはこちらが明らかに上だ。

そんな中、春樹は疑問に思った。どうしてバトルが終わらない？

多分、このくらい攻撃を加えれば俊太も倒れる、と思ったのだが……。

もう数分も交戦が続いている。アウロラもフローリアもルビーも、流石に限界が近そうだ。ルビーが何とかミニサイズになってアウロラの元に転移し、彼女の背中にしがみついて隠れた。アウロラは背中に隠した妖精2人を守るために、こちらの3人を同時に相手にしている。エクシードも用いてなんとか攻撃をいなしているが、ダメージは着実に入っている。当然、反撃する暇もないので、もはや一方的なりんちのように見えてきてしまった。

……なのに、バトルは終わらない。

不審に思った春樹が目を凝らすと、反対側のαドライバーゾーンに立っている俊太は——普段の彼からは想像もできないほど顔を歪めて、必死に立っていた。

(なんで、まだ立ってるんだ)

その俊太が、叫ぶ。

「戦えー！ 耐えるから、戦えー！」

その叫びは、幾重もの極光の壁を通り抜けて、春樹の耳を強烈に打つ。

瞬間、春樹は戦慄せざるを得なかった。本能的に感じたのは、恐怖といつてもいい。

いくら攻撃しても、倒れない。

ブルーミングバトルに出場するαドライバーが、もしそんな奴だったら。それは、敗北条件を1つ無視しているようなものだ。だが春樹が感じたのは、そんな理屈っぽい恐怖ではなく、もっと本能的なもの。倒せない相手。ただそれだけ。



今自分は、そんな奴を相手にしている。その実感に、背筋が寒くなった。

『は、春樹くん……っ！』

『ど、どーすんのさー。このままやり続けんの……？』

「そ、それは……」

アウロラは既にボロボロだ。しかし、俊太の渾身の叫びを聞いた瞬間、それに呼応するかのようには攻撃魔法を放ち始めた。美海は回避し、琉花は防御しながらも、普段の穏やかさなど一片も感じられない気迫に怖気づいてしまっている。

いや、怖気づいているのは春樹も同じだ。美海と琉花の逡巡に、言葉を返せない。

そんな3人に激励の言葉を叩きつけたのは、一念を通し続ける忍だった。

『やるしか、ないでゴザル！ 2人とも！ 春樹殿も！』

その声はわずかに震えていた。きつと彼女も怖いのだろう。だが、彼女の言う通りだ。やるしか、ない。勝つためには。

『全力で、やってくれ！』

『……っ。わ、分かった！』

『しよ、しよーがないよね！ やるよ！』

そこから始まったのは、お互いに戦略も何もない、ただの全力のぶつけ合い。向こうは防御を無視して攻撃しているので、春樹にもどんなダメージが蓄積していく。このまま押し切ってしまう……！

ただ、恐怖が消えない。俊太は依然として立っている。春樹の何倍ものダメージを受けているはずなのに。大丈夫だ、勝てる、と何度自分を奮起させてみても、どうしても心の端に残っってしまう恐怖から目を離せないのだ。

もし自分が先に倒れたら？ 正直、春樹の限界も近かった。そして、自分が限界に近づきながら、向こうの底知れない限界を覗き込む感覚に、恐怖が増幅していく。

『負けるわけには——いかない、のっ！』

『うぐうっ?!』

その恐怖が伝播してしまったのだろうか。アウロラの攻撃魔法が美海にクリーンヒットしてしまった。そのフィードバックで、春樹の膝が折れかける。

（た、耐えなきや——負ける！）

意地でも耐える、ではなく、耐えなきや負ける。恐怖が意地を蝕んでいた。

攻撃魔法が、美海に、琉花に、忍に突き刺さる。その度に春樹は、大岩の如き絶望感が背中に叩きつけられているように感じた。

あと何度、限界を超えればいいんだ——

絶望的な気分になりそうになった——が、ふと気が付くと、全ての痛覚が消えていた。

『永瀬俊太チームのプログレスのファーストリンクが全て切断されました。よって、神城春樹チームの勝利です』

そんな感じのアナウンスがぼんやりと聞こえた。どつと押し寄せた安堵に、春樹は思わず座り込んでしまう。

ファーストリンクが切れたということは、プログレスかαドライバーが気絶したということだ。なので、俊太はどうなったと思ってフィールドの向こうを見ると、彼は——

まだ、立っていた。

立ったまま、意識を失っていた。

それを見た春樹の胸に沸き上がったのは、どうしようもない敗北感。思わず、口に出す。

「……俺の、負けだな」

初めての勝利の味。それは、余りにも苦かった。

……

「報告通りではありませんが……これは偶然……ですかえ？」

「恐らくは……。彼女が来島してから1年間と数か月、何度も確認しましたが、アーシー様の魂ではないようでした」

「……にしては、雰囲気似ています。不思議なこともありますえ……まさか、暁天のと似た異能の持ち主とは……。ほとぼりが冷めたら、わたくしも直に確認してよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろん。というより……。どうか、お願いします。私では判断が付かないので……」

「しかし、あの少年も。立ったまま気を失うとは……。あの心胆、カイを思い出すようです。……。これもまた偶然、なのですかえ？　のう、暁天の……」

第1話 『これからも、よろしくーーー!!!』

「おつかれ、俊太。屋台で買ってきたから食べな」

「ども、春樹さん。ありがとうございます」

「ほれ、焼きそばとたこ焼きなんだけど。ど定番」

「あ、嬉しい。昨日アウロラに異世界のものばっか食べさせられてたんで、逆に新鮮かもです」

バトルが終わった後。気絶したため安静にしていた俊太の部屋に、春樹はお土産を持って訪れた。

「気絶してたけど、大丈夫か？」

「ええ。それよりアウロラの方が心配です。無理させちゃったから……」

「さつきちよつと聞いてきたけど、大丈夫だって。やっぱタフいよな」  
「それなら安心なんですけど」

普段は結んでいる髪を下ろした俊太は、その小さな体躯と中性的な顔立ちもあって、少女に見えないこともない。窓から差し込む夕日のせいもあるのだろうか。

その俊太が、苦笑しながら口を開いた。

「負けました。やっぱ強かったです、春樹さんのチーム」

「お前のチームこそ。初めてのバトルなのに、あそこまでやるなんて……」

春樹はベッド脇の椅子に座りながら言った。俊太がお土産の焼きそばに手を付け始めたのを眺めながら、少し考え込んでしまう。こんな、ともすれば「可愛い」と形容できてしまう子が、あんなに顔を歪めて最後まで立っていたなんて。

「俺さ、バトル終了のアナウンスが流れて、安心して座り込んでしまったんだよ。でもさ、お前は立ってた。だからめっちゃ負けた気分」

「あー……なんか、そうっぽいですね。志賀先生に、無理しすぎだって怒られました」

「そりゃ怒られるでしょ」

「でも、俺の取り柄なんてそのくらいしかないですもん。んで、結果負けただから……情けないです」

「……そんなことねえよ。俺らは確かに追い詰められてた。俺の心があと5秒早く折れてたら、お前らの勝ちだった。そのくらいよくやってたんだ。それは誇っていい——ってというか、誇れ。じゃないと、俺の立場が無いよ。な?」

「……………ん。春樹さんがそういう言うなら、そういうことにします。あ、そうだ」

「お?」

俊太は思い出したように右手を差し出してきた。

「バトル、ありがとうございました」

「……………おう。こつちこそありがとう。いい勉強になった」

春樹は差し出された手を握る。バトルは真剣にやっても、終わったら共に高め合う仲間同士。そこに負の感情は一切無く、ただ向上心だけが存在していた。

「でもさ、お前の戦略、考え直すのもいいかもだぞ。俺が5月にやった『ダメージカウンター式』のバトルだと、αドライバーがどれだけ耐えるかって意味ないからな」

「それもそっか……やっぱ無駄にダメージ受けすぎましたかねー」

「削れるところはあったと思うぞ。ま、それは俺もだけど。なんか、みんなすごいよくやってるからさ。俺も新しい作戦、考えてみたくなかった」

「それは同感。アウロラにもフロリアにもルビーにも、もつと大きな可能性あるなって、思いました」

「そうだ。せっかくなら対戦した相手として思ったこと、教え合おうじゃん。俺も聞きたいし」

「お、いいっすね」

「じゃあまず俺からな。戦った感想としては——」

「ふむふむ——」

相争った2人のαドライバーは、互いのバトルを振り返り、己の力として取り込んでいく。

.....

時は流れ、ワールド・コネクト世界接続20周年祭の3日目の夜。

「もう少しで終わっちゃうのか〜」

「なんかちよつと寂しいよな」

「もう少し長くてもいいのにな〜」

春樹と美海・琉花・忍・兔莉子の5人は、青蘭島の浜辺に来ていた。夕陽は島に沈み、もう少しで日付が変わる。

「ん〜、でもめっちゃ楽しかったよ!」

「いろいろと有益な祭りでゴザったな」

「無事に終わりそうので何よりだねっ」

ブルーミングバトルが終わってから今まで、色々な事があった。バトルの反省会をしたり、改めて本気でお祭りを楽しみに掛かったり。青蘭の島々を巡って、他の世界の文化に触れるのも面白かった。美海ではないが、もう少し続けてほしいと春樹も思っている。

だが、本当に充実していたのは確かだ。何より、この5人でここまで来れたことが嬉しかった。春樹としてはこっそり、浴衣を着た彼女らの姿を見られたのが嬉しかったというのもある(記念撮影と称してばっちり保存済み)。

もう少しすると、賢緑島から花火が上がり始める。その拡大魔術のために、賢緑島は現在、渡航禁止だ。渡航禁止にするほどなんだからきつとすごいんだろう、と期待しながら、花火を待つて談笑している、というのが今の状況だ。

春樹たちの後ろには、木組みに半紙で作られた灯籠が5つ、置かれている。これは後で灯籠流しに使用するものだ。どの灯籠にも、送る人の名前が書いてある。

「灯籠には、拙者のエクシードで火を点けられるでゴザルな」

「ちゃんとライター使おうぜ〜。暴走したら全部パアじゃん!」

「それもそうでゴザルな。バトルが終わって、少し気が緩んでしまっているかもしれんでゴザル」

「忍ちゃんでも、気が緩んじゃうんだ?」

「兎莉子殿には信じられんかもしれないでゴザろうが、拙者も人間でゴザルからな」

そう言うと、忍は自分の分の灯籠を取ってきた。

「あまり声を大にして言うべきことではゴザらんが……もしよろしければ、みんなが誰を送るのか、教えてほしいでゴザル。互いのことをよく知るためにも……」

「……ん、まあ、そこに置いてあるから、読めば分かっちゃうけどさ」

春樹は自分の灯籠を手元に寄せながら言った。他の皆も打ち明けてくれるようで、それぞれの灯籠を手にとった。

「言い出しつぺの拙者は、敬愛する師匠でゴザル。忍術を拙者に教えてくれた……ここに来る前にくたばったでゴザルが、まあ満足して死んだようだから、現世に留まらないでさっさと帰ってほしいでゴザル」

「へえ……なんかドライ」

「そういう男だったのでゴザルよ」

忍の表情は、呆れているような、それでいて寂しそうな、でも少し喜んでいような、形容しがたいものだった。しかし、彼女がその師匠に対して並々ならぬ愛情を抱いていることだけは確実に分かった。

「じゃあ次は俺ね。……俺の場合は、父さんなんだ。俺が青蘭学園にスカウトされて、一家纏めて移住するって時に、事故で死んじゃってさ。ここに着いた時も呆然としたの、覚えてるよ。だけどさ、父さんは青蘭庁の外交官で、その時に作ってくれた縁のおかげで、俺も母さんも生きて来られたんだ。だから、ありがとうって」

「春樹くん……」

「い、いいんだよ、湿っぽくならないで。父さんもきつと喜んでくれるさ。こんなに素敵なチーム作って、一緒に頑張ってたからさ」

春樹の灯籠に書かれた名前は『神城秋人』。彼の父の名前だ。

彼の父は厳しくも優しい、まさに理想の父親だった。外交官であるが故に家にいないことが多かったものの、働いている父の後ろ姿は、いつも春樹の憧れだった。

せつかく青蘭に移住することも決まって、これからは一緒に過ごせる時間が伸びると、誰よりも喜んでいたのに……その死は余りにもショックだったが、だからこそ彼の死後に残った縁故を知った春樹は、生前に何かを遺すことの大切さを知ったものだ。

父は死んだ。だが、その父が今まで生かしてくれた。今でも尊敬する、大切な人なのだ。

そんな春樹の表情を慮りながら、兔莉子が口を開いた。

「わ、私は……家族とかじゃないんだけど、今まで救えなかった、沢山の動物さんたち……。私ができるのは話すことだけだから、元気づけてあげるだけで何もしてあげられなかったけど……天国で、みんな仲良く暮らしてくれてれば、嬉しいなあって思います」

隣に座った兔莉子の灯籠に書かれている——いや、描かれているのは、動物たちの姿だった。春樹はこんな時ながら、絵が上手いな、と思った。どれも丁寧に描かれている。彼女にとってはどれも辛く、だが無意味ではない死だったのだろう。彼女が時折見せる毅然とした芯の強さの原点は、これだったのだ。その考えに至った春樹は、彼女への愛情が溢れて止まらない気がして、ほとんど無意識に彼女の頭を撫でていた。

そんな春樹と兔莉子の様子を眺めながら、琉花が口を開いた。

「じゃあ次は私で。私は母方のおじいちゃんとおばあちゃん。なんていうか……普通に亡くなった、ってカンジ。おじいちゃんは私が生まれる前に死んじゃったから、話したこともないんだけどさ」

「あ、私もおばあちゃんなんだよ。すつごく優しいおばあちゃんだったんだけど、老衰で亡くなったの。すつごく悲しかったけど、いろいろなお話してくれたなあって思ってた」

琉花と美海は灯籠を撫でながら視線を交わし合っている。その視線の優しさから、2人にとつてそれぞれとても大切な人だったんだろうな、ということが分かった。

「……そろそろ時間だし、火、点けようか。ほら、あそこでライター貸し出してる」

「それでゴザルな。拙者、借りてくるでゴザル」



少ししんみりしてしまったので、空気を変えるために春樹がそう言う、そもそも言い出した忍が真つ先にライターを取りに行った。そのすれ違いざまに彼女は春樹の耳元に口を寄せて、

「ありがとう、でゴザル」

「……気にすんな」

その声は、今まで聞いた彼女の声の中で一番柔らかかった……気がした。普段はチーム1のしっかり者で、先日のバトル中でも揺らいだ春樹たちの心を立ち直らせてくれた彼女だったが、中身はやはり少女。その年相応な部分を見せられると、やはり愛おしさを感じる。

……………

「おつ、みんな灯籠流し始めたねー」

「わあ、綺麗！ 写真撮っておこう」

「海が光ってるみたいだねっ」

日付が変わるまであと30分。海に流された灯籠が徐々に沖へと出て、五角形を描く青蘭諸島の中心の方へ集まっていく。兎莉子の言う通り、まるで海が光っているようだ。

琉花と美海と兎莉子は写真を撮るのに夢中になっている。そんな3人を、少し離れたところから眺める春樹と忍。

「みんなが、誰かを送った光でゴザル」

「感慨深いよな」

「……先ほどは、本当にありがとう、でゴザル。改めて考えると、とんだ不躰だったでゴザルが……」

「大丈夫だよ。それに、こっちこそありがとう、だ。チーム組んでからずっと主力を任せっぱなしで」

「それは問題ないのでゴザル。何しろ、春樹殿は拙者が仕える主人と認めた殿方でゴザルからな」

そう言う、忍は春樹の方を向いて、ニコツと笑った。

「……頭、撫でていい？」

「拙者のでゴザルか？ いいでゴザルよ」

忍は普段から被っている黒い帽子を取ると、頭を寄せてきた。よく考えると、帽子を取った彼女を見るのは初めてな気がする……。

「も、もし！ 撫でるならさっさとするでゴザル！ 帽子を取るのには恥ずかしいのでゴザルよ」

「ご、ごめんよ。ほれ、よしよし」

「……む、これは……なんというか、懐かしい感じ……」

春樹が忍の頭に手を乗せて撫でると、彼女は戸惑いながらも喜んでくれているみたいだった。

「……この歳にもなれば、人に頭撫でられる機会なんて無くなっちゃうもんな」

「なら……拙者は、幸せ者でゴザル。良き主、良き友人、良きライバル、良き先導者。己を高めるのには、どれも不可欠でゴザルからな」

「お互い、もっと強くなろうな。付いてきてくれるか？」

「無論でゴザル——つと、ここまででゴザル！」

忍は急に離れると、帽子を被りなおした。見ると、写真を撮っていた3人が戻って来るところだった。

「いーカンジに撮れた〜！ ほら見てこれ！」

「ん？ お、ホントだ。後で送ってよ」

「シノ、何してたん？ ハル先輩に撫でて貰ってたの〜？」

「う、うるさいでゴザル。バトルで成果を上げた褒美でゴザルよ」

「あつ、忍ちゃんが照れてる。珍しいねっ」

不意に視界の端が鮮やかに光った。見ると、賢緑島から花火が上がっている。

ここから10キロ以上離れた賢緑島は、ほんの小島のように小さく見えるが、上がった花火の大きさはその数倍の大きさだった。これが拡大魔術の成せる業なのか、と感心する。

「うわあ、でつかーい！」

「めっちゃ拡大されてんねー！」

「迫力満点でゴザルな。写真撮らないでよいのでゴザルか？」

「あつ、撮る撮る！」

「海にも映ってるのが、すごくキレイ……」

しばらくすると、見たこともないような弾け方をする花火が混じり始めた。線のような軌跡を幾筋も残す花火、暫し空中に残つて雨のように火花を降らせる花火、螺旋を描くように輝きながら上昇する花火

「……20年の積み重ね、か。すごいな」

「これからは、拙者らも担って行くのでゴザルな」

「だな。昨日のバトルはその第一歩だった、って感じだ」

「みんなとは、長い付き合いになりそうでゴザル」

雲一つない、晴れ渡った星空に、花火が弾けては消え、また弾ける。そのどれもが美しい。まるで「一番美しかった奴が新しい星になれるぞ」と言われて、その美しさを余すことなくアピールするように。

あと数分で日付が変わる。厳密な世界接続の時期は不明なのだが、とりあえずそこから21年目に突入、ということになっている。

その訪れを、5人は静かに花火を見上げながら待っている。

「ねえ、春樹くん」

「どうした、美海？」

「これからも、よろしくね？」

「もちろん。こつちこそよろしくな」

横を見ると、美海の瞳はキラキラと輝いていた。花火を映して、灯籠の明かりを映して、星明りを映して。その輝きに、春樹は見惚れてしまった。

初めて出会った時に思った彼女の美しき。それがまだここに——いや、さらに輝きを増して、ここにがある。

「あと1分か」

「おし、じゃあ叫ぼう！」

「え、なんて？」

「うーん……『これからもよろしくー！』とか？」

「ほ、ホントに叫ぶの？」

「まあ俺ら高校生だし。ちよつとヤンチャするのもいいかもな」

「でしよでしょ？」

「行き当たりばったりでゴザルなあ。まあ、それが琉花殿の良いところ

ろでもゴザルが」

「よーし……じゃあ、準備して……」

春樹が時計を確認しながら息を整える。あと20秒——10秒——5秒、4、3………

「2……1……!」

日付が、変わる。

『これからも、よろしくー！ー！ー！！！！』

思いつきり、叫んだ！ ああ、なんだか気分がいい。この連帯感。まさに青春。

それと同時に最後の花火が打ち上がった。一際大きな、緑色の花火。それが消えて、ようやく世界接続20周年祭が——

——消えない。

最後の花火は煌めいたまま賢緑島の上空に留まっていた。揺らめくようにその輝きを広げている。

「あれ、あの花火消えない——」

「——花火？ じゃなくない……？」

「あれは……」

全員、徐々に理解してきた。あれは花火じゃない。あの煌めき。あの雰囲気。一度認識してしまえば、間違えるはずがない。だって、そばに同じものが3つもあるのだから。

そう、あれは——

——  
ハイロウ  
門だ。

## 最終話 「これからよろしくな」

時刻は、午前零時。  
世界が変わった。

……………

「……………え？ あれ、<sup>ハイロウ</sup>門……………？」

「まさか……………でも、それってつまり……………」

「あ、あれってもしかして、新しい世界ってこと？」

周囲の人々も異常に気付き、だんだんと騒ぎが広まっていく。そんな中、春樹たちははつきりと分かっていた。分かってしまった。

(あれだ)

(あれだ)

(助けを求めているのは、あれだ……………！)

夢の中に出てくる、揺らめく緑色の光。

「たすけて」と呼ぶ、あの煌めき。

あれだ。助けを求めているのは、あれだ。

あの夢は、この予兆だったのだ。

「は、春樹くん……………っ！」

「……………あ、ああ……………あれは……………」

美海が絞り出すように呼び掛けてきたが、春樹はうまく言葉を返せない。当の美海も、明確な答えを求めているというよりかは、とりあえず絞り出されたただの声のようだ。

琉花も忍も兔莉子も、立ち尽くすことしかできない。

眼前に揺らめく緑の光は、新しい世界への<sup>ハイロウ</sup>門。あの向こうには、今までに見たことのない世界が広がっている……………はずだ。

春樹ら5人は全員、世界接続より後に産まれた。だから、3つの世界と繋がっているということはある意味当たり前前の事だった。それが正しいものだとして理解してきた。

その正しさが、ひっくり返った。この世界に繋がっている世界は、今や3つではなく4つ。

世界接続の折にどんな混乱があったのか、春樹は両親から聞かされている。世界間の外交官だった父からは特に具体的な話まで。他の4人も、程度の差こそあれそういうことは聞いてきたはずだ。

それが今、起ころうとしている。この世界接続20周年祭が仮初の平和の元に成り立っていて、新しい世界の出現を機に争い始める、なんてことになってもおかしくないのだ。

「ね、ねえ。これ、どうしよう。どうなるんだろ」

「お、落ち着くでゴザル。とにかく、慌てないで……」

「そそ、そうだねっ。こういう時は、変なことしないようにっ」

なんとか平静を取り戻そうとする。現に、直前までの連帯感が働いたためか、この5人に関しては上手くいった。そうだ、この異変にはみんな気付いているはず。きつと青蘭庁が動いてくれる。自分たちが心配することは、少なくとも今のところは、ない。

だが、少し離れたところでは騒ぎが起こり始めていた。

「あ、新しい世界だっ……っ？」

「どうなっちゃうのかしら……っ!？」

「や、ヤバいことになるかも。もしかしたら、戦争に——」

「せ、戦争っ!?! そんな、嫌よ!」

徐々に騒ぎが大きくなっていく。1人が出した『戦争』というワードが恐怖と共に広がっていく様は、まるで集団ヒステリーだ。そして、春樹らはそんな光景を、ただ見ていることしかできない。「落ち着いてください!」とか言う事すらできない。だって彼らも混乱しているのだから。無理やり平静を保っているのだから。

そして、同じことが青蘭諸島中で起きていた。あちらこちらでパニックが広がる。新しい世界の到来を、悪い方向に捉えて。

先ほどまでの和やかなムードはどこへやら、青蘭中が恐怖に包まれていく。

「ほ。ほんとに大丈夫、だよね……っ？」

「大丈夫に決まってる……たぶん」

隣の美海が不安そうな声を上げた。それに対して春樹は、またも口  
クな答えを返してあげることができない。周囲の恐怖が徐々に心を  
蝕んでくる。これは俊太とのバトルの際に感じたそれとはまた違う、  
感情が捻じ曲げられそうな恐怖だ。

——こんな時、どうすれば……

そう考えようとしながら、それでも遠くに揺らめく緑色の光から目  
を離せないまま立ち尽くしていると——ふと、視界の端に柔らかい青  
の光が漂った。視線を落とすと、優しく光る青い羽根が、ふわりと砂  
浜に舞い落ちた。

今度は視線を上げる。すると、今見たものと同じ、青く光る羽根が、  
まるで雪のように次から次へと降り注いでいた。この世のものとは思  
えない、幻想的な光景だ。

そんな光景に目を奪われていると……気付けば春樹の心から恐怖  
が消え去っていた。驚いて周囲を見ると、美海も琉花も忍も兎莉子も  
同じ様子だったし、先ほどまでパニックになっていた人々も平静を取  
り戻したようだ。

そして、これもまた同じことが青蘭中で起きていた。あちらこちら  
に広がったパニックが収まっていく。

舞い散る羽根の青い光が、青蘭中を包んでいく。

『皆様。私は赤の世界の大天使、ラファエルです』

光に包まれる人々の耳に、優しい声が響き渡った。ゲストとして招  
かれていた、赤の世界の『命導』の大天使・ラファエルの声が、羽根  
を通じてあらゆる人の耳に届く。

『予想だにしないことでしたが、青の世界は新しい世界と繋がります  
た。門の色ハイロクになぞらえて、その先の世界を『緑の世界』と呼びます』  
『皆様。ご安心ください。不安な気持ちは、私の羽根が拭い去りま  
しょう』

『『緑の世界』の実情は不明ですが、対応は青蘭庁にお任せください。』

今宵、皆様がお家へとお帰りになり、お休みになられるまで、このラファエルの羽根が、皆様の心をお包みします』

『お伝えがこのような形になり、大変心苦しくはありますが……これにて『世界接続20周年祭』は閉幕となります。皆様、お気をつけてお帰り下さいませ』

『なお、特例措置により、ただ今から黒・赤・白の世界への門を開門いたします。世界間渡航証明書さえご用意いただければ、即座にご自身の世界へと帰還されることも可能です。宿泊施設に荷物を置いたままでも、後日郵送にてご自宅までお届けできます。どうぞ、今お帰りになられたい場所へ、お帰り下さいませ。この世界におられる限り、私の羽根は皆様をお守りします』

『それでは皆様。本日はお疲れさまでした。どうぞごゆっくり、お休みなさいませ』

ラファエルの声が止んだ後も、青い光の羽根は降り続けている。地面を見ると、地に落ちた羽根はいつの間にか形を失い消えていた。

「……帰ろう、か」

「う、うん。そうしよう」

「そだ。ハル先輩、家まで送るよ」

「え？ いやいいよ。満月寮からちよつと離れてるでしょ。むしろ俺が満月寮まで送ってくって」

「そんなこと言わずに、でゴザル」

「ほら、私たちは4人で帰れますからっ」

「んく……じゃあ、せっかくだしお言葉に甘えちやおうかな」

そんな感じのやり取りをしながら、5人はその場を離れた。少しきこえないながらも、先ほどまでの不安とは無縁の足取りで。

青蘭中の人々が、各々の帰るべき場所に歩を進めていた。

そんな人々を、延々と天から降り注ぐ青い光の羽根は、静かに見守っている。

……………



青枝山の中腹辺り。やや開けた場所から4人の少女が、緑の門を眺めている。

「これにて我々も、ようやくお役御免、といったところでしょうか」

『白のはじまりの少女』コードⅡ913・セレナが、透き通った声でそう言った。

「いや……これからでしょ。なんか面倒なことになってる。誰が来た？」

『赤のはじまりの少女』エルミナ・ガーネットが、面倒そうに首を振りながらそれに応じた。

「今回の……なんだか随分と弱そう。私たちとは少し違う性質みたい。大丈夫かしら？」

『黒のはじまりの少女』クロリス・オブシディアが、不安そうな声を上げた。

「……確認しよう」

『青のはじまりの少女』サファイアは、常と変わらない落ち着きのまま立ち上がった。

………

賢緑島上空に開いた門<sup>ハイロウ</sup>。その真下は、機動隊基地の演習場だった。

そこに1人の少女が落ちてくる。

艶やかな長い髪、何の変哲もない少女だ。——着ているものが、緑を基調とした軍服であることを除いて。

その目は虚ろだ。開いてはいるが、何も映してはいない。その瞳の奥に、緑色の光が覗く。

少女はそのまま降下し、機動隊基地の演習場に音もなく降り立った。

少しの間、少女は周囲を見渡していたが……その瞳の奥に灯っていた緑の光が消えた瞬間、初めて自分が置かれている状況に気付いたようだった。

「あ、あれっ？ ハ、ハハは——どっ……っ。」

きよろきよろと周囲を見渡すが、誰もいない——いや、1人だけいた。こちらに近づいてくる。

「やあ、っ(きげんよう。何もしないから、手を上げて」

陽気に聞こえるが、どことなく冷徹な、男性の声。少女は「ひっ」と声を上げたが、ほんの一瞬だけ悩んで、

「ぐ、《グリム・フォーゲル》！」

そう唱える。すると、少女の左右の手に小さな拳銃が一丁ずつ出現した。

その銃で近づいてきた男性を狙う——ことは出来ず、

少女——マユカ・サナギは意識を失って地面に倒れ込んだ。

……………

「随分と喧嘩っ早いな……何もしないって言ったのに」

少女に金縛りの術を掛けて意識を奪った海斗は、金縛りの状態を再確認しながら周囲に合図を送った。すると、基地のあちこちの物陰に隠れていた機動隊員が集まってきて、少女を拘束し始める。

同時に黒の世界からの来賓であったネロ・グラディウスが、その上空で揺らめく緑色の門ハイロウに魔術を掛け始めた。他の門ハイロウに掛けられているものと同じ常設結界だ。

「完璧に予定通り……次は、調査隊か。もう組織は終わっているし、機を見て行くだけだ」

周囲で機動隊員が忙しく動いている中、海斗は拘束され運ばれていく少女をぼんやりと眺めていた。

この数ヶ月間の全ては、今この瞬間のためにあつたといっても過言ではなかった。

予見によつて事が起こる日時と位置を絞り込み、機動隊に掛け合つて人員や物資や設備を整え、執行部にはより厳重な警戒網の整備を呼びかけ、教務課は異常が開始するプログレスをなんとか制御し、さらに事態の收拾に必要な人員を来賓として招き、その全てを今この瞬間に傾ける。

今までの歩みが、まるで緩やかな走馬灯のように脳裏に流れていた。

要するに、彼は余りにも疲れているのだ。

『皆様。私は赤の世界の大使、ラファエルです』

上空から青く光る羽根が舞い落ちる中、ラファエルの声が青蘭中に響き渡った。混乱もこれで少しは収まるだろう。

海斗は相変わらずぼんやりしながら、リュックサックの中から1冊の本を取り出し、目的のページに書かれている文章を眺めた。

『海斗様。どうしてこちら側からばかり、あちら側へと落ちて行つちやうと思えます?』

ほんの数刻前。エルミナ・ガーネットから投げかけられた質問に、海斗は答えられなかった。

『世界が、その表紙と同じ位置にあつたら、必然だと思いませんか?』

一瞬、そうかも、と思つてしまった。

『そんなこと、私を知るわけありませんが』

だが、エルミナ・ガーネットはクスクスと笑つてそう言った。

「……………これからよろしくな、緑の世界」

海斗はぼつりと呟くと、深呼吸して気持ちを入れ替え、その場を後

にした。これからやるべきことは、まだまだいくらでもあるのだから。

海斗が取り出した、1冊の古ぼけた本。

その表紙には、掠れた5つの星が描かれていた。

右に黒、上に赤、左に白、中央に大きな青。

そして、下に小さな緑。

……………

青い光の羽根に見守られて無事に帰ることができた早輝は、自室のベランダから緑の門ハイロウを眺めていた。

「……………」

ラファエルのものだという青く光る羽根は未だに舞い続けている。幻想的な光に当てられて、どんな恐怖も怒りも鎮まってしまうかのようだ。争いが存在しない世界があるとしたら、まさに今この状況以外には考えられないだろう。

頬を撫でる夜風が気持ちいい。そんな愛すべき世界にまた一つ、巨大な異変が起きてしまった。今夜はどんな夢を見るのだろうか。

「……………なんだろうね」

あの門ハイロウが開いた時、奇妙な感じがした。今までに経験したことのない、不思議な感覚。

例えるなら……………そう。

心が、何かと繋がった気がした。

その夜、連日の悪夢から解放された彼は、幼い頃の夢を見た。泣き虫な妹と、意地っ張りな姉の夢。

翌朝。目覚めた彼が覚えていたのは、1人っ子である自分には余りにも贅沢すぎる夢を見た、ということだけだった。